

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第112集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

田篠中原遺跡

—縄文時代中期末の環状列石・配石遺構群の調査—

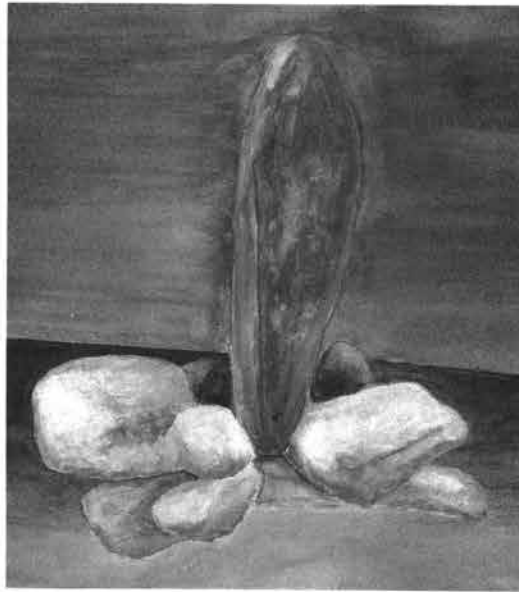
1990

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第112集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

田 篠 中 原 遺 跡

— 縄文時代中期末の環状列石・配石遺構群の調査 —





序

平成4年度に開通が予定されている上信越自動車道は、富岡市から藤岡市にかけて鑄川のつくった見事な河岸段丘と、それに連なる丘陵地上を走ることになります。緩やかな甘楽の谷の景観は、ドライバーの人達の目を楽しませることになるでしょう。

甘楽の谷の南側に連なる山々の内、稲含山から流れ出る雄川は、甘楽町善慶寺・富岡市田篠を中心に河岸段丘を侵食し、善慶寺原と呼ばれる広い扇状地を作り出しました。

その扇状地上の桑畑となっていた高速道路予定地の発掘調査から、縄文時代中期の祭祀遺構が現れてきました。環状列石、配石、立石、敷石住居跡、墓地等と、それに伴う多数の多孔石も出土し、

当時の人々がこの土地をどのように使い、またその人々の社会観・死・祭祀のあり方等を研究するのに格好の材料を提供してくれました。

今回の報告書が、全国の研究者、地域の社会教育・学校教育等に活用され、歴史解明の一助になれば幸いに存じます。

発掘調査・整理事業を行うに当たり、調査に参加された皆様をはじめ、地域の皆様、関係された諸機関の皆様の暖かい御援助、御協力に感謝し、序といたします。

平成2年9月10日

（働）群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水 一郎





かぶらの谷

群馬県の北西部に位置する荒船山頂に立つと、かぶらの谷が一望できる。

荒船山(1,423m)とその裾野に連なる山々は、上信越国境の分水嶺になっている。この谷合いから湧き出る水は鐮川の源流となり、たくさんの支流を集めて、下仁田町、富岡市、甘楽町を東に流れて烏川に合流しているが、この流域を「かぶらの谷」とよんでいる。

下仁田町より東方の鐮川流域は、川の流れも一転して緩やかになり、河岸段丘面が未広がりな平地をつくっている。富岡市を中心とした平坦地は、鐮川を境にして、南側には高瀬段丘面が広く発達している。一方北側には、妙義山麓丘陵、丹生丘陵、富岡丘陵など小高い丘が続いている。高田川(21,619m)、丹生川、そして鐮川(37,645m)の流水の働きによって河岸段丘(面)が発達し、一ノ宮・富岡市街地をつくっている。

甘楽町一帯の地形は、下仁田町との境界に聳え立つ稲倉山(1,370m)に源を発して流れる雄川(15,394m)が、小幡丘陵の北側を流れて小幡扇状地を発達させて鐮川へ合流している。

遺跡はこの小幡扇状地のほぼ扇中央部に立地している。

写真左に流れている川が雄川である。撮影日は昭和62年2月9日。



36号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）

縄文時代の環状列石と敷石住居跡

環状列石（弧状列石）は集落の広場部分に構築されていた。径約38mを呈している。列石内部からは立石が検出された。この立石は調査の過程では倒れた状態で検出されたものであるが、構築当初の姿を復元してみた（図と復元写真を参照）。

敷石住居跡は11軒検出された。構築時期は加曾利E 3 式期から加曾利E 4 式期にかけてであった。



23号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）



24号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）

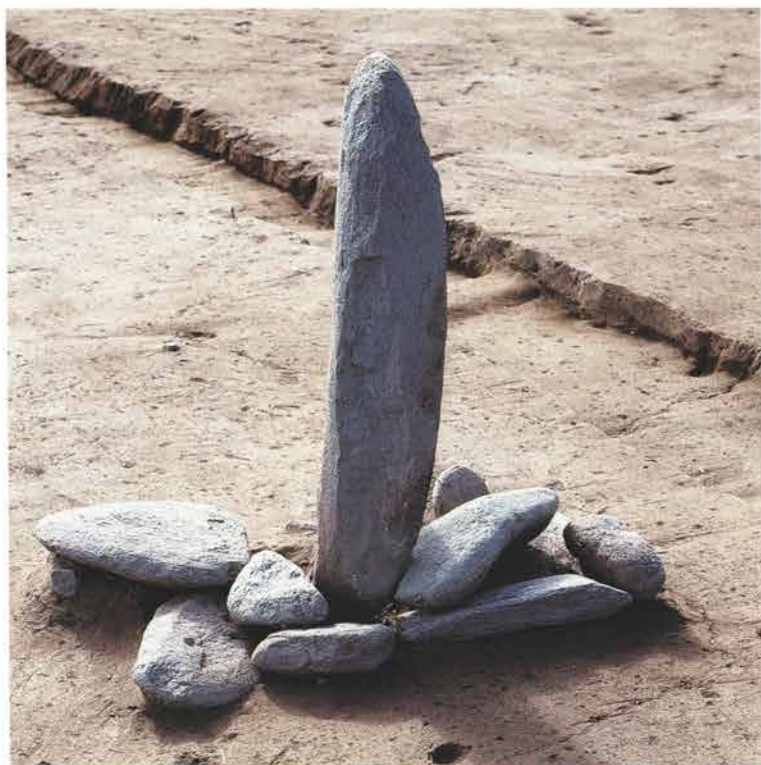


37号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）





環状列石の部分



立石



5号配石遺構（円形敷石住居跡）



8号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）埋襲



8号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）

〔例言・凡例〕

例 言

1. 本書は、関越自動車道（上越線）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は以下のとおりである。
田篠中原遺跡（たじのなかはら）遺跡
富岡市田篠419番、他
3. 発掘した遺跡の調査期間と調査面積は以下のとおりである。
昭和61年5月28日～昭和62年12月27日
面積 15,800㎡
4. 発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
5. 実際の調査にあたっては、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台3-15-8所在）が担当した。
調査担当者は以下のとおりである。
依田治雄（昭和61・62年度 専門員）
右島和夫（昭和61年度 専門員）
菊池 実（昭和61・62年度 調査研究員）
飯塚 聡（昭和62年度 調査研究員）
6. 出土遺物の整理作業・報告書作成期間は以下のとおりである。
平成元年4月1日～平成2年9月30日までの1年6カ月。
整理担当者 菊池 実（主任調査研究員）
7. 本文執筆は菊池を中心に各執筆者間で協議して行い、本文執筆の文責については目次に記した。
8. 当遺跡の内容をより詳細に浮彫りする意図で、次の各位に資料の分析・測定を依頼し、その分析・測定結果の玉稿を賜った。各位に厚く御礼申し上げます。
残存脂肪分析 中野益男（帯広畜産大学）
長田正宏（株式会社 ズコーシャ）
中野寛子（株式会社 ズコーシャ）
福島道広（株式会社 ズコーシャ）
土器胎土分析 井上 巖（第4紀地質研究所）
黒曜石分析 二宮修治（東京学芸大学）
薬科 実（東京学芸大学）
網干 守（成城学園高等学校）
大沢眞澄（東京学芸大学）
石材鑑定 陣内圭一（群馬県立自然科学資料館）
地中レーザ 渡辺広勝（テラ・インホメーション・エンジニアリング）
9. 発掘調査および出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関に御教示、御協力を賜った。（敬称略）
野村 崇（北海道開拓記念館）、林 謙作（北海道大学）、
工藤研治（北海道埋蔵文化財センター）、富樫 泰時（秋田県埋蔵文化財センター）、秋本信夫（鹿角市教育委員会）、
藤井安正（よねしろ考古学研究会）、佐藤 樹（よねしろ考古学研究会）、
仲田茂司（福島県三春町教育委員会）、海老原郁雄（宇都宮商業高校）、相澤貞順（前

橋市立女子高校）、赤山容造（群馬県企業局）、井上 太（富岡市教育委員会）、内田憲治（新里村教育委員会）、小宮俊久（新田町教育委員会）、小安和順（甘楽町教育委員会）、菊池誠一（吉井高校）、篠原幹夫（富岡市教育委員会）、新藤 彰（榛東村教育委員会）、田口 修（松井田町教育委員会）、小林達雄（國學院大学）、時枝 努（東京国立博物館）、宮塚義人（シン航空写真株式会社）、栗原文藏（埼玉県立歴史資料館）、秋山道生（板橋区教育委員会）、小葉一夫（東京都埋蔵文化財センター）、桐生直彦（多摩市教育委員会）、都築恵美子（練馬区教育委員会）、小杉 康（明治大学大学院）、内山博司（シン航空写真株式会社）、鈴木保彦（日本大学）、関 俊彦、塚原正典（慶応義塾大学）、山本輝久（神奈川県立埋蔵文化財センター）、戸田哲也（玉川大学）、今井 堯（大井町史編纂委員会）、橋口尚武（武蔵村山東高校）、大賀 健（山武考古学研究所）、千田幸生（山武考古学研究所）、肥田順一（山武考古学研究所）、平田貴正（山武考古学研究所）、近江屋成陽（山武考古学研究所）、北村 亮（新潟県教育委員会）、渡辺朋和（新津市教育委員会）、平林 彰（長野県埋蔵文化財調査センター）、群馬考古学研究会、よねしろ考古学研究会、学習院大学考古学研究会、群馬県立女子大学考古学研究会、富岡市教育委員会、富岡市農協、甘楽町教育委員会

10. 出土遺物・図面・写真・記録等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 本書中の遺構番号は発掘調査時に付したものをそのまま使用しているが、以下の遺構名称は整理作業の過程で変更している。

| 調査時 | 整理時 |
|---------|-----------|
| 13号配石遺構 | 17号配石遺構 |
| 18号配石遺構 | 12号屋外埋設土器 |
| 19号配石遺構 | 22号土壇 |
| 39号配石遺構 | 2号竪穴住居跡 |
| 42号配石遺構 | 21号土壇 |
| 1号集 石 | 13号配石遺構 |
| 第2集 石 群 | 19号配石遺構 |

2. 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

(1) 挿図縮尺

| | |
|------------------|------------------|
| 環状列石 | 1/80、1/160、1/300 |
| 敷石住居跡・竪穴住居跡・配石遺構 | 1/40 1/80 |

| | |
|-----------|---------------|
| 屋外埋設土器・土壇 | 1/20 |
| 土器実測図 | 1/4、土器展開図は1/6 |
| 土器拓本図 | 1/3 |
| 石器実測図 | 1/6、1/8 |
| 全体図 | 1/200 |

- (2) 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。

座標系は国家座標第IX系である。

- (3) 水系レベルは標高を示す。

- (4) 遺物番号は本文、挿図、表と一致する。

(5) 挿図中のスクリーントーンの指示は各挿図中に示してある。

(6) 色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖(1976)に基づいている。

7. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1(「富岡」)地形図を使用した。

[編集]

菊池 実

[執筆]

網干 守(成城学園高等学校)
飯塚 聡(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
井上 巖(第4紀地質研究所)
大沢真澄(東京学芸大学)
長田正宏(株式会社 ズコーシャ)
菊池 実(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
桜井美枝(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
陣内圭一(群馬県立自然科学資料館)
徳江 紀(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
中野益男(帯広畜産大学)
中野寛子(株式会社 ズコーシャ)
二宮修治(東京学芸大学)
福島道広(株式会社 ズコーシャ)
渡辺広勝(テラ・インホームーション・エンジニアリング)
薬科 実(東京学芸大学)

[写真撮影]

飯塚 聡(遺構写真)
菊池 実()
佐藤元彦(遺物写真 群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)
シン航空写真株式会社(航空写真 モザイク写真)
国際航業株式会社(航空写真 測量図)
中央航業株式会社(航空写真)

[測量・トレース]

株式会社 測研

[保存科学]

関 邦一(群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)
北爪健二() 嘱託員)
小材浩一() 補助員)

[整理補助員]

宇田川千恵 小嶋八重子 小林 幸子 湯浅美枝子
堤 由美子 渡部 重子 大川万里子 岩佐佐美枝
温井 久子 入江 由美 菊池スミ子 横尾 友子
(関越道上越線調査事務所整理補助員)
中村 奈津(鶴見大学)

[事務 昭和61年4月～平成2年9月]

関越道上越線調査事務所長
井上 信(昭和61～63年度)
高橋 一夫(平成元・2年度)
総括次長 片桐 光一(昭和62～平成元年度)
〃 大澤 友治(平成2年度)
次 長 原田 恒弘(昭和62年度)
〃 徳江 紀(昭和63～平成2年度)
課 長 長谷部達雄(昭和61年度)
〃 鬼形 芳夫(昭和63～平成2年度)

庶務課係長代理

黒沢 重樹(昭和61～63年度)
宮川初太郎(平成元・2年度)
〃 主任 国定 均(昭和63・平成元年度)
〃 主任 笠原 秀樹(平成2年度)

庶務課臨時職員

山崎 郁雄 神戸市四郎 松井 留雄
町田 康子 本城 美樹 後閑 玲子
田中知恵美

(本部)

常務理事 白石保三郎(昭和61～63年度)
〃 邊見 長雄(平成元・2年度)
事務局長 井上 唯雄(昭和61・62年度)
〃 松本 浩一(昭和63～平成2年度)
管理部長 大沢 秋良(昭和61年度)
〃 田口 紀雄(昭和62～平成2年度)
調査研究部長 上原 啓巳(昭和61～63年度)
〃 神保 佑史(平成元・2年度)

[内部協力者]

須田朋子 桜岡正信 鹿沼栄輔 春山秀幸 綿貫鋭次
郎 関口功一 依田治雄 右島和夫 松村和男 小林
裕二 小島達夫 船藤 亨 亀山幸弘

[発掘調査従事者 敬称略]

秋山いね 浅香時子 浅香法子 浅香春造 浅香重作
新井種次 新井ミツ 新井光江 新井美代 新井重幸
新井英子 飯間 操 井野口久代 岩井みち子 岩井
幸雄 井田松寿 飯塚君子 飯塚豊作 飯塚リキ 飯
塚静枝 浦辺重代 江原秋江 江原恵子 大野かつ子
小柏洋子 折茂たき子 帯川よう子 笠原正五 加藤
あい子 金田キヨ子 木戸ふち子 衣川 勉 黒沢利
次 黒沢 広 黒沢富久子 工藤和枝 熊井戸和子
久保みち子 小出伸一 高間まき 小林忠男 後藤徳
治 斉藤はつ江 斉藤君代 酒井よし江 酒井紀江
左堀利政 清水きよ子 清水道雄 篠崎かほる 神宮
政江 神宮儀一 鈴木ふじ江 鈴木みや 須賀隆雄
須賀尚子 関谷ろく 関口治郎 関口とみ子 高木甚
三郎 高木とり 高間幸子 高橋ふさ 高橋和子 高
橋 守 田村梅之祐 田村嘉三郎 田村カメ 田村ふ
み 谷川あさ子 長岡三郎 中野初次郎 中野セツ
中野利一 中野道子 中村保男 野口勝巳 橋本メ雄
深沢恒一 福田亥十郎 布瀬川千代松 布瀬川はつ子
堀口 巖 松井キクヨ 松井シズ江 松井昌子 松井
洋子 松浦みや 丸沢君枝 宮前美恵子 宮下きわ子
森平文男 森平玲子 矢島みどり 山崎章子 山内勝
広 山本房二郎 山田カツ 山田けさ子 山田長治
山田茂樹 山田タケ 山田ツネ 八木はな 吉田さく
渡辺一女 渡辺武江

[群馬県立女子大学]

大木綾子 志田尚子 小笠原直子

[学習院大学]

岩淵令治 江橋正浩 尾田倫一 松本右子

[筑波大学]

谷中 隆 有田貴紅葉 沖松信隆 山田康弘

[日本大学]

長 義之

抄 録

1 遺跡の概略

当遺跡は群馬県富岡市田篠に所在する。調査対象地は、富岡市と甘楽町の境界付近で、甘楽町早道場から雄川に至る約650mの間である。この地域は鎭川の支流雄川によって形成された扇状地のほぼ扇中央部にあたる。発掘調査は昭和61（1986）年5月28日から昭和62（1987）年12月27日までの1年7か月間実施された。調査当初、遺跡は田篠遺跡として命名されてきたが、昭和63（1988）年8月に上越線関連の遺跡名検討が行われた結果、遺跡名は大字小字名の連記を原則として、従来の遺跡名は事業名称として残すことになった。このため、田篠遺跡II・III・IV区は田篠上平遺跡たじのかみだいらに、0・I区は田篠中原遺跡たじのなかはらとして分離され、田篠遺跡は事業名称として残ることになった。田篠上平遺跡は古墳、奈良～平安時代の遺跡であり、平成元（1989）年3月に当事業団から報告書が刊行されている。

2 遺構数量

当遺跡の調査面積は約15,800㎡であり、縄文時代中期加曾利E3式期～加曾利E4式期の集落が調査された。検出された遺構は以下のとおりである。

| 種 別 | 時 代 | 数 量 | 備 考 |
|-------------|-------------|-----|--|
| 環 状 列 石 | 縄 文 時 代 中 期 | 1 | 径約38mを有する。集落の広場部分に構築。加曾利E3式期に構築され、加曾利E4式期まで機能。 |
| 敷 石 住 居 跡 | 縄 文 時 代 中 期 | 11 | 加曾利E3式期7軒、加曾利E4式期4軒。 |
| 竪 穴 住 居 跡 | 縄 文 時 代 中 期 | 2 | 加曾利E3式期2軒。 |
| 配 石 遺 構 | 縄 文 時 代 中 期 | 36 | 加曾利E3～E4式期にかけて構築。 |
| 屋 外 埋 設 土 器 | 縄 文 時 代 中 期 | 12 | 加曾利E3～E4式期にかけて構築。 |
| 土 壙 | 縄 文 時 代 中 期 | 22 | 加曾利E3～E4式期にかけて構築。 |
| 廃 棄 場 所 | 縄 文 時 代 中 期 | 1 | 加曾利E3～E4式期にかけて使用。 |

3 まとめ

縄文時代中期集落（加曾利E3～E4式期）のほぼ全容を調査することができた。集落の広場部分には径約38mの環状列石が構築され、この列石を囲うようにE3～E4式期の敷石住居跡が構築されていた。集落の規模は東西約250mである。E4式期の敷石住居跡は総て柄鏡形を呈し、環状列石に近接して構築されている。環状列石下、また環状列石内部の掘り下げも実施したが、土壌の検出は列石下から1基、内部から1基の検出にとどまった。まとまった土壌群は環状列石外から検出された。

自然科学的分析として、残存脂肪分析、土器の胎土分析、黒曜石産地同定、石材分類、地中レーダ分析を掲載した。

4 その他

- 1) 現地説明会 昭和61年10月11・12日 昭和62年9月12・13日
- 2) 講演会 甘楽町教育委員会主催の町民文化講座
- 3) 雑誌発表 『群馬文化 第209号』昭和61年 『考古学ジャーナル No285』昭和62年 『東国史論 第3号』昭和63年
- 4) 研究発表 日本考古学協会第54回総会（昭和63年度）研究発表

田篠中原遺跡

- 1章 調査の経過
- 2章 遺跡の立地と環境
- 3章 縄文時代の配石遺構群と遺物
- 4章 自然科学的分析
- 5章 成果と問題点

1章 調査の経過

- 〔1〕 調査に至る経過…………… 2
徳江 紀
- 〔2〕 調査の経過（日誌）…………… 3
菊池 実
- 〔3〕 調査の方法…………… 7
菊池 実
- 〔4〕 基本土層…………… 9
菊池 実
- 〔5〕 整理作業の経過…………… 10
菊池 実

2章 遺跡の立地と環境

- 〔1〕 地理的環境…………… 12
飯塚 聡
- 〔2〕 歴史的環境…………… 16
菊池 実
- 〔3〕 隣接遺跡の状況…………… 19
飯塚 聡

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

- 〔1〕 配石遺構群の概要…………… 22
菊池 実
- 〔2〕 環状列石と立石……………23~48
菊池 実
- 〔3〕 敷石住居跡……………49~173
菊池 実
 - 1号配石遺構…………… 49
 - 2号配石遺構…………… 55
 - 5号配石遺構…………… 58
 - 8号配石遺構…………… 66
 - 17号配石遺構…………… 77
 - 23号配石遺構…………… 86
 - 24号配石遺構……………101
 - 26号配石遺構……………125
 - 36号配石遺構……………137
 - 37号配石遺構……………153
 - 38号配石遺構……………165
- 〔4〕 竪穴住居跡……………173~197
菊池 実
 - 1号竪穴住居跡……………173

- 2号竪穴住居跡……………180
- 〔5〕 配石遺構……………198~373

菊池 実

- 3号配石遺構……………198
- 4号配石遺構……………200
- 6号配石遺構……………206
- 7号配石遺構……………211
- 9号配石遺構……………218
- 10号配石遺構……………222
- 11号配石遺構……………224
- 12号配石遺構……………229
- 14号配石遺構……………234
- 15号配石遺構……………238
- 16号配石遺構……………240
- 19号配石遺構……………244
- 20号配石遺構……………248
- 21号配石遺構……………256
- 22号配石遺構……………259
- 25号配石遺構……………265
- 27号配石遺構……………272
- 28号配石遺構……………278
- 29号配石遺構……………283
- 30号配石遺構……………289
- 31号配石遺構……………295
- 32号配石遺構……………302
- 33号配石遺構……………307
- 34号配石遺構……………315
- 35号配石遺構……………322
- 40号配石遺構……………327
- 13号配石遺構……………333
- 41号配石遺構……………334
- 43号配石遺構……………341
- 44号配石遺構……………342
- 45号配石遺構……………348
- 46号配石遺構……………352
- 47号配石遺構……………359
- 48号配石遺構……………365
- 49号配石遺構……………369
- 50号配石遺構……………370

- 〔6〕 屋外埋設土器……………374~390

菊池 実

- 1号屋外埋設土器……………374
- 2号屋外埋設土器……………374
- 3号屋外埋設土器……………376
- 4号屋外埋設土器……………376
- 5号屋外埋設土器……………376
- 6号屋外埋設土器……………378

| | |
|-----------|-----|
| 7号屋外埋設土器 | 378 |
| 8号屋外埋設土器 | 378 |
| 9号屋外埋設土器 | 378 |
| 10号屋外埋設土器 | 382 |
| 11号屋外埋設土器 | 382 |
| 12号屋外埋設土器 | 382 |

〔7〕配石墓・土壙墓・土坑
.....391~411

菊池 実

| | |
|-------|-----|
| 1号土壙 | 391 |
| 2号土壙 | 391 |
| 3号土壙 | 391 |
| 4号土壙 | 392 |
| 5号土壙 | 392 |
| 6号土壙 | 392 |
| 7号土壙 | 392 |
| 8号土壙 | 393 |
| 9号土壙 | 393 |
| 10号土壙 | 393 |
| 11号土壙 | 393 |
| 12号土壙 | 403 |
| 13号土壙 | 403 |
| 14号土壙 | 403 |
| 15号土壙 | 403 |
| 16号土壙 | 403 |
| 17号土壙 | 404 |
| 18号土壙 | 404 |
| 19号土壙 | 404 |
| 20号土壙 | 404 |
| 21号土壙 | 404 |
| 22号土壙 | 405 |

〔8〕廃棄場所.....411~417

菊池 実

〔9〕グリッド.....417~424

菊池 実

4章 自然科学的分析

〔1〕田篠中原遺跡の配石遺構
群および埋設土器に残存
する脂肪の分析426~454

中野益男
福島道広
中野寛子
長田正宏

〔2〕田篠中原遺跡の縄文土器
胎土分析.....455~466

—X線回析試験及び電子顕微鏡観察—

井上 巖

〔3〕田篠中原遺跡出土黒曜石
の原産地推定.....467~472

二宮修治
藁科 実
網干 守
大沢真澄

〔4〕田篠中原遺跡でみられる
石材の種類と地質的関連
.....473~484

陣内主一

〔5〕遺跡調査における地中
レーダの活用.....485~504

渡辺広勝

5章 成果と問題点

〔1〕田篠中原遺跡の提起する
諸問題505~512

- 1 環状列石
- 2 敷石住居跡
- 3 配石遺構
- 4 埋 壘
- 5 屋外埋設土器
- 6 土 壙

菊池 実
飯塚 聡

〔2〕出土石器の検討513~517
—多孔石・凹石・石皿・磨石を中心として—

菊池 実

〔3〕田篠中原遺跡出土石斧
について.....518~520

桜井美枝

PLATES

別添資料

- 付図 1 田篠中原遺跡全体図
2 環状列石全体図
3 環状列石石材別分布図
4 環状列石重量別分布図

挿 図 目 次

| | | | | | |
|--------|----------------------------------|-------|--------|---------------------------------|---------|
| 第 1 図 | 発掘区配置図 | 8 | 第 60 図 | 17号配石遺構重量別分布 | 81 |
| 第 2 図 | O区・I区基本土層 | 9 | 第 61 図 | 17号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ | 82 |
| 第 3 図 | 調査地周辺の地質図 | 13 | 第 62 図 | 17号配石遺構出土土器 | 83 |
| 第 4 図 | 周辺地形の模式図 | 14・15 | 第 63 図 | 17号配石遺構出土土器 | 84 |
| 第 5 図 | 田篠中原遺跡と周辺の縄文時代遺跡 | 17 | 第 64 図 | 23号配石遺構 炉 (左)・先端部埋壘 (右) | 86 |
| 第 6 図 | 環状列石全体図と埋設土器分布 | 24 | 第 65 図 | 23号配石遺構 | 87・88 |
| 第 7 図 | 環状列石 (部分 1) | 27 | 第 66 図 | 23号配石遺構土器出土状況 | 89 |
| 第 8 図 | 環状列石 (部分 2) | 28 | 第 67 図 | 23号配石遺構石器出土状況 | 90・91 |
| 第 9 図 | 環状列石 (部分 3) | 29 | 第 68 図 | 23号配石遺構石材別分布 | 92 |
| 第 10 図 | 環状列石 (部分 4) | 30 | 第 69 図 | 23号配石遺構重量別分布 | 93 |
| 第 11 図 | 環状列石 石皿・多孔石出土状況 | 31 | 第 70 図 | 23号配石遺構出土土器 (1) | 95 |
| 第 12 図 | 環状列石 凹石・磨石・打製石斧等出土状況 | 32 | 第 71 図 | 23号配石遺構出土土器 (2) | 96 |
| 第 13 図 | 環状列石出土土器 (1) | 34 | 第 72 図 | 23号配石遺構出土土器 (1) | 98 |
| 第 14 図 | 環状列石出土土器 (2) | 35 | 第 73 図 | 23号配石遺構出土土器 (2) | 99 |
| 第 15 図 | 環状列石出土土器 (1) | 38 | 第 74 図 | 24号配石遺構 先端部埋壘 (左)・ 接続部埋壘 (右) | 101 |
| 第 16 図 | 環状列石出土土器 (2) | 39 | 第 75 図 | 24号配石遺構 | 102・103 |
| 第 17 図 | 環状列石出土土器 (3) | 40 | 第 76 図 | 24号配石遺構土器出土状況 | 104・105 |
| 第 18 図 | 環状列石出土土器 (4) | 41 | 第 77 図 | 24号配石遺構石器出土状況 | 106・107 |
| 第 19 図 | 環状列石出土土器 (5) | 42 | 第 78 図 | 24号配石遺構石材別分布 | 108 |
| 第 20 図 | 環状列石出土土器 (6) | 43 | 第 79 図 | 24号配石遺構重量別分布 | 109 |
| 第 21 図 | 環状列石出土土器 (7) | 44 | 第 80 図 | 24号配石遺構出土土器 (1) | 111 |
| 第 22 図 | 環状列石出土土器 (8) | 45 | 第 81 図 | 24号配石遺構出土土器 (2) | 112 |
| 第 23 図 | 立石の石材別グラフ | 46 | 第 82 図 | 24号配石遺構出土土器展開図 | 折り込み |
| 第 24 図 | 立石 | 47 | 第 83 図 | 24号配石遺構出土土器 (3) | 115 |
| 第 25 図 | 立石出土土器 | 48 | 第 84 図 | 24号配石遺構出土土器 (4) | 116 |
| 第 26 図 | 1号配石遺構 | 49 | 第 85 図 | 24号配石遺構出土土器 (5) | 117 |
| 第 27 図 | 1号配石遺構 炉 (左)・埋壘 (右) | 50 | 第 86 図 | 24号配石遺構出土土器 (1) | 121 |
| 第 28 図 | 1号配石遺構遺物出土状況 | 51 | 第 87 図 | 24号配石遺構出土土器 (2) | 122 |
| 第 29 図 | 1号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ | 51 | 第 88 図 | 24号配石遺構出土土器 (3) | 123 |
| 第 30 図 | 1号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布 | 52 | 第 89 図 | 24号配石遺構出土土器 (4) | 124 |
| 第 31 図 | 1号配石遺構出土土器 | 53 | 第 90 図 | 26号配石遺構 | 折り込み |
| 第 32 図 | 1号配石遺構出土土器 | 54 | 第 91 図 | 26号配石遺構遺物出土状況 | 折り込み |
| 第 33 図 | 2号配石遺構 | 55 | 第 92 図 | 26号配石遺構 炉 (左)・埋壘 (右) | 127 |
| 第 34 図 | 2号配石遺構 炉 (左)・埋壘 (右) | 56 | 第 93 図 | 26号配石遺構石材別分布 | 折り込み |
| 第 35 図 | 2号配石遺構遺物出土状況 | 56 | 第 94 図 | 26号配石遺構重量別分布 | 折り込み |
| 第 36 図 | 2号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布 | 56 | 第 95 図 | 26号配石遺構出土土器 (1) | 132 |
| 第 37 図 | 2号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ | 57 | 第 96 図 | 26号配石遺構出土土器 (2) | 133 |
| 第 38 図 | 2号配石遺構出土土器 | 58 | 第 97 図 | 26号配石遺構出土土器 (3) | 134 |
| 第 39 図 | 5号配石遺構 | 59 | 第 98 図 | 26号配石遺構出土土器 | 137 |
| 第 40 図 | 5号配石遺構 炉 (上)・埋壘 (下) | 60 | 第 99 図 | 36号配石遺構 | 138・139 |
| 第 41 図 | 5号配石遺構遺物出土状況 | 61 | 第100図 | 36号配石遺構 炉・接続部埋壘・先端部埋壘 | 140 |
| 第 42 図 | 5号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ | 61 | 第101図 | 36号配石遺構遺物出土状況 | 142・143 |
| 第 43 図 | 5号配石遺構 石材別 (上)・重量別 (下) 分布 | 62 | 第102図 | 36号配石遺構石材別分布 | 144 |
| 第 44 図 | 5号配石遺構出土土器 | 63 | 第103図 | 36号配石遺構重量別分布 | 145 |
| 第 45 図 | 5号配石遺構出土土器 (1) | 65 | 第104図 | 36号配石遺構出土土器 (1) | 147 |
| 第 46 図 | 5号配石遺構出土土器 (2) | 66 | 第105図 | 36号配石遺構出土土器 (2) | 148 |
| 第 47 図 | 8号配石遺構 | 67 | 第106図 | 36号配石遺構出土土器 (1) | 149 |
| 第 48 図 | 8号配石遺構 接続部埋壘 (左)・炉 (右) | 68 | 第107図 | 36号配石遺構出土土器 (2) | 150 |
| 第 49 図 | 8号配石遺構遺物出土状況 | 69 | 第108図 | 36号配石遺構出土土器 (3) | 151 |
| 第 50 図 | 8号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布とグラフ | 70 | 第109図 | 36号配石遺構出土土器 (4) | 152 |
| 第 51 図 | 8号配石遺構出土土器 (1) | 72 | 第110図 | 37号配石遺構 | 154・155 |
| 第 52 図 | 8号配石遺構出土土器展開図 | 73 | 第111図 | 37号配石遺構遺物出土状況 | 156・157 |
| 第 53 図 | 8号配石遺構出土土器 (2) | 74 | 第112図 | 37号配石遺構石材別分布 | 158 |
| 第 54 図 | 8号配石遺構出土土器 (3) | 75 | 第113図 | 37号配石遺構重量別分布 | 159 |
| 第 55 図 | 8号配石遺構出土土器 | 77 | 第114図 | 37号配石遺構出土土器 | 160 |
| 第 56 図 | 17号配石遺構 炉 | 78 | 第115図 | 37号配石遺構出土土器 (1) | 162 |
| 第 57 図 | 17号配石遺構 | 79 | 第116図 | 37号配石遺構出土土器 (2) | 163 |
| 第 58 図 | 17号配石遺構遺物出土状況 | 80 | 第117図 | 37号配石遺構出土土器 (3) | 164 |
| 第 59 図 | 17号配石遺構石材別分布 | 81 | 第118図 | 38号配石遺構 | 166 |

| | | | | | |
|-------|---------------------------|------|-------|---------------------------|------|
| 第119図 | 38号配石遺構遺物出土状況 | 167 | 第182図 | 11号配石遺構出土土器 | 228 |
| 第120図 | 38号配石遺構石材別分布 | 168 | 第183図 | 11号配石遺構出土土器 | 229 |
| 第121図 | 38号配石遺構重量別分布 | 169 | 第184図 | 12号配石遺構 | 230 |
| 第122図 | 38号配石遺構出土土器 | 171 | 第185図 | 12号配石遺構遺物出土状況 | 231 |
| 第123図 | 38号配石遺構出土土器 | 173 | 第186図 | 12号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 231 |
| 第124図 | 1号竪穴住居跡 | 174 | 第187図 | 12号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布 | 232 |
| 第125図 | 1号竪穴住居跡 | 175 | 第188図 | 12号配石遺構出土土器 | 232 |
| 第126図 | 1号竪穴住居跡遺物出土状況 | 176 | 第189図 | 12号配石遺構出土土器 | 233 |
| 第127図 | 1号竪穴住居跡出土土器(1) | 178 | 第190図 | 14号配石遺構 | 234 |
| 第128図 | 1号竪穴住居跡出土土器(2) | 179 | 第191図 | 14号配石遺構遺物出土状況 | 235 |
| 第129図 | 1号竪穴住居跡出土土器 | 180 | 第192図 | 14号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 235 |
| 第130図 | 2号竪穴住居跡 | 折り込み | 第193図 | 14号配石遺構石材別分布 | 236 |
| 第131図 | 2号竪穴住居跡土器出土状況 | 折り込み | 第194図 | 14号配石遺構重量別分布 | 236 |
| 第132図 | 2号竪穴住居跡土器出土状況 | 折り込み | 第195図 | 14号配石遺構出土土器 | 237 |
| 第133図 | 2号竪穴住居跡出土土器(1) | 187 | 第196図 | 14号配石遺構出土土器 | 238 |
| 第134図 | 2号竪穴住居跡出土土器(2) | 188 | 第197図 | 15号配石遺構 | 239 |
| 第135図 | 2号竪穴住居跡出土土器(3) | 189 | 第198図 | 15号配石遺構 重量別(左)・石材別(右) 分布 | 239 |
| 第136図 | 2号竪穴住居跡出土土器(4) | 190 | 第199図 | 15号配石遺構出土土器 | 239 |
| 第137図 | 2号竪穴住居跡出土土器(5) | 191 | 第200図 | 16号配石遺構 | 240 |
| 第138図 | 2号竪穴住居跡出土土器(1) | 194 | 第201図 | 16号配石遺構遺物出土状況 | 241 |
| 第139図 | 2号竪穴住居跡出土土器(2) | 195 | 第202図 | 16号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 241 |
| 第140図 | 2号竪穴住居跡出土土器(3) | 196 | 第203図 | 16号配石遺構石材別分布 | 242 |
| 第141図 | 3号配石遺構 | 198 | 第204図 | 16号配石遺構重量別分布 | 242 |
| 第142図 | 3号配石遺構遺物出土状況と石材別グラフ | 198 | 第205図 | 16号配石遺構出土土器 | 243 |
| 第143図 | 3号配石遺構重量別分布とグラフ | 199 | 第206図 | 16号配石遺構出土土器 | 244 |
| 第144図 | 3号配石遺構出土土器 | 199 | 第207図 | 19号配石遺構 | 折り込み |
| 第145図 | 4号配石遺構 | 200 | 第208図 | 19号配石遺構石材別分布 | 246 |
| 第146図 | 4号配石遺構遺物出土状況 | 201 | 第209図 | 19号配石遺構重量別分布 | 246 |
| 第147図 | 4号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 201 | 第210図 | 19号配石遺構出土遺物 | 247 |
| 第148図 | 4号配石遺構 石材別(上)・重量別(下) 分布 | 202 | 第211図 | 20号配石遺構 | 249 |
| 第149図 | 4号配石遺構出土土器 | 203 | 第212図 | 20号配石遺構遺物出土状況 | 250 |
| 第150図 | 4号配石遺構出土土器(1) | 204 | 第213図 | 20号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 250 |
| 第151図 | 4号配石遺構出土土器(2) | 205 | 第214図 | 20号配石遺構 石材別(上)・重量別(下) 分布 | 251 |
| 第152図 | 6号配石遺構 | 206 | 第215図 | 20号配石遺構出土土器 | 253 |
| 第153図 | 6号配石遺構遺物出土状況 | 207 | 第216図 | 20号配石遺構出土土器 | 255 |
| 第154図 | 6号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 207 | 第217図 | 21号配石遺構 | 256 |
| 第155図 | 6号配石遺構石材別分布 | 208 | 第218図 | 21号配石遺構出土土器 | 256 |
| 第156図 | 6号配石遺構重量別分布 | 208 | 第219図 | 21号配石遺構遺物出土状況 | 257 |
| 第157図 | 6号配石遺構出土土器 | 209 | 第220図 | 21号配石遺構石材別分布 | 257 |
| 第158図 | 6号配石遺構出土土器 | 210 | 第221図 | 21号配石遺構重量別分布 | 257 |
| 第159図 | 7号配石遺構 | 211 | 第222図 | 21号配石遺構出土土器 | 258 |
| 第160図 | 7号配石遺構遺物出土状況 | 212 | 第223図 | 22号配石遺構 | 260 |
| 第161図 | 7号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 212 | 第224図 | 22号配石遺構遺物出土状況 | 261 |
| 第162図 | 7号配石遺構石材別分布 | 213 | 第225図 | 22号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 261 |
| 第163図 | 7号配石遺構重量別分布 | 213 | 第226図 | 22号配石遺構石材別分布 | 262 |
| 第164図 | 7号配石遺構出土土器(1) | 215 | 第227図 | 22号配石遺構出土土器 | 262 |
| 第165図 | 7号配石遺構出土土器(2) | 216 | 第228図 | 22号配石遺構重量別分布 | 263 |
| 第166図 | 7号配石遺構出土土器 | 217 | 第229図 | 22号配石遺構出土土器(1) | 264 |
| 第167図 | 9号配石遺構 | 218 | 第230図 | 22号配石遺構出土土器(2) | 265 |
| 第168図 | 9号配石遺構遺物出土状況 | 219 | 第231図 | 25号配石遺構 | 266 |
| 第169図 | 9号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 219 | 第232図 | 25号配石遺構遺物出土状況 | 267 |
| 第170図 | 9号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布 | 220 | 第233図 | 25号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 267 |
| 第171図 | 9号配石遺構出土土器 | 220 | 第234図 | 25号配石遺構石材別分布 | 268 |
| 第172図 | 9号配石遺構出土土器 | 221 | 第235図 | 25号配石遺構重量別分布 | 269 |
| 第173図 | 10号配石遺構 | 222 | 第236図 | 25号配石遺構出土土器 | 270 |
| 第174図 | 10号配石遺構石材別分布とグラフ | 222 | 第237図 | 25号配石遺構出土土器 | 272 |
| 第175図 | 10号配石遺構重量別分布とグラフ | 223 | 第238図 | 27号配石遺構 | 273 |
| 第176図 | 10号配石遺構出土土器 | 223 | 第239図 | 27号配石遺構遺物出土状況 | 274 |
| 第177図 | 11号配石遺構 | 224 | 第240図 | 27号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 274 |
| 第178図 | 11号配石遺構遺物出土状況 | 225 | 第241図 | 27号配石遺構石材別分布 | 275 |
| 第179図 | 11号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ | 225 | 第242図 | 27号配石遺構重量別分布 | 275 |
| 第180図 | 11号配石遺構石材別分布 | 226 | 第243図 | 27号配石遺構出土土器 | 276 |
| 第181図 | 11号配石遺構重量別分布 | 227 | 第244図 | 27号配石遺構出土土器 | 277 |

| | | | | | |
|-------|------------------------------------|------|-------|---------------------------------|------|
| 第245図 | 28号配石遺構 | 278 | 第305図 | 41号配石遺構重量別分布 | 336 |
| 第246図 | 28号配石遺構遺物出土状況 | 279 | 第306図 | 41号配石遺構出土土器(1) | 338 |
| 第247図 | 28号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 279 | 第307図 | 41号配石遺構出土土器(2) | 339 |
| 第248図 | 28号配石遺構石材別分布 | 280 | 第308図 | 41号配石遺構出土土器 | 340 |
| 第249図 | 28号配石遺構重量別分布 | 280 | 第309図 | 43号配石遺構 | 341 |
| 第250図 | 28号配石遺構出土土器 | 281 | 第310図 | 43号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 342 |
| 第251図 | 29号配石遺構 | 283 | 第311図 | 43号配石遺構出土遺物 | 342 |
| 第252図 | 29号配石遺構遺物出土状況 | 284 | 第312図 | 44号配石遺構 | 折り込み |
| 第253図 | 29号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 284 | 第313図 | 44号配石遺構石材別分布 | 折り込み |
| 第254図 | 29号配石遺構石材別分布 | 285 | 第314図 | 44号配石遺構重量別分布 | 折り込み |
| 第255図 | 29号配石遺構重量別分布 | 286 | 第315図 | 44号配石遺構出土土器 | 346 |
| 第256図 | 29号配石遺構出土土器 | 287 | 第316図 | 44号配石遺構出土土器 | 347 |
| 第257図 | 29号配石遺構出土土器 | 289 | 第317図 | 45号配石遺構 | 折り込み |
| 第258図 | 30号配石遺構 | 290 | 第318図 | 45号配石遺構石材別分布 | 折り込み |
| 第259図 | 30号配石遺構遺物出土状況 | 291 | 第319図 | 45号配石遺構重量別分布 | 折り込み |
| 第260図 | 30号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 291 | 第320図 | 45号配石遺構出土土器 | 351 |
| 第261図 | 30号配石遺構石材別分布 | 292 | 第321図 | 45号配石遺構出土土器 | 352 |
| 第262図 | 30号配石遺構重量別分布 | 292 | 第322図 | 46号配石遺構 | 折り込み |
| 第263図 | 30号配石遺構出土土器 | 293 | 第323図 | 46号配石遺構石材別分布 | 折り込み |
| 第264図 | 30号配石遺構出土土器 | 295 | 第324図 | 46号配石遺構重量別分布 | 折り込み |
| 第265図 | 31号配石遺構 | 296 | 第325図 | 46号配石遺構出土土器(1) | 355 |
| 第266図 | 31号配石遺構遺物出土状況と 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 297 | 第326図 | 46号配石遺構出土土器(2) | 356 |
| 第267図 | 31号配石遺構石材別分布 | 298 | 第327図 | 46号配石遺構出土土器 | 359 |
| 第268図 | 31号配石遺構重量別分布 | 299 | 第328図 | 47号配石遺構 | 360 |
| 第269図 | 31号配石遺構出土土器 | 300 | 第329図 | 47号配石遺構遺物出土状況 | 361 |
| 第270図 | 31号配石遺構出土土器 | 301 | 第330図 | 47号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 361 |
| 第271図 | 32号配石遺構 | 302 | 第331図 | 47号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布 | 362 |
| 第272図 | 32号配石遺構遺物出土状況 | 303 | 第332図 | 47号配石遺構出土土器 | 363 |
| 第273図 | 32号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 303 | 第333図 | 47号配石遺構出土土器 | 365 |
| 第274図 | 32号配石遺構石材別分布 | 304 | 第334図 | 48号配石遺構 | 366 |
| 第275図 | 32号配石遺構重量別分布 | 305 | 第335図 | 48号配石遺構遺物出土状況と出土土器 | 367 |
| 第276図 | 32号配石遺構出土土器 | 306 | 第336図 | 48号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 367 |
| 第277図 | 32号配石遺構出土土器 | 307 | 第337図 | 48号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布 | 368 |
| 第278図 | 33号配石遺構 | 折り込み | 第338図 | 48号配石遺構出土土器 | 369 |
| 第279図 | 33号配石遺構石材別分布 | 折り込み | 第339図 | 49号配石遺構 | 369 |
| 第280図 | 33号配石遺構重量別分布 | 折り込み | 第340図 | 49号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布 | 369 |
| 第281図 | 33号配石遺構出土土器(1) | 311 | 第341図 | 49号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 370 |
| 第282図 | 33号配石遺構出土土器(2) | 312 | 第342図 | 50号配石遺構 | 371 |
| 第283図 | 33号配石遺構出土土器 | 314 | 第343図 | 50号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布とグラフ | 372 |
| 第284図 | 34号配石遺構 | 316 | 第344図 | 50号配石遺構出土土器 | 373 |
| 第285図 | 34号配石遺構遺物出土状況 | 317 | 第345図 | 1・2号屋外埋設土器 | 375 |
| 第286図 | 34号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布とグラフ | 318 | 第346図 | 3・4・5号屋外埋設土器 | 377 |
| 第287図 | 34号配石遺構出土土器(1) | 319 | 第347図 | 6・7号屋外埋設土器 | 379 |
| 第288図 | 34号配石遺構出土土器(2) | 320 | 第348図 | 8・9・10・11号屋外埋設土器 | 380 |
| 第289図 | 34号配石遺構出土土器 | 321 | 第349図 | 12号屋外埋設土器 | 381 |
| 第290図 | 35号配石遺構 | 322 | 第350図 | 1・2・3号屋外埋設土器 | 383 |
| 第291図 | 35号配石遺構石材別分布 | 323 | 第351図 | 4・5・6・7・9号屋外埋設土器 | 384 |
| 第292図 | 35号配石遺構重量別分布 | 324 | 第352図 | 8・10・11・12号屋外埋設土器 | 385 |
| 第293図 | 35号配石遺構出土土器 | 325 | 第353図 | 屋外埋設土器展開図(1・2・3 6・9・12号) | 折り込み |
| 第294図 | 35号配石遺構出土土器 | 327 | 第354図 | 屋外埋設土器出土土器 | 389 |
| 第295図 | 40号配石遺構遺物出土状況 | 328 | 第355図 | 土壌(1・2・3号) | 394 |
| 第296図 | 40号配石遺構 | 折り込み | 第356図 | 土壌(4・5・6・7号) | 395 |
| 第297図 | 40号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布とグラフ | 折り込み | 第357図 | 土壌(8・9号) | 396 |
| 第298図 | 40号配石遺構出土土器 | 331 | 第358図 | 土壌(10・11・12・13号) | 397 |
| 第299図 | 40号配石遺構出土土器 | 333 | 第359図 | 土壌(14・15・16号) | 398 |
| 第300図 | 13号配石遺構 | 333 | 第360図 | 土壌(17・18・19号) | 399 |
| 第301図 | 41号配石遺構 | 334 | 第361図 | 土壌(20・21号) | 400 |
| 第302図 | 41号配石遺構遺物出土状況 | 335 | 第362図 | 22号土壌 | 折り込み |
| 第303図 | 41号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ | 335 | 第363図 | 土壌出土土器 | 407 |
| 第304図 | 41号配石遺構石材別分布 | 336 | 第364図 | 土壌出土土器(1) | 408 |
| | | | 第365図 | 土壌出土土器(2) | 409 |

| | | | | | |
|-------|--|-------------|-----|------------------------|-----|
| 第366図 | 土壙出土石器(3) | 410 | 第4図 | 縄文土器X線回折図型 | 466 |
| 第367図 | 廃棄場所遺物出土状況 | 412・413 | 第1図 | 下仁田町付近の地質図 | 482 |
| 第368図 | 廃棄場所出土石器 | 414 | 第2図 | 富岡市付近の地質図 | 483 |
| 第369図 | 廃棄場所出土石器(1) | 415 | 図1 | 環状列石シュミレーション図 | 487 |
| 第370図 | 廃棄場所出土石器(2) | 416 | 図2 | | 487 |
| 第371図 | グリッド別中期土器分布図(点数) | 418 | 図3 | 住居跡 | 489 |
| 第372図 | グリッド別中期土器分布図(重量) | 419 | 図4 | 住居跡 | 489 |
| 第373図 | グリッド別石器分布図 | 420 | 図5 | 周溝・周溝・溝・堀跡 | 489 |
| 図1 | 土壌試料採取地点(1-1~19) | 427~429 | 図6 | 横穴入口部羨道・横穴 | 490 |
| 図2 | 重金属分布(2-1~10) | 431・432 | 図7 | | 490 |
| 図3 | 各遺構から採取した土壌のリン分布 | 432 | 図8 | | 491 |
| 表1 | 試料の残存脂肪抽出量および抽出率 (1-1~5) | 432・434 | 図9 | トンネルの横断データ | 494 |
| 表2 | コレステロールと シトステロールの割合(2-1~13) | 435・436 | 図10 | 地中における表現例(礫群・空洞・埋設物) | 494 |
| 図4 | 残存する脂肪の脂肪酸組成(4-1~31) | 439~442 | 図11 | | 495 |
| 図5 | 残存する脂肪のステロール組成 (5-1~16) | 442・445・446 | 図12 | | 495 |
| 図6 | 残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 (6-1~17) | 446~448・451 | 図13 | | 496 |
| 図7 | 残存する脂肪の脂肪酸組成による 種特異性相関(7-1~17) | 451~454 | 図14 | 埋設物体の反射面 | 497 |
| 第1図 | 三角(A)・菱形(B)ダイアグラム位置図 | 456 | 図15 | リアルラインとパターン発生 | 498 |
| 第1表 | 胎土性状表 | 458 | 図16 | ローム層遺跡での反射波の取得条件(溝の場合) | 498 |
| 第2図 | (A) Mo, Mi, Hb三角ダイアグラム (B) Mo-Cb, Mi-Hb菱形ダイアグラム | 460 | 図17 | 地中レーダ法に利用される電磁波パルス帯 | 500 |
| 第3図 | Q t - P t 相関図 | 462・463 | 図18 | 媒体の電気特性 | 500 |
| | | | 図19 | 地中レーダ探査装置概要図 | 502 |
| | | | 図20 | CRT映像表示例 | 502 |
| | | | 第1図 | 打製石斧分類概念図 | 518 |
| | | | 第2図 | 打製石斧類型組成 | 518 |
| | | | 第3図 | 打製石斧類型別石材組成 | 519 |
| | | | 第4図 | 磨製石斧石材組成 | 520 |

PLATES

| | | | |
|--------|---------------------|--------|--|
| PL. 1 | 航空写真 | PL. 32 | 24号配石遺構 |
| PL. 2 | 航空写真 | PL. 33 | 24号配石遺構 |
| PL. 3 | 航空写真(東から) | PL. 34 | 24号配石遺構 |
| PL. 4 | 航空写真 上(西から)・下(南から) | PL. 35 | 24号配石遺構・先端部埋壘 |
| PL. 5 | 航空写真(北から) | PL. 36 | 24号配石遺構・先端部埋壘・接続部埋壘 |
| PL. 6 | I区全景 | PL. 37 | 26号配石遺構・張出し部 |
| PL. 7 | 0区全景 | PL. 38 | 26号配石遺構・炉・先端部埋壘 |
| PL. 8 | モザイク写真 | PL. 39 | 36号配石遺構 |
| PL. 9 | モザイク写真・下(環状列石の部分拡大) | PL. 40 | 36号配石遺構 |
| PL. 10 | 環状列石 | PL. 41 | 36号配石遺構・張出し部・炉 |
| PL. 11 | 環状列石 | PL. 42 | 36号配石遺構・先端部埋壘・接続部埋壘・多孔石・ 石皿・丸石・磨製石斧 |
| PL. 12 | 環状列石(部分) | PL. 43 | 37号配石遺構 |
| PL. 13 | 環状列石(部分) | PL. 44 | 37号配石遺構・張出し部 |
| PL. 14 | 立石 | PL. 45 | 37号配石遺構 |
| PL. 15 | 1号配石遺構・埋壘・炉 | PL. 46 | 37号配石遺構 |
| PL. 16 | 2号配石遺構・埋壘・炉 | PL. 47 | 37号配石遺構・炉 |
| PL. 17 | 5・6号配石遺構 | PL. 48 | 37号配石遺構・立石・先端部埋壘・多孔石 |
| PL. 18 | 5号配石遺構 | PL. 49 | 38号配石遺構・埋壘 |
| PL. 19 | 5号配石遺構・炉・埋壘 | PL. 50 | 1号竪穴住居跡 |
| PL. 20 | 7・8号配石遺構 | PL. 51 | 2号竪穴住居跡 |
| PL. 21 | 8号配石遺構 | PL. 52 | 2号竪穴住居跡 |
| PL. 22 | 8号配石遺構 | PL. 53 | 2号竪穴住居跡 |
| PL. 23 | 8号配石遺構 | PL. 54 | 3号配石遺構・4号配石遺構 |
| PL. 24 | 8号配石遺構・張出し部 | PL. 55 | 6号配石遺構 |
| PL. 25 | 8号配石遺構・炉・埋壘 | PL. 56 | 6号配石遺構・伏壘 |
| PL. 26 | 17号配石遺構 | PL. 57 | 7号配石遺構 |
| PL. 27 | 17号配石遺構・炉・石皿 | PL. 58 | 8号配石遺構 |
| PL. 28 | 23~26号配石遺構 | PL. 59 | 9号配石遺構・10号配石遺構 |
| PL. 29 | 23号配石遺構 | PL. 60 | 11号配石遺構 |
| PL. 30 | 23号配石遺構 | PL. 61 | 12号配石遺構 |
| PL. 31 | 23号配石遺構・張出し部・埋壘・炉 | | |

- PL. 62 14号配石遺構・15号配石遺構
- PL. 63 16号配石遺構
- PL. 64 12号屋外埋設土器
- PL. 65 20号配石遺構
- PL. 66 21号配石遺構
- PL. 67 22号配石遺構
- PL. 68 22号配石遺構・埋壘
- PL. 69 27号配石遺構・28号配石遺構
- PL. 70 29号配石遺構
- PL. 71 30号配石遺構
- PL. 72 31号配石遺構
- PL. 73 32号配石遺構
- PL. 74 33号配石遺構
- PL. 75 33号配石遺構
- PL. 76 34号配石遺構・35号配石遺構
- PL. 77 40号配石遺構
- PL. 78 41号配石遺構・43号配石遺構
- PL. 79 44号配石遺構・45号配石遺構
- PL. 80 46号配石遺構・47号配石遺構
- PL. 81 48号配石遺構・多孔石
- PL. 82 49号配石遺構・50号配石遺構
- PL. 83 13号配石遺構・19号配石遺構
- PL. 84 1号屋外埋設土器・2号屋外埋設土器
- PL. 85 2号屋外埋設土器
- PL. 86 3号屋外埋設土器
- PL. 87 4号屋外埋設土器
- PL. 88 5号屋外埋設土器・6号屋外埋設土器
- PL. 89 7号屋外埋設土器・8号屋外埋設土器・9号屋外埋設土器
・10号屋外埋設土器
- PL. 90 1号土壘・2号土壘・3号土壘・4号土壘
- PL. 91 3号土壘・5号土壘
- PL. 92 6号土壘・7号土壘・8号土壘
- PL. 93 9号土壘・10号土壘・11号土壘・12号土壘・13号土壘
- PL. 94 14号土壘・15号土壘・16号土壘・17号土壘・18号土壘
- PL. 95 19号土壘・20号土壘
- PL. 96 21号土壘
- PL. 97 22号土壘・伏壘
- PL. 98 廃棄場所
- PL. 99 廃棄場所
- PL. 100 グリッド
- PL. 101 石棒出土状況・グリッド遺物出土状況・多孔石出土状況
- PL. 102 環状列石（土器・石器）
- PL. 103 環状列石（石器）
- PL. 104 環状列石（石器）・立石（石器）
- PL. 105 1号配石遺構（土器・石器） 2号配石遺構（土器）
5号配石遺構（土器・石器）
- PL. 106 5号配石遺構（石器） 8号配石遺構（土器・石器）
17号配石遺構（土器・石器）
- PL. 107 17号配石遺構（石器） 23号配石遺構（土器・石器）
- PL. 108 24号配石遺構（土器）
- PL. 109 24号配石遺構（土器・石器）
- PL. 110 24号配石遺構（石器） 26号配石遺構（土器）
- PL. 111 26号配石遺構（土器・石器） 36号配石遺構（土器・石器）
- PL. 112 36号配石遺構（石器）
- PL. 113 36号配石遺構（石器）
- PL. 114 37号配石遺構（土器・石器）
- PL. 115 37号配石遺構（石器） 38号配石遺構（土器・石器）
1号竪穴住居跡（土器・石器） 2号竪穴住居跡（土器）
- PL. 116 2号竪穴住居跡（土器・石器）
- PL. 117 2号竪穴住居跡（石器）
- PL. 118 3号配石遺構（石器） 4号配石遺構（土器・石器）
- PL. 119 6号配石遺構（土器・石器） 7号配石遺構（土器・石器）
9号配石遺構（土器・石器）
- PL. 120 9号配石遺構（石器） 10号配石遺構（土器）
11号配石遺構（土器・石器） 12号配石遺構（土器・石器）
13号配石遺構（土器） 14号配石遺構（土器・石器）
15号配石遺構（石器）
- PL. 121 16号配石遺構（土器・石器） 19号配石遺構（土器・石器）
20号配石遺構（土器・石器） 21号配石遺構（土器・石器）
- PL. 122 22号配石遺構（土器・石器） 25号配石遺構（土器・石器）
27号配石遺構（土器）
- PL. 123 27号配石遺構（石器） 28号配石遺構（土器・石器）
29号配石遺構（土器・石器） 30号配石遺構（土器・石器）
31号配石遺構（土器）
- PL. 124 31号配石遺構（石器） 32号配石遺構（土器・石器）
33号配石遺構（土器・石器）
- PL. 125 34号配石遺構（土器・石器） 35号配石遺構（土器・石器）
40号配石遺構（土器・石器）
- PL. 126 41号配石遺構（土器・石器） 43号配石遺構（土器・石器）
44号配石遺構（土器・石器） 45号配石遺構（土器・石器）
- PL. 127 46号配石遺構（土器・石器） 47号配石遺構（土器・石器）
48号配石遺構（土器・石器） 50号配石遺構（石器）
- PL. 128 1号屋外埋設土器・2号屋外埋設土器・3号屋外埋設土器
4号屋外埋設土器・5号屋外埋設土器・6号屋外埋設土器
7号屋外埋設土器・8号屋外埋設土器・9号屋外埋設土器
10号屋外埋設土器・11号屋外埋設土器・12号屋外埋設土器
- PL. 129 3号土壘・7号土壘・8号土壘・9号土壘・13号土壘・
14号土壘・15号土壘・18号土壘
- PL. 130 19号土壘・22号土壘
- PL. 131 廃棄場所
- PL. 132 廃棄場所・グリッド

1章 調査の経過

上信越自動車道（関越自動車道上越線）は、首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡J Cから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過、新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

群馬県側に係る埋蔵文化財の取り扱いは群馬県教育委員会が所管している。

昭和56年、藤岡市～松井田町間の路線発表があり、以後、インターチェンジ・サービスエリア等を中心にその設計について、日本道路公団から説明が行われてきた。

建設に係る埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な進展は、昭和59年に入ってからである。日本道路公団東京第2建設局と県教育委員会文化財保護課を中心に頻繁な事前協議が行われ、その結果、昭和59年11月28日付け、東京第2建設局長から県教育長あてに「関越自動車道上越線（藤岡市～下仁田町間）に係る埋蔵文化財包蔵地の分布調査について」の依頼があった。その根拠になったのは、昭和42年9月30日付け「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」第3項である。

分布調査の結果（その後の補正を含め）、発掘調査必要面積の約100万㎡が定まることになり、昭和60年には発掘調査計画が策定された。公団・県教委・文化庁の協議が繰り返され、文化庁から次の指導がなされている（昭和61年5月9日付文化庁次長より県教育長あて通知）。

事前の発掘調査等に遺漏のないよう（道路公団に）指導すると共に、東京第2建設局長あて文書の中に、埋蔵文化財の取り扱いについて遺漏のないようお願いするとして次の4点をあげている。

1 当該予定地に係る49個所の遺跡については、

工事の施工に先立って発掘調査を実施すること。

2 発掘調査の結果、重要な遺跡が発見された場合は、その保存について十分配慮すること。

3 当該予定地内において、未確認の遺跡が発見された場合は、その取り扱いについて十分配慮すること。

4 発掘調査後の措置については、群馬県教育委員会と協議すること。

※49箇所は後に55遺跡に変更された。

田篠遺跡は、昭和61年に上信越線の調査が開始された4つの遺跡の内の1つであり、昭和62年に調査を終了している。

当遺跡は、その遺構の性質上・調査上から、田篠上平遺跡・田篠中原遺跡の2つに分け、前者については、昭和63年度に整理と報告書の刊行が行われている。田篠遺跡全体の調査に至る経過については、田篠上平遺跡報告書に記述してあるので、それを参照していただきたい。

上信越線の整理事業については昭和63年度から始まっている。一般的に開発事業に伴う発掘調査は、工事工程に追われることから発掘調査をすべて終了させてから整理に入ることが多い。その場合、整理期間が長期にわたることから発掘と整理にギャップが生じ易く、また、予算についても問題点として指摘されていた。

今回、上信越線全体の発掘調査・整理事業の効率化をはかるという観点から、発掘調査と一部並行し、3班体制で上越線調査事務所で行われた。

当田篠中原遺跡の整理は平成元年4月～平成2年9月までの1年6カ月である。

上越線調査事務所での整理は平成3年度までとし、以後の整理は本部で行うことになっている。

2 調査の経過（日誌）

田篠遺跡は昭和61年4月、関越道上越線調査事務所開設と同時に発掘計画が進められた。当遺跡は県教育委員会文化財保護課による分布調査で、中央部（遺物分布濃密地区）22,800㎡、そこを挟んで、東に分布の薄い地区10,900㎡と西に要試掘区約9,000㎡とに、3分割されていた。当遺跡内には南北に走る市道2本、農道2本があり、それによって分割される部分を西からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区とした。さらに要試掘区は61年度調査の結果、遺構の継続が予想され0区とした。

整理事業を実施するにあたり、田篠遺跡0・Ⅰ区は田篠中原遺跡に、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区は田篠上平遺跡に分離されたが、調査は並行して実施している。田篠上平遺跡報文中ではⅡ～Ⅳ区検出の古墳、奈良～平安時代の遺構調査を中心に日誌がまとめられており、今回は0・Ⅰ区検出の縄文時代の遺構群の調査を中心に日誌を掲載する。

なお、日誌の記述にあたっては、調査の問題点等も記した。

昭和61（1986）年度

5月13日 日本道路公団富岡工事事務所へ打ち合わせ。発掘場所の図面、その他の資料をいただく。調査担当者は依田治雄、右島和夫、菊池 実の3名である。

5月16日 農協と事務所用地借地の件で打ち合わせ。富岡市教育委員会と発掘作業員雇用条件についての協議。

5月18日 作業員募集の広告と、事務所用地契約を行う。

5月21日 事務所用地の桑の抜根作業及び整地。

5月23日 調査事務所建設。

5月24日 発掘調査工程について公団と打ち合わせ。またそのことについて農協へも連絡。

5月26日 作業員雇用受付開始。

5月27日 試掘トレンチ設定。桑の収穫終了まで調査に入れない畑もあり、調査会議にかけて、地層把握のための試掘トレンチを設定する。

5月28日 作業員が本日より出勤。試掘トレンチの発掘調査を開始する。

5月29日 基準杭打ち作業を（株）測研に委託。発掘機材を搬入。

6月3日 桑の収穫終了した畑から重機による抜根開始。

6月16日～25日 遺構確認作業を行う。

6月26日 縄文時代の遺構を検出。1号配石遺構・2号配石遺構と命名。

遺構名称について 1号配石遺構・2号配石遺構の調査を進めて行く過程では、これらの遺構が敷石住居跡になるものとは想像もつかなかった。Ⅰ区調査区からは敷石住居跡とは確実に異なる配石遺構が多数検出され、それらと同一のものと理解していた。その後、1・2号配石遺構に炉跡と思われる石組の存在と埋塞の検出、さらに決定的であったのは5号配石遺構の調査結果であり、そこから1・2号配石遺構は敷石住居跡の残欠と判断されるに至った。このため、調査段階では敷石住居跡か配石遺構かの判断のつかないもの、確実に敷石住居跡と判断されるものも、遺物取り上げ時の混乱を防ぐ目的で、総てに配石遺構名称を付して調査の円滑をはかった。

6月27日～7月10日 遺構確認作業を継続。

7月11日 Ⅰ区西端から縄文時代中期土器片が大量に出土した。

7月12日～27日 遺構確認作業と精査。

7月28日 1号～5号配石遺構の写真撮影。

7月29日 遺構確認作業を継続。

7月30日 Fd-47・48グリッドから縄文時代中期の屋外埋設土器を検出。土壌内に逆位状態で埋設されていた。次年度0区に調査が及んで、この土器が環状列石に伴うことが判明した。

Ⅰ区の調査



1章 調査の経過

屋外埋設土器について 住居内埋壘と異なり、屋外に単独に、あるいは複数個体埋設された土器を指す。住居内埋壘と同一範疇でとらえる報告書が多々見られるが、明らかに分離すべきである。

8月1日～7日 遺構確認作業を継続。
8月8日 読売新聞群馬版に遺跡の紹介記事が掲載される。

8月9日～25日 遺構確認作業、配石遺構の実測、遺物取り上げ等を行う。

配石遺構の実測作業 詳細な図面を作成するために、1/10実測を原則とした。敷石住居跡や土壇も同様である。というのも、配石遺構や敷石住居跡には多種多様な石が使用され、大石もあれば、それら大石の押さえの小石も多量に出土していた。これらを実測するには1/20図面では不可能にちかかったからである。このため実測作業にあたっては、(株)測研の応援を得た。

なお、環状列石は規模が大きいため1/20実測図を作成した。

8月25日 沢口 宏先生来跡。
8月26日～9月4日 遺構確認作業の継続。9号配石遺構までを検出した。
9月5日～12日 5・6・7・9・10号配石遺構の実測作業。10号配石遺構の写真撮影。
9月13日～18日 調査継続。
9月19日 シン航空写真株式会社の高塚義人氏、県企業局の赤山谷造氏来跡。
9月20日 現地説明会の資料作成。
9月22日～29日 遺構確認作業、配石遺構の調査。
9月30日～10月4日 航空写真撮影のためのI区全域の清掃。東京新聞社取材。
10月5日 ヘリコプター使用による航空写真撮影の実施(中央航業株式会社)。
10月6日～8日 現地説明会の準備。
10月9日 シン航空写真株式会社によるモザイク写真撮影の実施。

遺跡航空写真の撮影について 9月末日現在、幅約60m、長さ約230mの路線範囲で発掘調査を行っている。このうち約6,000㎡の調査区(I区)から縄文時代の配石遺構群を検出し、残りの調査区(II・III区)からは古墳、奈良～平安時代の集落を検出している。遺跡の立地、検出した遺構の配置を検討するために、航空写真撮影を実施した。撮影にあたっては、高高度・低高度による垂直写真および4方向(東西南北)からの斜め写真である。

①高高度・低高度の垂直写真撮影。
高高度一周辺河川、地形および古墳群を明瞭に撮影できるように。

低高度一遺跡を中心とした撮影になるが、とりわけ配石遺構群が明瞭に撮影できるように。

②斜め写真撮影。

高高度からの4方向撮影を考慮しており、遺跡の立地(扇状地形)を中心とした撮影。

上記撮影方法には、従来①ラジコン機②バルーン③航空機(セスナ機あるいはヘリコプター)使用による撮影が行われてきたが、過去の実績ならびに遺跡の条件を考慮してヘリコプター使用による撮影を実施した。

10月11・12日 現地説明会を開催。11日(土)は雨天にもかかわらず100余名の見学者、翌日は200余名集まり、総計330名に達した。このほかにTBSテレビ、日本テレビ、日本写真新聞社の取材があった。

現地説明会について 開催日の1か月前より準備を始めた。案内の送付は、富岡市内の小・中・高等学校、甘楽町内の小・中学校、県内市町村教育委員会、近県埋文事業団・同センターなどである。説明会は土・日曜日の2日間を設定し、時間は午前10時から午後3時までとした。小雨決行である。遺跡の見学と遺構および調査の方法について解説し、また、事務所において出土遺物および写真パネルを展示して解説を行った。遺跡パンフレットはB4版2ツ折りで、計1,000部を印刷配布した。

10月17日 8号配石遺構の写真撮影。
10月18日 育英高等学校の松本 保先生、生徒見学。
10月20日～26日 個々の配石遺構の調査実施。
10月27日 甘楽町文化財調査委員来跡。
10月28日 明和県立高等学校の川原秀夫先生、生徒見学。
10月29日～11月4日 配石遺構の調査実施。
11月5日 青山学院大学の吉田章一郎先生、田村晃一先生、清水信行氏来跡。
11月6・7日 配石遺構と土壇の調査を行う。
11月8日 埼玉県埋蔵文化財調査事業団の職員、研修で来跡。
11月10日 2・3・7号土壇と2号屋外埋設土器の遺物取り上げを実施した。
11月12日 文化庁の岡本調査官来跡。
11月13日 3・4号土壇と4号屋外埋設土器の調査。
11月14日 残存脂肪分析土壌採取の指導で、帯広畜産大学の中野益雄先生と北海道測量図工社の長田正宏所長来



敷石住居跡の調査



写真撮影の準備

2 調査の経過（日誌）

跡。

残存脂肪分析について 住居内埋甕、屋外埋設土器の用途に差異あるものか、また土壌は墓として機能したものを判断するために上記分析を実施した。

11月17・18日 12号配石遺構までを調査。18日には戸田哲也、鈴木保彦、山本輝久、能登 健の各氏来跡。

11月19・20日 6号土壌、立石の写真撮影。

立石について 61年度調査段階では、立石は単独のものとして理解していたが、0区に調査がおよんだ62年度に入って、これが環状列石内に組み込まれていることが判明した。

11月21日 県立歴史博物館の外山和夫、石川正之助両氏来跡。

11月22日～29日 グリッドの遺物取り上げ作業。

12月1日～3日 配石遺構の下部調査。7・8号土壌の写真撮影。グリッドの遺物取り上げ。

12月4日 北海道教育庁の工藤研二氏来跡。

12月5日～8日 配石遺構の遺物取り上げ。

12月9日 群馬大学の新井房夫先生来跡。

12月10日～20日 7・8号配石遺構の遺物取り上げと敷石の取り上げ。4・5号土壌の土壌サンプリング。

12月22日～25日 屋外埋設土器の土壌サンプリング。25日は周辺整理と大掃除。

昭和62（1987）年

1月8日 調査を再開。

1月9日～12日 1区東端の遺物取り上げ。

1月13日 前日の降雪のために午前中は雪掻き。午後から作業開始。

1月14日～30日 1区東端の遺物取り上げ。この調査箇所は縄文時代の廃棄場所と思われる。多量の土器片と多孔石が出土した。

1月31日 『群馬文化』第209号に遺跡の概要を紹介。

2月2日～7日 2日から3日にかけて降雪があり、4日は雪掻き作業。5・6日は航空写真撮影のため清掃。

2月9日 航空写真撮影。今回の撮影はセスナ機を使用。館林市の大西飛行場を離陸。

2月10日～12日 1区東端（廃棄場）と1区西端の遺物取り上げ。

2月13日 9・10号土壌写真撮影。1区西端遺物取り上げ。

2月16日～18日 6・9号土壌の土壌サンプリング。

2月19・20日 保存処理室の北爪氏による立石下の土層剥ぎ取り作業。

2月21日～26日 1区掘り下げ作業。1・2号配石遺構の最終調査。

2月27日 0区をジョレンで精査。

3月2日～6日 0区精査、1区の5・6号配石遺構の最終調査。

3月9・10日 0区精査、5・6号配石遺構の最終調査と16号配石遺構の写真撮影。17号配石遺構を新たに検出。

3月11日 降雪のために作業中止。

3月12日～16日 17号配石遺構の写真撮影。

3月17日 本日をもって昭和61年度の調査を終了した。

この後、遺物・図面・写真の基本整理を行う。

昭和62（1987）年度

4月14日 本日より作業を開始。調査担当者は依田治雄、菊池 実、飯塚 聡の3名である。依田、飯塚の両名でIV区の調査を、菊池が0区の調査を担当。0区西端から遺構確認作業。配石遺構を3箇所検出（以後、すべて作業は0区）。

4月15日～17日 遺構確認作業。新たに3箇所の配石遺構を確認。「安全に関する講和」を現場事務所で行った。

4月20日～24日 遺構確認作業。現在までに約20箇所程の配石遺構を検出。22日には石棒が出土した。

4月27日～30日 遺構確認作業。甘楽町立小幡小の先生2名来跡。

5月2日～7日 遺構確認作業を継続。

5月8日～12日 昨年度未検出された17号配石遺構の図面作成と遺物取り上げ作業。

5月13日～20日 17号配石遺構の石囲い炉調査。遺構確認作業。

5月21日～25日 20・21号配石遺構の調査を開始。

5月26日 環状列石を検出。列石内から屋外埋設土器が出土した。

環状列石について 環状列石の検出によって1区にまでこの遺構が延びていることが判明した。1区調査段階では全く想像のつかなかったことである。航空写真、図面の照合によって辛うじてその列石の一部が認められた。

5月27日～30日 環状列石の調査。

6月1日～3日 環状列石の周辺掘り下げ。グリッドの遺物取り上げ。

6月4日 20号配石遺構の図面、22号配石遺構の写真撮影。グリッドごとに掘り下げ。配石遺構が続出。

6月5日 20号配石遺構の写真撮影、21号配石遺構の図面作成。

6月8日～12日 21号配石遺構の写真撮影。グリッドごとに掘り下げ、遺物取り上げ。

6月13日 当遺跡において上越線調査課会議が行われる。



配石遺構の調査



環状列石の調査

1章 調査の経過

6月15日～19日 グリッドごとに掘り下げ。
6月22日～25日 グリッドごとに掘り下げ、遺物の取り上げ作業。
6月26日 県企業局の赤山容造、小宮俊久両氏来跡。
6月29・30日 グリッドごとに遺物取り上げ。
7月1日～3日 24号配石遺構の写真撮影。
7月6日～10日 20～22号配石遺構の図面終了。23～27号配石遺構、9号屋外埋設土器の写真撮影。
7月13日～17日 28～31号配石遺構の写真撮影。31号配石遺構まで実測を終了。
7月20日～24日 グリッドごとに掘り下げ、遺物取りあげ。西端から多量の土器と石が出土。
7月27日～31日 グリッドごとに掘り下げ、遺物取り上げ作業。
8月3日～7日 グリッド出土遺物の取り上げ。
8月10・11日 32号配石遺構、11号土壌の写真撮影。
8月12日 本橋恵美子氏来跡。33・34号配石遺構の調査。
8月13日 34号配石遺構の写真撮影。
8月17日～21日 35号配石遺構の写真撮影。36・37号配石遺構（柄鏡形敷石住居）の調査。
8月24日～26日 37・38号配石遺構（敷石住居跡）の調査。グリッドごとに掘り下げ。
8月27日 相澤貞順氏来跡。35号配石遺構まで実測終了。
8月28日 現地説明会の準備作業。
9月1日～4日 40号配石遺構、10号屋外埋設土器の写真撮影。環状列石の実測開始。グリッドごとに掘り下げ、遺物取り上げ。
9月7日 青山学院大学の吉田章一郎先生来跡。
9月8日～11日 2号竪穴住居跡の調査。上毛新聞に現地説明会の案内が掲載される。現地説明会の準備。
9月12・13日 現地説明会を実施。2日間で456名の見学者があった。天気恵まれ、前年よりも盛況であった。
9月16日～18日 環状列石の写真撮影。11～13号土壌の調査。6～8号屋外埋設土器の写真撮影。20～27号配石遺構の遺物取り上げ。
9月21日～25日 環状列石の周辺精査。24号配石遺構が柄鏡形敷石住居になる。27～29・32～34号配石遺構の遺物取り上げ。22日に航空測量に関する現地説明をし、国際航業株式会社に決定。
9月28日～30日 グリッドごとに遺物の取り上げ。
10月1日～5日 空測にそなえて精査。
10月6日 東京都埋蔵文化財センターの千野裕道、小葉一夫、小島正裕、丹野雅人各氏来跡。
10月7日 日本農業新聞に遺跡の紹介記事が掲載される。

10月8日 本日10時からヘリコプター使用による航空測量、写真撮影を実施。
10月9日 関 俊彦先生、佐藤 誠、常松成人両氏来跡。
10月12日 関 茂先生来跡。41号配石遺構の写真撮影。7～9号屋外埋設土器の掘り下げ。
10月13日～16日 28・29・38・40号配石遺構の石取り上げ。11～15号土壌調査。環状列石の全景写真撮影。
10月19日～24日 22～25号配石遺構の石取り上げ。11～17号土壌の写真撮影。22号配石遺構に埋設土器を確認。
10月26日～27日 23・24号配石遺構（柄鏡形敷石住居）の遺物取り上げ。23号配石遺構の張出し部写真撮影。土壌の図面を作成。
10月28日 栗原文蔵、海老原郁雄両氏来跡。
10月29日～31日 23・24号配石遺構の石取り上げ。
11月2日～5日 23・24号配石遺構の掘り下げ。26・32号配石遺構の石取り上げ。30号配石遺構の写真撮影。
11月6日 26・27・30号配石遺構の石取り上げ。新たに配石遺構を検出。藤岡市教育委員会の志村 哲氏来跡。普及資料課の石守、佐藤両氏による遺跡のビデオ撮影実施。
11月7日 清藤一順氏来跡。
11月9・10日 26・27・30・31号配石遺構の調査。グリッドごとに遺物の取り上げ。石の計測、重量測定を実施。
11月11日 県立自然科学資料館の陣内圭一先生による地質調査、石材鑑定を実施。
11月12日～15日 7・8・18～20号配石遺構の石取り上げ。7号配石遺構下に土壌検出。12号屋外埋設土器を検出。23号配石遺構、2号屋外埋設土器の最終図面終了。1号竪穴住居跡の遺物出土状況図作成と遺物取り上げ。石の洗いと注記作業。

石材鑑定について 配石遺構出土の石は勿論のこと、配石遺構を構成している総ての石をも取り上げて、計測、重量の測定、石材鑑定を実施した。石の計測、重量測定は調査と並行して11月から実施した。膨大な量の石のために、大変な労力を必要とした。このため12月末日の調査終了まで、土・日を返上して作業を行った。石材鑑定を陣内圭一先生にお願いしたが、先生は昭和初年から鍋川流域の石材についての研究を進められ、これまでに数多くの実績を残された方である。約17,000点に上る石の鑑定を短期間で実施していただいた。

11月16日～20日 8号配石遺構の炉体土器の取り上げ、埋塵の写真撮影。12号屋外埋設土器の取り上げ、22号配石遺構の埋設土器の実測。25号配石遺構の遺物取り上げ。26号配石遺構の張出し部の石取り上げ、炉体土器の実測。41号配石遺構、1・2号竪穴住居跡の遺物取り上げ。環状列



環状列石の遺物取りあげ



環状列石の遺物取りあげ

石の部分写真撮影。

11月21日 多摩市教育委員会の桐生直彦氏来跡。

11月22日 22号配石遺構の埋設土器、26号配石遺構の炉体土器の取り上げ。8号土壇の石取り上げ。環状列石内の土器写真撮影。本日から学習院大学考古学研究会の岩淵令治君が調査に参加。

11月24日～27日 23号配石遺構の主体部配石取り上げ、張出し部埋壘2個体の写真撮影。24号配石遺構の調査、26号配石遺構の埋壘取り上げ。41号配石遺構の遺物取り上げ。9号屋外埋設土器の取り上げ。土壇の調査。

11月28日 甘楽・富岡地区の社会科の先生11名来跡。

11月29・30日 23・24号配石遺構の遺物取り上げ。43・44号配石遺構の調査。

12月1日～6日 23・24号配石遺構の掘り下げ。36・37号配石遺構の遺物取り上げ。1・2号竪穴住居跡の遺物取り上げ。33～35号配石遺構の写真撮影。2日から筑波大学の有田貴紅葉さん、5日から日本大学の長 義之君調査に参加。

12月7日 環状列石の石をブロック別に取り上げ開始。23号配石遺構の石囲い炉の実測。33～35号配石遺構の遺物取り上げ。本日から筑波大学の沖松信隆、山田康弘両君調査に参加。

12月8日 テラ・インホメーション・エンジニアリングの渡辺広勝氏による地中レーダ探査を実施。

地中レーダ探査の実施について 環状列石の一部が路線外に延びている。このために路線外の列石を把握する目的で地中レーダ探査を実施した。

12月9日～13日 環状列石、33号配石遺構の石の取り上げ。44～47号配石遺構の写真撮影。1・2号竪穴住居跡の

掘り下げ。2号竪穴住居跡に炉体土器出土。グリッドごとに遺物取り上げ。10日に筑波大学の谷中 隆君、仲山さん来跡。12日から県立女子大学考古学研究会の志田尚子さん、小笠原直子さん調査に参加。

12月14日～16日 環状列石、34・44～46号配石遺構の石取り上げ。グリッドごとに遺物の取り上げ。『考古学ジャーナル』No285誌上に遺跡の速報が掲載される。

12月17日 福島県三春町教育委員会の仲田茂司氏来跡。47号配石遺構の石取り上げ。

12月18日 環状列石、46号配石遺構の石取り上げ。48・49号配石遺構の写真撮影。現場忘年会。

12月19・20日 環状列石、1号竪穴住居跡の石取り上げ。50号配石遺構の写真撮影。グリッドごとに遺物取り上げ。19日に県立女子大学の太木綾子さん調査に参加。20日には当事業団の船藤 亨氏調査応援。

12月21日～23日 環状列石の内部掘り下げ。36号配石遺構の接続部埋壘の写真撮影と先端部埋壘の取り上げ。37号配石遺構石囲い炉の写真撮影。48号配石遺構の石取り上げ。6号屋外埋設土器の写真撮影。土壇サンプリング。18・19号土壇の写真撮影。グリッドごとに遺物取り上げ。23日に学習院大学考古学研究会の江橋正浩、尾田倫一両君、松本右子さん調査に参加。

12月24日～26日 環状列石の石取り上げ後の全景写真撮影。24号配石遺構の先端部埋壘の写真撮影。38号配石遺構の埋壘取り上げ。8号屋外埋設土器の写真撮影。グリッドごとに遺物取り上げ。

12月27日 本日をもって調査を終了。

以後、年明けとともに機材、遺物の引っ越し作業を行い、次の調査地である吉井町長根安坪遺跡へ移動。

3 調査の方法

調査対象地は、富岡市と甘楽町の境界付近で、甘楽町早道場から雄川に至る約650mの間である。

① 遺跡名の選定

調査は昭和61(1986)年度にⅠ・Ⅱ・Ⅲ区、昭和62(1987)年度に0・Ⅳ区の順で実施した。遺跡は調査当初から田篠遺跡として命名されてきたが、昭和63(1988)年度からの整理事業をひかえ、

上越線関連の遺跡名検討が63年8月に行われた。その結果、遺跡名は大字小字名の連記を原則として、従来の遺跡名は事業名称として残すことになった。このため、田篠遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区は田篠上平遺跡に、0・Ⅰ区は田篠中原遺跡として分離され、田篠遺跡は事業名称として残ることになった。



敷石住居跡の調査

1章 調査の経過

なお、田篠上平遺跡は古墳、奈良～平安時代の遺跡であり、すでに平成元（1989）年3月に報告書が刊行されている。

② 調査区（グリッド）の設定

調査区全域に5m四方のメッシュをかぶせられるように雄川の近く、発掘区の南東約200mに原点を設けた（国家座標 基準X=26700、Y=-82100が原点）。グリッドは南東コーナーの杭をもって呼称した。北方向へ5mごとに1づつ増え、西方向は100mごとにA・B・Cというように大区画を作り、その中の5mごとにa・b・cというようにアルファベット順に20区画を設定した。

なお、グリッドの設定水準点の移動は（株）測研が対応した。

③ 調査手順

昭和61年5月から翌年3月までI区の調査を、62年4月から同年12月27日まで0区の調査を実施した。I区の調査の結果、多数の配石遺構群が検出され、0区にも同様遺構の検出が予想されたが、最終的には環状列石を含めた貴重な遺構群を検出した。

④ 遺構の調査

配石遺構の調査で苦慮したことは、石の配置が人為的なものか、自然の状態であるか、といった

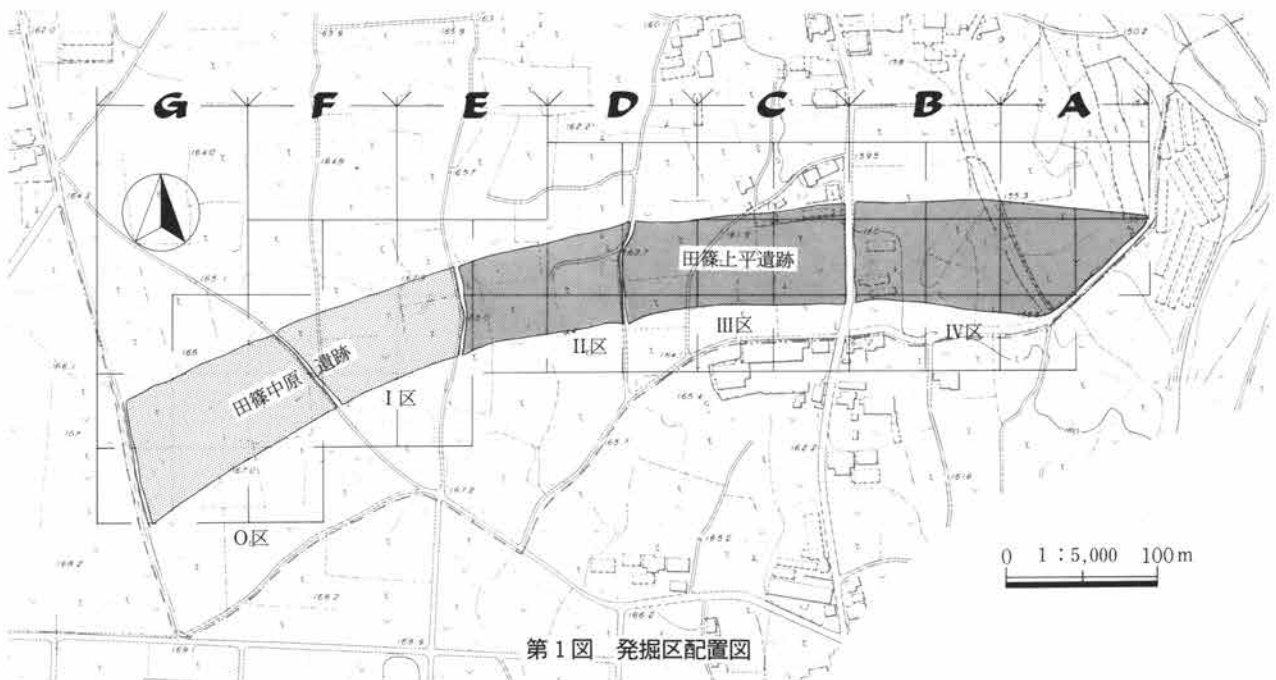
ことであった。というのも遺跡の立地が雄川の扇状地上に構築されているために、その識別が困難なことが多かったからである。このため調査にあたっては、細心の注意をはらい進めた。遺構図面は1/10実測図を原則として詳細図を作成した。この詳細図作成にあたっては、（株）測研の応援を得ている。また0区については、遺構全体図（1/50、1/100）を国際航業株式会社に、ヘリコプター使用による航空測量図作成を委託した。

⑤ 遺物の取り上げ方

出土遺物の中で、遺構に伴わないものについてはグリッドで取り上げ、遺構に伴う土器はP No、石はS Noを付して取り上げた。配石遺構を構成する石、敷石住居跡の敷石、環状列石の石も当然取り上げ調査を実施した。このため取り上げた石の総点数は、約17,000点に達している。これらの石は、調査と並行して石材分類、計測、重量の測定、石器分類等を実施した。担当者にかかる負担は並大抵ではなかったが、詳細なデータが得られたものと自負している。

⑥ 写真撮影

遺構写真は35mm白黒フィルムとカラースライドフィルムおよび6×7を使用した。また遺跡空中写真（4×5インチ）は、シン航空写真株式会社、



国際航業株式会社、中央航業株式会社のヘリコプターとセスナ機使用により、また遺跡モザイク写真作成をシン航空写真株式会社にそれぞれ委託し

た。

なお、報告書掲載の遺構写真は6×7を使用した。

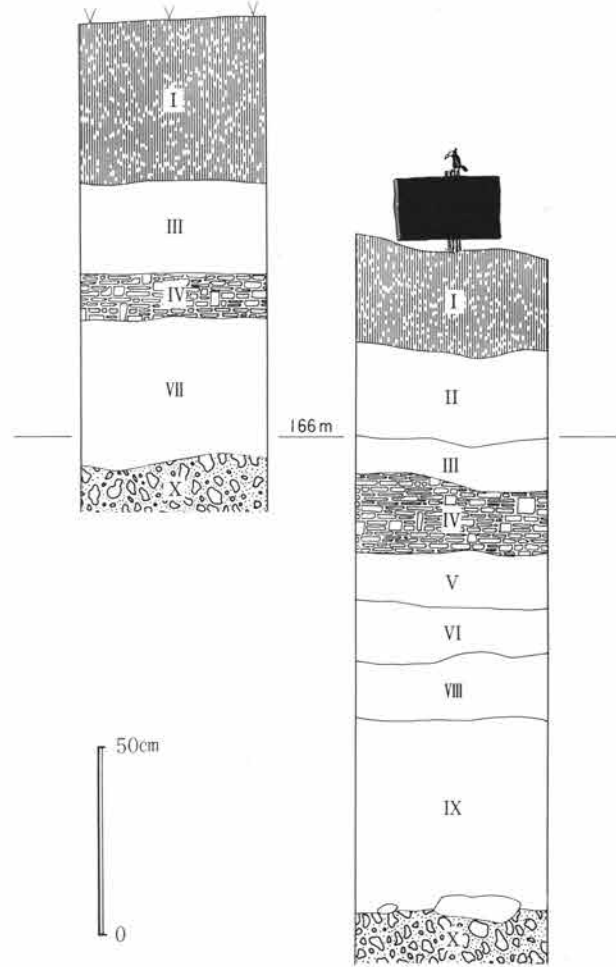
4 基本土層

^{かぶらがわ} 鑓川の段丘は、基盤層として、吉井層と呼ばれる（新第3紀、中新生堆積）泥岩と粘性土が分布している。雄川と下川に挟まれたこの地では、その基盤層の上に、^{くだがわ} 段丘堆積層（第4紀洪積世堆積）の玉石混じりの礫層が堆積している。この段丘堆積層が当遺跡の第X層とした層に一致する。この堆積層は、場所によって多少異なるが、さらに1m程の厚みをもって基盤層につづく。

遺跡地は西が高く、東に向かって低くなっており、その比高差は約60cmである。したがってそれぞれの地区において基本土層の厚みが異なるところが見られる。

0区・I区基本土層

- 第I層 耕作土層 浅間A軽石を含んでいる。
- 第II層 暗褐色土層 やわらかく粘性が少しある。
- 第III層 暗褐色土層 固く締まり粘性がある。
- 第IV層 暗褐色土層 やや固く粘性がある。遺構構築面。
- 第V層 黄褐色土層 固く締まるが、粘性はあまりない。浅間C軽石を含んでいる。
- 第VI層 黄褐色土層 固く締まるが、粘性はあまりない。第V層より砂礫を多く含む。
- 第VII層 砂礫層
- 第VIII層 黄褐色粘質土層 非常に固く締まり、粘性がある。
- 第IX層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。小礫を含む。



第2図 0区・I区基本土層

第X層 砂礫層

第IV層上に縄文時代中期の配石遺構群が構築されているが、土壌の調査ではプランを明瞭に確認するために、第V層まで掘り下げたものもある。

5 整理作業の経過

関越自動車道上越線の埋蔵文化財整理事業は、昭和63（1988）年4月より多野郡吉井町南陽台にある調査事務所敷地内の整理棟で開始された。

田篠遺跡の整理事業については、0・I区を中心とする縄文時代の遺構群を田篠中原遺跡として1年6カ月の整理期間、II・III・IV区を中心とする古墳、奈良～平安時代の遺構群を田篠上平遺跡として1年の整理期間で、報告書を刊行することになった。すでに田篠上平遺跡の報告書は平成元（1989）年3月に刊行されている。

当遺跡の整理期間は、平成元（1989）年4月から2年9月までである。

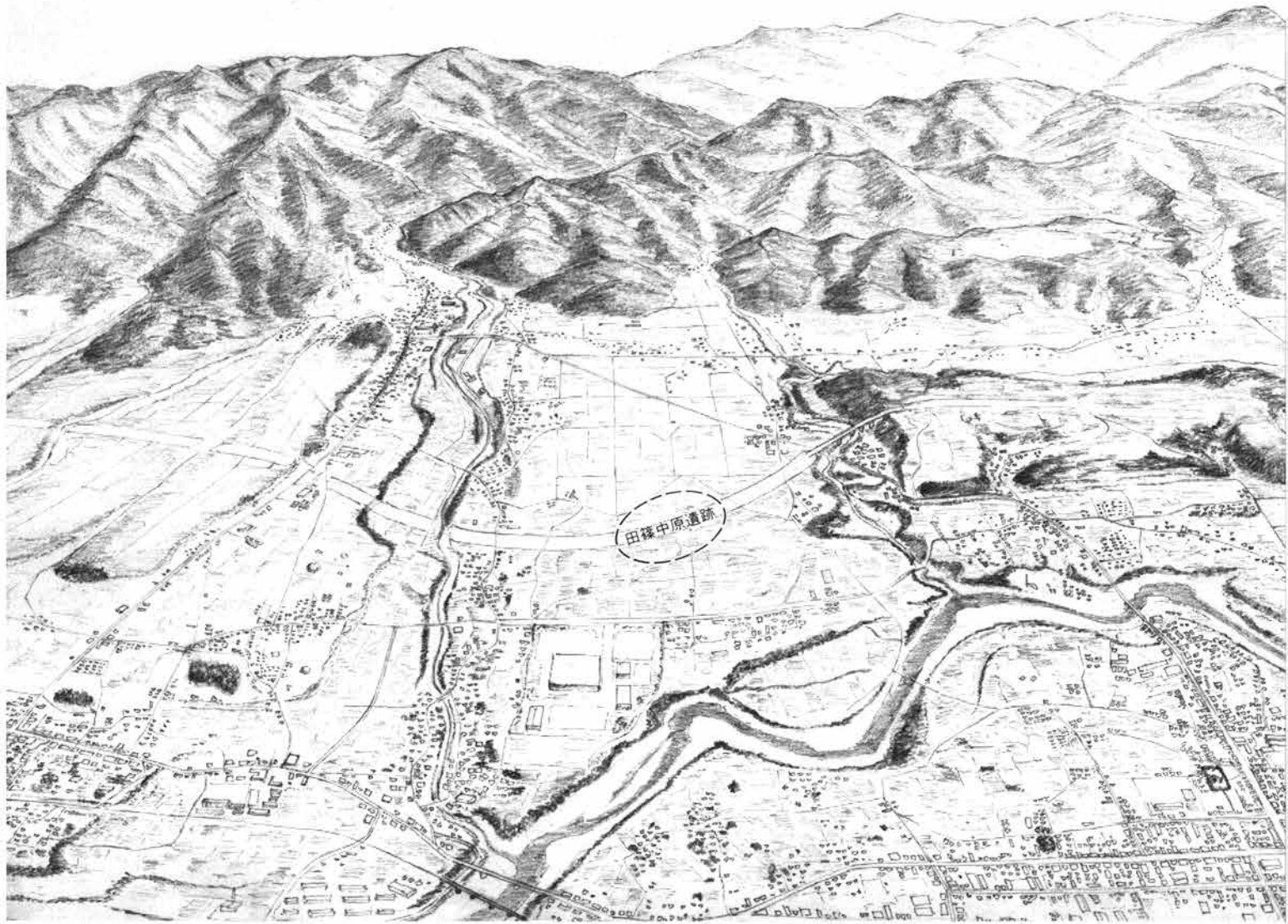
主な作業の流れ

元年4月 縄文土器の接合・復元作業。
 （1989） 遺構図面の修正作業。
5月 縄文土器の接合・復元作業。
 遺構図面の修正、遺構写真版下作成作業。下旬から縄文土器の実測と遺構トレース作業を並行。

6月 前月の作業を継続。
7月 縄文土器の接合・復元が終了。土器の実測はSスペースで素図を作成し行う。
8月 縄文土器の実測、遺構図修正とトレース作業を中心に実施。
9月 中旬までに遺構図修正が終了。
10月 縄文土器の実測と土器のトレース作業に入る。
11月 土器実測、遺構トレース終了。石器実測開始。
12月 原稿執筆開始。石器実測継続。鎭川流域の岩石標本を作成。
2年1月 縄文土器トレース、石器実測終了。土器・石器写真撮影。
2月 土器拓本作業。石器トレース。
3月～4月 遺構・遺物版下作成。
5月～6月 原稿執筆終了。入札。
 以後、校正と遺物収蔵作業を行い、9月末に報告書を刊行。

| 月 | 区分 | 平成元年 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 平成2年 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 |
|-----|--------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | 4月 | | | | | | | | | 1月 | | | | | | | | |
| 遺物 | 接合 | — | — | — | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 復元 | — | — | — | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 実測 | | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | |
| | トレース | | | | | | | — | — | — | — | — | — | — | | | | | |
| | 版下作成 | | | | | | | | | | | | — | — | — | | | | |
| | 写真撮影 | | | | | | | | | | | — | — | — | | | | | |
| | 写真版下作成 | | | | | | | | | | | | — | — | — | | | | |
| 遺構 | 原図整理 | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | | | | | | |
| | トレース | | — | — | — | — | — | — | — | — | | | | | | | | | |
| | 版下作成 | | | | | | | | | | | — | — | — | — | | | | |
| | 写真版下作成 | | — | — | — | | | | | | | | | — | — | | | | |
| 原稿 | 土器観察表 | | | | | | | | | | — | — | — | — | — | | | | |
| | 本文 | | | | | | | | | | — | — | — | — | — | | 入札 | 校正 | |
| その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | 収蔵 | 刊行 | |

2章 遺跡の立地と環境



小幡扇状地遠景

富岡市君川付近の上空から南方を俯瞰。右上方に稲倉山。中央左上の街が小幡。平坦地へ出た雄川はそこから北（手前）へ流れ下り、鑓川と合流する。既に発掘調査も終わり高速道路の建設が進む1990年初夏の頃の景色。破線で示した部分は、調査によって判明した縄文時代中期の遺構検出状況より推定した、遺構の展開領域。

(絵・飯塚 聡)

1

地理的環境

当遺跡は、群馬県富岡市田篠字中原に所在する。ここは富岡市の東南端にあたり、甘楽郡甘楽町善慶寺に隣接している。かつて甘楽郡福島町（現甘楽町）の一部をなしていた地区であったが、昭和34年、富岡市に編入されて現在に至っている。

調査地域は、東・南・西三方を甘楽町善慶寺地区に囲まれた舌状に張り出す富岡市域に所在し、雄川左岸段丘上を東端とする東西650mの区域である。田篠字上平・中原・細田地区にわたっており、そのうちの東半分が田篠上平遺跡、そして西半分の中原・細田地区が田篠中原遺跡に該当する。また西方で甘楽町に接して善慶寺早道場遺跡へ連なる。

南方には関東山地へと連なる多野・甘楽山系の山並みが迫り、その北麓、当遺跡より南東約1km余りに城下町小幡の町並み、南西約3kmの丘陵上に国峰城跡、その後方には古くからの信仰の山である稲舎山（標高1,370m）を眺め、西方0.5kmには崖上に内匠城跡を戴く内匠・下高瀬の丘陵をまじかに望む。東北方約1.5kmには笹森稲荷塚古墳及び神社の森が望まれ、北方1～1.5kmにて鎭川ならびに国道254号線に達するほか、古道鎌倉街道、の伝承を伝える道筋が北方約0.6kmのところを東西に通過している。

なお、周辺には富岡市田篠から甘楽町善慶寺にかけて小円墳が群集し、当遺跡はその中央を東西に貫く。

「甘楽の谷」あるいは「かぶらの谷」と呼ばれる鎭川流域には、大規模な河岸段丘の発達が見られ、大きな地域的特色となっている。これは下仁田町馬山付近から藤岡市上落合に至る二十数kmにおよぶもので、段丘面は上下2段に分かれている。下位段丘は両岸に発達するが、上位段丘は特に南岸において顕著な発達を見せる。これは地殻の傾動運動による鎭川南岸の相対的な隆起に起因し、



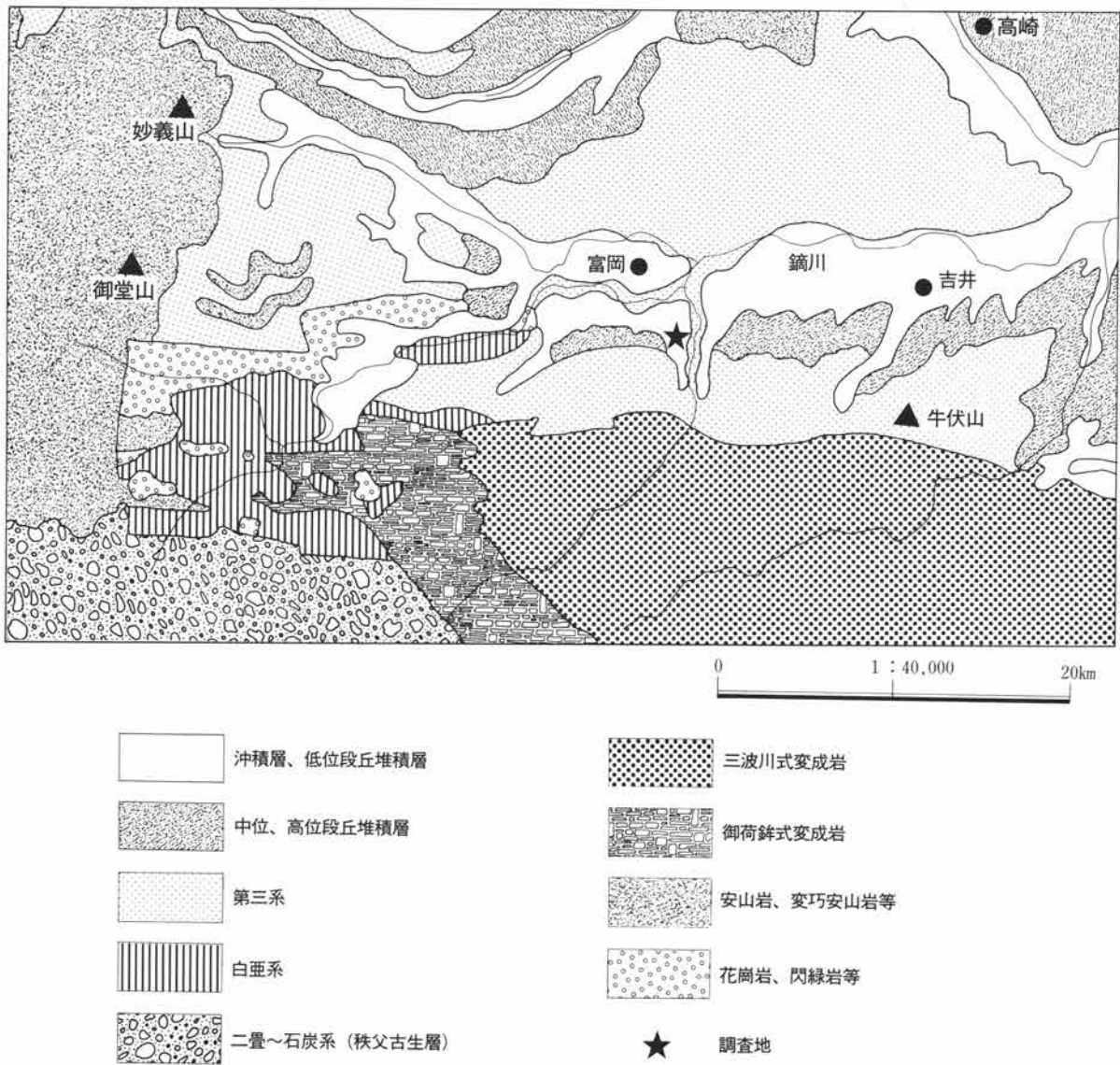
遺跡から稲舎山を望む

徐々に鎭川流路が北に移動しつつ起こされた浸食作用の結果形成されていったものと考えられている。田篠地区に隣接する富岡市内匠・下高瀬付近に見られる上位段丘面の標高は、およそ200～240mで、南から北へ緩やかに傾斜している。下位段丘面との比高差は40mから50mである。上位段丘面の形成は数万年から十数万年前の洪積世末期と考えられている。その後、約2万年前から始まる浅間火山噴出物による上部ローム層が上位段丘面に堆積しはじめる頃には、鎭川は下位段丘面を氾濫原としていたものと考えられている。したがって下位段丘面にはローム層の堆積はほとんど見られない。

地殻の傾動運動による鎭川の北方への移動に伴い、南方の多野・甘楽山系から流れ込む河川はや



小幡から扇央・扇端部を望む



出典：群馬県地質地図（1964）、内外地図発行を簡略化

第3図 調査地周辺の地質図



雄川上流



雄川中流 (田篠付近)

2章 遺跡の立地と環境

がて上位段丘を浸食・分断して北へ伸びて行く。このうち、稲含山東腹に源を発する雄川は、甘楽町秋畑地区の山間部を東北方向に流下し、小幡地区南方で平坦面に達している。そしてここを扇頂とする扇状地を形成しながら北方に流下し、下田篠付近にて鑓川に注いでいる。この扇状地は「小幡扇状地」あるいは「雄川扇状地」と呼ばれ、雄川をその主たる形成要因の河川とするほか、かつて富岡市額本・岡本を東流していたと推察されている旧野上川や、内匠地区の上位段丘東崖下を北流する下川によっても形成されたと考えられている。その領域は甘楽町町谷～小幡付近を扇頂部として、東は甘楽町福島、西は下川、北は原田篠・下田篠地区にて鑓川下位段丘面に接し、南北2～2.5km、東西約2kmにわたっている。標高は扇頂付近が約200m、扇端部が約160mほどである。富岡市内匠・下高瀬と甘楽町上野の間の上位段丘を浸食・分断して北へ扇形に広がる様相を呈している。当遺跡はこの小幡扇状地の中央やや西より、扇央部から扇端部へさしかかる部分に相当する位置を東西に横断するかたちで立地している。

扇状地には上位・下位段丘面とほぼ同様に砂礫層の厚い堆積が見られる。ただし、雄川・下川・野上川等の河川の上流域山間地帯が、馬山金井線と呼ばれる構造線の南側および下仁田以東に広がる三波川変成帯に属しているために、そこから運ばれてくる小幡扇状地の堆積物には、緑泥片岩・



下川（早道場付近）

石黒片岩をはじめとする三波川結晶片岩と総称される変成岩類（いわゆる“長瀨系”と称される礫種）が大方を占めているのが特色である。一方、鑓川本流域について見れば、源流である南牧川流域が秩父古生層帯に属することから、チャート・輝緑凝灰岩など、いわゆる“秩父系”と称される礫種がその堆積物に多く含まれているのが特色である。この傾向は上位・下位段丘面、現流路を問わずに見られる。したがって、鑓川本流が下位段丘面を流路としたのち、雄川・旧野上川等が上位段丘面を浸食しながら北流する時に秩父系の礫種

第4図 田篠中原遺跡周辺地形模式図

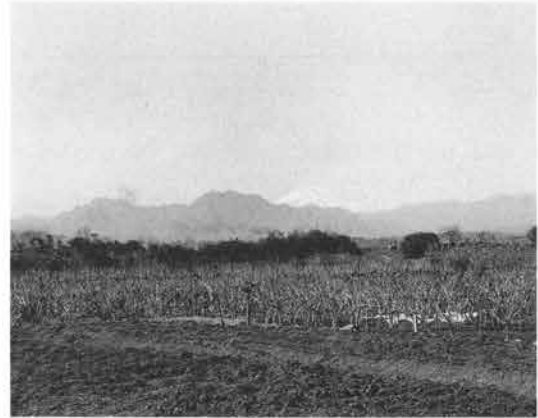
富岡市北部上空から南方向、小幡扇状地を中央に望む景観を想定して作図。西方（向って右）から鑓川が大規模な河岸段丘を形成しながら東流。特に南岸にて上位・下位段丘面が顕著に発達する一方、南方の多野山系から流下する野上川・下川・雄川・白倉川・天引川・大沢川等によって各地で浸食・分断され、大小の河谷・谷地・扇状地が形成されている様子が窺える。高速道路予定線が主に上位段丘面を東西に貫くのに伴い、遺跡の発掘調査対象地も帯状に続く。各時代に互る遺跡の濃厚なる分布状況が見てとれよう。（作図・飯塚 聡）

- 微高地・畑地
- 水田耕作地
- 市街地





遺跡から内匠の丘陵（上位段丘）を望む



遺跡から妙義山・浅間山（右奥）を望む

を含む堆積物を伴う可能性があるほかは、小幡扇状地の場合、その堆積物では長滞系の礫種が支配的であるという特徴が窺える。

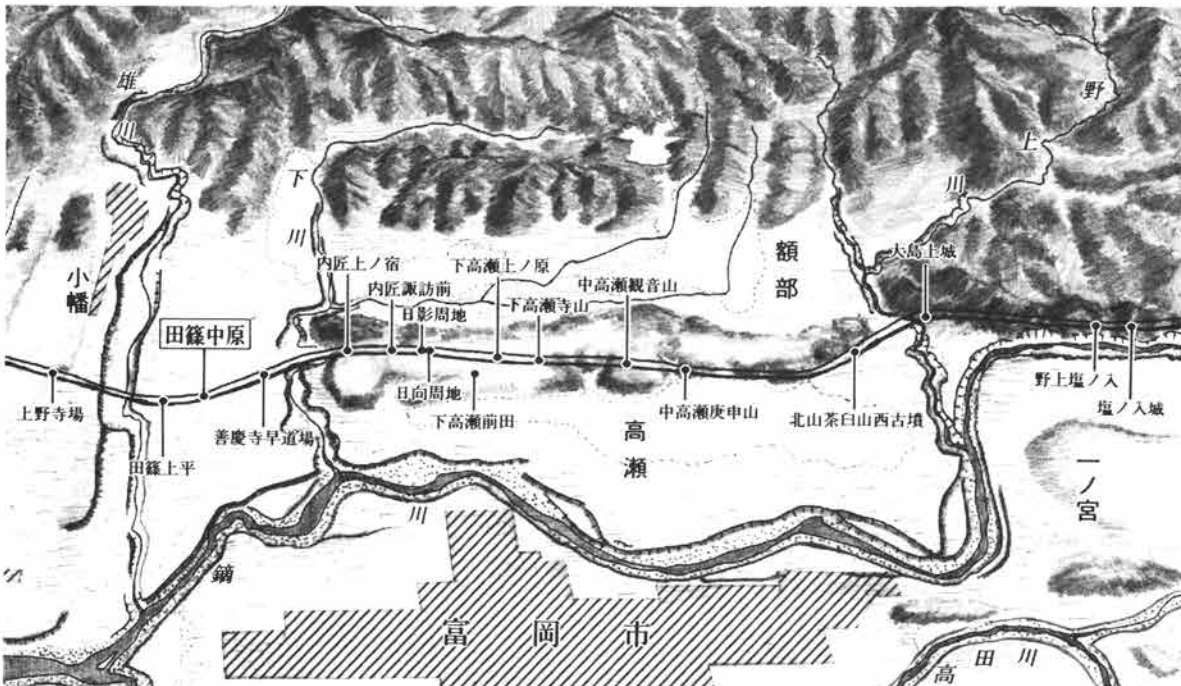
なお、竈川上位段丘面に見られる上部ローム層の純層としての堆積は、下位段丘面、扇状地には見られない。さらに、上位段丘面を浸食しかつ扇状地形成にも一役かった旧野上川・下川流域にもまた、上部ローム層の堆積は見られない。

砂礫層の上には黒褐色土が40～70cm程度堆積している。耕作土としても利用されているが、高操な土地柄ゆえ、扇状地一帯には主に桑畑とコン

ニャク畑が広がっている。上位段丘面の土地利用状況とほぼ同様である。また、富岡市高瀬や甘楽町福島などの下位段丘面や、旧野上川流域の額部・岡本地区等、小幡扇状地を取り巻く周辺部には水田耕作が見られるが、扇状地内では雄川下流河床低地沿いに若干行われているほかは、ほとんど見られない。

参考文献

- 『かぶらの自然』1972 かぶら理科研究会
- 木崎喜雄・野村 哲・中島啓治編著 『群馬のおいたちをたずねて』上・下 1977 上毛新聞社
- 『富岡市史』自然編 原始・古代・中世編 1987



2 歴史的環境

かぶらの谷は群馬県の南西部に位置し、富岡市、甘楽郡の3町1村で構成され、総面積は48,950haである。南は赤久縄山系、西は荒船山系、北は金洞山系で三方が山嶺に囲まれ、東部に開けた集水地形である。

鑄川は、この谷の水を集め流れ下っている。上流部ではV字谷を造り、中流部では河岸段丘をつくり、生活の場所を提供してくれている。

富岡・甘楽地域は、この鑄川の浸食によってできた下位段丘とその背後にある上位段丘によって構成されている。

遺跡の分布を大きく見ると、鑄川の北側上位段丘には22箇所、南側上位段丘には20箇所程の縄文時代の遺跡の分布が見られるが、過去に調査された遺跡の数は少ない。昭和61年度から開始された関越自動車道上越線地域の埋蔵文化財調査によって、この地域の縄文時代遺跡の調査が進みつつあるというのが、現状である。

(縄文時代前期の調査遺跡)

前期の関山式期の住居跡が、野上塩之入遺跡(第5図11)と富岡市本宿・郷土遺跡(第5図27)から検出されている。また南蛇井増光寺遺跡では前期中葉の黒浜式期の集落調査が実施されている。前期後半の遺跡は、富岡市南部に高瀬地区と額部地区とを隔てるように存在する、通称“離れ山、丘陵(幅約500m、長さ約3km)を中心に比較的検出されているが、いずれも小規模な遺跡である。そのなかで、ややまとまって検出されているのは、寺山遺跡(第5図8)の諸磯b式期の住居跡9軒と中高瀬観音山遺跡(第5図9)の同じく諸磯b式期の住居跡6軒である。標高は約200~240mである。甘楽町小幡の佐久間遺跡(第5図30)でも諸磯式期の住居跡5軒が調査されている。また前期末の十三菩提式期の住居跡1軒が内匠諏訪前遺跡(第5図5)から検出されている。

(縄文時代中期の調査遺跡)

中期の遺跡では、五領ガ台式期の住居跡1軒と該期の屋外埋設土器3基が富岡市小塚遺跡(第5図21)で検出されている。田篠中原遺跡と同時期の遺跡では、南蛇井増光寺遺跡で竪穴住居跡15軒と敷石住居跡3軒、本宿・郷土遺跡で柄鏡形敷石住居跡1軒が調査されている。なお、甘楽町善慶寺の早道場遺跡(第5図2)の調査(平成元年・2年度)において、田篠中原遺跡の集落西端部が確認されている。通称“離れ山、丘陵上には今のところ中期集落の検出例はない。該期の集落は前期集落とは明らかに集落立地を異にしている。

(縄文時代後期の調査遺跡)

後期の遺跡では、田篠中原遺跡西の“離れ山、丘陵上に内匠上ノ宿遺跡(第5図4)が調査されている。検出遺構は柄鏡形敷石住居跡1軒、竪穴住居跡3軒、屋外埋設土器12基であり、田篠中原遺跡の集落立地を考えるうえで興味深いものがある。また田篠坂詰遺跡(第5図3)では土坑が、南蛇井増光寺遺跡からは敷石住居跡1軒が検出されている。甘楽町白倉下原遺跡(第5図29)では2軒の柄鏡形敷石住居跡が調査され、また粟の沢遺跡(第5図31)では加曾利B式期の住居跡が検出されている。

(縄文時代晩期の遺跡)

晩期の遺跡の調査例は今のところないが、富岡土木事務所の東側、鑄川に向かう東傾斜面から耕作の際に多量の晩期の土器片が発見されている。



第5図 田篠中原遺跡と周辺の縄文時代遺跡

1:50,000 富岡 巻 図

- | | |
|--------------|------------|
| 1 田篠中原遺跡 | 16 上ノ山遺跡 |
| 2 善慶寺早道場遺跡 | 17 背戸谷遺跡 |
| 3 田篠坂遺跡 | 18 小沢西遺跡 |
| 4 内匠上之宿遺跡 | 19 芹田向山遺跡 |
| 5 内匠諏訪前遺跡 | 20 辻平遺跡 |
| 6 内匠日影周地遺跡 | 21 小塚遺跡 |
| 7 下高瀬上之原遺跡 | 22 観音前遺跡 |
| 8 寺山遺跡 | 23 地日市遺跡 |
| 9 中高瀬観音山遺跡 | 24 地図に記載なし |
| 10 中高瀬庚申山遺跡 | 25 宮崎遺跡 |
| 11 野上塩之入遺跡 / | 26 神農原遺跡 |
| 12 地図に記載なし | 27 本宿・郷土遺跡 |
| 13 後賢遺跡 | 28 地図に記載なし |
| 14 白岩遺跡 | 29 白倉下原遺跡 |
| 15 相野田(大平)遺跡 | 30 佐久間遺跡 |
| | 31 栗の沢遺跡 |
| | 32 長根安坪遺跡 |

- | | |
|--|---------|
| | 縄文前期の遺跡 |
| | 縄文中期の遺跡 |
| | 縄文後期の遺跡 |
| | 時期不明 |

2章 遺跡の立地と環境

周辺遺跡一覧表（縄文時代の遺跡を中心として）

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 面積 | 遺跡の概要 | 文献 |
|-----|-----------|------------------|-----------------------|--|----------------------------------|
| 1 | 田篠中原遺跡 | 富岡市田篠 | 昭和61・62年度 15,800㎡ | 中期末の環状列石、敷石住居跡11軒、竪穴住居跡2軒、配石遺構36基、屋外埋設土器12基、土壇22基、廃棄場所1箇所。 | 本書所収 |
| 2 | 善慶寺早道場遺跡 | 甘楽町善慶寺 | 昭和63・平成元年度～ | 田篠中原遺跡の続き。土坑2基と土器包含層。 | 『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 3 | 田篠坂詰遺跡 | 富岡市田篠 | 昭和62年度 3,200㎡ | 田篠中原遺跡の北東約1.1km、雄川右岸段丘上。土坑、後期の注口土器が出土。 | 『新井・坂詰遺跡』1990 富岡市教育委員会 |
| 4 | 内匠上之宿遺跡 | 富岡市内匠・下高瀬岡本 | 昭和62年度 16,500㎡ | 鑄川右岸の上位段丘面、通称「離山」。丘陵の東端に位置。標高213～221m。柄鏡形敷石住居跡1軒、竪穴住居跡3軒、屋外埋設土器12基、土坑250基。 | 『年報』7 1989 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 5 | 内匠諏訪前遺跡 | 富岡市内匠字諏訪前 | 昭和63年度 8,000㎡ | 内匠上ノ宿遺跡と谷地を隔てて西側に位置。竪穴住居跡2軒（諸磯b式期と十三菩提式期）と土坑。 | 『年報』8 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 6 | 内匠日影周地遺跡 | 富岡市内匠字日影周地 | 昭和63・平成元年度 | 内匠諏訪前遺跡と谷地を隔てて西側に位置。竪穴住居跡1軒（諸磯b式期）と土坑。 | 『年報』8・9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 7 | 下高瀬上之原遺跡 | 富岡市下高瀬字上之原他 | 昭和63・平成元年度 10,500㎡ | 内匠日影周地遺跡の西側に位置。標高220～230m。竪穴住居跡1軒、落とし穴状土坑、袋状土坑。 | 『年報』8・9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 8 | 寺山遺跡 | 富岡市岡本字寺山 | 平成元年度 2,251㎡ | 日影周地、上ノ原遺跡の西方に位置。竪穴住居（諸磯b式期）9軒、土坑41基、集石遺構5基、落とし穴1基。 | 『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 9 | 中高瀬観音山遺跡 | 富岡市中高瀬字観音山 | 平成元年度 13,000㎡ | 高瀬山丘陵上、標高230mに立地。竪穴住居跡（諸磯b式期）6軒、土坑6基、集石土坑1基、包含層1カ所。 | 『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 10 | 中高瀬庚申山遺跡 | 富岡市中高瀬 | 平成元年度 3,400㎡ | 中高瀬観音山遺跡の南西に位置。竪穴住居跡3軒、土坑。 | 『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 11 | 野上塩之入遺跡 | 富岡市野上 | 昭和62・63年度 | 鑄川上位段丘から関東山地に連なる丘陵の東部に位置。竪穴住居跡3軒、土坑10数基。 | 『年報』8 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 12 | 南蛇井増光寺遺跡 | 富岡市南蛇井 | 昭和62・63、平成元年度～ | 鑄川左岸段丘上に立地。前期の竪穴住居跡23軒、中期の竪穴住居跡15軒、中期の敷石住居跡3軒、後期の敷石住居跡1軒、後期の配石遺構1基、埋甕、土坑478基等。 | 『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 13 | 後賀遺跡 | 富岡市後賀 | | 里川が星川に流れ込む西側一帯にかけての台地～傾斜地。中期の土器片と打製石斧、石鏃出土。 | 『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』1987 富岡市 |
| 14 | 白岩遺跡 | 富岡市白岩 | | 星川に接する北傾斜の台地上。土器片の散布。 | 『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会 |
| 15 | 相野田(大平)遺跡 | 富岡市相野田 | | 里川を見下ろす南から北側に低くなる傾斜地。標高150～152m。打製石斧出土。 | 『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』1987 富岡市 |
| 16 | 上ノ山遺跡 | 富岡市上高尾 | | 山上の平坦地から南斜面にかけて、土器片の散布。 | 『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会 |
| 17 | 背戸谷遺跡 | 富岡市背戸谷 | | 上ノ山遺跡の北方。土器片の散布。 | 『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会 |
| 18 | 小沢西遺跡 | 富岡市七日市字小沢西492番地他 | 昭和62年度 | 高田川に架かる小沢橋から上流へ西南約400mの右岸。標高165.5m。竪穴住居跡3軒、土坑71基。 | 篠原幹夫編『小沢西遺跡』1989 富岡市教育委員会 |
| 19 | 芹田向山遺跡 | 富岡市 | | 辻平遺跡から1.5km程北東の上位段丘上に立地。中期の土器片と石器の出土。 | |
| 20 | 辻平遺跡 | 富岡市黒川字辻平 | | 小塚遺跡の北北東500m、上位段丘にあたる山並の裾部に立地。標高188m付近。土器片の散布。 | 『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』1987 富岡市 |
| 21 | 小塚遺跡 | 富岡市黒川字小塚 | 昭和59年度 10,000㎡ | 鑄川の支流高田川の左岸に立地。前期（諸磯b式）の竪穴住居跡2軒、中期初頭の竪穴住居跡1軒と竪穴4基、屋外埋設土器3基、前期～中期の土坑61基。 | 井上 太編『小塚・六反田・久保田遺跡』1987 富岡市教育委員会 |
| 22 | 観音前遺跡 | 富岡市七日市字観音前 | 昭和62年 | 上信電鉄上州七日市駅北側一帯に分布。中期後半の土器が出土。 | |
| 23 | 七日市遺跡 | 富岡市七日市 | | 観音前遺跡の西南約100mに位置。中期の竪穴住居跡検出。 | |
| 24 | 神守寺南遺跡 | 富岡市宇田 | | 高田川と丹生川の合流点を丹生川にそって約1.3kmさかのぼった北方の山地の南斜面に立地。 | 『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会 |

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 調査年度 面積 | 遺跡の概要 | 文献 |
|-----|---------|------------------|------------------------------------|--|---|
| 25 | 宮崎遺跡 | 富岡市 | | 鍋川左岸の宮崎丘陵暖斜面に土器片の散布。 | |
| 26 | 神農原遺跡 | 富岡市神農原 | | 鍋川左岸段丘上に立地。土器片の散布。 | 『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』 1972 群馬県教育委員会 |
| 27 | 本宿・郷土遺跡 | 富岡市一の宮字 本宿・田島 | 昭和53・54年 度 | 前期の竪穴住居跡（関山式期）2軒、中期の敷石住居跡1軒、土坑20基。 | 井上 太編『本宿・郷土遺跡』 1981 富岡市教育委員会 |
| 28 | 下丹生山口遺跡 | 富岡市原 | | 大下駄山斜面の山麓に発達した傾斜地。遺物の散布。 | 『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』 1972 群馬県教育委員会 |
| 29 | 白倉下原遺跡 | 甘楽町白倉 | 平成元年度～ | 天引川と白倉川によって大きく開析された鍋川右岸の上位段丘面に立地。前期の竪穴住居跡2軒と土坑200基、中期の竪穴住居跡2軒と土壘2基、後期の柄鏡形敷石住居2軒。 | 『年報』9 1990 榑群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 30 | 佐久間遺跡 | 甘楽町小幡 | 昭和62年度 | 上信電鉄の上州福島駅より南方約4km、雄川の東に所在。標高230～260m。前期の竪穴住居跡5軒、中期の竪穴住居跡1軒、不明の竪穴住居跡4軒、土坑53基。 | 肥田順一編『佐久間遺跡』1988 山武考古学研究所 |
| 31 | 粟の沢遺跡 | 甘楽町秋畑 | 昭和25年度 | 後期（加曾利B式期）の竪穴住居跡を検出。 | 神道 登『秋畑村における先史時代の考察—とくに粟ノ沢遺跡とその付近の調査について—』1950 秋畑村役場 |
| 32 | 長根安坪遺跡 | 吉井町長根 | 昭和62・63年 度 18.275m ² | 中期前半と後半の住居跡15軒、配石遺構3基（1基は環状列石）、土坑多数。 | 『年報』7・8 1989・1990 榑群馬県埋蔵文化財調査事業団 |

3

隣接遺跡の状況

田篠中原遺跡は、東接する田篠上平遺跡とともに小幡扇状地を東西に横断するかたちで調査が行われた。両遺跡とも扇状地の富岡市域内に位置し、両調査地をあわせると雄川～下川間の約2/3に達する。扇状地の西よりに位置する田篠中原遺跡の西は甘楽町善慶寺早道場・蛇喰地区である。

田篠中原地区から下川までの区域は、善慶寺早道場遺跡と称し、昭和63年度以降2回に分けて調査が行われている。調査対象面積は18,300m²で、平成元年度末までに15,300m²の調査が実施されている。これまでのところ、竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡4棟、古墳1基、近世墓墳1基、古代末期以降の溝数条、土坑、ピット群等の遺構が検出されている。出土遺物は縄文時代前期～後期、古墳時代後期～奈良・平安時代以降近世に及ぶ。このうち田篠中原遺跡との連続性が予想される縄文時代遺構については、調査区の東端、すなわち田篠中原遺跡に接する地点で中期末の遺物包含層および土坑2基が検出されており、扇状部に展開される中期集落の西限を確認することができた。下

川に近い場所では前期～後期の遺物はまばらで、遺構は伴わない。古墳の墳丘は削平されてなく、周堀から土師器や須恵器が出土。これは扇状地域に南北に展開する上田篠・善慶寺古墳群に含まれると考えられ、古墳時代末期のものであろう。竪穴住居跡は、平安時代のもものが1～2軒見られるほかは、ほとんどが古墳時代末から奈良時代初期にかけてのものである。砂礫混じりの黒褐色土および地山の砂礫層を掘り込んで構築され、規模は最大のもので一辺約7m、最小で約3m、多くは4～5mの方形もしくは長方形を呈している。カマドは北壁に設けられたものが多いが、東壁のものも5軒、東南隅のものも1軒検出されている。分布状況は下川至近にて濃厚で、扇状部は散在的である。立地、構造等、扇状地上の同一環境のもとにある田篠上平遺跡の住居跡と同様である。なお、田篠中原遺跡に東接する田篠上平地区では、古墳3基、奈良～平安時代の住居跡50軒、掘立柱建物跡23棟、水田跡約1,000m²等が検出されている（『田篠上平遺跡』1989）。住居跡は8～9世紀におよぶ

2章 遺跡の立地と環境

が、特に8世紀前半および9世紀後半を中心とする時期の集落の展開が顕著である。

以上、田篠中原遺跡の東西に接する2遺跡の状況から判断すると、扇中央部には縄文集落以後、古墳時代になり古墳群の形成とともに扇状地西端部の下川沿いに当該期集落が営まれ、次代になって東半部の雄川沿岸に集落が展開して行ったことが窺われる。

現在、扇状地の東端に雄川、西端に下川が北流する状況下で、縄文中期集落の立地する扇中央部地域は、両河川によって形成された扇状地の脊梁的立地を示すといえ、最初に居住が可能となった部

分と言えよう。このころ、扇状地の他の部分は雄川・下川および支流の流路地帯であったと思われる。両河川がほぼ現在地を浸食し小段丘を形成し、定着して以降、古墳時代以降の集落が展開する。下川沿岸地域が先行して居住域となったことは、雄川沿岸は下川にくらべて段丘も発達し、河床も広く、流路の定着が遅れた可能性を窺わせる。下川沿岸を中心とする扇状地西半部は標高も扇中央部とほぼ同レベルで、割合はやくに居住域の条件が整っていたと考えられる。扇状地における各時代の集落の展開のありようは、大局的には両河川の流路の変遷を反映しているものと言えよう。

3 章 縄文時代の配石遺構群と遺物

1 配石遺構群の概要

田篠中原遺跡から検出された縄文時代中期の遺構群は以下のとおりである。

| | |
|-----------------|------------------------------------|
| 環状列石(径約38m)… 1基 | (中期加曾利E 3式期に構築され、E 4式期まで機能) |
| 敷石住居跡……………11軒 | (中期加曾利E 3式期 7軒) (中期加曾利E 4式期 4軒) |
| 竪穴住居跡…………… 2軒 | (中期加曾利E 3式期) |
| 配石遺構……………36基 | (中期加曾利E 3式期～E 4式期) |
| 屋外埋設土器……………12基 | (中期加曾利E 3式期～E 4式期) |
| 土 壙……………22基 | (中期加曾利E 3式期～加曾利E 4式期) |
| 廃棄場所…………… 1箇所 | (中期加曾利E 3式期～加曾利E 4式期) |

発掘調査はI区から開始し、敷石住居跡5軒、配石遺構10基、屋外埋設土器7基、土壙10基を検出した。その後、0区に調査が及んで、環状列石1基、敷石住居跡6軒、配石遺構26基、屋外埋設土器5基、土壙22基を検出し、約1年7か月間(田篠上平遺跡調査期間も含む)の調査で、縄文時代中期集落のほぼ全容をつかむことができた。配石遺構群は扇状地上に構築されていたために、人為的な石の配置なのか、自然の状態であるのか判断に迷うこともたびたびあったが、調査の進展に伴いその識別も容易になっていった。

環状列石の検出は群馬県内では3例目であった。吾妻郡中之条町の久森遺跡からは、当遺跡と同時期の環状列石と敷石住居跡が検出されている。利根郡月夜野町の十二原II遺跡からは、中期前半の環状列石と該期の竪穴住居跡が検出されている。当遺跡の調査終了後も、多野郡吉井町の長根安坪遺跡から中期加曾利E 3式期の環状列石が検出され、また碓井郡松井田町の行田II遺跡から後期の弧状配石墓群が検出され、徐々にではあるが類例が増している。

敷石住居跡や配石遺構の調査例となると県内では数多く知られている。例えば、勢多郡新里村上鶴カ谷遺跡(後期)、北群馬郡子持村押出遺跡(後期～晩期)、北群馬郡榛東村下新井遺跡(後期～晩期)、等は最近調査された代表的遺跡であり、配石墓や配石遺構が多数検出されている。

田篠中原遺跡検出の敷石住居跡は加曾利E 3～E 4式期にかけての構築である。これらの住居の敷石状態は、張出し部では明瞭な敷石が認められるが、主体部については部分敷石であったり、大小様々な礫が雑然と組み立てられていたり、主体部は偏平な礫や小さい礫で円形に周囲と区画しているなど、大きな特色となっている。初源的な敷石住居跡ということで、加曾利E 4式期から称名寺式期の定型化された柄鏡形敷石住居跡(県内では小室遺跡、中大塚遺跡、梨の木平遺跡等に代表される)とは趣を異にしている。

群馬県内における縄文時代の環状列石、柄鏡形敷石住居跡、配石遺構等を検出した遺跡の大多数は、集落全体のなかで検討することのできない単独の検出例であったり、限られた調査区なかでの検出例であった。このために縄文集落のなかでの具体的検討は、いまだ不十分な状況であると言わざるを得ない。こうしたなかであって、田篠中原遺跡検出の環状列石・配石遺構群は、縄文集落を解明していくうえで貴重な遺構群であるといえる。

2 環状列石と立石

環状列石（第6～22図、PL. 9～13、102～104 付図2～4）

位置 Fd-47・48、Fe-46～49、Ff-46～50、Fg-45～50、Fh-44～50、Fi-44～50、Fj-44～51、Fk-44～50、Fl-45～49、Fm-48・49グリッドにかけて検出された。調査区のほぼ中央からの検出であったが、その一部は路線外に延びている。

経過 I区（昭和61年度調査区）から0区（昭和62年度調査区）にかけて検出。61年7月30日に1号屋外埋設土器を検出した。周辺には明瞭な遺構は存在せず、単独の遺構と判断し調査を進めた。その後、1号屋外埋設土器の北西10m20cmの所から立石が検出されたが、当初この遺構も単独のものと判断し調査を実施した。昭和61年度の調査では環状列石の出現は予想もできなかった。

0区に調査の及んだ62年5月26日に、Fl-48グリッドにおいて環状列石の一部を確認した。配石遺構と考えて周辺を精査した結果、列石が広範囲に延びていることが判明した。この列石の検出によって、61年度調査区にも遺構が存在していることが考えられたので、図面と写真の照合を行った。その結果、列石がかろうじてI区にまで及んでいることが判明した。わずかに石の配置が認められるだけであったので、これが環状列石を構成する石とは、I区調査段階ではとても判断できなかった。そして1号屋外埋設土器の出土位置は列石下に、立石は列石内に組み込まれていることがさらに判明した。しかし列石の一部が路線外に延びているために環状列石の全域を調査することはできなかった。このために路線外については地中レーダを使用してその全容の把握に努め、路線外にも列石が延びていることが解った。その結果、径約38mを有していることが判明した。

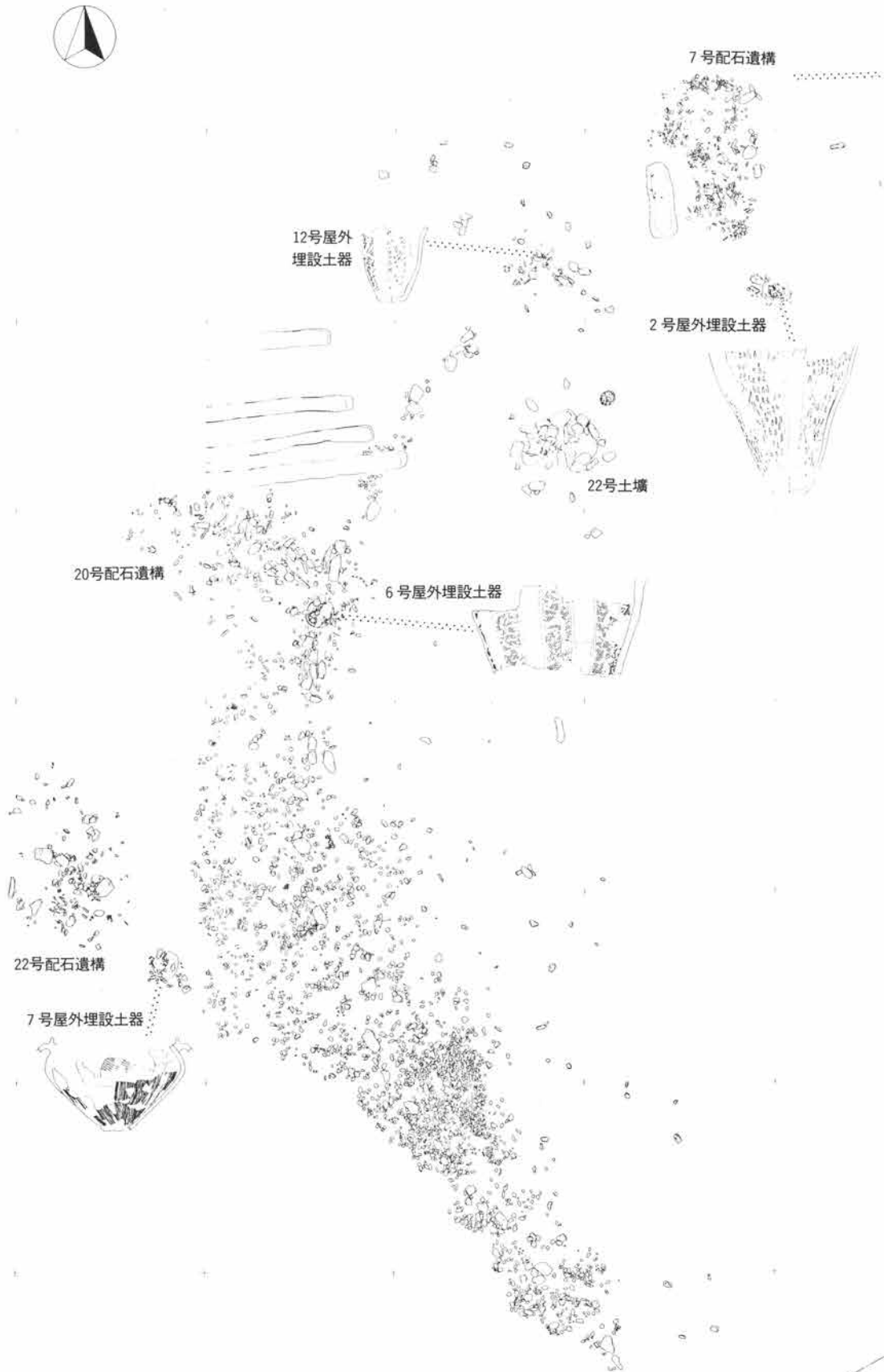
重複 列石下から3基の屋外埋設土器（1・6・12号）が出土している。このうち6号屋外埋設土器には列石が蓋石となっていた。3基の埋設土器はいずれも加曾利E3式土器であり、列石の構築時期を加曾利E3式期に求めることができる。このほかに列石周辺から2基の屋外埋設土器、列石内部から1基の屋外埋設土器がそれぞれ出土している。

土壌では列石下から8号土壌（配石墓）が検出され、列石内部から22号土壌（配石墓）が検出された。8号土壌上の墓標は列石に連なるものであった。列石下から明確な墓壙が検出されたのは8号土壌の1基だけであり、これをもって環状列石は墓地であるという根拠にはならないであろう。

列石には張出し部と考えられる遺構が存在している。7号配石遺構と20号配石遺構がこれに該当しよう。7号配石遺構は加曾利E4式の土器が主体的に出土し、20号配石遺構からは加曾利E3式の土器が主体的に出土していることから、環状列石は加曾利E3式期に構築され加曾利E4式期まで機能していたことが解る。

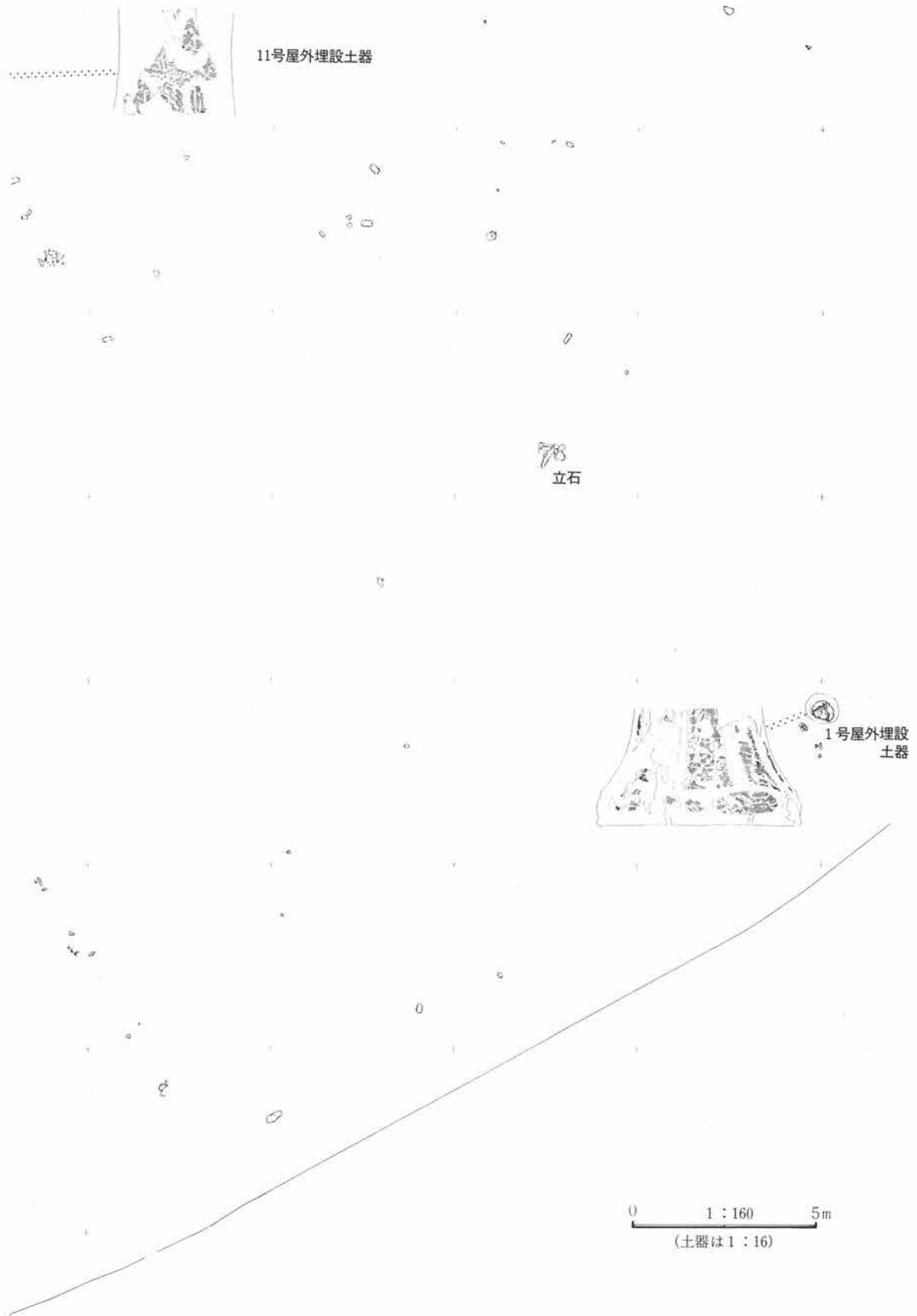
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・列石状況 径約38mの環状列石であるが、列石の明瞭な部分はFj-44、Fk-44・45・49、Fl-46・47・48グリッドにかけてであり、実際は弧状列石として理解できるものである。構築当初から石の分布に濃淡があったのか、後世何らかの破壊があったものなのかは、にわかに決しがたいが、従来環状列石として把握されているものも石の分布に濃淡があることから構築当初からのものと理解して良いのかもしれない。秋田県大湯環状列石においても石の分布に濃淡は認められる。群馬県内の最近の調査でも弧状列石が確認されている。環状列石の調査面積は現状では約918m²であり、路線外を含めた推定面積は約1,050m²である。このため環状列石の約87.4%を調査したことになる。



第6図 環状列石全体図と埋設土器分布

2 環状列石と立石



使用石材 列石を構成する石の総てを取り上げて石材鑑定を実施し、49種類の石材が確認された。2,519点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩768点(30.5%)、輝緑岩336点(13.3%)、点紋緑泥片岩161点(6.4%)、緑泥片岩144点(5.7%)、珪石135点(5.4%)、輝岩129点(5.1%)、点紋絹雲母石墨片岩105点(4.2%)、絹雲母緑泥石墨片岩62点(2.5%)、絹雲母緑泥片岩55点(2.2%)、斑斕岩53点(2.1%)、チャート47点(1.9%)、石墨絹雲母片岩40点(1.6%)、珪岩36点(1.4%)、緑色珪質板岩30点(1.2%)、点紋絹雲母緑泥片岩29点(1.2%)、緑簾緑泥片岩・角閃岩各24点(各1%)、変斑斕岩16点(0.64%)、閃緑岩15点(0.6%)、赤色珪質板岩・紅簾絹雲母片岩各14点(各0.56%)、緑泥石墨片岩・砂岩各13点(各0.5%)、点紋絹雲母石墨緑泥片岩11点(0.44%)、方散虫板岩10点(0.4%)、安山岩・閃輝緑岩各9点(各0.36%)、石墨片岩・点紋絹雲母緑泥石墨片岩各7点(各0.28%)、石墨緑泥片岩6点(0.24%)、熱変成岩・千枚岩各5点(各0.2%)、絹雲母片岩・輝緑凝灰岩・紅簾片岩各4点(各0.16%)、硬砂岩3点(0.12%)、石英斑岩2点(0.08%)、滑石片岩・流紋岩・点紋石墨緑泥片岩・蛇紋岩・玢岩・熔結凝灰岩・緑泥絹雲母片岩・脆雲母絹雲母片岩各1点(0.04%)であり、不明は161点(6.4%)を数えた。2,519点中1,458点(57.9%)の石は片岩類である。

列石を構成する石の中でも指標となる石には大石が使用され、また一定間隔で配置されている。これらの石の最長間隔は3m70cm、最短間隔は1mであり、平均間隔は2m11cmであった。これらの石の重量が一番軽いもので約17kg、最大重量は60.5kgであり、平均は約40kgとなる。確認された石材は、絹雲母緑泥片岩3点、点紋緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各2点、絹雲母石墨片岩・輝緑岩・安山岩・閃緑岩・砂岩各1点であった。

石材重量 重量の判明している石は2,409点である。その内訳は、500g未満の石1,156点(48%)、500g～1kg未満の石592点(24.6%)、1kg～2.5kg未満の石463点(19.2%)、2.5kg～5kg未満の石101点(4.2%)、5kg～7.5kg未満の石34点(1.4%)、10kg～20kg未満の石21点(0.9%)、7.5kg～10kg未満の石14点(0.6%)、20kg～30kg未満の石13点(0.5%)、40kg以上の石10点(0.4%)、30kg～40kg未満の石5点(0.2%)である。

遺物出土状況 列石下から3基の埋設土器の他に、255点の土器片が出土している。加曽利E3式土器片を主体に加曽利E4式土器片も含まれている。

石器では石皿5点、多孔石15点、凹石17点、磨石3点、打製石斧10点、磨製石斧4点、丸石2点である。石皿2点と多孔石15点中の6点は列石の指標となる石に使用されていた。他の多孔石は列石を構成する石の中からの出土であるが、1点だけは列石内部からの出土であった。凹石等の石器はFk-45・46グリッドにかけて集中して検出された。石器の含有率は2.2%であり、また焼石は2,519点中189点で、7.5%を占めている。

所見 加曽利E3式期の集落の広場部分に構築された環状列石であり、加曽利E4式期まで機能していたものであろう。明確な環状を呈しておらず、実態は弧状列石ではあるが、立石の存在と1号屋外埋設土器、さらにわずかに点在する石の存在から環状列石として判断したものである。立石の在り方は秋田県大湯環状列石の原型を思わせるものであるが、列石下からは土壌がわずかに1基存在したのみであった。列石内部にも1基の配石墓だけの存在であり、環状列石を墓地遺構と断定することには疑問があった。

なお、使用石材の点数と、石材重量の点数が合地しないのは、ラベルを紛出した石や、注記の判読できなかった石があったために生じたものである。また、石材不明の石は鑑定からもれた石や該当する石が確認できなかったものであり、石材鑑定の結果不明となったものではない。



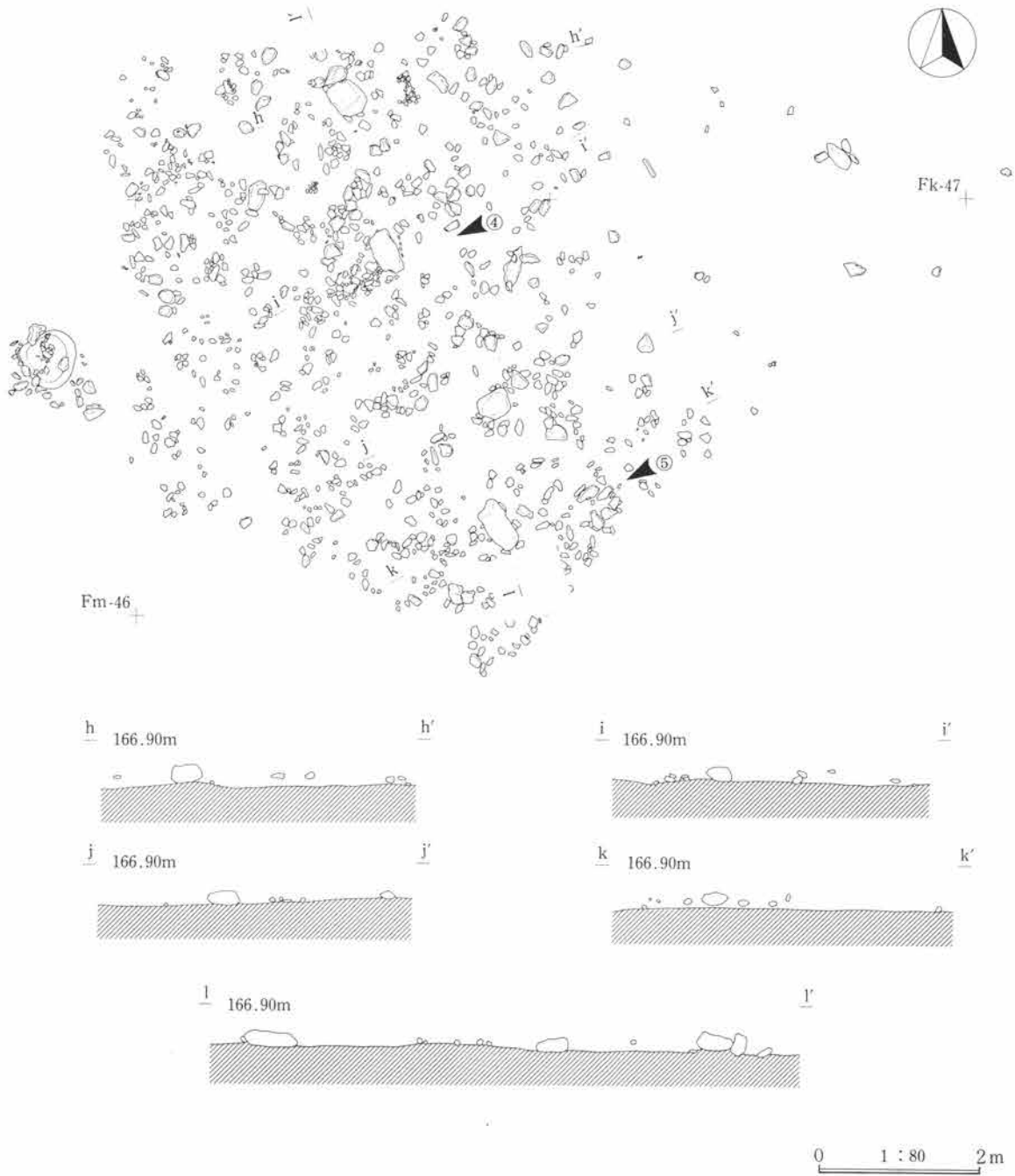
第7図 環状列石（部分1）





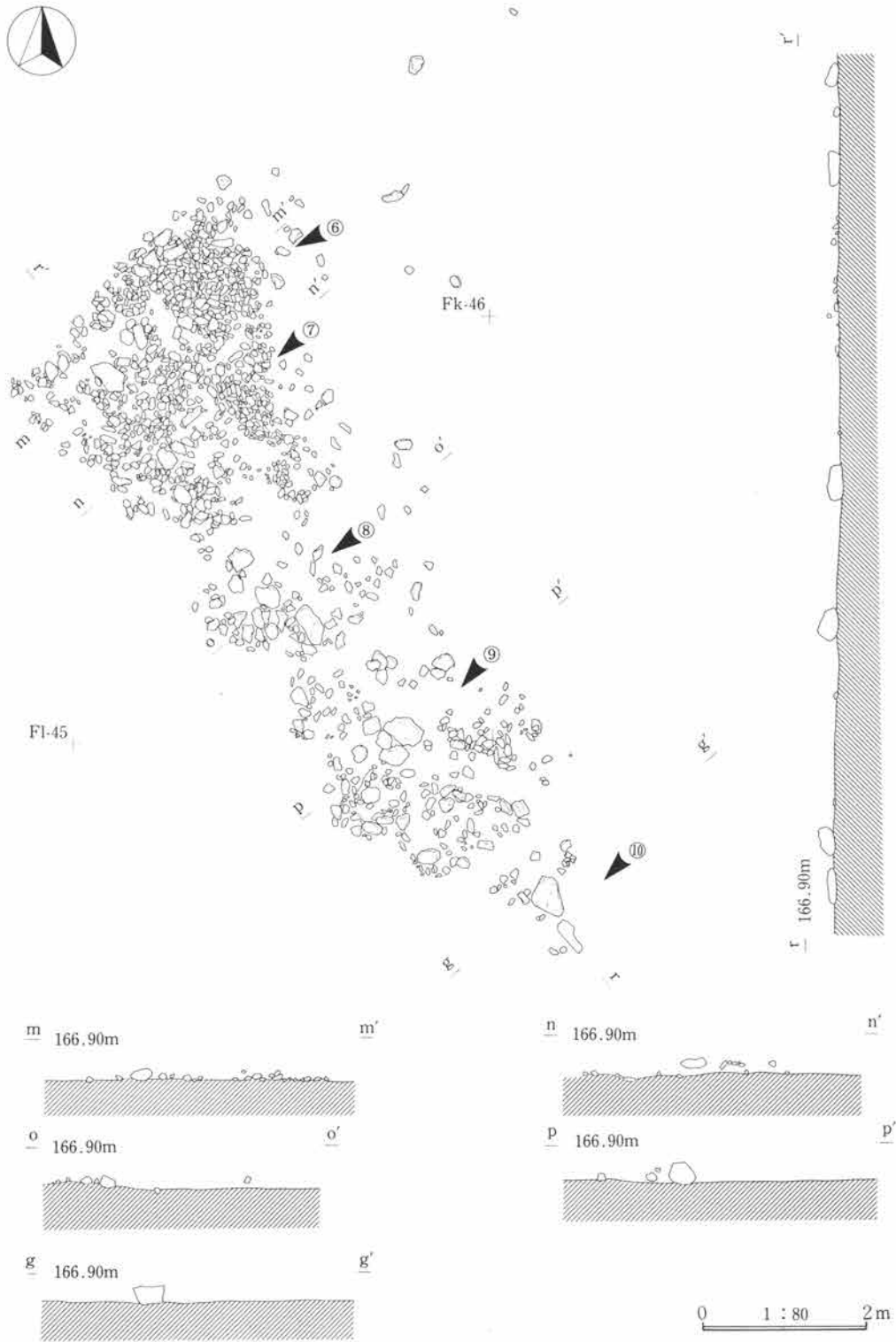
第8図 環状列石 (部分2)





第9図 環状列石 (部分3)





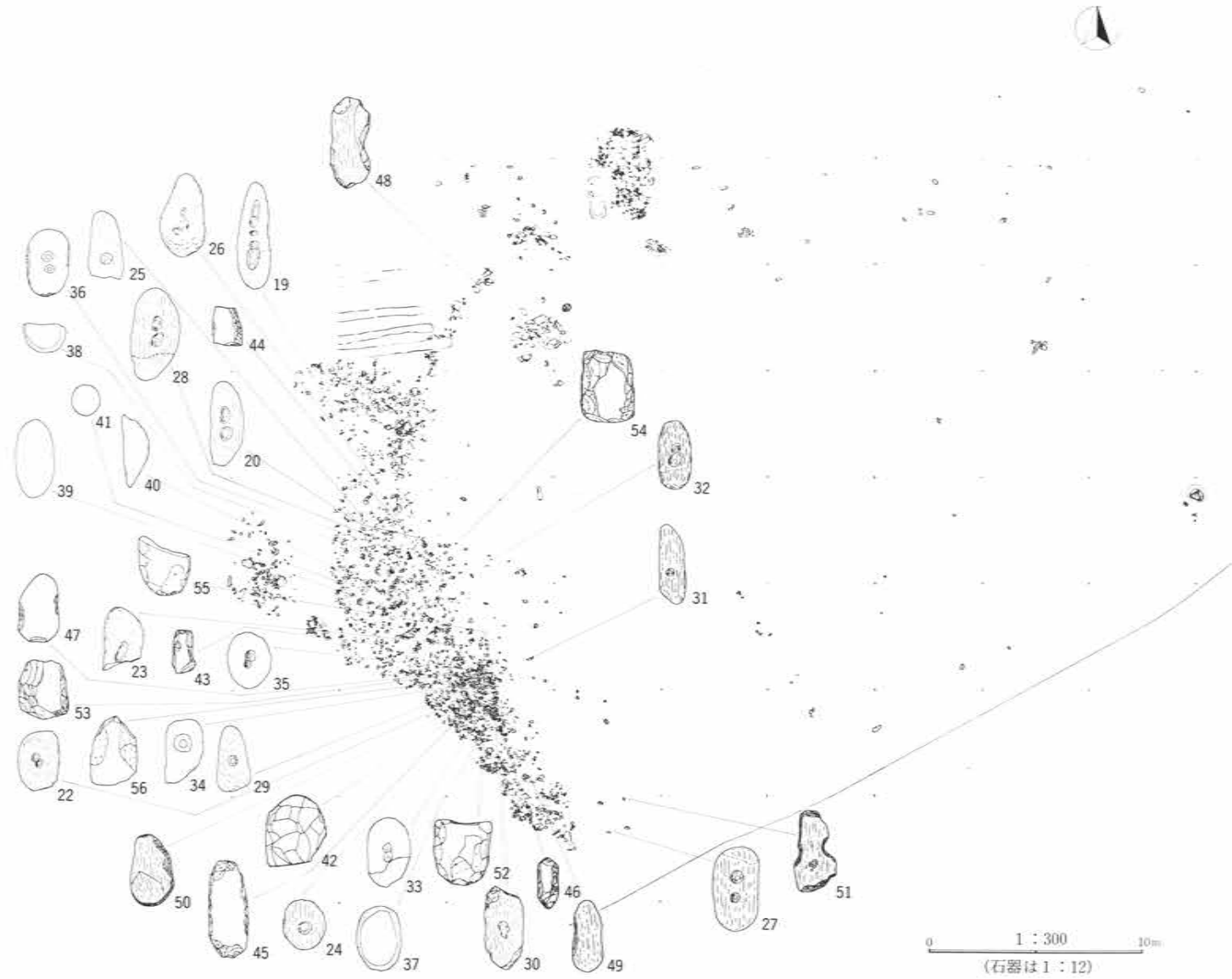
第10図 環状列石（部分4）





第11図 環状列石 石皿・多孔石出土状況

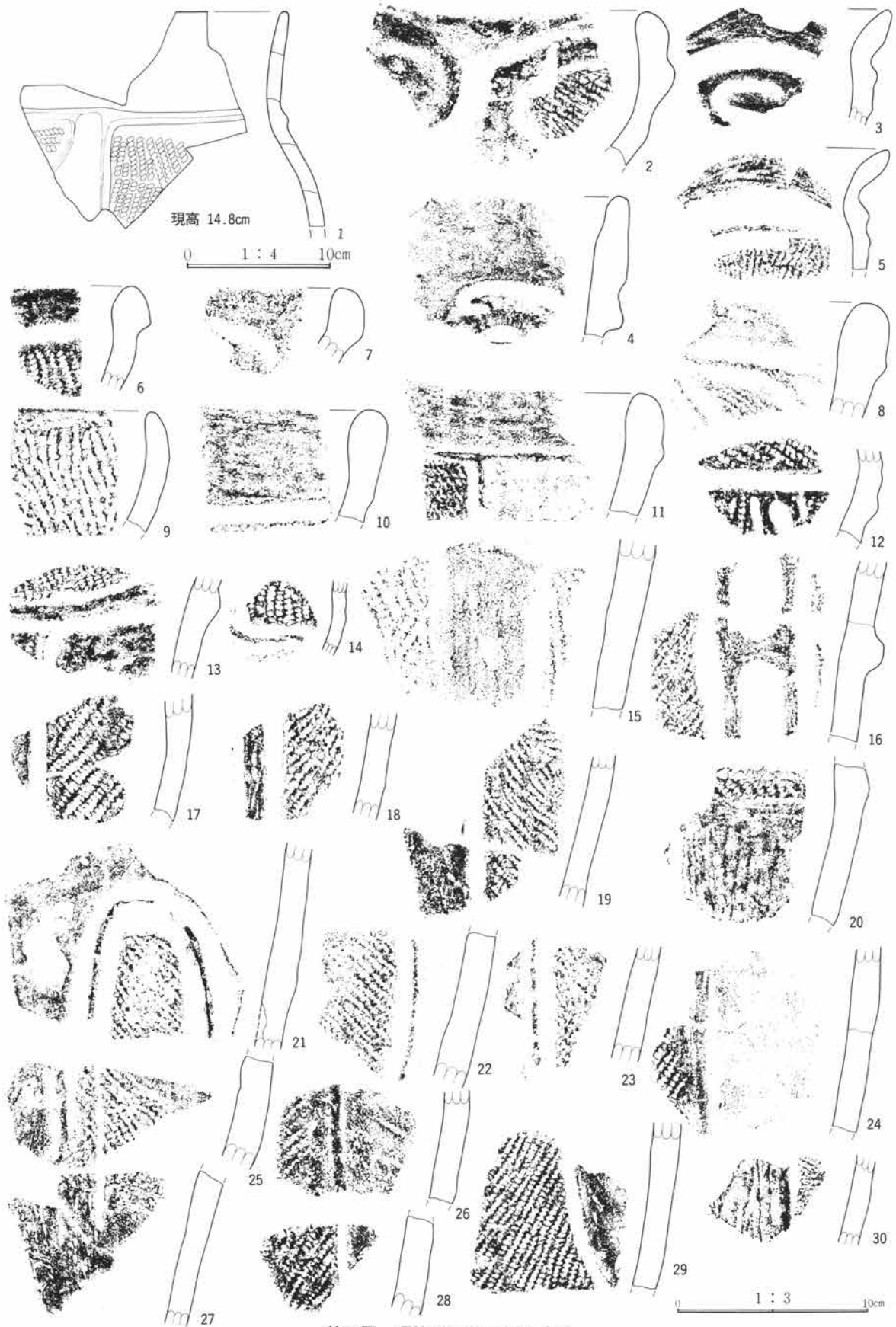
2 環状列石と立石



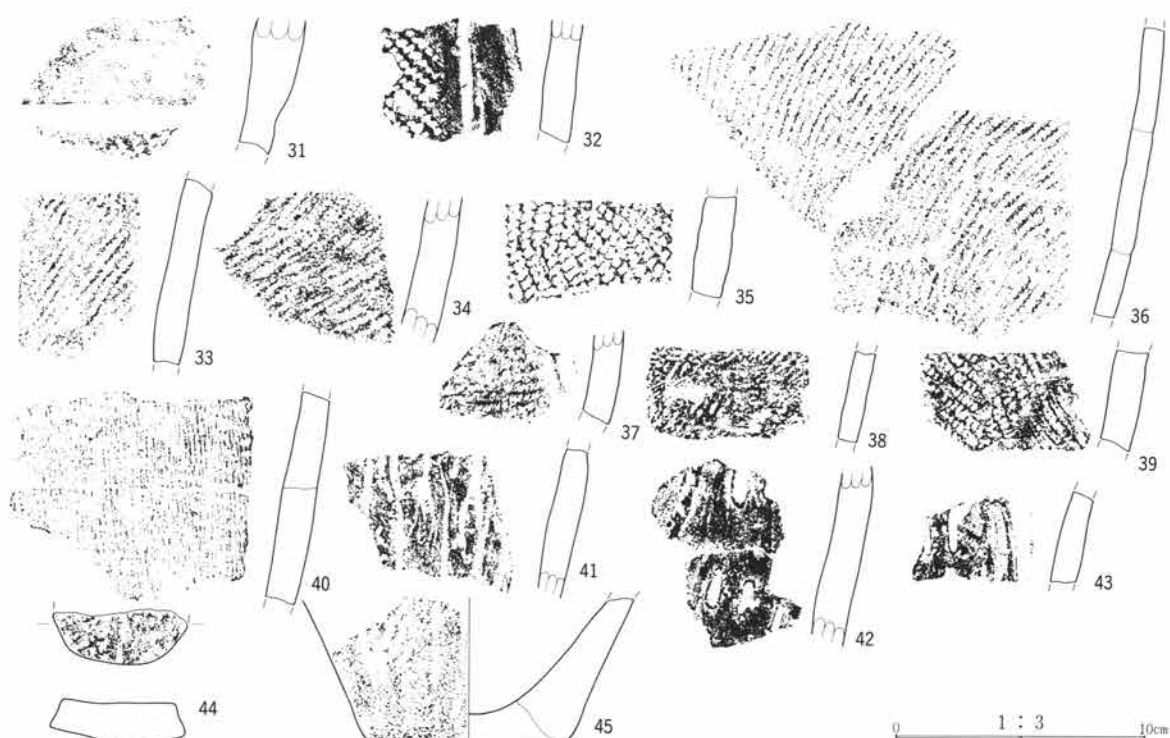
第12図 環状列石 凹石・磨石・打製石斧等出土状況

環状列石土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|---|---|---------------|
| 13-1 102 | 口縁 部～ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器(両耳壺)の口縁～胴部片。器厚8 ～10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らす。胴部にはそれに接続する微隆起帯 を配し、区画内に縄文施文。原体はR(↑↑ 横・縦位施文。 | Fk-46 グリッド |
| 13-2 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～17mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯による楕 円等の文様が描かれ、縄文施文。 原体はR(↑↑横転がし。 | 一括 |
| 13-3 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい橙色。 | 波状口縁部片。隆帯と幅広の沈線による文 様が描かれる。 外面に煤が付着している。 | 一括 |
| 13-4 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれる。 | 一括 |
| 13-5 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7～10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 波状口縁部片。口縁部に幅広の沈線による 文様が描かれ、縄文施文。原体はR(↑↑縦転 がし。 | F1-46 グリッド |
| 13-6 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(↑↑横転がし。 | 一括 |
| 13-7 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚20mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は黄褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれている。 | F1-47 グリッド |
| 13-8 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚19～25mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。それに接続する微隆起帯を配し、 区画内に縄文施文。原体はL(↑↑縦転がし。 | F1-47 グリッド |
| 13-9 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。 縄文施文。原体はR(↑↑)。 | Fk-46 グリッド |
| 13-10 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13～20mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、以下縄文施文。 | F1-47 グリッド |
| 13-11 102 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚17～20mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は黒褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らせる。それに接続する微隆起帯を 垂下させ、区画内に縄文施文。原体はL(↑↑ 縦転がし。 | Fk-46 グリッド |
| 13-12 102 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(↑↑横位。胴部縄文はR(↑↑縦 位。沈線を垂下。 | Fk-45 グリッド |
| 13-13 102 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は橙色。 | 口縁部に隆帯による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(↑↑横転がし。胴部は沈線を垂 下している。 | F1-46 グリッド |
| 13-14 102 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR(↑↑)。 | F1-46 グリッド |
| 13-15 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16～18mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 縄文施文。原体はR(↑↑縦・横転がし。 沈線を垂下している。 | Fk-45 グリッド |
| 13-16 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 隆帯による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR(↑↑縦転がし。 | F1-46 グリッド |
| 13-17 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11～14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑↑縦転がし(0段多 か?)。沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 一括 |
| 13-18 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 隆帯を垂下。 縄文施文。原体はR(↑↑縦転がし。 | F1-46 グリッド |
| 13-19 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明黄褐色。 | 隆帯を垂下。 縄文施文。原体はL(↑↑縦転がし。 | 一括 |



第13図 環状列石出土土器 (1)



第14図 環状列石出土土器(2)

環状列石土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|-------------------|--|--|---------------|
| 13-20 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~19mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 1条の微隆起帯を巡らせ、R(↑)横転がし。 沈線を垂下している。 | Fk-45 グリッド |
| 13-21 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は明褐色。 | 微隆起帯による「□」状の文様が描かれ、 区画内に縄文施文。原体L(↑)縦転がし。 | Fl-47 グリッド |
| 13-22 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | Fl-47 グリッド |
| 13-23 102 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。 原体はL(↑)縦転がし。 | 一括 |
| 13-24 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | 一括 |
| 13-25 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は明褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。 原体はL(↑)縦転がし。 | 一括 |
| 13-26 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | Fk-45 グリッド |
| 13-27 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は橙色、内面は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | Fl-48 グリッド |
| 13-28 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 土器接合面に刻みを施している。 | Fl-48 グリッド |
| 13-29 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | Fk-45 グリッド |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

環状列石土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|--|--|---------------|
| 13-30 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は黄褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。 原体はL(↑横転がし。 | Fj-44 グリッド |
| 14-31 102 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚18～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。 以下縄文施文。原体はR(↑。 | F1-47 グリッド |
| 14-32 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 沈線を垂下。 | Fk-45 グリッド |
| 14-33 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 | F1-48 グリッド |
| 14-34 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面は明褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 | F1-46 グリッド |
| 14-35 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑縦・横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | Fk-46 グリッド |
| 14-36 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は明褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑(0段多条か?)縦 転がし。 | F1-48 グリッド |
| 14-37 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。 原体はL(↑(0段多条)縦転がし。 | F1-46 グリッド |
| 14-38 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明黄褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑横転がし。 | F1-46 グリッド |
| 14-39 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 | F1-46 グリッド |
| 14-40 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11～14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は赤褐色。 | 条線が施されている。 | Fk-45 グリッド |
| 14-41 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐灰色。 | 沈線が施されている。 | 一括 |
| 14-42 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 微隆起帯と押し引き状の沈線が施されてい る。 | Fk-46 グリッド |
| 14-43 102 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9～11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 微隆起帯と押し引き状の沈線が施されてい る。 | Fk-47 グリッド |
| 14-44 102 | 土製 円盤 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 土製円盤の破片。器厚15mm。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい橙色。 | 重量21g | F1-47 グリッド |
| 14-45 102 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 沈線を垂下。 底部周縁は磨耗している。 | Fk-45 グリッド |

凡例補則

縄文土器の観察視点のなかで、焼成(遺存状況)の判定については、便宜的に非常に良・良・やや良・不良の4分類している。これは上條朝宏氏*の分類に従っている。

非常に良→内・外面ともていねいに調整されており、光沢のある土器片。

良 → 一次のやや良との中間的な土器で光沢のない土器片。

やや良 → 手で触れると細かい粒子が指先につく土器片。

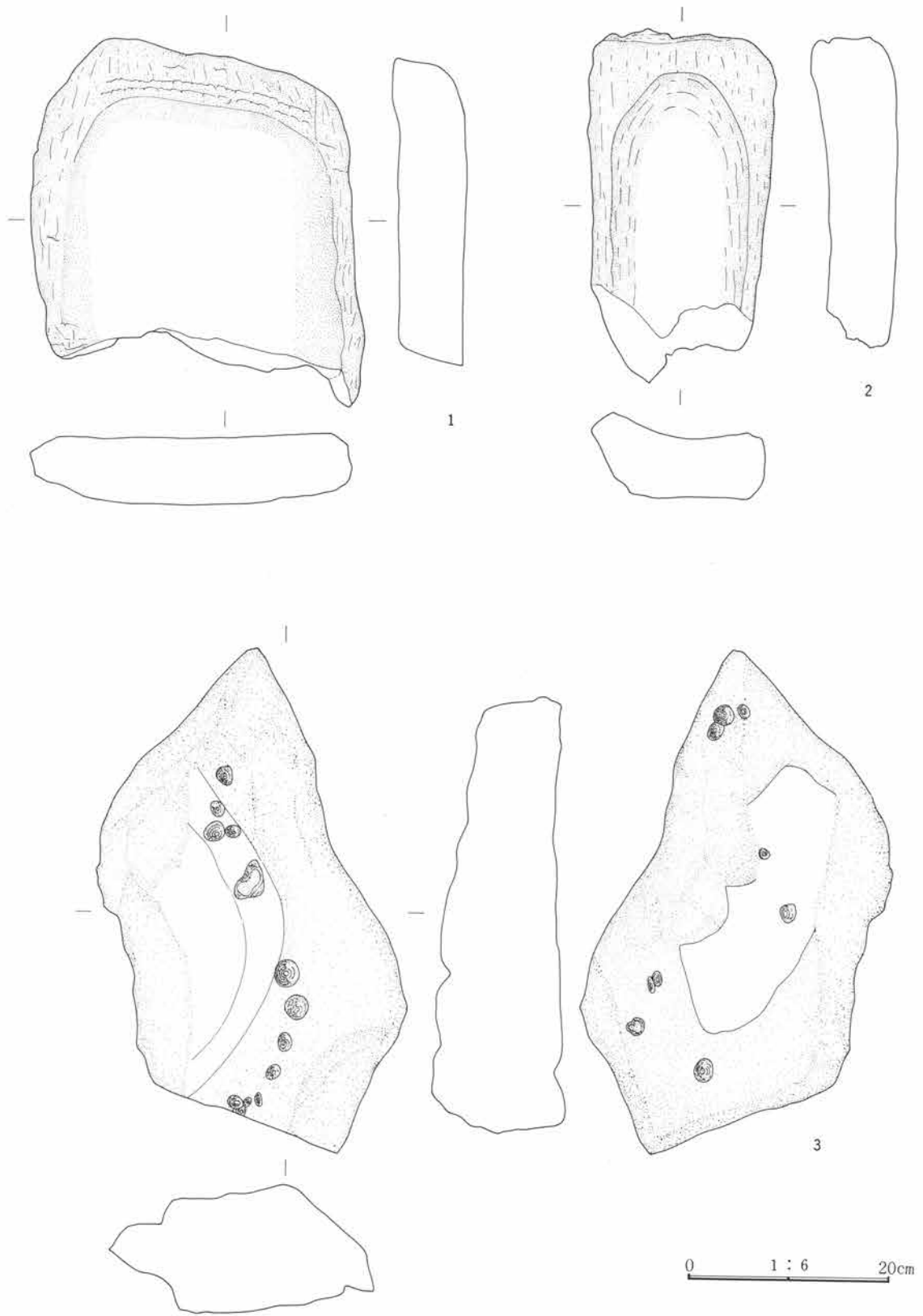
不 → 良 → 注意して持たないと破損する土器片。

*上條朝宏「胎土分析I」『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器III』1983

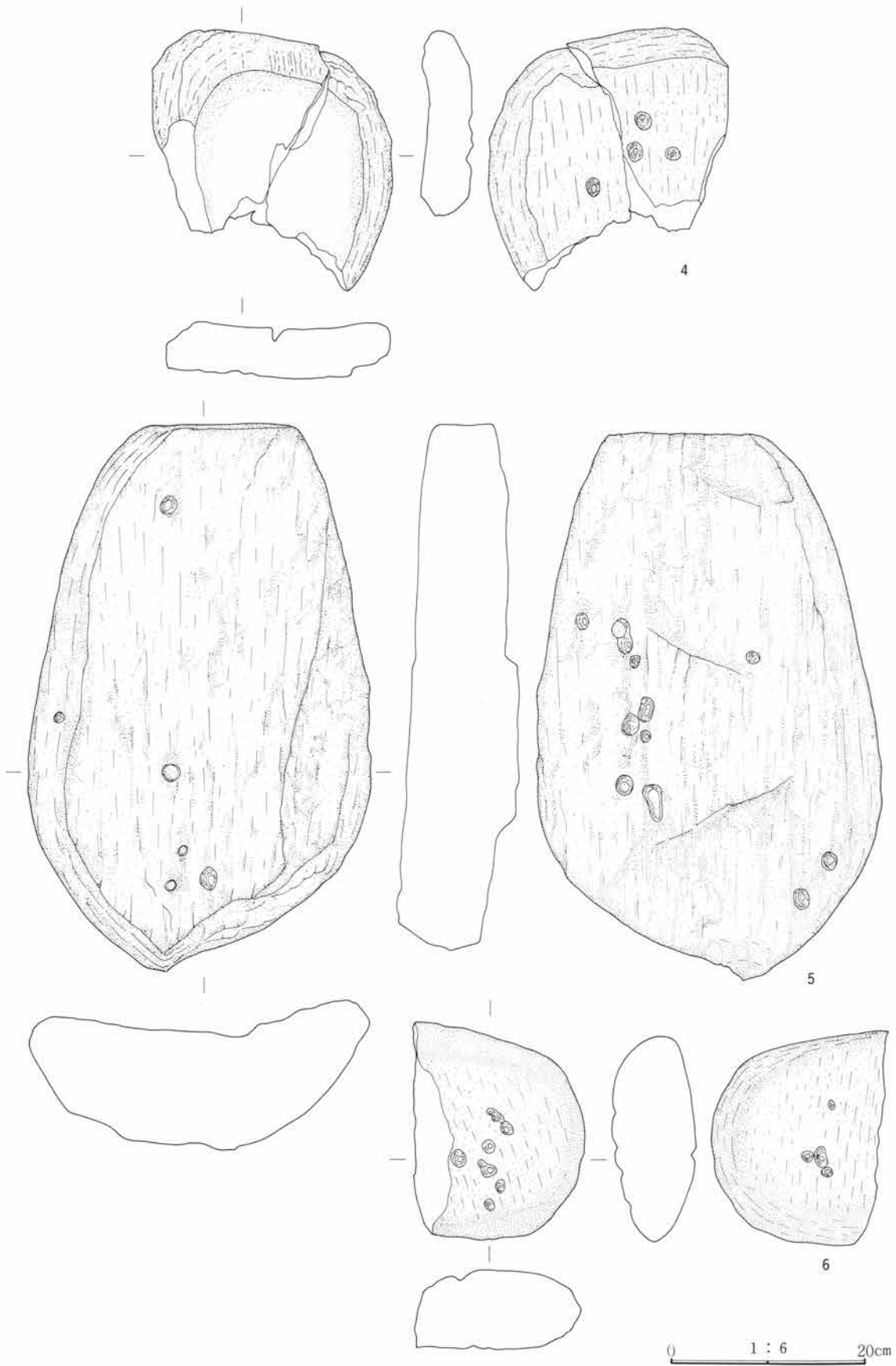
2 環状列石と立石

環状列石石器観察表

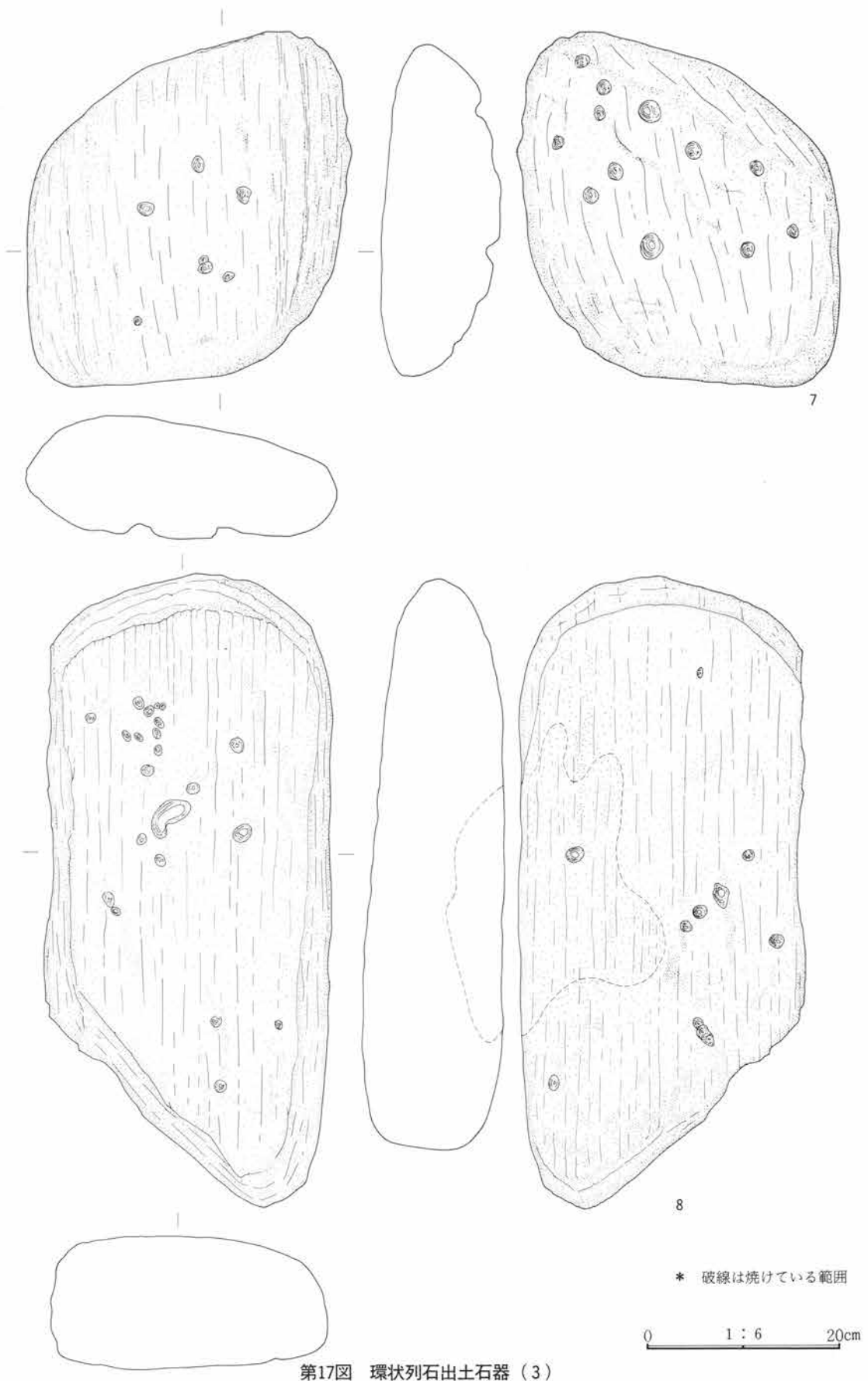
| 図番 PL | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|-----------|--------------|--------|-------|----------|--|------------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 15-1 102 | 石 皿 | % | 点紋絹雲母緑泥片岩 | (35.8) | 32.6 | 6.8 | (12,400) | 長方形を呈し、窪みは浅い。 | F1-47・48 グリッド |
| 15-2 102 | 石 皿 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (34.7) | 18.3 | 8.6 | (8,100) | 長方形を呈し、窪みはやや深い。全面焼けている。 | F1-46 グリッド |
| 15-3 102 | 石 皿 | 一部欠損 | 砂岩 | (49.0) | (30.7) | 12.5 | (16,600) | 両面に磨面と凹みがある。凹みは22個で、最大は長40mm、短24mm、深4mm。最小は長10mm、短7mm、深2mmで、平均は長18mm、短14mm、深5mm。 | Fk-45 グリッド |
| 16-4 102 | 石 皿 | % | 点紋緑泥片岩 | (26.2) | 24.4 | 5.8 | (5,100) | 楕円形で窪みは浅い。裏面に4個の凹み。最大は長18mm、短17mm、深5mm。最小は長15mm、短12mm、深4mmで、平均は長17mm、短15mm、深5mm。一部焼けている。 | Fk-46 グリッド |
| 16-5 102 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 54.3 | 35.0 | 14.9 | 34,800 | 両面に18個の凹み。最大の凹みは長37mm、短16mm、深2mm。最小は長11mm、短9mm、深1mmで、平均は長19mm、短14mm、深2mm。 | F1-48・49 グリッド |
| 16-6 102 | 多 孔 石 | % | 点紋緑泥片岩 | (21.8) | 17.4 | 8.5 | (4,700) | 両面に13個の凹み。最大の凹みは長21mm、短12mm、深5mm。最小は長7mm、短7mm、深5mmで、平均は長13mm、短10mm、深4mm。 | F1-46 グリッド |
| 17-7 103 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 35.9 | 33.1 | 12.5 | 20,900 | 両面に18個の凹み。最大の凹みは長26mm、短23mm、深14mm。最小は長11mm、短8mm、深3mmで、平均は長15mm、短13mm、深5mm。 | Fk-49 グリッド |
| 17-8 103 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋絹雲母緑泥片岩 | 64.2 | 29.8 | 13.7 | 43,600 | 両面に32個の凹み。最大の凹みは長46mm、短20mm、深2mm。最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長14mm、短10mm、深2mm。一部被熱。 | F1-48 グリッド |
| 18-9 103 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | 47.9 | 21.7 | 13.3 | (18,650) | 両面に9個の凹み。最大の凹みは長25mm、短24mm、深18mm。最小は長10mm、短10mm、深7mmで、平均は長19mm、短18mm、深10mm。一部被熱。 | Fk-49 グリッド |
| 18-10 132 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 33.8 | 19.4 | 10.4 | 12,350 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長16mm、短14mm、深4mm。最小は長10mm、短9mm、深1mmで、平均は長14mm、短12mm、深3mm。一部磨耗している。 | Fg-50 グリッド |
| 18-11 103 | 多 孔 石 | 完形 | 安山岩 | 46.5 | 37.8 | 15.5 | 44,700 | 片面に22個の凹み。最大の凹みは長20mm、短19mm、深6mm。最小は長7mm、短6mm、深3mmで、平均は長12mm、短10mm、深3mm。 | Fk-49 グリッド |
| 18-12 103 | 多 孔 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 21.8 | 17.2 | 11.2 | 5,700 | 両面に39個の凹み。最大の凹みは長24mm、短21mm、深8mm。最小は長8mm、短8mm、深2mmで、平均は長17mm、短14mm、深6mm。 | Fk-45 グリッド |
| 19-13 103 | 多 孔 石 | 完形 | 紅簾絹雲母片岩 | 46.0 | 20.1 | 9.0 | 13,600 | 両面に77個の凹み。最大の凹みは長24mm、短20mm、深7mm。最小は長4mm、短3mm、深1mmで、平均は長14mm、短11mm、深4mm。一部被熱。 | Fg-45 グリッド |
| 19-14 103 | 多 孔 石 | 部分 | 絹雲母石墨片岩 | (17.4) | (8.8) | (7.5) | (310) | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径17mm、深さ7mmである。 | F1-46 グリッド |
| 19-15 103 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | 15.6 | 11.3 | 6.5 | (1,400) | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径11mm、短径10mm、深さ2mmである。 | F1-48 グリッド |
| 19-16 103 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | 30.0 | 21.0 | 11.6 | (12,800) | 両面に19個の凹み。最大の凹みは長21mm、短16mm、深10mm。最小は長11mm、短10mm、深3mmで、平均は長15mm、短13mm、深5mm。一部被熱。 | F1-47 グリッド |
| 19-17 103 | 多 孔 石 | 完形 | 石墨絹雲母片岩 | 18.1 | 12.9 | 12.0 | 4,150 | ほぼ全面に11個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深6mm。最小は長11mm、短11mm、深2mmで、平均は長17mm、短14mm、深5mm。 | F1-48 グリッド |
| 20-18 104 | 多 孔 石 | 完形 | 砂岩 | 60.5 | 29.5 | 20.4 | 26,500 | 両面に21個の凹み。最大の凹みは長73mm、短42mm、深7mm。最小は長12mm、短10mm、深2mmで、平均は長25mm、短16mm、深4mm。 | F1-46 グリッド |
| 20-19 104 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 20.5 | 6.3 | 3.3 | 700 | 両面に8個の凹み。最大の凹みは長41mm、短22mm、深4mm。最小は長15mm、短10mm、深2mmで、平均は長24mm、短15mm、深3mm。一部被熱。 | F1-48 グリッド |
| 20-20 104 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 16.1 | 6.3 | 4.3 | 600 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径31mm、短径22mm、深さ3mmである。 | F1-47 グリッド |
| 20-21 104 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 17.9 | 9.4 | 7.2 | 1,600 | 片面に1個の凹みがある。凹みは長径20mm、短径15mm、深さ8mmである。凹石の凹みとは異なる。 | F1-48 グリッド |

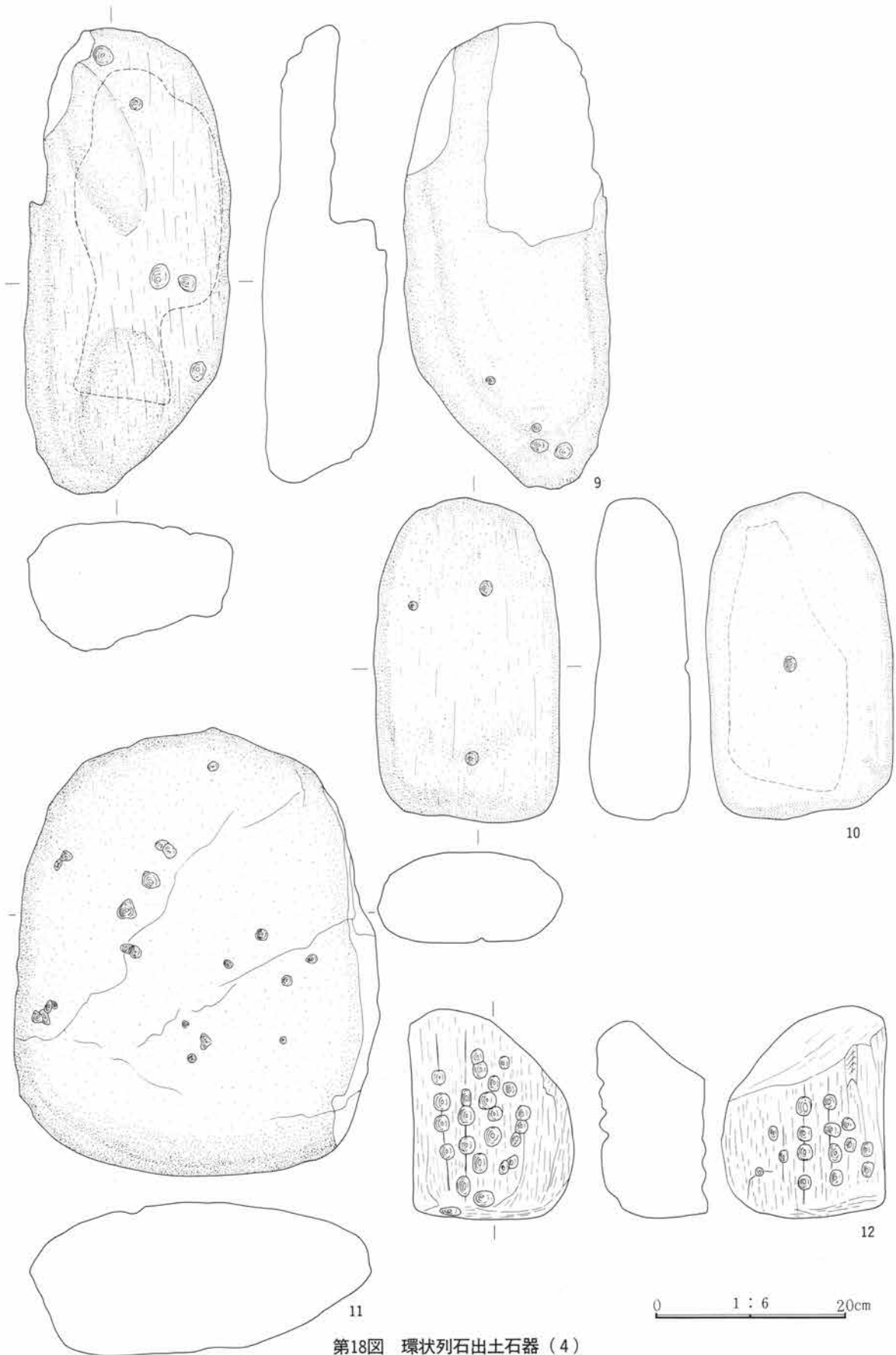


第15図 環状列石出土石器（1）

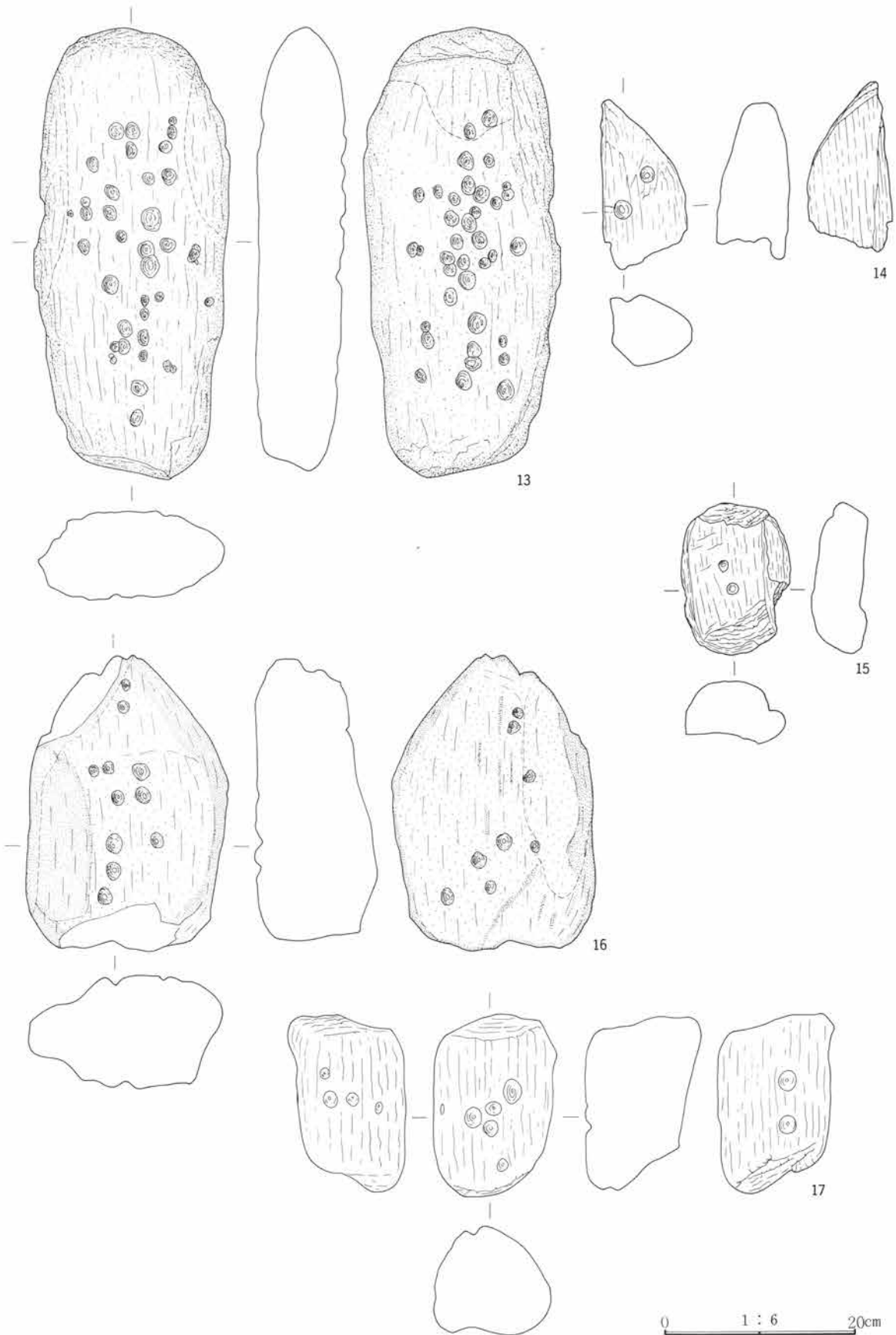


第16図 環状列石出土石器（2）

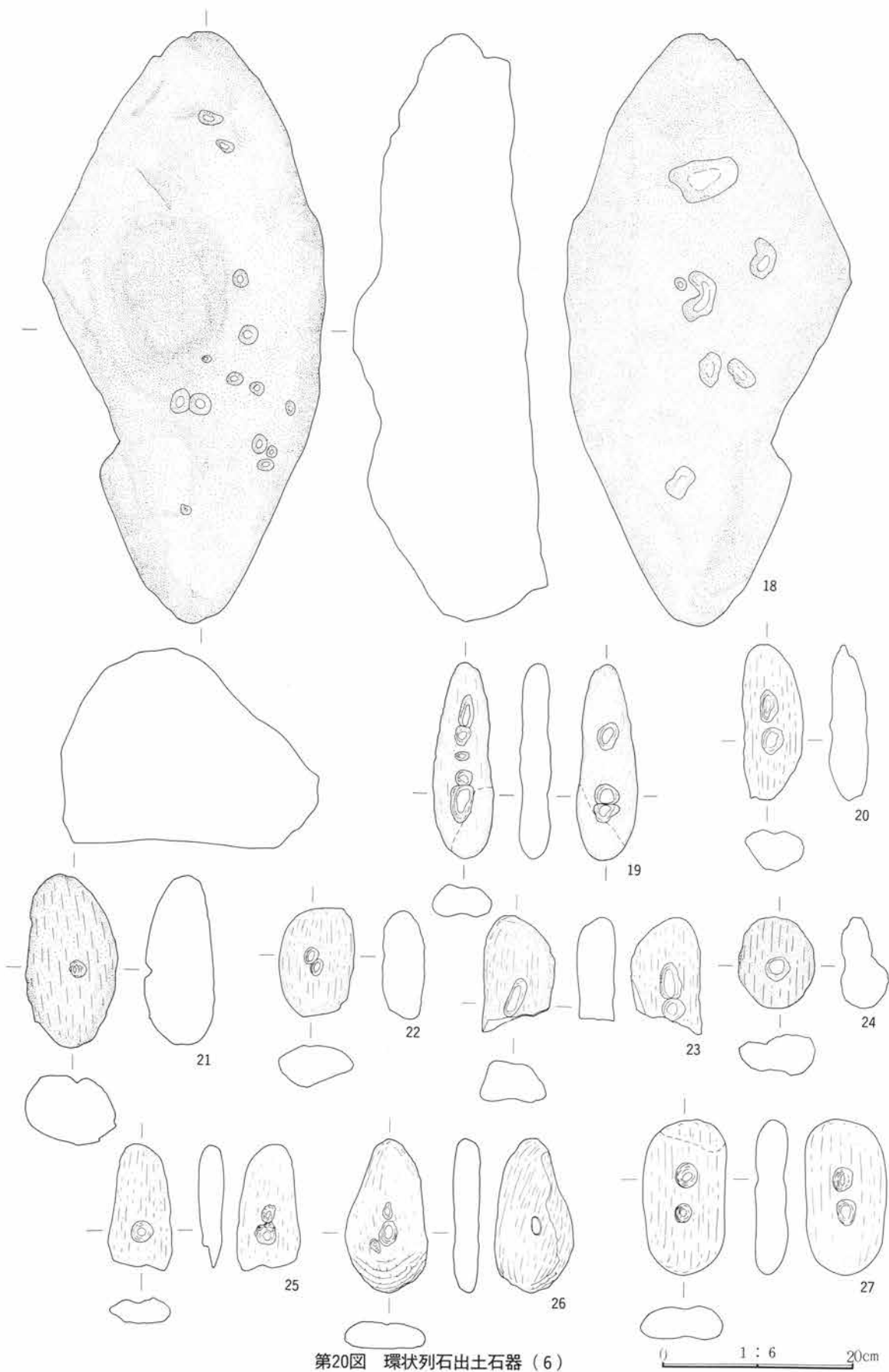




第18図 環状列石出土石器(4)



第19図 環状列石出土石器 (5)

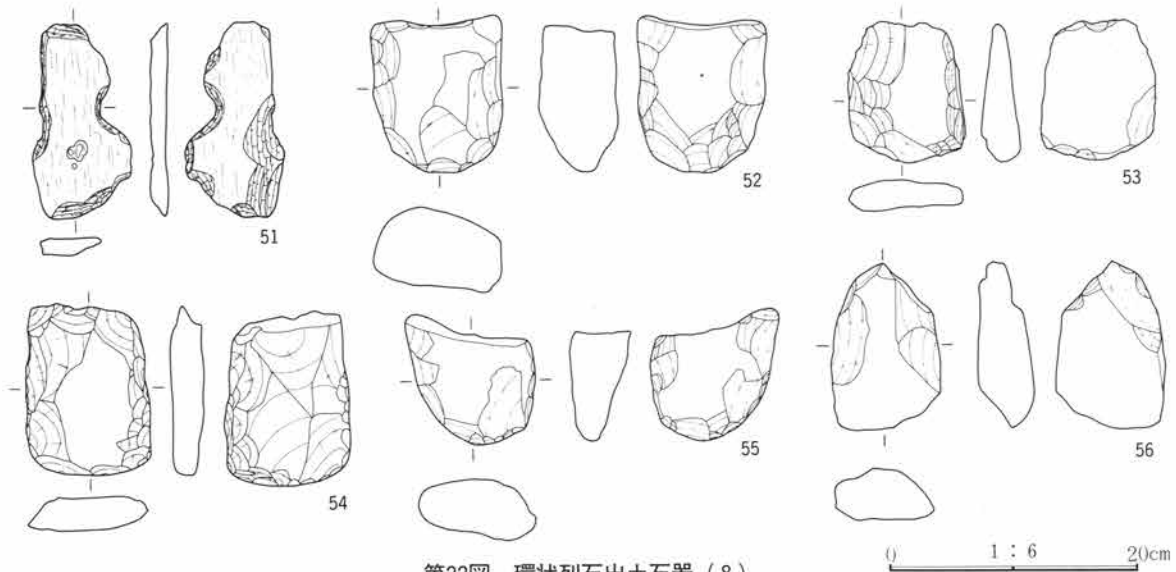


第20図 環状列石出土石器 (6)



第21図 環状列石出土石器 (7)

2 環状列石と立石



第22図 環状列石出土石器 (8)

環状列石石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|--------------|-----|-----|-------|--|---------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 20-22 104 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 11.2 | 8.0 | 4.4 | 600 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径14mm、深さ2mmである。 | Fk-46 グリッド |
| 20-23 104 | 凹 石 | 欠 | 点紋緑泥片岩 | (12.0) | 7.5 | 4.2 | (600) | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長42mm、短16mm、深2mm。最小は長24mm、短23mm、深3mmで、平均は長34mm、短21mm、深2mm。 | Fk-46 グリッド |
| 20-24 104 | 凹 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | 9.5 | 7.9 | 5.0 | (500) | 片面に1個の凹みがある。凹みは長径26mm、短径25mm、深さ5mmである。 | Fk-45 グリッド |
| 20-25 104 | 凹 石 | 一部欠損 | 点紋絹雲母片岩 | (13.0) | 6.7 | 2.6 | (300) | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長24mm、短23mm、深2mm。最小は長18mm、短14mm、深1mmで、平均は長22mm、短19mm、深2mm。 | F1-47 グリッド |
| 20-26 104 | 凹 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 15.8 | 8.7 | 2.8 | 500 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長26mm、短18mm、深3mm。最小は長15mm、短9mm、深2mmで、平均は長19mm、短12mm、深2mm。片面被熱。 | F1-48 グリッド |
| 20-27 104 | 凹 石 | 完形 | 石墨絹雲母片岩 | 16.0 | 8.6 | 3.4 | 340 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長27mm、短20mm、深2mm。最小は長18mm、短18mm、深1mmで、平均は長23mm、短20mm、深2mm。一部被熱。 | Fj-44 グリッド |
| 21-28 104 | 凹 石 | 完形 | 緑泥片岩 | 17.6 | 9.0 | 3.9 | 950 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長30mm、短20mm、深2mm。最小は長19mm、短15mm、深2mmで、平均は長26mm、短19mm、深2mm。一部被熱。 | F1-47 グリッド |
| 21-29 104 | 凹 石 | 完形 | 石墨絹雲母片岩 | 12.2 | 6.4 | 2.4 | 300 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長20mm、短17mm、深1mm。最小は長15mm、短10mm、深2mmで、平均は長18mm、短15mm、深1mm。 | Fk-46 グリッド |
| 21-30 104 | 凹 石 | ほぼ完形 | 緑泥片岩 | 15.9 | 7.2 | 1.9 | 350 | 片面に1個の凹みがある。凹みは長径34mm、短径17mm、深さ2mmである。 | Fk-45 グリッド |
| 21-31 104 | 凹 石 | 完形 | 緑泥片岩 | 15.3 | 5.0 | 3.0 | 380 | 片面に1個の凹みがある。凹みは長径16mm、短径14mm、深さ1mmである。 | Fk-46 グリッド |
| 21-32 104 | 凹 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 13.2 | 6.3 | 3.8 | 430 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径25mm、短径18mm、深4mm。 | Fk-47 グリッド |
| 21-33 104 | 凹 石 | 一部欠損 | 安山岩 | (13.1) | 8.3 | 4.3 | (600) | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短18mm、深2mm。最小は長18mm、短17mm、深3mmで、平均は長20mm、短17mm、深2mm。全面に磨耗痕。 | Fk-45 グリッド |
| 21-34 104 | 凹 石 | 欠 | 砂岩 | (11.7) | 7.5 | 3.6 | (400) | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長33mm、短28mm、深4mmである。 | Fk-45 グリッド |
| 21-35 104 | 凹 石 | 完形 | 輝緑岩 | 10.7 | 8.1 | 4.1 | 550 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径16mm、深さ2mmである。 | Fk-46 グリッド |
| 21-36 104 | 凹 石 | 完形 | 輝緑岩 | 12.7 | 8.2 | 6.0 | 1,100 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径20mm、短径18mm、深さ4mmである。器面に磨耗痕と敲打痕がみられる。 | F1-47 グリッド |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

環状列石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|---------------|--------------|-------|-----|---------|------------------------------|---------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 21-37 104 | 磨 石 | 完形 | 安山岩 | 12.0 | 8.4 | 4.9 | 710 | 器面に磨耗痕がみられる。 | Fk-45 グリッド |
| 21-38 104 | 磨 石 | 欠 | 安山岩 | (5.5) | 7.2 | 4.6 | (300) | 器面と磨耗痕と敲打痕がみられる。 | F1-47 グリッド |
| 21-39 104 | 磨 石 | 完形 | 輝緑岩 | 15.0 | 7.4 | 3.9 | 700 | 器面に磨耗痕がみられる。 | F1-46 グリッド |
| 21-40 104 | 石皿(?) | 部分 | 砂岩 | (13.7) | (4.6) | 4.9 | (300) | 小型の石皿か?。全面焼けている。 | F1-46 グリッド |
| 21-41 104 | 丸 石 | 一部欠損 | 安山岩 | 5.7 | 5.3 | 4.7 | (200) | 丸い石。 | F1-47 グリッド |
| 21-42 104 | 丸 石 | 完形 | 安山岩 | 13.5 | 11.2 | 8.3 | 1,400 | 丸石に加工痕がみられる。 | F1-47 グリッド |
| 21-43 104 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 熱変成岩 | (8.2) | 4.4 | 2.2 | (110) | バチ (II a)。 | Fk-45 グリッド |
| 21-44 104 | 打製石斧 | 両端欠損 | 熱変成岩 | (7.4) | 5.7 | 2.5 | (146) | バチ (II b)。 | F1-46 グリッド |
| 21-45 104 | 磨製石斧 | 完形 | 斑礫岩 | 18.3 | 7.3 | 3.5 | 750 | 敲打途中。片目が粗割り段階のまま残る。 | Fk-45 グリッド |
| 21-46 104 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 9.7 | 4.0 | 1.7 | 80 | 分銅 (I?)。両側の内湾の度合いが小さい。 | Fk-45 グリッド |
| 21-47 104 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 13.0 | 7.8 | 3.0 | 450 | バチ (II a?)。加工頻度少なく未成品の可能性。 | Fk-46 グリッド |
| 21-48 104 | 打製石斧 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 17.0 | 7.4 | 2.9 | 510 | 分銅 (I)。一側縁のみ内湾。 | Fk-49 グリッド |
| 21-49 104 | 打製石斧 | 完形 | 点紋絹雲母石墨 片岩 | 13.5 | 5.9 | 2.3 | 246 | バチ (II a)。 | Fj-45 グリッド |
| 21-50 104 | 打製石斧 | 完形 | 緑泥片岩 | 13.6 | 8.2 | 2.4 | 350 | バチ (II a)。一側縁のみわずかに内湾。 | Fk-45 グリッド |
| 22-51 104 | 打製石斧 | 一部欠損 | 石墨絹雲母片岩 | (15.4) | 7.9 | 1.5 | (200) | 分銅 (I)。 | Fj-44 グリッド |
| 22-52 104 | | 基部欠損 | 閃輝緑岩 | (12.3) | 10.3 | 6.7 | (1,530) | 粗割り途中。両面一部に自然面残る。 | Fk-45 グリッド |
| 22-53 104 | 打製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (11.1) | 9.3 | 3.2 | (450) | バチ (II a)。節理に沿って基部から片面にかけ欠損。 | Fk-46 グリッド |
| 22-54 104 | 打製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (13.7) | 10.0 | 2.8 | (720) | バチ (II b)。折れ面からの調整痕あり、再加工か? | Fk-47 グリッド |
| 22-55 104 | | 基部欠損 | 輝緑岩 | (10.3) | 10.5 | 4.9 | (630) | 粗割り段階。 | Fk-46 グリッド |
| 22-56 104 | | 完形 | 輝緑岩 | 13.2 | 8.8 | 4.5 | 770 | 粗割り途中。両面にかなりの自然面残る。 | Fk-46 グリッド |

立石 (第23・24図、PL. 14、104)

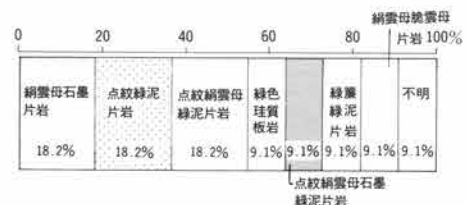
位置 Ff-49グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東13m、列石内部に位置している。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。当初、単独の立石として調査を進めた。8月6日に全景写真の撮影を行い、その後、他の配石遺構の調査に移行した。11月に入って立石の復元写真の撮影を行ったが、復元にあたっては倒れていた中心の石を立てただけである。実測と写真の作業が総て終了した後、石の取りあげと下部調査を実施したが、土壌は存在しなかった。61年度調査段階では、立石は単独のものと理解していたが、0区に調査がおよんだ62年度に入って、これが環状列石内に組み込まれていることが判明した。

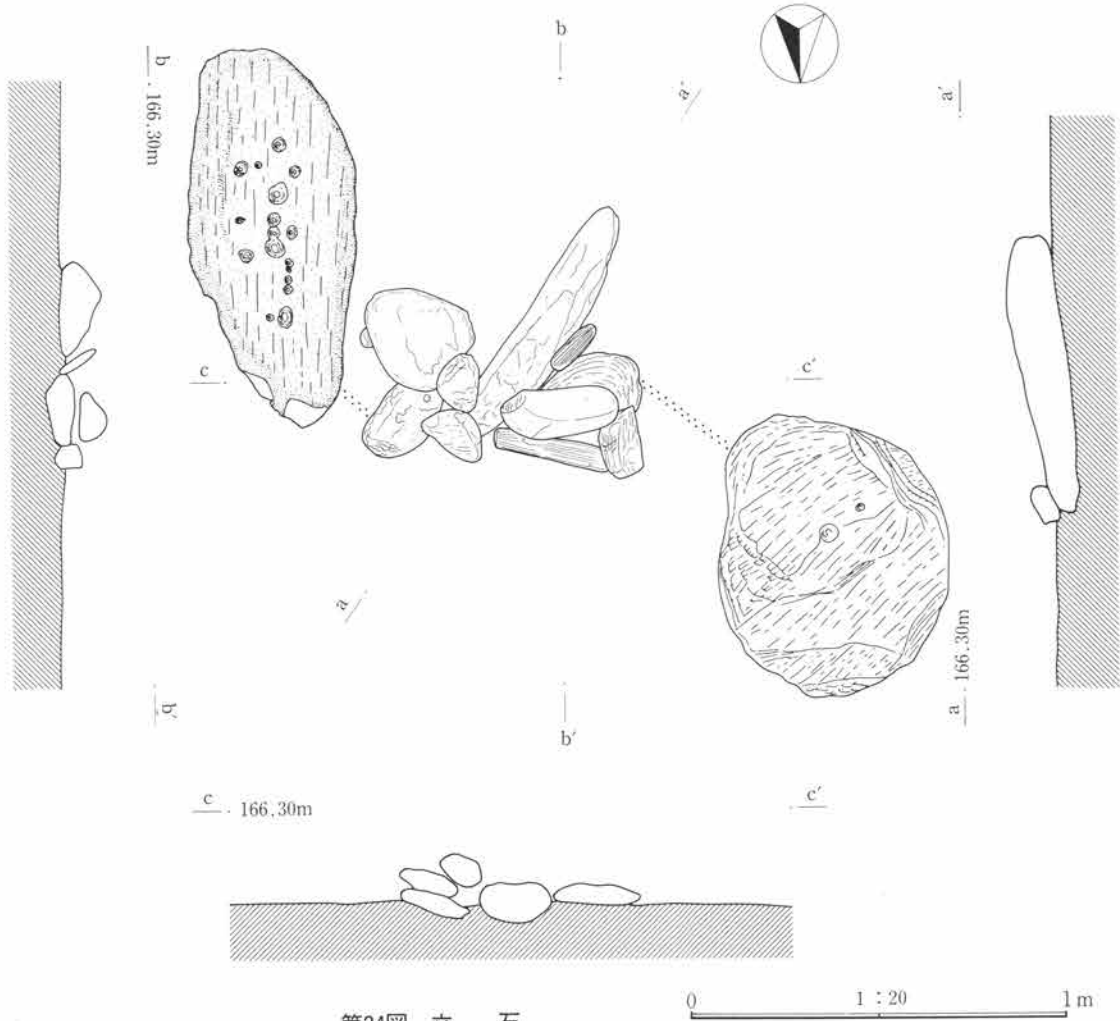
重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 秋田県大湯環状列石検出の所謂「日時計」と共



第23図 立石の石材グラフ



第24図 立石

通するものである。11点の石から構成され、中心の立石は長さ78cmを測る。

使用石材 7種類の石材が確認された。11点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各2点（各18.2%）、綠色珪質板岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・絹雲母脆雲母片岩各1点（各9.1%）であり、不明は1点（9.1%）を数えた。9点（82%）の石は片岩類である。

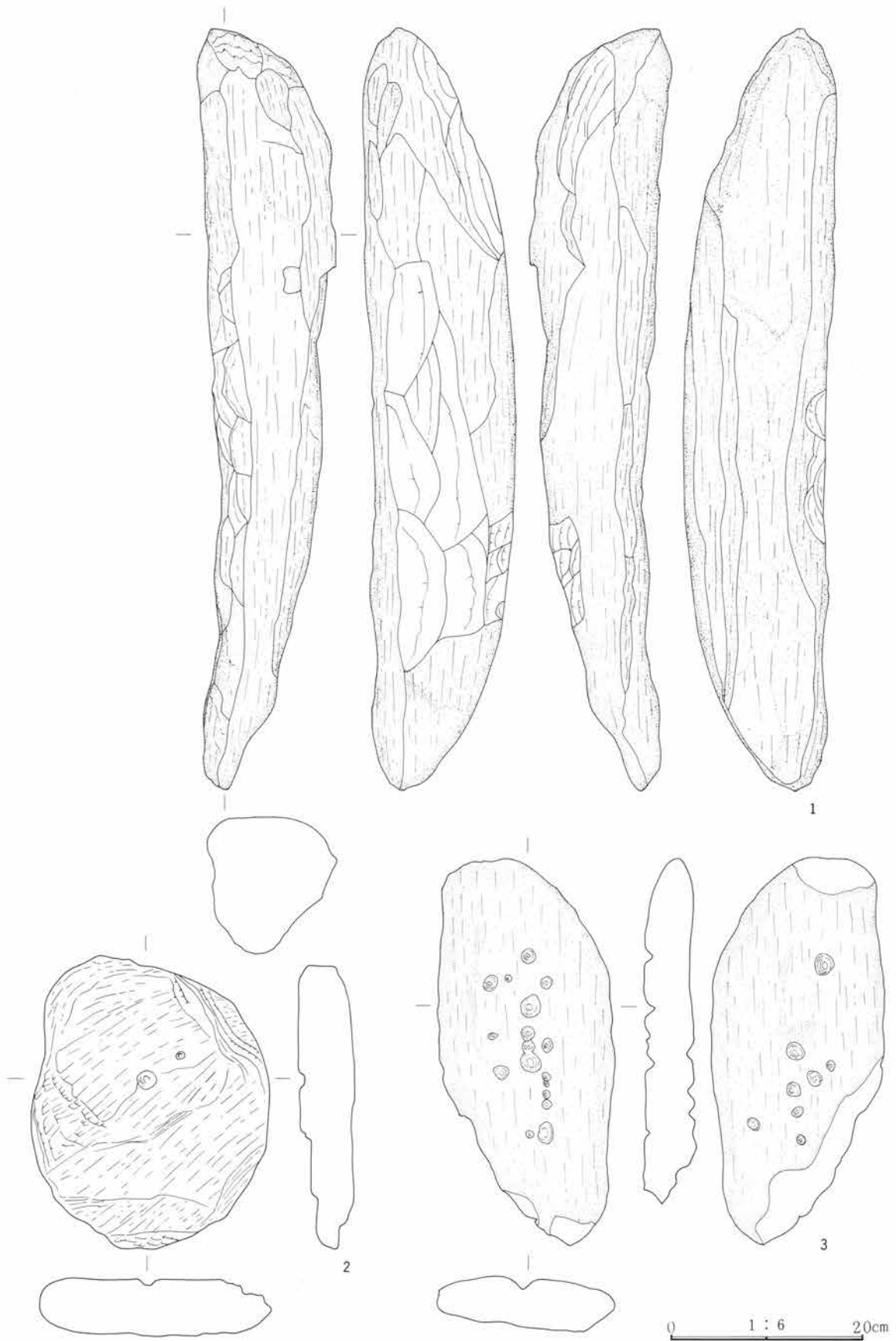
石材重量 重量の判明している石は10点である。その内訳は、500g～1kg未満の石1点、1kg～2.5kg未満の石4点、5kg～7.5kg未満の石4点、20kg～30kg未満の石1点である。

遺物出土状況 立石1点と多孔石2点が出土している。焼石は3点であり、27%を占めていた。

所見 当遺構は環状列石内の立石である。秋田県大湯環状列石の所謂「日時計」と同遺構であるが、下部に土壌は存在せず、集落のシンボリック存在だったものであろう。

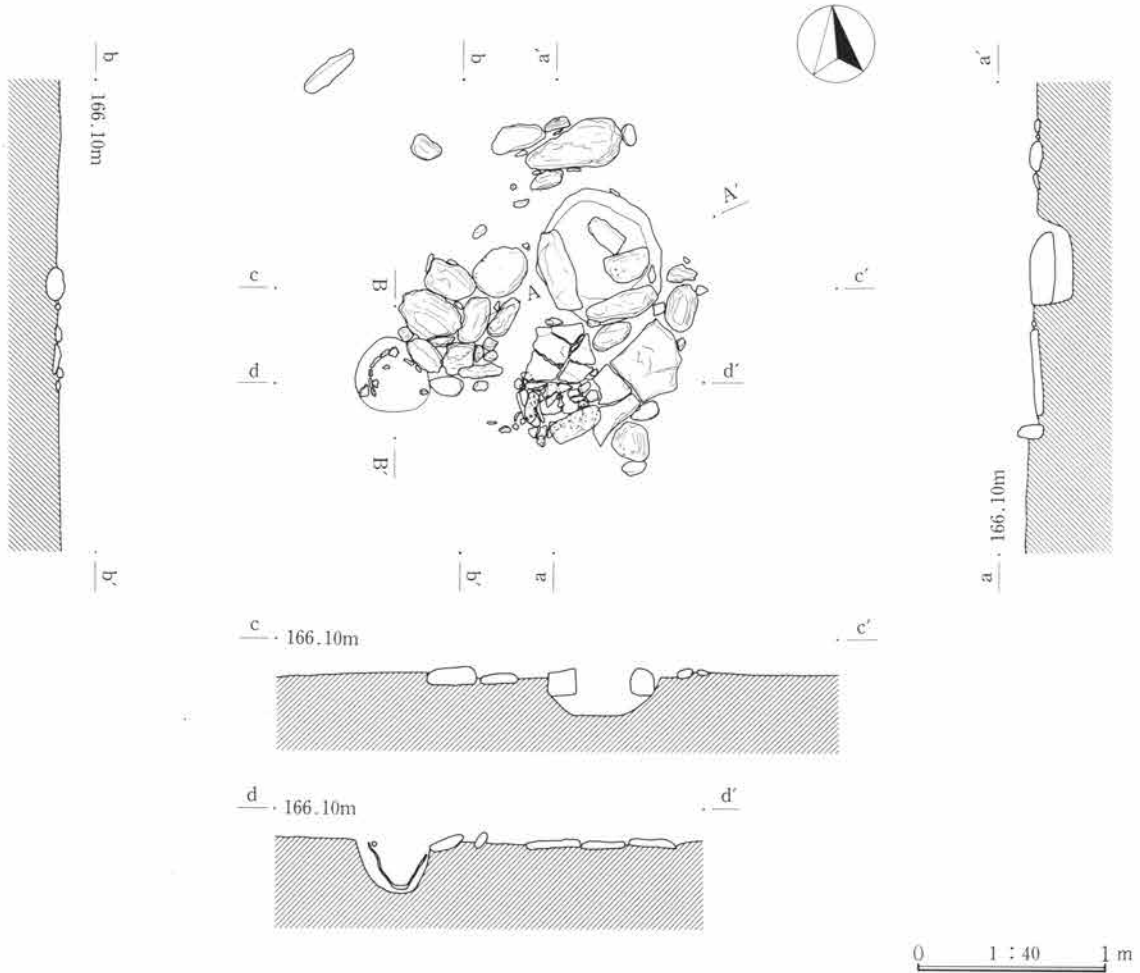
立石観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|-------------|-------|------|---------|--------------|------|------|---------|---|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 25-1 104 | 立 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 78.0 | 15.7 | 14.0 | 2,100 | 周囲に加工痕がみられる。 | 立石 |
| 25-2 104 | 多 孔 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 30.0 | 24.6 | 5.8 | 6,100 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径15mm、短径14mm、深さ5mmである。 | 押えの石 |
| 25-3 104 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (39.3) | 18.2 | 5.6 | (5,100) | 両面に25個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深12mm。最小は長7mm、短5mm、深3mmで、平均は長14mm、短12mm、深7mm。 | 押えの石 |



第25図 立石出土石器

3 敷石住居跡



第26図 1号配石遺構

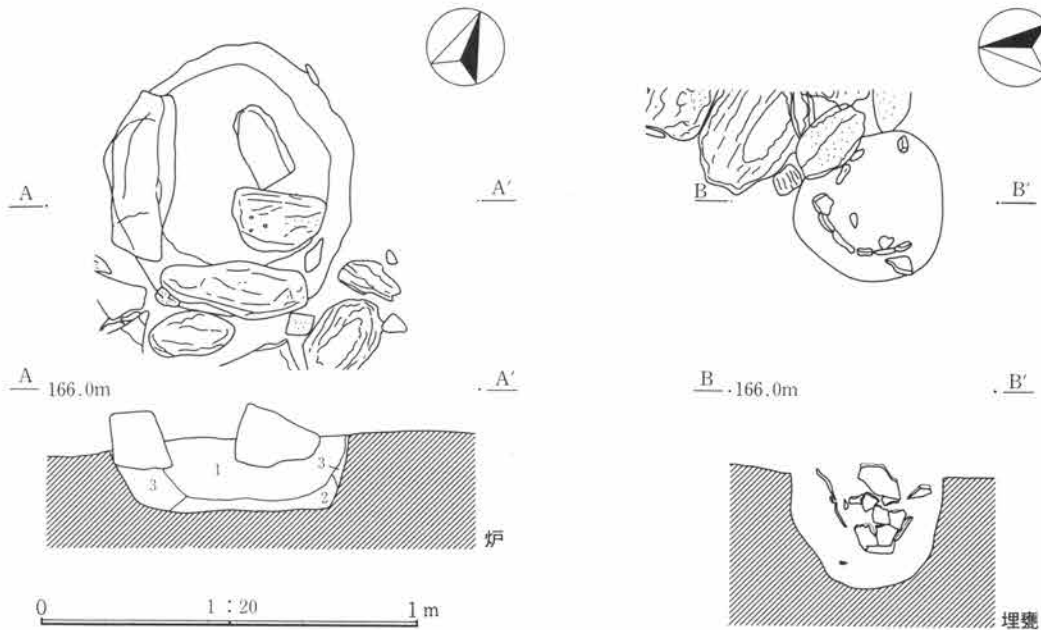
1号配石遺構（第26～32図、PL. 15、105）

位置 Ep・Eq-53・54グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東約66m（炉までの距離）、2号配石遺構の北東約9.5mに位置している。また、東端の廃棄場所からは約50mの所に位置している。

経過 I区（昭和61年度調査区）から検出。6月16日よりI区の調査に入り、26日になって縄文時代の配石遺構もしくは敷石住居跡と考えられる遺構を検出した。その後、周辺の遺構確認作業を行う過程で、中期縄文土器片の出土や、同様な配石遺構の検出により、I区全域に縄文時代中期の遺構群が広がることが予想された。当遺構は8月に入り実測作業に入ったが、この段階では配石遺構なのか敷石住居跡なのか判断に迷った。というのも石の配置が部分的であり、また張出し部に該当する個所が存在しないこと等からである。その後、5号配石遺構の調査所見や当遺構に炉跡と思われる石組の存在と埋甕の検出等から、当遺構は敷石住居跡であり、その残欠と最終的に判断された。このため他遺構の調査にあたっては、敷石住居跡と考えられる遺構についても配石遺構Noを付して調査進行をはかり、最終判断は該当遺構終了時まで持ち越した。

重複 風倒木と重複しているが、当遺構のほうが新しい。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。



第27図 1号配石遺構 炉(左)・埋甕(右)

形状 炉や埋甕の位置から判断して、当遺構は5号配石遺構と同様な円形の敷石住居跡になるものと思われる。敷石を中心とした当住居跡の規模は、現状で長径2m75cm・短径2mで、面積約4㎡である。

敷石状況 炉跡を中心に3個所の敷石が認められる。炉南側で長径120cm・短径95cm、炉と埋甕間で長径80cm・短径60cm、炉北側は長径80cm・短径35cmの範囲である。基本的に炉を中心として石の配置があるが、北東方向には認められない。こうした配置は、5号配石遺構の調査により構築当初からの姿と考えられるが、周囲を囲う石のほとんどは抜き去られたものと思われる。かろうじてそのうちの一点が、炉端から北西1m35cmのところで検出されている。

使用石材 当敷石住居跡は総計56点の石から構成され、9種類の石材が確認された。56点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩29点(51.8%)、輝岩7点(12.5%)、点紋緑泥片岩4点(7.1%)、点紋絹雲母緑泥片岩・砂岩各3点(各5.4%)、緑泥片岩2点(3.6%)、輝緑岩・千枚岩・珪石各1点(各1.8%)であり、不明は5点(8.9%)を数えた。56点中38点(68%)の石が片岩類である。炉石には硬い輝岩が使用され、敷石には絹雲母石墨片岩が一般的に使用されているが、炉南側では板状に加工された長径35cm・短径30cmの砂岩が特徴的に使用されていた。

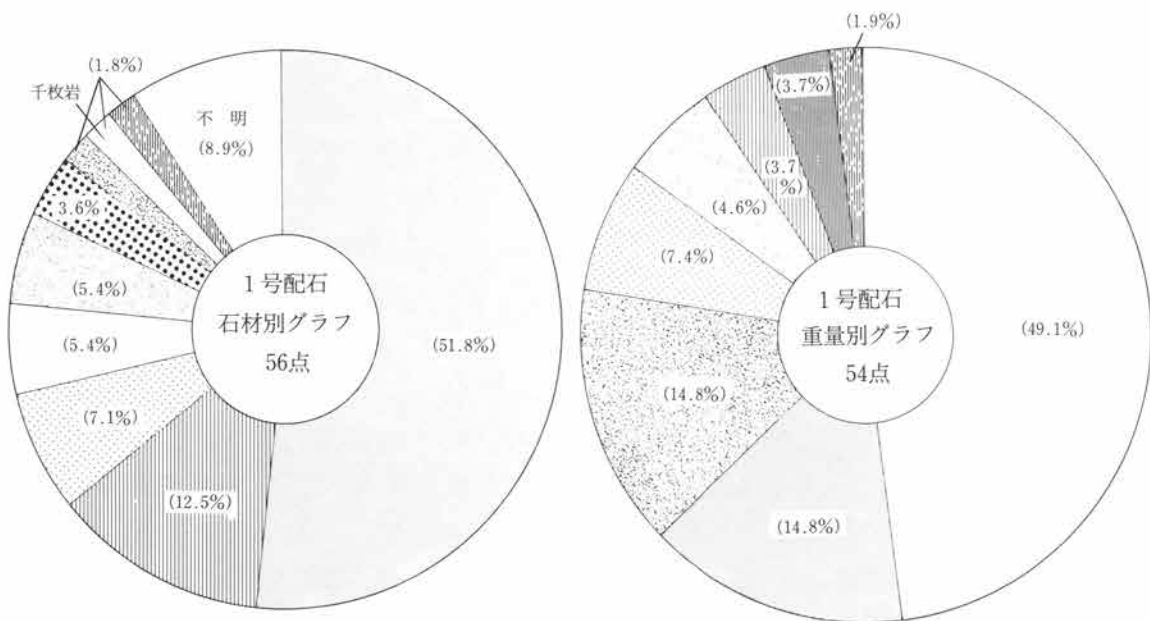
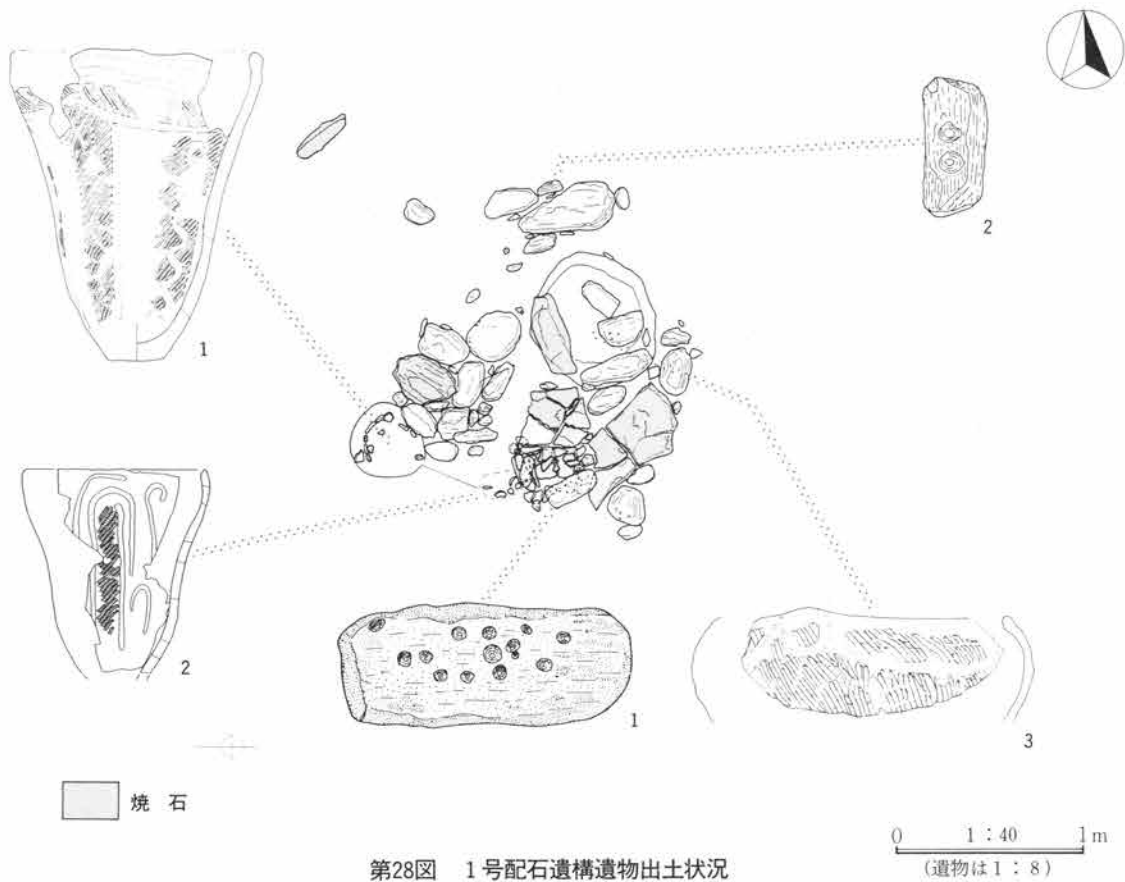
石材重量 重量の判明している石は54点である。その内訳は、500g未満の石26点(48.1%)、1kg～2.5kg未満の石8点(14.8%)、2.5kg～5kg未満の石8点(14.8%)、500g～1kg未満の石4点(7.4%)、5kg～7.5kg未満の石3点(5.6%)、10kg～20kg未満の石2点(3.7%)、20kg～30kg未満の石(3.7%)、7.5kg～10kg未満の石1点(1.9%)である。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来掘り込みはなかったものと思われる。

床面 敷石面は凹凸が認められる。これは大きさ、厚さとも不均一な石が多数使用された結果であろう。

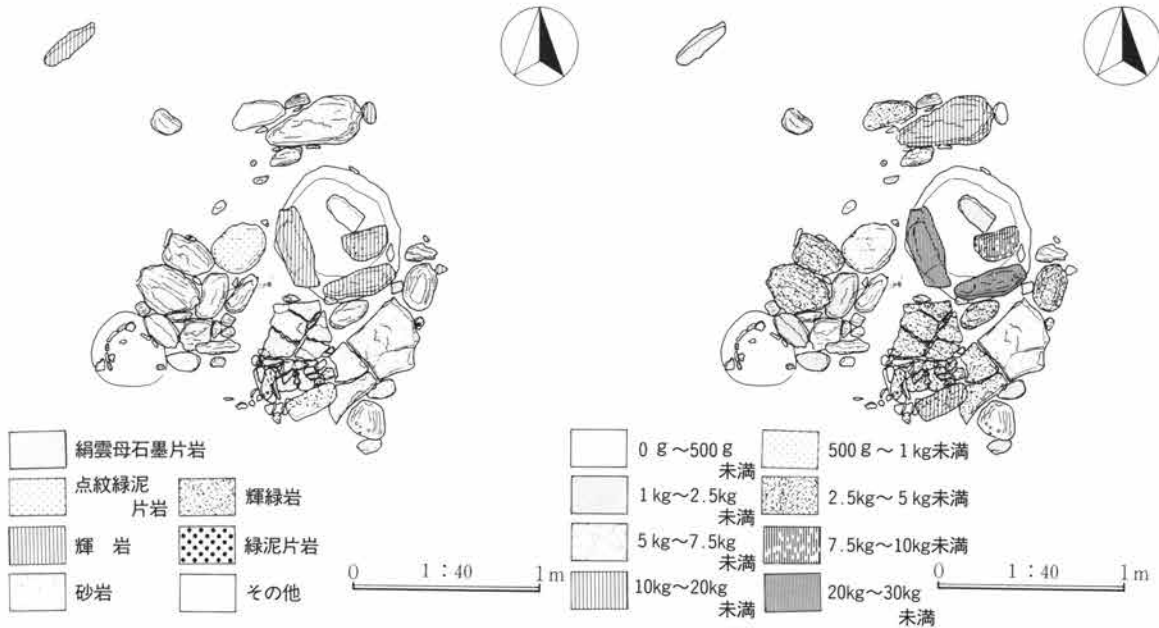
柱穴 検出できなかった。

炉 石囲い炉である。長径72cm・短径65cm・深さ20cmの楕円形を呈している。面積約0.4㎡。炉石は2個で



第29図 1号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

南端・西端に配置され、硬い輝岩が使用されていた。焼土は全く認められなかったが、炭化物が多量に含まれていた。また、覆土中からは加曾利E3式土器の口縁部片が出土している。覆土は3層に分かれた。
 第1層 暗褐色土層 やや固く締めり粘性がある。炭化物粒子を多量に含み、黄褐色粘質土粒子を少量含む。



第30図 1号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・粒子を含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・粒子を多量に含む。

この炉跡の検出によって、当遺構は敷石住居跡であることが判明した。

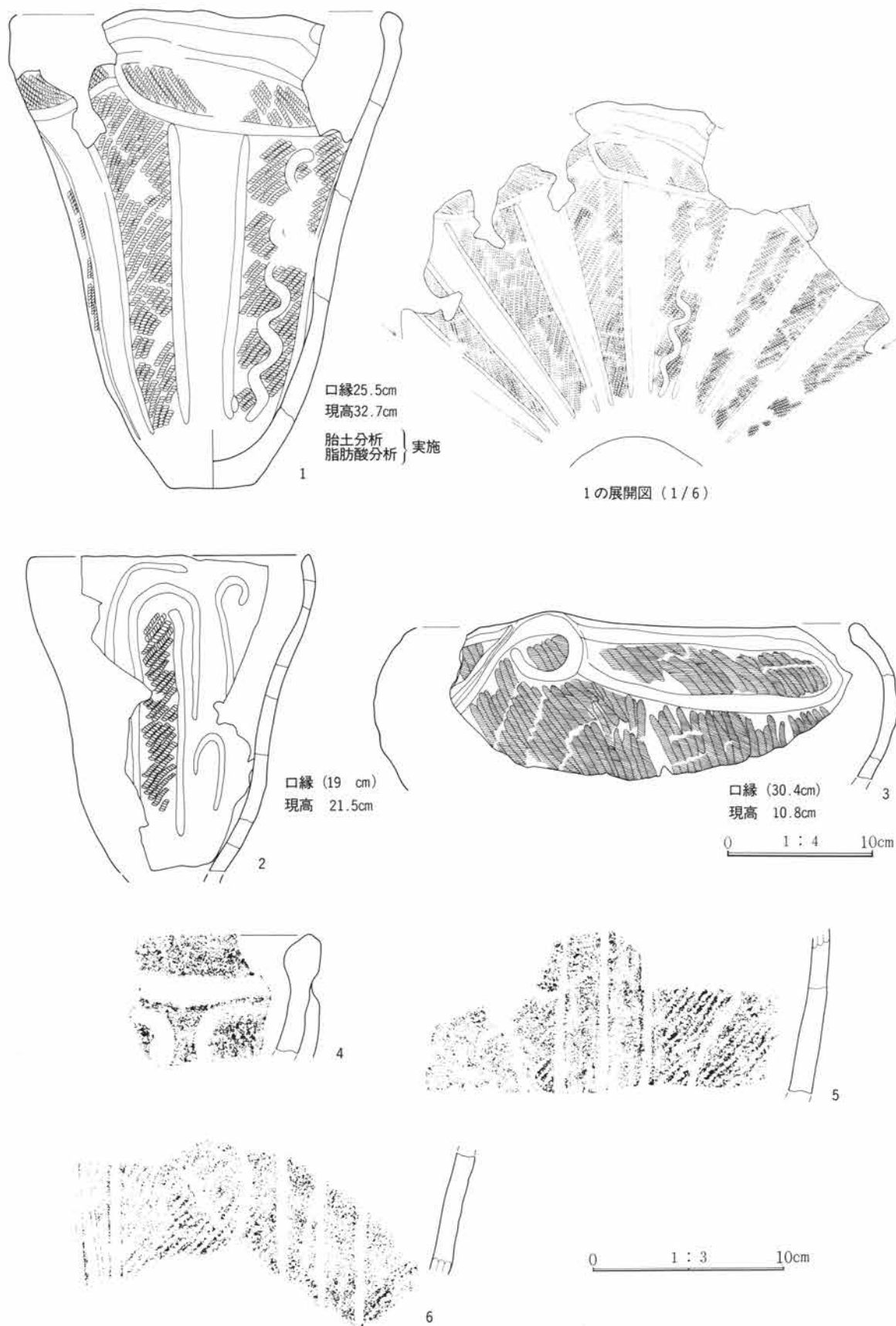
埋甕 加曾利E3式土器の深鉢(口縁部一部欠損)が斜位状態で埋設されていた(第31図1)。埋設ピットは長径42cm・短径40cm・深さ32cmであり、炉端の南西約90cmのところに位置している。埋甕内覆土は暗褐色土層で、やや固く締まり粘性が少しあり、底部ちかくなるにしたがい炭化物を多く含んでいた。

なお、埋甕内・外土壌と埋甕土器片については、残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

張出し部 検出できなかった。構築当初より存在しなかったものと思われる。

遺物出土状況 埋甕の他に口縁部片一点(第31図3)が炉跡内から、深鉢形土器片(第31図2)が敷石上から出土している。いずれも加曾利E3式土器片である。土器の出土は少量であった。石器では多孔石1点が炉南側の敷石として利用され、凹石1点は北の敷石内から検出された。石器含有率は3.6%である。また敷石54点(炉石2点除外)中、焼石は5点で、9%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡と考えられる。構築当初の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。主軸方向はN-62°-E。

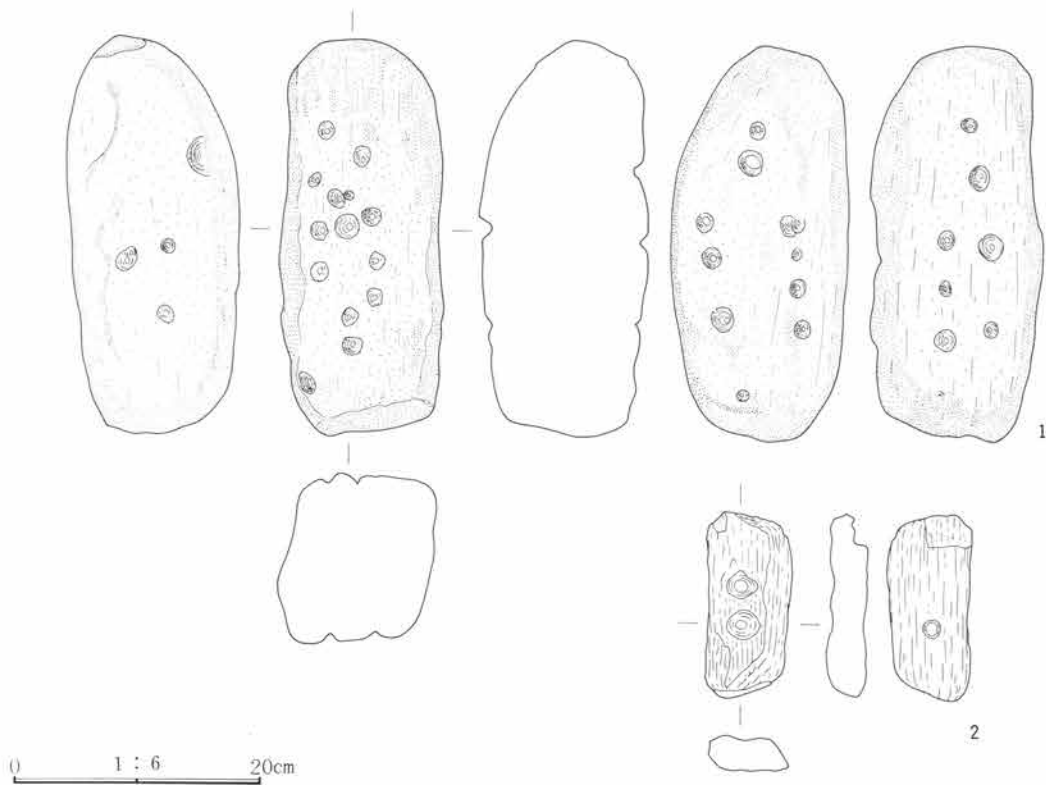


第31図 1号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

1号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|------------------|----------------|-------------------|---|--|--------------|
| 31-1 105 | ほぼ 完形 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部一部欠損。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗褐色。 | 日常煮沸用土器を埋甕に転用。口縁部に幅 広の沈線による楕円の文様が描かれ、R(土 横転がし。胴部にはR(土縦転がし。沈線と 蛇行沈線を垂下。内面の胴下半部に炭化物 が付着している。 | 埋甕 (斜位状態) |
| 31-2 105 | 口縁 ～底 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 小型深鉢形土器の大形破片。器厚5～9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 口縁部はやや内湾する。沈線による文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(土縦転がし。 隣り合う節の傾きが一部異なる。 | 埋甕東側 |
| 31-3 105 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる楕円、渦巻き等の文様が描かれ、縄文 施文。原体はL(土縦転がし。内外面に煤が 付着している。 | 炉内 |
| 31-4 105 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体は磨耗していてわかりにく いがR(土横転がしと思われる。 | 一括 |
| 31-5 6 105 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9～12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 31-5・6は同一個体。縄文施文。 原体はR(土縦転がし。沈線を垂下。 | 一括 |



第32図 1号配石遺構出土石器

1号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|-------------|-------|------|---------|--------------|------|------|--------|--|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 32-1 105 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 31.4 | 13.9 | 13.3 | 10,200 | 全面に凹み。その数は35個で、最大は長22mm、短 20mm、深8mm。最小は長9mm、短8mm、深2mmで、 平均は長15mm、短13mm、深5mm。 | 炉南の敷 石 |
| 32-2 105 | 凹 石 | 完形 | 網雲母石墨片岩 | 14.9 | 7.1 | 3.3 | 490 | 両面に3個の凹みがある。最大の凹みは長26mm、 短23mm、深3mm。最小は長15mm、短13mm、深1mm で、平均は長22mm、短18mm、深2mm。 | 北の敷石 内 |

2号配石遺構 (第33~38図、P.L.16、105)

位置 Er-52・53グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東約56m、1号配石遺構の南西9.5mに位置している。また、東端の廃棄場所からは60mの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。6月後半に入り1号配石遺構とほぼ同時に検出された。当遺構も調査開始段階から配石遺構として考え、調査を進めてきたが、その後の調査進展で炉跡の検出、さらに埋甕の存在等から判断して1号配石遺構と同様に敷石住居跡と考えられるに至った。しかし、その在り方からはかなりの敷石が抜き去られたものと判断される。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために遺構内覆土は認められなかった。

形状 敷石住居跡の残欠のために、全体

規模は不明である。敷石を中心とした規模は、現状で長径1m65cm・短径1m30cmで、面積約2.3m²である。

敷石状況 当敷石住居跡からは総計26点の石が出土している。このうち炉東にある3個の石が部分敷石を構成するものである。以下、計測値と石材を記す。① 長径53cm・短径28.5cm・厚さ8cm・重量22kg、絹雲母緑泥片岩、② 長径38cm・短径35cm・厚さ11cm・重量30kg、絹雲母緑泥片岩、③ 長径40cm・短径35cm・厚さ12.5cm・重量22.7kg、点紋緑泥片岩である。これらの石は部分敷石の残存であろう。他の石は炉覆土中から出土しているもの、埋甕の押さえの石として使用されているものである。

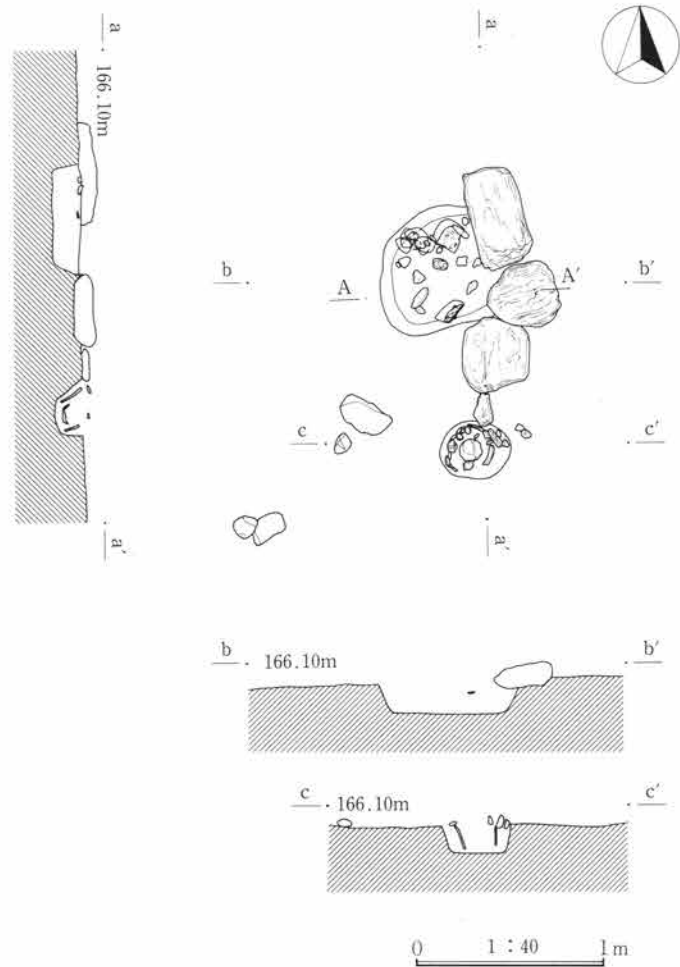
使用石材 8種類の石材が確認された。26点の石材別点数は、点紋緑泥片岩5点(19.2%)、絹雲母石墨片岩4点(15.4%)、絹雲母緑泥片岩3点(11.5%)、輝岩2点(7.7%)、紅簾絹雲母片岩・砂岩・変斑板岩・珪石各1点(各3.8%)であり、不明は8点(30.8%)を数えた。26点中13点(50%)の石が片岩類である。

石材重量 500g未満の石13点(50%)、500g~1kg未満の石4点(15.4%)、1kg~2.5kg未満の石4点(15.4%)、2.5kg~5kg未満の石2点(7.7%)、20kg~30kg未満の石2点(7.7%)、30kg~40kg未満の石1点(3.8%)である。部分敷石はいずれも20kg以上の石が使用されている。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来掘り込みはなかったものと思われる。

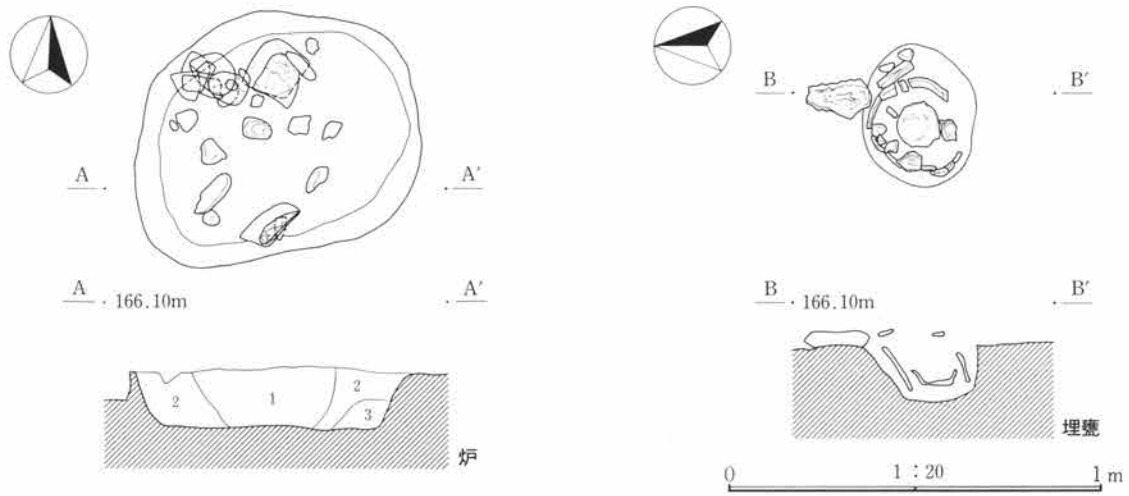
床面 わずかな敷石からの判断ではあるが、凹凸が認められる。

柱穴 検出できなかった。



第33図 2号配石遺構

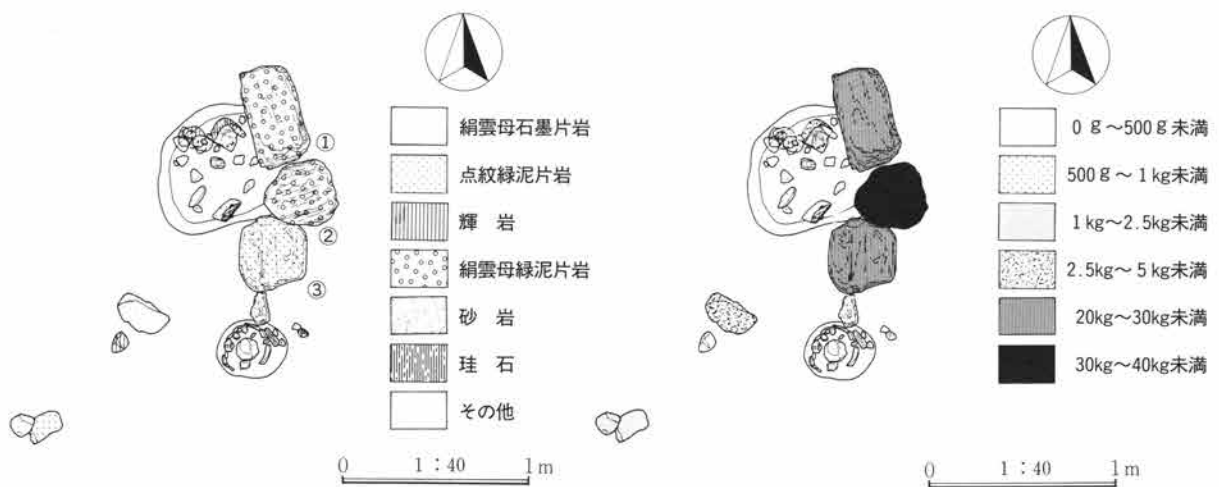
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



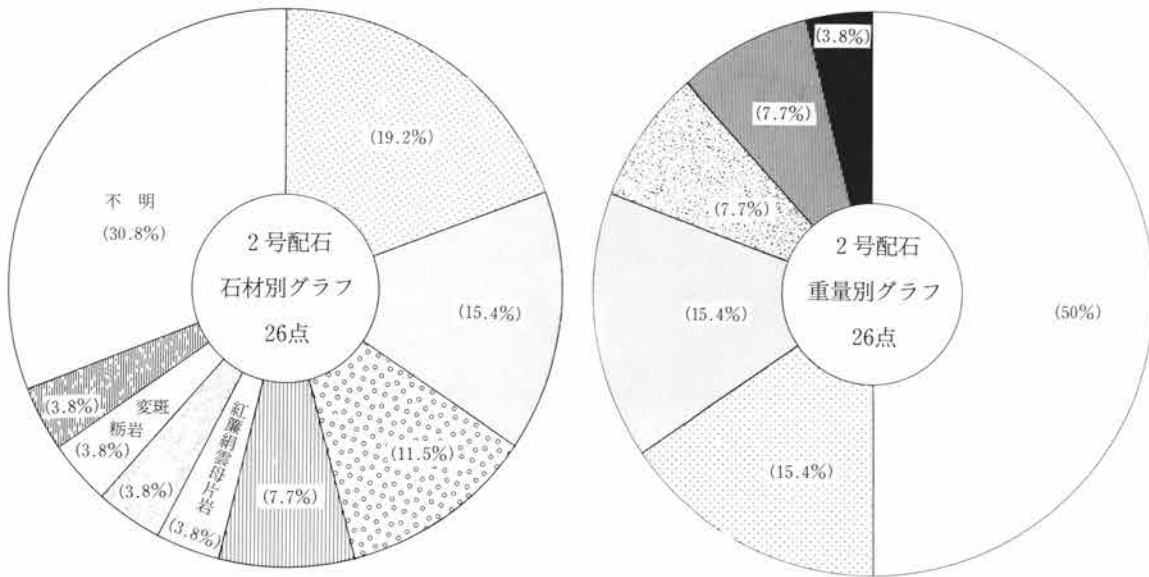
第34図 2号配石遺構 炉 (左)・埋甕 (右)



第35図 2号配石遺構遺物出土状況



第36図 2号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布



第37図 2号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ

炉 地床炉である。長径78cm・短径64cm・深さ15cmの楕円形を呈している。面積約0.4㎡。覆土中からは、土器片等が出土している。覆土は3層に分れたが、焼土・炭化物は含まれていない。

第1層 暗褐色土層 非常に固く締まり粘性が少しある。

第2層 黄褐色土層 非常に固く締まり、粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色粘質土層 非常に固く締まる。

この炉跡の検出によって、当遺構は敷石住居跡であることが判明した。

埋甕 加曾利E 3式土器の深鉢(口縁部と底部欠損)が炉内側に向く斜位状態で埋設されていた(第38図 1)。埋設ピットは長径38cm・短径31cm・深さ15cmであり、炉端の南65cmの所に位置している。埋甕内覆土は暗褐色土層で、黄褐色粘質土ブロック・粒子を含んでいた。また、埋甕内からは、別個体の底部が出土している。

なお、埋甕内・外土壌と埋甕土器片については、残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

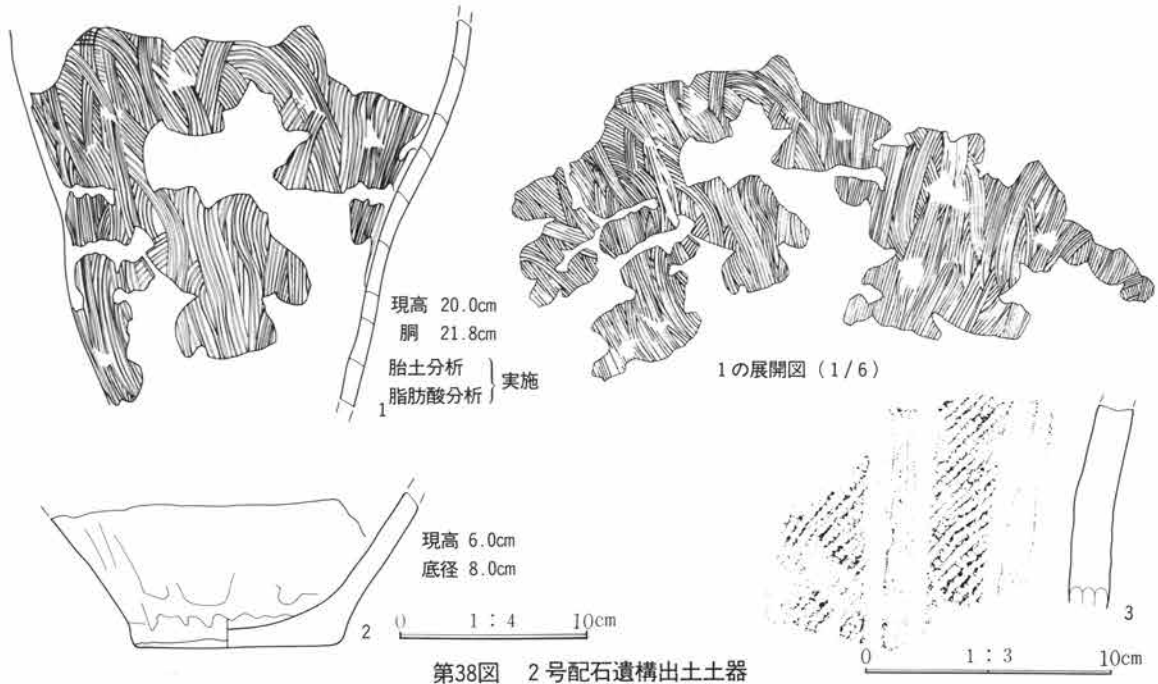
張出し部 検出できなかった。1号配石遺構と同様に構築当初より存在しなかったものであろうか。

遺物出土状況 埋甕の他には炉内から少量の土器片が出土しているだけである。26点の石のなかで焼石は3点で、11.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 3式期の敷石住居跡と考えられる。構築当初

2号配石遺構土器観察表

| 図番 PL | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|-------------|----------------------|-------------------|---|------------------------------------|----------|
| 38-1 105 | 口縁 部と 底部 欠損 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部(口縁部と底部欠損)。器厚10mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調は灰黄褐色、内面は褐灰色。 | 6本1単位とする条線による文様が施されている。 | 埋甕(斜位状態) |
| 38-2 105 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径80mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。外面の色調はにぶい橙色、内面は明褐灰色。 | 土器接合面が磨かれている。 | 埋甕内から出土 |
| 38-3 105 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。内面は粗い調整が行われている。外面の色調は明褐色、内面は赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。沈線を垂下。外面に煤が付着している。 | 敷石北西部 |



第38図 2号配石遺構出土土器

の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。しかし、1・5号配石遺構と異なり、敷石は抜かれたものが多いものと思われる。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。主軸方向はN-6°-W。

5号配石遺構 (第39~46図、PL. 17~19、105・106)

位置 Ff-54・55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西39m (炉までの距離) の所、6号配石遺構に接して構築されている。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。7月中旬に入り石の配置を確認し、周辺を広げ遺構の把握に努めた。下旬までには遺構全体を検出。しかし、東に接して配石遺構 (6号配石遺構) が存在し、この遺構が当遺構と同一遺構を構成するものなのか判断に迷った。9月になり、写真撮影と実測作業を行う過程で、当遺構に石囲い炉と埋甕の存在、この延長線上 (埋甕の北東方向) には張出し部が存在しないことから、当配石遺構は円形の敷石住居跡になるものと判断された。ところで6号配石遺構については、当初は5号配石遺構の張出し部ではないかと思われたが、配石の位置関係から別遺構と判断せざるを得なかった。

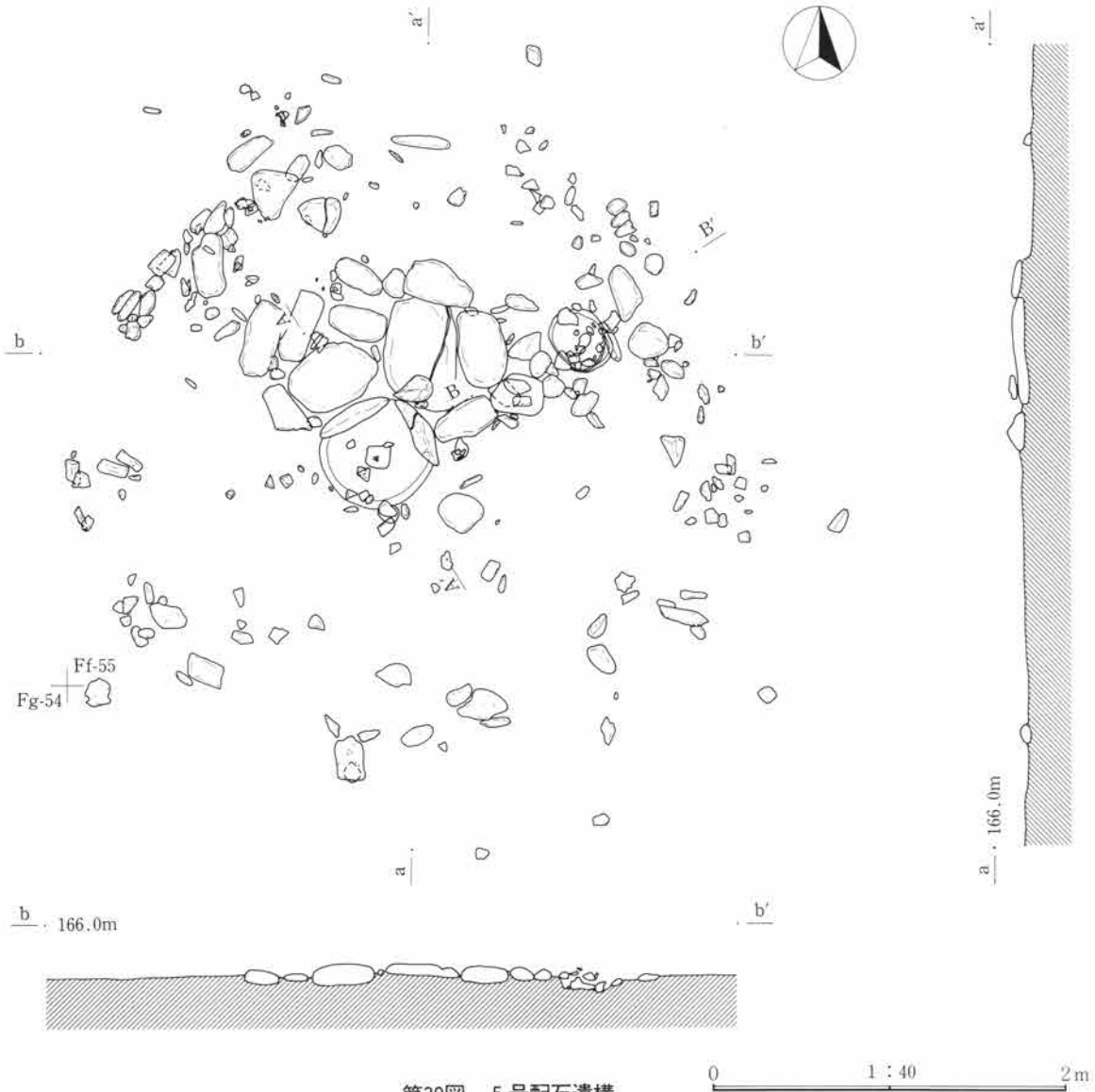
重複 6号配石遺構と接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状 長径3m70cm、短径3m50cmのほぼ円形に石を巡らし、炉北側に部分敷石を施している。その範囲は、長径約150cm、短径約80cmである。1・2号配石遺構が敷石住居跡と判断されたのも、実にこの部分敷石の状況からである。当遺構から圍繞する石を取り除けば、1・2号配石遺構とほぼ同様な遺構となってしまう。住居面積は約11㎡である。

敷石状況 炉北側の敷石を構成している石は12点であり、少量の小石を間隙に詰めている。敷石12点のなかには多孔石1点、焼石6点が含まれていた。また敷石中最大のもは、長径64cm・短径31cm・厚さ6.5cm・重量29.5kgの点紋緑泥片岩である。敷石平均では、長径40cm・短径21.4cm・厚さ5.6cm・重量11.2kgになる。圍繞する石は計127個からなるが、均等には巡っていない。比較的まとまりの良い個所は炉北西の部分と埋甕にほぼ接した個所であり、前者は43個の石、後者は27個の石から構成されている。他の個所はまばらな分布で

3 敷石住居跡〈5号配石遺構〉



第39図 5号配石遺構

あるが、5つのブロックにまとめられる。1ブロック9個、2ブロック11個、3ブロック10個、4ブロック10個、5ブロック13個からなり、約10個程の石でそれぞれ構成されている。これらの石は、炉北側の部分敷石と比べると非常に小形の石が選定されている。最大のもので、長径31cm・短径17.5cm・厚さ8.5cm・重量5.7kgであり、平均では長径11.9cm・短径7.3cm・厚さ3.3cm・重量698gとなる。これらの中には凹石1点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧1点、焼石15点が含まれていた。

使用石材 当敷石住居跡からは総計218点の石が出土し、18種類の石材が確認された。218点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩69点（31.7%）、点紋緑泥片岩23点（10.6%）、輝岩20点（9.2%）、緑泥片岩14点（6.4%）、輝緑岩10点（4.6%）、点紋絹雲母緑泥片岩8点（3.7%）、熱変成岩・珪石各7点（各3.2%）、斑岩5点（2.3%）、絹雲母緑泥片岩・安山岩・絹雲母片岩各3点（各1.4%）、赤色珪質板岩・角閃岩各2点（各0.9%）、点紋絹雲母石墨片岩・紅糜絹雲母石墨片岩・絹雲母脆雲母片岩・流紋岩各1点（各0.5%）であり、不明は37点（17%）を数えた。218点中123点（56.4%）の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は205点である。その内訳は、500g未満の石130点（63.4%）、500g～1kg未満の石29点（14.1%）、1kg～2.5kg未満の石（11.2%）、2.5kg～5kg未満の石11点（5.4%）、5kg～7.5kg未

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

満の石6点(2.9%)、10kg~20kg未満の石2点(1%)、30kg~40kg未満の石2点(1%)、7.5kg~10kg未満の石1点(0.5%)、20kg~30kg未満の石1点(0.5%)である。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来掘り込みはなかったものと思われる。

床面 敷石面は凹凸が認められる。これは大きさ、厚さとも不均一な石が多数使用された結果である。

柱穴 検出できなかった。

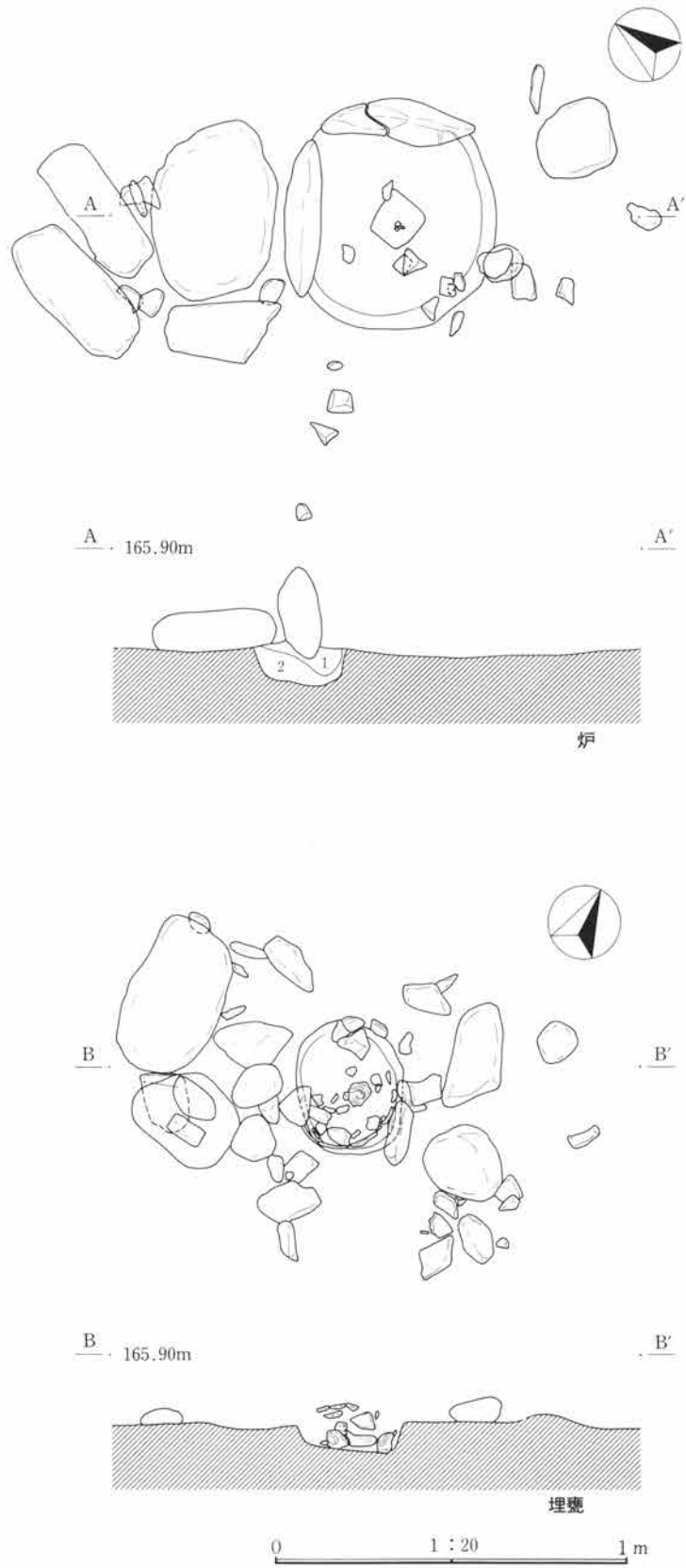
炉 石囲い炉である。長径65cm・短径60cm・深さ5cmのほぼ円形を呈している。面積約0.3m²。炉石は2個で北端と東端に配置され、1号配石遺構と同様に硬い輝岩と輝緑岩が使用されている。このうちの1点は多孔石が利用されていた。覆土には焼土は全く含まれていなかった。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。黄褐色粘質土粒子を含む。

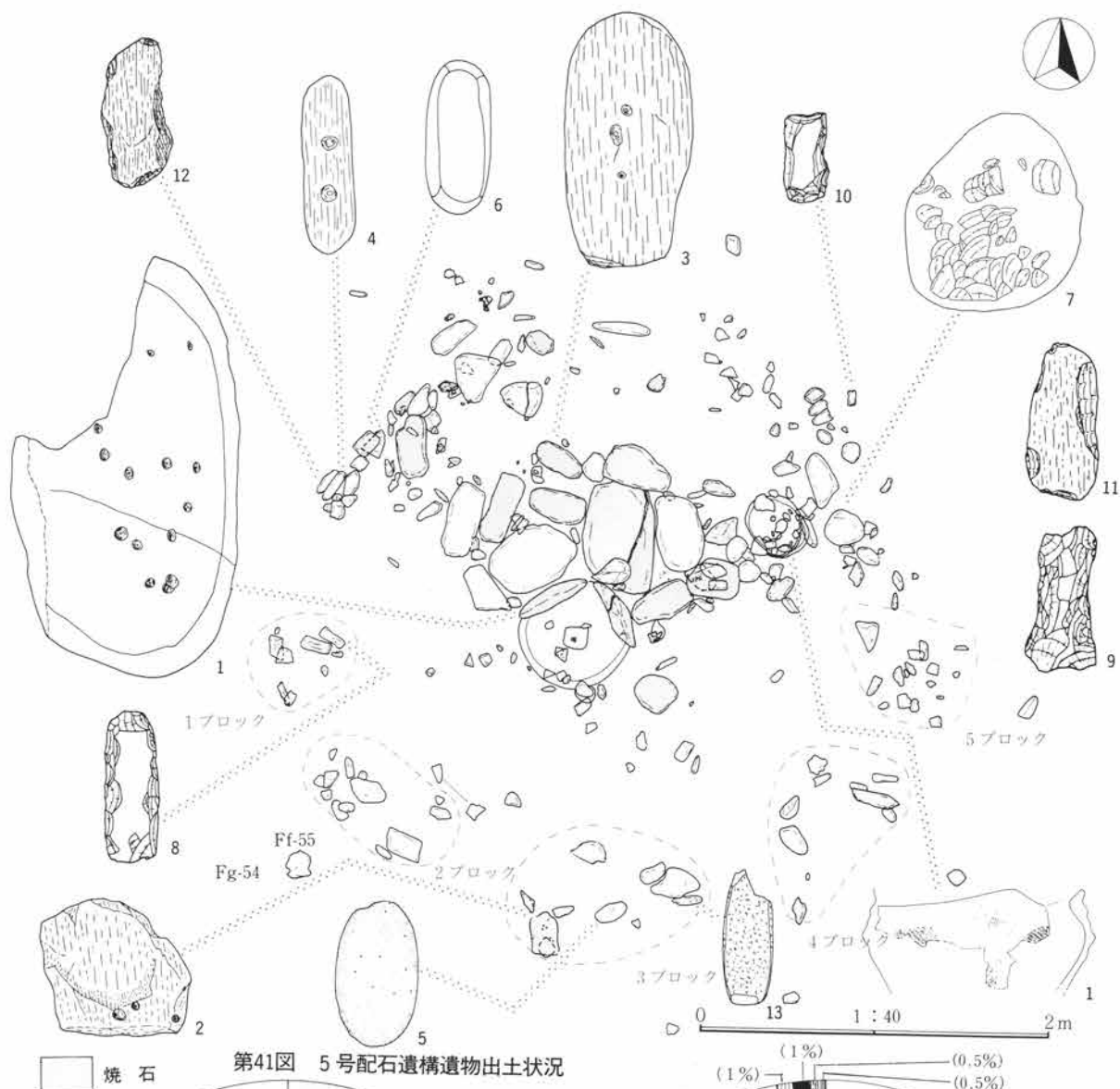
第2層 暗褐色土層 やや固く締めり粘性がある。極少量の炭化物粒子を含む。

第3層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。炉石固定のための人為的埋土。

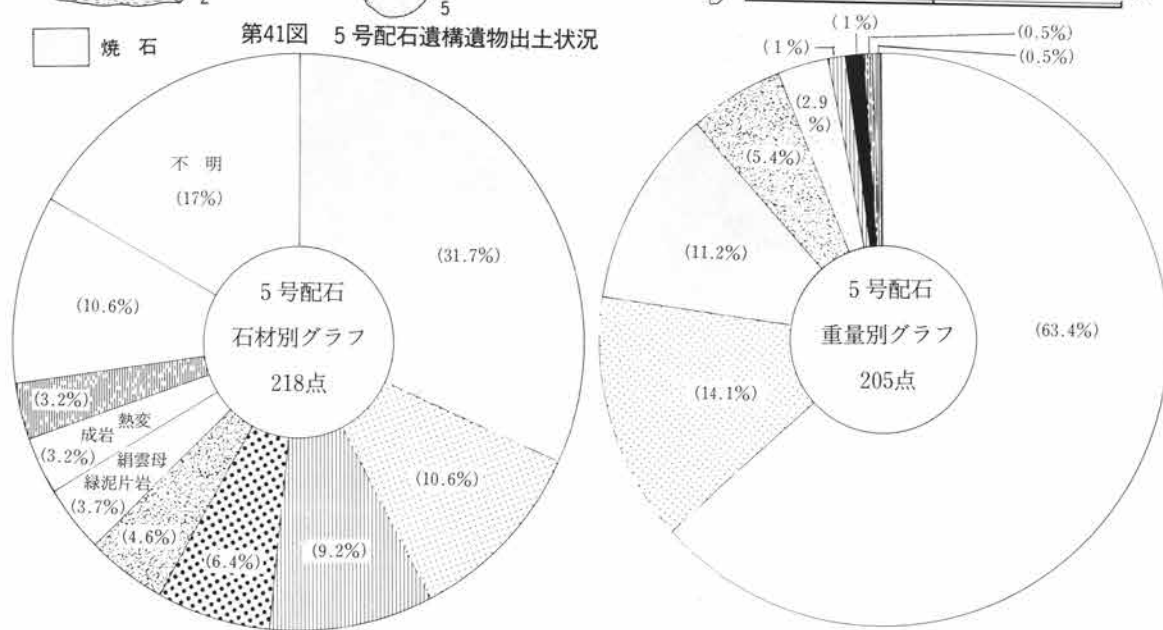
埋甕 加曽利E3式土器の深鉢(胴部欠損)が逆位状態で埋設されていた(第44図1)。埋設ピットは長径37cm・短径30cm・深さ10cmであり、炉端の北東約1mの所に位置している。埋設ピット覆土は黒褐色土層でやや固く締めり粘性がある。黄褐色粘質土粒子・炭化物粒子を含んでいた。埋甕は18個の石で周囲を囲われている。埋甕内覆土は暗褐色土層であり、やや固く締めり粘性が非常にある。炭化物粒子・黄褐色粘質土粒子を極少量含む。



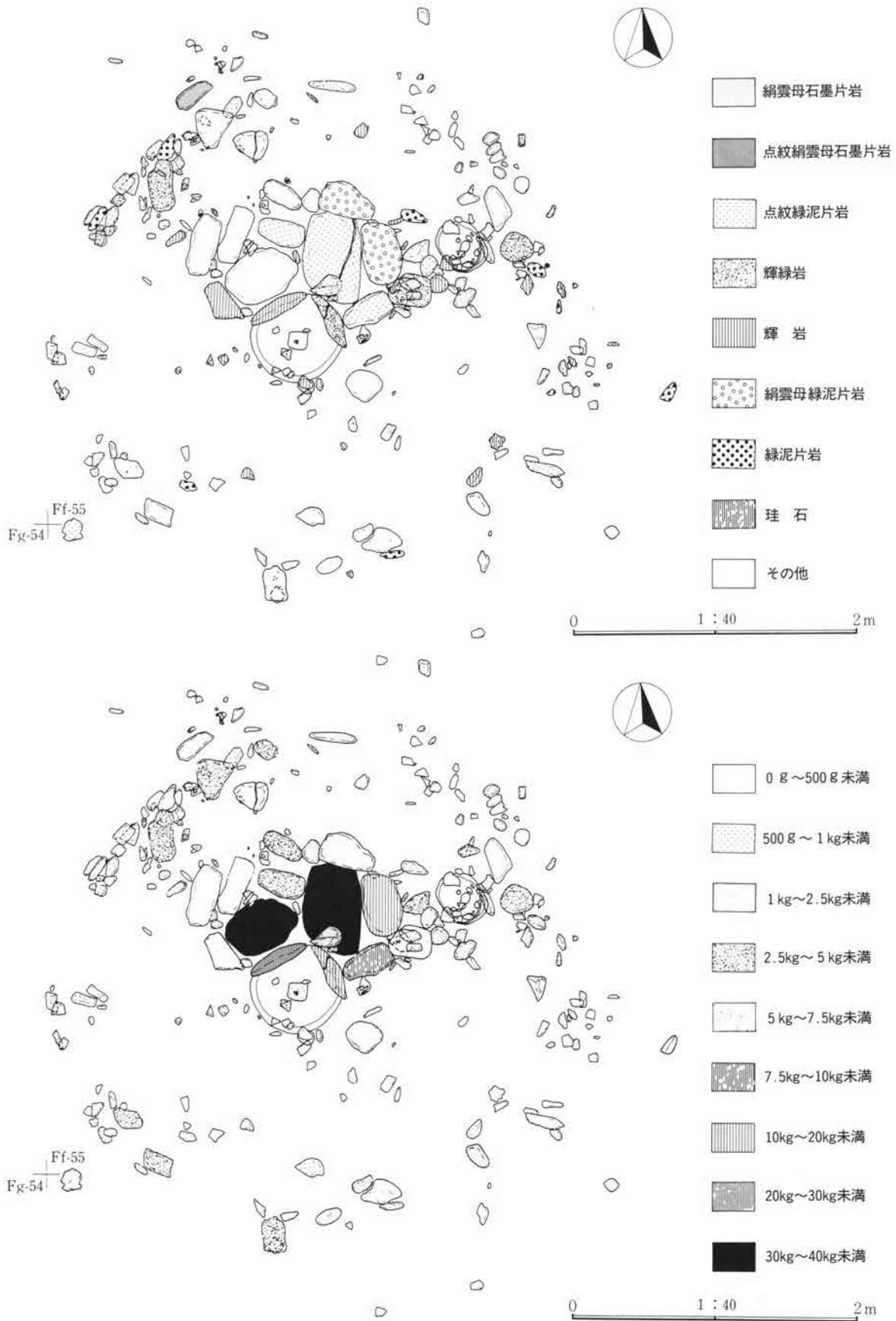
第40図 5号配石遺構 炉(上)・埋甕(下)



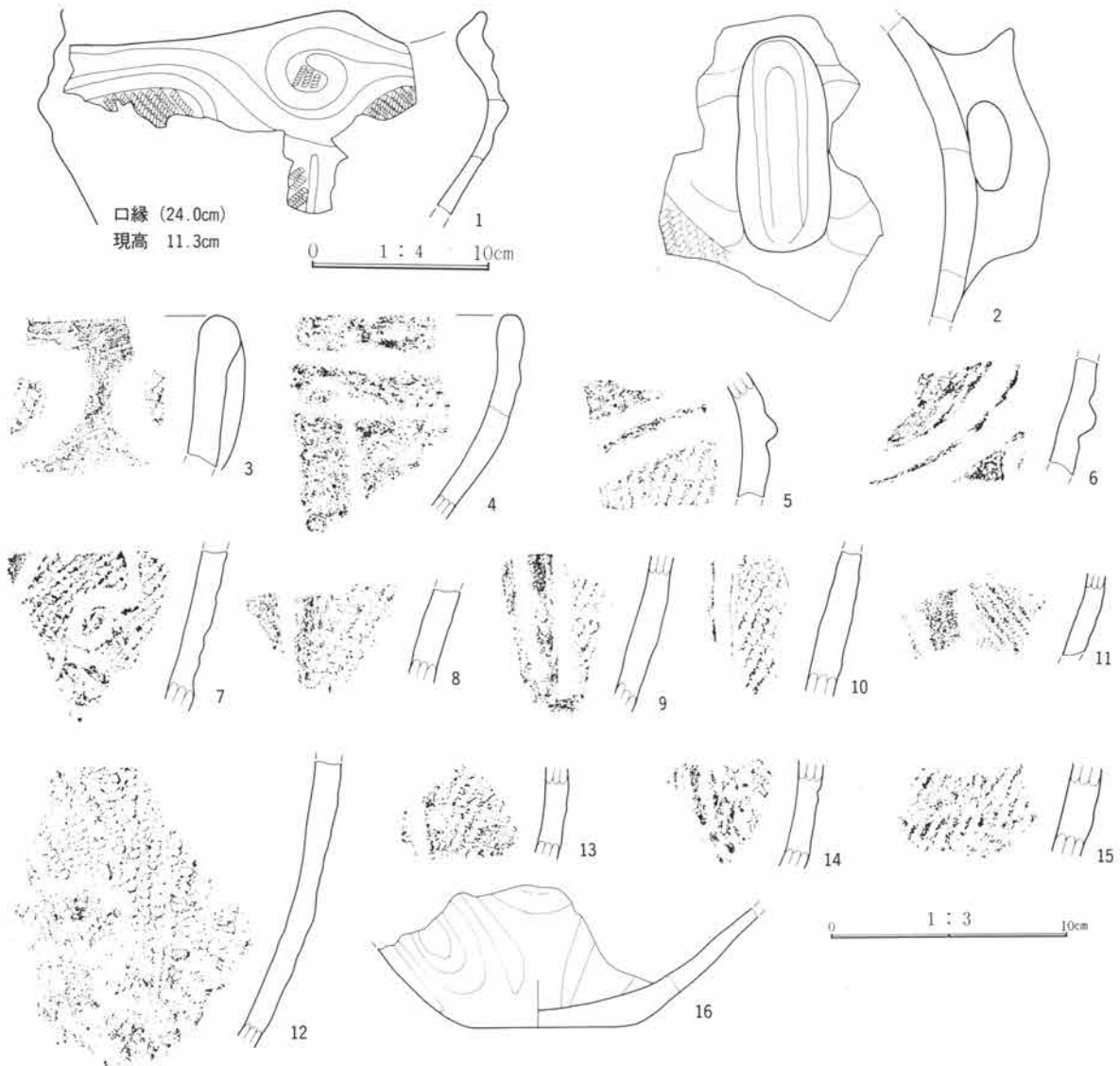
第41図 5号配石遺構遺物出土状況



第42図 5号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第43図 5号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布



第44図 5号配石遺構出土土器

張出し部 検出できなかった。構築当初より存在しなかったものと思われる。調査段階では6号配石遺構が張出し部に該当するのではないかと考えたが、炉と埋甕の延長線上（埋甕北東方向）には敷石は存在せず、6号配石遺構は別種遺構と判断されるに至った。

遺物出土状況 埋甕の他には炉周辺と圍繞する石に混じって加曾利E3式土器片を主体に、E4式土器片も若干出土している。口縁部10点、胴部21点、底部1点の計32点の出土は少量であった。石器では圍繞する石のなかから、多孔石1点、凹石1点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧1点が検出され、また炉石と部分敷石に多孔石がそれぞれ1点ずつ使用されていた。石器含有率は6%である。焼石は32点で、14.7%を占めていた。

所見 当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形敷石住居跡と考えられる。炉を中心とした小範囲に部分敷石を施し、周囲に石を円形配置したものであるが、バラツキが認められる。当遺構は1・2号配石遺構の構築当初の姿になるものと思われる。主軸方向はN-119°-W。

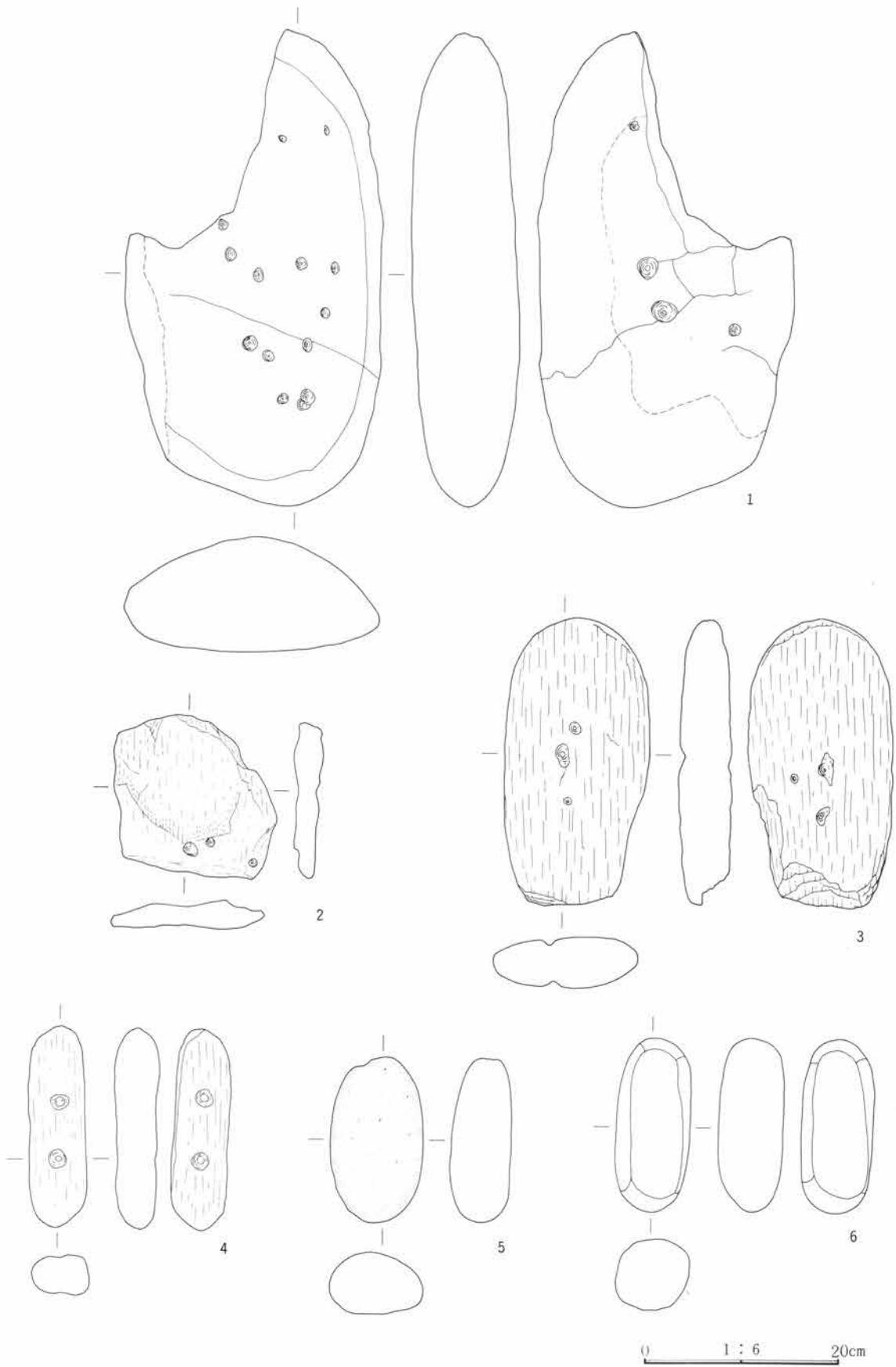
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

5号配石遺構土器観察表

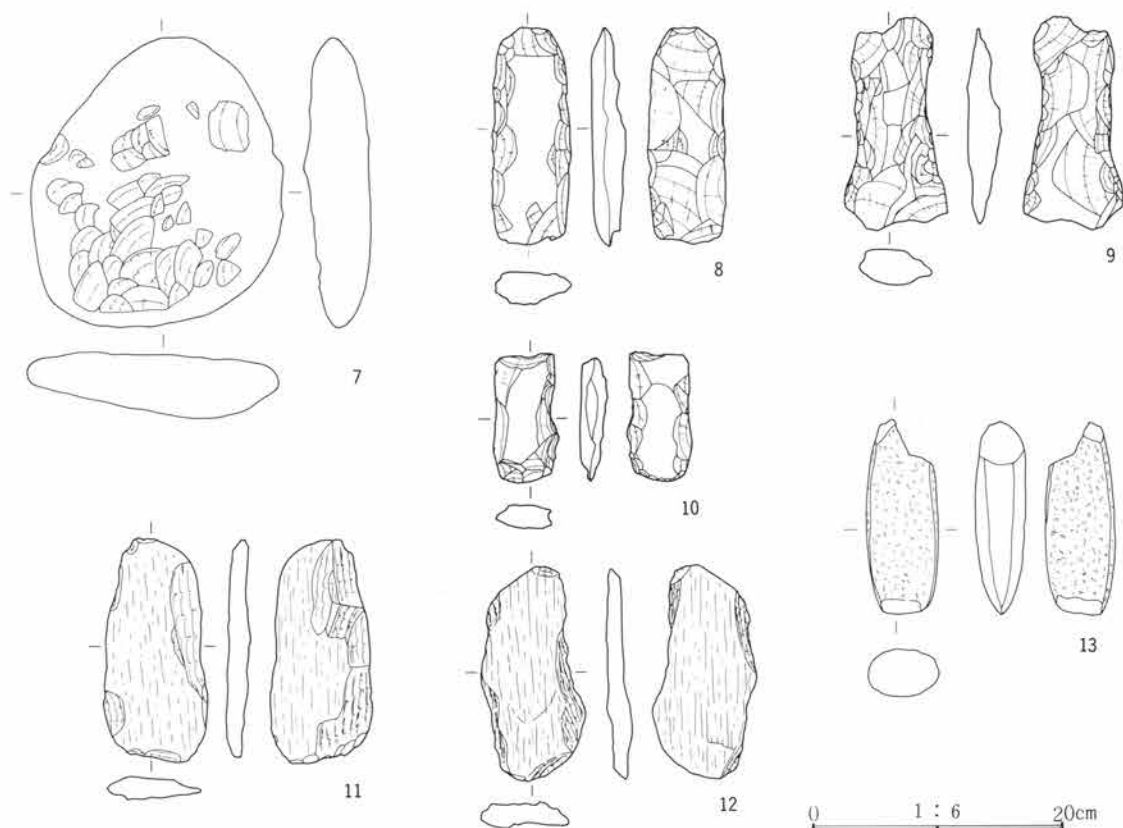
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|------|--------------------|---|---|--------------|
| 44-1 105 | 口縁部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部 (胴部欠損)。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 口縁部は内湾し、突起を有する。口縁部に隆帯と沈線による渦巻き、楕円等の文様が描かれ、R $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 横位。胴部はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 縦位。沈線を垂下。外面に煤が付着している。 | 埋甕 (逆位状態) |
| 44-2 105 | 把手 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 把手の破片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 。 | 敷石中心部 |
| 44-3 105 | 口縁部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は褐色。 | 口縁部は沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 横転がし。 | 敷石東南部 |
| 44-4 105 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に1条の沈線を巡らせ、縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 縦転がし。 | 敷石縁石内 |
| 44-5 105 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は赤褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 横転がし。 | 敷石縁石内 |
| 44-6 105 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 横転がし。 外面に煤が付着している。 | 一括 |
| 44-7 105 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 縦転がし。沈線による文様が描かれている。 外面に煤が付着している。 | 敷石縁石内 |
| 44-8 105 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は橙色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ (0段多条) 縦転がし。沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 敷石西部 |
| 44-9 105 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 縦転がし。 沈線を垂下。 | 敷石西部 |
| 44-10 105 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 一括 |
| 44-11 105 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 縦転がし。 沈線を垂下している。 | 一括 |
| 44-12 105 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 斜め転がし。 土器面は柔軟。 | 敷石南西部 |
| 44-13 105 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ (0段多条) 縦転がし。沈線が施されている。 | 一括 |
| 44-14 105 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 刺突が施されている。 | 敷石南西部 |
| 44-15 105 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} \uparrow \\ \downarrow \end{array} \right.$ 横転がし。 | 一括 |
| 44-16 105 | 底部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径73mm。 内面は荒れている。 外面の色調は赤褐色、内面は黄褐色。 | 沈線による文様が描かれている。内外面とも荒れており、内面に煤が付着している。 | 敷石南西部 |

5号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|-------------|-----|------|---------|--------------|------|------|----------|---|---------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 45-1 105 | 多孔石 | 1/4 | 輝岩 | 47.8 | 25.8 | 11.5 | (18,000) | 両面に17個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深2mm。最小は長10mm、短7mm、深4mmで、平均は長14mm、短9mm、深4mm。一部被熱。 | 炉石 |
| 45-2 105 | 多孔石 | 1/4 | 絹雲母石墨片岩 | (16.3) | 16.8 | 3.1 | (1,000) | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長16mm、短13.5mm、深3mm。最小は長9mm、短8.5mm、深1mmで、平均は長12mm、短10mm、深3mm。全面焼。 | 緑石 (3プロック) |



第45図 5号配石遺構出土石器(1)



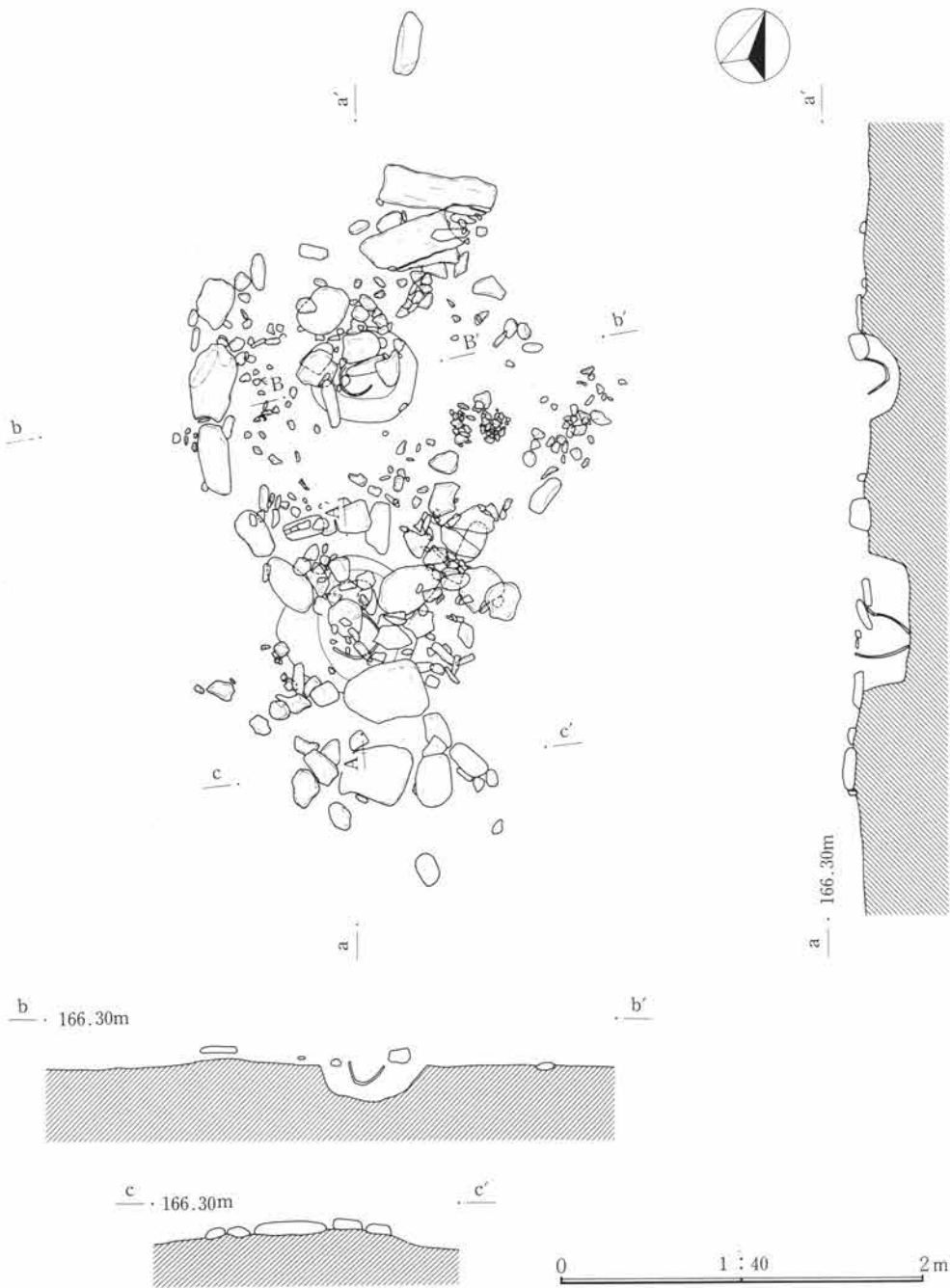
第46図 5号配石遺構出土石器(2)

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|--------------|------|-----|-------|---|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 45-3 105 | 多孔石 | ほぼ完形 | 絹雲母石墨片岩 | 28.8 | 14.9 | 5.3 | 3,500 | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長22mm、短13mm、深4mm。最小は長8mm、短7mm、深3mmで、平均は長13mm、短10mm、深4mm。 | 部分敷石 |
| 45-4 105 | 凹石 | 完形 | 緑泥片岩 | 20.5 | 6.2 | 4.2 | 1,000 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長19mm、短19mm、深3mm。最小は長18mm、短16mm、深1mmで、平均は長19mm、短17mm、深2mm。 | 縁石 |
| 45-5 105 | 磨石 | 完形 | 安山岩 | 16.9 | 9.5 | 6.3 | 1,600 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 縁石 |
| 45-6 105 | 磨石 | 完形 | 流紋岩 | 17.4 | 7.7 | 7.1 | 1,250 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 縁石 |
| 46-7 106 | 台石 | 完形 | 輝緑岩 | 23.4 | 20.0 | 5.3 | 3,600 | | 埋塞近く |
| 46-8 106 | 打製石斧 | 完形 | 安山岩 | 17.2 | 6.3 | 2.7 | 367 | 短冊(III)。片面に大きく自然面残す。 | 1ブロック |
| 46-9 106 | 打製石斧 | 一部欠損 | 熱変成岩 | (16.9) | 8.0 | 2.8 | (325) | バチ(IIa)。刃部付近の左側刃欠損。 | 一括 |
| 46-10 106 | 打製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (10.3) | 5.3 | 2.2 | (155) | 短冊(III)。一側がわずかに内湾。 | 縁石 |
| 46-11 106 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 17.7 | 8.4 | 1.8 | 335 | バチ(IIa)。 | 一括 |
| 46-12 106 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 16.9 | 8.3 | 2.1 | 280 | バチ(IIb?)。調整の頻度少なく未成品の可能性。 | 縁石 |
| 46-13 106 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 緑泥片岩 | (15.4) | 5.7 | 4.0 | (530) | 磨き段階。両面かなりの部分に敲打痕残す。 | 縁石 |

8号配石遺構(第47~55図、PL. 20~25、106)

位置 Fj-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東25m(炉までの距離)、列石からは7m50cmの所、7号配石遺構の北東にほぼ接するように構築されている。

3 敷石住居跡〈8号配石遺構〉



第47図 8号配石遺構

経過 I区（昭和61年度調査区）から検出。9月下旬に遺構の一部を確認し、10月に入り周辺を掘り下げ全体を把握した。遺構上面から多量の土器片と石が出土し、何らかの祭祀遺構ではないかと思われた。その後、1/10の図面を作成し、遺物を取り上げる過程で、ようやく敷石住居跡として理解できるようになった。規模の小さい柄鏡形敷石住居である。最終敷石面の実測終了後、総ての石を取り上げ、石材分類、計測、重量の測定等を実施した。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状 柄鏡形を呈している。主体部は長径2 m40cm、短径2 m30cmのほぼ円形を呈し、張出し部は長径1 m55

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

cm、短径1m10cmである。主体部の面積は約4㎡、張出し部の面積は約0.7㎡であり、総計約4.7㎡になる。
敷石状況 張出し部では明瞭な敷石が認められる。3個の石を配置し周囲に押さえの石を配置したものである。3個の石の最大は、長径45cm・短径31.5cm・厚さ7cm・重量15.5kgの点紋石墨緑泥片岩である。主体部の敷石は炉北西部分に若干の敷石が認められるが、内部にはほとんど敷石は施されていない。縁石は主体部北から西にかけて認められるが、東部分は存在しない。ただし縁石下の小石が存在することから判断して、当初縁石は存在していたものであろう。縁石の大きさの平均は、長径33.3cm・短径19.8cm・厚さ4.6cm・重量4.1kgである。

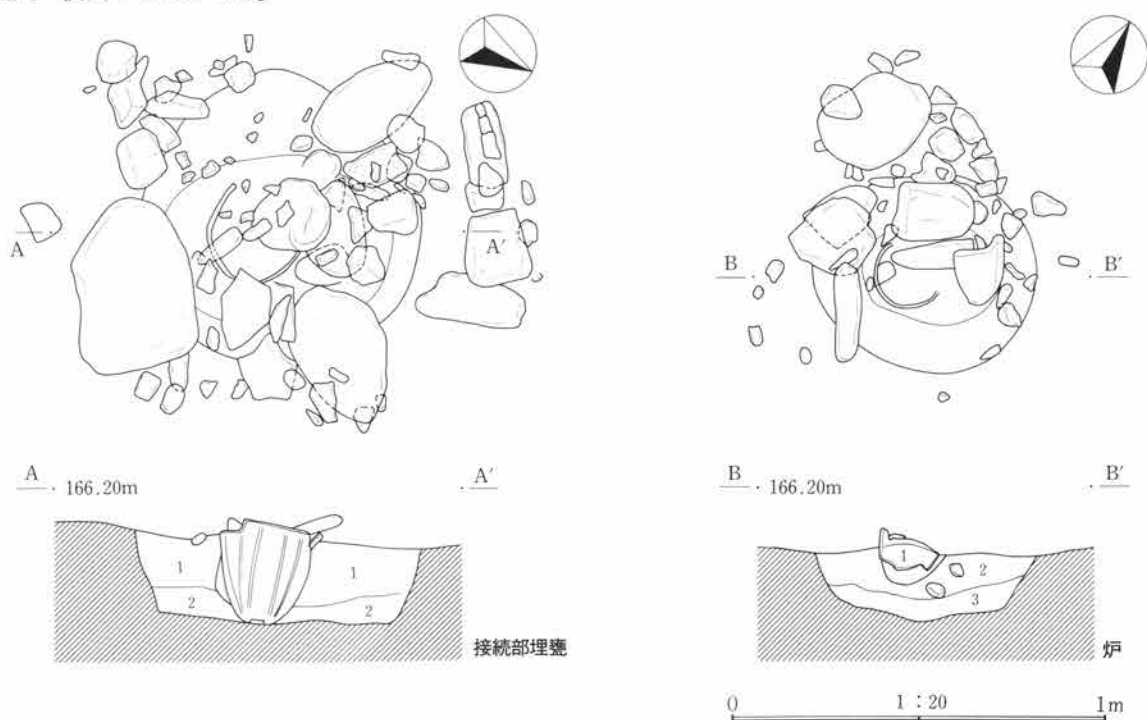
使用石材 32種類の石材が確認された。270点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩107点(39.6%)、輝岩20点(7.4%)、点紋緑泥片岩19点(7%)、緑泥片岩18点(6.7%)、輝緑岩12点(4.4%)、珪石6点(2.2%)、砂岩5点(1.9%)、点紋石墨緑泥片岩・脆雲母石墨片岩各4点(各1.5%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩各3点(各1.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩・安山岩・絹雲母片岩・紅簾片岩・紅簾絹雲母石墨片岩各2点(各0.7%)、斑斕岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・石墨片岩・緑泥石墨片岩・絹雲母脆雲母片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・角閃岩・綠色珪質板岩・頁岩・千枚岩・絹雲母脆雲母片岩各1点(各0.4%)であり、不明は39点(14.4%)を数えた。270点中179点(66.3%)の石は片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は246点である。その内訳は、500g未満の石184点(74.8%)、500g～1kg未満の石27点(11%)、1kg～2.5kg未満の石17点(6.9%)、2.5kg～5kg未満の石13点(5.3%)、5kg～7.5kg未満の石2点(0.8%)、10kg～20kg未満の石2点(0.8%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.4%)である。

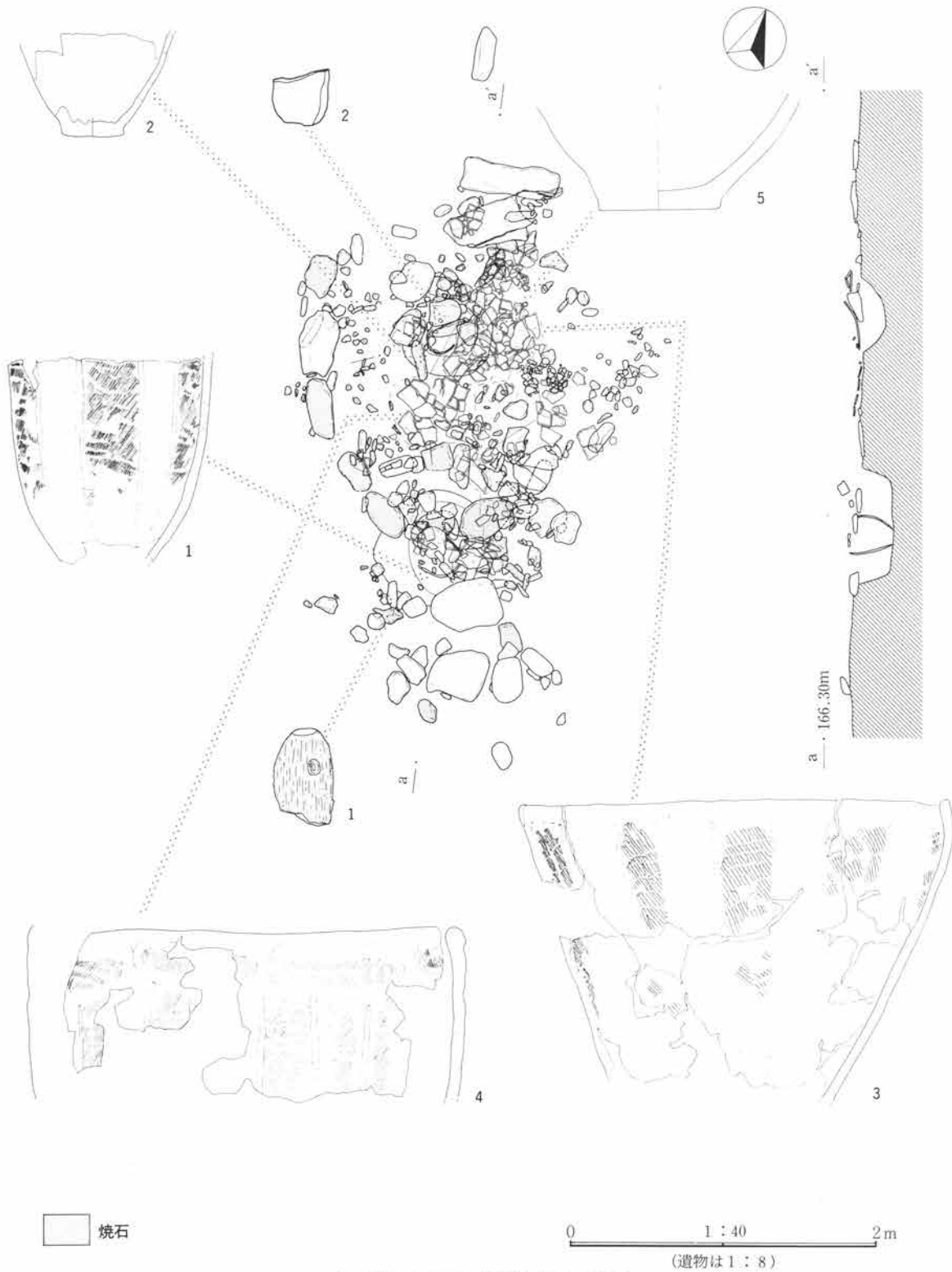
壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来ほとんど掘り込みはなかったものと思われる。

床面 ほぼ平坦であるが、張出し部より若干低くなっている。

柱穴 検出できなかった。



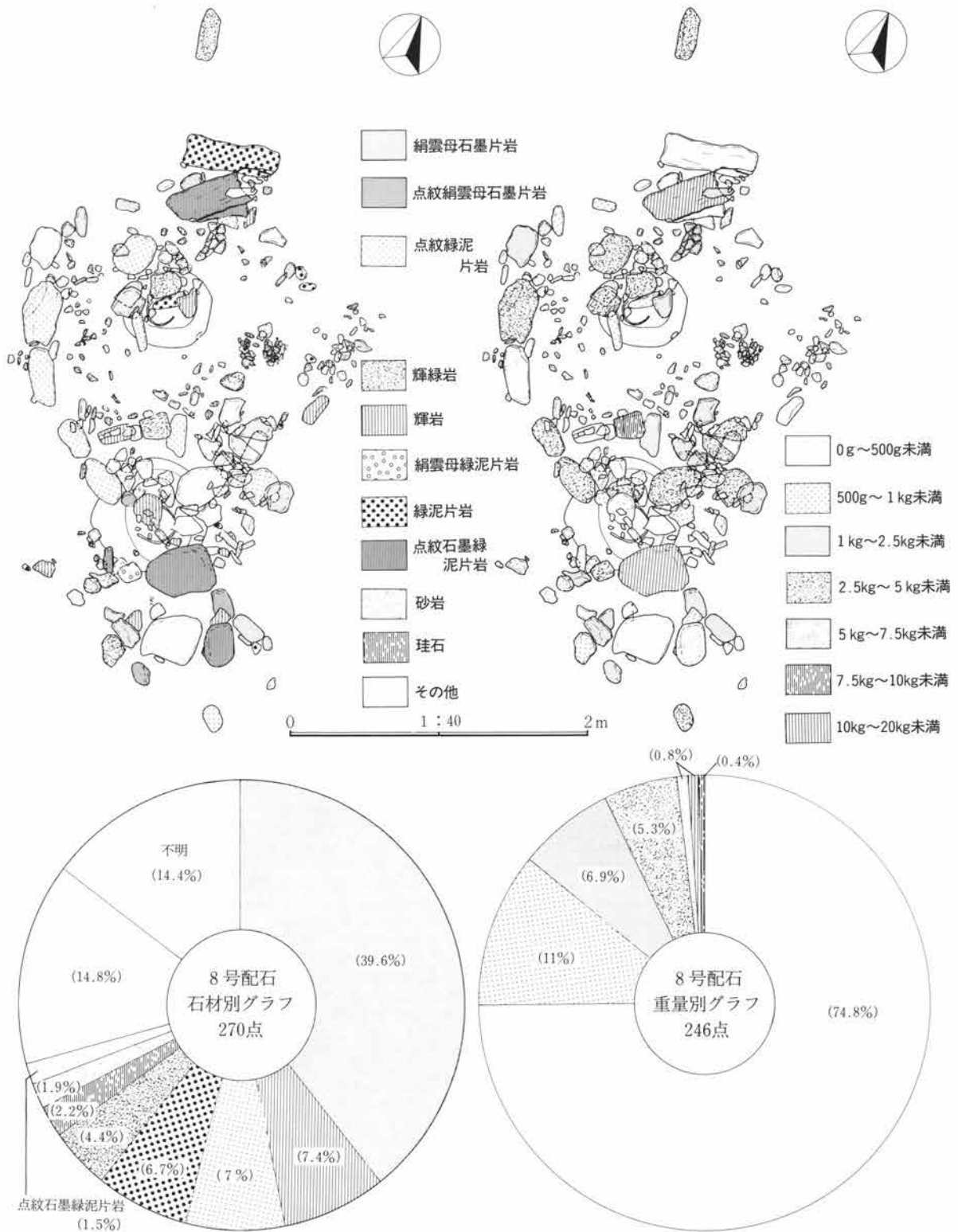
第48図 8号配石遺構 接続部埋壺(左)・炉(右)



第49図 8号配石遺構遺物出土状況

炉 石囲い炉で、炉体土器（第51図 2）を伴っている。炉の規模は長径60cm・短径53cm・深さ20cmの楕円形を呈し、面積約0.24㎡である。炉石は3個で東端・西端・北端に配置され、緑泥片岩・点紋緑泥片岩・輝緑岩が使用されていた。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が少しある（炉体土器の覆土）。



第50図 8号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布とグラフ

第2層 黒褐色土層 やわらかくて締まり、粘性がある。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性がある。小石を多量に含む。人為的埋土。

炉体土器は底部を使用して、炉内におかれているが押さえのための小石も存在していた。

埋甕 主体部と張出し部の接続部に加曾利E 4式土器の深鉢（口縁部と底部欠損）が斜位状態で埋設されて

3 敷石住居跡〈8号配石遺構〉

いた(第51図 1)。埋設土壌は長径75cm・短径70cm・深さ27cmのほぼ円形を呈し、面積0.43m²である。炉端の南1m20cmのところに位置している。覆土は3層に分かれた。いずれも人為的埋土である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。小石を含む。

第2層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。黄褐色土ブロックを多量に含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくてサラサラしている。

埋甕には扁平な蓋石が伴い、埋甕の東側にずり落ちていた。この蓋石は長径18cm・短径15cm・厚さ2cm・重量650gの脆雲母石墨片岩を使用している。埋甕内・外土壌と埋甕土器片については、残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

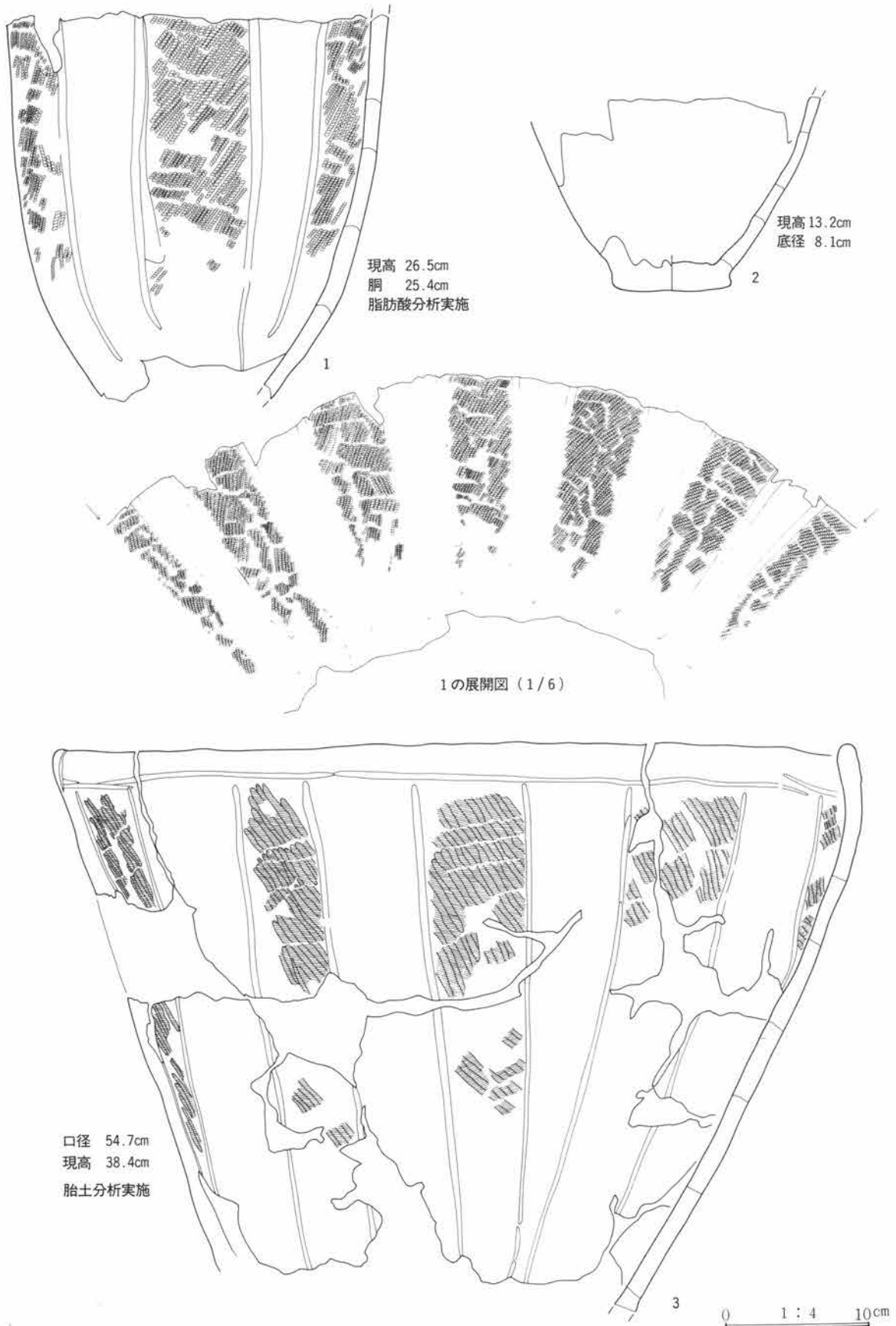
遺物出土状況 炉体土器と埋甕のほかには、炉東から胴下部欠損の大型土器(加曾利E4式)、炉南から胴下部欠損の大型土器片(加曾利E3式)が出土し、このほかに口縁部21点、胴部184点、底部3点の計208点の土器片が出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も含まれていた。石器では凹石1点、打製石斧1点が出土しているが、石器含有率は0.7%と少ない。また焼石は270点中46点の出土で、17%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の小規模な柄鏡形敷石住居跡である。環状列石に近接して構築されている。主軸方向はN-20°-W。

8号配石遺構土器観察表

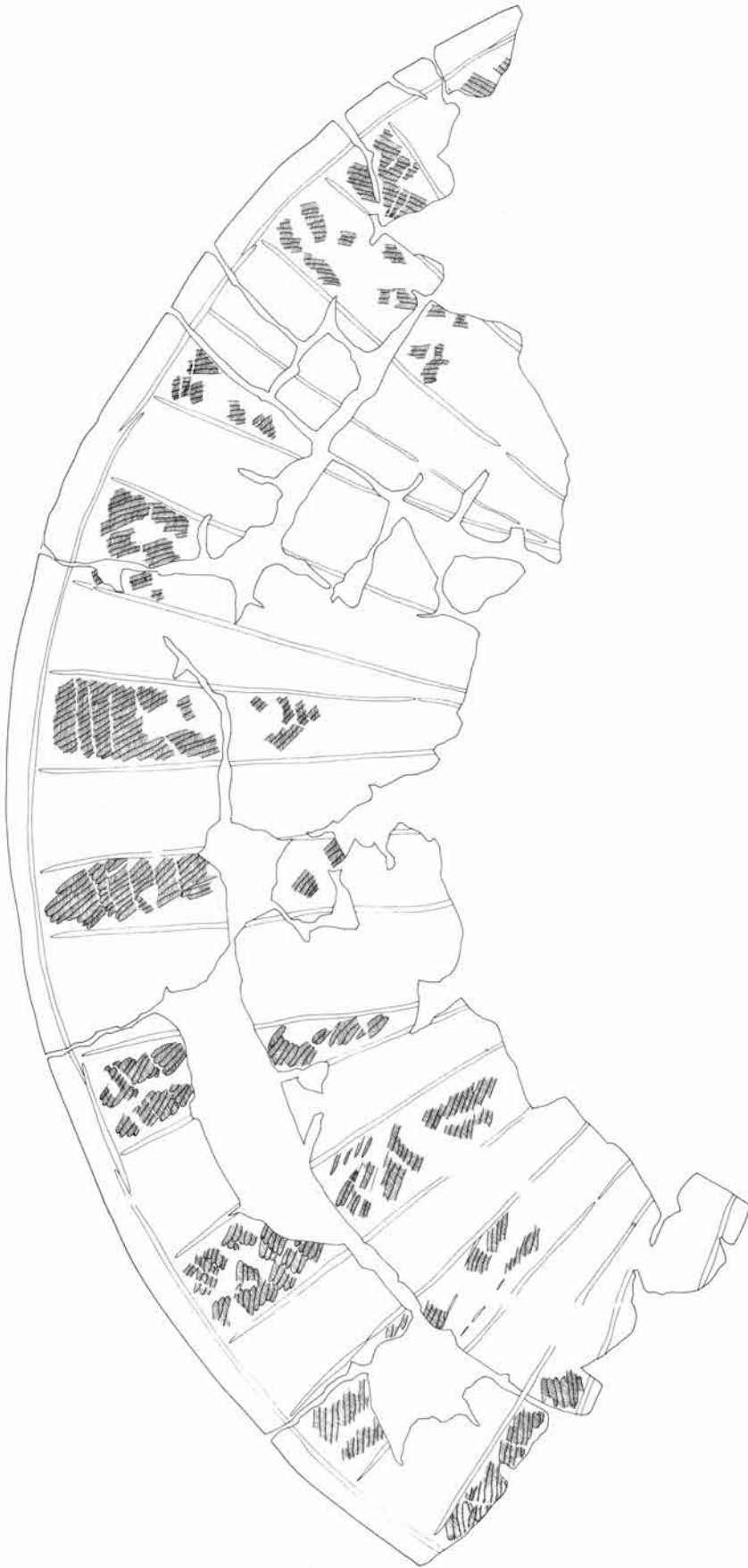
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------------------|-------------------|--|---|--------------|
| 51-1 106 | 口縁 ・底 部欠 損 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部と底部欠損。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい明褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下し、縄文施文。原体はR{↑縦転 がし。粘土接合面は整形している。 | 埋甕 (斜位状態) |
| 51-2 106 | 底部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部。底径81mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色。 | 胴上半部を欠損して、炉体土器として使用 している。外面も粗い調整が行われている。 | 炉体土器 |
| 51-3 106 | 胴下 半部 欠損 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴下半部欠損。器厚10~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。 | 口縁部は内湾し、胴部の括れをもたない器 形。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈 線を巡らせる。これに接続させるように沈 線を垂下。区画内にL{↑縦位。土器面は柔 軟。 | 炉東 |
| 53-4 106 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に幅広の沈線による楕円等の文様が 描き、縄文施文。原体はR{↑縦 縦転がし。沈線を垂下。土器面は柔軟で押 圧が強い。 | 炉南 |
| 53-5 106 | 底部 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部。底径110mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰黄褐色。 | 内面に煤が付着している。 | 炉東 |
| 53-6 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は明赤褐色。 | 波状口縁部片。口縁部は隆帯と沈線による 渦巻き等の文様が描かれ、縄文施文。原体 はL{↑横転がし。撚りは細かい。 | 主体部内部 |
| 53-7 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR{↑横 横転がし。 | 主体部内部 |
| 53-8 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR{↑横 横転がし。 | 埋甕 |
| 53-9 106 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL{↑斜位縦転がし。 | 主体部内部 |
| 53-10 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はL{↑長。 | 主体部縁石 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

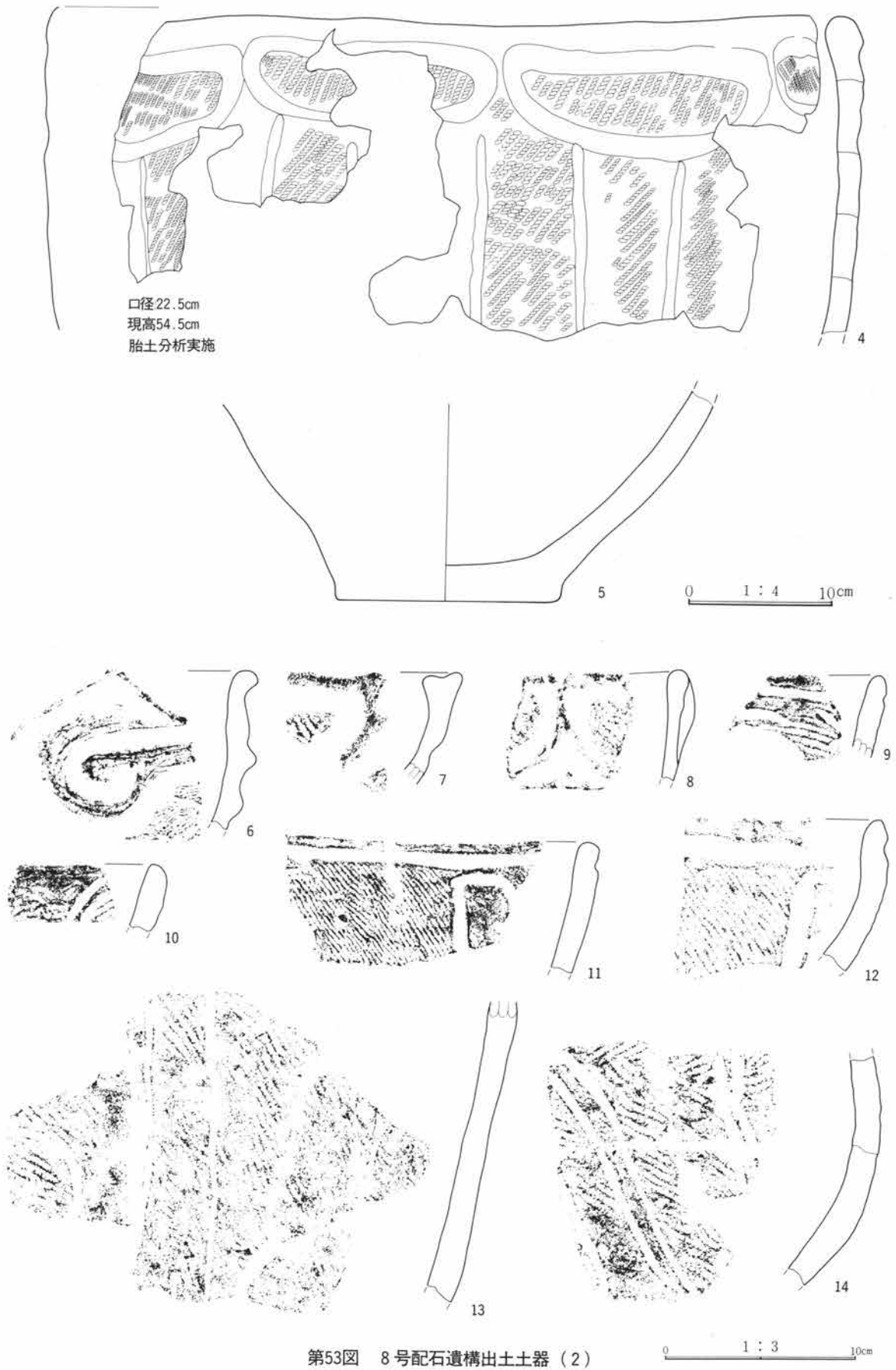


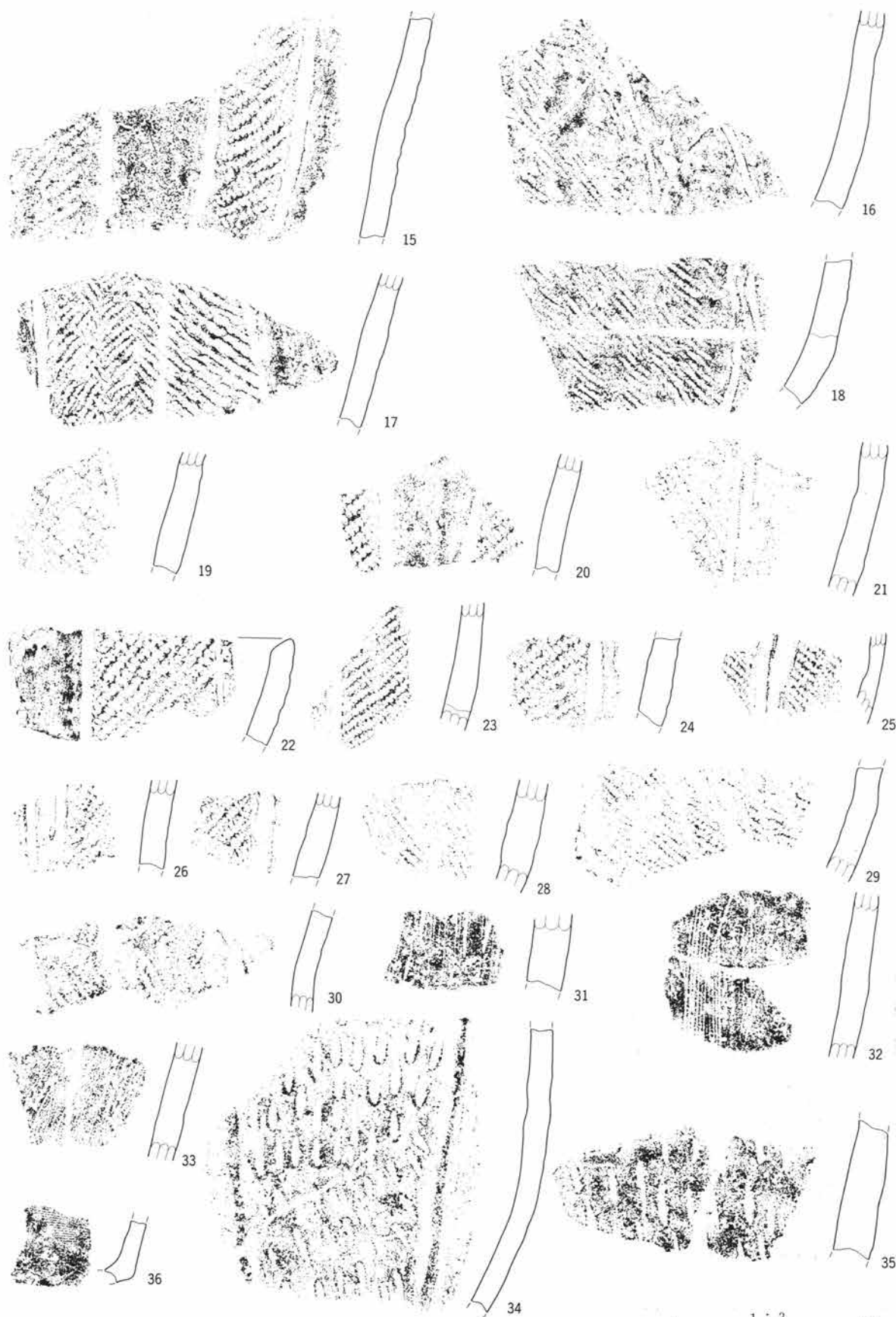
第51図 8号配石遺構出土土器 (1)

3 敷石住居跡〈8号配石遺構〉



第52図 8号配石遺構出土土器展開図(1/6)





第54図 8号配石遺構出土土器(3)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

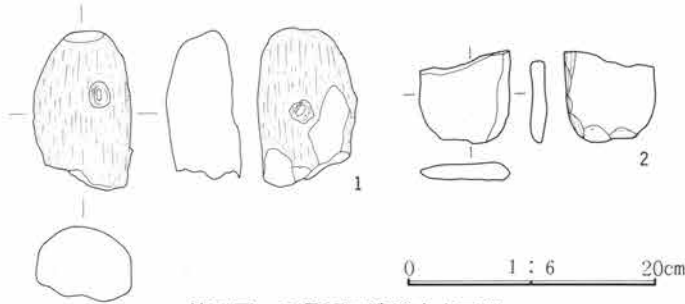
8号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|---|---|-------|
| 53-11 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面は黒褐色。 | 口唇部に1条の沈線を巡らせ、胴部に「 \square 」 状の沈線が施されている。縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。外面に煤が付着している。 | 炉周辺 |
| 53-12 106 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に1条の沈線を 巡らせ、胴部に「 \square 」状の沈線が施されて いる。縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦位。外面に 煤が付着している。 | |
| 53-13 106 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。 | 主体部内部 |
| 53-14 106 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明黄褐色。 | 縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦・横転がし。 | 主体部縁石 |
| 54-15 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 沈線を垂下。縄文施文。 原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。 | 主体部内部 |
| 54-16 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。 | 炉内部 |
| 54-17 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が しと $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。3種類の原体を使用し ている。土器面は柔軟で押圧が強い。 | 埋蔵周辺 |
| 54-18 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 54-19 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。 | 主体部内部 |
| 54-20 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。 | 炉周辺 |
| 54-21 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。 | 一括 |
| 54-22 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。押圧が強い。輪積み痕を口縁部として 再利用。 | 張出し部 |
| 54-23 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。 | 主体部縁石 |
| 54-24 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。 | 一括 |
| 54-25 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯を垂下。縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦 転がし。 | 主体部縁石 |
| 54-26 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明褐灰色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転が し。 | 主体部縁石 |
| 54-27 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 縦転がし。 隆帯を垂下。 | 一括 |
| 54-28 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16~20mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体は $R\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ 。 | 主体部縁石 |
| 54-29 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体は $L\left\{\begin{array}{l} \text{縦} \\ \text{横} \end{array}\right.$ (0段多条)縦転が し。沈線が施されている。 | 炉北 |

3 敷石住居跡〈17号配石遺構〉

8号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|--------------------|---|---------------------------------------|-------|
| 54-30 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR(上縦・横転がして羽状。 外面に煤が付着している。 | 主体部緑石 |
| 54-31 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 条線が施されている。粘土接合面に刻みが 施されている。 | 主体部緑石 |
| 54-32 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は橙色、内面は黒褐色。 | 条線が施されている。 | 張出し部 |
| 54-33 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。 | 条線が施されている。 | 炉 |
| 54-34 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に押し引き状 の沈線が施されている。 | 主体部緑石 |
| 54-35 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 押し引き状の沈線が施されている。 | 一括 |
| 54-36 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄橙色。 | 縄文施文。原体はL(斜め転がし。 然りは非常に細かい。 | 炉 |



第55図 8号配石遺構出土石器

8号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|-------------|-------|------|--------|--------------|-----|-----|-------|--|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 55-1 106 | 凹 石 笥 | 劣 | 点紋緑泥片岩 | (12.5) | 8.2 | 5.9 | (400) | 両面に2個の凹みがある。ほぼ同じ大きさで、長 径20mm、短径18mm、深さ4mmである。 | 埋甕の南 |
| 55-2 106 | 打製石斧 | 基部欠損 | 輝岩 | (7.2) | 7.4 | 1.5 | (90) | バチ(IIb?)。1面に大きく自然面残す。 | 炉北 |

17号配石遺構 (第56~63図、PL. 26・27、106・107)

位置 Fe・Ff-58・59グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北東59m (炉までの距離)、12号配石遺構の北東12mの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。12月上旬、Fe-58グリッドにおいて配石遺構を検出した。当初、遺構名を13号配石遺構として調査を進めたが、その後、3月10日になってFe-59グリッドにおいて石囲い炉が検出された。さらに周辺から土器片が出土したことから、この遺構を17号配石遺構とした。その後、調査を進めていく過程で、13号配石遺構と17号配石遺構は同一の遺構で敷石住居跡となることが判明した。遺構の北半分ほどは路線外に延びているために、完掘はできなかった。

重複 なし。 覆土 遺構上層には耕作土層と暗褐色土層が堆積している。 第1層 暗褐色土層 浅間A

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

軽石を多量に含む耕作土層。第2層 暗褐色土層 固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を含む。第3層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。遺構内は堅穴としての掘り込みが確認できなかったために、覆土は把握できなかった。

形状 部分的な検出のために柄鏡形を呈するものか、円形になるのか不明である。現状では長径5m、短径3m10cmを測る。面積は約12.3㎡である。

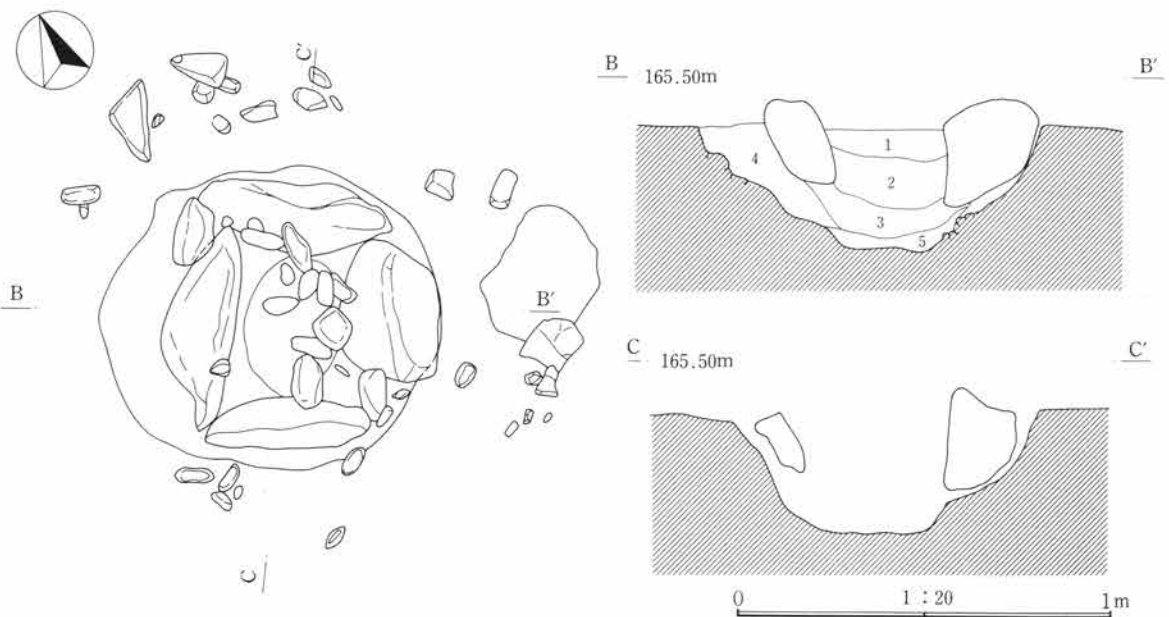
敷石状況 炉南西1m80cmのところに石が集中している。また炉東1m50cmの部分にも集中箇所があるが、遺構内部の敷石ではなくて圍繞する縁石となろう。

使用石材 26種類の石材が確認された。274点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩109点(39.8%)、輝岩30点(10.9%)、点紋緑泥片岩24点(8.8%)、輝緑岩17点(6.2%)、緑泥片岩・珪石各15点(各5.5%)、絹雲母緑泥片岩9点(3.3%)、絹雲母石墨緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・流紋岩・変斑岩各3点(各1.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩・斑岩・砂岩各2点(各0.7%)、点紋絹雲母石墨片岩・滑石片岩・赤色珪質板岩・チャート・安山岩・絹雲母片岩・熱変成岩・紅泥片岩・緑色珪質板岩・脆雲母石墨片岩・石英安山岩・珪岩各1点(各0.4%)であり、不明は25点(9.1%)を数えた。274点中167点(61%)の石は片岩類である。

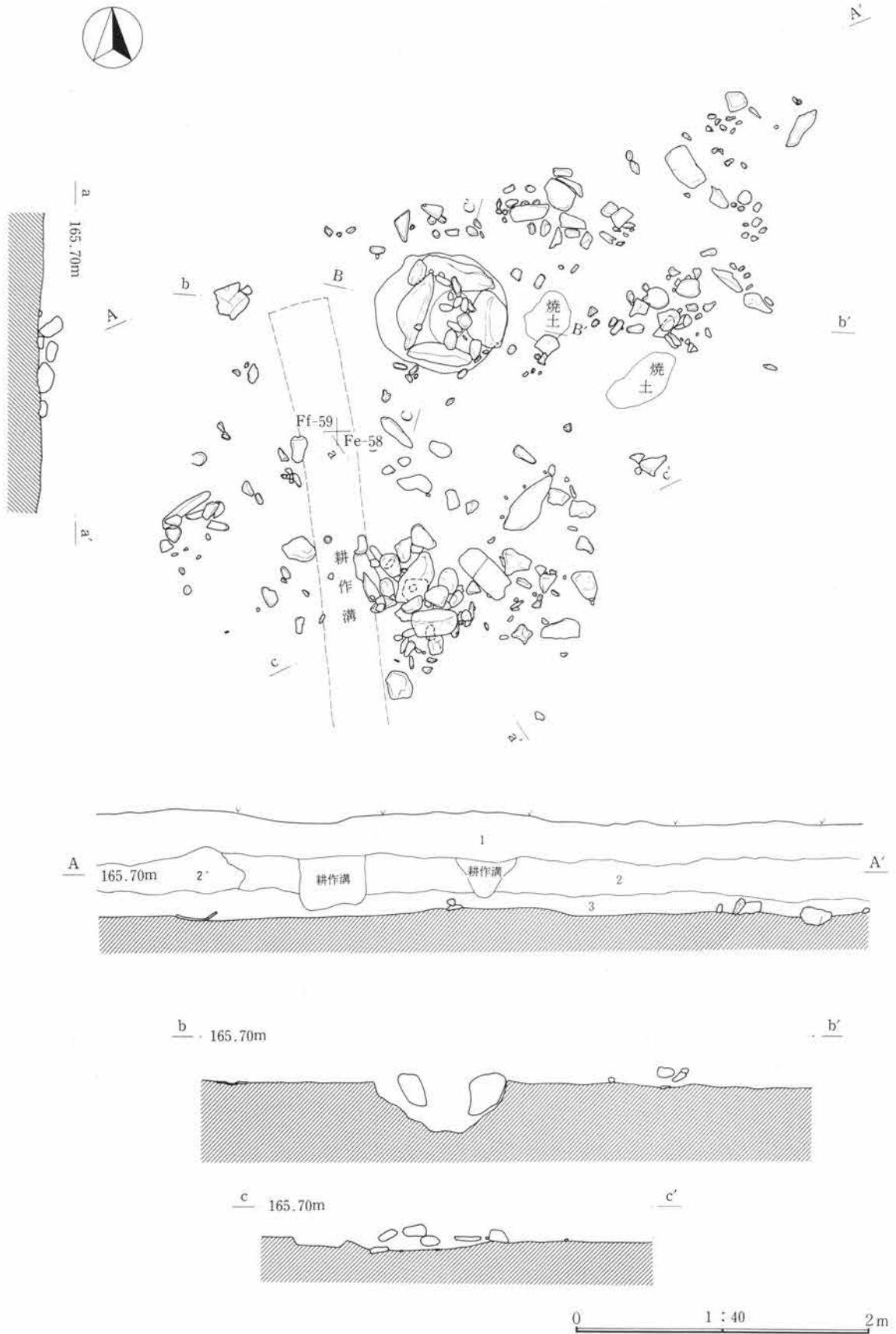
石材重量 重量の判明している石は257点である。その内訳は、500g未満の石164点(63.8%)、500g～1kg未満の石38点(14.8%)、1kg～2.5kg未満の石29点(11.3%)、2.5kg～5kg未満の石16点(6.2%)、10kg～20kg未満の石5点(1.9%)、7.5kg～10kg未満の石3点(1.2%)、5kg～7.5kg未満の石1点(0.4%)、30kg～40kg未満の石1点(0.4%)である。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係から判断して、本来掘り込みはなかったものと思う。

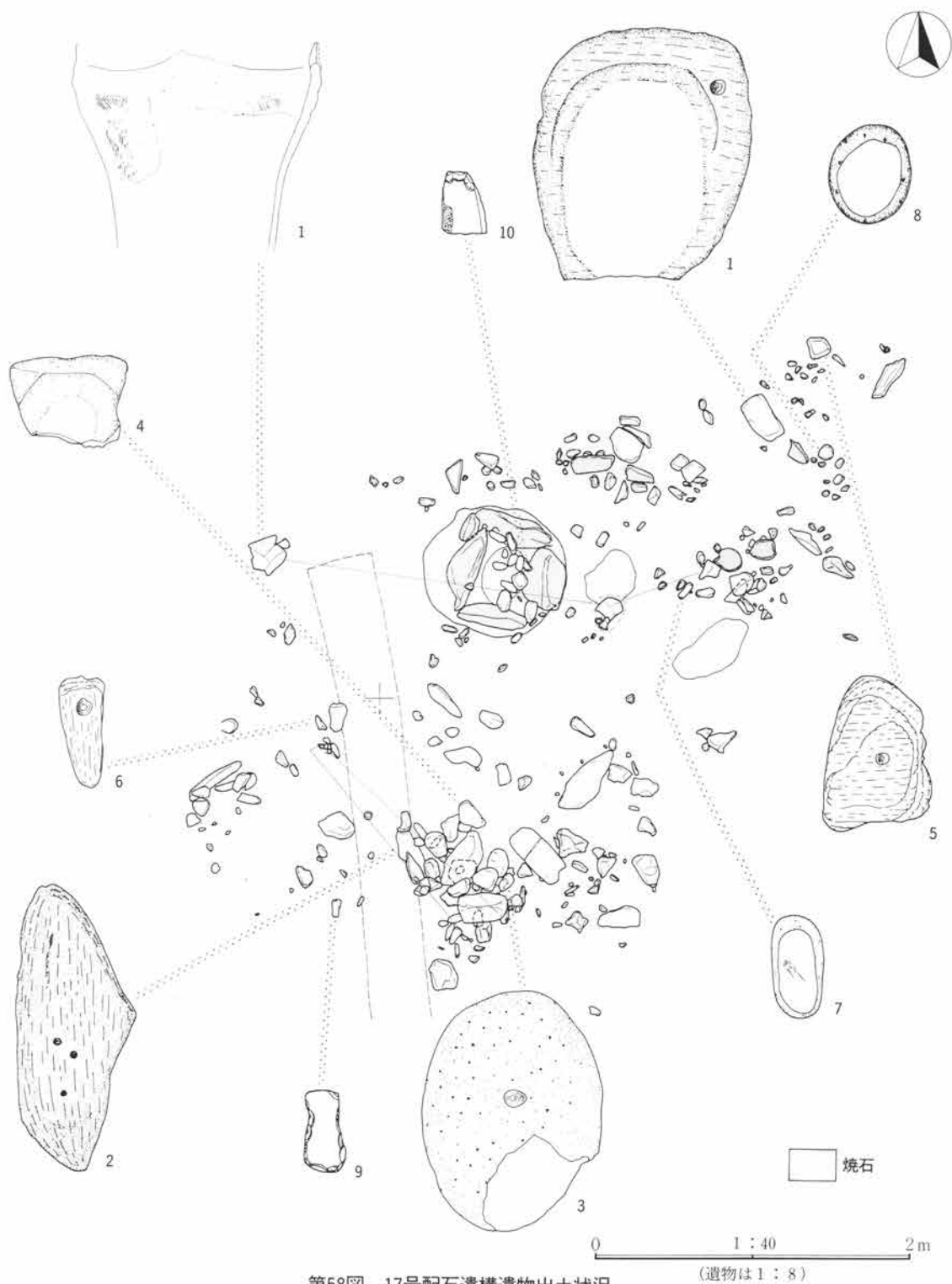
柱穴 検出できなかった。 **炉** 石囲い炉である。長径92cm・短径80cm・深さ34cmの楕円形を呈し、面積0.6㎡である。覆土は5層に分かれた。第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性がある。炭化物粒子を少量含む。第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子、焼土粒子を含む。第1層よりやや黒色を増す。第3層 茶褐色土層 やわらかくて粘性がある。焼土粒子を多量に含み、炭化物粒子を少量含む。第4層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量



第56図 17号配石遺構 炉



第57図 17号配石遺構



第58図 17号配石遺構遺物出土状況

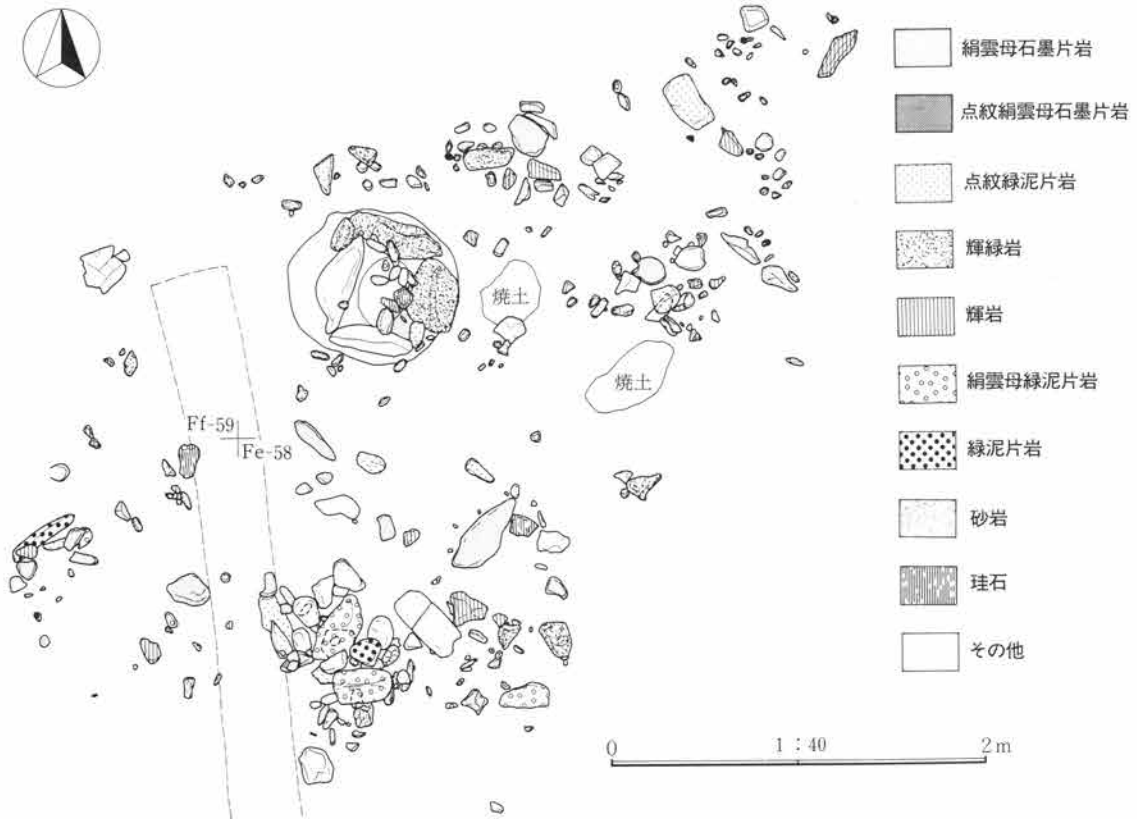
に含む。炉石をおさえる人為的埋土。 第5層 黄褐色土層 黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

炉には4個の大石と2個の小石を配置している。6点の炉石のうち4点は固い石材が使用されていた。石材は輝緑岩3点、点紋緑泥片岩・斑柘岩・絹雲母緑泥石墨片岩各1点である。

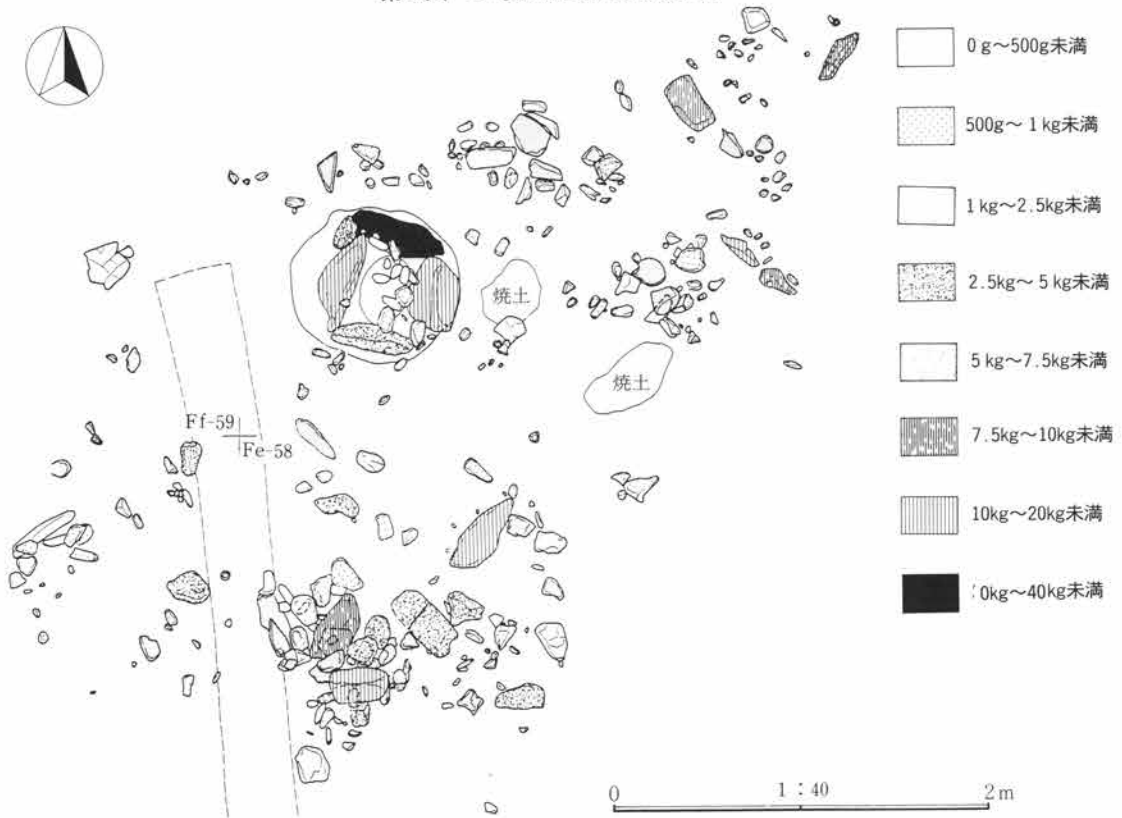
埋甕 検出できなかった。 **張出し部** 検出できなかった。

遺物出土状況 加曾利E 3式の大形土器片1点の他に、口縁部14点、胴部47点、底部1点の計62点の土器片

3 敷石住居跡〈17号配石遺構〉

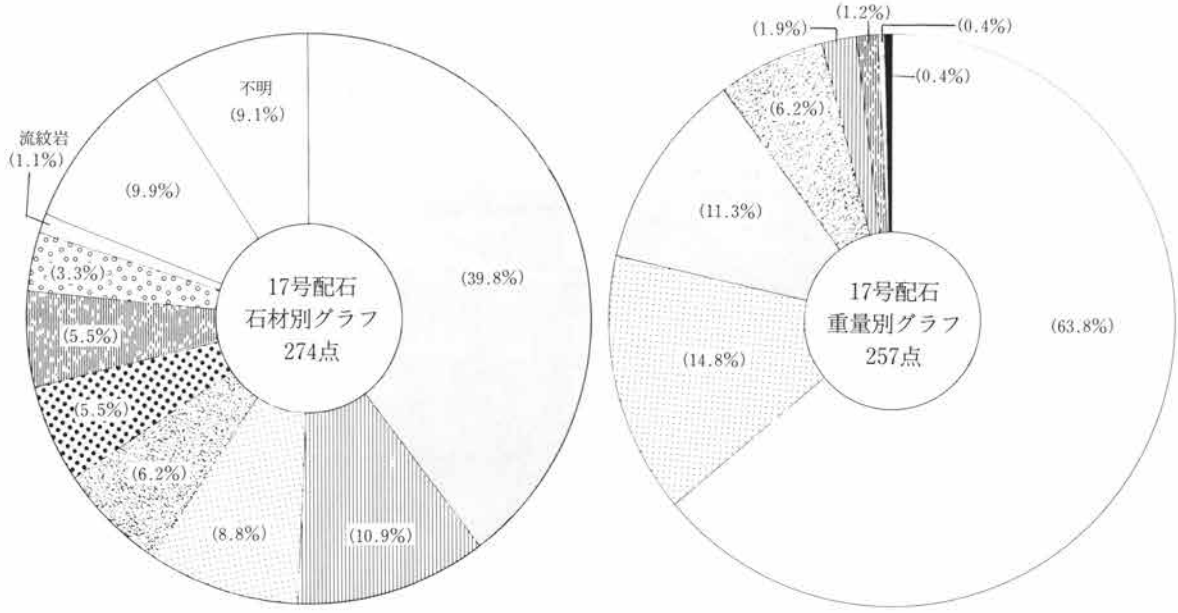


第59図 17号配石遺構石材別分布



第60図 17号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第61図 17号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

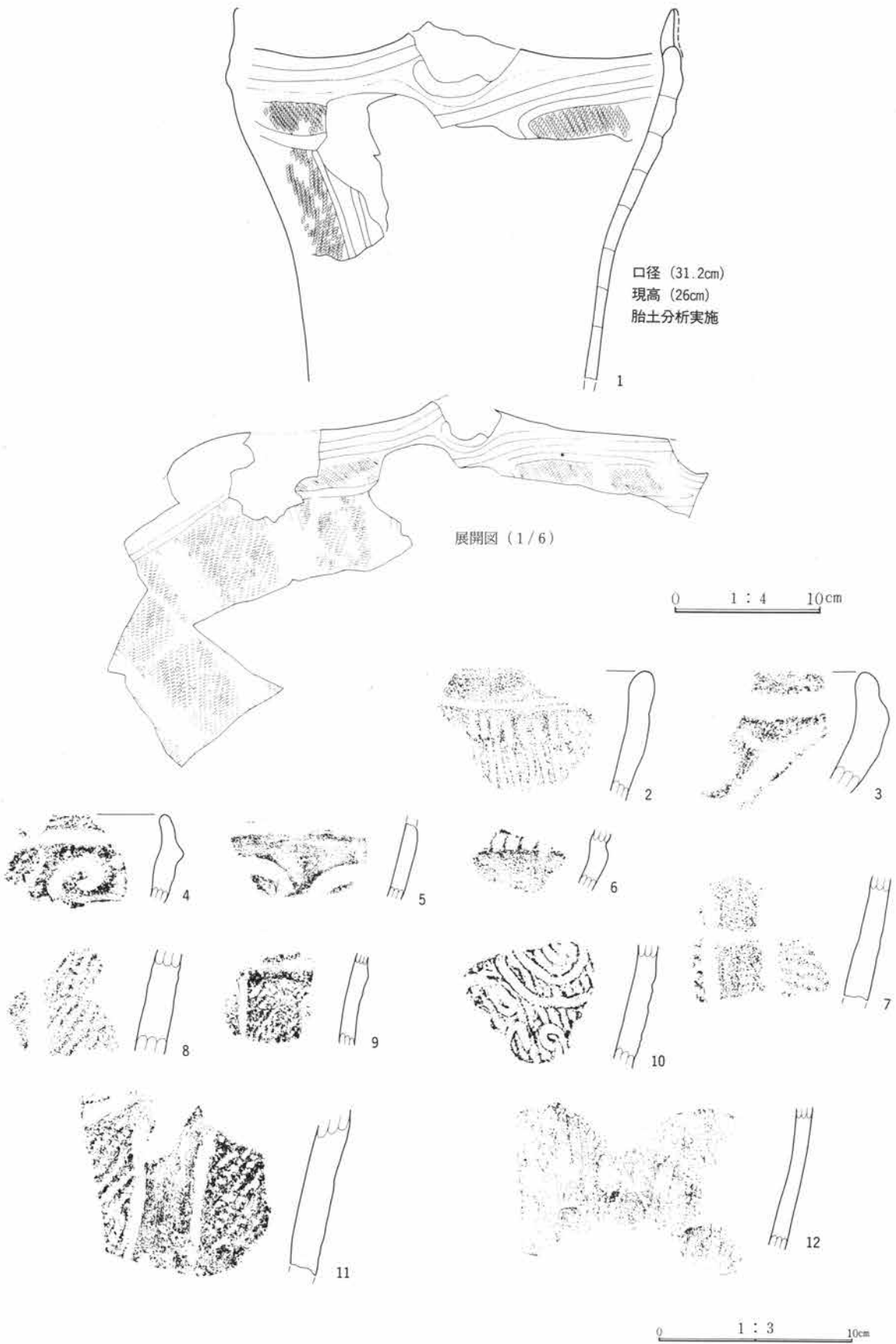
が出土している。加曽利E 3式土器を主体に、E 4式土器片も若干含まれていた。石器では石皿2点、多孔石3点、凹石1点、磨石2点、打製石斧1点、磨製石斧1点が出土している。石器含有率は3.6%であり、焼石は274点中28点の出土で、10.2%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E 3式期の敷石住居跡である。ただし完掘できなかったために円形なのか、柄鏡形なのか判断はつかない。

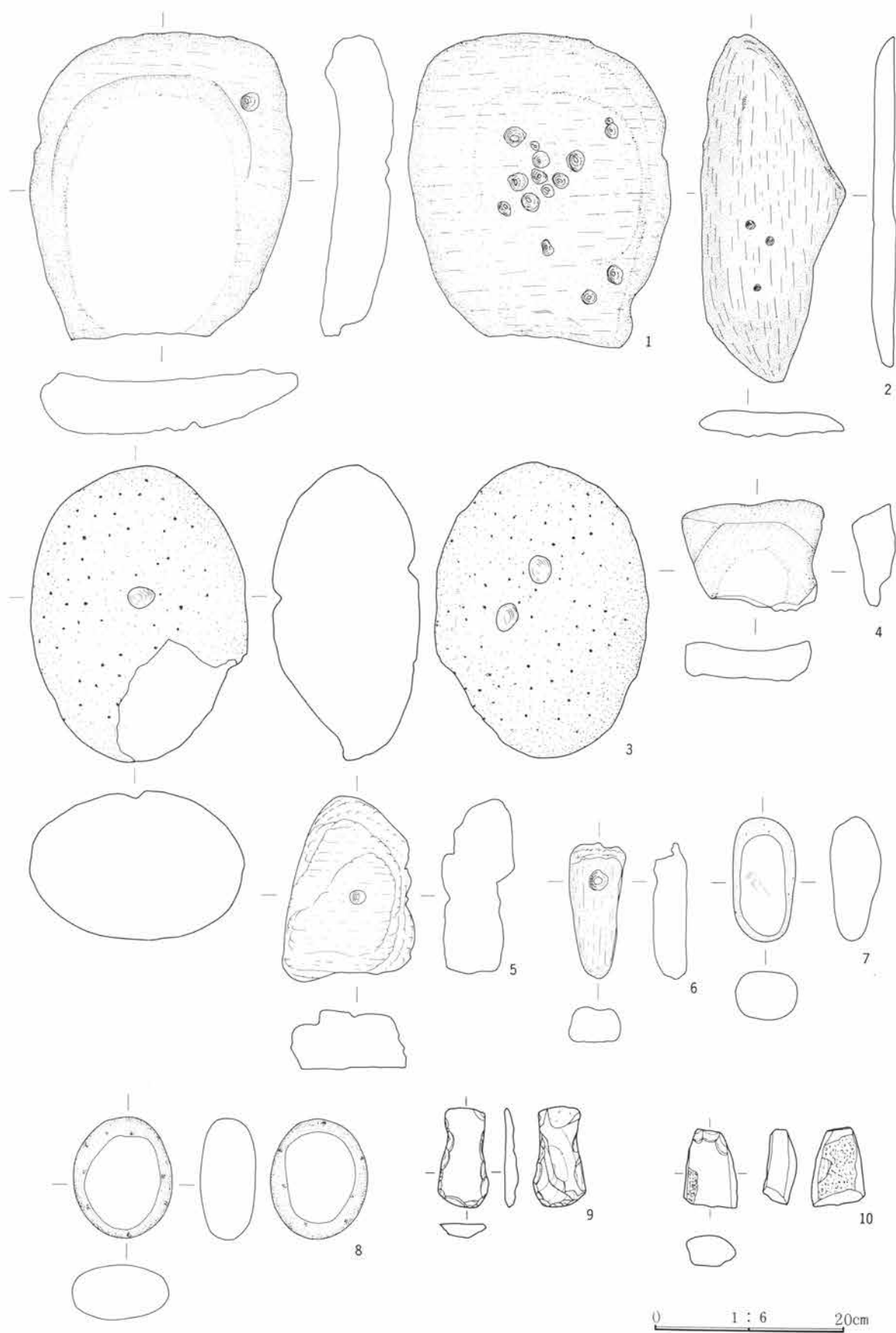
17号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|-------------|-----------|------------------|---|---|-------|
| 62-1 106 | 口縁 ～胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚8～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は黄褐色。 | 内湾する波状口縁部。口縁部は隆帯と沈線による渦巻き、楕円等の文様が描かれ、R(↑)横。胴部はR(↑)縦。太い条と細い条を使用。沈線を垂下。土器面は柔軟で、押圧が強い。 | 炉西 |
| 62-2 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。以下押し引き状の沈線が施されている。 | 主体部縁石 |
| 62-3 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれる。 | 主体部縁石 |
| 62-4 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による渦巻き等の文様が描かれる。 | 一括 |
| 62-5 106 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれる。 | 炉北 |
| 62-6 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は橙色。 | 刺突が施されている。 | 一括 |
| 62-7 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10～13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は明褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 炉南西 |
| 62-8 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 炉東 |

3 敷石住居跡〈17号配石遺構〉



第62図 17号配石遺構出土土器



第63図 17号配石遺構出土石器

3 敷石住居跡 <17号配石遺構>

17号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|--------------------|---|--------------------------------------|------|
| 62-9 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 62-10 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 沈線による文様が描かれている。 | 炉南 |
| 62-11 106 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 62-12 106 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 炉東 |

17号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------------|------|---------|------------|--------|------|---------|--|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 63-1 106 | 石皿 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 31.7 | 27.5 | 7.1 | 9,400 | 楕円形で磨面浅く湾曲している。15個の凹み。平均は長径17mm、短径15mm、深さ6mmで、多孔石の凹みと共通している。 | 炉北東 |
| 63-2 107 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 36.2 | 15.0 | 25.0 | 2,000 | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長10mm、短9mm、深2mm。最小は長2mm、短6mm、深1mmで、平均は長9mm、短8mm、深1.3mm。 | 炉南の縁石 |
| 63-3 107 | 多孔石 (丸石) | 一部欠損 | 石英安山岩 | 20.5 | 15.3 | 10.4 | (3,700) | 両面に3個の凹み。いずれもほぼ同じ大きさである。平均は長径20mm、短径15mm、深さ6mmである。 | 炉南の縁石 |
| 63-4 106 | 石皿? | 部分 | 砂岩 | (11.5) | (15.1) | 4.6 | (710) | 小型の石皿片である。 | |
| 63-5 106 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 19.3 | 13.7 | 7.6 | 2,500 | 片面に1個の凹みがある。長径16mm、短径15mm、深さ4mm。凹みは1個であるが、多孔石の凹みと共通している。 | 炉南の縁石 |
| 63-6 106 | 凹石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (14.0) | 6.0 | 3.7 | (500) | 片面に1個の凹みがある。長径22mm、短径21mm、深さ3mm。 | 炉南西 |
| 63-7 107 | 磨石 | 完形 | 流紋岩 | 13.1 | 6.4 | 5.3 | 600 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 炉東 |
| 63-8 107 | 磨石 | 完形 | 安山岩 | 12.5 | 10.5 | 5.7 | 1,150 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 石皿近く |
| 63-9 107 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 10.4 | 5.4 | 1.5 | 80 | バチ(IIa)。 | 縁石 |
| 63-10 107 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (8.0) | 5.7 | 3.6 | (230) | 敲打途中。 | 炉内 |

23号配石遺構 (第64～73図、PL. 28～31、107)

位置 Fo・Fp-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西40m(炉までの距離)、列石からは20mの所、24号配石遺構の南6m(炉から炉までの距離)に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。6月から環状列石周辺の調査を開始し、多数の配石遺構を確認した。当遺構周辺からは多量の石と土器片が出土したため、図面作成と遺物取り上げには時間がかかった。このため配石遺構として調査を進めていったが、敷石住居跡と判断されたのは調査もなかばを過ぎてからである。7月上旬に遺構の全景写真の撮影を実施し、その後、他の配石遺構の調査を行った。9月中旬になり、遺物の取り上げを再開し、10月下旬に張出し部の写真撮影、11月下旬から主体部の敷石の取り上げを開始した。12月に入って石囲い炉の調査を行い、敷石の総ての石を取り上げて調査を終了した。

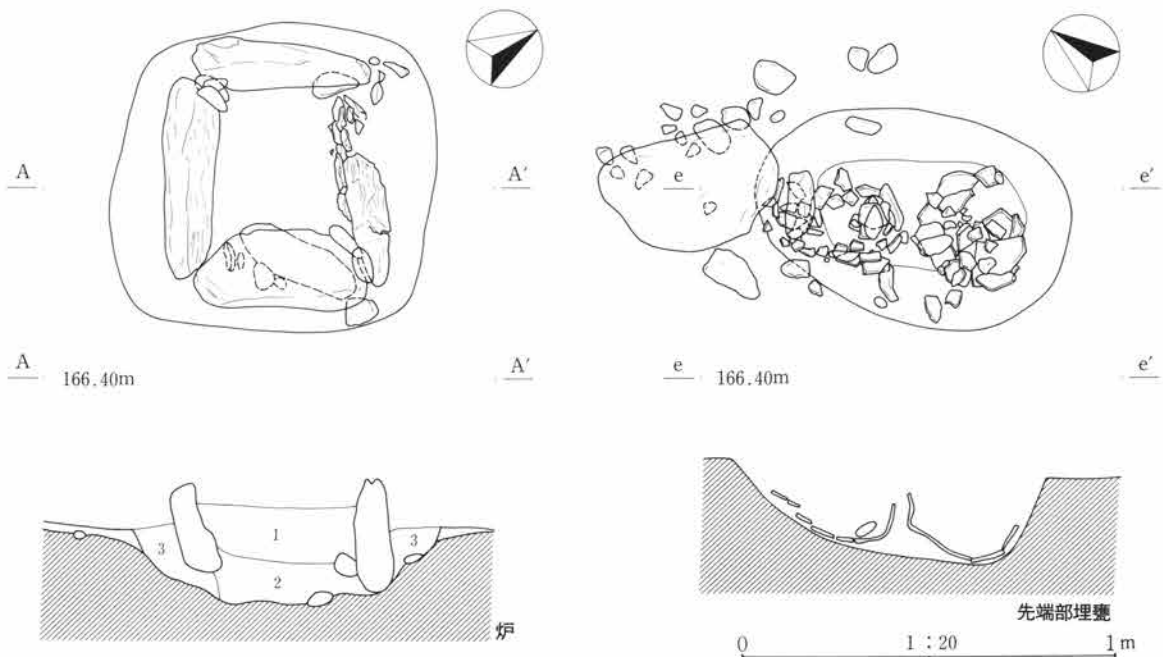
重複 なし。24号配石遺構に近接している。

覆土 竪穴としての掘り込みは確認できなかった。しかし、張出し部と主体部には段差が生じているために本来は掘り込みは存在していたものであろう。

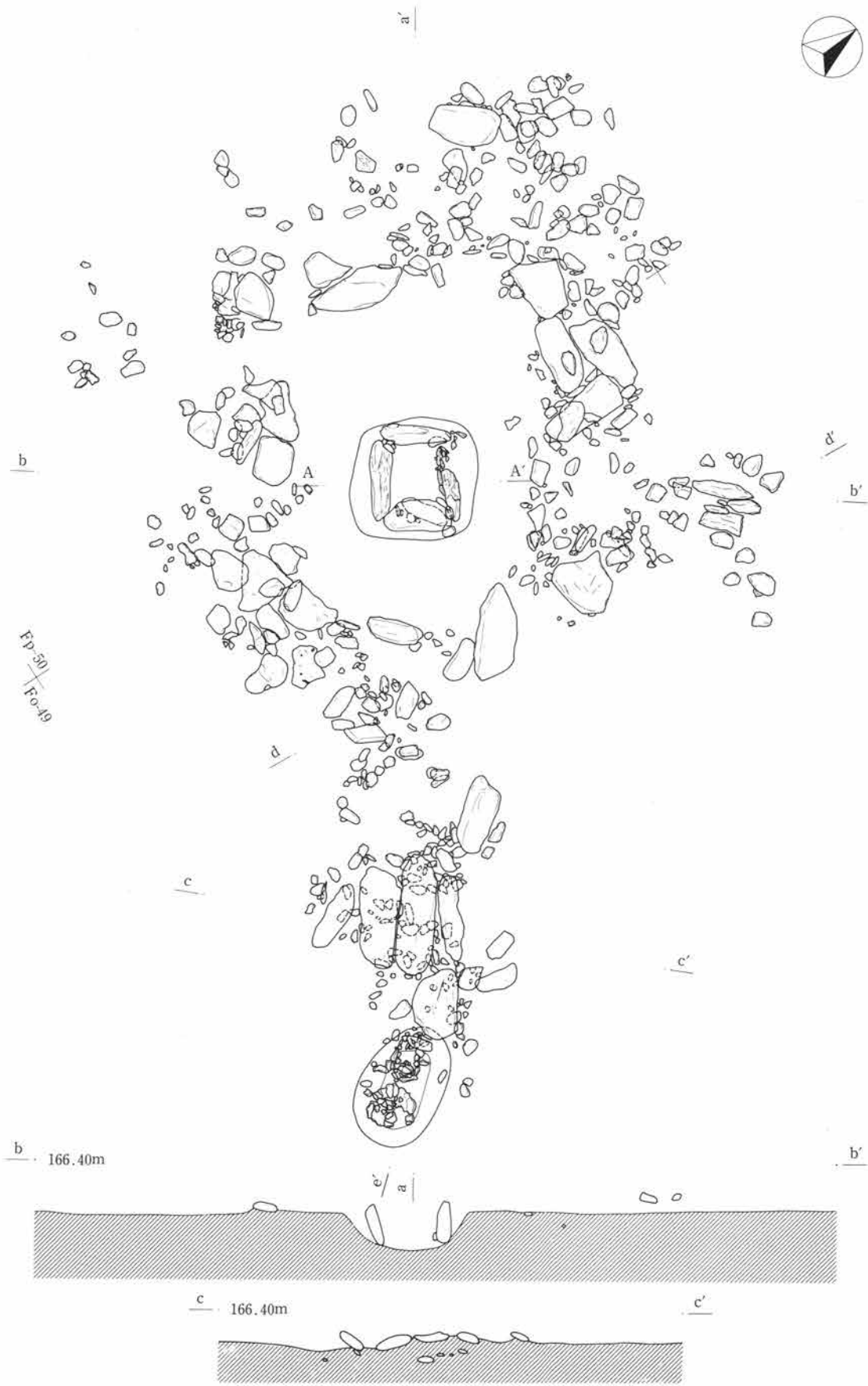
形状 柄鏡形敷石住居跡で全長6m40cmを測る。主体部は長短とも径3mの円形を呈し面積約9.2㎡、張出し部は長径3m40cm、短径90cmで、面積約2.6㎡ある。総面積は約12.1㎡になる。

敷石状況 主体部の縁石と張出し部に敷石が施されているが、主体部の内部には敷石は認められない。この事実は他の敷石住居跡と共通するものである。張出し部の石の下には多量の小石が、押さえの石として使用されていた。また主体部の縁石の間隙にも小石が認められた。

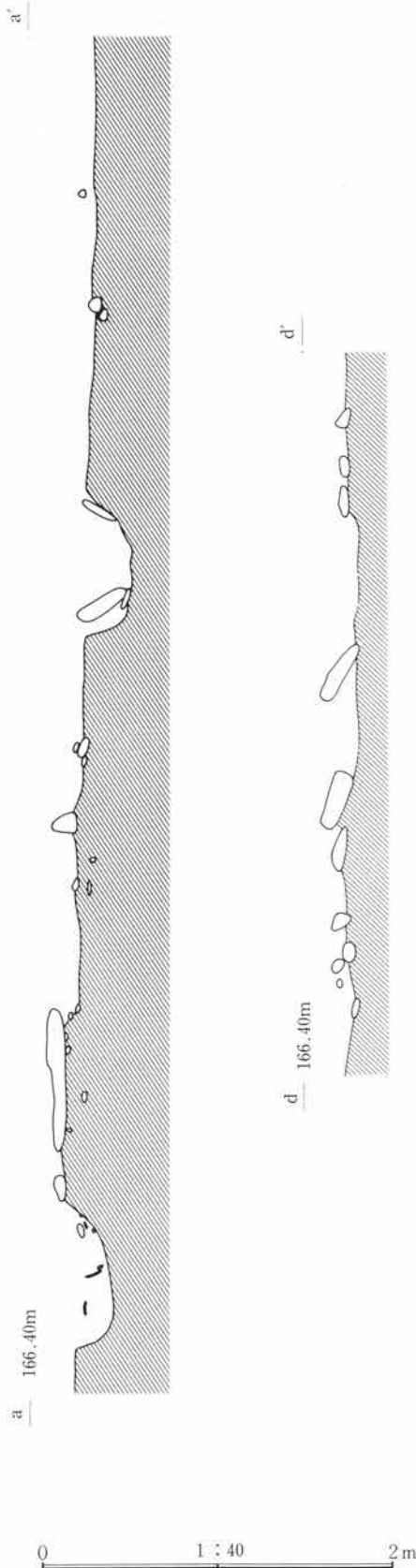
使用石材 敷石住居跡を構成している敷石と、この敷石の押さえの小石は総計518点検出されている。この石材別点数は、絹雲母石墨片岩146点(28.2%)、点紋絹雲母石墨片岩86点(16.6%)、輝緑岩48点(9.3%)、点紋緑泥片岩39点(7.5%)、点紋石墨緑泥片岩17点(3.3%)、緑泥片岩・珪石各15点(各2.9%)、チャート13点(2.5%)、その他の石材97点(18.7%)であり、不明は42点(8.1%)を数えた。また敷石を構成しない石は823点出土している。この石材別点数は、絹雲母石墨片岩278点(33.8%)、点紋絹雲母石墨片岩74点(9%)、



第64図 23号配石遺構 炉(左)・先端部埋壘(右)



第65図 23号配石遺構



点紋緑泥片岩55点(6.7%)、輝緑岩53点(6.4%)、輝岩48点(5.8%)、珪石44点(5.3%)、緑泥片岩37点(4.5%)、点紋石墨緑泥片岩34点(4.1%)、その他の石材143点(17.4%)であり、不明は57点(6.9%)を数えた。

石材重量 重量の判明している敷石関係の石は487点である。その内訳は、500g未満の石300点(61.6%)、500g～1kg未満の石77点(15.8%)、1kg～2.5kg未満の石65点(13.3%)、2.5kg～5kg未満の石16点(3.3%)、10kg～20kg未満の石9点(1.8%)、5kg～7.5kg未満の石8点(1.6%)、20kg～30kg未満の石5点(1%)、7.5kg～10kg未満の石4点(0.8%)、30kg～40kg未満の石3点(0.6%)である。また敷石を構成しない石は698点の重量が判明している。その内訳は、500g未満の石409点(58.6%)、500g～1kg未満の石150点(21.5%)、1kg～2.5kg未満の石107点(15.3%)、2.5kg～5kg未満の石24点(3.4%)、5kg～7.5kg未満の石5点(0.7%)、7.5kg～10kg未満の石2点(0.3%)、10kg～20kg未満の石1点(0.1%)である。

壁高 確認できなかったが、張出し部と主体部の床面とは段差があるので、主体部には若干の掘り込みがあった可能性が高い。

柱穴 検出できなかった。

炉 石囲い炉である。長径84cm・短径82cm・深さ26cmの方形を呈し、面積0.6m²である。覆土は3層に分かれた。

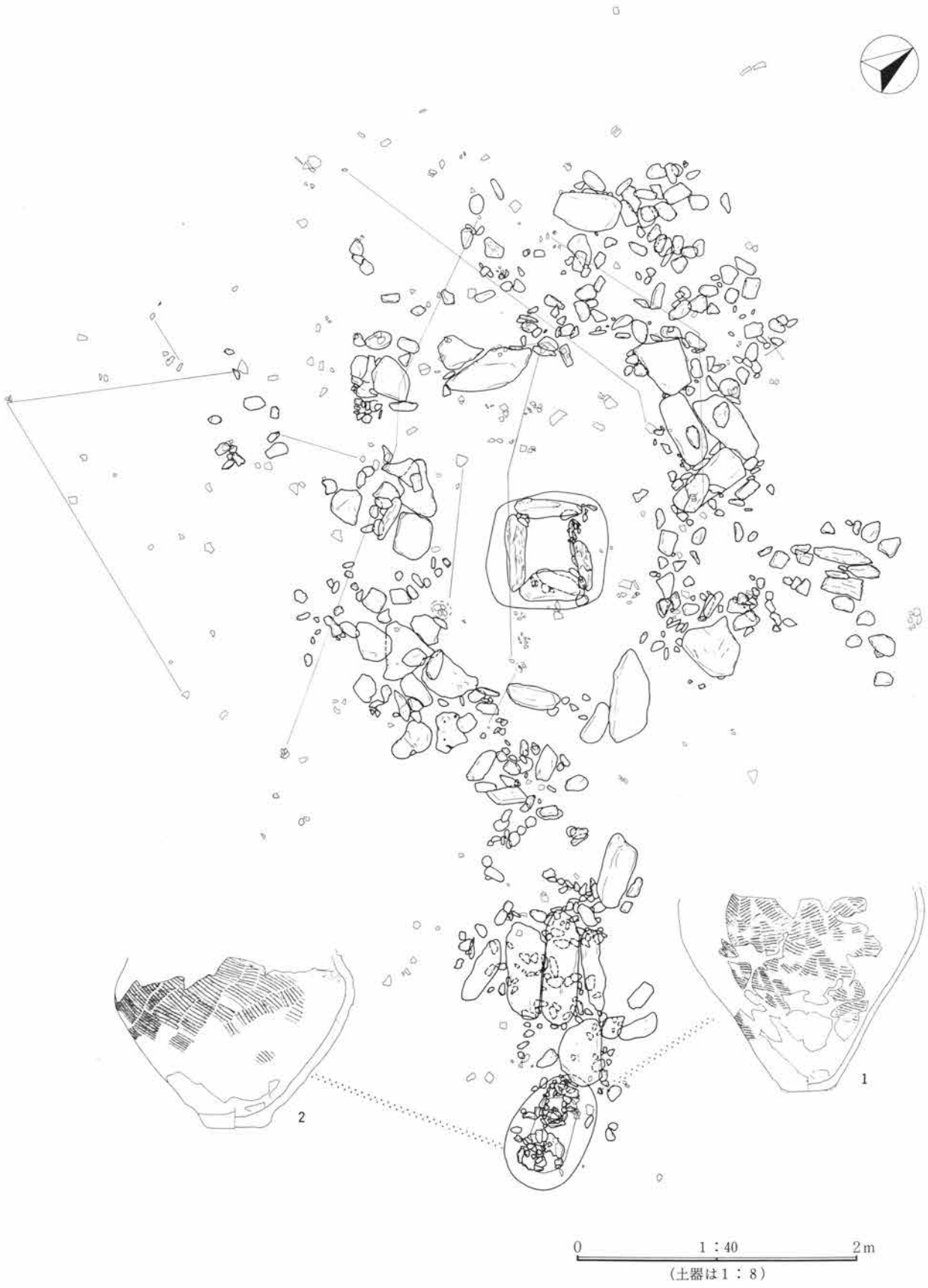
第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炭化物粒子を極少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。炭化物粒子を少量含む。

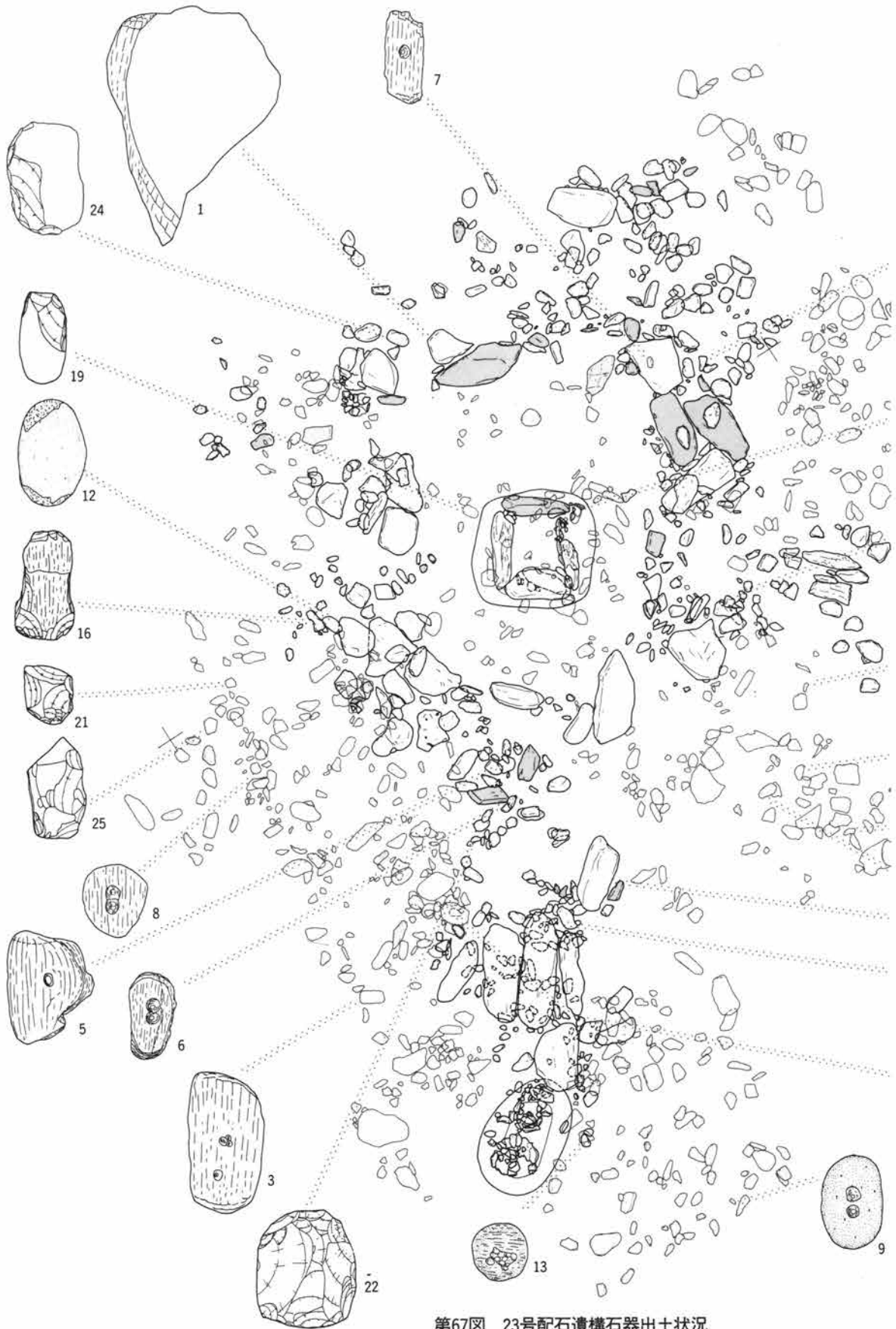
第3層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炉掘り方の覆土である。

1・2・3層には焼土は含まれていない。

炉石は4個の大石が使用され、この間隙に小石を配置している。この構築方法は17号配石遺構の石囲い炉と共通するものである。炉石4個の石材は絹雲母石墨片岩2点、点紋緑泥片岩1点、点紋絹雲母緑泥片岩1点であり、固い輝緑岩・輝岩等の石材は使用されてい



第66図 23号配石遺構土器出土状況



第67図 23号配石遺構石器出土状況

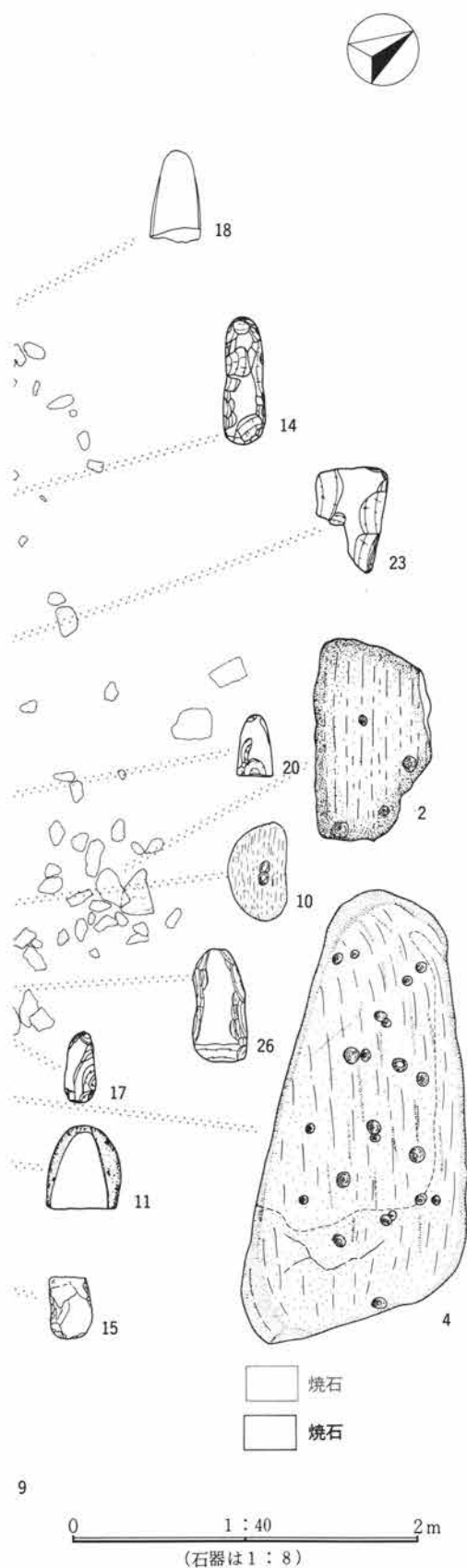
なかった。

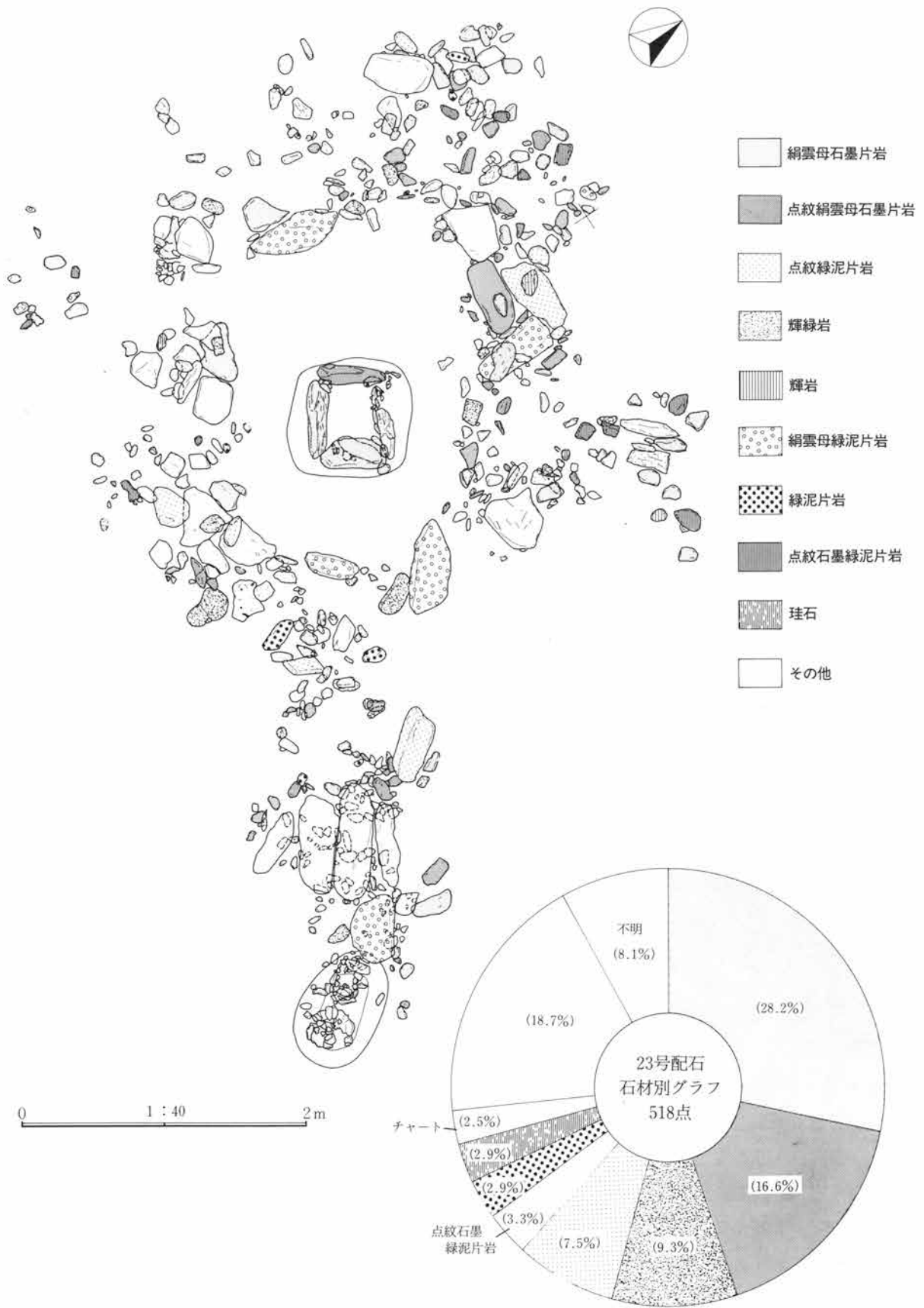
埋甕 張出し部先端から口縁部を欠損した加曾利E 4式土器2個体が出土した(第70図 1・2)。埋設土壌は長径85cm・短径56cm・深さ24cmの楕円形を呈している。覆土は暗褐色土層で、やわらかくて粘性は余りなかった。埋甕はこの土壌内に斜位状態で埋設されていたものである。埋甕①は蓋石を伴っていた。この蓋石は長径17cm・短径8cm・厚さ4cmを測る。埋甕2個体の覆土は、暗褐色土層でやわらかくて締まり悪い。粘性は余りなかった。埋甕内土壌はいずれも残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

張出し部 3m40cmの張出し部で、明瞭な敷石が認められるのは埋甕の北1m20cmまでの範囲である。石材は絹雲母緑泥片岩1点、点紋絹雲母緑泥片岩4点であり同様な石材が選択されていた。この敷石下には多量の小石が存在していた。なお、接続部近くに立石がある。この立石は焼石で、長径31cm・短径21cm・厚さ10.5cm・重量10kgの点紋絹雲母緑泥片岩を使用していた。

遺物出土状況 埋甕2個体を含め、297点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部34点、胴部254点、底部9点である。加曾利E 4式土器を主体に、E 3式土器片が若干含まれていた。石器では石皿1点、多孔石4点、凹石6点、磨石1点、敲石2点、打製石斧4点、磨製石斧は未製品も含め9点が出土している。石器含有率は2%である。また焼石は107点の出土で、8%を占めている。

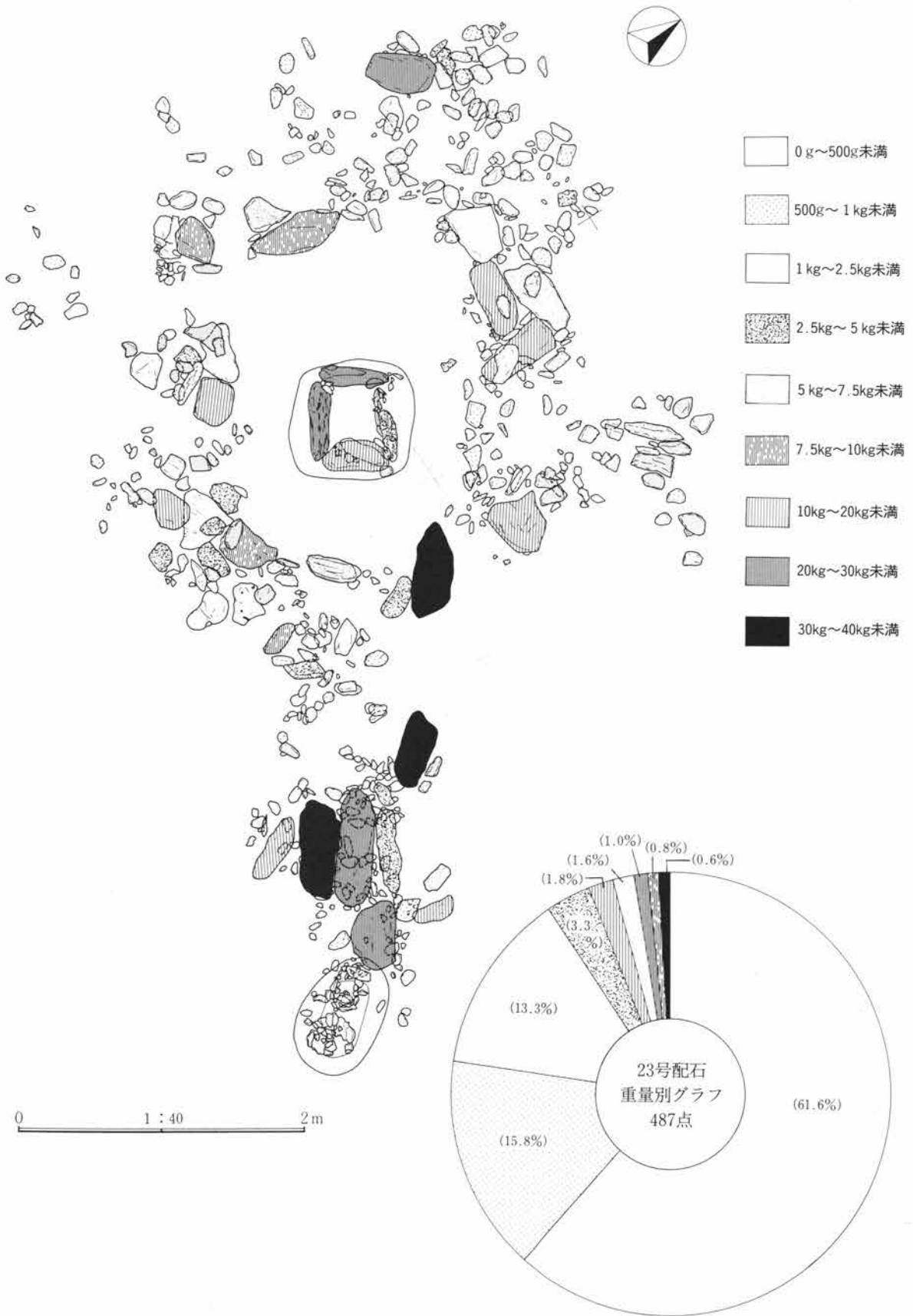
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 4式期の柄鏡形敷石住居跡である。加曾利E 3式期の敷石住居跡とは異なり、環状列石に近接して構築されている。主軸方向はN-54°-W。





第68図 23号配石遺構石材別分布

3 敷石住居跡 <23号配石遺構>



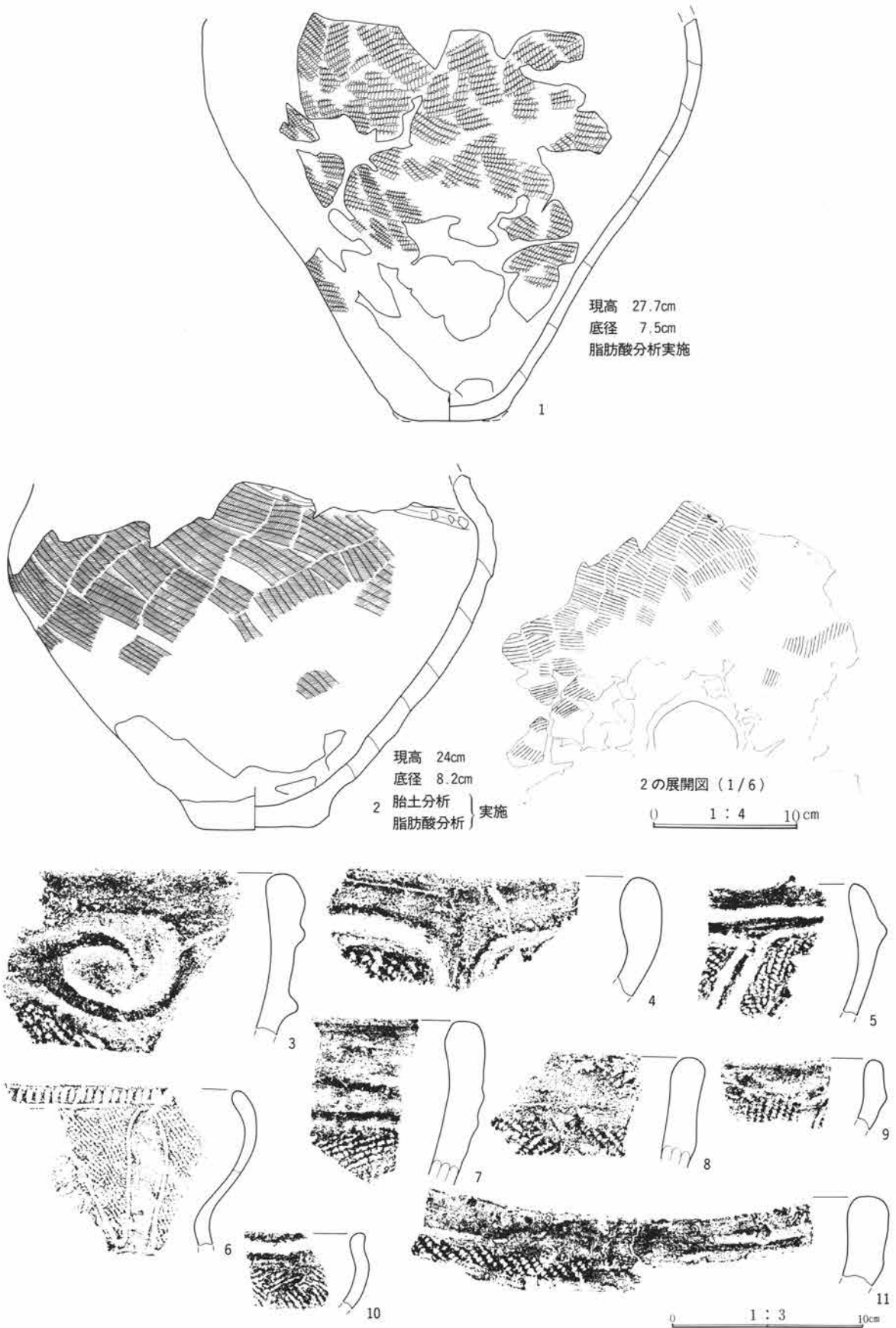
第69図 23号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

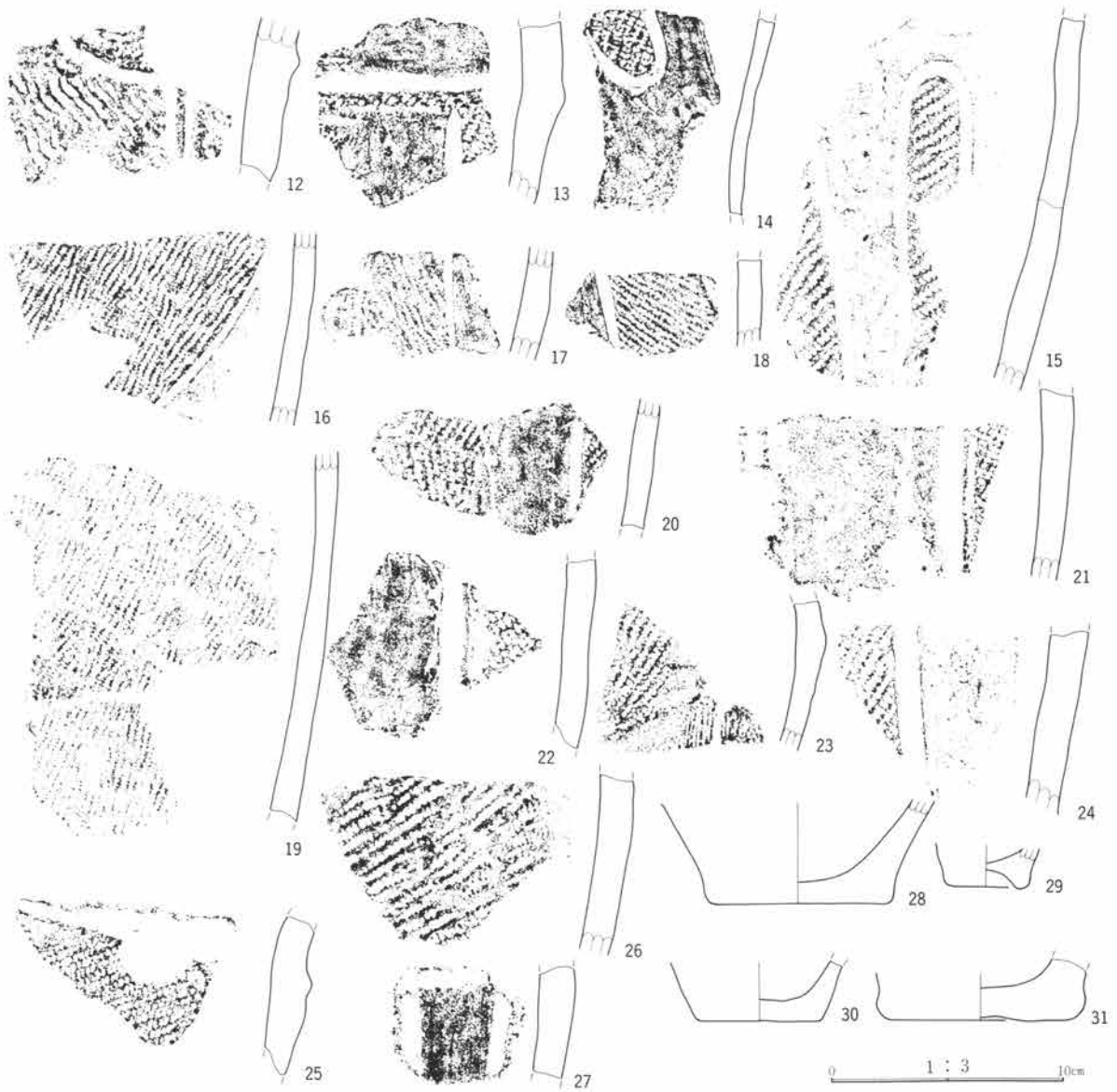
23号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|-------------------|---|--|----------------------|
| 70-1 107 | 胴部 ～底 部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴上半部～底部。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はL{長縦・横転がし。 底部周縁は磨耗している。 | 張出し部埋 壘 (斜位状態) |
| 70-2 107 | 胴上 半～ 底部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器の口縁部欠損。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 1条の微隆起帯を巡らせている。縄文施文。 原体はL{長縦転がし。外面に煤が付着して いる。底部周縁は磨耗している。 | 張出し部埋 壘 (斜位状態) |
| 70-3 107 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と幅広の 沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR{長横転がし。 | 埋壘西 |
| 70-4 107 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12～22mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に幅広の沈線に よる梢円等による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR{長横転がし。 | 主体部縁石 |
| 70-5 107 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾し、突起を有する。口唇部に 1条の微隆起帯を巡らせ、以下微隆起帯に よる文様を描く。縄文はL{長。 | 主体部内部 |
| 70-6 107 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚5～8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。口唇 部に刺突を施し、1条の細沈線を巡らせる。 区画内にL{長縦転がし。 | 主体部内部 |
| 70-7 107 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 2条の微隆起帯を巡らせる。以下縄文施文。 原体はR{長縦転がし。 | 主体部西 |
| 70-8 107 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にR{長横、以下 R{長縦転がし。 | 炉南西 |
| 70-9 107 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR{長縦転 がし。 | 主体部縁石 |
| 70-10 107 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 口唇部に幅広の沈線を巡らせ、以下縄文施 文。原体はL{長横・縦転がし。 | 主体部内部 |
| 70-11 107 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚22mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にはR{長横転がし。 | 主体部北西 |
| 71-12 107 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL{長縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 張出し部西 |
| 71-13 107 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚13～18mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にはR{長横位。胴部 には沈線を垂下し、区画内にR{長縦位。 | 主体部縁石 |
| 71-14 107 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 沈線による「U」字状の文様を描き、区画 内に縄文施文。原体はR{長縦転がし。土器 面は柔軟。外面に煤が付着している。 | 主体部西 |
| 71-15 107 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10～13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。 | 沈線による「Ω」状の文様を描き、区画内 に縄文施文。原体はR{長縦転がし。 内面に煤が付着している。 | 主体部内部 |
| 71-16 107 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、縄文施文。原 体はR{長縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 71-17 107 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 細沈線を垂下し、縄文施文。原体はL{長縦 転がし。 | 主体部内部 |
| 71-18 107 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。 沈線を垂下。 | 主体部縁石 |
| 71-19 107 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8～12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 細沈線を施し、縄文施文。原体はR{長縦 転がし。外面に煤が付着している。 | 主体部縁石 |
| 71-20 107 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はL{長横・縦転がし。 沈線を垂下している。 | 主体部縁石 |

3 敷石住居跡 〈23号配石遺構〉



第70図 23号配石遺構出土土器 (1)



第71図 23号配石遺構出土土器（2）

23号配石遺構土器観察表

| 図番 Pl. | 部位 | ①胎土 ②焼成（遺 存状況） | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様（その他） | 出土状況 |
|--------------|---------|-------------------|---|--------------------------------|-------|
| 71-21 107 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 微隆起帯を垂下し、縄文施文。原体はRⅠⅡ 縦転がし。 | 主体部南西 |
| 71-22 107 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は RⅠⅡ縦転がし。 | 主体部内部 |
| 71-23 107 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の臍部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はRⅠⅡ縦転がし。条線が施 されている。 | 主体部縁石 |

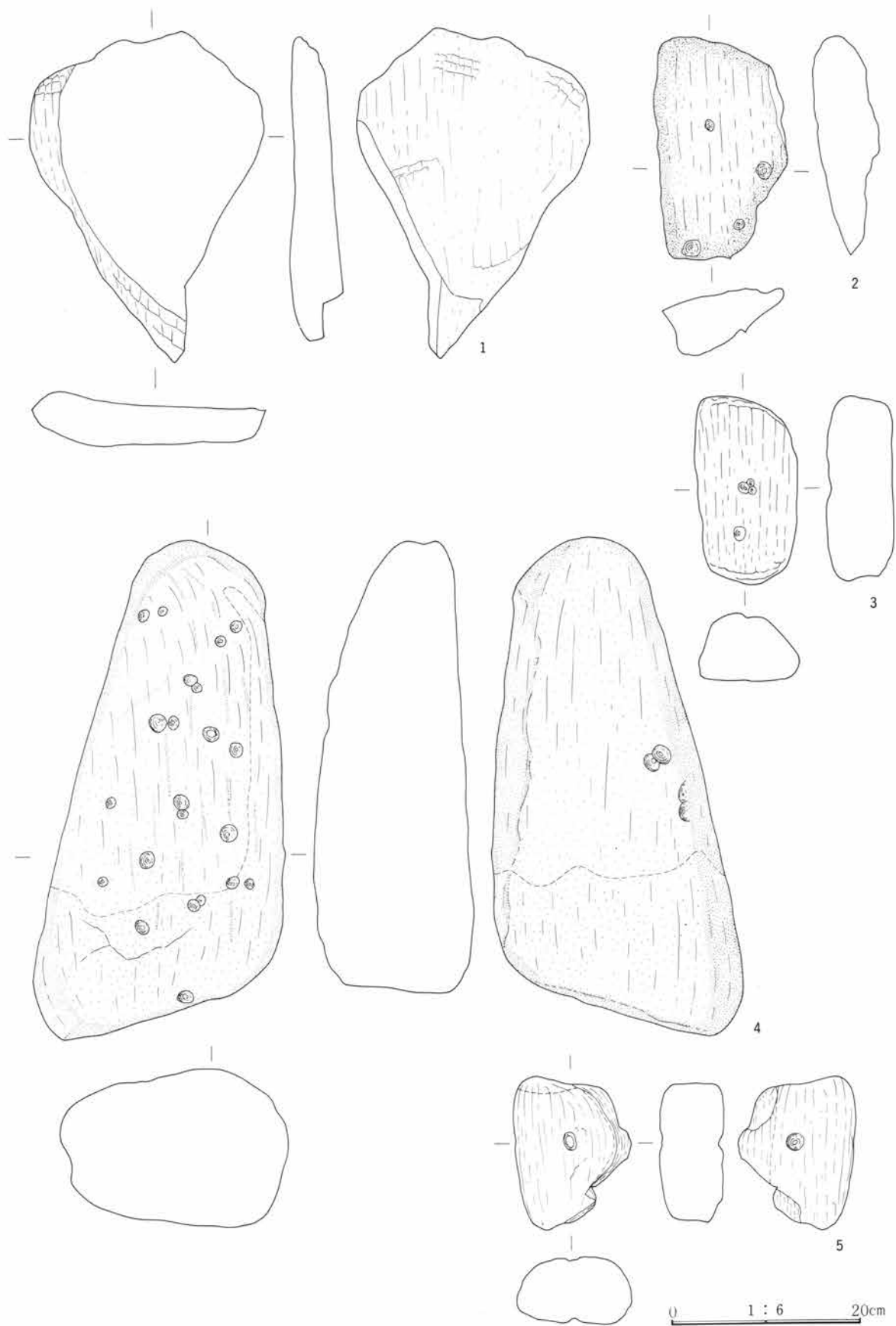
3 敷石住居跡 <23号配石遺構>

23号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|--|---|-------|
| 71-24 107 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 主体部西 |
| 71-25 107 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR(↑)縦転 がし。 | 主体部縁石 |
| 71-26 107 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 71-27 107 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下している。 | 張出し部 |
| 71-28 107 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径77mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | | 主体部西 |
| 71-29 107 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 底径35mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 張出し部北 |
| 71-30 107 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径52mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい褐色。 | | 主体部縁石 |
| 71-31 107 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | | 主体部縁石 |

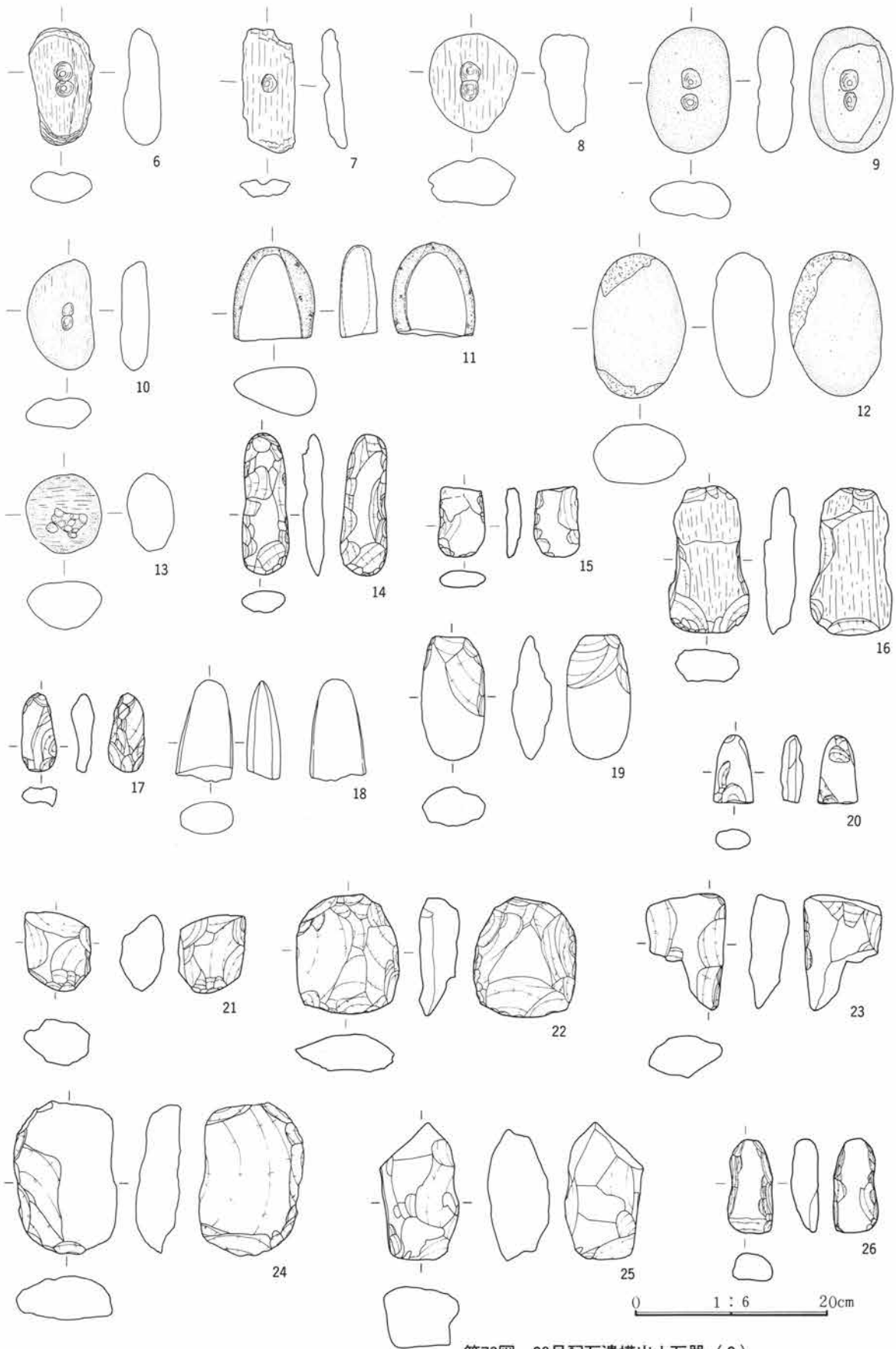
23号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|------------|--------|------|---------|---|------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 72-1 107 | 石皿 | % | 絹雲母緑泥片岩 | (33.9) | (24.4) | 5.8 | (4,900) | 破片。窪みは浅い。 | 主体部 縁石 |
| 72-2 107 | 多孔石 | 欠損 | 点紋緑泥片岩 | (23.2) | (13.9) | 6.9 | (2,700) | 片面に4個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、 深10mm。最小は長13mm、短9mm、深5mmで、平均 は長17mm、短14mm、深6mm。全面焼けている。 | 主体部の 北東 |
| 72-3 107 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 19.5 | 10.8 | 7.1 | 2,500 | 片面に4個の凹み。最大の凹みは長15mm、短7mm、 深4mm。最小は長8mm、短7mm、深2mmで、平均 は長11mm、短8mm、深3mm。 | 張出し部 西 |
| 72-4 107 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 51.3 | 26.4 | 16.7 | 34,800 | 両面に26個の凹み。最大は長22mm、短17mm、深3 mm。最小は長10mm、短8mm、深3mmで、平均は長 15mm、短12mm、深3mm。焼けている。 | 張出し部 |
| 72-5 107 | 多孔石 | ほぼ完形 | 緑泥片岩 | 15.8 | 12.4 | 6.9 | 1,900 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、 短径16mm、深さ5mm。一部焼けている。 | 張出し部 |
| 73-6 107 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 12.3 | 6.8 | 3.9 | 400 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17.5 mm、短径17mm、深さ3mmである。焼けている。 | 張出し部 |
| 73-7 107 | 多孔石 | 完形 | 石墨片岩 | 12.9 | 5.3 | 1.8 | 200 | 片面に1個の凹みがある。凹みは長径20mm、短径 16mm、深さ7mmである。全面焼けている。凹石の 凹みとは異なっている。 | 主体部 |
| 73-8 107 | 凹石 | 完形 | 緑泥片岩 | 10.4 | 9.0 | 4.9 | 650 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径21mm、 短径19mm、深さ3mmである。 | 主体部の 南 |
| 73-9 107 | 凹石 | 完形 | 流紋岩 | 12.9 | 8.9 | 3.9 | 600 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長23mm、短20mm、 深4mm。最小は長20mm、短15mm、深2mmで、平均 は長21mm、短18mm、深3mm。片面に煤が付着。 | 埋甕の北 東 |
| 73-10 107 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 11.4 | 7.0 | 3.1 | 390 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径14mm、 短径11mm、深さ2mmである。 | 主体部の 東 |
| 73-11 107 | 磨石 | % | 流紋岩 | (9.6) | 8.5 | 5.1 | (500) | 器面に磨耗痕がみられる。一部焼けている。 | 張出し部 |
| 73-12 107 | 敲石 | 一部欠損 | 流紋岩 | 14.8 | 9.7 | 6.3 | (1,150) | 器面に敲打痕がみられる。 | 主体部 |



第72図 23号配石遺構出土石器(1)

3 敷石住居跡 <23号配石遺構>



第73图 23号配石遺構出土石器(2)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

23号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------------|--------------|------|-----|-------|-----------------------------|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 73-13 107 | 敲 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 8.1 | 7.9 | 4.9 | 500 | 器面に敲打痕がみられる。 | 埋埋付近 |
| 73-14 107 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 14.5 | 5.1 | 2.5 | 250 | バチ (II a)。一側がわずかに内湾。かなり細身。 | 炉付近 |
| 73-15 107 | 打製石斧 | 基部欠損 | 熱変成岩 | (7.2) | 4.9 | 1.8 | (80) | バチ (II b)。片面に素材となった剥片の腹面残す。 | 張出し部 |
| 73-16 107 | 打製石斧 | 完形 | 点紋石墨絹雲母 片岩 | 15.2 | 8.4 | 3.3 | 540 | バチ (II a)。 | 主体部 |
| 73-17 107 | 打製石斧 | 完形 | 輝岩 | 8.1 | 3.6 | 2.5 | 90 | バチ (II b)。かなり小型。 | 主体部東 |
| 73-18 107 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 角閃岩 | (10.3) | 6.3 | 3.5 | (300) | 磨き段階。 | 縁石 |
| 73-19 107 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 緑泥片岩 | (12.8) | 6.6 | 4.1 | (480) | 磨き段階。 | 炉近接 |
| 73-20 107 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 角閃岩 | (7.0) | 4.2 | 2.2 | (111) | 磨き途中。両面に粗割り痕残す。 | 主体部東 |
| 73-21 107 | | | 角閃岩 | 8.1 | 7.1 | 4.6 | 380 | 粗割り段階。 | 主体部南 |
| 73-22 107 | | 完形 | 輝緑岩 | 12.4 | 10.7 | 4.4 | 810 | 粗割り段階。 | 張出し部 |
| 73-23 107 | | | 輝緑岩 | 12.1 | 8.1 | 4.2 | 510 | 粗割り段階。 | 縁石 |
| 73-24 107 | | 完形 | 輝緑岩 | 15.6 | 11.1 | 4.7 | 1,210 | 粗割り途中。ほとんど素材 (分割際) の状態。 | 縁石 |
| 73-25 107 | | 完形 | 輝緑岩 | 14.1 | 8.2 | 6.3 | 1,130 | 粗割り途中。 | 主体部南 |
| 73-26 107 | | 完形 | 輝緑岩 | 9.7 | 4.6 | 2.9 | 220 | 粗割り段階。一部に自然面残す。 | 張出し部 北 |

24号配石遺構（第74～89図、PL. 32～36、108～110）

位置 Fo・Fp-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東43m（炉までの距離）、列石からは23m50cmの所、23号配石遺構の北6m（炉から炉までの距離）に位置している。

経過 0区（昭和62年度調査区）から検出。6月から環状列石周辺の調査を開始し、多数の配石遺構を確認した。当遺構周辺からは多量の石と土器片が出土したため、図面作成と遺物取り上げには23号配石遺構と同様に時間がかかった。調査開始時から配石遺構として調査を進めていったが、敷石住居跡と判断されたのは調査もなかばをすぎた9月下旬に入ってからである。23号配石遺構と同様に、これが敷石住居跡となるとは調査初期の段階では想像もつかなかった。その後、他の配石遺構の調査を行い、10月中旬になって遺物の取り上げ作業を再開した。多量の石と土器片が出土したために、1/10図面もまた多量に作成しなければならなかった。12月に先端部の埋甕を検出し、写真撮影、図面の作成を行い、調査最終日に取り上げを行った。また敷石の総ての石も取り上げて調査を終了した。1軒の敷石住居跡の調査であったが、23号配石遺構と同様に多くの労力と時間をかけて実施した。

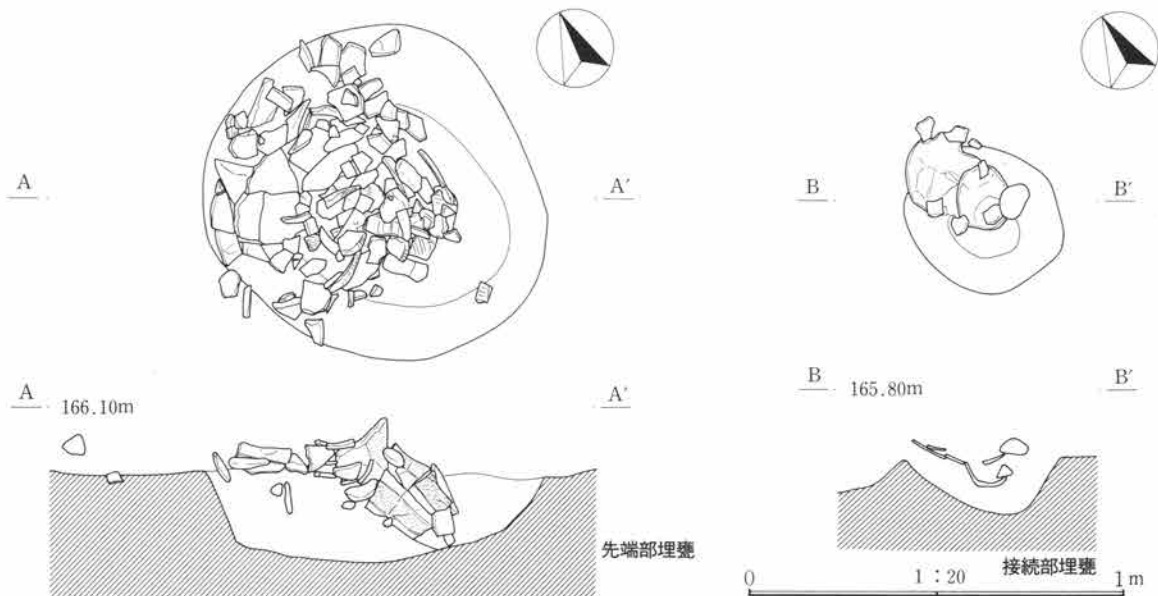
重複 なし。23号配石遺構に近接している。

覆土 主体部は掘り込みが確認された。覆土は暗褐色土層であり、やわらかくて締まり良く、粘性が非常にあった。

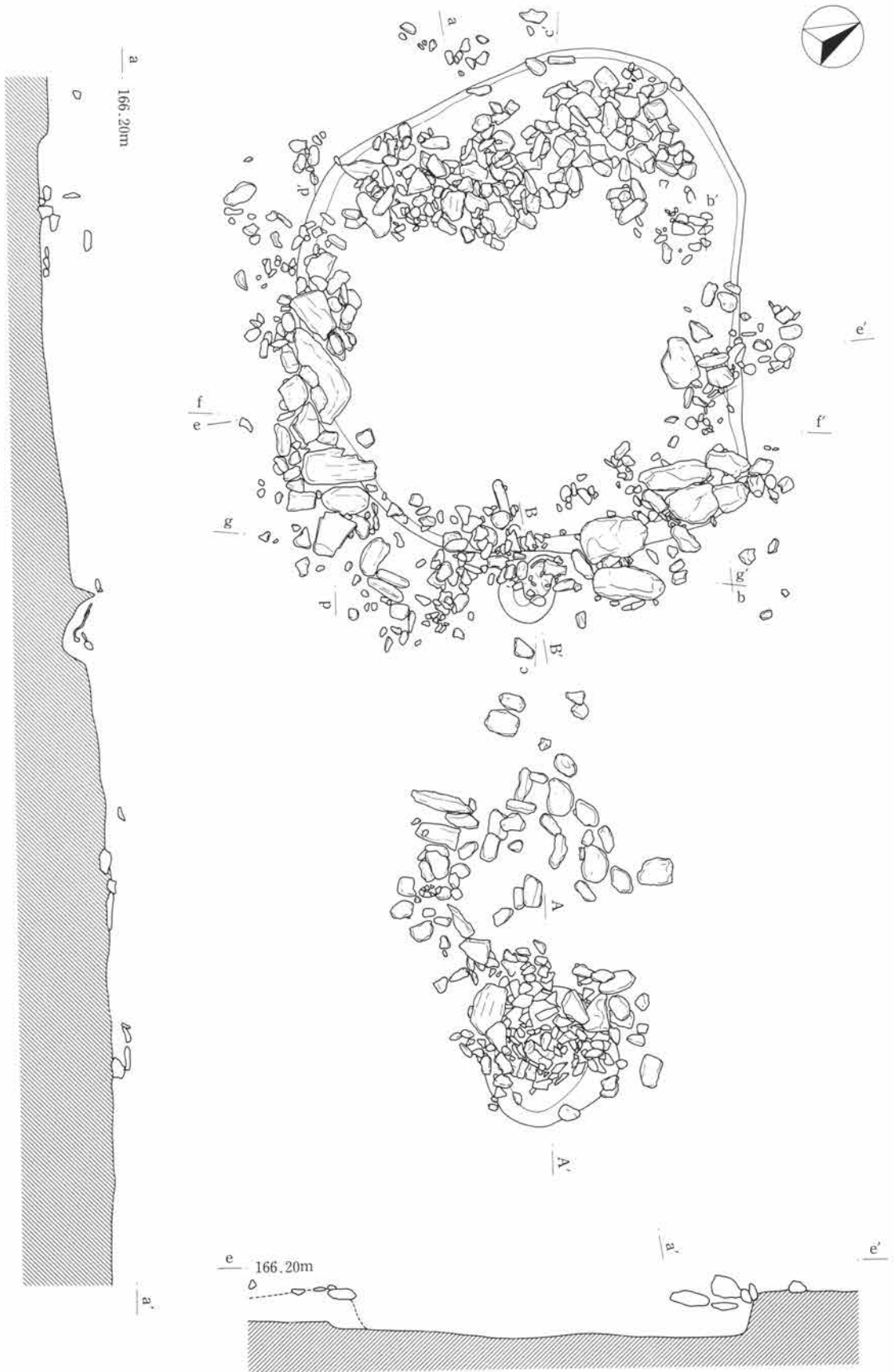
形状 柄鏡形敷石住居跡で全長7m20cmを測る。主体部の規模は長径3m80cm、短径3m20cmの方形を呈し、面積約9.5㎡。張出し部の規模は長径3m40cm、短径1m20cmで、面積約3.6㎡である。総面積は約13.1㎡になる。

敷石状況 主体部の縁石と張出し部の一部に敷石が施されているが、主体部内部には敷石は認められなかった。縁石は竪穴内に巡るのではなく、掘り込みの外側に巡らされたものであり、類例のない敷石状況である。北壁と西壁上に巡っていた縁石は、竪穴内部に崩れ混んだ状態で検出され、多量の石が使用されていた。東壁と南壁の縁石は大きな石が選定されているが、西壁の縁石はやや小さな石が主体的に選定されている。

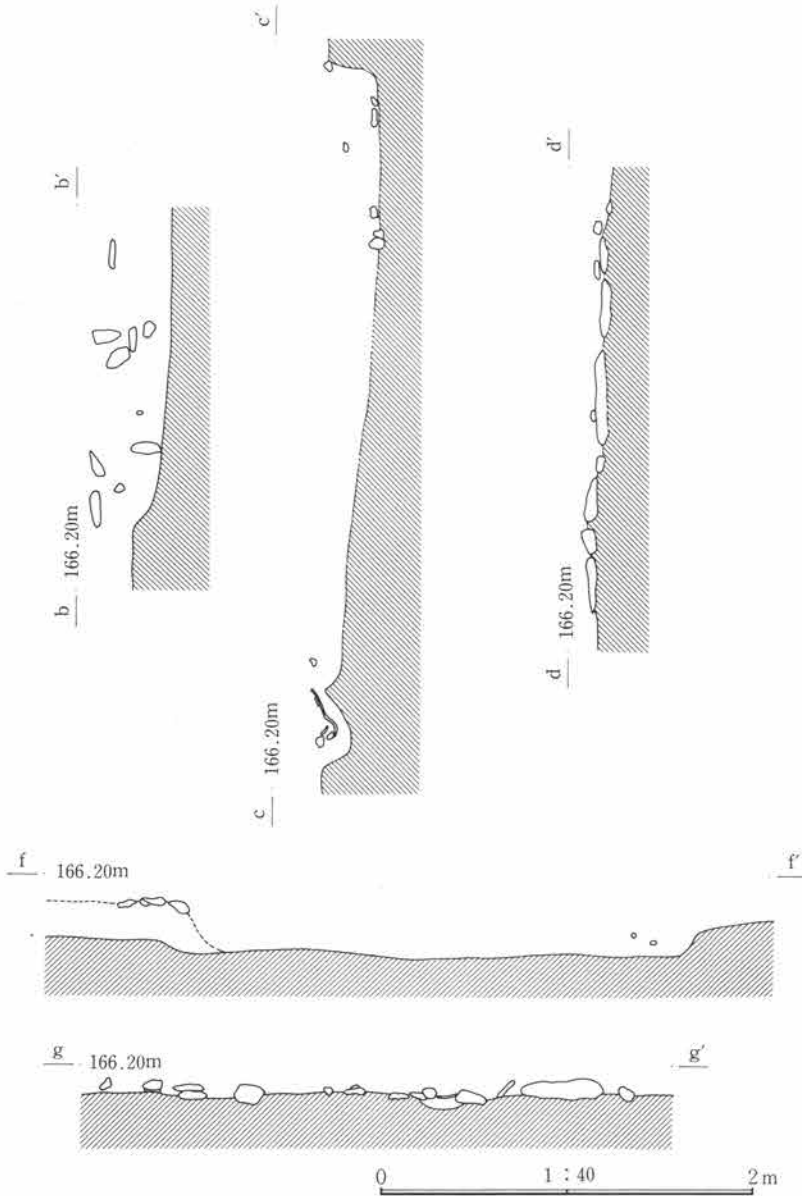
使用石材 敷石住居跡を構成している敷石は959点出土している。この石材別点数は、絹雲母石墨片岩299点（31.2%）、輝緑岩110点（11.5%）、点紋絹雲母石墨片岩107点（11.2%）、点紋緑泥片岩66点（6.9%）、珪石



第74図 24号配石遺構 先端部埋甕（左）・接続部埋甕（右）



第75図 24号配石遺構

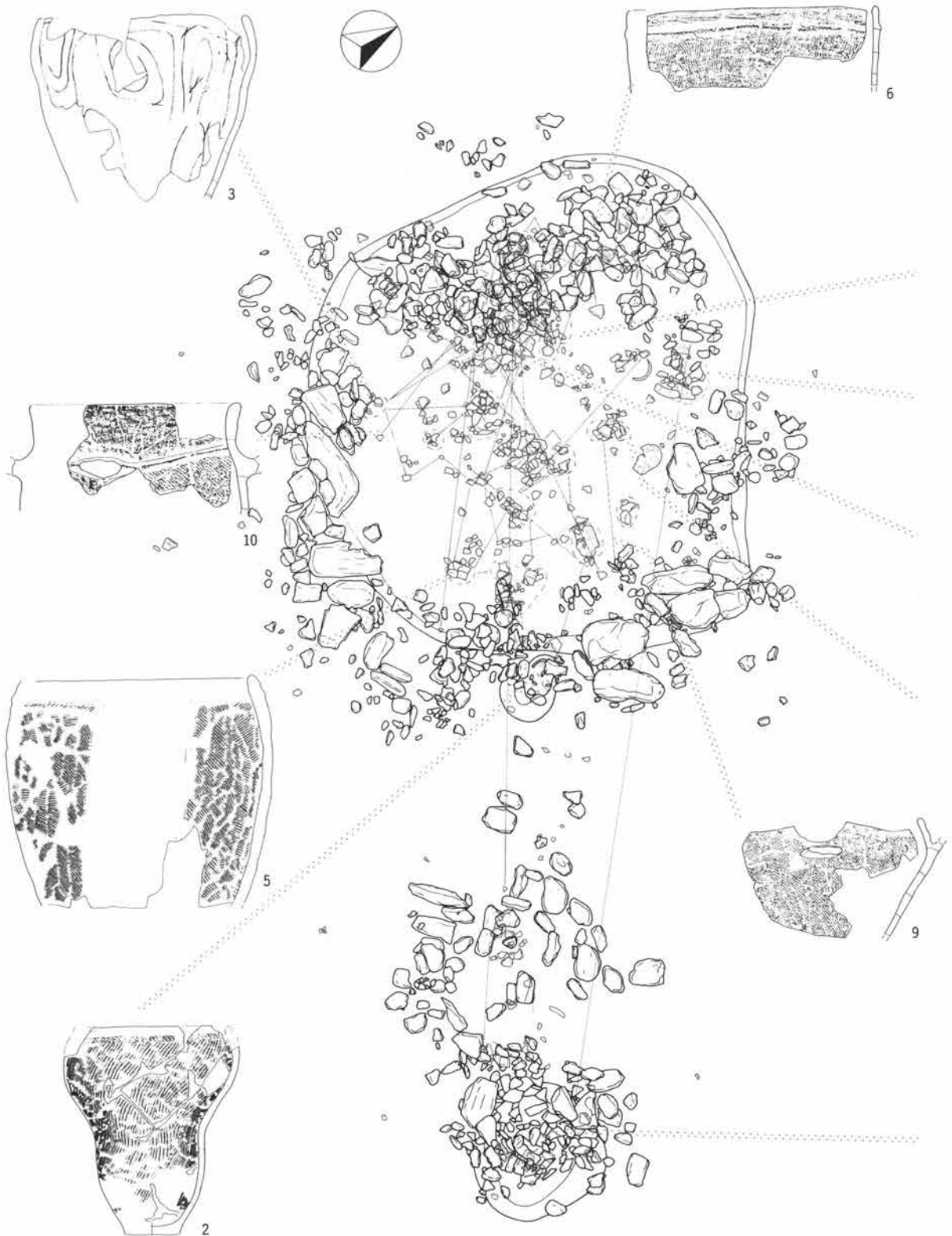


48点（5%）、緑泥片岩32点（3.3%）、石墨絹雲母片岩27点（2.8%）、輝岩20点（2.1%）、その他の石材186点（19.4%）であり、不明は64点（6.7%）を数えた。また覆土中の石は392点出土している。その石材別点数は絹雲母石墨片岩145点（37%）、輝緑岩44点（11.2%）、点紋緑泥片岩28点（7.1%）、珪石25点（6.4%）、点紋絹雲母石墨片岩17点（4.3%）、輝岩15点（3.8%）、絹雲母緑泥石片岩・点紋石墨緑泥片岩各14点（各3.6%）、その他の石材70点（17.9%）であり、不明は20点（5.1%）を数えた。

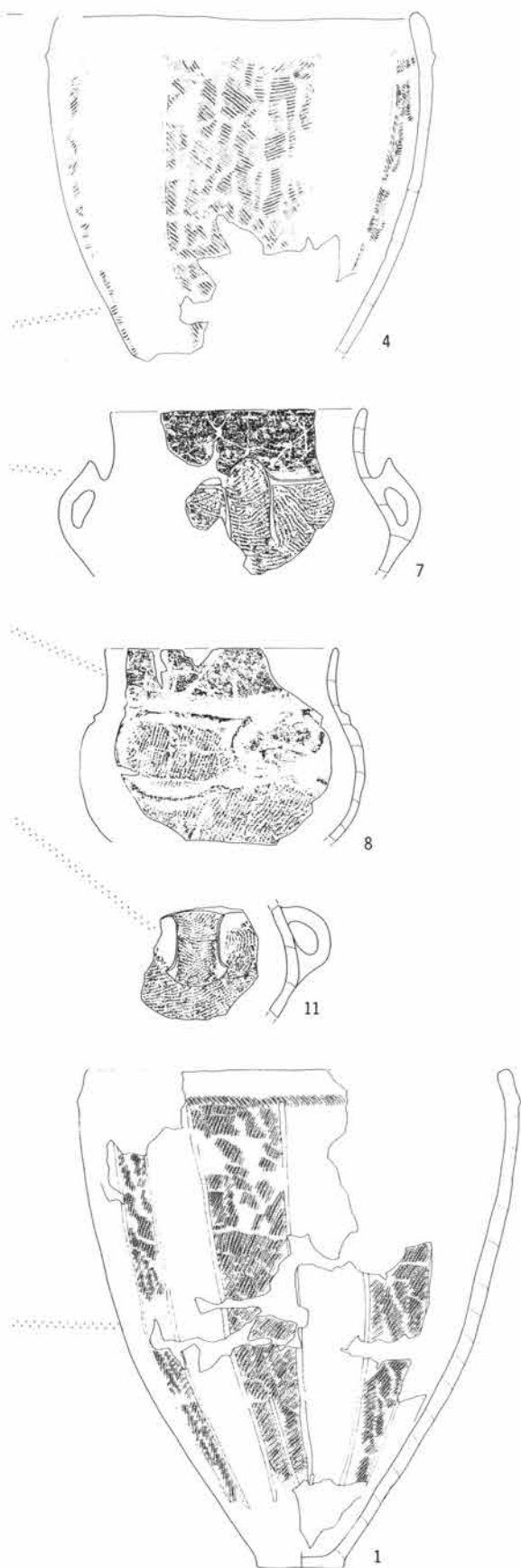
石材重量 重量の判明している石は888点である。その内訳は、500g未満の石550点（61.9%）、500g～1kg未満の石157点（17.7%）、1kg～2.5kg未満の石120点（13.5%）、2.5kg～5kg未満の石43点（4.8%）、5kg～7.5kg未満の石9点（1%）、10kg～20kg未満の石7点（0.8%）、7.5kg～10kg未満の石1点（0.1%）、20kg～30kg未満の石1点（0.1%）である。

壁高 10cm～28cmを測る。北壁が比較的残存状況は良かった。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第76図 24号配石遺構土器出土状況



柱穴 検出できなかった。

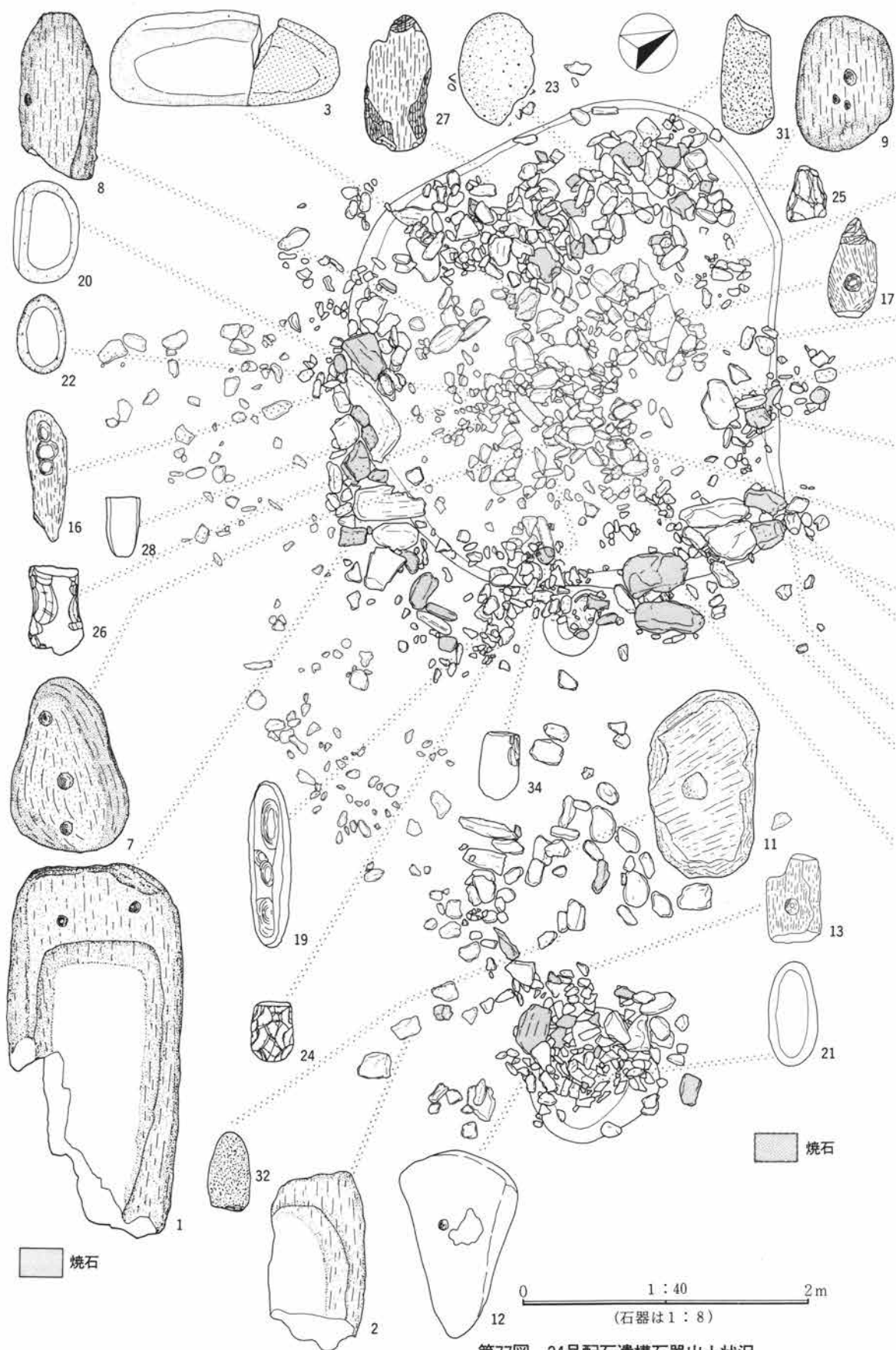
炉 検出できなかった。主体部内部に炉と断定できる遺構は存在しなかった。

埋甕 主体部と張出し部の接続部に1点(第80図2)、張出し部の先端部に1点(第80図1)の計2点が出土している。接続部の埋甕は口縁部の一部を欠損した加曾利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。埋設ピットは長径48cm・短径38cm・深さ15cmを測る。埋甕には蓋石が伴っていた。この蓋石は長径13cm・短径8cm・厚さ3cm・重量350gの絹雲母石墨片岩を使用していた。先端部の埋甕は口縁部の一部を欠損した大型の加曾利E4式土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた。土壌の規模は長径93cm・短径85cm・深さ30cmである。覆土は暗褐色土層であった。やや固く締めり粘性が非常にある。黄褐色土層を含み、炭化物粒子を極少量含んでいる。先端部埋甕については残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

張出し部 3m40cmの張出し部で明瞭な敷石が認められるのは、先端部埋甕の西1m40cmの範囲である。地山が砂礫層であったために、人為的な配石なのか自然の石の状態であるのか把握は困難を極めた。23号配石遺構の張出し部で見られたような大石を使用した敷石ではなかった。

遺物出土状況 埋甕2個体の他に、大形土器片9点が主体部から出土している。また口縁部63点、胴部416点、底部7点の計486点の土器片が主体部を中心に出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も若干含まれていた。

石器では石皿3点、多孔石8点、凹石7点、磨石5点、打製石斧4点、磨製石斧は未製品を含め7点が出土している。石皿2点は縁石として利用され、1点は先端部埋甕の南西から出土している。多孔石では3点が縁石として使用され、3点は主体部からの出土、1点は張出し部、1点は先端部埋甕に近接してそれぞれ出土している。凹石は3点が縁石中から、3点は主体部から、1点が先端

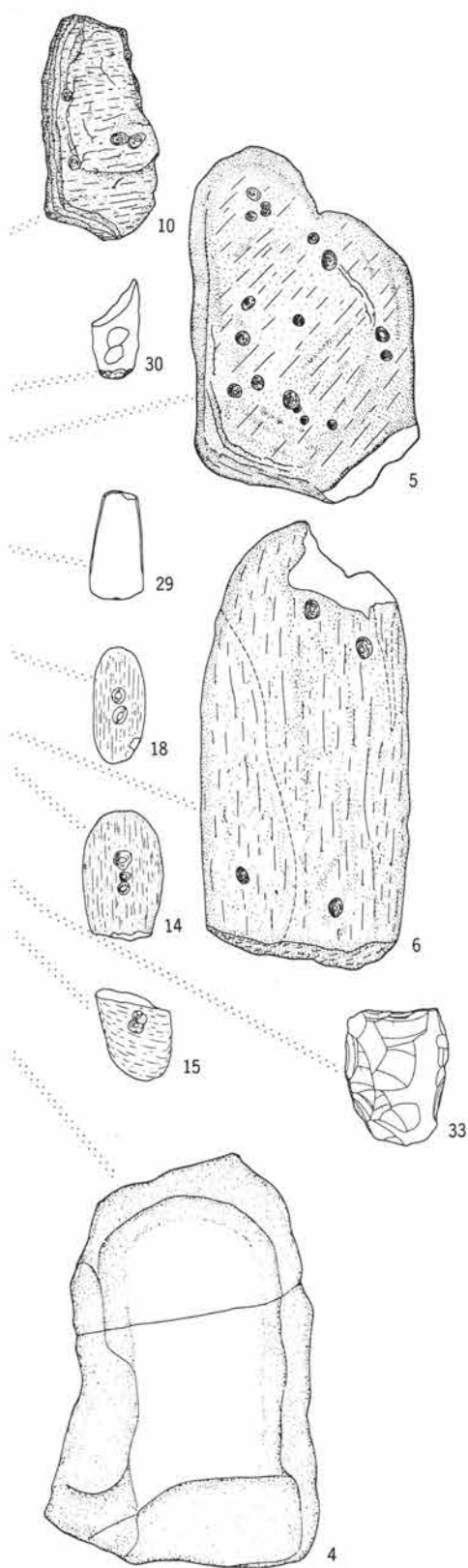


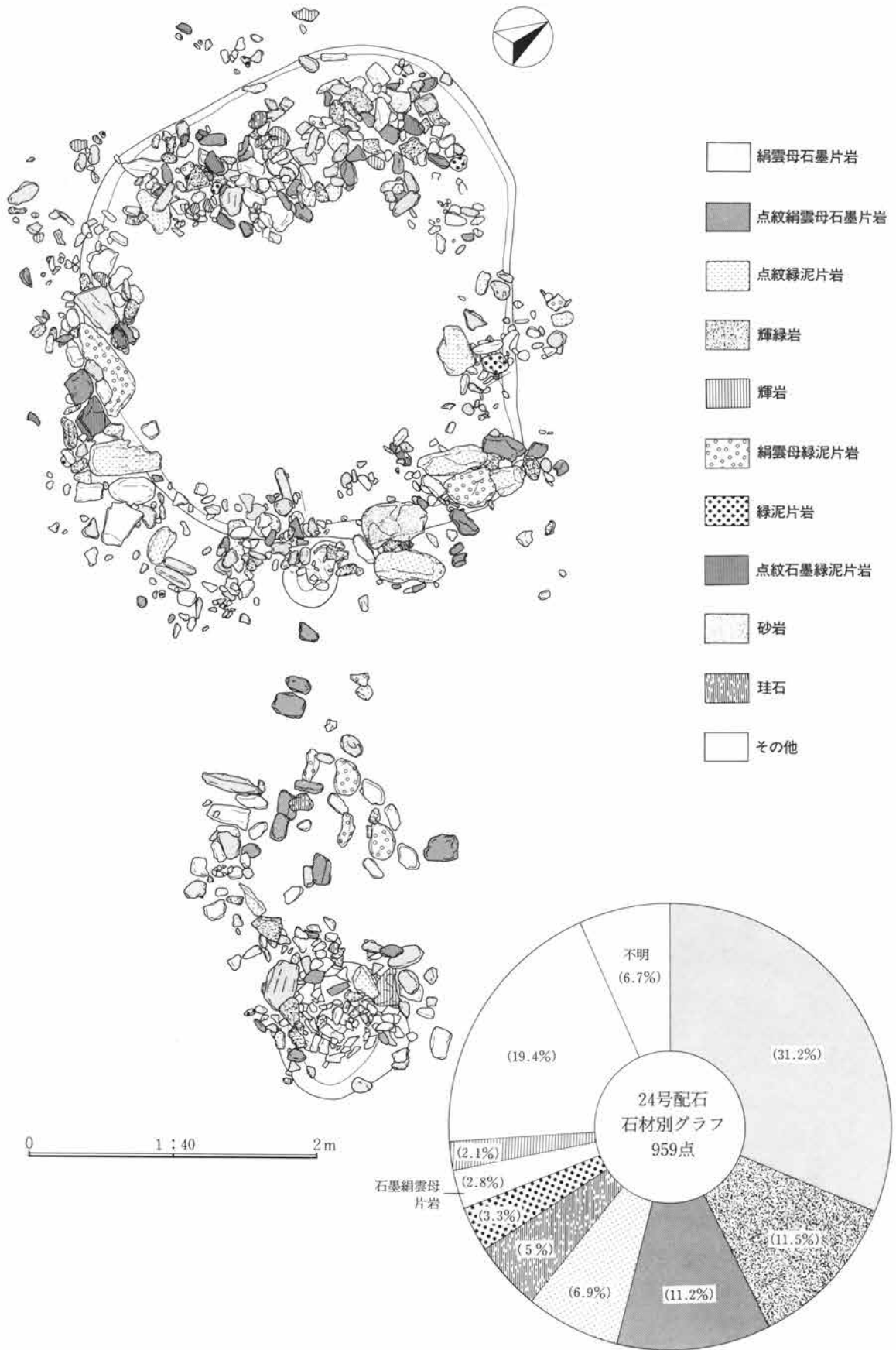
第77図 24号配石遺構石器出土状況

3 敷石住居跡〈24号配石遺構〉

部埋甕に近接してそれぞれ出土している。磨石は2点が縁石中から、2点は主体部から、1点が先端部埋甕周辺から出土している。敷石中の石器含有率は3.5%であった。また焼石は97点の出土で、5.3%を占めている。

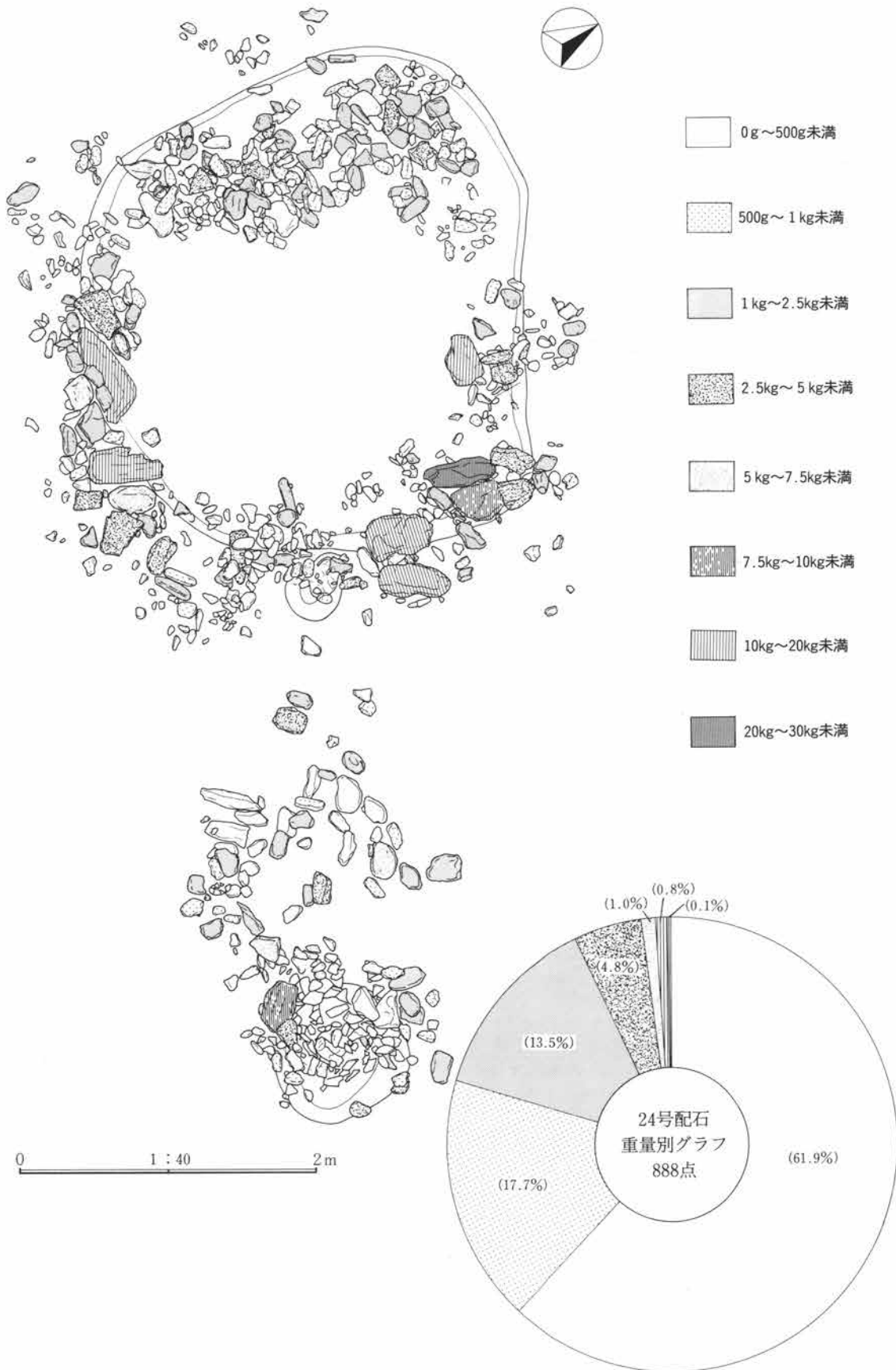
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。加曾利E3式期の敷石住居跡とは異なり、環状列石に近接して構築されている。主軸方向はN-67°-W。





第78図 24号配石遺構石材別分布

3 敷石住居跡 <24号配石遺構>

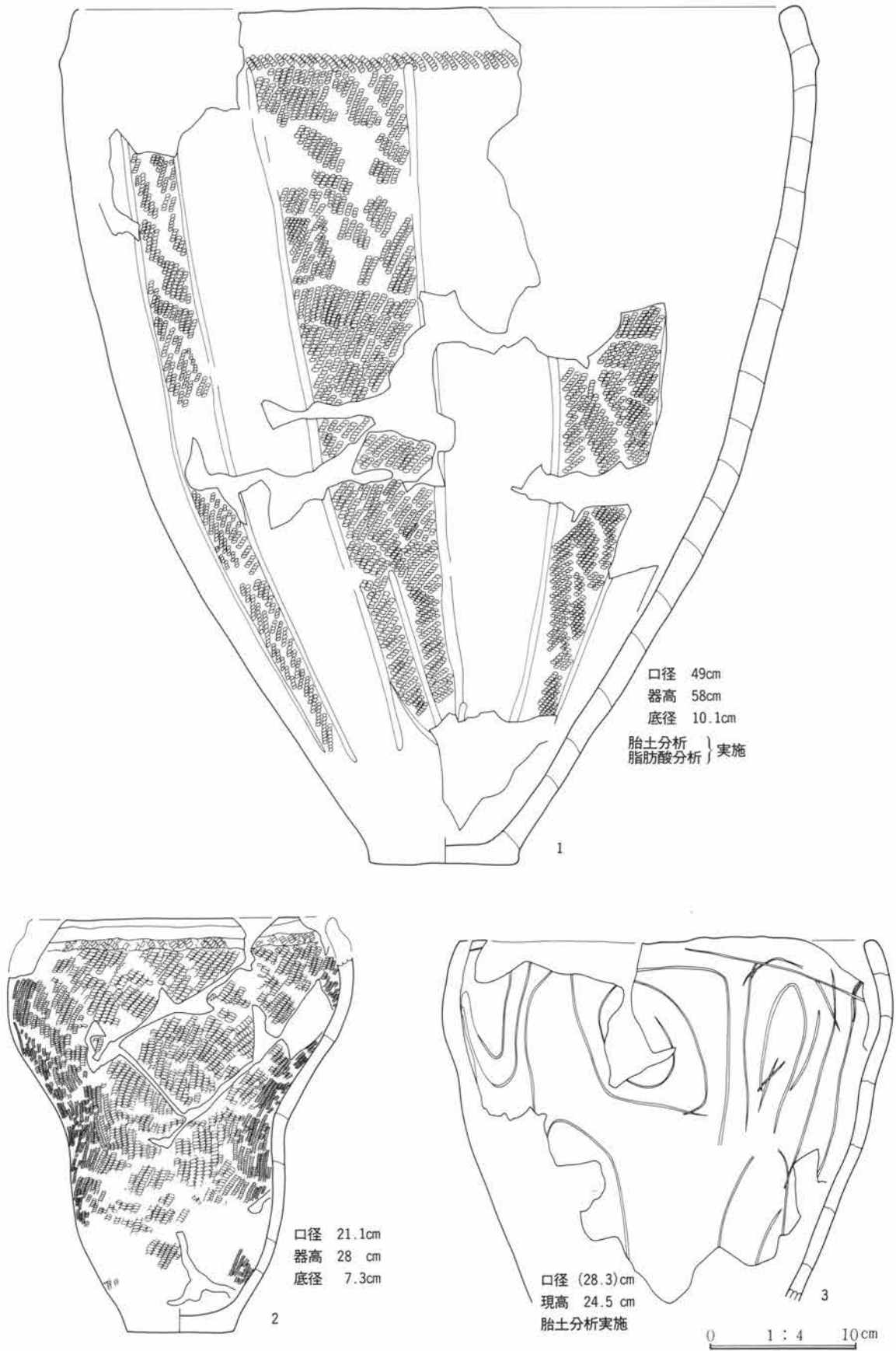


第79図 24号配石遺構重量別分布

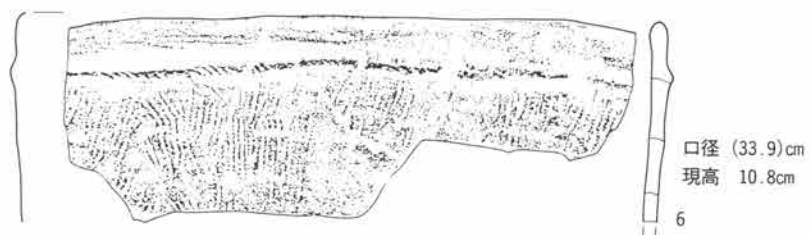
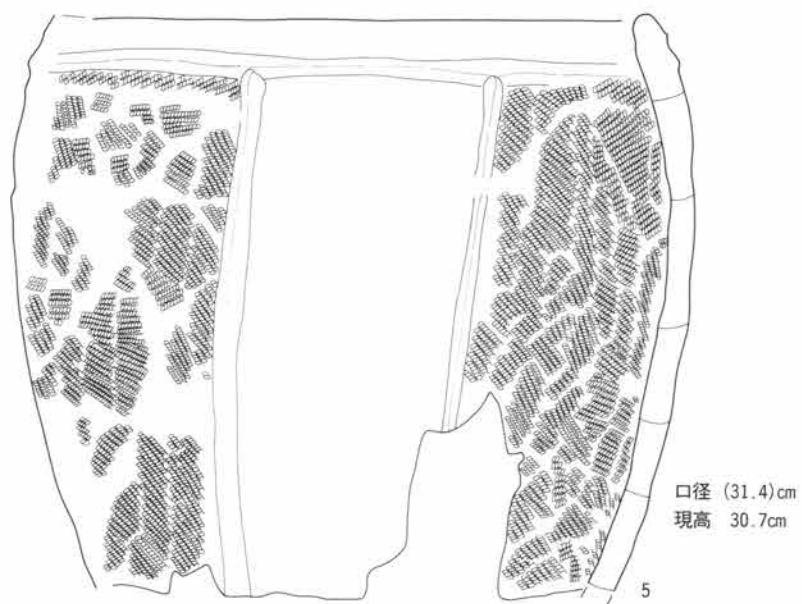
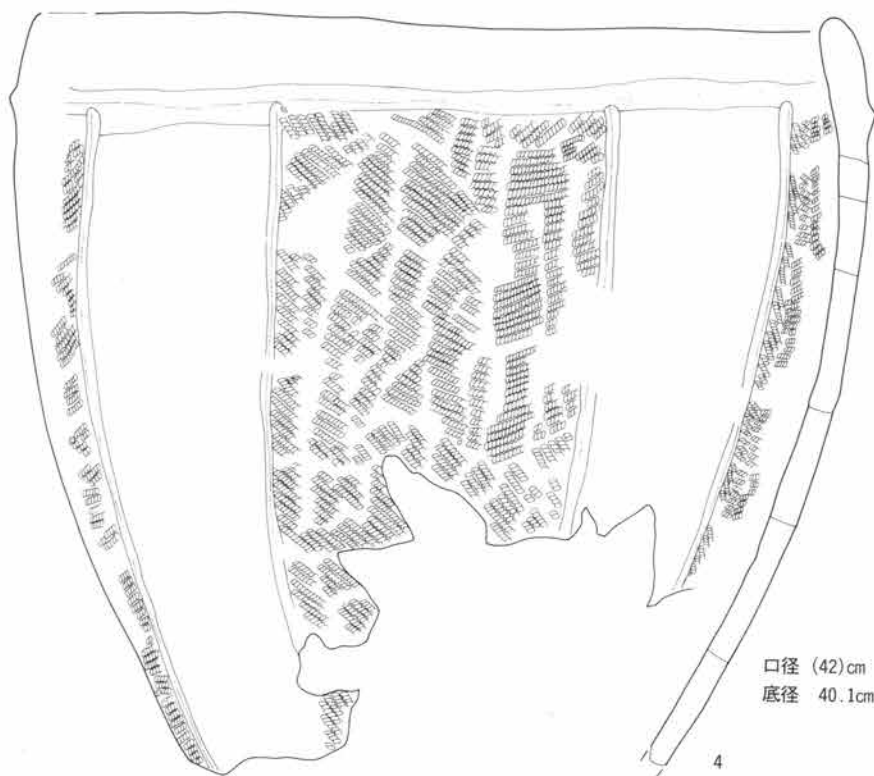
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

24号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|-----------------|--------------------|---|--|-----------------|
| 80-1 108 | 口縁 部一部欠 損 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部を一部欠損している。 器厚12~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は橙色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに 接続する沈線を垂下させ、区画内に縄文施 文。原体は微隆起帯上にR{↑横位、以下R {↑縦位。押圧が強い。 | 先端部埋壘 (斜位状態) |
| 80-2 108 | 口縁 部一部欠 損 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部を一部欠損している。 器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい黄橙色。 | 口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。口唇 部に幅の狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らせる。微隆起帯上にR{↑横位、以 下R{↑縦位がし。 | 接続部埋壘 (斜位状態) |
| 80-3 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚8~10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の細沈線を巡らせる。以下細沈線によ る文様が描かれている。 外面に煤が付着している。 | 主体部内部 |
| 81-4 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続す る微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はL{↑横・縦位がし。 | 主体部内部 |
| 81-5 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに 接続する微隆起帯を垂下させ、区画内に縄 文施文。原体はL{↑横・縦位。外面に煤。 | 主体部内部 |
| 81-6 108 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。 器厚7~10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にR{↑横位がし。 以下R{↑横・縦位がし。隣り合う節の傾が 異なる。縄文施文は乱雑。 | 主体部内部 |
| 83-7 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部に幅広い無文帯をおいて、1条の微 隆起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体は R{↑縦・斜位がし。肩部に橋状把手をも つ。 | 主体部内部 |
| 83-8 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚10mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部に幅広い無文帯をおいて、橋状把手 両端を連結するような微隆起帯を巡らせ る。区画の内外にR{↑縦位がし。肩部に橋 状把手をもつが剥落している。 | 主体部内部 |
| 83-9 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は橙色。 | 口縁部は内湾し、胴部中で括れる器形。橋 状把手をもつが剥落している。口唇部に狭 い無文帯をおいて、縄文施文。原体はL{↑ 横・縦位がし。 | 主体部内部 |
| 83-10 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らせる。肩部に橋状把手をもつが 剥落している。胴部に縄文施文。原体は L{↑縦位がし。 | 主体部内部 |
| 83-11 108 | 橋状 把手 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の橋状把手部分。 器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。肩部に橋状把手をもつ。胴部に 縄文施文。原体はR{↑。 | 主体部内部 |
| 83-12 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はL{↑縦位。 隣り合う節の傾きが異なる。 | 主体部縁石 |
| 83-13 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚9~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体はR {↑縦位がし。 | 主体部縁石 |
| 84-14 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚8~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体は R{↑縦位がし。 | 主体部内部 |
| 84-15 108 | 口縁 ~胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の口縁~胴部片。 器厚9~13mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐色。 | 口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らせる。肩部に橋状把手をもつが 剥落している。 | 張出し部 |

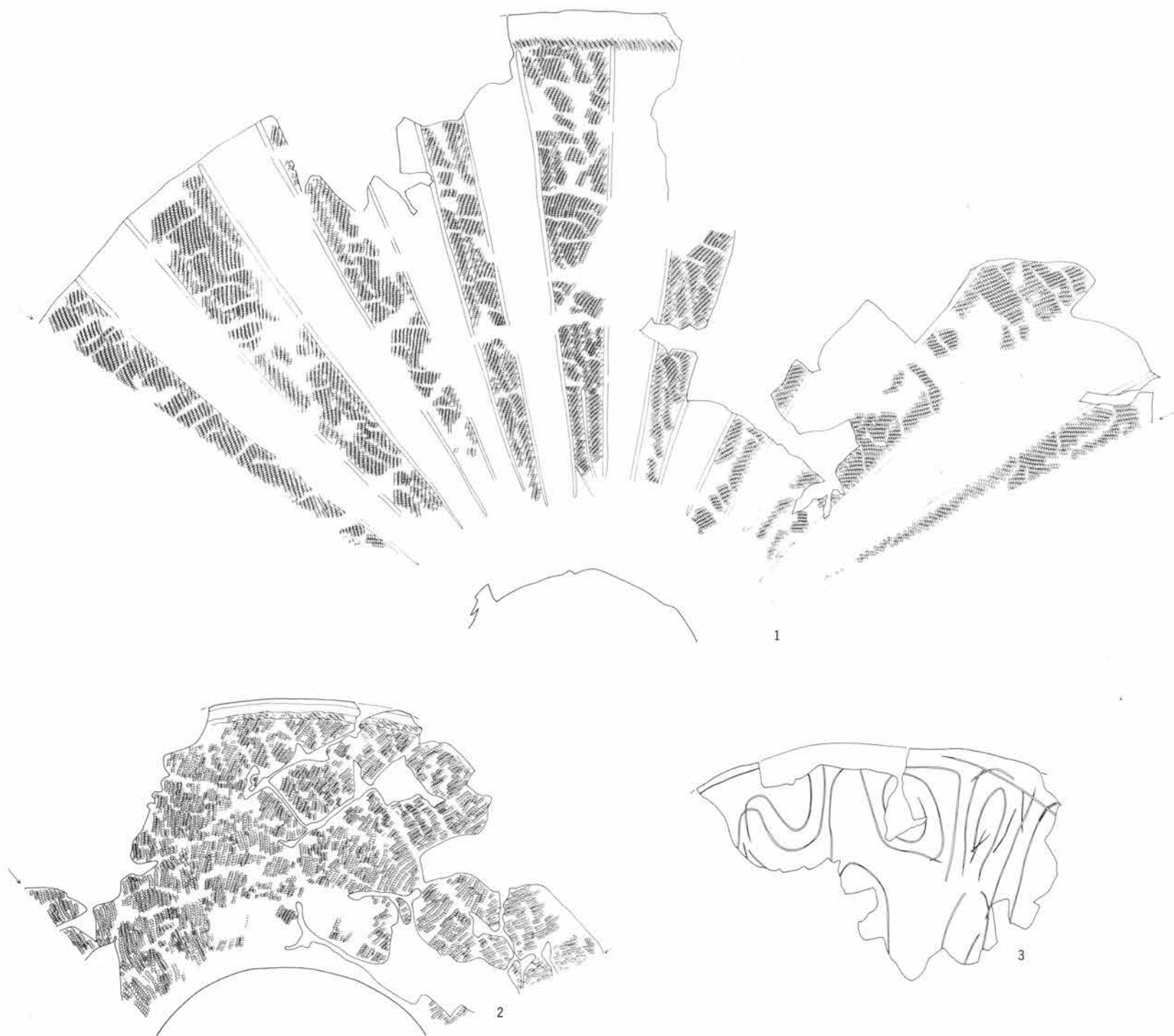


第80図 24号配石遺構出土土器(1)

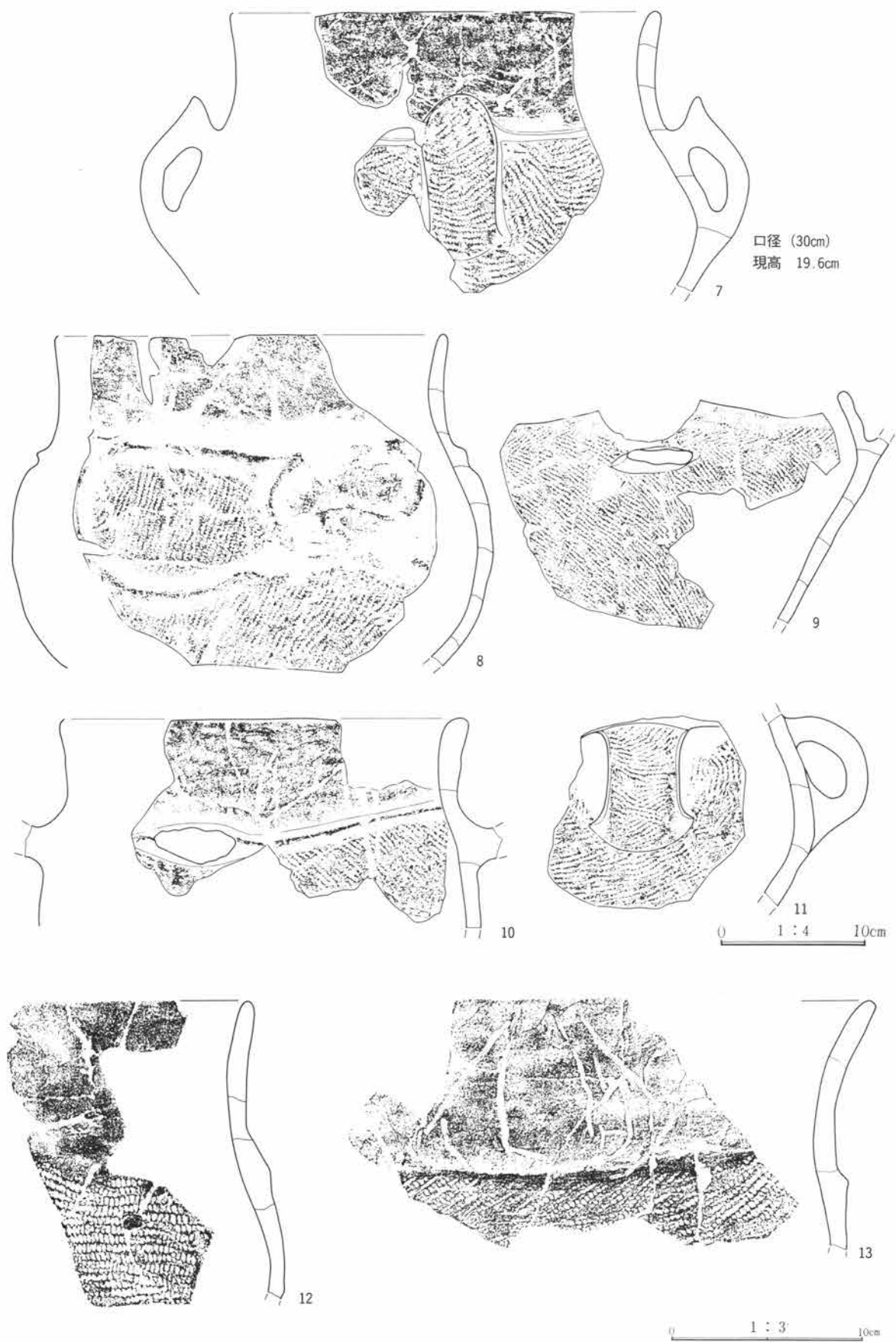


0 1 : 4 10cm

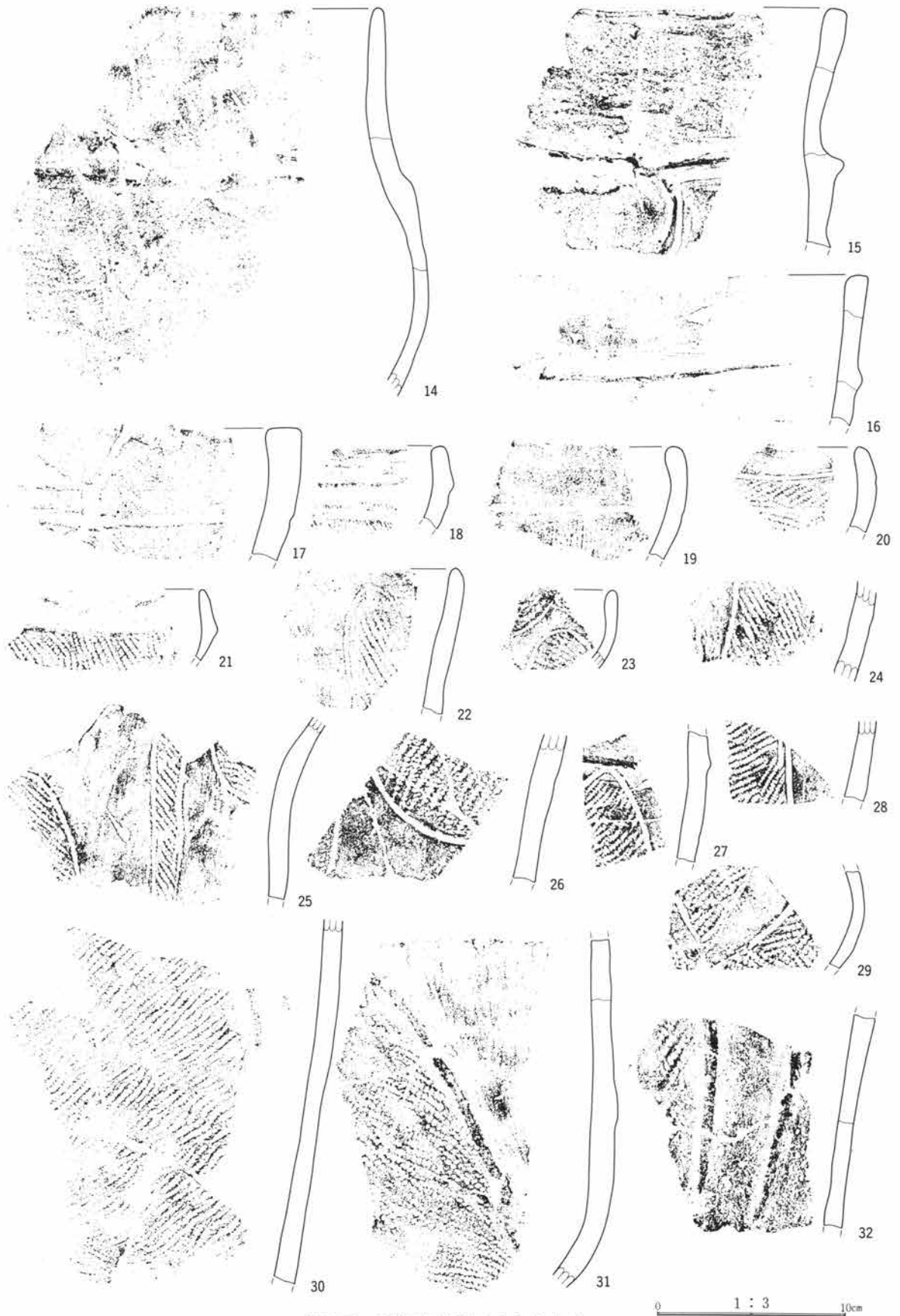
第81図 24号配石遺構出土土器 (2)



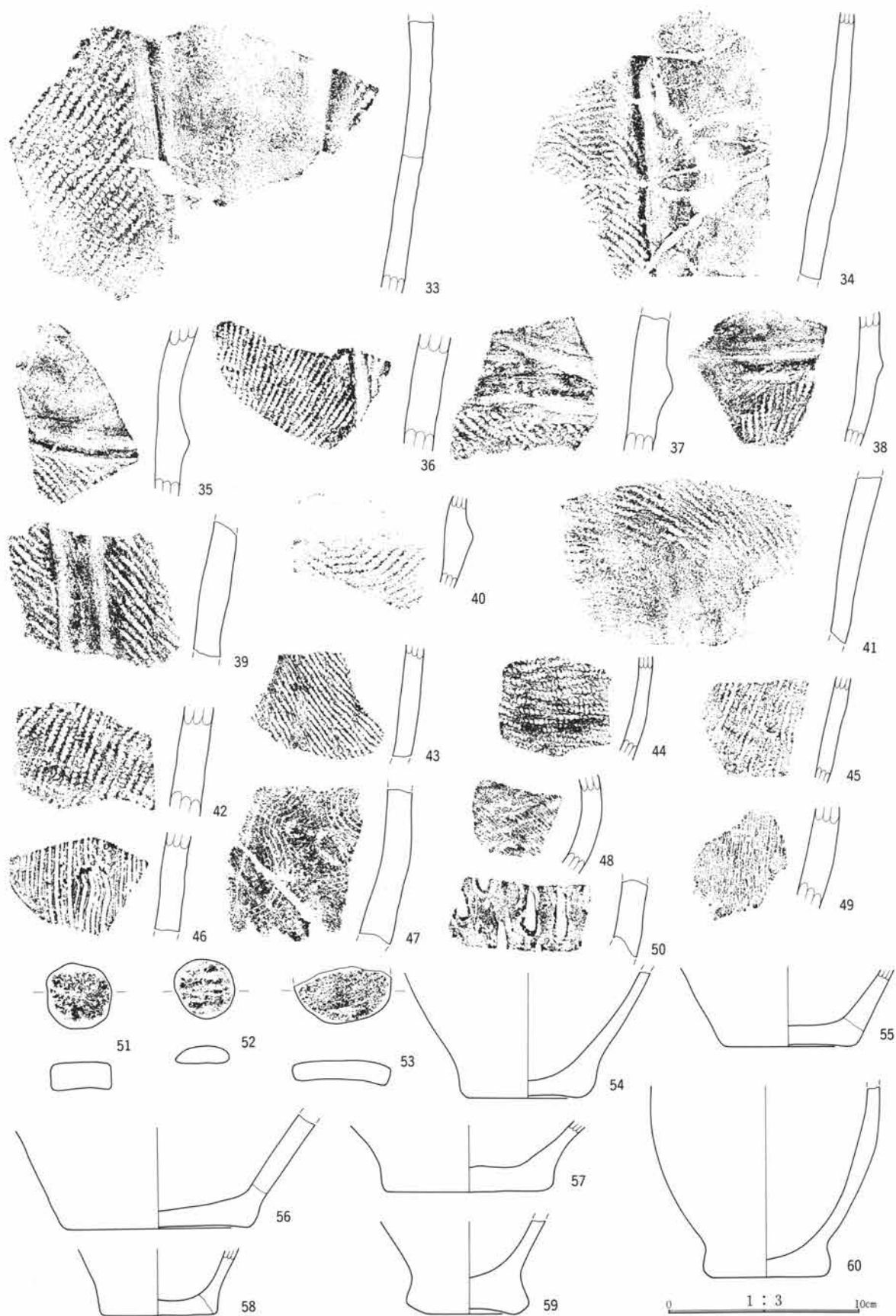
第82図 24号配石遺構出土土器展開図 (1/6)



第83図 24号配石遺構出土土器(3)



第84図 24号配石遺構出土土器(4)



第85図 24号配石遺構出土土器 (5)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

24号配石遺構土器観察表

| 図番 PL | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|--|--|-------|
| 84-16 108 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。胴部には細沈線による文様が描 かれ、区画内にR(↑)縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 84-17 108 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の沈線を巡ら せる。以下条線による文様が描かれる。 | 張出し部 |
| 84-18 108 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らせる。以下条線が施されている。 | 張出し部 |
| 84-19 108 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の沈線を巡らせる。以下条線が施され ている。 | 主体部内部 |
| 84-20 108 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の細沈線を巡らせる。縄文施文。 原体はR(↑)。 | 主体部縁石 |
| 84-21 108 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚は4~7mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は黒色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の微隆起帯を巡らせる。以下縄 文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 主体部内部 |
| 84-22 108 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8~10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 細沈線による「□」状の文様が描かれ、区 画内に縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 84-23 108 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。 | 口唇部に刺突と細沈線を巡らせ、以下「□」 状の細沈線による文様を描き、区画内に縄 文施文。原体はL(↑)縦転。外面に煤付着。 | 主体部内部 |
| 84-24 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はL(↑)縦転がし。土器面は柔軟。 | 主体部内部 |
| 84-25 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。 | 胴部で括れる器形。細沈線による文様が描 かれ、区画内に縄文施文。原体はL(↑)。 外面に煤が付着している。 | 主体部縁石 |
| 84-26 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 84-27 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。胴部に細沈線による文様が描か れ、区画内に縄文施文。原体はR(↑)縦転。 | 主体部内部 |
| 84-28 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はR(↑) (0段多条) 縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 主体部内部 |
| 84-29 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗褐色。 | 胴部で括れる器形。細沈線による「V」字 状等の文様が描かれ、区画内に縄文施文。 原体はR(↑)縦・横転がし。内面に煤付着。 | 主体部縁石 |
| 84-30 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はR(↑)。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 主体部内部 |
| 84-31 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はL(↑)。 | 主体部縁石 |
| 84-32 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | 主体部内部 |
| 85-33 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 85-34 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はL(↑)。 | 主体部内部 |

3 敷石住居跡 <24号配石遺構>

24号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|--|--|------------|
| 85-35 108 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器(両耳壺)の口縁～胴部片。 器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転 がし。 | 主体部内部 |
| 85-36 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 主体部内部 |
| 85-37 108 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は黒褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転 がし。 | 主体部南 |
| 85-38 108 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 。 | 主体部内部 |
| 85-39 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。 | 沈線を垂下し、縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転 がし。 | 張出し部 |
| 85-40 108 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 。 | 主体部内部 |
| 85-41 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 内面に炭化物が付着している。 | 先端部埋塞 |
| 85-42 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 85-43 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 主体部内部 |
| 85-44 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 。 | 主体部内部 |
| 85-45 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 主体部南西 部 |
| 85-46 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 条線が施されている。 | 主体部北西 部 |
| 85-47 108 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13～16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 条線による文様が施されている。 | 張出し部 |
| 85-48 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 条線が施されている。 | 張出し部 |
| 85-49 108 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。 | 条線が施されている。 | 主体部縁石 |
| 85-50 108 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 押し引き状の沈線が施されている。 | 主体部内部 |
| 85-51 108 | 土製 円盤 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 胴部片を利用。厚さ13mm。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 重量20g。 | 主体部縁石 |
| 85-52 108 | 土製 円盤 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 胴部片を利用。厚さ9mm。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 重量7g。 | 主体部内部 |
| 85-53 108 | 土製 円盤 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 土製円盤の破片。胴部片を利用。厚さ10mm。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。 | 重量(15)g | 主体部縁石 |
| 85-54 109 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径68mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 底部周縁が磨耗している。 | 主体部内部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

24号配石遺構土器観察表

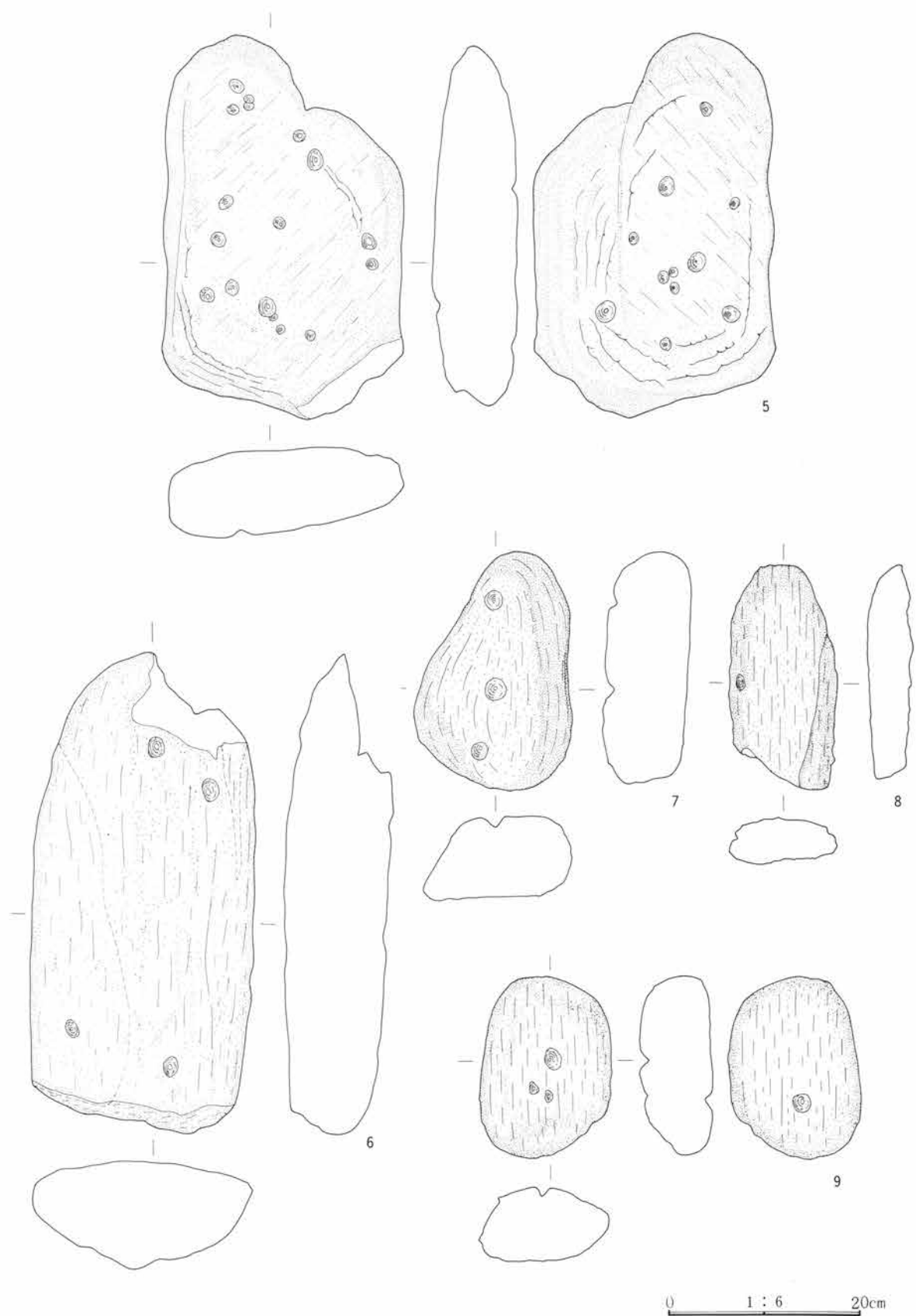
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|---|--|-------|
| 85-55 109 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 主体部縁石 |
| 85-56 109 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径98mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 主体部内部 |
| 85-57 109 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径87mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | | 主体部内部 |
| 85-58 109 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径59mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 主体部内部 |
| 85-59 109 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 底径60mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。 | 細沈線による「V」字状の文様を描き、縄 文施文。原体はL(袋縦転がし。 | 主体部内部 |
| 85-60 109 | 胴部 ～底 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部～底部片。底径65mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は暗褐色。 | 細沈線による「V」字状の文様を描き、縄 文施文。原体はL(袋縦転がし。 | 主体部内部 |

24号配石遺構石器観察表

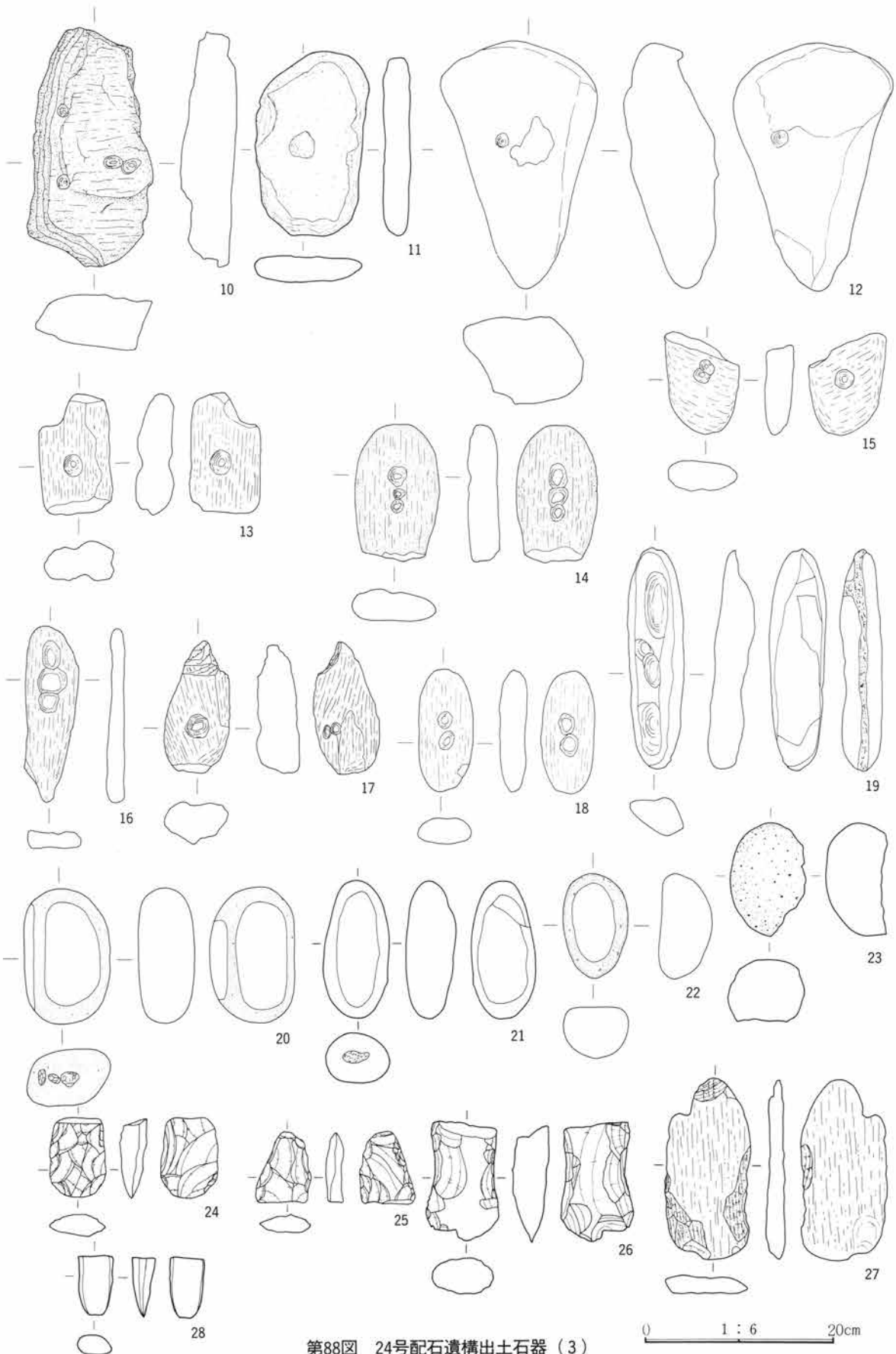
| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|-----------|------------|--------|------|----------|---|--------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 86-1 109 | 石 皿 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (51.3) | 24.1 | 6.6 | (13,350) | 長方形で窪みは浅い。両面に磨面を有するが、使用痕跡はほとんどない。片面に2個の凹み。平均は長15mm、短15mm、深4mmである。 | 南壁の縁石 |
| 86-2 109 | 石 皿 | 部分 | 点紋緑泥片岩 | (24.9) | (13.6) | 6.7 | (3,460) | 石皿の破片。裏面に凹みを有する。凹みは3個。 | 先端部埋 壘の南西 |
| 86-3 109 | 磨石 | ほぼ完形 | 安山岩 | 31.7 | 13.2 | 13.1 | 8,950 | 両面に磨耗痕がみられる。20号配石の磨石と接合。 | 主体部の 覆土 |
| 86-4 109 | 石 皿 | ほぼ完形 | 砂岩 | 45.0 | 31.1 | 8.9 | 12,300 | 長方形で窪みは浅い。裏面に7個の凹み。最大の凹みは長22mm、短22mm、深2mm。最小は長13mm、短13mm、深2mm。平均長17mm、短15mm、深3mm。 | 東壁の縁 石 |
| 87-5 109 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 38.9 | 24.9 | 9.0 | 13,800 | 両面に28個の凹み。最大の凹みは長22mm、短22mm、深6mm。最小は長11mm、短6mm、深3mmで、平均は長15mm、短12mm、深3mm。 | 北壁の縁 石 |
| 87-6 110 | 多孔石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | 49.1 | 23.0 | 11.2 | (20,100) | 片面に4個の凹み。最大は長23mm、短17mm、深8mm。最小は長19mm、短12mm、深3mmで、平均は長21mm、短16mm、深5mm。一部被熱。 | 東壁の縁 石 |
| 87-7 109 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 24.5 | 16.2 | 8.9 | 5,100 | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長25mm、短22mm、深12mm。最小は長20mm、短18mm、深10mmで、平均は長22mm、短20mm、深11mm。 | 主体部の 覆土 |
| 87-8 110 | 多孔石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (23.0) | 11.1 | 4.9 | (1,600) | 片面に1個の凹みがある。長径、短径ともに17mm、深さ6mmである。一部焼けている。 | 主体部の 覆土 |
| 87-9 110 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 18.5 | 13.7 | 7.5 | 2,900 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長22mm、短17mm、深11mm。最小は長13mm、短9mm、深6mmで、平均は長17mm、短14mm、深8mm。 | 北壁の縁 石 |
| 88-10 110 | 多孔石 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 24.8 | 13.1 | 5.5 | 2,450 | 片面に4個の凹み。最大の凹みは長21mm、短15mm、深4mm。最小は長14mm、短13mm、深2mmで、平均は長19mm、短13mm、深3mm。 | 主体部の 覆土 |
| 88-11 110 | 多孔石 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 19.2 | 12.0 | 2.8 | 1,120 | 片面に1個の凹みがある。長径28mm、短径27mm、深2mmである。凹石の凹みとは異なる。 | 張出し部 |
| 88-12 110 | 多孔石 | ほぼ完形 | 輝緑岩 | 25.4 | 16.5 | 9.9 | 4,500 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径15mm、深さ9mmである。凹石の凹みとは異なる。 | 先端部埋 壘付近 |
| 88-13 110 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 12.5 | 7.6 | 4.2 | 600 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径24mm、短径22mm、深さ7mmである。 | 先端部埋 壘の周辺 |
| 88-14 110 | 凹石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (14.2) | 9.0 | 3.3 | (700) | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深2mm。最小は長13mm、短11mm、深1mmで、平均は長19mm、短13mm、深2mm。 | 東壁の縁 石中 |
| 88-15 110 | 凹石 | 1/2 | 絹雲母石墨片岩 | (10.6) | 8.0 | 3.2 | (380) | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長21mm、短19mm、深2mm。最小は長17mm、短12mm、深1mmで、平均は長18mm、短14mm、深1mm。 | 主体部の 覆土 |



第86図 24号配石遺構出土石器 (1)

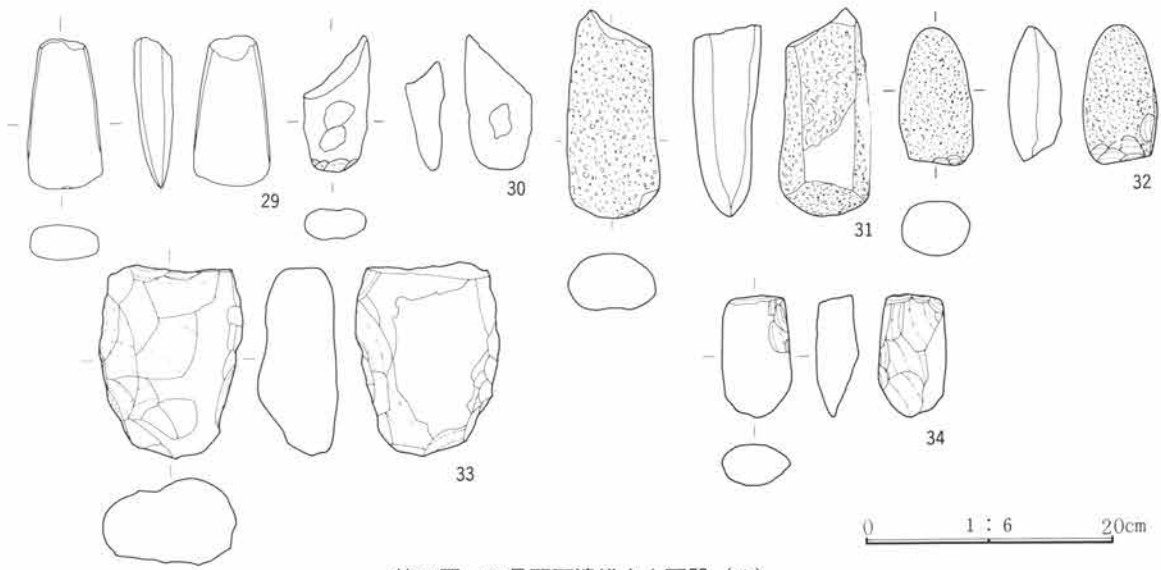


第87図 24号配石遺構出土石器(2)



第88図 24号配石遺構出土石器 (3)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



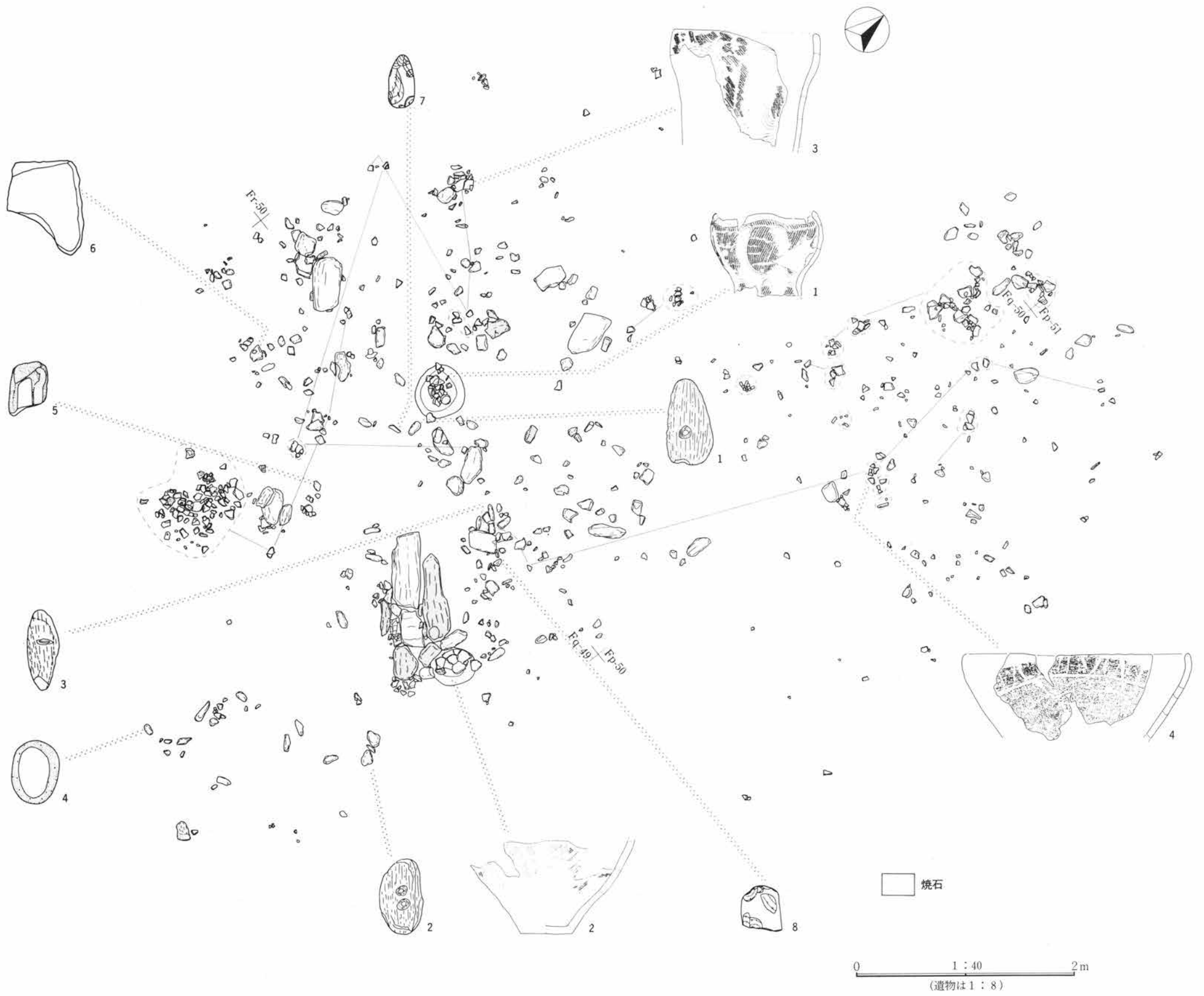
第89図 24号配石遺構出土石器（4）

24号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|-----------|--------------|-------|-----|---------|---|--------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 88-16 110 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 18.5 | 5.5 | 2.0 | 350 | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長30mm、短27mm、深4mm。最小は長21mm、短20mm、深2mmで、平均は長27mm、短22mm、深3mm。 | 南壁の緑石中 |
| 88-17 110 | 凹 石 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | 13.7 | 6.9 | 4.4 | (700) | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長26mm、短23mm、深4mm。最小は長12mm、短11mm、深1mmで、平均は長18mm、短14mm、深2mm。 | 主体部の覆土 |
| 88-18 110 | 凹 石 | 完形 | 絹雲母片岩 | 12.6 | 5.6 | 2.6 | 400 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短19mm、深0.5mm。最小は長18mm、短15mm、深1mmで、平均は長21mm、短16mm、深0.6mm。 | 主体部の覆土 |
| 88-19 110 | 凹 石 | 完形 | 輝岩 | 23.3 | 5.8 | 4.9 | 800 | 片面に4個の凹み。また両面には磨耗がみられ、側面には敲打痕がみられる。凹石、磨石、敲石として機能。 | 主体部の覆土 |
| 88-20 110 | 磨 石 | 完形 | 流紋岩 | 14.2 | 9.0 | 6.0 | 1,050 | 器面に磨耗痕と敲打痕。一部焼けている。 | 緑石中 |
| 88-21 110 | 敲 石 | 完形 | 斑筋岩 | 14.3 | 6.9 | 5.8 | 820 | 一端に敲打痕。 | 先端部埋土 |
| 88-22 110 | 磨 石 | 完形 | 安山岩 | 11.1 | 6.7 | 5.6 | 520 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 主体部覆土 |
| 88-23 110 | 磨 石 | 欠 | 流紋岩 | 11.8 | (8.1) | 6.5 | (810) | 器面に磨耗痕がみられる。 | 緑石中 |
| 88-24 110 | 打製石斧 | 基部欠損 | 熱変成岩 | (7.7) | 5.9 | 2.5 | (170) | バチ (II b)。 | 張出し部 |
| 88-25 110 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 熱変成岩 | (7.6) | 5.7 | 1.8 | (110) | バチ (II b)。 | 緑石中 |
| 88-26 110 | 打製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (12.4) | 7.7 | 3.8 | (520) | 分銅 (I)。 | 主体部覆土 |
| 88-27 110 | 打製石斧 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 18.7 | 9.0 | 2.0 | 480 | 分銅 (I?)。両側のえぐりほとんど施されず未成品の可能性。 | 緑石中 |
| 88-28 110 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 角閃岩 | (6.2) | 3.6 | 2.4 | (100) | 磨き段階。 | 主体部覆土 |
| 89-29 110 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (11.8) | 6.1 | 3.0 | (400) | 磨き段階。ほぼ全面磨かれている。 | 緑石中 |
| 89-30 110 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝岩 | (10.6) | 5.3 | 3.5 | (200) | 磨き途中。両面に粗割り痕残す。 | 主体部覆土 |
| 89-31 110 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (16.4) | 7.4 | 5.3 | (1,100) | 敲打段階。 | 緑石中 |
| 89-32 110 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (10.9) | 6.0 | 4.3 | (420) | 磨き段階 (?)。風化激しく磨きの区別困難。 | 張出し部 |



第90図 26号配石遺構



第91図 26号配石遺構遺物出土状況

24号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|-----|------------|------|-----|---------|-----------------------|-------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 89-33 110 | | 一端欠損 | 輝緑岩 | (15.3) | 11.7 | 6.8 | (2,000) | 粗割り途中。 | 縁石中 |
| 89-34 110 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (9.6) | 5.6 | 3.5 | (320) | 磨き途中。片面かなりの部分に粗割り痕残す。 | 接続部埋 葬近く |

26号配石遺構 (第90～98図、PL. 37・38、110・111)

位置 Fq-49・50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西47m (炉までの距離)、列石からは27m50cmの所、23号配石遺構の西南西9m (炉から炉までの距離) に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。環状列石の周辺に調査が及んだ6月に、多数の配石遺構を検出した。21号～27号・41号の各配石遺構がこれに該当する。当遺構周辺からは多量の石と土器片が出土し、配石遺構として調査を開始した。遺構を掘り下げ、図面作成と遺物取り上げを行う過程で、炉跡の検出と張出し部先端の埋甕の存在から、当遺構が柄鏡形敷石住居跡となることが判明した。7月に遺構の写真撮影を実施し、その後、他の遺構の調査に入った。9月中旬から遺物取り上げを再開し、11月になって敷石住居跡の石の取り上げを始めた。中旬には張出し部の石の取り上げ、炉体土器の実測作業と取り上げを行い、他の配石遺構の調査と同様に敷石を構成する総ての石を取り上げ、調査を終了した。

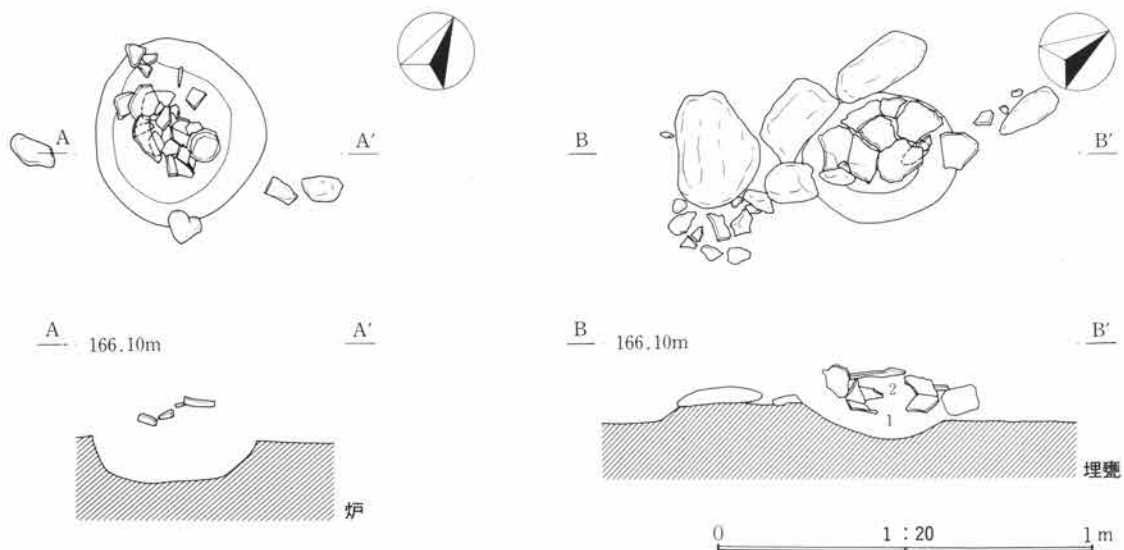
重複 なし。41号配石遺構に近接している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状 柄鏡形敷石住居跡で全長4m80cmを測る。主体部の規模は推定長径3m40cm、推定短径3m30cmを呈し、推定面積は約8.4m²である。張出し部の規模は長径1m40cm、短径60～80cmで、面積約1.6m²である。総面積は約10m²となる。

敷石状況 張出し部の敷石は明瞭であるが、主体部の敷石は乱雑であった。主体部内部には当初から敷石は存在せず、縁石だけと考えられるが、この縁石も当初の姿を留めてはいない。しかしこの縁石の同レベルの拡散から判断して、当柄鏡形敷石住居跡の掘り込みは存在しなかったものと考えられる。

使用石材 33種類の石材が確認された。300点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩87点(29%)、閃緑岩26点(8.7%)、珪石21点(7%)、輝岩18点(6%)、点紋緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩各14点(各4.7%)、輝緑岩13点



第92図 26号配石遺構 炉 (左)・埋甕 (右)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

(4.3%)、緑泥片岩9点(3%)、砂岩8点(2.7%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・チャート各7点(各2.3%)、変斑礫岩6点(2%)、絹雲母緑泥片岩・赤色珪質板岩・斑礫岩・石墨片岩・絹雲母片岩各4点(各1.3%)、点紋絹雲母緑泥片岩3点(1%)、緑簾緑泥片岩・安山岩・紅簾絹雲母片岩・角閃岩・熱変成岩・緑色珪質板岩・紅簾絹雲母石墨片岩各2点(各0.7%)、石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・脆雲母石墨片岩・硬砂岩・凝灰岩・頁岩・珪岩各1点(0.3%)であり、不明は19点(6.3%)を数えた。300点中162点(54%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は321点である。その内訳は、500g未満の石224点(69.8%)、500g～1kg未満の石49点(15.3%)、1kg～2.5kg未満の石28点(8.7%)、2.5kg～5kg未満の石7点(2.2%)、5kg～7.5kg未満の石6点(1.9%)、10kg～20kg未満の石4点(1.2%)、20kg～30kg未満の石2点(0.6%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.3%)である。

壁高 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

柱穴 検出できなかった。 **炉** 埋甕炉である。炉体土器を埋設するピットの大きさは、長径50cm・短径46cm・深さ22cmである。面積は約0.17㎡である。覆土は黒褐色土層であった。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締まりは良くない。粘性もあまりない。小石と極微量の炭化物粒子を含んでいる。焼土は検出できなかった。

炉体土器は胴下半分を欠損した加曾利E4式土器(第95図1)であり、潰れた状態で出土した。

埋甕 張出し部の先端から底部を転用した埋甕1個体が斜位状態で検出された(第95図2)。埋設ピットの周囲には4個の石が配置されている。埋設ピットは長径40cm・短径34cm・深さ20cmであり、覆土は黒褐色土。

第1層 黒褐色土層 やや固く締まり、粘性が少しある。小石を含む人為的埋土。

埋甕は底部を転用したものであり、覆土は暗褐色土層であった。

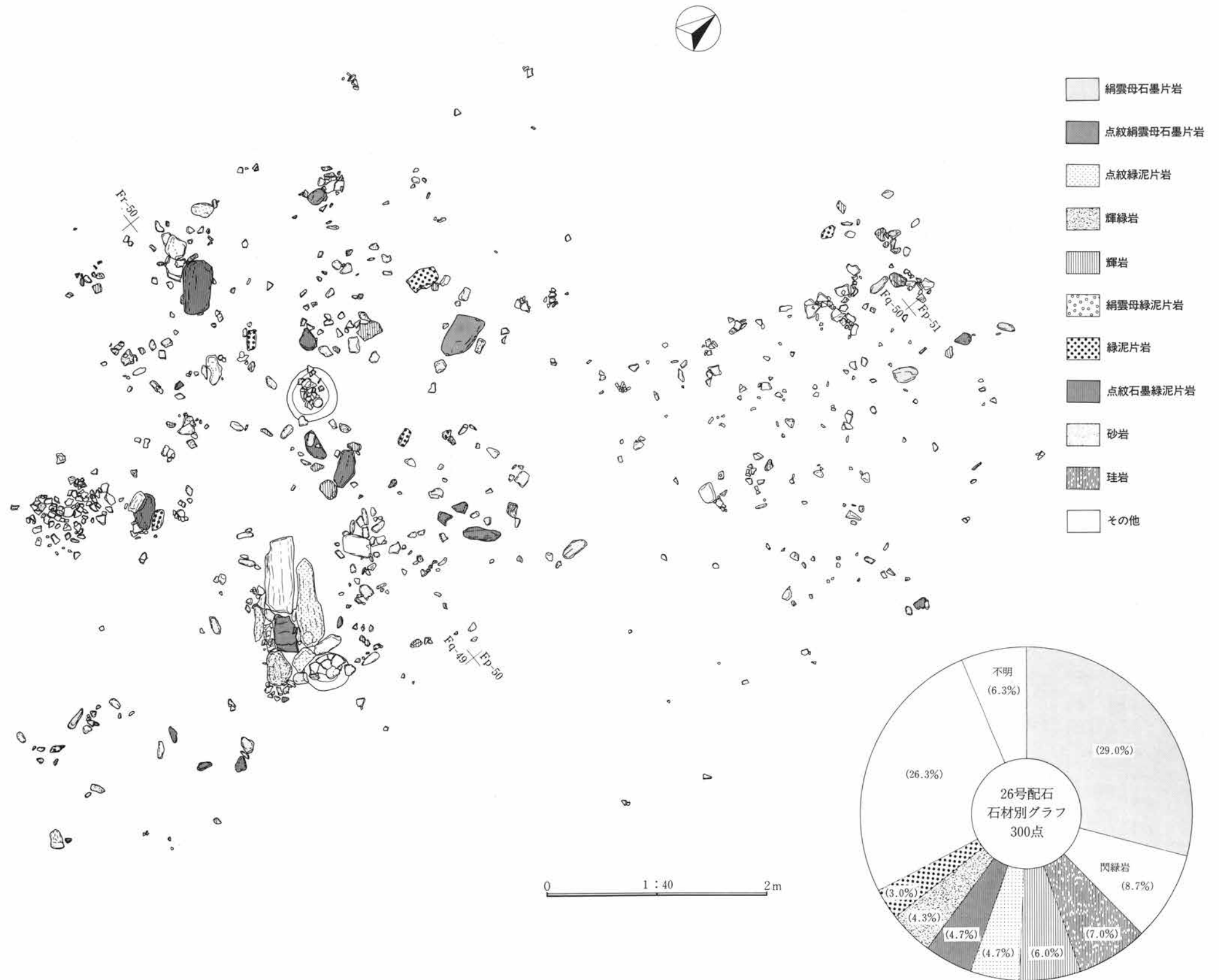
第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性はあまりない。小石2個が入っていた。蓋石の役割をしていたものであろうか。

張出し部 長径1m40cm、短径60cm～80cmの範囲に敷石が施されている。この敷石は6点の石とその間隙に小石を詰めて構築されており、先端部の埋甕の周囲には4点の石を配置している。6点の敷石中、最大の石は長径81cm・短径24cm・厚さ11cm・重量24.1kgの点紋緑泥片岩の焼石である。敷石平均では、長径46.6cm・短径19.2cm・厚さ5cm・重量9.4kgとなる。6点中3点は焼石であった。

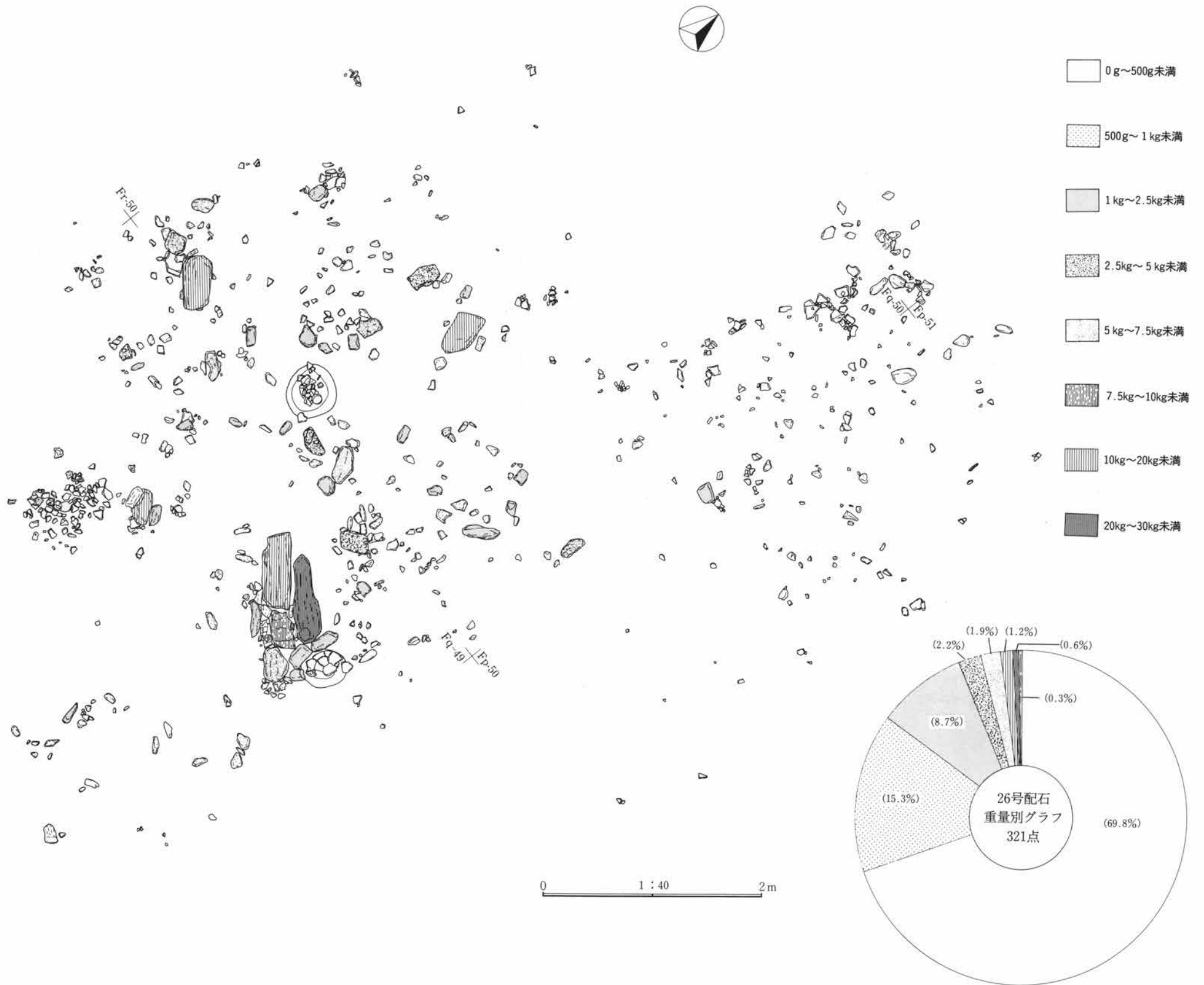
遺物出土状況 炉体土器と埋甕の他には、大形破片2個体、口縁部39点、胴部314点、底部6点が敷石住居跡内外から出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も多量に含まれていた。第91図の遺物出土状況図から解るように、土器の接合関係は広範囲に認められる。このことは当住居の廃絶後、かなりの部分が破壊を受けたことを物語るものであろう。このことはまた縁石の乱雑さからも読み取ることができる。しかし破壊の手は張出し部と炉には及んでいない。

石器では凹石2点、石棒(?)1点、磨石1点、砥石2点、打製石斧1点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。凹石1点は炉の近くから、もう1点は張出し部の南から出土し、石棒と思われるものは主体部の縁石中から、磨石1点は張出し部の南2m40cm、砥石2点は主体部の縁石中、打製石斧1点は炉の近く、磨製石斧1点は張出し部の北からそれぞれ出土している。石器含有率は2.7%であり、また焼石は300点中18点、6%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。同時期の柄鏡形敷石住居跡である23号・24号配石遺構と近接して構築されている。主軸方向はN-49°-W。



第93図 26号配石遺構石材別分布

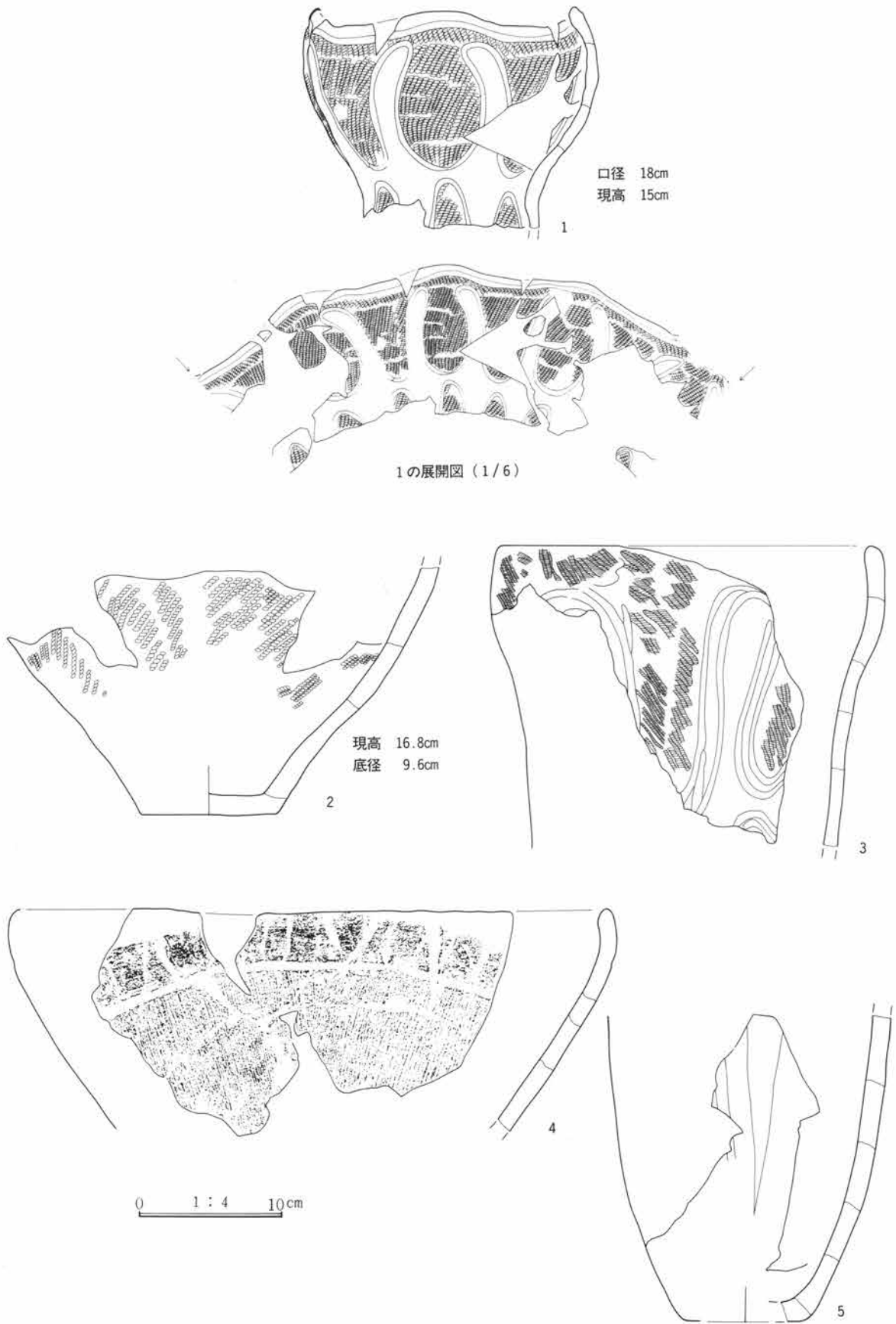


第94図 26号配石遺構重量別分布

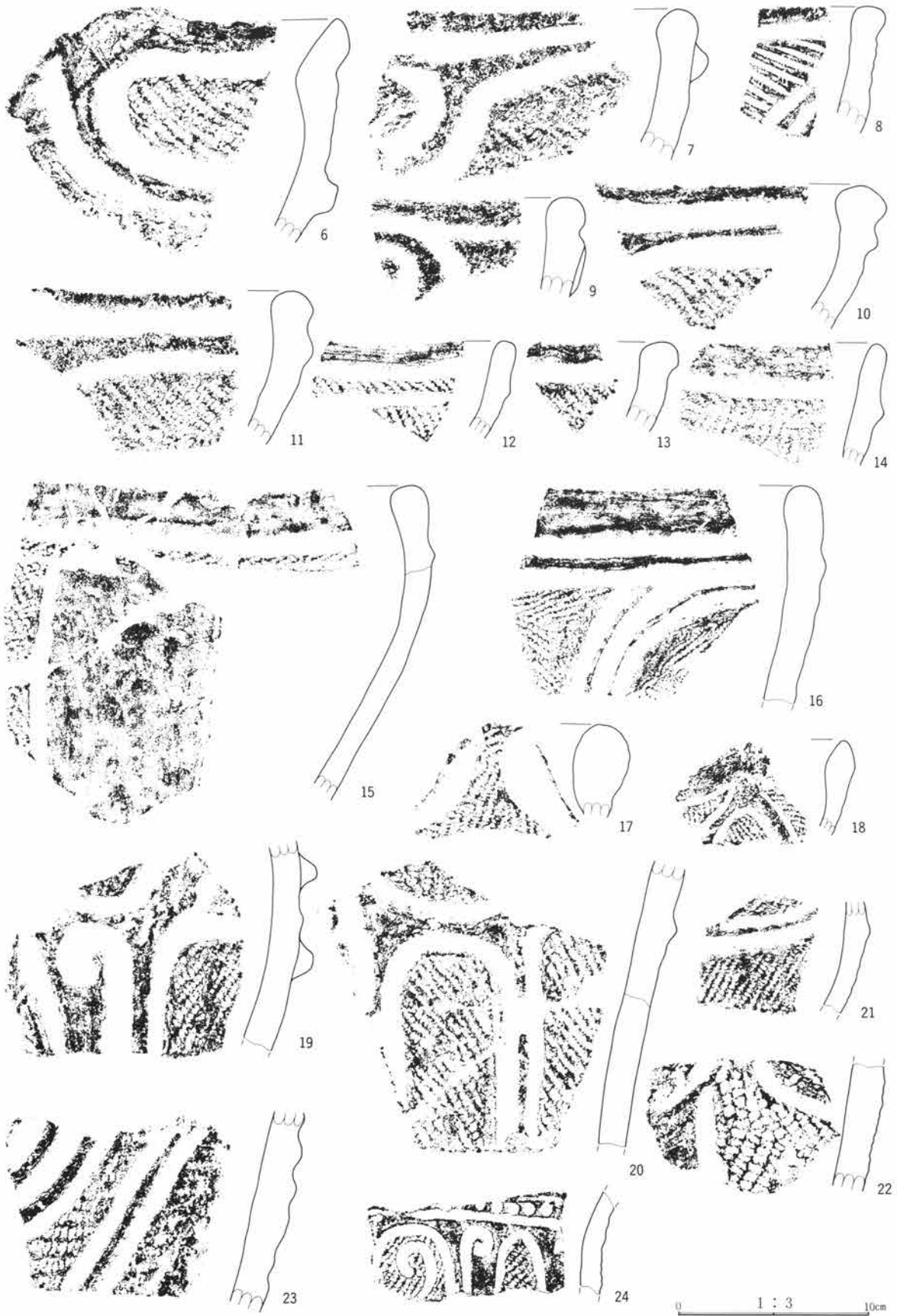
3 敷石住居跡 (26号配石遺構)

26号配石遺構土器観察表

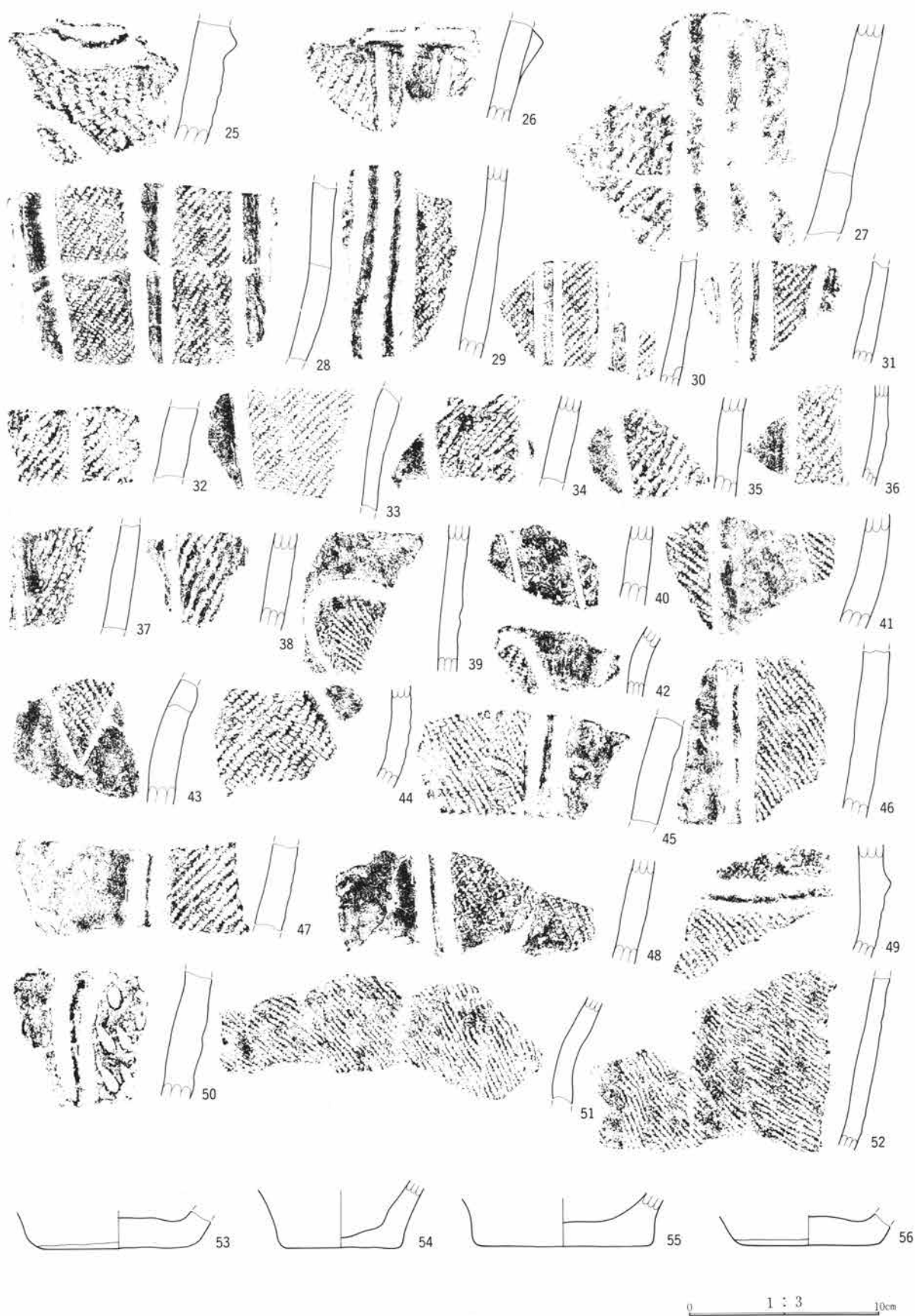
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|---|--|-----------------|
| 95-1 111 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴下半部欠損。 器厚6～10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。4単 位の波状口縁を呈する。口唇部に狭い無文 帯をおき、1条の沈線を巡らせる。胴部上 半に「V」字状・「U」字状の区画、胴下半 部に「∩」状の区画、区画内にR{↑}。外面 煤付着。 | 炉体土器 |
| 95-2 111 | 底部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部。底径96mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR{↑}縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 先端部埋塞 (斜位状態) |
| 95-3 111 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。 器厚10mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部はやや内湾する。胴部上半は二重の 沈線による波状文が描かれ、縄文施文。原体 はL{↑}縦転がし。胴下半部には二重の沈線 による「∩」状の文様。外面に煤が付着。 | 主体部の縁 石 |
| 95-4 111 | 口縁 ～胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚10mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の沈線を巡らせる。以下縦位の条線が 施されている。 | 主体部東部 |
| 95-5 111 | 底部 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線が施されている。内面に煤が付着して いる。 | 主体部南部 |
| 96-6 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14～22mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる文様が描かれ、縄文施文。原体はR{↑} 横転がし。 | 主体部北東 部 |
| 96-7 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部はやや内湾する。口縁部に隆帯と沈 線による文様が描かれ、縄文施文。原体は R{↑}横転がし。 | 主体部北東 部 |
| 96-8 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 沈線が施されている。 | 張出し部 |
| 96-9 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15～20mm。 内面は荒れている。 外面の色調は橙色、内面は黄褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による文様が描かれて いる。 | 張出し部 |
| 96-10 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる文様が描かれ、縄文施文。原体はR{↑} 横転がし。 | 主体部北東 部 |
| 96-11 111 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14～22mm。 内面は荒れている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 口縁部はやや内湾する。口縁部に隆帯と沈 線による文様が描かれ、縄文施文。原体は R{↑}横転がし。 | 主体部南部 |
| 96-12 111 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にR{↑}横転がし。胴 部にもR{↑}横転がし。 | 主体部内部 |
| 96-13 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR{↑}横転がし。 | 張出し部 |
| 96-14 111 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にR{↑}横、以下R{↑} 縦転がし。 | 主体部北東 部 |
| 96-15 111 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11～19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐色。 | 口縁部は内湾。口唇部に無文帯をおき、1 条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する 沈線を垂下。区画内にL{↑}縦位。微隆起帯 上は横位。 | 主体部北西 部 |
| 96-16 111 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚16～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下微隆起帯による文様が描か れ、区画内に縄文施文。原体はL{↑}。内面煤。 | 主体部北東 部 |
| 96-17 111 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13～28mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は橙色。 | 口縁部の突起部分。縄文施文。原体はR{↑} (0段多条か?)。 | 主体部内部 |
| 96-18 111 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は橙色。 | 細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はL{↑}。 | 主体部北東 部 |



第95図 26号配石遺構出土土器 (1)



第96図 26号配石遺構出土土器(2)



第97図 26号配石遺構出土土器(3)

3 敷石住居跡 <26号配石遺構>

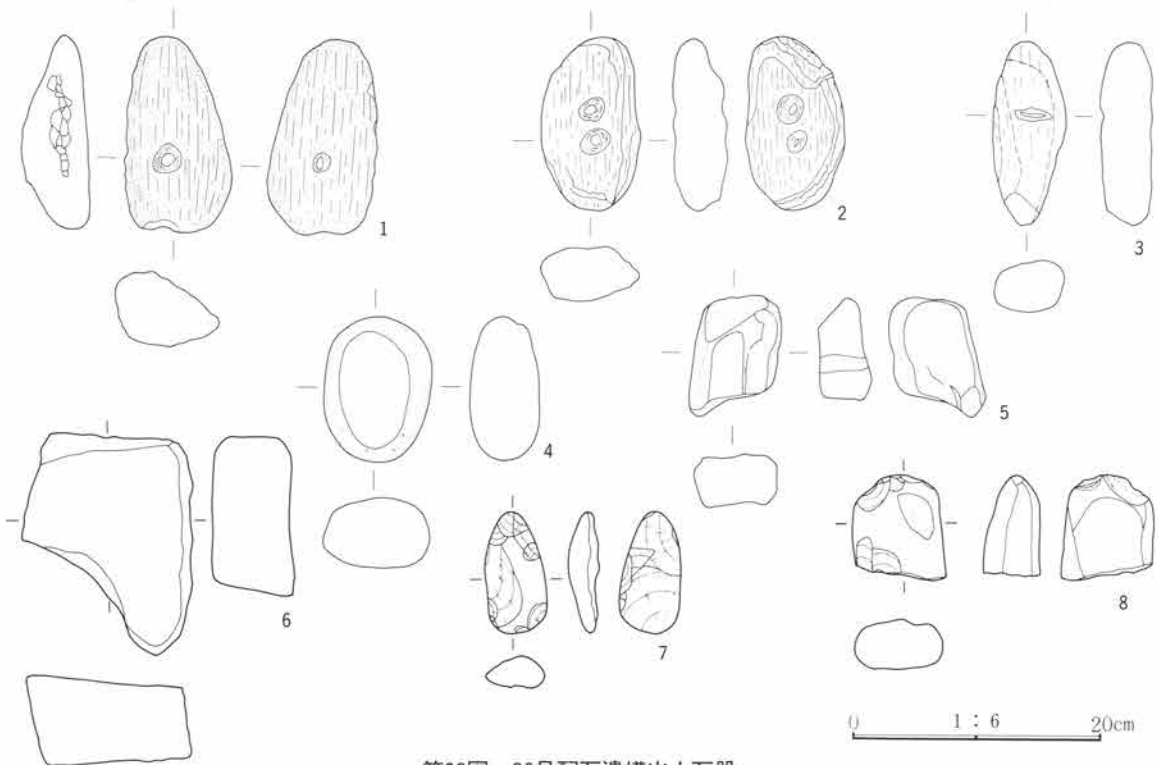
26号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|---|---|-------------|
| 96-19 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 隆帯と沈線による蕨手状の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL{長。 | 主体部北東 部 |
| 96-20 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL{長。 | 主体部北東 部 |
| 96-21 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 微隆起帯を巡らせ、縄文施文。原体はR{上。 | 主体部北東 部 |
| 96-22 111 | 口縁 ~胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚16~18mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれ、 縄文施文。原体はR{上横転がし。胴部 は沈線を垂下し、R{上横・縦転がし。 | 主体部北東 部 |
| 96-23 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15~20mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 隆帯による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR{上。 | 主体部北東 部 |
| 96-24 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。 | 胴部中程に2条の沈線を巡らせ、刺突を施 す。以下沈線による『∩』状、蕨手状の沈 線を施し、縄文施文。原体はR{上縦転がし。 区画内にも蕨手状沈線を施す。 | 主体部南部 |
| 97-25 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はにぶい褐色。 | 隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR{上。 | 主体部北東 部 |
| 97-26 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 沈線を垂下。縄文施文。原体はR{上。土器 面は柔軟。 | 主体部内部 |
| 97-27 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 隆帯を垂下させ、縄文施文。原体はR{上縦 転がし。 | 主体部北東 部 |
| 97-28 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 | 主体部南部 |
| 97-29 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色。内面は褐灰色。 | 隆帯を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 | 主体部南部 |
| 97-30 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面は黒褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 主体部南東 部 |
| 97-31 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 | 先端部埋藏 南部 |
| 97-32 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 主体部北東 部 |
| 97-33 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 | 主体部南部 |
| 97-34 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上(太い条と細い条を 使用)縦転がし。 | 一括 |
| 97-35 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 | 主体部南部 |
| 97-36 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{上縦転がし。 | 主体部内部 |
| 97-37 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は R{上縦転がし。 内面に煤が付着している。 | 主体部北西 部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

26号配石遺構土器観察表

| 図番 PL | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|-------------------|---|--|--------------|
| 97-38 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 押圧が強い。 | 張出し部南 部 |
| 97-39 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は黒褐色。 | 沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施 文。原体はL(↑)縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 97-40 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 細沈線が施されている。 | 主体部北東 部 |
| 97-41 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL(↑)縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 主体部北東 部 |
| 97-42 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 細沈線による「∩」状の文様が描かれ、縄 文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 張出し部北 部 |
| 97-43 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。 | 細沈線による「V」字状の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 先端部埋壘 東部 |
| 97-44 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は黒褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、縄文施文。原 体はR(↑)縦転がし。 内面に煤が付着している。 | 主体部北東 部 |
| 97-45 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は L(↑)縦転がし。土器面は柔軟。 | 主体部北東 部 |
| 97-46 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は L(↑)縦転がし。 | 主体部北東 部 |
| 97-47 111 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は R(↑)縦転がし。 | 主体部北東 部 |
| 97-48 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②非常に良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は L(↑)縦転がし。縄文は土器面が硬い段階 で、施文されている。 | 主体部北東 部 |
| 97-49 111 | 口縁 ~胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はL(↑)縦転 がし。 | 主体部東部 |
| 97-50 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に押 し引き状の沈線が施されている。 | 主体部北東 部 |
| 97-51 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 胴部で括れる器形。 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 主体部北東 部 |
| 97-52 111 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 主体部北東 部 |
| 97-53 111 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径82mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 一括 |
| 97-54 111 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径60mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 張出し部北 部 |
| 97-55 111 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径90mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 先端部埋壘 北東部 |
| 97-56 111 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 炉体土器周 辺 |



第98図 26号配石遺構出土石器

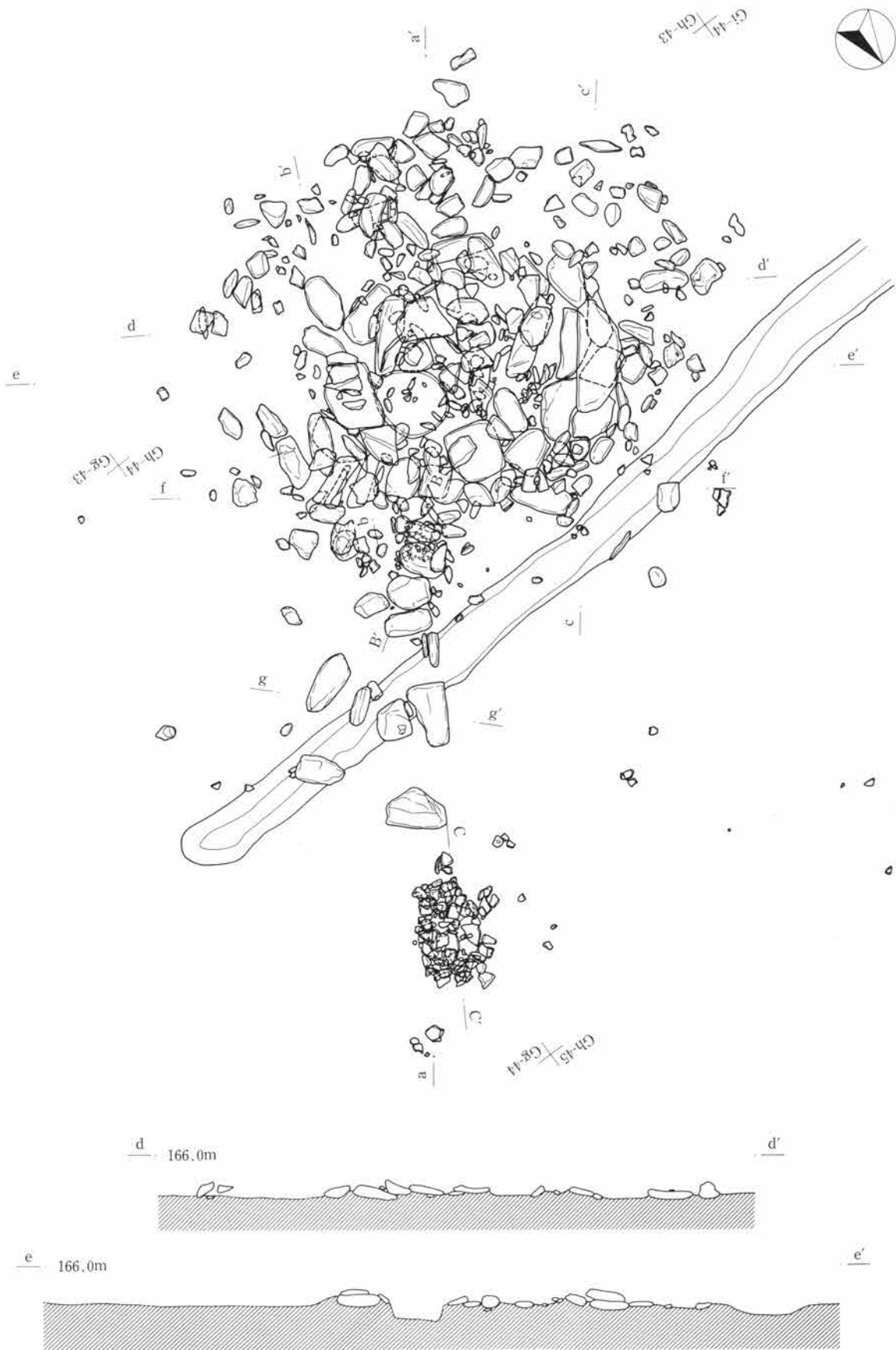
26号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|-------------|-------|------|----------|--------------|--------|-----|---------|---|------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 98-1 111 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 15.7 | 8.5 | 6.0 | 1,000 | 両面に2個の凹みがある。凹の平均は長径21mm、短径13mm、深さ3mmである。側面には敲打痕がみられる。 | 炉の近くから出土 |
| 98-2 111 | 凹 石 | 完形 | 点紋石墨緑泥片岩 | 13.7 | 8.1 | 4.6 | 700 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長25mm、短18mm、深3mm。最小は長19mm、短15mm、深3mmで、平均は長22mm、短18mm、深3mm。 | 張出し部の南から出土 |
| 98-3 111 | 石 棒 ? | 一端欠損 | 緑泥片岩 | (14.5) | 5.7 | 4.0 | (500) | 未成品か? 片面一部に横長のくぼみ。一部焼けている。 | 主体部の緑石中 |
| 98-4 111 | 磨 石 | 完形 | 安山岩 | 11.5 | 8.7 | 5.7 | 900 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 張出し部の南 |
| 98-5 111 | 砥 石 | 部分 | 砂岩 | (9.3) | (7.3) | 4.0 | (310) | 片面と側面に痕跡がある。 | 主体部 |
| 98-6 111 | 砥 石 | 部分 | 輝緑岩 | (17.5) | (13.8) | 7.0 | (2,600) | 器面に磨耗痕がみられる。 | 主体部 |
| 98-7 111 | 打製石斧 | 完形 | 輝岩 | 9.7 | 5.0 | 2.5 | 150 | バチ (II b)。 | 炉近く |
| 98-8 111 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 角閃岩 | (8.3) | 7.3 | 4.5 | (520) | | 張出し部の北 |

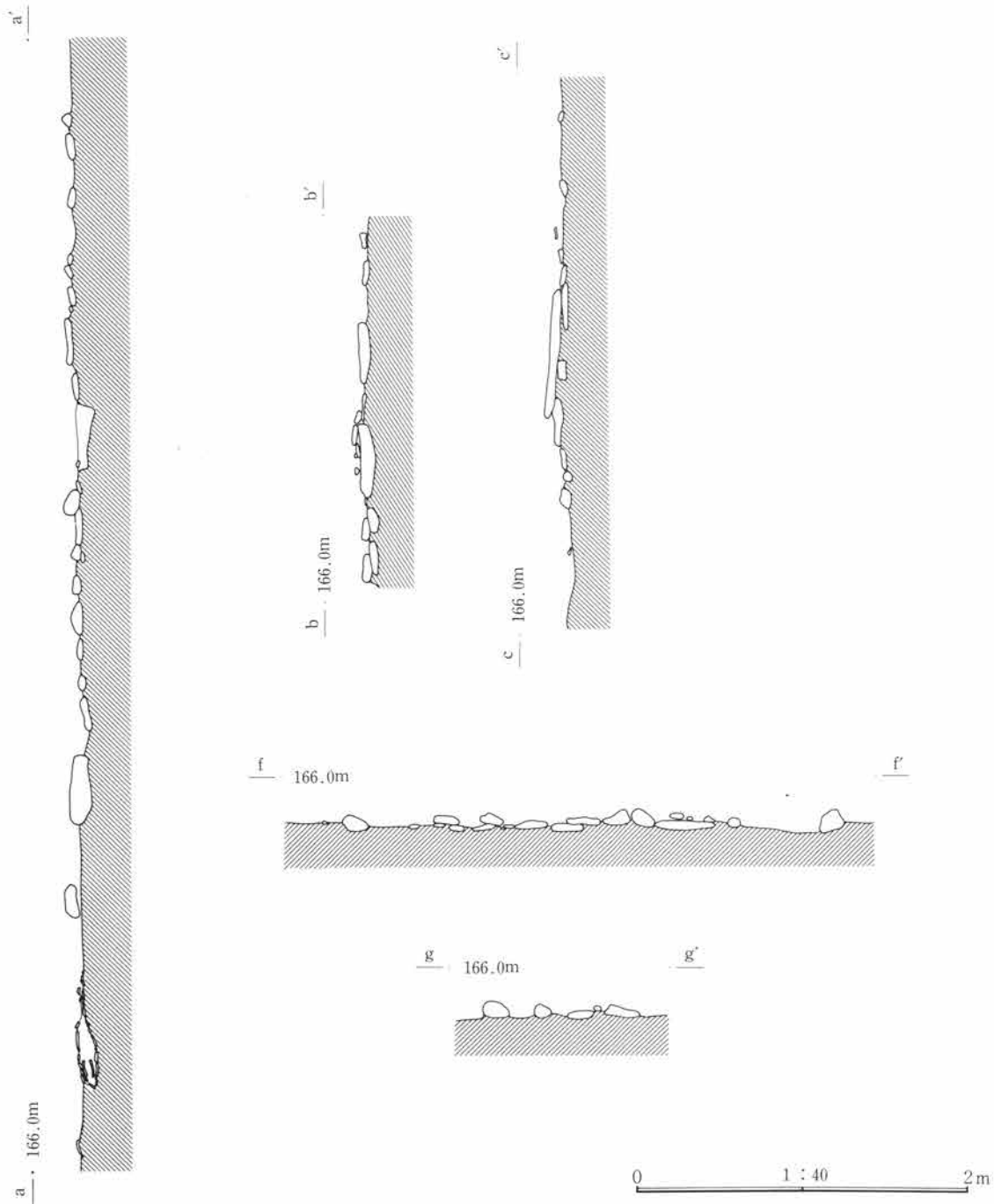
36号配石遺構 (第99~109図、PL. 39~42、111~113)

位置 Gg-44、Gh-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西101m(炉までの距離)、列石からは81mの所、37号配石遺構の北41m50cm(炉から炉までの距離)に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。8月中旬から37号配石遺構とともに調査を開始した。多量の石が検出され、また重なり合っていたために、遺構の全容を把握するには時間がかかった。19日に全景写真と主体部敷石の部分写真、張出し部の写真撮影を実施し、実測作業を行った。以後、他の配石遺構の調査に移行し、調査を再開したのは12月に入ってからである。遺物の取り上げを行い、さらに敷石をはずしながら下部の調査を実施した。その結果、張出し部の敷石下から接続部埋壘が検出された。12月下旬までに敷石の



第99図 36号配石遺構



総ての石と接続部埋甕、先端部埋甕を取り上げて調査を終了した。1軒の敷石住居跡の調査であったが、他の敷石住居跡と同様に多くの労力と時間をかけて実施した。

重複 なし。新しい耕作溝によって張出し部の一部が壊されている。また50号配石遺構に近接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。当敷石住居跡もまた他の敷石住居跡と同様に、当時の地表面に敷石を施したものであろう。

形状 柄鏡形敷石住居跡で全長6mを測る。主体部の規模は長径3m60cm、短径2m60cmで面積約7.9m²。張

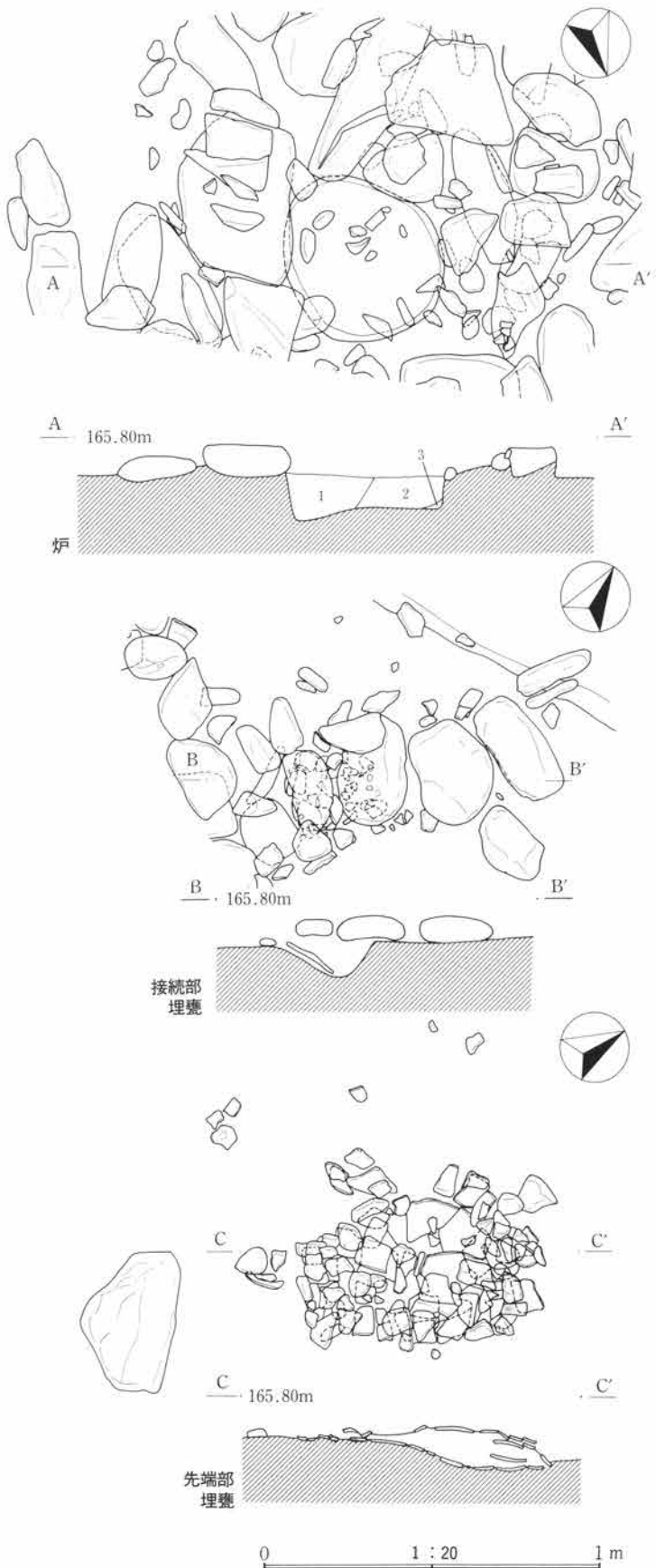
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

出し部の規模は長径3m40cm、短径50cmで、面積約2.1㎡である。総面積は約10㎡になる。

敷石状況 主体部内部の全面には敷石は施されていない。炉を中心に西側にかけて敷石が認められるが、大小さまざまな石が使用され雑然としている。この周囲に縁石が巡るが、内部敷石との間には空間部が存在している。この空間部は当初から存在していたものであろう。

使用石材 33種類の石材が確認された。378点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩68点(18%)、点紋絹雲母石墨片岩55点(14.6%)、輝緑岩54点(14.3%)、点紋緑泥片岩53点(14%)、点紋絹雲母緑泥片岩・砂岩各19点(各5%)、緑泥片岩15点(4%)、角閃岩11点(2.9%)、絹雲母緑泥片岩10点(2.6%)、熱変成岩8点(2.1%)、石墨絹雲母片岩・石墨片岩・紅簾絹雲母片岩・珪岩各4点(各1.1%)、輝岩・流紋岩・安山岩・点紋石墨緑泥片岩・千枚岩・珪石各3点(各0.8%)、絹雲母片岩2点(0.5%)、絹雲母緑泥石墨片岩・斑斕岩・チャート・石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・玻璃質安山岩・石英閃緑岩・紅簾片岩・ノーライト各1点(各0.3%)であり、不明は18点(4.8%)を数えた。378点中242点(64%)の石は片岩類である。配石遺構(敷石住居跡は除外)を構成している石材は絹雲母石墨片岩が圧倒的に使用されているが、敷石住居跡ではその占める割合は高くなかった。

石材重量 重量の判明している石は357点である。その内訳は、500g未満の石184点(51.5%)、1kg~2.5kg未満の石61点(17.1%)、500g~1kg未満の石38点(10.6%)、2.5kg~5kg未満の石34点(9.5%)、5kg~7.5kg未満の石12点(3.4%)、7.5kg~10



第100図 36号配石遺構

3 敷石住居跡〈36号配石遺構〉

kg未満の石12点(3.4%)、10kg~20kg未満の石11点(3.1%)、20kg~30kg未満の石4点(1.1%)、30kg~40kg未満の石1点(0.3%)である。主体部と張出し部の敷石は重量のある石が選定され、縁石は軽量の石が選定されている。

壁高 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

柱穴 検出できなかった。

炉 石囲い炉である。長径53cm・短径46cm・深さ9cm~14cmの楕円形を呈し、面積約0.18m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炭化物粒子を極微量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炭化物粒子を極微量含む。1層よりは明るい色調。

第3層 黄褐色土層 固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子を極微量含む。

各層とも炭化物粒子を極微量含んでいるが、焼土は含まれていなかった。

炉石は主体部の敷石が代用されているもので、規則的には組まれていない。

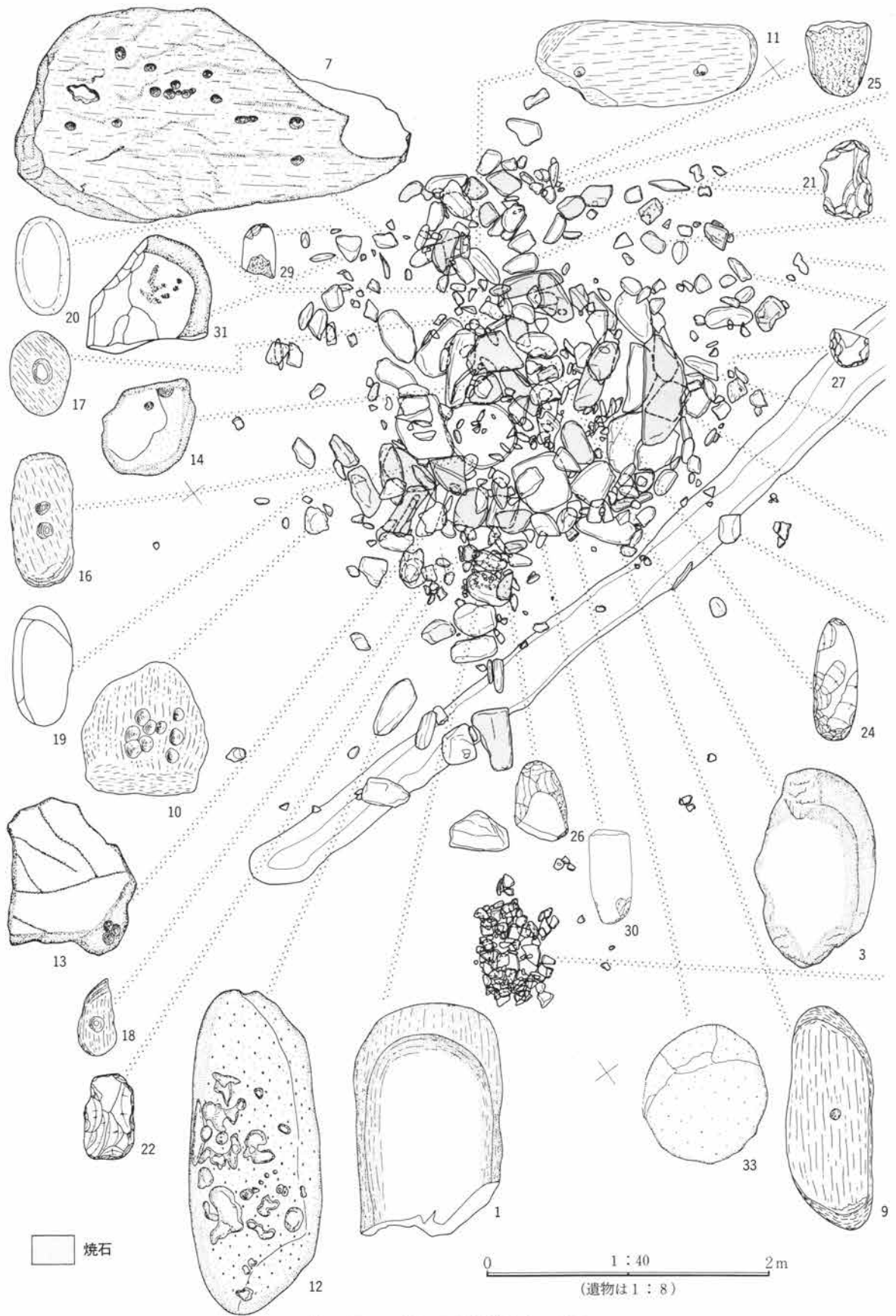
埋甕 主体部と張出し部の接続部に1点、張出し部の先端部に1点の計2点が出土している。接続部の埋甕は胴下半分を欠損した加曾利E3式土器で斜位状態で埋設されていた。埋設ピットは長径、短径とも30cm、深さ10cmを測る。覆土は暗褐色土層であり、固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子を極少量含んでいた。埋甕には2個の蓋石が伴っている。これらの蓋石は張出し部の敷石がその役割を果たしていたものであり、1点は石皿を伏せていた。なお、埋甕は脆弱であったために復元はできなかった。先端部の埋甕は口縁部を欠損した大型の加曾利E3式土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた(第104図 1)。土壌の規模は長径80cm・短径60cm・深さ13cmである。接続部埋甕と先端部埋甕の大きさは著しく異なっている。24号配石遺構の埋甕の在り方と共通している。

張出し部 新しい耕作溝によってその一部が壊されているが、残存状況は比較的良い。10個の石と押さえの細かな石からなっている。10個の石の平均値は、長径32.3cm・短径20.1cm・厚さ8.4cm・重量9.8kgである。石皿1点、多孔石1点が含まれていた。

遺物出土状況 埋甕2個体の他に、口縁部23点、胴部84点、底部2点の計113点の土器片が主体部を中心に出土している。土器片の出土は多くはなかった。

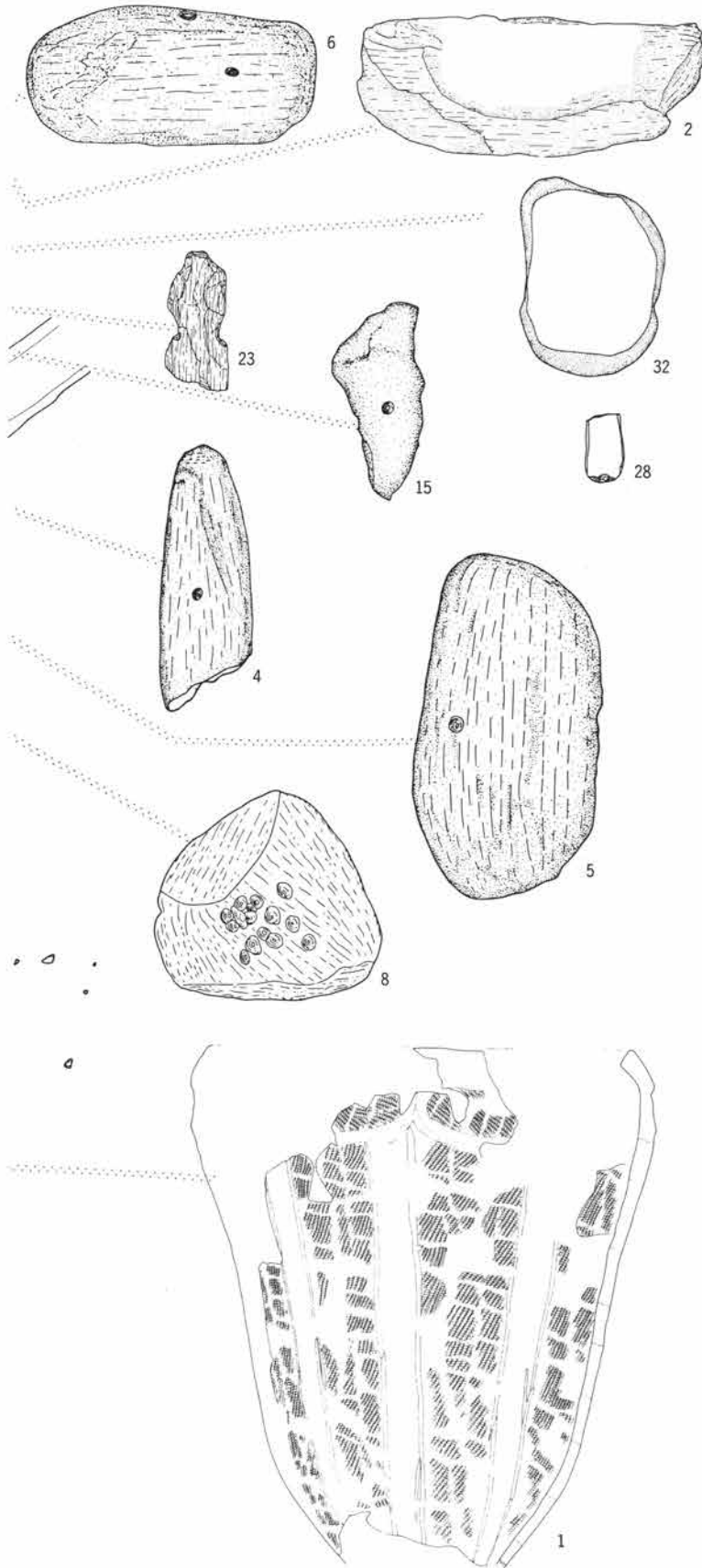
石器では石皿3点、多孔石10点、砥石3点、凹石3点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧7点、丸石1点がそれぞれ出土している。石皿1点は張出し部、2点は主体部から、多孔石1点は張出し部、4点は主体部、5点は縁石から、砥石は主体部から2点、縁石から1点、凹石は主体部1点、縁石1点、張出し部1点、磨石は主体部からそれぞれ出土している。石器の含有率は8.5%であり、焼石は378点中77点の出土で、20.4%を占めている。

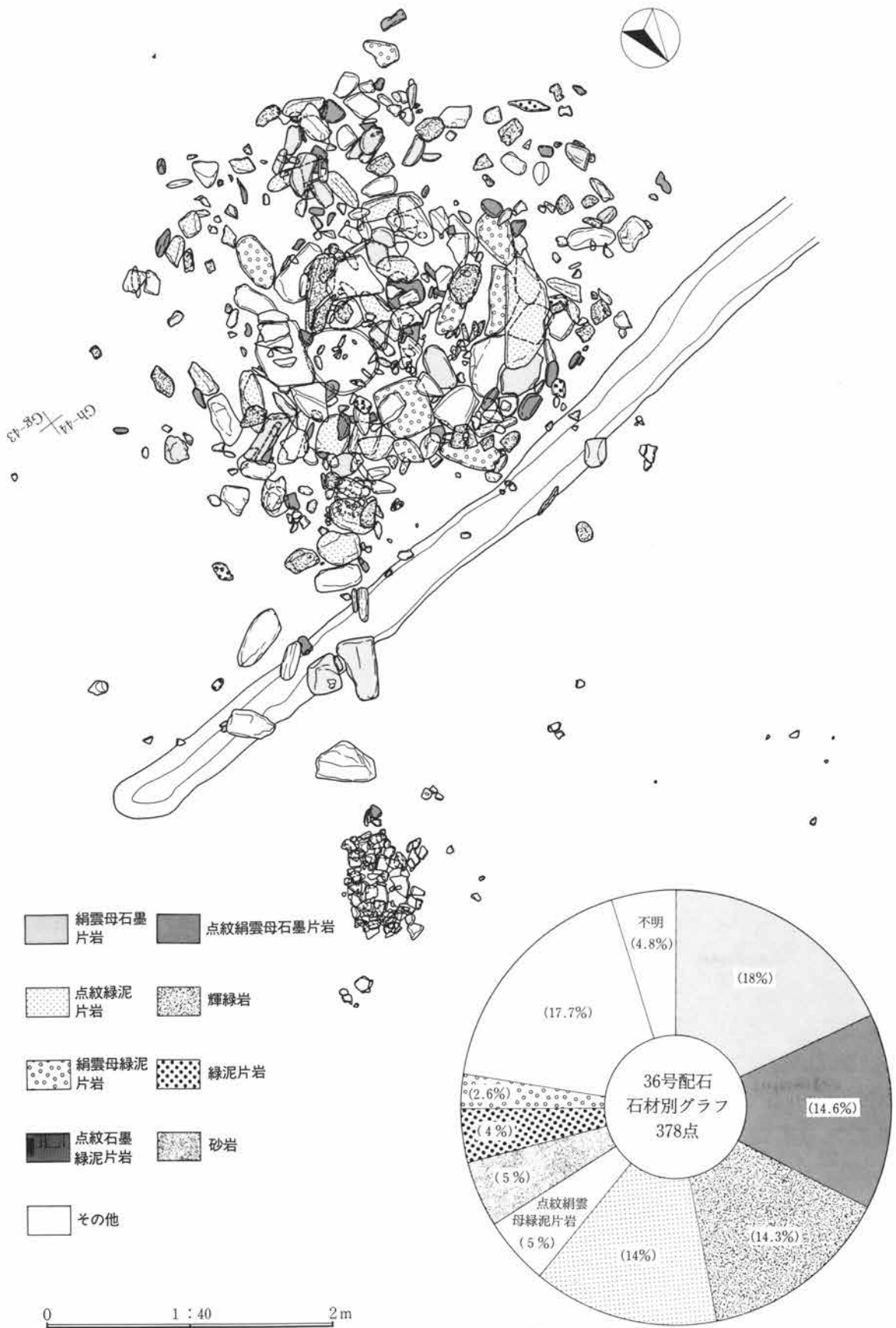
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の柄鏡形敷石住居跡である。該期の敷石住居跡には5号配石遺構に代表されるように張出し部を伴わないもの、当敷石住居跡のように確実に張出し部を伴うものの2者が併存している。主軸方向はN-148°-W。



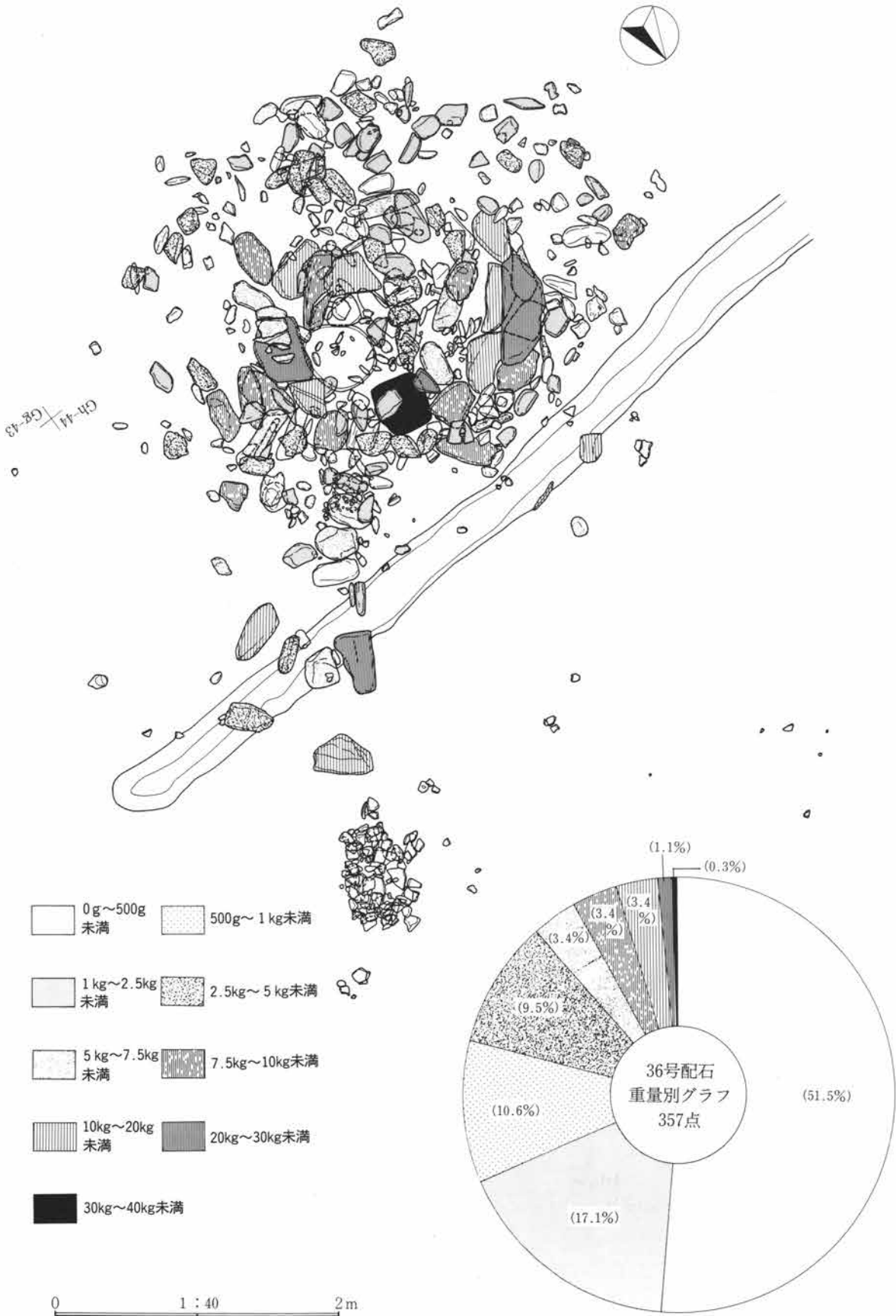
第101図 36号配石遺構遺物出土状況

3 敷石住居跡 <36号配石遺構>





第102図 36号配石遺構石材別分布



第103図 36号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

36号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------------|--------------------|---|--|--------------|
| 104-1 111 | 口縁部と 底部を欠損 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部と底部を欠損。 器厚13~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様を描き、原体はR{ $\frac{1}{2}$ }横転がし。胴部は沈線を垂下し、R{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。押圧が強い。 | 先端部埋壘 (斜位状態) |
| 105-2 111 | 口縁 ~胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様を描かれ、縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ } (0段多条)。胴部R{ $\frac{1}{2}$ } (0段多条) 横位施文。 | 主体部東部 |
| 105-3 111 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様を描かれ、縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }横転がし。 | 張出し部 |
| 105-4 111 | 口縁部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様を描かれ、縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }横転がし。 | 主体部東部 |
| 105-5 111 | 胴部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 主体部内部 |
| 105-6 111 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 外面は荒れている。 | 主体部南部 |
| 105-7 111 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 一括 |
| 105-8 111 | 胴部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 主体部南部 |
| 105-9 111 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 主体部縁石 |
| 105-10 111 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ }。土器面は柔軟。 | 主体部縁石 |
| 105-11 111 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 主体部内部 |
| 105-12 111 | 底部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は黄褐色。 | 全体的に荒れている。 | 張出し部北部 |
| 105-13 111 | 底部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径78mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{R}{R}$ }。 全体的に荒れている。 | 張出し部南部 |
| 105-14 111 | 土製 円盤 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 土製円盤の破片。厚さ10~14mm。 内外面は荒れている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明黄褐色。 | 重量 (32) g | 主体部西部 |

36号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|--------|--------------|--------|-------|---------|--|----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 106-1 111 | 石 皿 | % | 点紋緑泥片岩 | (32.4) | 20.8 | 7.0 | (7,500) | 楕円形を呈す。裏面に12個の凹み。最大は長21mm、短17mm、深9mm。最小は長10mm、短8mm、深3mmで、平均は長16mm、短13mm、深7mm。 | 接続部埋壘の蓋石 |
| 106-2 112 | 石 皿 | % | 点紋緑泥片岩 | (40.5) | (15.9) | (6.2) | (5,900) | 楕円形を呈している。 | 主体部 |
| 106-3 112 | 石 皿 | % | 点紋緑泥片岩 | (27.1) | (16.9) | 4.6 | (2,050) | 楕円形を呈す。裏面に5個の凹み。最大は長22mm、短16mm、深6mm。最小は長12mm、短11mm、深3mmで、平均は長17mm、短15mm、深5mm。全面焼け。 | 主体部 |
| 106-4 112 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (30.9) | 10.9 | 6.3 | (3,300) | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は13mm、短径11mm、深さ3mmである。凹石の凹みとは異なる。 | 主体部 |

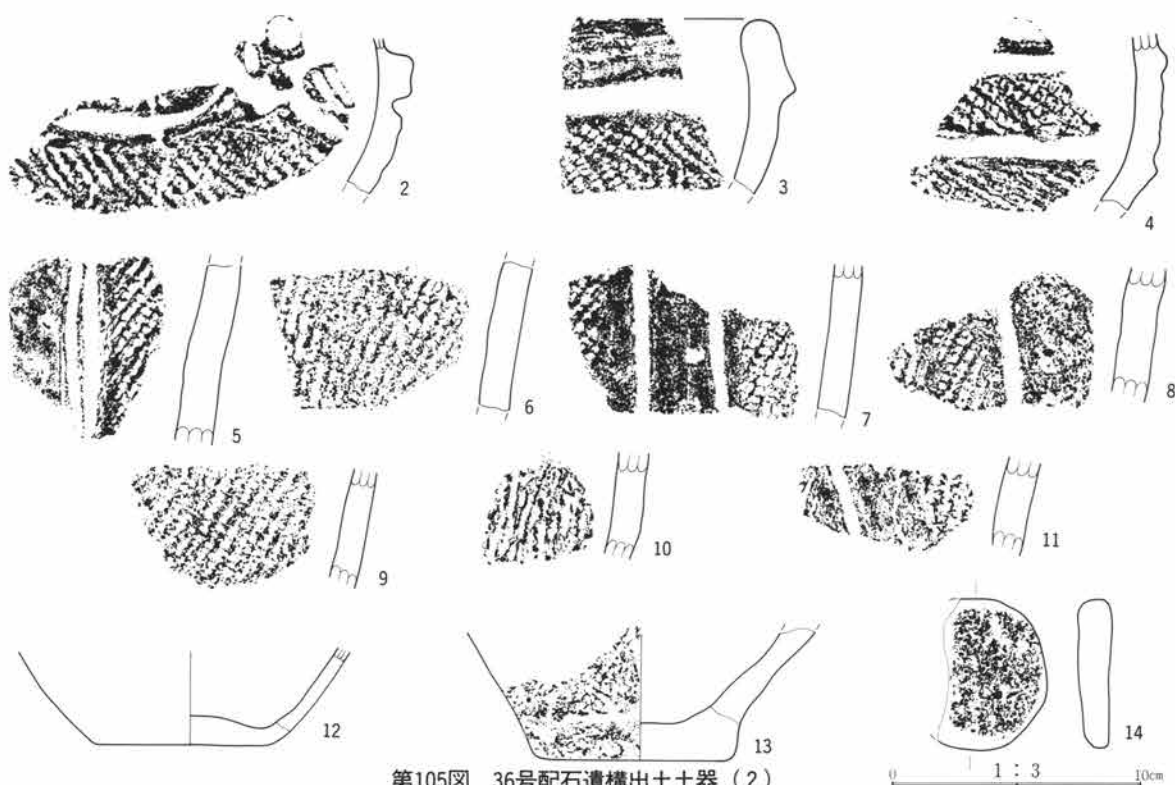


口径 48cm
現高 60cm
胎土分析実施

展開図 (1/6)

第104図 36号配石遺構出土土器 (1)

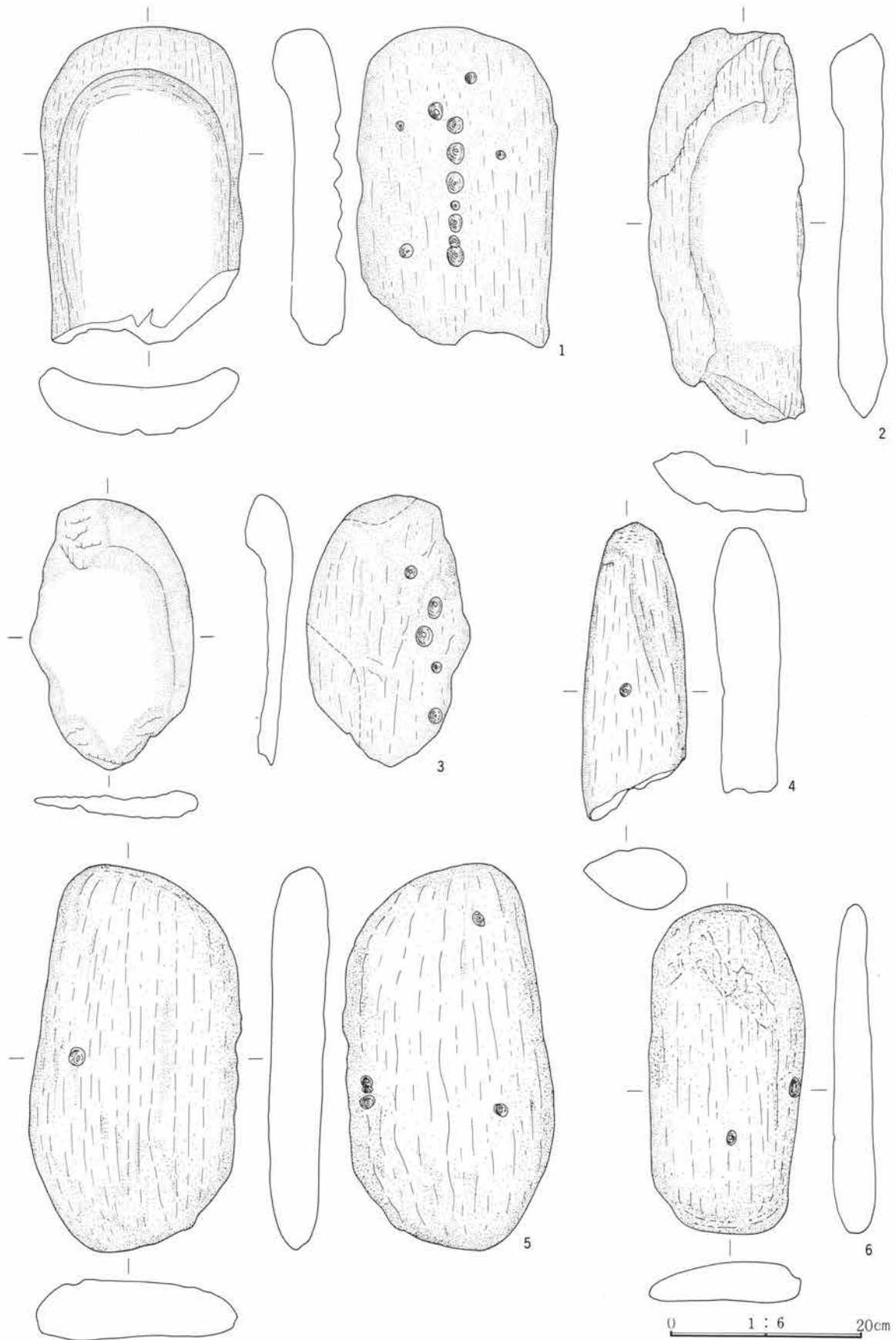
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



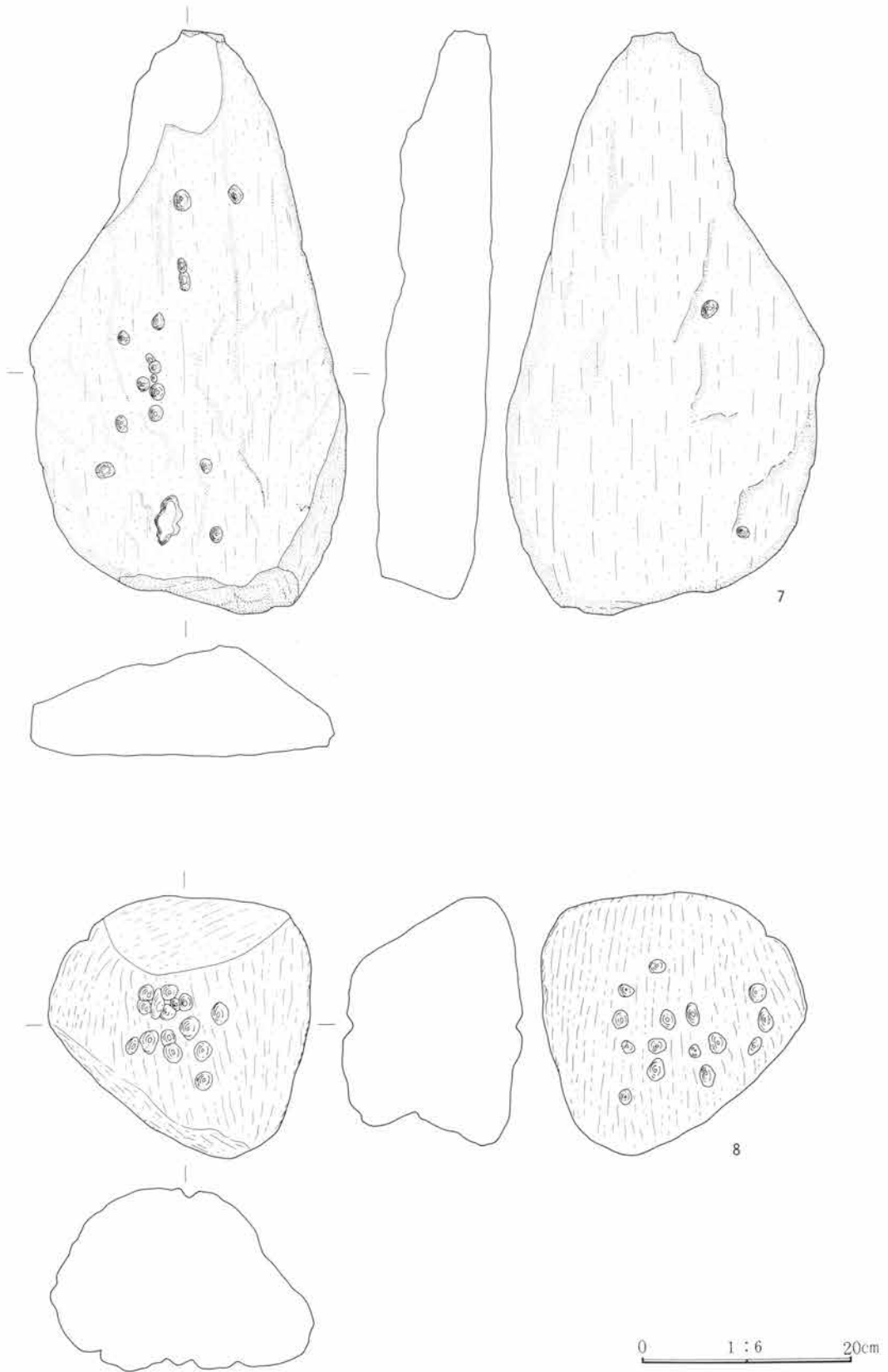
第105図 36号配石遺構出土土器(2)

36号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|------------|------|-----------|--------------|--------|------|---------|---|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 106-5 112 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 39.6 | 21.8 | 6.4 | 9,000 | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長18mm、短17mm、深5mm。最小は長10mm、短7mm、深1mmで、平均は長14mm、短12mm、深2mm。 | 主体部 |
| 106-6 112 | 多孔石 | 完形 | 点紋絹雲母緑泥片岩 | 33.7 | 16.0 | 4.4 | 3,850 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径12mm、深3mm。ある。 | 縁石 |
| 107-7 112 | 多孔石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 55.3 | 30.4 | 10.5 | 21,800 | 両面に19個の凹み。最大の凹みは長径48mm、短径18mm、深2mm。最小は長8mm、短7mm、深1mmで、平均は長16mm、短11mm、深3mm。 | 縁石 |
| 107-8 113 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 24.9 | 25.4 | 17.0 | 13,500 | 両面に30個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、深8mm。最小は長13mm、短7mm、深4mmで、平均は長18mm、短13mm、深7mm。 | 縁石 |
| 108-9 113 | 多孔石 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 31.0 | 12.2 | 8.4 | 5,200 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長20mm、短17mm、深5mm。最小は長14mm、短13mm、深3mmで、平均は長16mm、短14mm、深3mm。 | 主体部 |
| 108-10 113 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母緑泥片岩 | 18.9 | 17.8 | 9.3 | 4,100 | 片面に9個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深13mm。最小は長18mm、短15mm、深9mmで、平均は長22mm、短18mm、深11mm。 | 縁石 |
| 108-11 113 | 多孔石 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | 31.5 | 12.5 | 4.7 | (2,800) | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長16mm、短15mm、深6mm。最小は長10mm、短6mm、深3mmで、平均は長13mm、短11mm、深4mm。 | 主体部 |
| 108-12 113 | 多孔石 | 完形 | 斑礫岩 | 45.4 | 18.5 | 12.5 | 18,000 | 全面に48個の凹みがあるが、凹みの製作途中のものがかかなりある。凹みの平均は長27mm、短16mm、深5mm。多孔石の未製品か。 | 張出し部 |
| 108-13 113 | 砥石 (石皿) | 部分 | 砂岩 | (18.3) | (22.0) | 5.5 | (2,200) | 石皿というよりは砥石として使用されたものか。片面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、短径16mm、深さ4mm。 | 主体部 |
| 108-14 113 | 砥石 (石皿) | 部分 | 砂岩 | (13.1) | (13.2) | 5.3 | (1,000) | 石皿というよりは砥石として使用されたものか。両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径14mm、深さ7mm。 | 主体部 |

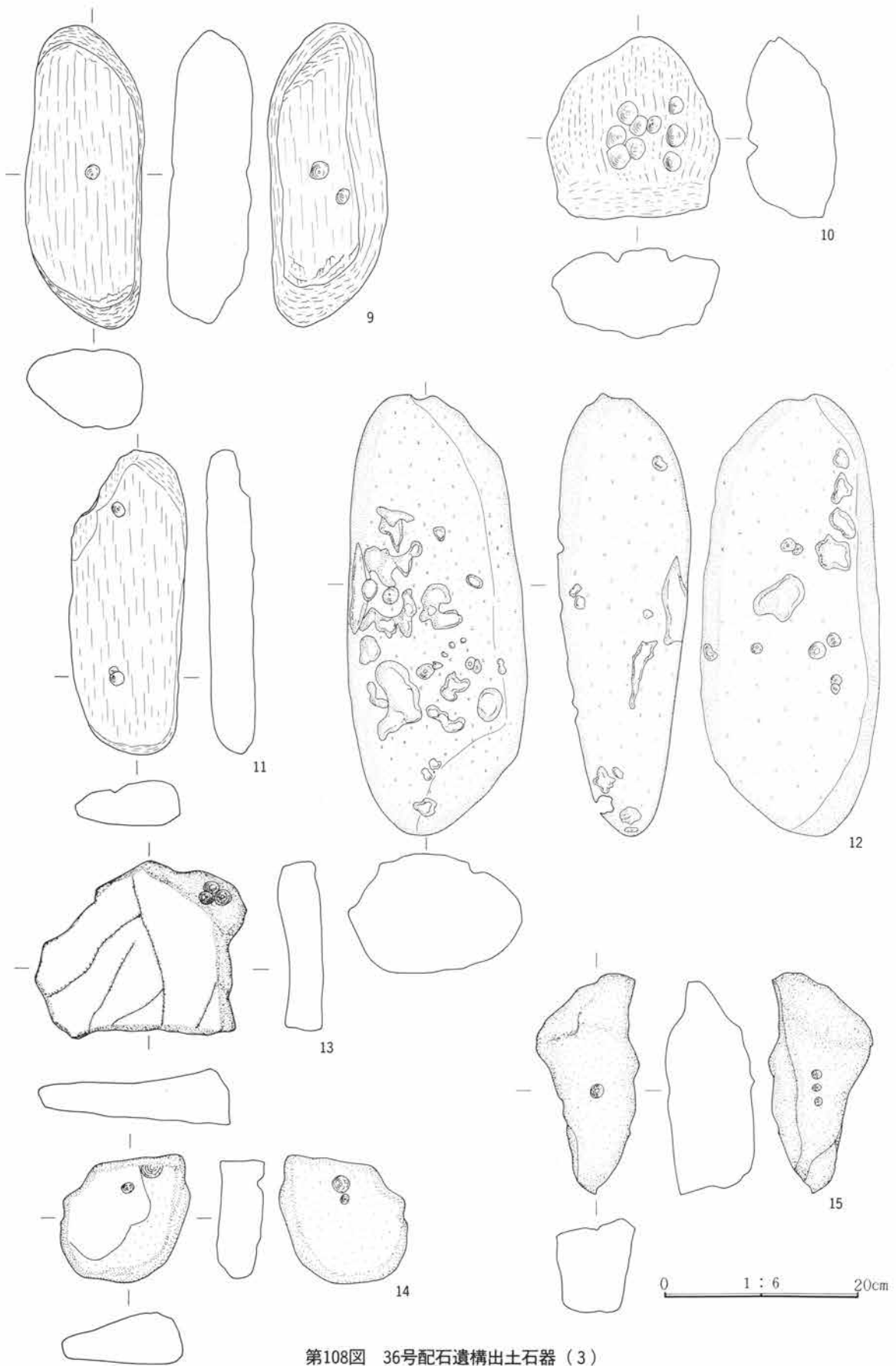


第106図 36号配石遺構出土石器(1)



第107図 36号配石遺構出土石器（2）

3 敷石住居跡〈36号配石遺構〉



第108図 36号配石遺構出土石器（3）



第109図 36号配石遺構出土石器 (4)

3 敷石住居跡〈37号配石遺構〉

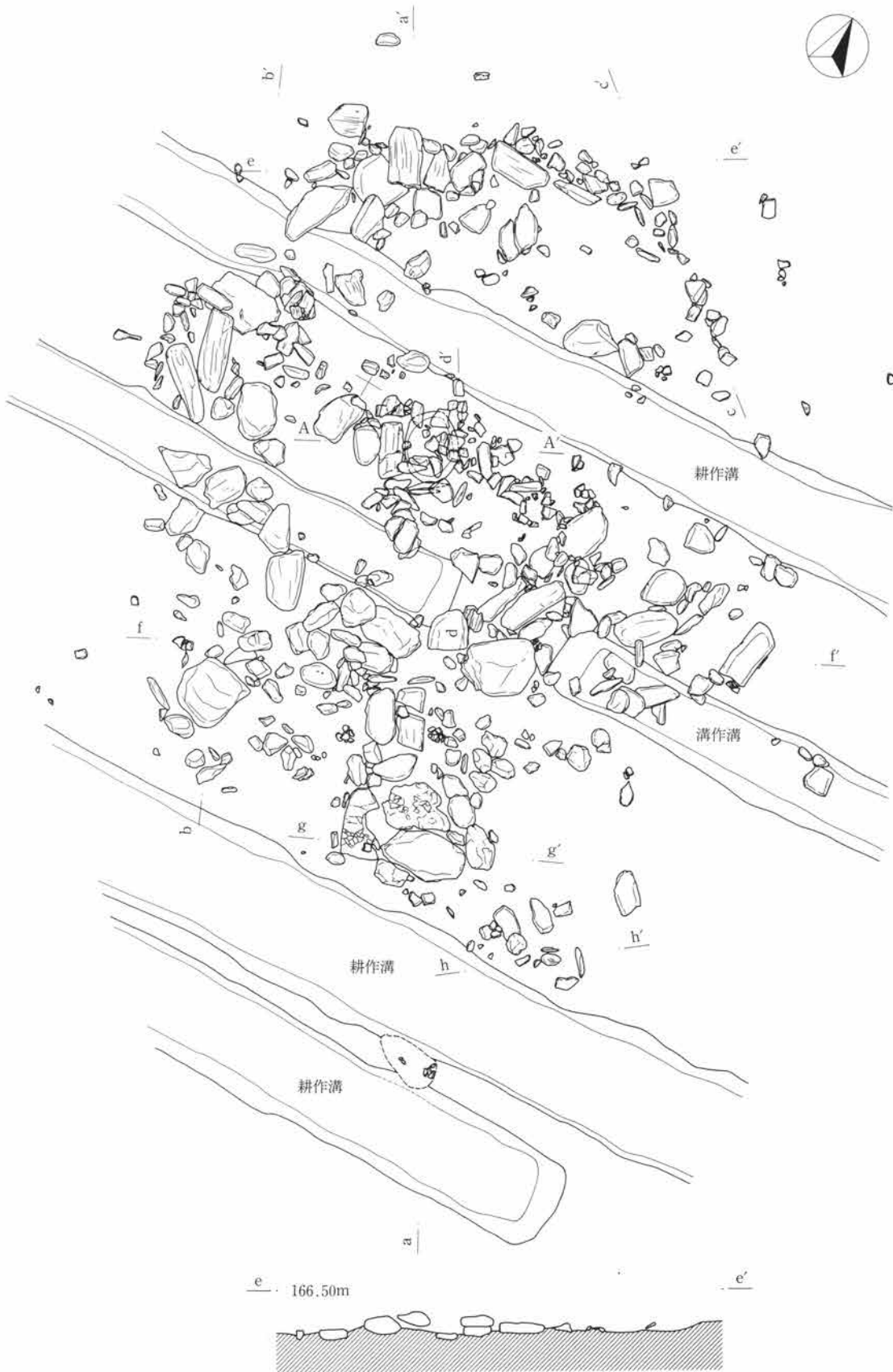
36号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|------|------|-----------|--------------|--------|------|---------|---|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 108-15 113 | 多孔石 | 部分 | 砂岩 | (22.6) | (10.8) | 9.2 | (1,820) | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長14mm、短14mm、深4mm。最小は長8mm、短7mm、深1mmで、平均は長10mm、短9mm、深2mm。 | 縁石 |
| 109-16 113 | 凹石 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 18.8 | 9.0 | 2.4 | 600 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短18mm、深4mm。最小は長18mm、短15mm、深2mmで、平均は長20mm、短15mm、深3mm。 | 縁石 |
| 109-17 113 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 11.8 | 8.7 | 4.7 | 500 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長37mm、短28mm、深4mm。最小は長17mm、短13mm、深3mmで、平均は長24mm、短16mm、深2mm。 | 主体部 |
| 109-18 113 | 凹石 | 欠 | 点紋緑泥片岩 | 10.9 | 5.7 | 5.5 | (400) | 全面に6個の凹み。最大の凹みは長24mm、短23mm、深3mm。最小は長12mm、短12mm、深2mmで、平均は長17mm、短17mm、深3mm。 | 張出し部 |
| 109-19 113 | 磨石 | 完形 | 流紋岩 | 16.7 | 8.5 | 6.2 | 1,200 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 主体部 |
| 109-20 113 | 磨石 | 完形 | 流紋岩 | 13.7 | 7.8 | 4.0 | 550 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 主体部 |
| 109-21 113 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 10.9 | 7.2 | 1.4 | 150 | 分銅(Ⅰ)。一方の刃部が軸に対して斜めに傾く。 | 主体部 |
| 109-22 113 | 打製石斧 | 完形 | 輝岩 | 11.9 | 7.2 | 2.5 | 250 | バチ(Ⅱb)。 | 張出し部 |
| 109-23 113 | 打製石斧 | 一部欠損 | 点紋絹雲母石墨片岩 | (16.0) | 7.4 | 1.9 | (240) | 分銅(Ⅰ)。一部焼けている。 | 縁石 |
| 109-24 113 | 磨製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 17.2 | 6.2 | 3.2 | 590 | 磨き途中。一部のみ磨きあり。 | 主体部 |
| 109-25 113 | | 基部欠損 | 角閃岩 | (10.6) | 9.4 | 4.3 | (560) | 粗割り段階。 | 縁石 |
| 109-26 113 | | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (11.4) | 7.4 | 5.4 | (580) | 粗割り段階。 | 張出し部 |
| 109-27 113 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (5.4) | 5.6 | 1.9 | (90) | 磨き途中。剥離痕一部残す。 | 縁石 |
| 109-28 113 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (7.8) | 4.6 | 2.5 | (150) | 磨き途中。一部に粗割り痕残す。 | 一括 |
| 109-29 113 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 角閃岩 | (7.5) | 4.8 | 2.6 | (145) | 磨き途中。両面に敲打・粗割り痕残る。 | 縁石 |
| 109-30 113 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (10.0) | 7.5 | 3.5 | (620) | 磨き途中。一部に粗割り痕残る。 | |
| 109-31 113 | | 完形 | 安山岩 | 16.0 | 18.0 | 16.8 | 4,900 | 敲打痕と磨耗痕がみられる。 | 縁石 |
| 109-32 113 | 砥石 | 完形 | 砂岩 | 22.8 | 16.8 | 4.8 | 2,900 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 縁石 |
| 109-33 113 | 丸石 | 完形 | 安山岩 | 19.3 | 17.8 | 12.3 | 4,700 | | 縁石 |
| 113 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (13.9) | 5.9 | 3.5 | (475) | 磨き段階。刃部再生途中の可能性あり。 | |

37号配石遺構 (第110～117図、PL. 43～48、114・115)

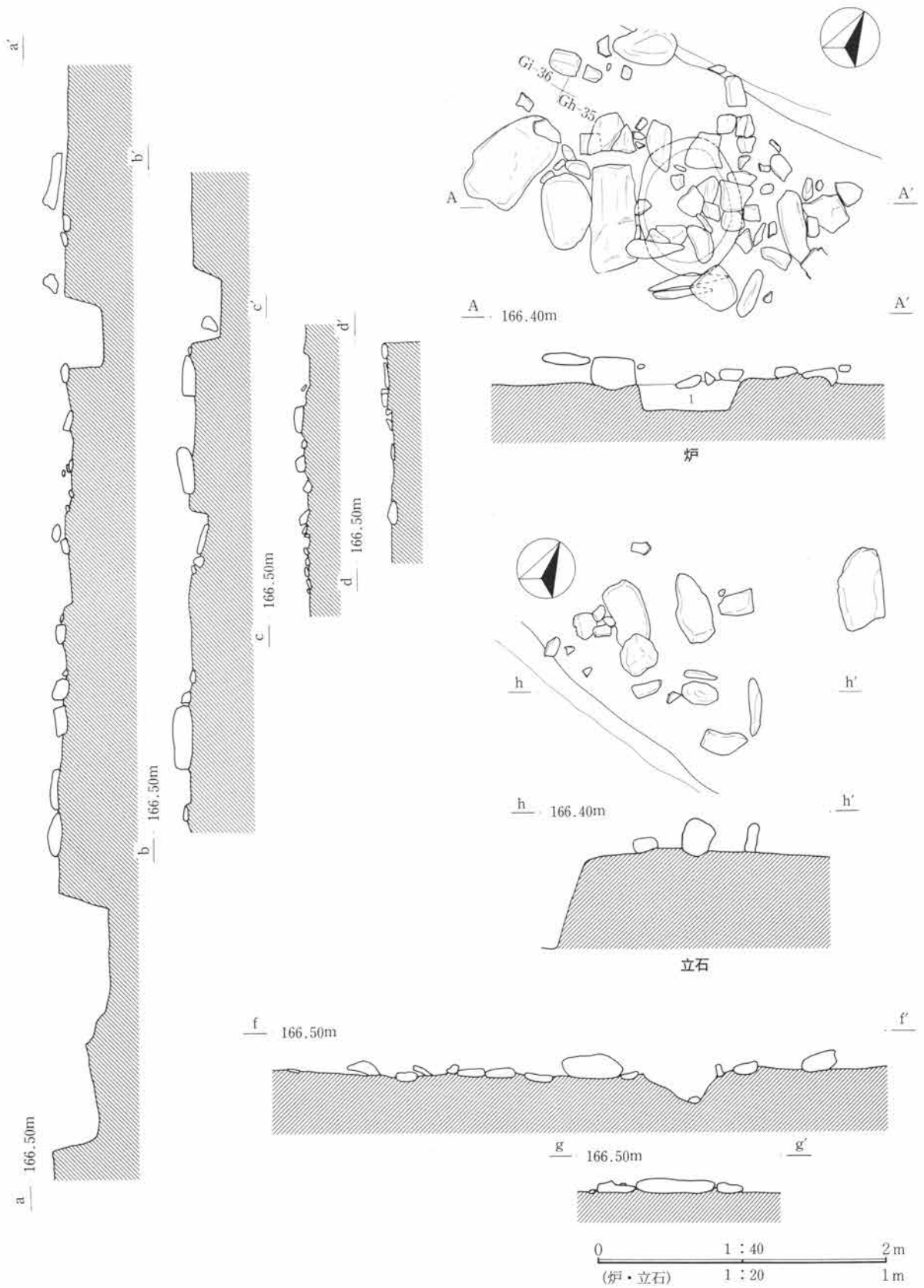
位置 Gh・Gi-35・36グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西118m (炉までの距離)、列石からは98m50cmの所、36号配石遺構の南41m50cmに位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。8月中旬から36号配石遺構とともに調査を開始した。多量の石が検出され、また重なり合っていたために、遺構の全容を把握するには時間がかかった。24日に全景写真と主体部敷石の部分写真、張出し部の写真撮影を実施し、実測作業に入った。以後、他の配石遺構の調査に移行し、調査を再開したのは36号配石遺構と同様に12月に入ってからである。遺物の取り上げを行い、さらに図面の追加をしながら敷石をはずした。新しい耕作溝によって部分的に壊されているが、敷石の残存状況は比較的良かった。また南端からは、かろうじて先端部埋甕の一部が検出された。



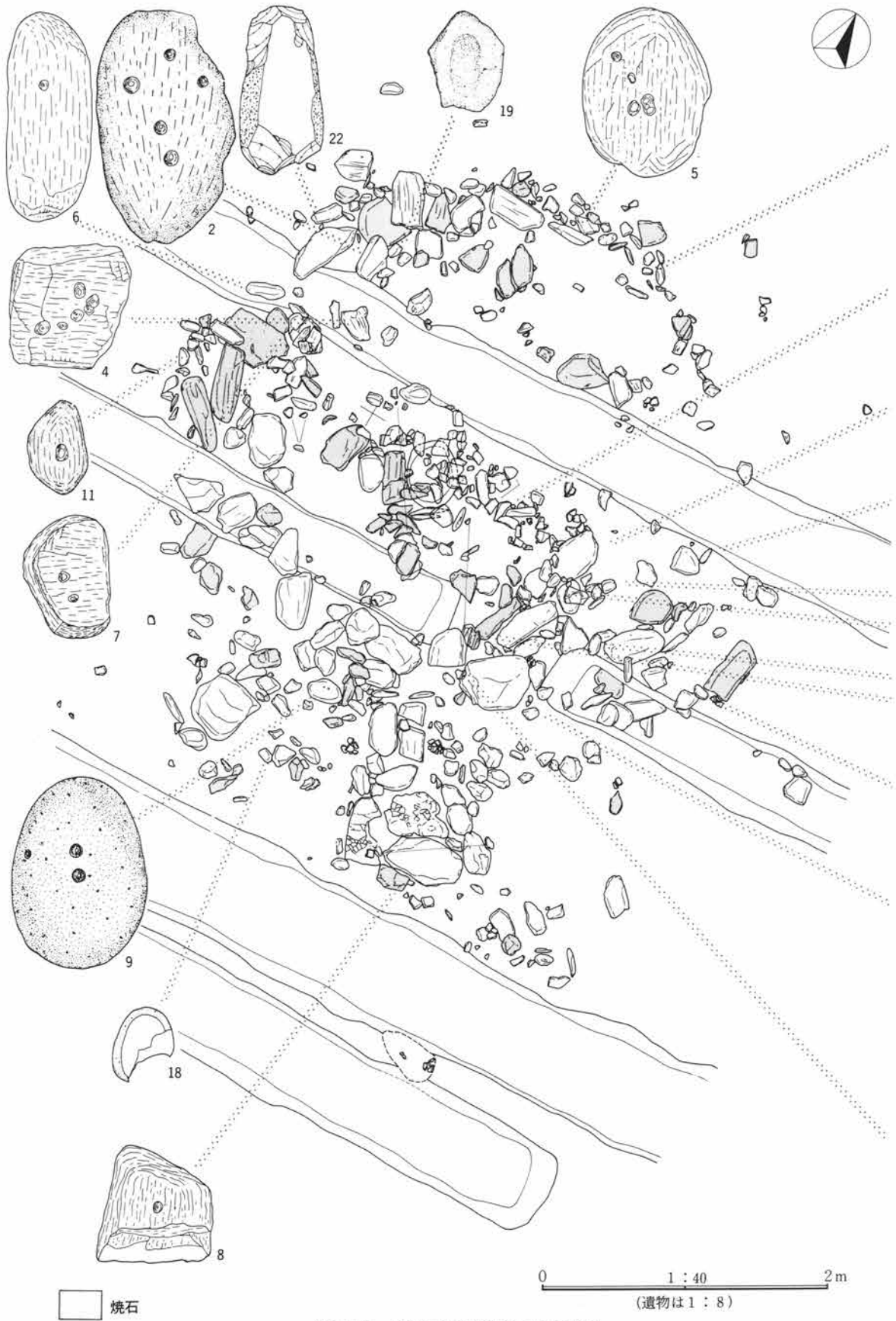
第110図 37号配石遺構

3 敷石住居跡〈37号配石遺構〉



重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。当敷石住居跡もまた他



第111図 37号配石遺構遺物出土状況

3 敷石住居跡〈37号配石遺構〉

の敷石住居跡と同様に、当時の地表面に敷石を施したものであろう。

形状 柄鏡形敷石住居跡で全長6m40cmを測る。主体部の規模は長径4m、短径3m70cmで、面積約13.5㎡である。張出し部は、その一部を耕作溝で壊されているが、長径2m70cm、短径1m10cmで、面積約3㎡である。総面積は約16.5㎡となる。

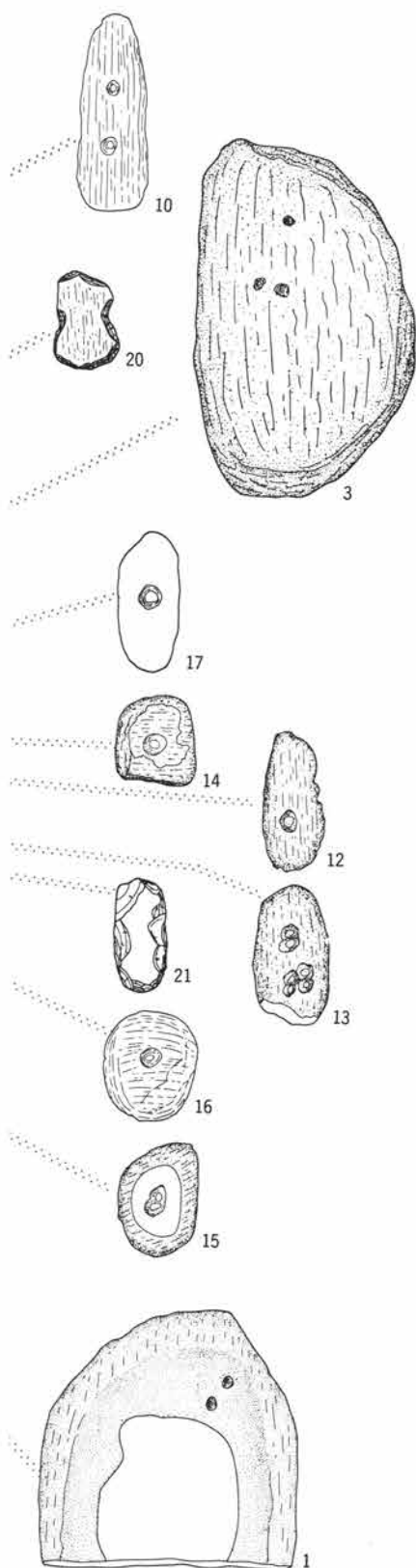
敷石状況 主体部の縁石と張出し部には敷石が施されているが、主体部内部には敷石は認められない。縁石は東縁では小さな石が選定されているが、西縁・南縁・北縁の3縁では比較的大きな石が選定されている。張出し部の敷石は耕作溝によって壊されているために全容は不明であるが、現状では1m50cmまで敷石が認められる。

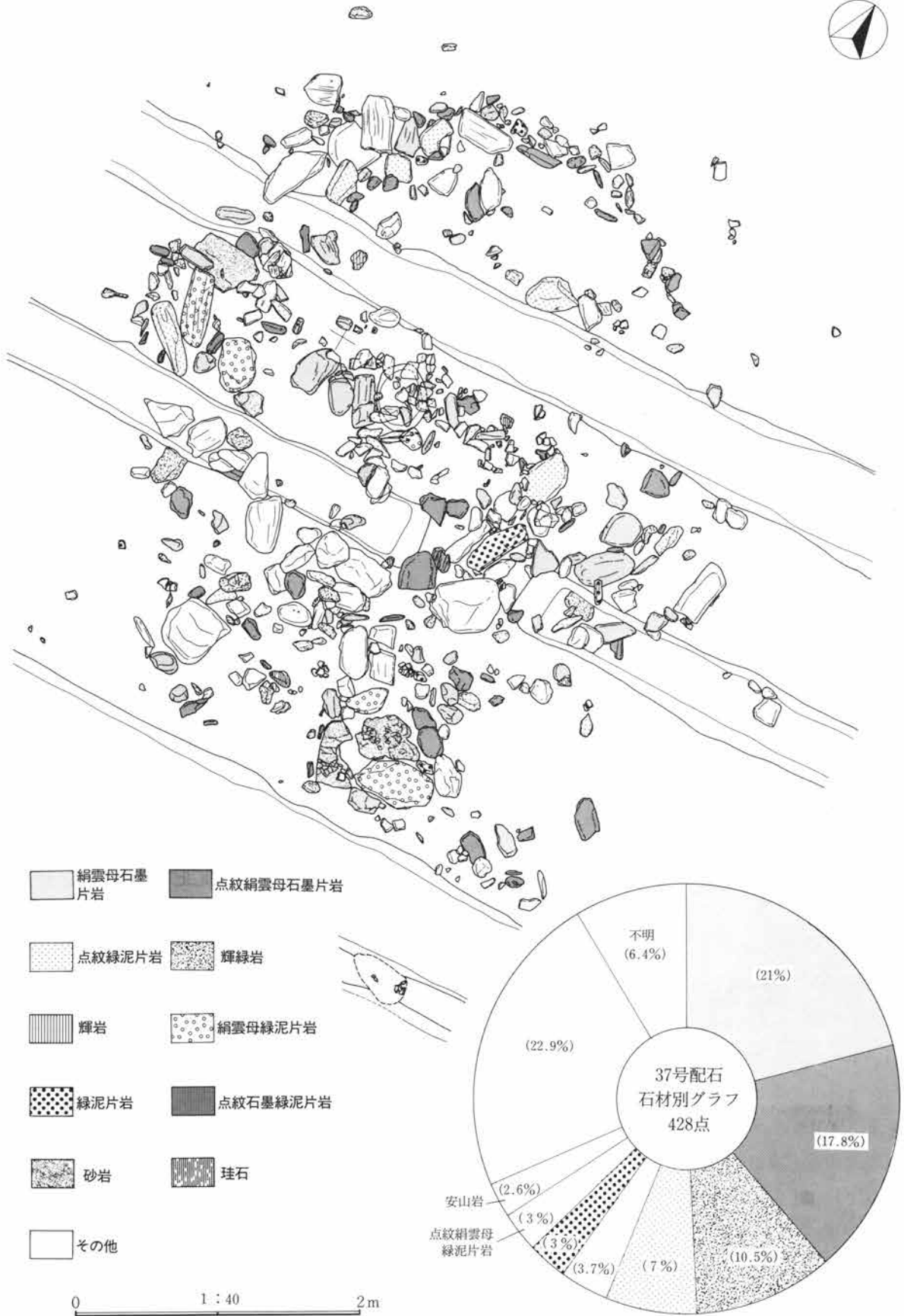
使用石材 41種類の石材が確認されている。428点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩90点(21%)、点紋絹雲母石墨片岩76点(17.8%)、輝緑岩45点(10.5%)、点紋緑泥片岩30点(7%)、紅簾絹雲母片岩16点(3.7%)、緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各13点(各3%)、安山岩11点(2.6%)、砂岩10点(2.3%)、石墨絹雲母片岩8点(1.9%)、絹雲母緑泥片岩・珪石各7点(各1.6%)、角閃岩6点(1.4%)、絹雲母緑泥石墨片岩5点(1.2%)、流紋岩・紅簾絹雲母石墨片岩各4点(各0.9%)、石墨片岩・絹雲母片岩・熱変成岩・硬砂岩・閃輝緑岩各3点(各0.7%)、輝岩・斑斨岩・チャート・石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・脆雲母石墨片岩・石英安山岩・方散虫板岩各2点(各0.5%)、滑石片岩・緑泥石墨片岩・輝緑凝灰岩・変斑斨岩・花崗閃緑岩・緑泥絹雲母片岩・千枚岩・珪岩各1点(各0.2%)であり、不明は36点(8.4%)を数えた。不明の石を除いた392点中281点(71.7%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は390点である。その内訳は、500g未満の石169点(43.3%)、500g～1kg未満の石79点(20.3%)、1kg～2.5kg未満の石71点(18.2%)、2.5kg～5kg未満の石30点(7.7%)、5kg～7.5kg未満の石16点(4.1%)、10kg～20kg未満の石13点(3.3%)、7.5kg～10kg未満の石6点(1.5%)、20kg～30kg未満の石3点(0.8%)、30kg～40kg未満の石3点(0.8%)である。

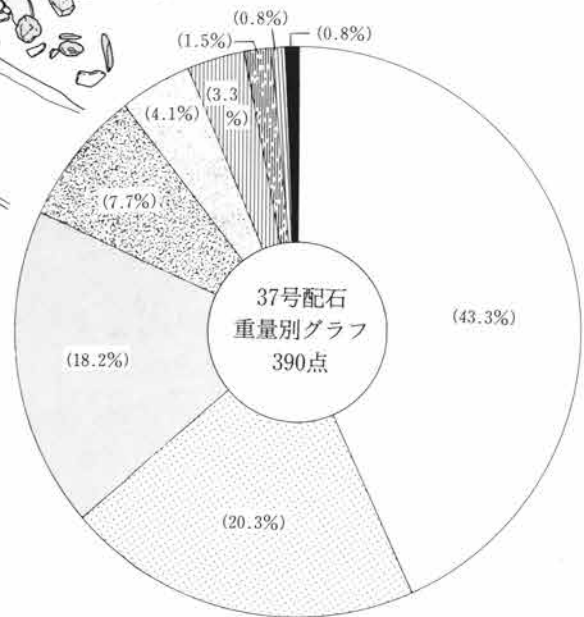
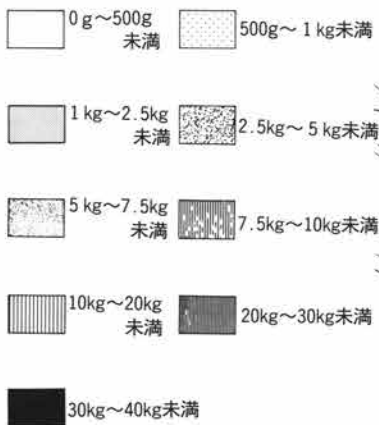
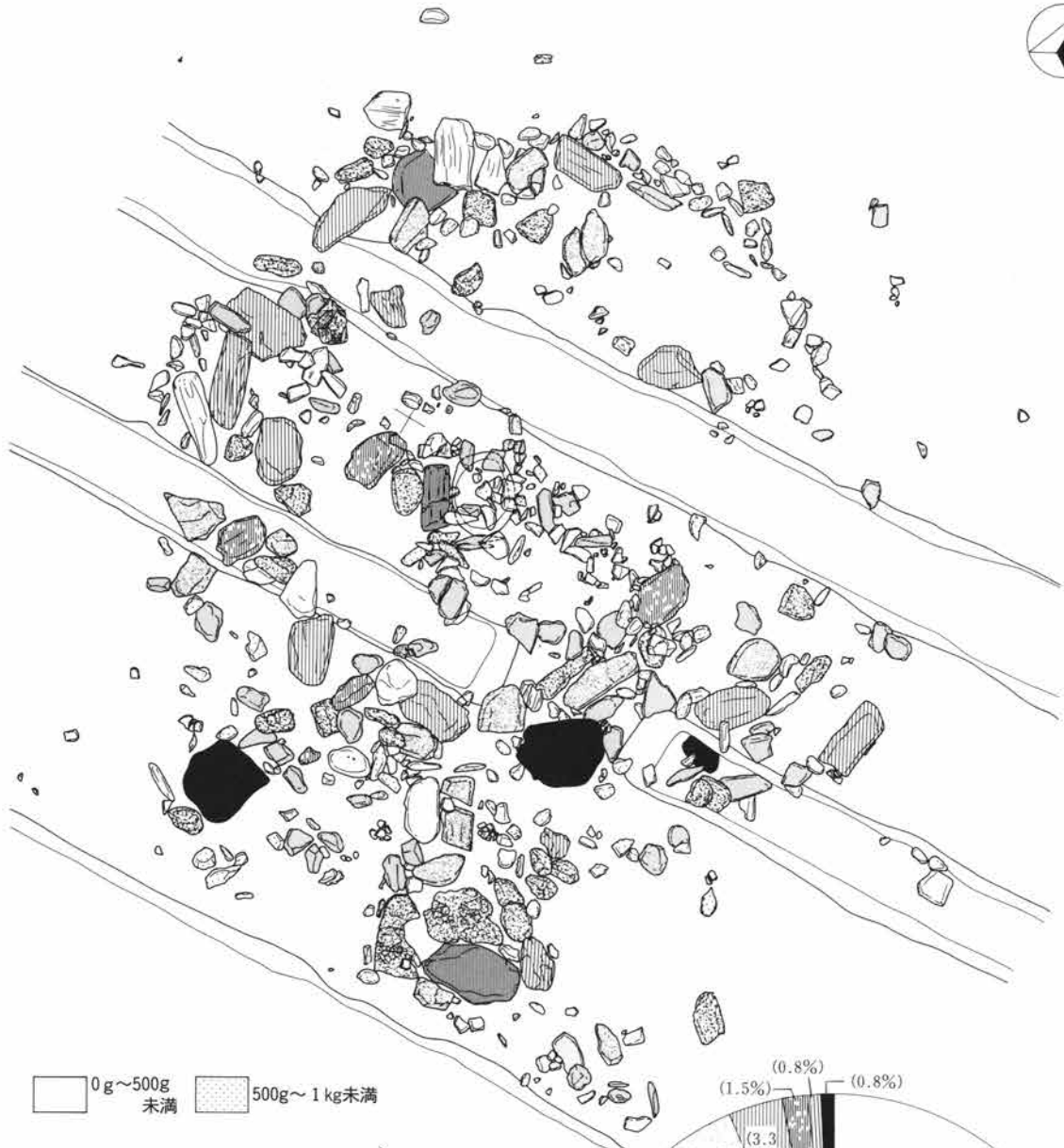
壁高 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。



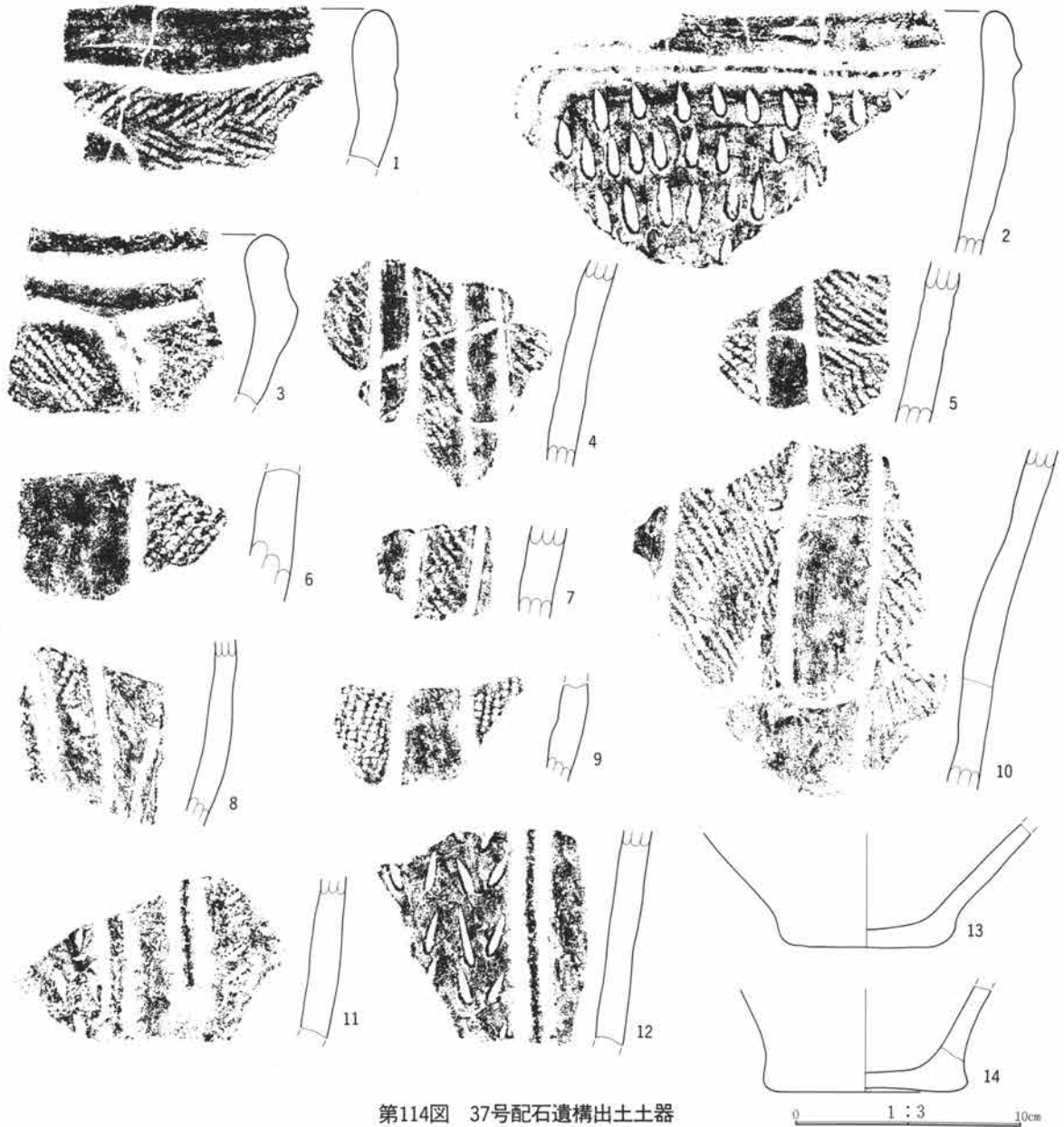


第112図 37号配石遺構石材別分布



0 1 : 40 2m

第113図 37号配石遺構重量別分布



第114図 37号配石遺構出土土器

炉 石囲い炉である。長径52cm・短径36cm・深さ10cmの楕円形を呈し、面積は約0.15m²である。覆土は暗褐色土層である。固く締まり粘性が非常にある。焼土粒子・炭化物粒子を微量含んでいた。炉石は6個の石から構成されている。

埋甕 張出し部の先端部から検出されたが、耕作溝によって壊されていたために全容を知ることはできなかった。埋甕の破片は加曾利E3式土器であった。

張出し部 新しい耕作溝によってその一部が壊されている。この張出し部の東から小さな立石が検出された。この立石は周囲を石で囲われている。その規模は長径65cm、短径50cmであった。立石は長径16.5cm・短径12.5cm・厚さ7cm・重量2.2kgの点紋絹雲母石墨片岩を使用していた。

遺物出土状況 埋甕の他には、口縁部13点、胴部93点、底部7点の計113点の土器片が、炉の東部分を中心に出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も含まれていた。

石器では石皿1点、多孔石8点、凹石8点、磨石2点、打製石斧2点、磨製石斧の未製品1点が出土して

3 敷石住居跡〈37号配石遺構〉

いる。石皿1点は緑石として、多孔石6点は緑石、2点は張出し部から、凹石6点は炉東の緑石から集中的に出土し、2点は他の緑石から、磨石は張出し部の西からそれぞれ出土している。石器の含有率は5.1%であり、また焼石は428点中76点の出土で、17.8%を占めている。焼石は緑石を中心に認められた。

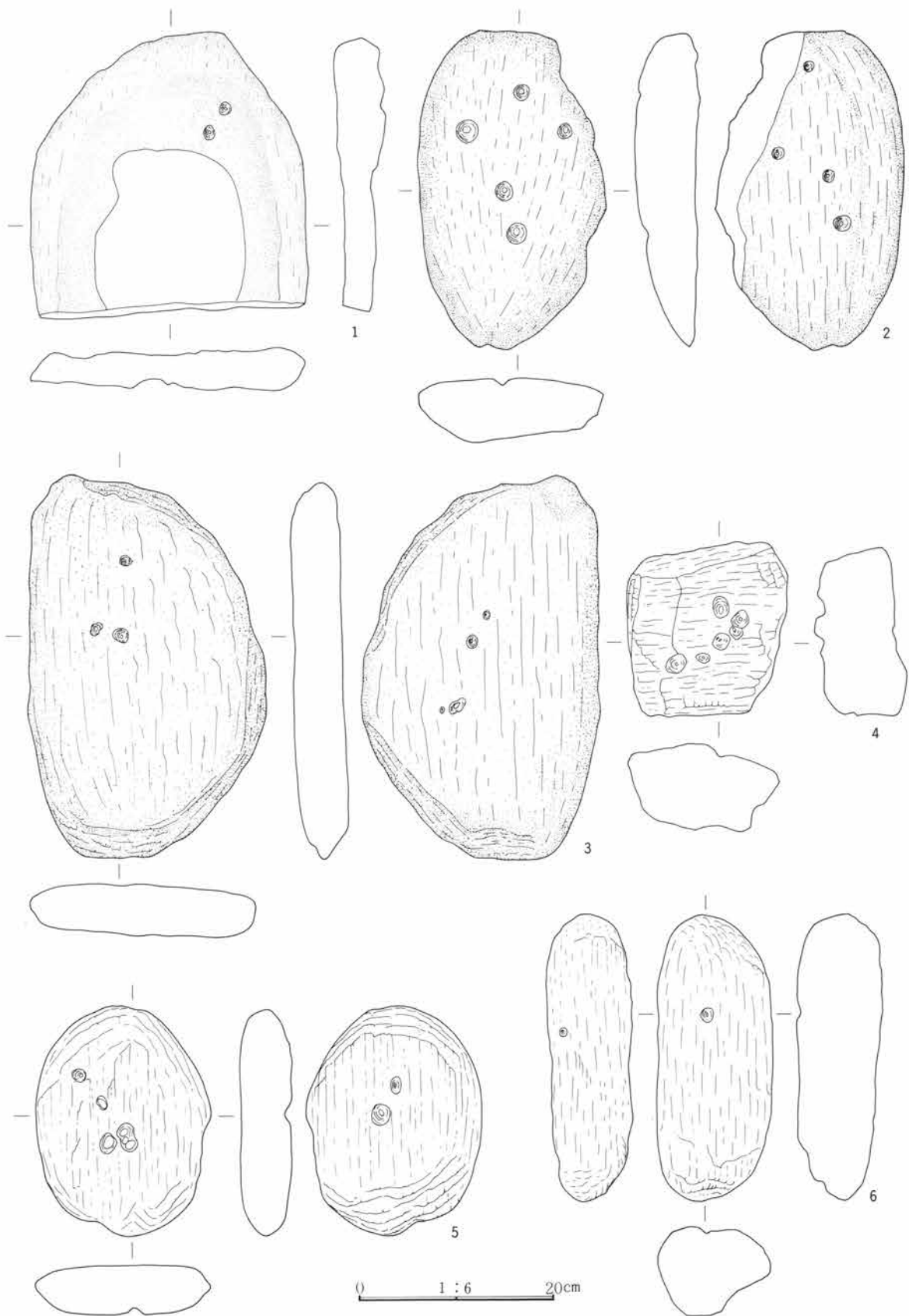
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 3式期の柄鏡形敷石住居跡である。

37号配石遺構土器観察表

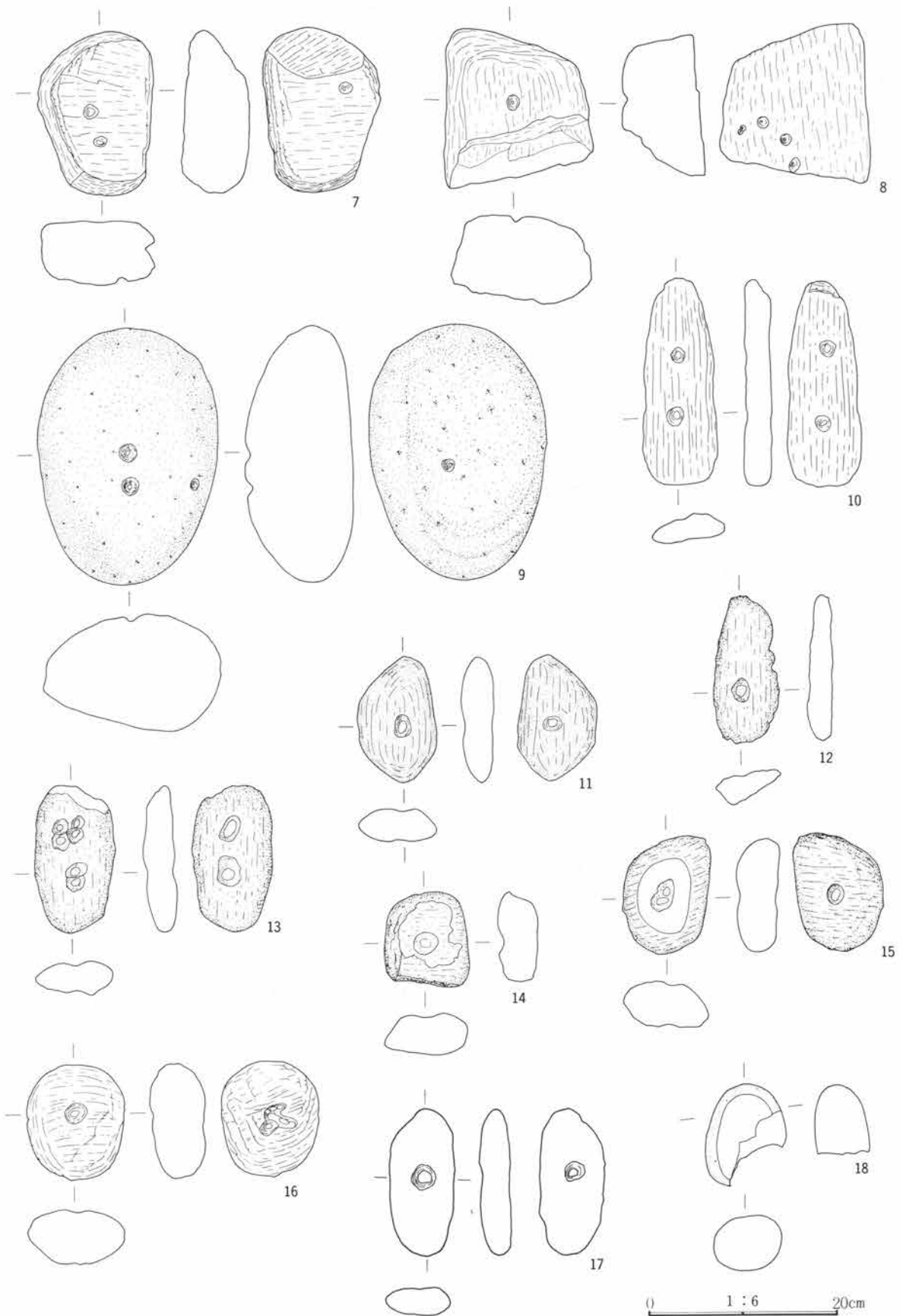
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|--|---|-------------|
| 114-1 114 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~19mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による 文様が描かれ、縄文施文。原体はL(↓ 横・縦位。 | 主体部緑石 |
| 114-2 114 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい橙色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、微隆起帯を巡 らせる。区画内に押し引き状の沈線が施さ れている。 | 主体部北東 部 |
| 114-3 114 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~19mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は橙色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる文様が描かれ、縄文施文。原体はR(↑ 横転がし。 | 主体部緑石 |
| 114-4 114 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↓ 縦転がし。 内面に煤が付着している。 | 先端部埋壘 東部 |
| 114-5 114 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↓ 縦転がし。 | 張出し部 |
| 114-6 114 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15~18mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑ 縦転がし。 | 主体部東部 |
| 114-7 114 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↓ 縦転がし。 | 主体部緑石 南部 |
| 114-8 114 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑ 縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 張出し部南 部 |
| 114-9 114 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑ 縦転がし。 | 張出し部北 部 |
| 114-10 114 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↓ 縦転がし。 | 張出し部 |
| 114-11 114 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、押し引き状の沈線が 施されている。 | 先端部埋壘 北部 |
| 114-12 114 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、押し引き状の沈線が 施されている。 | 先端部埋壘 南部 |
| 114-13 114 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 外面は荒れている。 | 主体部内部 |
| 114-14 114 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径89mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色、 | 底部周縁は磨耗している。 | 先端部埋壘 北部 |

37号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|---------------|------------|--------|-----|---------|--|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 115-1 114 | 石 皿 | % | 点紋絹雲母石墨 片岩 | (29.4) | 28.5 | 5.4 | (5,700) | 楕円形で窪みは浅い。表面に2個の凹みがある。 凹みの平均は長径14mm、短径12mm、深さ1mmであ る。 | 南の緑石 |
| 115-2 114 | 多 孔 石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 32.3 | (19.5) | 6.6 | (6,000) | 両面に9個の凹み。最大の凹みは長21mm、短20mm、 深6mm。最小は長11mm、短7mm、深3mmで、平均 は長17mm、短15mm、深5mm。 | 北の緑石 |

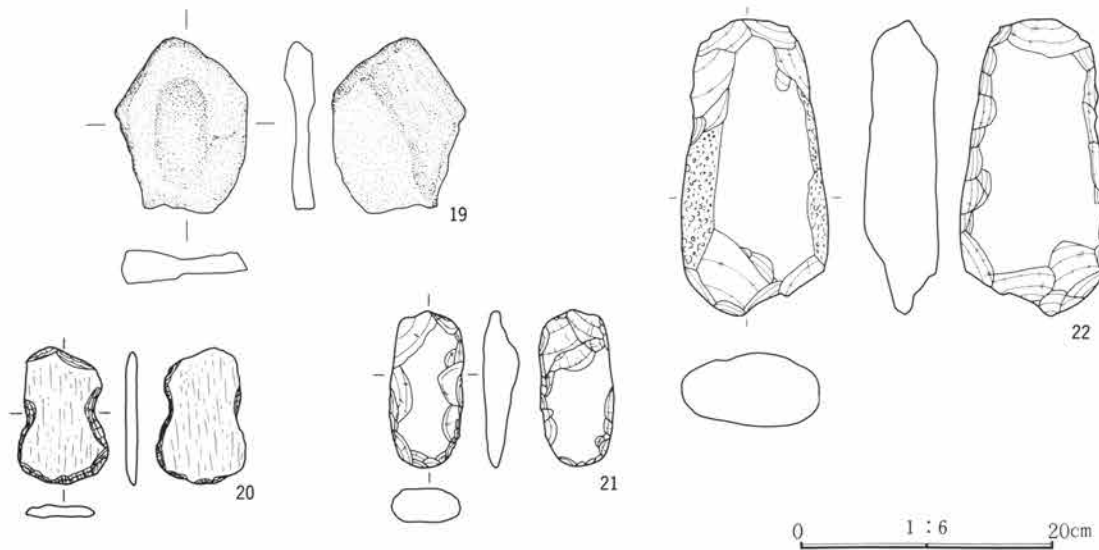


第115図 37号配石遺構出土石器(1)



第116図 37号配石遺構出土石器(2)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第117図 37号配石遺構出土石器(3)

37号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|-------------|------|---------|--------------|------|------|---------|--|------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 115-3 114 | 多孔石 | 完形 | 点紡緑泥片岩 | 38.8 | 24.5 | 5.5 | 9,200 | 両面に8個の凹み。最大の凹みは長19mm、短11mm、深1mm。最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長12mm、短10mm、深1mm。 | 炉の東 |
| 115-4 114 | 多孔石 | 完形 | 石墨絹雲母片岩 | 18.0 | 16.4 | 9.1 | 3,850 | 片面に6個の凹み。最大の凹みは長24mm、短16mm、深15mm。最小は長15mm、短11mm、深8mmで、平均は長18mm、短15mm、深11mm。 | 西の縁石 |
| 115-5 114 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 23.3 | 18.0 | 5.1 | 3,250 | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長30mm、短15mm、深2mm。最小は長14mm、短9mm、深1mmで、平均は長20mm、短14mm、深3mm。 | 北の縁石 |
| 115-6 114 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 29.0 | 11.8 | 8.9 | 4,500 | 2個の凹みがある。凹みの平均は長径12mm、短径11mm、深さ3mmである。 | 西の縁石 |
| 116-7 114 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 17.0 | 12.4 | 7.2 | 2,100 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長15mm、短14mm、深2mm。最小は長13mm、短10mm、深3mmで、平均は長14mm、短12mm、深4mm。 | 西の縁石 |
| 116-8 114 | 多孔石 | 欠 | 絹雲母石墨片岩 | (16.5) | 15.9 | 9.3 | (3,700) | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長16mm、短14mm、深7mm。最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長11mm、短9mm、深2mm。一部焼けている。 | 張出し部 |
| 116-9 114 | 多孔石 (丸石) | 完形 | 流紋岩 | 26.4 | 18.7 | 12.1 | 7,400 | 丸石に4個の凹み。最大の凹みは長18mm、短18mm、深9mm。最小は長11mm、短9mm、深3mmで、平均は長15mm、短14mm、深7mm。 | 張出し部 の西 |
| 116-10 115 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 21.7 | 7.8 | 3.2 | 700 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長21mm、短17mm、深3mm。最小は長16mm、短14mm、深2mmで、平均は長18mm、短16mm、深2mm。 | 北の縁石 |
| 116-11 115 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 13.1 | 8.5 | 3.5 | 550 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径23mm、短径16mm、深さ3mmである。側面に磨耗痕がみられる。 | 西の縁石 |
| 116-12 115 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 15.5 | 6.8 | 3.5 | 450 | 片面に1個の凹みがある。凹みは長径26mm、短径18mm、深さ2mmである。 | 東の縁石 |
| 116-13 115 | 凹石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | (15.2) | 8.7 | 3.6 | (700) | 両面に8個の凹み。最大の凹みは長32mm、短24mm、深4mm。最小は長16mm、短13mm、深1mmで、平均は長22mm、短15mm、深2mm。 | 東の縁石 |
| 116-14 115 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 9.8 | 8.9 | 4.3 | 520 | 片面に1個の凹みがある。凹みの大きさは長径24mm、短径23mm、深さ5mmである。 | 東の縁石 |
| 116-15 115 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 12.2 | 9.4 | 4.8 | 820 | 両面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径11mm、短径7mm、深さ4mmである。片面に磨耗痕がみられる。 | 南の縁石 |

37号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|------|------|---------|--------------|-------|-----|-------|---|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 116-16 115 | 凹 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 11.9 | 10.3 | 5.9 | 1,000 | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長30mm、短8mm、深2mm。最小は長5mm、短4mm、深1mmで、平均は長17mm、短9mm、深2mm。 | 東の縁石 |
| 116-17 115 | 凹 石 | 完形 | 輝緑岩 | 15.4 | 6.9 | 3.1 | 600 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径27mm、短径23mm、深さ3mmである。全面に磨耗痕がみられる。 | 東の縁石 |
| 116-18 115 | 磨 石 | % | 流紋岩 | (10.5) | (8.6) | 5.7 | (500) | 器面に磨耗痕がみられる。 | 張出し部 西 |
| 117-19 115 | | 一部欠損 | 砂岩 | (13.8) | 10.6 | 2.4 | (400) | 器面に窪みがある。 | 北の縁石 |
| 117-20 115 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母片岩 | 10.8 | 7.1 | 1.1 | 120 | 分銅 (I)。 | 炉東 |
| 117-21 115 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 12.4 | 6.0 | 2.9 | 300 | 短冊 (III)。 | 南の縁石 |
| 117-22 115 | | 完形 | 輝緑岩 | 23.4 | 11.9 | 5.9 | 2,510 | 粗割り途中。ほとんど原石の状態。 | 北の縁石 |

38号配石遺構 (第118～123図、PL. 49、115)

位置 Gj-47、Gk-47・48グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西115m (埋甕までの距離)、列石からは95m50cmの所、36号配石遺構の北西24mに位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月下旬から調査を開始した。24日に遺構の全景写真と部分写真の撮影を実施し、実測作業に入った。南端から埋甕の検出、また敷石の残存を思わせる石の検出から判断して、当遺構は敷石住居跡になるものと考えられた。ただし、路線外に遺構が延びているために全体を把握することはできなかった。10月中旬から遺物の取りあげと敷石の取り上げを行い、調査を終了した。

重複 なし。

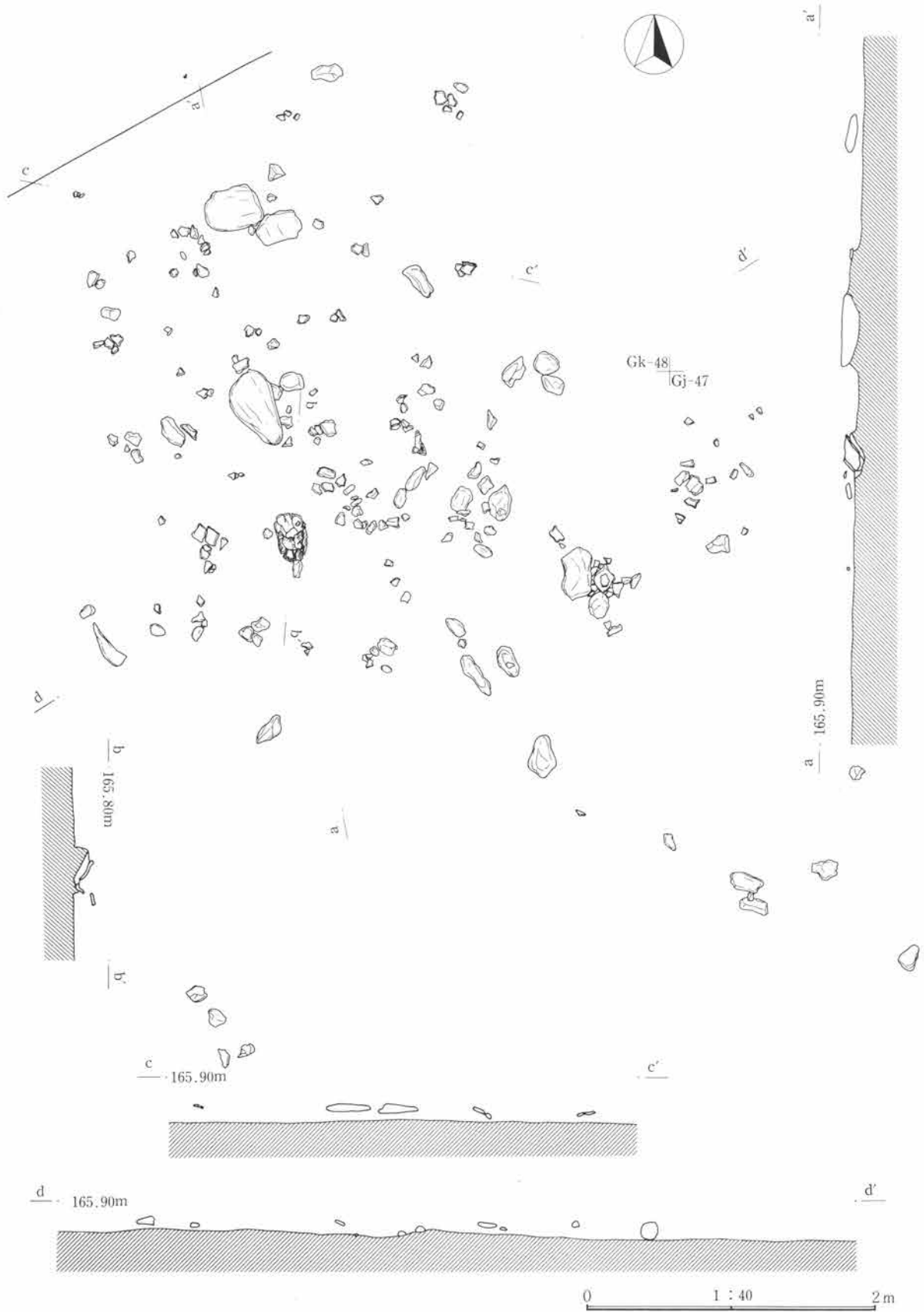
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。当敷石住居跡もまた他の敷石住居跡と同様に、当時の地表面に敷石を施したものであろう。

形状 路線外に遺構が延びていたり、残存敷石が不明瞭なために、柄鏡形を呈するのか円形であるのかは不明である。現状では長径4m60cm、短径4mの範囲に石と土器片の分布が認められる。面積は約18.7㎡である。
敷石状況 かりうじて敷石の一部が残っているが、全容は不明である。おそらく破壊を受けたものであろうが、この破壊は新しいものではなくて、縄文時代にさかのぼるものである。

使用石材 19種類の石材が確認された。87点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩20点(23%)、輝緑岩13点(14.9%)、点紋緑泥片岩11点(12.6%)、輝岩9点(10.3%)、点紋石墨緑泥片岩6点(6.9%)、熱変成岩・砂岩各3点(各3.4%)、絹雲母緑泥石墨片岩・チャート・珪石各2点(各2.3%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・安山岩・石墨絹雲母片岩・石墨片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・千枚岩各1点(各1.1%)であり、不明は7点(8%)を数えた。不明の石を除いた80点中44点(55%)の石が片岩類である。配石遺構 (敷石住居跡は除外) を構成している石材は、絹雲母石墨片岩が圧倒的に使用されていたが、敷石住居跡ではその占める割合は高くはなかった。この傾向は当遺構でも追認された。

石材重量 重量の判明している石は81点である。その内訳は、500g未満の石39点(48.1%)、1kg～2.5kg未満石15点(18.5%)、500g～1kg未満の石14点(17.3%)、2.5kg～5kg未満の石6点(7.4%)、5kg～7.5kg未満の石3点(3.7%)、10kg～20kg未満の石3点(3.7%)、20kg～30kg未満の石1点(1.2%)である。

壁高 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

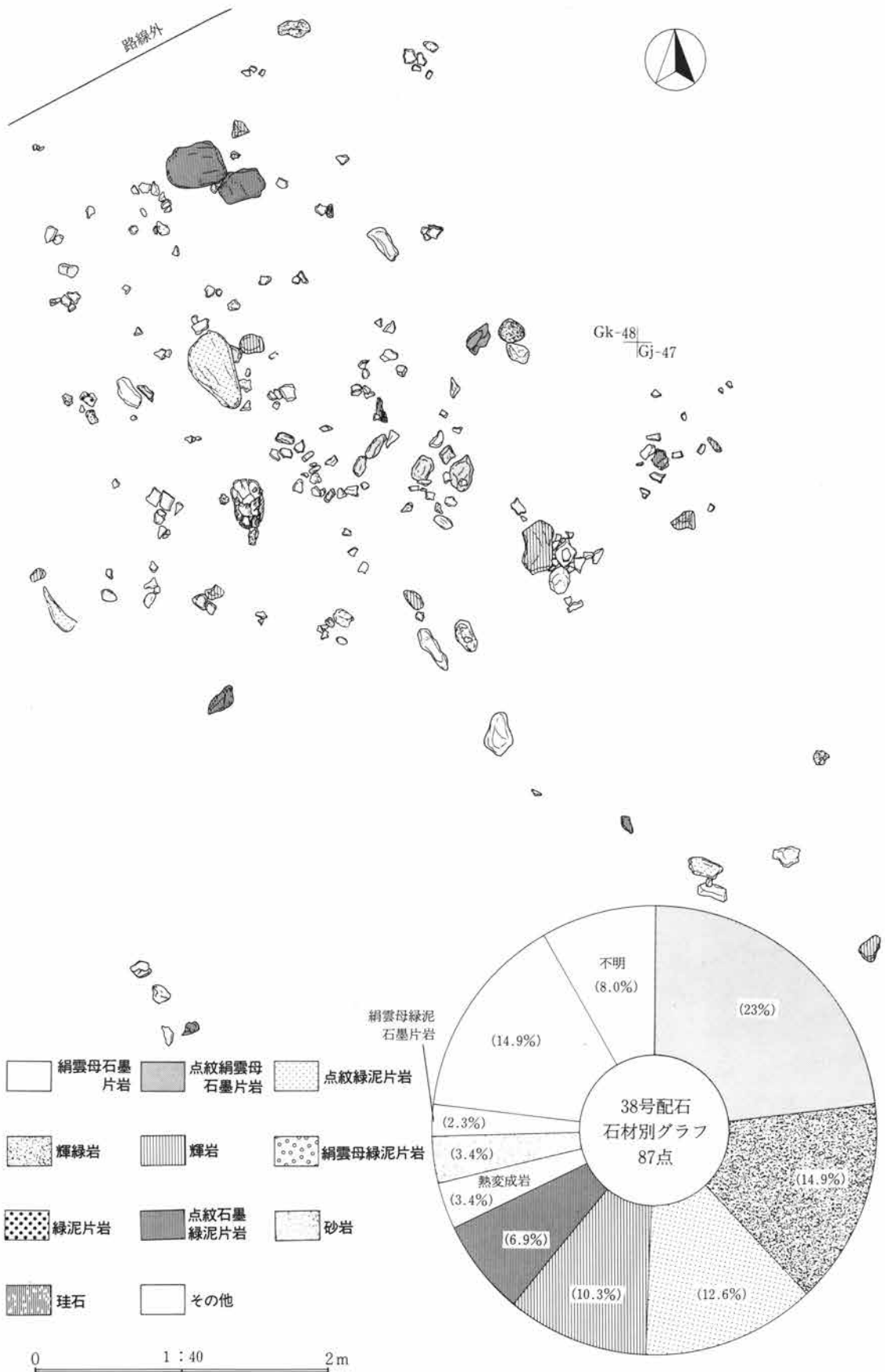


第118図 38号配石遺構

3 敷石住居跡〈38号配石遺構〉

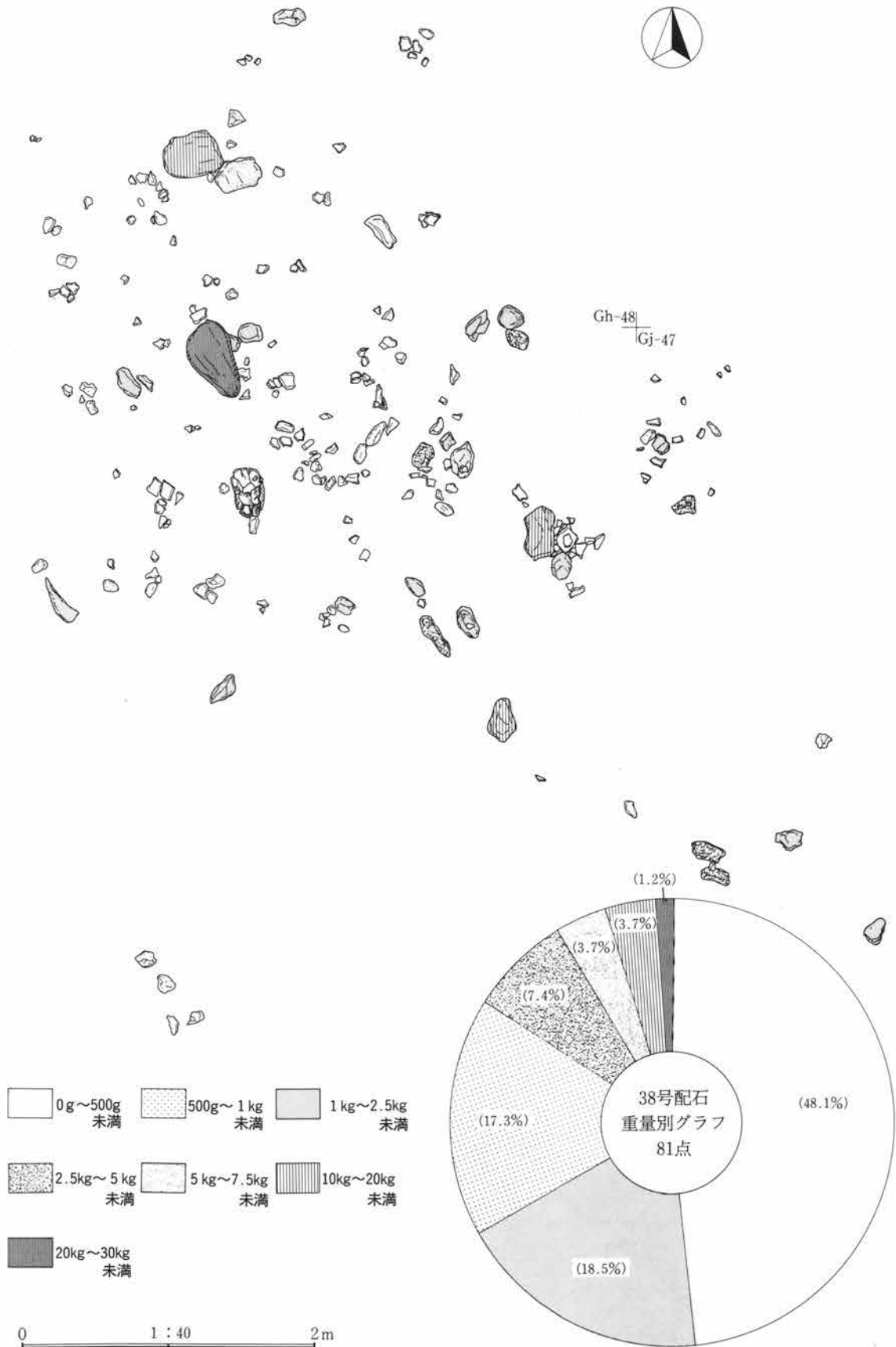


第119図 38号配石遺構遺物出土状況



第120図 38号配石遺構石材別分布

3 敷石住居跡 <38号配石遺構>



第121図 38号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

柱穴 検出できなかった。

炉 検出できなかった。路線外に存在しているものか。

埋甕 南端から1基検出された。この埋甕は胴下半分を欠損した加曾利E3式土器であり、斜位状態で埋設されていた(第122図 1)。埋設ピットの覆土は暗褐色土層であった。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を多量に含み、炭化物粒子を極少量含んでいる。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を多量に含む。埋甕内覆土。

埋甕は北に向かって斜位状態で出土したことから判断して、主体部は埋甕の北に存在するものであろう。残存敷石の状態から検討すると、この埋甕は先端部埋甕に該当するものとなろう。

張出し部 埋甕の北2m30cmまでの範囲が、明瞭ではないが張出し部に該当するものであろうか。

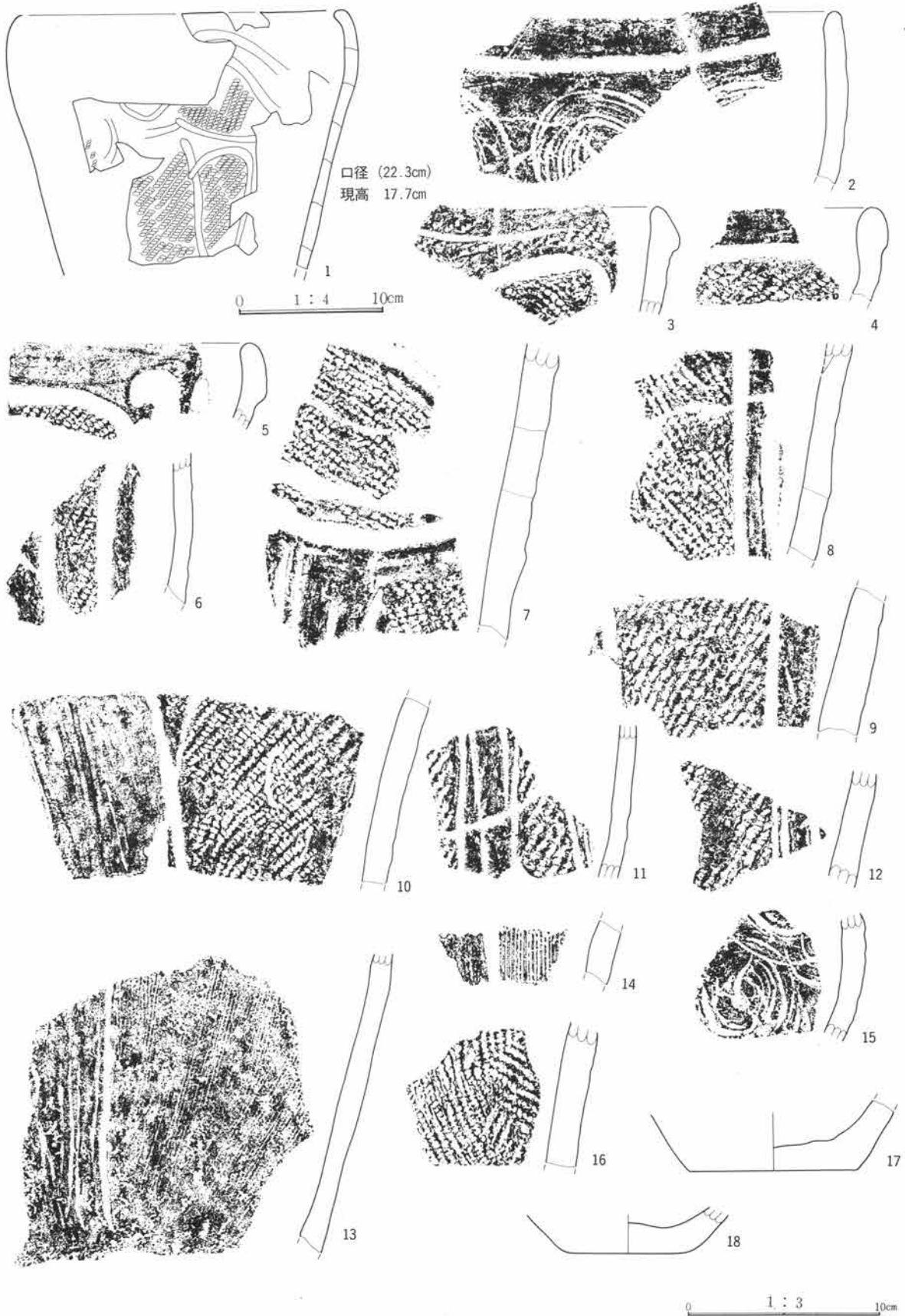
遺物出土状況 埋甕1個体の他に、口縁部13点、胴部91点、底部2点の計106点の土器片が出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も少量含まれていた。

石器では石皿1点が埋甕の南西から、凹石1点は埋甕の北東からそれぞれ出土している。石器含有率は2.3%である。また焼石は87点中10点の出土で、11.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡である。路線外に遺構が延びていることと、一部が破壊されているためにその全容をつかむことはできなかった。おそらく調査箇所は張出し部に該当する部分であろう。

38号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------------------|-------------------|---|---|---------------|
| 122-1 115 | 口縁 ~胴 上半 部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴上半。器厚5~8mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部は沈線による楕 円等の文様が描かれ、縄文施文。胴部には R{L縦転がし。沈線による文様が描かれる。 | 埋 甕 (斜位状態) |
| 122-2 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡ら せる。胴部には沈線による文様が描かれて いる。 | 張出し部 |
| 122-3 115 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR{L。 | 主体部南部 |
| 122-4 115 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に沈線による楕 円等の文様が描かれ、縄文施文。原体は L{R横転がし。 | 主体部縁石 |
| 122-5 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる楕円、廠手状の文様が描かれ、縄文施 文。原体はL{R。 | 主体部縁石 |



第122図 38号配石遺構出土土器

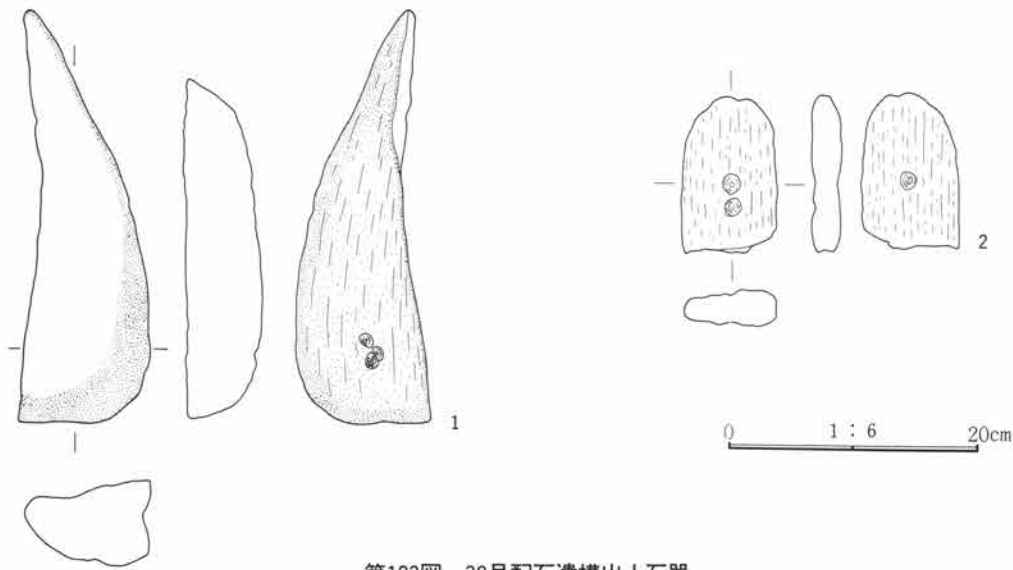
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

38号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|----------------|--------------------|--|--|------------|
| 122-6 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/1)縦転がし。 | 主体部内部 |
| 122-7 115 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様を 描き、縄文施文。原体はL(1/1)。胴部に沈線 を垂下し、縄文施文。原体はL(1/1)。 | 張出し部北 部 |
| 122-8 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12～14mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(1/1)縦転がし。 | 張出し部 |
| 122-9 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17～21mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/1)縦転がし。 押圧が強い。 | 張出し部 |
| 122-10 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/1)縦転がし。土器は柔 軟で押圧が強い。内面に煤が付着している。 | 主体部北 部 |
| 122-11 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/1) (0段多条) 縦転が し。 | 主体部縁石 |
| 122-12 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/1)縦転がし。 | 主体部北 部 |
| 122-13 115 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10～12mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 沈線と条線が施されている。 | 主体部内 部 |
| 122-14 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒色。 | 沈線と条線が施されている。 内面に炭化物が付着している。 | 張出し部 |
| 122-15 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黄褐色。 | 沈線による文様が描かれている。 | 張出し部 |
| 122-16 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はL(1/1)。 | 張出し部北 部 |
| 122-17 115 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径88mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 底面は荒れている。 | 主体部北東 部 |
| 122-18 115 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径60mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明赤褐色。 | | 張出し部南 部 |

38号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|----|------|---------|--------------|--------|-----|---------|--|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 123-1 115 | 皿 | ㍻ | 点紋緑泥片岩 | (32.6) | (10.7) | 6.6 | (2,500) | 磨面はあまり窪みがない。裏面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径11mm、短径9mm、深さ3mmである。 | 埋甕の南 西 |
| 123-2 115 | 凹石 | ㍻ | 絹雲母石墨片岩 | (12.4) | 7.8 | 2.9 | (400) | 両面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径15mm、短径13mm、深さ3mmである。 | 埋甕の北 東 |



第123図 38号配石遺構出土石器

4 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第124～129図、PL. 115）

位置 Fm・Fn-43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から34m50cm（炉までの距離）、列石からは15mの所に位置している。北東方向に土壌群が存在している。

経過 0区（昭和62年度調査区）から検出。9月上旬に遺構を確認した。多量の石と土器片が出土し、周辺を精査して竪穴住居跡となることが判明した。覆土上層から多量の石が出土しているために、1/10実測図を作成しながら調査を進めた。11月19日までは土層ベルトを残して床面まで調査が及んだ。ベルト除去後は遺物の取り上げを継続して行い、12月11日に全景写真と部分写真の撮影を実施した。床面からの遺物の出土はなく、覆土上層に集中していた。

重複 なし。

覆土 砂礫層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は以下のとおりである。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり、粘性はあまりない。石と土器片を多量に含んでいた。意識的な投棄を思わせる。

第2層 黄褐色砂礫層 壁の崩れ。

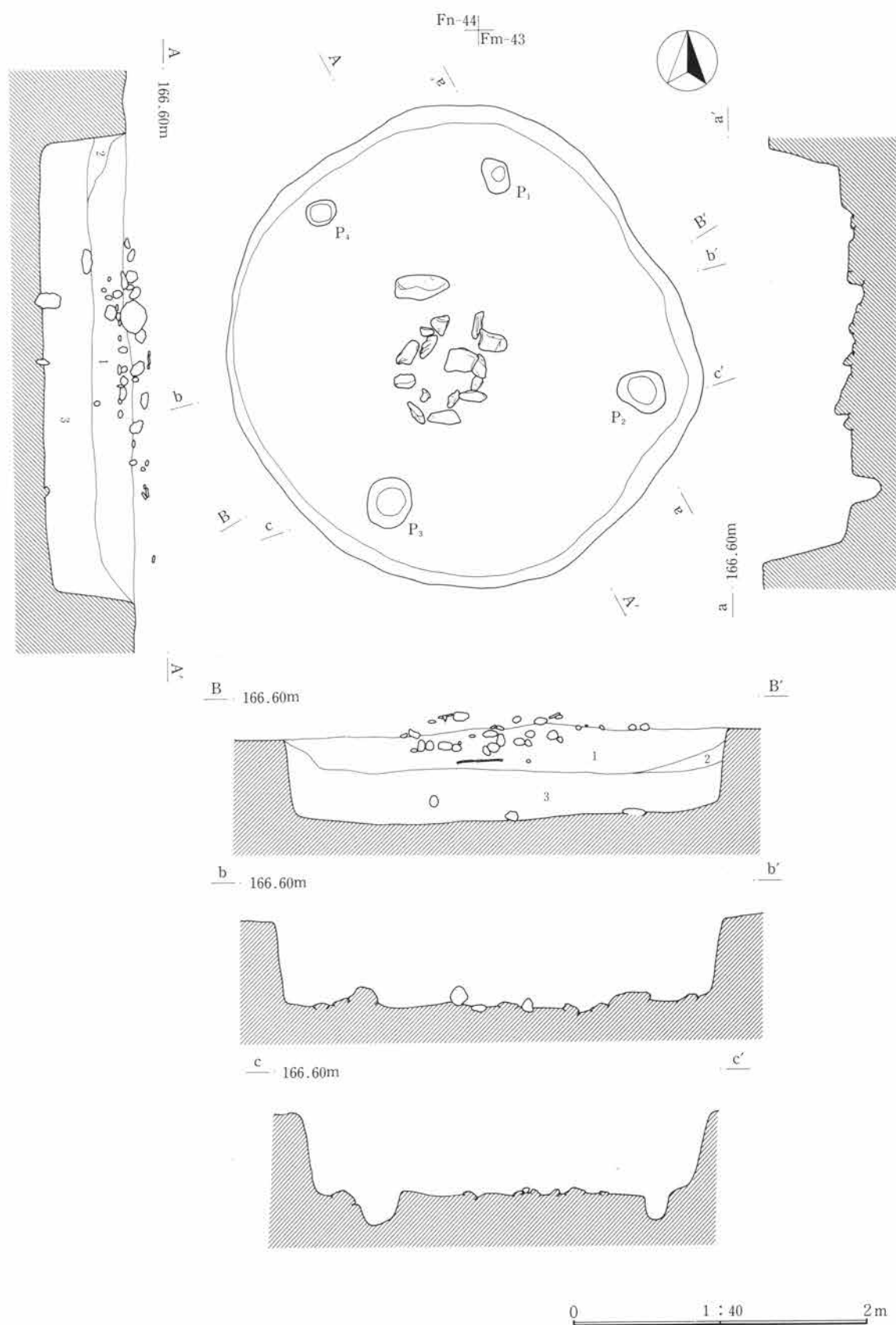
第3層 黒褐色土層 固く締まり粘性が非常にある。石を混入。

覆土は自然堆積層であるが、覆土最上層から出土した多量の石と土器片は意識的投棄と考えられる。

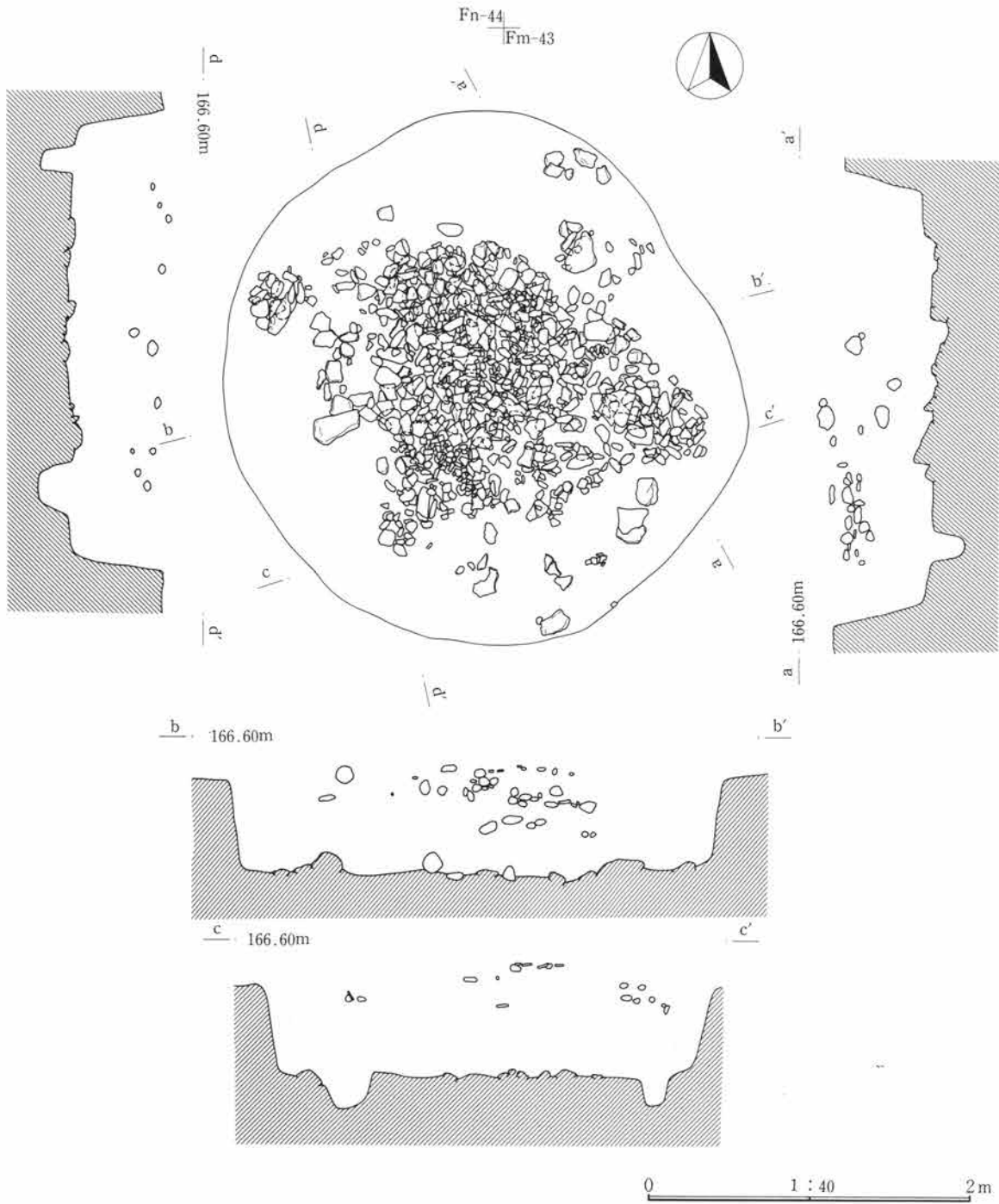
形状 竪穴住居跡であり、長径3m10cm、短径3mのほぼ円形を呈している。面積は約8㎡である。

壁高 確認面からの深さは60cm程であり、残存状況は比較的良かった。床面からほぼ垂直に立ち上がっている。

床面 砂礫層を7cm～10cmほど掘り込み、この部分に黒褐色土を埋めて床面としていた。また床面は全体的に凹凸が認められる。



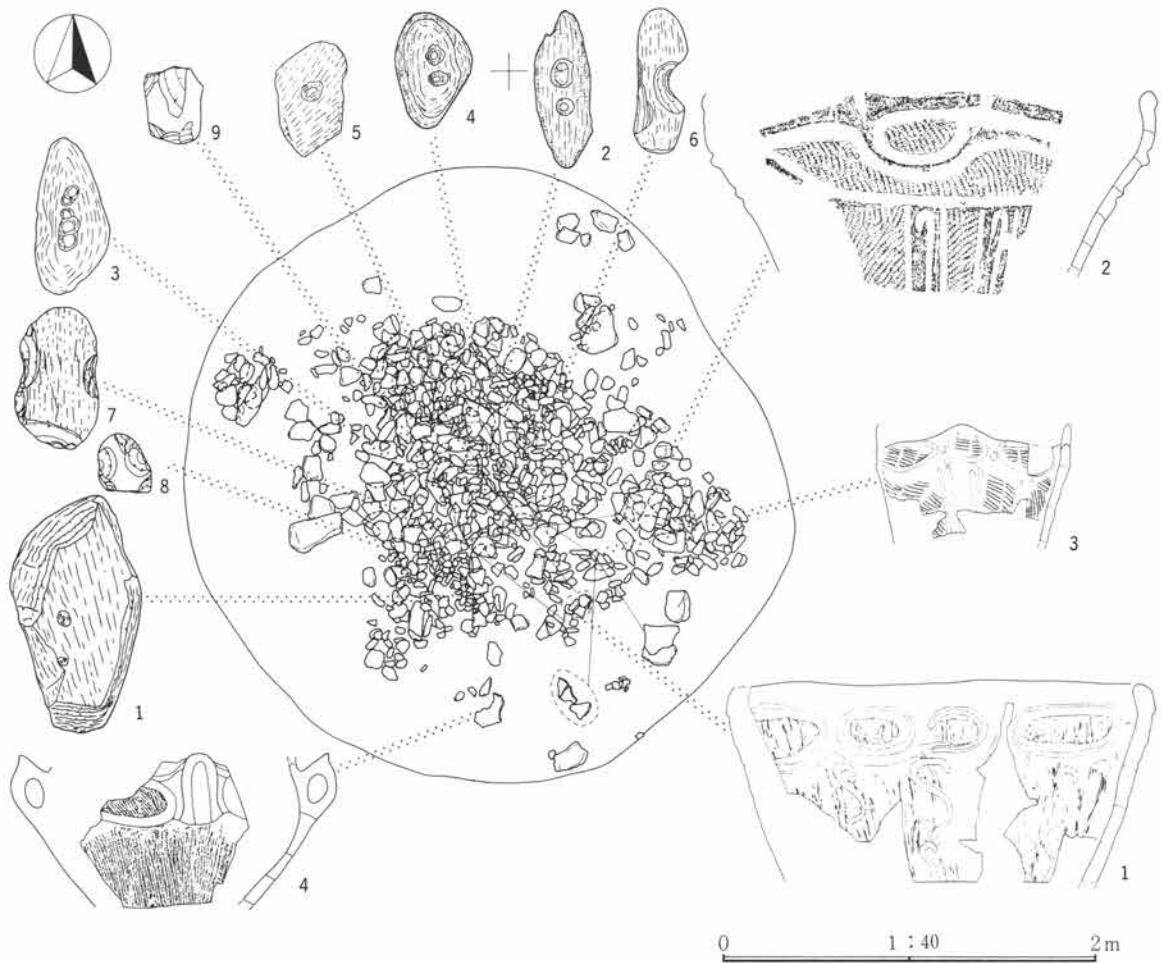
第124図 1号竖穴住居跡



第125図 1号竪穴住居跡

周溝 検出できなかった。

柱穴 4個のピットが検出された。P₁は長径25cm・短径18cm・深さ9cm。P₂は長径33cm・短径28cm・深さ22cm。P₃は長径35cm・短径31cm・深さ20cm。P₄は長径21cm・短径17cm・深さ16cmである。P₁とP₄が小さく浅いピットで、P₂とP₃が大きく深い。またピットの間隔もP₁・P₄間距離125cm、P₂・P₃間距離は190cmとP₁・P₄間距離よりも長いことから判断して、P₁とP₄の間が出入り口部に該当するものであろうか。ちなみにP₁とP₂間距離は175cm、P₃とP₄間距離は200cmを測る。



第126図 1号竪穴住居跡遺物出土状況

炉 石囲い炉であろう。床面のほぼ中央から検出された。長径80cm・短径60cmの規模であるが、明瞭な石囲い炉としてとらえることはできなかった。焼土、炭化物等は検出されていない。

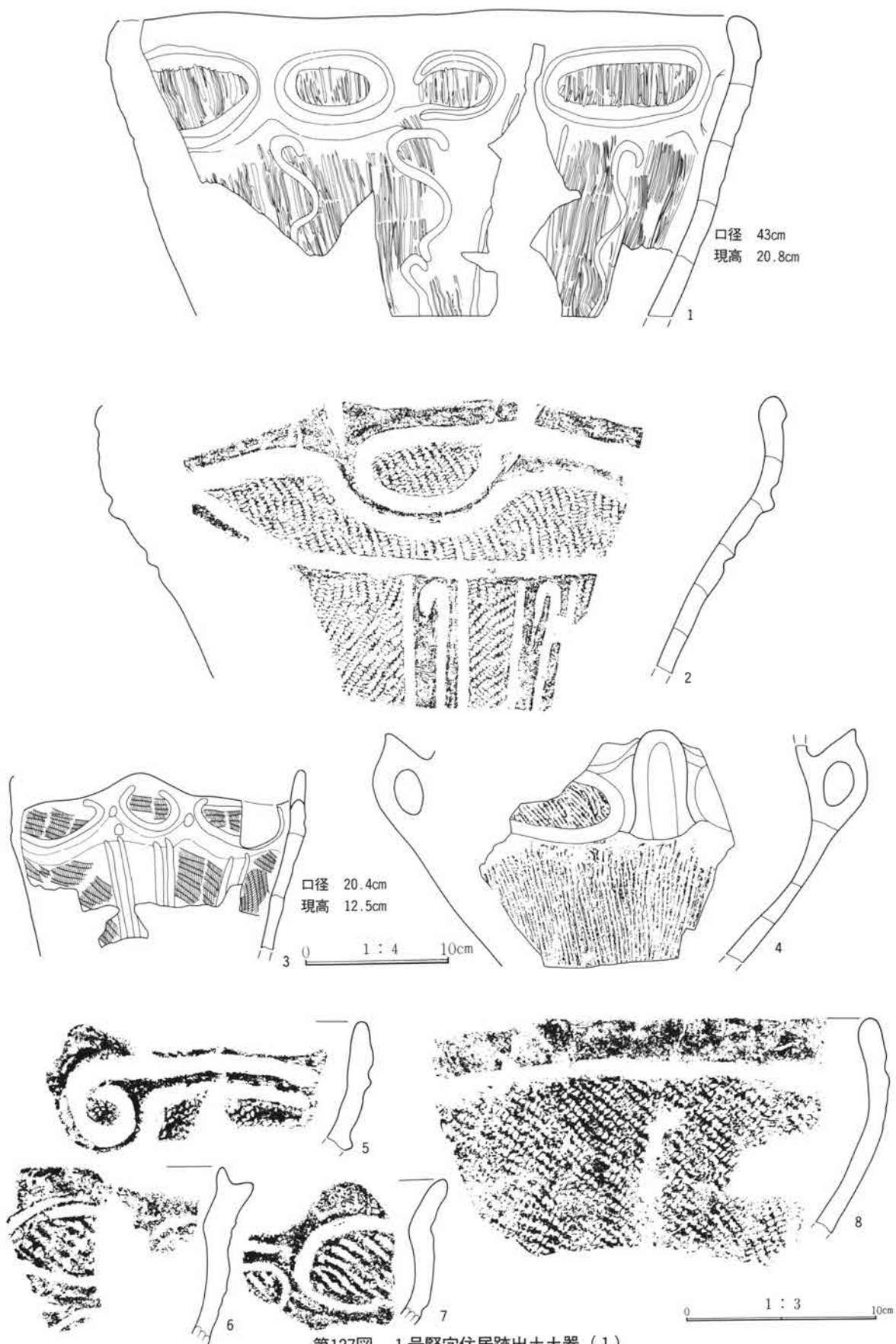
遺物出土状況 土器片は実測個体4点と、口縁部22点、胴部132点、底部2点の計160点が覆土最上層から出土している。接合関係も認められる。加曾利E3式土器を主体としていた。

石器は多孔石1点、凹石4点、打製石斧2点、磨製石斧は未製品2点が出土している。土器片と同様に覆土最上層からの出土であった。このほかに749点の石が出土している。石材別点数は、絹雲母石墨片岩214点(28.6%)、点紋絹雲母石墨片岩84点(11.2%)、輝緑岩66点(8.8%)、珪石49点(6.5%)、点紋緑泥片岩・緑泥片岩各39点(各5.2%)、輝岩30点(4%)、点紋石墨緑泥片岩27点(3.6%)、その他の石材163点(21.8%)で、不明は38点(5.1%)を数えた。

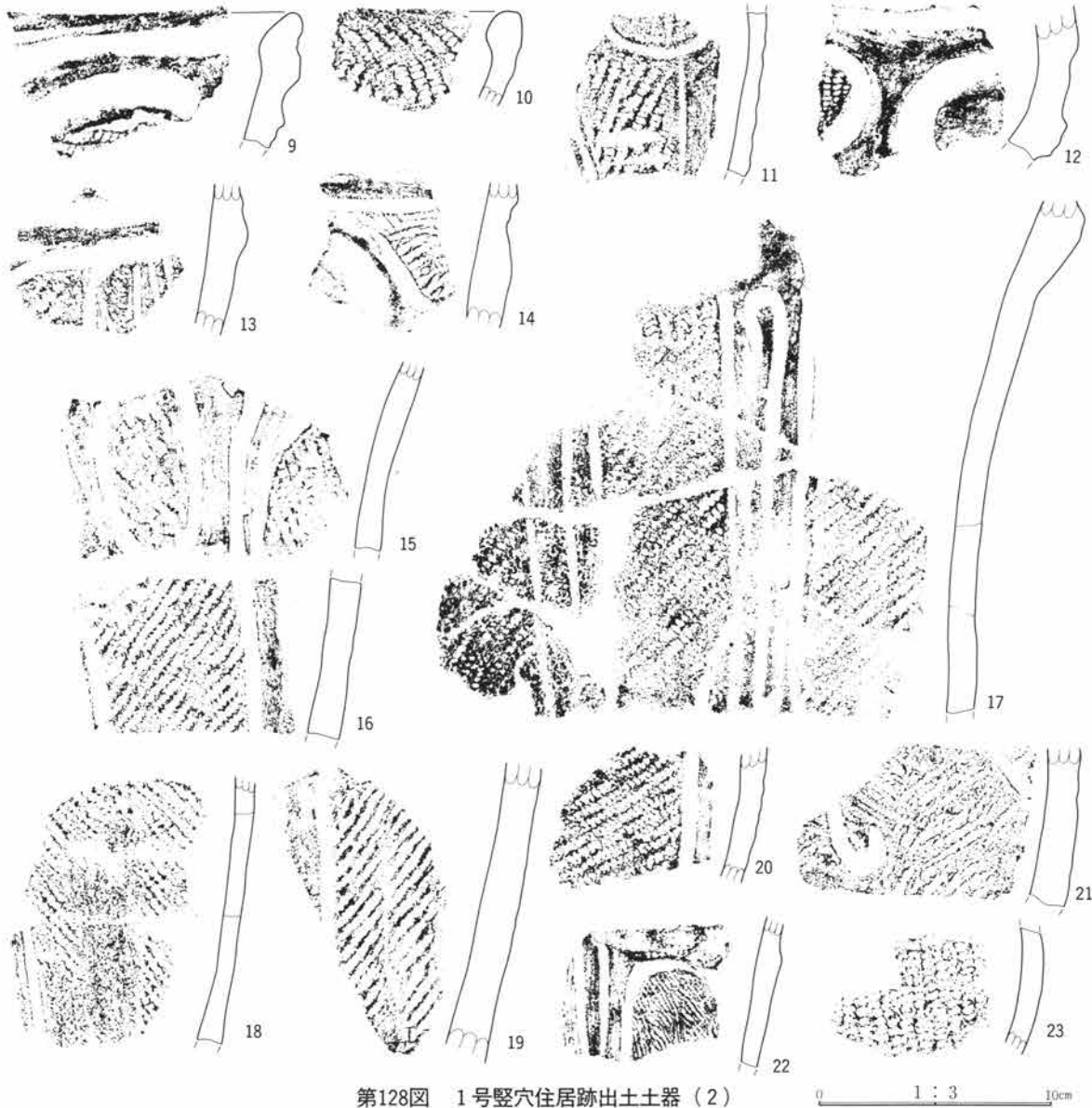
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形の竪穴住居跡である。

1号竪穴住居跡土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------------|-------------------|---|--|------|
| 127-1 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部 $\frac{1}{2}$ 。器厚14~20mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円、円形等の 文様が描かれ、条線が施されている。 胴部には条線と蛇行沈線が施されている。 | 覆土上層 |
| 127-2 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原 体はR{ \uparrow 横位。胴部にはR{ \uparrow 縦位。沈線 と蕨手状の沈線が垂下している。土器面は 柔軟で押圧が強い。 | 覆土上層 |
| 127-3 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部 $\frac{1}{2}$ 。器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部に4単位の突起が付けられる。口縁 部に隆起と沈線による楕円、円形等の文様 が描かれ、縄文施文。原体はR{ \uparrow 。胴部 には沈線を垂下し、R{ \uparrow 施文。 | 覆土上層 |
| 127-4 115 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器の口縁~胴部。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部に無文帯をおき、肩部に橋状把手を もつ。肩部に楕円の文様を描き、縄文施文。 原体はR{ \uparrow 横転がし。胴部には縦位の条線 が施されている。土器面は柔軟。 | 覆土上層 |
| 127-5 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は褐色。 | 口縁部に突起を有する。口縁部に隆帯と沈 線による渦巻き、楕円等の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL{ \uparrow 。 | 覆土上層 |
| 127-6 115 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。 | 口縁部に突起を有する。口縁部に沈線による 楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原体 はR{ \uparrow 横転がし。 | 覆土上層 |
| 127-7 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 口縁部に突起を有する。口縁部に沈線による 楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原体 はR{ \uparrow 横転がし。 | 覆土上層 |
| 127-8 115 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の沈線を巡らせる。以下縄文施 文。原体はL{ \uparrow 縦転がし。 | 覆土上層 |
| 128-9 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰黄褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はL{ \uparrow 。 | 覆土上層 |
| 128-10 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 縄文施文。原体はR{ \uparrow 。 | 覆土上層 |
| 128-11 115 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚5~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、原体は R{ \uparrow 。胴部は沈線を垂下し、R{ \uparrow 縦転が し。押圧が強い。 | 覆土上層 |
| 128-12 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、 縄文施文。原体はR{ \uparrow 。 | 覆土上層 |
| 128-13 115 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は灰黄褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による文様。胴部は R{ \uparrow 縦転がし。沈線を垂下している。 外面に煤が付着している。 | 覆土上層 |
| 128-14 115 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12~18mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL{ \uparrow 。 | 覆土上層 |
| 128-15 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はL{ \uparrow 縦転がし。土器面は柔軟で押圧が強 い。外面に煤が付着している。 | 覆土上層 |
| 128-16 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 押圧が強い。 | 覆土上層 |
| 128-17 115 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は荒れている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。 | 縄文施文。原体はR{ \uparrow 。沈線と蕨手状の沈 線を垂下している。 | 覆土上層 |
| 128-18 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL{ \uparrow 縦転がし。 | 覆土上層 |



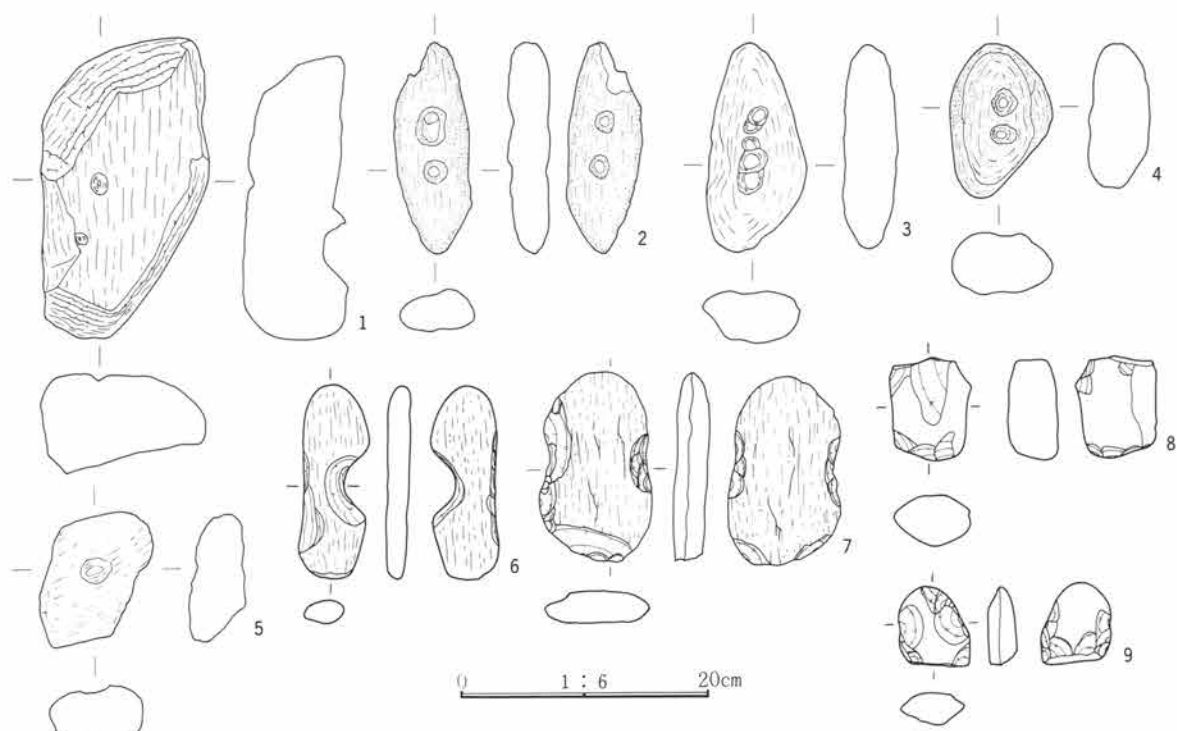
第127図 1号竖穴住居跡出土土器(1)



第128図 1号竖穴住居跡出土土器(2)

1号竖穴住居跡土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|-------------------|---|---|------|
| 128-19 115 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 覆土上層 |
| 128-20 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 覆土上層 |
| 128-21 115 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は赤褐色。 | 縄文施文。原体はL(下)横転がし。 沈線による文様が描かれている。 | 覆土上層 |
| 128-22 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はL(下)縦転がし。 | 覆土上層 |
| 128-23 115 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR(上)。 | 覆土上層 |



第129図 1号竪穴住居跡出土石器

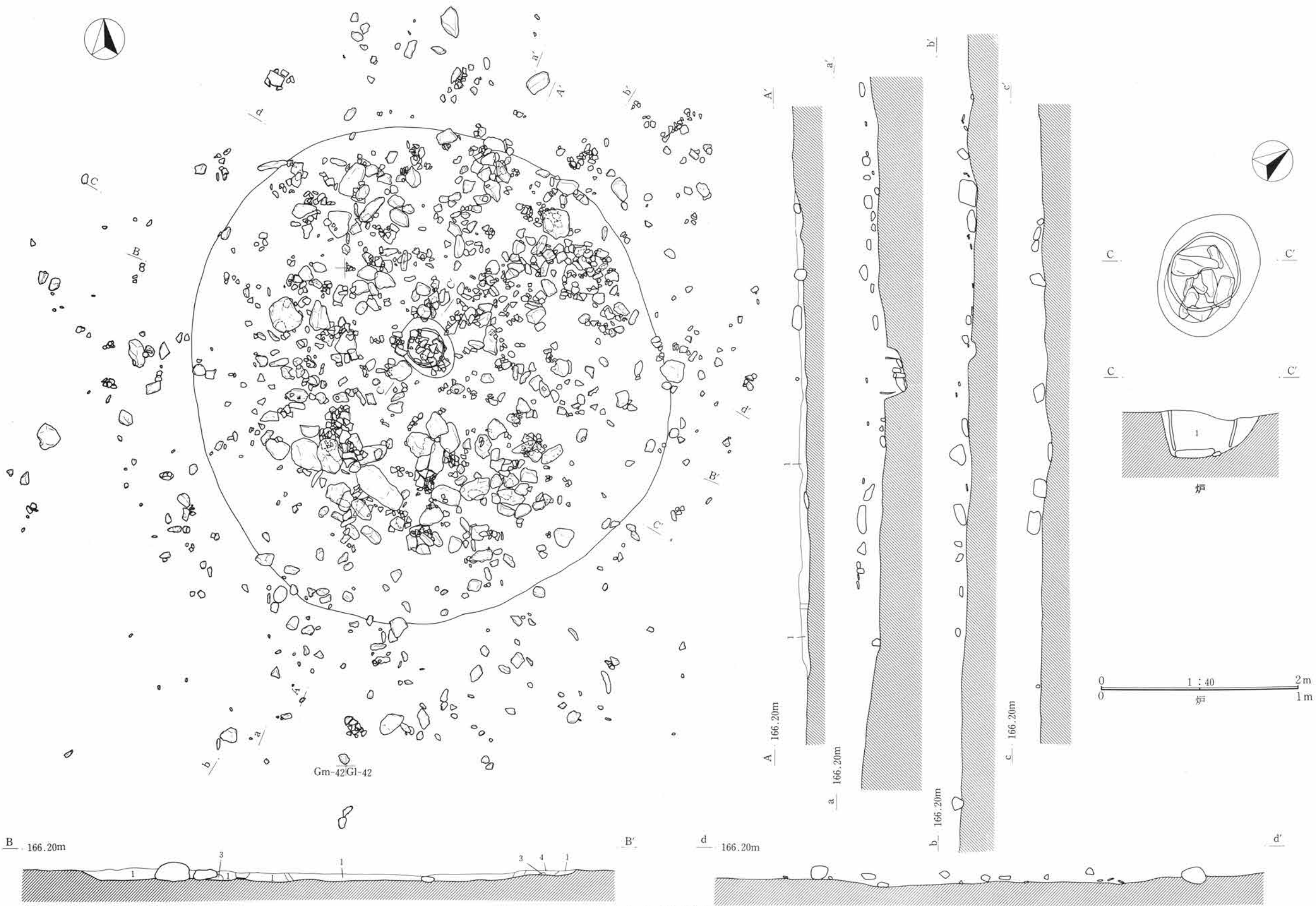
1号竪穴住居跡石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|-----------|--------------|--------|-------|---------|---|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 129-1 115 | 多孔石 | 一部欠損 | 緑泥石墨片岩 | 24.1 | (13.4) | (8.2) | (3,700) | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径14mm、短径12mm、深さ5mmである。 | 覆土最上層 |
| 129-2 115 | 凹石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 16.9 | 6.1 | 3.4 | 500 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長31mm、短23mm、深5mm。最小は長18mm、短15mm、深2mmで、平均は長22mm、短18mm、深3mm。 | 覆土最上層 |
| 129-3 115 | 凹石 | 完形 | 緑泥片岩 | 16.7 | 7.8 | 4.2 | 800 | 片面に5個の凹み。最大の凹みは長22mm、短18mm、深4mm。最小は長11mm、短10mm、深2mmで、平均は長16mm、短14mm、深3mm。 | 覆土最上層 |
| 129-4 115 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 12.1 | 8.3 | 4.9 | 700 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径22mm、短径17mm、深さ1mmである。 | 覆土最上層 |
| 129-5 115 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 10.8 | 9.0 | 4.2 | 510 | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は25mm、短径20mm、深さ4mmである。 | 覆土最上層 |
| 129-6 115 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 15.3 | 5.6 | 1.8 | 236 | 分銅(1)。一側縁のみ内湾。 | 覆土最上層 |
| 129-7 115 | 打製石斧 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 14.8 | 9.1 | 2.7 | 580 | 分銅(1)。両側の内湾の度合小さい。 | 覆土最上層 |
| 129-8 115 | | 両端欠損 | 角閃岩 | (8.2) | 6.5 | 4.1 | (340) | 粗割り途中(?)。 | 覆土最上層 |
| 129-9 115 | | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (6.5) | 5.7 | 2.4 | (121) | 粗割り途中。両面に一部自然面残る。 | 覆土最上層 |

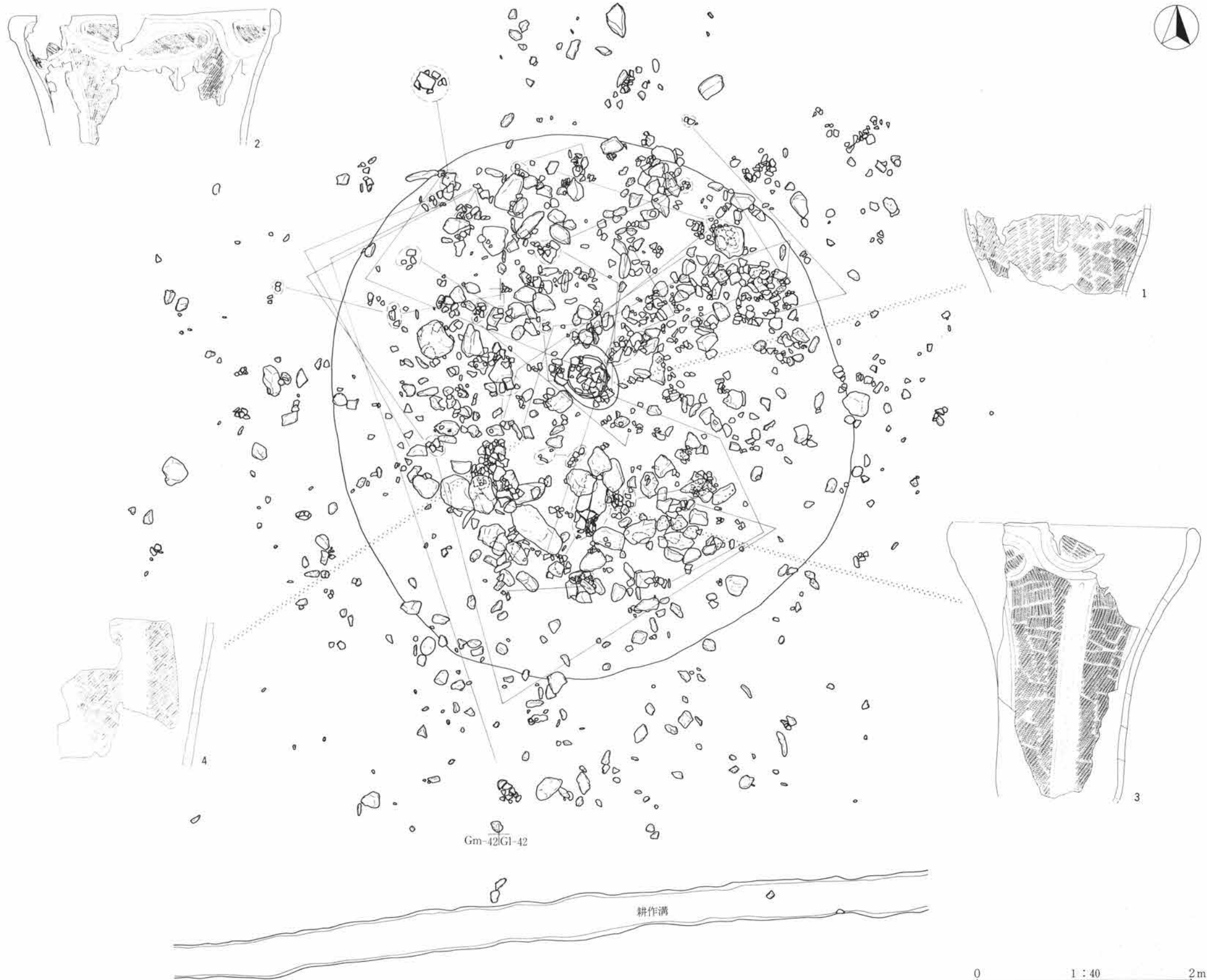
2号竪穴住居跡 (第130~140図、PL. 51~53、115~117)

位置 GI・Gm-43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西123m (炉までの距離)、列石からは103mの所、36号配石遺構の西22mに位置している。

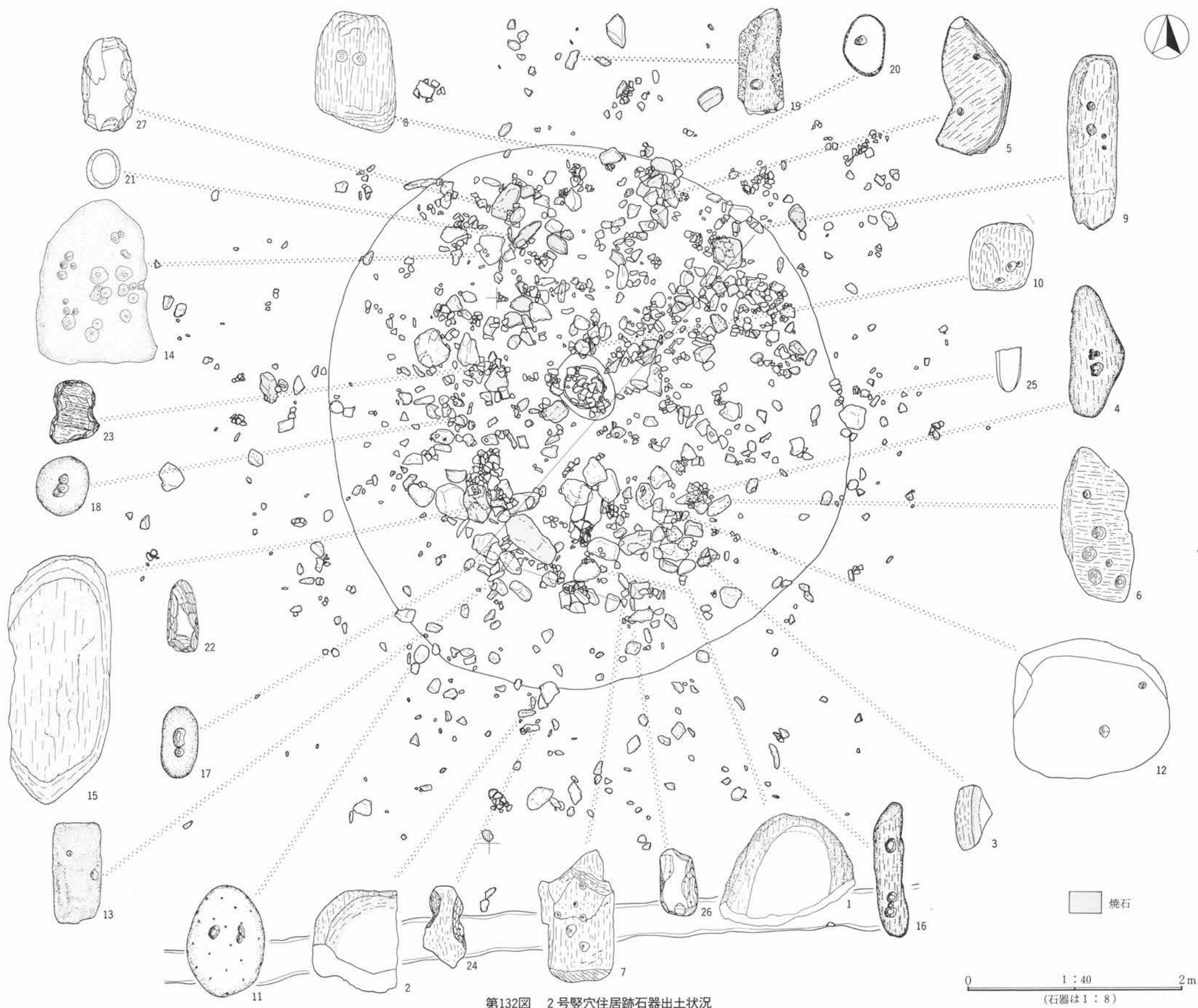
経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。8月下旬から調査を開始した。多量の石と土器片が出土し、配石遺構として調査を始めた。多量の遺物のために1/10実測図を作成しながら掘り下げ、9月10日には遺物出



第130图 2号竖穴住居跡



第131図 2号竖穴住居跡土器出土状況



第132图 2号竖穴住居跡石器出土状况

0 1:40 2m
(石器は1:8)

土状況の写真撮影と部分写真撮影を実施した。遺物出土状況からの判断では、この遺構が竪穴住居跡になるものとは想像もつかなかった。その後、遺物を取り上げる過程で埋甕炉の検出と、土層観察から遺構全体に若干の掘り込みを有することが判明し、当遺構は竪穴住居跡となった。

重複 なし。

覆土 黄褐色土層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は以下のとおりである。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を少量含む。

第2層 茶褐色土層 やや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。

第4層 黒褐色土層 締まり悪く、粘性はない（攪乱）。

覆土は自然堆積層であるが、出土した多量の遺物は意識的投棄と考えられる。1号竪穴住居跡の遺物出土状況と共通している。

形状 竪穴住居跡であり、長径5m、短径4m80cmのほぼ円形を呈している。面積は約19㎡である。

壁高 確認面からの深さは4cm～16cm程であり、残存状況は悪かった。

床面 凹凸が認められ全体的に軟弱である。踏み固められた良好な床面はほとんど検出できなかった。

周溝 なし。

柱穴 検出できなかった。

炉 埋甕炉であり、床面のほぼ中央から検出された。炉の規模は長径65cm・短径49cm・深さ24cmであり、加曾利E3式土器の胴部が正位状態で埋設されていた（第133図 1）。覆土は暗褐色土層であった。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性がある。黄褐色粘質土粒子とブロック、焼土粒子、炭化物粒子を含んでいる。

炉体土器の依存状況は悪かった。

遺物出土状況 炉体土器1個体、大形土器片3個体の他に、口縁部99点、胴部651点、底部10点の計760点の土器片が覆土中から満遍なく出土している。接合関係も広範囲に認められる。加曾利E3式土器を主体としていた。

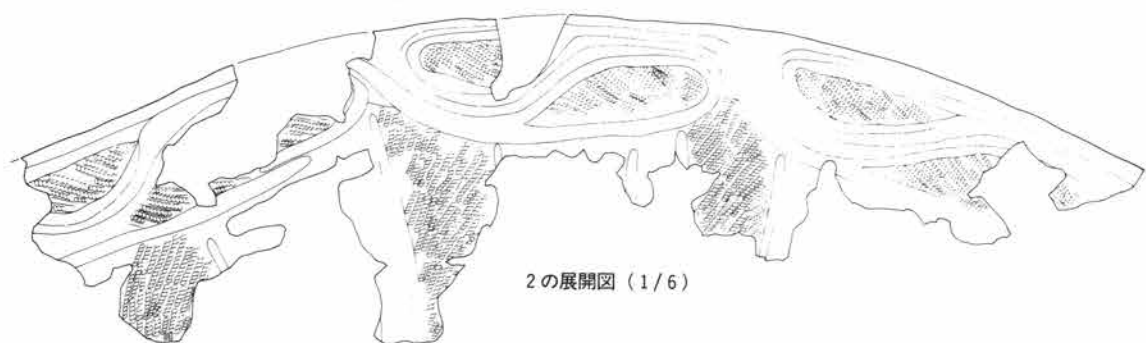
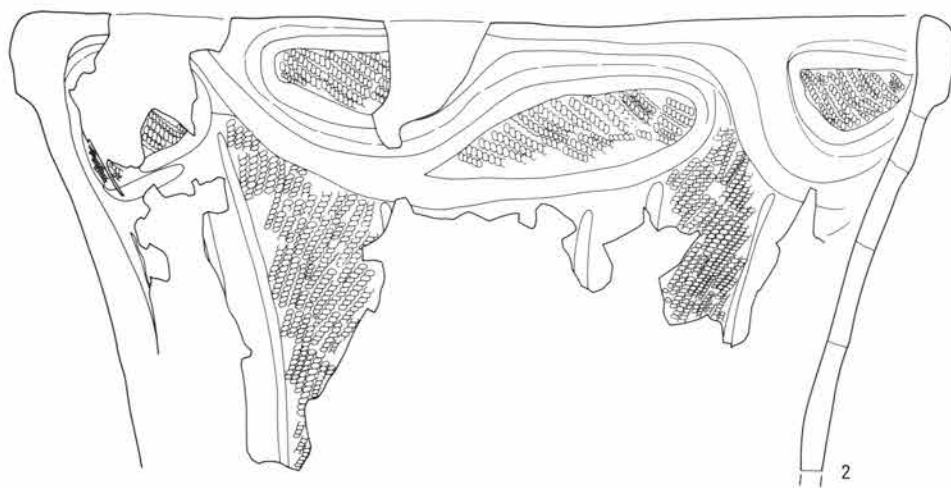
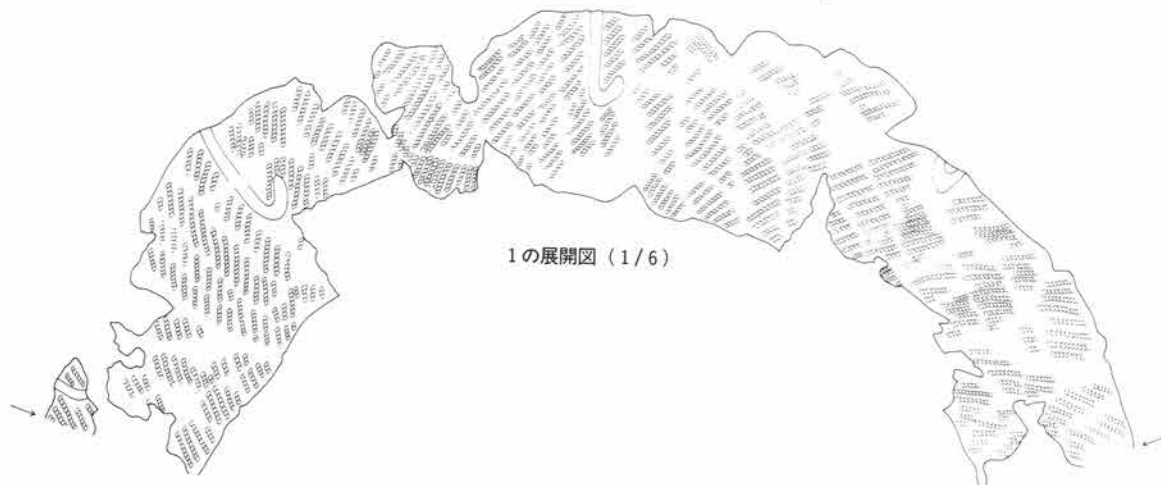
石器は石皿3点、多孔石11点、凹石5点、磨石1点、敲石1点、打製石斧3点、磨製石斧3点が出土している。このほかに、663点の石が出土している。石材別点数は、絹雲母石墨片岩164点(24.7%)、輝緑岩97点(14.6%)、点紋絹雲母石墨片岩89点(13.4%)、点紋緑泥片岩38点(5.7%)、緑泥片岩25点(3.8%)、珪石21点(3.2%)、絹雲母緑泥石墨片岩15点(2.3%)、絹雲母緑泥片岩13点(2%)、その他の石材140点(21.1%)であり、不明は61点(9.2%)を数えた。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形の竪穴住居跡である。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

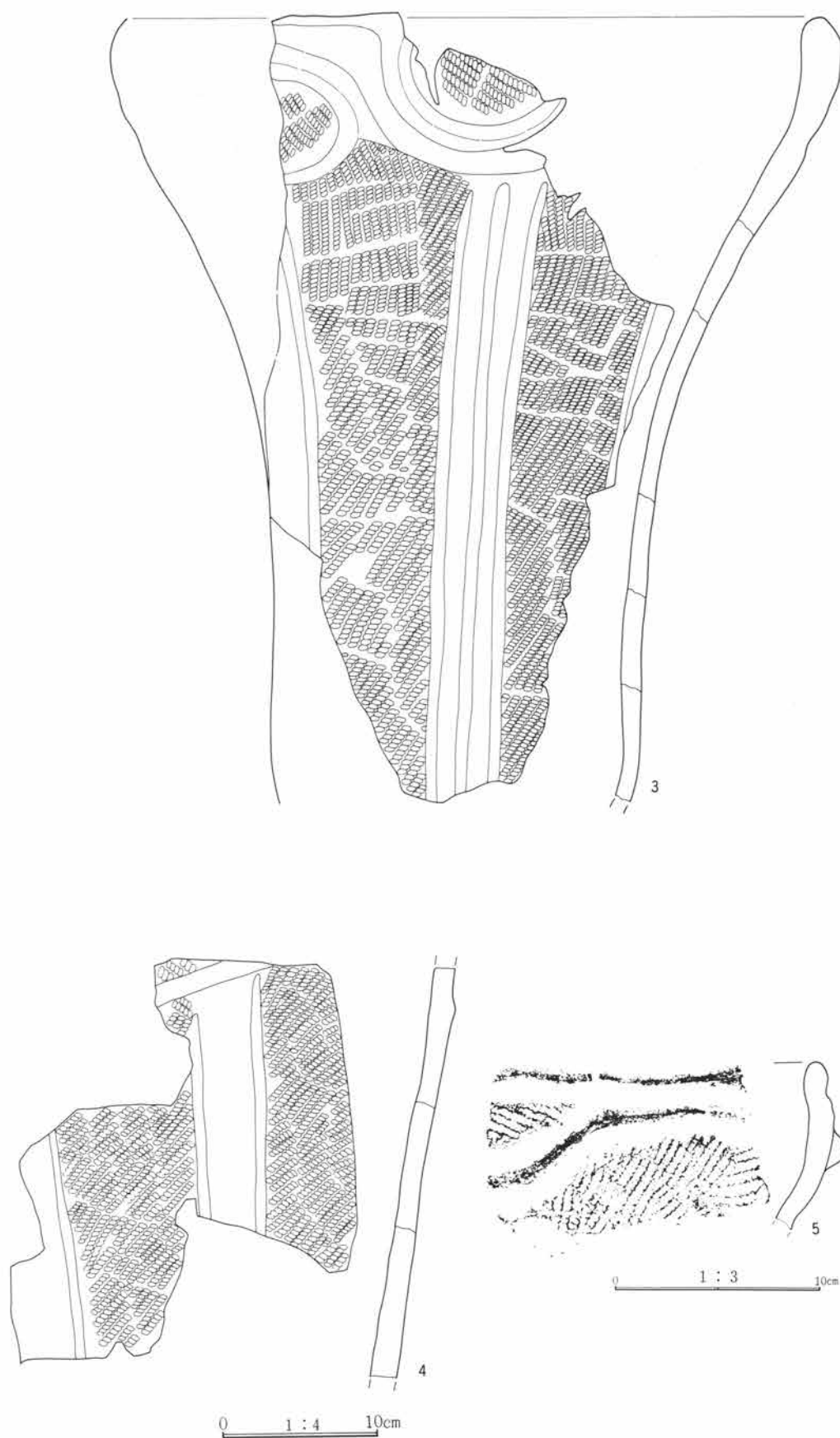
2号竪穴住居跡土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|----------------|--------------------|--|---|------|
| 133-1 115 | 胴部 | ①中粒の砂を混入 ②不良 | 深鉢形土器の胴部中位。両端を欠損。 器厚9~11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を施している。 内外面とも荒れている。 | 炉体土器 |
| 133-2 116 | 口縁 ~胴 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚10~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 胴部はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下している。 | 覆土 |
| 134-3 116 | 口縁 ~胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の大形破片。器厚10~24mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR(↑)横転がし。胴部はR (↑)縦・横転がし。沈線を垂下している。 | 覆土 |
| 134-4 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 覆土 |
| 134-5 116 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、 縄文施文。原体R(↑)。 | 覆土 |
| 135-6 116 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原 体はR(↑)横。胴部はR(↑)横・斜め転がし。 沈線を垂下。 | 覆土 |
| 135-7 116 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる文様が描かれ、縄文施文。原体はR(↑) 横転がし。土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 135-8 116 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 蕨手状の沈線が施されている。 | 覆土 |
| 135-9 116 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は灰褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR(↑)。 | 覆土 |
| 135-10 116 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL(↑)縦転がし。 | 覆土 |
| 135-11 116 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部隆帯による円形 等の文様が描かれ、縄文施文。原体はR(↑)。 条線も施されている。外面に煤が付着。 | 覆土 |
| 135-12 116 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚12~14mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部にR(↑)横転がし。胴部にR(↑)横・ 縦転がし。沈線を垂下している。 | 覆土 |
| 135-13 116 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部はやや内湾する。口縁部に隆帯と沈 線による渦巻き等の文様を描き、縄文施文。 原体R(↑)横転がし。 | 覆土 |
| 135-14 116 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 胴部はR(↑)縦転がし。沈線を垂下。 | 覆土 |
| 135-15 116 | 口縁 ~胴 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚14~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。 | 口縁部は沈線による楕円等の文様が描か れ、縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 135-16 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 覆土 |
| 135-17 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 136-18 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は明黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 覆土 |

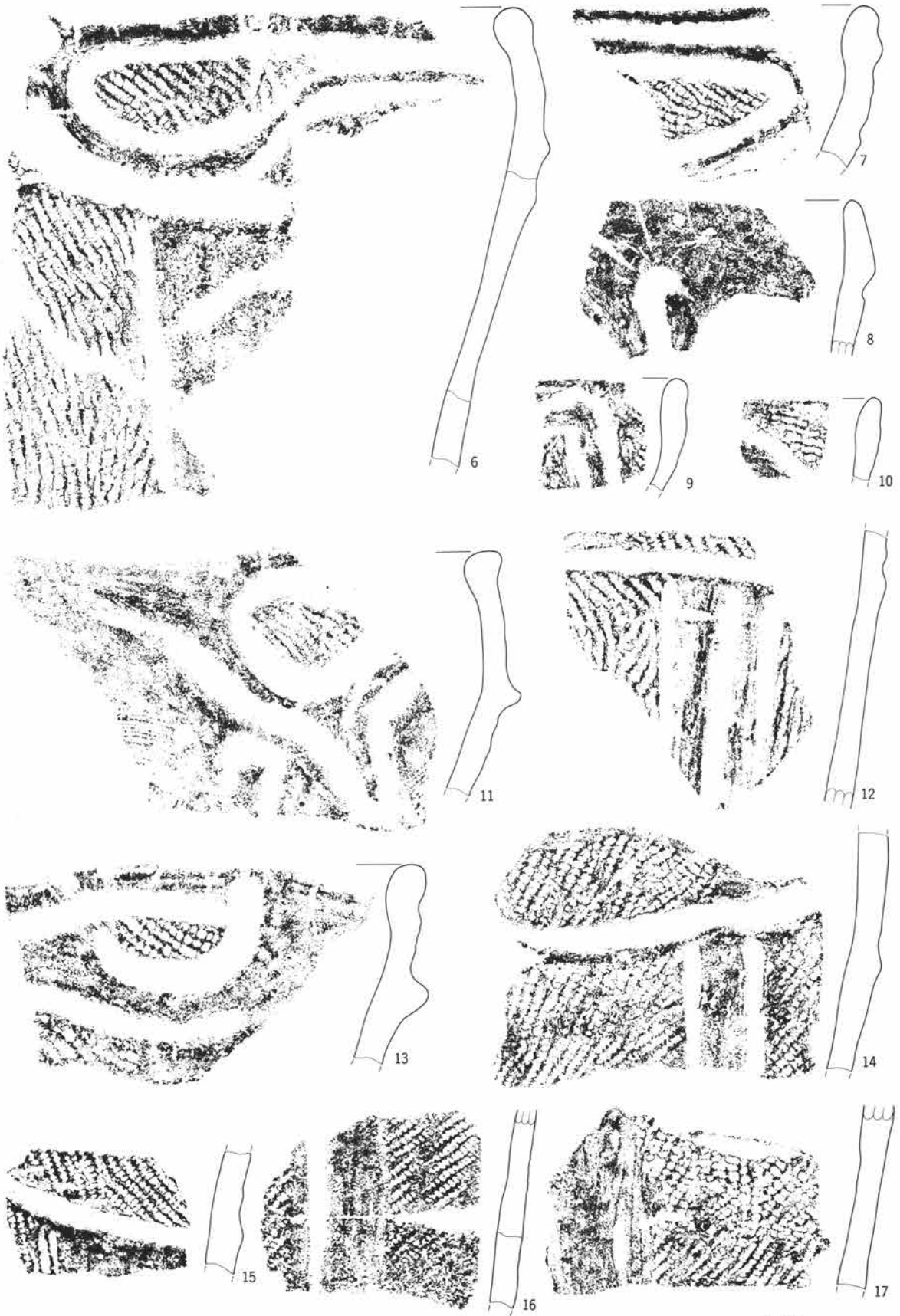


第133図 2号竖穴住居跡出土土器 (1)

0 1 : 4 10cm



第134図 2号竖穴住居跡出土土器(2)

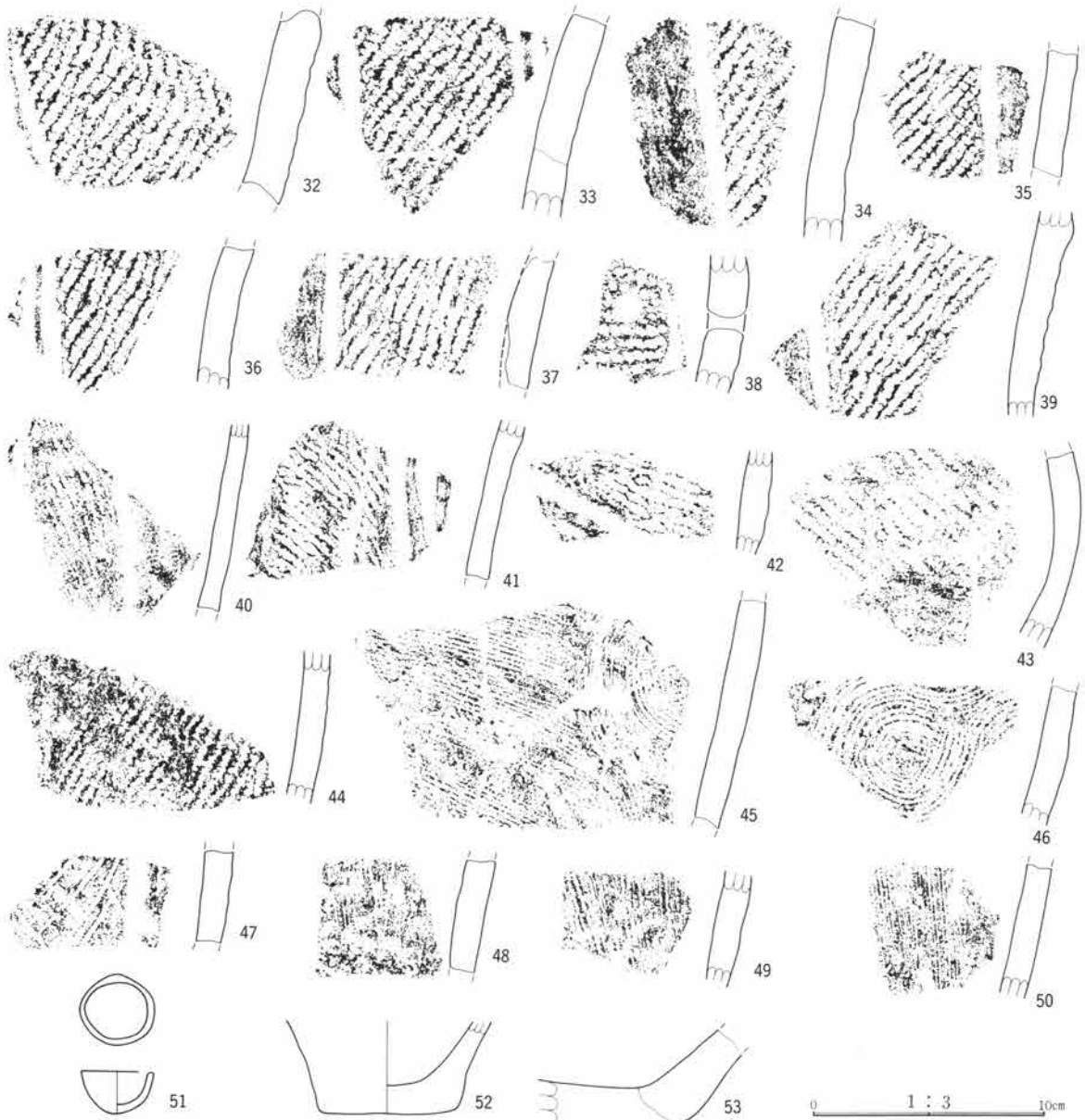


第135图 2号竖穴住居跡出土土器(3)

0 1:3 10cm



第136図 2号竪穴住居跡出土土器(4)



第137図 2号竪穴住居跡出土土器(5)

2号竪穴住居跡土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|-------------------|---|--|------|
| 136-19 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/2)縦転がし。 | 覆土 |
| 136-20 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/2)縦転がし。 | 覆土 |
| 136-21 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/2)縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-22 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1/2)縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

2号竪穴住居跡土器観察表

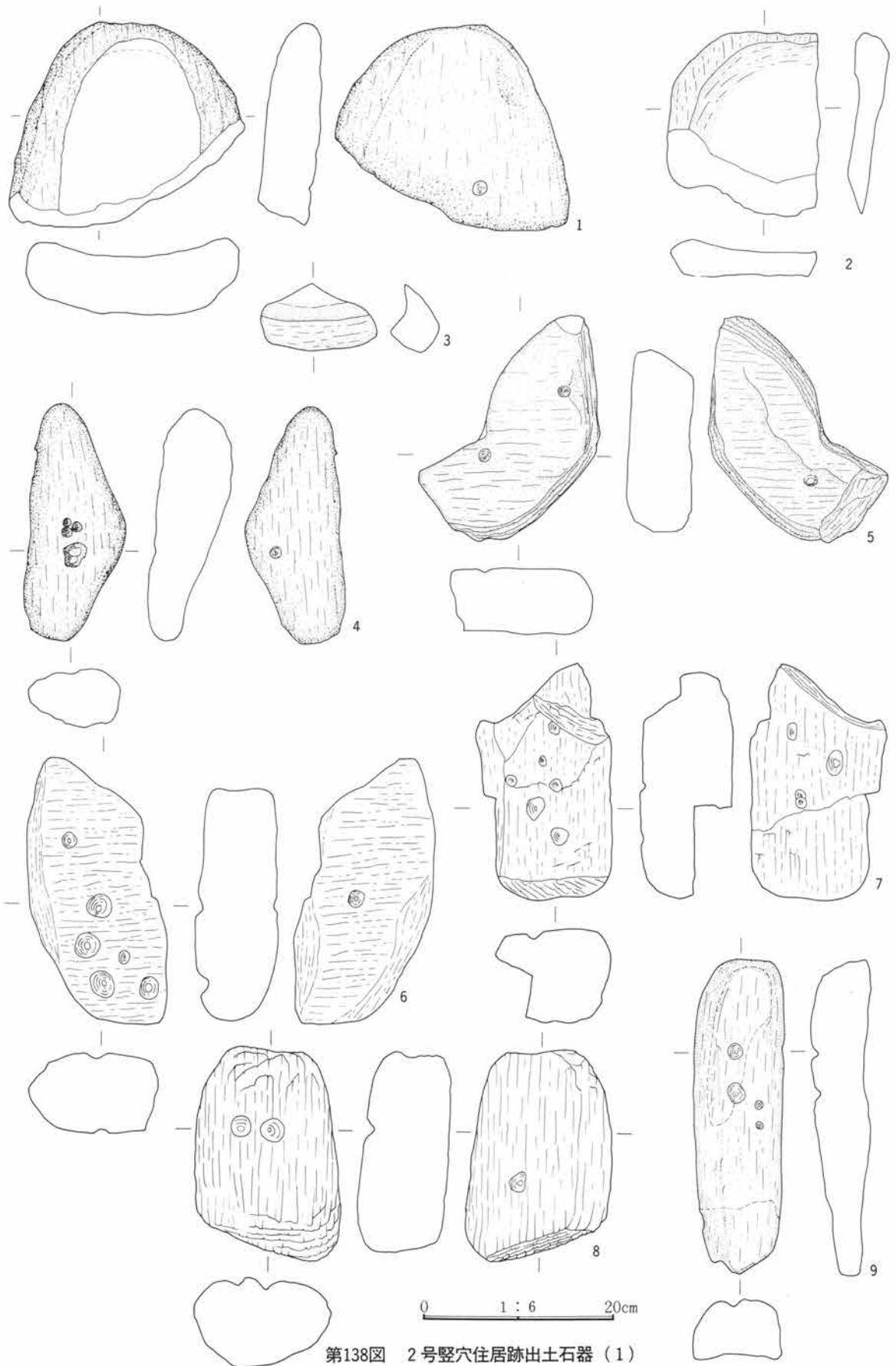
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|---|------|
| 136-23 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。外面に煤が付着している。 | 覆土 |
| 136-24 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-25 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-26 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-27 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 覆土 |
| 136-28 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-29 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄灰褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-30 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 136-31 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 覆土 |
| 137-32 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-33 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-34 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-35 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-36 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-37 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-38 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 。 内外面から径9mmの補修孔が作られている。 | 覆土 |
| 137-39 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-40 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 覆土 |
| 137-41 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は灰黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 覆土 |

2号竪穴住居跡土器観察表

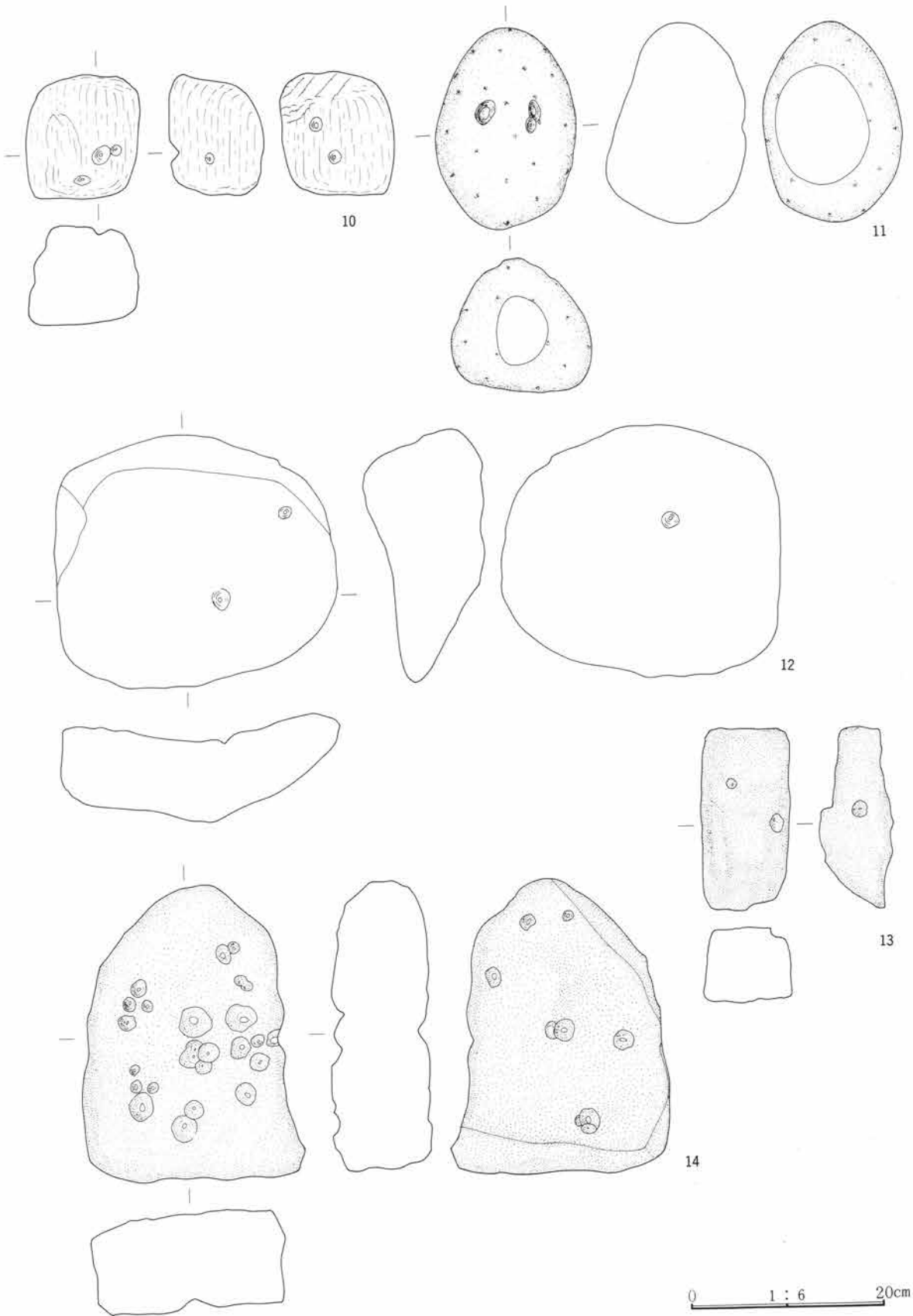
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|--------------------|---|------------------------------------|------|
| 137-42 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 覆土 |
| 137-43 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 | 覆土 |
| 137-44 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 覆土 |
| 137-45 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 7本一単位の条線による文様が描かれてい る。 | 覆土 |
| 137-46 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 条線による円形等の文様が描かれている。 | 覆土 |
| 137-47 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 沈線による文様が描かれている。 | 覆土 |
| 137-48 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 条線が施されている。 | 覆土 |
| 137-49 116 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 条線が施されている。 | 覆土 |
| 137-50 116 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 条線が施されている。 | 覆土 |
| 137-51 116 | 小型 土器 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 口径3cm。器厚2.5cm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | | 覆土 |
| 137-52 116 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径57mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。 | 底部周縁が磨耗している。 | 覆土 |
| 137-53 116 | 底部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。器厚15~19mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | | 覆土 |

2号竪穴住居跡石器観察表

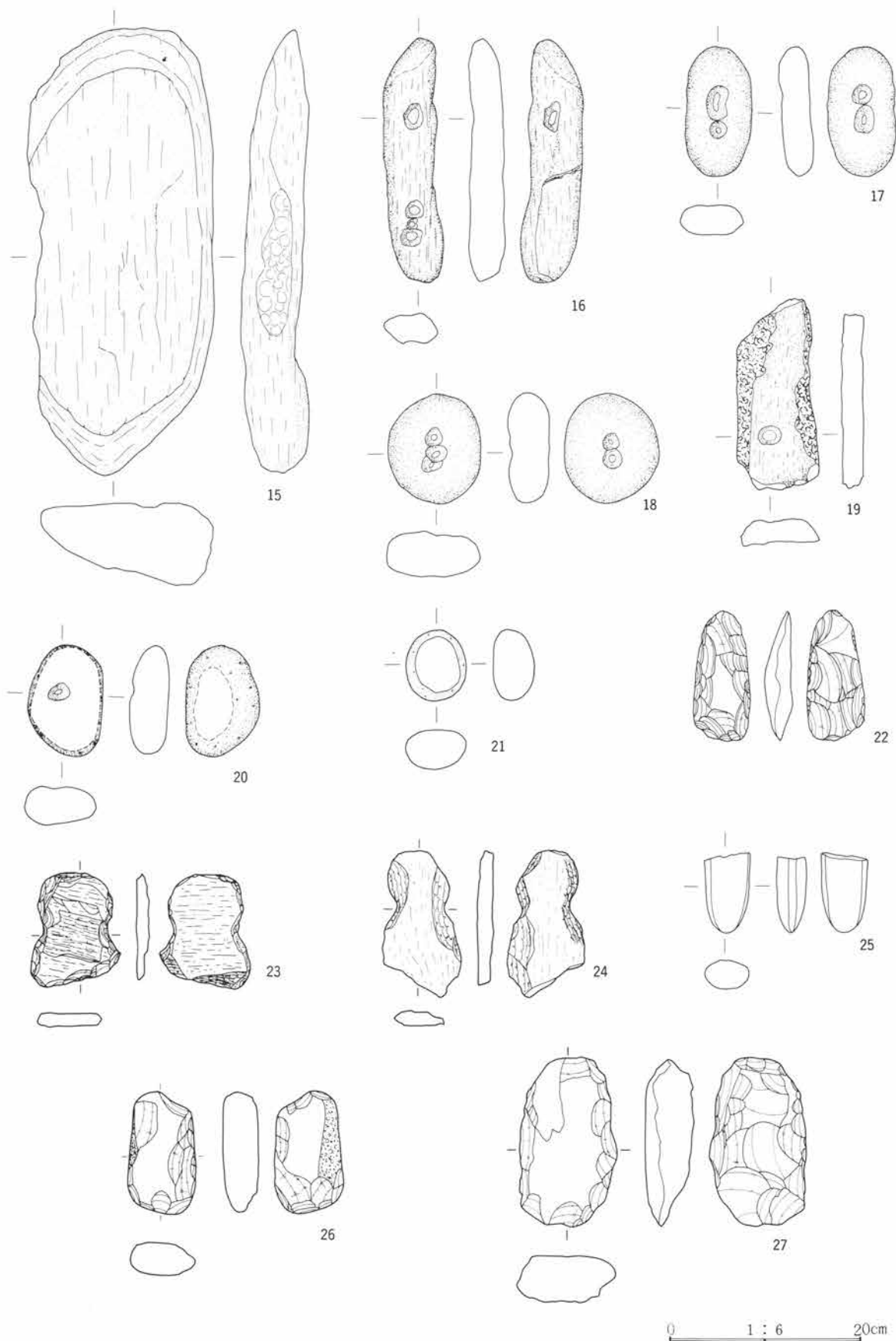
| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------------|------------|--------|-----|---------|--|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 138-1 116 | 石皿 | 欠 | 点紋緑泥片岩 | (21.1) | (24.3) | 7.9 | (4,900) | 石皿の破片。窪みは浅い。裏面に多孔石と同様の 凹み1個がある。凹みは長径15mm、短径14mm、深 さ5mm。裏面全体は焼けている。 | 遺構南 |
| 138-2 116 | 石皿 | 欠 | 点紋絹雲母石墨 片岩 | (18.9) | (16.0) | 3.7 | (1,500) | 石皿の破片。窪みは浅い。 | 南壁際 |
| 138-3 116 | 石皿 | 部分 | 点紋緑泥片岩 | (12.1) | (6.9) | 4.8 | (400) | 石皿の破片。 | 覆土 |
| 138-4 116 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 24.5 | 10.6 | 6.0 | 2,300 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長25mm、短22mm、 深6mm。最小は長9mm、短9mm、深2mmで、平均 は長14mm、短13mm、深4mm。 | 覆土 |
| 138-5 116 | 多孔石 | 完形 | 点紋絹雲母緑泥 片岩 | 23.2 | 18.2 | 7.0 | 3,600 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長12mm、短11mm、 深5mm。最小は長12mm、短7mm、深2mmで、平均 は長12mm、短9mm、深3mm。 | 覆土北端 |
| 138-6 116 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母緑泥片岩 | 27.1 | 14.0 | 8.4 | 5,000 | 両面に7個の凹み。最大の凹みは長30mm、短24mm、 深11mm。最小は長13mm、短12mm、深3mmで、平均 は長21mm、短20mm、深7mm。 | 覆土東南 |



第138図 2号竪穴住居跡出土石器(1)



第139图 2号竖穴住居跡出土石器(2)



第140図 2号竪穴住居跡出土石器(3)

4 竪穴住居跡〈2号〉

2号竪穴住居跡石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|-------------|------|---------|--------------|-------|-------|---------|--|----------------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 138-7 116 | 多孔石 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | (24.3) | 14.3 | 9.7 | (3,800) | 両面に10個の凹み。最大の凹みは長25mm、短16mm、深8mm。最小は長10mm、短7mm、深4mmで、平均は長15mm、短12mm、深6mm。 | 遺構南に 接合関係 あり |
| 138-8 117 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 22.0 | 15.0 | 9.5 | 4,900 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深10mm。最小は長22mm、短16mm、深7mmで、平均は長23mm、短20mm、深8mm。 | 覆土北端 |
| 138-9 117 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 32.2 | 9.3 | 5.8 | 3,100 | 片面に4個の凹み。最大の凹みは長21mm、短17mm、深10mm。最小は長8mm、短7mm、深2mmで、平均は長14mm、短12mm、深6mm。一部被熱。 | 遺構北東 端と南西 端で接合 |
| 139-10 117 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 12.5 | 11.8 | 10.2 | 2,400 | 全面に6個の凹み。最大の凹みは長21mm、短17mm、深8mm。最小は長11mm、短10mm、深2mmで、平均は長15mm、短12mm、深3mm。 | 炉に近接 |
| 139-11 117 | 多孔石 (丸石) | 完形 | 流紋岩 | 20.5 | 14.6 | 14.0 | 5,200 | 丸石に3個の凹み。凹みの平均は長22mm、短14mm、深4mmである。一部に磨耗痕がみられる。 | 覆土南端 |
| 139-12 117 | 多孔石 | 完形 | 輝緑岩 | 28.7 | 29.0 | 12.4 | 13,800 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、深4mm。最小は長14mm、短12mm、深2mmで、平均は長18mm、短15mm、深3mm。 | 中央南寄 り |
| 139-13 117 | 多孔石 | 一部欠損 | 砂岩 | 18.6 | 9.4 | (7.6) | (1,600) | 3個の凹みがある。最大の凹みは長17mm、短14mm、深5mm。最小は長10mm、短10mm、深2mmで、平均は長14mm、短13mm、深4mm。 | 覆土西南 端 |
| 139-14 117 | 多孔石 | 完形 | 砂岩 | 30.0 | 22.8 | 10.2 | 9,200 | 両面に34個の凹み。最大の凹みは長33mm、短33mm、深14mm。最小は長10mm、短9mm、深5mmで、平均は長19mm、短16mm、深9mm。 | 覆土北 |
| 140-15 117 | | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 45.8 | 19.3 | 8.4 | 10,300 | 側面に敲打痕がみられる。 | 覆土南西 |
| 140-16 117 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 25.4 | 6.3 | 3.8 | 900 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長28mm、短20mm、深1mm。最小は長14mm、短18mm、深1mmで、平均は長23mm、短16mm、深1mm。一部被熱。 | 遺構外 |
| 140-17 117 | 凹石 | 完形 | 砂岩 | 13.3 | 7.2 | 3.1 | 400 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長32mm、短20mm、深1mm。最小は長18mm、短18mm、深1mmで、平均は長24mm、短19mm、深1mm。 | 覆土南西 |
| 140-18 117 | 凹石 | 完形 | 砂岩 | 11.3 | 9.8 | 4.7 | 600 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長21mm、短19mm、深4mm。最小は長17mm、短12mm、深2mmで、平均は長19mm、短17mm、深2mm。 | 覆土西 |
| 140-19 117 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 19.6 | 8.8 | 2.8 | 840 | 1個の凹みがある。凹みの大きさは長径24mm、短径19mm、深さ2mmである。側面には敲打痕がみられる。 | 遺構外 |
| 140-20 117 | 凹石 | 完形 | 流紋岩 | 11.4 | 8.0 | 4.0 | 500 | 1個の凹み。全面に磨耗痕がみられる。 | 覆土北端 |
| 140-21 117 | 磨石 | 完形 | 安山岩 | 7.2 | 6.4 | 4.2 | 200 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 覆土北端 |
| 140-22 117 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 13.3 | 6.0 | 2.8 | 260 | バチ(IIb)。 | 遺構外 |
| 140-23 117 | 打製石斧 | 完形 | 紅泥片岩 | 11.7 | 9.3 | 1.5 | 230 | 分銅(I)。一方の刃部が軸に対して斜めに傾く。刃部再生の結果か。 | 炉の西 |
| 140-24 117 | 打製石斧 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | (15.0) | 8.1 | 1.9 | (230) | 分銅(I)。 | 遺構外 |
| 140-25 117 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 閃緑岩 | (8.1) | (4.8) | 3.0 | (200) | 磨き段階。 | 遺構外 |
| 140-26 117 | | 完形 | 輝緑岩 | 12.5 | 7.2 | 3.7 | 540 | 粗割り途中。両面にかなりの自然面残る。 | 遺構南端 |
| 140-27 117 | | 完形 | 輝緑岩 | 17.1 | 10.2 | 4.7 | 1,450 | 粗割り途中。片面に大きく自然面残る。 | 遺構北端 |

3号配石遺構 (第141～144図、PL. 54、118)

位置 Er-52グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から東北東55m20cm (遺構の中心までの距離)、2号配石遺構の南4mの所に位置している。

経過 1区 (昭和61年度調査区) から検出。6月後半に入り、1・2号配石遺構とほぼ同時に検出した。その規模は1・2号配石遺構に比べて小規模なものであった。実測図の作成、写真撮影の後、石を取り上げ下部の調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 遺構の一部は新しい耕作溝によって壊されている。

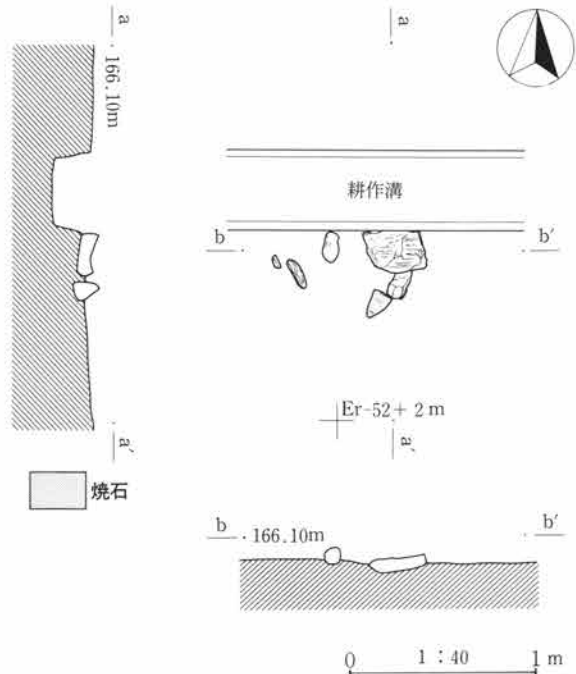
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 現状で6点の石が長径83cm、短径 (47cm) の規模に配置されている。このなかには多孔石1点、凹石1点、砥石1点、焼石1点が含まれていた。配石の面積は0.33m²である。小規模なために、これで配石が完結しているのかは判断しにくい。

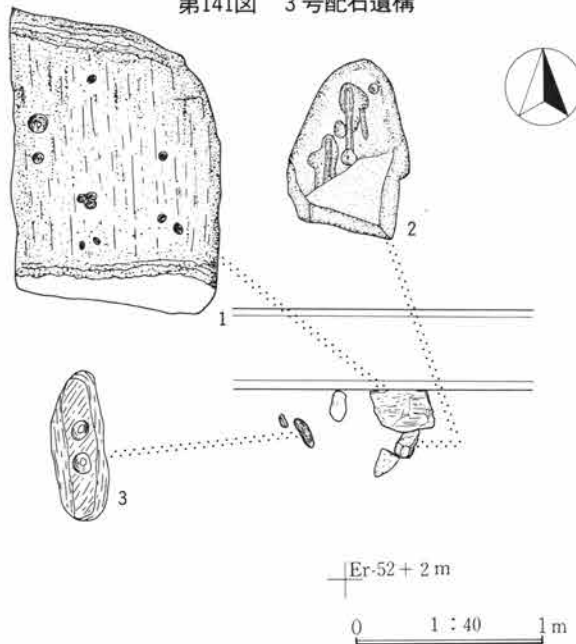
使用石材 5種類の石材が確認された。6点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩2点(33.3%)、点紋緑泥片岩1点(16.7%)、点紋絹雲母緑泥片岩1点(16.7%)、斑斨岩1点(16.7%)、砂岩1点(16.7%)である。6点中4点(66.7%)が片岩類である。

石材重量 500g未満の石2点(33.3%)、1kg～2.5kg未満の石2点(33.3%)、500g～1kg未満の石1点(16.7%)、20kg～30kg未満の石1点(16.7%)である。

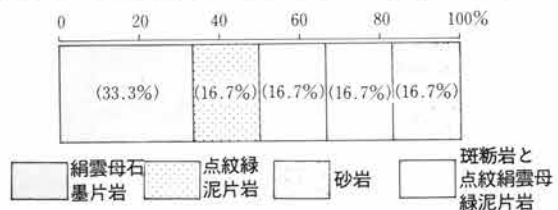
遺物出土状況 当遺構からは縄文土器の出土はないが、縄文時代の石器である多孔石・凹石・砥石が出土している。配石中の石器含有率50%、焼石は16.7%を占めている。

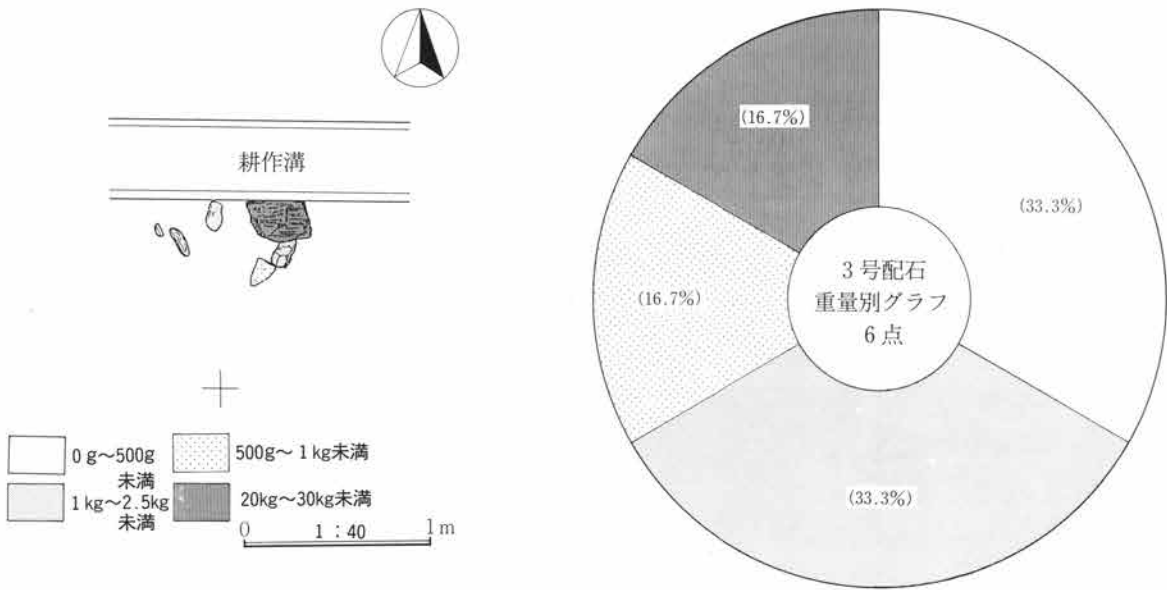


第141図 3号配石遺構

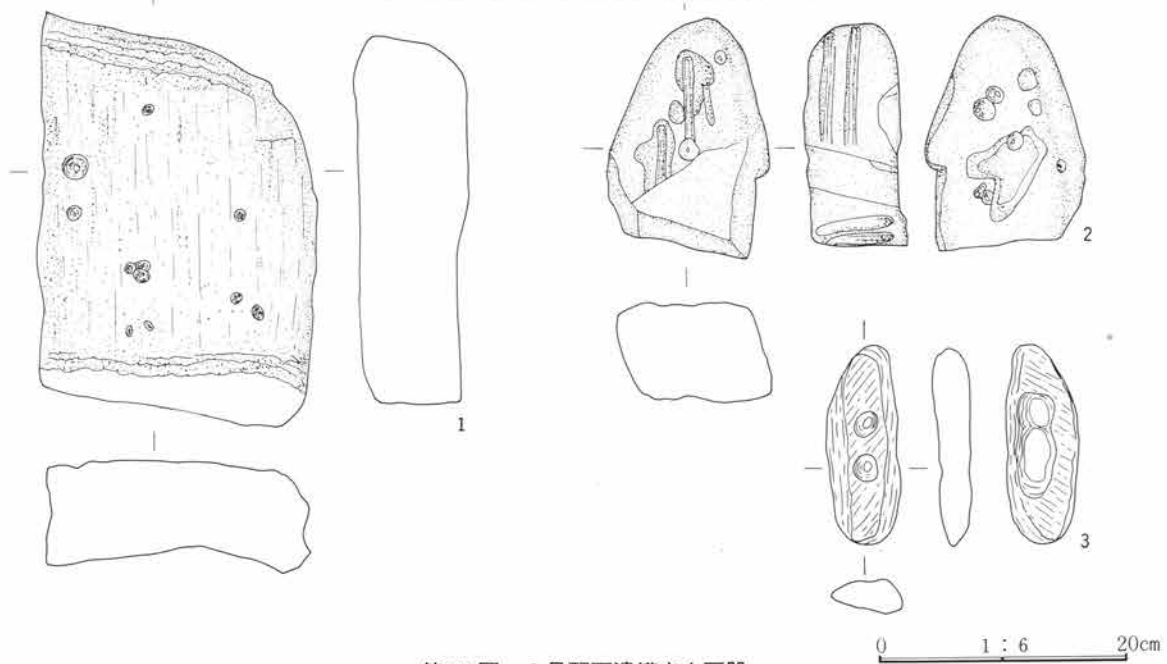


第142図 3号配石遺構遺物出土状況と石材別分布グラフ





第143図 3号配石遺構重量別分布とグラフ



第144図 3号配石遺構出土石器

3号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|-----------|--------------|--------|-----|----------|---|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 144-1 118 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 点紋絹雲母緑泥片岩 | (32.7) | (22.1) | 8.2 | (10,300) | 片面に11個の凹み。最大の凹みは長19mm、短17mm、深5mm。最小は長9mm、短7mm、深2mmで、平均は長11mm、短10mm、深3mm。 | 配石の一部 |
| 144-2 118 | 砥 石 | 完形 | 砂岩 | 18.8 | 13.1 | 8.2 | 2,000 | 両面に13個の凹みがある。 | 配石の一部 |
| 144-3 118 | 凹 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 15.8 | 6.0 | 3.0 | 600 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長55mm、短30mm、深2mm。最小は長20mm、短16mm、深2mmで、平均は長29mm、短23mm、深3mm。 | 配石の一部 |

所見 遺構周辺からは中期末の土器片が出土している。また多孔石等の在り方から判断して、縄文時代中期末の配石遺構であることは間違いない。



第145図 4号配石遺構

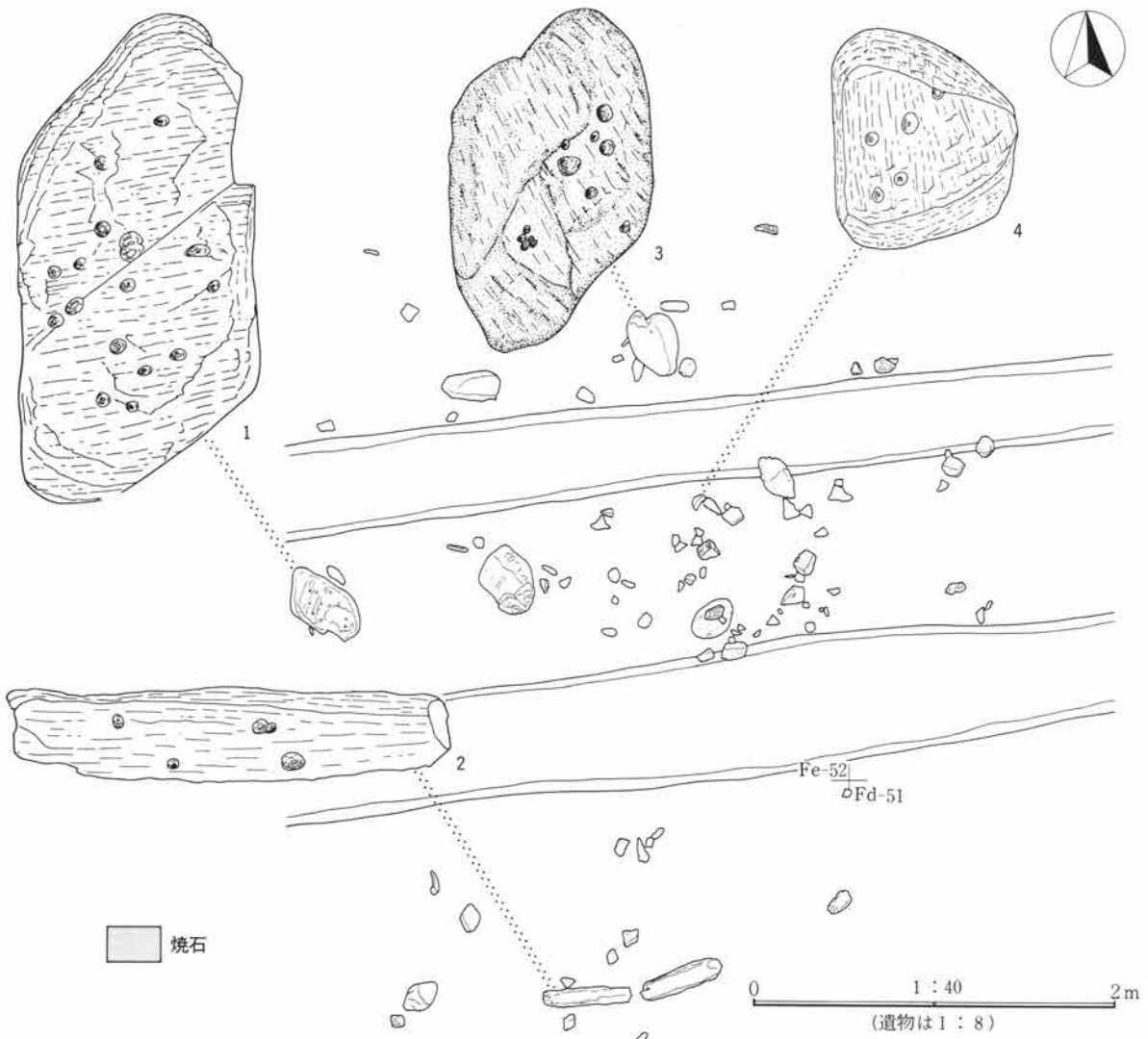
4号配石遺構 (第145～151図、PL. 54、118)

位置 Fd-52、Fe-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東28m (遺構の中心までの距離)、15号配石遺構の西7mの所に位置している。

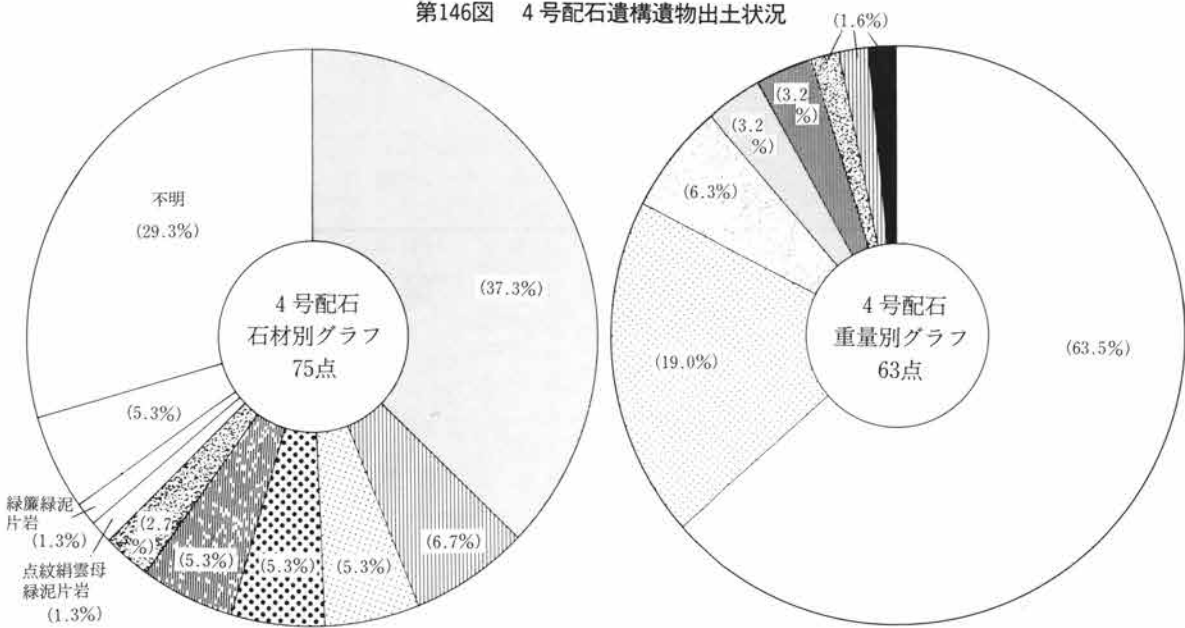
経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。7月中旬に入って遺構を検出し、28日に写真撮影を実施した。遺構は新しい耕作溝によって壊されているが、この耕作溝の断面観察を行い、下部に遺構があるかどうかの確認を実施した。

重複 耕作溝によってその一部は壊されている。耕作溝は比較的最近のものである。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

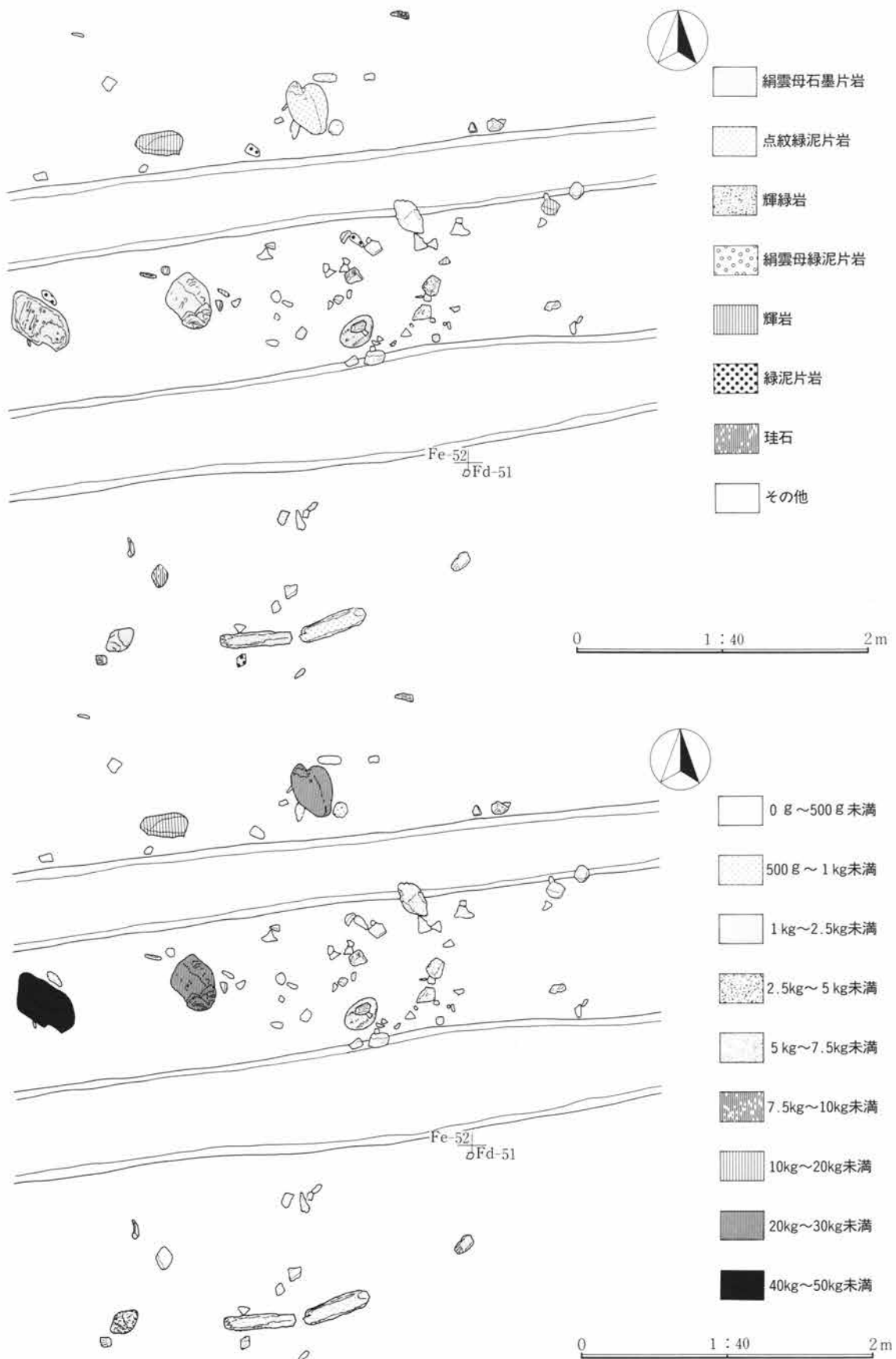


第146図 4号配石遺構遺物出土状況



第147図 4号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第148図 4号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布

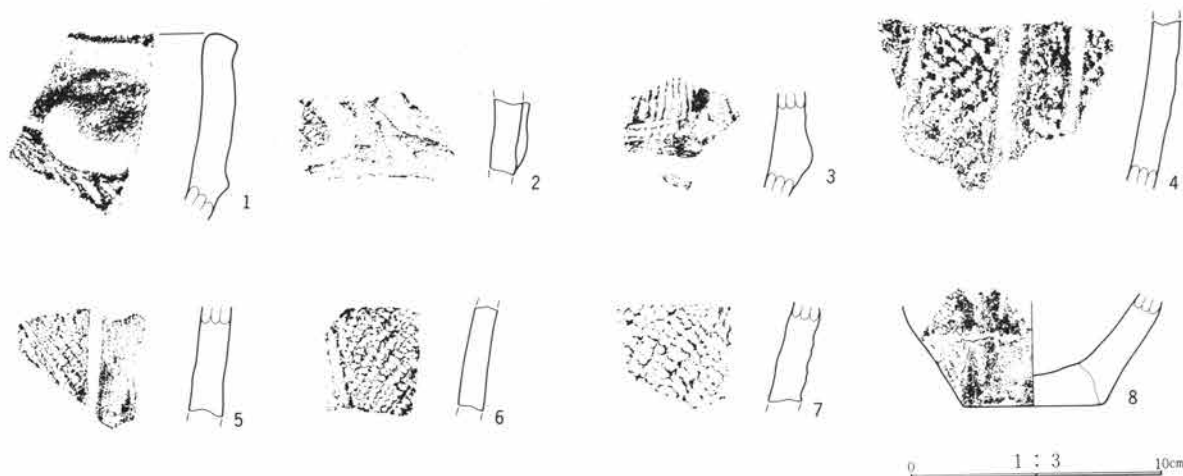
形状・配石状況 75点の石から構成されているが、その大きさは様々である。周囲をほぼ円形に石を配置しているが、その在り方はまばらであった。50号配石遺構と似ているが、その規模は長径4m、短径3m63cmである。また配石中心からやや北東よりに長径1m15cm、短径82cmの規模で石の集中する個所がある。配石の面積は約12.7㎡である。

使用石材 12種類の石材が確認された。75点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩28点(37.3%)、輝岩5点(6.7%)、点紋緑泥片岩・緑泥片岩・珪石各4点(各5.3%)、輝緑岩2点(2.7%)、絹雲母緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・変斑礫岩・閃輝緑岩各1点(各1.3%)である。不明は22点(29.3%)を数えた。不明の石を除いた53点中40点(75.5%)の石が片岩類である。多孔石4点のうち3点は絹雲母石墨片岩、1点が点紋緑泥片岩を使用している。

石材重量 重量の判明している石は63点である。その内訳は、500g未満の石40点(63.5%)、500g～1kg未満の石12点(19%)、5kg～7.5kg未満の石4点(6.3%)、1kg～2.5kg未満の石2点(3.2%)、20kg～30kg未満の石2点(3.2%)、2.5kg～5kg未満の石1点(1.6%)、10kg～20kg未満の石1点(1.6%)、40kg～50kg未満の石1点(1.6%)である。

遺物出土状況 縄文中期土器片が17点出土している。いずれも加曾利E3式土器である。また石器では多孔石4点のうち3点が周囲を区画する配石中からの出土であり、焼石5点のうち3点は内部の小配石中からの出土である。石器含有率は5.3%、焼石は6.7%を占めている。

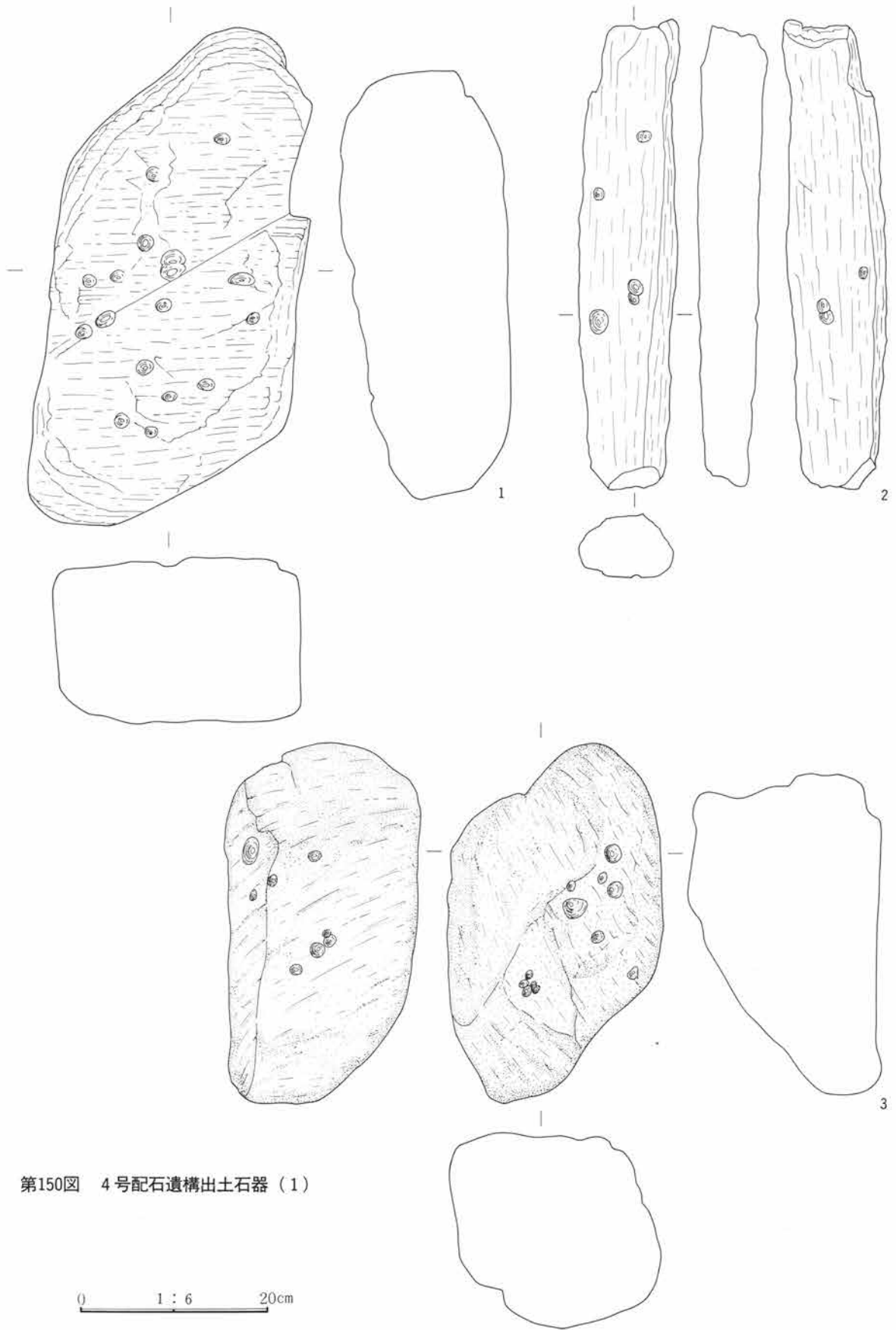
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構である。



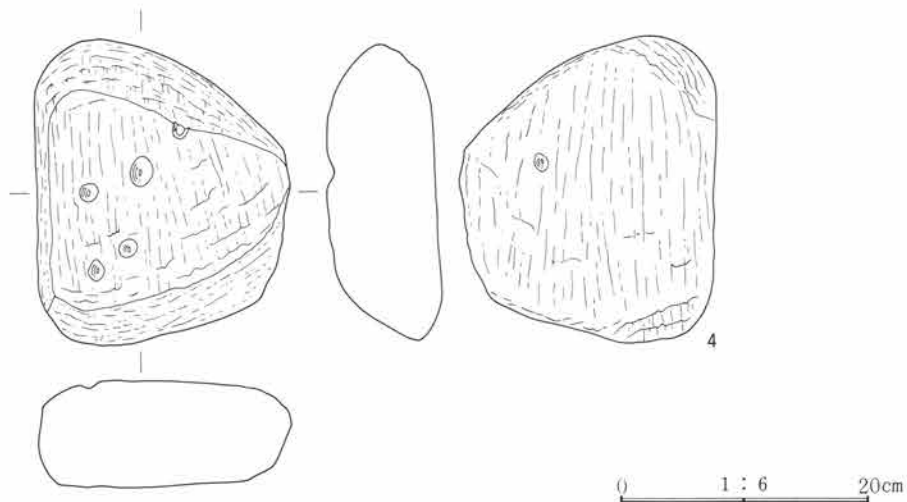
第149図 4号配石遺構出土土器

4号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|--|--|-------|
| 149-1 118 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に太い沈線による渦巻文を描く。 | 配石西部 |
| 149-2 118 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は黒褐色。 | 口縁部に太い沈線による渦巻文。地文に縄 文施文。原体はR↑↑横転がし。 | 配石北部 |
| 149-3 118 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 原体はL↑↑。 | 配石北部 |
| 149-4 118 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は灰白色、内面はにぶい黄橙色。 | 縄文施文。原体はR↑↑縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |



第150図 4号配石遺構出土石器(1)



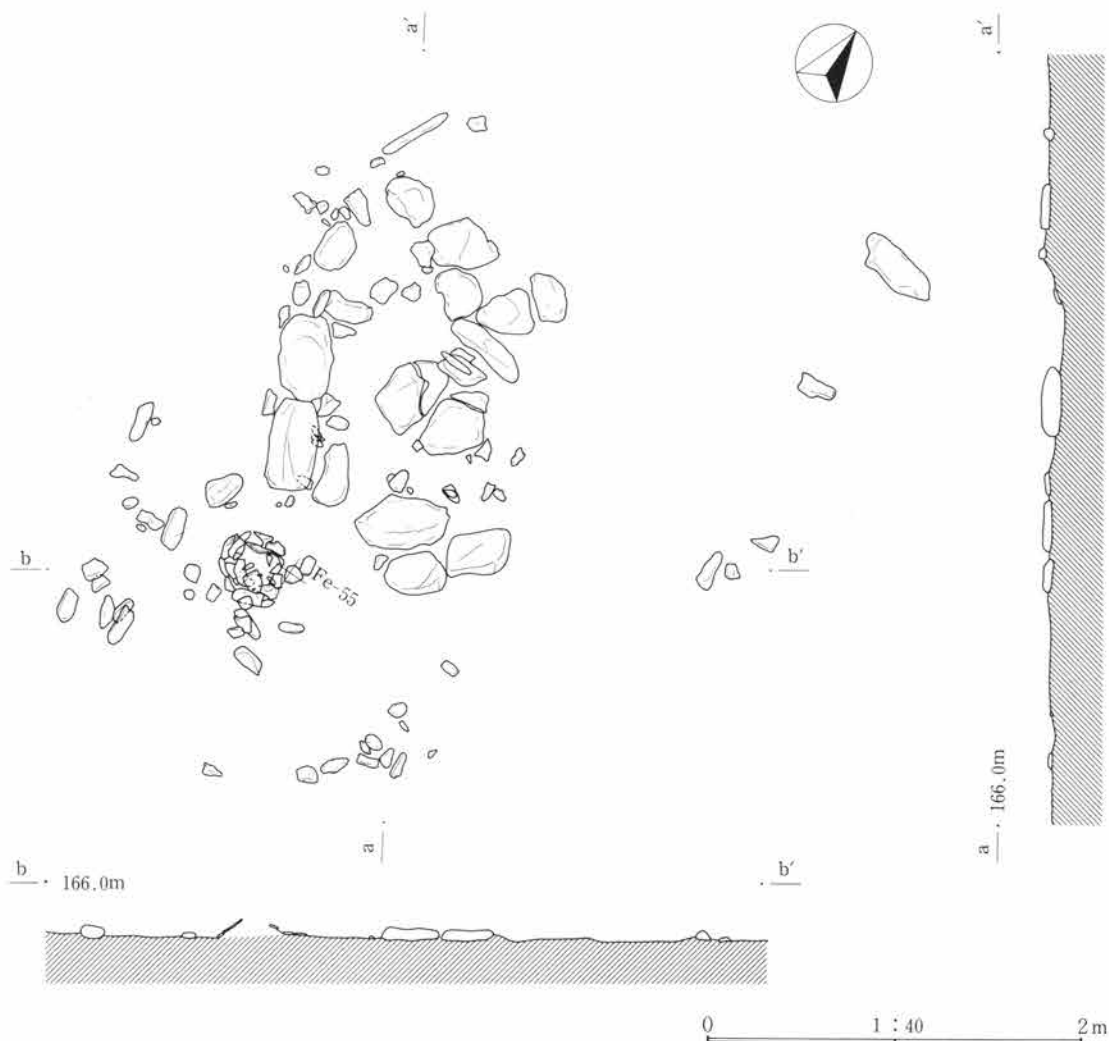
第151図 4号配石遺構出土石器(2)

4号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|-------------------|---|---|-------|
| 149-5 118 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL ₁ 縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 149-6 118 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はR ₁ 縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 149-7 118 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR ₁ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石南部 |
| 149-8 118 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径56mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は灰白色。 | 外面に縦方向のミガキが行われている。 | 配石南部 |

4号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|--------------|------|------|--------|--|-------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 150-1 118 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 51.4 | 29.5 | 17.6 | 40,100 | 片面に17個の凹み。最大の凹みは長27mm、短14mm、深9mm。最小は長13mm、短10mm、深6mmで、平均は長18mm、短13mm、深6mm。 | 配石西端 |
| 150-2 118 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 48.6 | 11.6 | 7.4 | 5,600 | 両面に8個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深3mm。最小は長12mm、短9mm、深2mmで、平均は長15mm、短12mm、深3mm。 | 配石南端 |
| 150-3 118 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 37.3 | 22.6 | 20.2 | 26,100 | 両面に20個の凹み。最大の凹みは長25mm、短20mm、深8mm。最小は長9mm、短6mm、深1mmで、平均は長14mm、短11mm、深3mm。 | 配石北端 |
| 151-4 118 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 24.2 | 20.4 | 9.2 | 6,800 | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長23mm、短19mm、深7mm。最小は長14mm、短12mm、深3mmで、平均は長16mm、短14mm、深4mm。 | 配石中央 部付近 |



第152図 6号配石遺構

6号配石遺構 (第152～158図、PL. 55・56、119)

位置 Fe・Ff-54・55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北東40m (遺構の中心までの距離)、5号配石遺構の東に接して構築されていた。

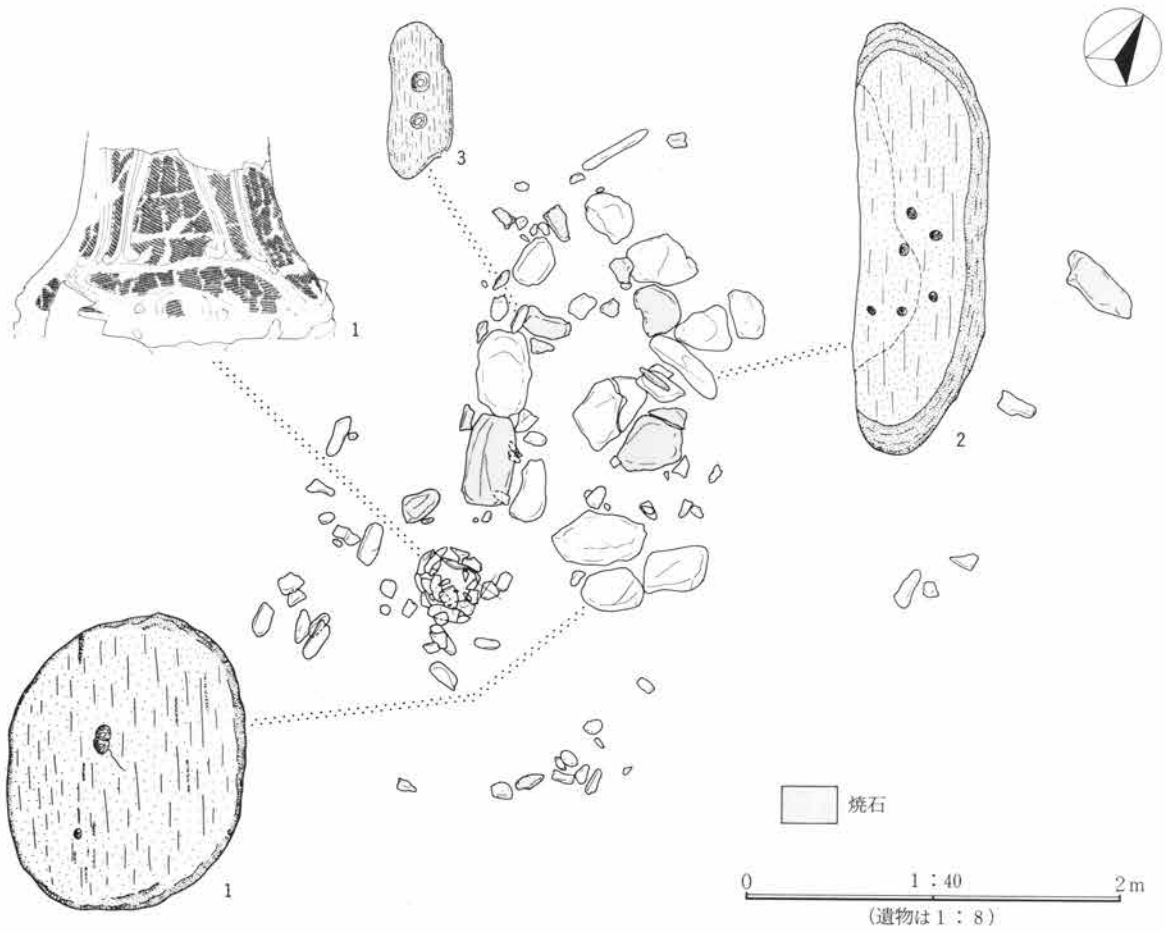
経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。7月中旬に入り、5号配石遺構と同時に確認した。下旬までに遺構全体を検出。当初、5号配石遺構の一部と判断していたが、9月になり写真撮影と実測作業を行う過程で別遺構と判断せざるを得なかった。というのも当遺構の配置が5号配石遺構の張出し部とはなり得ないからであった。

重複 5号配石遺構と接している。

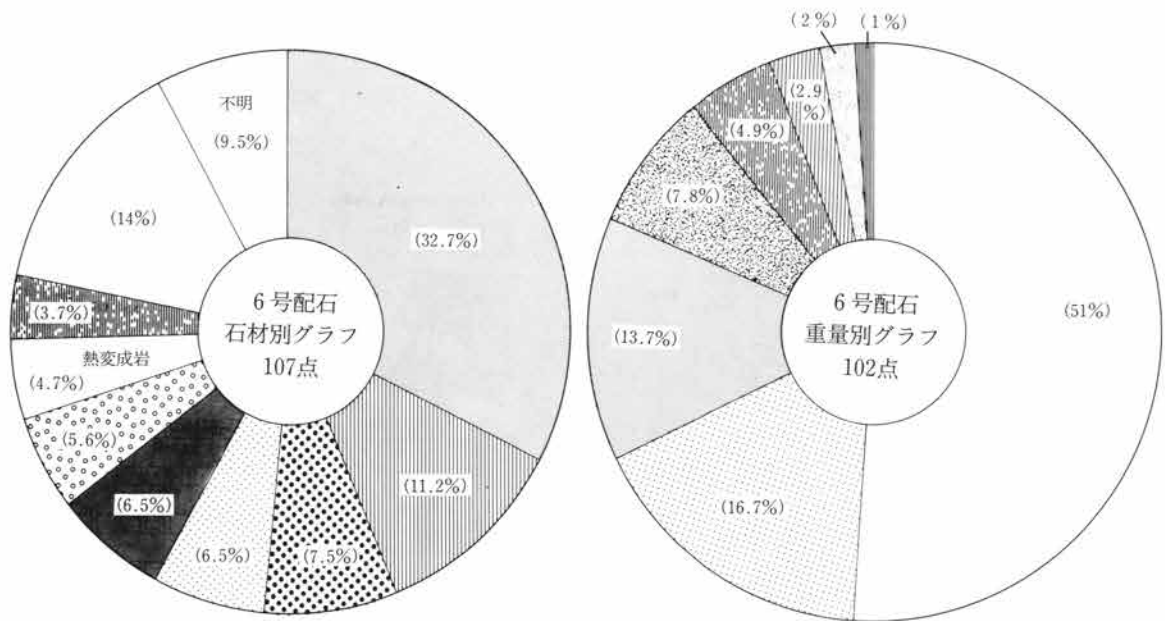
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 やや長方形状に配石が施されている。その規模は長径2m20cm、短径1m30cmの範囲である。長方形状の配石部分は比較的大きな石が使用され、その数は54点である。周辺の石を含めるとその数は107点になる。また南端の伏甕周辺には小石が配置されている。配石の面積は約10.7㎡である。

使用石材 19種類の石材が確認された。107点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩35点(32.7%)、輝岩12点(11.2%)、緑泥片岩8点(7.5%)、点紋緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各7点(各6.5%)、絹雲母緑泥片岩6点



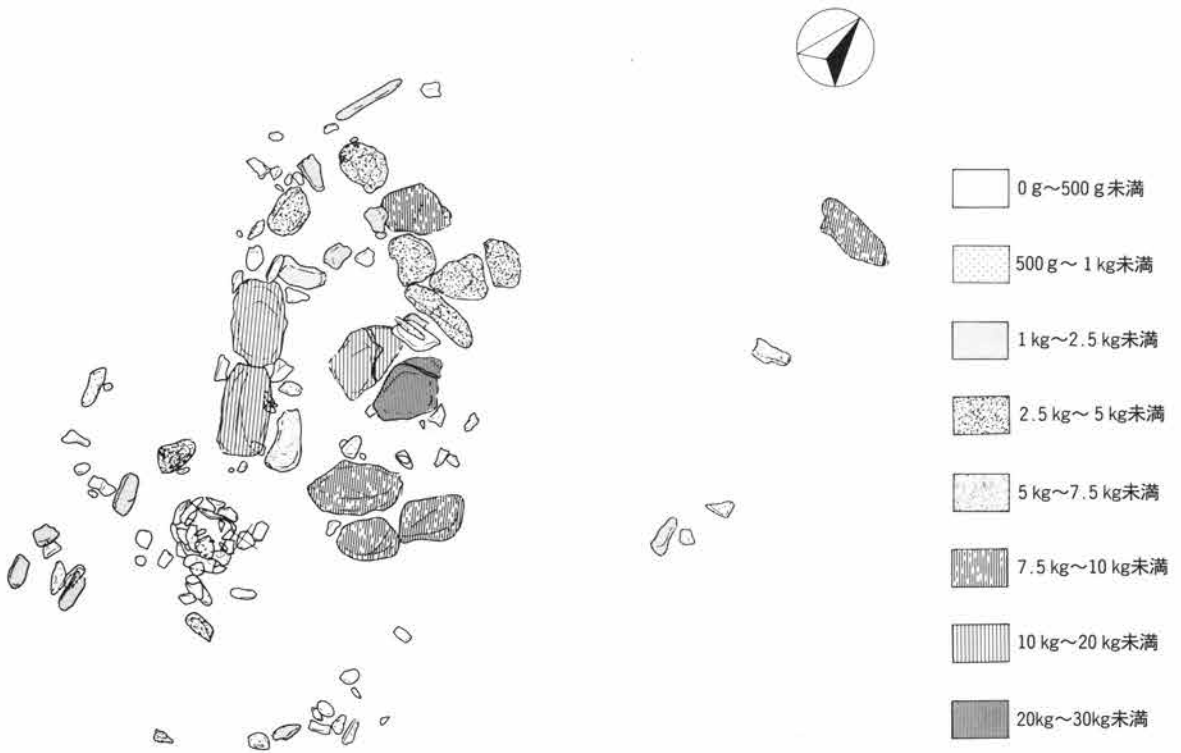
第153図 6号配石遺構遺物出土状況



第154図 6号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第155図 6号配石遺構石材別分布



0 1 : 40 2m

第156図 6号配石遺構重量別分布

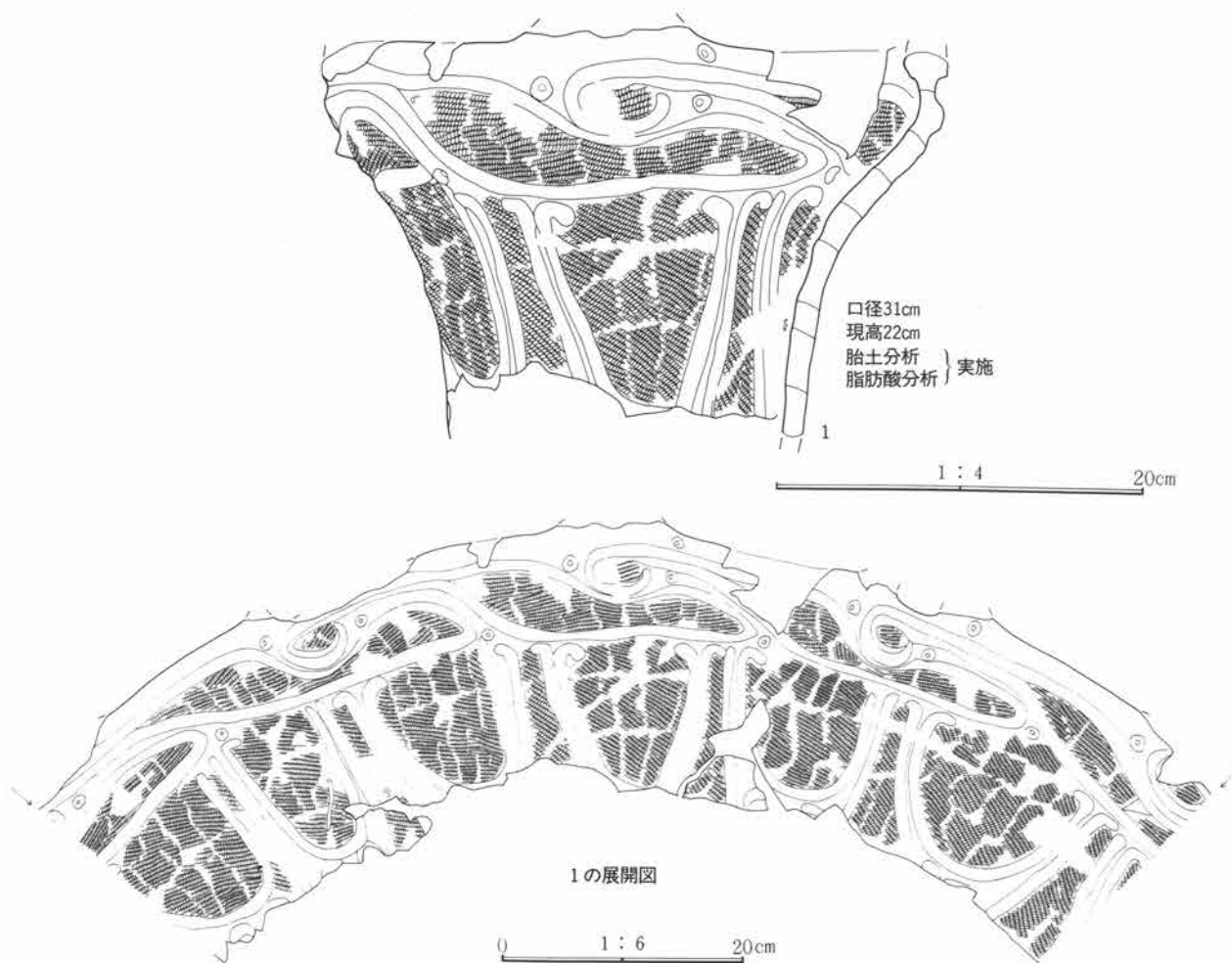
5 配石遺構〈6号〉

(5.6%)、熱変成岩5点(4.7%)、珪石4点(3.7%)、斑斨岩3点(2.8%)、砂岩2点(1.9%)、絹雲母片岩・滑石片岩・角閃岩・紅簾絹雲母石墨片岩・ノーライト・熔結凝灰岩・黒曜石・絹雲母脆雲母片岩各1点(各0.9%)である。不明の石を除いた99点中67点(67.7%)の石が片岩類である。多孔石2点は点紋緑泥片岩を使用している。

石材重量 重量の判明している石は102点である。その内訳は、500g未満の石52点(51%)、500g～1kg未満の石17点(16.7%)、1kg～2.5kg未満の石14点(13.7%)、2.5kg～5kg未満の石8点(7.8%)、7.5kg～10kg未満の石5点(4.9%)、10kg～20kg未満の石3点(2.9%)、5kg～7.5kg未満の石2点(2%)、20kg～30kg未満の石1点(1%)である。全体的に重量のある石が使用されている。

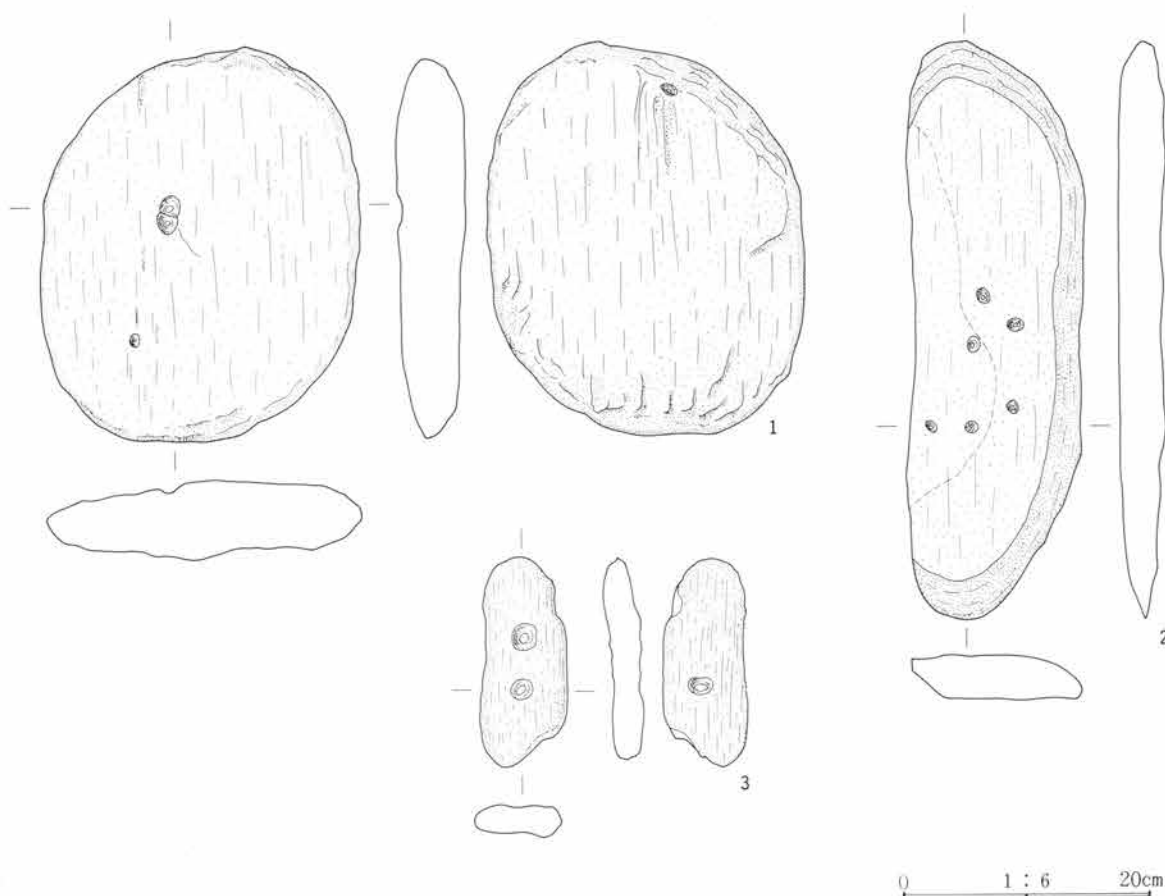
遺物出土状況 配石遺構の南端から加曽利E3式の伏甕(胴下半分欠損)が出土している(第157図1)。また中期土器片5点も出土しているが、土器の出土は非常に少ない。石器では多孔石2点、凹石1点が配石遺構を構成し、含有率2.8%である。また焼石は107点中17点の出土で15.9%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E3式期の配石遺構である。



第157図 6号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



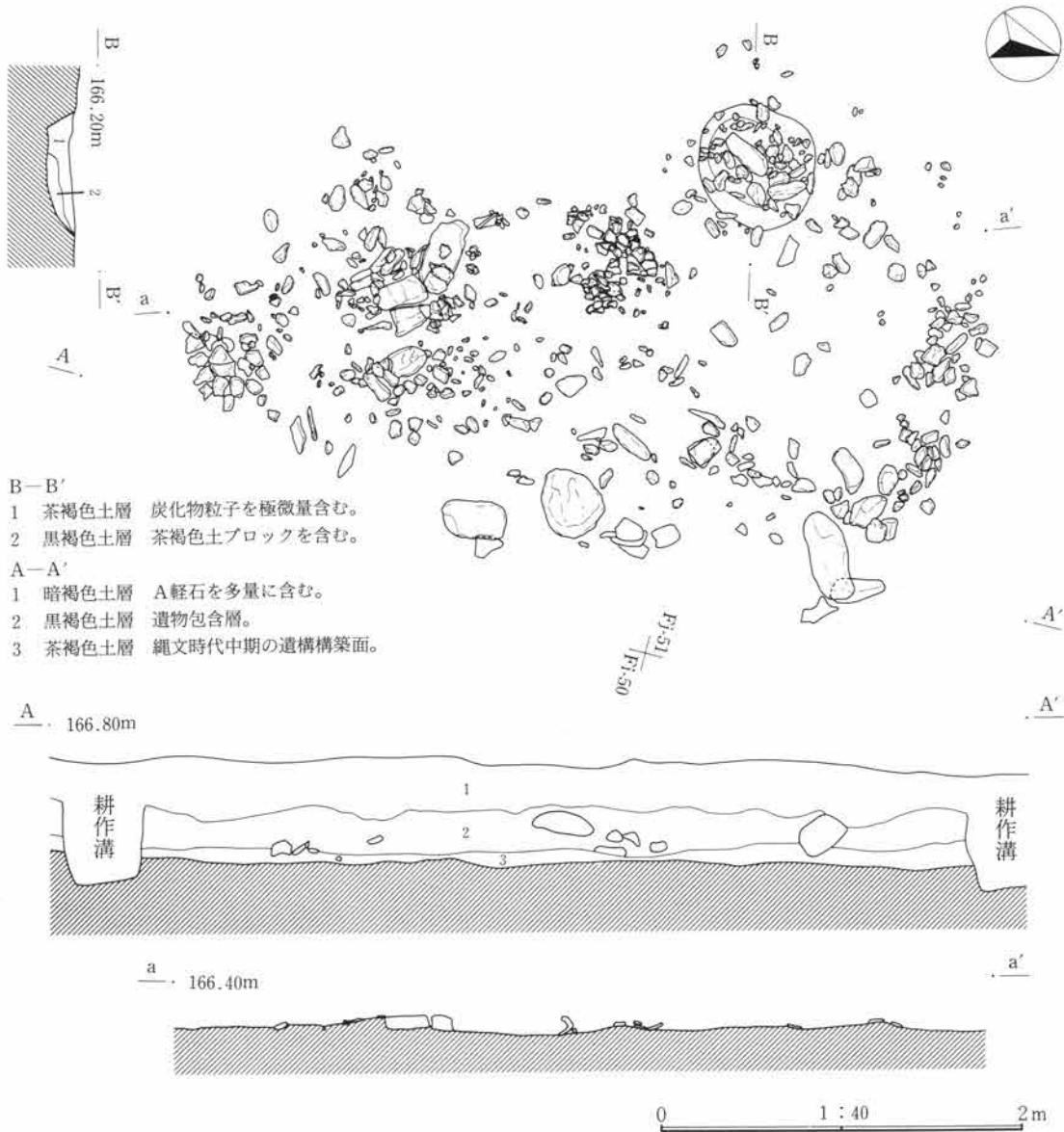
第158図 6号配石遺構出土石器

6号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文様(その他) | 出土状況 |
|--------------|------------|----------------|--|---|-------------|
| 157-1 119 | 胴下半部 欠損 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴下半部欠損。 器厚10~15mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部は内湾し、口唇部に4単位の突起を有する。口縁部に隆帯と沈線による渦巻き、楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はL ₁ R ₁ 。胴部は沈線による「U」字状の文様が描かれ、L ₁ R ₁ 縦転がし。 | 伏礎 配石南西部 |

6号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|--------|--------------|--------|-----|---------|--|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 158-1 119 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 31.1 | 25.5 | 6.7 | 7,450 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長17mm、短16mm、深4mm。最小は長12mm、短8mm、深2mmで、平均は長15mm、短12mm、深4mm。 | 配石南端 |
| 158-2 119 | 多孔石 | % | 点紋緑泥片岩 | 45.7 | (14.3) | 3.6 | (4,500) | 片面に6個の凹み。最大の凹みは長13mm、短11mm、深2mm。最小は長10mm、短9mm、深2mmで、平均は長12mm、短9mm、深2mm。一部被熱。 | 配石中央 |
| 158-3 119 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 16.6 | 6.8 | 2.6 | 500 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長21mm、短19mm、深1mm。最小は長18mm、短17mm、深2mmで、平均は長20mm、短17mm、深2mm。 | 配石西端 |



- B-B'
- 1 茶褐色土層 炭化物粒子を極微量含む。
 - 2 黒褐色土層 茶褐色土ブロックを含む。
- A-A'
- 1 暗褐色土層 A軽石を多量に含む。
 - 2 黒褐色土層 遺物包含層。
 - 3 茶褐色土層 縄文時代中期の遺構構築面。

第159図 7号配石遺構

7号配石遺構 (第159~166図、PL. 57・58、119)

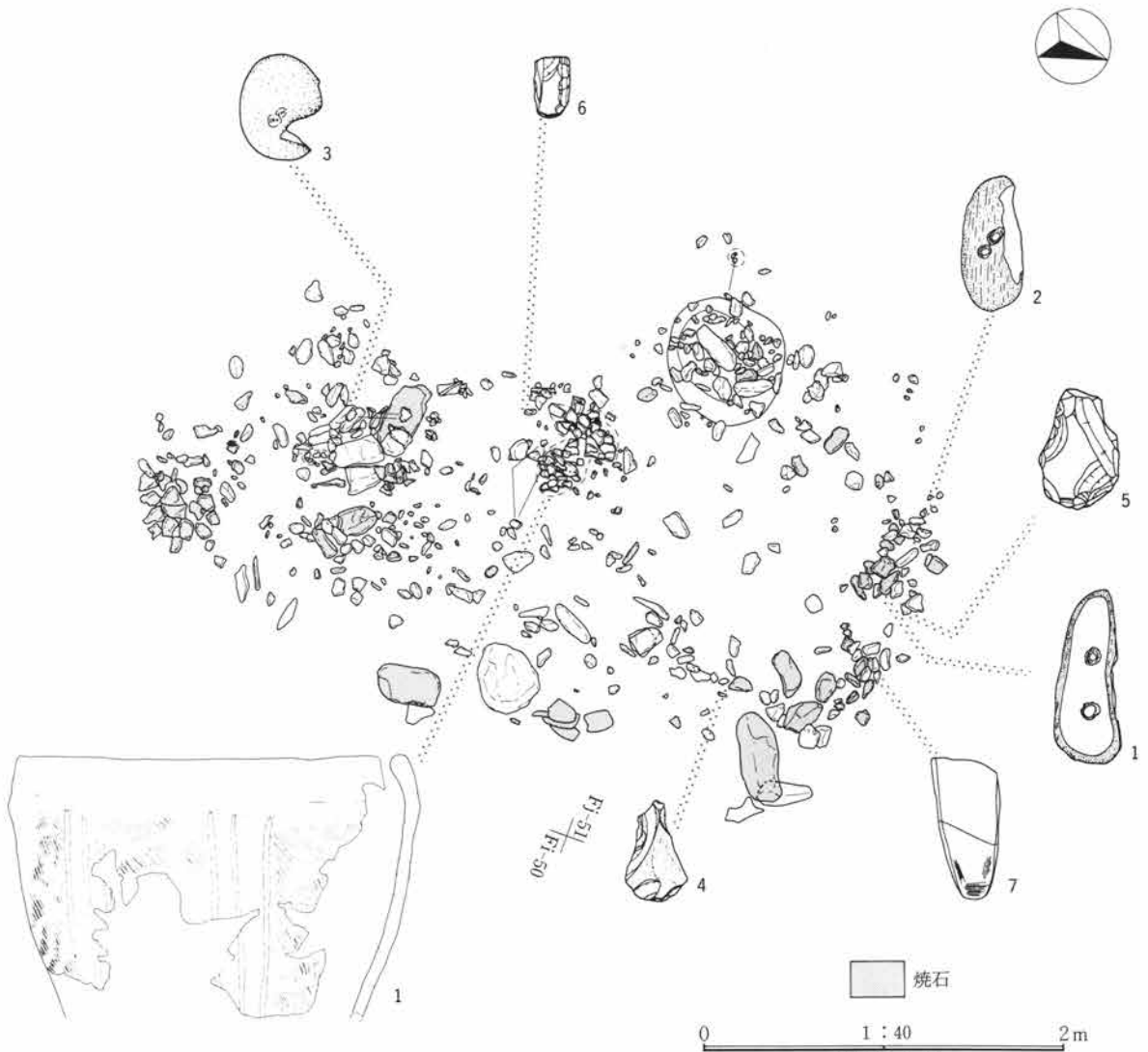
位置 Fj-50・51グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西18m (遺構の中心までの距離)、8号配石遺構の南東6mの所に位置している。20号配石遺構と同様に列石上に構築されている。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。8月下旬から9月上旬にかけて、8号配石遺構とほぼ同時に確認された。9月中旬には遺構の実測作業を実施したが、その後、他遺構の調査に入ったために写真撮影は12月2日に行った。以後、12月の下旬まで遺物の取りあげ作業を実施した。

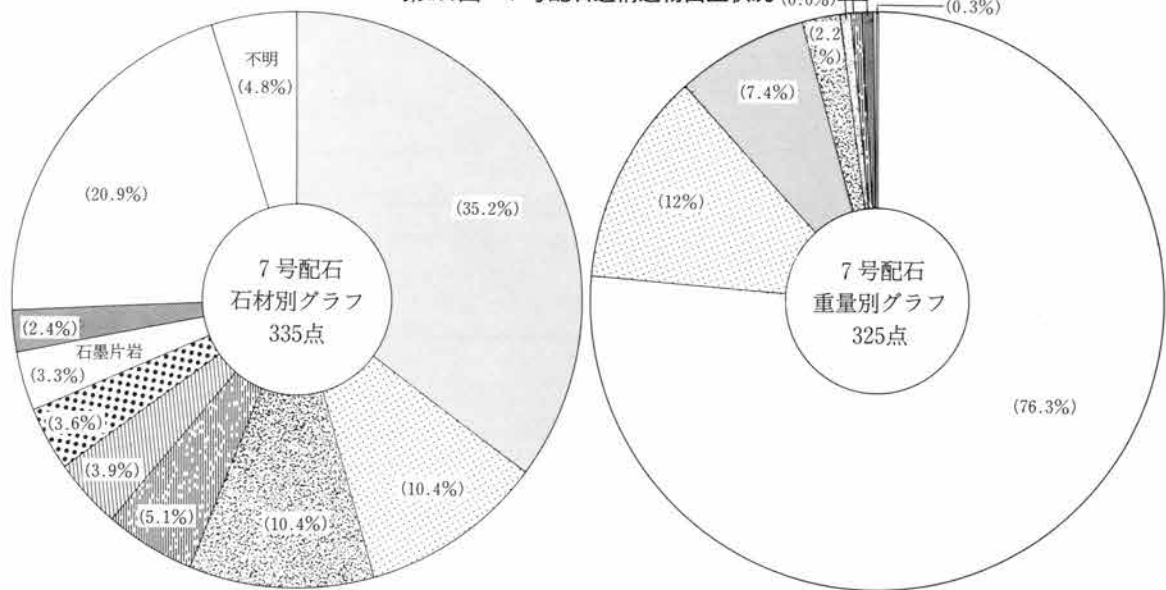
重複 当遺構は環状列石に組み込まれているものと思われる。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径4m50cm、短径2m30cmの柄鏡形を呈するようである。主体部は長径2m30cmの楕円形を呈するが、4個所の配石ブロックに分かれるようである。このうち1個所の配石下から土壌が検出された。土壌上面の規模は、長径70cm・短径68cm・深さ15cmである。他の配石下からは土壌は検出されていない。張



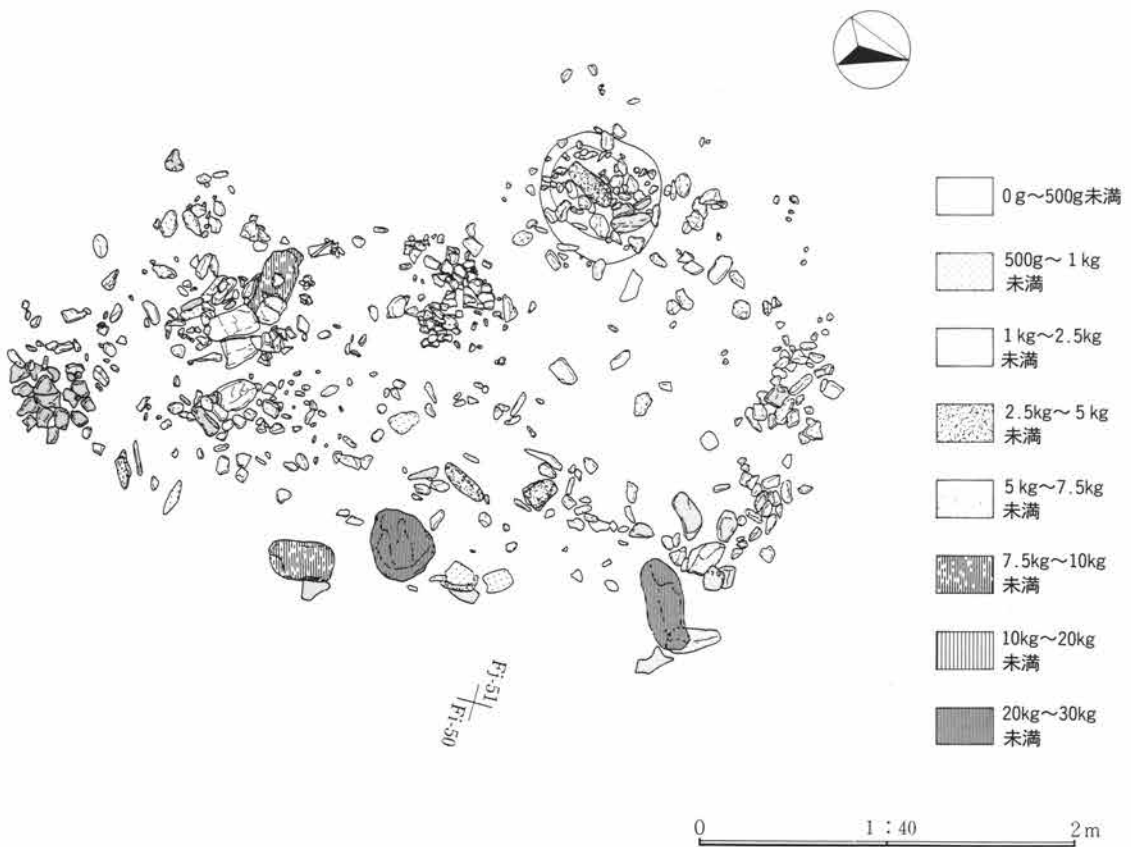
第160図 7号配石遺構遺物出土状況 (遺物は1:8)



第161図 7号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



第162図 7号配石遺構石材別分布



第163図 7号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

出し部は長径2m20cm、短径1m50cmである。この部分も3個所の配石ブロックに分かれるようであるが、配石下からは遺構の検出はない。当遺構は柄鏡形を呈するようであるが、主体部には炉はなく、また埋甕も存在しないことから判断して、住居にはならないと考えられる。配石の面積は約7.4㎡である。

使用石材 33種類の石材が確認された。335点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩118点(35.2%)、点紋緑泥片岩・輝緑岩各35点(各10.4%)、珪石17点(5.1%)、輝岩13点(3.9%)、緑泥片岩12点(3.6%)、石墨片岩11点(3.3%)、点紋絹雲母石墨片岩・点紋石墨緑泥片岩各8点(各2.4%)、絹雲母緑泥石片岩・脆雲母石墨片岩各7点(各2.1%)、チャート・絹雲母石墨緑泥片岩・砂岩各6点(各1.8%)、熱変成岩4点(1.2%)、緑色珪質板岩3点(0.9%)、絹雲母緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・安山岩・紅簾絹雲母片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・珪岩各2点(各0.6%)、赤色珪質板岩・斑斕岩・滑石片岩・流紋岩・石墨緑泥片岩・絹雲母片岩・閃緑岩・点紋絹雲母緑泥片岩・石英安山岩・蛇紋岩・変斑岩各1点(各0.3%)であり、不明は16点(4.8%)を数えた。不明の石を除いた319点中224点(70.2%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は325点である。その内訳は、500g未満の石248点(76.3%)、500g～1kg未満の石39点(12%)、1kg～2.5kg未満の石24点(7.4%)、2.5kg～5kg未満の石7点(2.2%)、5kg～7.5kg未満の石2点(0.6%)、7.5kg～10kg未満の石2点(0.6%)、20kg～30kg未満の石2点(0.6%)、10kg～20kg未満の石1点(0.3%)である。500g未満の石の占める割合は高い。

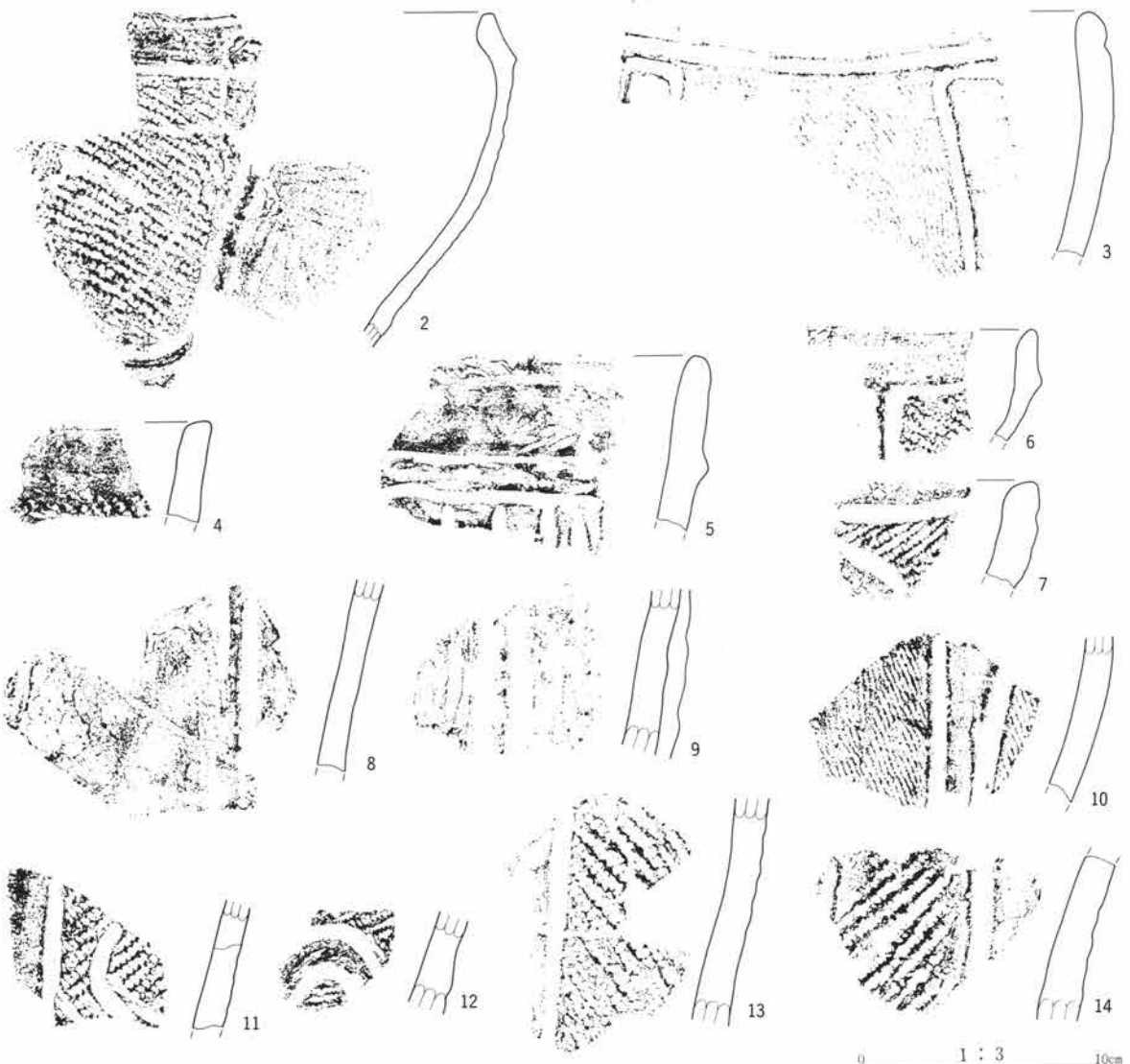
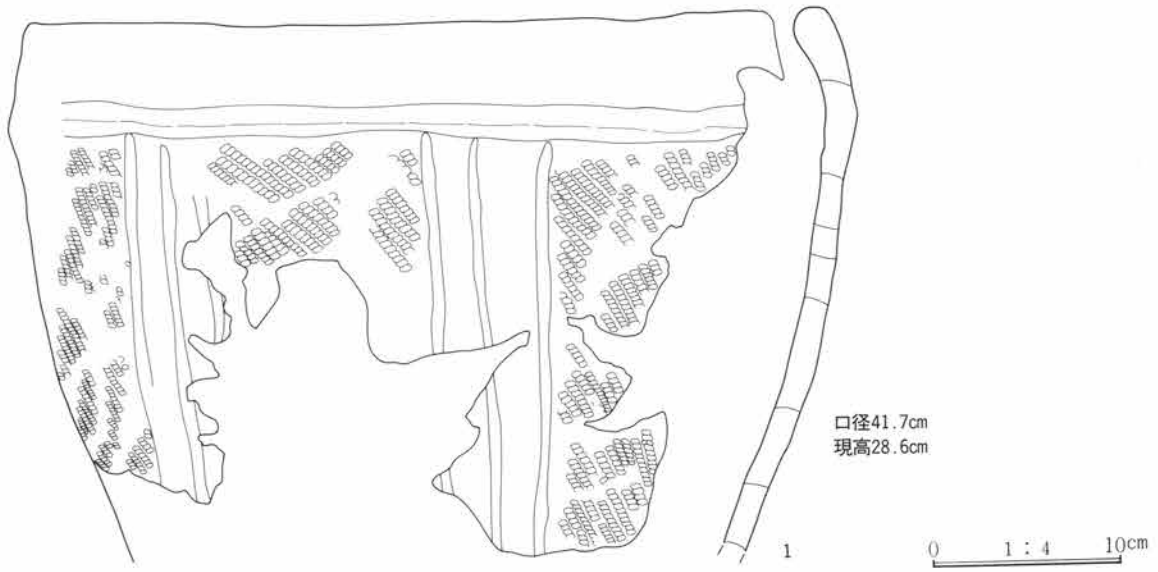
遺物出土状況 大形破片1点と89点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部11点、胴部77点、底部1点であり、配石の中心部から南端部にかけて出土している。加曽利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれている。石器では凹石3点、打製石斧2点、磨製石斧2点が出土しているが、多孔石の出土はない。配石中の石器含有率は2.1%である。また焼石は335点中78点の出土で、23.3%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E4式期の配石遺構であり、環状列石の一部を構成するものであろう。

7号配石遺構土器観察表

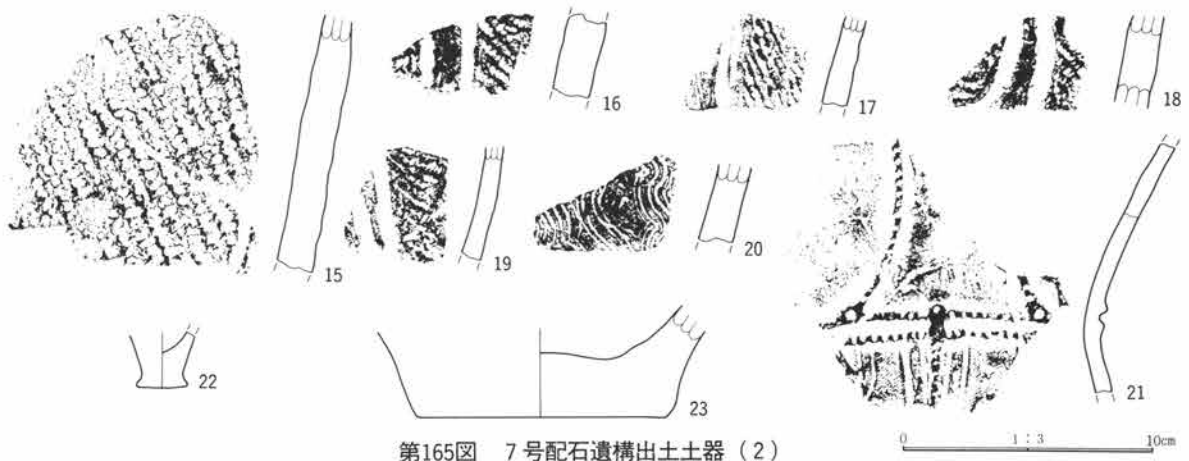
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|-------------------|---|---|-------|
| 164-1 119 | 口縁部 ～ 胴部 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁～胴部均。器厚12～16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。それに接続する沈線を垂下し、 区画内に縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石中心部 |
| 164-2 119 | 口縁部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の微隆起帯を巡らせる。胴部 には微隆起帯による文様が描かれ、区画内 に縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石南部 |
| 164-3 119 | 口縁部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11～13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らす。胴部には沈 線による「□」状の文様が描かれ、縄文施 文。原体はR{長縦転がし。然りは細かい。 | 配石中心部 |
| 164-4 119 | 口縁部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部に無文帯。以下縄文施文。 原体はR{長横転がし。 | 配石南西部 |
| 164-5 119 | 口縁部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい黄褐色。 | 口縁部が無文帯となり1条の隆帯を巡ら す。 胴部は沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 164-6 119 | 口縁部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6～9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗赤褐色。 | 口縁部はやや内湾。口唇下に微隆起帯を巡 らせ、それと接続するように微隆起帯を垂 下。区画内にL{長を充填。 | 配石南部 |
| 164-7 119 | 口縁部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口唇下に沈線を巡らす。地文に縄文施文。 原体はL{長横転がし。 | 配石北部 |

5 配石遺構〈7号〉



第164图 7号配石遺構出土土器(1)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第165図 7号配石遺構出土土器(2)

7号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------------|----------|-------------------|--|---|-------|
| 164-8 119 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させる。 | 配石南部 |
| 164-9 119 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。 | 隆帯を垂下させる。 | 配石南西部 |
| 164-10 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。沈線を垂下。 原体はL{ }縦転がし。撚りは細い。 外面に煤付着。 | 配石中心部 |
| 164-11 12 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 11・12は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚 11~14mm。内面は縦方向の調整。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ }縦転がし。 蛇行沈線を施す。 | 配石中心部 |
| 164-13 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ }縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟。 | 配石中心部 |
| 164-14 119 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ }縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 165-15 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{ }縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 165-16 119 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{ }縦転がし。 沈線を垂下。 粘土接合面に刻目を施している。 | 配石中心部 |
| 165-17 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{ }縦転がし。 隆帯を垂下。 | 配石南西部 |
| 165-18 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや荒れている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{ }縦転がし。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 165-19 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{ }縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 165-20 119 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰赤褐色。 | 条線を施している。 | 配石中心部 |
| 165-21 119 | 頸部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の頸部片。器厚6mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部が外反し頸部がくの字に折れる。刻 みを施した隆線。胴部に沈線で文様を描き、 L{ }充填。堀之内式土器。 | 配石南西部 |
| 165-22 119 | 小型 土器 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 底径20mm。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 土製品か? | 配石南部 |
| 165-23 119 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 底径99mm。内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 沈線を垂下。 | 配石中心部 |

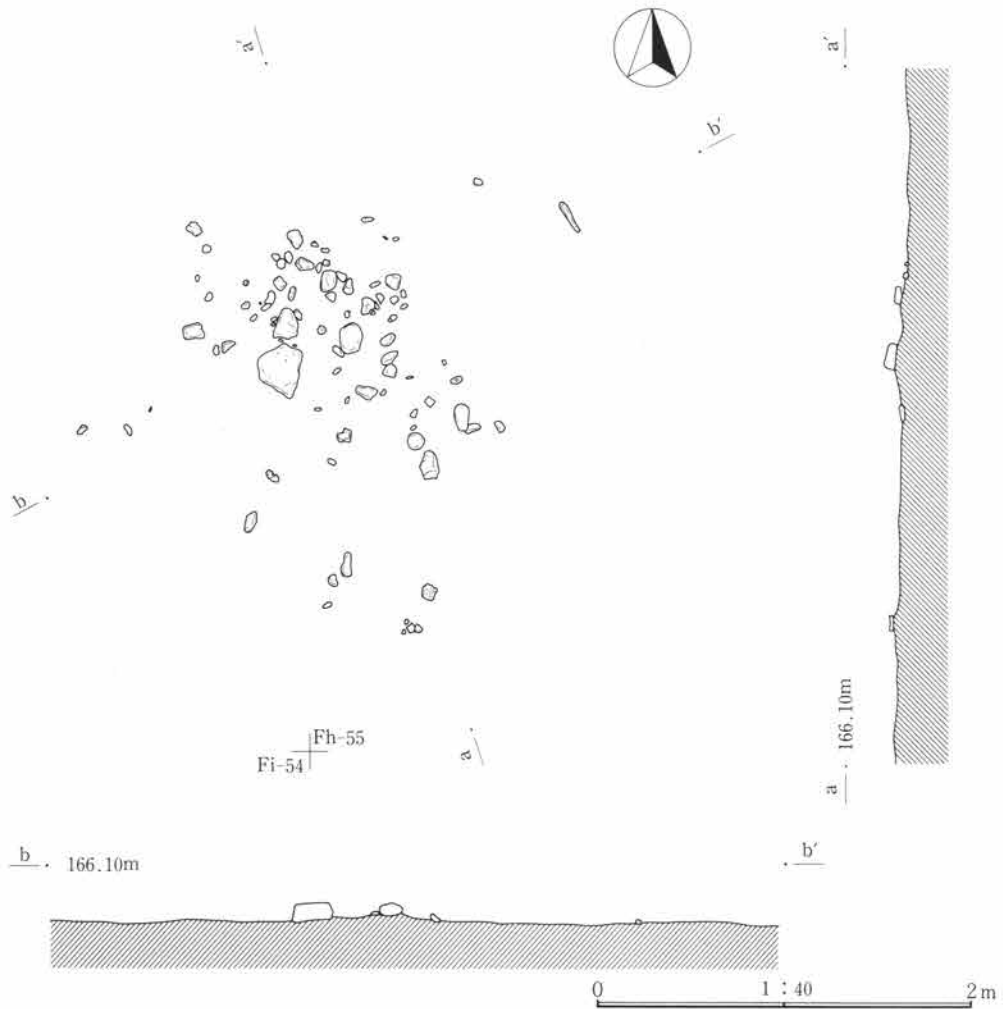
5 配石遺構〈7号〉



第166図 7号配石遺構出土石器

7号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|--------|--------------|-------|-----|-------|---|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 166-1 119 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 19.0 | 7.9 | 3.3 | 700 | 片面に2個の凹みがある。その平均は長径20mm、短径18mm、深さ1mmである。凹みのある面は磨耗している。 | 配石北端 |
| 166-2 119 | 凹 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | 14.9 | (7.3) | 5.0 | (800) | 両面に3個の凹みがある。最大の凹みは長21mm、短20mm、深5mm。最小は長16mm、短15mm、深4mmで、平均は長20mm、短17mm、深4mm。全面赤化。 | 配石北端 |
| 166-3 119 | 凹 石 | 一部欠損 | 石英安山岩 | 11.6 | 8.6 | 5.5 | (500) | 片面に2個の凹みがある。その平均は長径12.5mm、短径12mm、深さ2mmである。 | 配石南端 |
| 166-4 119 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 10.9 | 7.0 | 2.7 | 188 | バチ(II a)。背面に自然面を持つ。横長剝片を素材とする。 | 配石東端 |
| 166-5 119 | 打製石斧 | 基部欠損 | 輝岩 | (13.0) | 8.9 | 2.3 | (320) | バチ(II b)。 | 配石北端 |
| 166-6 119 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (6.7) | 4.0 | 2.7 | (130) | 敲打途中。片面一部に敲打痕あり。 | 配石西端 |
| 166-7 119 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (15.7) | 7.3 | 4.5 | (610) | 磨き段階。 | 配石北端 |



第167図 9号配石遺構

9号配石遺構 (第167～172図、PL. 59、119・120)

位置 Fh・Fi—55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西39m30cm (遺構の中心までの距離)、10号配石遺構の南西3m50cmの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。8月下旬から9月上旬にかけて10・11号配石遺構とともに調査を開始した。10号配石遺構と同様に小規模な遺構である。写真撮影・実測作業終了後、石の取り上げを行い下部の調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

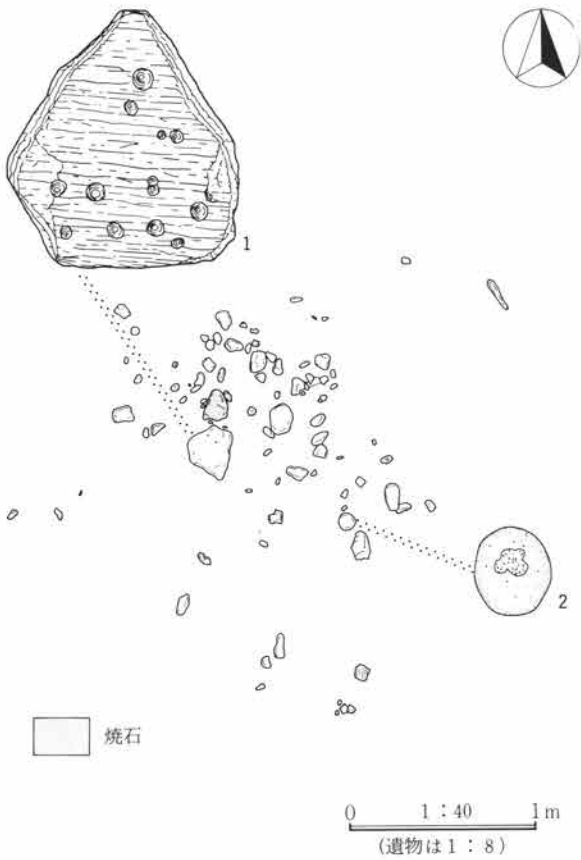
重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径2m、短径1m10cmの範囲に石66点と土器片が散在しているが、多孔石を中心としたまとまりが認められる。配石の面積は約1.9㎡である。

使用石材 10種類の石材が確認された。66点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩34点(51.5%)、珪石3点(4.5%)、点紋緑泥片岩・輝岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各2点(各3%)、点紋絹雲母石墨片岩・安山岩・角閃岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点(各1.5%)であり、不明は17点(25.8%)を数えた。不明の石を除いた49点中44点(89.8%)の石が片岩類である。多孔石は絹雲母石墨片岩、敲石は安山岩を使用している。

石材重量 重量の判明している石は56点である。その内訳は、500g未満の石46点(82.1%)、500g～1kg未

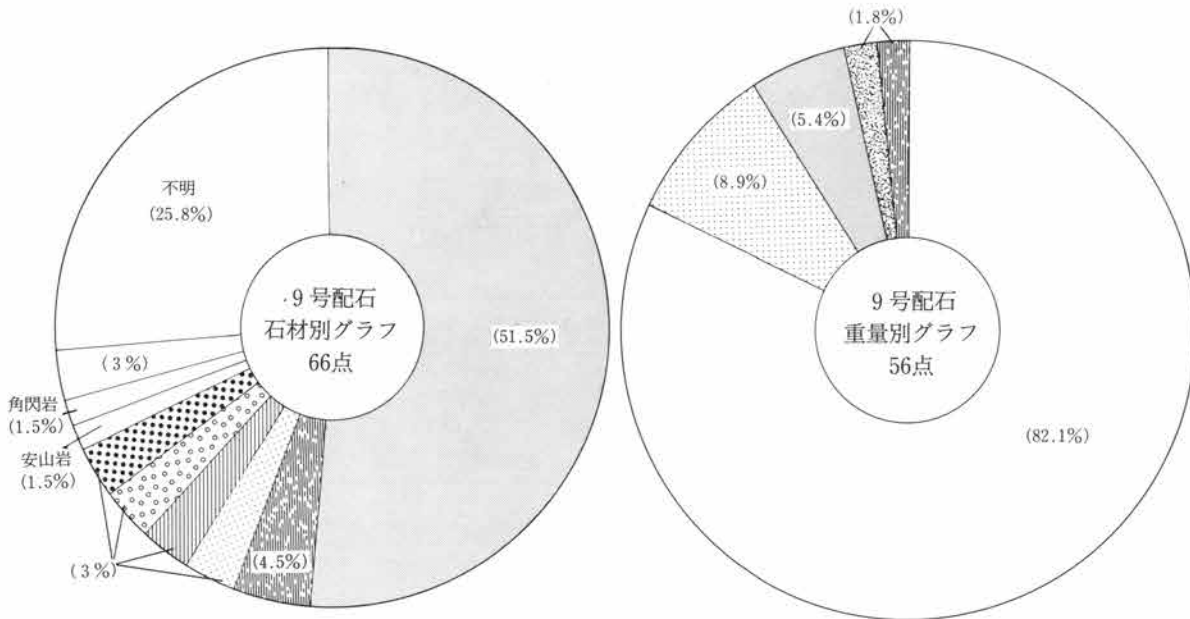


満の石 5 点 (8.9%)、1 kg~2.5kg未満の石 3 点 (5.4%)、2.5kg~5 kg未満の石 1 点 (1.8%)、7.5kg~10 kg未満の石 1 点 (1.8%) である。小規模な配石遺構であるために、500g未満の石の占める割合が他の配石遺構よりも高い。

遺物出土状況 多孔石を中心に遺構が構成されている。43点の土器片が出土しているが、その部位別点数は口縁部12点、胴部31点である。加曽利E3式土器を主体としている。石器では多孔石1点、敲石1点が出土し、配石中の石器含有率は3%である。また焼石は66点中2点の出土であり、3%を占めている。

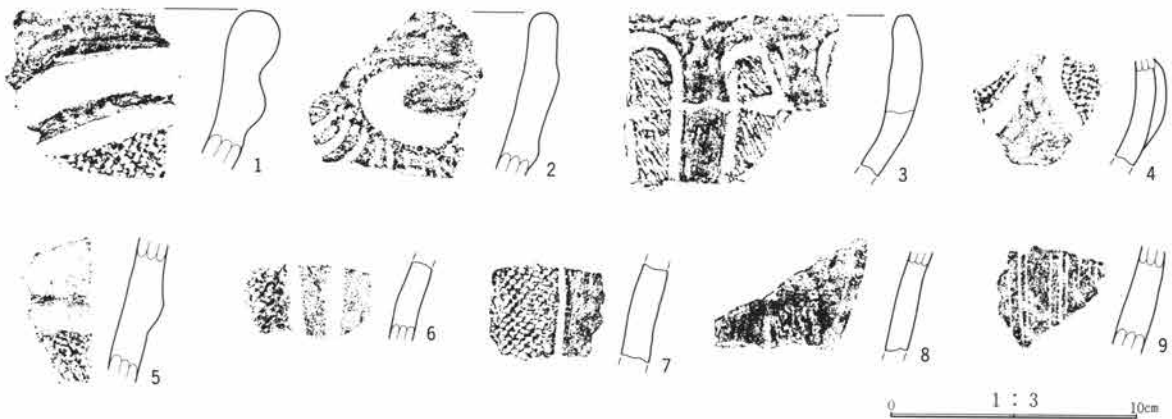
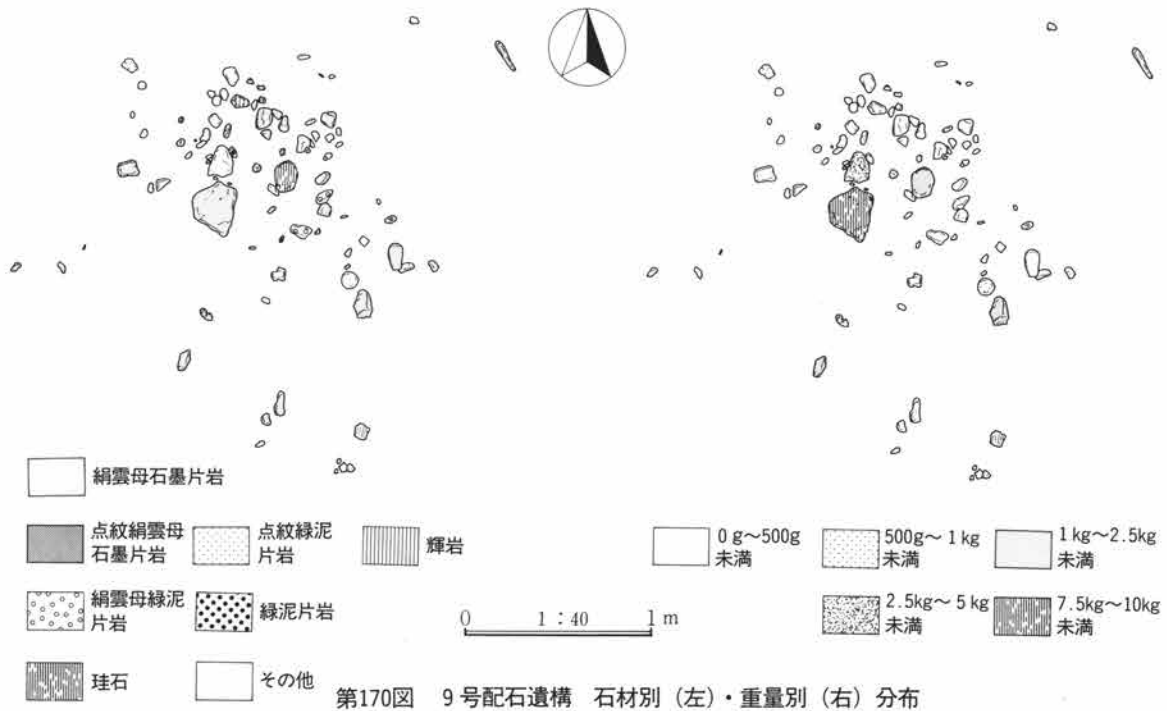
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E3期の配石遺構である。

第168図 9号配石遺構遺物出土状況



第169図 9号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

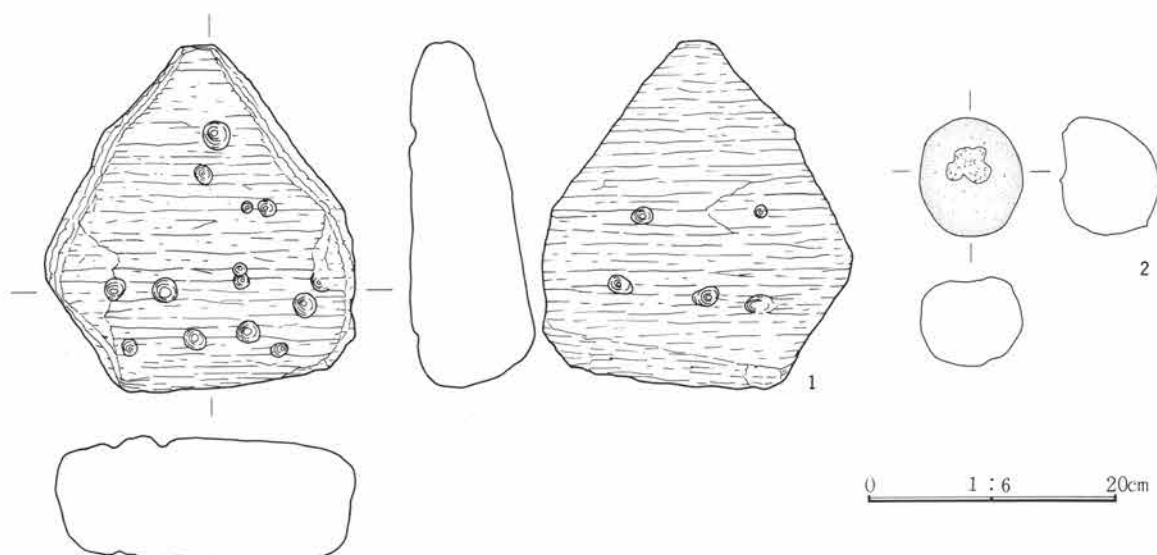


9号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文様(その他) | 出土状況 |
|--------------|------|----------------|--|--|-------|
| 171-1 119 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~20mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 口縁部に隆帯及び太い沈線による渦巻き等の文様を描き、地文に縄文施文。 原体はR(↑)横転がし。押圧が強い。 | 配石中心部 |
| 171-2 119 | 口縁部片 | ①細粒の砂が混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部に太い沈線による渦巻文を描く。 | 配石東南部 |
| 171-3 119 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部は内湾する。沈線で「 \cap 」状の文様を配し、区画内にL(↓)縦転がし。縄の開端を別の条で縛る。 | 配石北東部 |
| 171-4 119 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 口縁部はやや内湾し、沈線で文様を描く。 地文に縄文施文。原体はR(↑)。 | 配石東南端 |
| 171-5 119 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 口縁部が無文となり、1条の微隆起帯を巡らせる。以下、縄文を施文。 原体はL(↓)縦転がし。 | 一括 |

9号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|-------------------|---|---|------|
| 171-6 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right.$ 縦転がし。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 171-7 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は赤褐色。 | 地文に縄文施文。 原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ L \\ R \end{array} \right.$ 。沈線を垂下。 | 一括 |
| 171-8 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 胴部に沈線による「 \square 」状の区画内に縄文 を施す。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right.$ 縦転がし。 | 一括 |
| 171-9 119 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 胴部に縦位の条線を施す。 | 一括 |



第172図 9号配石遺構出土石器

9号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|------------|------|-----|-------|--|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 172-1 120 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 27.5 | 24.8 | 9.5 | 9.400 | 両面に19個の凹みがある。最大の凹みは長23mm、 短22mm、深7mm。最小は長10mm、短9mm、深3mm で、平均は長17mm、短14mm、深5mm。 | 配石の一 部 |
| 172-2 120 | 敲石 | 完形 | 安山岩 | 9.3 | 8.3 | 6.9 | 800 | 器面に著しい敲打痕がみられる。 | 配石東南 端 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

10号配石遺構(第173~176図、PL. 59、120)

位置 Fh-55・56グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北41m80cm(遺構の中心までの距離)、11号配石遺構の南西約3m50cm、9号配石遺構の北東3m50cmの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。8月下旬から9月上旬にかけて9・11号配石遺構とともに調査を開始した。小規模な配石遺構である。10・11号配石遺構とともに写真撮影、実測作業を行い石の取り上げを実施した。下部の調査も実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められない。

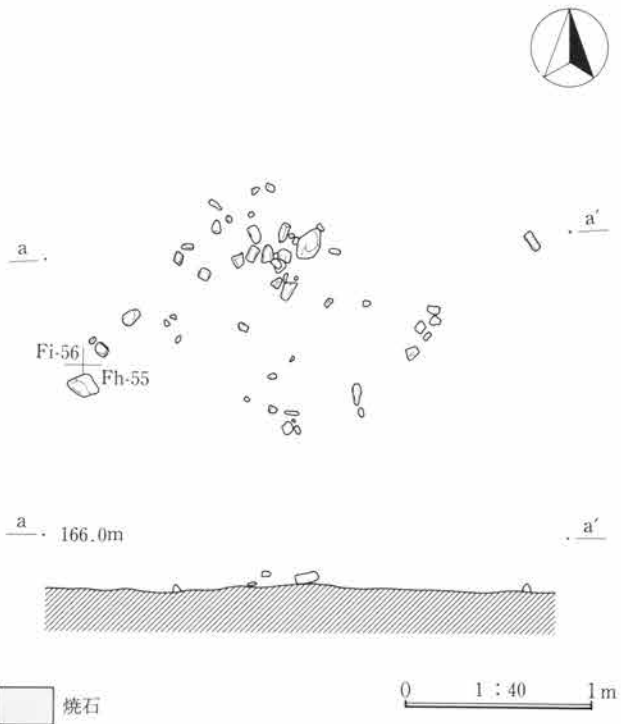
形状・配石状況 配石の規模は長径1m40cm、短径1m10cm程の規模であり、37点の石と19点の土器片から構成されていた。配石の面積は約1.9m²である。

使用石材 9種類の石材が確認された。37点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩19点(51.4%)、珪石6点(16.2%)、緑泥片岩3点(8.1%)、点紋緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各2点(各5.4%)、赤色珪質板岩・斑斕岩・流紋岩・蛇紋岩各1点(各2.7%)であり、不明は1点(2.7%)を数えた。不明の石を除いた36点中26点(72.2%)の石が片岩類である。

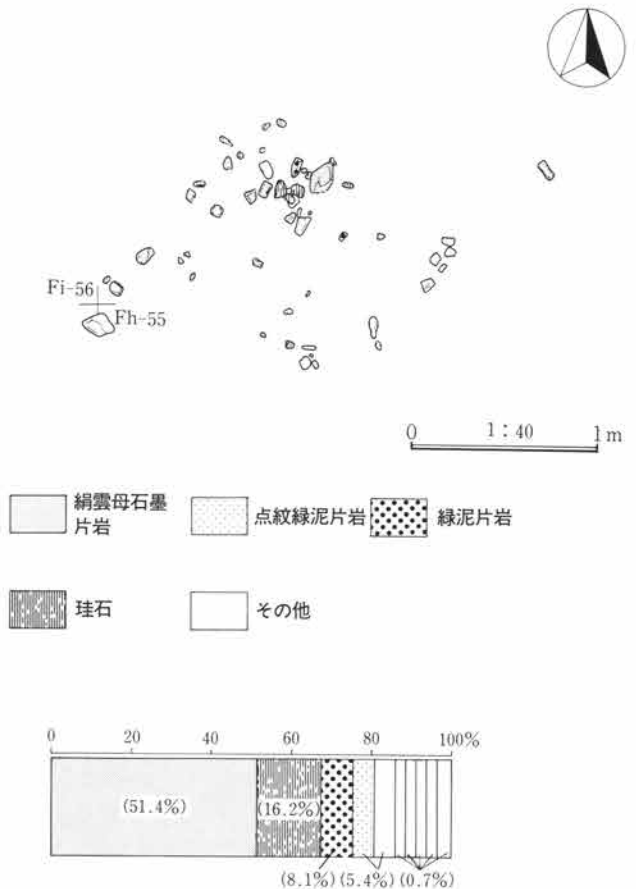
石材重量 37点の重量別点数は、500g未満の石33点(89.2%)、500g~1kg未満の石4点(10.8%)である。

遺物出土状況 縄文中期加曾利E3式土器を主体とした19点は配石遺構の周辺から出土している。また石器の出土はないが、焼石1点(2.7%)が出土した。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は

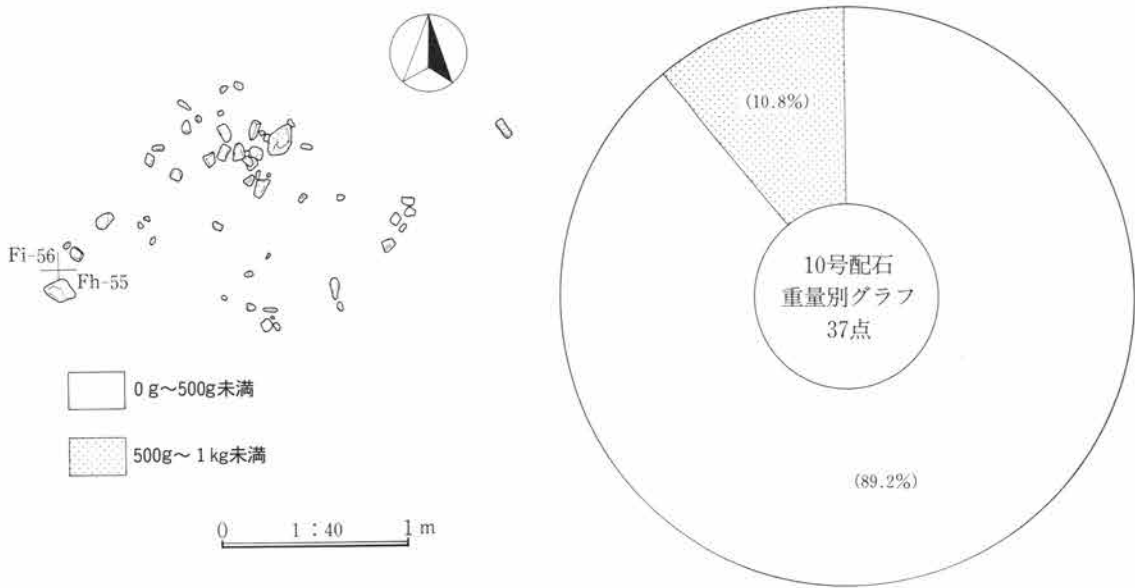


第173図 10号配石遺構

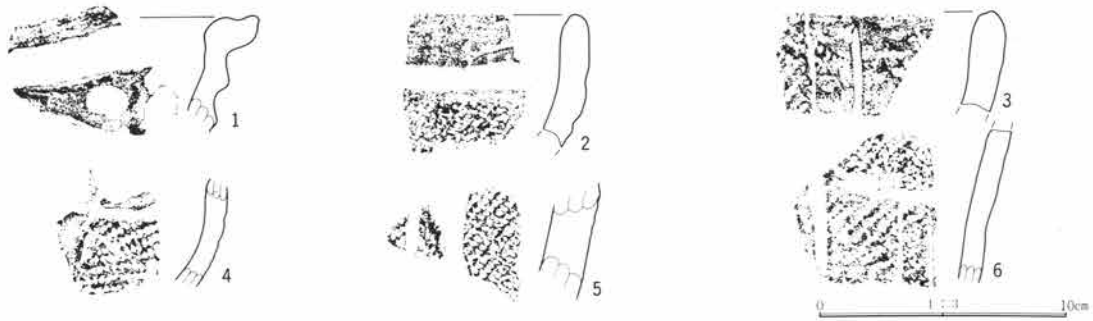


第174図 10号配石遺構石材別分布とグラフ

縄文時代中期加曾利E 3式期の配石遺構である。



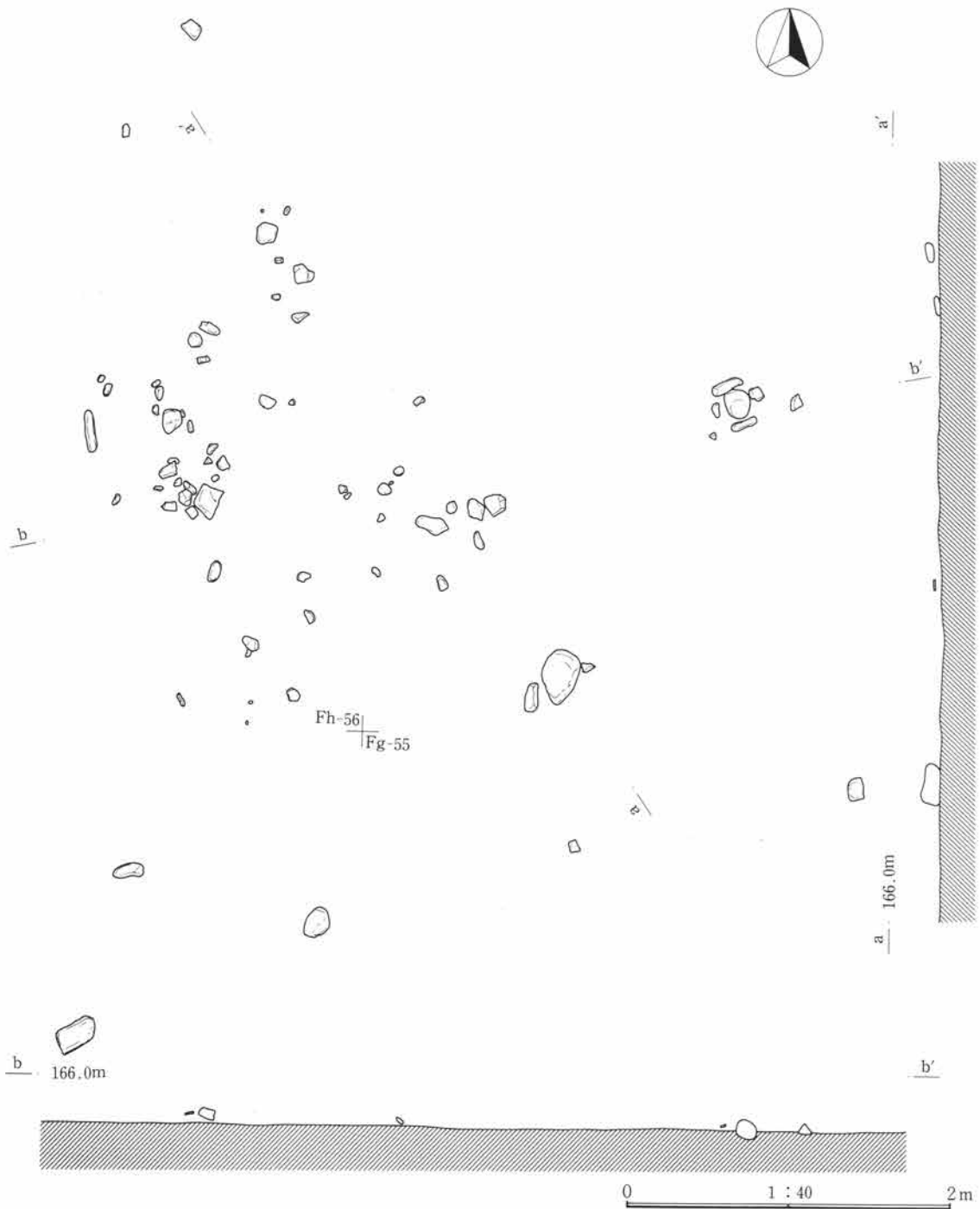
第175図 10号配石遺構重量別分布とグラフ



第176図 10号配石遺構出土土器

10号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|---|---|-------|
| 176-1 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。 | 波状口縁となり、口縁にそって太い沈線による渦巻文を描く。 | 配石北東部 |
| 176-2 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰黄褐色。 | 口縁部が無文となり1条の沈線を巡らす。 以下に縄文施文。原体はR(1/1(0段多条か) 縦転がし。 | 配石東端 |
| 176-3 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面はにぶい褐色。 | やや内湾する口縁部片。地文に縄文施文。 原体はR(1/1横転がし。沈線を垂下。 | 一括 |
| 176-4 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 口縁部に沈線による文様を描き、地文に縄 文施文。原体はL(1/1横転がし。 | 配石東端 |
| 176-5 120 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(1/1縦転がし。 隆帯と沈線を垂下。 | 一括 |
| 176-6 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は褐灰色。 | 地文に縄文施文。原体はR(1/1縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 一括 |



第177図 11号配石遺構

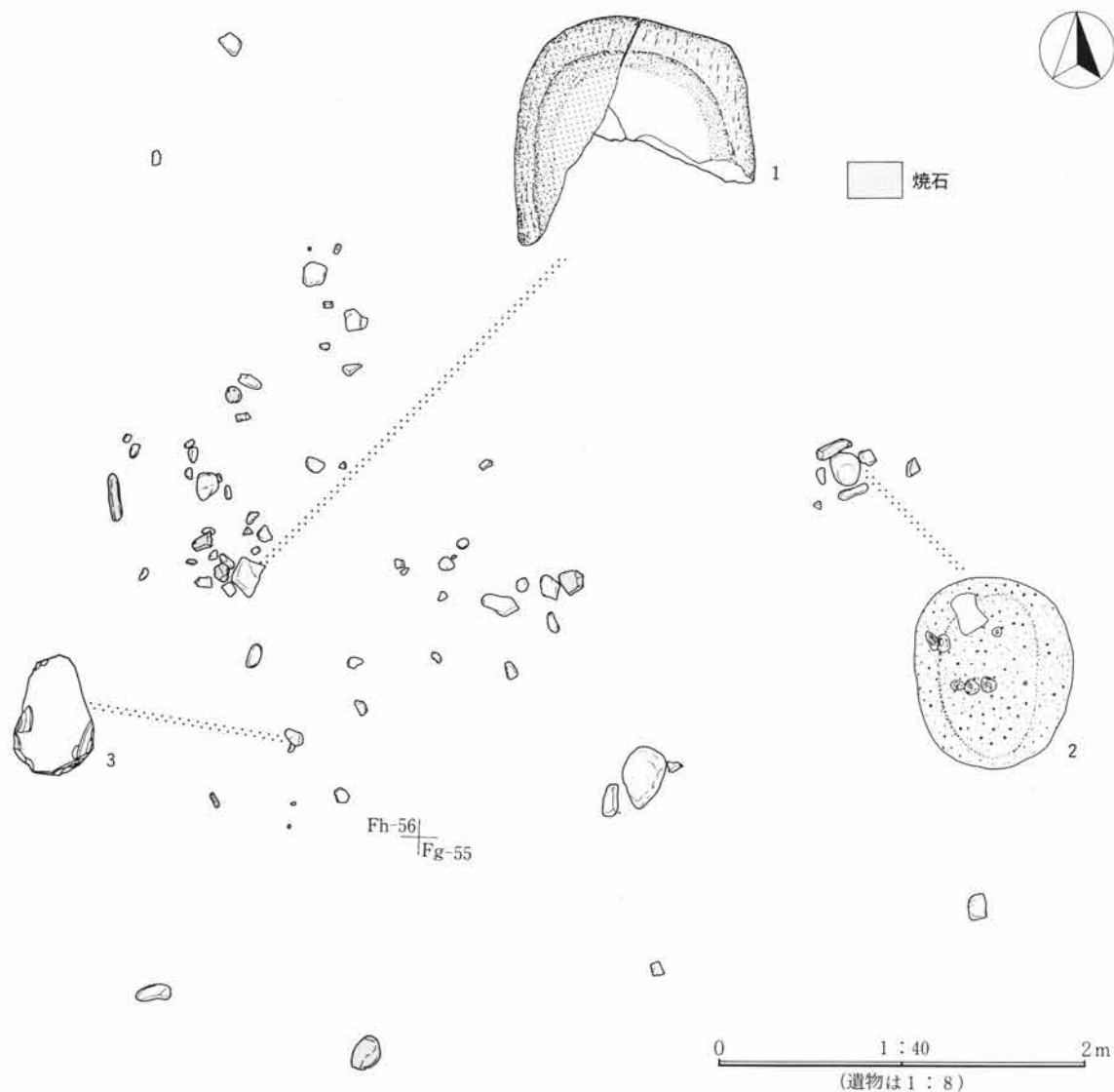
11号配石遺構 (第177~183図、PL. 60、120)

位置 Fg・Fh-55・56グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北東43m (遺構の中心までの距離)、16号配石遺構の北5m50cm、10号配石遺構の南西3m50cmの所に位置している。

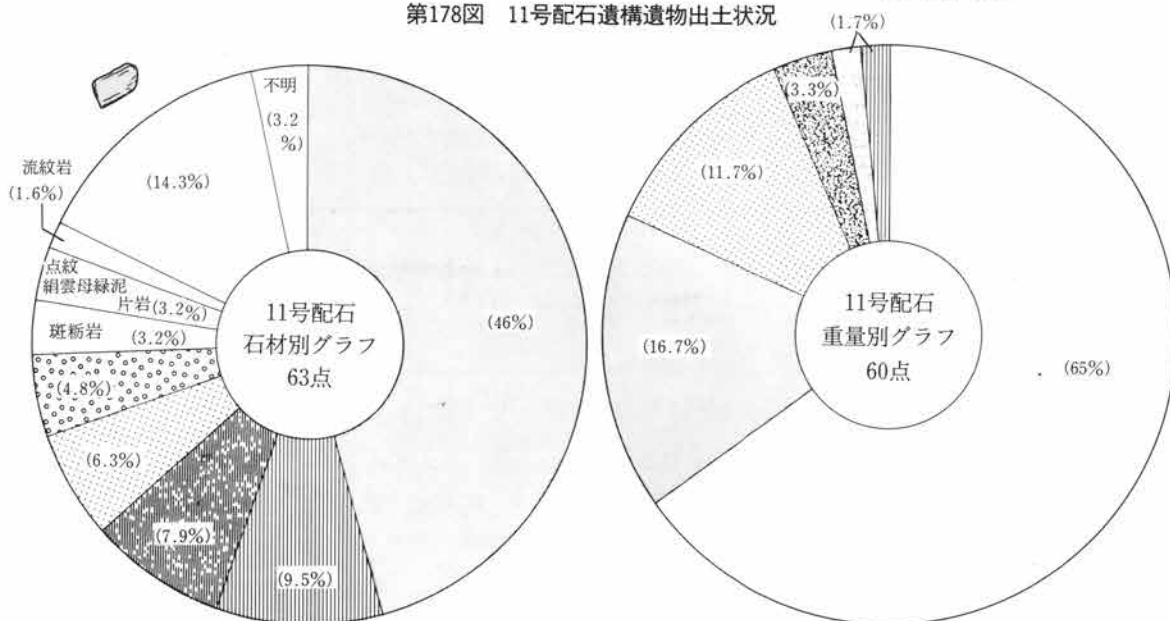
経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。9月上旬に10号配石遺構とともに調査を開始した。写真撮影、実測図の作成終了後、遺物取り上げを行い下部調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

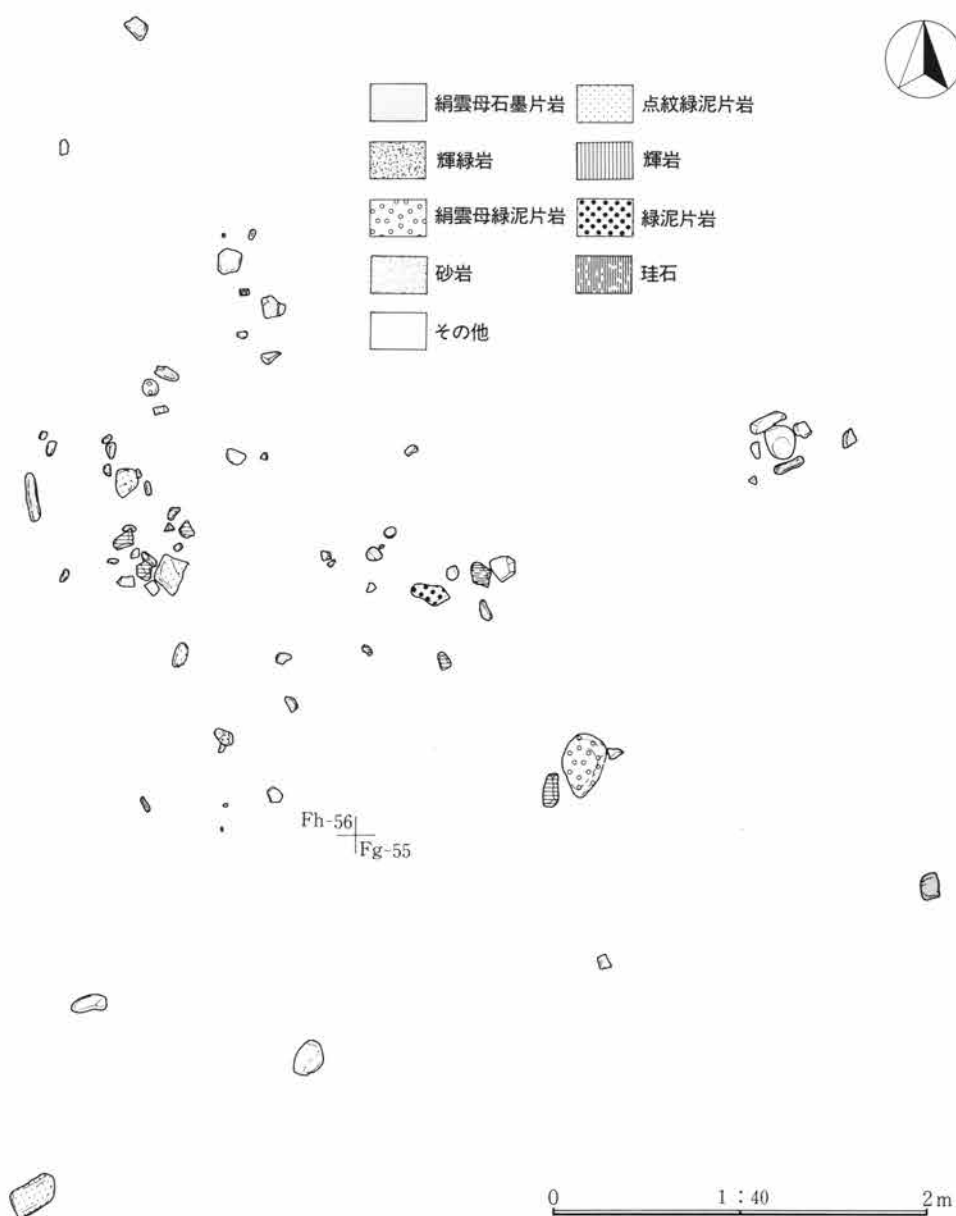
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。



第178図 11号配石遺構遺物出土状況



第179図 11号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

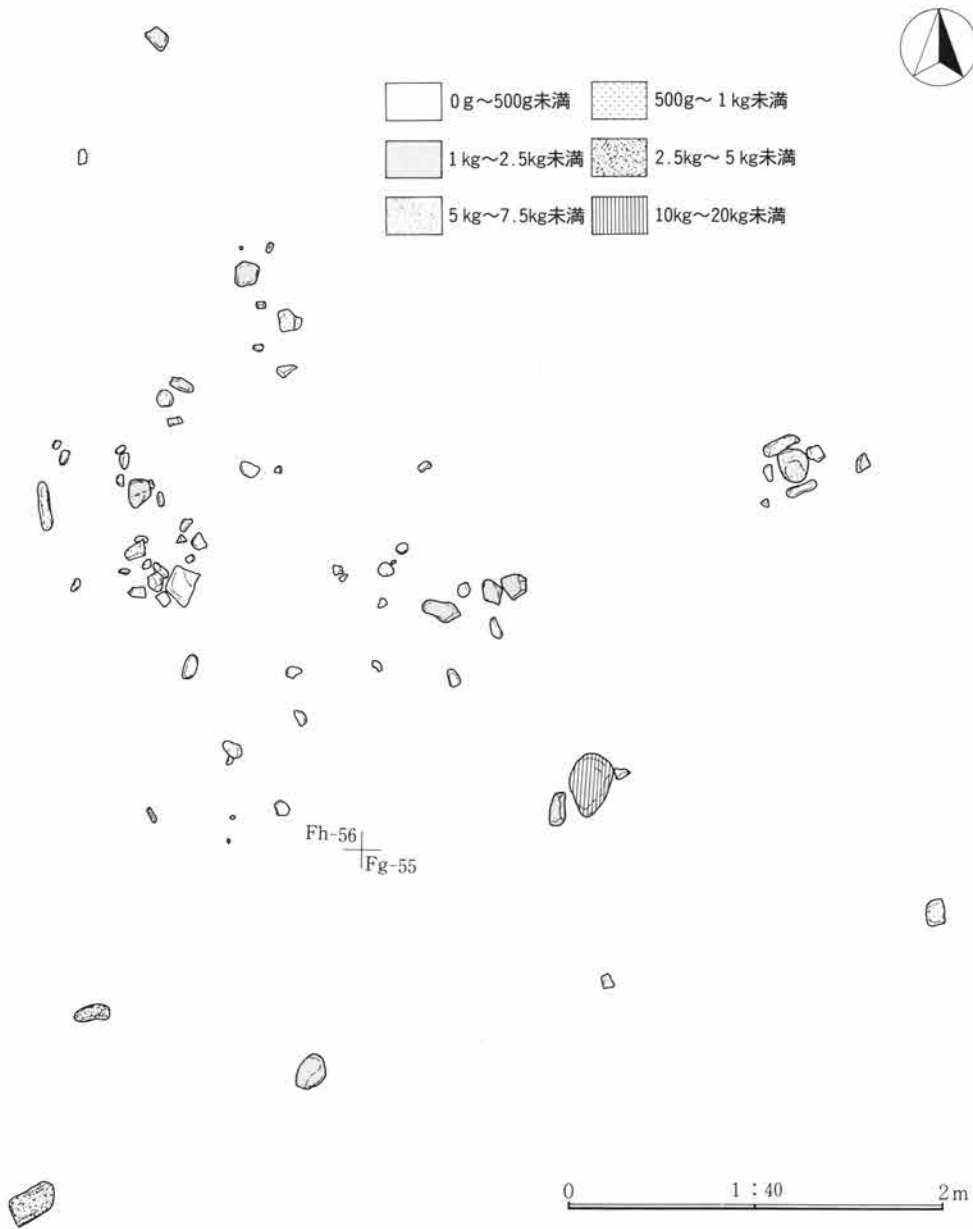


第180図 11号配石遺構石材別分布

形状・配石状況 長径約6m、短径約5mの範囲に散漫的に石が配置されているが、ややまとまって分布している範囲は、長径2m50cm、短径2m30cmの範囲である。63点の石と22点の土器片から構成されていた。配石の面積は約11.2m²である。

使用石材 17種類の石材が確認された。63点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩29点(46%)、輝岩6点(9.5%)、珪石5点(7.9%)、点紋緑泥片岩4点(6.3%)、絹雲母緑泥片岩3点(4.8%)、斑斨岩・点紋絹雲母緑泥片岩各2点(各3.2%)、輝緑岩・緑泥片岩・赤色珪質板岩・流紋岩・砂岩・変斑斨岩・紅簾絹雲母石墨片岩・方散虫板岩・玢岩・赤鉄鉱珪岩各1点(各1.6%)であり、不明は2点(3.2%)を数えた。不明の石を除いた61点中40点(65.6%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は60点である。その内訳は、500g未満の石39点(65%)、1kg～2.5kg未満の石10点(16.7%)、500g～1kg未満の石7点(11.7%)、2.5kg～5kg未満の石2点(3.3%)、5kg～7.5kg



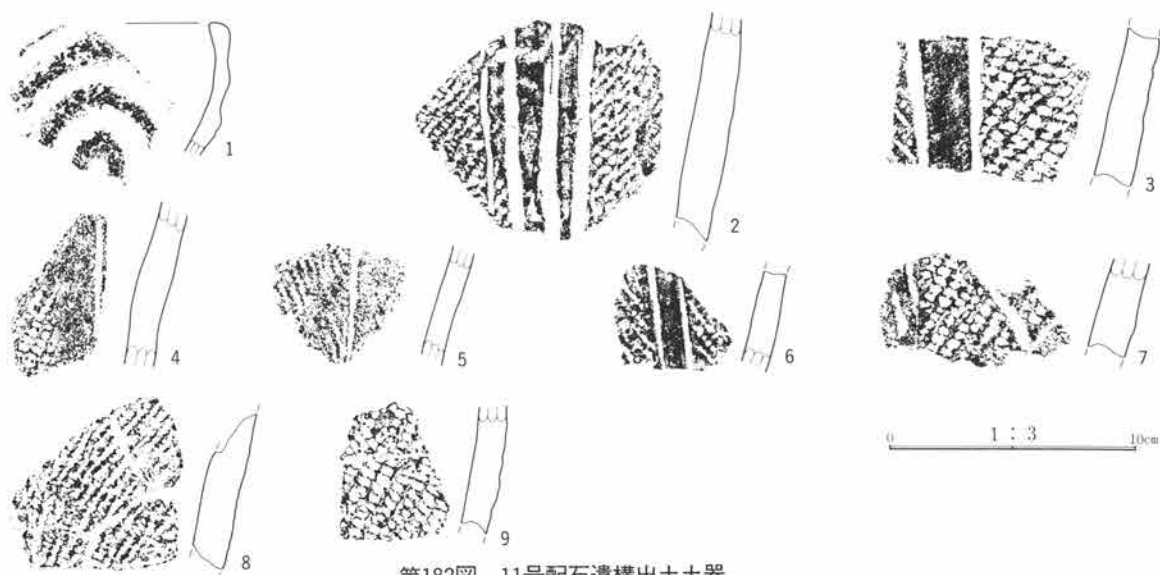
第181図 11号配石遺構重量別分布

未満の石1点(1.7%)、10kg~20kg未満の石1点(1.7%)である。

遺物出土状況 22点の土器片が出土している。その部位別点数は口縁部2点、胴部20点であり、石と同様に散漫的な出土である。加曾利E3式土器を主体としている。石器では配石西端から東約3m50cmの所に、多孔石(丸石)1点が出土した。この多孔石は石2点と土器片で回りを囲われており、4号屋外埋設土器の丸石と共通した出土状況である。また石皿1点(16号配石遺構の石皿と接合)、打製石斧1点も出土している。配石中の石器の含有率は4.8%である。また焼石は63点中8点の出土で、12.7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

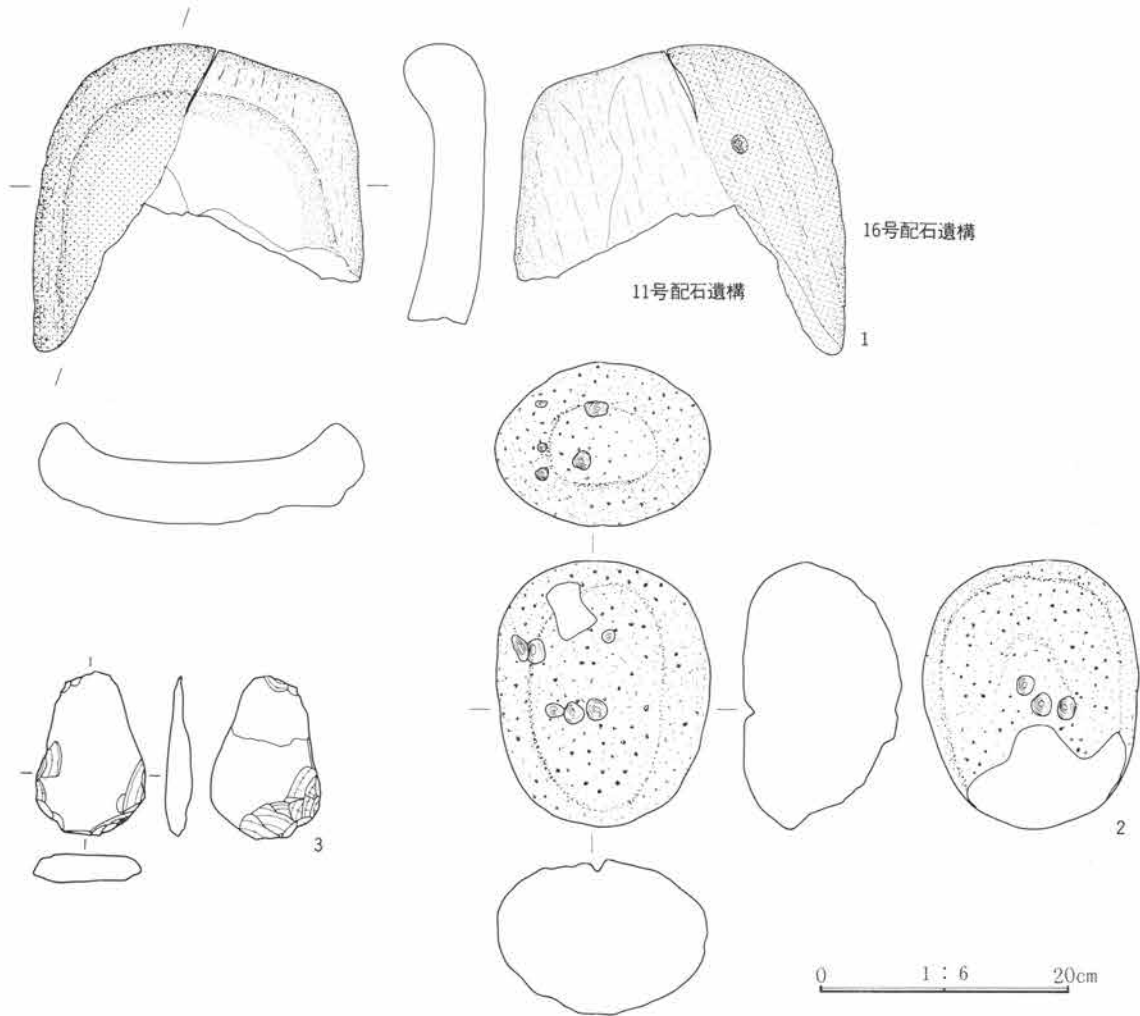
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第182図 11号配石遺構出土土器

11号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|--|---------------------------------------|-------|
| 182-1 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 波状口縁部片。沈線による渦巻文が描かれて いる。 | 配石中心部 |
| 182-2 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石東端 |
| 182-3 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西部 |
| 182-4 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北部 |
| 182-5 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL(長)縦転がし。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 182-6 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL(長)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西部 |
| 182-7 120 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北西端 |
| 182-8 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石東端 |
| 182-9 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 | 一括 |



第183図 11号配石遺構出土石器

11号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------------|------|--------|--------------|------|------|---------|---|-----------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 183-1 120 | 石 皿 | 欠 | 点紋緑泥片岩 | (25.2) | 26.5 | 8.1 | (4,700) | 楕円形で窪みが深く、湾曲している。裏面に多孔石と同様の凹みが1個ある。長径13mm、短径11mm、深さ3mm。 | 11号配石と16号配石から出土 |
| 183-2 120 | 多孔石 (丸石) | 一部欠損 | 流紋岩 | 21.3 | 17.3 | 12.7 | (5,400) | 丸石に凹みが15個ある。最大の凹みは長18mm、短17mm、深10mm。最小は長7mm、短6mm、深3mmで、平均は長15mm、短12mm、深5mm。 | 配石東端 |
| 183-3 120 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 13.0 | 8.7 | 2.2 | 300 | バチ(II b)。両面に自然面を残し礫素材と思われる。 | 配石南西 |

12号配石遺構 (第184~189図、PL. 61、120)

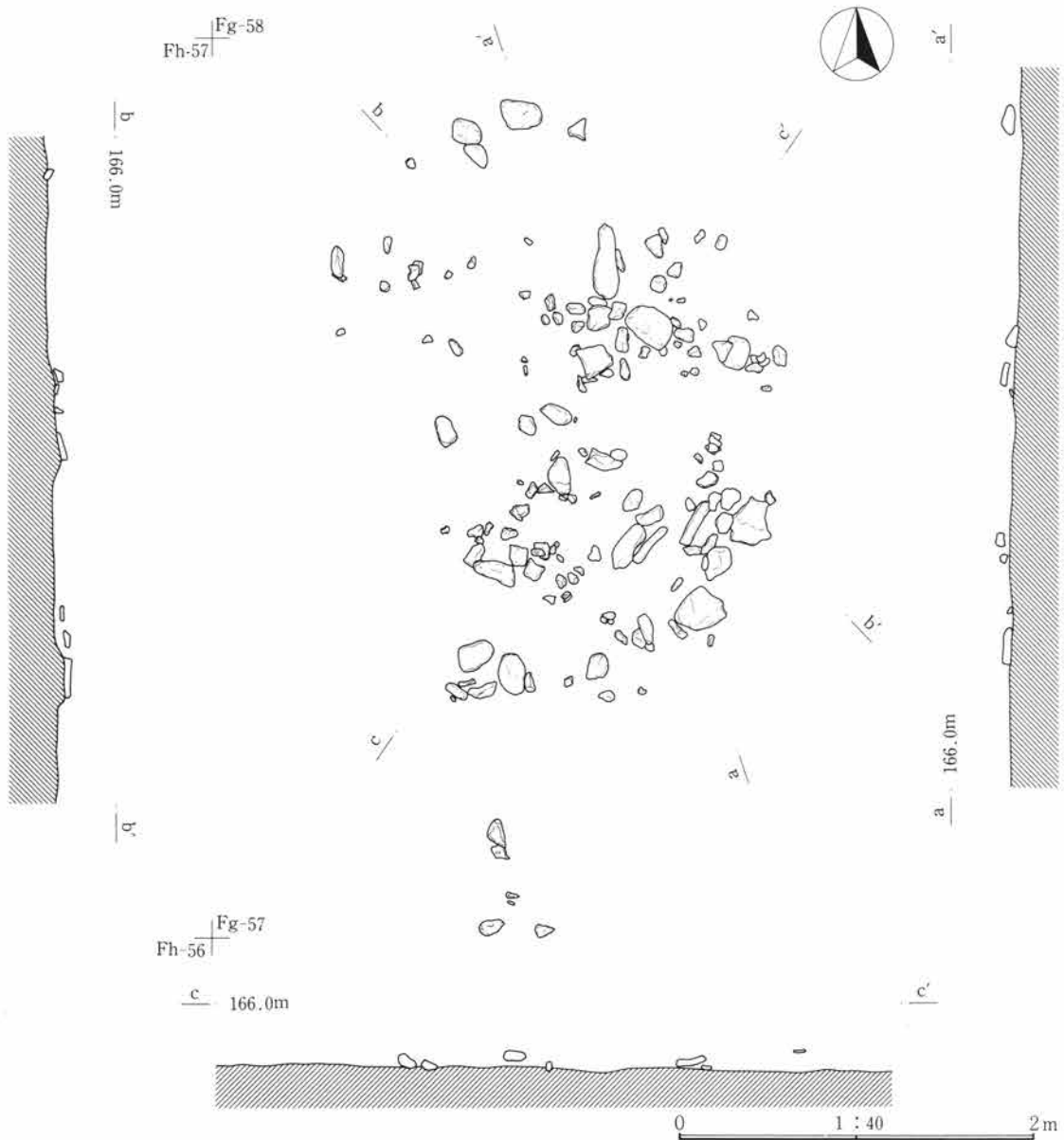
位置 Fg-57グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北東49m50cm (遺構の中心までの距離)、17号配石遺構の南西12mの所に位置している。また北東方向 3m50cmの所に風倒木がある。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。11月上旬に遺構の図面作成、下旬から遺物取り上げ作業を実施。遺物取り上げ後は、下部に遺構があるかどうかの確認調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

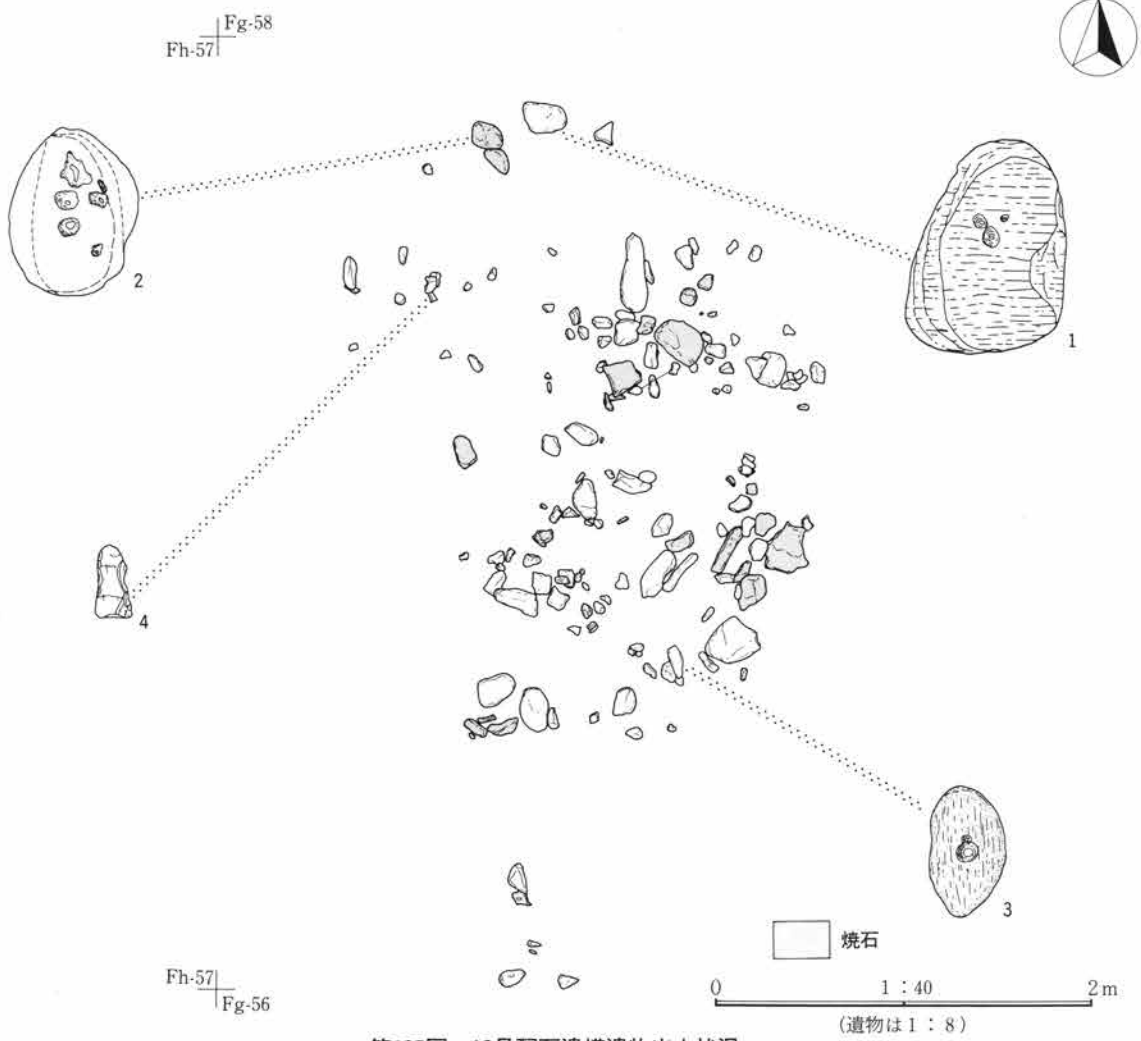
形状・配石状況 ほぼ半円状に配石が認められる。その規模は長径 3m40cm、短径 2mである。石の分布密度



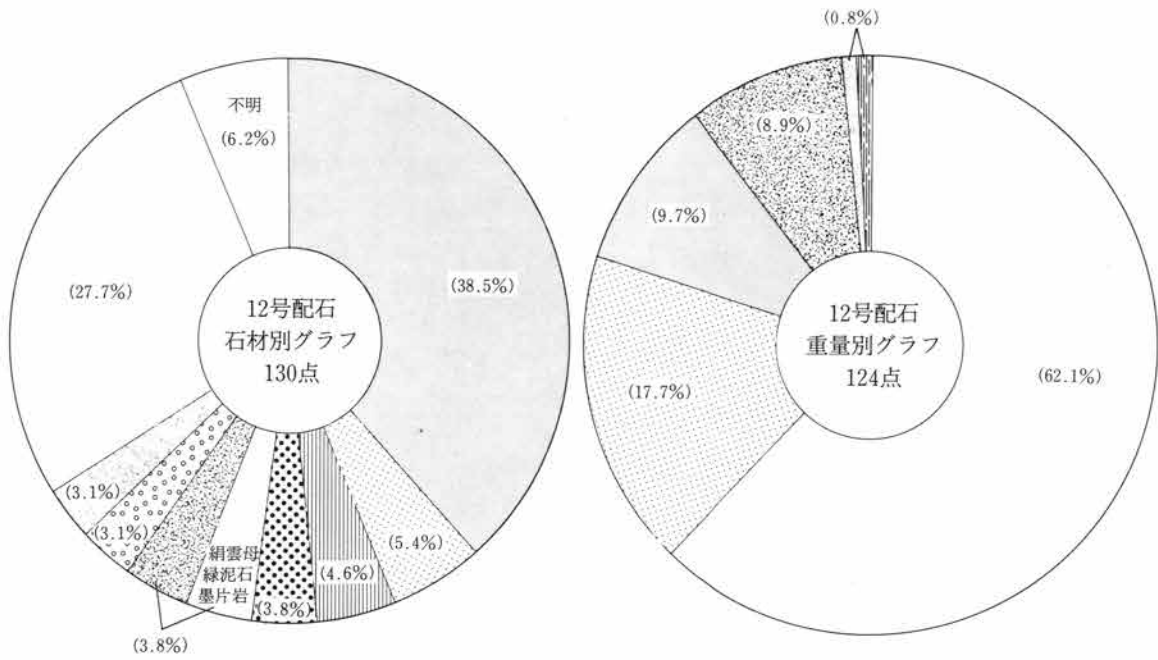
第184図 12号配石遺構

は他の配石遺構よりも高い。130点の石と18点の土器片から構成されていた。配石の面積は約7.3m²である。
使用石材 28種類の石材が認められた。130点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩50点 (38.5%)、点紋緑泥片岩7点 (5.4%)、輝岩6点 (4.6%)、輝緑岩・絹雲母緑泥石墨片岩・緑泥片岩各5点 (各3.8%)、絹雲母緑泥片岩・砂岩各4点 (各3.1%)、斑斨岩・絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩各3点 (各2.3%)、点紋石墨緑泥片岩・石墨片岩・輝緑凝灰岩・絹雲母脆雲母片岩・脆雲母石墨片岩・赤色珪質板岩各2点 (各1.5%)、点紋絹雲母石墨片岩・滑石片岩・チャート・点紋絹雲母緑泥石墨片岩・角閃岩・緑色珪質板岩・変斑斨岩・閃輝緑岩・珪石各1点 (各0.8%) であり、不明は8点 (6.2%) を数えた。不明の石を除いた122点中91点 (74.6%) の石が片岩類である。

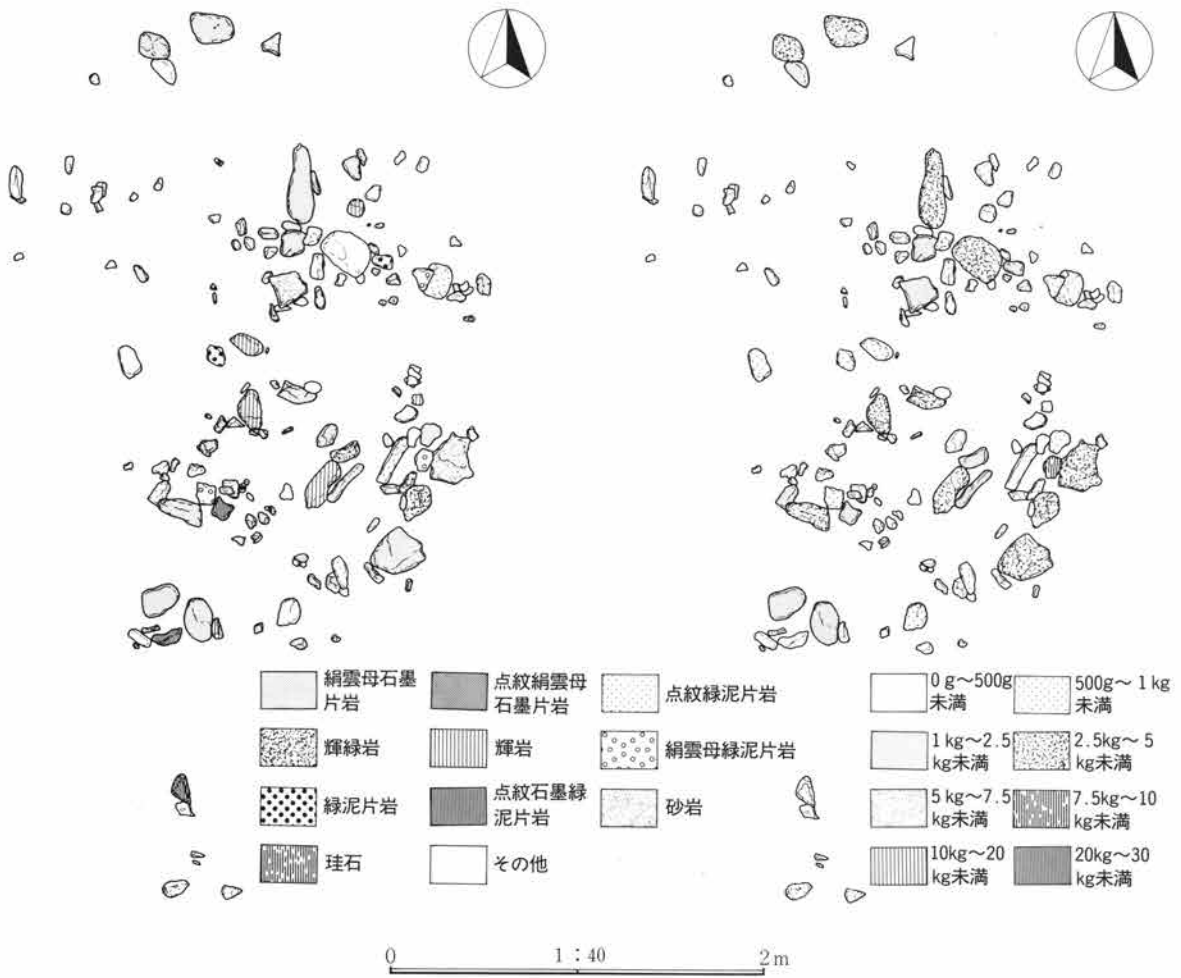
石材重量 重量の判明している石は124点である。その内訳は、500g未満の石77点 (62.1%)、500g～1kg未満の石22点 (17.7%)、1kg～2.5kg未満の石12点 (9.7%)、2.5kg～5kg未満の石11点 (8.9%)、5kg～7.5kg未満の石1点 (0.8%)、7.5kg～10kg未満の石1点 (0.8%) である。



第185図 12号配石遺構遺物出土状況



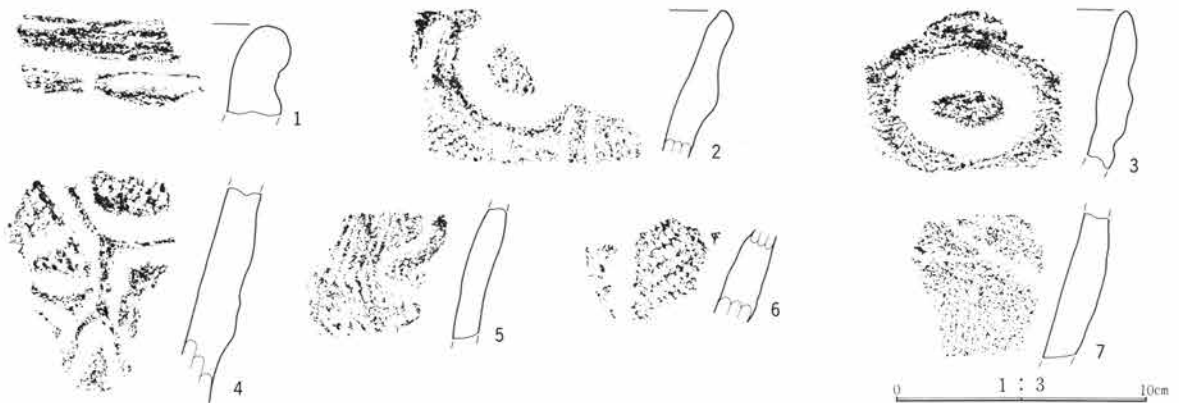
第186図 12号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



第187図 12号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布

遺物出土状況 18点の土器片が出土している。その部位別点数は口縁部3点、胴部15点であり、配石とともに出土している。加曾利E3式土器を主体としていた。石器では配石遺構北端から多孔石2点が出土している。このほかに凹石1点が南端から、打製石斧1点も出土している。配石中の石器含有率は3.1%である。また焼石は130点中24点の出土で、18.5%を占めている。焼石の比率は他の配石遺構よりも高い。

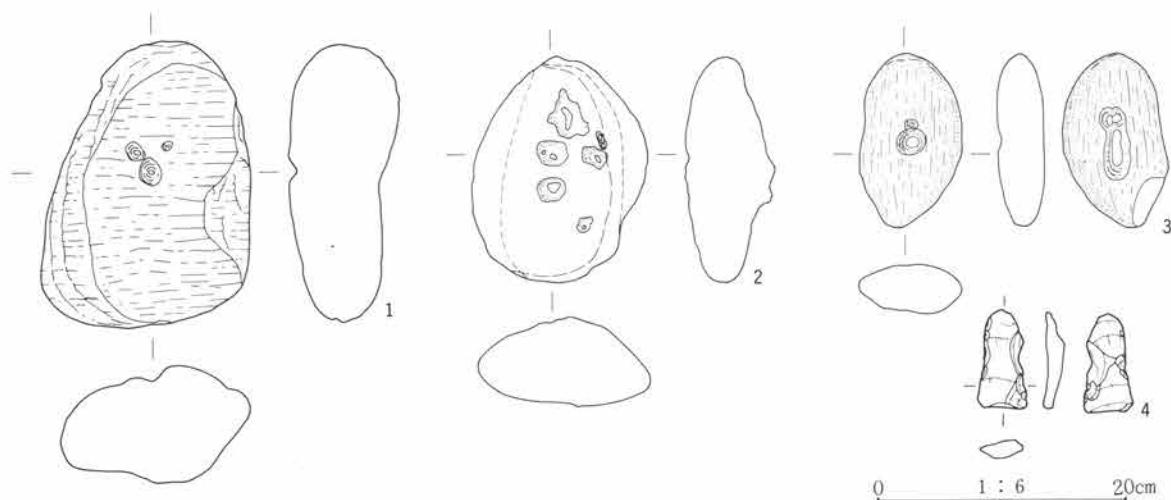
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第188図 12号配石遺構出土土器

12号配石遺構土器観察表

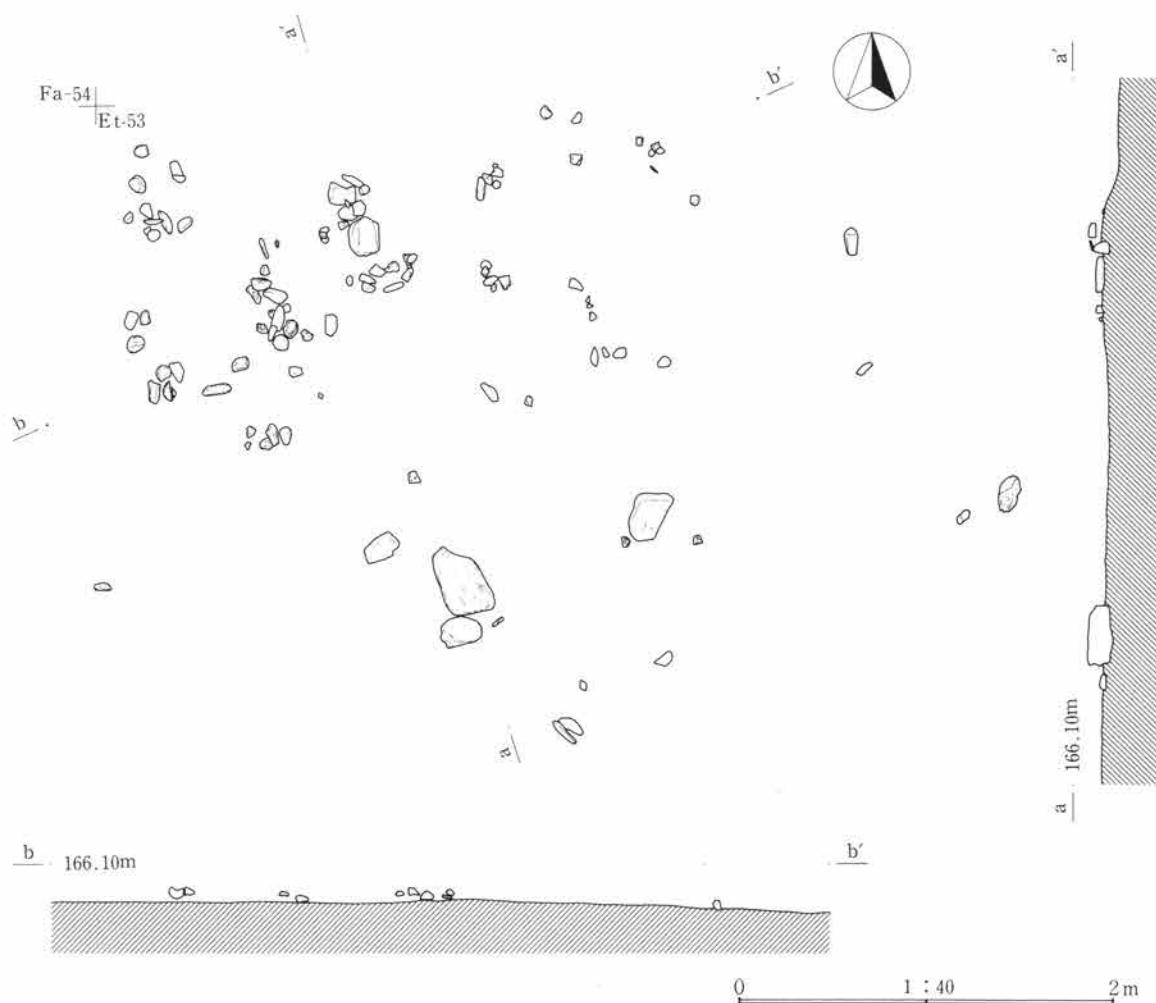
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|---|--|-------|
| 188-1 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚19mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らす。 | 配石北東部 |
| 188-2 120 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は赤褐色。 | 波状口縁部片。沈線による渦巻文を描き、 以下、縄文施文。原体R(1)縦転がし。 | 配石東部 |
| 188-3 120 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は赤褐色。 | 波状口縁部片。沈線による楕円文等を描く。 | 配石北東部 |
| 188-4 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~18mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 隆帯による区画内に縄文施文。原体はR(1)横転がし。 | 配石南部 |
| 188-5 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(1)。 蛇行沈線を垂下。 | 一括 |
| 188-6 120 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 沈線を垂下。 | 一括 |
| 188-7 120 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 細い条線を施している。 | 配石中心部 |



第189図 12号配石遺構出土石器

12号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|--------------|------|-----|-------|--|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 189-1 120 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 22.5 | 16.8 | 9.2 | 4,350 | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短18mm、深7mm。最小は長9mm、短6mm、深2mmで、平均は長16mm、短12mm、深5mm。 | 配石北端 |
| 189-2 120 | 多孔石 | ほぼ完形 | 玢岩 | 17.9 | 14.0 | 7.0 | 2,500 | 片面に7個の凹み。最大の凹みは長40mm、短22mm、深2mm。最小は長7mm、短7mm、深1mmで、平均は長20mm、短15mm、深2mm。2/3位被熱。 | 配石北端 |
| 189-3 120 | 凹石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 13.8 | 8.2 | 4.0 | 700 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長40mm、短20mm、深2mm。最小は長10mm、短7mm、深1mmで、平均は長21mm、短14mm、深2mm。 | 配石南端 |
| 189-4 120 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 熱変成岩 | (7.3) | 4.0 | 1.8 | (50) | バチ (II a)。縦長の剥片を素材とする。 | 配石西端 |



第190図 14号配石遺構

14号配石遺構（第190～196図、PL. 62、120）

位置 Et-53グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東49m50cmの所に位置し（遺構の中心までの距離）、2号土壌が南西方向に接して存在している。

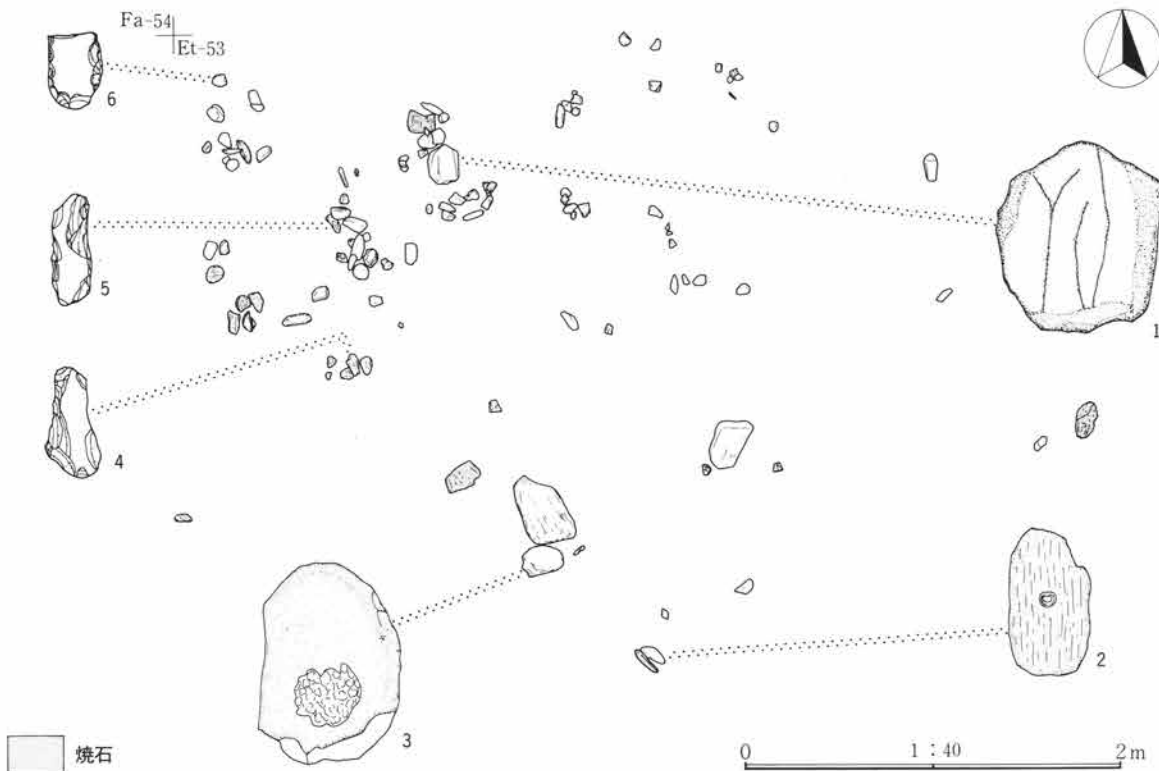
経過 I区（昭和61年度調査区）から検出。9月上旬に遺構を確認し、写真撮影、実測作業を行い、遺物取り上げを実施した。遺物取り上げ後は下部調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

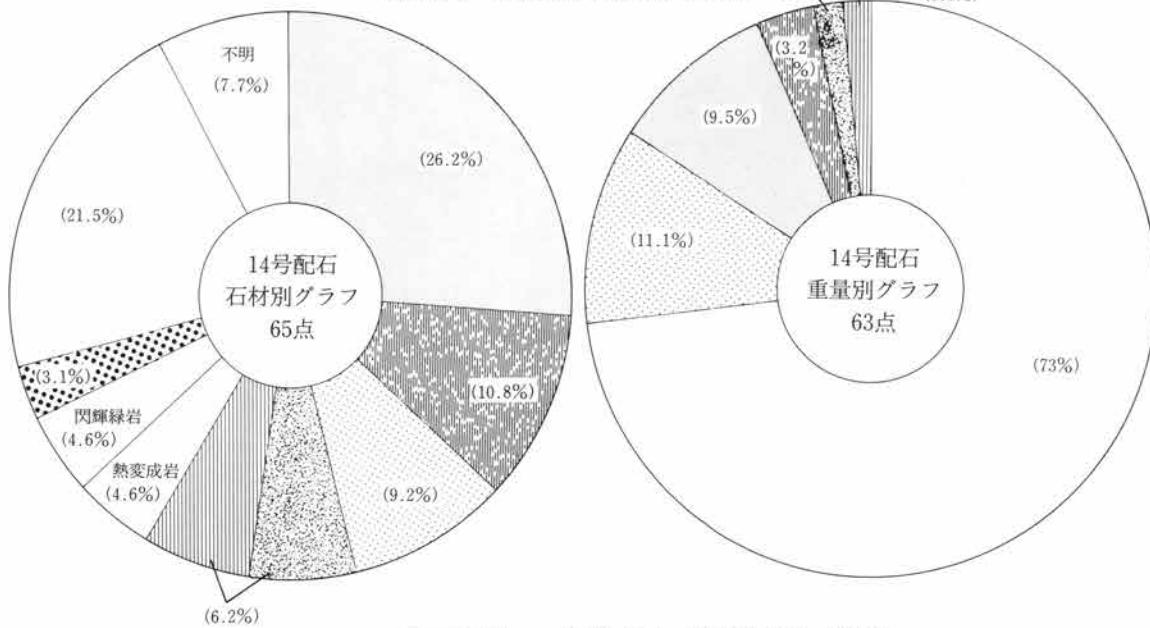
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m、短径3mの範囲に石が散在しているが、遺構の西部分の長径1m80cm、短径1m70cmの範囲は石の分布密度が高い。65点の石と41点の土器片から構成されていた。配石の面積は約10.9㎡である。

使用石材 21種類の石材が確認された。65点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩17点(26.2%)、珪石7点(10.8%)、点紋緑泥片岩6点(9.2%)、輝緑岩・輝岩各4点(各6.2%)、熱変成岩・閃輝緑岩各3点(各4.6%)、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各2点(各3.1%)、絹雲母緑泥石片岩・斑斨岩・安山岩・点紋石墨緑泥片岩・紅簾絹雲母片岩・角閃岩・砂岩・石英閃緑岩・変斑斨岩・紅簾絹雲母石墨片岩・絹雲母脆雲母片岩・珪岩各



第191図 14号配石遺構遺物出土状況 (遺物は1:8)



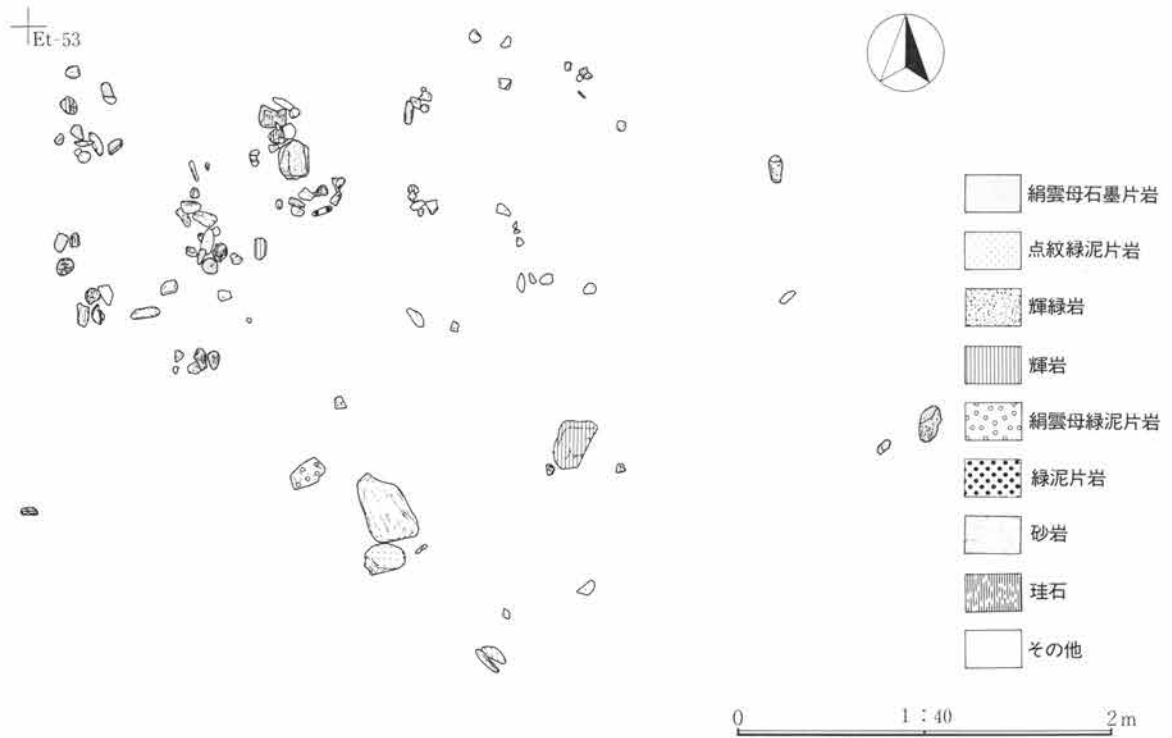
第192図 14号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

1点 (各1.5%) であり、不明は5点 (7.7%) を数えた。不明の石を除いた60点中32点 (53.3%) の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は63点である。その内訳は、500g未満の石46点 (73%)、500g～1kg未満の石7点 (11.1%)、1kg～2.5kg未満の石6点 (9.5%)、7.5kg～10kg未満の石2点 (3.2%)、2.5kg～5kg未満の石1点 (1.6%)、10kg～20kg未満の石1点 (1.6%) である。

遺物出土状況 41点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部14点、胴部26点、底部1点であり

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



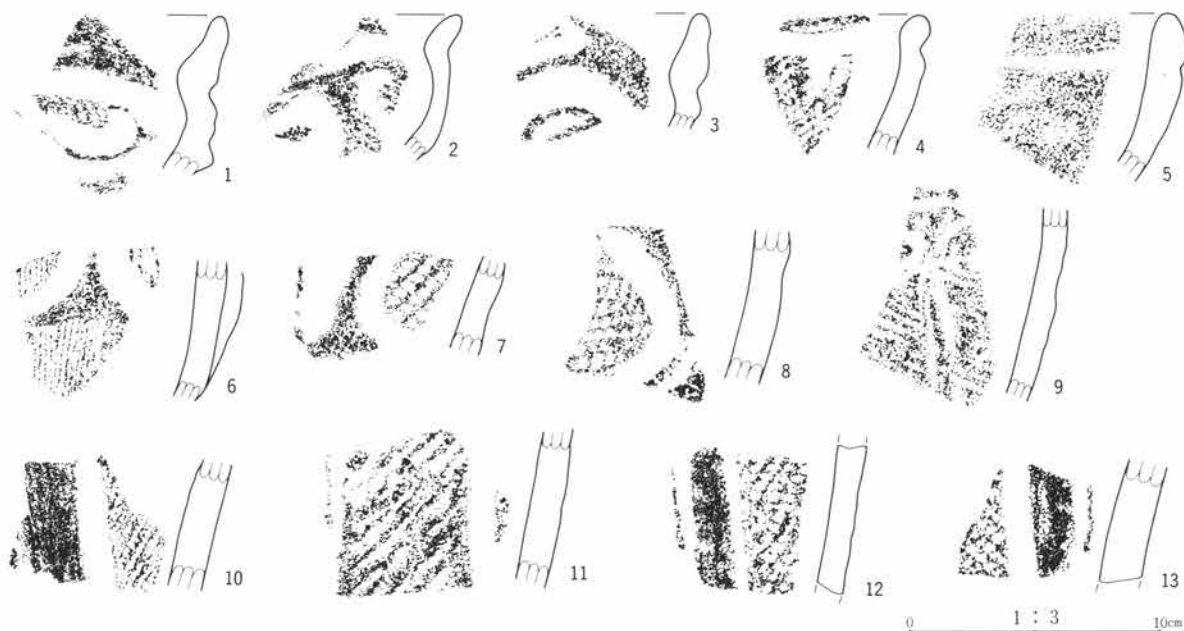
第193図 14号配石遺構石材別分布



第194図 14号配石遺構重量別分布

配石とともに出土している。加曾利E3式土器を主体としていた。石器では石皿1点が配石遺構の中心部から、凹石1点、台石1点が配石遺構南端から、打製石斧3点は配石遺構の中心部付近から出土している。配石中の石器含有率は9.2%である。また焼石は65点中9点の出土で、13.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第195図 14号配石遺構出土土器

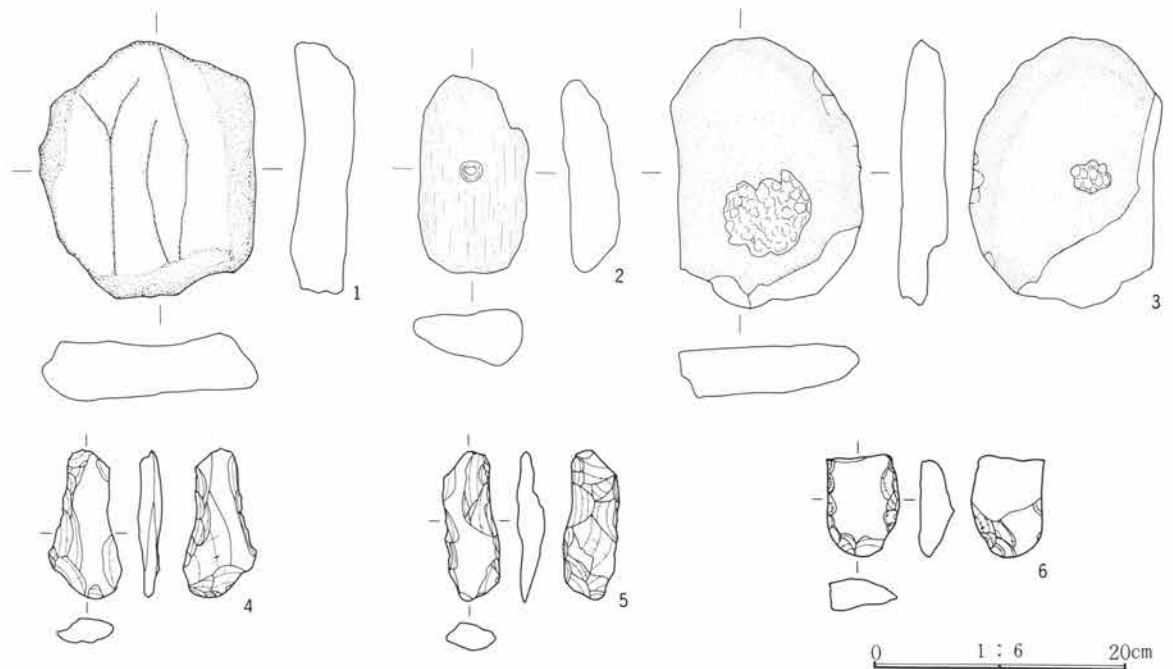
14号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|--|--|-------|
| 195-1 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は褐色。 | 波状口縁部片。沈線による渦巻文が描かれて いる。地文に縄文施文。原体はR(↑)横転 がし。 | 配石北西部 |
| 195-2 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は明赤褐色。 | 波状口縁部片。沈線による渦巻文等を描く。 地文に縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 | 配石西部 |
| 195-3 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は黒褐色。 | 波状口縁部片。沈線による渦巻文等を描く。 | 配石南東部 |
| 195-4 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下、縄文 施文。原体はL(↑)袋。土器面は柔軟。 | 配石東部 |
| 195-5 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下、縄文 施文。磨滅しているため原体は不明。 | 配石北東部 |
| 195-6 120 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。 | 隆帯及び沈線で文様を描き、区画内には条 線を施している。 | 配石南西部 |
| 195-7 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線で楕円を描き、地文に縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | 配石中心部 |
| 195-8 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい橙色。 | 隆帯及び沈線による楕円を描き、地文に縄 文施文。原体はL(↑)袋縦転がし。 | 配石中心部 |
| 195-9 120 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 口縁部に沈線を1条巡らす。胴部にも沈線 で文様を描き、地文に縄文施文。 原体はR(↑)縦転がし。 | 配石東部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

14号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|--|-------|
| 195-10 120 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南西部 |
| 195-11 120 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はにぶい黄橙色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北西部 |
| 195-12 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石北西部 |
| 195-13 120 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL(上)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西部 |



第196図 14号配石遺構出土石器

14号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|--------|--------------|------|-----|---------|----------------------------------|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 196-1 120 | 石 皿 | 完形 | 砂岩 | 20.4 | 17.2 | 4.6 | 2,200 | 石皿であり、また砥石として使用されたもの。 | 配石中央部 |
| 196-2 120 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 15.9 | 8.9 | 4.5 | 800 | 片面に1個の凹みがある。長径18mm、短径16mm、深さ4mm。 | 配石南端 |
| 196-3 120 | 台 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (21.5) | 15.4 | 3.7 | (2,100) | 偏平な石の両面に集合打痕がある。 | 配石南端 |
| 196-4 120 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 11.8 | 5.8 | 1.9 | 130 | バチ (II a)。刃部が軸に対し斜めに傾く。 | 配石中央部 |
| 196-5 120 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 11.9 | 4.5 | 2.2 | 115 | バチ (II a)。1側のみ内湾。 | 配石中央部 |
| 196-6 120 | 打製石斧 | 基部欠損 | 斑禿岩 | (8.1) | 5.8 | 2.8 | (193) | 短冊 (III?)。片面がほとんど未加工の未成品か。 | 配石北西部 |

15号配石遺構 (第197~199図、PL. 62、120)

位置 Fc・Fd-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東31m50cm (遺構の中心までの距離)、4号配石遺構の東7mの所に位置している。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。11月上旬に遺構の写真撮影を実施。土器片の出土はなく、小規

模な配石遺構である。下部には土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

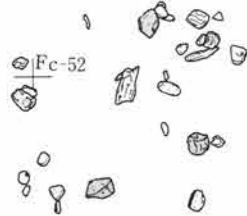
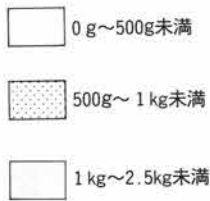
形状・配石状況 長径1m40cm、短径1m20cmの範囲に石が集中している。配石の面積は約1.5㎡である。

使用石材 14種類の石材が確認された。27点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩12点(44.4%)、輝緑岩2点(7.4%)、輝岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・赤色珪質板岩・斑斨岩・石墨絹雲母片岩・石墨片岩・紅簾絹雲母片岩・砂岩・緑色珪質板岩・閃輝緑岩・珪石各1点(各3.7%)で、不明は1点(3.7%)。65.4%が片岩類。

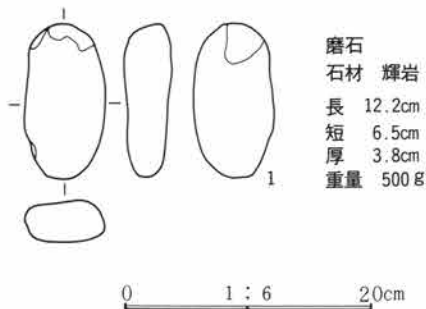
石材重量 27点の重量別点数は、500g未満の石20点(74.1%)、500g～1kg未満の石4点(14.8%)、1kg～2.5kg未満の石3点(11.1%)である。

遺物出土状況 縄文土器の出土はないが、石器として磨石1点が出土している。石器の含有率は3.7%。また焼石は1点の出土で、3.7%を占めている。

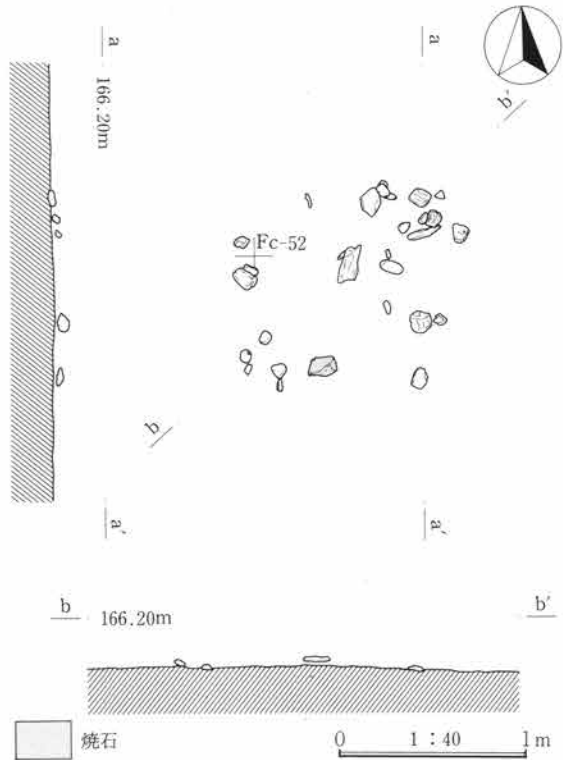
所見 縄文時代の磨石が出土し、また周辺からは加曾利E3式土器片も出土している。当遺構は縄文時代中期末の配石遺構であろう。



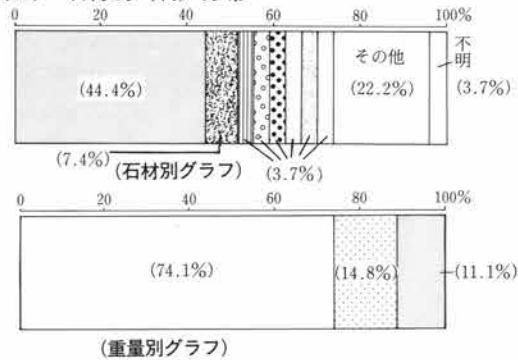
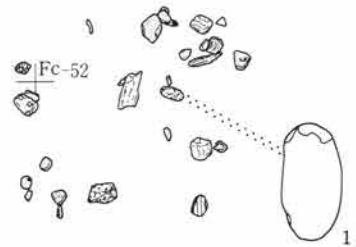
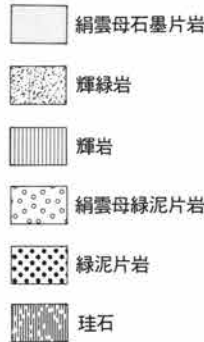
第198図 15号配石遺構 重量別(左)・石材別(右)分布

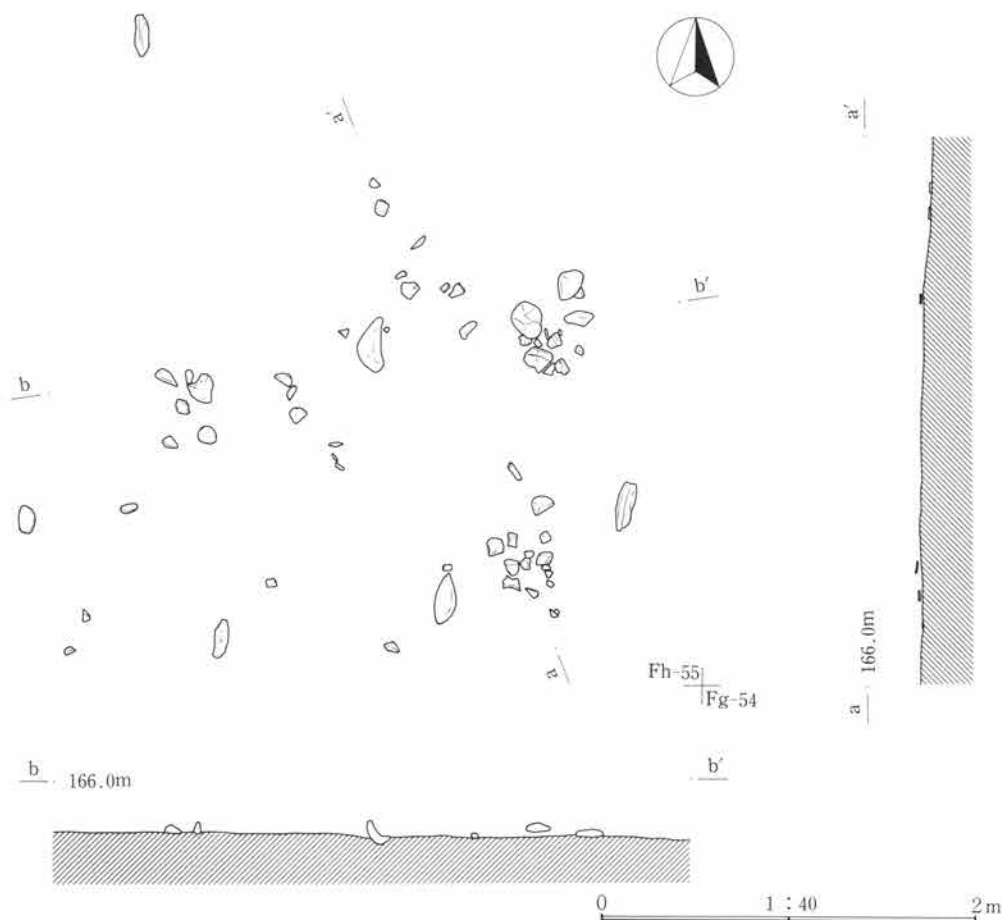


第199図 15号配石遺構出土石器



第197図 15号配石遺構





第200図 16号配石遺構

16号配石遺構 (第200～206図、PL. 63、121)

位置 Fh-55グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北37m70cm(遺構の中心までの距離)、9号配石遺構の東南4mの所に位置している。

経過 1区(昭和61年度調査区)から検出。62年3月になって遺構を検出した。3月9日に写真撮影、翌日に実測作業を実施した。遺物の取り上げ後は下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

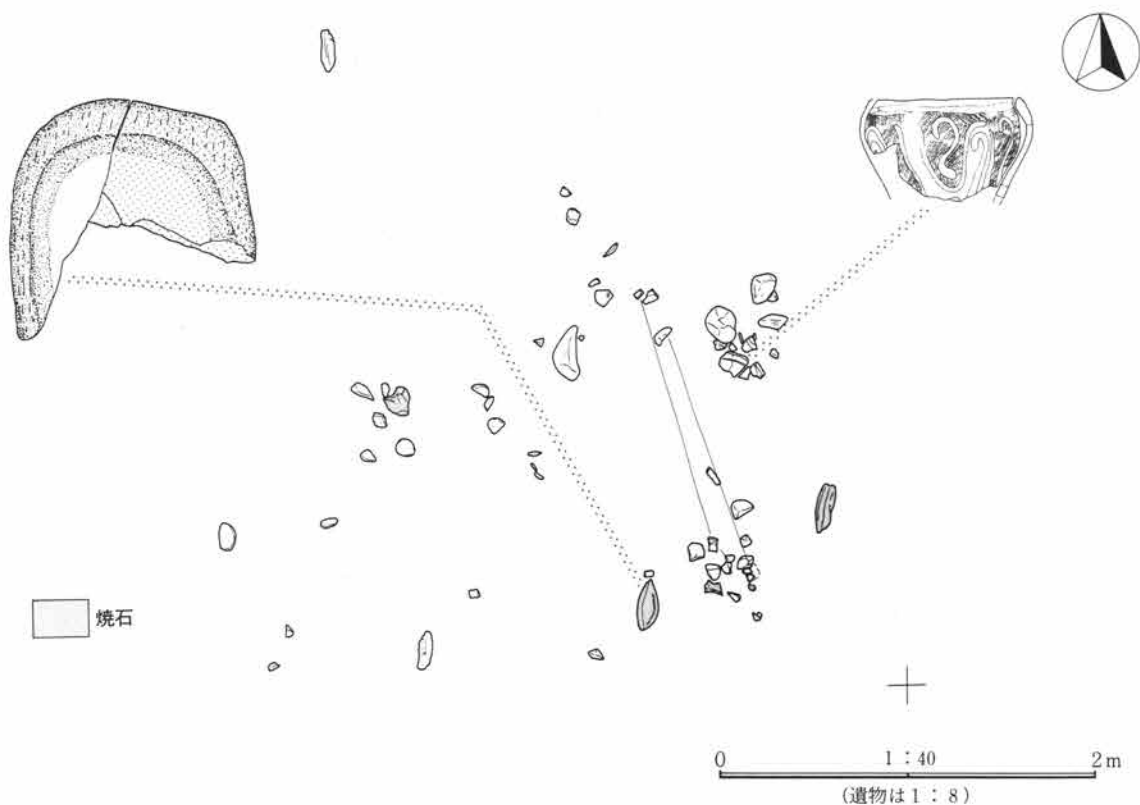
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m、短径2mの範囲に石が配置されている。41点の石と23点の土器片から構成されている。配石の面積は約6.4㎡である。

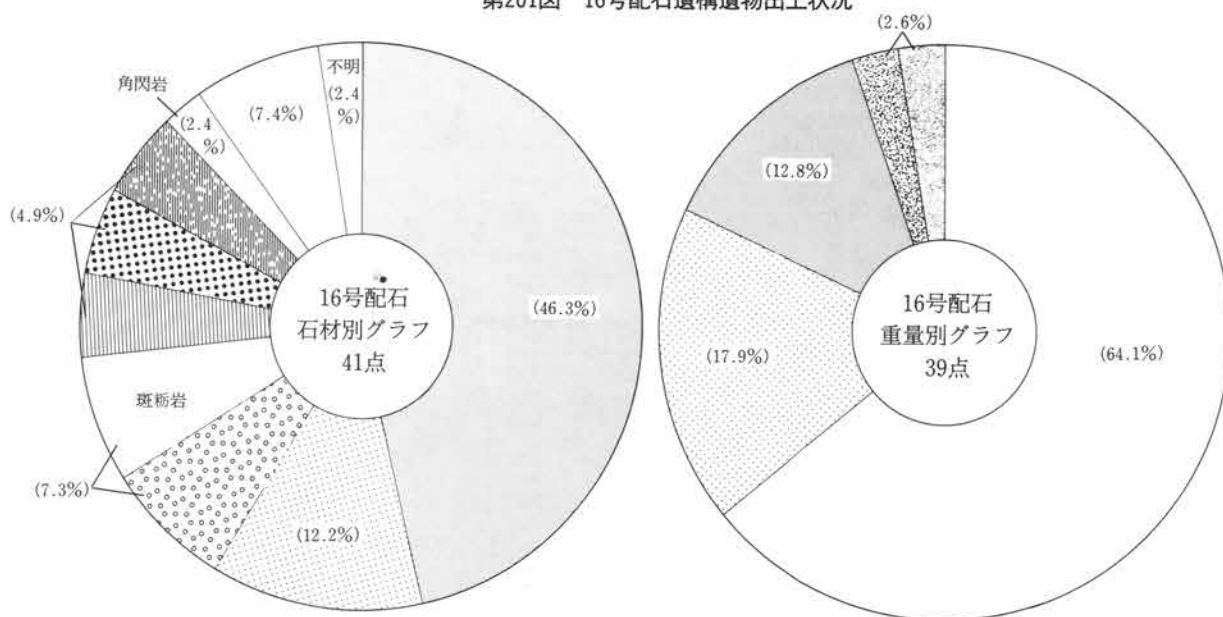
使用石材 11種類の石材が確認された。41点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩19点(46.3%)、点紋緑泥片岩5点(12.2%)、絹雲母緑泥片岩・斑斨岩各3点(各7.3%)、輝岩・緑泥片岩・珪石各2点(各4.9%)、紅簾絹雲母片岩・角閃岩・点紋絹雲母緑泥片岩・変斑斨岩各1点(各2.4%)であり、不明は1点(2.4%)を数えた。不明の石を除いた40点中31点(77.5%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は39点である。その内訳は、500g未満の石25点(64.1%)、500g～1kg未満の石7点(17.9%)、1kg～2.5kg未満の石5点(12.8%)、2.5kg～5kg未満の石1点(2.6%)、5kg～7.5kg未満の石1点(2.6%)である。

遺物出土状況 23点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部2点、胴部19点、底部2点である。



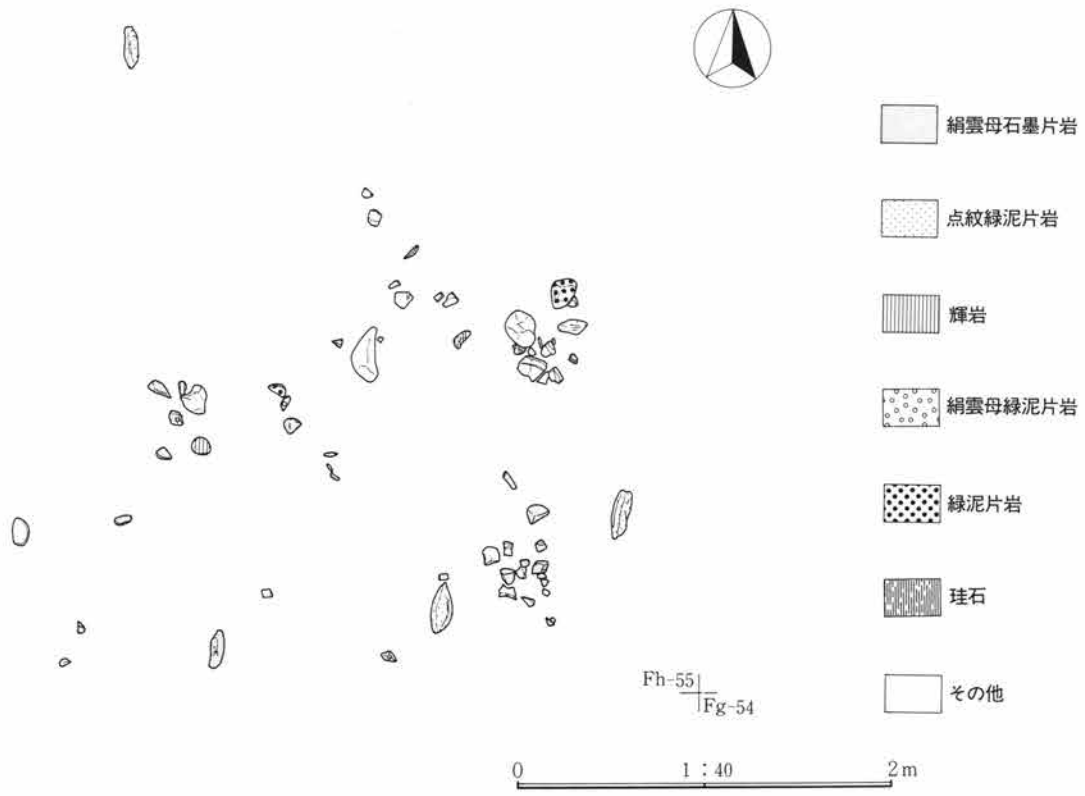
第201図 16号配石遺構遺物出土状況



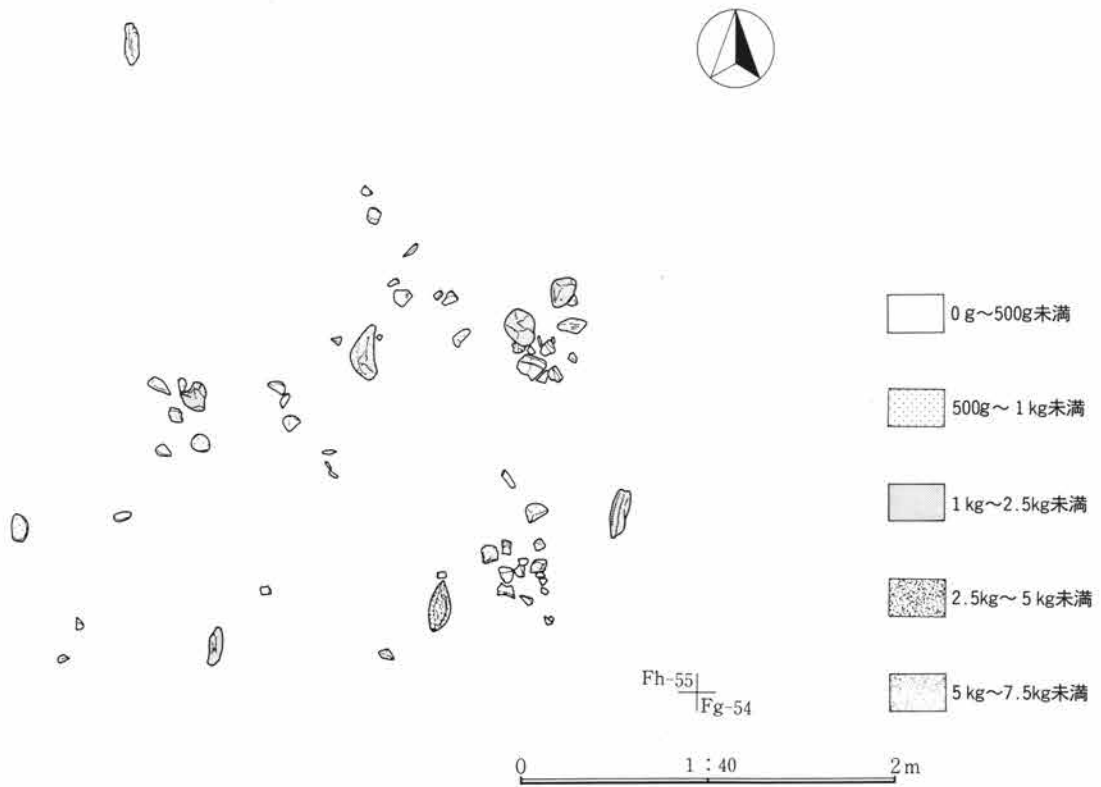
第202図 16号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

また小型深鉢の口縁部片が配石の北東部分から出土している。加曾利E 3式土器を主体に、E 4式土器片も少量含まれていた。石器では石皿の破片1点が出土。この石皿片は11号配石遺構出土の石皿と同一個体であり、接合関係を有している。また焼石は4点出土し9.8%を占める。

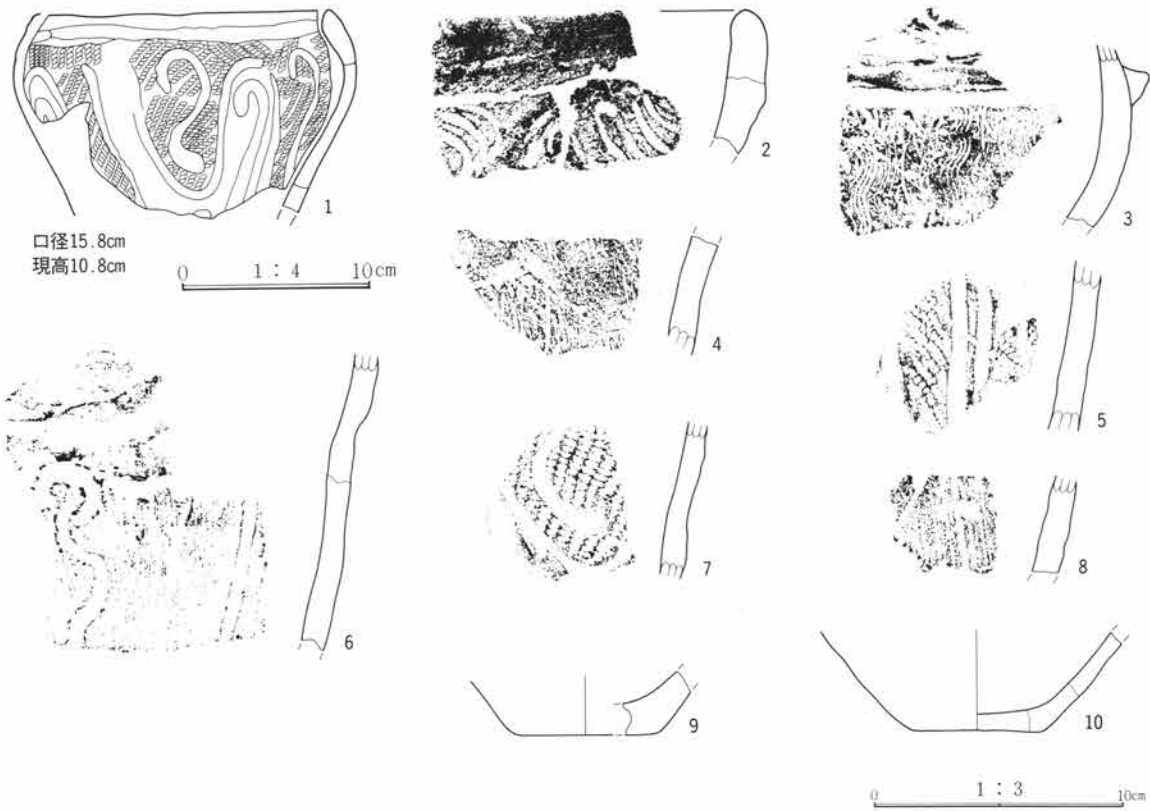
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 3式期の配石遺構である。11号配石遺構と同時期のものであろう。



第203図 16号配石遺構石材別分布



第204図 16号配石遺構重量別分布



第205図 16号配石遺構出土土器

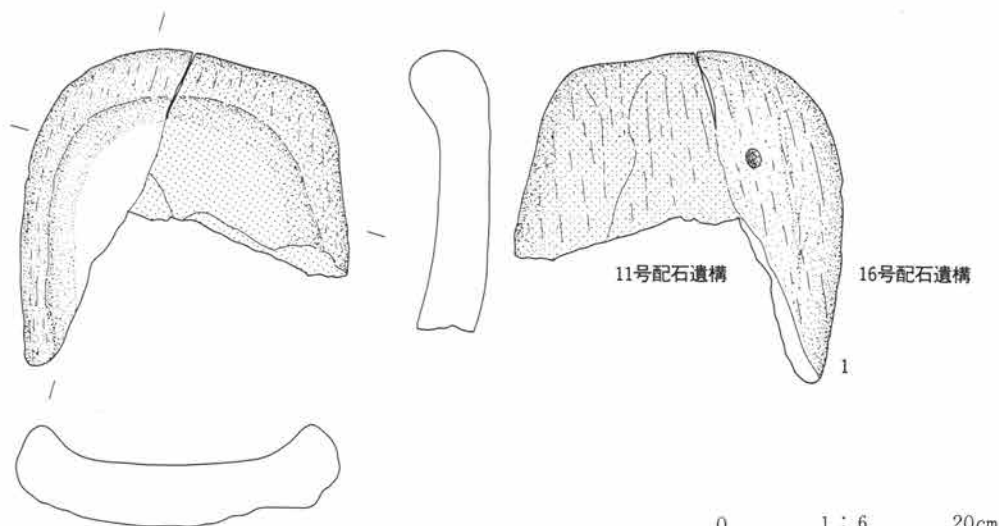
16号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|------------|-------------------|---|--|--------------|
| 205-1 121 | 口縁部～ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6～9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の幅広の沈線を巡らせる。胴部は沈線による波状文を施し、地文に縄文施文。原体はR(上横・縦位。蕨手状の沈線が施されている。外面に煤が付着している。 | 配石北東部 |
| 205-2 121 | 口縁部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部はやや内湾し、隆帯による区画を施す。区画内には沈線による文様を描く。 | 配石南東部 と北部 |
| 205-3 121 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰褐色。 | 隆帯を1条巡らし、以下細い条線を施す。 | 配石北部 |
| 205-4 121 | 胴部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰褐色。 | 条線を施す。 | 配石南東部 |
| 205-5 121 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL(長縦転がし。沈線を垂下。 土器面は柔軟。 | 配石北部 |
| 205-6 121 | 口縁部～ 胴部 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部～胴部。器厚10mm。 内面はミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部に沈線による楕円区画。胴部は条線を施し、蛇行沈線を垂下。 | 配石南東部 と北部 |
| 205-7 121 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。 | 地文に縄文施文。原体はR(上縦転がし。沈線による文様を描く。 | 配石北部 |
| 205-8 121 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は灰褐色。 | 条線を施す。 | 配石南部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

16号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|--------------|-------|
| 205-9 121 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径56mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | | 配石北東部 |
| 205-10 121 | 底部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径53mm。 内面はミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい黄橙色。 | 外面は荒れている。 | 配石北東部 |



第206図 16号配石遺構出土石器

16号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|----|------|--------|------------|------|-----|---------|---|-----------------------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 206-1 120 | 石皿 | 片 | 点紋緑泥片岩 | (25.2) | 26.5 | 8.1 | (4,700) | 楕円形で窪みが深く、湾曲している。裏面に多孔 石と同様の凹みが1個ある。長径13mm、短径11mm、 深さ3mm。 | 16号配石 と11号配 石から出 土 |

19号配石遺構 (第207～210図、PL. 83、121)

位置 Fi・Fj—56・57グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西49m(遺構の中心までの距離)、7号土壌に近接した所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。9月9日に遺構の写真撮影。3号屋外埋設土器は当遺構内から検出されている。遺物取り上げ後、下部調査を実施したが遺構は存在しなかった。当遺構は、調査過程では集石群として把握していたが、配石遺構と明確に分離することができないために、整理段階で配石遺構名称を使用。19号が欠番となっていたために、この番号を使用した。

重複 なし。3号屋外埋設土器が当遺構の南東隅に存在している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 路線外に遺構は続くものと考えられるが、現状での規模は長径8m、短径4m50cm程である。他の配石遺構と異なり、小さな石を無数に使用し、そして広範囲に配置している。この配石遺構の南東隅から石蓋を伴う加曽利E3式土器が伏せられた状態で出土した。配石の面積は約30.7㎡である。



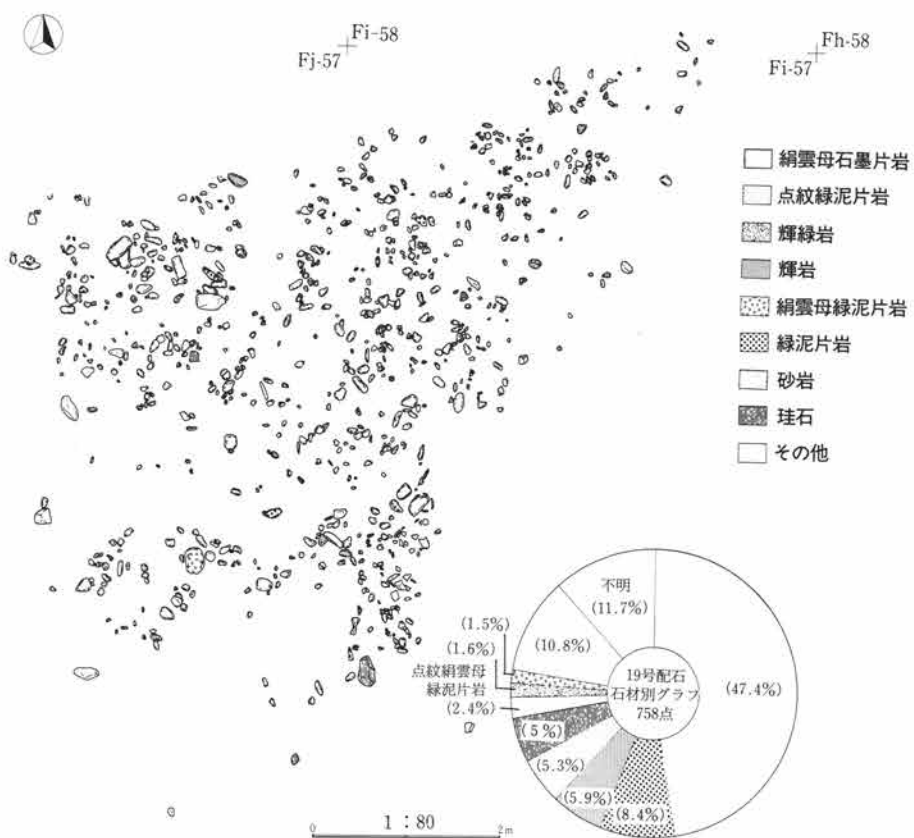
Fj-57 | Fi-58

Fi-57 | Fi-58

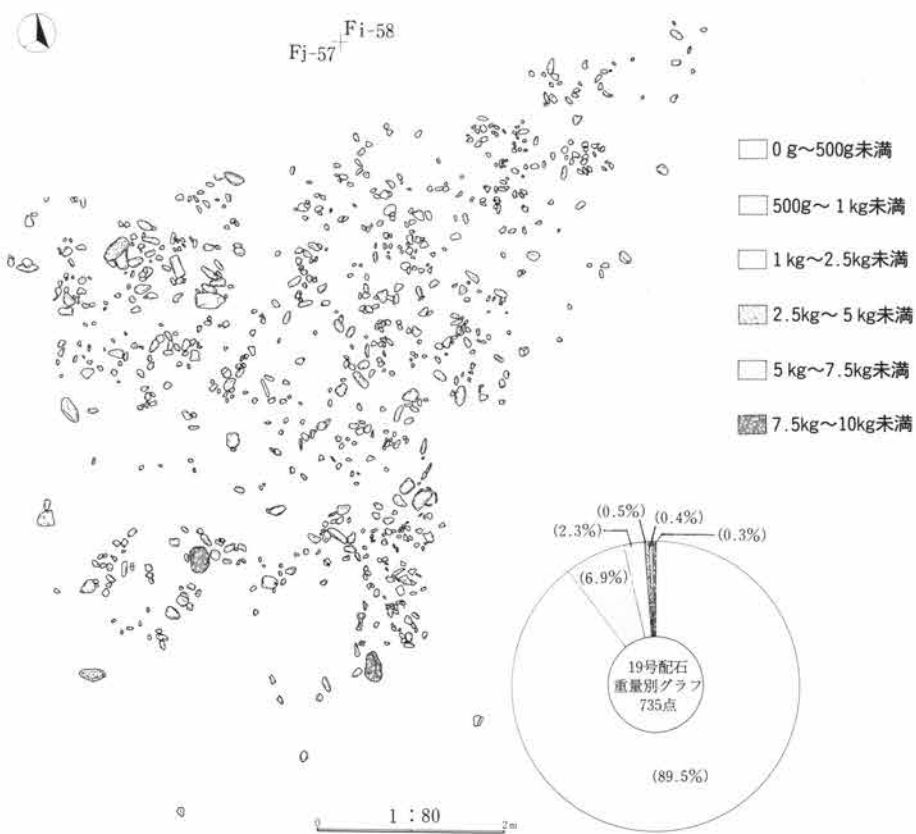
路線外



第207図 19号配石遺構



第208図 19号配石遺構石材別分布



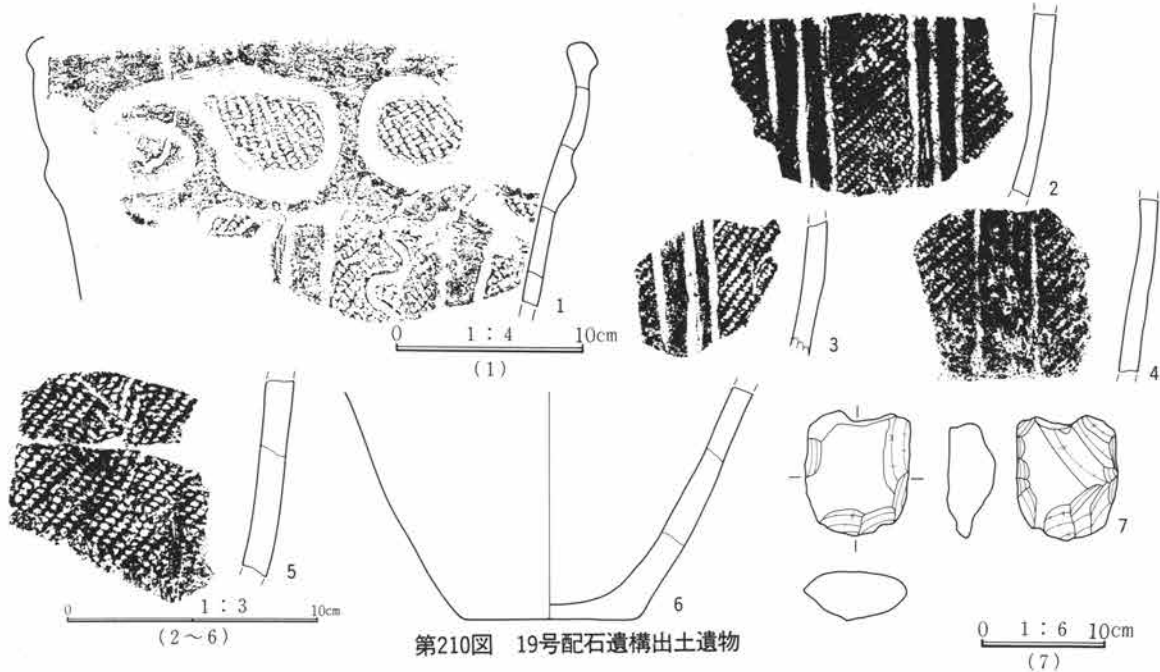
第209図 19号配石遺構重量別分布

使用石材 31種類の石材が確認された。758点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩359点(47.4%)、緑泥片岩64点(8.4%)、輝岩45点(5.9%)、点紋緑泥片岩40点(5.3%)、珪石38点(5%)、点紋絹雲母緑泥片岩18点(2.4%)、輝緑岩12点(1.6%)、絹雲母緑泥片岩11点(1.5%)、その他の石材は82点(10.8%)であり、不明は89点(11.7%)を数えた。不明の石を除いた669点中537点(80.3%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は735点である。その内訳は、500g未満の石658点(89.5%)、500g～1kg未満の石51点(6.9%)、1kg～2.5kg未満の石17点(2.3%)、2.5kg～5kg未満の石4点(0.5%)、5kg～7.5kg未満の石3点(0.4%)、10kg～20kg未満の石2点(0.3%)である。500g未満の石が実に90%ちかくを占めている。

遺物出土状況 屋外埋設土器1基と、この土器の周辺から口縁部1点、胴部29点の計30点の加曾利E3式土器を主体とした土器片が出土している。石器では磨製石斧の未製品1点が出土し、また焼石は758点中5点の出土で、0.7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第210図 19号配石遺構出土遺物

19号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|------|------------------|--|--|-------------|
| 210-1 121 | 口縁部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7～13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。 | 口縁部に隆帯及び沈線により渦巻き、楕円等が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR{↑横転がし。胴部は内部磨り消しとなる懸垂文と蛇行沈線をもちR{↑縦転がし。 | 3号屋外埋設土器に近接 |
| 210-2 121 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7～9mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。沈線を垂下。外面に煤が付着している。 | 一括 |
| 210-3 121 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐灰色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。沈線を垂下。外面に煤が付着している。 | 配石南部 |
| 210-4 121 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。沈線を垂下。外面に煤が付着している。 | 一括 |
| 210-5 121 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 | 配石南部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

19号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|--------------------|--|--------------|-------|
| 210-6 121 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径67mm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色。 | 沈線を垂下。 | 配石中心部 |

19号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|----|------|--------|------------|-----|-----|-------|------------------|------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 210-7 121 | | 一端欠損 | 輝岩 | (9.9) | 8.2 | 3.9 | (430) | 粗割り途中。内面に自然面を残す。 | 配石中央 部東 |

20号配石遺構 (第211～216図、PL. 65、121)

位置 Fl・Fm—48・49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西22m (遺構の中心までの距離)、列石から突出したかたちで存在している。7号配石遺構と同様に環状列石の一部を構成するものであろう。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。5月21日から21号配石遺構とともに調査を開始した。6月に入り遺構の写真撮影、図面の作成を実施したが、図面作成は7月までかかった。以後の調査は、当遺構が環状列石を構成する一部であることから、環状列石の調査とともに進めた。

重複 なし。環状列石の一部を構成している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

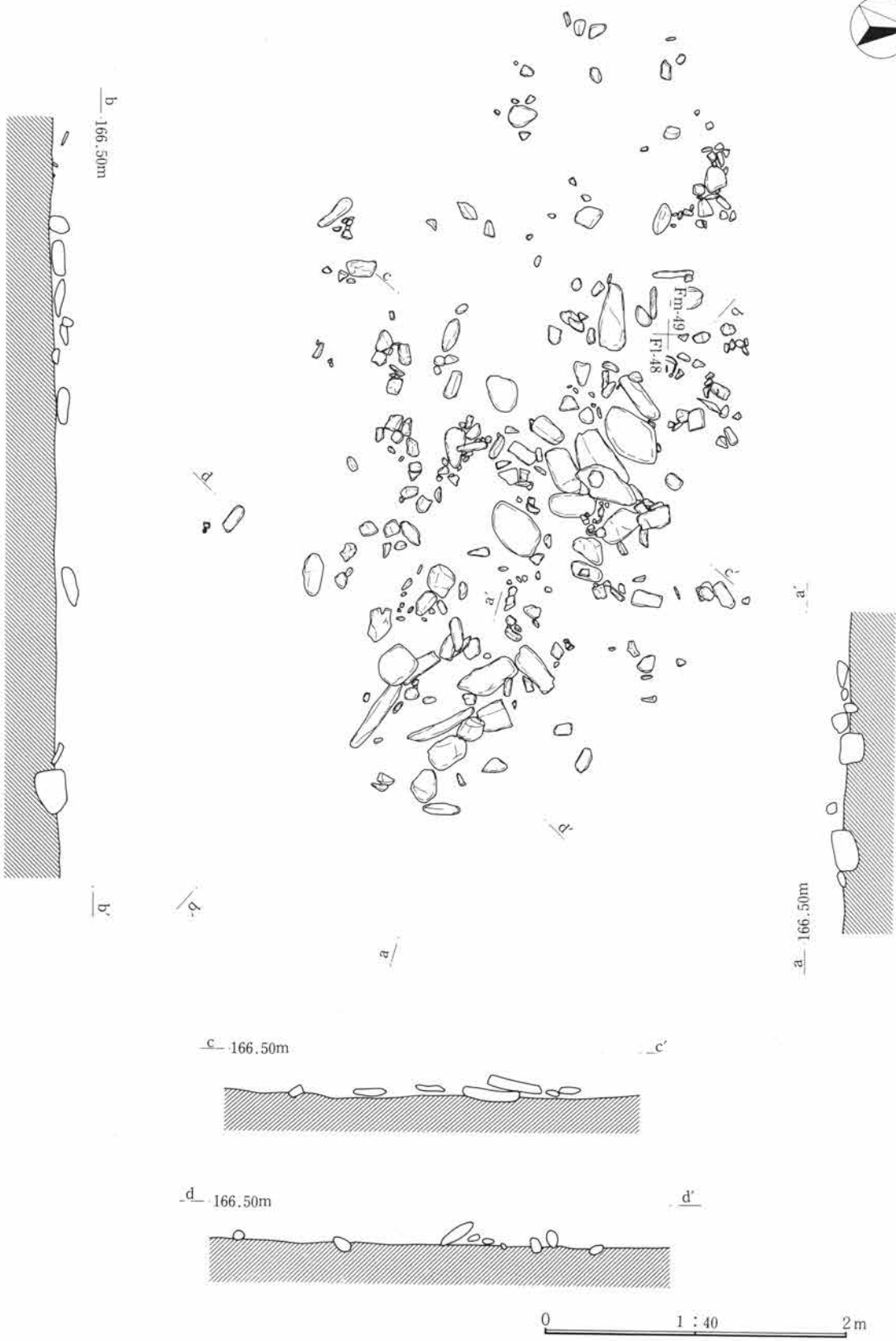
形状・配石状況 長径5m、短径2m30cmの範囲に石が配置されている。中心部にやや大きな石を使用しているが、列石内部に通じる通路のような役割を果たしていたものであろうか。配石の面積は約12.7㎡である。

使用石材 29種類の石材が確認された。244点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩79点 (32.4%)、点紋緑泥片岩24点 (9.8%)、輝緑岩18点 (7.4%)、点紋石墨緑泥片岩14点 (5.7%)、輝岩13点 (5.3%)、緑泥片岩13点 (5.3%)、石墨片岩6点 (2.5%)、珪石6点 (2.5%)、その他の石材71点 (21.7%) であり、不明は18点 (7.4%) を数えた。不明の石を除いた226点中169点 (74.8%) の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は233点である。その内訳は、500g未満の石126点 (54.1%)、500g～1kg未満の石40点 (17.2%)、1kg～2.5kg未満の石34点 (14.6%)、2.5kg～5kg未満の石14点 (6%)、10kg～20kg未満の石8点 (3.4%)、5kg～7.5kg未満の石7点 (3%)、7.5kg～10kg未満の石3点 (1.3%)、20kg～30kg未満の石1点 (0.4%) である。列石から北西に向かい、帯状に重量のある石が使用されている。

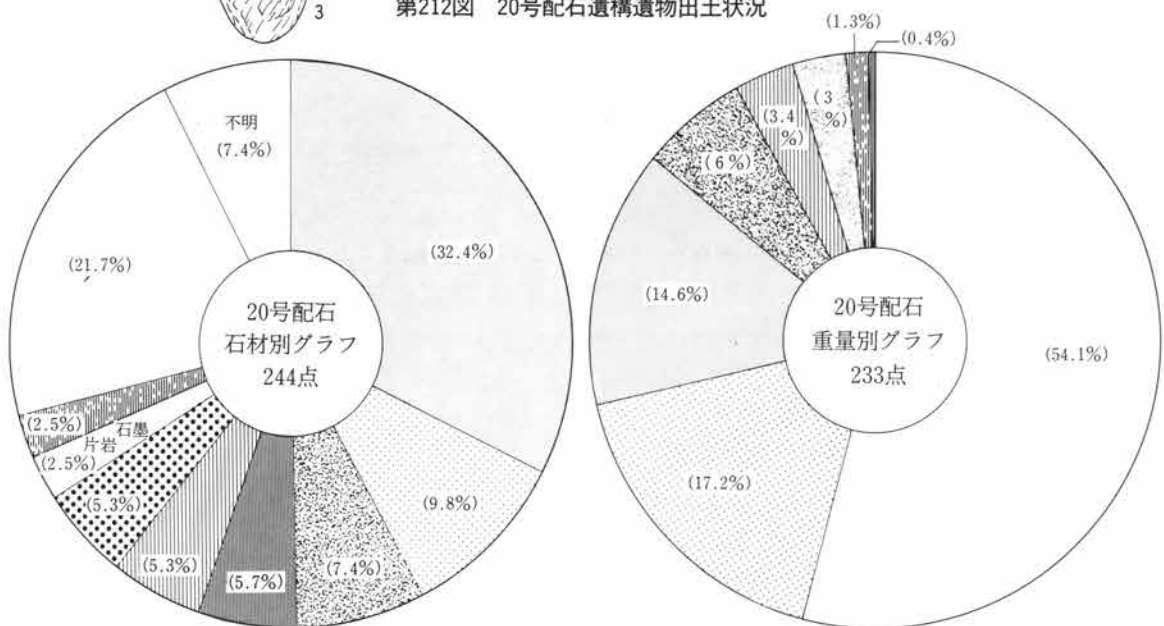
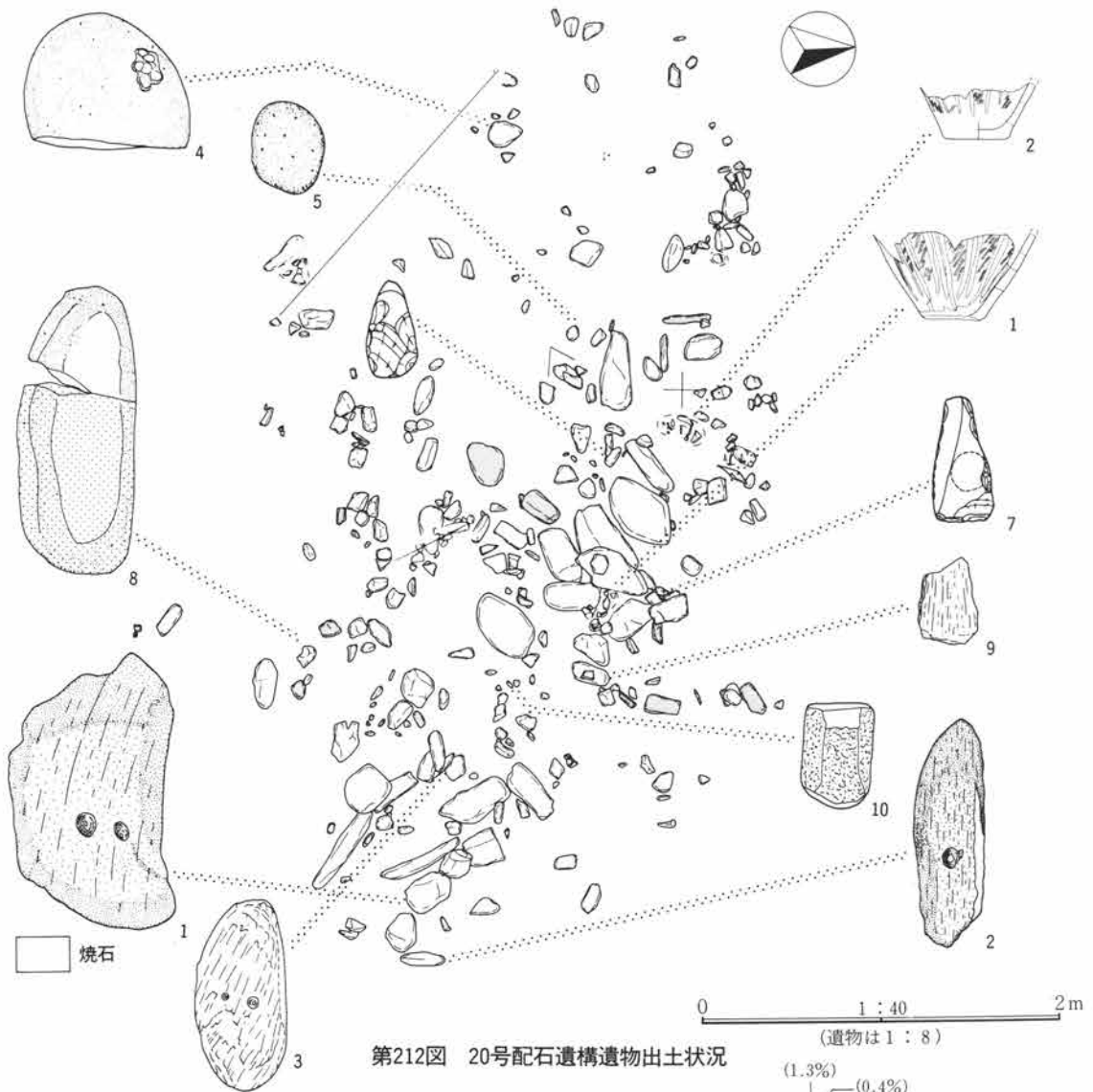
遺物出土状況 50点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部8点、胴部38点、底部4点であり、このうち底部1点は配石のほぼ中心部から出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も含まれていた。石器では多孔石3点、丸石1点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧1点が出土している。多孔石3点は列石近くから、また配石の南西端から丸石がそれぞれ出土し、磨石1点は24号配石遺構の磨石と接合関係があった。配石中の石器含有率は4.1%であり、また焼石は244点中15点の出土で、6.1%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構であり、環状列石の張出し部になるものと判断される。7号配石遺構と同様の遺構である。

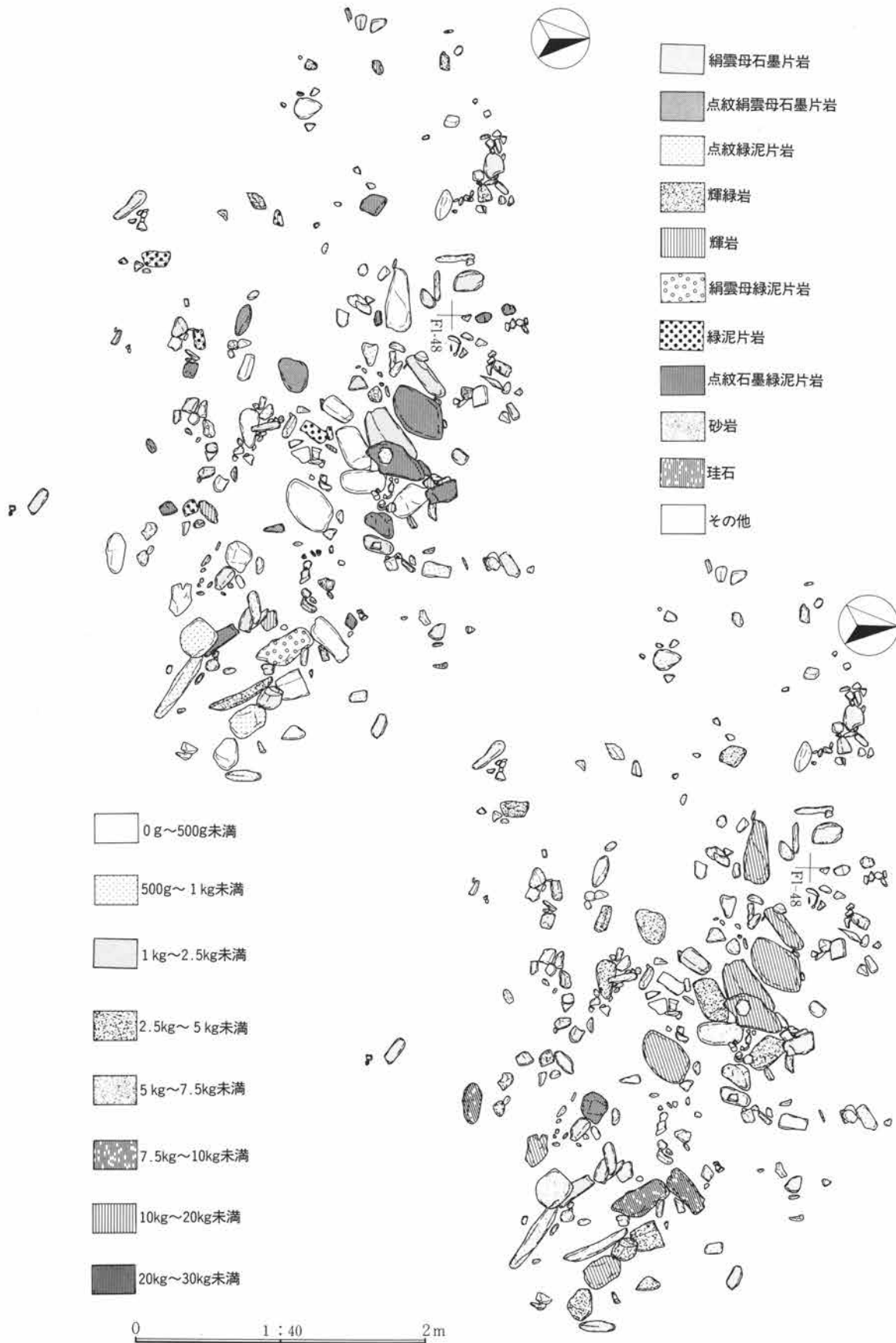


第211図 20号配石遺構

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第213図 20号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

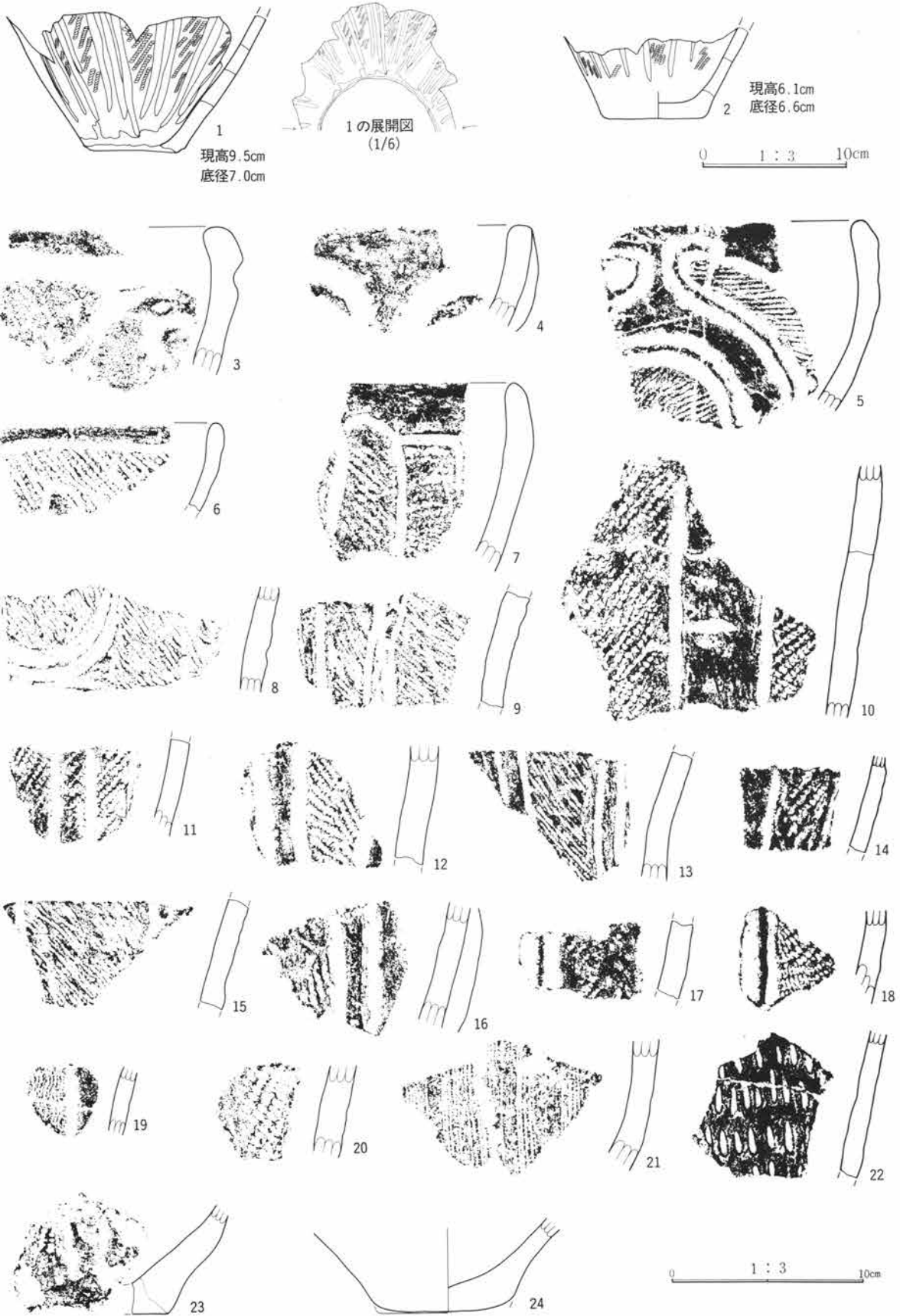


第214図 20号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

20号配石遺構土器観察表

| 図番 PL | 部位 | ①胎土 ②焼成（遺 存状況） | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様（その他） | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|--|--|-------------|
| 215-1 121 | 底部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部。器厚7~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 沈線を垂下。土器面は柔軟。 内面に炭化物が付着している。 | 配石中心部 |
| 215-2 121 | 底部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部。器厚8~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 沈線を垂下。底面に磨耗痕が認められる。 | 配石北西部 |
| 215-3 121 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 波状口縁部片。沈線による渦巻文等を描く。 区画内に縄文施文。原体はR{↑横転がし。 | 配石南部と 西部 |
| 215-4 121 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。 | 口縁部に隆帯及び沈線による文様が描かれる。 る。 | 配石南部 |
| 215-5 121 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部はやや内湾し、微隆起帯による文様 が描かれ、磨り消し及び縄文施文。 原体はL{↑長。外面に煤付着。 | 配石南部 |
| 215-6 121 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7~9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下縄文施 文。原体はR{↑縦転がし。太い条と細い条 を使用。外面に煤付着。 | 配石北部 |
| 215-7 121 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。 | やや内湾する口縁部片。沈線による「∩」 状の文様を描く。区画内に縄文施文。 原体はL{↑縦転がし。 | 配石南部 |
| 215-8 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい橙色。 | 微隆起帯と沈線による文様が描かれ、地文 に縄文施文。原体はL{↑縦転がし。土器面 は柔軟で、外面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 215-9 121 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい橙色。 | 地文に縄文施文。原体はL{↑長縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 215-10 121 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰黄色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟。 | 配石中心部 |
| 215-11 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 215-12 121 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{↑長（0段多 か？）縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北部 |
| 215-13 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 地文に縄文施文。原体はL{↑長縦転がし。 然り非常に細い。沈線を垂下。 外面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 215-14 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石北部 |
| 215-15 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は橙色。 | 地文に縄文施文。原体はL{↑縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟。 | 配石南部 |
| 215-16 121 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{↑縦転がし。 隆帯を垂下。 | 配石北西部 |
| 215-17 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 隆帯を垂下。 | 配石北部 |
| 215-18 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐灰色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑縦転がし。 隆帯を垂下。 | 一括 |
| 215-19 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰黄色。 | 地文に条線を施す。 沈線を垂下。 | 配石南部 |



第215図 20号配石遺構出土土器

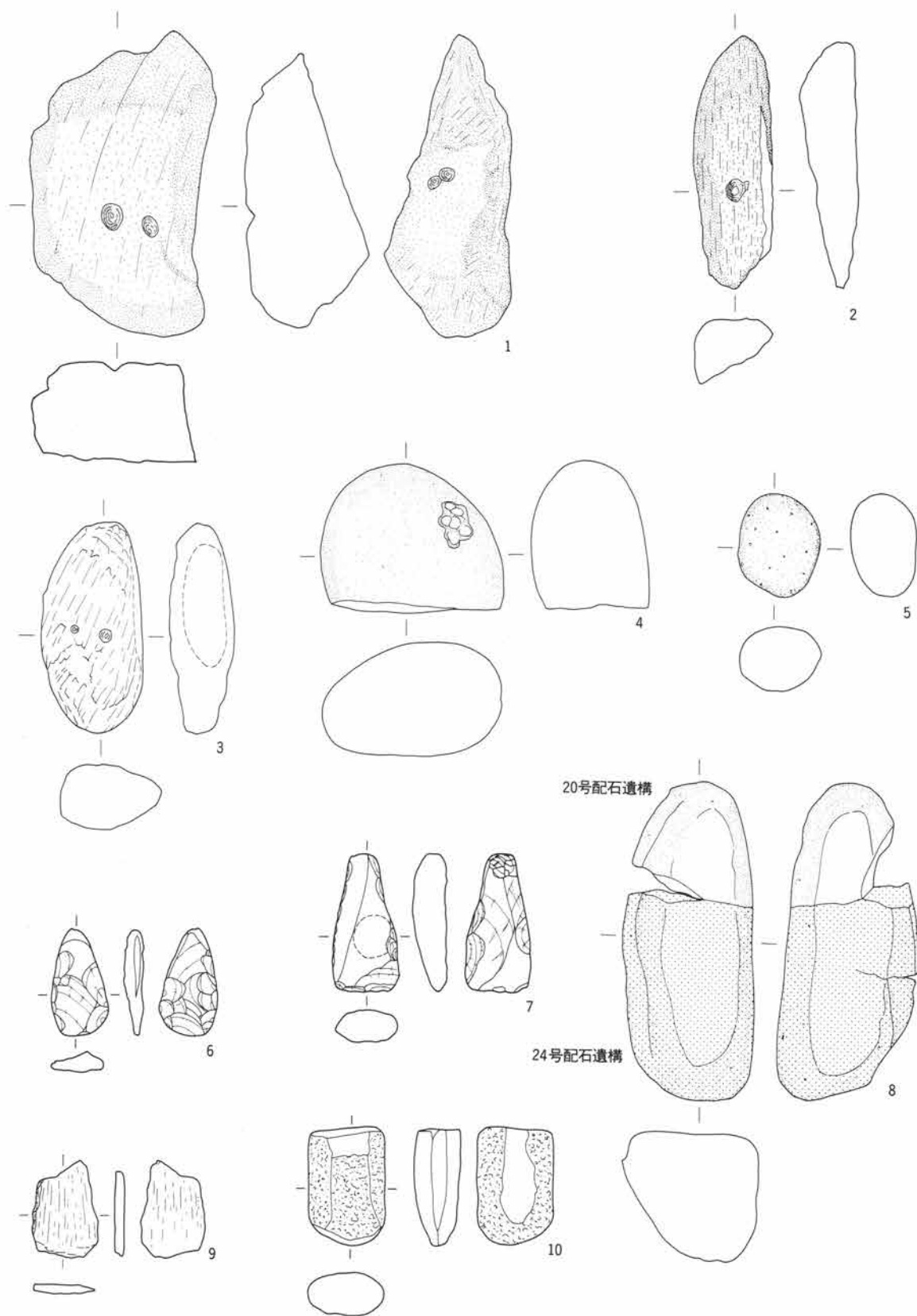
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

20号配石遺構土器観察表

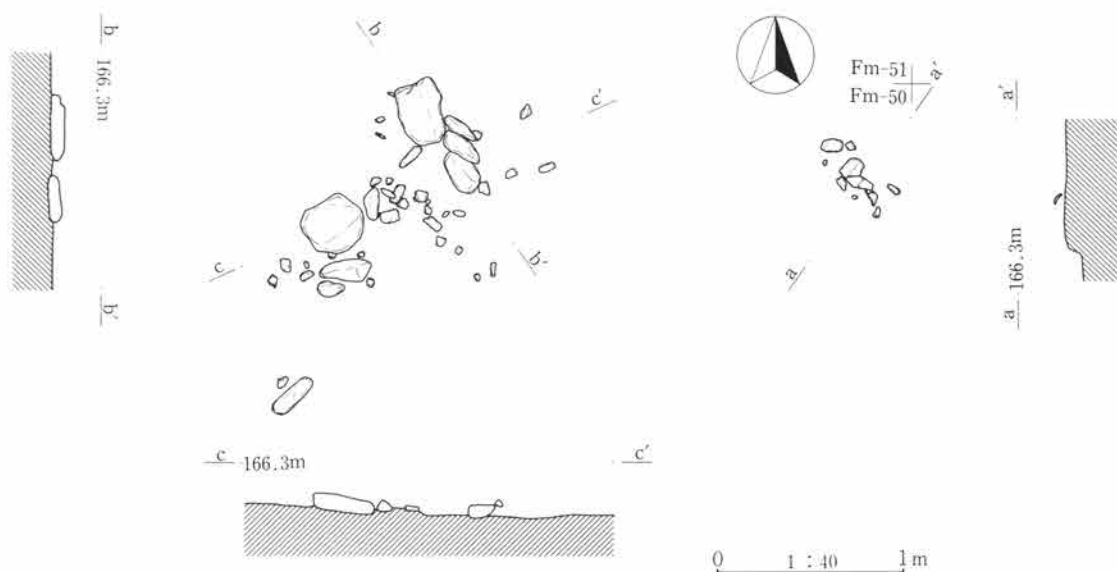
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|-------------------------------|-------|
| 215-20 121 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{土縦転がし。 | 配石西端 |
| 215-21 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐灰色。 | 条線を施す。 | 配石南部 |
| 215-22 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は黒褐色。 | 刺突を施す。 | 配石北西端 |
| 215-23 121 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。器厚11~17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は褐灰色。 | 地文に縄文施文。原体はR{土縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 215-24 121 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色。 | 底面は荒れている。 | 配石北部 |

20号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|------|------|---------|--------------|------|-------|---------|--|----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 216-1 121 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 31.0 | 18.5 | 12.5 | 8,000 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長28mm、短20mm、深9mm。最小は長15mm、短11mm、深4mmで、平均は長19mm、短14mm、深7mm。一部磨耗。 | 列石近くから出土 |
| 216-2 121 | 多孔石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | 25.4 | 7.9 | (6.4) | (1,700) | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は25mm、短径19mm、深さ7mmである。凹石の凹みとは異なる。 | 列石近くから出土 |
| 216-3 121 | 多孔石 | 完形 | 緑泥片岩 | 21.1 | 10.3 | 6.6 | 1,900 | 片面に2個の凹み。凹みの平均は長径11mm、短径10mm、深さ3mmである。側面に磨耗痕がみられる。 | 列石近くから出土 |
| 216-4 121 | 丸石 | 完形 | 安山岩 | 14.8 | 18.4 | 11.9 | 4,900 | 6個の凹みがみられる。 | 配石南西端 |
| 216-5 121 | 磨石 | 完形 | 安山岩 | 10.4 | 8.8 | 6.6 | 800 | 磨耗痕がみられる。 | 配石西寄り |
| 216-6 121 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 10.7 | 5.8 | 2.1 | 155 | バチ (II b)。 | 配石中央部 |
| 216-7 121 | 打製石斧 | 完形 | 輝岩 | 13.8 | 6.8 | 3.5 | 420 | バチ (II b)。 | 配石中央部 |
| 216-8 121 | 磨石 | ほぼ完形 | 安山岩 | 31.7 | 13.2 | 13.1 | 8,950 | 両面に磨耗痕がみられる。 | 24号配石と接合 |
| 216-9 121 | 打製石斧 | 両端欠損 | 絹雲母石墨片岩 | (9.6) | 6.6 | 1.0 | (88) | バチ (II b)。 | 配石中央部 |
| 216-10 121 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (11.7) | 7.4 | 4.8 | (850) | 敲打段階。 | 配石中央部 |



第216図 20号配石遺構出土石器



第217図 21号配石遺構

21号配石遺構（第217～222図、PL. 66、121）

位置 Fm-50グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西30m（遺構の中心までの距離）、23号配石遺構の東12mの所に位置している。

経過 0区（昭和62年度調査区）から検出。5月21日に20号配石遺構とともに調査を開始した。6月8日に遺構の写真撮影を実施。以後、遺物の取り上げ、下部の調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって遺構の一部は壊されている。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

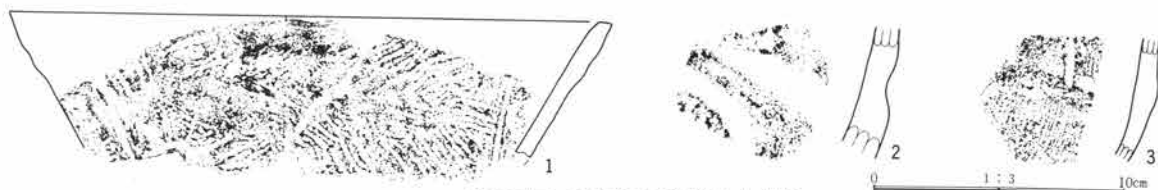
形状・配石状況 長径1m70cm、短径1m10cmの範囲に配石が認められ、また配石の中心から東2m40cmのところから伏甕が検出された。配石の面積は約2.7㎡で、非常に小規模なものである。

使用石材 15種類の石材が確認された。44点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩17点（38.6%）、点紋石墨緑泥片岩・珪石各5点（各11.4%）、点紋緑泥片岩4点（9.1%）、石墨片岩3点（6.8%）、点紋絹雲母石墨片岩・輝緑岩・輝岩・緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・斑柘岩・石墨緑泥片岩・角閃岩・綠色珪質板岩・頁岩各1点（各2.3%）である。44点中33点（75%）の石が片岩類である。

石材重量 44点の重量の内訳は、500g未満の石33点（75%）、1kg～2.5kg未満の石4点（9.1%）、500g～1kg未満の石3点（6.8%）、2.5kg～5kg未満の石2点（4.5%）、7.5kg～10kg未満の石1点（2.3%）、10kg～20kg未満の石1点（2.3%）である。

遺物出土状況 伏甕（口縁部片）1点と6点の土器片が出土している。石器では多孔石1点、凹石1点、打製石斧1点が出土し、石器含有率は6.8%である。また焼石は44点中3点の出土で、6.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

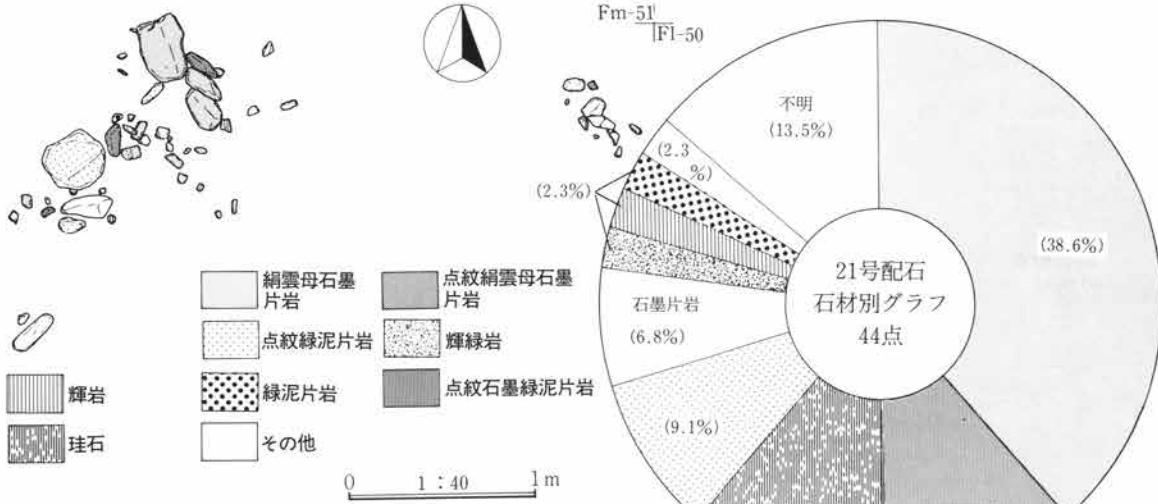


第218図 21号配石遺構出土土器

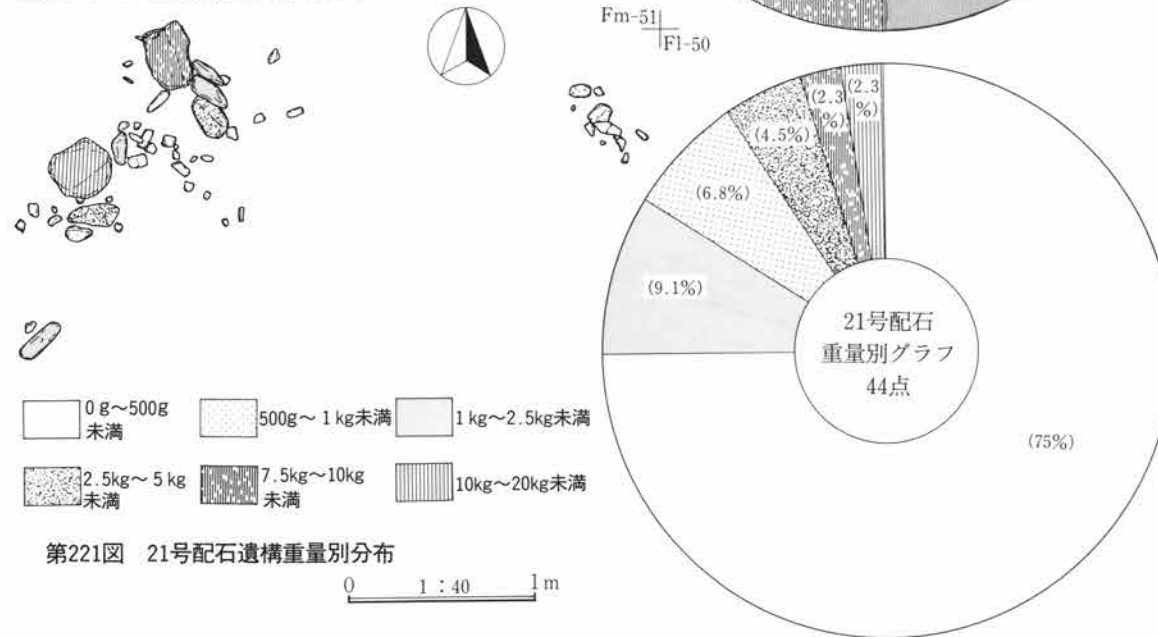
5 配石遺構〈21号〉



第219図 21号配石遺構遺物出土状況



第220図 21号配石遺構石材別分布

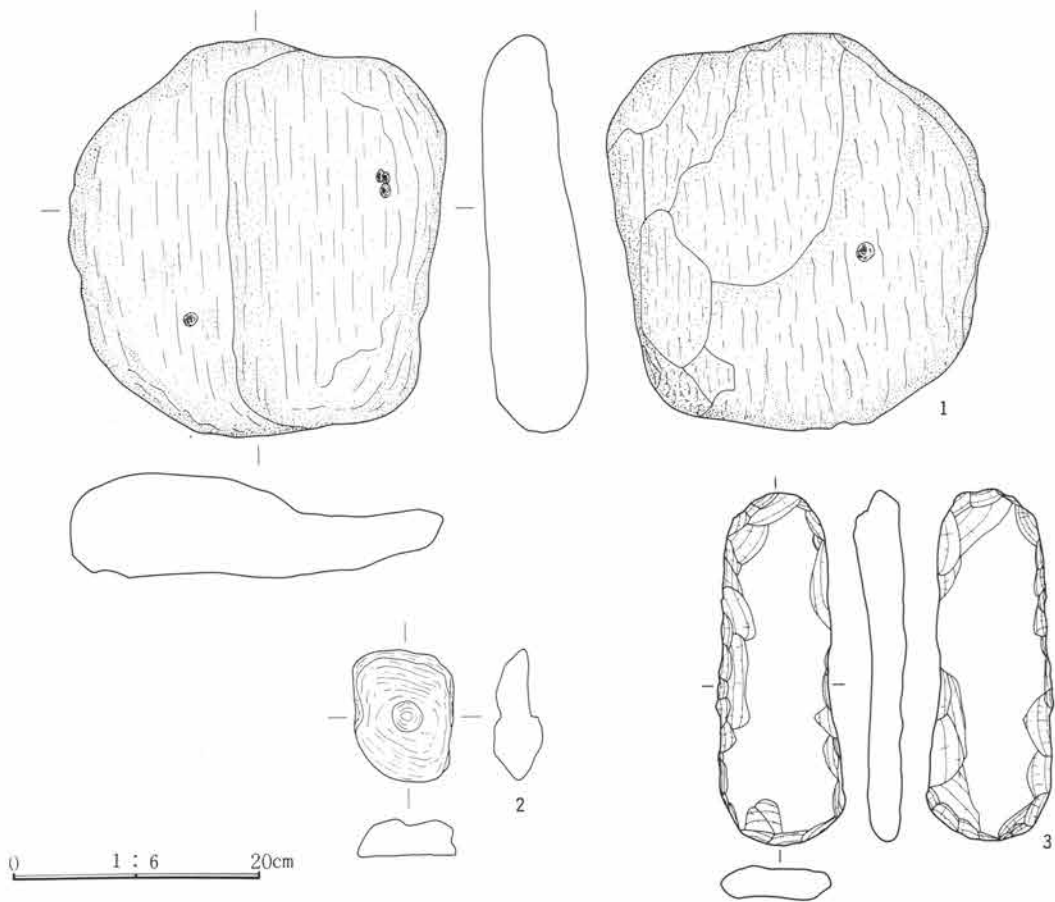


第221図 21号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

21号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|--|---|-------|
| 218-1 121 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は暗褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL(↑横・縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石東端 |
| 218-2 121 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄橙色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様。区画内に 縄文施文。原体はR(↑横転がし。 | 配石中心部 |
| 218-3 121 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚6~9mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰黄褐色。 | 条線を施す。 | 配石西部 |



第222図 21号配石遺構出土石器

21号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|------------|------|-----|--------|--|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 222-1 121 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 31.3 | 30.0 | 8.3 | 12,300 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長15mm、短13mm、 深3mm。最小は長9mm、短6mm、深1mmで、平均 は長11mm、短9mm、深2mm。 | 配石西南 端 |
| 222-2 121 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 10.5 | 8.0 | 3.9 | 400 | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は25mm、短 径24mm、深さ5mmである。 | 配石中央 部 |
| 222-3 121 | 打製石斧 | 完形 | 斑礫岩 | 28.2 | 10.2 | 4.0 | 1,570 | バチ(IIa)。1側がわずかに内湾。大型で細身。 | 配石南端 |

22号配石遺構（第223～230図、PL. 67・68、122）

位置 Fm-46・47グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西26m（遺構の中心までの距離）、列石からは西13mの所、7号屋外埋設土器の北西3mに位置している。

経過 0区（昭和62年度調査区）から検出。環状列石の周辺に調査が及んだ6月上旬に遺構を確認した。4日に遺構全景の写真撮影を実施。以後、7月8日まで図面の作製に入った。遺物取り上げ後、配石下に埋甕を検出した。この埋甕の存在で、当遺構は敷石住居跡の可能性が考えられたが、炉は存在せず、また配石状態も不規則であるために敷石住居跡からは除外して調査を進めた。

重複 なし。環状列石に近接して構築されている。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径4m50cm、短径3mの範囲に配石が施されている。集中する範囲は狭く、長径2m50cm、短径2m程である。配石の面積は約11.7㎡である。

使用石材 19種類の石材が確認された。140点の石材別点数は、砂岩54点(38.6%)、絹雲母石墨片岩20点(14.3%)、点紋緑泥片岩11点(7.9%)、点紋石墨緑泥片岩7点(5%)、緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩各5点(各3.6%)、点紋絹雲母石墨片岩・輝岩・斑駁岩各4点(各2.9%)、輝緑岩3点(2.1%)、石墨緑泥片岩・石墨片岩・絹雲母片岩・熱変成岩・綠色珪質板岩・脆雲母石墨片岩・凝灰岩・礫岩・千枚岩各1点(各0.7%)であり、不明は15点(10%)を数えた。不明の石を除いた126点中56点(44.4%)の石が片岩類、42.9%の石が砂岩であった。他の配石遺構よりも、砂岩の使用が多いのが当遺構の大きな特色である。また、配石南端に点紋石墨緑泥片岩が比較的多く使用されていた。

石材重量 重量の判明している石は127点である。その内訳は、500g未満の石68点(53.5%)、500g～1kg未満の石26点(20.5%)、1kg～2.5kg未満の石20点(15.7%)、2.5kg～5kg未満の石5点(3.9%)、5kg～7.5kg未満の石3点(2.4%)、10kg～20kg未満の石3点(2.4%)、7.5kg～10kg未満の石2点(1.6%)である。重量のある石と軽量の石とが乱雑に混ざりあっている。

埋甕 配石下から胴下半部を欠損した埋甕（加曾利E4式土器）が出土した（第227図1）。この埋甕は長径46cm、短径37cmのピット内に正位状態で埋設されていたものである。埋設土壌の覆土は暗褐色土層である。

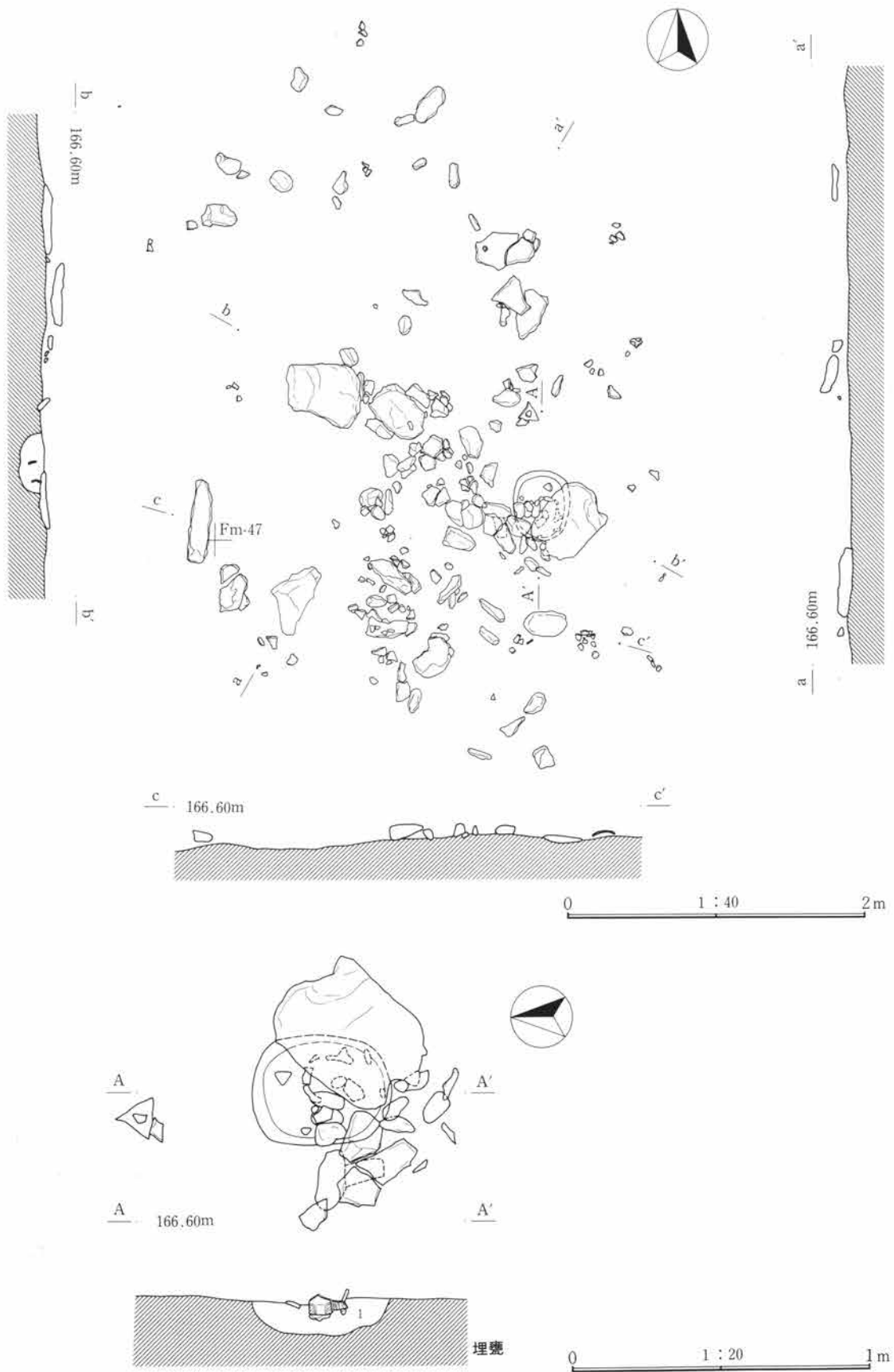
第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性はあまりない。小石を多量に含む、人為的埋土である。

埋甕は土壌内に小石で押さえられていた。また長径50cm・短径37cm・重量13.6kgの扁平な砂岩が埋設ピットを1/2程覆っているが、当初はこのピットを完全に覆っていたもので、蓋石として使用されたものであろう。

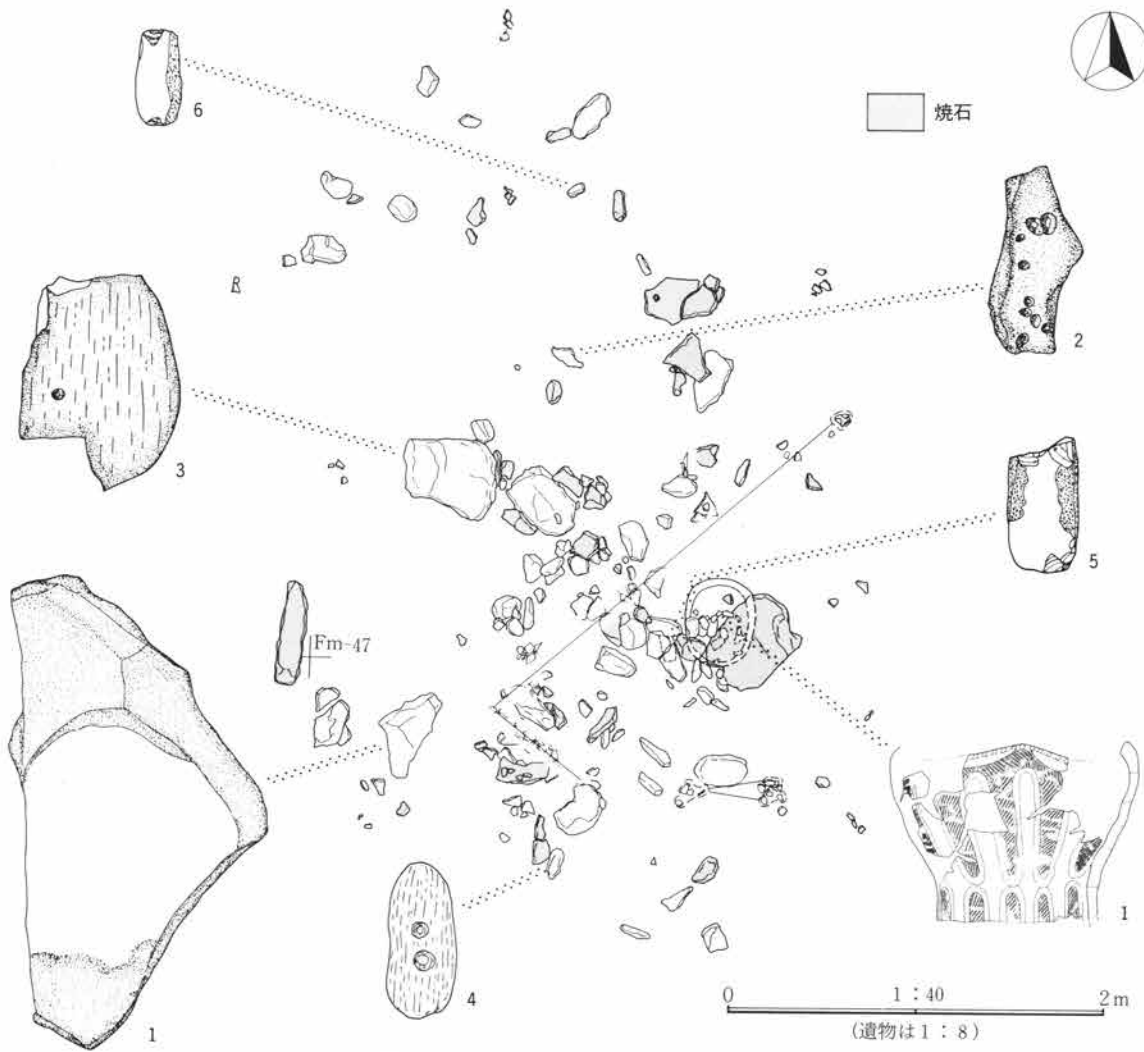
遺物出土状況 埋甕のほかには土器片58点が出土している。その部位別点数は、口縁部10点、胴部48点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片を少量含んでいる。

石器では石皿1点、多孔石2点、凹石1点、磨製石斧2点が出土している。石皿の破片は遺構南西部から、多孔石2点は遺構北部、凹石1点は南端、磨製石斧1点は埋甕の周囲、もう1点は北端からそれぞれ出土している。石器含有率は4.3%であり、また焼石は140点中43点の出土で、30.7%を占めている。焼石の占める割合は他の配石遺構よりも異常に高い。

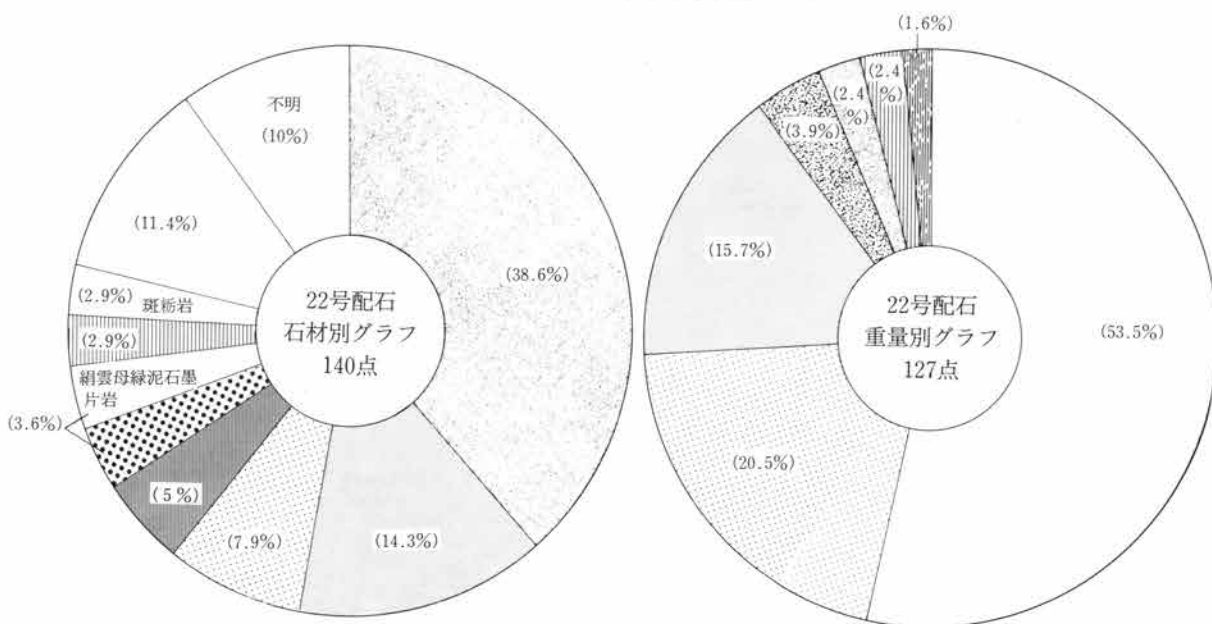
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であるが、他の配石遺構と異なり、砂岩が多量に使用され、焼石が多く、また埋甕を伴うことから、異質な感じを受ける。



第223図 22号配石遺構

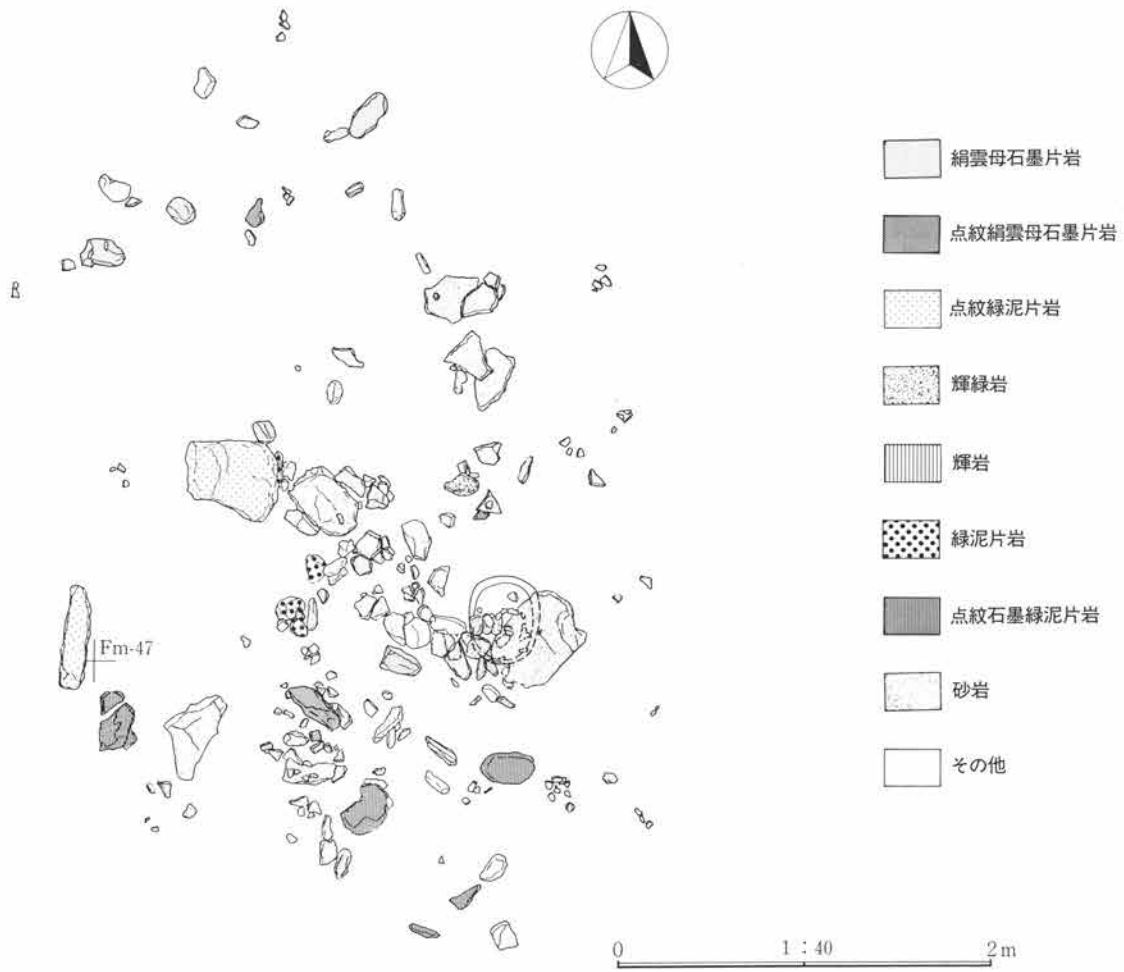


第224図 22号配石遺構遺物出土状況



第225図 22号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

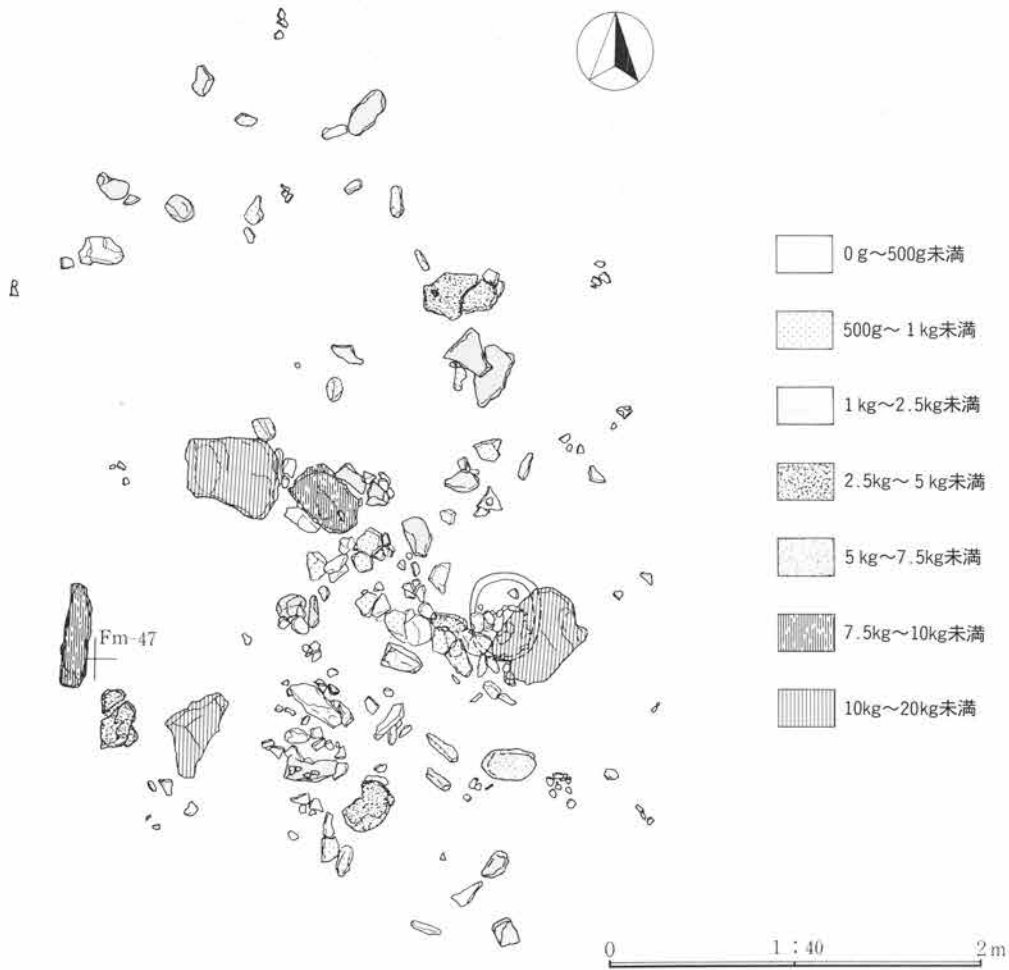
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第226図 22号配石遺構石材別分布



第227図 22号配石遺構出土土器



第228図 22号配石遺構重量別分布

22号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|---|--|----------------|
| 227-1 122 | 口縁 部～ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁～胴部。器厚7～10mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部は内湾し、波状を呈する。口唇部に 刺突を施し、1条の幅広の沈線を巡らせる。 胴部上半は沈線による波状を描き、区画内 に縄文施文。原体はR(↑)横・縦位。胴下半 部は沈線による「□」状の文様を配し、区 画内にR(↑)縦位。 外面に煤が付着している。 | 埋設土器 (正位状態) |
| 227-2 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部はやや内湾し、狭い無文となる。胴 部には微隆起帯による文様が描かれ、磨り 消し及び縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 | 配石南部 |
| 227-3 122 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15～20mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は橙色、内面は赤褐色。 | 口縁部が狭い無文となり、1条の微隆起帯 を巡らす。 | 配石南部 |
| 227-4 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 口縁部は内湾する。隆帯と沈線による渦巻 文等の文様を描き、区画内に縄文施文。原 体はR(↑)横転がし。 | 配石北端 |
| 227-5 122 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は明赤褐色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様を描き、区 画内に縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 | 配石北東部 |

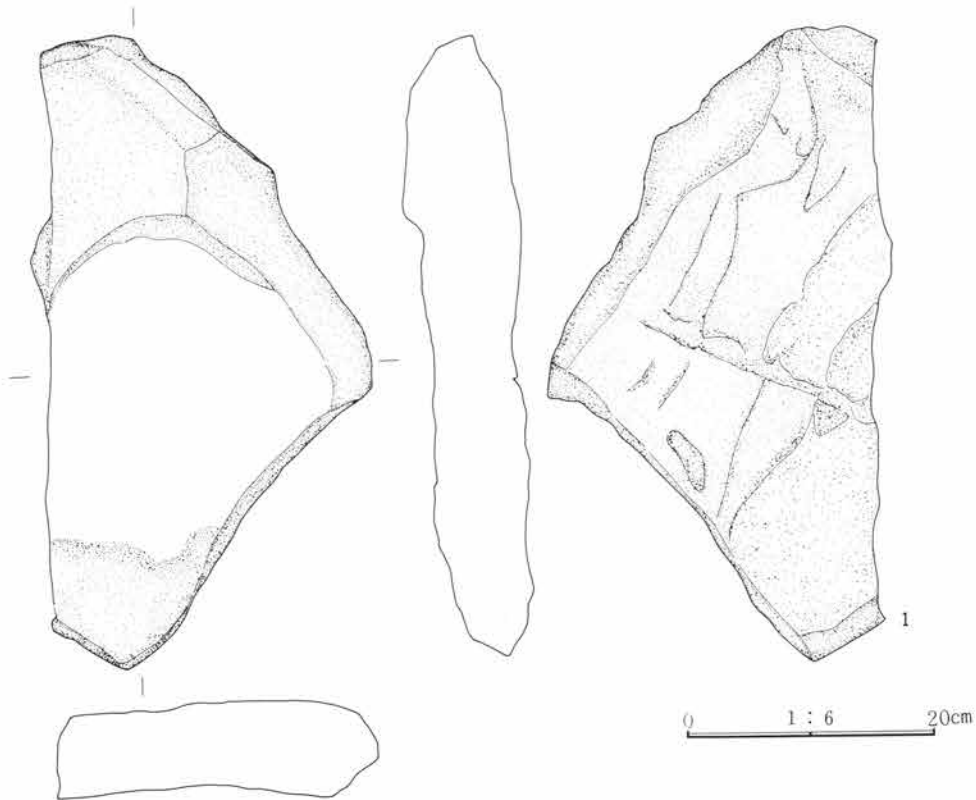
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

22号配石遺構土器観察表

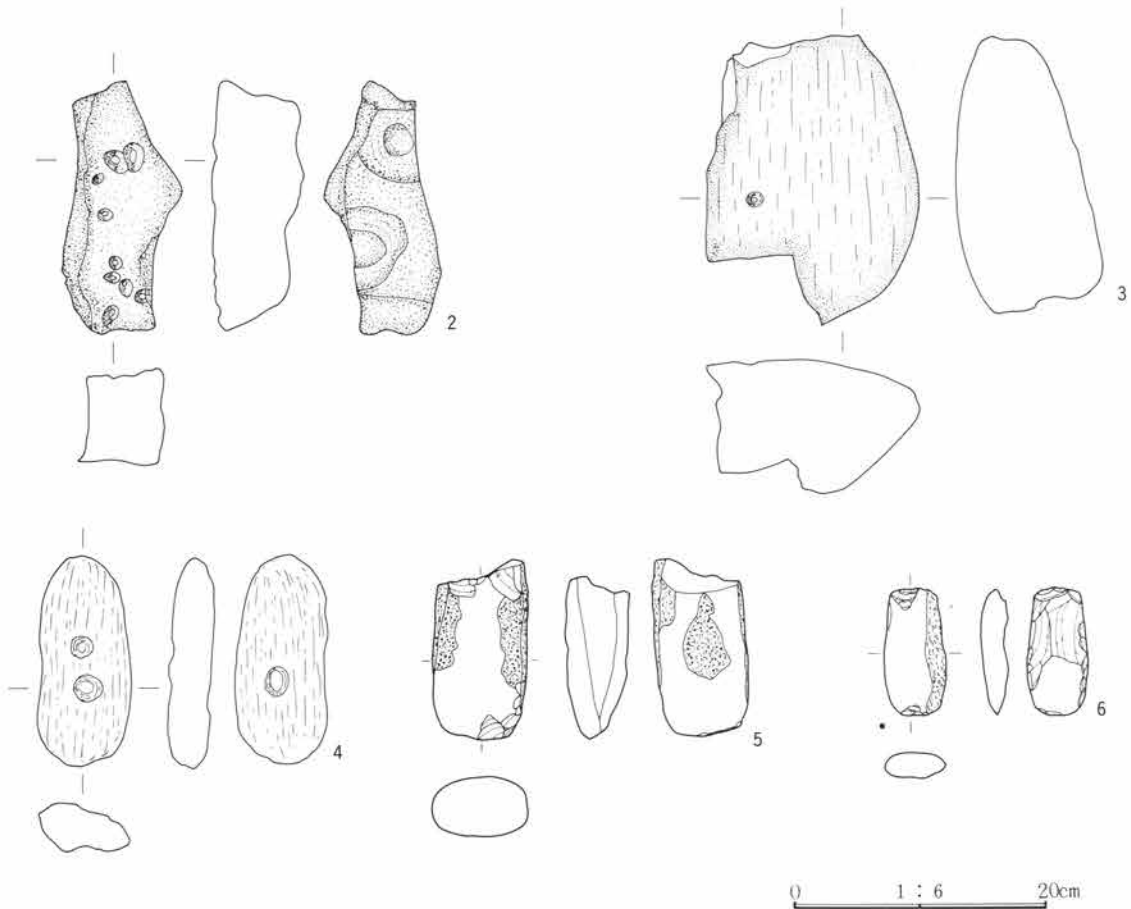
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|--------------------|--|--|-------------|
| 227-6 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文と条線を施文。縄文原体はR ⊥縦転がし。 沈線を施す。 | 配石南部と 東端 |
| 227-7 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐灰色。 | 地文に縄文施文。原体はR ⊥縦転がし。 隆帯を垂下。 土器面は柔軟。 | 配石中心部 |
| 227-8 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色。 | 条線を施文後、縄文施文。 原体はR ⊥縦転がし。 | 配石北西部 |

22号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|---------|------------|--------|------|----------|---|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 229-1 122 | 石 皿 | 部分 | 砂岩 | (50.0) | (27.1) | 7.5 | (18,000) | 未製品の可能性がある。 | 配石南西部 |
| 230-2 122 | 多 孔 石 | 部分 | 砂岩 | (19.9) | (9.5) | 7.3 | (1,200) | 両面に11個の凹み。最大の凹みは長23mm、短15mm、 深3mm。最小は長11mm、短8mm、深1mmで、平均 は長15mm、短11mm、深3mm。一部被熱。 | 配石北部 |
| 230-3 122 | 多 孔 石 | 部分 | 点紋緑泥片岩 | (22.8) | (16.9) | 11.6 | (4,980) | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は14mm、短 径12mm、深さ4mmである。凹石の凹みとは異なっ ている。 | 配石中央 部 |
| 230-4 122 | 凹 石 | 完形 | 網雲母石墨片岩 | 16.6 | 7.7 | 3.8 | 650 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長24mm、短21mm、 深1mm。最小は長18mm、短17mm、深3mmで、平均 は長21mm、短18mm、深2mm。全面焼けている。 | 配石南端 |
| 230-5 122 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (15.0) | 7.0 | 4.5 | (870) | 敲打段階。 | 埋甕近く |
| 230-6 122 | 磨製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 10.1 | 5.0 | 2.2 | 160 | 磨き途中。片面に大きく粗割り痕残す。 | 配石北端 |



第229図 22号配石遺構出土石器 (1)



第230図 22号配石遺構出土石器(2)

25号配石遺構 (第231～237図、PL. 122)

位置 Fp-53・54グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西46m (遺構の中心までの距離)、24号配石遺構の北北西4m50cmの所に位置している。

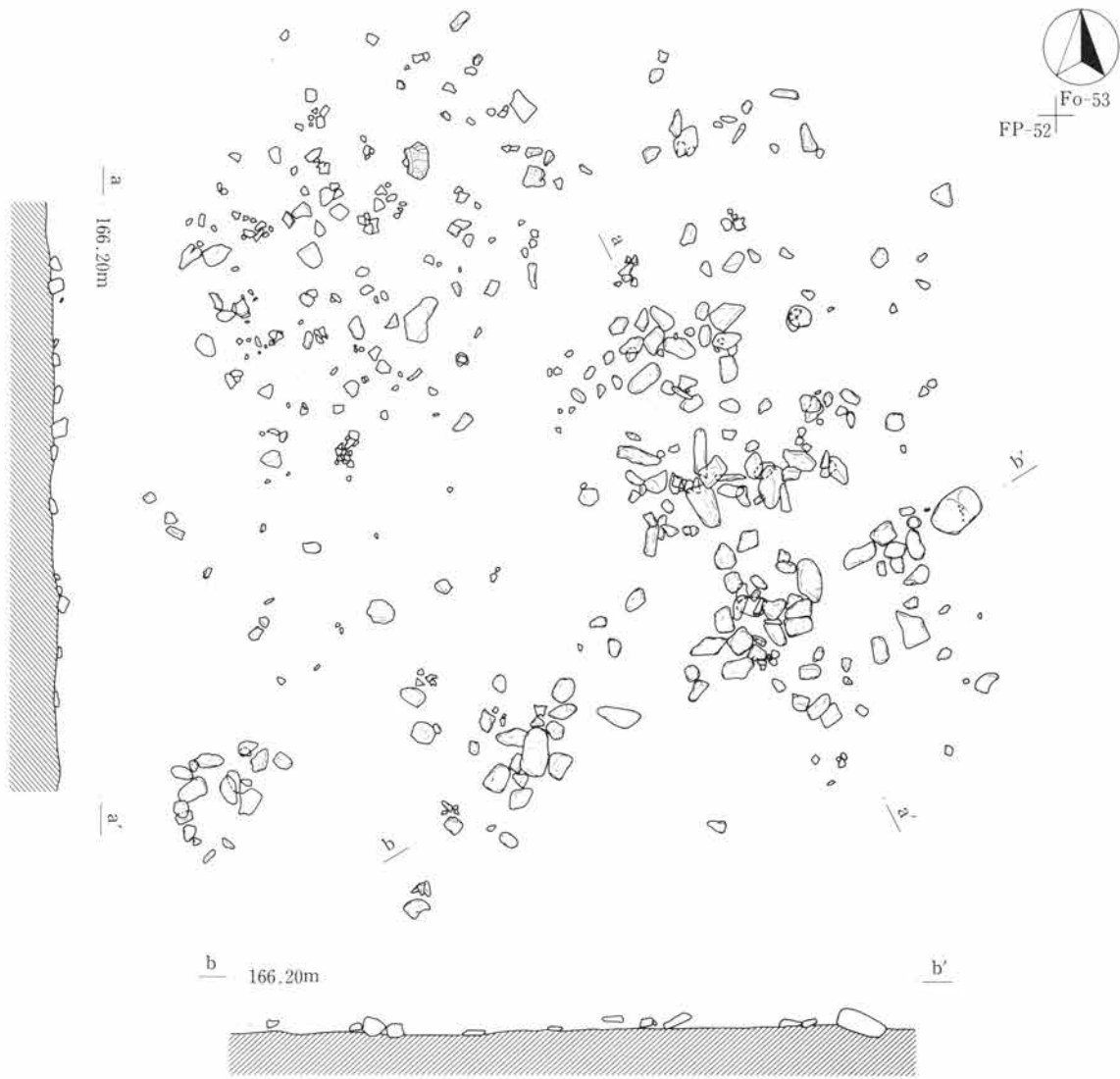
経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に23～27号配石遺構を連続して検出し、8日に遺構の全景写真と部分写真の撮影を行った。9日に実測作業を行い、遺物取り上げ作業を実施した。配石遺構下には土壌等の遺構は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m50cm、短径4m80cmの範囲に配石が施されているが、中心となる配石は、遺構北東から南西に直線的に配置される3ブロックと、遺構北西から南東に配置されるブロックになろう。これらを仮に1～6ブロックに分類した場合、それぞれの配石ブロックの規模は次のとおりである。1ブロックは長径80cm、短径40cmで石10点、2ブロックは長径1m、短径60cmで石22点、3ブロックは長径80cm、短径50cmで石14点、4ブロックは長径1m20cm、短径50cmで石31点、5ブロックは長径1m、短径60cmで石24点、6ブロックは長径70cm、短径50cmで石18点となり、それぞれ小規模な配石である。配石の総面積は約18.6㎡となる。

使用石材 27種類の石材が確認された。234点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩72点(30.8%)、珪石23点(9.8%)、点紋緑泥片岩19点(8.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩16点(6.8%)、輝緑岩13点(5.6%)、輝岩10点(4.3%)、緑泥片岩10点(4.3%)、点紋石墨緑泥片岩10点(4.3%)、石墨片岩9点(3.8%)、点紋絹雲母石墨片



第231図 25号配石遺構

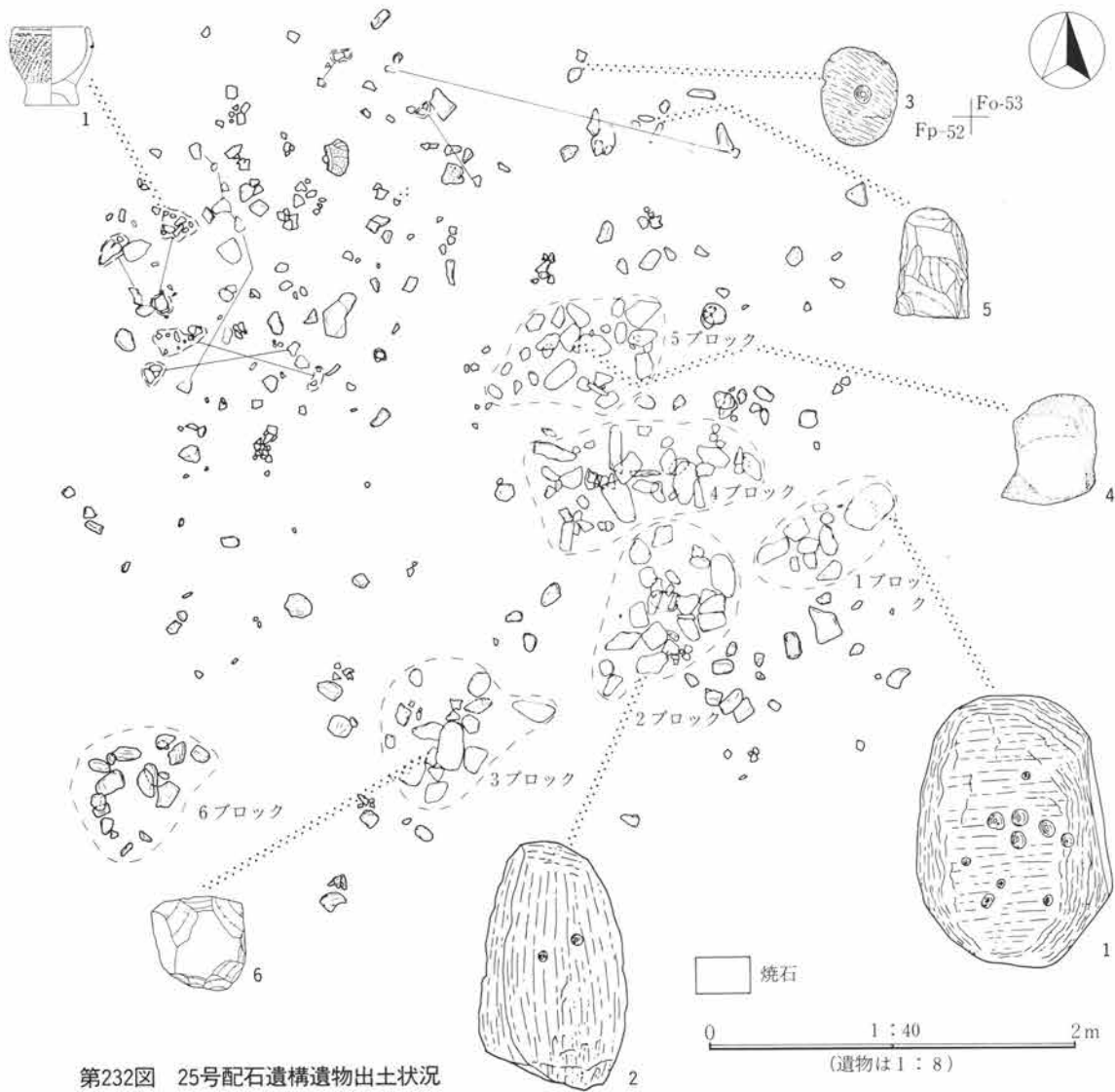
0 1 : 40 2m

岩7点(3%)、赤色珪質板岩4点(1.7%)、斑礫岩3点(1.3%)、石墨緑泥片岩・緑泥石墨片岩・角閃岩・熱変成岩・砂岩・千枚岩各2点(各0.9%)、絹雲母緑泥片岩・チャート・絹雲母片岩・紅泥片岩・綠色珪質板岩・変斑礫岩・蛇紋岩・緑簾石英片岩各1点(各0.4%)であり、不明は17点(7.3%)を数えた。不明の石を除いた217点中152点(70%)の石が片岩類である。

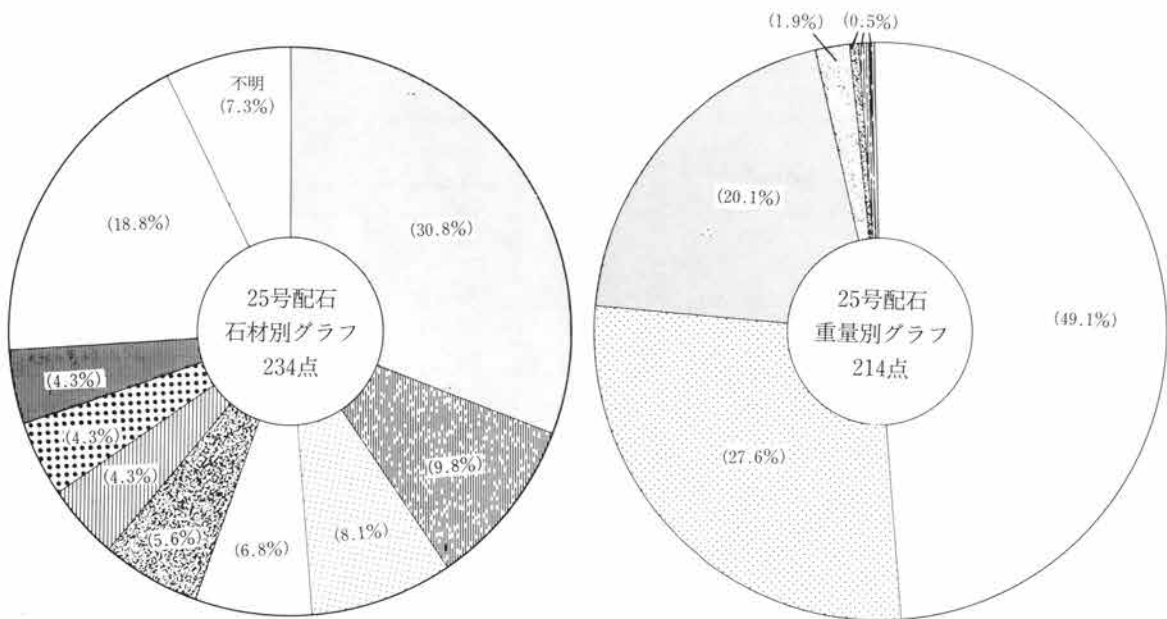
石材重量 重量の判明している石は214点である。その内訳は、500g未満の石105点(49.1%)、500g～1kg未満の石59点(27.6%)、1kg～2.5kg未満の石43点(20.1%)、2.5kg～5kg未満の石1点(0.5%)、5kg～7.5kg未満の石4点(1.9%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.5%)、10kg～20kg未満の石1点(0.5%)である。

遺物出土状況 小型土器1点を含め、土器片197点が出土している。その部位別点数は、口縁部41点、胴部154点、底部2点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も出土している。配石遺構の北西部に土器片が集中して出土し、接合関係も認められる。石器では多孔石2点が1ブロックと2ブロック、石皿の破片は5ブロック、凹石1点は遺構北端、磨製石斧は3ブロックから1点、北端から1点が出土している。石器含有率は2.7%であり、また焼石は234点中8点の出土で、3.4%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

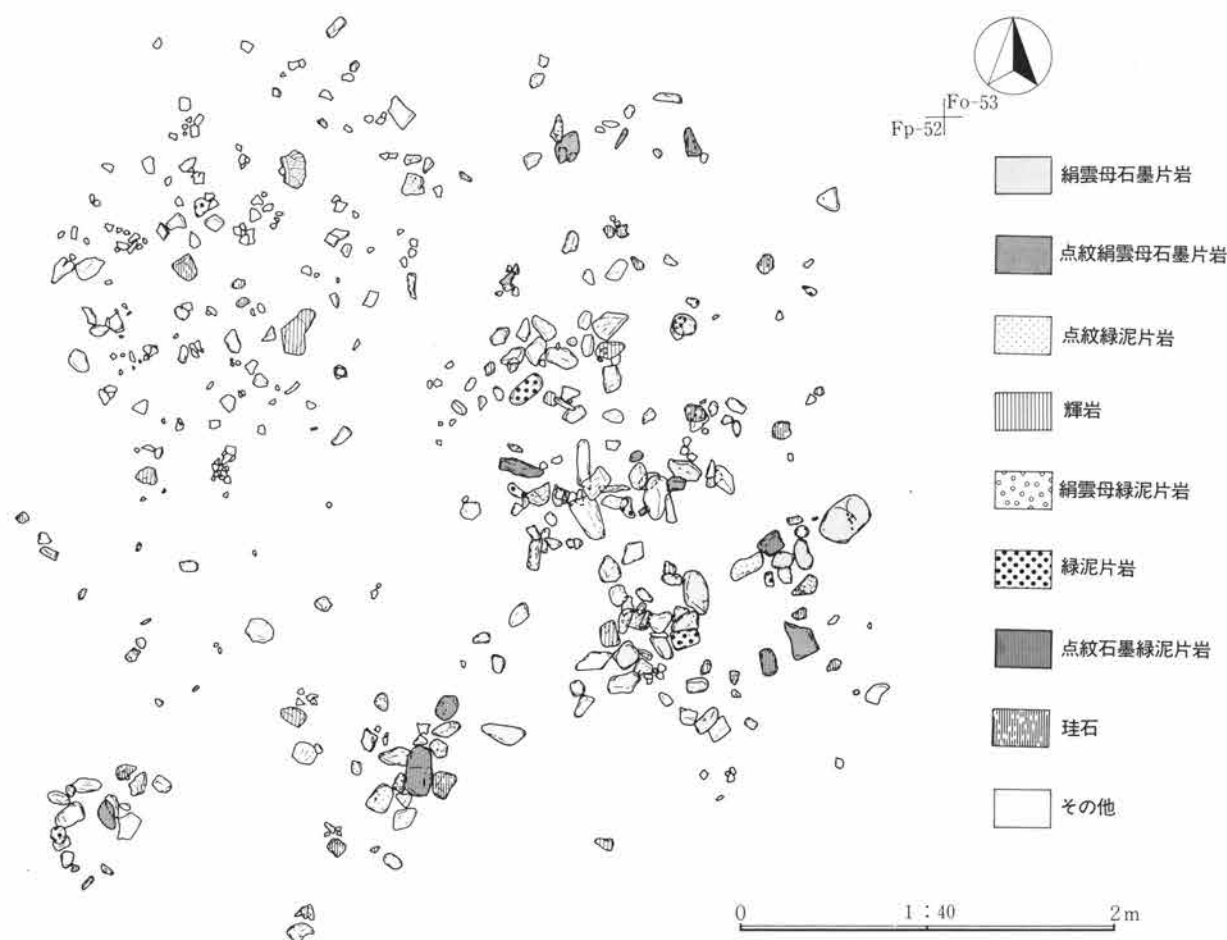


第232図 25号配石遺構遺物出土状況



第233図 25号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

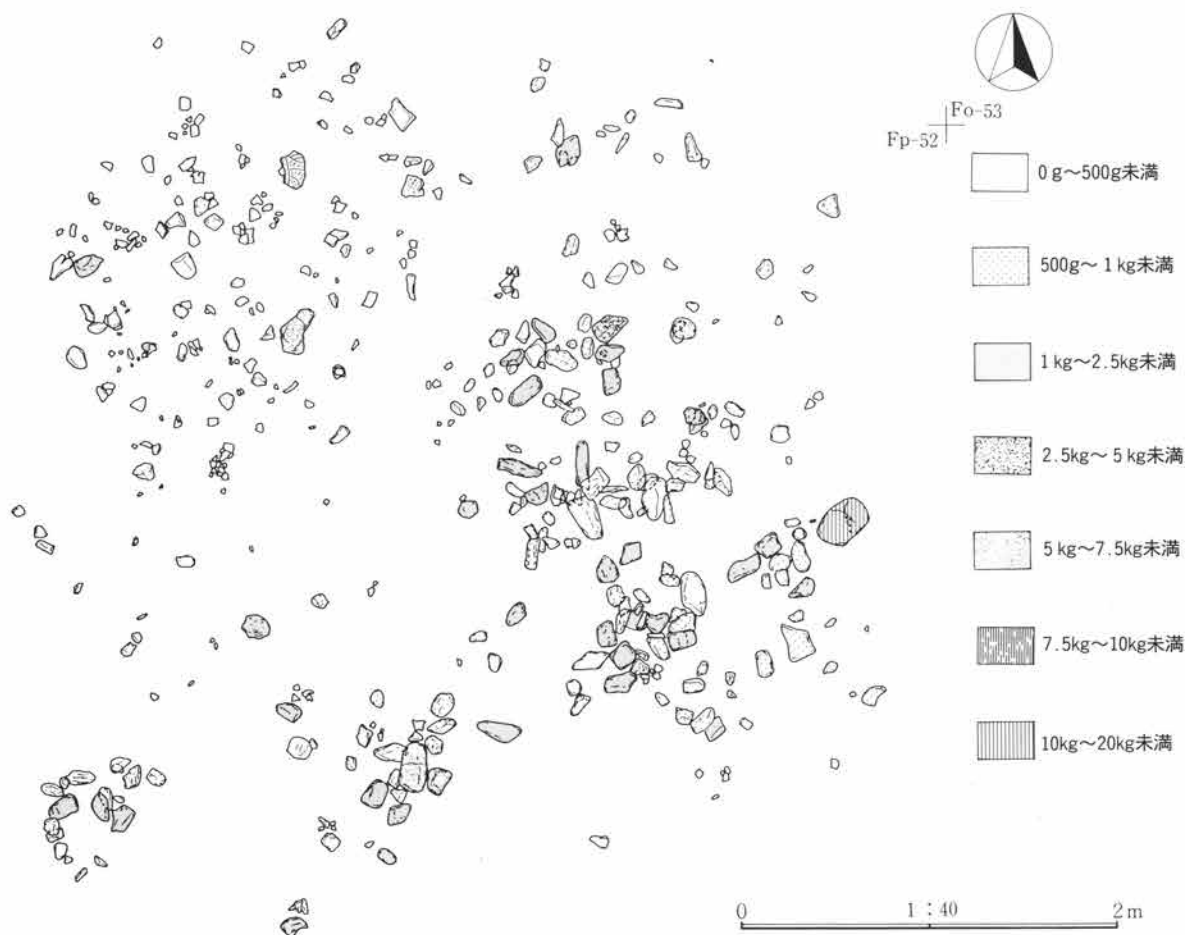


第234図 25号配石遺構石材別分布

25号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|---|---|-------|
| 236-1 122 | 小型 土器 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 小型土器の完形品。口径82mm、器高84mm、底径58mm。内面は横方向の調整。外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄橙色。 | 口縁部には1条の沈線を巡らせ、以下縄文施文。原体はR{↑縦転がし。底部付近には縦・横方向のミガキ。 | 配石北西部 |
| 236-2 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12~15mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調は明褐色、内面は褐色。 | 口縁部はやや内湾する。沈線による楕円等の文様を描き、縄文施文。原体はL{↑横転がし。 | 配石北西部 |
| 236-3 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~8mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調は褐灰色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部はやや内湾する。1条の沈線を巡らせ、縄文施文。原体はR{↑横・縦転がし。 | 配石中心部 |
| 236-4 122 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調はにぶい黄橙色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{↑横・縦転がし。沈線による文様を描く。 | 配石南西部 |
| 236-5 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~10mm。内面は丁寧な調整が行われている。外面の色調はにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色。 | 波状口縁部片。太い沈線による楕円等の文様を描く。 | 配石東部 |
| 236-6 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らす。隆帯による渦巻き等の文様を描かれる。区画内には縦位の沈線を施す。 | 配石北端 |
| 236-7 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~8mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 口縁部に狭い無文部。隆帯に沿って2条の円形刺突文を施す。以下縄文施文。原体はR{↑横転がし。 | 配石西部 |

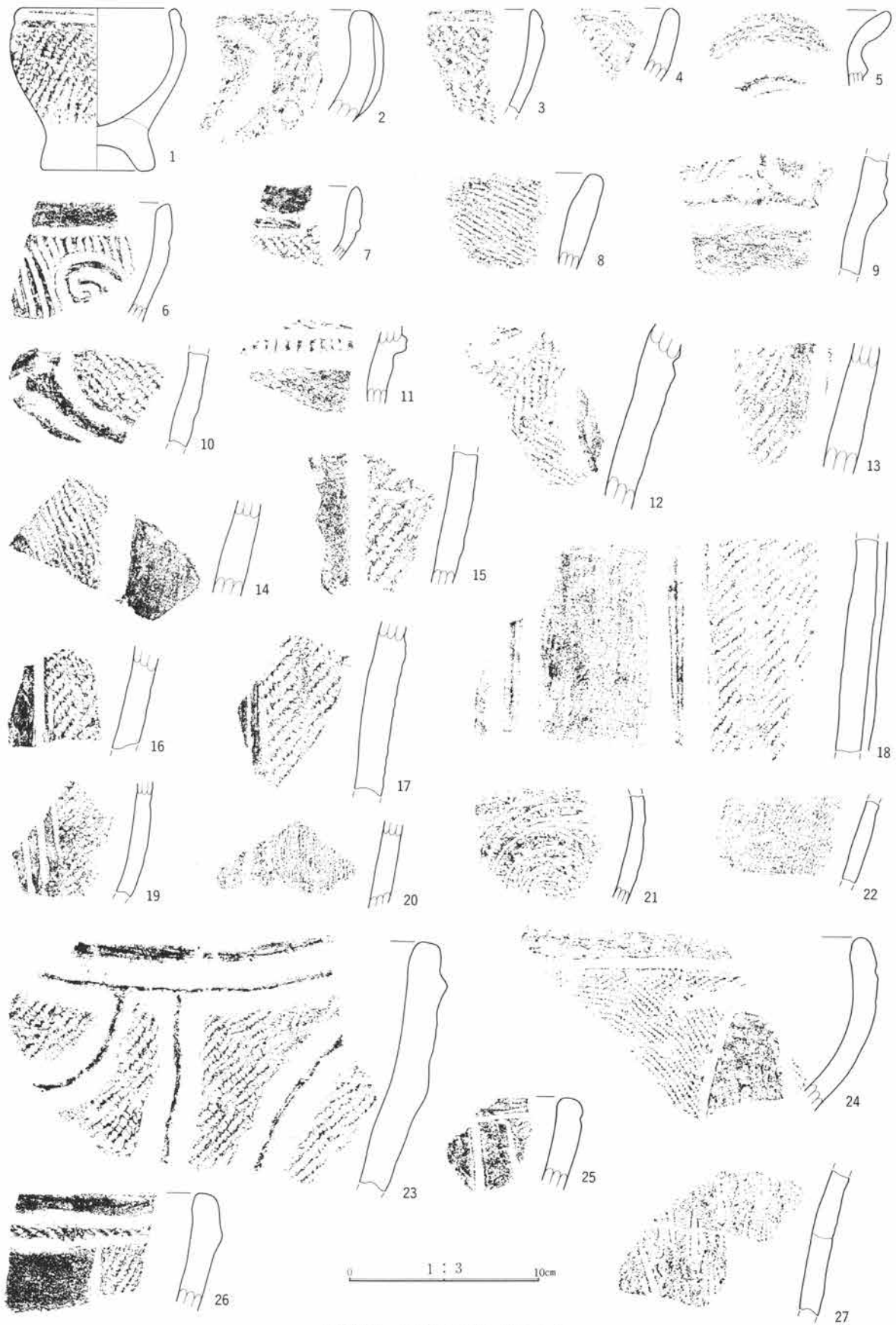
5 配石遺構〈25号〉



第235図 25号配石遺構重量別分布

25号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|--|---|-------|
| 236-8 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 小型土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR()横転がし。 | 配石東部 |
| 236-9 122 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐灰色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様を描く。 区画内に縄文施文。原体はL()横転がし。 | 配石北東部 |
| 236-10 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は淡黄色。 | 沈線による楕円等の文様を描く。区画内に 縄文施文。原体はR()横転がし。 | 配石北西部 |
| 236-11 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形の土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は橙色。 | 隆帯に刺突が施されている。 | 配石東端 |
| 236-12 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL()横・縦転がし。 沈線による文様が描かれている。 | 配石北部 |
| 236-13 122 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 沈線を垂下。外面に煤が付着している。 | 配石北部 |
| 236-14 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、磨り消し及 び縄文を施す。原体はL()縦転がし。 | 配石北西部 |



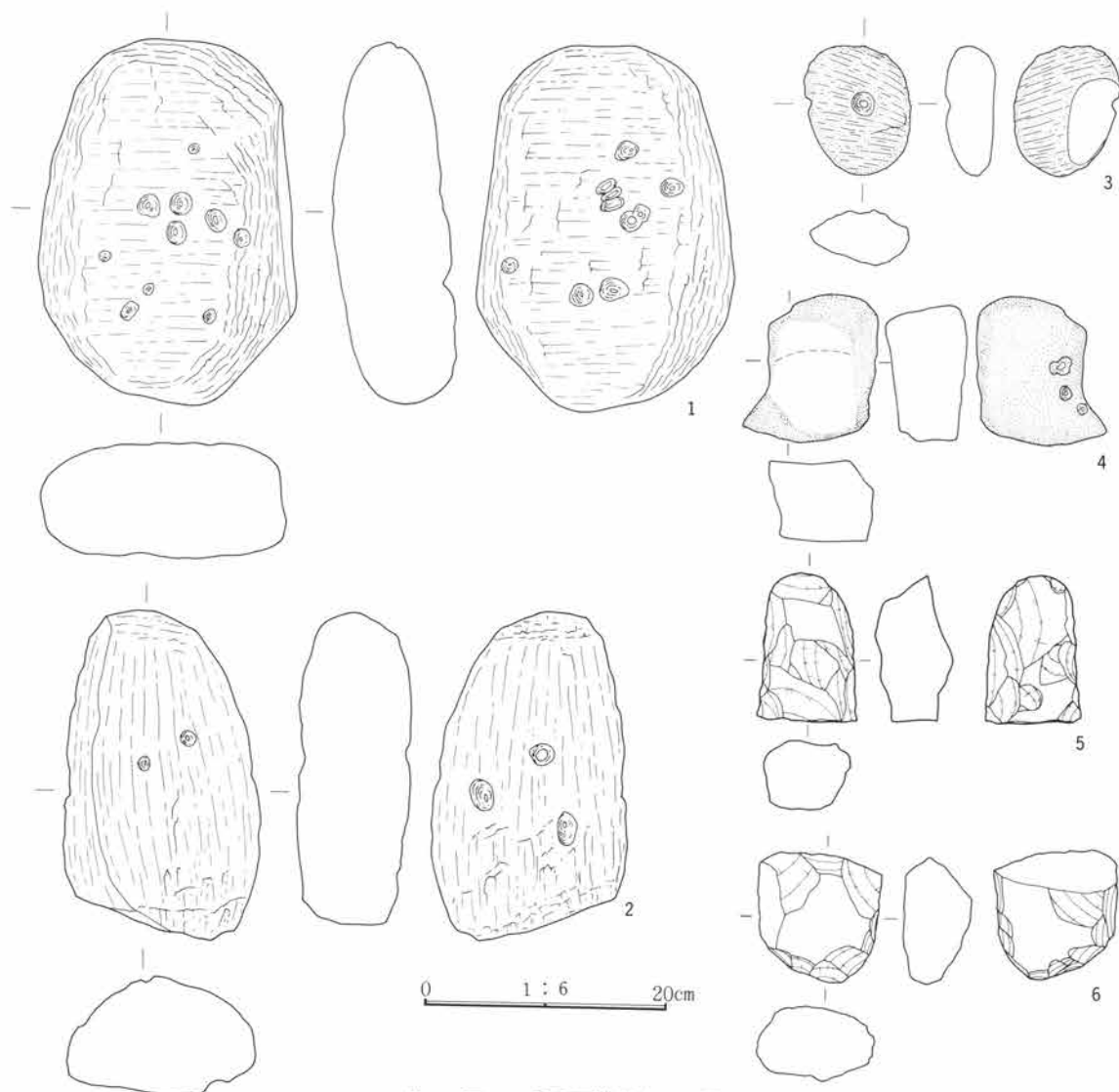
第236図 25号配石遺構出土土器

25号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|--|--|-------|
| 236-15 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北西端 |
| 236-16 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西部 |
| 236-17 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石中心部 |
| 236-18 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 微隆起の懸垂文によって区画している。 地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北部 |
| 236-19 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 236-20 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 条線を施している。 | 配石中心部 |
| 236-21 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線による文様が描かれている。 | 配石北西部 |
| 236-22 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は明褐色。 | 条線が施されている。 | 配石北西部 |
| 236-23 122 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~18mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外側の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 波状口縁部片。微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北部 |
| 236-24 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗褐色。 | 口縁部は内湾し、1条の沈線を巡らせる。 「□」状の沈線による文様が描かれ、磨り 消し及び縄文施文。原体はL(↑)横・縦位。 | 配石北西部 |
| 236-25 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部に1条の沈線を巡らせ、沈線を垂下 している。 | 配石北西部 |
| 236-26 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。 | 口唇下に微隆起帯を横位に巡らせ、これと 接続させて沈線を垂下させる。区画内には R(↑)縦転し。微隆起帯上にはR(↑)横位。 | 配石西部 |
| 236-27 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明赤褐色。 | 押し引き状の沈線を施している。 | 配石西部 |

25号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|--------------|--------|------|---------|---|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 237-1 122 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 29.5 | 20.9 | 10.3 | 9,500 | 両面に20個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、 深8mm。最小は長10mm、短9mm、深3mmで、平均 は長16mm、短13mm、深5mm。 | 1ブロッ ク |
| 237-2 122 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 26.5 | 16.0 | 9.5 | 5,400 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長25mm、短20mm、 深7mm。最小は長11mm、短9mm、深3mmで、平均 は長19mm、短15mm、深5mm。 | 2ブロッ ク |
| 237-3 122 | 凹石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 10.5 | 8.8 | 4.5 | 550 | 片面に1個の凹みがある。長径20mm、短径18mm、 深さ3mmである。 | 配石北端 |
| 237-4 122 | 石皿 | 部分 | 砂岩 | (12.1) | (10.8) | 6.6 | (990) | 破片。裏面に3個の凹みがある。凹みの平均は長・ 短径ともに1cm、深さ2mmである。 | 5ブロッ ク |
| 237-5 122 | | 刃部欠損 | 角閃岩 | (12.0) | 8.1 | 6.1 | (160) | 粗割り途中。 | 配石北端 |
| 237-6 122 | | 一端欠損 | 輝緑岩 | (10.5) | 10.1 | 6.0 | (1,000) | 粗割り途中。両面に自然面を残す。 | 3ブロッ ク |



第237図 25号配石遺構出土石器

27号配石遺構 (第238～244図、PL. 69、122・123)

位置 Fq-48・49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西44m (遺構の中心までの距離)、26号配石遺構の南南東6mの所に位置している。

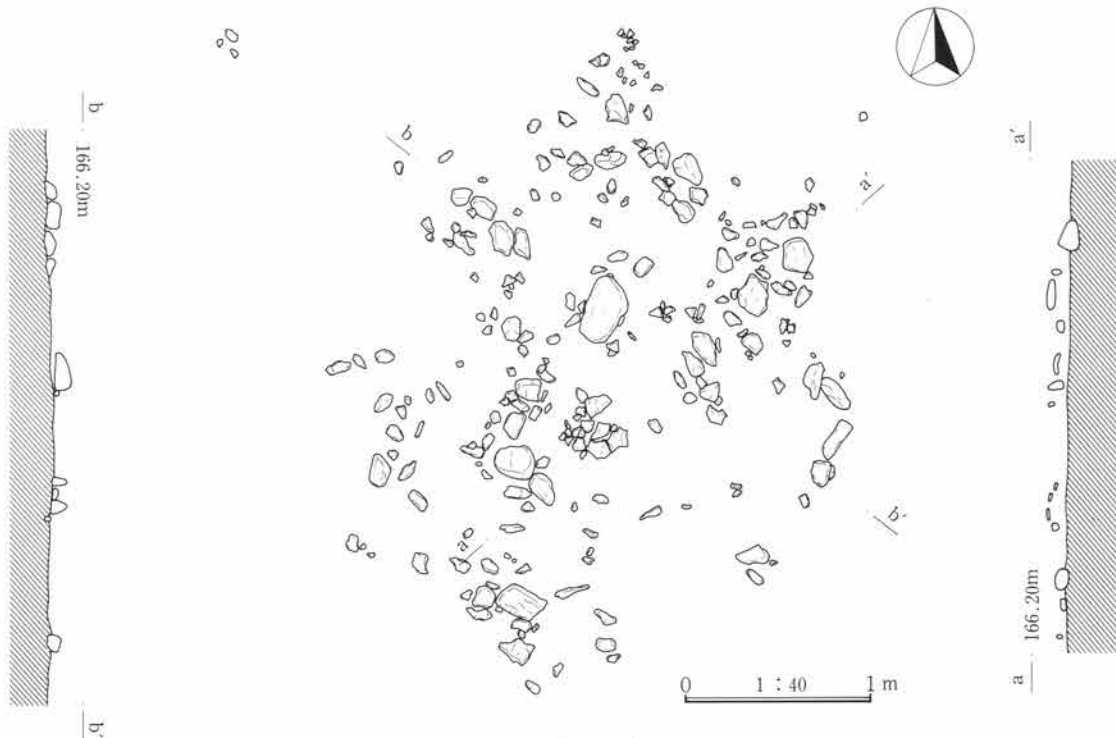
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。7月上旬に23～27号配石遺構を連続して検出し、10日に写真撮影を行った。その後、他遺構の調査を実施し、9月下旬に遺物の取り上げを行った。11月に入って配石遺構の石の取り上げを実施し下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。26号配石遺構に近接している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m、短径2m50cmの範囲に配石が施されている。中心に大きな多孔石を配置し、それを囲うように石の分布が認められる。配石の面積は約7.1㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。169点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩46点(27.2%)、輝岩15点(8.9%)、輝緑岩13点(7.7%)、点紋石墨緑泥片岩12点(7.1%)、珪石9点(5.3%)、緑泥片岩8点(4.7%)、絹雲母緑泥石墨片岩7点(4.1%)、点紋緑泥片岩・チャート・緑色珪質板岩各5点(各3%)、斑斕岩4点(2.4%)、



第238図 27号配石遺構

4%)、点紋絹雲母石墨片岩・石墨片岩各3点(各1.8%)、絹雲母緑泥片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・角閃岩・熱変成岩・砂岩各2点(各1.2%)、赤色珪質板岩・石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・角内石墨片岩・点紋石墨絹雲母片岩各1点(各0.6%)であり、不明は18点を数えた。不明の石を除いた151点中93点(61.6%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は159点である。その内訳は、500g未満の石95点(59.7%)、500g～1kg未満の石31点(19.5%)、1kg～2.5kg未満の石26点(16.4%)、2.5kg～5kg未満の石5点(3.1%)、5kg～7.5kg未満の石1点(0.6%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.6%)である。

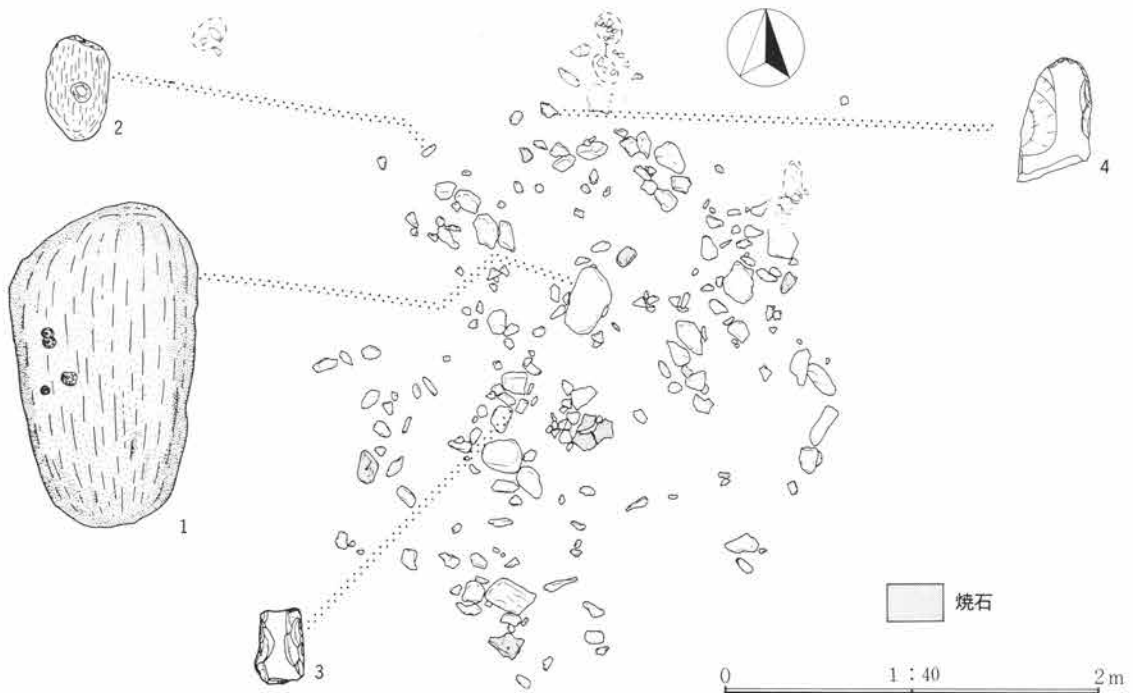
遺物出土状況 配石の中心に点紋緑泥片岩の多孔石が出土している。遺構はこの多孔石中心に構築され、このほかに凹石1点が遺構西北端から、打製石斧1点は中心部から、磨製石斧の未製品1点は北端からそれぞれ出土している。石器含有率は2.4%である。また焼石は169点中7点の出土で、4.1%を占めていた。土器片は口縁部11点、胴部58点、底部2点の計71点が出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

27号配石遺構土器観察表

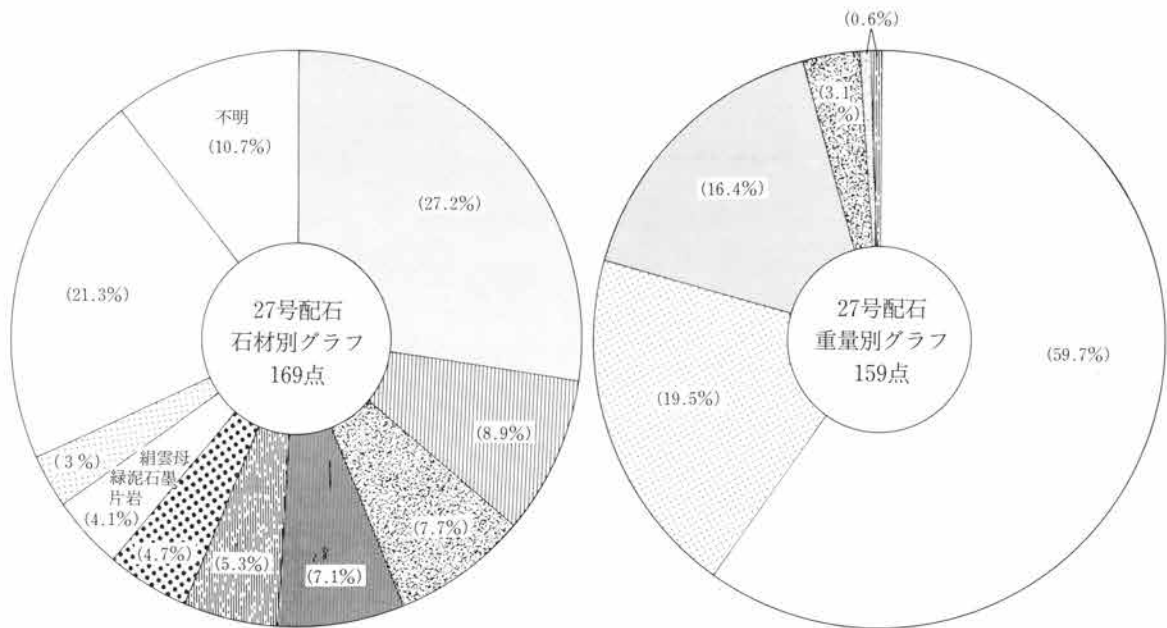
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|--|---|-------|
| 243-1 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6～11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい灰黄褐色、内面は黒褐色。 | 口唇下に狭い無文帯をおき、1条の沈線を 巡らせる。以下に縄文施文。原体はR(↑)縦 転がし。 | 配石北西部 |
| 243-2 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13～16mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口唇下に狭い無文帯をおき、微隆起帯を横 位に巡らせる。以下縄文施文。原体はR(↑)。 微隆起帯上は横位、以下縦位。 | 配石中心部 |
| 243-3 122 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部はやや内湾し、幅広の無文帯をおく。 以下縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石北東端 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第239図 27号配石遺構遺物出土状況

(遺物は1:8)

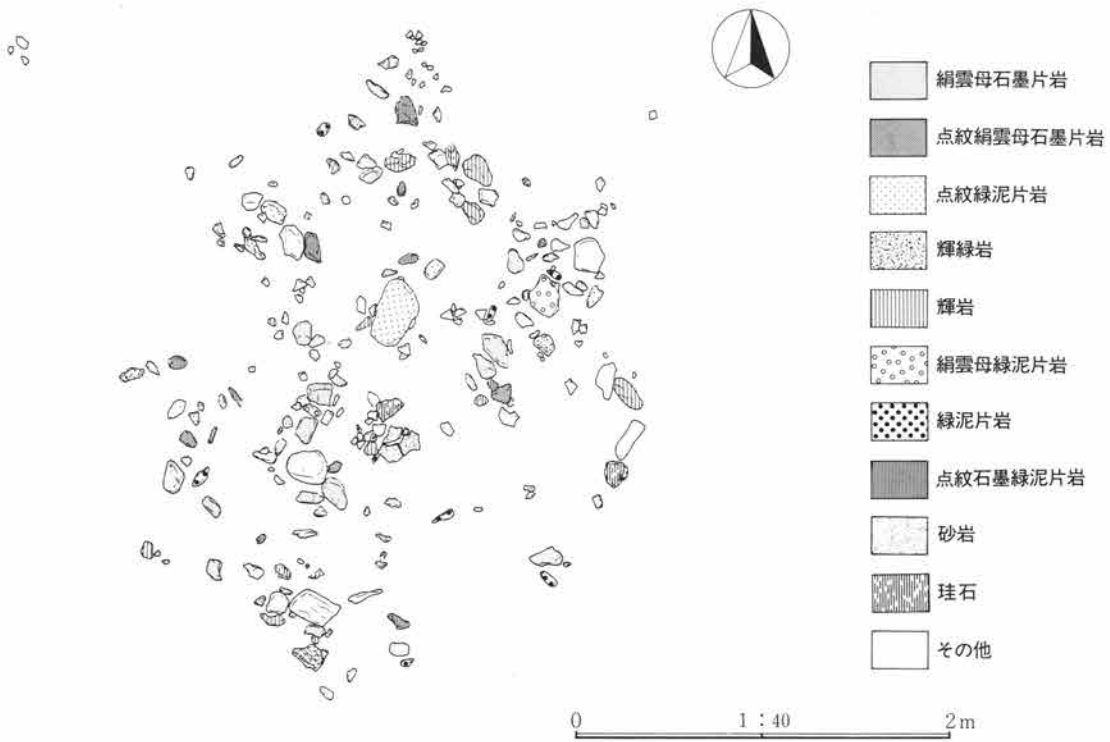


第240図 27号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

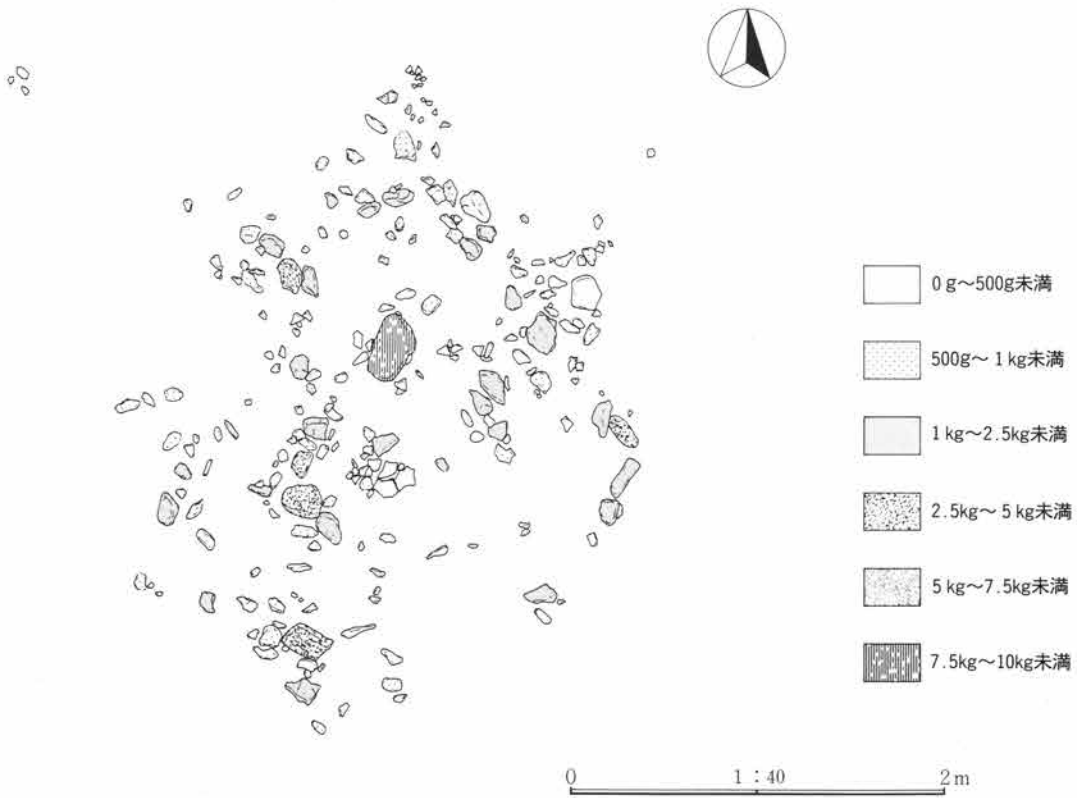
27号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|------|------------------|---|--|-------|
| 243-4 122 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7~9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。 | 口縁部は内湾し、狭い無文帯をおく。1条の沈線を巡らせ、以下縄文施文。 原体はL(長縦転がし)。 | 配石南部 |
| 243-5 122 | 口縁部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐色。 | 隆帯による楕円等の文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR(長横転がし)。 | 配石中心部 |

5 配石遺構〈27号〉

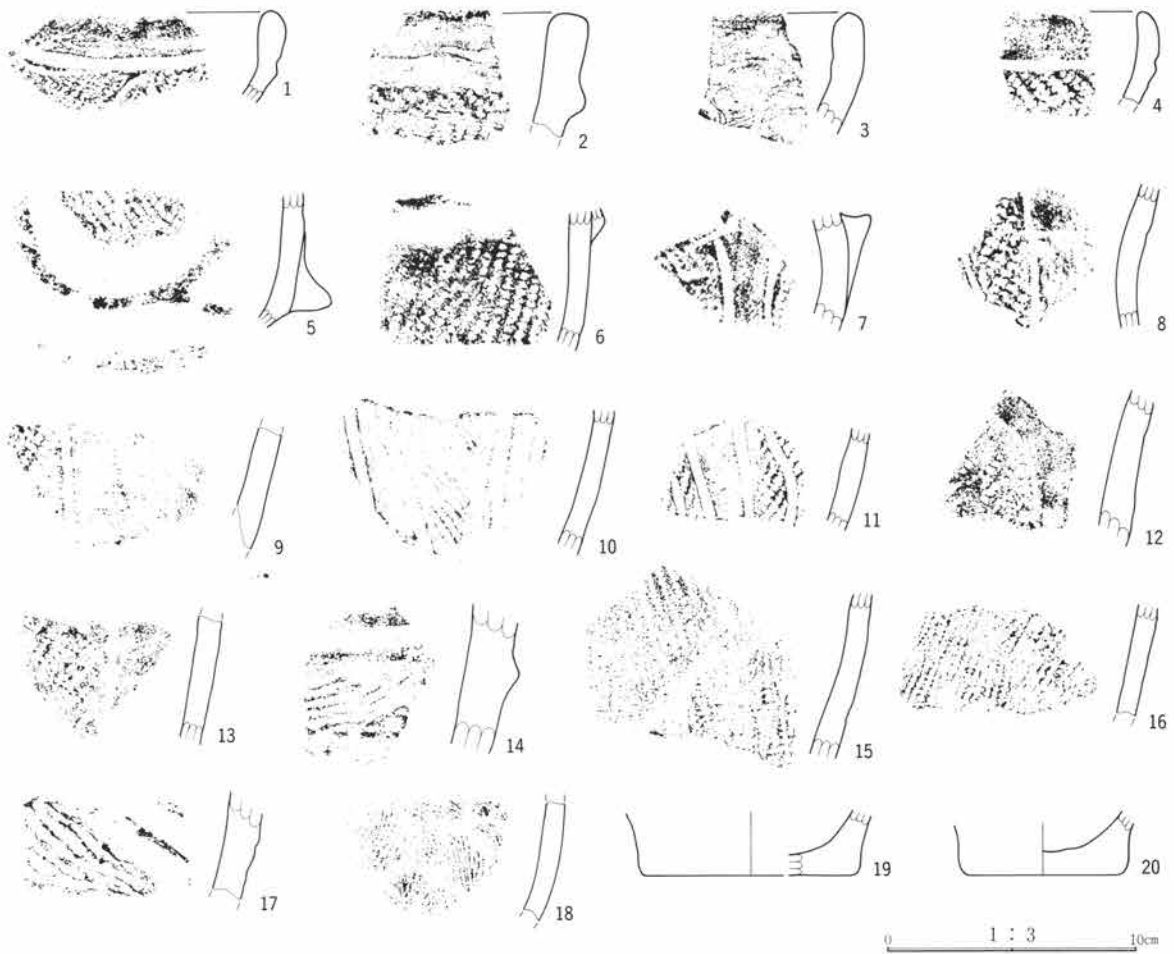


第241図 27号配石遺構石材別分布



第242図 27号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

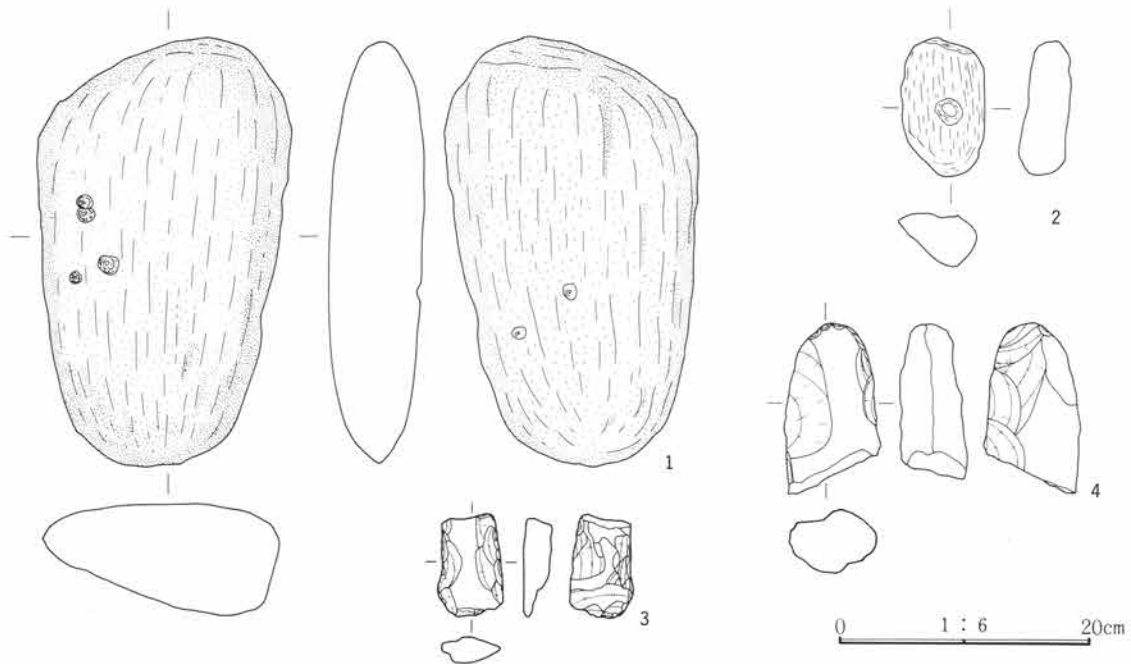


第243図 27号配石遺構出土土器

27号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|---|-------|
| 243-6 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。 | 微隆起帯を巡らせ、以下縄文施文。 原体はR↓↑縦転がし。 | 配石中心部 |
| 243-7 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐色。 | 沈線による区画を施し、縄文施文。 原体はL↓↑縦転がし。 | 配石北端 |
| 243-8 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR↓↑縦転がし。 | 配石南西部 |
| 243-9 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR↓↑縦転がし。 | 配石中心部 |
| 243-10 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は灰黄褐色。 | 沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はL↓↑縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 243-11 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR↓↑縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南部 |
| 243-12 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入。 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR↓↑縦転がし。 外面は荒れている。 | 配石東部 |

5 配石遺構〈27号〉



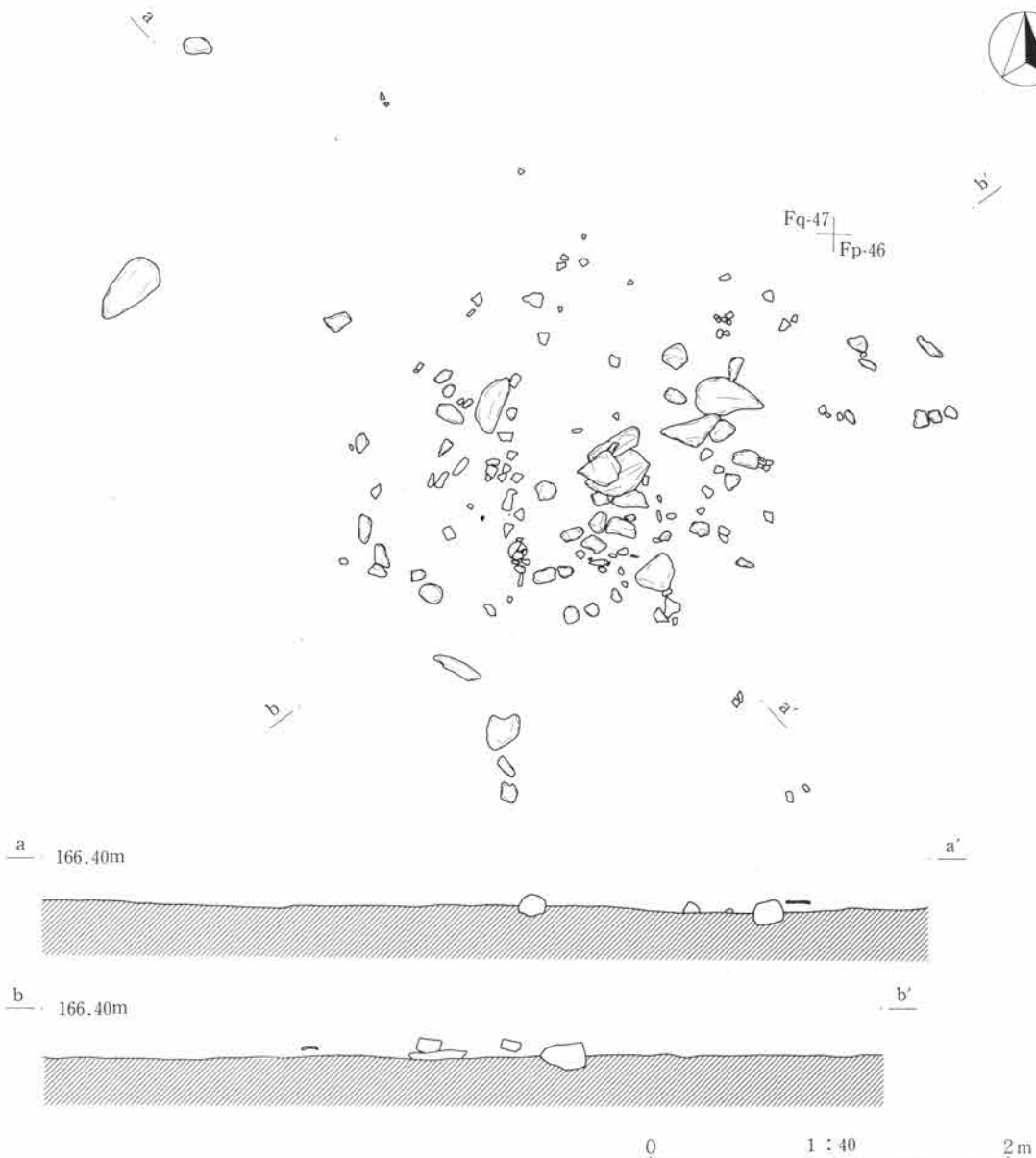
第244図 27号配石遺構出土石器

27号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|---|-------|
| 243-13 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR(↓)縦転がし。 外面は荒れている。 | 配石中心部 |
| 243-14 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16~18mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯を巡らせ、以下縄文施文。 原体はR(↓)縦転がし。 | 配石北西端 |
| 243-15 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はL(↓)縦転がし。 | 配石北部 |
| 243-16 122 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(↓)縦転がし。 | 配石北西端 |
| 243-17 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 隆帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄 文施文。原体はR(↓)横転がし。 | 配石西部 |
| 243-18 122 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 条線が施されている。 | 配石中心部 |
| 243-19 122 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径86mm。 外面の色調は灰褐色、内面は褐色。 | 内外面は丁寧な調整が行われている。 内面に煤が付着している。 | 配石南東部 |
| 243-20 122 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径62mm。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。 | 内外面は丁寧な調整が行われている。 | 配石北東端 |

27号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|--------------|------|-----|-------|---|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 244-1 123 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 33.8 | 20.3 | 8.3 | 8,600 | 両面に6個の凹み。最大の凹みは長15mm、短13mm、 深5mm。最小は長11mm、短10mm、深2mmで、平均は 長13mm、短11mm、深3mm。 | 配石中央 部 |
| 244-2 123 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 11.0 | 6.8 | 4.2 | 450 | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は22mm、短 径19mm、深さ2mmである。 | 配石西北 端 |
| 244-3 123 | 打製石斧 | 基部欠損 | 熱変成岩 | (8.1) | 5.2 | 2.3 | (100) | バチ(II b)。基部と比較して非常に薄手の刃部を 持つ。 | 配石中央 部 |
| 244-4 123 | | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (13.4) | 7.6 | 5.2 | (740) | 敲打途中、両面に粗割り痕残す。 | 配石北端 |



第245図 28号配石遺構

28号配石遺構（第245～250図、PL. 69、123）

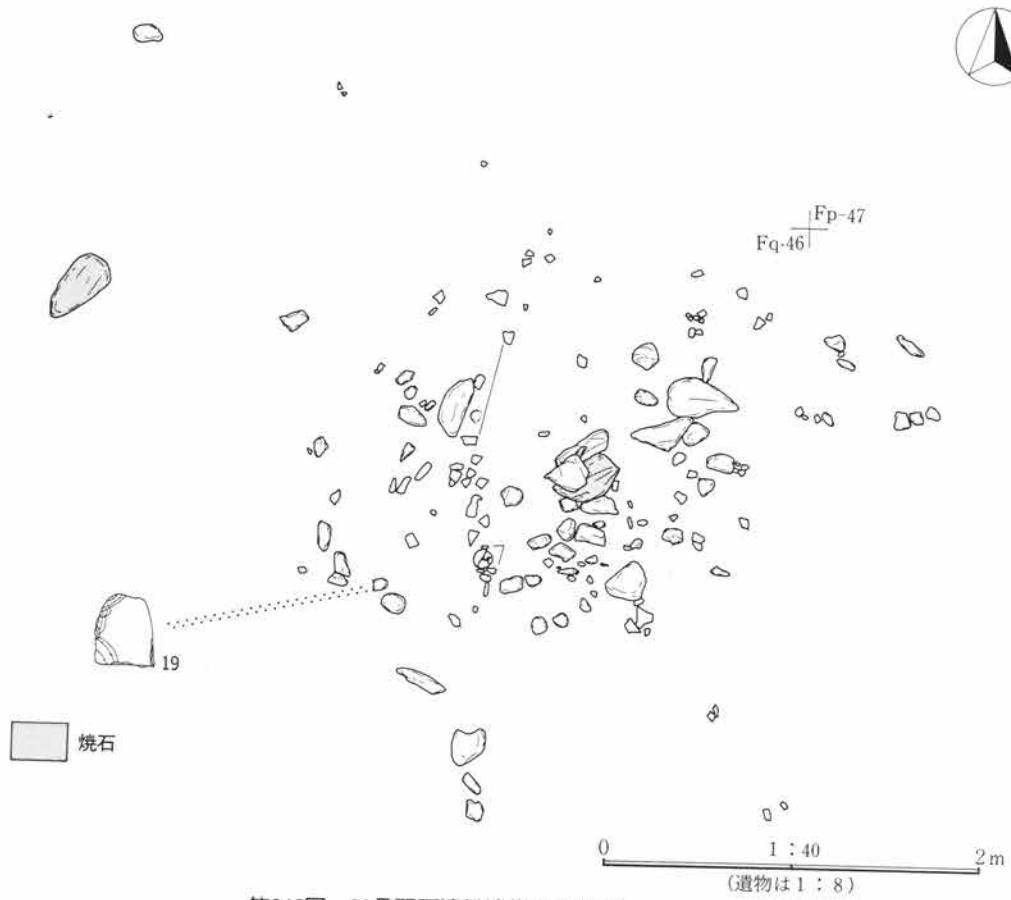
位置 Fq-46グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西南西44m(遺構の中心までの距離)、27号配石遺構の南11mの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に遺構を確認、13日に写真撮影を実施した。1/10実測図を作成後、遺物の取り上げ作業を実施。当遺構は27号配石遺構と同様に自然の礫層上に構築されていたために、その把握は困難を極めた。配石遺構の石の取り上げを実施し下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

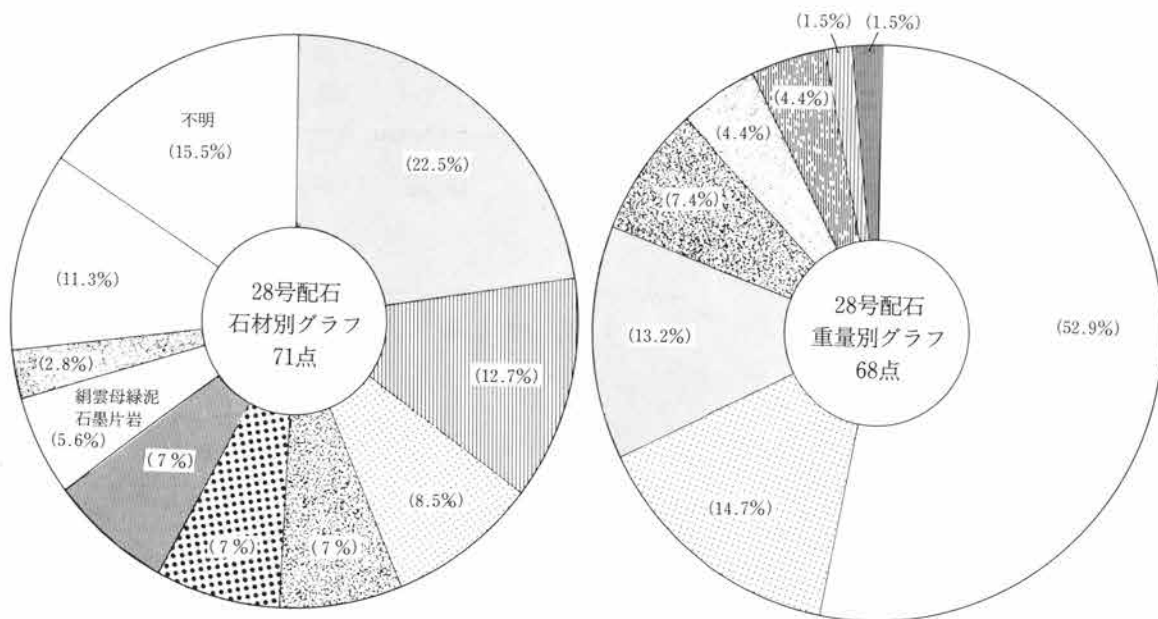
重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

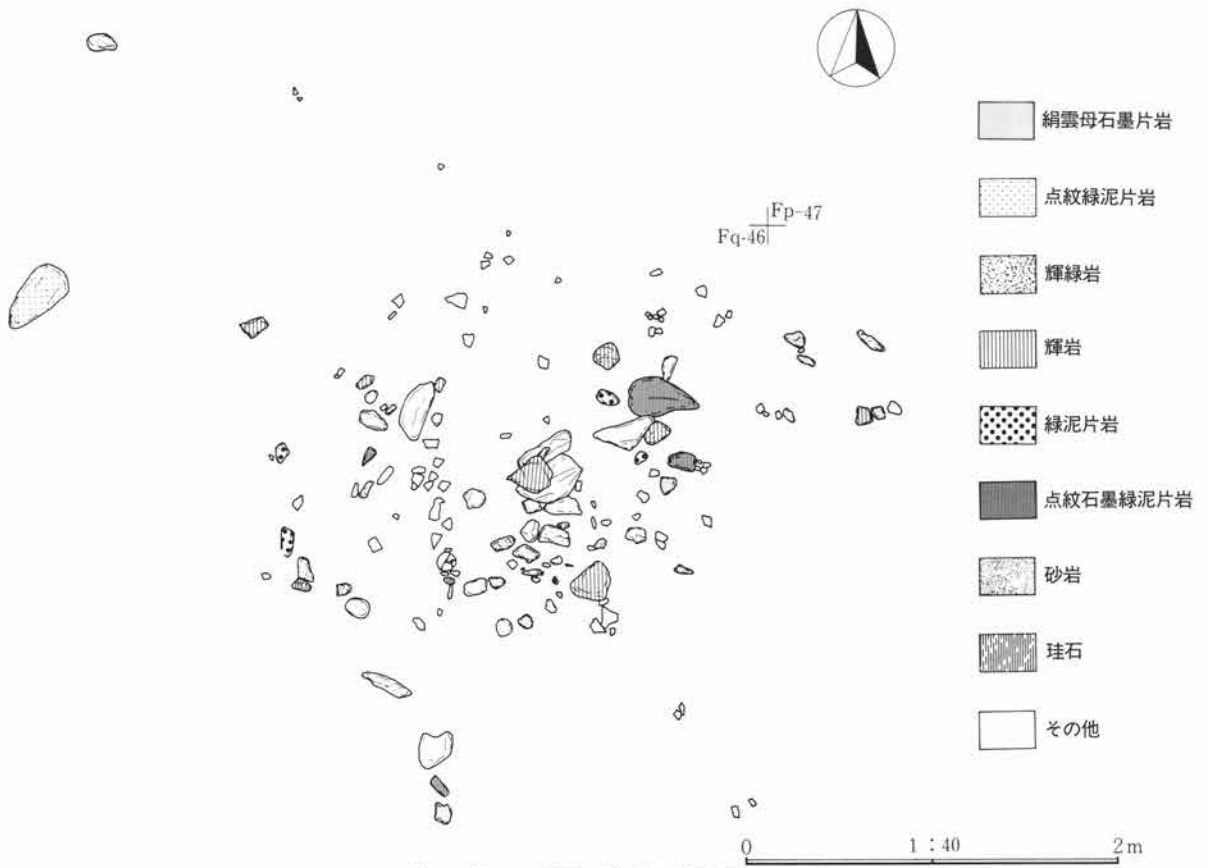
形状・配石状況 長径3m、短径2m30cmの半円状の範囲に石の集中と土器片の分布が認められる。71点の石から構成され、中心部にやや大きな石を配置している。配石の中心に大きな石を配置するのは27号配石遺構



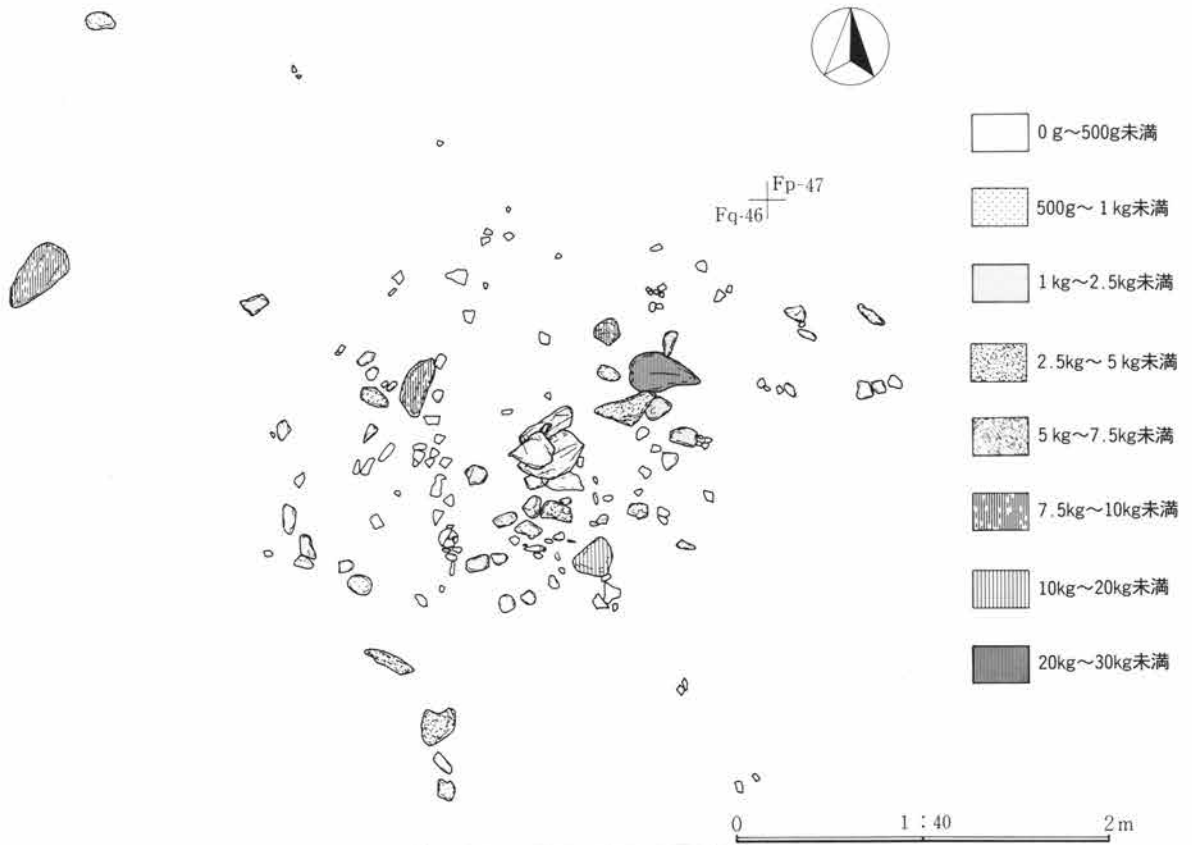
第246図 28号配石遺構遺物出土状況



第247図 28号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第248図 28号配石遺構石材別分布



第249図 28号配石遺構重量別分布

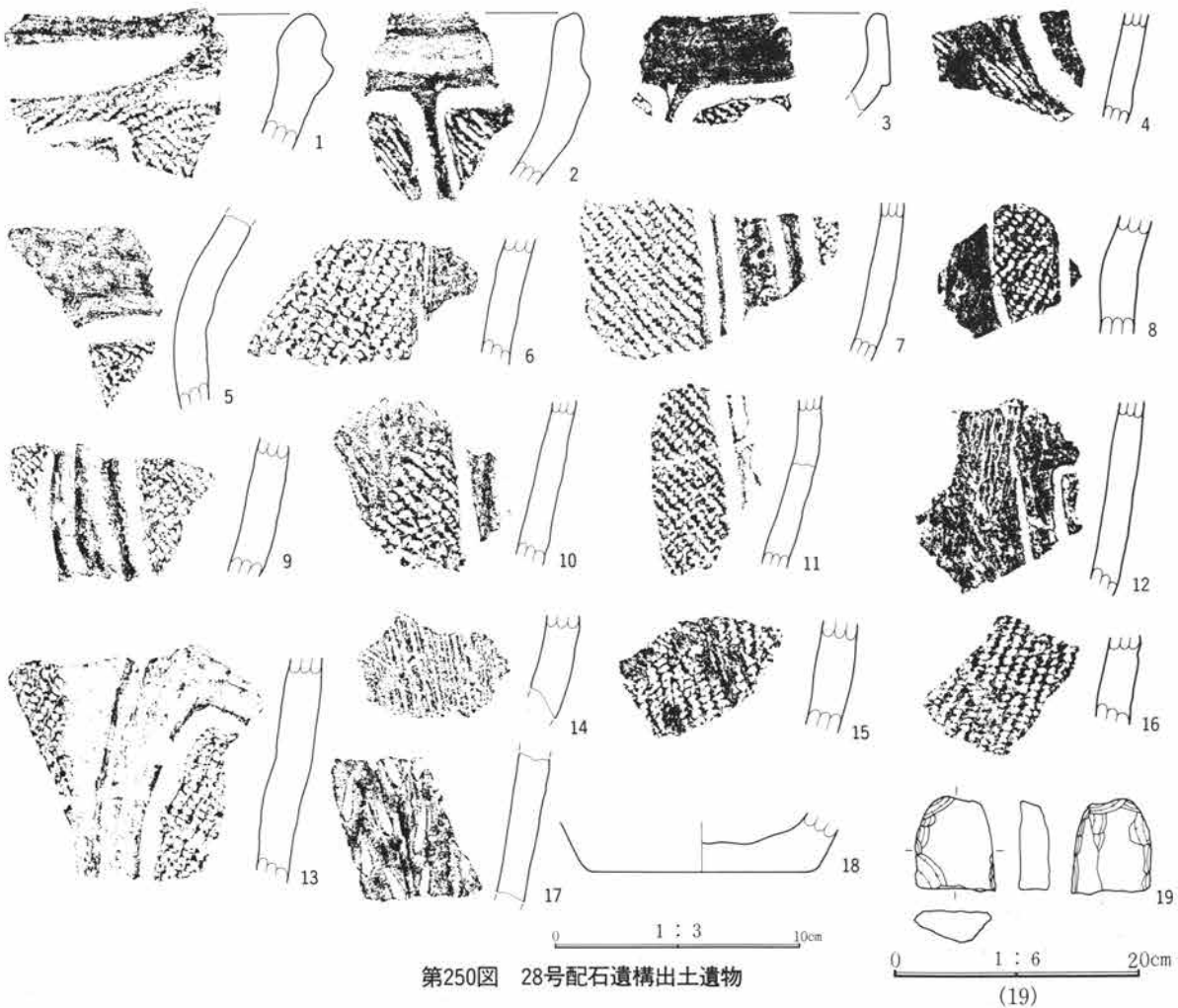
と同じである。配石の面積は約6.9m²である。

使用石材 14種類の石材が確認された。71点の石材別点数は絹雲母石墨片岩16点(22.5%)、輝岩9点(12.7%)、点紋緑泥片岩6点(8.5%)、輝緑岩・緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩各5点(各7%)、絹雲母緑泥石墨片岩4点(5.6%)、絹雲母石墨緑泥片岩・砂岩・珪石各2点(各2.8%)、石墨緑泥片岩・紅簾絹雲母片岩・角閃岩・変斑礫岩各1点(各1.4%)であり、不明は11点(15.5%)を数えた。不明の石を除いた60点中40点(66.7%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は68点である。その内訳は、500g未満の石36点(52.9%)、500g～1kg未満の石10点(14.7%)、1kg～2.5kg未満の石9点(13.2%)、2.5kg～5kg未満の石5点(7.4%)、5kg～7.5kg未満の石3点(4.4%)、7.5kg～10kg未満の石3点(4.4%)、10kg～20kg未満の石1点(1.5%)、20kg～30kg未満の石1点(1.5%)である。

遺物出土状況 縄文土器片82点(口縁部10点、胴部71点、底部1点)が配石中心のやや大きな石を囲うように分布している。加曽利E4式土器を主体に、E3式土器片も出土している。磨製石斧の未製品1点が出土し、焼石は71点中4点で、5.6%を占めている。

所見 出土遺物から判断して当遺構は、縄文時代中期加曽利E4式期の配石遺構である。



第250図 28号配石遺構出土遺物

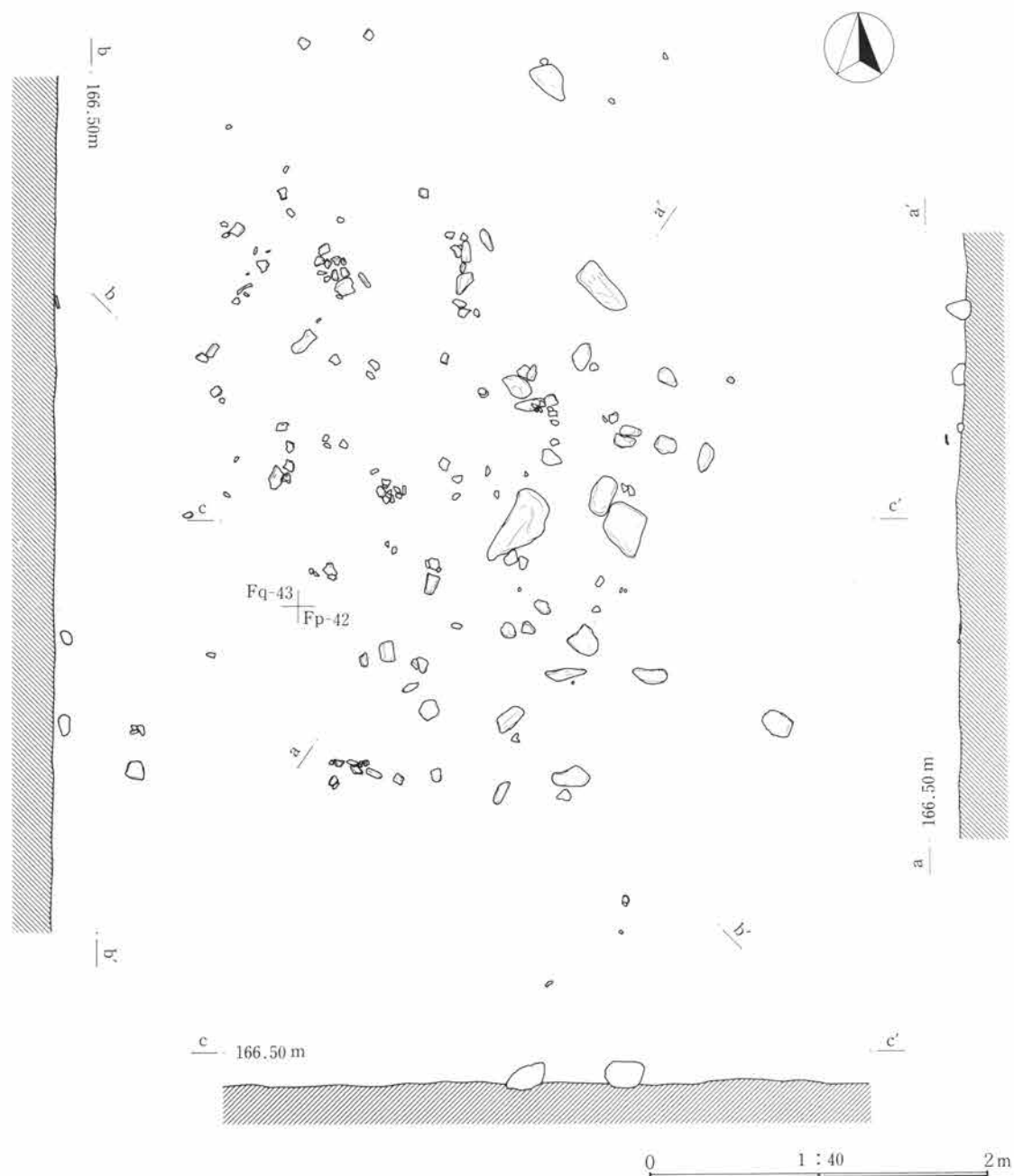
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

28号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|---|--|-------|
| 250-1 123 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 波状口縁部片。太い沈線による文様が描かれ、地文に縄文施文。 原体はL(↑)横・縦転がし。 | 配石西部 |
| 250-2 123 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明褐色。 | 口縁部はやや内湾。口唇下に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。それと接続する微隆起帯を垂下。区画内にL(↑)縦位。 | 配石東部 |
| 250-3 123 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線により楕円等の文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR(↑)横転がし。 | 配石南西部 |
| 250-4 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 配石東部 |
| 250-5 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR(↑)。 内面に煤が付着している。 | 配石西部 |
| 250-6 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石西部 |
| 250-7 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。 | 微隆起帯を巡らせ、区画内に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石北西部 |
| 250-8 123 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石中心部 |
| 250-9 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石南部 |
| 250-10 123 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒色。 | 地文に縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北東部 |
| 250-11 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 | 配石北部 |
| 250-12 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 沈線と条線が施される。 | 配石東端 |
| 250-13 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石南東部 |
| 250-14 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。 | 条線を施している。 | 配石東南端 |
| 250-15 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)。 | 配石西端 |
| 250-16 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石西部 |
| 250-17 123 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11～13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 押し引き状の沈線を施している。 | 配石東部 |
| 250-18 123 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径90mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 底面はやや荒れている。 | 配石南西部 |

28号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|----|------|-----|--------------|-----|-----|-------|--------|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 250-19 123 | | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (7.7) | 6.7 | 2.5 | (190) | 粗割り段階。 | 配石南西 |



第251図 29号配石遺構

29号配石遺構（第251～257図、PL. 70、123）

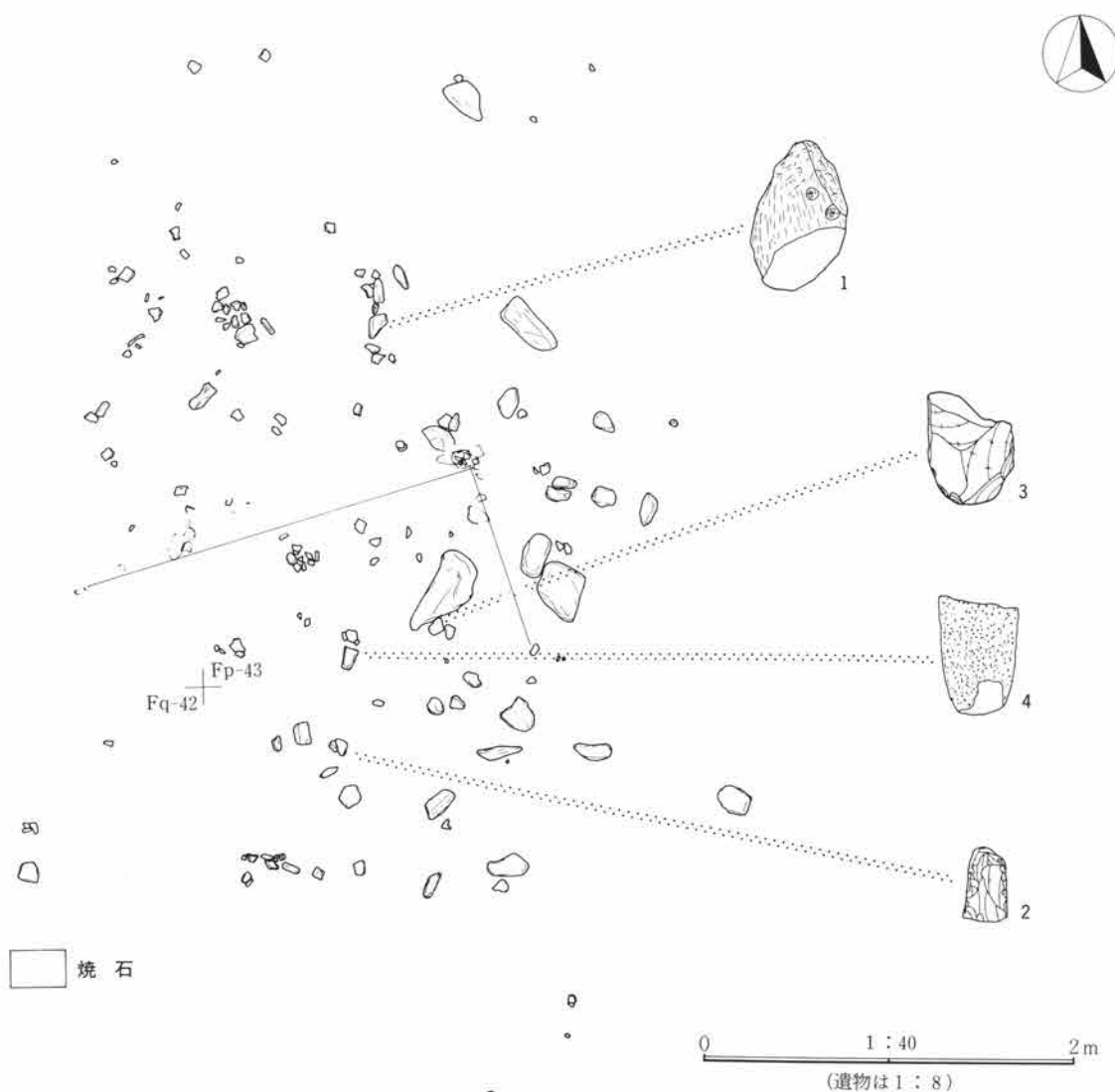
位置 Fp・Fq-42・43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南42m（遺構の中心までの距離）、47号配石遺構の南南東5m50cmの所に位置している。

経過 0区（昭和62年度調査区）から検出。7月13日に28・30号配石遺構と同時に写真撮影を実施した。1/10実測図作成の後、遺物取り上げ作業を実施した。その後、配石遺構の石を取り上げ、下部の調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

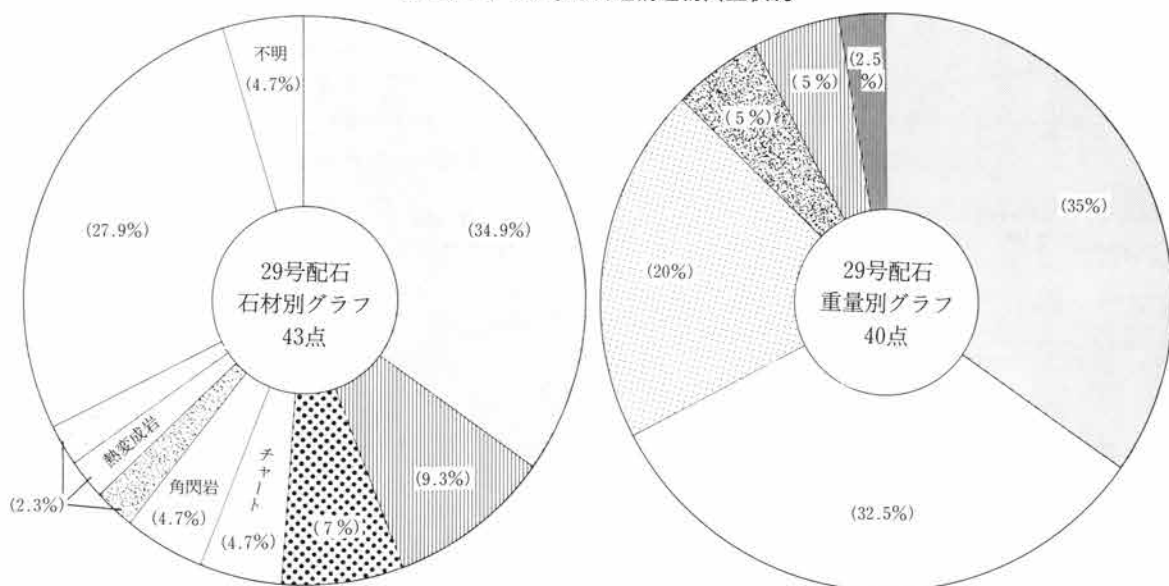
重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

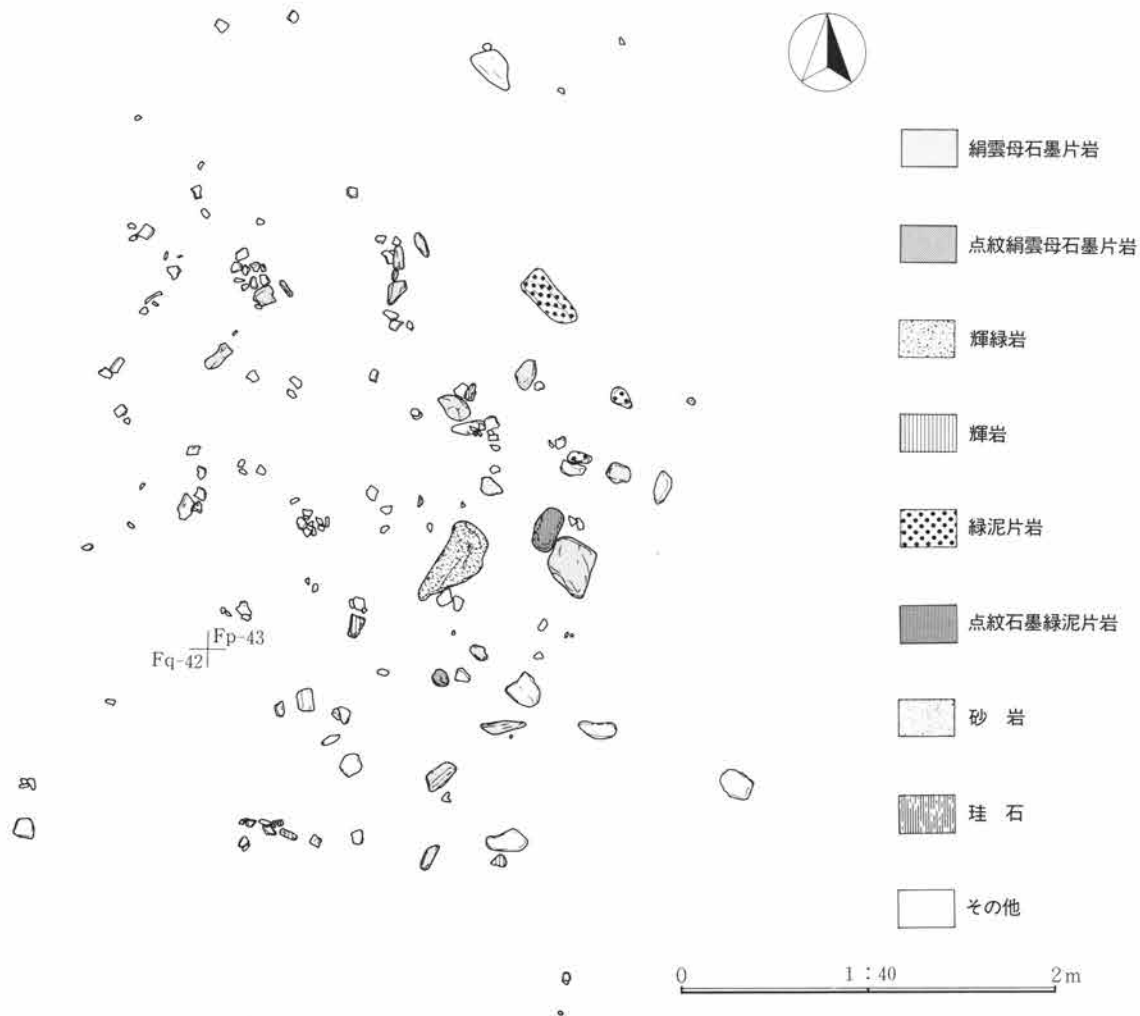
形状・配石状況 長径3m90cm、短径3m50cmの範囲に配石が施されている。43点の石と106点の土器片から



第252図 29号配石遺構遺物出土状況



第253図 29号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第 254 図 29 号配石遺構石材別分布

構成されていた。遺構東部にやや大きな石を使用している。配石の面積は約11.7㎡である。

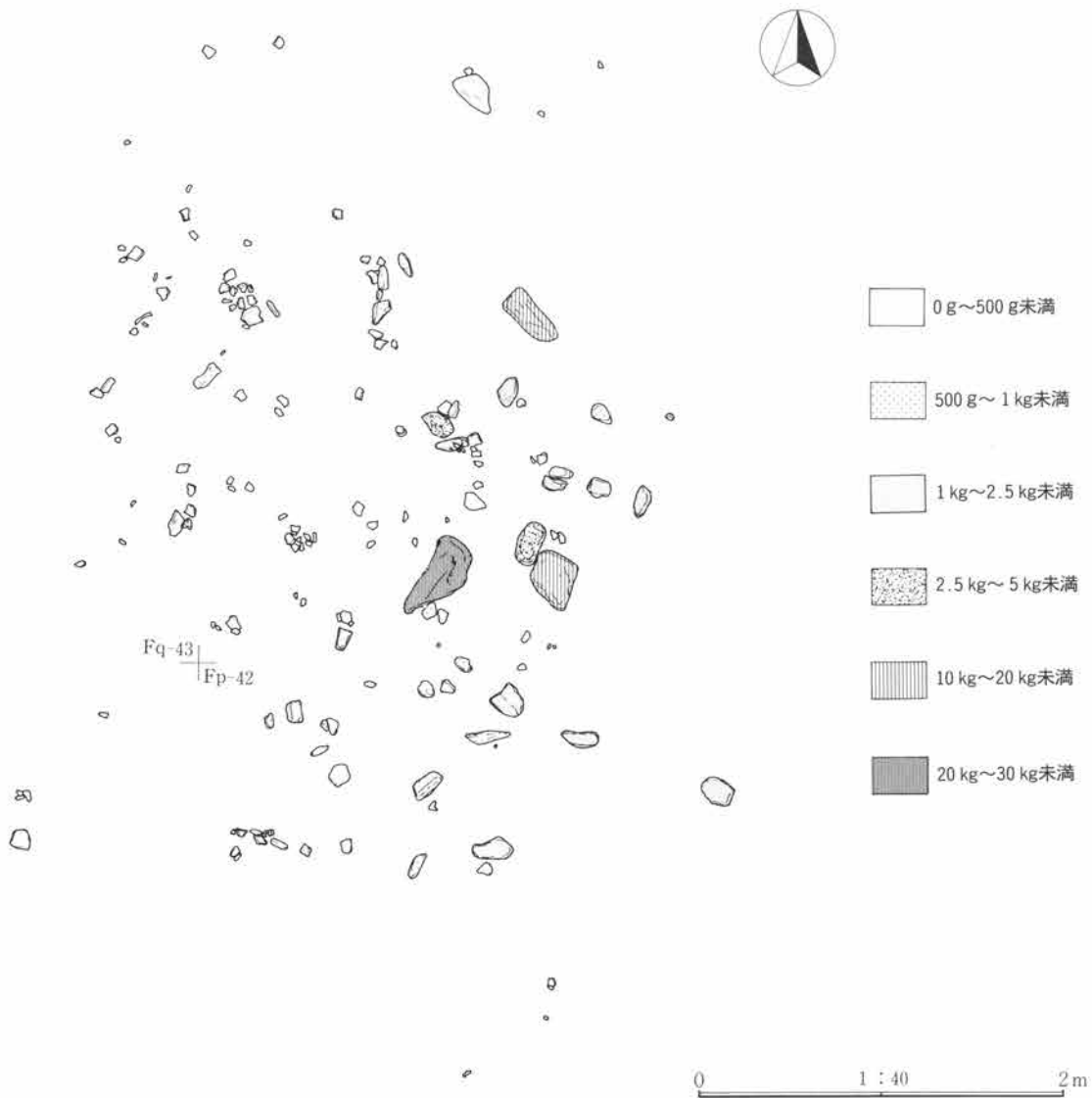
使用石材 20種類の石材が確認された。43点の石材別点数は絹雲母石墨片岩15点(34.9%)、輝岩4点(9.3%)、緑泥片岩3点(7%)、チャート・角閃岩各2点(各4.7%)、輝緑岩・点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・緑簾緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・点紋石墨緑泥片岩・石墨片岩・緑泥石墨片岩・紅簾絹雲母片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・熱変成岩・砂岩・綠色珪質板岩・珪石各1点(各2.3%)であり、不明は2点(4.7%)を数えた。不明の石を除いた41点中28点(68.3%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は40点である。その内訳は、1kg～2.5kg未満の石14点(35%)、500g未満の石13点(32.5%)、500g～1kg未満の石8点(20%)、2.5kg～5kg未満の石2点(5%)、10kg～20kg未満の石2点(5%)、20kg～30kg未満の石1点(2.5%)である。

遺物出土状況 106点の縄文土器片が遺構周辺から満遍なく出土している。土器片の部位別点数は、口縁部9点、胴部93点、底部4点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も含まれていた。石器では多孔石1点が遺構北部から、未製品を含めた磨製石斧2点は南西部から、打製石斧1点は南端から出土し、また石皿(未掲載)が立石として転用されていた。石器含有率は11.6%である。また焼石は43点中3点の出土で、7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

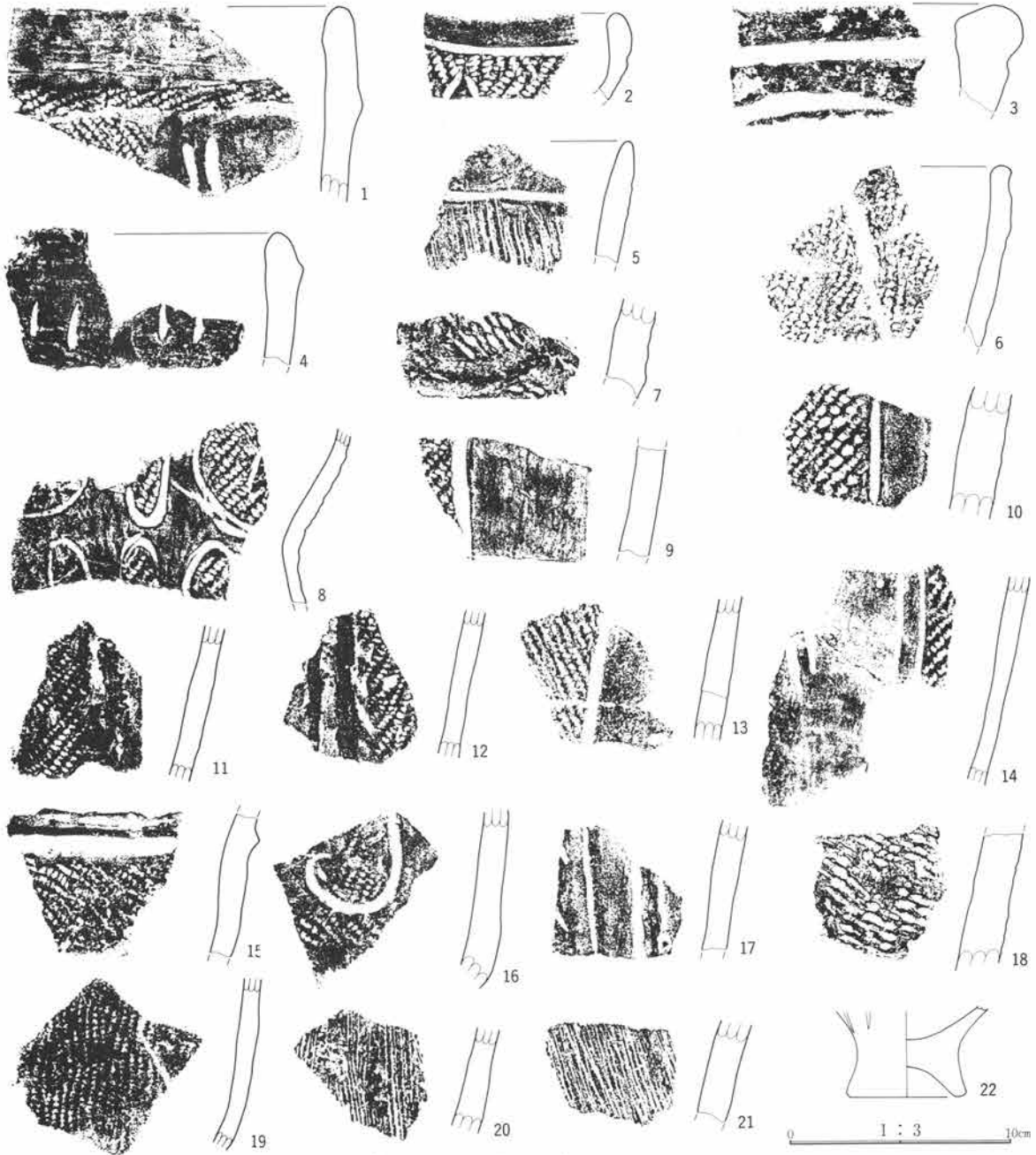
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第 255 図 29 号配石遺構重量別分布

29号配石遺構土器観察表

| 図番 Pl. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|------|----------------|---|--|-------|
| 256-1 123 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおいて、1条の微隆起帯を巡らす。それと接続するように微隆起帯を垂下。区画内にL字横・縦施文。 | 配石西部 |
| 256-2 123 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 内湾する波状口縁部片。口唇部は無文で1条の沈線を巡らせる。胴部は沈線による文様が描かれ縄文施文。原体はR字横・縦位。 | 配石北西部 |
| 256-3 123 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚20~30mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれている。 | 配石北西部 |
| 256-4 123 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。以下押し引き状の沈線を施文。 | 配石中心部 |
| 256-5 123 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい橙色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を巡らせる。以下条線を施している。 | 配石北西部 |



第256図 29号配石遺構出土土器

29号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|---|--|-------|
| 256-6 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR(↓)縦転がし。 沈線を施している。 土器面は柔軟。 | 配石北東部 |
| 256-7 123 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明褐色。 | 隆帯による楕円等の文様を描いている。 区画内に縄文施文。原体はR(↓)横転がし。 | 配石北端 |
| 256-8 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚5~8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 口縁部は内湾し、胴部で括れる器形と推定 される。文様は細沈線によって描かれ、区 画内に縄文施文。原体はR(↓)縦転がし。 | 配石西部 |

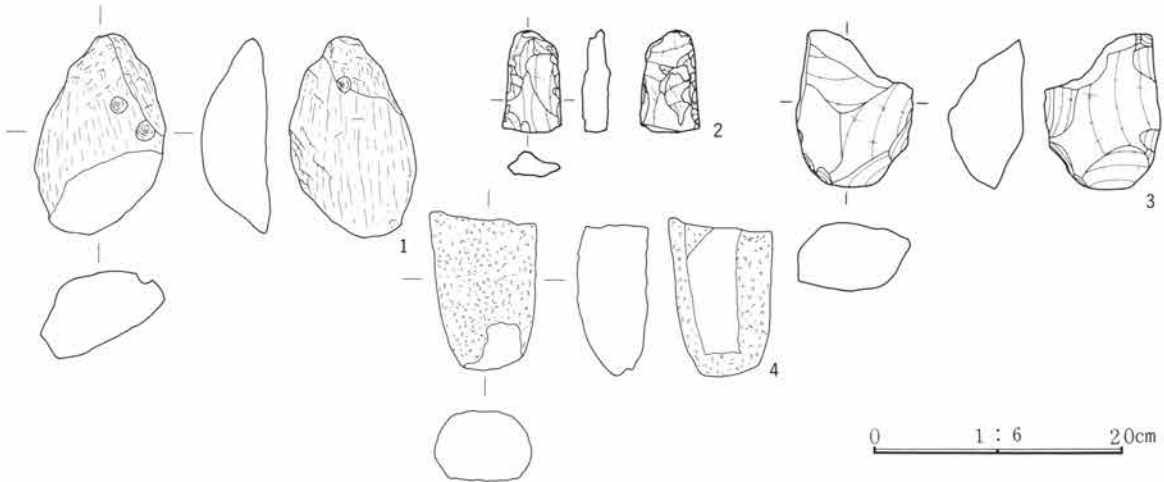
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

29号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|--|-------|
| 256-9 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 沈線により区画され、区画内に縄文施文。 原体はR{土}縦転がし。 | 配石北部 |
| 256-10 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 細沈線により区画され、区画内に縄文施文。 原体はR{土} (0段多条) 縦転がし。 | 配石北部 |
| 256-11 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はにぶい褐色。 | 隆帯を垂下させ縄文施文。 原体はR{土}縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石南部 |
| 256-12 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 隆帯を垂下させ縄文施文。 原体はR{土}縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石北東部 |
| 256-13 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{土}縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南東端 |
| 256-14 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | ナデつけによる微隆起帯を垂下させ、縄文 施文。原体はR{土}縦転がし。 | 配石北西部 |
| 256-15 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は褐灰色。 | 1条の微隆起帯を巡らせ、以下縄文施文。 原体はR{土}。 | 配石北部 |
| 256-16 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR{土}。 沈線。 | 配石北西部 |
| 256-17 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は灰赤色。 | 微隆起帯を垂下させ、押し引き状沈線を施 している。 | 配石東部 |
| 256-18 123 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚18mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はL{土}縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石中心部 |
| 256-19 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。 | 縄文施文。原体はR{土}。 外面は荒れている。 | 配石北部 |
| 256-20 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 条線を施している。 内面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 256-21 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は橙色。 | 条線を施している。 | 配石南部 |
| 256-22 123 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 底径55mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。 | 細沈線が施されている。 | 配石北東部 |

29号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|------------|------|-----|---------|---|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 257-1 123 | 多孔石 | % | 絹雲母石墨片岩 | (15.3) | 10.3 | 6.9 | (900) | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長14mm、短14mm、 深5mm。最小は長11mm、短10mm、深3mmで、平均 は長13mm、短12mm、深4mm。 | 配石北端 |
| 257-2 123 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 熱変成岩 | (8.0) | 4.7 | 1.5 | (100) | バチ (II b)。 | 配石南端 |
| 257-3 123 | | 基部欠損 | 角閃岩 | (12.3) | 9.3 | 6.1 | (900) | 粗割り段階。 | 配石中央 部 |
| 257-4 123 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 緑泥片岩 | (12.5) | 8.7 | 5.7 | (1,050) | 敲打途中。片面に自然面を残す。 | 配石中央 部 |



第 257 図 29 号配石遺構出土石器

30号配石遺構 (第258～264図、PL. 71、123)

位置 Fs-42グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西南60m(遺構の中心までの距離)、31号配石遺構の南南東5mの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に遺構を検出し、13日に写真撮影を実施した。その後、図面の作成、遺物取り上げを行い、下部調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。31号配石遺構に近接している。

覆土 竖穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

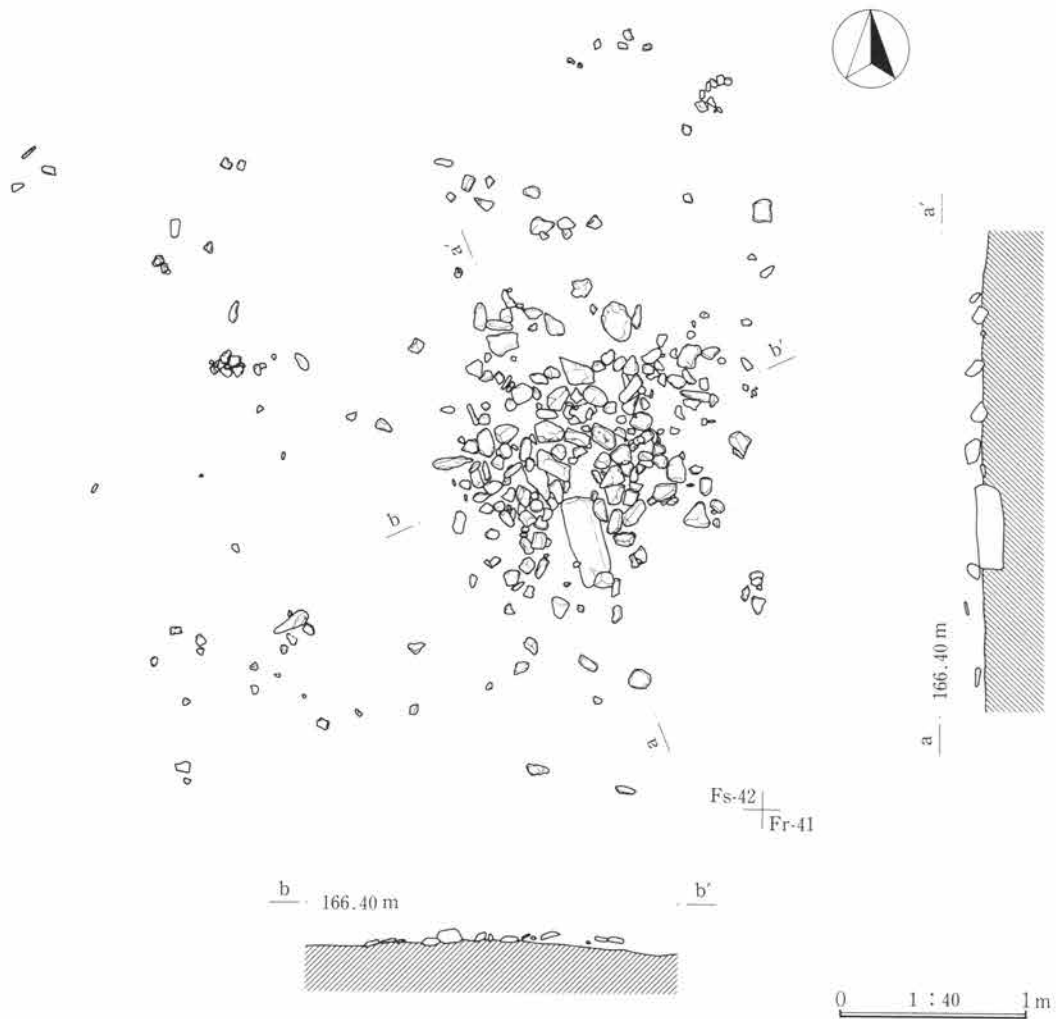
形状・配石状況 長径1m60cm、短径1m50cmの範囲に集中して石が配置されている。この配石の南端には、長径49cm・短径20cm・厚さ19cm・重量28.8kgの大石が配置されているが、当初は立石として機能していたものであろうか。配石の面積は約2.6㎡である。またこの配石の周囲にも散漫的な石の分布が認められる。

使用石材 27種類の石材が確認された。197点の石材別点数は絹雲母石墨片岩58点(29.4%)、珪石20点(10.2%)、緑泥片岩16点(8.1%)、点紋緑泥片岩15点(7.6%)、輝岩12点(6.1%)、輝緑岩10点(5.1%)、点紋石墨緑泥片岩9点(4.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩6点(3%)、点紋絹雲母石墨片岩5点(2.5%)、斑斨岩4点(2%)、絹雲母緑泥片岩・石墨緑泥片岩・石墨片岩・緑泥石墨片岩各3点(各1.5%)、赤色珪質板岩・チャート・緑簾緑泥片岩・紅簾絹雲母片岩各2点(各1%)、石墨絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・角閃岩・点紋絹雲母緑泥片岩・輝緑凝灰岩・熱変成岩・緑色珪質板岩・石英安山岩・石英斑岩各1点(各0.5%)であり、不明は13点(6.6%)を数えた。不明の石を除いた184点中128点(70%)の石が片岩類である。立石の可能性のある石の石材は点紋絹雲母石墨片岩である。

石材重量 重量の判明している石は189点である。その内訳は、500g未満の石139点(73.5%)、500g～1kg未満の石26点(13.8%)、1kg～2.5kg未満の石19点(10.1%)、2.5kg～5kg未満の石4点(2.1%)、20kg～30kg未満の石1点(0.5%)である。最大重量は立石の可能性のある石であった。

遺物出土状況 94点の土器片が出土している。その部位別点数は口縁部10点、胴部81点、底部3点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では多孔石2点、凹石2点、敲石1点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。石器含有率は3%である。また焼石は197点中17点の出土で、8.6%を占めている。

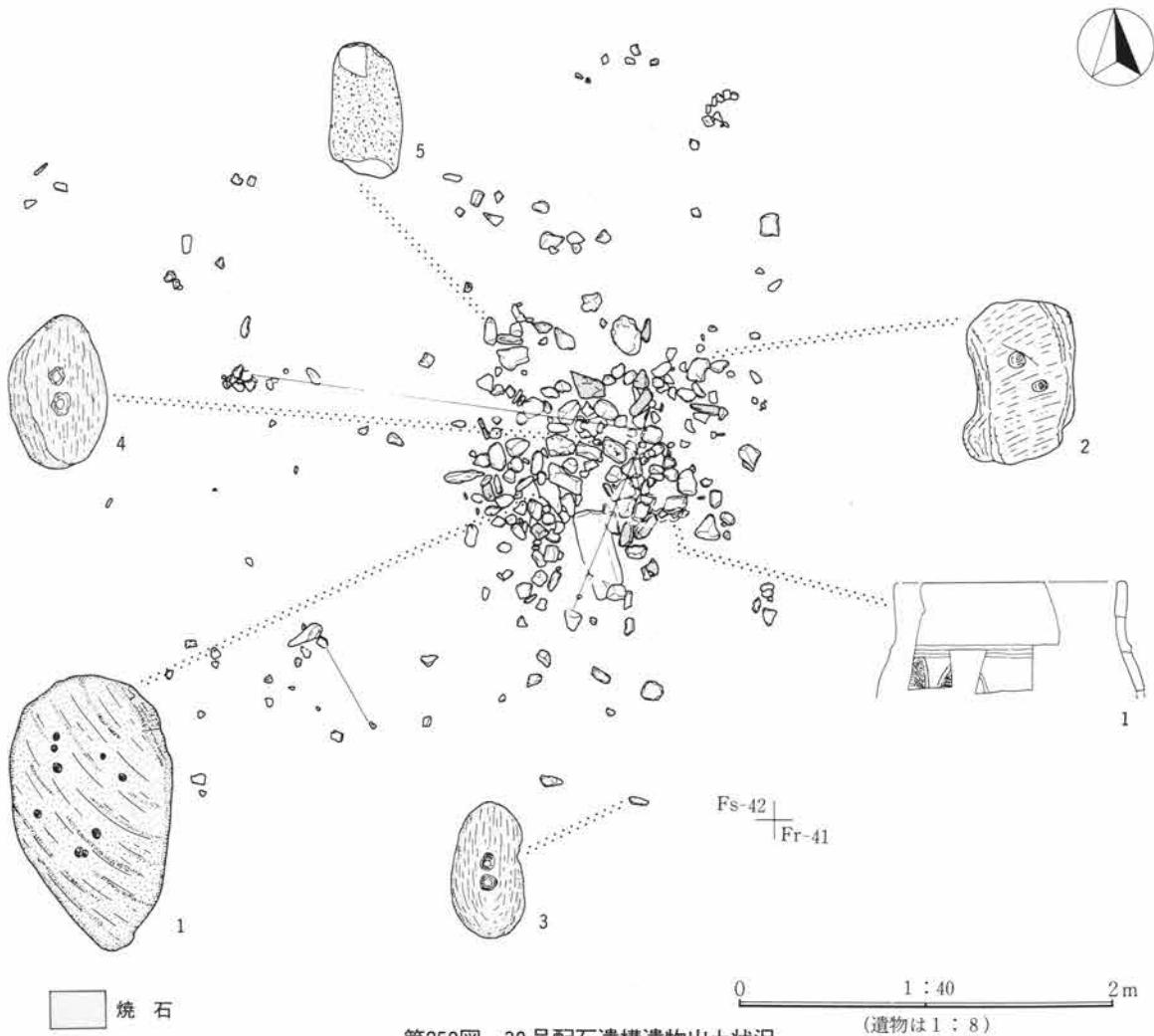
所見 当遺構は立石を有する配石遺構の可能性が高いが、下部には土壌は存在しなかった。出土遺物から判断して、縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。



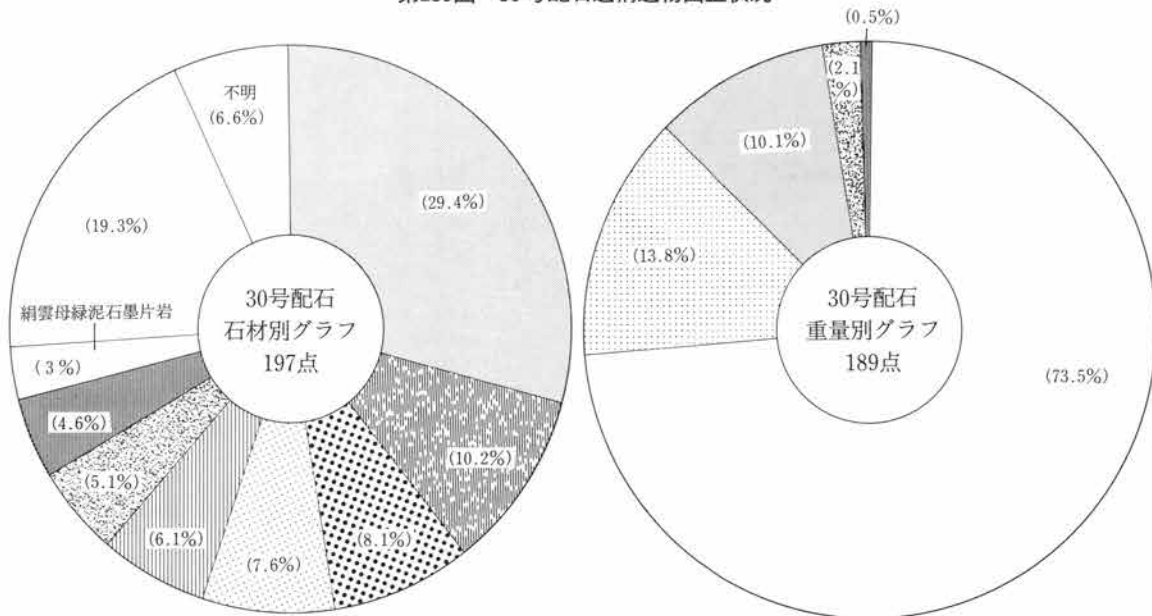
第258図 30号配石遺構

30号配石遺構土器観察表

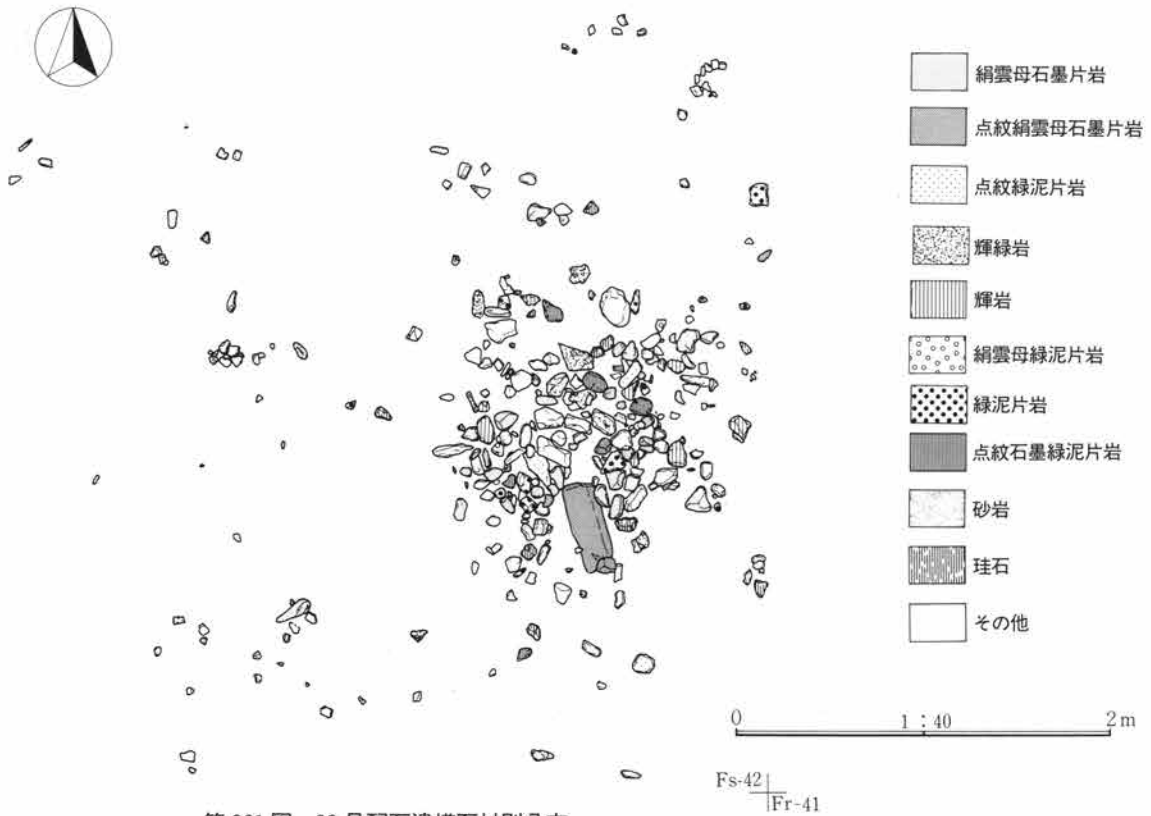
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|--|--|-------|
| 263-1 123 | 口縁 部～ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器 (両耳壺) の破片。器厚11mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 口唇下に幅広の無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らせる。胴部には沈線で「V」字 状や「∩」状の区画文を施す。 区画内にL 長縦転がし。 | 配石中心部 |
| 263-2 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色。 | 口縁部はやや内湾する。隆帯と沈線による 楕円等の文様を描く。地文に縄文施文。原 体はR 上横転がし。 | 配石北西部 |
| 263-3 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部はやや内湾する。1条の沈線を巡ら せ、垂下する。区画内に縄文施文。原体は L 長縦転がし。土器面は柔軟。 | 配石北東部 |
| 263-4 123 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14～16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面は灰褐色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、 地文に縄文施文。原体はR 上横転がし。 外面は荒れている。 | 配石北西部 |
| 263-5 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11～17mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐灰色。 | 1条の微隆起帯を巡らせ、垂下。区画内に 縄文施文。原体はL 長縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北西部 |
| 263-6 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13～15mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はにぶい黄橙色。 | 沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はR 上縦転がし。 | 配石北東部 |



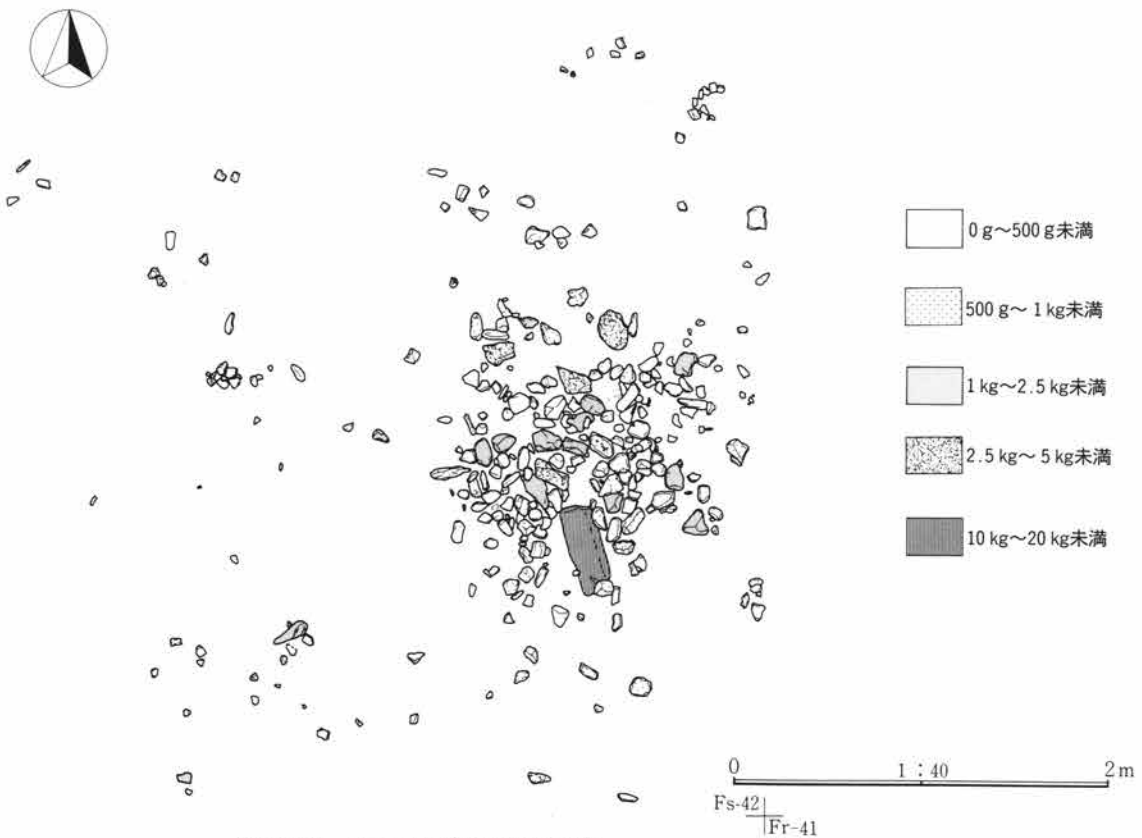
第259図 30号配石遺構遺物出土状況



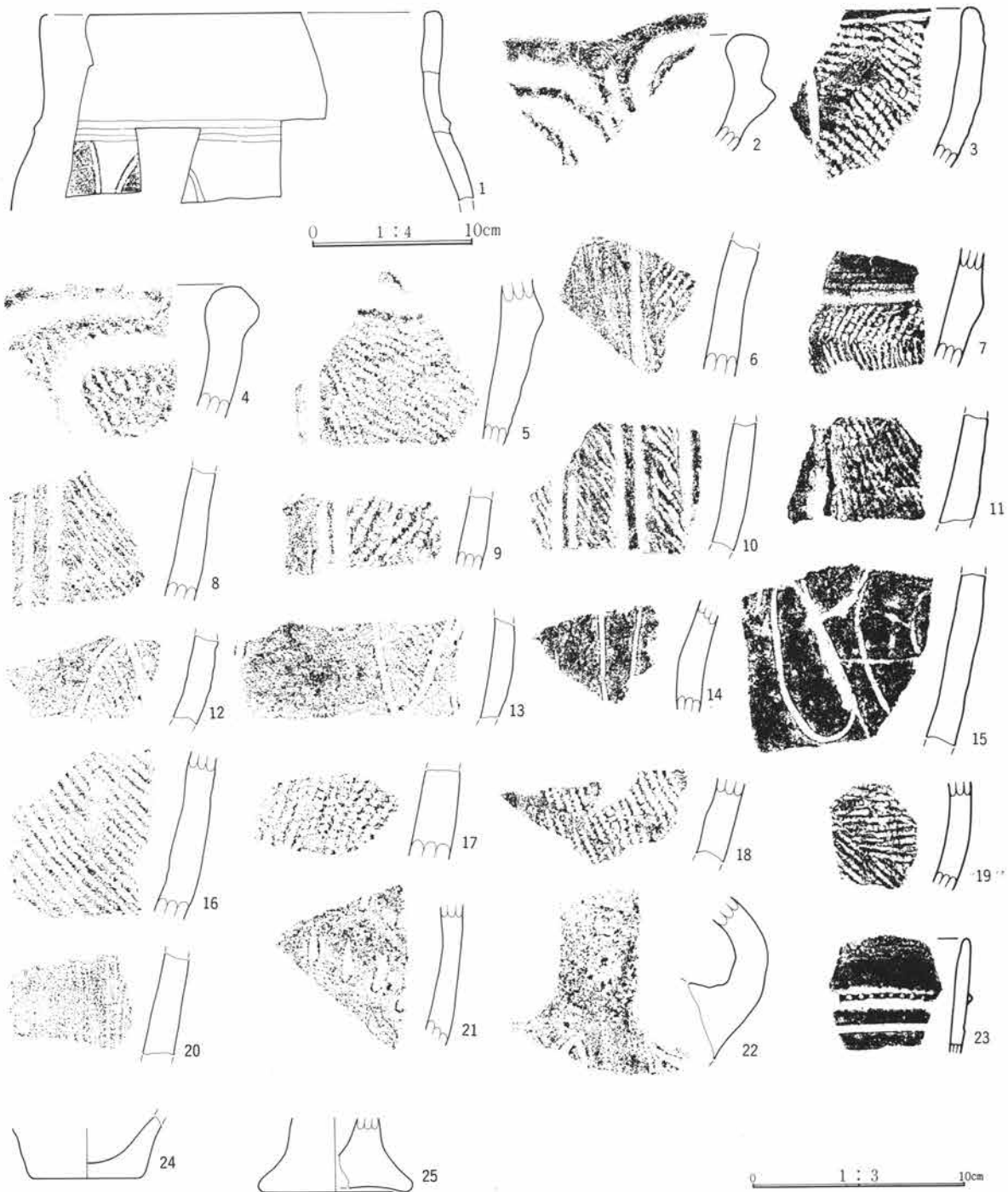
第260図 30号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第 261 図 30 号配石遺構石材別分布



第 262 図 30 号配石遺構重量別分布



第 263 図 30 号配石遺構出土土器

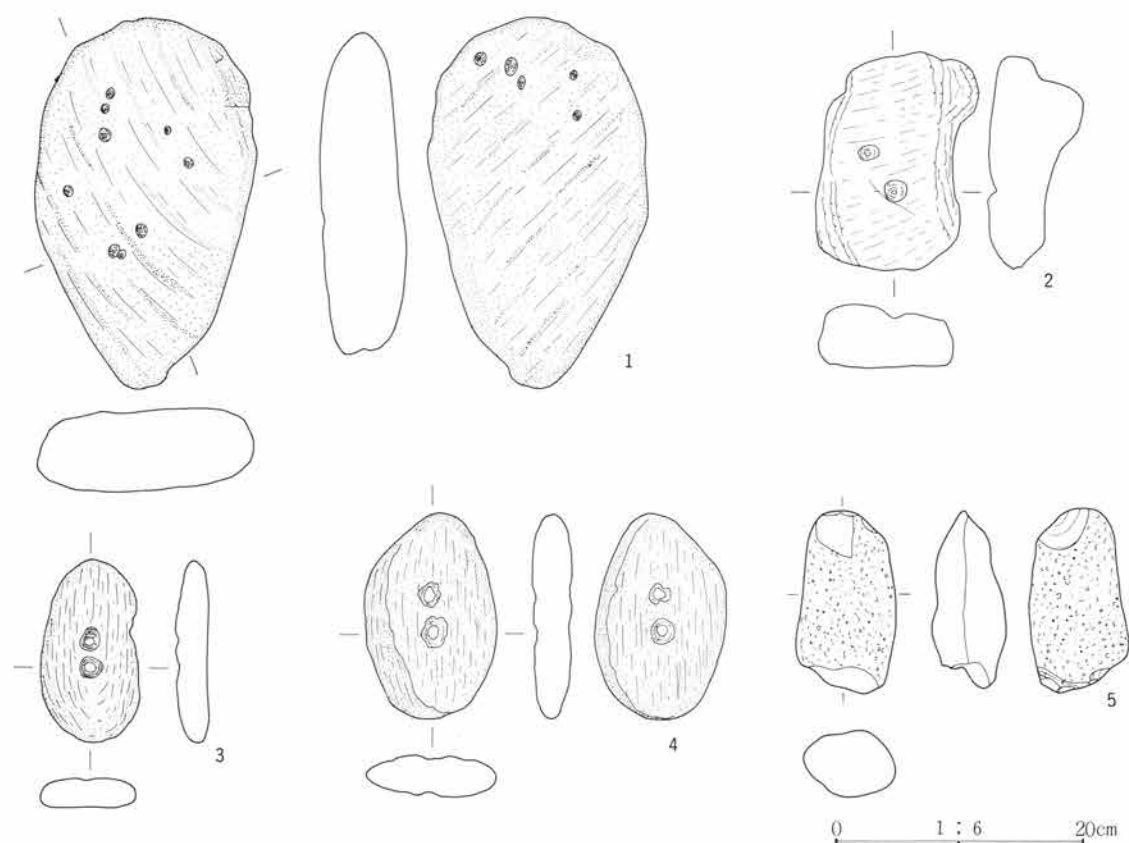
30号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|---|--|-------|
| 263-7 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口唇部は無文帯となり、微隆起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体はL{長横・縦転がし。 | 配石中心部 |
| 263-8 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 地文に縄文施文。原体はL{縦転がし。太 い条と細い条を使用。沈線を垂下。 外面は荒れている。 | 配石南西部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

30号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|--|---|-------|
| 263-9 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は褐灰色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はR{ㄱ縦転がし。 | 配石南東部 |
| 263-10 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はL{ㄱ縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石北東部 |
| 263-11 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はL{ㄱ縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石南西部 |
| 263-12 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 細沈線による「V」字状の文様を描き、区 画内に縄文施文。原体はL{ㄱ縦転がし。 | 配石中心部 |
| 263-13 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 細沈線による「V」字状の文様を描き、区 画内に縄文施文。原体はL{ㄱ縦転がし。 | 配石北西部 |
| 263-14 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。 | 細沈線による文様が描かれている。 | 配石西部 |
| 263-15 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 細沈線による文様が描かれている。 | 配石中心部 |
| 263-16 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はL{ㄱ縦転がし。 | 配石南西部 |
| 263-17 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR{ㄱ縦転がし。 | 配石中心部 |
| 263-18 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はL{ㄱ縦転がし。 | 配石北東部 |
| 263-19 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はL{ㄱ。 | 配石北西部 |
| 263-20 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は灰褐色。 | 条線を施している。 | 配石北東部 |
| 263-21 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 押し引き状の沈線を施している。 | 配石南西部 |
| 263-22 123 | 把手 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 橋状把手。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 細沈線を施している。 | 配石中心部 |
| 263-23 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 口唇部に突起が付く。1条の隆線を巡らし 刻みが施されている。堀之内2式土器片。 | 配石南西部 |
| 263-24 123 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径52mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | | 配石中心部 |
| 263-25 123 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 底径70mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | | 配石南西部 |



第264図 30号配石遺構出土石器

30号配石遺構石器観察表

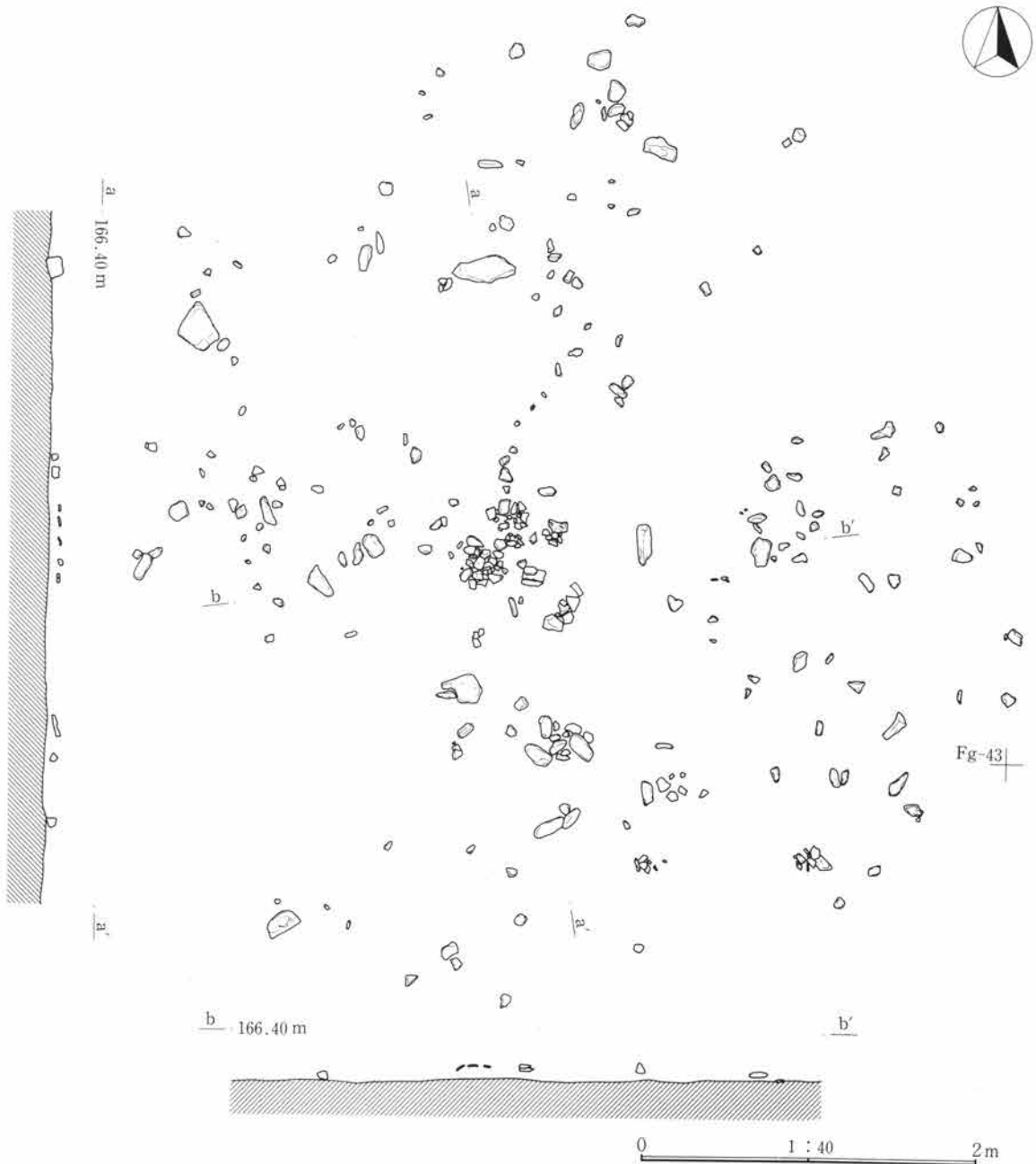
| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|---------|--------------|------|-----|-------|---|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 264-1 123 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 27.7 | 19.7 | 6.9 | 5,200 | 両面に14個の凹み。最大の凹みは長13mm、短10mm、深3mm。最小は長7mm、短7mm、深1mmで、平均は長9mm、短8mm、深2mm。 | 配石中央部 |
| 264-2 123 | 多 孔 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 17.3 | 13.0 | 7.5 | 2,000 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径15mm、深さ5mmである。 | 配石北東部 |
| 264-3 123 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 14.7 | 7.9 | 2.7 | 500 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、短径16mm、深さ3mmである。全面焼けている。 | 配石南端 |
| 264-4 123 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 16.3 | 10.7 | 3.3 | 800 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短19mm、深3mm。最小は長17mm、短14mm、深1mmで、平均は長20mm、短17mm、深2mm。 | 配石中央部 |
| 264-5 123 | 磨製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (14.6) | 8.1 | 6.8 | (980) | 敲打途中。一部に自然面を残す。 | 配石北西部 |

31号配石遺構 (第265~270図、PL. 72、123・124)

位置 Fs-42・43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西60m (遺構の中心までの距離)、30号配石遺構の北北西5mの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。7月上旬に遺構を検出し、14日に全景写真と部分写真撮影を実施した。その後、遺物の取り上げと配石遺構の石の取り上げを行い、11月に入って下部調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。30号配石遺構に近接している。

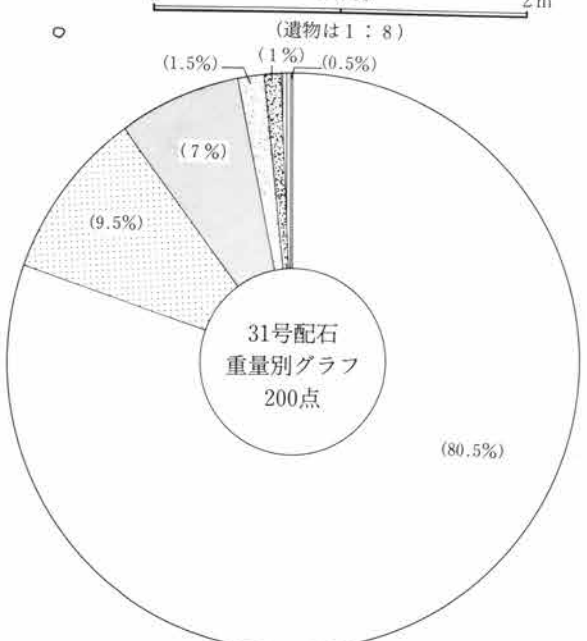
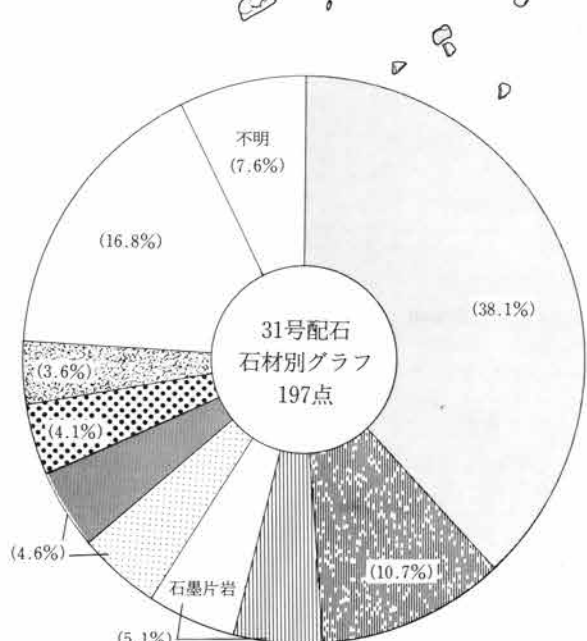
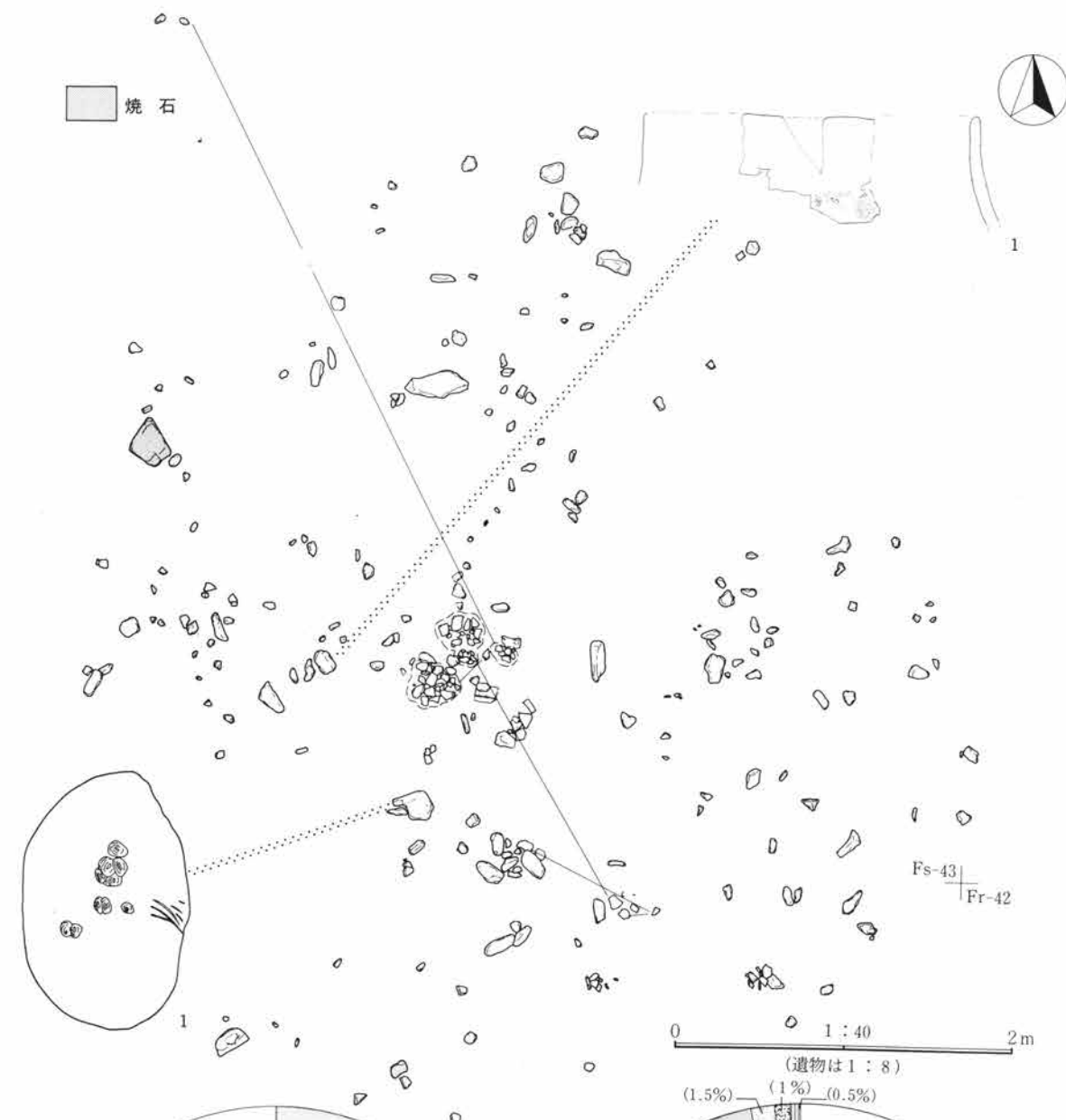


第 265 図 31 号配石遺構

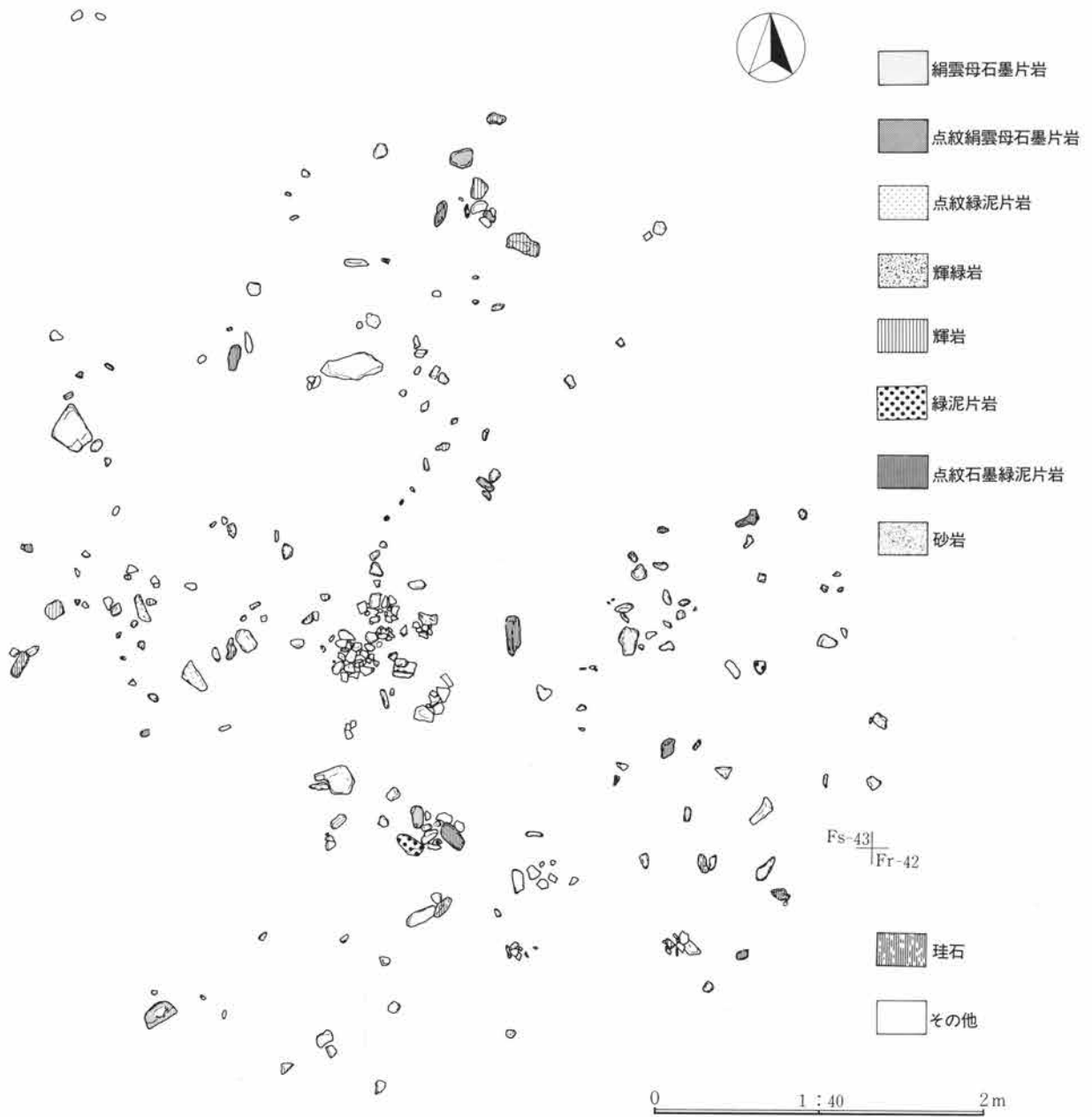
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径 5 m、短径 4 m50cmの範囲に散漫的に石が分布している。隣接している30号配石遺構の石の配置とは非常に異なっている。配石の中心には土器片が集中している。配石の面積は約24.3m²である。

使用石材 24種類の石材が確認された。197点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩75点(38.1%)、珪石21点(10.7%)、輝岩・石墨片岩各10点(各5.1%)、点紋緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩各9点(各4.6%)、緑泥片岩8点(4.1%)、輝緑岩・点紋絹雲母石墨片岩各7点(各3.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩5点(2.5%)、変斑礫岩3点(1.5%)、赤色珪質板岩・チャート・緑簾緑泥片岩・紅簾絹雲母片岩・綠色珪質板岩各2点(各1.2%)、絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥石墨片岩・角閃岩・輝緑凝灰岩・砂岩・凝灰岩・千枚岩・珪岩各1点(各0.5%)であり、不明は15点(3.2%)を数えた。不明の石を除いた182点中128点(70.3%)の石が片岩類である。



第 266 図 31 号配石遺構遺物出土状況と石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

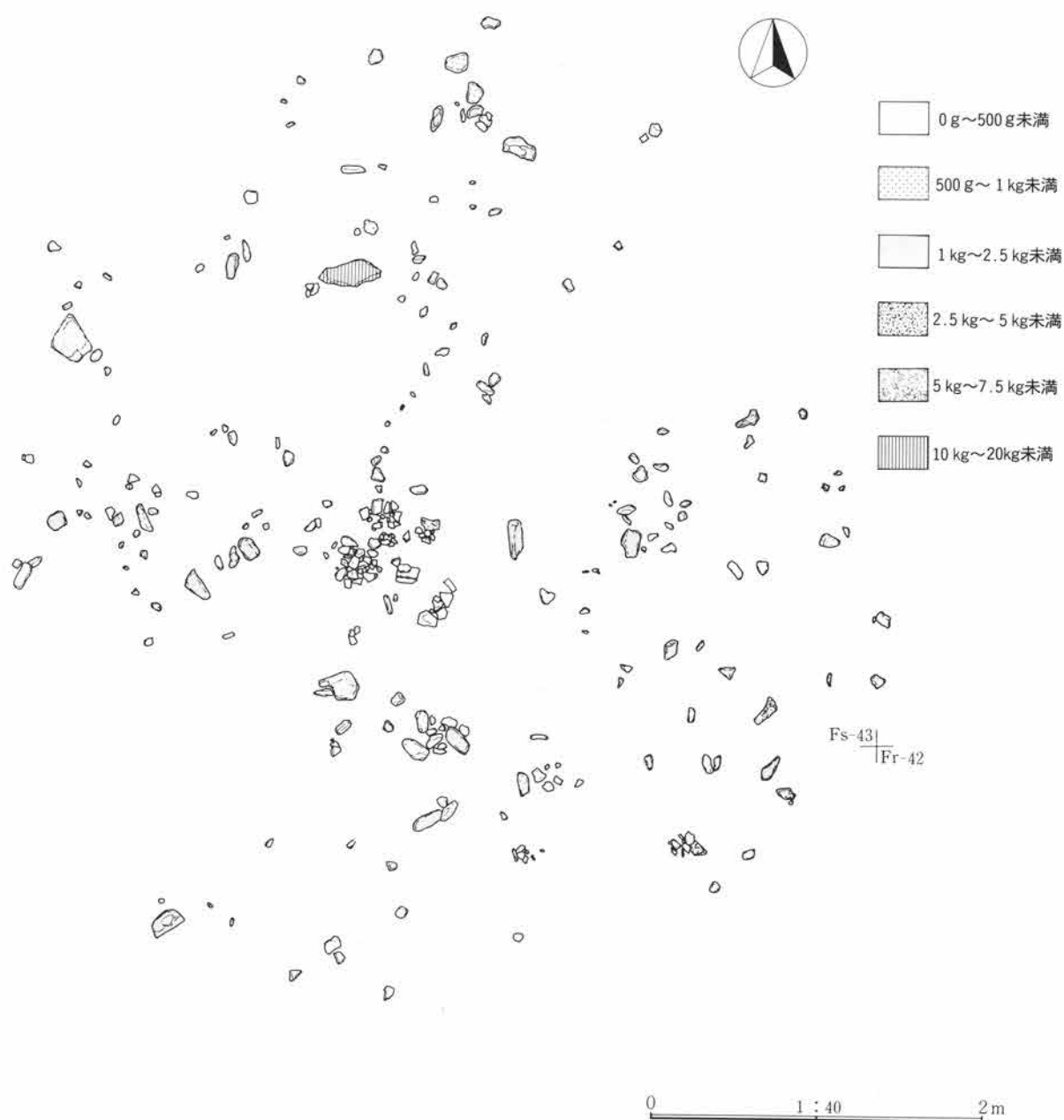


第 267 図 31 号配石遺構石材別分布

石材重量 重量の判明している石は200点である。その内訳は、500g未満の石161点(80.5%)、500g～1kg未満の石19点(9.5%)、1kg～2.5kg未満の石14点(7%)、5kg～7.5kg未満の石3点(1.5%)、2.5kg～5kg未満の石2点(1%)、10kg～20kg未満の石1点(0.5%)である。

遺物出土状況 71点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部6点、胴部64点、底部1点であり、配石の中心に集中して出土している。加曽利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では多孔石1点が配石中心から南寄りに出土し、石器含有率は0.5%であり、また焼石は200点中5点の出土で、2.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E4式期の配石遺構である。

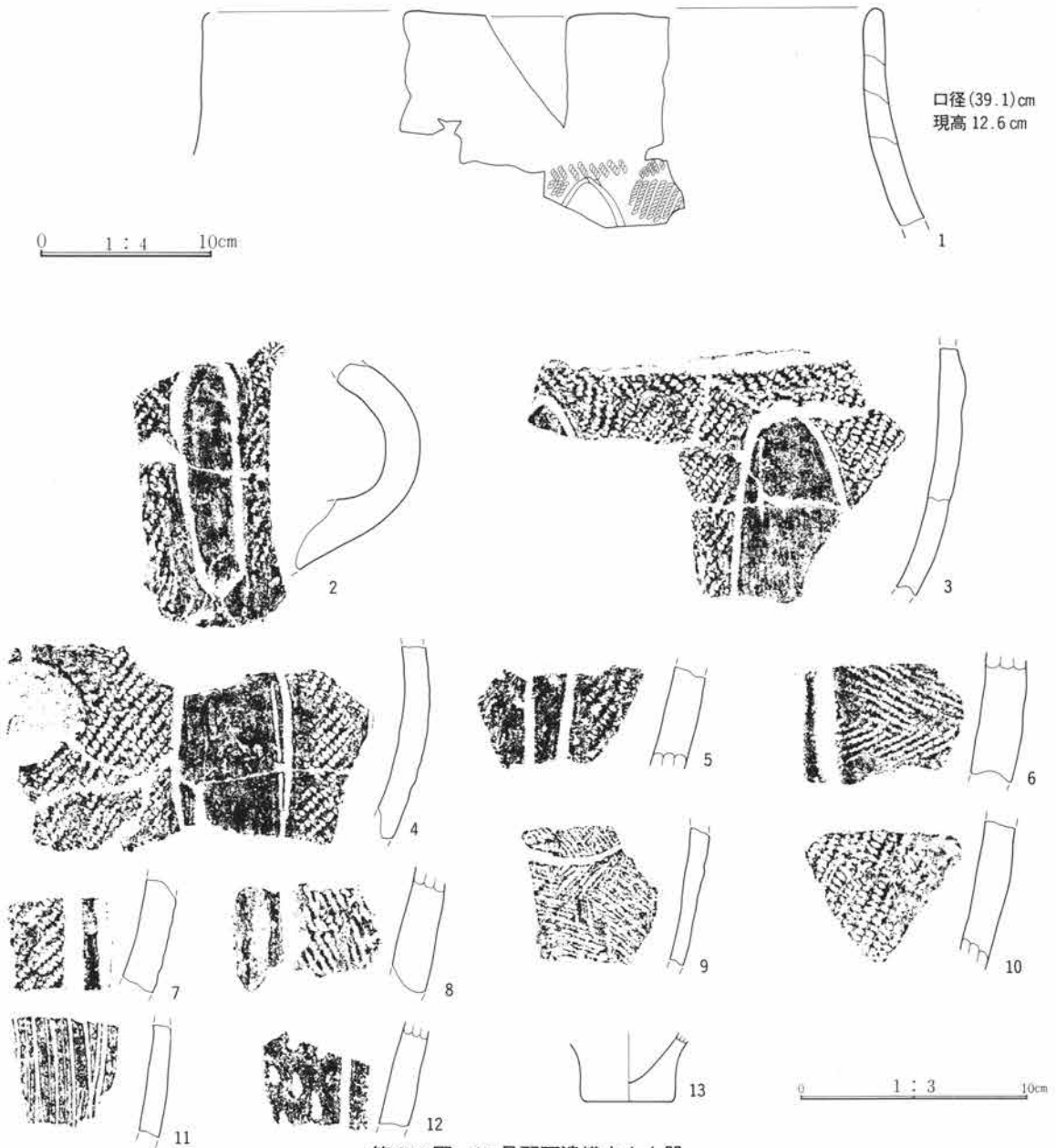


第268図 31号配石遺構重量別分布

31号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|---|---|-------|
| 269-1 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 器厚11~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部に幅広の無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。微隆起帯上にはR{↑横転がし。以下細沈線による「□」状の文様とR{↑縦位。 | 配石中心部 |
| 269-2 123 | 把手 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 両耳壺の把手部分。器厚20mm。 粗い調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 沈線による楕円文を描き、縄文施文。 原体はR{↑縦転がし。 | 配石中心部 |
| 269-3 123 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 口縁部は無文帯となり、1条の微隆起帯を巡らす。胴部は細沈線による「□」状の文様を描き、縄文施文。原体はR{↑横・縦転がし。 | 配石中心部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



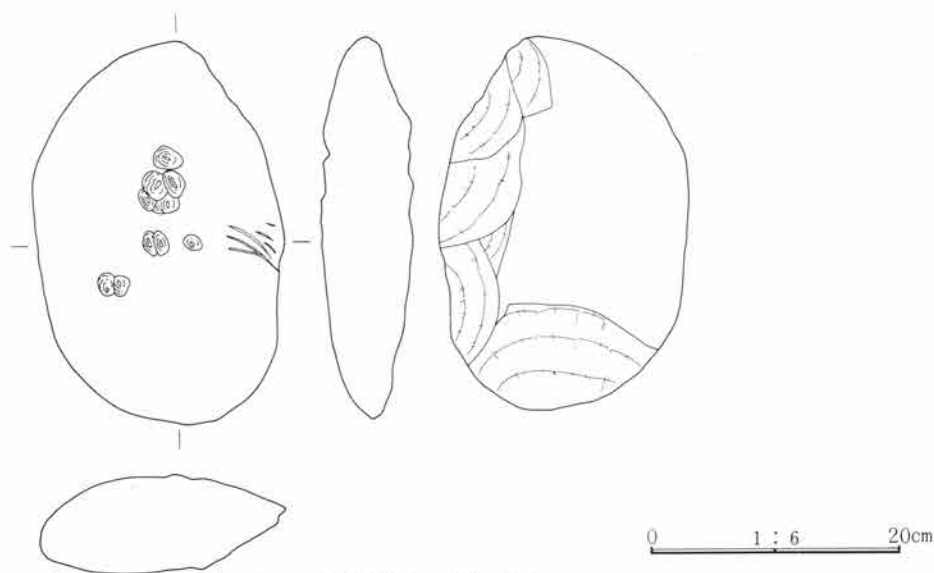
第 269 図 31 号配石遺構出土土器

31号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|---------|-------------------|--|---|-------|
| 269-4 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 細沈線による文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR{↑}縦転がし。 | 配石中心部 |
| 269-5 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は明褐色。 | 縄文施文。原体はR{↑}縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南端 |
| 269-6 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚19mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は明赤褐色。 | 微隆起帯を垂下。区画内に縄文施文。 原体はL{↑}縦・横転がし。 外面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 269-7 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR{↑}縦転がし。 隆帯を垂下。 | 配石南東部 |

31号配石遺構土器観察表

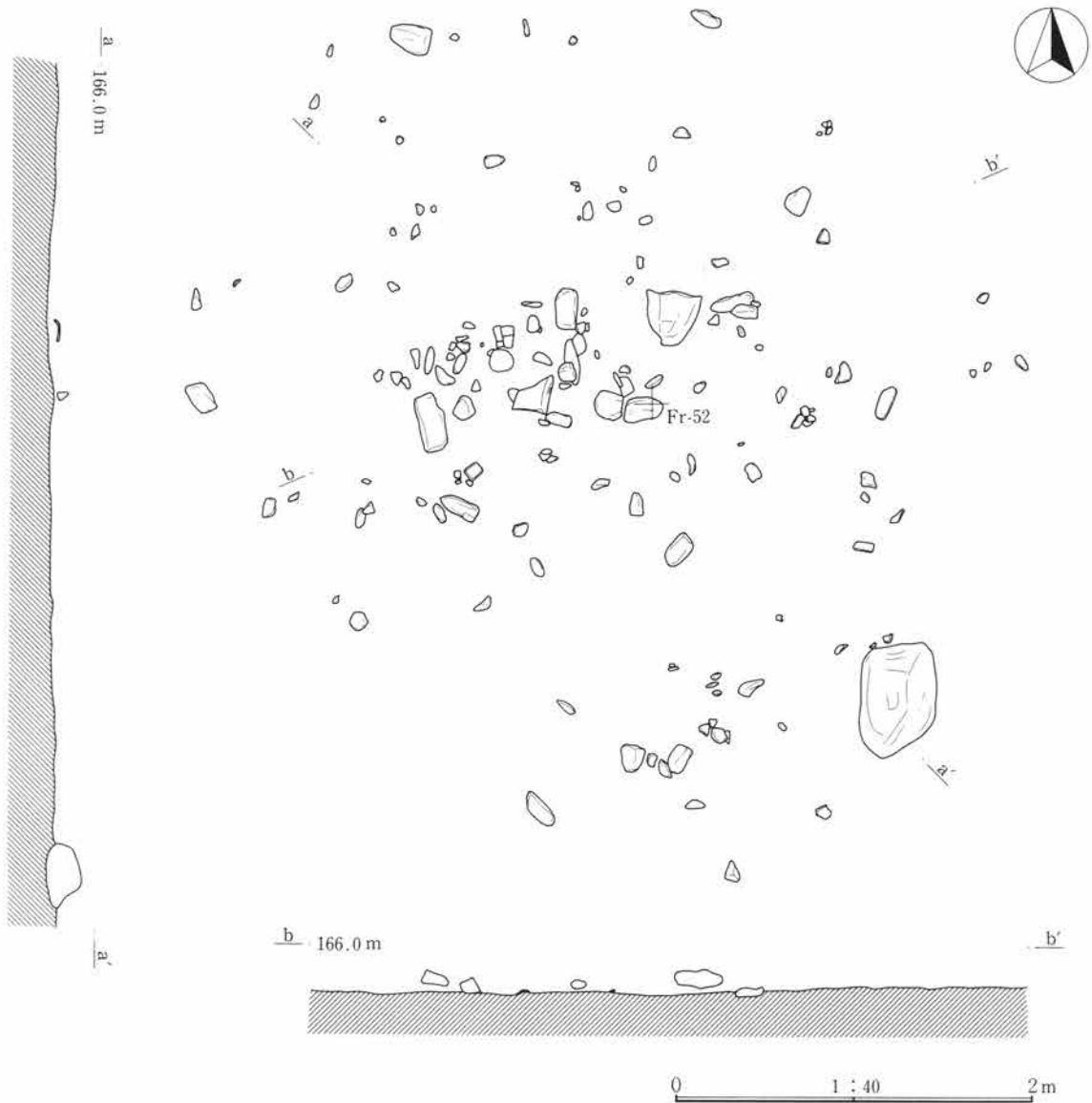
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|-------------------|--|--|-------|
| 269-8 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文 施文。原体はL(↑)縦転がし。 押圧が強い。 | 配石南西部 |
| 269-9 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚6~8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 沈線による文様を描く。 土器面は柔軟。 | 配石中心部 |
| 269-10 123 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 | 配石中心部 |
| 269-11 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~9mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 条線を施している。 | 配石中心部 |
| 269-12 123 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。区画内に刺突文を施している。 | 配石南東部 |
| 269-13 123 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 小型土器の底部片。底径13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | | 配石中心部 |



第270図 31号配石遺構出土石器

31号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|------------|------|-----|-------|--|-------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 270-1 124 | 多孔石 | ほぼ完形 | 絹雲母石墨片岩 | 30.0 | 19.8 | 7.6 | 5.800 | 片面に10個の凹み。最大の凹みは長24mm、短19mm、深6mm。最小は長16mm、短12mm、深1mmで、平均は長20mm、短14mm、深3mm。全面に磨耗痕がみられる。 | 配石の中央から南寄り。 |



第271図 32号配石遺構

32号配石遺構 (第271～277図、PL. 73、124)

位置 Fr・Fs—52・53グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西59m (遺構の中心までの距離)、25号配石遺構の西北西14mの所に位置している。

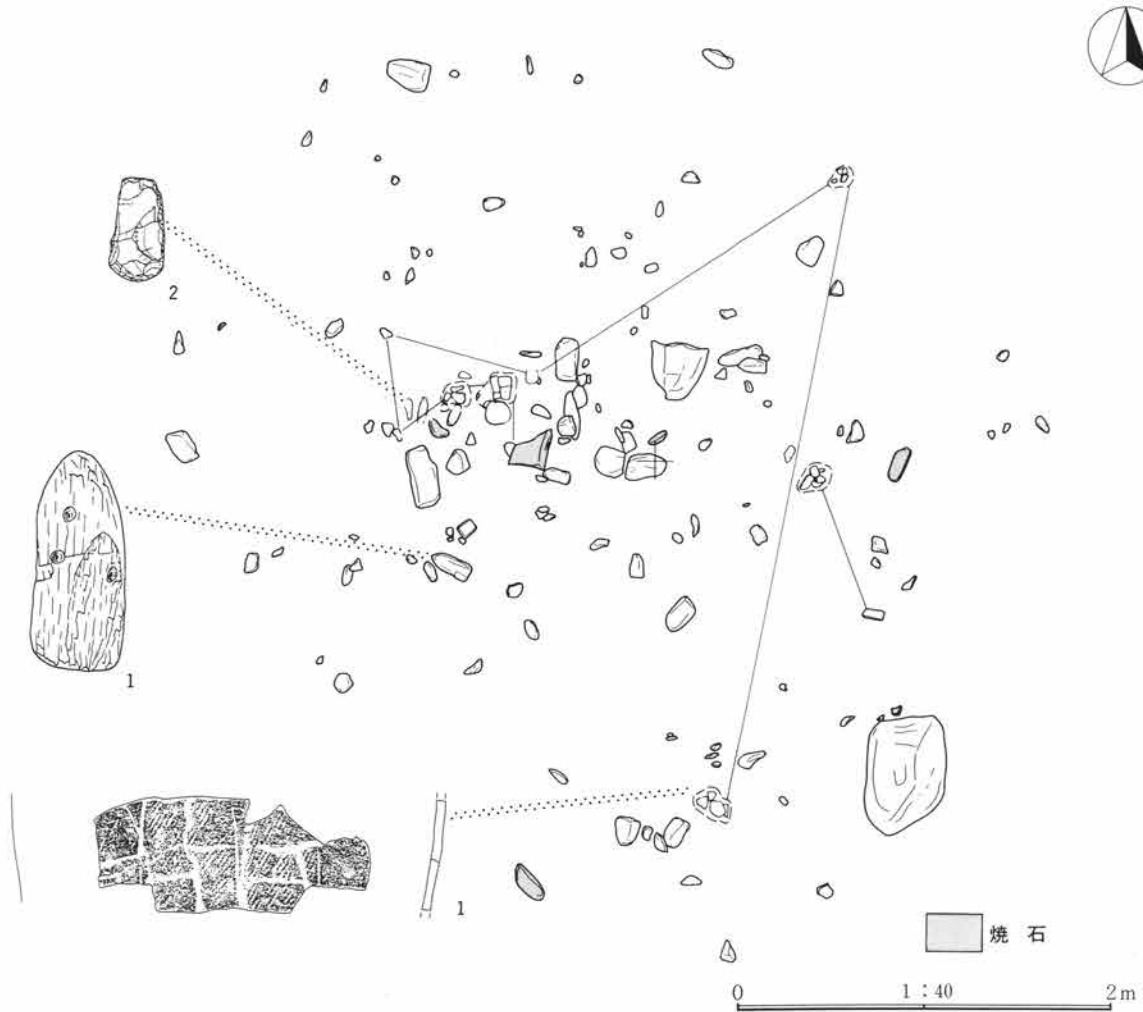
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月に入り調査を開始。10日に遺構の全景写真と部分写真の撮影を行い、実測作業に入った。遺物の取り上げは9月下旬に、配石遺構の石の取り上げは11月上旬に実施した。その後、下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

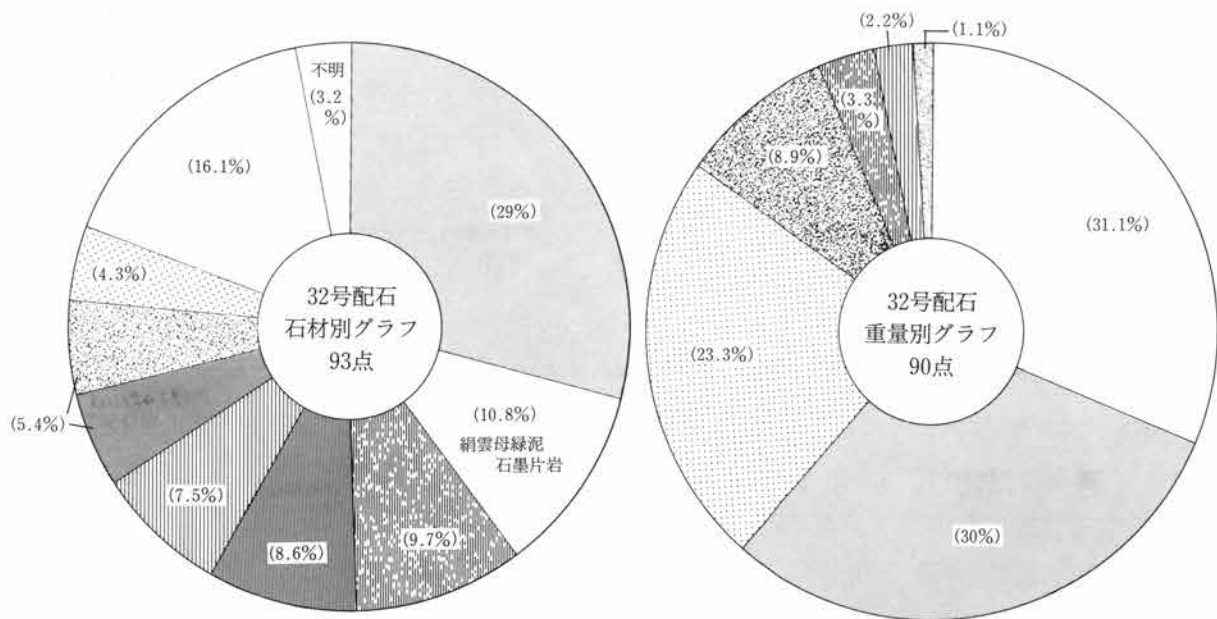
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m、短径4mの楕円形の範囲に石の分布が認められるが、集中する範囲は長径2m、短径80cmの配石の中心部である。配石全体の面積は約16.9㎡である。

使用石材 17種類の石材が確認された。93点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩27点(29%)、絹雲母緑泥石墨片岩10点(10.8%)、珪石9点(9.7%)、点紋石墨緑泥片岩8点(8.6%)、輝岩7点(7.5%)、点紋絹雲母石

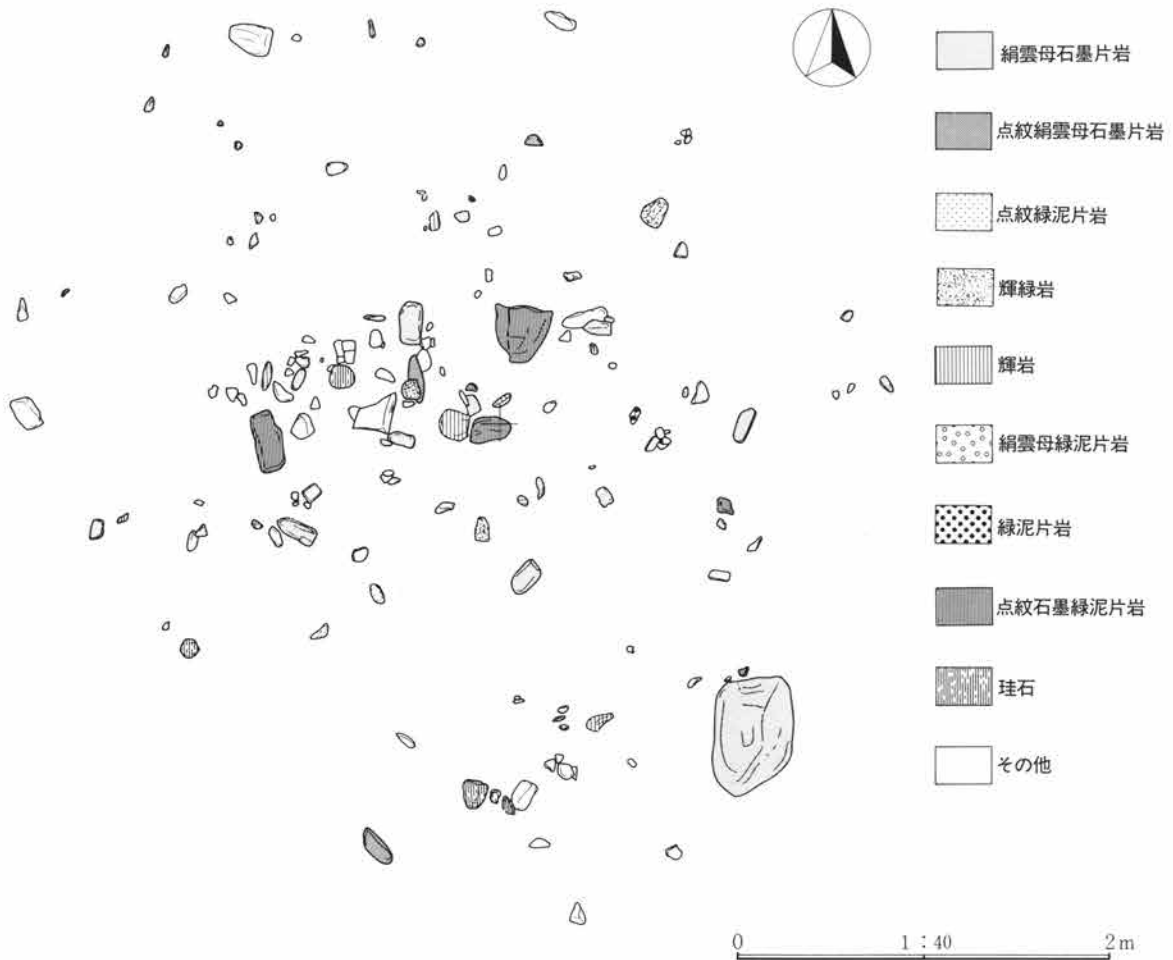


第272図 32号配石遺構遺物出土状況 (遺物は1:8)



第273図 32号配石遺構 石材料別(左)・重量別(右)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



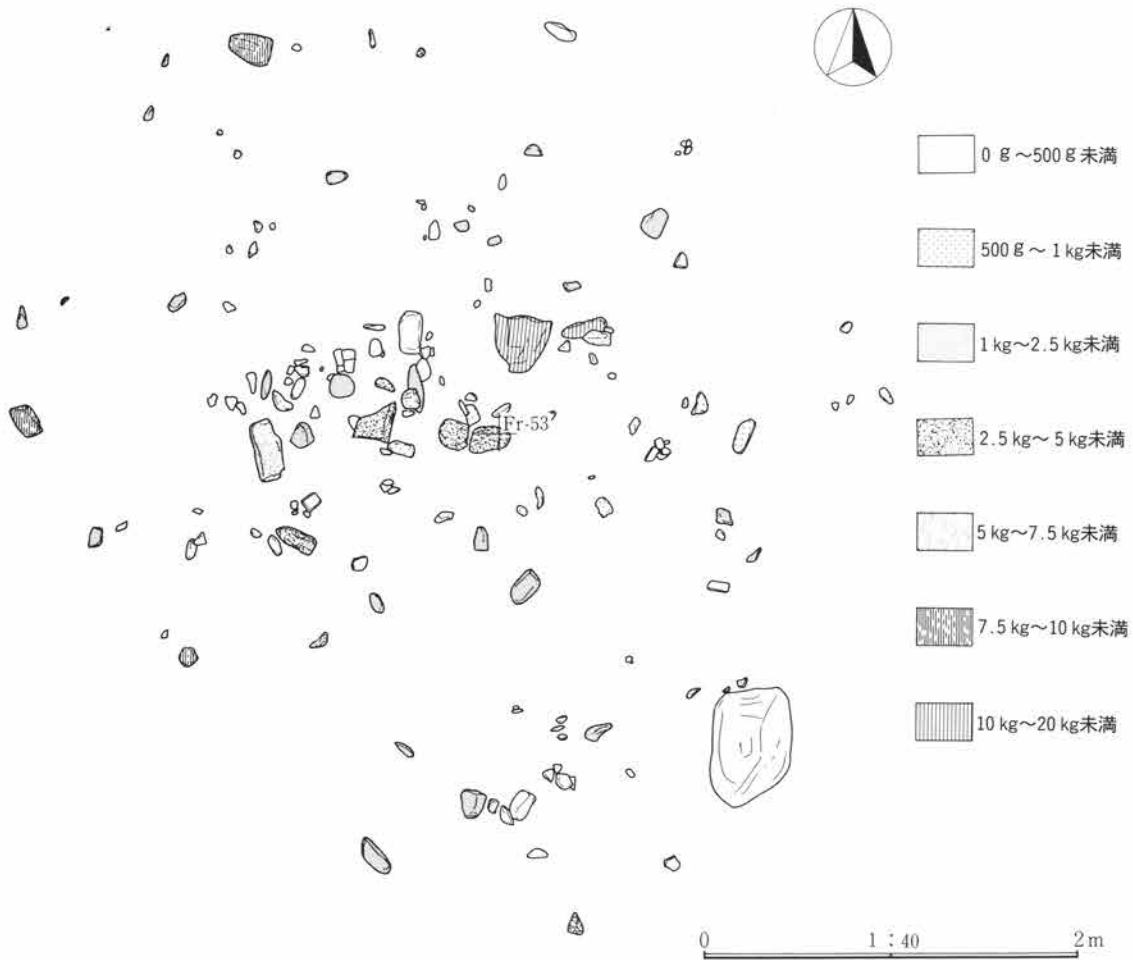
第274図 32号配石遺構石材別分布

墨片岩・輝緑岩各5点(各5.4%)、点紋緑泥片岩・チャート各4点(各4.3%)、緑泥片岩・石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩各2点(各2.2%)、点紋絹雲母緑泥片岩・緑色珪質板岩・熱変成岩・石英安山岩・珪岩各1点(各1.1%)であり、不明は3点(3.2%)を数えた。不明の石を除いた90点中61点(67.8%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は90点である。その内訳は、500g未満の石28点(31.1%)、1kg～2.5kg未満の石27点(30%)、500g～1kg未満の石21点(23.3%)、2.5kg～5kg未満の石8点(8.9%)、7.5kg～10kg未満の石3点(3.3%)、10kg～20kg未満の石2点(2.2%)、5kg～7.5kg未満の石1点(1.1%)である。

遺物出土状況 51点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部2点、胴部48点、底部1点であり、配石中心部に集中して出土している。加曽利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では多孔石1点が中心部のやや南から、打製石斧1点は中心部の配石から出土している。石器含有率は2.2%である。また焼石は93点中7点の出土で、7.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E4式期の配石遺構である。

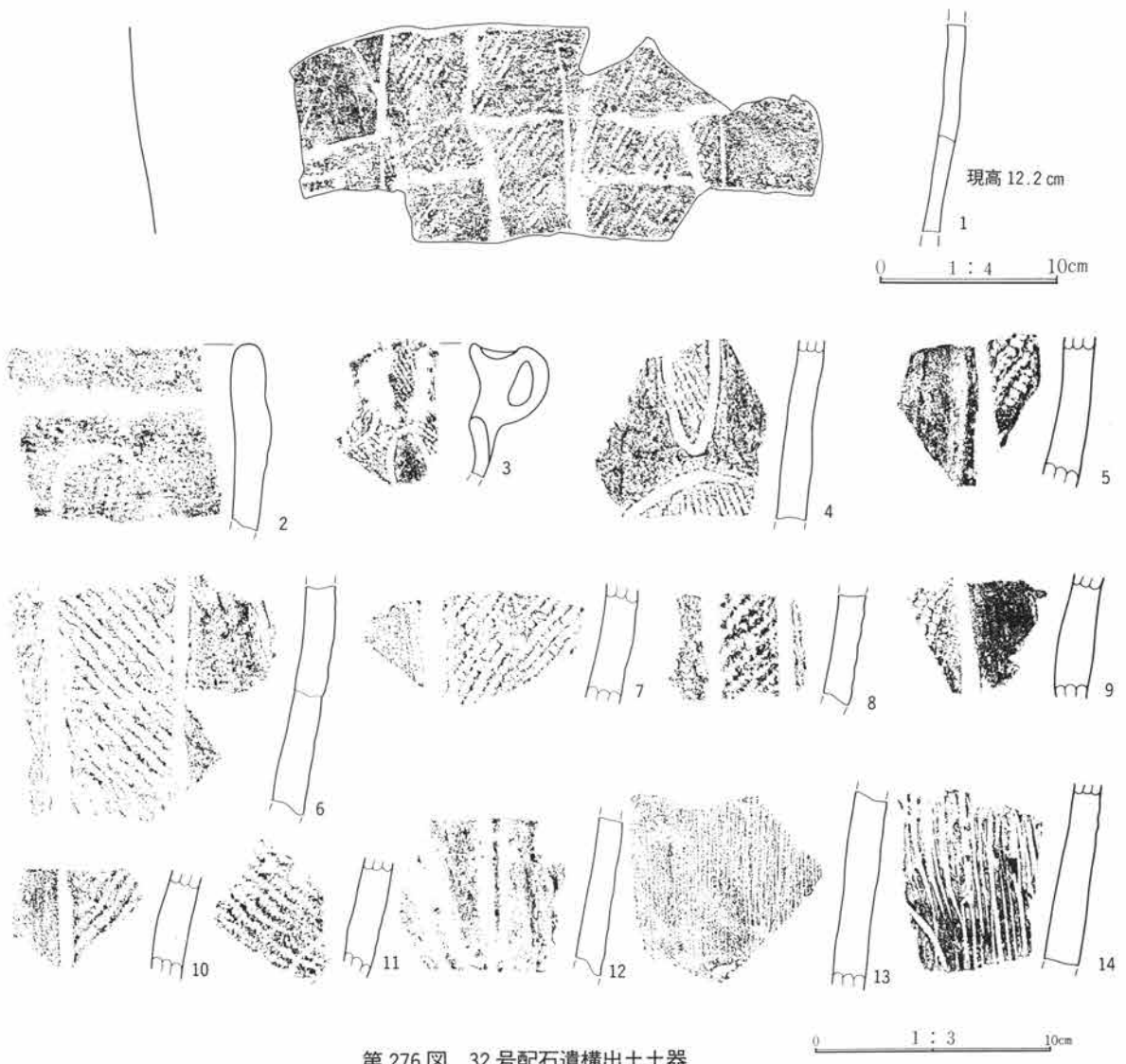


第 275 図 32 号配石遺構重量別分布

32号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|--|---|-------|
| 276-1 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 細沈線による区画が施され、区画内に縄文 施文。原体はR(↑)縦転がし。 外面は荒れている。 | 配石中心部 |
| 276-2 124 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11~15mm。 内面は丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は橙色、内面は黒褐色。 | 口唇部に無文帯。1条の微隆起帯を巡らし、 胴部には細沈線による「Π」状の文様。区 画内にR(↑)縦転がし。 外面は荒れて、内面に煤付着。 | 配石中心部 |
| 276-3 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は褐灰色。 | 波状口縁。波頂部に橋状把手。口唇下に1 条の細沈線、刺突。胴上半に細沈線による 「Π」状の文様。R(↑)縦位。内面に煤付着。 | 配石北西部 |
| 276-4 124 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐灰色、内面は褐灰色。 | 沈線による「U」字状の文様が描かれ、区 画内に縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石中心部 |
| 276-5 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 隆帯を垂下させ、縄文施文。原体はR(↑)縦 転がし。 土器面は柔軟。 | 配石南端 |
| 276-6 124 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はL(↑)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南東部 |
| 276-7 124 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰白色。 | 地文に縄文と条線を施す。原体はR(↑)縦転 がし。沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南端 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



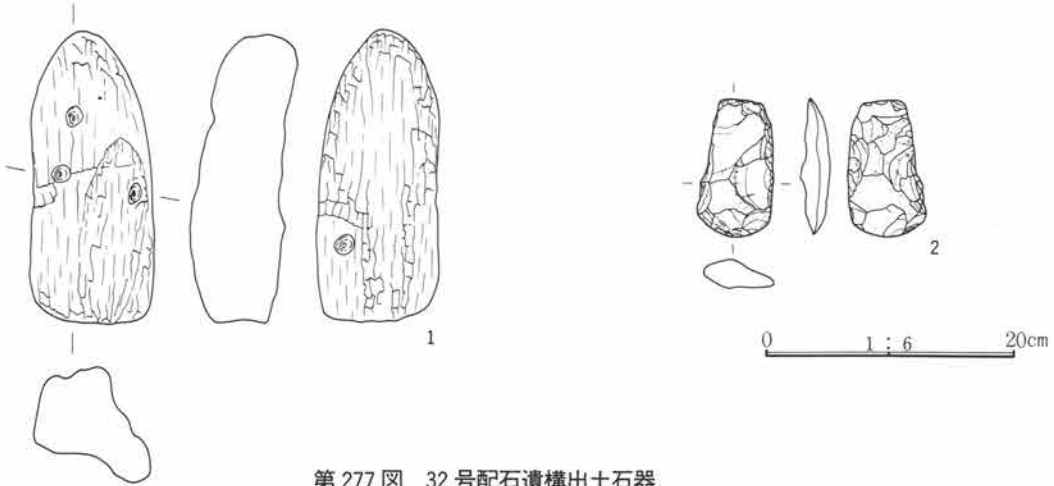
第276図 32号配石遺構出土土器

32号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|----------------------------------|-------|
| 276-8 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色。 | 細沈線を垂下し、区画内に縄文施文。 原体はR(上縦転がし。 | 配石中心部 |
| 276-9 124 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北西部 |
| 276-10 124 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 276-11 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はR(上(0段多条)横転が し。 | 配石北東部 |
| 276-12 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させる。 | 配石中心部 |
| 276-13 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は褐灰色。 | 条線が施されている。 | 配石南部 |

32号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|-----------------------|-------|
| 276-14 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 条線が施されている。 土器面は柔軟。 | 配石南西部 |



第277図 32号配石遺構出土石器

32号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|------------|-----|-----|-------|---|--------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 277-1 124 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 23.1 | 9.8 | 9.0 | 2,700 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長19mm、短14mm、深6mm。最小は長17mm、短14mm、深5mmで、平均は長18mm、短16mm、深6mm。全面焼けている。 | 配石の中 央やや南 |
| 277-2 124 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 10.7 | 5.8 | 2.4 | 152 | バチ (II b)。片面に大きく自然面残る。 | 配石中央 |

33号配石遺構 (第278~283図、PL. 74・75、124)

位置 Gd-40・41・42、Ge-40・41・42グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西86m (遺構の中心までの距離)、34号配石遺構の北東に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月12日から34号配石遺構とともに調査を開始した。広範囲に土器片と石が分布しているために、遺構として把握することには疑問があった。しかし、当遺構の北側には土器片と石の分布はほとんど認められないために、配石遺構として調査を進めることになった。写真撮影と実測図の作成後、他遺構の調査を進め、遺物の取り上げを実施したのは12月に入ってからである。そして12月9日に配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査を実施したが遺構は検出できなかった。

重複 なし。34号配石遺構と接している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径10m、短径7mの広範囲に多量の石と土器片が分布している。この分布の北側には石と土器片の分布はほとんど認められないことから、配石遺構として把握した。この配石の面積は約62.9m²である。

使用石材 34種類の石材が確認された。641点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩221点 (34.5%)、輝緑岩66点 (10.3%)、点紋緑泥片岩52点 (8.1%)、緑泥片岩41点 (6.4%)、点紋絹雲母石墨片岩32点 (5%)、珪石27点 (4.2%)、絹雲母緑泥片岩23点 (3.6%)、輝岩・石墨絹雲母片岩各18点 (各2.8%)、点紋絹雲母緑泥片岩13点 (2%)、絹雲母緑泥石墨片岩・チャート各12点 (各1.9%)、紅簾絹雲母片岩9点 (1.4%)、斑岩7点 (1.1%)、緑簾緑泥片岩・角閃岩各6点 (各0.9%)、石墨片岩・綠色珪質板岩各5点 (各0.8%)、珪岩4点

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

(0.6%)、石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨泥片岩・熱変成岩・砂岩各3点(各0.5%)、赤色珪質板岩・絹雲母片岩・変斑岩各2点(各0.3%)、滑石片岩・安山岩・緑泥石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・輝緑凝灰岩・硬砂岩・点紋絹雲母片岩・閃輝緑岩各1点(各0.16%)であり、不明は38点(5.9%)を数えた。不明の石を除いた603点中444点(73.6%)の石が片岩類である。

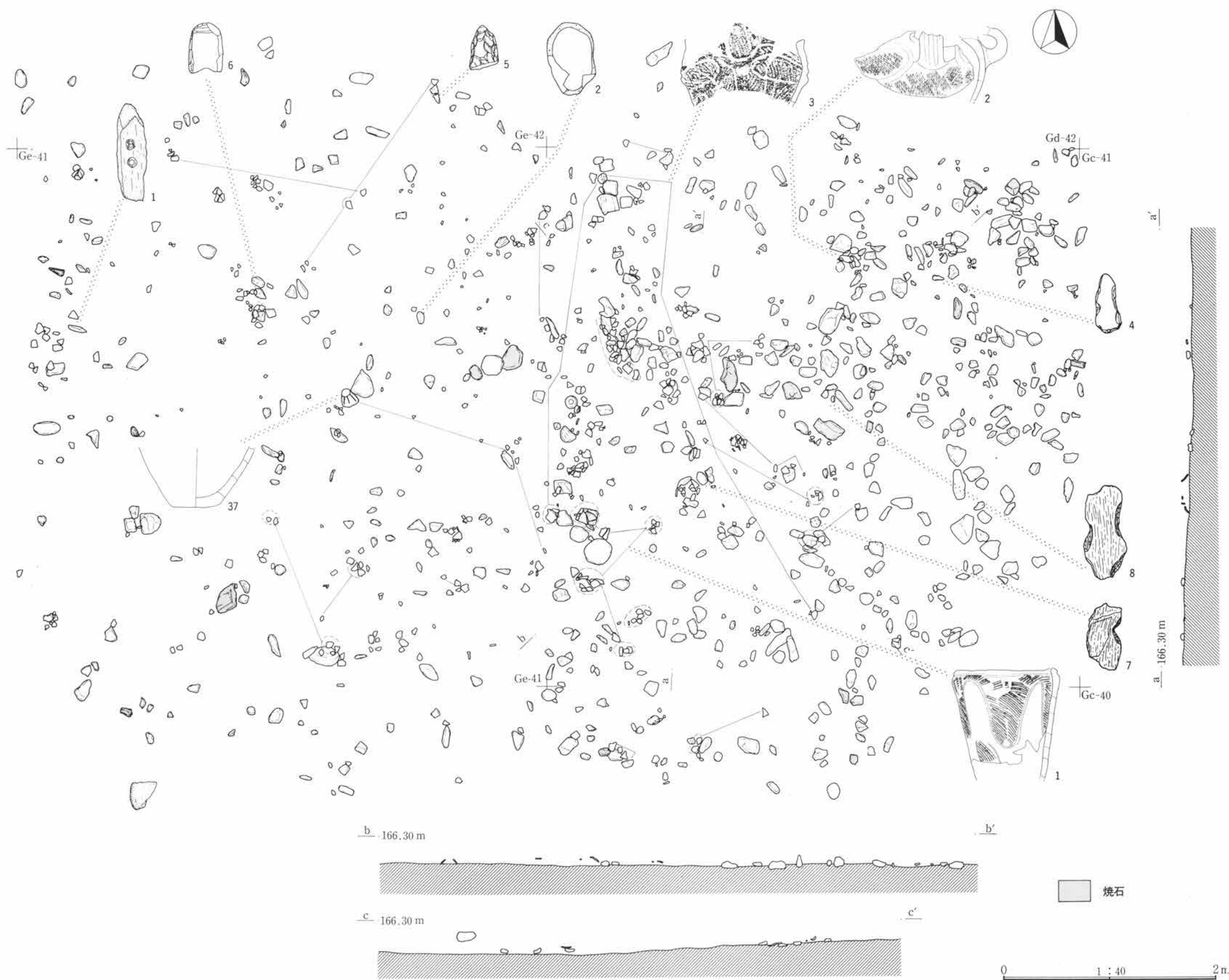
石材重量 重量の判明している石は634点である。その内訳は、500g未満の石350点(55.2%)、500g～1kg未満の石120点(18.9%)、1kg～2.5kg未満の石114点(18%)、2.5kg～5kg未満の石35点(5.5%)、5kg～7.5kg未満の石6点(0.9%)、7.5kg～10kg未満の石5点(0.8%)、10kg～20kg未満の石4点(0.6%)である。

遺物出土状況 533点の土器片が遺構内から満遍なく出土しているが、とりわけ中央部分に集中している。接合関係は広範囲に認められる。部位別点数は、口縁部86点、胴部427点、底部20点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も出土している。石器では凹石1点が西端から、磨石は2点のうち1点は中央西寄りに出土し、打製石斧4点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。石器の含有率は1.2%であり、また焼石は641点中29点の出土で、4.5%を占めている。

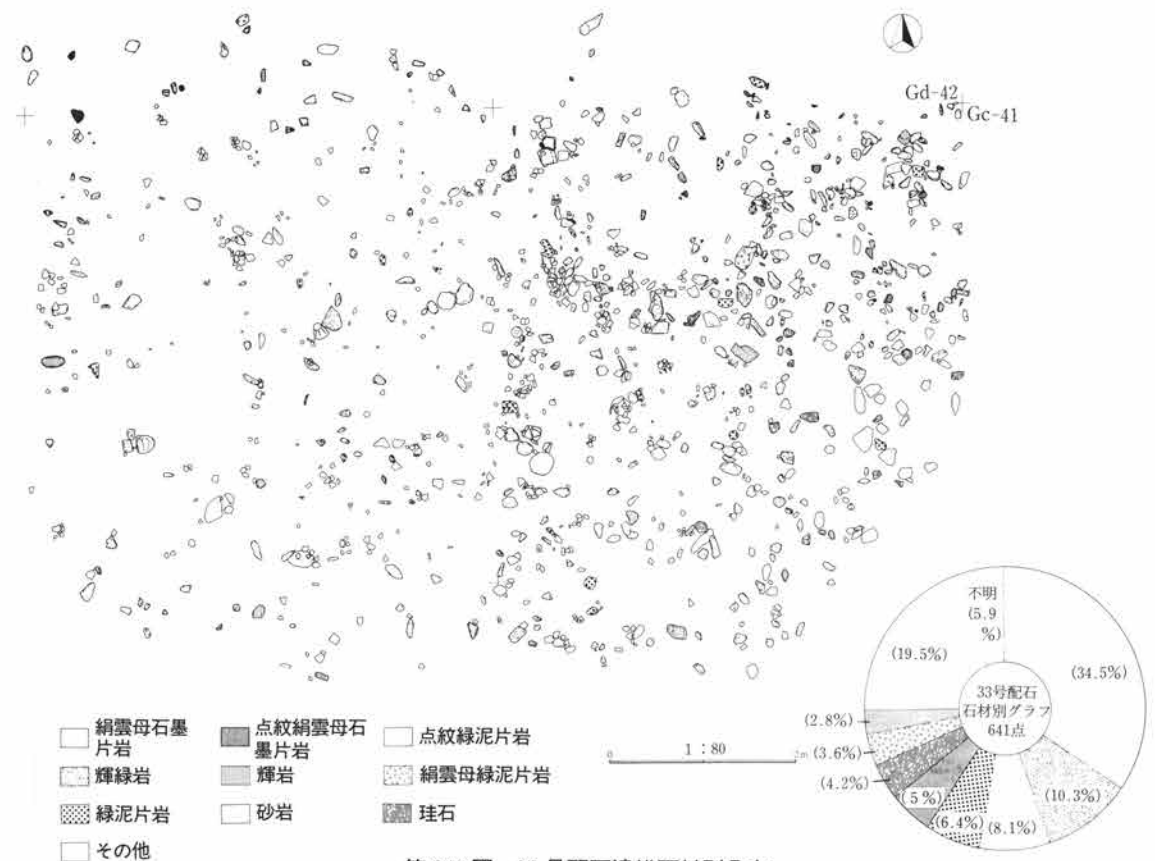
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

33号配石遺構土器観察表

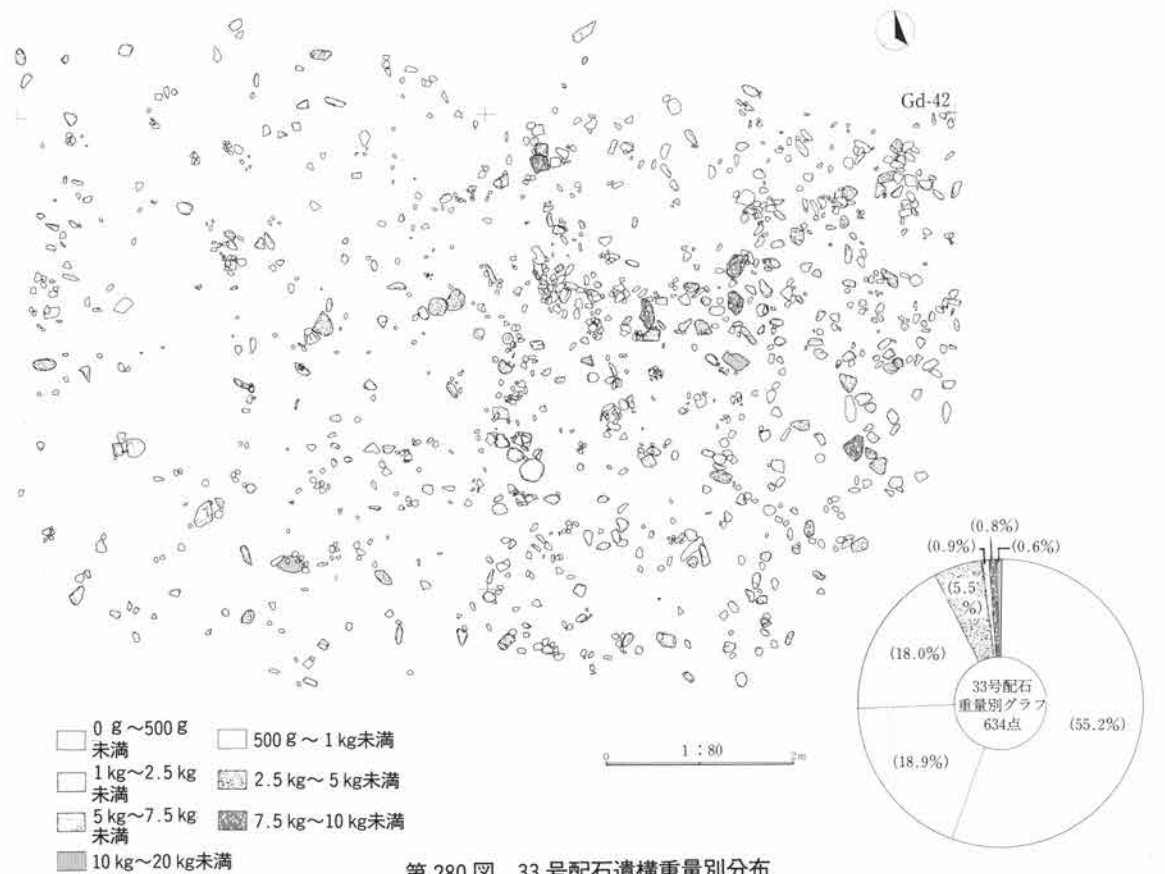
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------------------|-------------------|---|--|--------------|
| 281-1 124 | 胴下 半部 欠損 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴下半部欠損。器厚10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。 | 口縁部はやや内湾。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の細沈線を巡らせる。胴上半部に細沈線による波状文を描き、区画内に縄文施文。原体はL(フ)。胴下半部は「口」状の文様。区画内L(フ)。 | 配石中心部 |
| 281-2 124 | 口縁 部～ 胴上 半 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器(両耳壺)の口縁部～胴上半。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 口縁部に無文帯。肩部に橋状把手。微隆起帯による楕円区画を施し、区画内に縄文施文。原体はR(フ)(0段多条)横位。胴上半R(フ)(0段多条)縦・横位。 土器面は柔軟で、押圧が強い。 | 配石北東部 |
| 281-3 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口唇部に突起。口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様を描き、内部に縄文施文。原体はR(フ)横位。胴部はR(フ)縦位。沈線を垂下。 | 配石中心部 ～北部 |
| 281-4 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12～24mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 口縁部は内湾する。隆帯と沈線による渦巻き等の文様を描き、地文に縄文施文。原体はR(フ)横・縦転がし。 | 配石北端 |
| 281-5 124 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。 | 口縁部は内湾する。隆帯と沈線による楕円等の文様を描き、地文に縄文施文。原体はR(フ)横転がし。内外面に煤が付着。 | 配石西部 |
| 281-6 124 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6～12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。 | 口縁部は内湾する。沈線による文様を描き、地文に縄文施文。原体はR(フ)縦・横転がし。 | 配石北部 |
| 281-7 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は褐灰色。 | 口縁部は内湾する。沈線による文様を描き、縄文施文。原体はR(フ)縦転がし。 | 配石西部 |
| 281-8 124 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部はやや内湾する。口唇部に1条の沈線を巡らせ、以下沈線で「口」状の文様を描き区画内に縄文施文。原体はR(フ)縦・斜位。 | 配石南西部 |
| 281-9 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、沈線により文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR(フ)横転がし。 | 配石南西部 |
| 281-10 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。 | 内湾する波状口縁部片。口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下に「口」状の沈線を施す。地文に縄文施文。原体はL(フ)縦位。 内外面に煤が付着している。 | 配石南部 |
| 281-11 124 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。 | 沈線による「口」状の文様を描き、縄文施文。 原体はR(フ)縦転がし。 | 配石東部 |



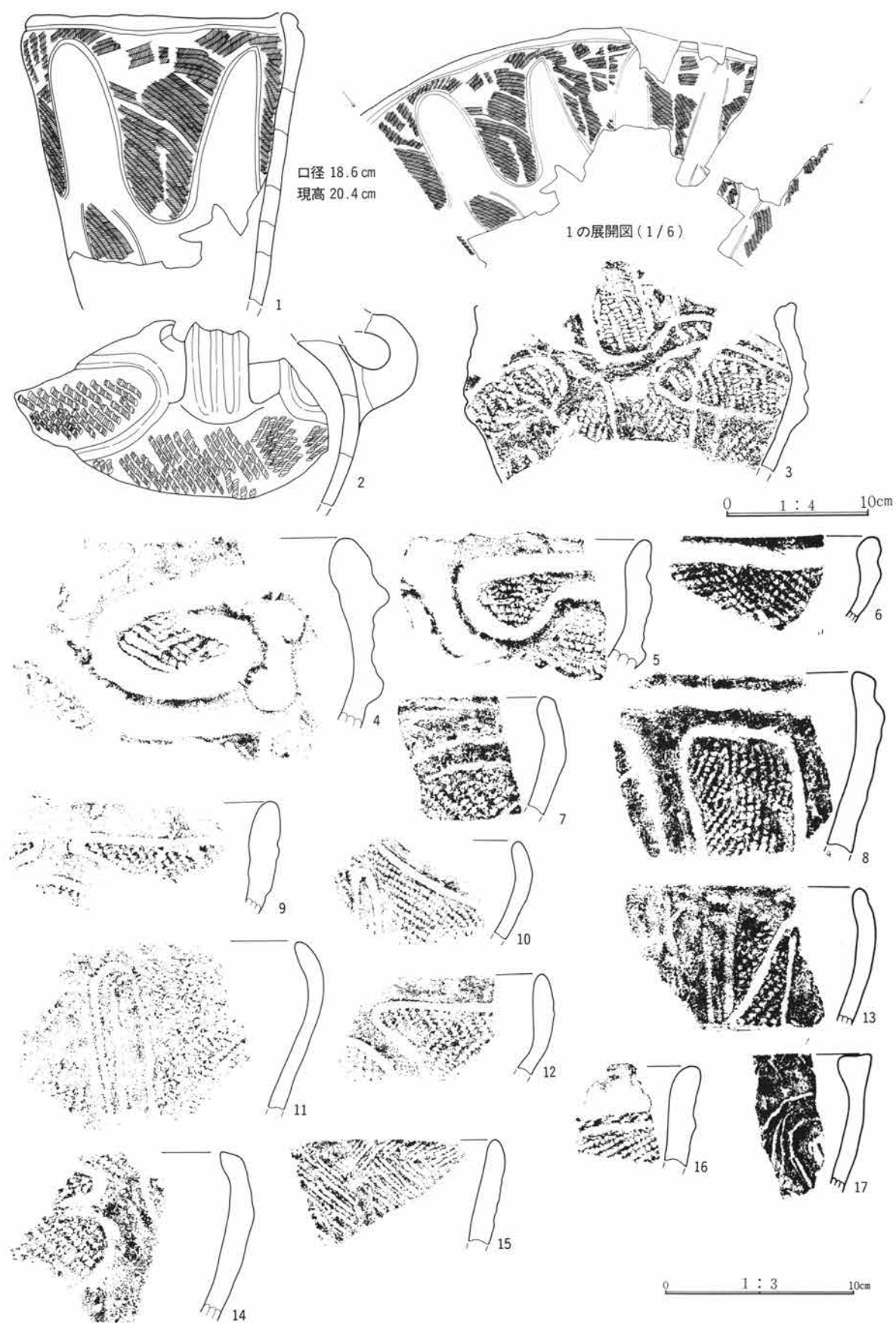
第 278 図 33 号配石遺構



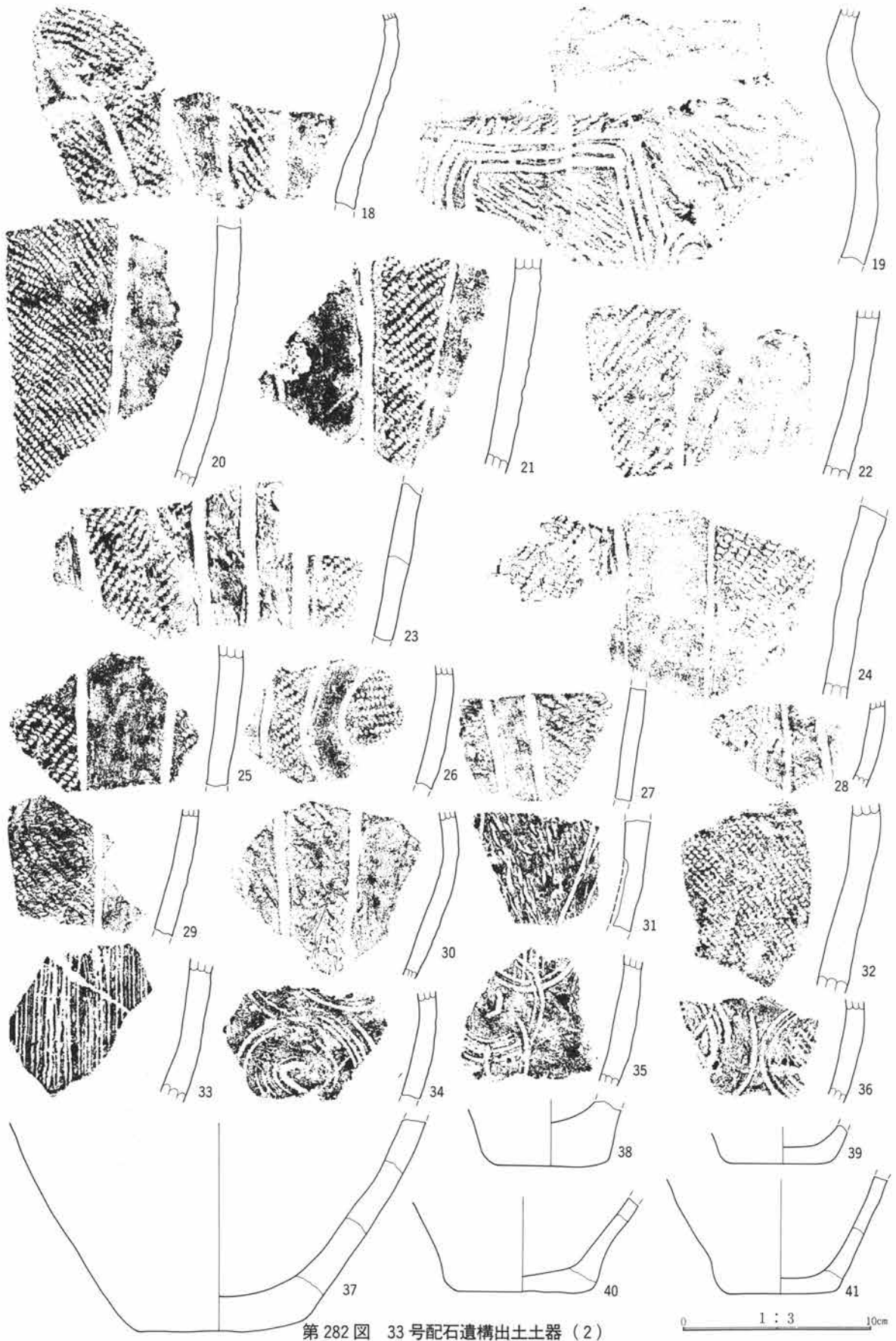
第279図 33号配石遺構石材別分布



第280図 33号配石遺構重量別分布



第 281 図 33 号配石遺構出土土器 (1)



第282図 33号配石遺構出土土器(2)

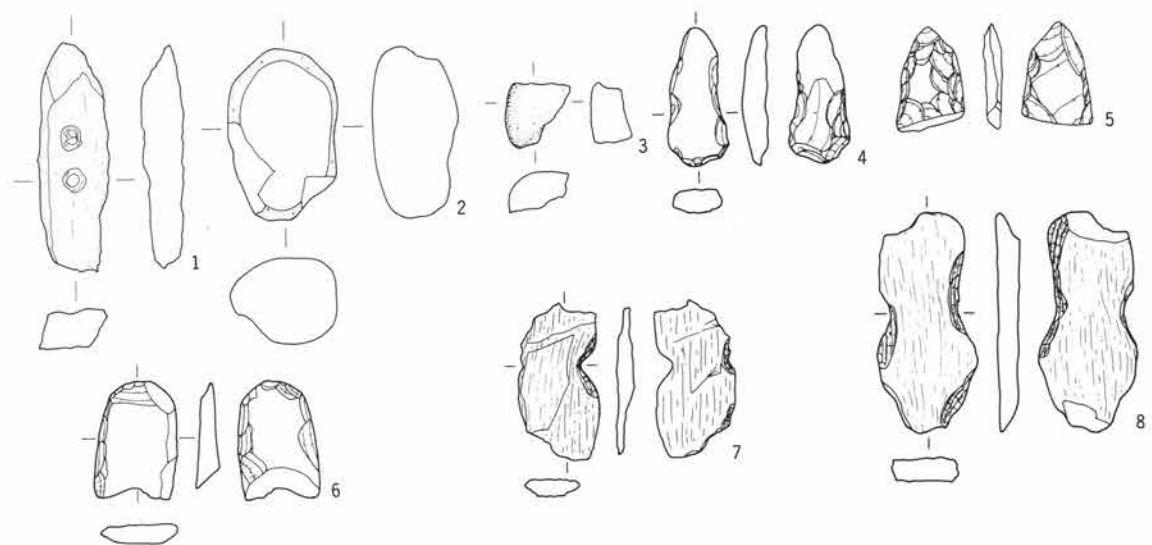
33号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------------|-------------------|---|--|-------|
| 281-12 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、沈線による文様を描く。区画内に縄 文施文。原体はR(↑横・縦転がし。 | 配石南西部 |
| 281-13 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は明褐色。 | 口縁部は内湾する。沈線による文様が描か れ、内部に縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 外面は荒れている。 | 配石北東部 |
| 281-14 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。沈線による楕円等の文 様が描かれ、地文に縄文施文。原体はR(↑ 横転がし。 | 配石南西部 |
| 281-15 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑横・縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 配石北部 |
| 281-16 124 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR(↑。 | 配石東部 |
| 281-17 124 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 口縁部に突起を有する。沈線による文様が 描かれている。 | 配石西部 |
| 282-18 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部は内湾。胴部で括れる器形と推定さ れる。沈線による「∩」状の文様を描き、 縄文施文。原体はR(↑縦位。 土器面は柔軟で、押圧が強い。 | 配石北部 |
| 282-19 124 | 口縁 部~ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰褐色。 | 口縁部に無文帯。肩部の橋状把手剥落。橋 状把手上端に微隆起帯を巡らせ、以下沈線 による文様を描く。区画内に縄文施文。原 体はL(↑縦位。 | 配石東部 |
| 282-20 124 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~12mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はL(↑縦転がし。 | 配石東部 |
| 282-21 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 沈線による文様を描き、区画内に縄文施文。 原体はR(↑縦転がし。 内面に煤が付着している。 | 配石南端 |
| 282-22 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚は10~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はR(↑縦転がし。 | 配石中心部 |
| 282-23 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 282-24 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面はにぶい黄褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 | 配石中心部 |
| 282-25 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 | 配石北西部 |
| 282-26 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR(↑縦転がし。 | 配石南西部 |
| 282-27 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 | 配石南端 |
| 282-28 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 | 配石南端 |
| 282-29 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 | 配石南端 |
| 282-30 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 | 配石南端 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

33号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|--|-------|
| 282-31 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 細沈線を垂下。 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石南端 |
| 282-32 124 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 配石北西部 |
| 282-33 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 条線を施している。 | 配石北東部 |
| 282-34 124 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線による渦巻き等の文様が描かれている。 | 配石西端 |
| 282-35 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線による円形等の文様が描かれている。 | 配石西端 |
| 282-36 124 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 沈線による円形等の文様が描かれている。 | 配石西端 |
| 282-37 124 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径86mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 細沈線を垂下している。 | 配石西部 |
| 282-38 124 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径68mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 底面周縁が磨耗している。 | 配石南西部 |
| 282-39 124 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径56mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | | 配石中心部 |
| 282-40 124 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径78mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ 縦転がし。 | 配石南部 |
| 282-41 124 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径62mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | | 配石中心部 |



第 283 図 33 号配石遺構出土石器

33号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------------|--------------|-------|-----|---------|---|-------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 283-1 124 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 18.4 | 5.8 | 3.2 | 500 | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径20mm、短径18mm、深さ4mmである。 | 配石西端 |
| 283-2 124 | 磨 石 | 一部欠損 | 流紋岩 | (13.6) | 8.7 | 7.0 | (1,050) | 器面に磨耗痕がみられる。 | 配石中央 西寄り |
| 283-3 124 | 磨 石 | 部分 | 流紋岩 | (5.2) | (5.2) | 3.3 | (100) | 器面に磨耗痕がみられる。 | |
| 283-4 124 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 11.0 | 4.9 | 2.1 | 130 | バチ (II a)。片面に大きく自然面残す。 | 配石東端 |
| 283-5 124 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 熱変成岩 | (8.2) | 5.7 | 1.6 | (82) | バチ (II b)。 | 配石北端 |
| 283-6 124 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 輝緑岩 | (9.4) | 6.5 | 1.9 | (180) | 短冊 (III)。両面に大きく節理面残る。 | 配石西寄 り |
| 283-7 124 | 打製石斧 | 一部欠損 | 絹雲母緑泥石墨 片岩 | (12.5) | 6.4 | 1.4 | (140) | 分銅 (I)。1側は内湾の度合い小さい。 | 配石中央 |
| 283-8 124 | 打製石斧 | 一部欠損 | 石墨絹雲母片岩 | (17.5) | 8.0 | 2.0 | (360) | 分銅 (I)。 | 配石中央 |

34号配石遺構 (第284~289図、PL. 76、125)

位置 Gd-40、Ge-39・40グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西92m (遺構の中心までの距離)、35号配石遺構の東に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月12日に33号配石遺構とともに調査を開始した。翌日に全景写真と部分写真の撮影を行い、実測作業に入った。遺物の取り上げは9月下旬に実施し、その後さらに掘り下げを行った。以後、他の配石遺構の調査を継続しつつ、12月上旬に最終面の全景写真撮影を行い、遺物取り上げを実施した。配石遺構の石の取り上げは12月中旬に実施し、その後下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。35号配石遺構と接している。

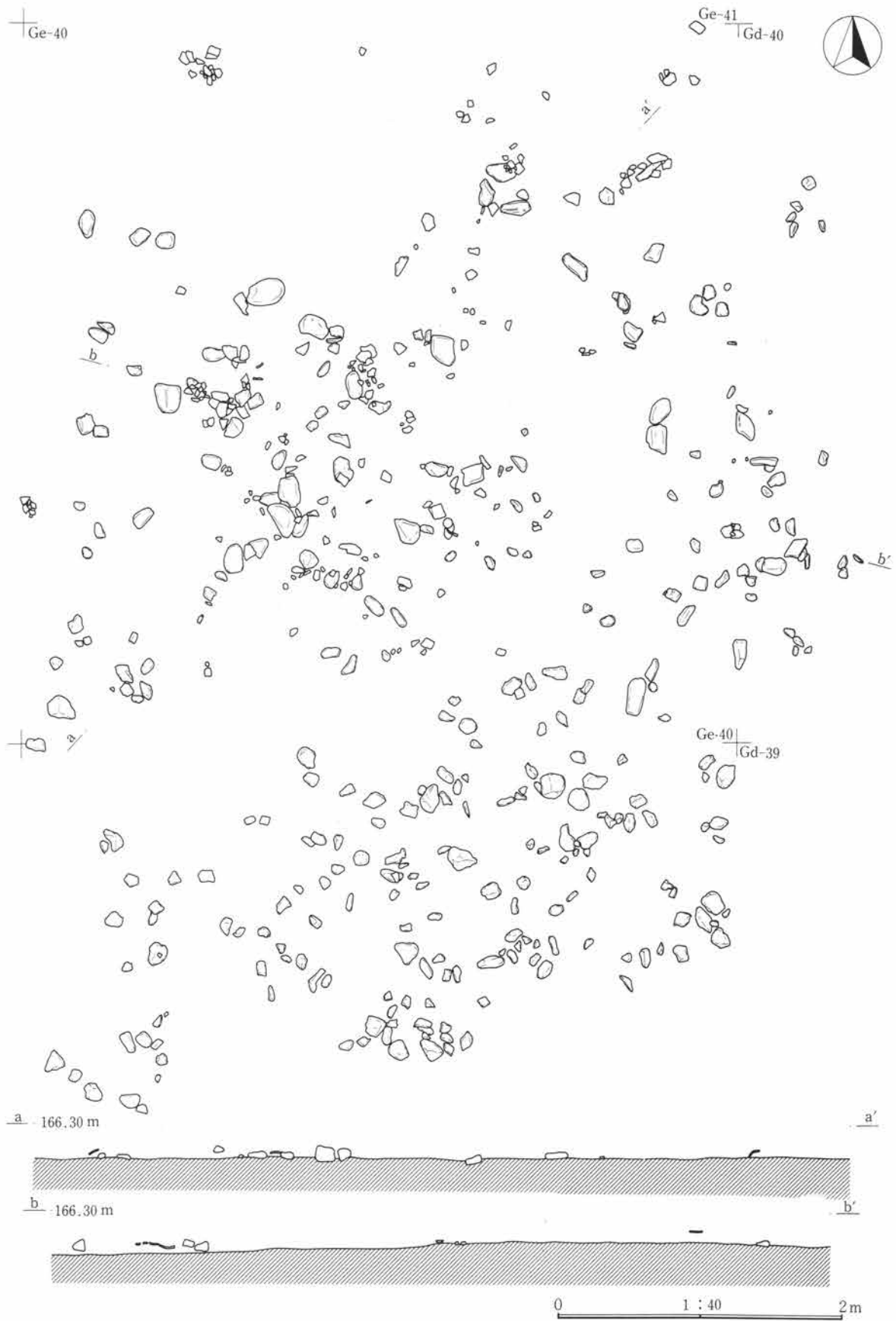
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径8m50cm、短径6mの楕円形の範囲に配石が認められる。その中で集中している部分は3箇所認められる。1ブロックは長径160cm、短径110cm、面積は約2㎡。2ブロックは長径280cm、短径250cm、面積は約5.9㎡。3ブロックは長径360cm、短径250cm、面積は約8.5㎡である。配石の総面積は約37.1㎡となる。

使用石材 36種類の石材が確認された。306点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩106点(34.6%)、輝緑岩34点(11.1%)、点紋絹雲母石墨片岩18点(5.9%)、点紋緑泥片岩15点(4.9%)、珪石14点(4.6%)、輝岩13点(4.2%)、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各9点(各2.9%)、チャート・石墨絹雲母片岩各6点(各2%)、絹雲母緑泥石墨片岩・斑斕岩・紅簾絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各5点(各1.6%)、角閃岩・珪岩各4点(各1.3%)、石墨片岩3点(0.9%)、緑簾緑泥片岩・緑泥石墨片岩・輝緑凝灰岩・砂岩・綠色珪質板岩・変斑斕岩各2点(各0.7%)、赤色珪質板岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥石墨片岩・閃緑岩・熱変成岩・脆雲母石墨片岩・紅簾片岩・方散虫板岩・頁岩・点紋絹雲母片岩・千枚岩各1点(各0.3%)であり、不明は20点(6.5%)を数えた。不明の石を除いた286点中192点(67.1%)の石が片岩類である。

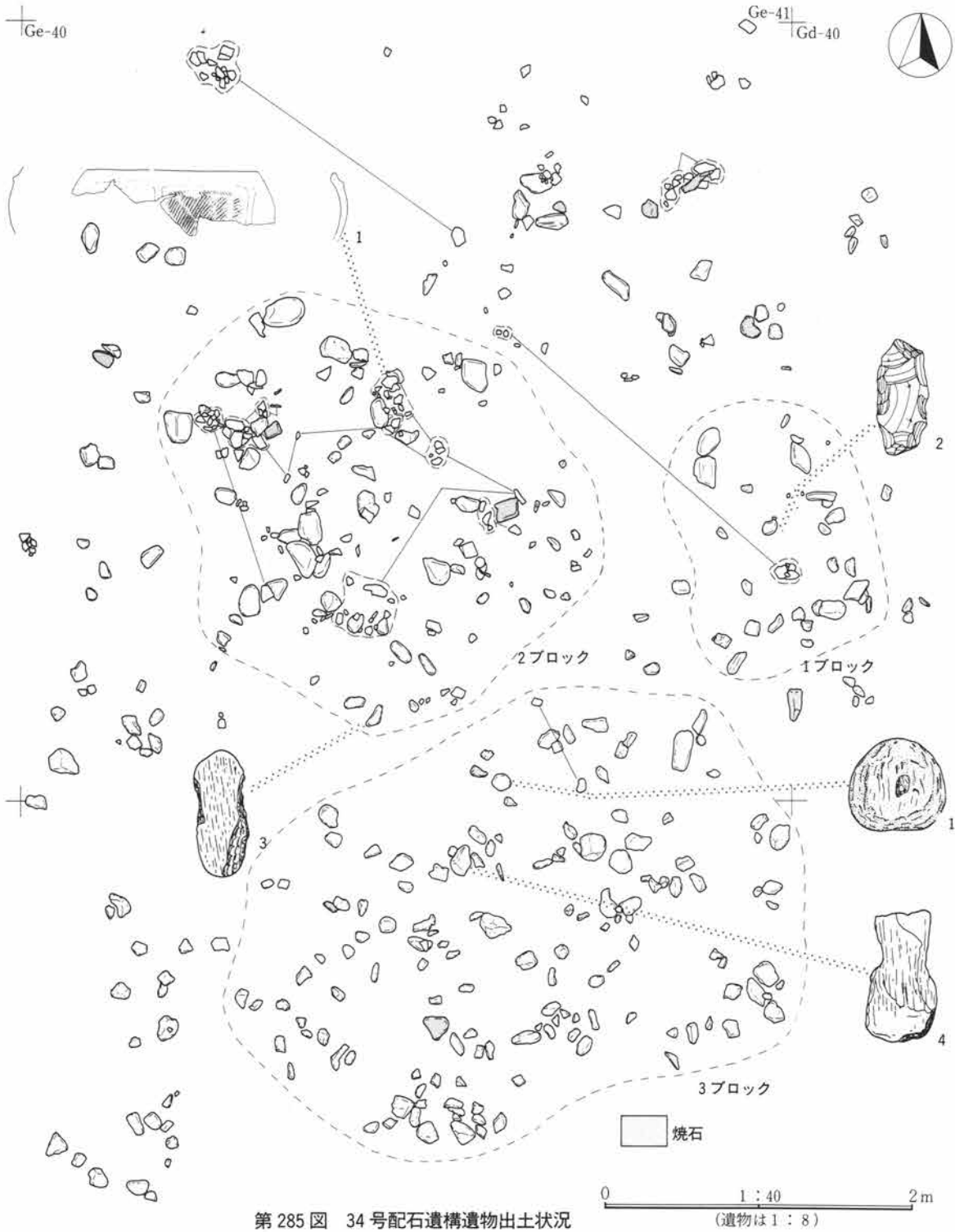
石材重量 重量の判明している石は286点である。その内訳は、500g未満の石113点(39.5%)、500g~1kg未満の石82点(28.7%)、1kg~2.5kg未満の石62点(21.7%)、2.5kg~5kg未満の石24点(8.4%)、5kg~7.5kg未満の石2点(0.7%)、7.5kg~10kg未満の石2点(0.7%)、10kg~20kg未満の石1点(0.3%)である。

遺物出土状況 197点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部25点、胴部167点、底部5点であ



第284図 34号配石遺構

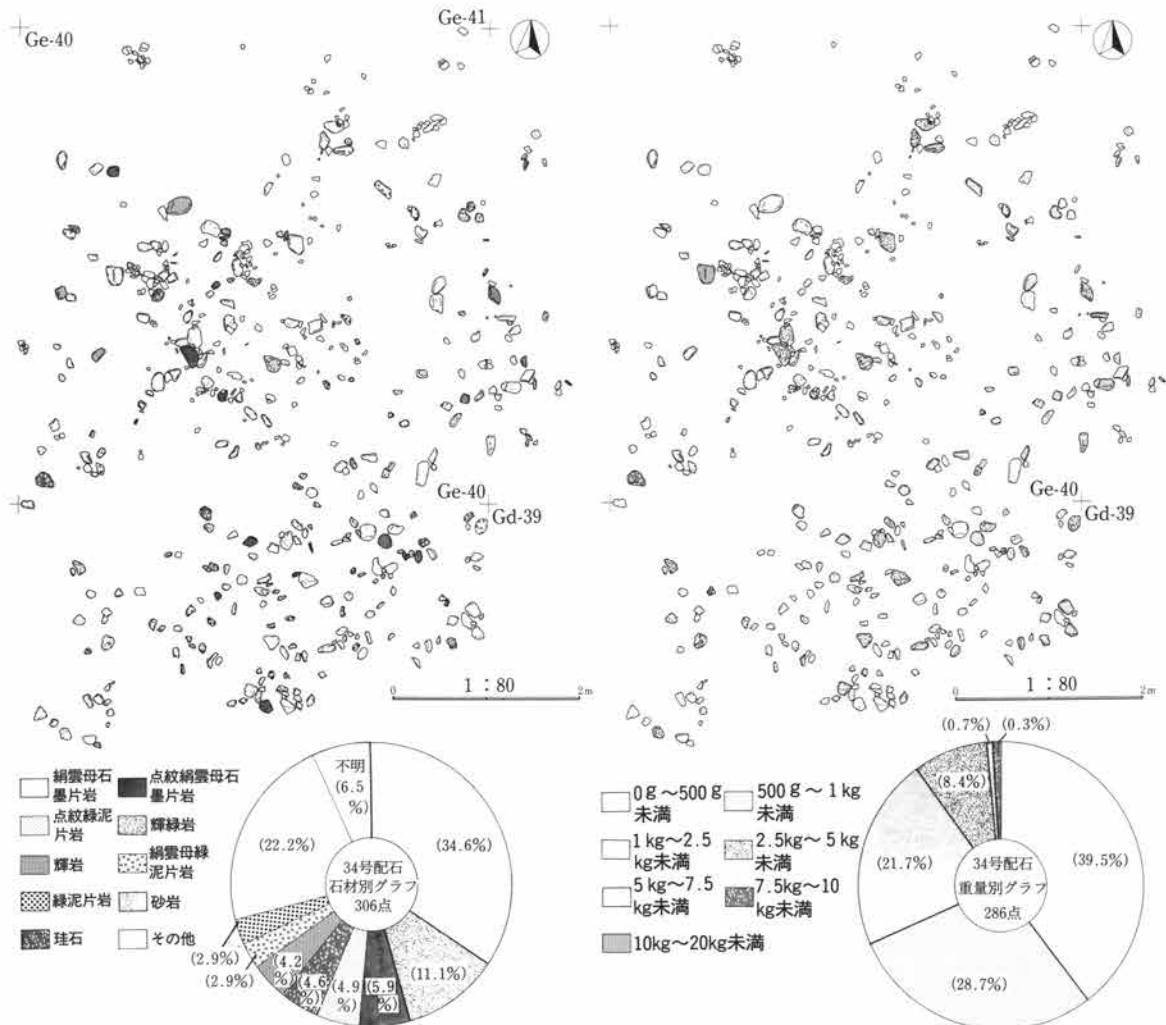
5 配石遺構〈34号〉



第285図 34号配石遺構遺物出土状況

(遺物は1:8)

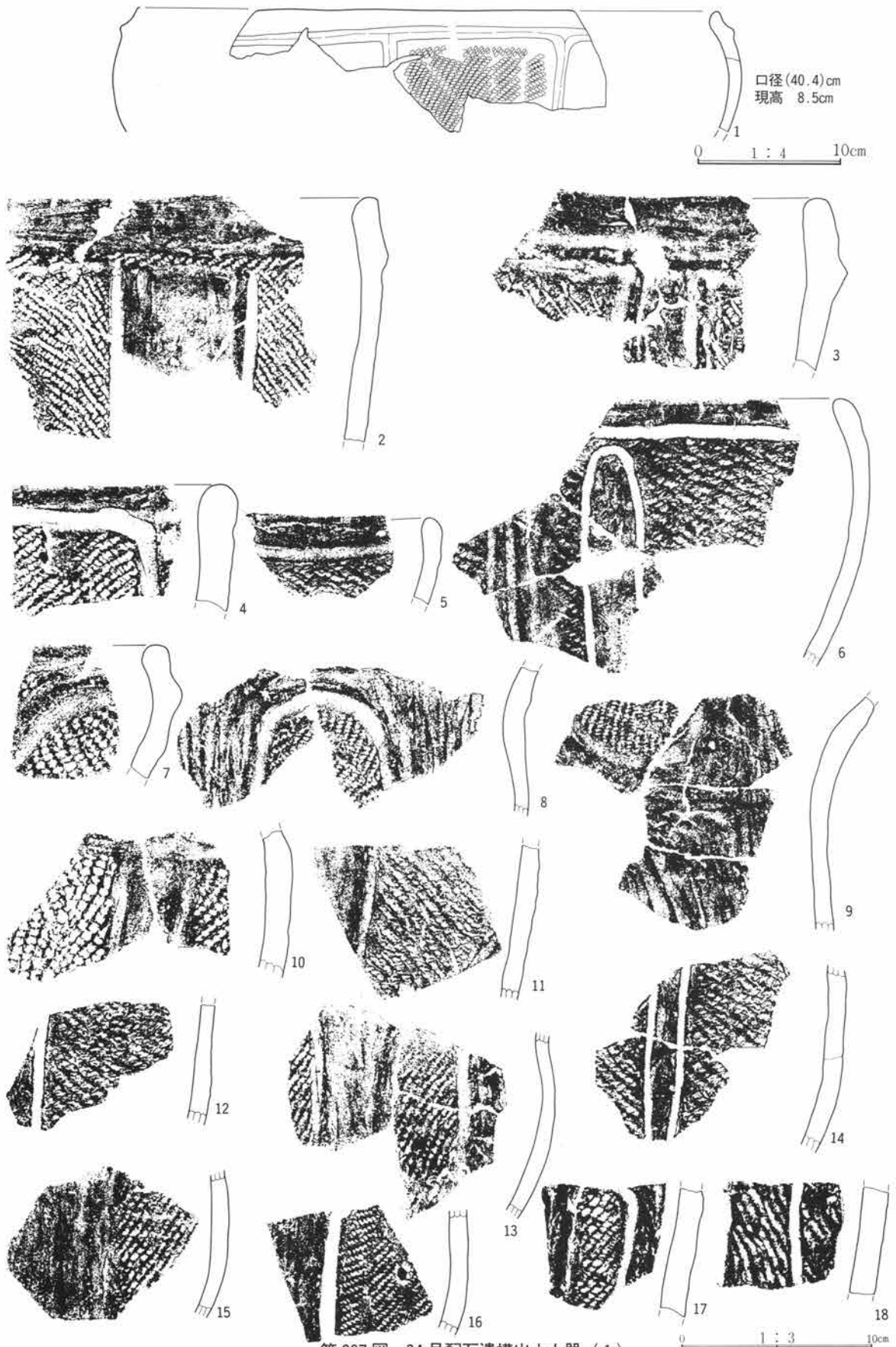
り、3ブロックに集中して出土している。1・2ブロックには土器片はほとんど出土していない。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では1ブロックから打製石斧1点、2ブロックから打製石斧1点、3ブロックから多孔石1点と打製石斧各1点が出土している。各ブロックとも打製石斧の出土が共通している。石器の含有率は1.3%であり、また焼石は306点中12点の出土で、3.9%を占めている。所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であり、配石ブロック下には土壌等は存在しなかった。



第286図 34号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布とグラフ

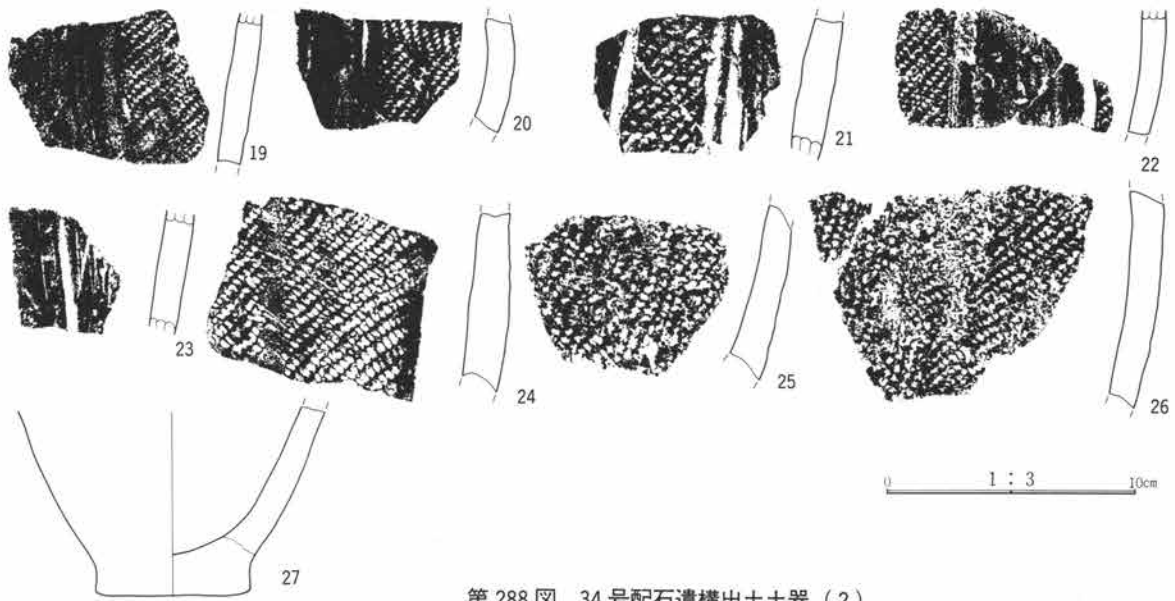
34号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|--|---|-------|
| 287-1 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部は内湾。口唇部に狭い無文帯をおき 1条の微隆起帯を巡らす。それと接続する 微隆起帯を垂下。区画内にR↑横・縦位施 文。 | 配石北西部 |
| 287-2 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らし、それに接続する微隆起帯を垂 下。微隆起帯上と区画内にL↑長横・縦位。 土器面は柔軟。 | 一括 |
| 287-3 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らし、それに接続する微隆起帯を垂 下。区画内にR↑縦位。太い条と細い条を 使用。 | 配石北東部 |
| 287-4 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②非常に良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部に幅広の沈線による楕円等の文様が 描かれ、内部に縄文施文。原体はL↑長横 がし。土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南西部 |
| 287-5 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 波状口縁部片。口唇部に狭い無文帯をおき、 1条の沈線を巡らせる。以下縄文施文。原 体はL↑長縦転がし。 | 配石東端 |
| 287-6 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部は内湾。口唇部に狭い無文帯をおき 幅広の沈線を巡らせる。胴部には「Π」状 の沈線による区画。内部磨り消し。縄文は L↑縦位。 | 配石北西端 |



第 287 図 34 号配石遺構出土土器 (1)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



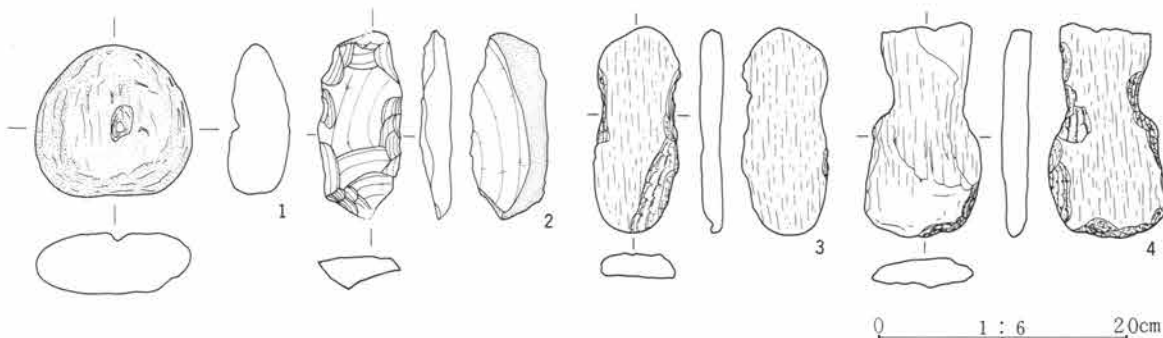
第288図 34号配石遺構出土土器(2)

34号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|---|--|--------------|
| 287-7 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 口縁部は内湾する。隆帯による楕円等の文 様を描き、地文に縄文施文。原体はR(↑横 転がし。 | 配石西部 |
| 287-8 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯による「∩」状の文様を描き、区 画内に縄文施文。原体はR(↑縦転がし。 | 配石西部 |
| 287-9 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐灰色。 | 胴部に括れを有する。微隆起帯による「U」 字状の文様を描き、区画内に縄文施文。原 体はR(↑縦転がし。 | 配石北西部 |
| 287-10 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面はにぶい横橙色。 | 地文に縄文施文。 原体はR(↑ $\begin{matrix} L \\ R \\ L \\ R \end{matrix}$ 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 287-11 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 沈線による文様を描き、区画内に縄文施文。 原体はL(↑縦転がし。 | 配石北東端 |
| 287-12 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 | 配石中心部 |
| 287-13 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 胴部に括れを有する。微隆起帯による「∩」 状の文様を描き、区画内に縄文施文。原体 はR(↑縦転がし。内面に煤付着。 | 配石北西部 |
| 287-14 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北部 |
| 287-15 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。 | 微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文 施文。原体はR(↑縦転がし。押圧が強い。 | 配石西部 |
| 287-16 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰赤色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はR(↑縦転がし。 | 配石北部 |
| 287-17 125 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 沈線による「∩」状の文様が描かれ、区画 内に縄文施文。原体はR(↑(0段多条か?) 縦転がし。 | 配石北部 |
| 287-18 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 縄文施文。 原体はR(↑縦転がし。沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南西部 と北部 |

34号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|---|-------|
| 288-19 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はR(上)縦転がし。 | 配石北西部 |
| 288-20 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、内部に縄文 施文。原体はR(上)横・縦転がし。 | 配石北部 |
| 288-21 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 沈線を垂下。 内部に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 | 配石北部 |
| 288-22 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒色。 | 微隆起帯を垂下させ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。 内面に炭化物が多量に付着している。 | 配石北西部 |
| 288-23 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 条線を施し、沈線を垂下。 | 配石西部 |
| 288-24 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 微隆起帯を垂下させ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。 | 配石中心部 |
| 288-25 125 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 底部に近い部分。縄文施文。原体はR(上)縦 転がし。外面は荒れている。 内面に煤が付着している。 | 配石北東部 |
| 288-26 125 | 胴部 片 | ①粗粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面は荒れている。 内面に煤が付着している。 | 配石北東部 |
| 288-27 125 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径62mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石中心部 |



第 289 図 34号配石遺構出土石器

34号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------------|--------------|------|-----|-------|--|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 289-1 125 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 12.5 | 11.9 | 4.9 | 1,100 | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径は30mm、短 径16mm、深さ8mmである。凹石の凹みとは異なる。 | 3ブロッ ク |
| 289-2 125 | 打製石斧 | 完形 | 熟変成岩 | 14.9 | 6.8 | 2.5 | 263 | 短冊(III?)。片面が未調整の未成品と思われる。 | 1ブロッ ク |
| 289-3 125 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 16.3 | 6.9 | 2.0 | 350 | 分銅(I)。両面の内湾の度合い小さい。 | 2ブロッ ク |
| 289-4 125 | 打製石斧 | 一部欠損 | 点紋絹雲母石墨 片岩 | (17.0) | 9.1 | 2.3 | (430) | 分銅(I)。 | 3ブロッ ク |

35号配石遺構 (第290～294図、PL. 76、125)
位置 Gf-38～42、Gg-39・40グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西99m (遺構の中心までの距離)、34号配石遺構の西に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月中旬から33号・34号配石遺構とともに調査を開始した。17日に遺構の全景写真の撮影を行い、実測作業に入った。27日までに実測を終了し、遺物の取り上げは9月下旬から実施。その後さらに掘り下げを行った。以後、他の配石遺構の調査に移り、12月になって遺物の取り上げと配石の取り上げを実施し、下部の調査を行ったが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。34号配石遺構と接している。

覆土 竖穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径20m、短径8mの範囲に石と土器片が散在しているが、集中しているのは長径8m、短径6mの楕円形を呈した範囲である。

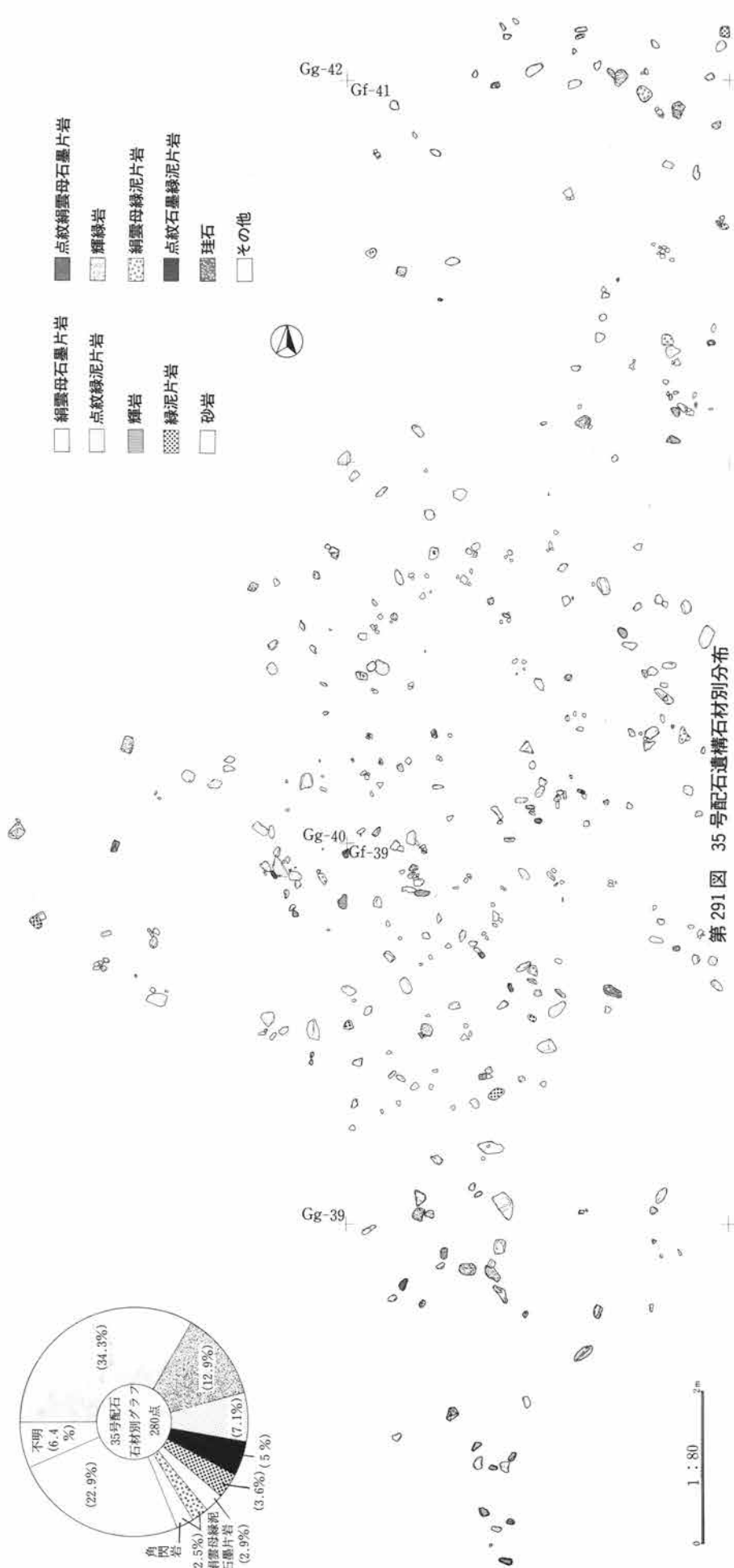


5 配石遺構〈35号〉

この部分の配石の面積は約20.8㎡である。

使用石材 28種類の石材が確認された。280点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩96点(34.3%)、輝緑岩36点(12.9%)、点紋緑泥片岩20点(7.1%)、点紋絹雲母石墨片岩14点(5.0%)、緑泥片岩10点(3.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩8点(2.9%)、絹雲母緑泥片岩・角閃岩・石墨絹雲母片岩・珪石各7点(各2.5%)、輝岩6点(2.1%)、点紋絹雲母緑泥片岩・珪岩各5点(各1.8%)、斑岩・紅簾絹雲母片岩・熱変成岩・砂岩各4点(各1.4%)、チャート・安山岩・絹雲母片岩各3点(各1.1%)、閃輝緑岩2点(0.7%)、赤色珪質板岩・緑簾緑泥片岩・石墨片岩・緑泥石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・方散虫板岩各1点(各0.4%)であり、不明は18点(6.4%)を数えた。不明の石を除いた262点中178点(67.9%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は280点である。その内訳は、500g未満の石85点(30.4%)、1kg～2.5kg未満の石75点

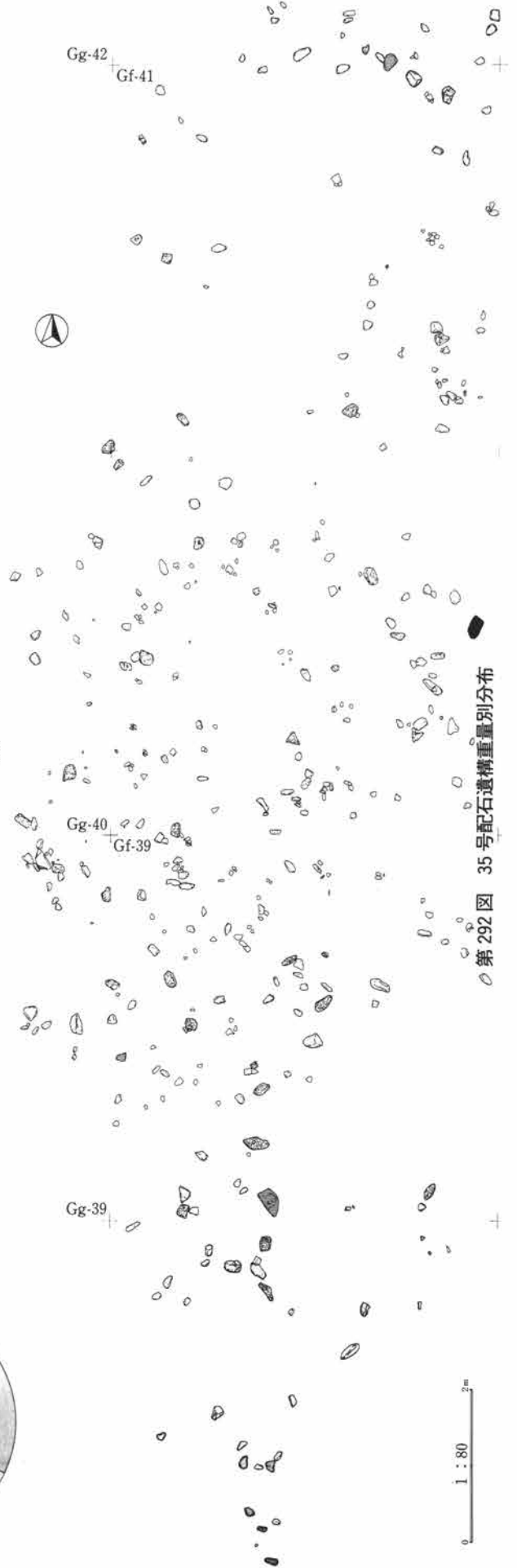
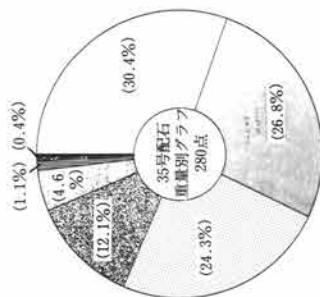


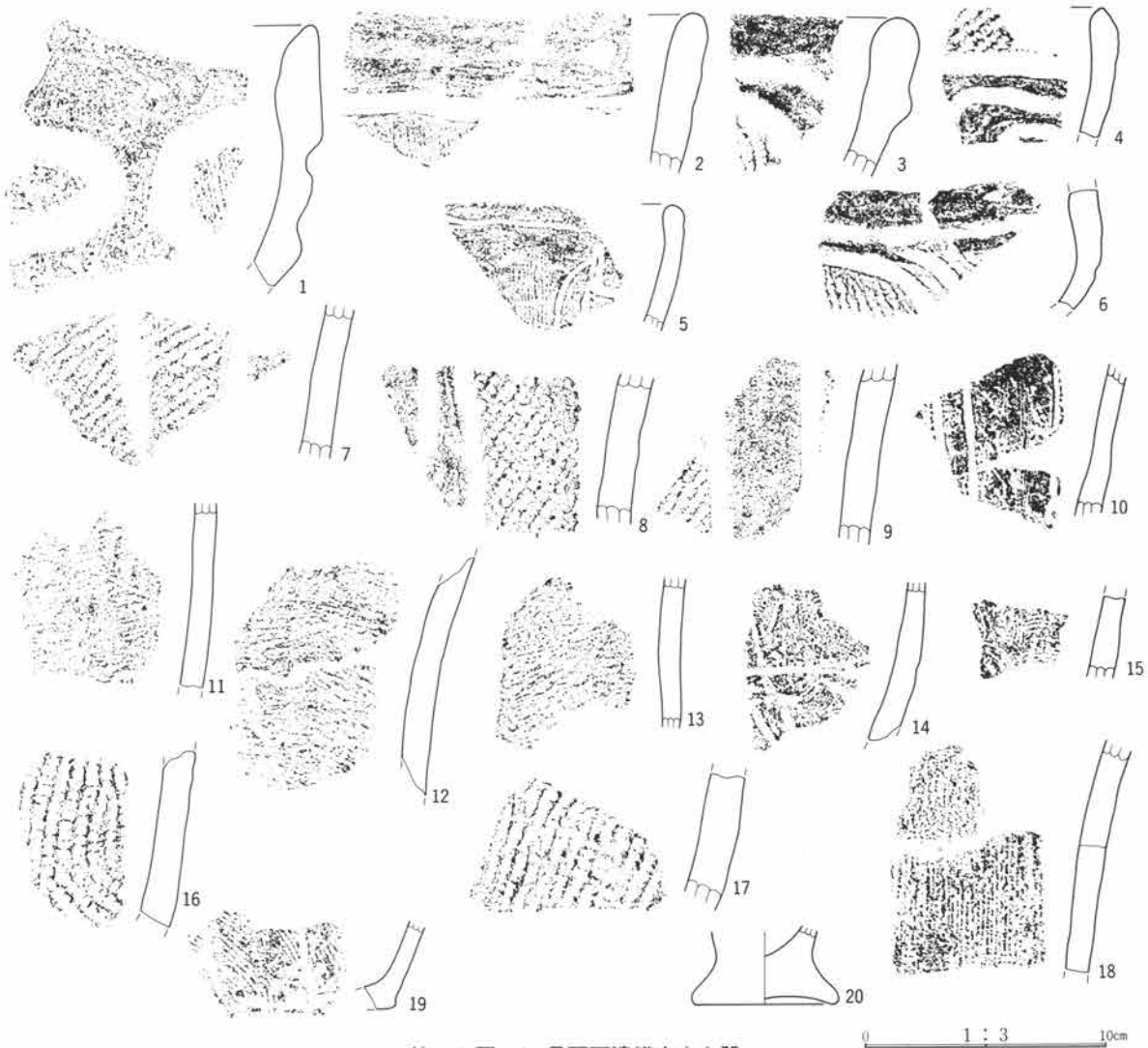
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

(26.8%)、500g～1kg未満の石68点(24.3%)、2.5kg～5kg未満の石34点(12.1%)、5kg～7.5kg未満の石13点(4.6%)、10kg～20kg未満の石3点(1.1%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.4%)、40kg～50kg未満の石1点(0.4%)である。

遺物出土状況 196点の土器片が出土している。部位別点数は、口縁部25点、胴部163点、底部8点であり、配石の中心部からの出土が多い。加曽利E3式土器を主体に、E4式土器片も含まれていた。石器では多孔石1点が遺構の南端から、磨石1点は遺構の西端、打製石斧3点はほぼ中心部近くから、磨製石斧1点は遺構西端からそれぞれ出土している。石器含有率は2.1%であり、また焼石は280点中31点で、11%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E3式期の配石遺構であるが、広範囲に遺物が分布しているために、明確に遺構として把握することにたいしては若干の疑問が残る。





第293図 35号配石遺構出土土器

35号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|--------------------|--|--|-------|
| 293-1 125 | 口縁 部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~19mm。 内面は粗い横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 内湾する波状口縁部片。太い沈線による楕 円等の文様が描かれ、地文に条線が施され ている。 | 配石中心部 |
| 293-2 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②非常に良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡ら せる。以下条線を施している。 | 配石中心部 |
| 293-3 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部に隆帯による楕円等の文様が描か れ、地文に縄文施文。原体はR(上横転がし)。 | 配石南部 |
| 293-4 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口唇部に縄文施文。原体はL(上横転がし)。 以下沈線により文様が施されている。 | 配石中心部 |
| 293-5 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 口唇部に1条の沈線を巡らせ、以下沈線に よる文様と条線による文様が施されてい る。 | 配石中心部 |
| 293-6 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②非常に良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。沈線による楕円等の文 様が描かれ、縄文施文。原体はL(上横転が し)。 | 配石北西部 |

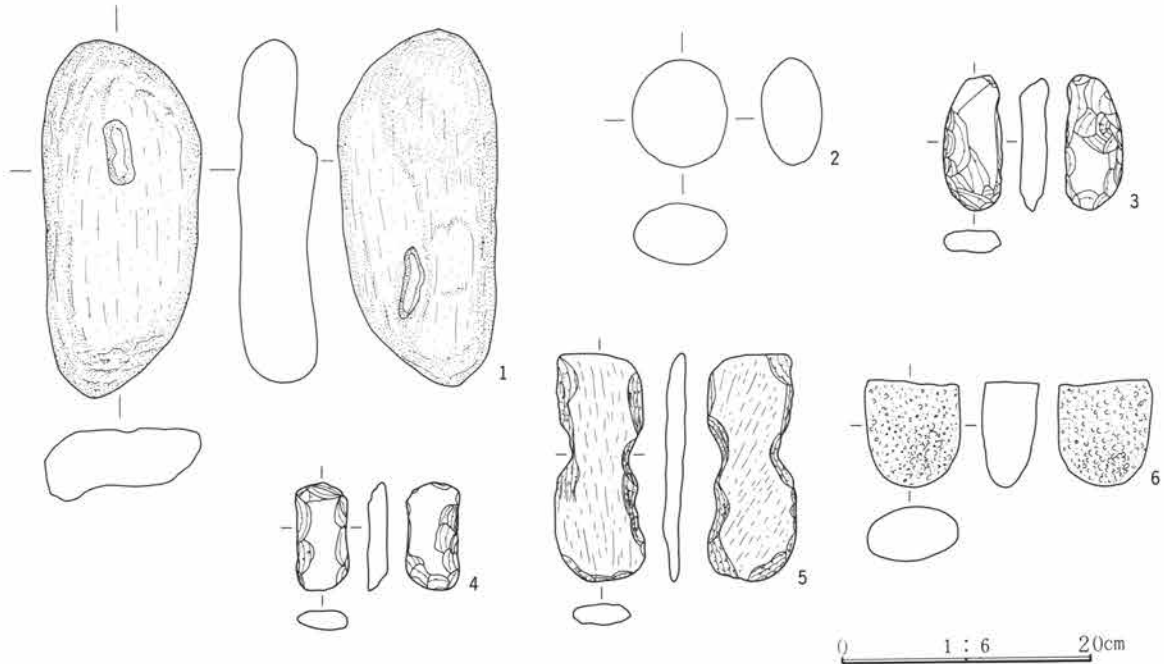
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

35号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|---|-------|
| 293-7 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 293-8 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南東部 |
| 293-9 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南部 |
| 293-10 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。 | 条線を施している。沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 293-11 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 配石南部 |
| 293-12 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 配石南部 |
| 293-13 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 配石東部 |
| 293-14 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。 | 条線による文様が描かれている。 内面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 293-15 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 条線による文様が描かれている。 | 配石中心部 |
| 293-16 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦・横転がし。 | 配石南部 |
| 293-17 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 | 配石南部 |
| 293-18 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 条線が施されている。 | 配石南東部 |
| 293-19 125 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。器厚6~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はL{ $\frac{1}{2}$ }縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 293-20 125 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 底径60mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。 | | 配石南部 |

35号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|--------------|------|-----|-------|--|----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 294-1 125 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 28.0 | 12.7 | 6.5 | 3,800 | 両面に2個の大きな凹みがある。凹みの平均は長径52mm、短径17mm、深さ5mmである。一部焼けている。 | 配石の南端ちかく |
| 294-2 125 | 磨石 | 完形 | 輝緑岩 | 8.5 | 7.6 | 4.9 | 500 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 配石西端 |
| 294-3 125 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 17.0 | 7.1 | 2.2 | 140 | バチ (II b)。片面刃部付近に磨耗痕見られる。 | 配石西端 |
| 294-4 125 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 8.5 | 4.3 | 1.6 | 80 | 短冊 (III)。両側がわずかに内湾気味。 | 配石中央 |
| 294-5 125 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 18.1 | 7.2 | 1.8 | 170 | 分胴 (I)。 | 中央北寄り |
| 294-6 125 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 斑礫岩 | 8.4 | 7.5 | 4.6 | 450 | 磨き途中。ほぼ全面に敲打痕残る。 | 配石西端 |



第294図 35号配石遺構出土石器

40号配石遺構 (第295～299図、PL. 77、125)

位置 Gm-34・35、Gn-34グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西142m (遺構の中心までの距離)、37号配石遺構の西南西25mの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) 最西端からの検出。8月下旬から調査を開始し、9月1日に全景写真と部分写真撮影を実施した。その後、実測と遺物取り上げ作業を、10月中旬には配石遺構の石の取り上げを行った。配石遺構の下部には土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって遺構の一部が壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 現状で長径2m50cm、短径2mの範囲に配石が施されているが、集中しているのは配石の東側部分である。また配石の周囲にも散漫的に石の分布が認められる。配石の面積は約17.4㎡である。

使用石材 22種類の石材が確認された。148点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩50点 (33.8%)、輝緑岩12点 (8.1%)、点紋緑泥片岩11点 (7.4%)、輝岩10点 (6.8%)、点紋石墨緑泥片岩9点 (6.1%)、緑泥片岩7点 (4.7%)、珪石6点 (4.1%)、砂岩・点紋絹雲母石墨片岩・斑斕岩各4点 (各2.7%)、絹雲母緑泥石墨片岩・熱変成岩各3点 (各2%)、チャート・緑簾緑泥片岩・石墨片岩各2点 (各1.4%)、絹雲母緑泥片岩・安山岩・絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・角閃岩・点紋絹雲母緑泥片岩・変斑斕岩各1点 (各0.7%) であり、不明は12点 (8.1%) を数えた。不明の石を除いた136点中91点 (66.9%) の石が片岩類である。

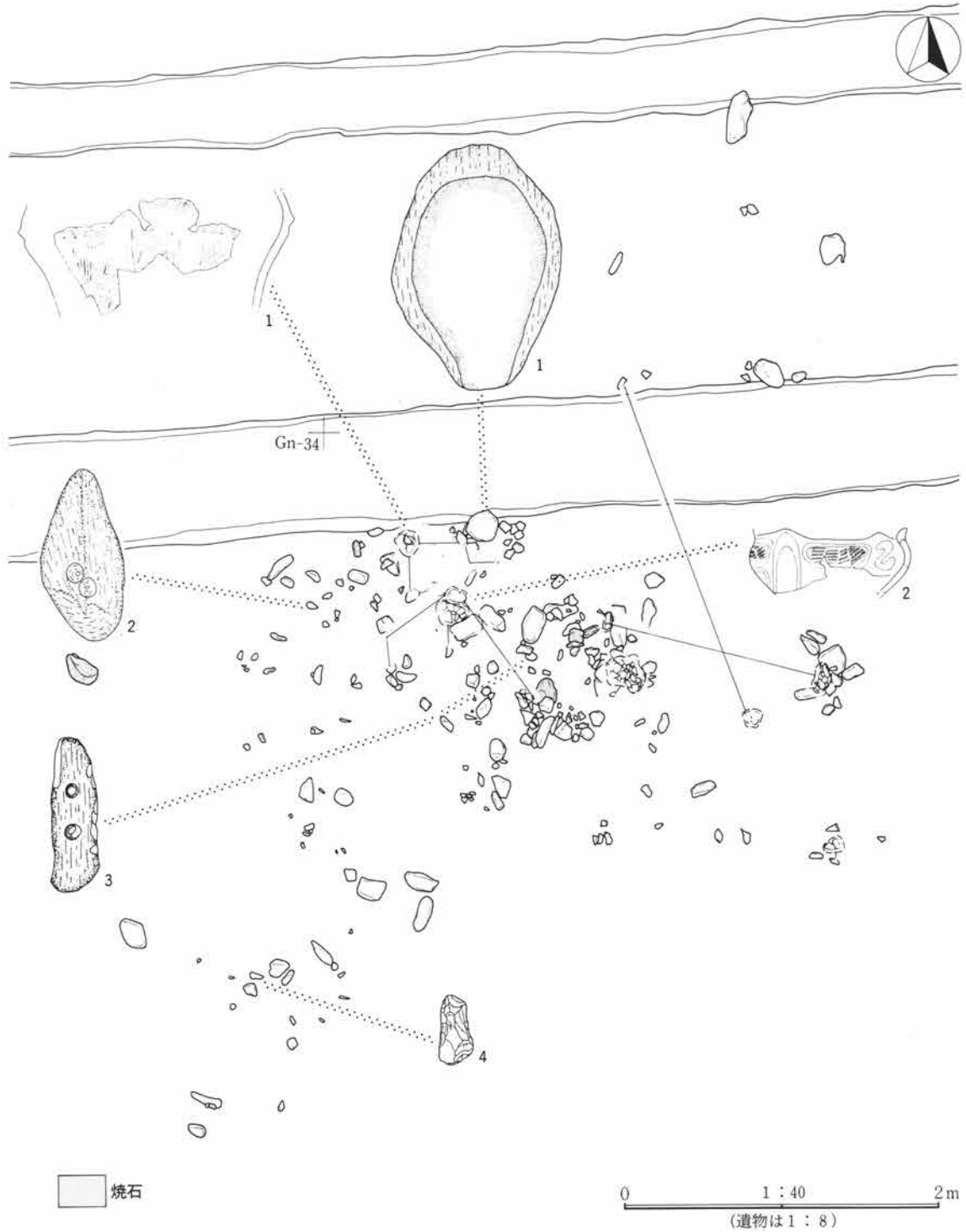
石材重量 重量の判明している石は137点である。その内訳は、500g未満の石74点 (54%)、500g～1kg未満の石31点 (22.6%)、1kg～2.5kg未満の石21点 (15.3%)、2.5kg～5kg未満の石9点 (6.6%)、5kg～7.5kg未満の石1点 (0.7%)、7.5kg～10kg未満の石1点 (0.7%) である。

遺物出土状況 130点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部29点、胴部100点、底部1点であり、配石にとまなうもので周辺からの出土はほとんどなかった。加曽利E3式を主体に、E4式土器片も少量含まれていた。石器では石皿1点が配石の北端から出土し、また多孔石1点は西端から、凹石1点は中央

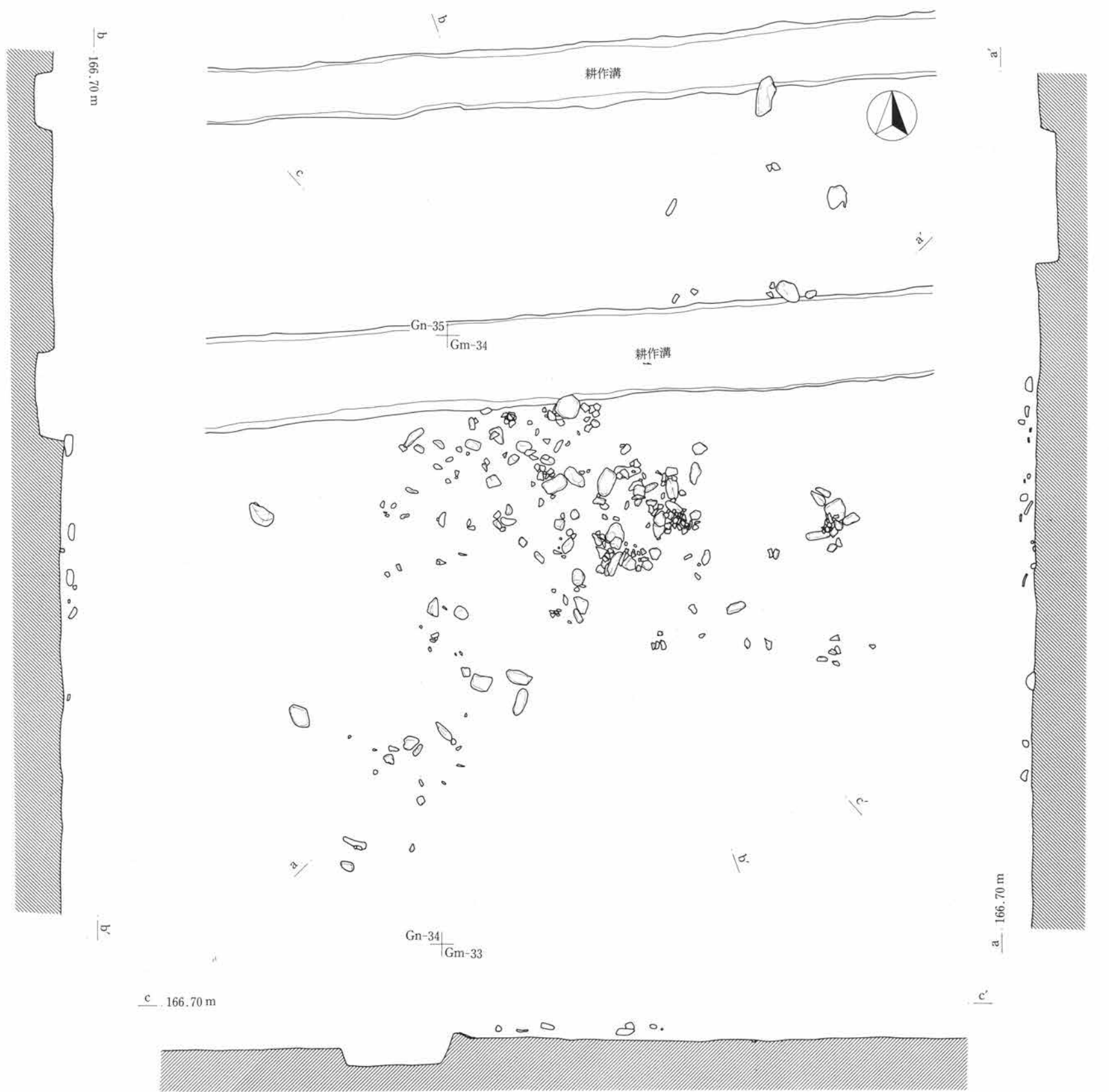
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

部から、打製石斧1点は配石の西南端からそれぞれ出土している。石器の含有率は2%であり、また焼石は148点中10点の出土で、6.8%を占めている。

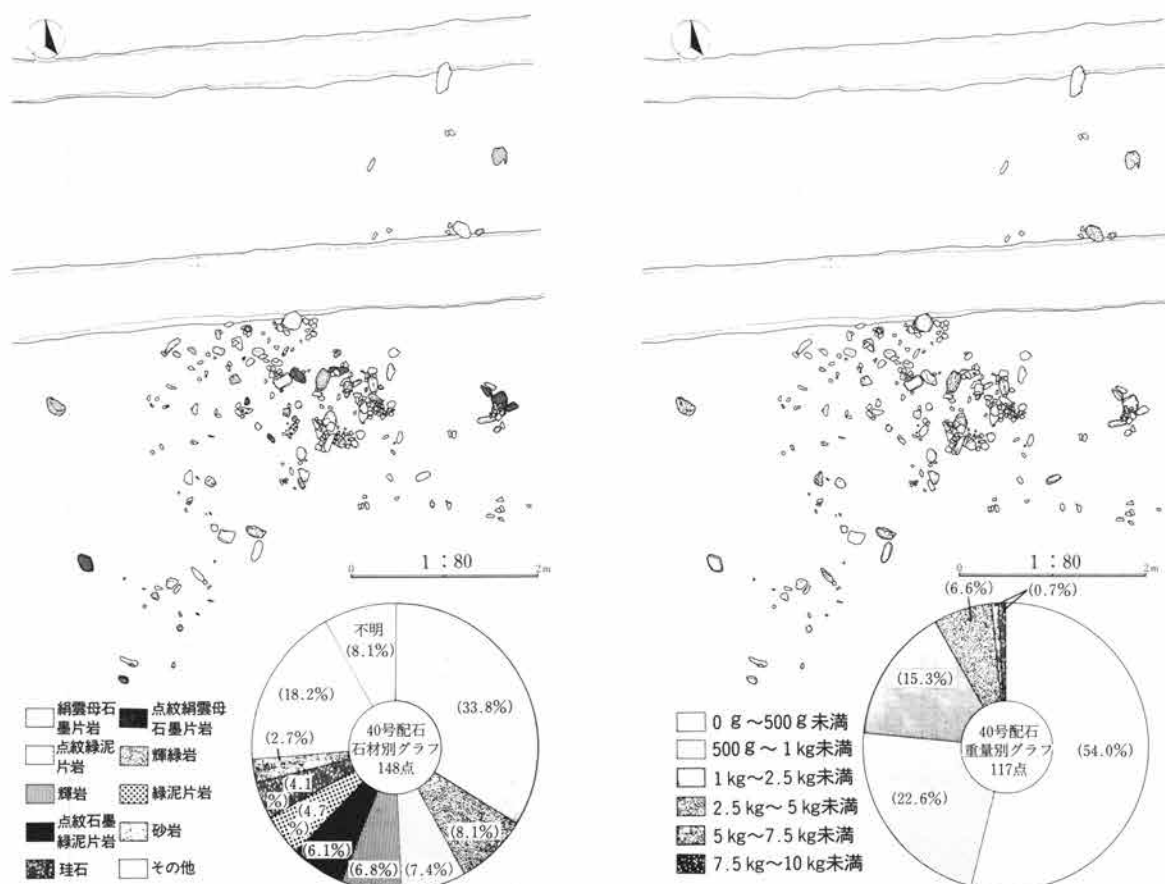
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第295図 40号配石遺構遺物出土状況



第296図 40号配石遺構

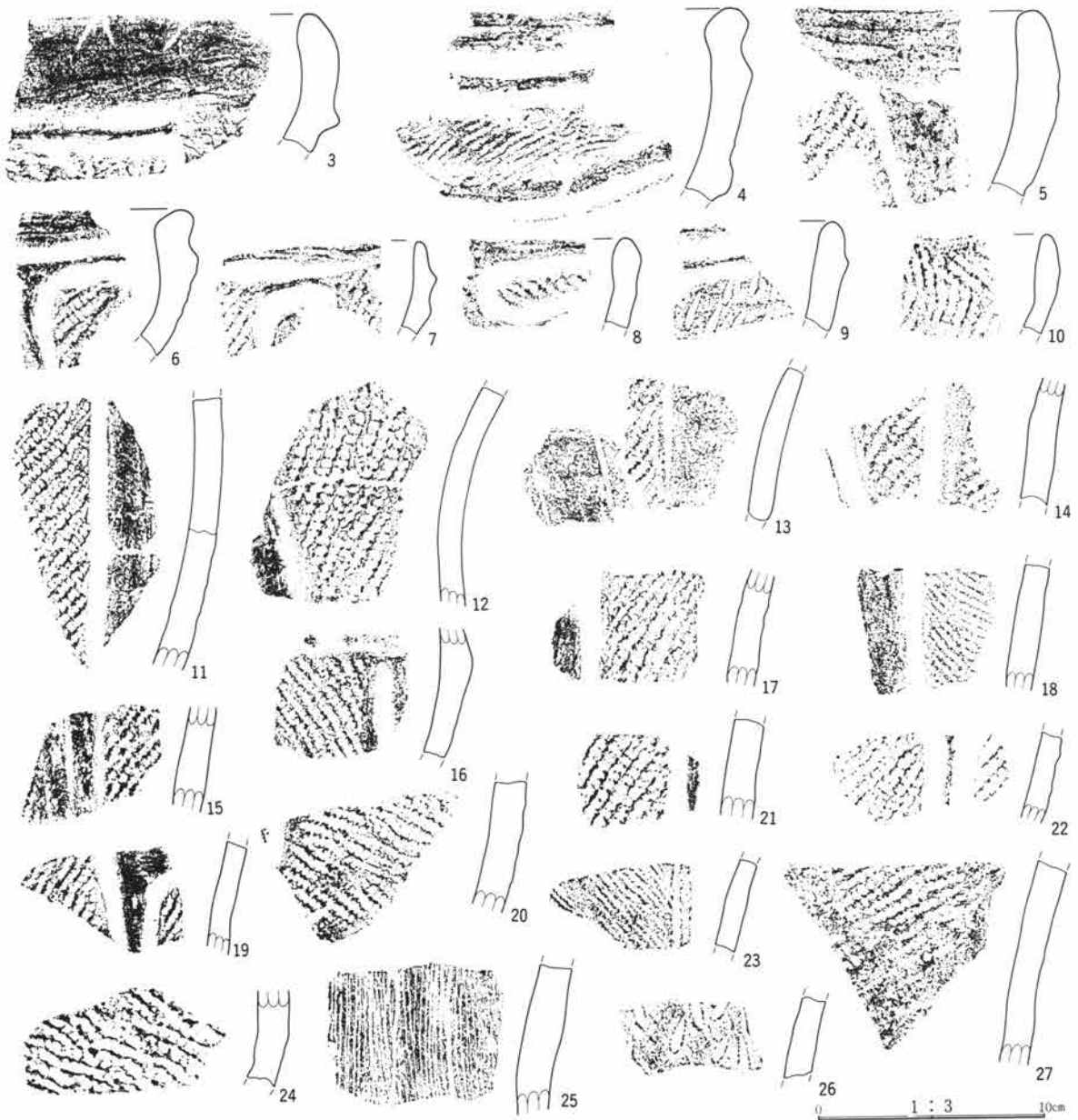
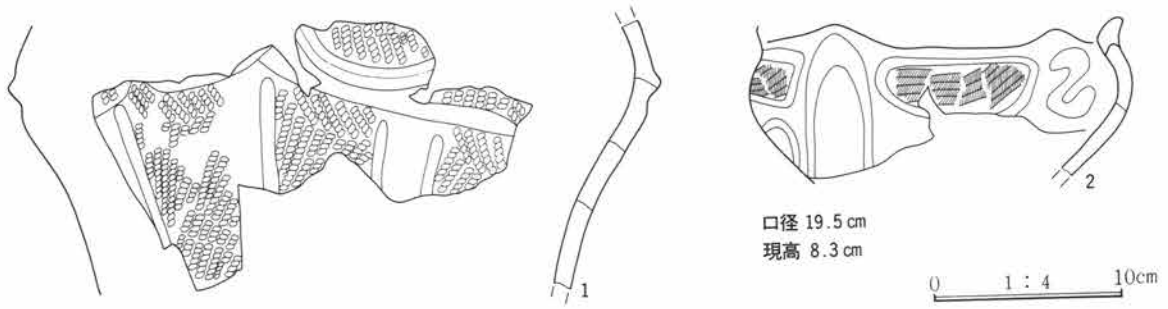


第297図 40号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布とグラフ

40号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|-------------------|--|--|-------|
| 298-1 125 | 口縁部 ~ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色。 | 口縁部は内湾。口縁部に隆帯と沈線による 楕円等の文様を描き、縄文施文。原体はR {↑横位。胴部はR{↑横・縦位。沈線を垂 下。 | 配石北西部 |
| 298-2 125 | 口縁 部 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は黒褐色。 | 口縁部は内湾し、4単位の突起が付けられ る。口縁部に沈線による楕円、「E」状の文様 を描き、縄文施文。原体はL{↑斜・横位。 外面に煤が付着している。 | 配石北西部 |
| 298-3 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色、内面は灰褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に1条の微隆起 帯を巡らし、胴部に縄文施文。原体はR{↑。 | 配石中心部 |
| 298-4 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様を描き、縄 文施文。原体はL{↑横転がし。 | 配石南東部 |
| 298-5 125 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は明赤褐色。 | 口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、沈線による文様を描く。区画内に縄 文施文。原体はR{↑縦転がし。 | 配石北端 |
| 298-6 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12~17mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は褐灰色。 | 隆帯と沈線による楕円等の文様を描き、縄 文施文。原体はR{↑。 | 配石北部 |
| 298-7 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚5~8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 口縁部は内湾する。沈線による「E」状の 文様等を描き、縄文施文。原体はR{↑縦転 がし。 | 配石北東部 |
| 298-8 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 沈線による楕円等の文様を描き、縄文施文。 原体はR{↑横転がし。 | 配石北東部 |

5 配石遺構〈40号〉

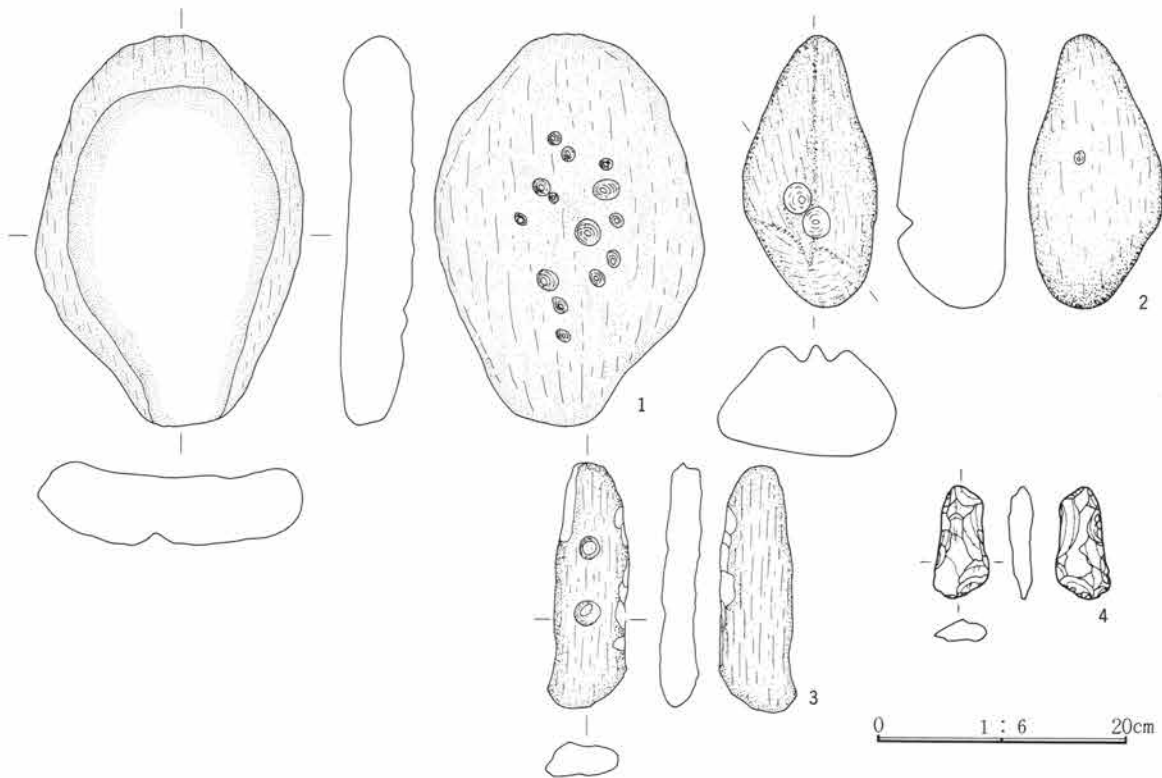


第 298 图 40号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

40号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|--------------------|---|---|-------|
| 298-9 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らす。以下押し引き状の沈線を施し ている。 | 配石中心部 |
| 298-10 125 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 口縁部は内湾する。縄文施文。原体はR{ \uparrow 横・縦転がし。 外面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 298-11 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は黒褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北端 |
| 298-12 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北西部 |
| 298-13 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 細沈線による文様を描き、区画内に縄文施 文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 | 配石中心部 |
| 298-14 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 298-15 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 298-16 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は明赤褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 。 沈線を垂下。 | 配石北西部 |
| 298-17 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟。 | 配石北西部 |
| 298-18 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。 | 地文に縄文施文。原体はL{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 298-19 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。 | 沈線による文様を描き、縄文施文。 原体はR{ \uparrow 縦転がし。 | 配石西部 |
| 298-20 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR{ \uparrow 横転がし。 | 配石南東部 |
| 298-21 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北西部 |
| 298-22 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい褐色。 | 地文に縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南西部 |
| 298-23 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はL{ \uparrow 縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石北部 |
| 298-24 125 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR{ \uparrow 横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北西部 |
| 298-25 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。 | 条線が施されている。 | 配石中心部 |
| 298-26 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 押し引き状の沈線が施されている。 | 配石東部 |
| 298-27 125 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はR{ \uparrow 縦転がし。 | 配石中心部 |



第 299 図 40 号配石遺構出土石器 (観察表は P348 に掲載)

13号配石遺構 (第300図、PL. 83、120)

位置 Et-52グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東46m30cmの所に位置。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。他の配石遺構と異なり小規模であり、またほぼ同一の石材から構成されていた。1/10実測図作成の後、石を取り上げ、下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

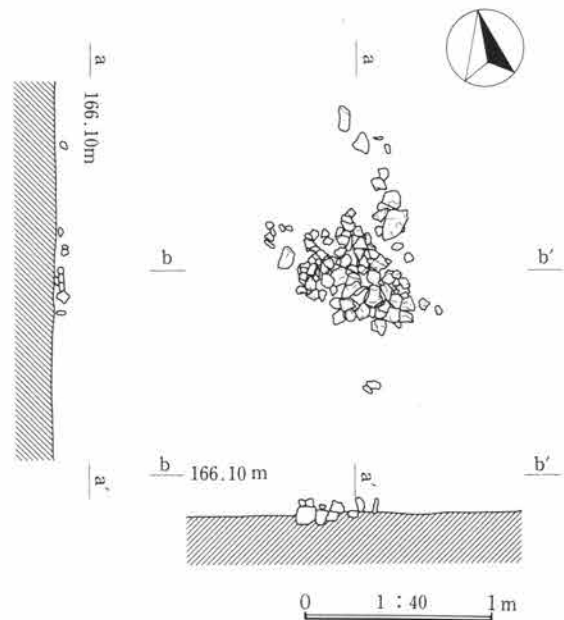
形状・配石状況 長径1m、短径70cmの範囲に石の集中が認められる。配石面積は約0.66m²である。

使用石材 100点の石材別点数は、凝灰岩54点、砂岩35点、絹雲母石墨片岩3点、斑岩・安山岩・珪石各2点、緑泥片岩・絹雲母緑泥石石墨片岩各1点であった。圧倒的多数

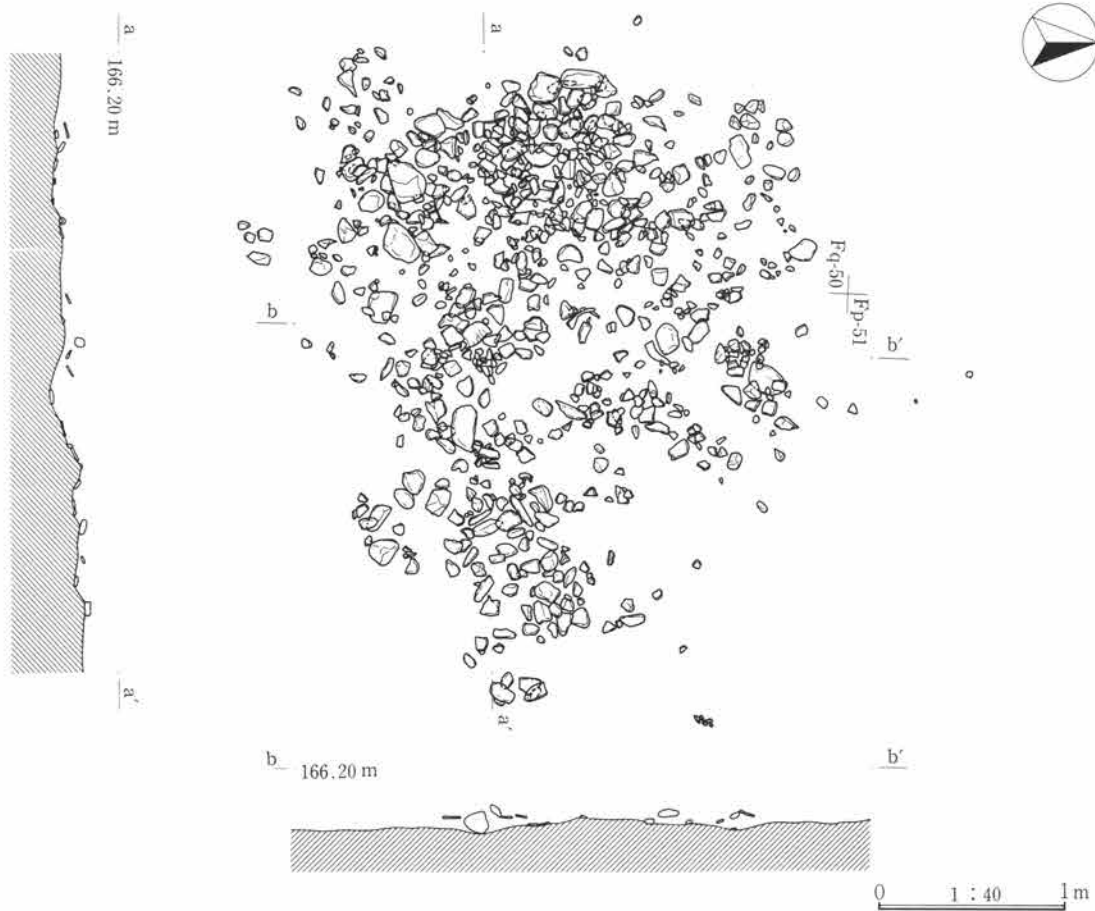
(89%)は凝灰岩と砂岩で占められ、これらは同一の石材を細かく打ち欠いたものを使用し、焼けていた。

遺物出土状況 土器片は3点出土している。石器の出土はなかった。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構であるが、集石遺構としてとらえた方が良いかもしれない。



第 300 図 13 号配石遺構



第301図 41号配石遺構

41号配石遺構 (第301～308図、PL. 78、126)

位置 Fp・Fq-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西45m(遺構の中心までの距離)、23号配石遺構と26号配石遺構のほぼ中間に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に23号配石遺構から26号配石遺構の調査を進めて行く過程で確認された。周囲の敷石住居跡の調査と並行しながら調査を進め、10月12日に遺構の全景写真撮影を実施した。その後、敷石住居跡の調査を先行させ、11月下旬に遺物の取りあげを行った。多量の石と土器片が集中して出土していたが、下部には土壌等は存在しなかった。

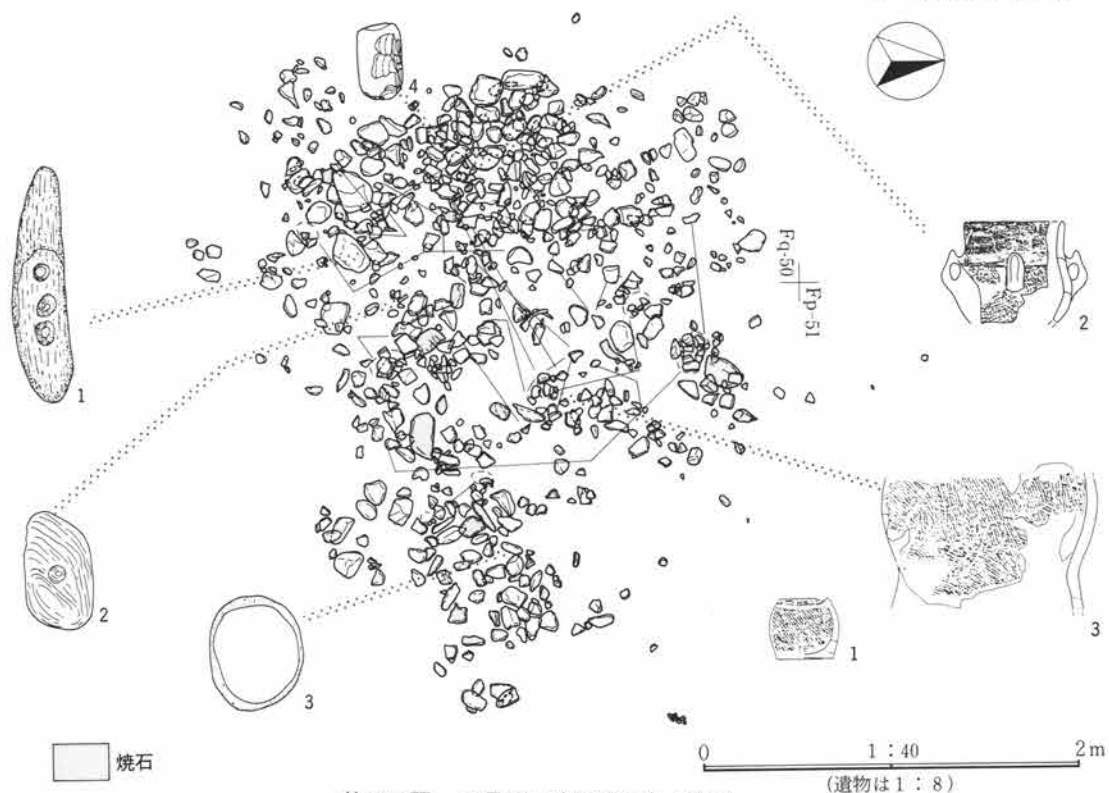
重複 なし。23号・26号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡)に近接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

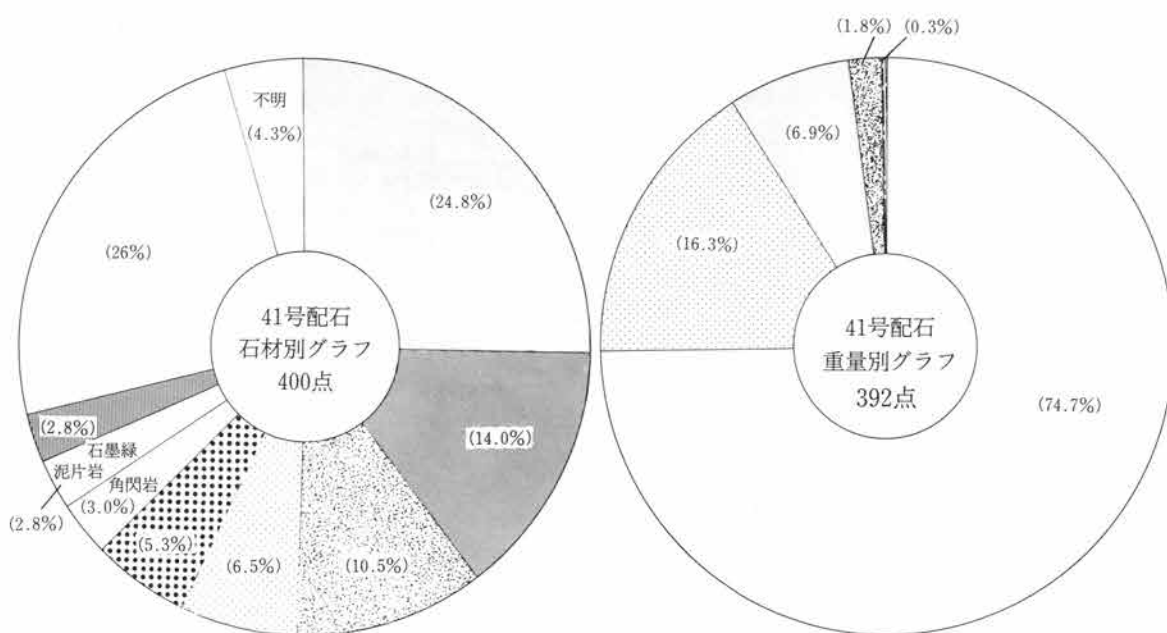
形状・配石状況 長径3m10cm、短径2m70cmの範囲に配石が施されている。狭い範囲に392点の石が集中しており、他の配石遺構と趣を異にしている。配石の面積は約8.2㎡である。

使用石材 36種類の石材が確認された。400点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩99点(24.8%)、点紋絹雲母石墨片岩56点(14%)、輝緑岩42点(10.5%)、点紋緑泥片岩26点(6.5%)、緑泥片岩21点(5.3%)、角閃岩12点(3%)、石墨緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩・珪石各11点(各2.8%)、石墨片岩10点(2.5%)、輝岩9点(2.3%)、砂岩8点(2%)、チャート7点(1.8%)、絹雲母緑泥石墨片岩・絹雲母石墨緑泥片岩各6点(各1.5%)、珪岩5点(1.3%)、絹雲母緑泥片岩・斑板岩・緑泥石墨片岩・綠色珪質板岩・変斑板岩各4点(各

5 配石遺構〈41号〉

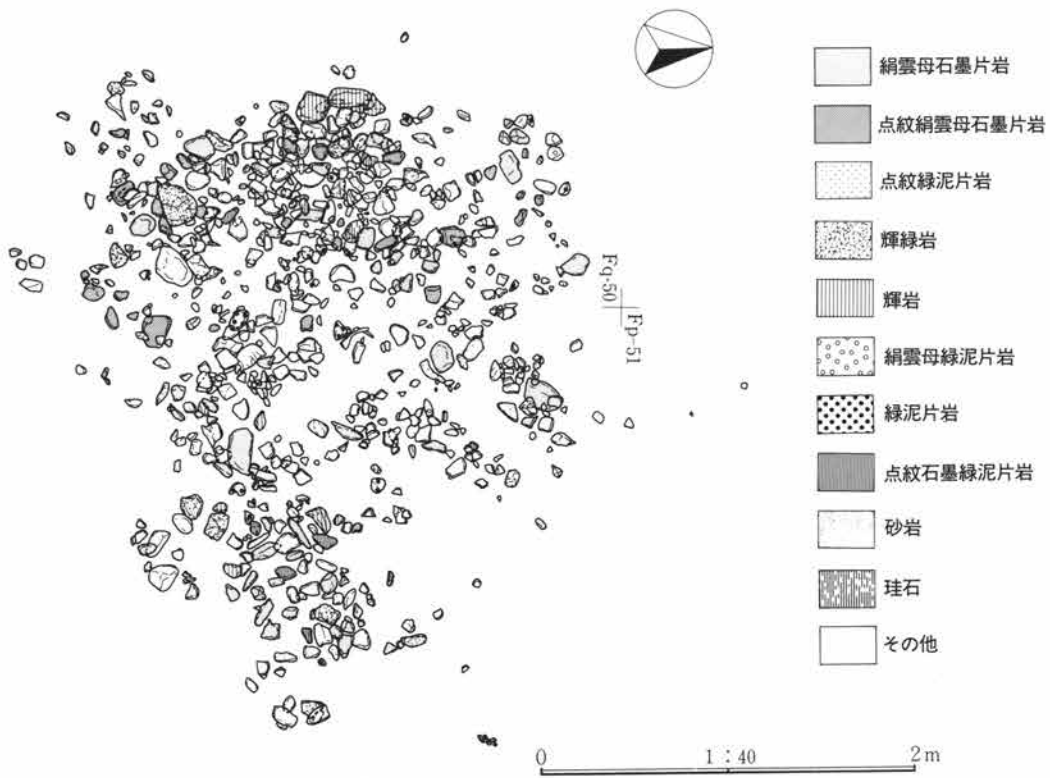


第302図 41号配石遺構遺物出土状況

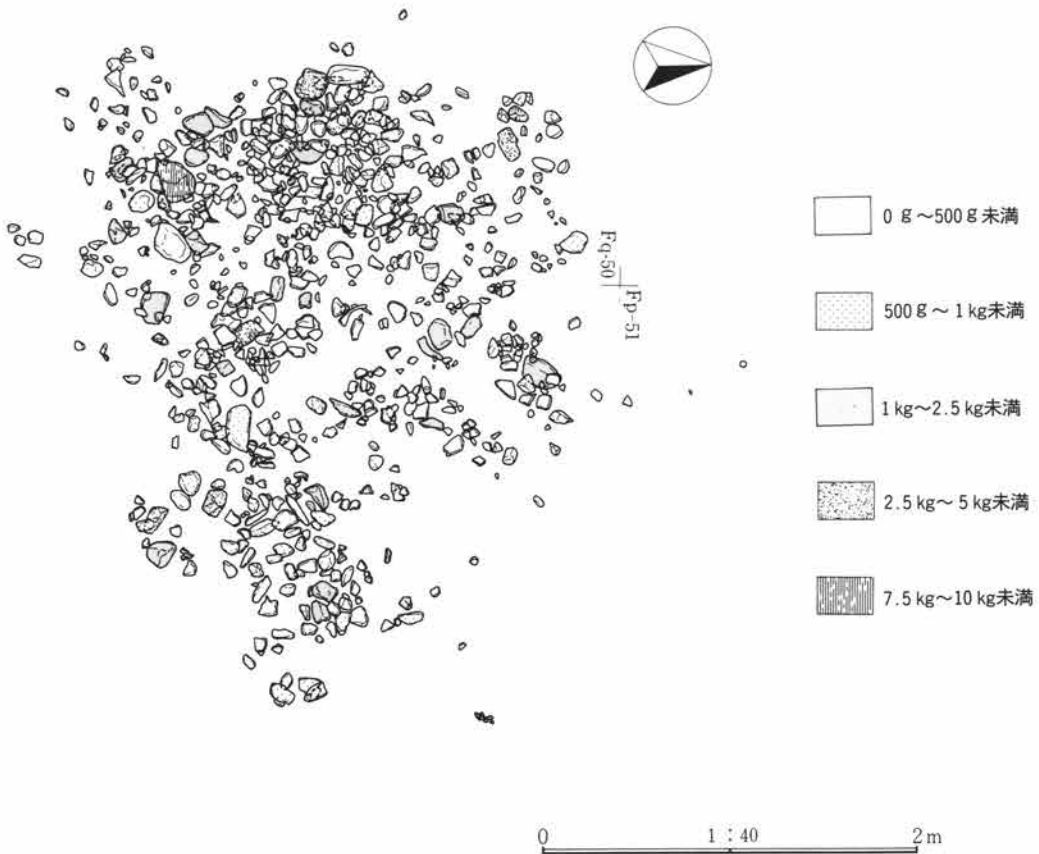


第303図 41号配石遺構 石材別 (左)・重量別グラフ (右)

1%)、赤色珪質板岩3点(0.8%)、石墨絹雲母片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・輝緑凝灰岩・方散虫板岩・頁岩各2点(各0.5%)、流紋岩・紅簾絹雲母片岩・絹雲母片岩・閃緑岩・熱変成岩・脆雲母石墨片岩・紅簾片岩・緑泥絹雲母片岩各1点(各0.3%)であり、不明は17点(4.3%)を数えた。不明の石を除いた383点中265点(69.2%)の石が片岩類である。



第 304 図 41 号配石遺構石材別分布



第 305 図 41 号配石遺構重量別分布

石材重量 重量の判明している石は392点である。その内訳は、500g未満の石293点(74.7%)、500g～1kg未満の石64点(16.3%)、1kg～2.5kg未満の石27点(6.9%)、2.5kg～5kg未満の石7点(1.8%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.3%)である。1kg未満の石が実に91%で、他の配石遺構より高い比率を占めている。

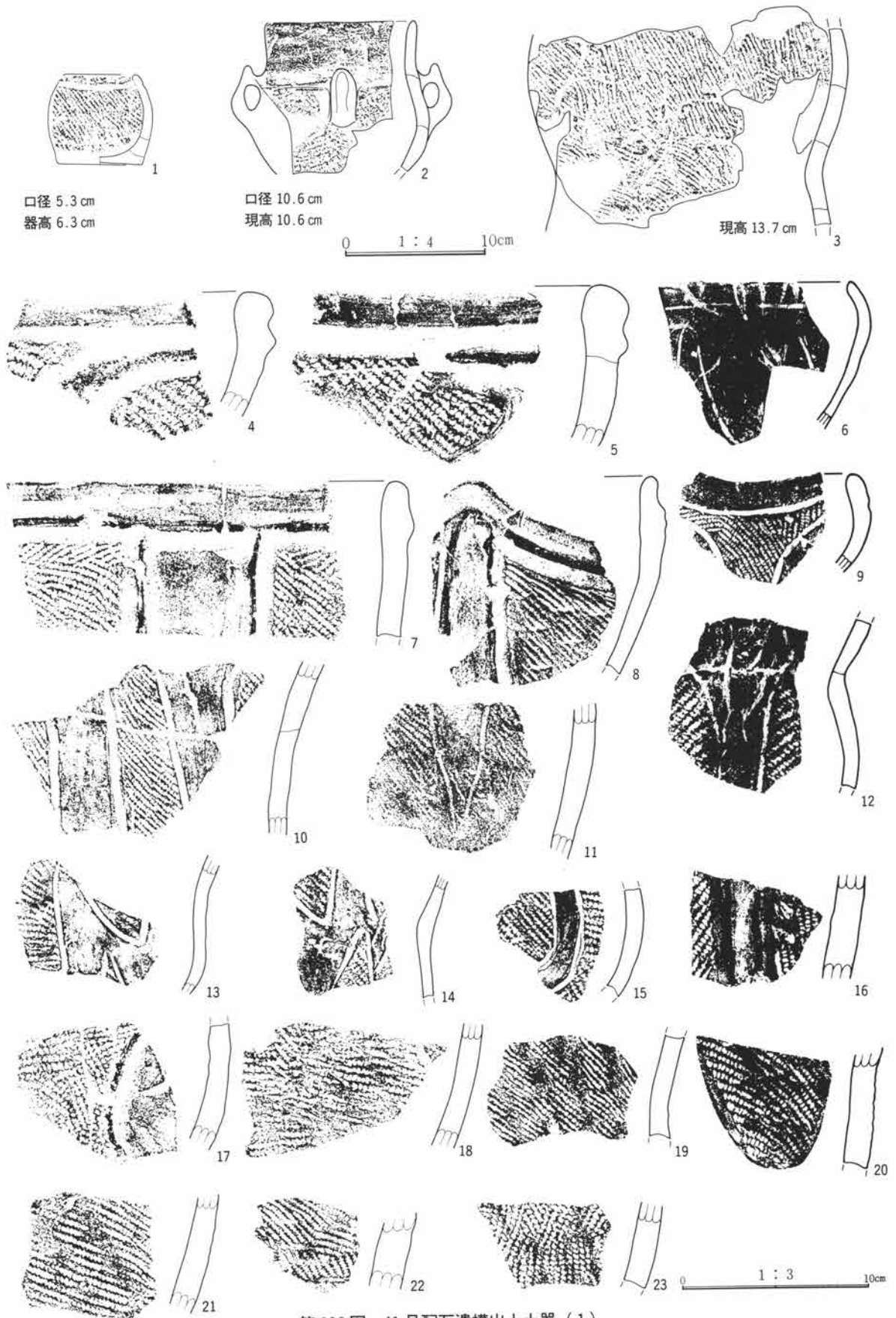
遺物出土状況 小型土器2点を含め、口縁部38点、胴部274点、底部10点の土器片が出土している。接合も配石の中心部に集中して認められる。加曽利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では凹石2点、磨石1点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。石器の含有率は1%であり、また焼石は400点中39点の出土で、9.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E4式期の配石遺構であり、小型土器の出土等から判断して祭祀の様相が強い。

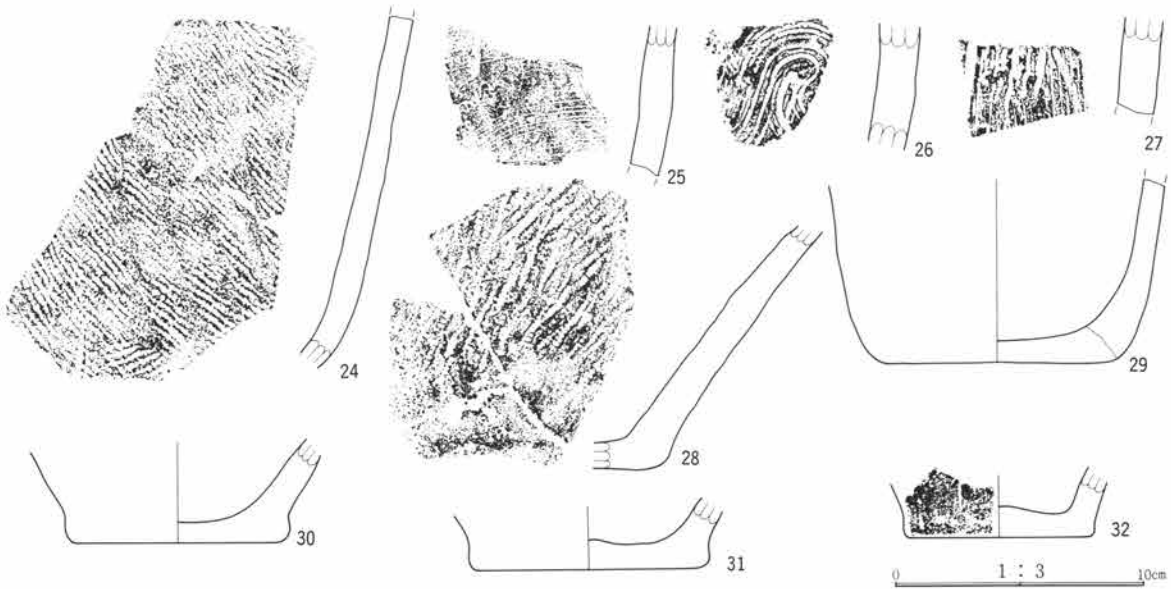
41号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------------|-------------------|---|---|-------|
| 306-1 126 | 小型 土器 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 小型土器の口縁～底部%。器厚5～7mm。 内面・底面ともミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口唇部に幅の狭い無文帯をおき、1条の沈 線を巡らせている。以下縄文施文。原体は L{↑}縦転がし。 | 配石東部 |
| 306-2 126 | 口縁 部～ 胴部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 小型の浅鉢形土器(両耳壺)約%。器厚5～7mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。 | 口縁部に幅広の無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らす。肩部に橋状把手をもつ。胴 部に縄文施文。原体はL{↑}縦・斜位。 | 配石西部 |
| 306-3 126 | 口縁 部～ 胴部 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部で括れる器形。器厚9～12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はL{↑}縦転がし。(太い条 と細い条を使用)。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北東部 |
| 306-4 126 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR{↑}横転がし。 | 配石南西端 |
| 306-5 126 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR{↑}横転がし。 | 配石北東部 |
| 306-6 126 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい橙色。 | 口縁部は内湾。口唇部に狭い無文帯をおき 1条の沈線を巡らせる。胴部には細沈線に よる波状文を施す。区画内にはL{↑}縦位。 外面に煤が付着している。 | 配石西部 |
| 306-7 126 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らす。それに接続する微隆起帯を垂 下させ、区画内にL{↑}横・縦位施文。 | 配石西部 |
| 306-8 126 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8～13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 内湾する波状口縁部片。口唇部に狭い無文 帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。それ に接続する「∩」状の微隆起帯を垂下。区 画内にL{↑}縦位。 | 配石南西部 |
| 306-9 126 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は橙色。 | 内湾する波状口縁部片。口唇部に狭い無文 帯をおき、1条の沈線を巡らせる。胴部 には沈線による文様が描かれ、L{↑}縦・横位。 | 配石北西部 |
| 306-10 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施 文。原体はL{↑}縦転がし。 | 配石中心部 |
| 306-11 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。 | 細沈線による「V」字状の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL{↑}縦転がし。 内面に煤が付着している。 | 配石東部 |
| 306-12 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚6～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 胴部で括れる器形。細沈線による「U」字 状・「∩」状の文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はR{↑}縦転がし。内面に煤付着。 | 配石東南部 |
| 306-13 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。 | 胴部で括れる器形。細沈線による波状文が 描かれ、区画内に縄文施文。原体はL{↑}縦 転がし。 | 配石北部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第 306 図 41 号配石遺構出土土器 (1)

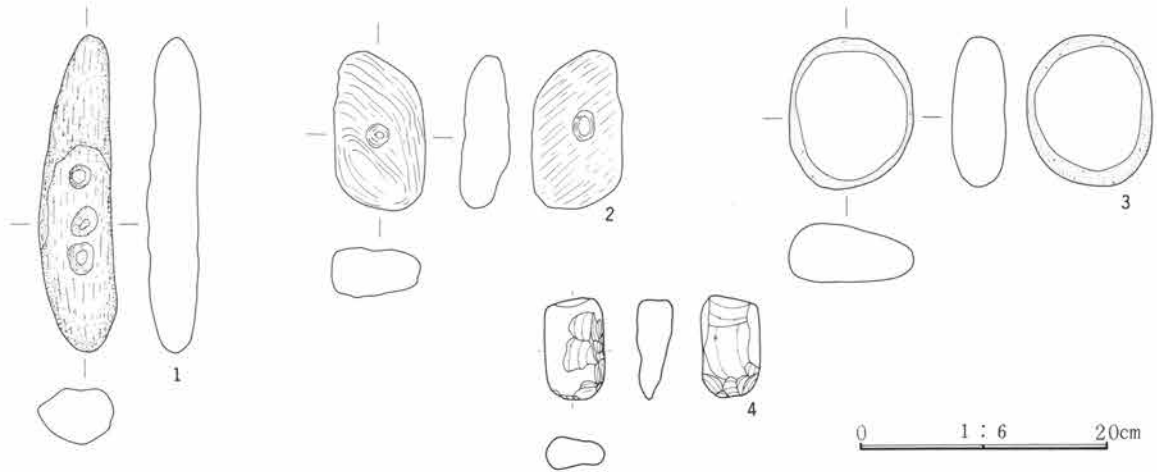


第 307 図 41 号配石遺構出土土器 (2)

41号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|---|-------|
| 306-14 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚 6~9mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰黄褐色。 | 胴部で括れる器形。細沈線による「V」字 状等の文様が描かれ、区画内に縄文施文。 原体はL{長縦転がし。 | 配石中心部 |
| 306-15 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚 9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石北西部 |
| 306-16 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR{上縦転がし。 | 配石北端 |
| 306-17 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL{長縦・横位。 | 配石北東部 |
| 306-18 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石北西部 |
| 306-19 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石北西部 |
| 306-20 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は褐灰色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石西部 |
| 306-21 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石北部 |
| 306-22 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。 | 配石北東部 |
| 306-23 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はL{長縦・斜位。 | 配石北部 |
| 307-24 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚 9~11mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はL{長縦転がし。撚りが細 かい。 | 配石北部 |
| 307-25 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 条線が施されている。土器面は硬い。 | 配石中心部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第308図 41号配石遺構出土石器

41号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|---|------------------------------------|-------|
| 307-26 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 条線に文様が描かれている。 | 配石中心部 |
| 307-27 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 条線と沈線が施されている。 | 配石南西部 |
| 307-28 126 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。器厚10~15mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はR ₁ 上縦転がし。粗い縄文。 | 配石中心部 |
| 307-29 126 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径93mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 内面に煤が付着している。 | 配石南西部 |
| 307-30 126 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径85mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。 | | 配石西部 |
| 307-31 126 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径90mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 底面はよくミガキが行われている。 | 配石北西部 |
| 307-32 126 | 底部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径72mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 細沈線が施されている。 | 配石南西部 |

41号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計測値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|--------|------------|------|-----|-------|---|----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 308-1 126 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 25.4 | 6.0 | 4.5 | 1,050 | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長27mm、短20mm、深2mm。最小は長19mm、短17mm、深2mmで、平均は長24mm、短19mm、深2mm。 | 配石南端 |
| 308-2 126 | 凹石 | 完形 | 緑泥片岩 | 12.5 | 7.5 | 3.9 | 600 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径22mm、短径18mm、深さ2mmである。 | 配石の中央南寄り |
| 308-3 126 | 磨石 | 完形 | 流紋岩 | 12.0 | 10.1 | 4.6 | 800 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 配石東端 |
| 308-4 126 | 磨製石斧 | 完形 | 角閃岩 | 8.0 | 4.3 | 3.0 | 190 | 磨き途中。両面に粗割り痕残る。 | 配石西端 |

43号配石遺構 (第309~311図、PL. 78、126)

位置 Fo-49グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西34m (遺構の中心までの距離)、23号配石遺構の南東7m50cmの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。11月下旬に44号配石遺構とともに調査を開始した。11月30日に遺構の全景写真を撮影。耕作溝によって一部が壊されているが、非常に小規模な配石遺構である。他の配石遺構と同様に下部調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

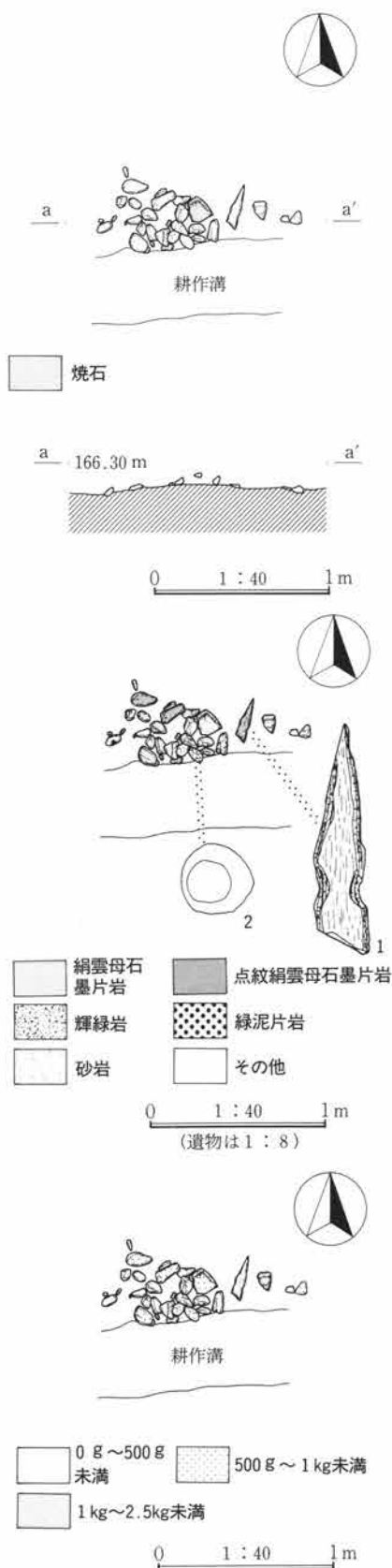
形状・配石状況 現状で長径50cm、短径40cmの小規模な配石遺構である。一部を新しい耕作溝で壊されているが、推定で長径50cm、短径50cm程の円形を呈していたものであろうか。配石の面積は約0.42㎡である。3号配石遺構と同様に小規模な遺構である。

使用石材 13種類の石材が確認された。30点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩10点 (33.3%)、点紋絹雲母石墨片岩・輝緑岩各4点 (各13.3%)、緑泥片岩・珪石各2点 (各6.7%)、角閃岩・砂岩・絹雲母緑泥石墨片岩・赤色珪質板岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・綠色珪質板岩・頁岩各1点 (各3.3%) である。30点中19点 (63.3%) の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は40点である。その内訳は、500g未満の石21点 (52.5%)、500g~1kg未満の石18点 (45%)、1kg~2.5kg未満の石1点 (2.5%) である。小規模な配石遺構のためか、1kg未満の石が97.5%を占めている。

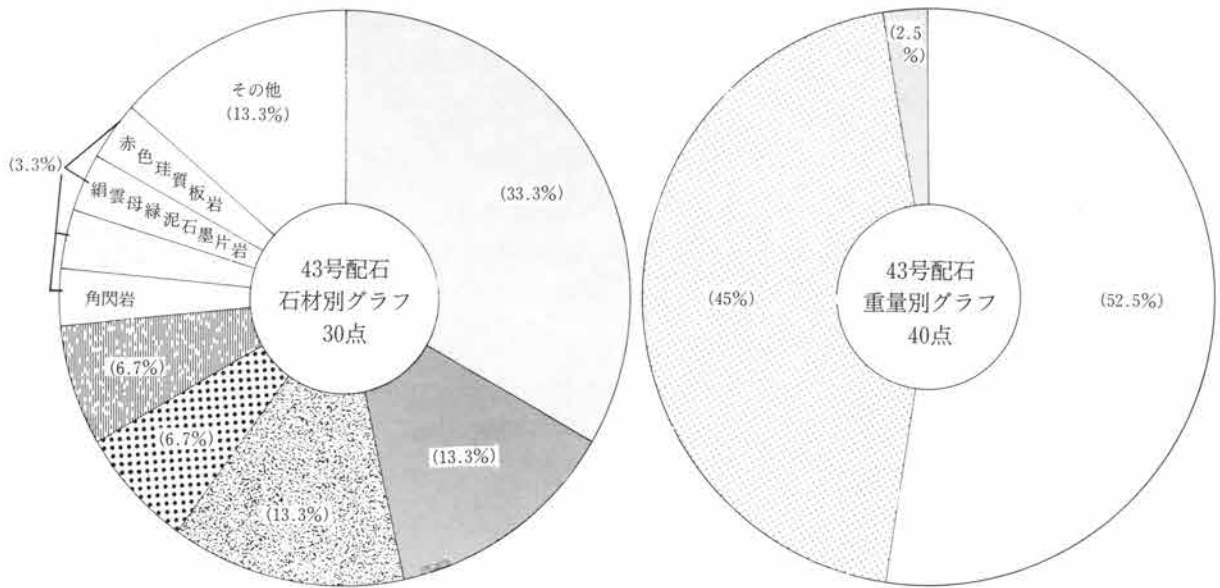
遺物出土状況 土器片は胴部1点のみの出土である。石器では磨石1点、打製石斧1点が出土している。石器の含有率は5%であり、また焼石は40点中1点の出土で、2.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

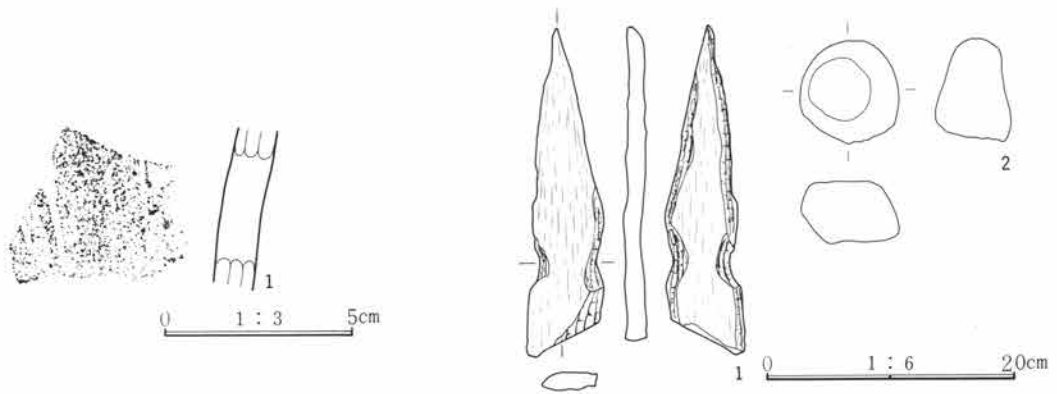


第309図 43号配石遺構

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第310図 43号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第311図 43号配石遺構出土遺物

43号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文様(その他) | 出土状況 |
|--------------|-----|----------------|--|------------|------|
| 311-1 126 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 沈線が施されている。 | 配石東部 |

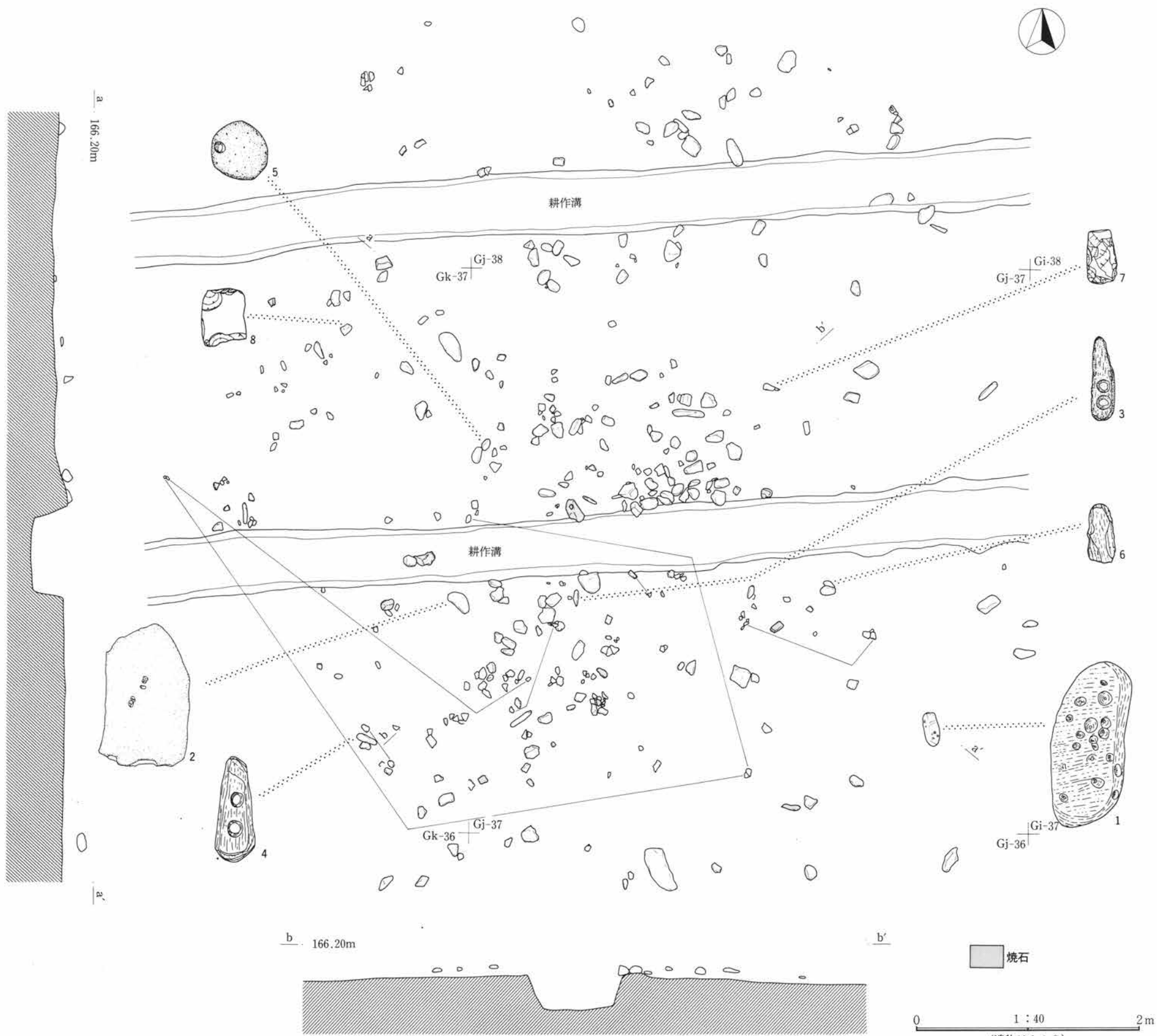
43号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|-----------|--------------|-----|-----|-------|----------------------|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 311-1 126 | 打製石斧 | 一端欠損 | 点紋絹雲母石墨片岩 | (25.9) | 6.3 | 2.0 | (320) | 分銅(1)。未成品。 | 配石東端 |
| 311-2 126 | 磨石 | 一部欠損 | 輝緑岩 | 8.1 | 8.0 | 6.1 | (570) | 器面に磨耗痕がみられる。全面焼けている。 | 配石中央 |

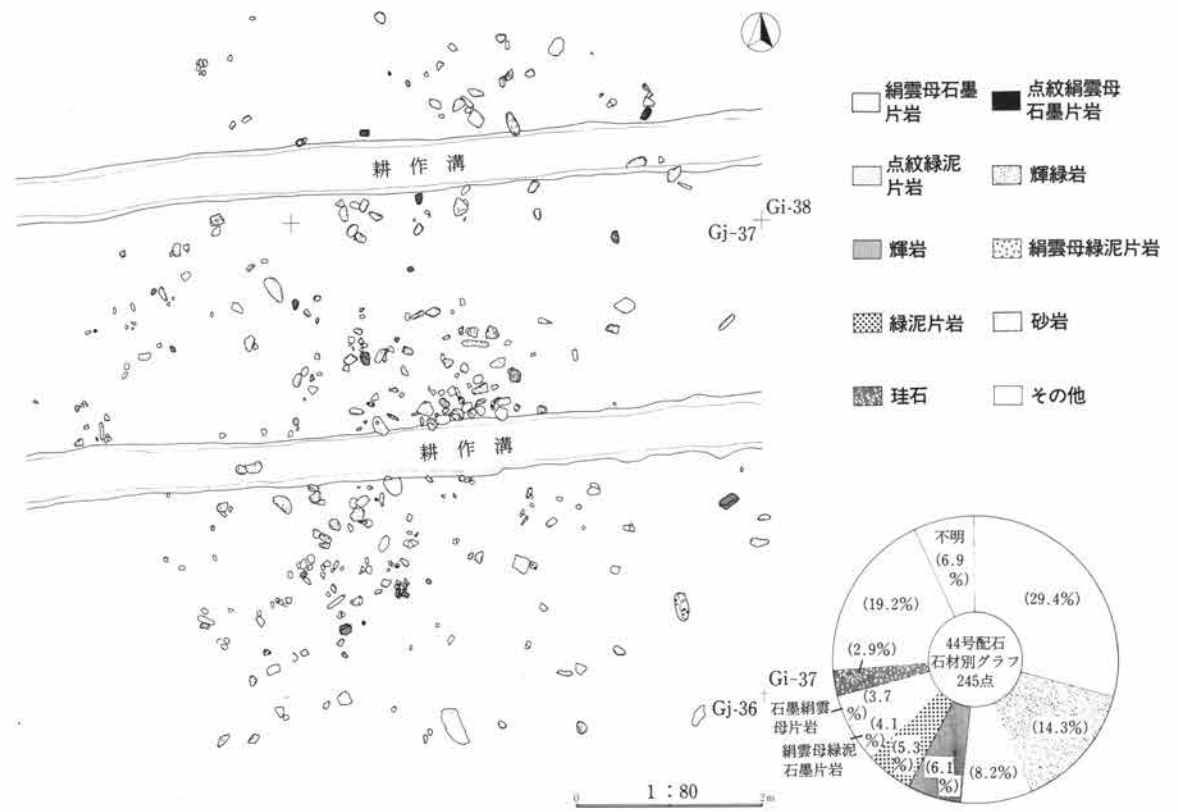
44号配石遺構 (第312~316図、PL. 79、126)

位置 Gj・Gk-36・37・38グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西122m (遺構の中心までの距離)、37号配石遺構の北西12m50cmの所に位置している。

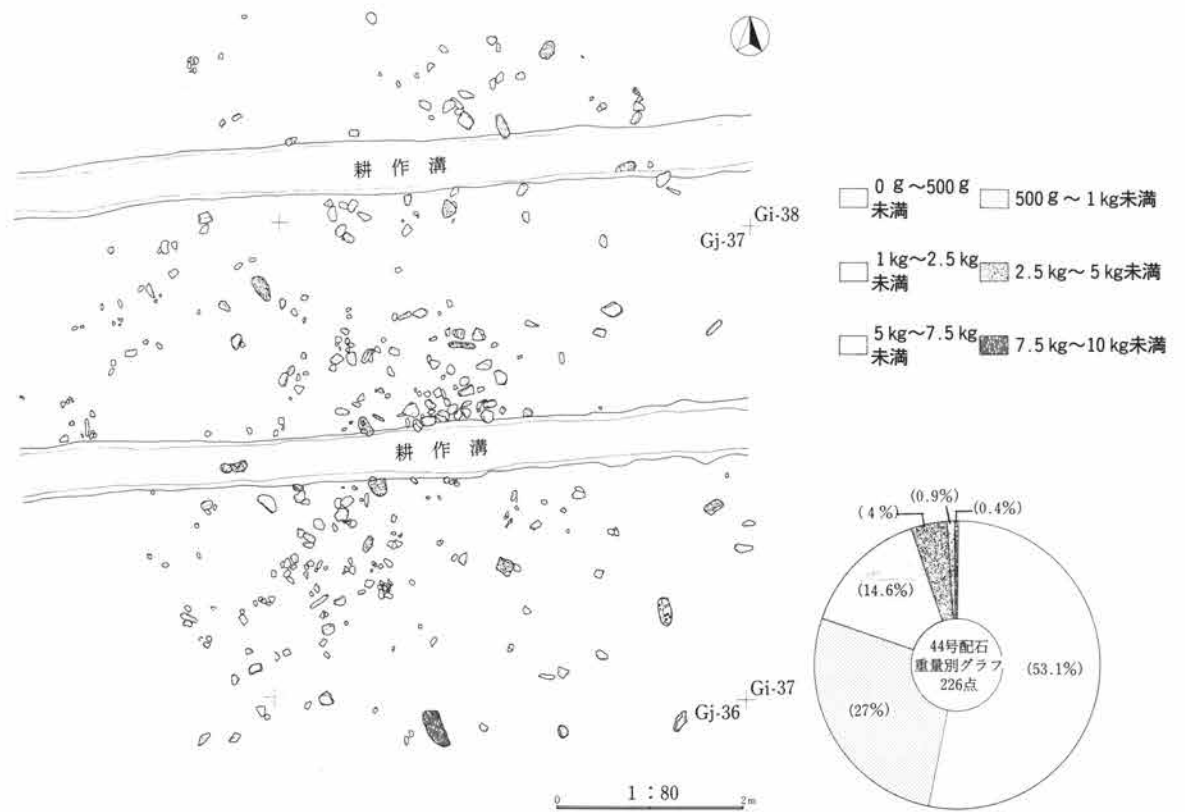
経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。11月下旬に43号配石遺構とともに調査を開始した。12月9日に遺



第312図 44号配石遺構



第313図 44号配石遺構石材別分布



第314図 44号配石遺構重量別分布

構の全景写真撮影を実施。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査に入った。この調査では新しい耕作溝の断面観察も利用したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 二重の環状構造を呈していると考えられる。配石の中心部に長径3m、短径2m50cmの規模で配石が施され、それを取り囲むように長径7m70cm、短径7m50cmの規模で配石が認められる。小規模な環状列石として把握してよいものであろうか。ただし石の配置は乱雑であるために断定することは危険である。このような配石状況は規模は異なるが4号配石遺構と共通するものである。配石の総面積は約47㎡であり、中心部の配石は約8.7㎡である。

使用石材 30種類の石材が確認された。245点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩72点(29.4%)、輝緑岩35点(14.3%)、点紋緑泥片岩20点(8.2%)、点紋絹雲母石墨片岩15点(6.1%)、緑泥片岩13点(5.3%)、絹雲母緑泥石墨片岩10点(4.1%)、石墨絹雲母片岩9点(3.7%)、珪石7点(2.9%)、輝岩・熱変成岩各4点(各1.6%)、絹雲母緑泥片岩・斑筋岩・紅簾絹雲母片岩・閃緑岩・砂岩各3点(各1.2%)、チャート・緑簾緑泥片岩・安山岩・緑泥石墨片岩・角閃岩・輝緑凝灰岩・紅泥片岩・綠色珪質板岩・閃輝緑岩各2点(各0.8%)、赤色珪質板岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・蛇紋岩・珪岩・脆雲母絹雲母片岩各1点(各0.4%)であり、不明は17点(6.9%)を数えた。不明の石を除いた228点中154点(67.5%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は226点である。その内訳は、500g未満の石120点(53.1%)、500g～1kg未満の石61点(27%)、1kg～2.5kg未満の石33点(14.6%)、2.5kg～5kg未満の石9点(4%)、5kg～7.5kg未満の石2点(0.9%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.4%)である。1kg未満の石は全体の80.1%を占めている。

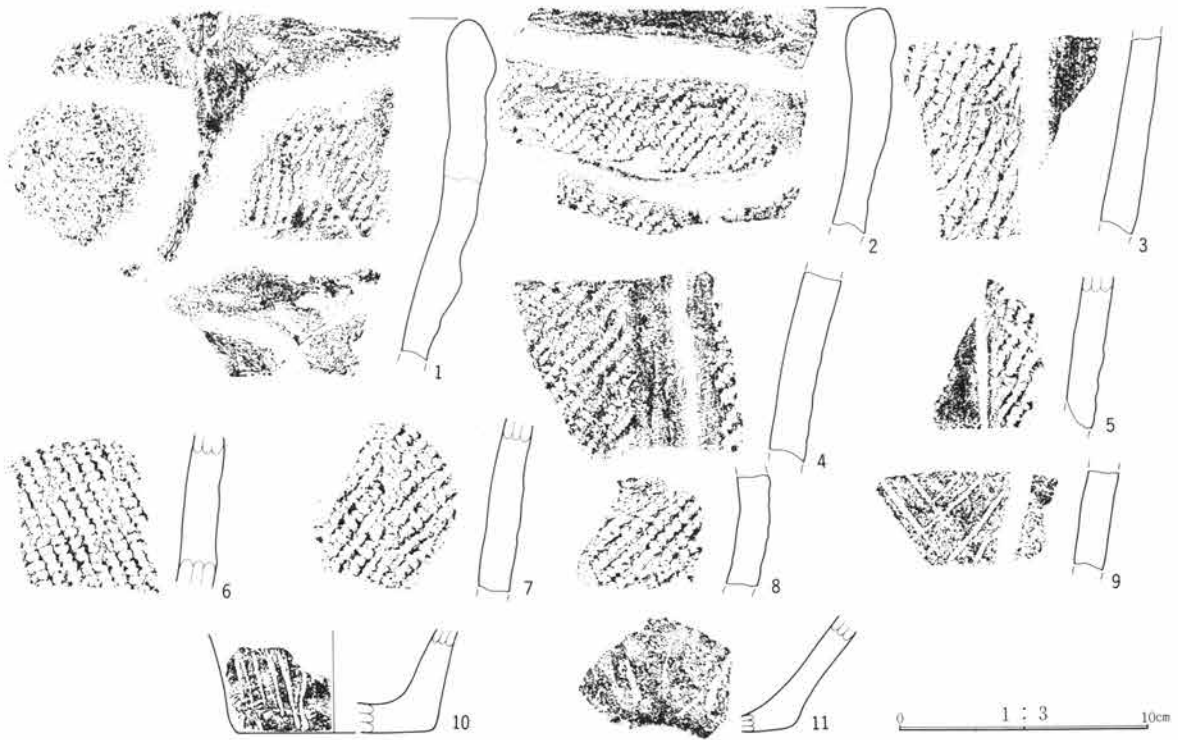
遺物出土状況 124点の土器片が遺構中心部から南部分にかけて出土し、接合関係もこの部分を中心に認められる。部位別点数は、口縁部18点、胴部102点、底部4点である。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も少量含まれていた。

石器では多孔石2点、凹石3点、打製石斧2点、磨製石斧1点が出土している。多孔石1点は外側の配石から、もう1点は内側の配石から出土し、凹石2点は内側の配石、もう1点は外側の配石からの出土であった。打製石斧2点は内側の配石、磨製石斧の未製品は外側の配石からの出土である。石器の含有率は3.3%であり、また焼石は245点中14点の出土で、5.7%を占めている。

所見 小規模な環状列石の可能性はあるが、配石下には土壌等は存在していない。出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

44号配石遺構土器観察表

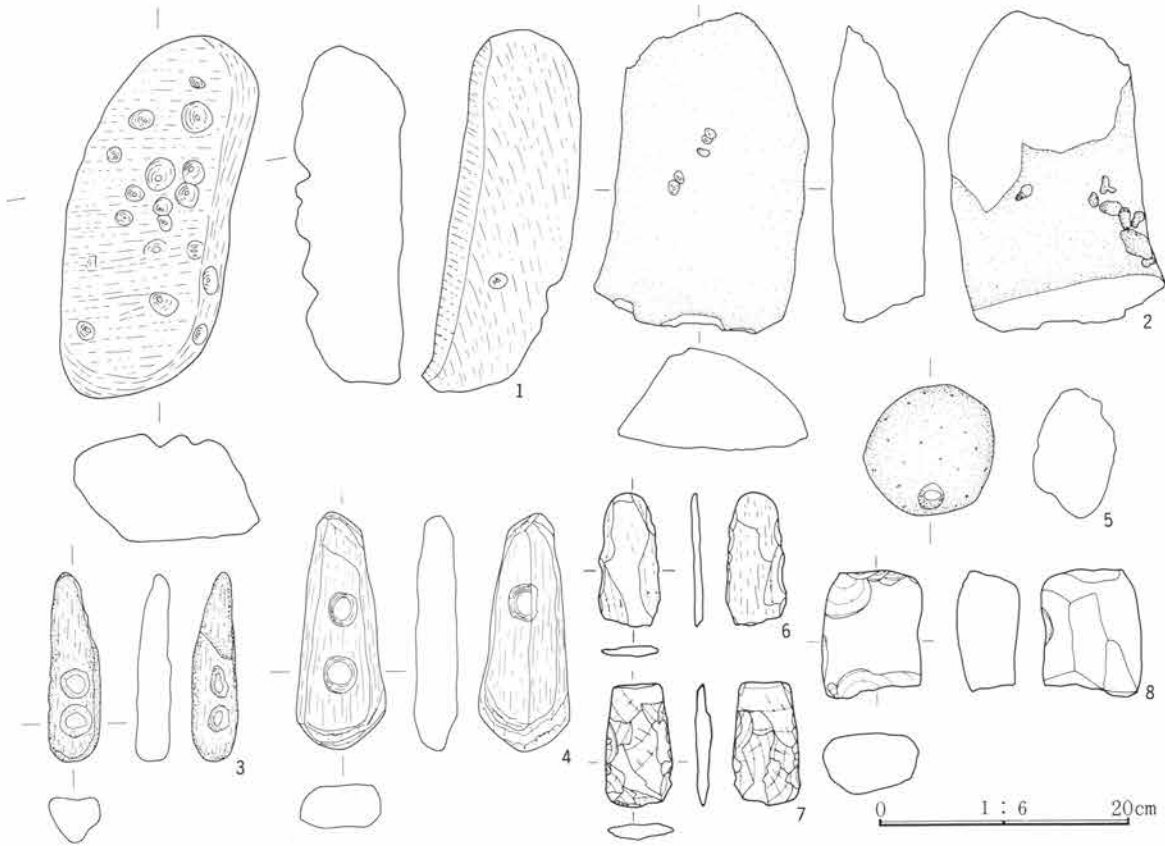
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|---|--|-------|
| 315-1 126 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13～17mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様を 描き、縄文施文。原体はR{土横転がし。 外面は荒れている。 | 配石中心部 |
| 315-2 126 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚11～17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面は灰褐色。 | 口縁部に幅広の沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR{土(隣り合う節の傾き が異なる)縦位。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 一括 |
| 315-3 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12～14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はR{土縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石西部 |



第315図 44号配石遺構出土土器

44号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|--------------------|--|---|-------|
| 315-4 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は橙色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ 縦転がし。 沈線を垂下。 外面は荒れている。 | 配石中心部 |
| 315-5 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石北西端 |
| 315-6 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。 原体はL $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ L \\ L \end{matrix} \right.$ 縦転がし。 | 配石南西端 |
| 315-7 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ 縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南西端 |
| 315-8 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ R \\ R \end{matrix} \right.$ 縦転がし。 | 一括 |
| 315-9 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 細沈線による『V』字状の文様を描き、沈 線を垂下している。 | 配石北西端 |
| 315-10 126 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 沈線を垂下。 底部周縁に磨耗がみられる。 | 配石中心部 |
| 315-11 126 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。器厚7~9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 沈線が施されている。 | 配石西部 |



第 316 図 44 号配石遺構出土石器

44号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|---------|--------------|------|-----|---------|--|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 316-1 126 | 多 孔 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 28.4 | 15.8 | 8.7 | 5,500 | 両面に18個の凹み。最大の凹みは長26mm、短24mm、深9mm。最小は長11mm、短11mm、深4mmで、平均は長16mm、短15mm、深7mm。 | 外側の配石 |
| 316-2 126 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 輝緑岩 | (25.3) | 17.1 | 8.1 | (5,250) | 片面に4個の凹み。最大の凹みは長12mm、短11mm、深4mm。最小は長7mm、短6mm、深3mmで、平均は長10mm、短8mm、深3mm。 | 内側の配石 |
| 316-3 126 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 14.9 | 4.3 | 3.5 | 300 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長27mm、短26mm、深1mm。最小は長22mm、短16mm、深2mmで、平均は長25mm、短19mm、深1mm。 | 内側の配石 |
| 316-4 216 | 凹 石 | 完形 | 石墨絹雲母片岩 | 18.8 | 7.2 | 3.4 | 700 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長29mm、短26mm、深3mm。最小は25mm、短23mm、深2mmで、平均は長27mm、短24mm、深2mm。 | 外側の配石 |
| 316-5 126 | 凹 石 | 完形 | 安山岩 | 10.4 | 10.4 | 6.6 | 750 | 1個の凹みがある。凹みの大きさは長径20mm、短径18mm、深さ7mmである。 | 内側の配石 |
| 316-6 126 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 紅簾絹雲母片岩 | 10.6 | 5.1 | 0.9 | 120 | バチ (II b)。非常に薄手。 | 内側の配石 |
| 316-7 126 | 打製石斧 | 基部欠損 | 熱変成岩 | 9.9 | 5.4 | 1.3 | 90 | バチ (II b)。 | 内側の配石 |
| 316-8 126 | | 一部欠損 | 閃輝緑岩 | (10.0) | 8.0 | 4.9 | (740) | 粗割り途中。ほとんど原石のままの状態。 | 外側の配石 |

45号配石遺構 (第317~321図、PL. 79、126)

位置 Gj-35、Gh・Gl-35・36グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西131m (遺構の中心までの距離)、44号配石遺構の南西11mの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。11月下旬に44号配石遺構とともに調査を開始し、12月上旬に遺構の全景写真撮影を実施した。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査に入った。この調査では新しい耕作溝の断面観察も利用したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径7m50cm、短径5m50cmの範囲に配石が施されているが、明瞭な部分は遺構北東から南西に延びる列状の配石である。この列状配石はその一部を新しい耕作溝で壊されているが、長さ約4mであり、ほぼ大きさの統一された石12点で構成されている。この中には多孔石2点が含まれていた。12点の石の平均は、長径22cm・短径13cm・厚さ8.5cm・重量3.5kgである。配石の面積は約41.5㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。108点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩37点 (34.3%)、輝緑岩15点 (13.9%)、点紋緑泥片岩7点 (6.5%)、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各5点 (各4.6%)、点紋絹雲母石墨片岩・珪石各4点 (各3.7%)、紅縑絹雲母片岩3点 (2.8%)、輝岩・赤色珪質板岩・斑縑岩・チャート・石墨絹雲母片岩各2点 (各1.9%)、絹雲母緑泥石墨片岩・石墨緑泥片岩・緑縑緑泥片岩・安山岩・点紋絹雲母緑泥石墨片岩・角閃岩・輝緑凝灰岩・熱変成岩・緑色珪質板岩・熔結凝灰岩・珪岩各1点 (各0.9%) であり、不明は7点 (6.5%) を数えた。不明の石を除いた101点中67点 (66.3%) の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は105点である。その内訳は、500g未満の石43点 (41%)、1kg~2.5kg未満の石20点 (19%)、500g~1kg未満の石18点 (17.1%)、2.5kg~5kg未満の石18点 (17.1%)、10kg~20kg未満の石3点 (2.9%)、7.5kg~10kg未満の石2点 (1.9%)、5kg~7.5kg未満の石1点 (1%) である。

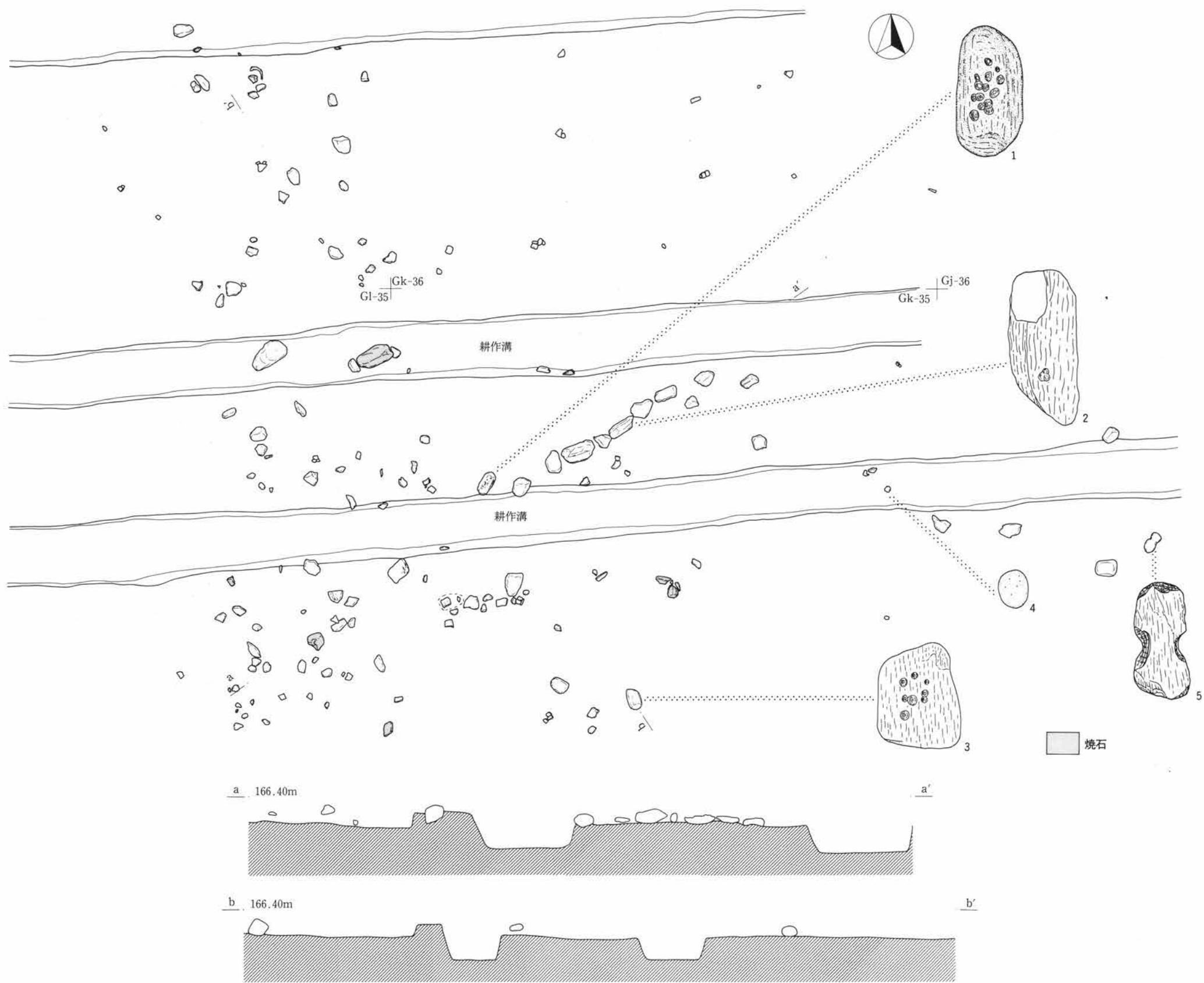
遺物出土状況 66点の土器片が遺構内から出土している。その部位別点数は、口縁部7点、胴部58点、底部1点であり、遺構の北から西にかけて出土している。加曽利E3式土器を主体としている。

石器は多孔石3点、磨石1点、打製石斧1点が出土している。多孔石2点は列状配石内から、1点は遺構南端から出土している。磨石は耕作溝内から、また打製石斧1点は遺構東端からそれぞれ出土している。石器の含有率は4.6%であり、また焼石は108点中8点の出土で、7.4%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E3式期の配石遺構である。

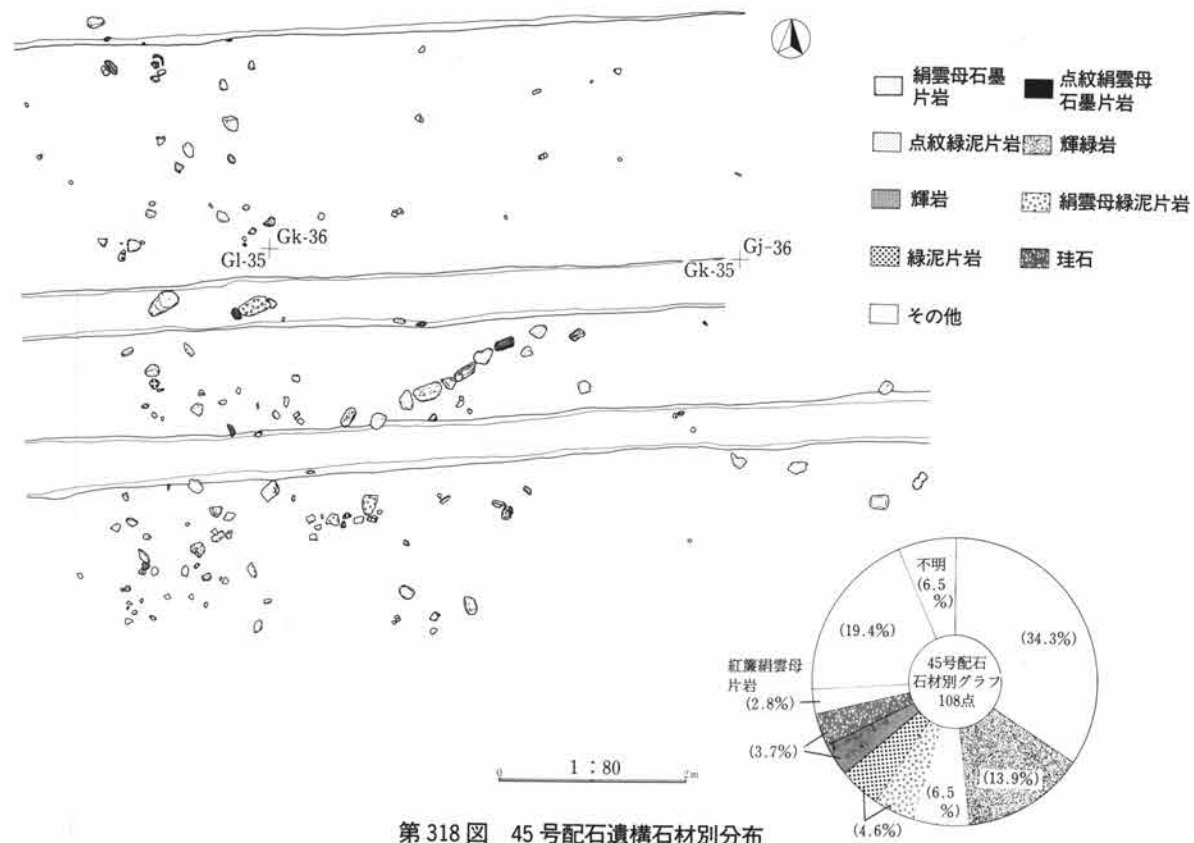
40号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|--------|--------------|------|-----|-------|---|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 299-1 125 | 石 皿 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 30.6 | 21.4 | 6.5 | 6,000 | 楕円形を呈し窪みは浅い。裏面に14個の凹み。最大は長21mm、短19mm、深8mm。最小は長11mm、短6mm、深2mmで、平均長14mm、短11mm、深4mm。 | 配石北端 |
| 299-2 125 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 21.3 | 10.6 | 8.5 | 2,600 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長24mm、短23mm、深12mm。最小は長11mm、短8mm、深2mmで、平均は長20mm、短18mm、深8mm。 | 配石西端 |
| 299-3 125 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 19.8 | 6.3 | 2.8 | 550 | 片面に2個の凹み。凹みの平均は長径20mm、短径19mm、深さ4mmである。側面に敲打痕がみられる。 | 配石中央部 |
| 299-4 125 | 打製石斧 | 完形 | 熱変成岩 | 8.9 | 4.3 | 2.1 | 84 | バチ (II a)。刃部が軸に対し斜めに傾く。 | 配石西南端 |

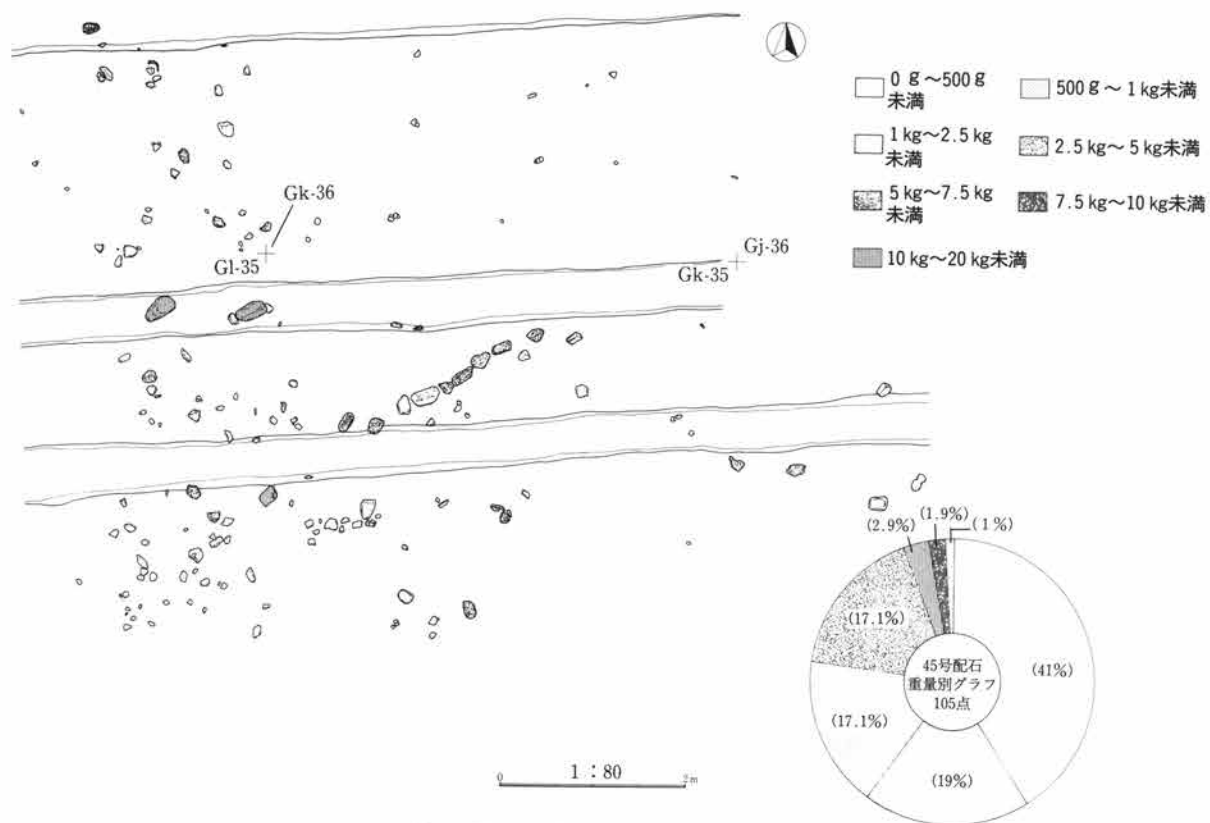


第 317 図 45 号配石遺構

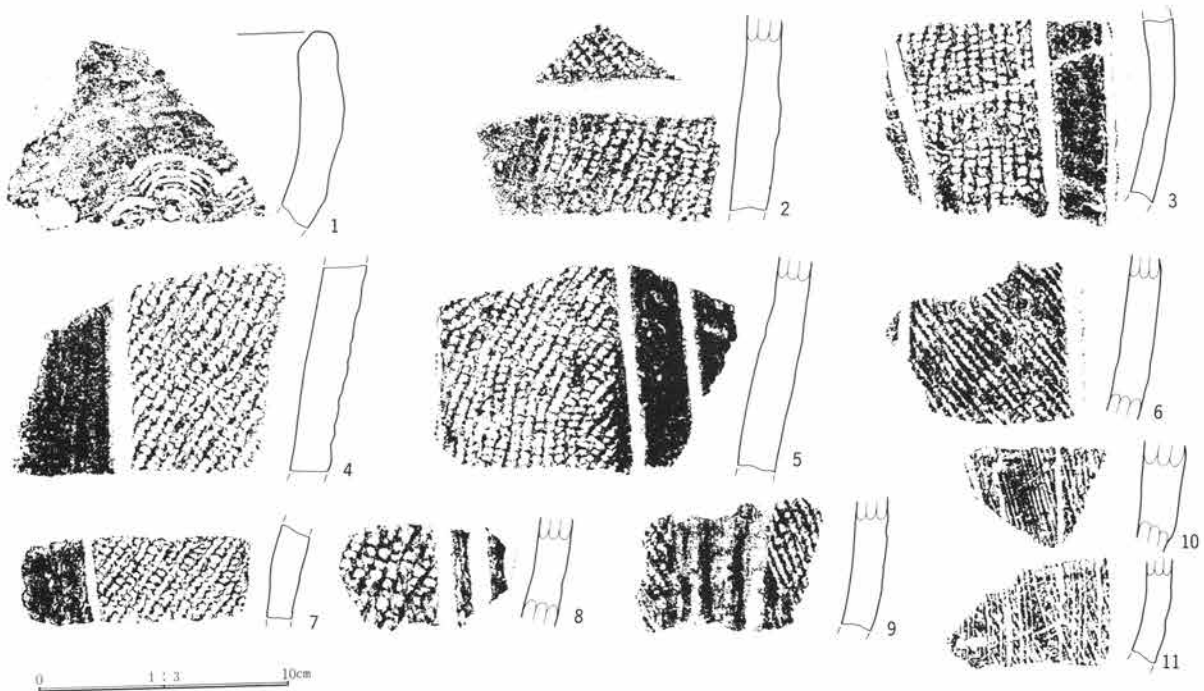
0 1 : 40 2m
(遺物は 1 : 8)



第 318 図 45 号配石遺構石材別分布



第 319 図 45 号配石遺構重量別分布

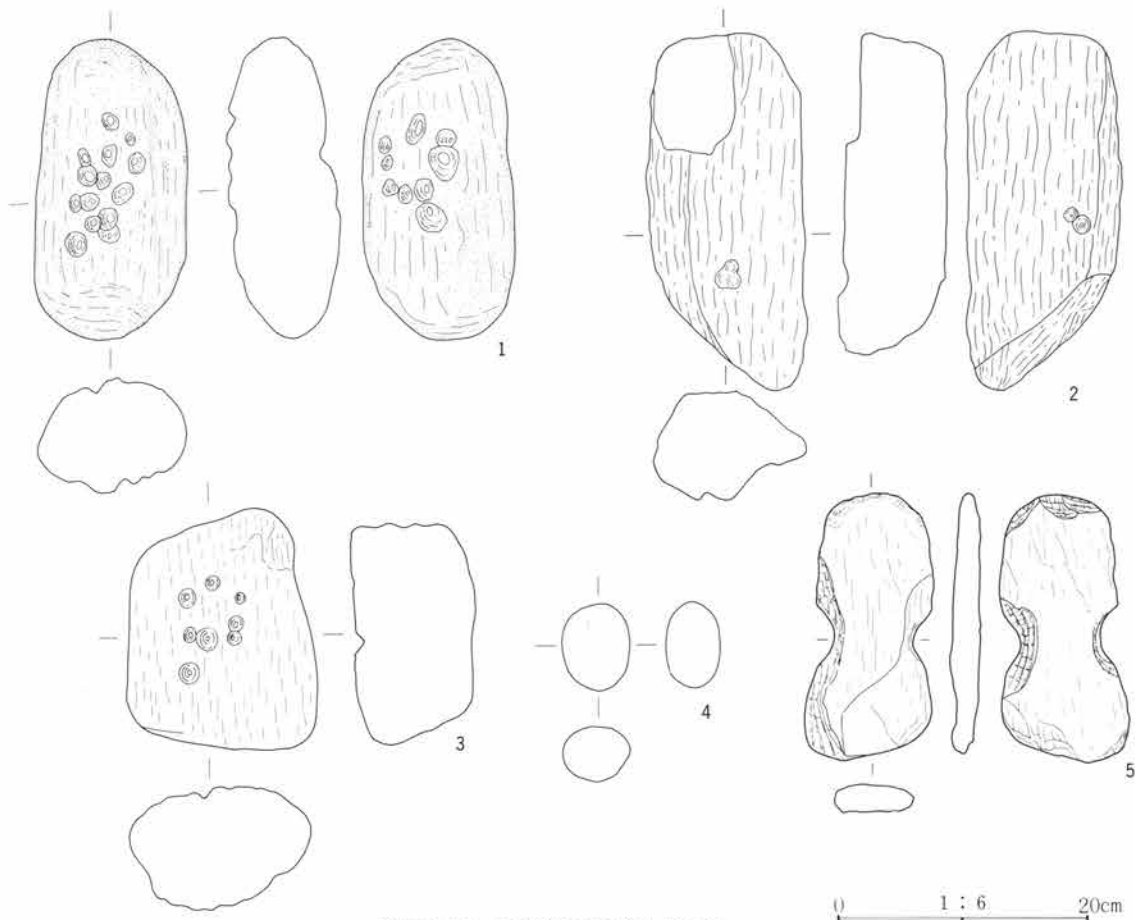


第320図 45号配石遺構出土土器

45号配石遺構土器観察表

| 図番 Pl. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|--------------------|--|--|-------|
| 320-1 126 | 口縁 部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 口縁部は内湾する。口縁部に隆帯による文 様が描かれ、内部に条線による文様が施さ れている。 | 配石北西部 |
| 320-2 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部は隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR(↑)横転がし。胴部は R(↑)縦転がし。 | 配石北西部 |
| 320-3 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦・斜転がし。 沈線を垂下。 | 配石南部 |
| 320-4 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石南西部 |
| 320-5 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦・斜転がし。 沈線を垂下。 | 配石南部 |
| 320-6 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰黄褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北西部 |
| 320-7 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北端 |
| 320-8 126 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北東端 |
| 320-9 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西部 |
| 320-10 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 条線と沈線が施されている。 | 配石北西端 |
| 320-11 126 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 条線が施されている。 | 配石中心部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第 321 図 45 号配石遺構出土石器

45号配石遺構石器観察表

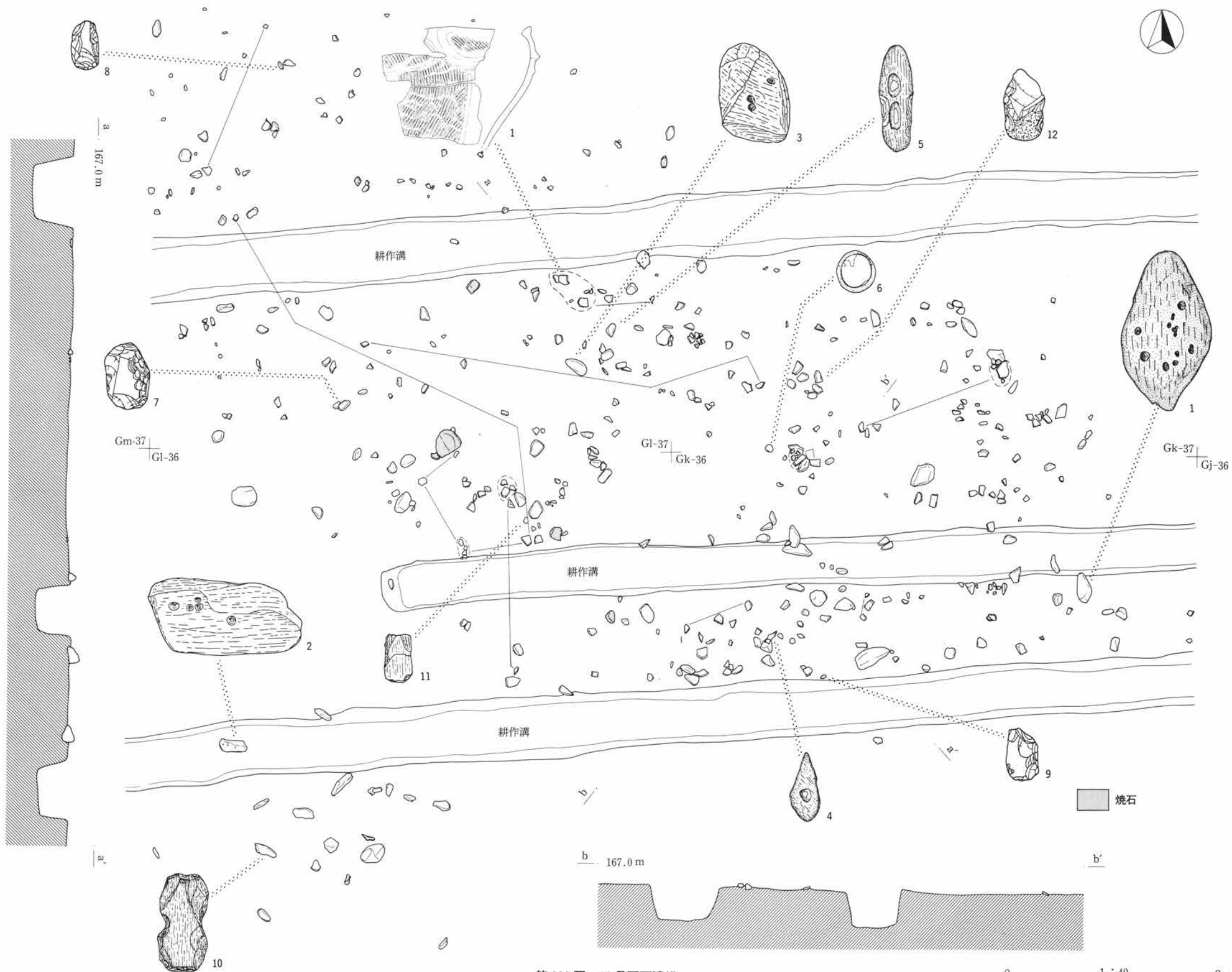
| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|-----------|--------------|------|-----|-------|--|------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 321-1 126 | 多 孔 石 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 23.7 | 12.0 | 9.0 | 3,800 | 両面に23個の凹み。最大の凹みは長28mm、短22mm、深13mm。最小は長10mm、短8mm、深2mmで、平均は長17mm、短13mm、深5mm。 | 列状配石 |
| 321-2 126 | 多 孔 石 | ほぼ完形 | 絹雲母石墨片岩 | 28.2 | 12.6 | 8.5 | 3,700 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長16mm、短10mm、深4mm。最小は長12mm、短10mm、深3mmで、平均は長14mm、短11mm、深4mm。 | 列状配石 |
| 321-3 126 | 多 孔 石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 19.2 | 15.2 | 9.7 | 4,000 | 片面に8個の凹み。最大の凹みは長18mm、短18mm、深9mm。最小は長11mm、短11mm、深2mmで、平均は長13mm、短13mm、深5mm。 | 配石南端 |
| 321-4 126 | 磨 石 | 完形 | 安山岩 | 6.8 | 5.5 | 4.4 | 200 | 器面に磨耗痕がみられる。 | 耕作溝内 |
| 321-5 126 | 打製石斧 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 21.2 | 10.5 | 2.5 | 800 | 分銅(1)。 | 配石東端 |

46号配石遺構 (第322~327図、PL. 80、127)

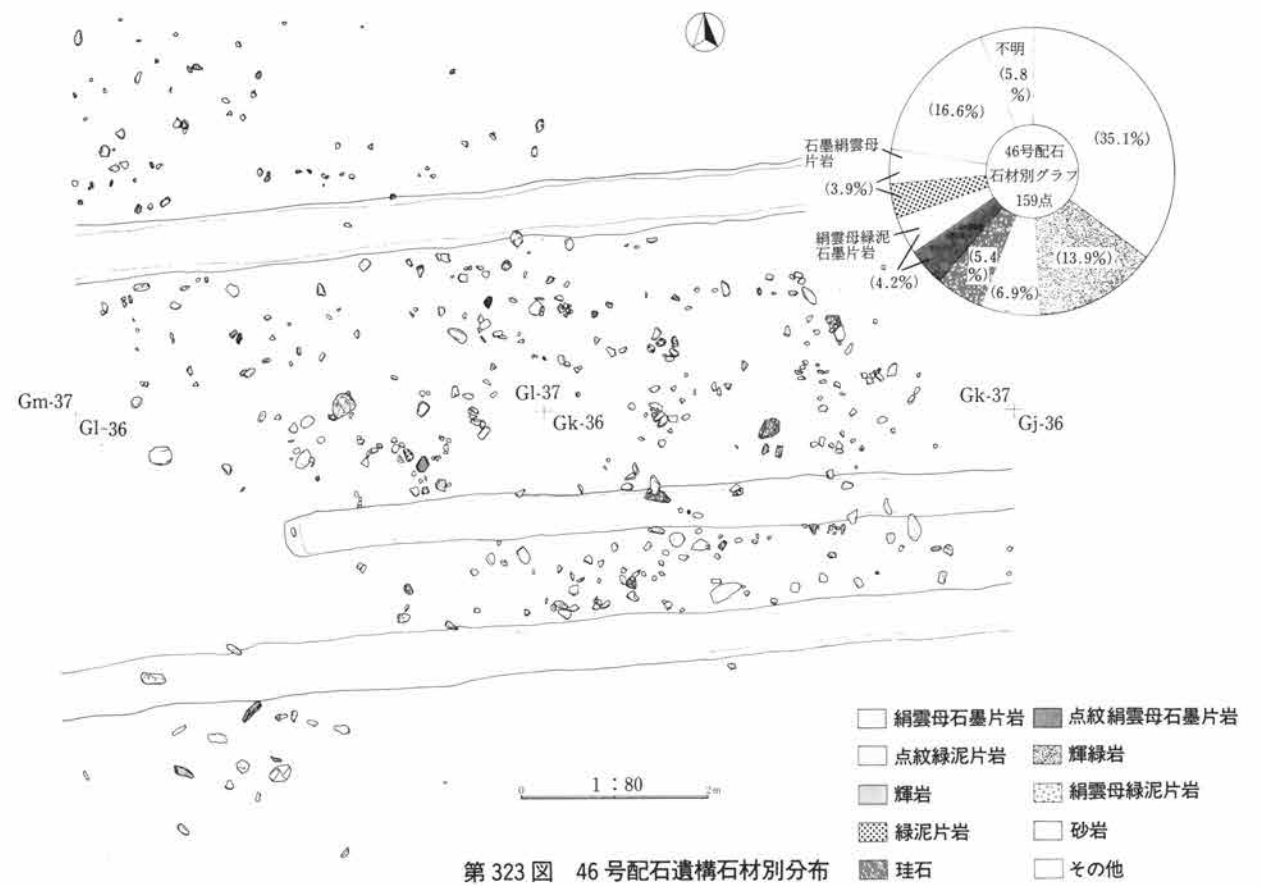
位置 Gk・G1-36・37グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西131m (遺構の中心までの距離)、44号配石遺構の南西に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。11月下旬から12月上旬にかけて遺構の調査を行い、10日に全景写真の撮影を実施した。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査に入った。この調査では新しい耕作溝の断面観察も利用したが、土壌等は存在しなかった。

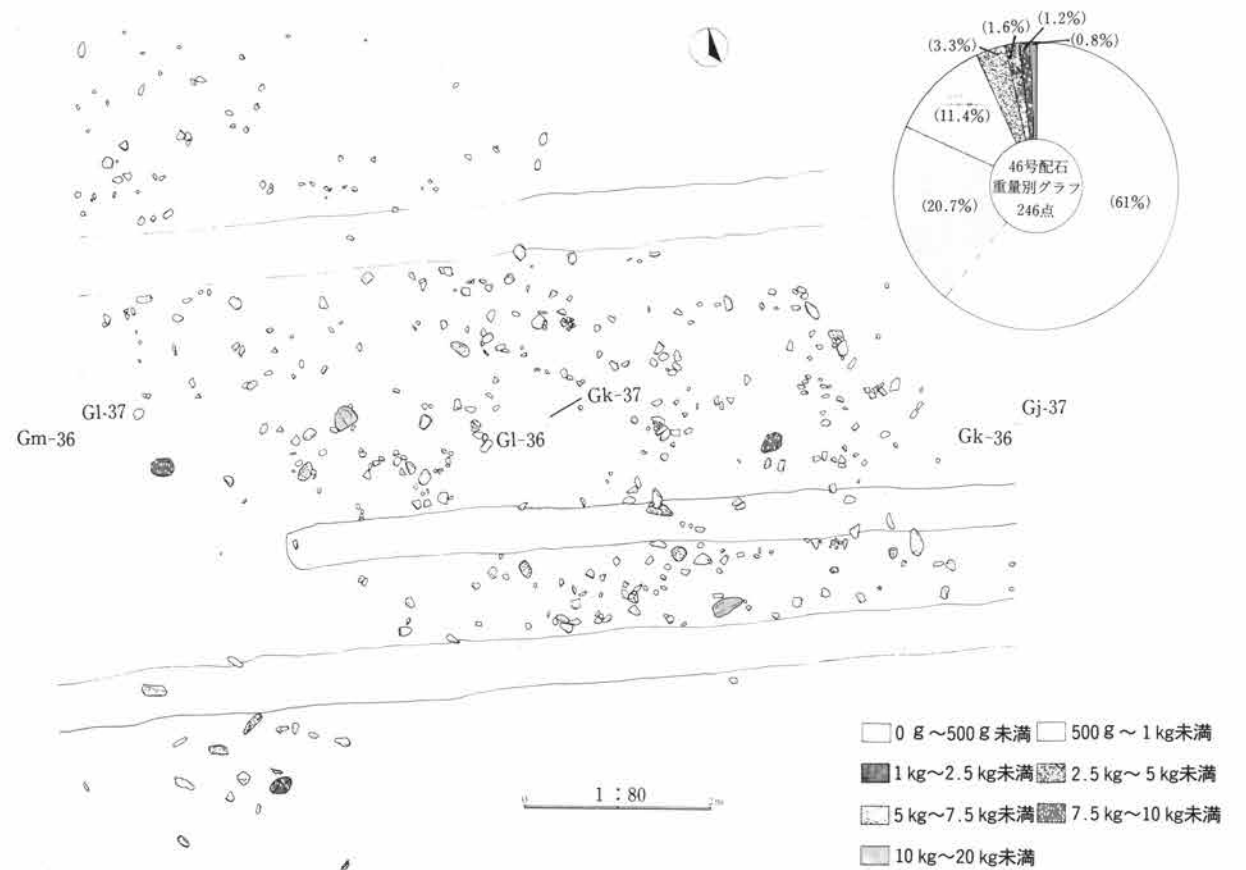
重複 新しい耕作溝によって壊されている。



第322図 46号配石遺構



第 323 図 46 号配石遺構石材別分布



第 324 図 46 号配石遺構重量別分布

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径約10m、短径約7mの範囲に石と土器片が分布している。この分布も子細に検討すると、遺構の東端に長径3m60cm、短径3m40cmの楕円形に、また中央部に長径2m80cm、短径2m50cmの楕円形に分布のまとまりが認められる。東端の配石の面積は約9.8㎡、中央部の配石面積は約6.5㎡であり、総面積は約51.9㎡になる。

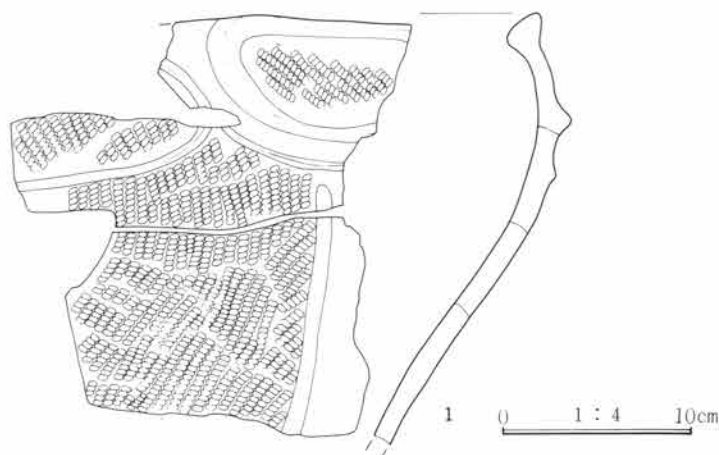
使用石材 29種類の石材が確認された。259点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩91点(35.1%)、輝緑岩36点(13.9%)、点紋緑泥片岩18点(6.9%)、珪石14点(5.4%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥石墨片岩各11点(各4.2%)、緑泥片岩・石墨絹雲母片岩各10点(各3.9%)、チャート6点(2.3%)、輝岩5点(1.9%)、緑色珪質板岩4点(1.5%)、絹雲母緑泥片岩・斑斕岩・閃輝緑岩各3点(各1.2%)、緑簾緑泥片岩・紅簾絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩各2点(各0.8%)、安山岩・石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩・閃緑岩・輝緑凝灰岩・砂岩・変斑斕岩・千枚岩・珪岩・脆雲母絹雲母片岩・雲母片岩各1点(各0.4%)であり、不明は15点(5.8%)を数えた。不明の石を除いた244点中164点(67.2%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は246点である。その内訳は、500g未満の石150点(61%)、500g～1kg未満の石51点(20.7%)、1kg～2.5kg未満の石28点(11.4%)、2.5kg～5kg未満の石8点(3.3%)、5kg～7.5kg未満の石4点(1.6%)、7.5kg～10kg未満の石3点(1.2%)、10kg～20kg未満の石2点(0.8%)である。

遺物出土状況 大形土器片1点を含め、土器片218点が出土している。部位別点数は、口縁部21点、胴部196点、底部1点であり、遺構東端から中央部にかけて出土している。加曾利E3式土器を主体としている。

石器は多孔石3点、凹石2点、磨石2点、打製石斧5点、磨製石斧1点が出土している。多孔石1点は東端の配石から、1点は中央部の配石、1点は耕作溝内からそれぞれ出土している。凹石は東端と中央部の配石から、磨石は東端の配石、打製石斧は東端の配石から1点、中央部の配石から2点、遺構北端と南端からそれぞれ1点、磨製石斧は東端の配石からの出土であった。石器の含有率は5%であり、また焼石は259点中12点の出土で、4.6%を占めている。

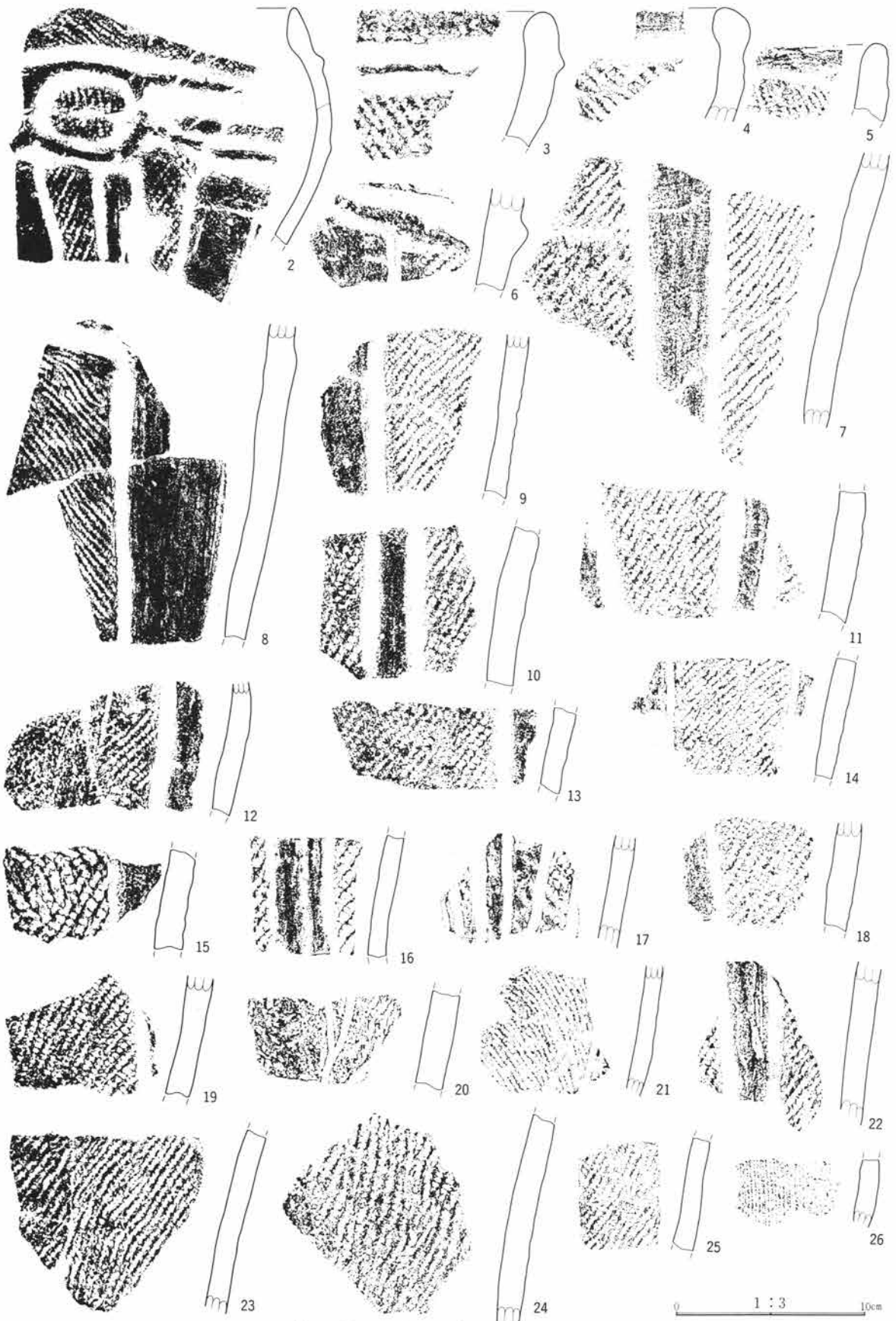
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構である。



第325図 46号配石遺構出土土器(1)

46号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|-----------|----------------|-------------------|---|--|-------|
| 325-1 | 口縁 ～胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の大形破片。器厚12～15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は褐色。 | 口縁部は内湾。口縁部に隆帯と沈線による 楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原体は R(↑)横。胴部にR(↑)縦・斜。沈線垂下。 | 配石中心部 |



第 326 図 46 号配石遺構出土土器 (2)

46号配石遺構土器観察表

| 図番 Pl. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|--------------------|--|---|-------|
| 326-2 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。 | 内湾する波状口縁部片。口唇部にR(上横。 口縁部に隆帯と沈線による円形・楕円形の 文様を描きR(上横。胴部R(上縦。沈線垂 下。 | 配石南東部 |
| 326-3 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚14~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR(上横転がし。 | 配石西部 |
| 326-4 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(上横転がし。 | 配石東部 |
| 326-5 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13~17mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(上横転がし。 | 配石南部 |
| 326-6 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16~18mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 胴部にR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南東部 |
| 326-7 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南部 |
| 326-8 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はL(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南西部 |
| 326-9 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は荒れている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石東部 |
| 326-10 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 326-11 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石東部 |
| 326-12 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 外面は荒れ、煤が付着している。 | 配石南東部 |
| 326-13 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は暗赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石東部 |
| 326-14 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。土器面は柔軟で押圧が強い。 外面に煤が付着している。 | 配石南端 |
| 326-15 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦・横転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石東部 |
| 326-16 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 配石西部 |
| 326-17 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は灰赤色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はL(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 326-18 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は荒れている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西部 |
| 326-19 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は黒褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南東部 |
| 326-20 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐灰色、内面はにぶい赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線が施されている。 | 配石東部 |

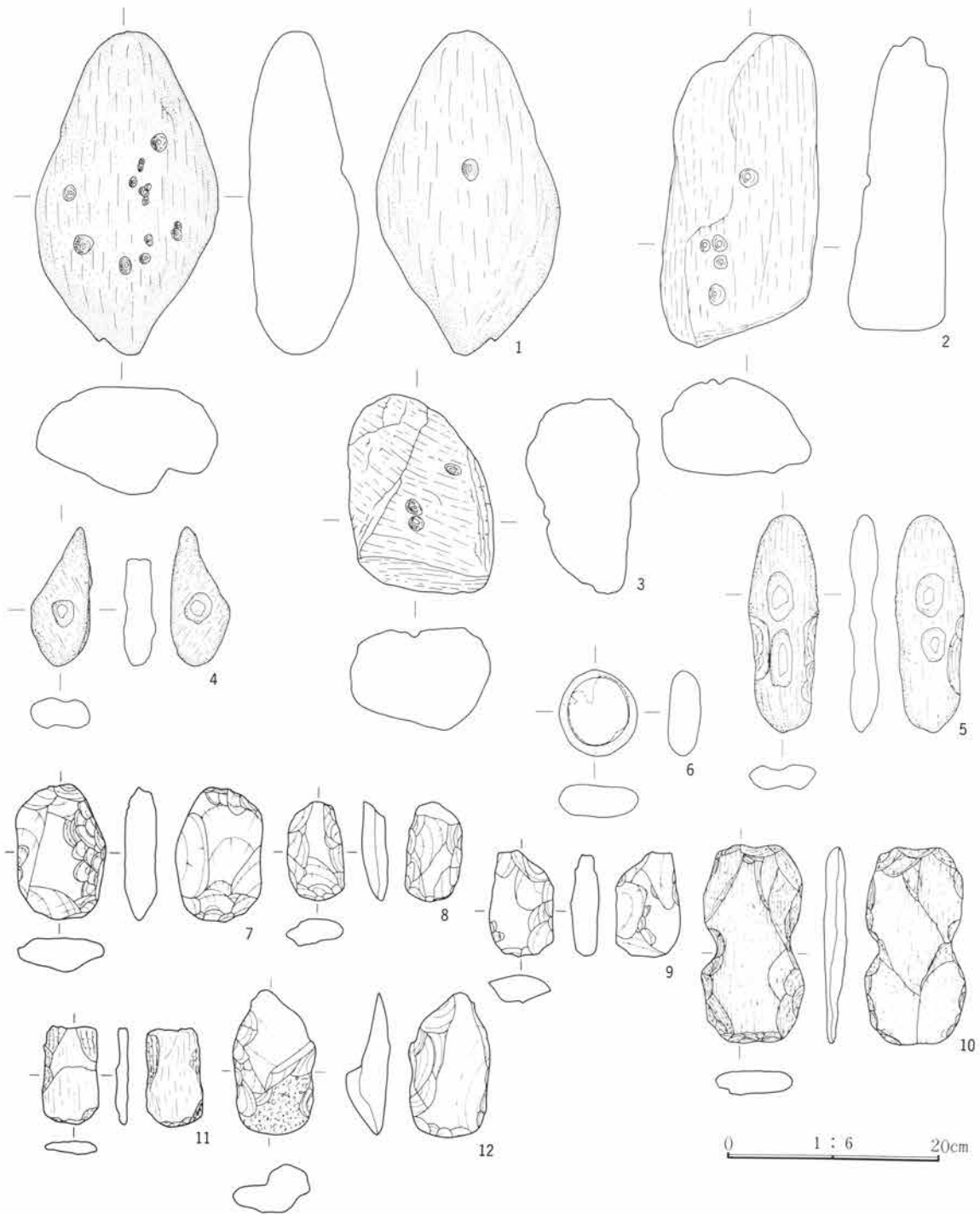
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

46号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|-------------------|---|------------------------------|-------|
| 326-21 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北端 |
| 326-22 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。 | 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石中心部 |
| 326-23 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 土器面は柔軟。 | 配石南西部 |
| 326-24 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 | 一括 |
| 326-25 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 | 配石西部 |
| 326-26 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面は橙色。 | 条線が施されている。 | 配石北端 |

46号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|------|------|-----------|--------------|------|------|-------|---|--------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 327-1 127 | 多孔石 | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 30.0 | 17.2 | 10.2 | 6,650 | 両面に15個の凹み。最大の凹みは長20mm、短14mm、深4mm。最小は長5mm、短4mm、深2mmで、平均は長11mm、短9mm、深2mm。 | 東端の配石 |
| 327-2 127 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 29.5 | 14.5 | 9.0 | 5,250 | 片面に5個の凹み。最大の凹みは長20mm、短15mm、深4mm。最小は長11mm、短9mm、深4mmで、平均は長15mm、短13mm、深4mm。 | 耕作溝内 |
| 327-3 127 | 多孔石 | ほぼ完形 | 絹雲母石墨片岩 | 18.5 | 13.6 | 9.5 | 3,700 | 片面に3個の凹み。最大の凹みは長17mm、短12mm、深5mm。最小は長14mm、短12mm、深5mmで、平均は長16mm、短11mm、深5mm。 | 中央部の配石 |
| 327-4 127 | 凹石 | 欠 | 点紋緑泥片岩 | (12.8) | 5.9 | 3.0 | (300) | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径27mm、短径22mm、深さ2mmである。 | 東端の配石 |
| 327-5 127 | 凹石 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 20.4 | 6.4 | 2.6 | 500 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長51mm、短20mm、深3mm。最小は長32mm、短23mm、深3mmで、平均は長43mm、短24mm、深4mm。 | 中央部の配石 |
| 327-6 127 | 磨石 | 完形 | 安山岩 | 7.9 | 7.5 | 3.2 | 200 | 器面に磨耗痕と煤の付着がみられる。 | 東端の配石 |
| 327-7 127 | 打製石斧 | 完形 | 閃輝緑岩 | 12.5 | 8.5 | 3.1 | 500 | バチ(IIb?)。片面に素材剥片の腹面大きく残す。 | 中央部の配石 |
| 327-8 127 | 打製石斧 | 基部欠損 | 熱変成岩 | (9.2) | 5.4 | 2.5 | (150) | 短冊(III)。片面の一部に自然面残る。 | 配石北端 |
| 327-9 127 | 打製石斧 | 基部欠損 | 千枚岩 | (9.7) | 6.0 | 2.7 | (170) | バチ(IIb)。 | 東端の配石 |
| 327-10 127 | 打製石斧 | 完形 | 点紋絹雲母石墨片岩 | 18.3 | 9.7 | 2.1 | 600 | 分胴(I)。 | 配石南端 |
| 327-11 127 | 打製石斧 | 基部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | (9.1) | 5.3 | 1.2 | (90) | 短冊(III)。 | 中央部の配石 |
| 327-12 127 | 磨製石斧 | 基部欠損 | 輝緑岩 | (13.3) | 7.6 | 4.4 | (470) | 敲打途中。片面ほとんど粗割り痕残る。 | 東端の配石 |

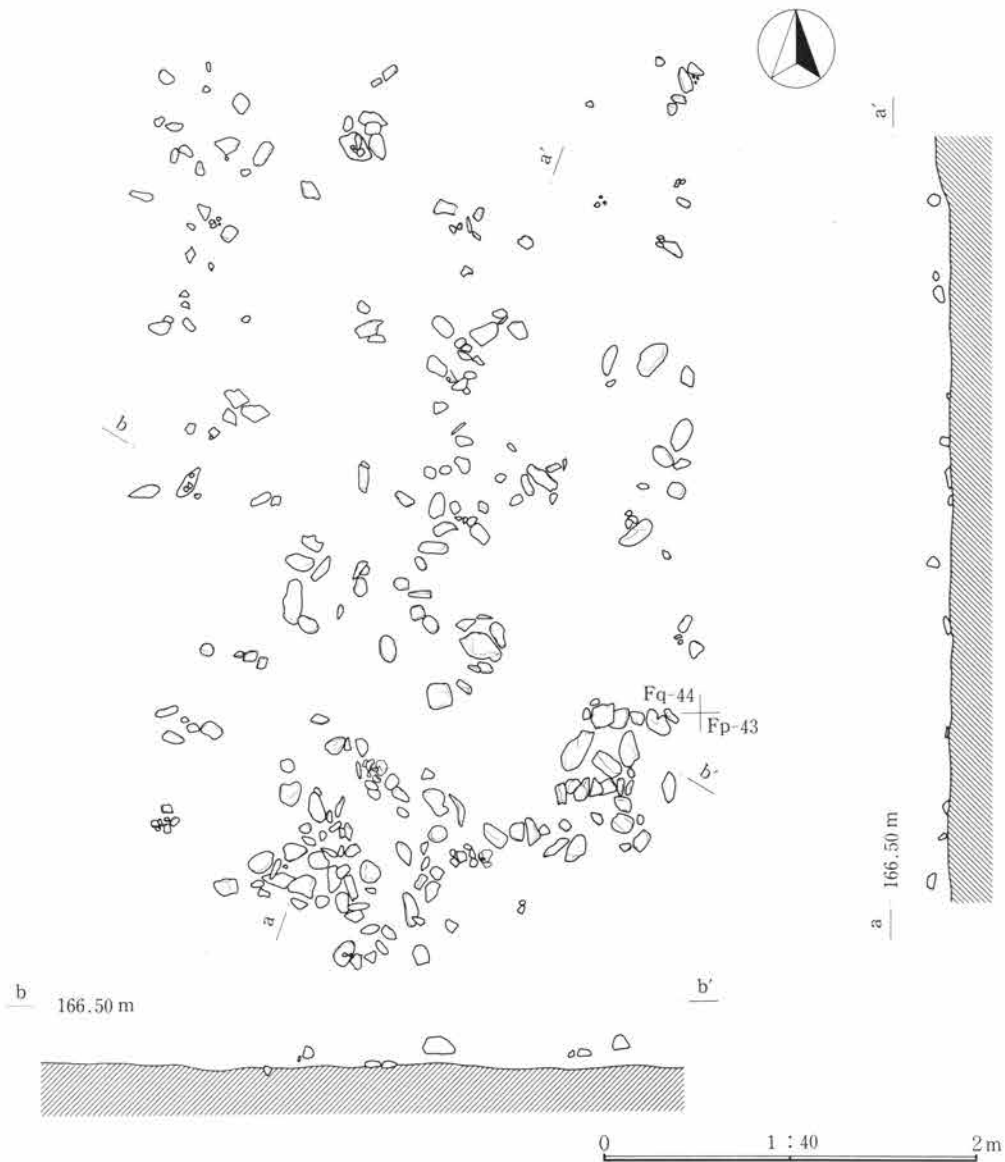


第327図 46号配石遺構出土石器

47号配石遺構 (第328～333図、PL. 80、127)

位置 Fq-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西47m50cm(遺構の中心までの距離)、29号配石遺構の北北西5m50cmの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。12月上旬から遺構の調査に入り、11日に全景写真の撮影を実施した。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い下部調査を行ったが、土壌等は存在



第328図 47号配石遺構

しなかった。

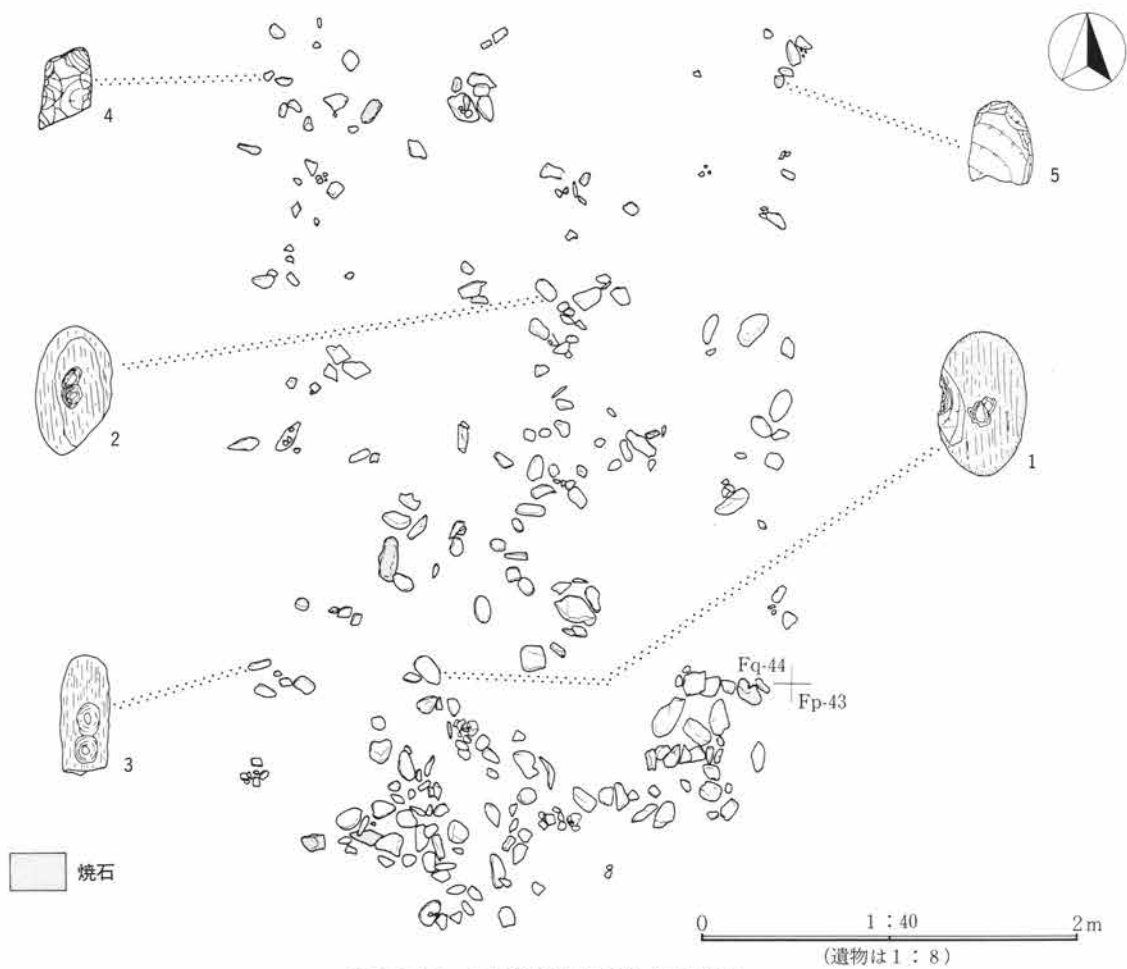
重複 なし。

覆土 竖穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

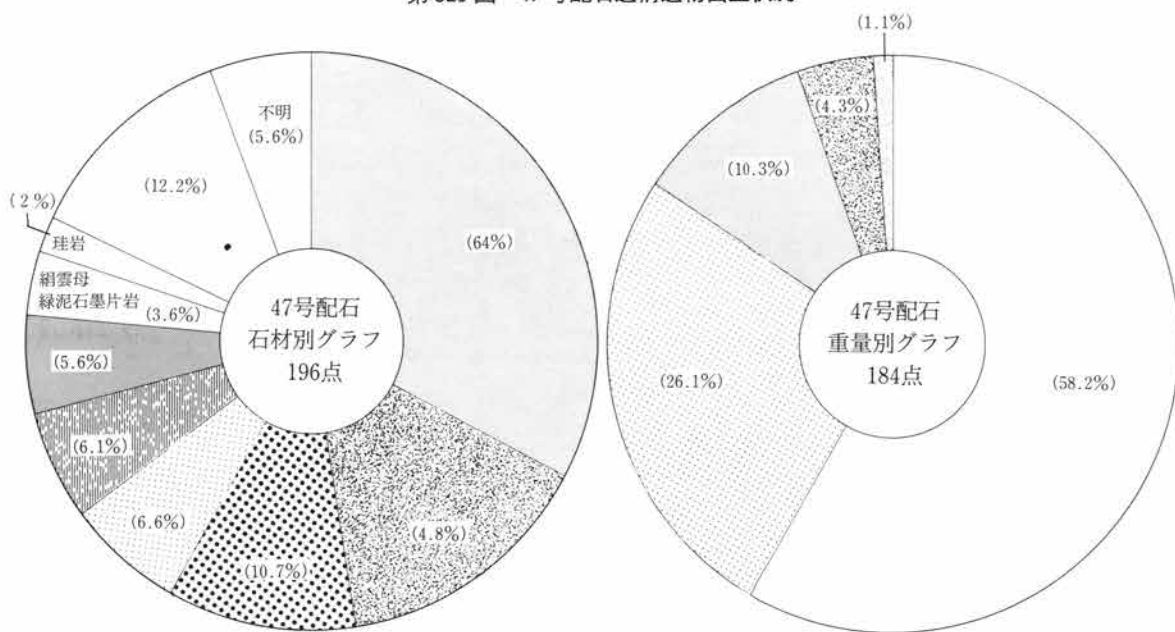
形状・配石状況 長径4m80cm、短径3mの範囲に配石が施されているが、南部分にやや集中している。配石の面積は約13.9㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。196点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩64点(32.7%)、輝緑岩29点(14.8%)、緑泥片岩21点(10.7%)、点紋緑泥片岩13点(6.6%)、珪石12点(6.1%)、点紋絹雲母石墨片岩11点(5.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩7点(3.6%)、珪岩4点(2%)、石墨絹雲母片岩・角閃岩各3点(各1.5%)、チャート・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩・緑色珪質板岩各2点(各1%)、輝岩・絹雲母緑泥片岩・赤色珪質板岩・安山岩・閃緑岩・輝緑凝灰岩・方散虫板岩・石英斑岩・閃輝緑岩・雲母片岩各1点(各0.5%)であり、不明は11点(5.6%)を数えた。不明の石を除いた185点中123点(66.5%)の石が片岩類である。

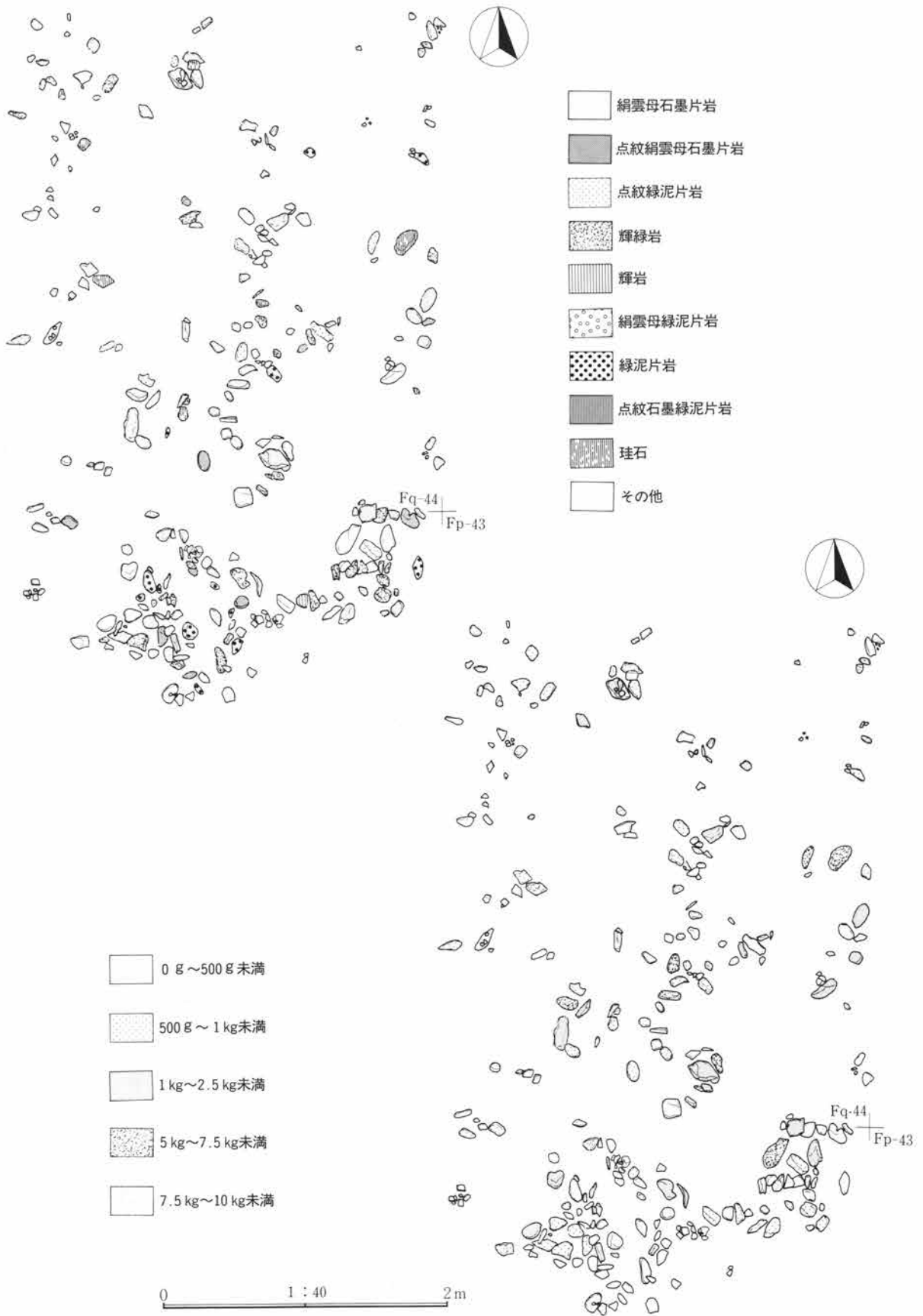
石材重量 重量の判明している石は184点である。その内訳は、500g未満の石107点(58.2%)、500g～1kg



第 329 図 47 号配石遺構遺物出土状況



第 330 図 47 号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



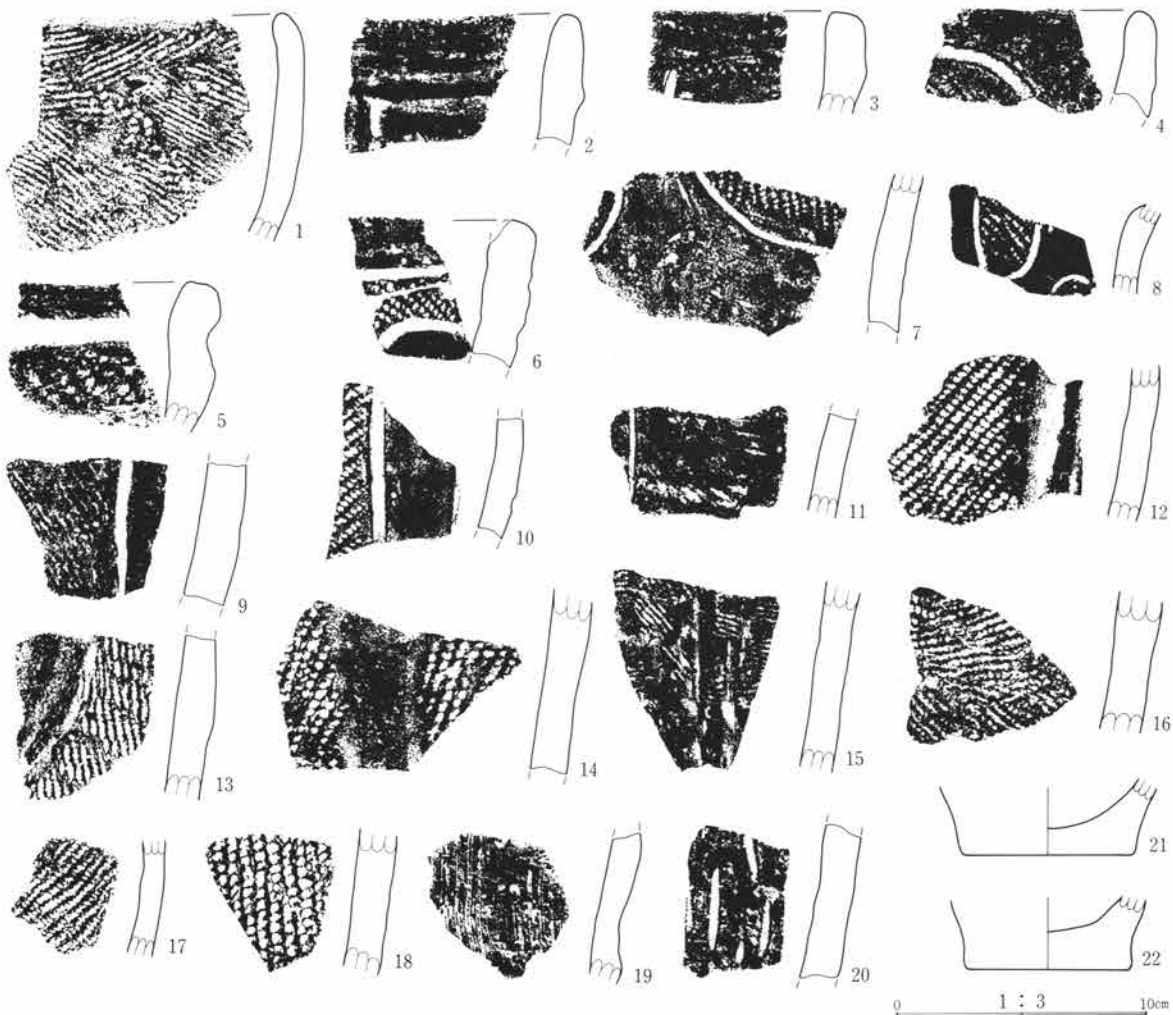
第331図 47号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布

未満の石48点(26.1%)、1kg~2.5kg未満の石19点(10.3%)、2.5kg~5kg未満の石8点(4.3%)、5kg~7.5kg未満の石2点(1.1%)である。

遺物出土状況 95点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部13点、胴部76点、底部6点であり、遺構中心部は少なく、周辺から出土している。加曽利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。

石器では凹石3点、打製石斧1点、磨製石斧の未製品1点が出土している。打製石斧と磨製石斧は配石の北端から、凹石は中央部と南端近くからの出土である。石器の含有率は2.6%であり、また焼石は196点中15点の出土で、7.7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E4式期の配石遺構である。



第332図 47号配石遺構出土土器

47号配石遺構土器観察表

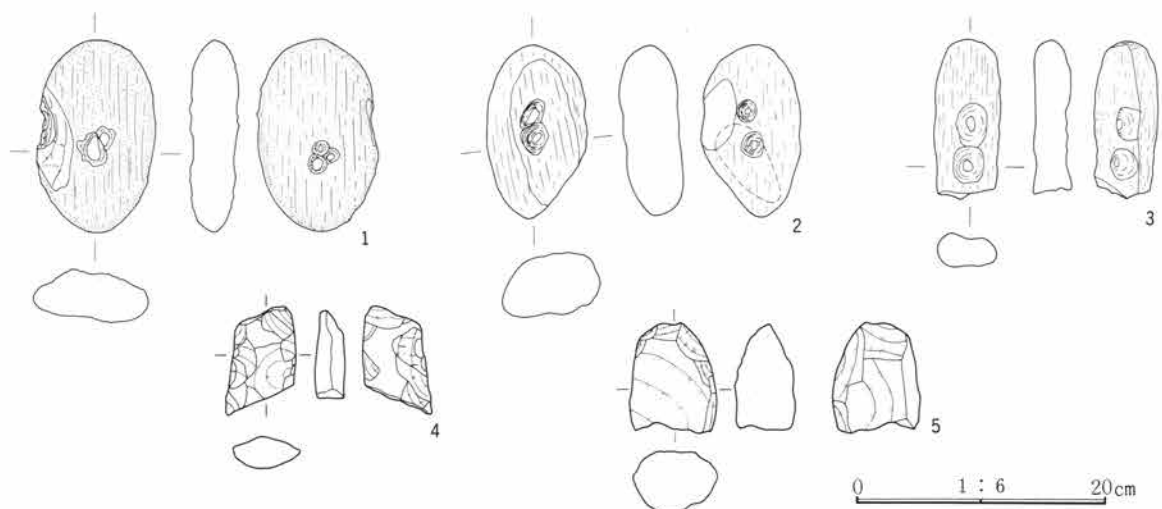
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|--------------|----------|-------------------|---|------------------------------------|-------|
| 332-1 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。 | 口縁部はやや内湾する。縄文施文。原形は L(↑横・縦転がし)。 | 配石北東部 |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

47号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|-------------------|---|--|-------|
| 332-2 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下 している。 | 配石北西部 |
| 332-3 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らせる。それに接続する沈線を垂下 している。微隆起帯上にR{横転がし。 | 配石東南端 |
| 332-4 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚13~16mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR{。 | 配石北部 |
| 332-5 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい橙色。 | 口縁部に幅広い沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR{横転がし。 | 配石東南部 |
| 332-6 127 | 口縁 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚19mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。 | 口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を 巡らせる。胴部は沈線による「U」状の文 様を描き、縄文施文。原体はR{。 | 配石東部 |
| 332-7 127 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はR{。 | 配石南部 |
| 332-8 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は灰黄褐色。 | 胴部で括れる器形。細沈線による「U」字 状の文様が描かれ、区画内に縄文施文。 原体はL{縦転がし。 | 配石北東端 |
| 332-9 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は赤褐色。 | 縄文施文。原体はL{縦転がし。 微隆起帯を垂下させている。 | 配石南部 |
| 332-10 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR{縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。 | 配石北西部 |
| 332-11 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黄褐色。 | 縄文施文。原体はL{縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石北東部 |
| 332-12 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はにぶい黄褐色。 | 縄文施文。原体はR{縦転がし。 隆帯を垂下。 | 配石北東部 |
| 332-13 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい褐色。 | 微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR{。 | 配石南部 |
| 332-14 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR{縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石西端 |
| 332-15 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は褐色。 | 微隆起帯を垂下させている。縄文施文。 原体はL{縦転がし。 | 配石北西部 |
| 332-16 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。 | 縄文施文。原体はL{縦・斜転がし。 | 配石北東部 |
| 332-17 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 縄文施文。原体はR{縦転がし。 | 配石西部 |
| 332-18 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。 | 縄文施文。原体はR{縦転がし。 押圧が強い。 | 配石東部 |
| 332-19 127 | 胴部 片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。 | 条線が施されている。 内面に煤が付着している。 | 配石中心部 |
| 332-20 127 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明褐色。 | 押し引き状の沈線が施されている。 | 配石西部 |

5 配石遺構〈48号〉



第 333 図 47 号配石遺構出土石器

47号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|---------------|---------|------------------|---|----------------|-------|
| 332-21 127 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の底部片。底径68mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。 | 内面に煤が付着している。 | 配石東部 |
| 332-22 127 | 底部 片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の底部片。底径65mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。 | 内面に炭化物が付着している。 | 配石南西部 |

47号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器 種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|------|------|---------|--------------|-----|-----|-------|--|---------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 333-1 127 | 凹 石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 15.2 | 9.8 | 4.2 | 900 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長27mm、短20mm、深3mm。最小は長12mm、短12mm、深3mmで、平均は長17mm、短14mm、深3mm。 | 配石の南端近く |
| 333-2 127 | 凹 石 | 完形 | 緑泥片岩 | 13.6 | 8.2 | 5.1 | 900 | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短22mm、深2mm。最小は長18mm、短16mm、深3mmで、平均は長21mm、短18mm、深3mm。一部被熱。 | 配石中央部 |
| 333-3 127 | 凹 石 | 欠 | 絹雲母石墨片岩 | (12.8) | 5.2 | 3.1 | (300) | 両面に4個の凹み。最大の凹みは長35mm、短24mm、深4mm。最小は長25mm、短18mm、深2mmで、平均は長29mm、短22mm、深3mm。 | 配石南西端 |
| 333-4 127 | 打製石斧 | 刃部欠損 | 熱変成岩 | (8.6) | 5.7 | 2.6 | (130) | バチ (II b)。 | 配石北西端 |
| 333-5 127 | | 刃部欠損 | 角閃岩 | (8.7) | 7.0 | 4.9 | (410) | 粗割り段階。 | 配石北東端 |

48号配石遺構 (第334～338図、PL. 81、127)

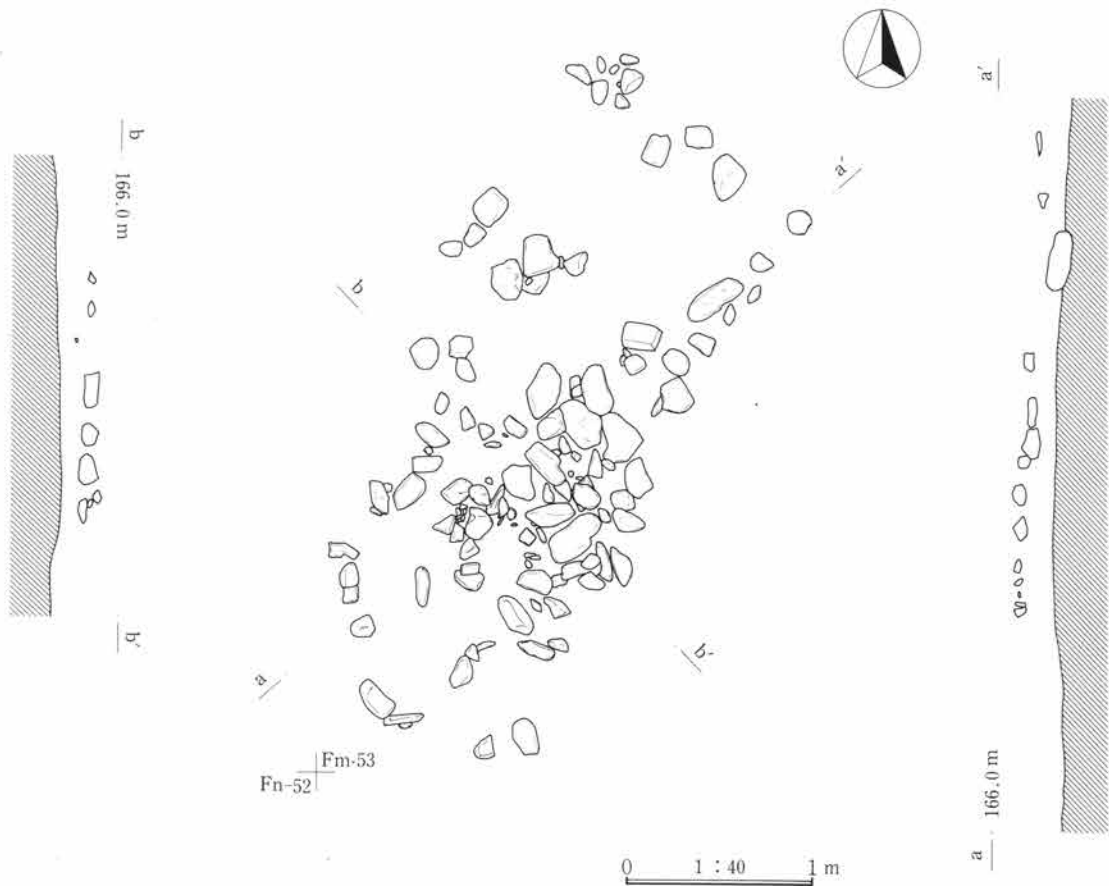
位置 Fm-53グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西38m50cm(遺構の中心までの距離)、49号配石遺構の南南東9mの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。12月上旬から調査を開始した。18日に遺構の全景写真撮影を実施した。下旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査を行ったが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m50cm、短径1m70cmの範囲に配石が集中的に施されている。配石の面積は約6.1m²



第 334 図 48 号配石遺構

である。

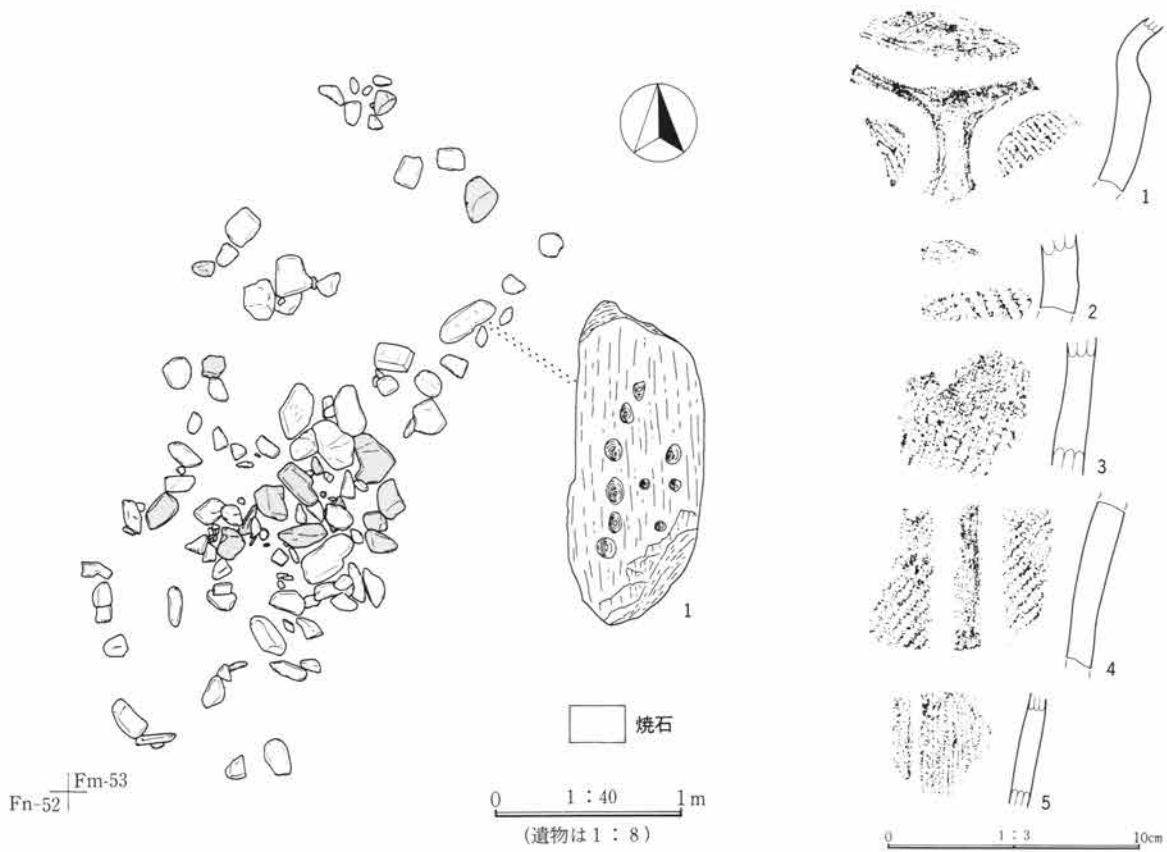
使用石材 25種類の石材が確認された。114点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩24点(21.1%)、輝緑岩22点(19.3%)、緑泥片岩9点(7.9%)、点紋絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩各7点(各6.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩5点(4.4%)、斑斨岩・チャート各4点(各3.5%)、絹雲母緑泥片岩・珪石各3点(各2.6%)、輝岩・角閃岩・変斑斨岩・点紋絹雲母片岩・珪岩各2点(各1.8%)、赤色珪質板岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・緑泥石墨片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・熱変成岩・綠色珪質板岩各1点(各0.9%)であり、不明は6点(5.3%)を数えた。不明の石を除いた108点中53点(49.1%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は108点である。その内訳は、500g未満の石36点(33.3%)、1kg～2.5kg未満の石32点(29.6%)、500g～1kg未満の石22点(20.4%)、2.5kg～5kg未満の石11点(10.2%)、5kg～7.5kg未満の石4点(3.7%)、7.5kg～10kg未満の石3点(2.8%)である。

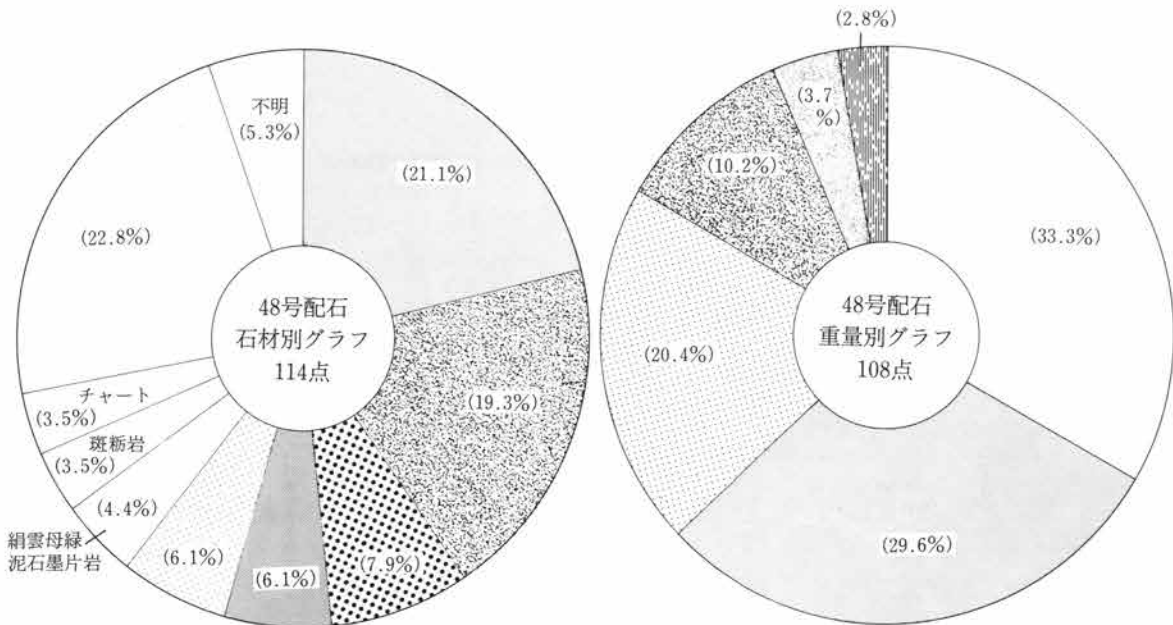
遺物出土状況 土器片は9点の出土で非常に少ない。部位別点数は口縁部2点、胴部7点であり、配石の中心部からの出土である。加曽利E3式土器を主体としている。

石器では多孔石1点が配石の北東から出土している。石器の含有率は0.9%であり、また焼石は114点中9点の出土で、7.9%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曽利E3式期の配石遺構である。

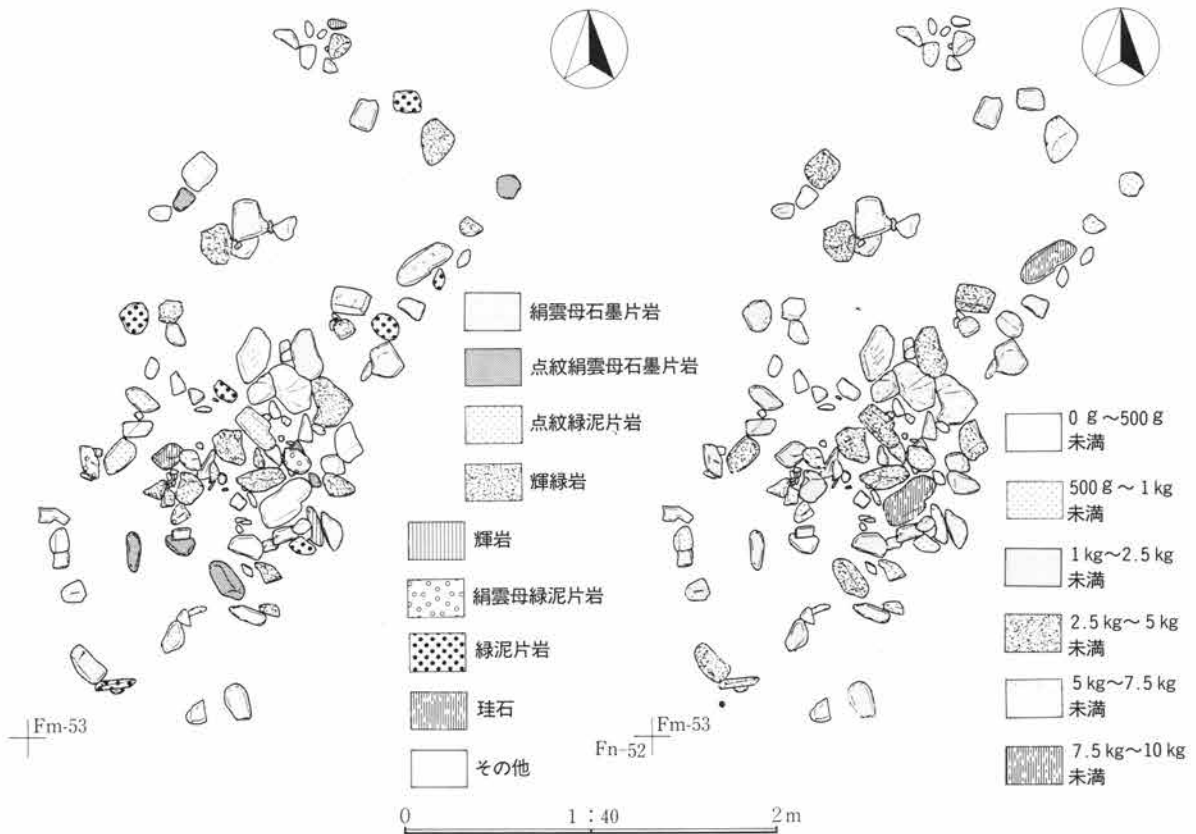


第 335 図 48 号配石遺構遺物出土状況と出土土器



第 336 図 48 号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



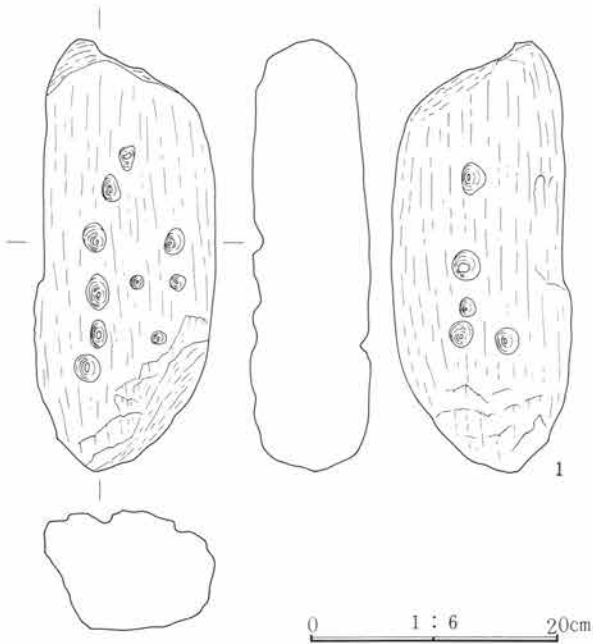
第 337 図 48 号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布

48号配石遺構土器観察表

| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|------|----------------|--|--|-------|
| 335-1 127 | 口縁部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚7~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 口唇部に無文帯。口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様を描き、縄文施文。 原体はR(└横転がし。 | 配石南西部 |
| 335-2 127 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。 | 縄文施文。原体はR(└(0段多条か?)縦・横転がし。 | 配石西部 |
| 335-3 127 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。 | 縄文施文。原体はR(└(0段多条)。 | 配石南部 |
| 335-4 127 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。 | 縄文施文。原体はR(└縦転がし。 沈線を垂下。 | 配石南部 |
| 335-5 127 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は黒褐色。 | 条線と沈線が施されている。 内面に煤が付着している。 | 配石南部 |

48号配石遺構石器観察表

| 図番 PL. | 器 種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|--------------|------|-----|-------|--|-------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 338-1 127 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 34.0 | 14.6 | 9.6 | 7,500 | 両面に15個の凹み。最大の凹みは長28mm、短18mm、深10mm。最小は長10mm、短9mm、深4mmで、平均は長17mm、短15mm、深5mm。一部焼けている。 | 配石北東端 |



第338図 48号配石遺構出土石器

49号配石遺構 (第339～341図、PL. 82)

位置 Fn-54・55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西47m (遺構の中心までの距離)、48号配石遺構の北北西9mの所に位置している。

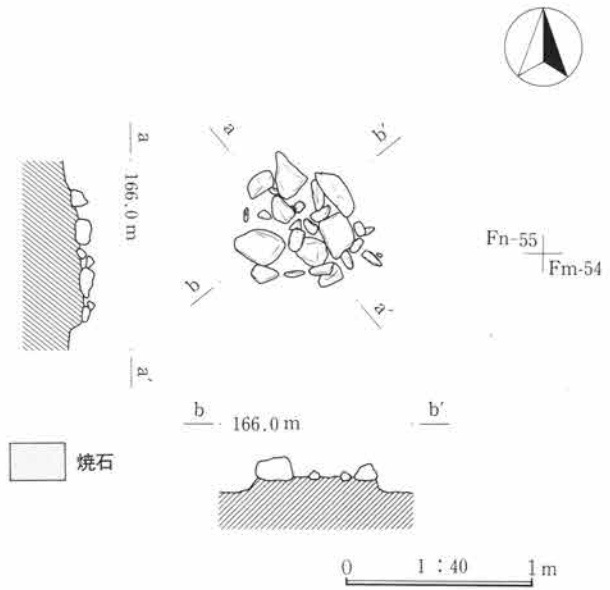
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。12月上旬から調査を開始した。18日に遺構の全景写真撮影を実施した。その後、遺物の取り上げ、配石遺構の石の取り上げ作業を行い下部調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

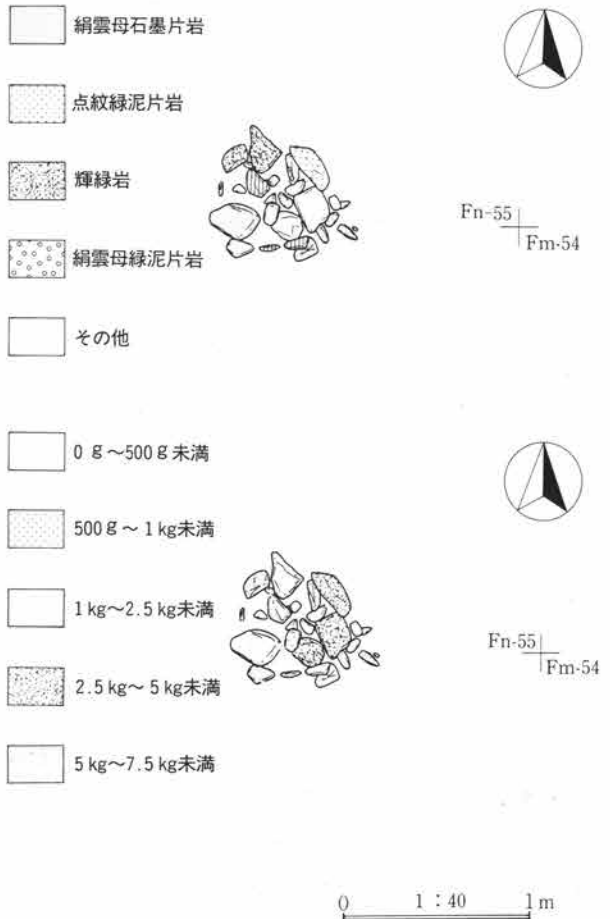
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径75cm、短径70cmの小規模な配石である。配石の面積は約0.5m²である。

使用石材 11種類の石材が確認された。27点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩10点 (37%)、輝緑岩・輝緑岩各3点 (各11.1%)、点紋緑泥片岩・紅縹絹雲母片岩各2点 (各7.4%)、緑泥片岩・絹雲母緑泥片岩・角閃岩・絹雲母緑泥石墨片岩・石墨絹雲母片岩・緑泥石墨片岩各1点 (各3.7%) であり、不明は1点 (3.7%) を数えた。不明の石を除いた26点中19点 (73.1%) の石が片岩類である。

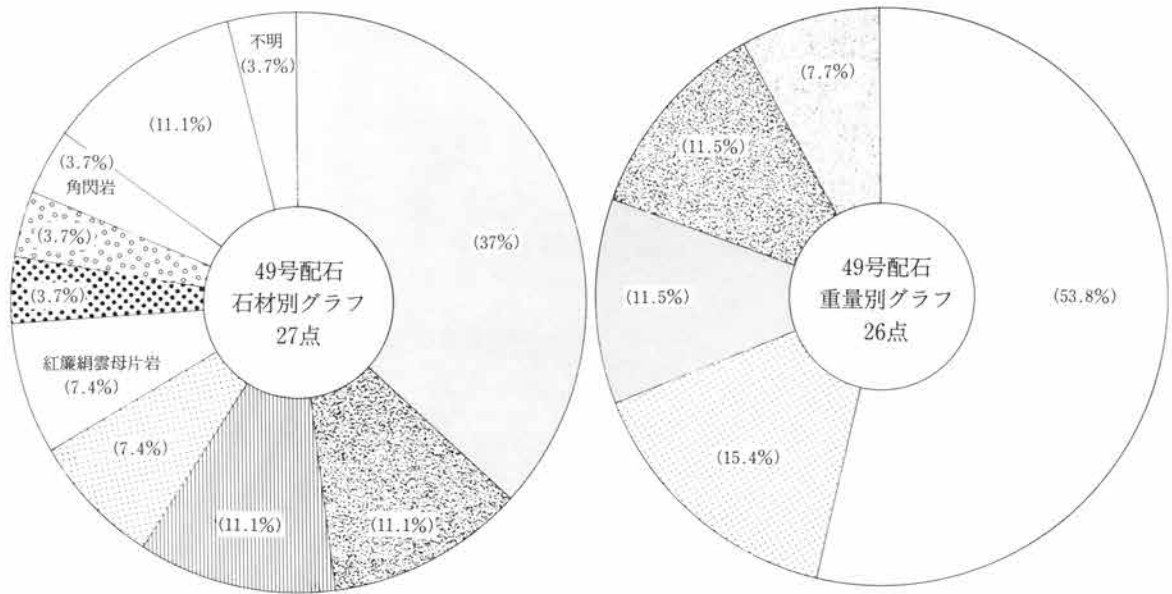


第339図 49号配石遺構



第340図 49号配石遺構
石材別 (上)・重量別 (下) 分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第341図 49号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

石材重量 重量の判明している石は26点である。その内訳は、500g未満の石14点(53.8%)、500g～1kg未満の石4点(15.4%)、1kg～2.5kg未満の石3点(11.5%)、2.5kg～5kg未満の石3点(11.5%)、5kg～7.5kg未満の石2点(7.7%)である。

遺物出土状況 土器片や石器は出土していない。

所見 遺物の出土はないが、配石状況から判断して縄文時代中期の配石遺構であることにはまちがいない。

50号配石遺構 (第342～344図、PL. 82、127)

位置 Gi・Gj-42・43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西110m(遺構の中心までの距離)、36号配石遺構の南西9m50cmの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。12月上旬から調査を開始し、19日に遺構の全景写真撮影を実施した。その後、遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い下部調査に入ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

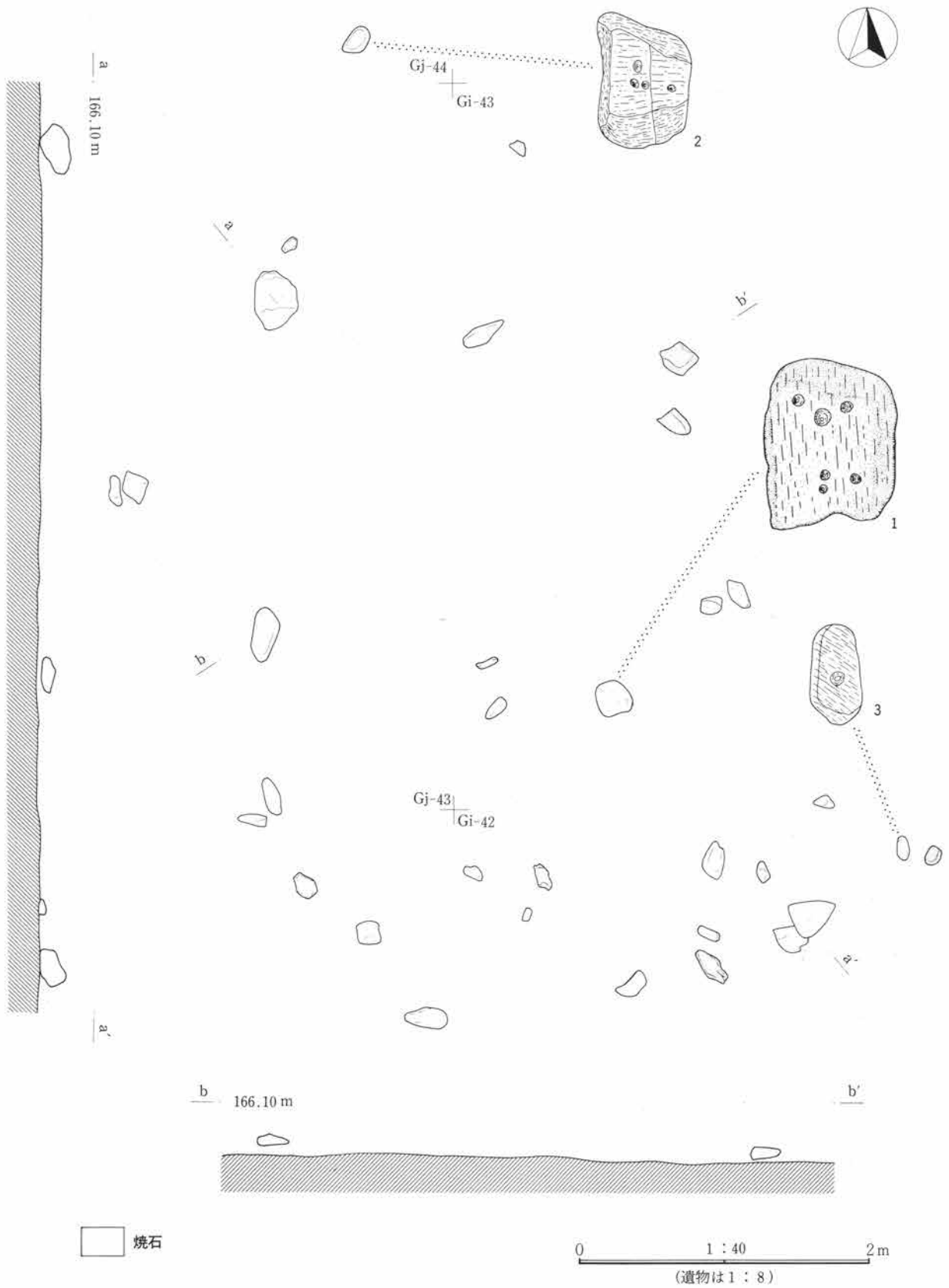
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径6m、短径4mの楕円形に配石が施されている。小規模な環状構造と判断して良いものだろうか。配石の中心からやや東南寄りから多孔石1点が出土している。配石の面積は約26.2㎡である。

使用石材 12種類の石材が確認された。32点の石材別点数は、輝緑岩6点(18.8%)、絹雲母石墨片岩5点(15.6%)、点紋緑泥片岩・石墨絹雲母片岩各4点(各12.5%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各2点(各6.3%)、砂岩・絹雲母緑泥石墨片岩・紅簾絹雲母片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点(各3.1%)であり、不明は2点(6.3%)を数えた。不明の石を除いた30点中23点(76.7%)の石が片岩類である。

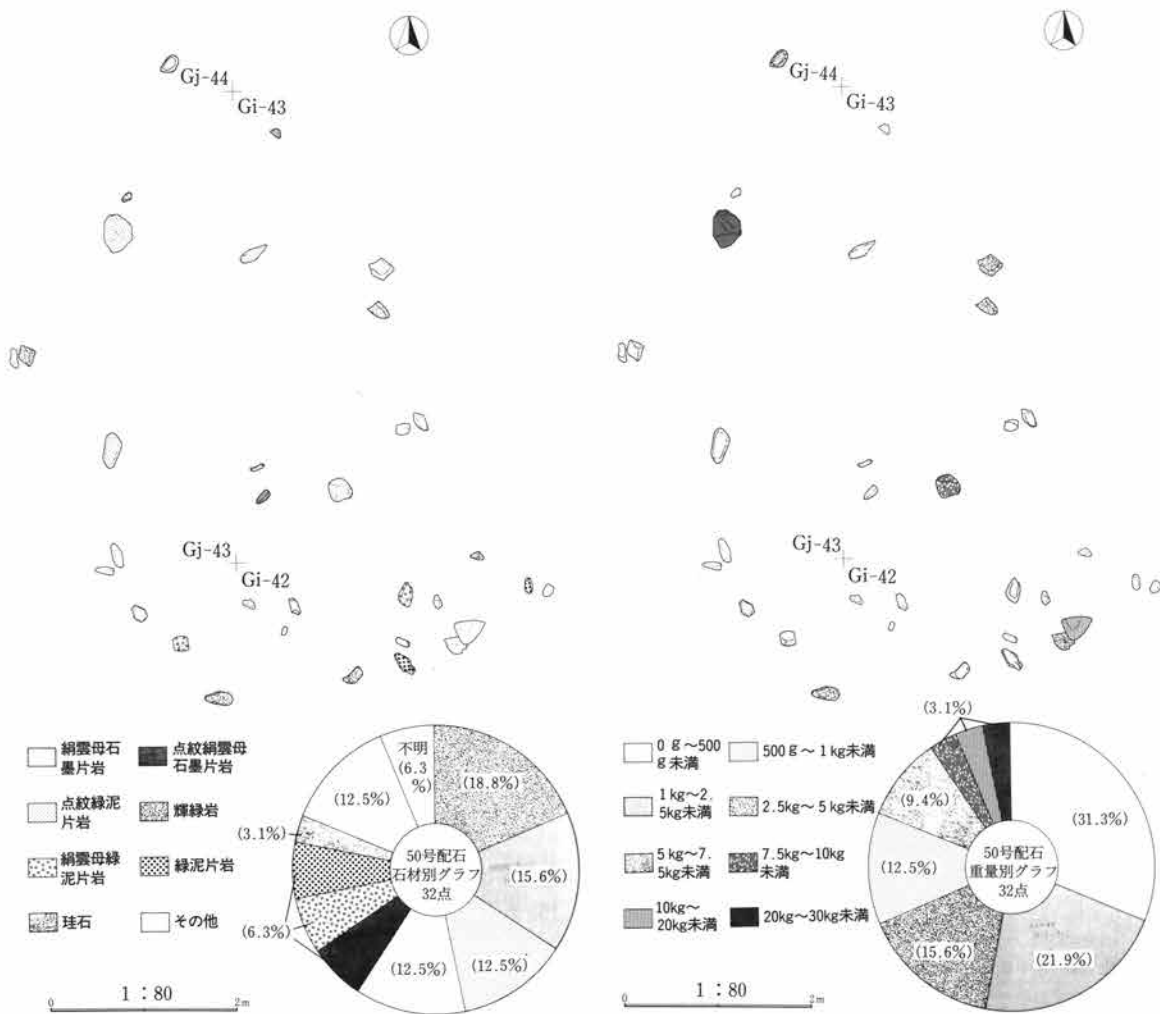
石材重量 重量の判明している石は32点である。その内訳は、500g未満の石10点(31.3%)、1kg～2.5kg未満の石7点(21.9%)、2.5kg～5kg未満の石5点(15.6%)、500g～1kg未満の石4点(12.5%)、5kg～7.5kg未満の石5点(15.6%)である。

5 配石遺構〈50号〉



第 342 図 50 号配石遺構

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

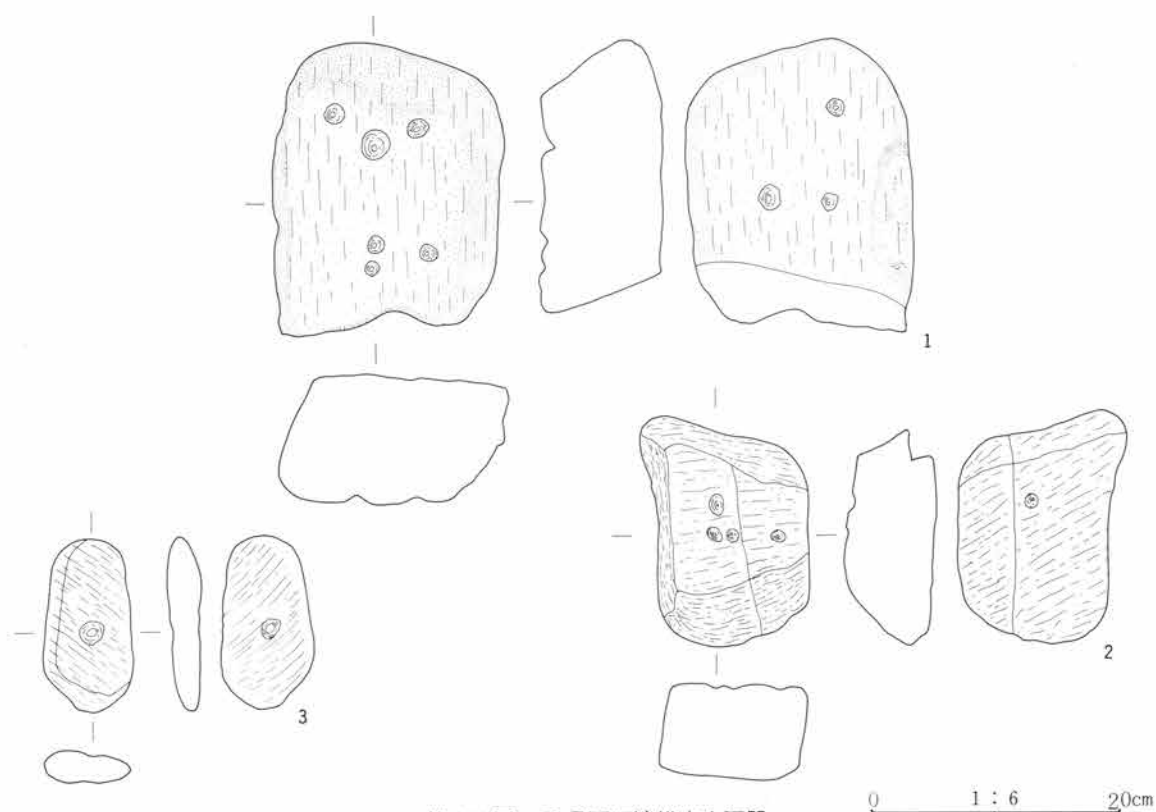


第343図 50号配石遺構石材別(左)・重量別(右)分布

5kg未満の石3点(9.4%)、7.5kg~10kg未満の石1点(3.1%)、10kg~20kg未満の石1点(3.1%)、20kg~30kg未満の石1点(3.1%)である。

遺物出土状況 土器片の出土はなく、石器として多孔石2点、凹石1点が出土している。多孔石1点は遺構の北端から、1点は中央やや南よりの出土である。凹石は東南端から出土している。石器の含有率は9.4%であり、また焼石は32点中8点の出土で、25%を占めている。焼石の占める割合は、他の配石遺構よりも高い。

所見 土器片の出土はないが、多孔石等の出土から考えて縄文時代中期の配石遺構であることには間違いない事実であろう。



第344図 50号配石遺構出土石器

50号配石遺構石器観察表

| 図番 Pl. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-------|------|---------|--------------|------|------|---------|--|--------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 344-1 127 | 多 孔 石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (23.2) | 18.4 | 10.1 | (7,850) | 両面に9個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深12mm。最小は長12mm、短10mm、深5mmで、平均は長17mm、短14mm、深8mm。全面焼けている。 | 配石の中 央南寄り |
| 344-2 127 | 多 孔 石 | ほぼ完形 | 絹雲母石墨片岩 | 18.2 | 13.6 | 7.6 | 2,600 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長15mm、短11mm、深5mm。最小は長10mm、短9mm、深3mmで、平均は長12mm、短10mm、深3mm。 | 配石北端 |
| 344-3 127 | 凹 石 | 完形 | 緑泥片岩 | 13.7 | 7.4 | 2.5 | 500 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径17mm、深さ4mmである。 | 配石東南 端 |

6 屋外埋設土器

屋外埋設土器は12基検出された。環状列石に組み込まれているもの3基、列石内部から検出されたもの1基、列石周辺から検出されたもの2基、廃棄場所から検出されたもの1基、配石遺構の周辺から検出されたもの5基である。12基の屋外埋設土器のうち4基については、残存脂肪分析を実施した。

環状列石に組み込まれているもの 1・6・12号屋外埋設土器
列石内部から検出されたもの 2号屋外埋設土器
列石周辺から検出されたもの 7・11号屋外埋設土器
廃棄場所から検出されたもの 5号屋外埋設土器
配石遺構周辺から検出されたもの 3・4・8・9・10号屋外埋設土器
残存脂肪分析を実施した屋外埋設土器 1・3・4・6号屋外埋設土器（4章 自然科学的分析〔1〕参照）

1号屋外埋設土器（第345・350・353図、PL. 84、128）

Fd・Fe—47グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東17m50cm、列石下に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は94×80cm、底面は74×58cm、深さ25cmの楕円形を呈し、面積約0.34m²である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子を極少量含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。埋設土器固定のための人為的埋土。

埋設土器は胴下半分を欠損した加曾利E 3式土器で、逆位状態で埋設され土圧によりやや南に傾いていた。埋設土器内部土壌は残存脂肪分析を、土器は胎土分析を実施した。

土壌の南部分に11点の石があるが、これらは列石の一部を構成するものであろう。6種類の石材が確認され、石材別点数は絹雲母石墨片岩・輝緑岩各3点、絹雲母緑泥石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・凝灰岩・珪石各1点であり、不明は1点であった。

2号屋外埋設土器（第345・350・353・354図、PL. 84・85、128）

Fi・Fj—50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西14m50cm、列石から3m50cm内側の所に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は74×69cm、底面は49×43cm、深さ25cmのほぼ円形を呈し、面積0.17m²である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。土器固定のための人為的埋土。

第2層 黄褐色砂礫層 粘性があまりなくサラサラしている。土壌掘りあげ土で、土器固定のための人為的埋土である。

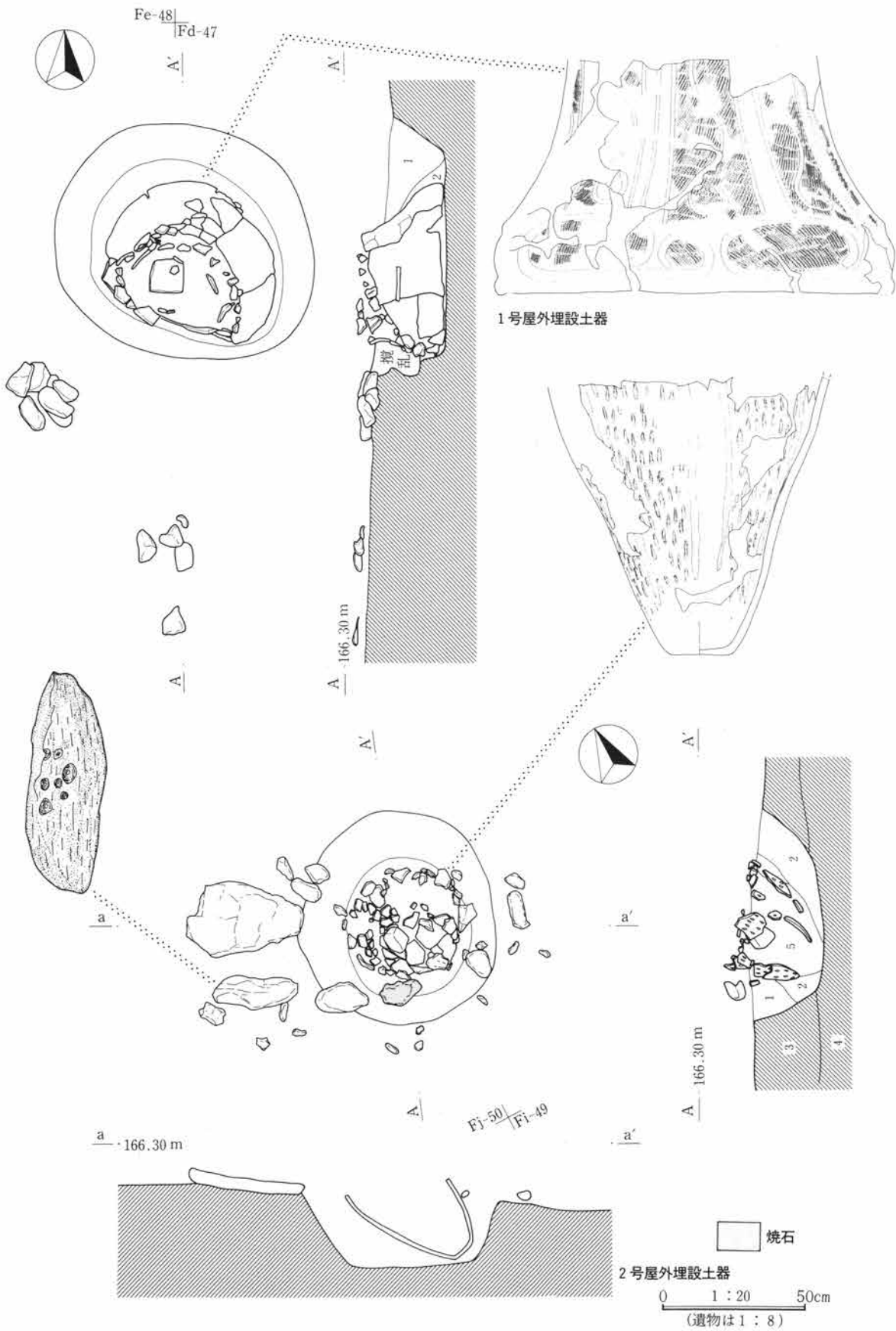
第3層・第4層は地山である。

第3層 茶褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。

第4層 黄褐色砂礫層

埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E 4式土器で、斜位状態で埋設されていた。埋設土器の覆土は暗褐色土層である。

第5層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性がある。



第345図 1・2号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

埋設土器の覆土上層からは蓋石が出土している。蓋石は長径16cm・短径11cm・厚さ4cm・重量1,350gの斑斨岩を使用している。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。また土壌上面には埋設土器を囲うように多孔石1点、焼石1点を含む26点の石が配置されている。石材の種類は13種類で、石材別点数は点紋絹雲母石墨片岩5点、絹雲母石墨片岩3点、点紋緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・緑泥片岩・斑斨岩各2点、輝緑岩・石墨片岩・紅簾絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・方散虫板岩各1点であり、不明は3点を数えた。

3号屋外埋設土器 (第346・350・353図、PL. 128)

Fi-57グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北西46m90cm、19号配石遺構内に構築されている。土器を埋設するピット上面の規模は38×34cm、底面は27×25cm、深さ17cmのほぼ円形を呈し、面積0.06m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。

埋設土器は胴部を欠損した加曾利E3式土器が、逆位状態で出土した。埋設土器の覆土は暗褐色土層であり、残存脂肪分析を実施した。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性がある。

埋設土器の上部からは蓋石が出土している。蓋石は長径26.3cm・短径14.4cm・厚さ3.8cm・重量2,300gの点紋緑泥片岩を使用している。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。またピット上面には埋設土器を囲うように石が配置されている。

4号屋外埋設土器 (第346・351・354図、PL. 87、128)

Fa-55グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東50m20cmの所に位置している。土器を埋設するピット上面の規模は38×37cm、底面は30×27cm、深さ15cmのほぼ円形を呈し、面積0.06m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。

埋設土器は加曾利E3式土器の胴部で逆位状態で埋設されていた。覆土は暗褐色土層であり、残存脂肪分析を実施した。

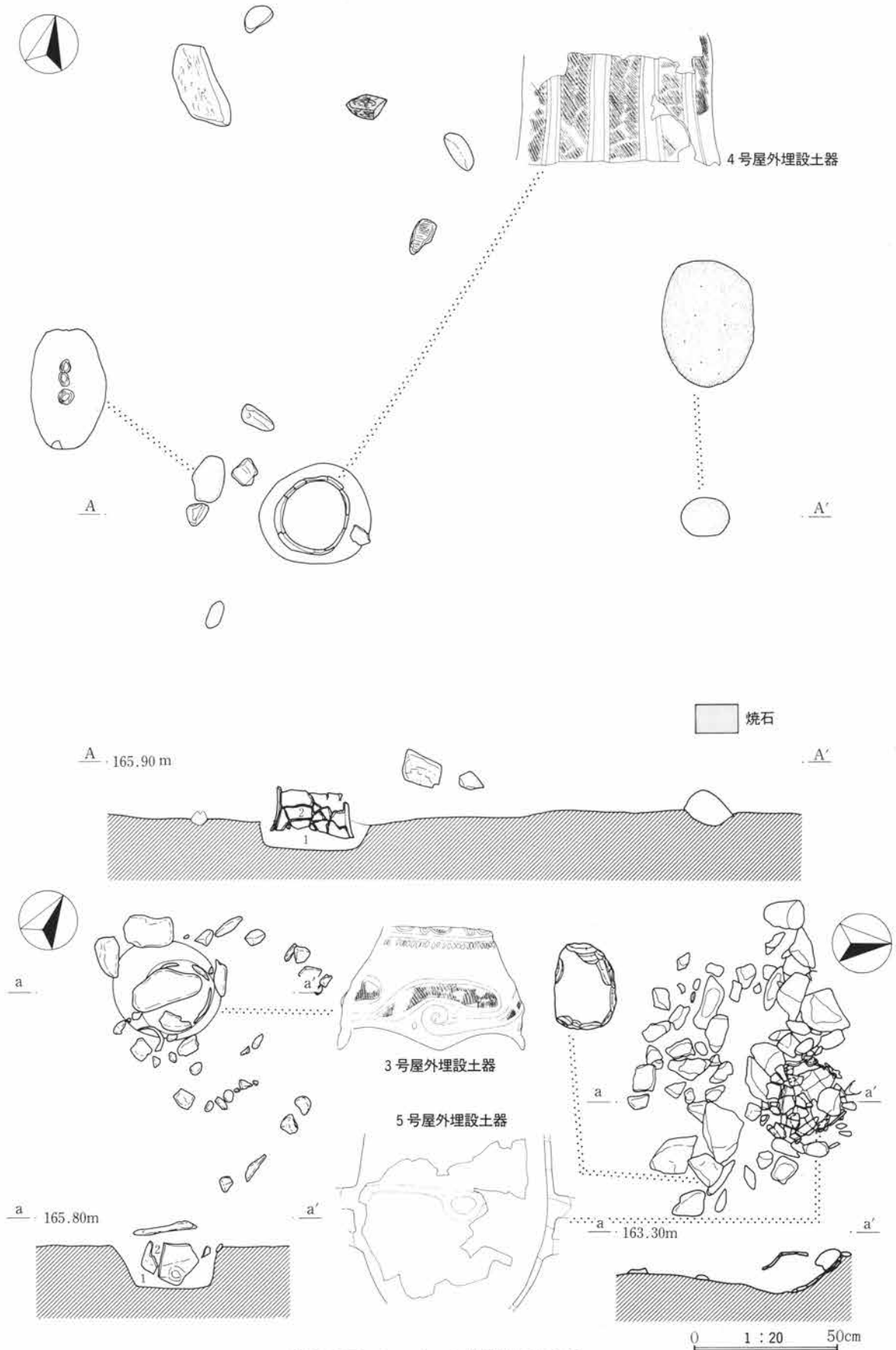
第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はほとんどない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。

ピット周囲には12点の石が配置され、墓標になると思われる丸石が北東135cmの所から出土した。この丸石は長径17.5cm・短径12.9cm・厚さ10.8cm・重量3,100gの安山岩を使用している。また凹石1点、焼石1点が含まれている。石材の種類は4種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩5点、点紋緑泥片岩3点、輝岩2点、斑斨岩1点であり、不明は1点であった。

5号屋外埋設土器 (第346・351・354図、PL. 88、128)

Ej・Ek-64グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東120m80cm、廃棄場所からの出土である。土器を埋設するピット上面の規模は33×32cm、底面は20×20cm、深さ15cmの楕円形を呈し、面積0.07m²である。

埋設土器は加曾利E4式土器で斜位状態の出土であった。また蓋石を伴って出土した。蓋石は長径8.7cm・短径8.4cm・厚さ6.8cm・重量810gの輝岩を使用している。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。周囲からは打製石斧1点を含む67点の石が出土している。石材の種類は9種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩29点、輝岩10点、緑泥片岩7点、珪石4点、点紋緑泥片岩・綠色珪質板岩各2点、絹雲母緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・石墨緑泥片岩各1点であり、不明は10点を数えた。



第346图 3・4・5号屋外埋設土器

6号屋外埋設土器 (第347・351・353・354図、PL. 88、128)

F1-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西北西19m50cm、列石下からの出土である。土器を埋設する土壌上面の規模は78×70cm、底面は75×66cm、深さ10cmのほぼ円形を呈し、面積0.39m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。炭化物粒子を極少量含む。

埋設土器は加曽利E 3式土器の胴部で斜位状態で出土した。環状列石の構築時期を考えるうえで貴重な資料である。また土器内覆土は残存脂肪分析を実施した。土壌上面には環状列石の石が蓋石として配置されている。この蓋石は長径43cm・短径29cm・厚さ19cm・重量44kgで、輝岩を使用している。周辺からは多量の石が出土しているが、これらは環状列石を構成する石である。この中には多孔石・凹石・打製石斧各1点も含まれていた。

7号屋外埋設土器 (第347・351図、PL. 89、128)

Fm-46グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西南西24mの所に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は71×68cm、底面は57×49cm、深さ20cmの楕円形を呈し、面積0.21m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性は少しある。小礫を含む。

埋設土器は加曽利E 3式土器の両耳壺が正位状態で出土した。土器の覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性が少しある。小礫を含む。

土壌周囲には埋設土器を囲うように27点の石が配置されている。石材の種類は10種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩15点、点紋緑泥片岩3点、斑斨岩2点、輝緑岩・輝岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・角閃岩・砂岩・珪石各1点である。

8号屋外埋設土器 (第348・352・354図、PL. 89、128)

Fm-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西31m50cm、1号竪穴住居跡の北東3mの所に位置している。土器を埋設するピット上面の規模は56×53cm、底面は41×34cm、深さ22cmの楕円形を呈し、面積0.09m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性はあまりない。

埋設土器は土器片を利用したもので、蓋石を伴っていた。蓋石は長径13cm・短径7cm・厚さ6cm・重量830gの絹雲母石墨片岩の焼石が使用されていた。蓋石と土器周辺の凹石1点を含め19点の石が出土している。石材の種類は8種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩8点、点紋絹雲母石墨片岩・珪石各2点、輝緑岩・輝岩・緑泥片岩・斑斨岩・石墨緑泥片岩各1点であり、不明は2点である。

9号屋外埋設土器 (第348・351・353・354図、PL. 89、128)

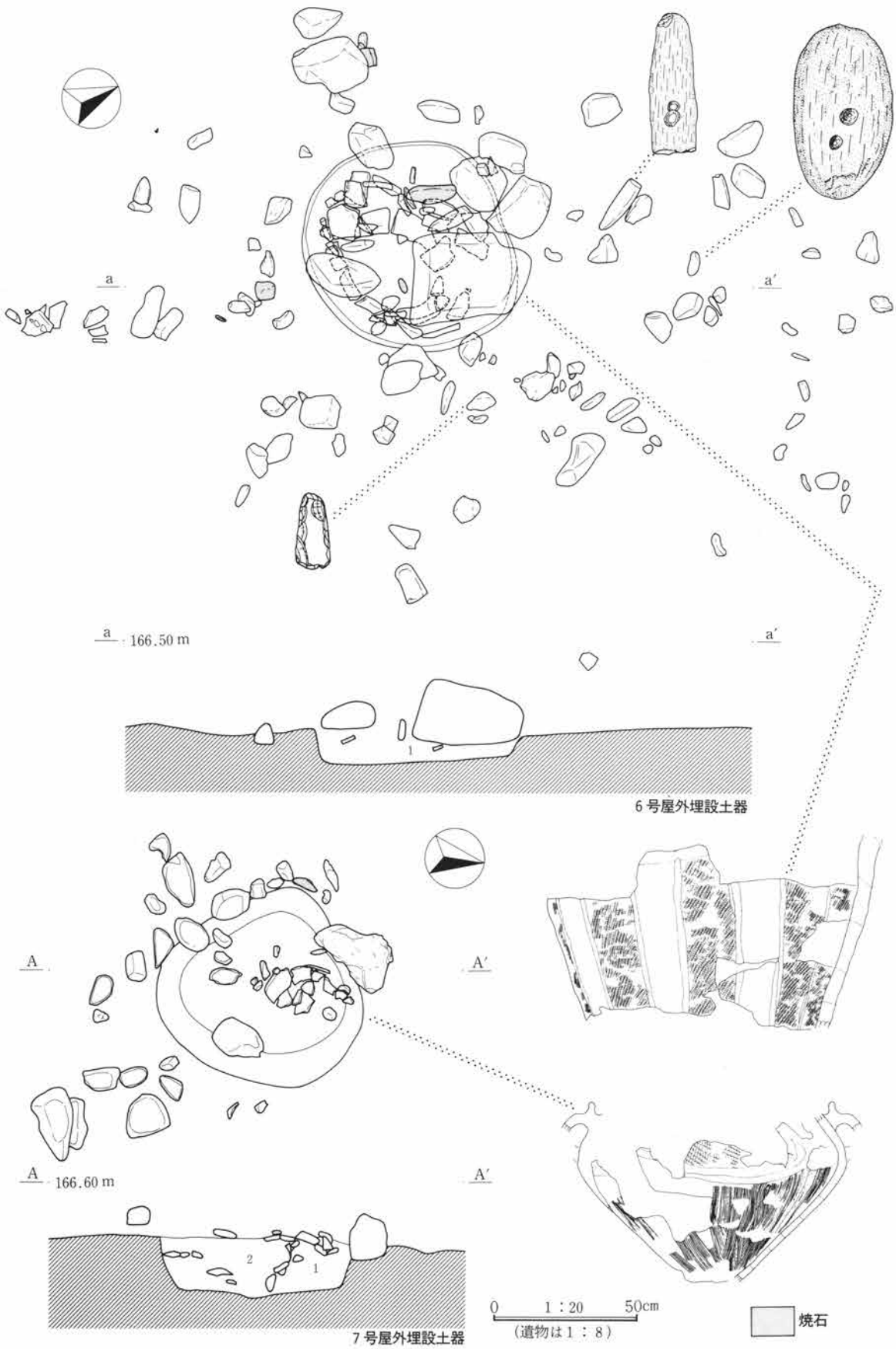
Fq-48・49、Fr-48・49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西47m50cm、26号配石遺構の南5mの所に位置している。埋設ピット上面の規模は41×38cm、底面は18×17cm、深さ20cmのほぼ円形を呈し、面積0.02m²である。覆土は黒褐色土層である。

第1層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。小礫を含む。

埋設土器は口縁部を欠損した加曽利E 3式土器で、正位状態で埋設されていた。土器内覆土は暗褐色土層である。

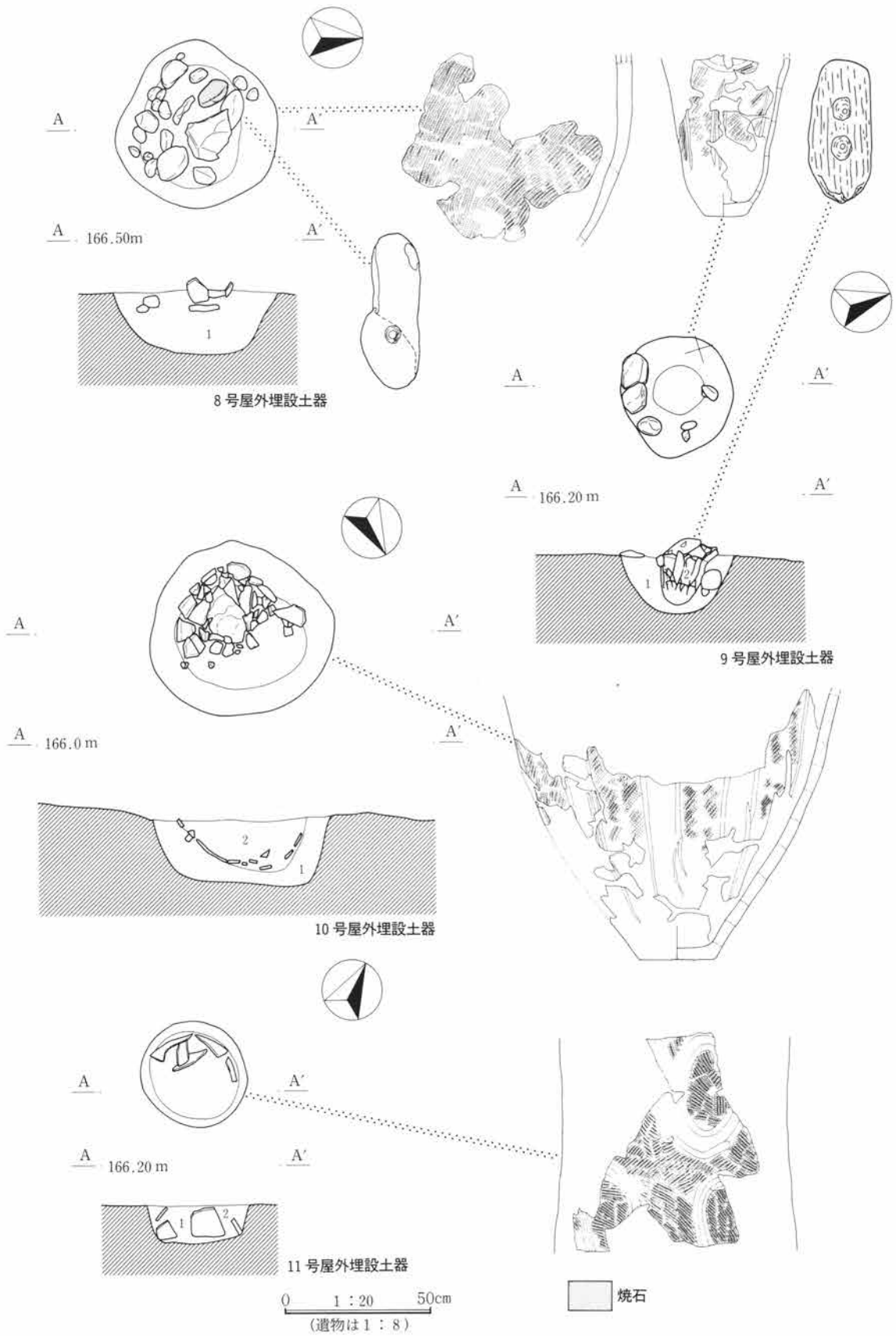
第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。小礫を含む。

土器上には蓋石として凹石が出土した。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。ま

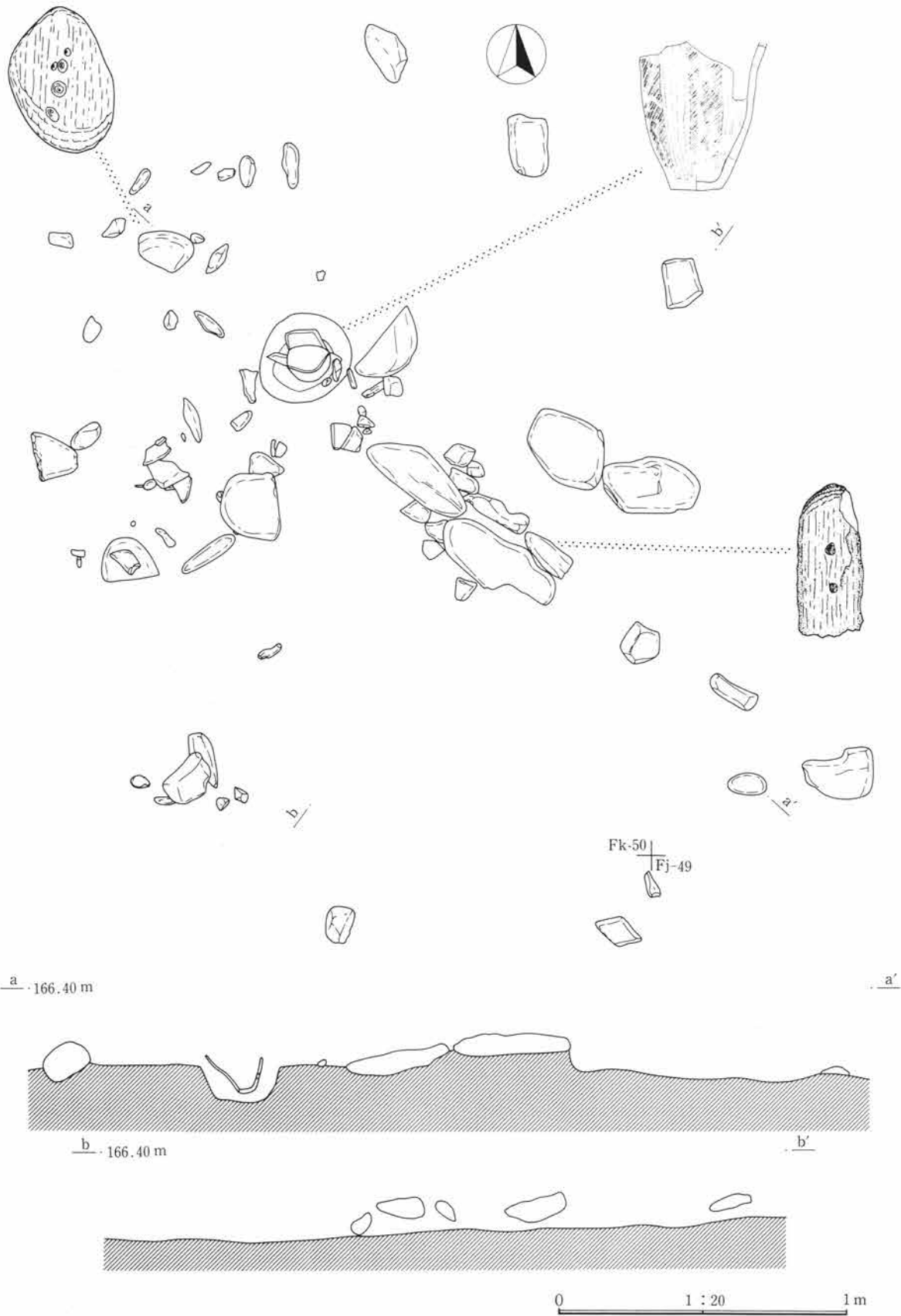


第347図 6・7号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第348図 8・9・10・11号屋外埋設土器



第 349 図 12 号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

た土器の押さえの石が6点出土している。

10号屋外埋設土器 (第348・352図、PL. 89、128)

Go・Gp-44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西139m、2号竪穴住居跡の西16m50cmの所に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は63×59cm、底面は44×35cm、深さ23cmの楕円形を呈し、面積0.12㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く、締まり悪い。粘性はあまりない。小礫を含む。

埋設土器は加曽利E3式土器の胴下半部で、正位状態で埋設されていた。土器内覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 固く締まり粘性はあまりない。炭化物粒子を少量含む。

11号屋外埋設土器 (第348・352図、PL. 89、128)

Fi-51グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北西19m、7号配石遺構の東2m50cmの所に位置している。土器を埋設するピット上面の規模は37×34cm、底面は31×27cm、深さ13cmの円形を呈し、面積0.05㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まりはあまりない。粘性がある。

埋設土器は加曽利E3式土器の胴部で、逆位状態で埋設されていた。土器の覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性もあまりない。

12号屋外埋設土器 (第349・352～354図、PL. 128)

Fj・Fk-50グリッドにかけて検出された。環状列石の北西18m70cm、列石下からの出土である。土器を埋設するピット上面の規模は34×30cm、底面は22×19cm、深さ18cmのほぼ円形を呈し、面積0.03㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。地山との区別は非常に困難であった。おそらくは掘り上げた土で埋め戻したものであろう。人為的埋土である。

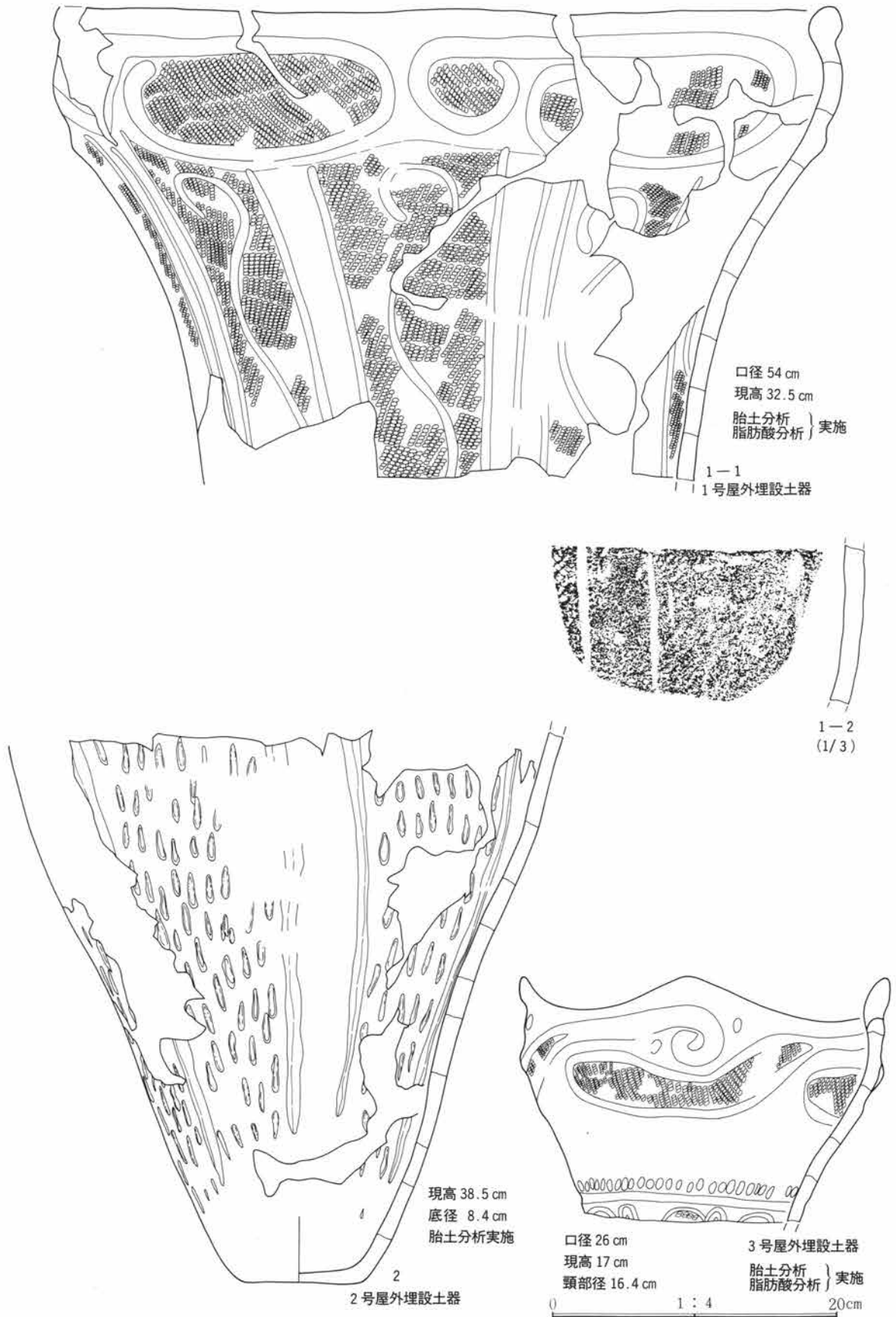
埋設土器は口縁部を欠損した加曽利E3式土器で、北西にやや傾く斜位状態で検出された。土器内部の覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が少しある。炭化物粒子、小礫を少量含む。

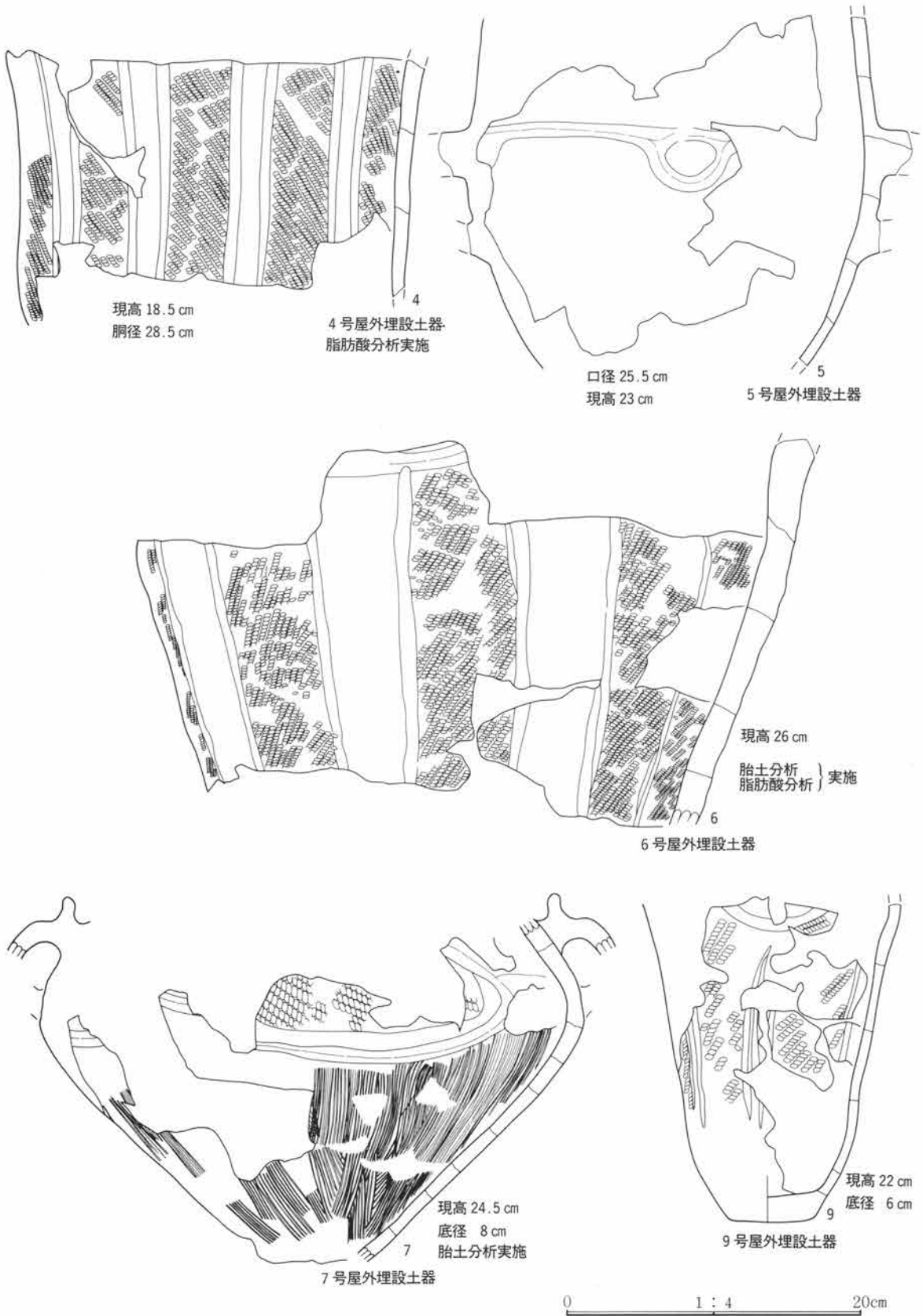
埋設土器周辺からは石が出土しているが、これらは環状列石を構成する石である。このなかには多孔石1点が含まれていた。

屋外埋設土器観察表

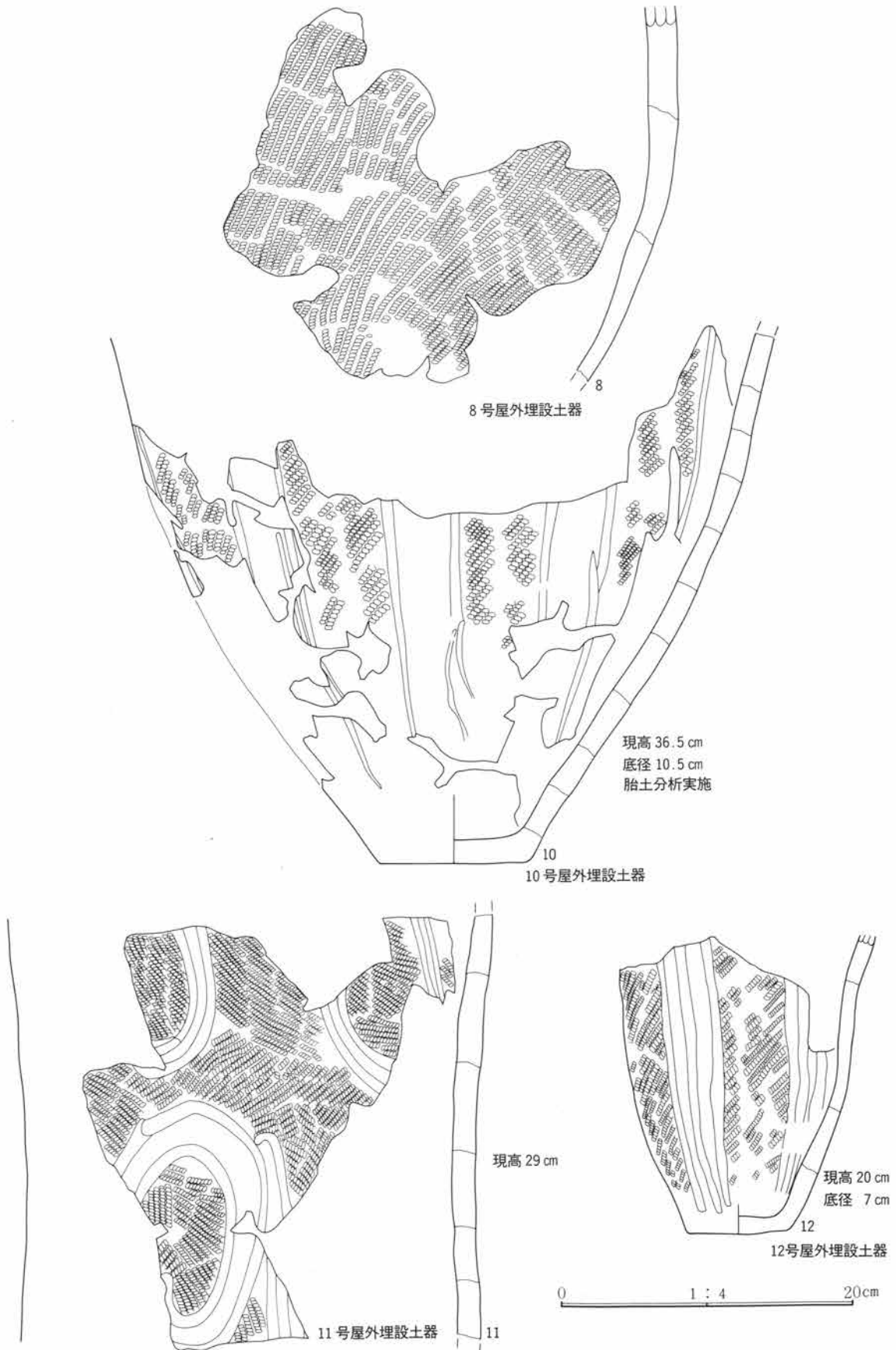
| 図番 PL. | 器種 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調 | 成形・器面調整の特徴 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|----------------|---------|--|---|--|------------------------|
| 350-1-1 128 | 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい橙色 | 胴下半部を意図的欠損。口縁部は内湾し、胴部 中位にくびれを有する。器厚12～22mm。 内面は横方向の調整が行われている。 | 口縁部文様帯は隆帯と巾広沈線の楕円区画 と渦巻文5単位で構成され、区画内はR{ㄗ 横位施文。胴部は2本・3本(1本は上端 が蕨手状)の平行沈線と波状沈線を交互に 垂下。R{ㄗ縦位施文。 | 1号屋外埋 設土器 (逆位状態) |
| 350-1-2 128 | 胴部 片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良③外面 におい黄橙色 内面 におい褐色 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10～12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 | 平行沈線を垂下。縄文はR{ㄗを縦位施文。 | 1号屋外埋 設土器内部 |
| 350-2 128 | 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい褐色 内面 におい橙色 | 口縁部を意図的欠損。器厚7～12mm。内面は横 方向の丁寧な調整。また炭化物が付着している。 | 2本と1本の単位の隆帯を垂下し、胴部を 7区画に区分。区画内は刺突文が施されて いる。 | 2号屋外埋 設土器 (斜位状態) |



第 350 図 1・2・3号屋外埋設土器



第351図 4・5・6・7・9号屋外埋設土器



第 352 図 8・10・11・12号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

屋外埋設土器観察表

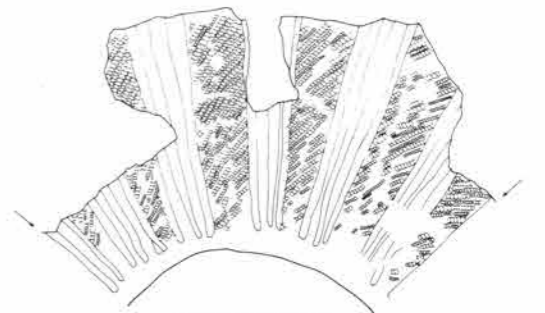
| 図番 PL. | 器種 | ①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調 | 成形・器面調整の特徴 | 文 様(その他) | 出土状況 |
|---------------|----------|---|--|--|---------------------|
| 350-3 128 | 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 褐灰色 内面 におい赤褐色 | 口縁部内面は肥厚し、明瞭な段を有する。胴部は意図的欠損。器厚9~15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 | 口縁部は4個の突起がつく波状口縁。突起下には隆帯と巾広のナデで小渦巻文を施し、渦巻間を隆帯で弧状に連結し、楕円区画文を構成する。区画内はR(┘)を横位施文。胴部括れ部に楕円刺突文を有する沈線を一条めぐらし、口縁部文様帯との間に無文帯を形成する。 | 3号屋外埋設土器 (逆位状態) |
| 351-4 128 | 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 ③外面 におい褐色 内面 におい褐色 | 深鉢形土器の胴部片。両端を輪づみ部分から意図的欠損。内面は横と縦方向の調整が行われている。 | 2本単位の平行沈線を垂下。縄文はL(┘)を縦位施文。 | 4号屋外埋設土器 (逆位状態) |
| 351-5 128 | 浅鉢 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 ③外面 におい褐色 内面 におい橙色 | 口縁部の一部と底部を意図的欠損。口縁部はやや内傾する。器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われているが、荒れている。 | 口縁部は無文で、肩部に隆帯による円形区画文を施している。橋状把手が付されている。 | 5号屋外埋設土器 (斜位状態) |
| 351-6 128 | 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい橙色 | 深鉢形土器の胴部片。口縁部と胴下半部を意図的欠損。器厚18~20mm。内面は横方向の調整が行われている。 | 2本単位の沈線を9単位垂下。 区画内はR(┘)を縦位施文。 | 6号屋外埋設土器 (斜位状態) |
| 351-7 128 | 浅鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい橙色 内面 におい黄褐色 | 口縁部と底部を欠損。残存胴部片。胴部上半に強い張りを有する。器厚7~12mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 | 胴部上半には隆帯とナデによる楕円区画文が施され、区画内にはR(┘)を横位施文。また橋状把手が付されている。胴下半は7本単位の条線を縦位施文。 | 7号屋外埋設土器 (正位状態) |
| 352-8 128 | 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 橙色 内面 におい褐色 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~21mm。 内面は横方向の調整が行われている。 | R(┘)を縦位施文。 土器面は柔軟で押圧が強い。 | 8号屋外埋設土器 |
| 351-9 128 | 小型 深鉢 | ①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 灰褐色 | 小型深鉢形土器の口縁部を意図的欠損。器厚6~18mm。内面は粗い調整で、炭化物が一部付着している。 | 口縁部文様帯は巾広の沈線で楕円区画文を施し、区画内縄文不明。胴部は2本単位の平行沈線を垂下。縄文はR(┘) (粗い)を縦位施文。 | 9号屋外埋設土器 (正位状態) |
| 352-10 128 | 深鉢 | ①中粒の砂を混入 ②良 ③外面 灰褐色 内面 におい橙色 | 胴部がかなり膨らむ大型の深鉢形土器の胴下半部。器厚13~17mm。内面は横方向の調整が行われている。 | 2本単位の平行沈線を垂下。区画内はR(┘)を縦位施文。 | 10号屋外埋設土器 (正位状態) |
| 352-11 128 | 深鉢 | ①粗粒の砂を混入 ②良 ③外面 橙色 内面 橙色 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~18mm。内面は横方向の調整が行われているが、荒れている。 炭化物付着。 | L(┘) (太い条と細い条) 縦位施文後(一部は横方向の施文)、沈線による楕円区画。土器面は柔軟で押圧が強い。 | 11号屋外埋設土器 |
| 352-12 128 | 深鉢 | ①中粒の砂を混入 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色 | 胴部上半~口縁部を意図的欠損。胴部中位で括れを有する。器厚9~13mm。内面は丁寧な調整。 炭化物付着。 | 3本単位の平行沈線を垂下し、6区画に区分。区画内はR(┘) (太い条と細い条)を縦位施文。土器面は柔軟で押圧が強い。 | 12号屋外埋設土器 (斜位状態) |



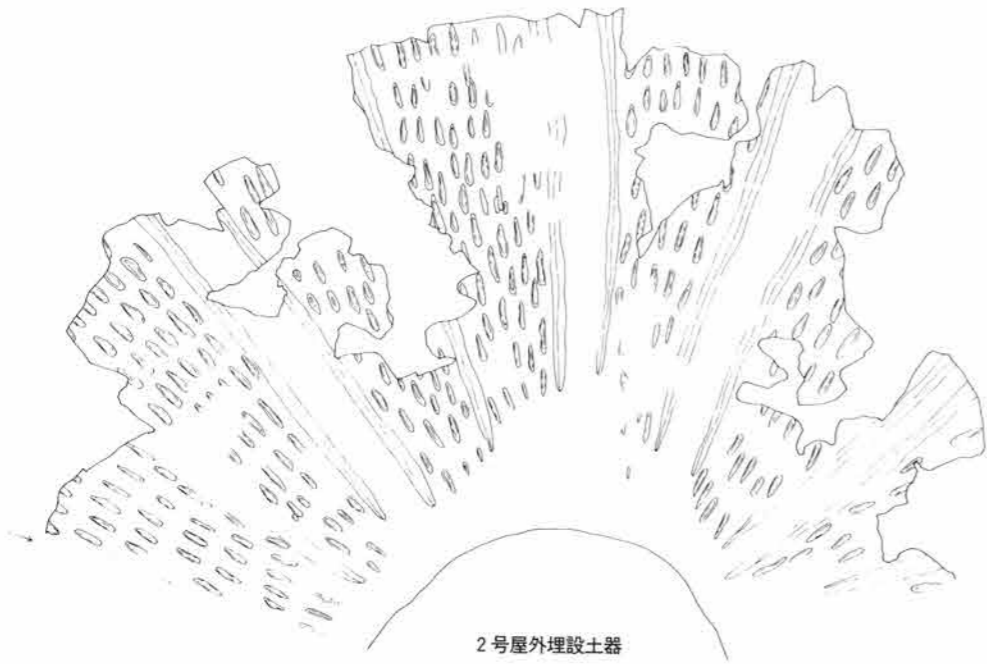
1号屋外埋設土器



9号屋外埋設土器



12号屋外埋設土器



2号屋外埋設土器



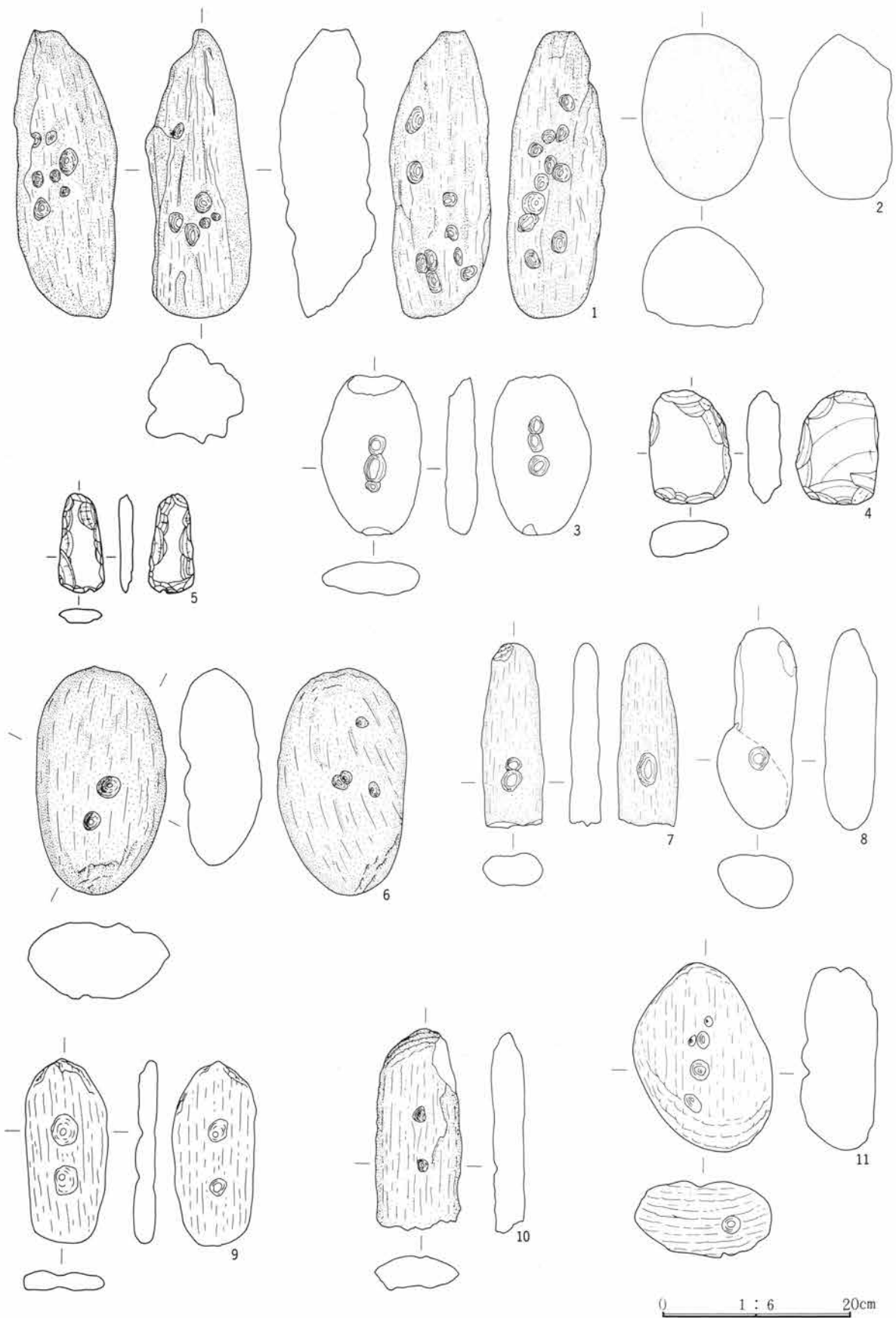
3号屋外埋設土器



6号屋外埋設土器

0 1 : 6 20cm

第 353 图 屋外埋設土器展開図 (1・2・3・6・9・12号)



第 354 図 屋外埋設土器出土石器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

屋外埋設土器石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|------|------|-----------|--------------|------|------|---------|---|-----------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 354-1 128 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 30 | 10.2 | 9.7 | 3,900 | 全面に凹み。数は33個で、最大は長23mm、短23mm、深12mm。最小は長11mm、短11mm、深6mmで、平均は長19mm、短14mm、深7mm。 | 2号屋外埋設土器 |
| 354-2 128 | 丸石 | 完形 | 安山岩 | 17.5 | 12.9 | 10.8 | 3,100 | 丸い石。 | 4号屋外埋設土器 |
| 354-3 128 | 凹石 | 一部欠損 | 輝岩 | (16.7) | 10.7 | 3.5 | (1,000) | 両面に6個の凹み。最大は長28mm、短28mm、深1mm。最小は長15mm、短11mm、深0.5mmで、平均は長20mm、短20mm、深0.8mm。 | 4号屋外埋設土器 |
| 354-4 128 | 打製石斧 | 完形 | 輝岩 | 11.9 | 8.8 | 3.7 | 640 | バチ(IIb)。 | 5号屋外埋設土器 |
| 354-5 128 | 打製石斧 | 完形 | 輝緑岩 | 10.4 | 4.9 | 1.5 | 120 | バチ(IIb)。両面の周辺のみ調整加工を施す。 | 6号屋外埋設土器 |
| 354-6 128 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 22.4 | 16.4 | 9.2 | 3,600 | 両面に凹み。数は6個で、最大は長23mm、短22mm、深7mm。最小は長12mm、短10mm、深3mmで、平均は長17mm、短14mm、深5mm。焼けている。 | 6号屋外埋設土器 |
| 354-7 128 | 凹石 | ㄨ | 点紋緑泥片岩 | (22.3) | 6.7 | 3.4 | (720) | 両面に凹み。数は3個で、最大は長35mm、短21mm、深1mm。最小は長17mm、短13mm、深1mmで、平均は長25mm、短17mm、深1mm。 | 6号屋外埋設土器 |
| 354-8 128 | 凹石 | 完形 | 輝岩 | 21.3 | 8.2 | 5.4 | 1,500 | 片面に凹み1個。長径23mm、短径21mm、深さ1mm。焼けている。 | 8号屋外埋設土器 |
| 354-9 128 | 凹石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 19.2 | 8.8 | 2.4 | 550 | 両面に凹み。数は4個で、最大は長33mm、短29mm、深6mm。最小は長19mm、短17mm、深1mmで、平均は長27mm、短23mm、深5mm。 | 9号屋外埋設土器 |
| 354-10 128 | 多孔石 | ㄨ | 点紋絹雲母石墨片岩 | (21.0) | 9.1 | 4.0 | (1,000) | 片面に凹み。数は2個で大きい凹みは長15mm、短13mm、深1mm。小さい凹みは長13mm、短10mm、深1mm。 | 12号屋外埋設土器 |
| 354-11 128 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 19.8 | 14.7 | 8.7 | 3,200 | 6個の凹みがある。最大は長22mm、短21mm、深9mm。最小は長12mm、短7mm、深3mmで、平均は長17mm、短13mm、深5mm。 | 12号屋外埋設土器 |

7 配石墓・土墳墓・土坑

土墳は22基検出された。このうちⅠ区からは10基、Ⅱ区からは12基である。土墳上面に石を配置した、いわゆる配石（土墳）墓は9基、上面に石を配置しない単なる土墳墓は9基、墓として認定困難な土坑は4基である。22基の土墳のうち7基については、残存脂肪分析を実施した。

配石（土墳）墓 1・3・7・8・11・12・18・19・22号土墳

土 墳 墓 2・4・6・9・10・13・14・15・20号土墳

土 坑 5・16・17・21号土墳

残存脂肪分析を実施した土墳 2・3・4・5・6・9・10号土墳（4章 自然科学的分析〔1〕参照）

1号土墳（第355図、PL. 90）

En-52グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から東北東72m50cm、1号配石遺構の東南14m20cmの所に位置している。上面の規模は108×105cm、底面は79×75cm、深さ49cmのほぼ円形を呈するが、その一部は耕作溝によって壊されていた。底面はほぼ平坦であり、面積約0.5m²である。覆土は暗褐色土層であり、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。

土墳上面の石は墓標になるものと思われる。焼石3点を含む大小35個の石が配置されていた。石材の種類は13種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩11点、輝岩3点、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・砂岩各2点、点紋緑泥片岩・輝緑岩・チャート・緑簾緑泥片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・緑色珪質板岩各1点であり、不明は6点を数えた。

2号土墳（第355図、PL. 90）

Fa・Fb-53グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東46m80cm、14号配石遺構の南西に近接している。上面の規模は70×51cm、底面は42×31cm、深さ25cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約0.1m²である。覆土は5層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を含む。

第2層 茶褐色土層 固く締まり粘性はあまりない。黄褐色粘質土粒子を多量に含む。

第3層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子・同ブロックを多量に含む。

第4層 暗褐色土層 固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を含む。

第5層 黄褐色土層 固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子・同ブロックを中心とした層。

当土墳は現状よりもさらに上面から確認されていた。土墳中央から検出されている石（絹雲母石墨片岩：長径29.8cm・短径16.3cm・厚さ9.4cm・重量6.1kg）は、本来覆土中であつたもので墓標とはなり得ない。抱石葬と考えられるものである。

なお、当土墳は残存脂肪分析を実施している。

3号土墳（第355・364図、PL. 90・91、129）

Et・Fa-51グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東北東40m80cm、4号土墳の西に接して構築されている。上面の規模は100×95cm、底面は78×75cm、深さ35cmのほぼ円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約0.5m²である。覆土は暗褐色土層で統一され、縄文時代中期土器片1点が出土している。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。

土壌上面からは、墓標になると考えられる多孔石3点と焼石3点を含む石10点が出土している。石材の種類は5種類で、石材別点数は点紋緑泥片岩4点、絹雲母石墨片岩3点、絹雲母緑泥片岩・点紋絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点である。

4号土壌と接して構築されており、また覆土もほとんど同一であることから、ほぼ同時期構築と思われる。なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

4号土壌 (第356図、PL. 90)

Et-51グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から東北東42m10cm、3号土壌の東に接して構築されている。上面の規模は124×105cm、底面は103×95cm、深さ39cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.8㎡である。覆土は2層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。

第2層 黄褐色土層 固く締まり粘性が少しある。第1層よりも締まり良い。

3号土壌とほぼ接して検出された。覆土は3号土壌のそれとほぼ同一であり、同時期の構築と考えられる。ただし当土壌上には墓標になる石は検出されていない。また規模も大きい。

なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

5号土壌 (第356図、PL. 91)

Eo-56グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東75m20cm、1号配石遺構の北北東11mの所に位置している。上面の規模は100×85cm、底面は95×75cm、深さ5～20cmの楕円形を呈する。底面は東にむかって深くなり、面積約0.6㎡である。覆土は黒褐色土層であり、縄文土器の出土はない。

第1層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。炭化物粒子、黄褐色粘質土ブロックを多量に含。

土壌上面からは焼石6点を含む59点の石が出土している。石材の種類は7種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩36点、輝岩・緑泥片岩各4点、点紋緑泥片岩2点、輝緑岩・絹雲母緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点であり、不明は10点を数えた。

当土壌は確認面から底面までが浅い。また覆土中に炭化物粒子が多量に認められることから、墓壇と考えるよりは別な用途を考えたほうが良いかもしれない。

なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

6号土壌 (第356図、PL. 92)

Es・Et-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東北東44m30cm、4号土壌の東南4m50cmの所に位置している。上面の規模は80×72cm、底面は61×54cm、深さ15cmの楕円形を呈する。底面はやや皿状を呈し、面積約0.2㎡である。覆土は2層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まるが、粘性はあまりない。黄褐色土粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締まるが粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

当土壌は他土壌と比較して小規模である。覆土は残存脂肪分析を実施した。

7号土壌 (第356・364図、PL. 129)

Fi-56グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北西44m30cm、3号屋外埋設土器の南東150cmの所に位置している。上面の規模は129×81cm、底面は105×62cm、深さ15cmの長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.5㎡である。覆土は暗褐色土層であり、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性がある。

土壌上面からは、墓標となる丸石1点と焼石4点を含む46点の石が配置されていた。石材の種類は16種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩11点、点紋緑泥片岩5点、砂岩・珪岩各3点、点紋絹雲母石墨片岩・輝岩・絹雲母緑泥石墨片岩・緑泥片岩・珪石各2点、チャート・石墨緑泥片岩・安山岩・石墨絹雲母片岩・点紋石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩各1点であり、不明は7点を数えた。

8号土壌 (第357・363・364図、PL. 92、129)

Fj-50グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西18m、列石上に位置している。環状列石を構成する配石墓である。上面の規模は197×65cm、底面は170×40cm、深さ18cmの長方形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.6m²である。覆土は3層に分かれ、縄文土器片4点が出土している。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良くない。粘性もあまりない。小石を多量に含む。

第2層 黄褐色粘質土層 固く締まり粘性はほとんどない（人為的埋土）。

第3層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。

土壌上には墓標となる倒れている石（点紋緑泥片岩：長径49.7cm・短径22.7cm・厚さ8.2cm・重量14.7kg）と、ほぼ全面に小石が多量に配置されていた。小石を除いたやや大きな石は焼石2点を含む41点で、16種類の石材が確認された。石材別点数は絹雲母石墨片岩13点、輝岩・点紋石墨緑泥片岩各3点、点紋緑泥片岩・輝緑岩・緑泥片岩・チャート・点紋絹雲母石墨緑泥片岩各2点、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩・斑斨岩・石墨絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・緑色珪質板岩・硬砂岩・珪石各1点であり、不明は4点を数えた。

9号土壌 (第357・363図、PL. 93、129)

Er・Es-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東北東49m20cm、6号土壌の東5m20cmの所に位置している。上面の規模は128×95cm、底面は91×51cm、深さ28cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約0.4m²である。覆土は2層に分かれ、縄文土器片2点が出土している。

第1層 暗褐色土層 6号土壌の第1層と同じ。

第2層 黄褐色土層 固く締まり粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に、炭化物粒子を極少量含む。

なお、当土壌は残存脂肪分析を実施している。

10号土壌 (第358図、PL. 93)

Fa-51グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東38m20cm、3号土壌の西北西3m30cmの所に位置している。上面の規模は103×98cm、底面は91×78cm、深さ18cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.5m²である。覆土は2層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性はあまりない。黄褐色粘質土粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

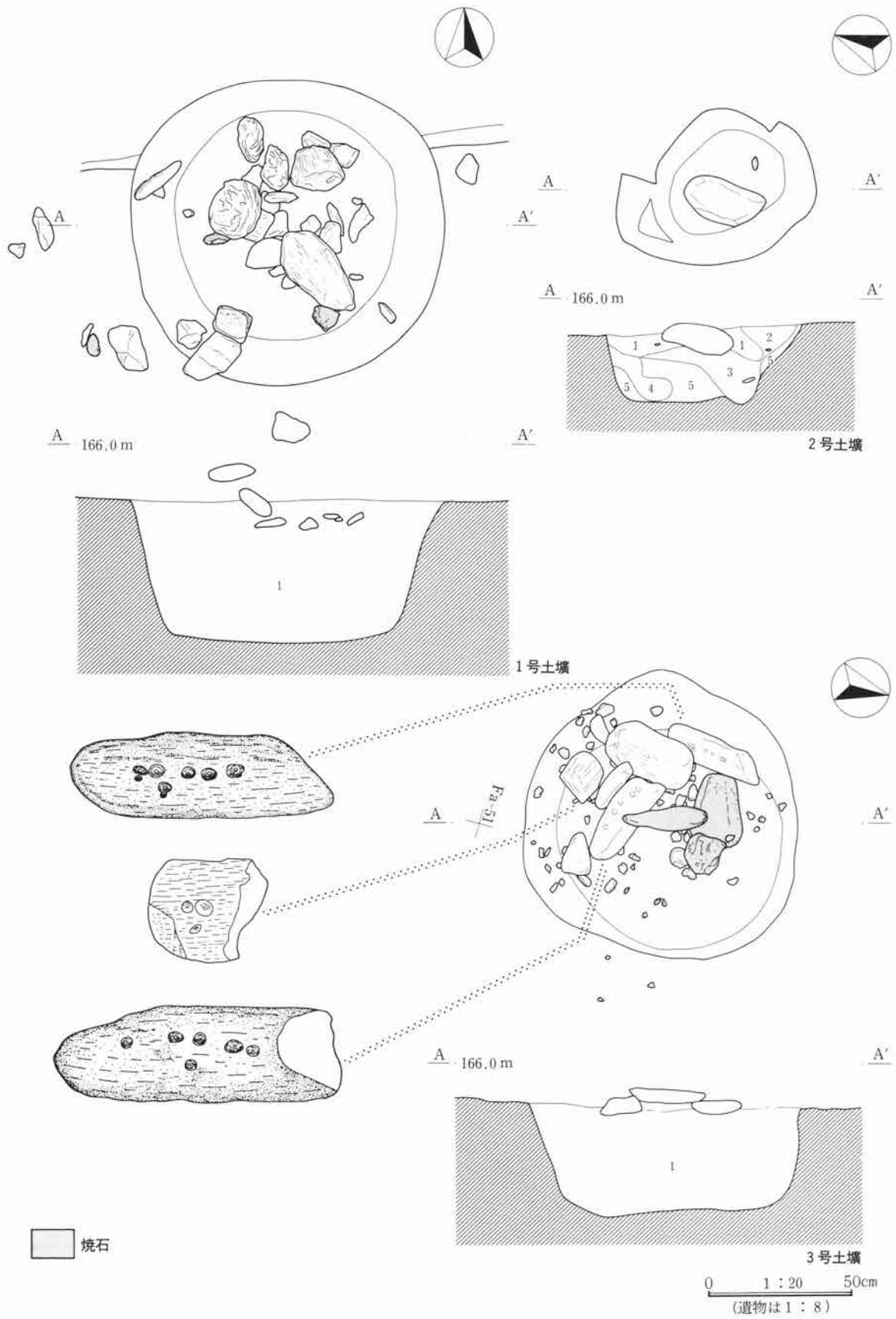
11号土壌 (第358図、PL. 93)

Fo-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西北西34m70cm、12号土壌の東5mの所に位置している。上面の規模は74×70cm、底面は49×47cm、深さ33cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.2m²である。覆土は3層に分かれ、縄文土器の出土はない。

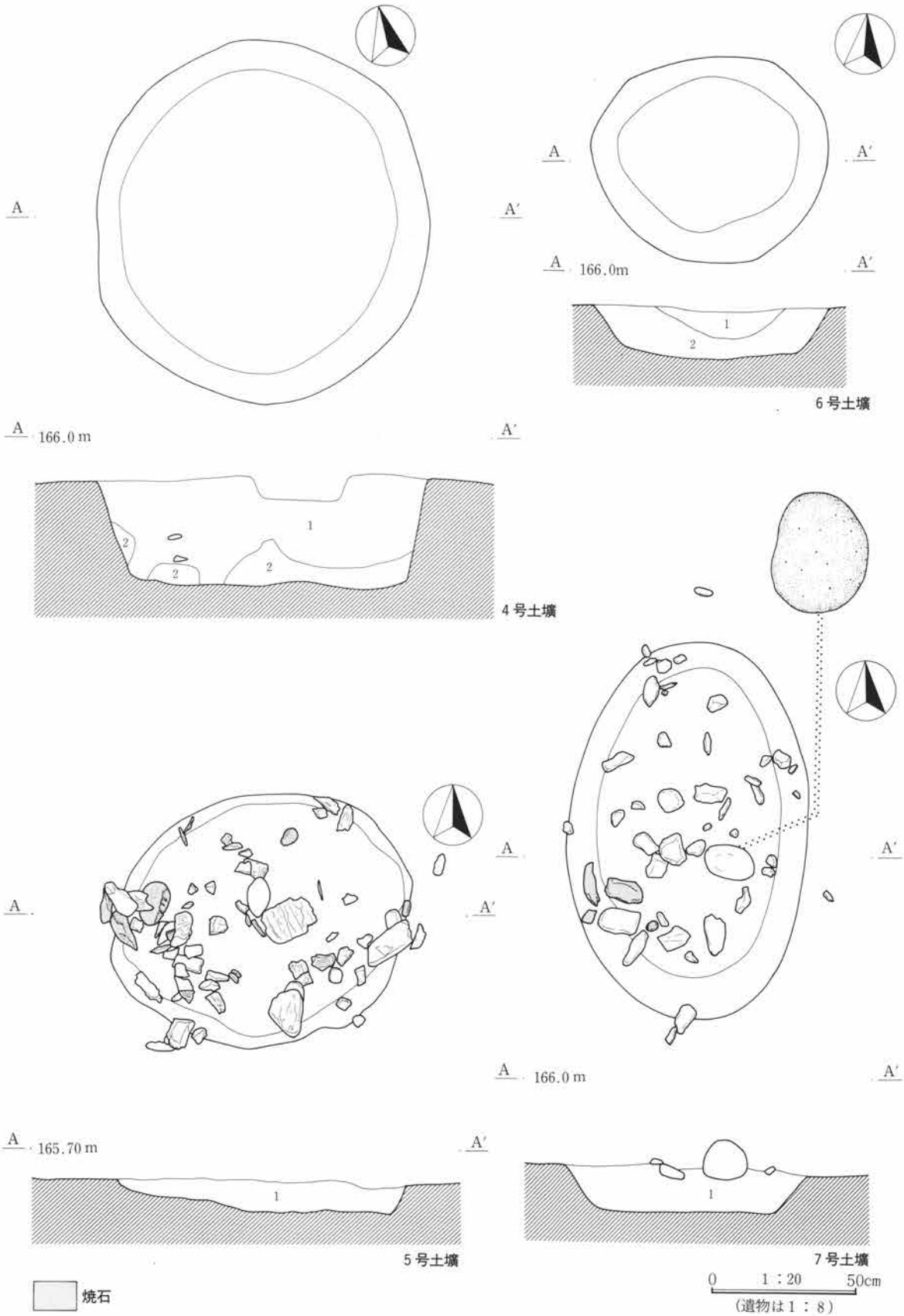
第1層 暗褐色土層 やや固く締まるが、粘性はあまりない。

第2層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性がある。

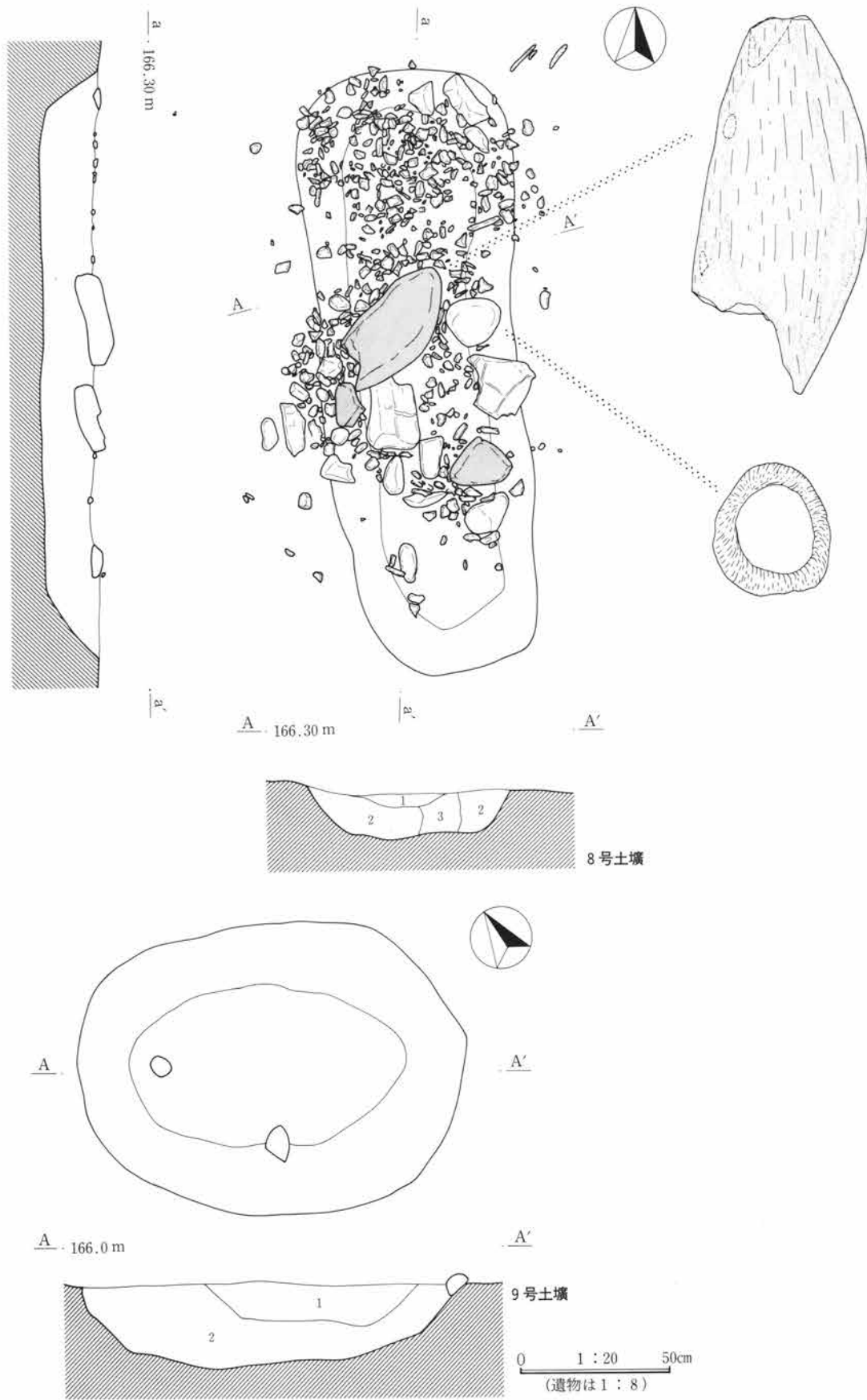
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



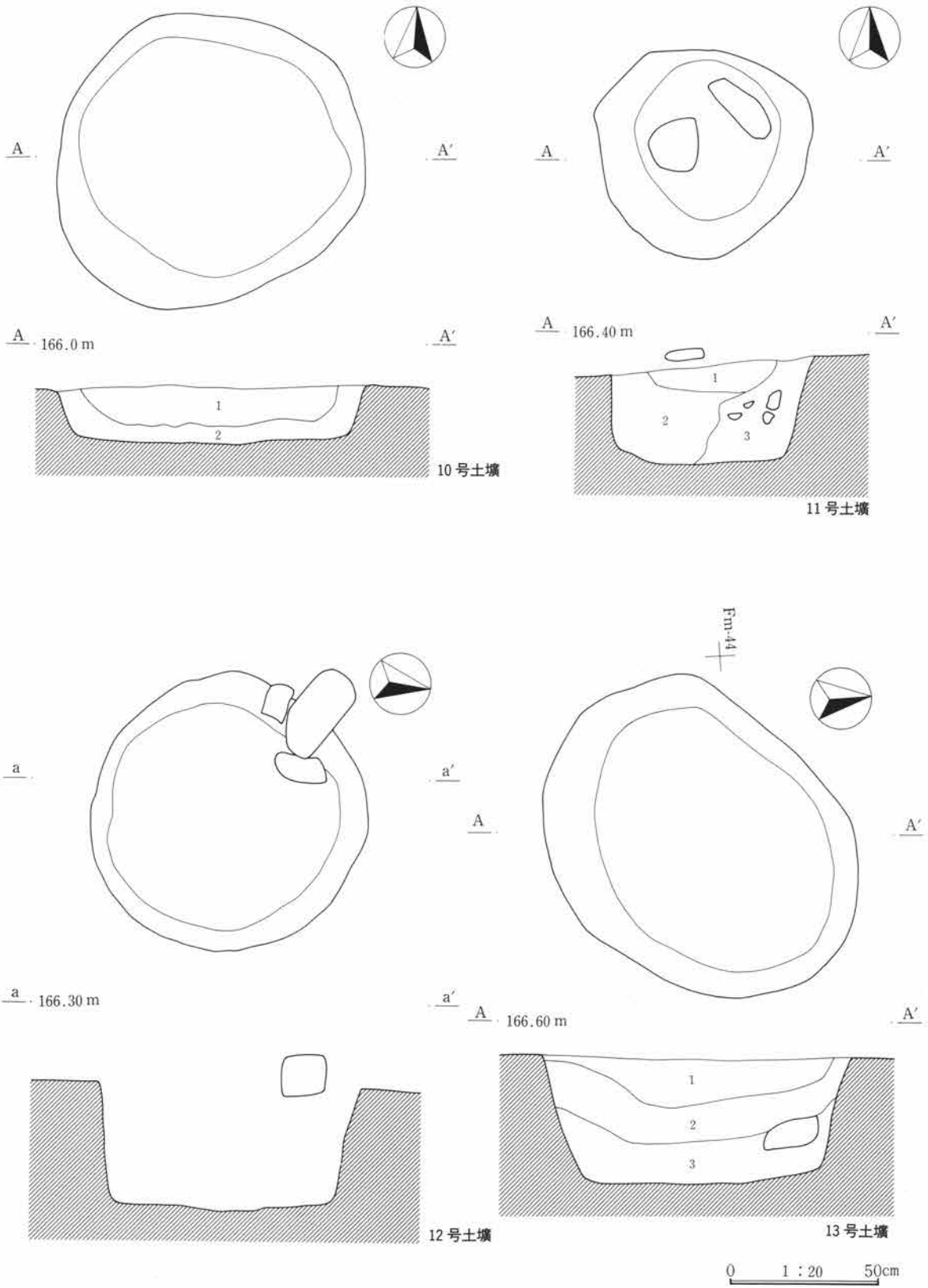
第355図 土坑(1・2・3号)



第356図 土坑(4・5・6・7号)

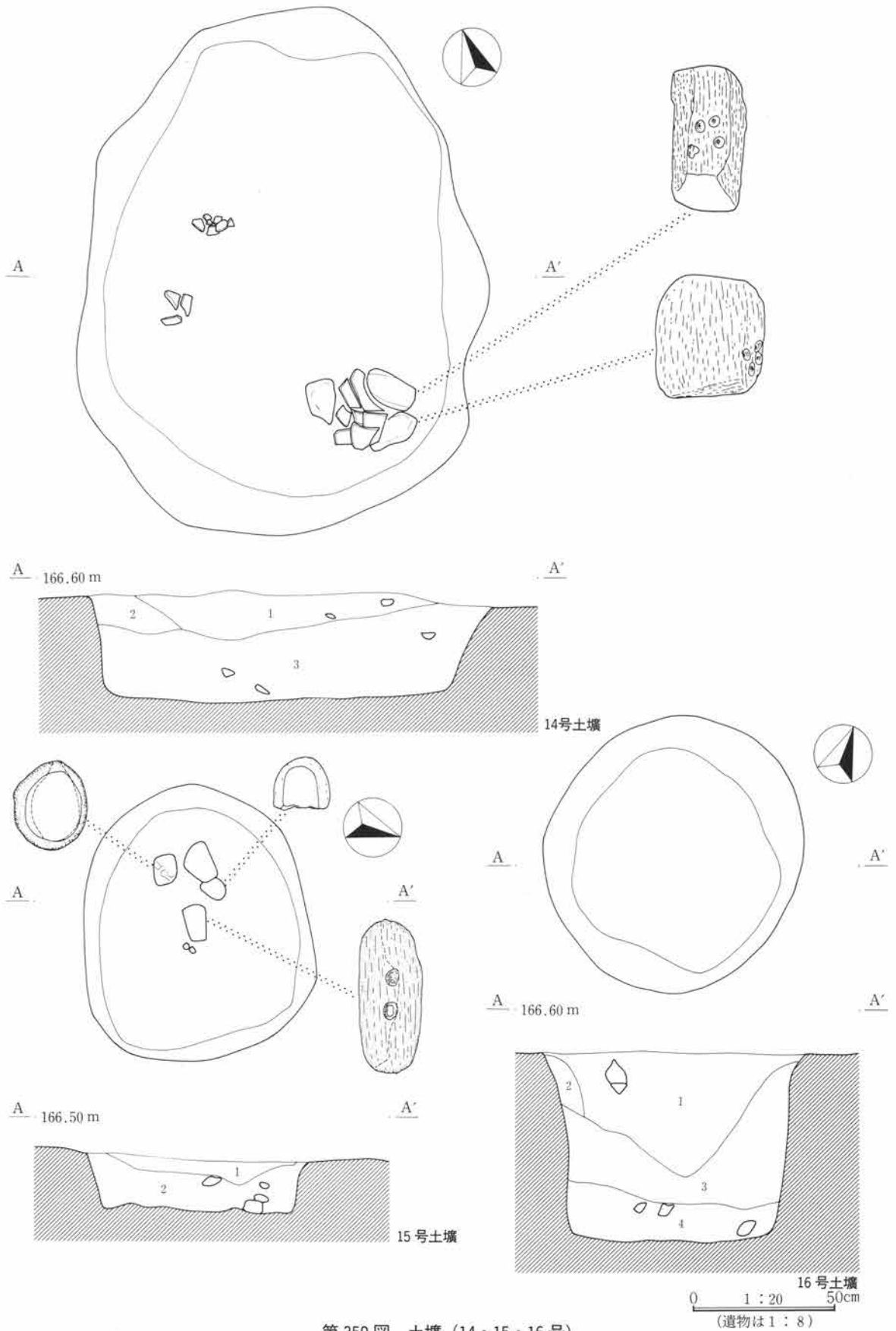


第357図 土坑(8・9号)

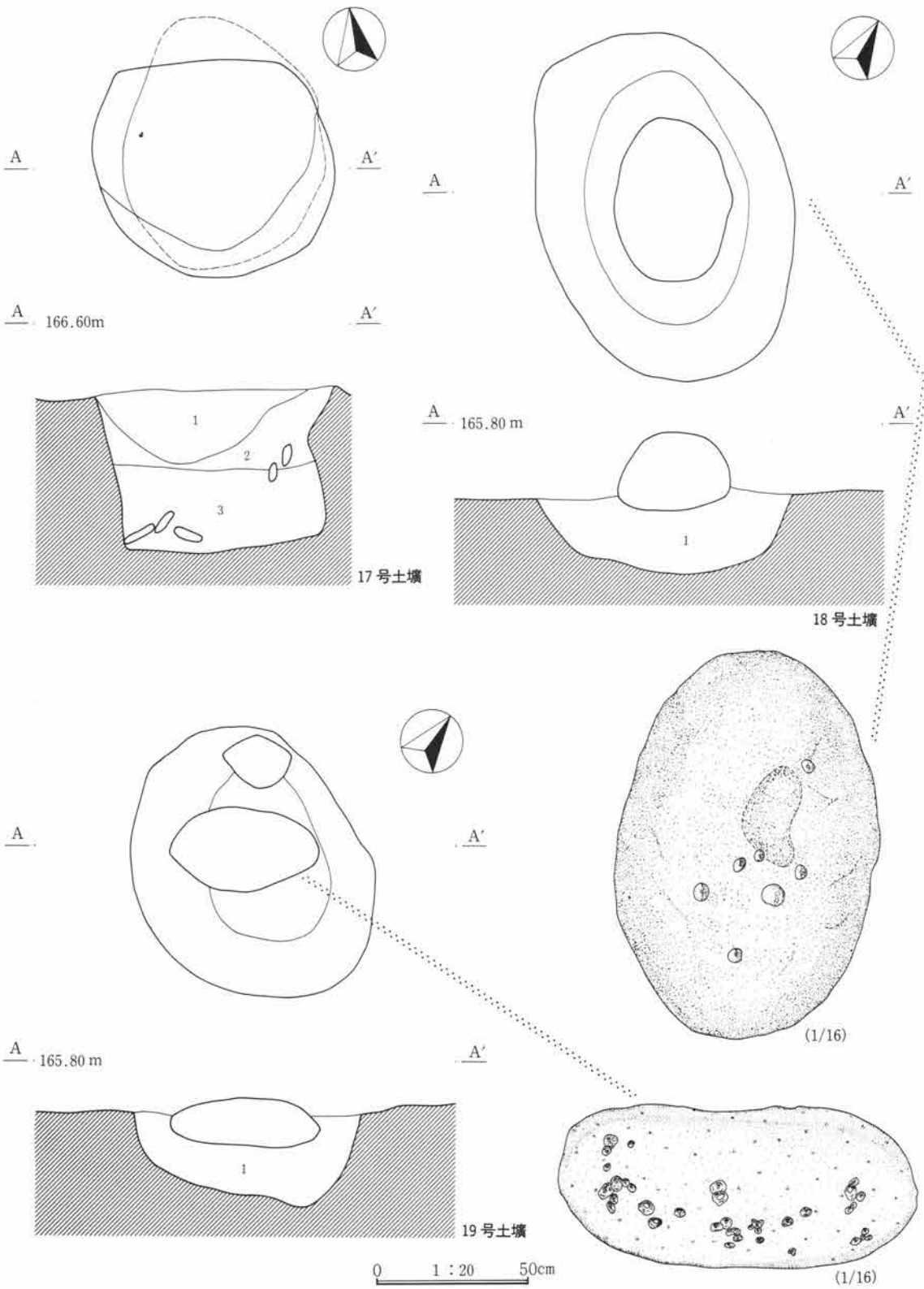


第358图 土坑 (10・11・12・13号)

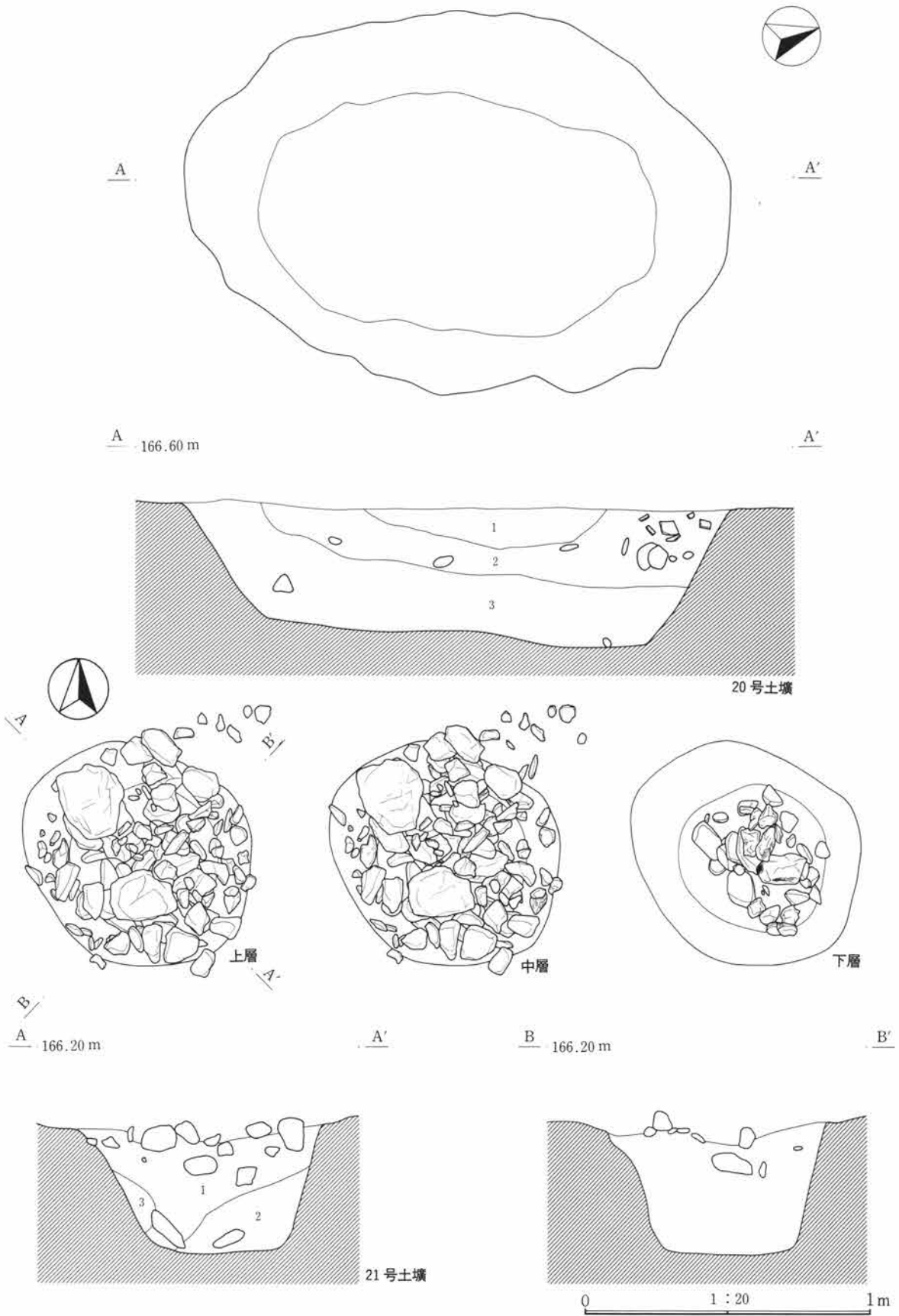
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



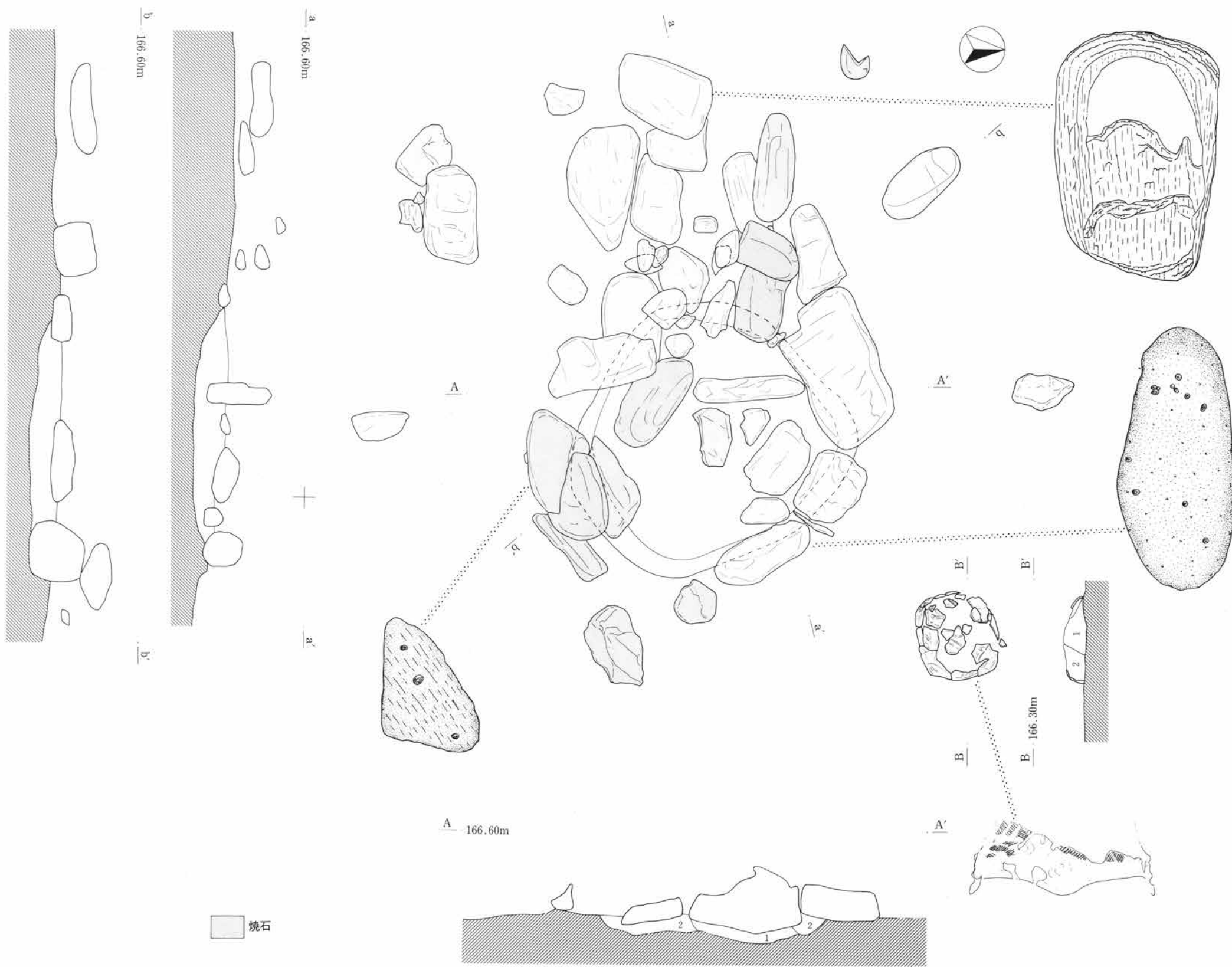
第359図 土坑 (14・15・16号)



第360图 土坑 (17・18・19号)



第361図 20・21号土壌



烧石

0 1:20 1m
(遺物は1:8)

第362図 22号土坑

第3層 茶褐色土層 固く締まり粘性が少しある。小礫を混入。

土壌上面に2個の石が配置されている。墓標となるものであろうか。

12号土墳 (第358図、PL. 93)

Fp-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西北西39m70cm、11号土墳の西5mの所に位置している。上面の規模は93×91cm、底面は75×73cm、深さ40cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.4㎡である。覆土は3層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。第1層より暗い色調である。

第3層 黄褐色砂質土層 粘性はない。小礫を多量に混入。

土壌上面には墓標1点とその押さえの石2点が出土している。墓標の石材は絹雲母石墨片岩、他は輝岩と点紋絹雲母緑泥石墨片岩である。

13号土墳 (第358・363図、PL. 93、129)

F1-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西28m70cm、17号土墳の東に接して構築されている。上面の規模は117×90cm、底面は96×70cm、深さ42cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.5㎡である。覆土は3層に分かれ、縄文土器片17点が出土している。

第1層 茶褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性があり、小礫を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。小礫を含む。

第3層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。小礫を含む。

土壌上面からややまとまって土器片が出土している。

14号土墳 (第359・363～365図、PL. 94、129)

F1・Fm-43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西31m30cm、15号土墳の南東2mの所に位置している。上面の規模は183×142cm、底面は150×120cm、深さ38cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約1.5㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。小礫を混入。

第2層 黄褐色砂礫土層 壁の崩れ。

第3層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。小礫を多量に含む。

覆土からは縄文土器片16点と多孔石2点が出土している。石材はいずれも絹雲母石墨片岩である。

15号土墳 (第359・363・365図、PL. 94、129)

Fm-43グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から南西31m30cm、17号土墳の南南西2mの所に位置している。上面の規模は145×80cm、底面は80×70cm、深さ18cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約0.5㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まりが悪い。粘性があり、小礫を含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。小礫を含む。

覆土からは縄文土器片2点と凹石1点、磨石2点が出土している。

16号土墳 (第359図、PL. 94)

F1-44グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から南西26m80cm、17号土墳の北東3mの所に位置している。上面の規模は96×88cm、底面は71×70cm、深さ65cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.4㎡である。覆土は4層に分かれた。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が少しある。小礫を含む。

第2層 黄褐色砂質土層 壁の崩れ。

第3層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性が非常にある。黄褐色砂質土、小礫を混入。

第4層 黄褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。小礫を含む。

17号土壌 (第360図、PL. 94)

Fm-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西29m70cm、13号土壌に接して構築されている。上面の規模は83×75cm、底面は76×63cm、深さ52cmのほぼ円形を呈し、断面はやや袋状である。底面はやや凹凸があり、面積約0.3m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締まり悪いが、粘性はある。小礫を混入。

第2層 黄褐色土層 やわらかくて締まり悪いが、粘性はある。黄褐色砂質土を含む。

第3層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。礫を含む。

18号土壌 (第360・365図、PL. 94、129)

Gf-47グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西89m40cm、19号土壌の西南西5mの所に位置している。上面の規模は115×84cm、底面は82×54cm、深さ25cmの楕円形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約0.3m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり、粘性が非常にある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。

土壌上面には砂岩の多孔石(長径50.3cm・短径34.3cm・厚さ25cm・重量56.5kg)が出土している。墓標になるものと思われる。

19号土壌 (第360・363・365図、PL. 95、130)

Ge-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西85m20cm、18号土壌の東北東5mの所に位置している。上面の規模は92×73cm、底面は60×40cm、深さ18~30cmの楕円形を呈する。底面は東部分が深く、面積約0.2m²である。覆土は暗褐色土層で、縄文土器片24点が出土している。

第1層 暗褐色土層 やや固いが締まりは悪い。粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。18号土壌の覆土とほぼ同一である。

土壌上面には流紋岩の多孔石(長径46.8cm・短径21.1cm・厚さ18cm・重量25.4kg)が出土している。墓標になるものと思われる。18号土壌と同一であるが、規模は小さい。

20号土壌 (第361図、PL. 95)

Fm-44グリッドにおいて検出された。上面の規模は191×131cm、底面は139×81cm、深さ40~47cmの楕円形を呈する。底面は北に向かって深くなり、面積約0.9m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性はあまりない。

第2層 茶褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性がある。第1層よりやや明るい色調である。縄文土器片を含む。

第3層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。

21号土壌 (第361図、PL. 96)

Fp-49・50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西42m80cm、26号配石遺構の東南1.5mの所に位置する。上面の規模は86×72cm、底面は54×49cm、深さ45cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積0.2m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固いが締まりは良くない。粘性が非常にある。炭化物粒子と黄褐色土粒子を多

量を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固いが締まりは良くない。粘性がある。炭化物粒子を多量に、黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色砂礫層 壁の崩れ。壁際は焼けている。

土壇上面から覆土第1層にかけて多量の石が出土した。

22号土壇 (第362・363・366図、PL. 97、130)

Fj・Fk-49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西15m、列石内部に構築されている。土壇上面の規模は120×115cm、底面は103×103cm、深さ15cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積0.9m²である。覆土は2層に分かれた。

第1層 茶褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が第1層よりもある。

土壇西よりには立石がある。この立石は長径50cm・短径29.5cm・厚さ9cm・重量18.8kgを測り、点紋緑泥片岩が使用されていた。また土壇の周囲から西にかけて配石を施し、その数は54点を数えた。このなかには石皿1点、多孔石2点、焼石13点が含まれている。15種類の石材が確認され、石材別点数は絹雲母石墨片岩12点、輝緑岩8点、点紋緑泥片岩6点、点紋石墨片岩5点、輝岩4点、安山岩・紅簾絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩各2点、絹雲母緑泥石墨片岩・緑泥片岩・石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・砂岩・脆雲母石墨片岩・紅簾絹雲母石墨片岩各1点であり、不明は7点を数えた。配石中最大の石は長径65cm・短径39.5cm・厚さ17cm・重量75.9kgを測り、絹雲母石墨緑泥片岩を使用していた。

この配石墓の北東70cmの所から加曾利E3式土器の伏甕(胴部欠損)が出土している。

土壇一覧表

| No. | グリッド | 上面cm (長径×短径) | 底面cm (長径×短径) | 上面 長径/短径 | 底面積(m ²) | 底面 長径/短径 | 深さ(cm) | 備考 |
|-----|----------|-----------------|-----------------|-------------|----------------------|-------------|--------|-----|
| 1 | En-52 | (108×105) | (79×75) | 1.03 | 0.5 | 1.05 | 49 | 配石墓 |
| 2 | Fa・Fb-53 | (70×51) | (42×31) | 1.37 | 0.1 | 1.35 | 25 | 土壇墓 |
| 3 | Et・Fa-51 | (100×95) | (78×75) | 1.05 | 0.5 | 1.04 | 35 | 配石墓 |
| 4 | Et-51 | (124×105) | (103×95) | 1.18 | 0.8 | 1.08 | 39 | 土壇墓 |
| 5 | EO-56 | (100×85) | (95×75) | 1.18 | 0.6 | 1.27 | 5~20 | 土坑 |
| 6 | Es・Et-50 | (80×72) | (61×54) | 1.11 | 0.2 | 1.13 | 15 | 土壇墓 |
| 7 | Fi-56 | (129×81) | (105×62) | 1.59 | 0.5 | 1.69 | 15 | 配石墓 |
| 8 | Fj-50 | (197×65) | (170×40) | 3.03 | 0.6 | 4.25 | 18 | 配石墓 |
| 9 | Er・Es-50 | (128×95) | (91×51) | 1.35 | 0.4 | 1.78 | 28 | 土壇墓 |
| 10 | Fa-51 | (103×98) | (91×78) | 1.05 | 0.5 | 1.17 | 18 | 土壇墓 |
| 11 | FO-48 | (74×70) | (49×47) | 1.06 | 0.2 | 1.04 | 33 | 配石墓 |
| 12 | FP-48 | (93×91) | (75×73) | 1.02 | 0.4 | 1.03 | 40 | 配石墓 |
| 13 | Fl-43・44 | (117×90) | (96×70) | 1.3 | 0.5 | 1.37 | 42 | 土壇墓 |
| 14 | Fl・Fm-43 | (183×142) | (150×120) | 1.29 | 1.5 | 1.25 | 38 | 土壇墓 |
| 15 | Fm-43 | (145×80) | (80×70) | 1.81 | 0.5 | 1.14 | 18 | 土壇墓 |
| 16 | Fl-44 | (96×88) | (71×70) | 1.09 | 0.4 | 1.01 | 65 | 土坑 |
| 17 | Fm-43・44 | (83×75) | (76×63) | 1.11 | 0.3 | 1.21 | 52 | 土坑 |
| 18 | Gf-47 | (115×84) | (82×54) | 1.37 | 0.3 | 1.52 | 25 | 配石墓 |
| 19 | Ge-48 | (92×73) | (60×40) | 1.26 | 0.2 | 1.5 | 18~30 | 配石墓 |
| 20 | Fm-44 | (191×131) | (139×81) | 1.46 | 0.9 | 1.72 | 40~47 | 土壇墓 |
| 21 | FP-49・50 | (86×72) | (54×49) | 1.19 | 0.2 | 1.10 | 45 | 土坑 |
| 22 | Fj・Fk-49 | (120×115) | (103×103) | 1.04 | 0.9 | 1.0 | 15 | 配石墓 |

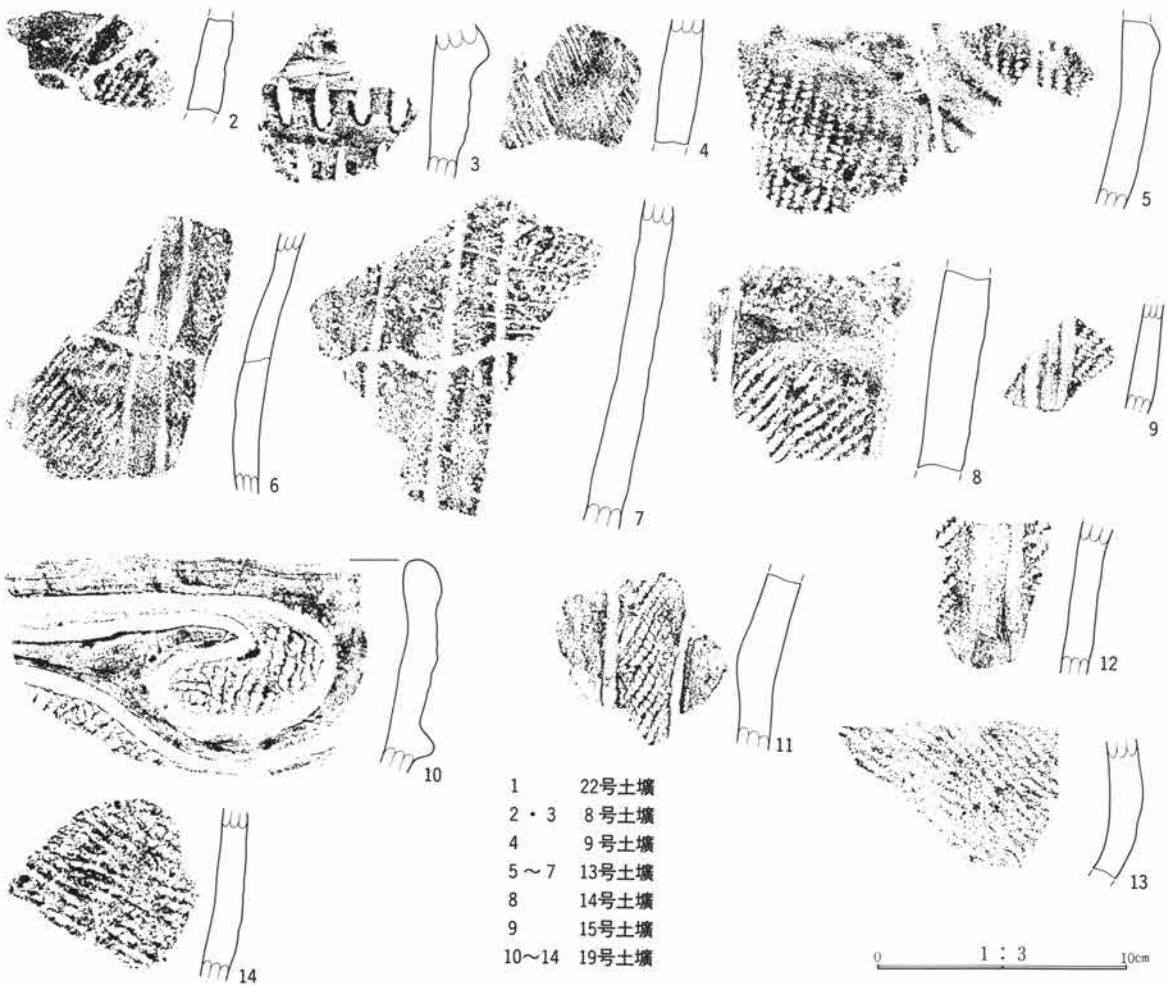
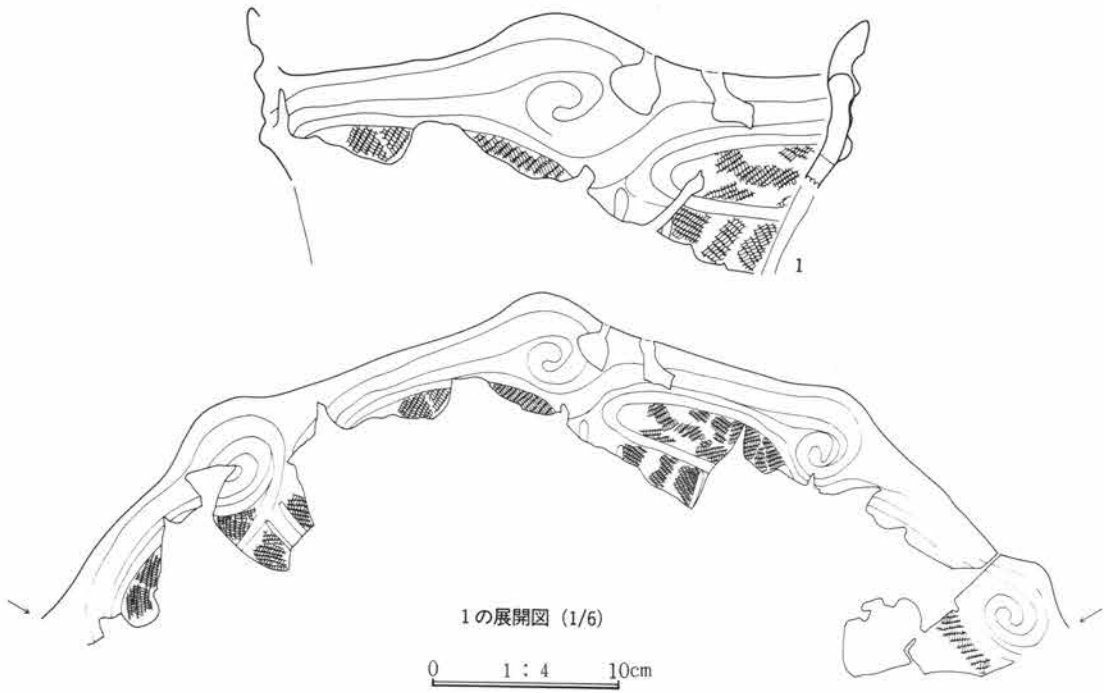
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

土壌出土土器観察表

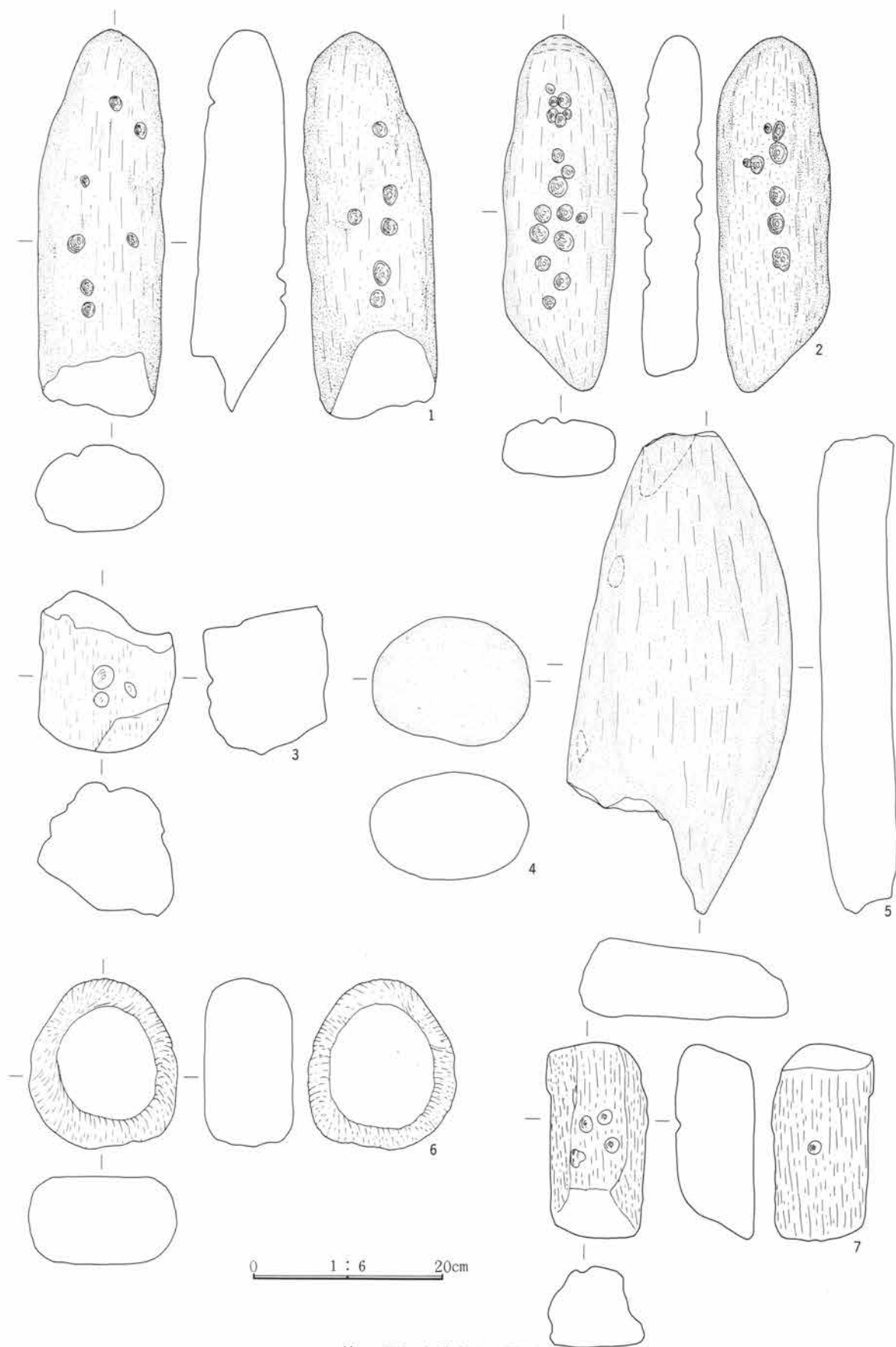
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | | 出土状況 |
|---------------|------|--------------------|--|---|--|-------------|
| | | | | | | |
| 363-1 130 | 口縁部 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 口縁部内面は肥厚し、明瞭な段を有す。 内面は横方向のミガキ。 内外面の色調は褐灰色。 | 口縁部に4個の突起。突起下に隆帯と幅広のナデで渦巻文を施し、渦巻間を楕円区画文で構成する。区画画はL(長) (0段多条)を横位施文。胴部はL(長)を縦位施文。 | | 22号土壌 伏甕 |
| 363-2 128 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐灰色。 | 縄文施文。原体はR(短)縦転がし。 | | 8号土壌 覆土 |
| 363-3 128 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11~21mm。 内面は丁寧な調整。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄橙色。 | 隆帯下に刺突文を施している。 | | 8号土壌 覆土 |
| 363-4 128 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片(底部にちかい)。器厚15mm。 内外面ともザラザラ。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい橙色。 | 縄文施文。原体はL(長)の縦転がし。 | | 9号土壌 覆土 |
| 363-5 129 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄橙色。 | 隆帯を巡らす。縄文原体はR(短)。 | | 13号土壌 |
| 363-6 129 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②不良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内外面ともザラザラしている。 内外面の色調は橙色。 | R(短)縦位施文後、平行沈線を垂下。 | | 13号土壌 |
| 363-7 129 | 胴部片 | ①粗粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 外面は荒れているが、内面は丁寧な調整。 外面の色調はにぶい黄橙色、内面は橙色。 | R(短)縦位施文後、3本の平行沈線を垂下。 | | 13号土壌 |
| 363-8 129 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚19mm。内面は丁寧な調整。外面の色調はにぶい橙色、内面は褐灰色。 | R(短) (0段多条か?) 縦位施文後、沈線を垂下。 | | 14号土壌 |
| 363-9 129 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は粗い調整。 外面の色調は灰黄色、内面は褐灰色。 | R(短)縦位施文後、2本の平行沈線を垂下。 | | 15号土壌 |
| 363-10 130 | 口縁部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整。 内外面の色調はにぶい黄橙色。 | 口縁部は内湾する。 | | 19号土壌 |
| 363-11 130 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は縦方向の調整。 外面の色調は灰黄褐色、内面は褐灰色。 | R(短)縦位施文後、2本の平行沈線を垂下。 | | 19号土壌 覆土 |
| 363-12 130 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整。 外面の色調は暗赤褐色、内面はにぶい黄橙色。 | R(短)縦位施文後、2本の平行沈線を垂下。 | | 19号土壌 覆土 |
| 363-13 130 | 胴部片 | ①細粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整。内外面の色調は褐灰色。 | L(長)縦位施文。 | | 19号土壌 覆土 |
| 363-14 130 | 胴部片 | ①中粒の砂を混入 ②やや良 | 深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄橙色。 | L(長)縦位施文。 | | 19号土壌 覆土 |

土壌石器観察表

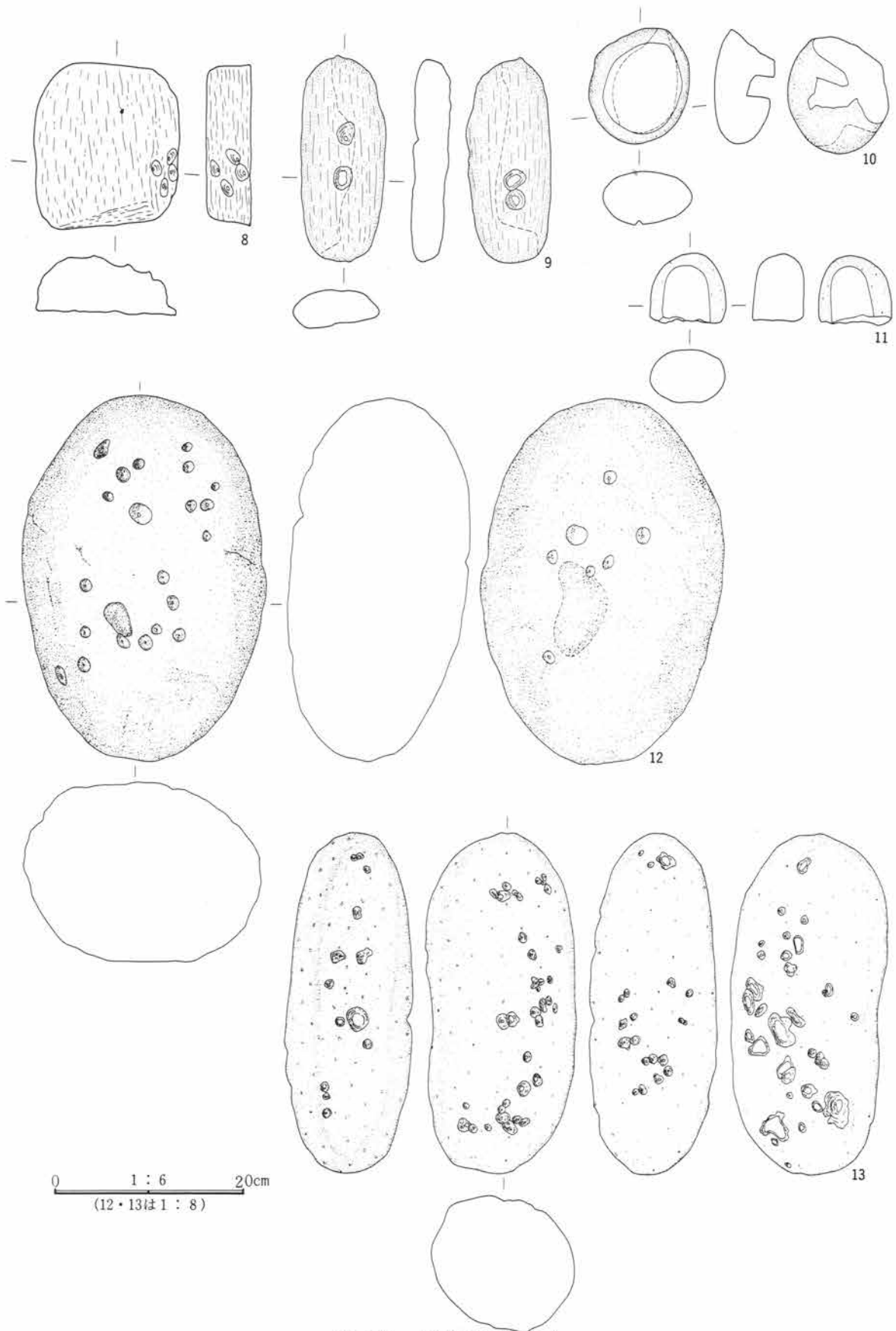
| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|---------|--------------|------|------|---------|---|------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 364-1 129 | 多孔石 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (38.8) | 13.1 | 9.5 | (7,600) | 両面に凹み。数は13個で、最大は長25mm、短19mm、深9mm。最小は長12mm、短8mm、深5mmで、平均は長23mm、短19mm、深9mm。 | 3号土壌 墓標 |
| 364-2 129 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 36.6 | 11.8 | 6.3 | 4,900 | 両面に凹み。数は27個で、最大は長22mm、短18mm、深7mm。最小は長7mm、短6mm、深1mmで、平均は長15mm、短13mm、深5mm。 | 3号土壌 墓標 |
| 364-3 129 | 多孔石 | 欠 | 絹雲母石墨片岩 | (16.7) | 14.2 | 13.7 | (4,000) | 片面に凹み。数は3個で、最大は長25mm、短23mm、深9mm。最小は長15mm、短10mm、深2mmで、平均は長18mm、短14mm、深5mm。 | 3号土壌 墓標 |
| 364-4 129 | 丸石 | 完形 | 安山岩 | 16.7 | 13.3 | 11.4 | 3,500 | 墓標として使用された丸石。 | 7号土壌 墓標 |



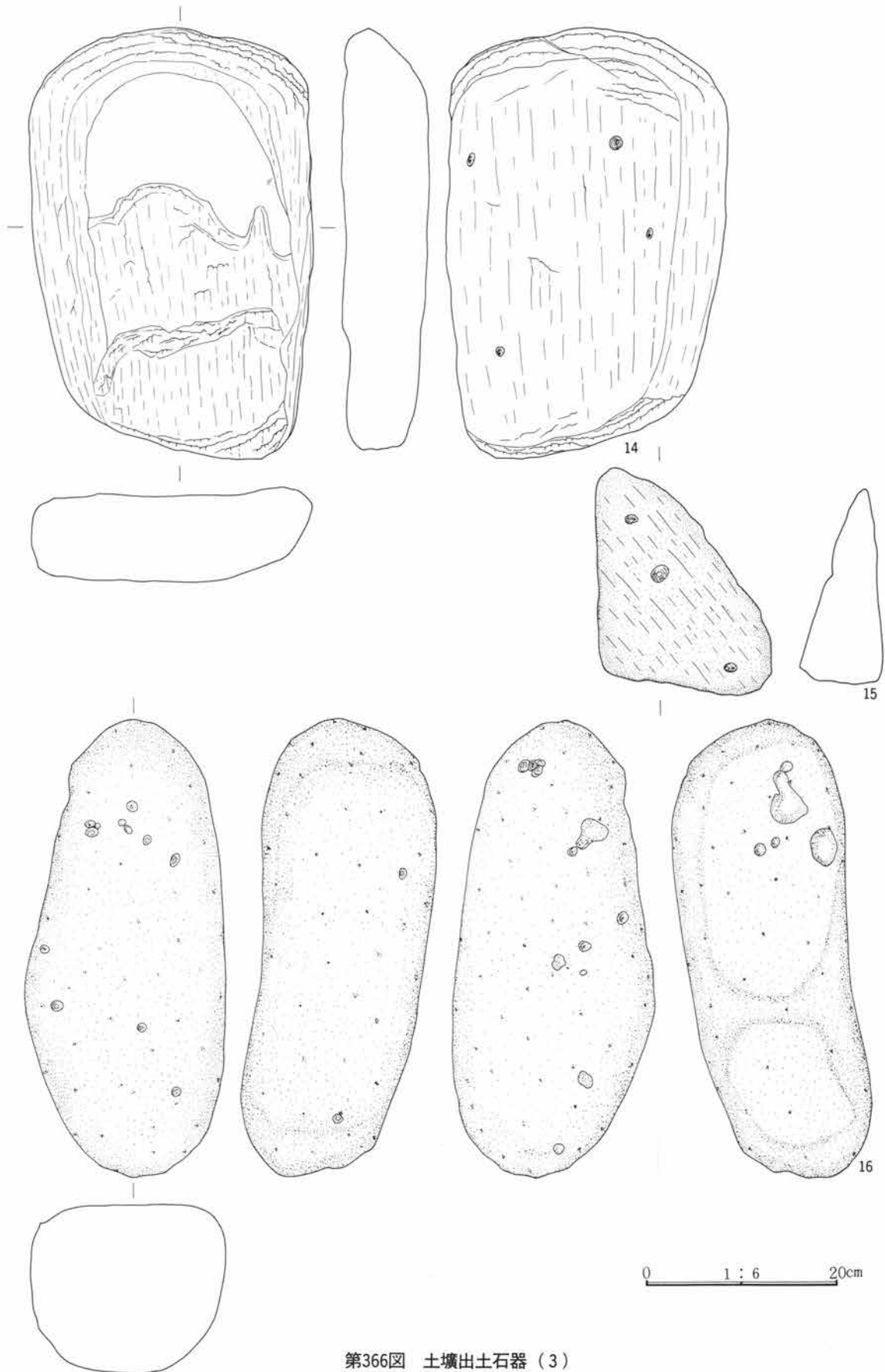
第363図 土壙出土土器



第364図 土壌出土石器 (1)



第365図 土墳出土石器(2)



第366図 土壇出土石器(3)

土壌石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|-----|------|---------|--------------|--------|-------|---------|--|-------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 364-5 129 | | ほぼ完形 | 点紋緑泥片岩 | 49.7 | 22.7 | 8.2 | 14,700 | 部分的に焼けている。墓標として使用。両面に加工痕が認められる。 | 8号土壌 墓標 |
| 364-6 | 磨石 | 完形 | 石墨絹雲母片岩 | 17.5 | 15.5 | 9.2 | 4,300 | 両面に磨耗痕が認められる。 | 8号土壌 |
| 364-7 129 | 多孔石 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | (20.1) | 10.6 | 8.3 | (2,900) | 両面に凹み。数は5個で、最大は長17mm、短14mm、深4mm。最小は長14mm、短13mm、深3mmで、平均は長16mm、短14mm、深3mm。 | 14号土壌 |
| 365-8 129 | 多孔石 | 欠損 | 絹雲母石墨片岩 | 17.5 | 15.2 | (5.1) | (2,200) | 側面に凹み。数は4個で、最大は長20mm、短14mm、深5mm。最小は長17mm、短15mm、深7mmで、平均は長19mm、短15mm、深6mm。 | 14号土壌 |
| 365-9 129 | 凹石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 21.6 | 8.9 | 4.1 | 1,300 | 両面に凹み。数は4個で、最大は長25mm、短19mm、深2mm。最小は長21mm、短20mm、深1mmで、平均は長24mm、短20mm、深3mm。約1/2程焼けている。 | 15号土壌 |
| 365-10 129 | 磨石 | 欠 | 安山岩 | 8.0 | 7.1 | 5.4 | (420) | 両面に磨耗痕が認められる。 | 15号土壌 |
| 365-11 129 | 磨石 | 一部欠損 | 砂岩 | (12.0) | 10.6 | 6.4 | (800) | 片面に磨耗痕が認められ、また焼けている。 | 15号土壌 |
| 365-12 129 | 多孔石 | 完形 | 砂岩 | 50.3 | 34.3 | 25.0 | 56,500 | 両面に凹み。数は28個で、最大は長55mm、短30mm、深6mm。最小は長14mm、短12mm、深9mmで、平均は長22mm、短17mm、深7mm。部分的に焼けている。墓標として使用。 | 18号土壌 墓標 |
| 365-13 130 | 多孔石 | 完形 | 流紋岩 | 46.8 | 21.1 | 18.0 | 25,400 | 全面に凹み。数は102個で、最大は長54mm、短33mm、深5mm。最小は長7mm、短5mm、深1mmで、平均は長17mm、短12mm、深2mm。墓標として使用された。 | 19号土壌 墓標 |
| 366-14 130 | 石皿 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 43.8 | 29.1 | 9.6 | 21,000 | 長方形を呈し窪みは浅い。裏面に4個の凹み。最大の凹みは長14mm、短11mm、深5mm。最小は長9mm、短7mm、深3mmで、平均は長12mm、短8mm、深3mm。 | 22号土壌 |
| 366-15 130 | 多孔石 | 部分 | 点紋緑泥片岩 | (23.1) | (18.1) | (8.4) | (3,100) | 片面に凹み。数は3個で、最大は長19mm、短5mm、深5mm。最小は長13mm、短9mm、深4mmで、平均は長15mm、短11mm、深4mm。 | 22号土壌 |
| 366-16 130 | 多孔石 | 完形 | 流紋岩 | 46.5 | 20.7 | 20.2 | 25,400 | 全面に凹み。数は31個で、最大は長52mm、短15mm、深3mm。最小は長5mm、短5mm、深1mmで、平均は長14mm、短9mm、深2mm。 | 22号土壌 |

8 廃棄場所

位置 Ej-61~64、Ek-61~64、El-62・63グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東約120m（廃棄場所の中心）の所、1号配石遺構からは北東約50mに位置している。標高は163.20m~164mである。

I区の遺構構築面がだいたい166m程であるので、約2m~2.8m程低い場所にあたる。

経過 I区（昭和61年度調査区）から検出。62年1月上旬から調査を開始した。上記グリッドから多量の土器片が出土し、また多孔石も多数出土した。図面の作成と遺物を取り上げて行く過程で、Ej・Ek-64グリッドにおいて5号屋外埋設土器が検出された。自然営力による遺物の流れ込みも当然考えられるが、意図的に土器が埋設されていること等から判断して、集落の廃棄場所として認識したものである。

規模 路線外に延びているために全体の規模は不明であるが、現状での面積は約125㎡である。

遺物出土状況 該当する各グリッドからの出土土器片の点数は以下のとおりである。

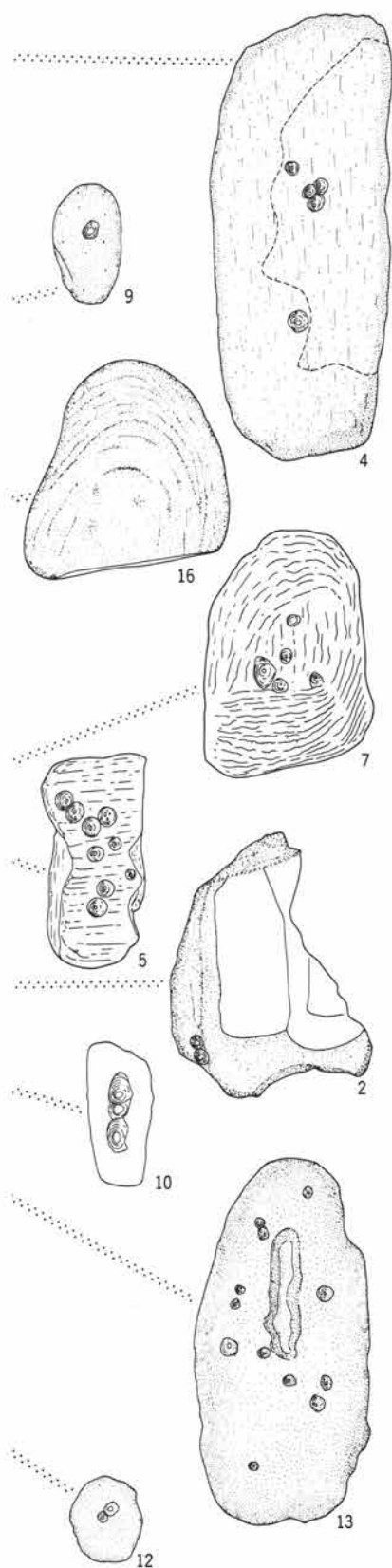
Ej-61グリッド 口縁部15点、胴部97点、底部2点、計114点。

Ej-62グリッド 口縁部17点、胴部117点、底部2点、計136点。

Ej-63グリッド 口縁部7点、胴部38点、底部1点、計46点。



第367図 廃棄場所遺物出土状況



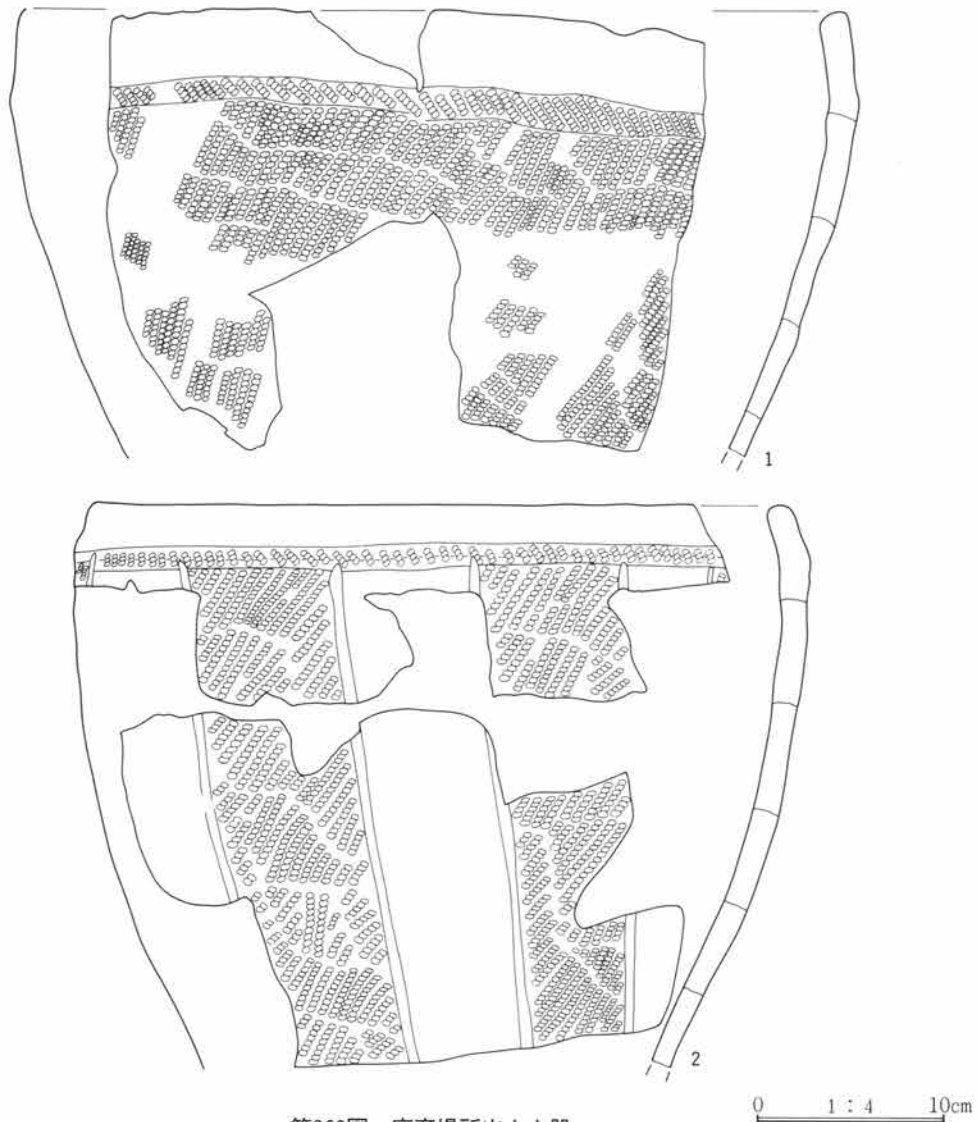
● 土器片

Ej-64グリッド 口縁部1点、胴部29点、底部1点、計31点。
 Ek-61グリッド 口縁部5点、胴部23点、底部1点、計29点。
 Ek-62グリッド 口縁部58点、胴部352点、底部13点、計423点。
 Ek-63グリッド 口縁部53点、胴部322点、底部16点、計391点。
 Ek-64グリッド 口縁部16点、胴部134点、底部7点、計157点。
 グリッドの総計は口縁部172点、胴部1112点、底部43点の計1327点であった。加曾利E3式土器片からE4式土器片が出土しているが、加曾利E4式土器片がEk-62グリッドでは多かった。またこのグリッドでは縄文時代前期土器片1点も含まれていた。土器片の接合関係は比較的広範囲に認められる。

石器では石皿2点、多孔石7点、凹石4点、磨石2点等が出土している。石皿2点はEj-62、Ek-62グリッドからの出土であり、多孔石7点はEj-62グリッド1点、Ej-63グリッド1点、Ej-64グリッド1点、Ek-62グリッド2点、Ek-63グリッド2点であった。凹石はEk-62グリッド3点、Ek-63グリッド1点である。磨石はEk-62、Ek-64グリッドからの出土である。これら石器のほかにも多量の石が出土している。

所見 集落の北東端にあたる場所から検出されたが、さらに路線外に延びている。廃棄場所の一角を調査しえたものである。集落の存続期間（加曾利E3式期～E4式期）中、廃棄され続けたものであろう。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



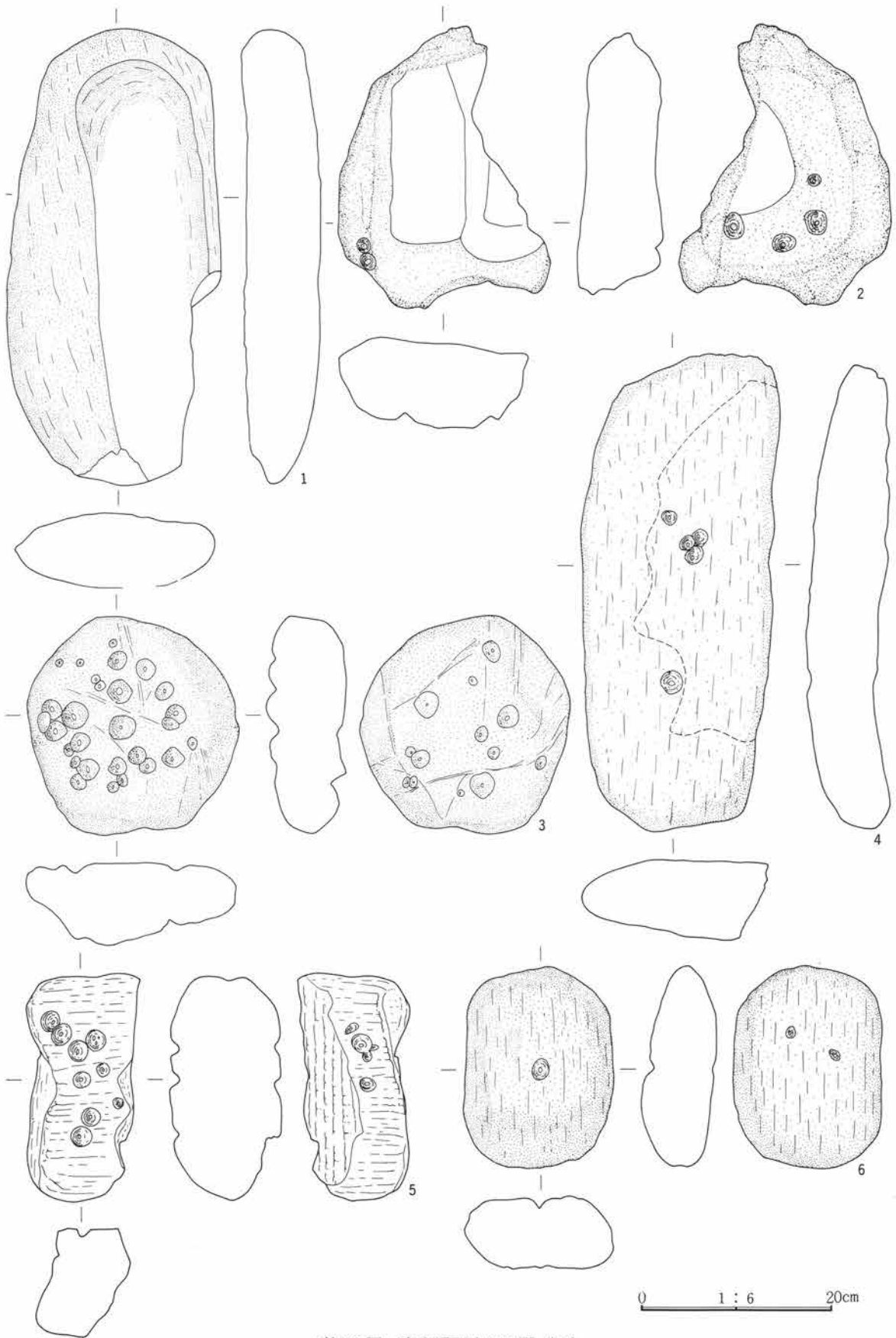
第368図 廃棄場所出土土器

廃棄場所土器観察表

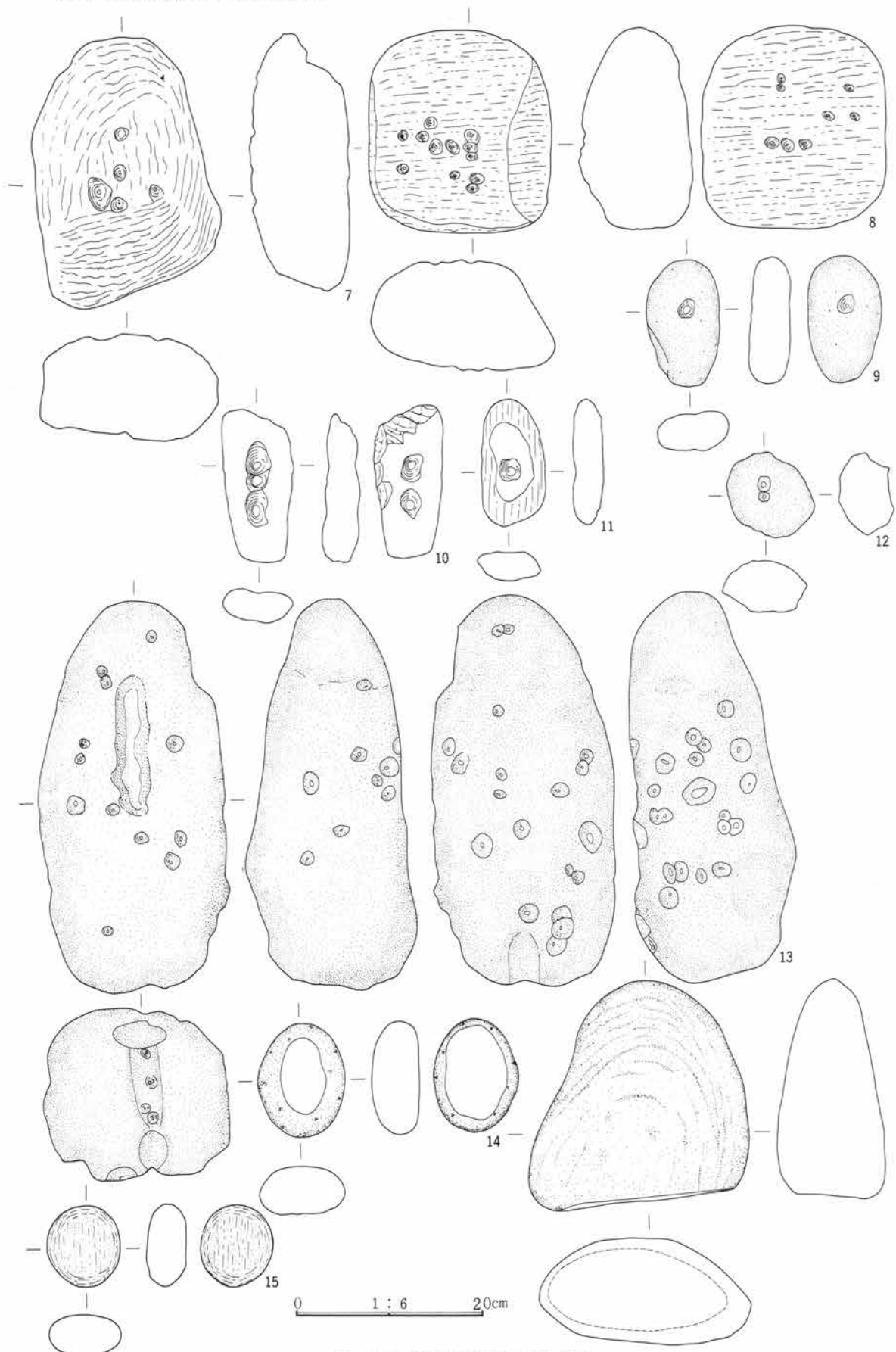
| 図番 PL. | 部位 | ①胎土 ②焼成 (遺 存状況) | 成形・器面調整の特徴と色調 | 文 様 (その他) | 出土状況 |
|--------------|----------------|--------------------|--|--|---------------|
| 368-1 131 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の大形破片。器厚9~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。微隆起帯上に R(┘横位。胴部にR(┘縦位。 外面は荒れている。 | Ek-62 グリッド |
| 368-2 131 | 口縁 ~胴 部片 | ①細粒の砂を混入 ②良 | 深鉢形土器の半完形品。器厚10~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。 | 口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせ、それに接続する沈線を垂下。区画 内に縄文施文。微隆起帯上にR(┘横位。胴 部はR(┘縦位。 | Ek-63 グリッド |

廃棄場所石器観察表

| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|--------------|-----|------|--------|--------------|--------|-----|----------|---|---------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 369-1 131 | 石 皿 | 一部欠損 | 点紋緑泥片岩 | (47.1) | 22.3 | 8.0 | (13,900) | 長方形を呈し、窪みは浅い。 | Ek-62 グリッド |
| 369-2 131 | 石 皿 | ㄨ | 砂岩 | 29.1 | (22.2) | 9.3 | (5,400) | 両面に磨面と凹みがみられる。凹みは6個で、最 大は長30mm、短25mm、深14mm。最小は長15mm、短 14mm、深4mmで、平均は長22mm、短19mm、深8mm。 | Ej-62 グリッド |



第369図 廃棄場所出土石器 (1)



第370図 廃棄場所出土石器（2）

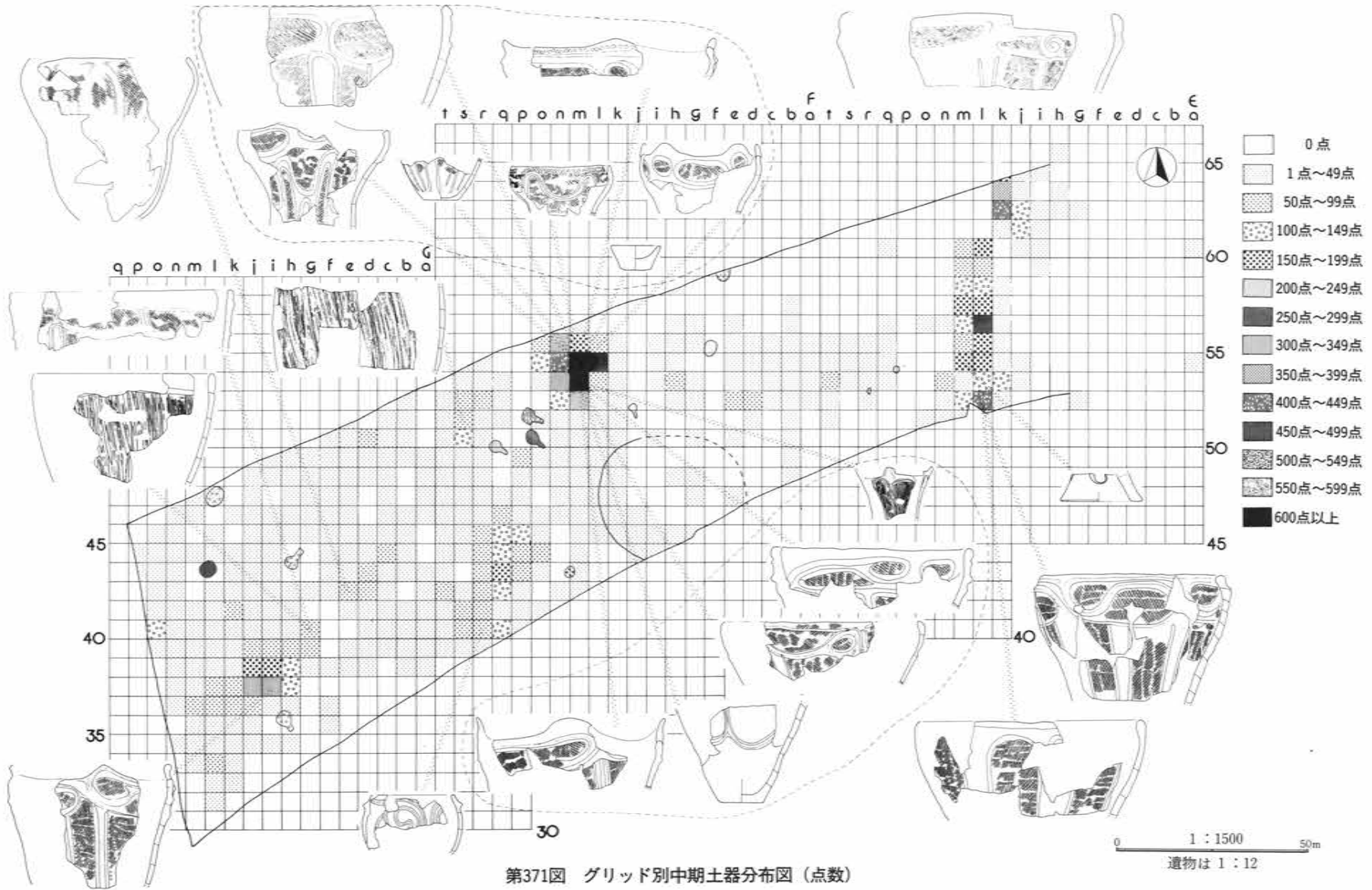
廃棄場所石器観察表

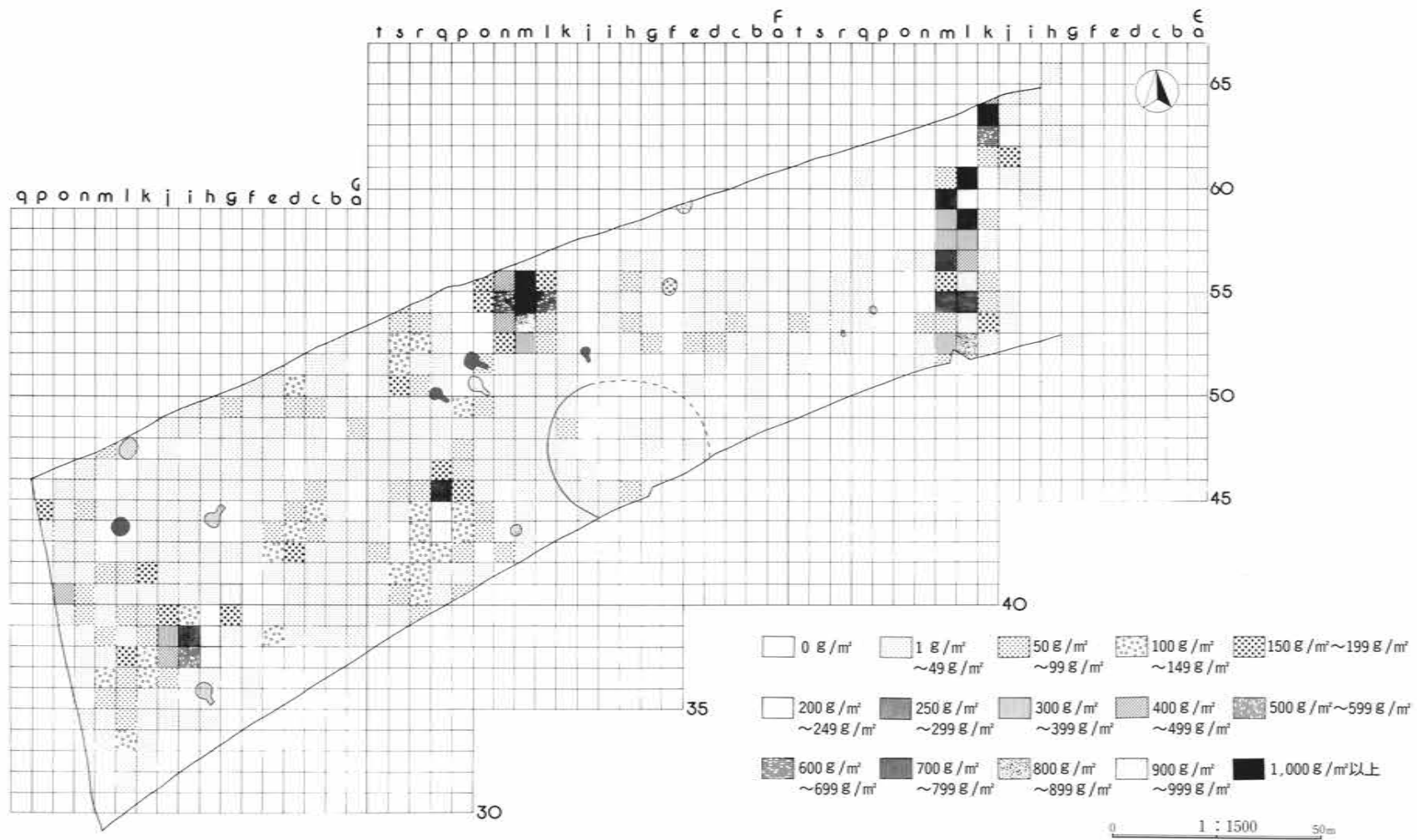
| 図番 PL. | 器種 | 遺存状況 | 石 材 | 計 測 値 (cm・g) | | | | 特 徴 | 出土状況 |
|---------------|-----|------|---------|--------------|--------|-------|---------|--|---------------|
| | | | | 全長 | 幅 | 厚 | 重量 | | |
| 369-3 131 | 多孔石 | 完形 | 砂岩 | 22.5 | 22.0 | 8.4 | 4,400 | 両面に41個の凹み。最大の凹みは長28mm、短28mm、深13mm。最小は長10mm、短8mm、深3mmで、平均は長18mm、短15mm、深7mm。 | Ek-62 グリッド |
| 369-4 131 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 49.6 | 20.7 | 8.2 | 14,100 | 片面に5個の凹み。最大の凹みは長23mm、短23mm、深3mm。最小は長15mm、短15mm、深1mmで、平均は長19mm、短16mm、深2mm。一部被熱。 | Ej-64 グリッド |
| 369-5 131 | 多孔石 | 一部欠損 | 絹雲母石墨片岩 | 23.5 | (11.9) | 11.6 | (4,400) | 両面に14個の凹み。最大の凹みは長23mm、短21mm、深10mm。最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長17mm、短15mm、深7mm。 | Ek-63 グリッド |
| 369-6 131 | 多孔石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 20.8 | 15.2 | 7.4 | 4,000 | 両面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、深8mm。最小は長11mm、短8mm、深4mmで、平均は長15mm、短12mm、深6mm。 | Ek-62 グリッド |
| 370-7 131 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 28.1 | 19.5 | 10.8 | 8,500 | 片面に5個の凹み。最大の凹みは長31mm、短20mm、深6mm。最小は長16mm、短12mm、深5mmで、平均は長20mm、短15mm、深5mm。 | Ej-63 グリッド |
| 370-8 131 | 多孔石 | 完形 | 絹雲母石墨片岩 | 21.0 | 19.3 | 11.5 | 7,600 | 両面に20個の凹み。最大の凹みは長16mm、短14mm、深5mm。最小は長7mm、短7mm、深3mmで、平均は長13mm、短11mm、深4mm。 | Ek-63 グリッド |
| 370-9 131 | 凹石 | 完形 | 流紋岩 | 13.2 | 8.0 | 4.1 | 700 | 両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、短径19mm、深さ2mmである。 | Ek-63 グリッド |
| 370-10 131 | 凹石 | 完形 | 緑泥片岩 | 16.1 | 7.4 | 3.7 | 700 | 両面に5個の凹み。最大の凹みは長38mm、短23mm、深6mm。最小は長23mm、短17mm、深3mmで、平均は長31mm、短22mm、深4mm。 | Ek-62 グリッド |
| 370-11 131 | 凹石 | 完形 | 緑簾緑泥片岩 | 13.4 | 6.6 | 3.2 | 500 | 片面に1個の凹みがある。凹みの長径22mm、短径22mm、深さ1mmである。器面に磨耗痕がみられる。 | Ek-62 グリッド |
| 370-12 131 | 凹石 | 欠 | 砂岩 | 9.2 | 9.0 | (5.4) | (450) | 片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径14mm、短径13mm、深さ3mmである。全面焼けている。 | Ek-62 グリッド |
| 370-13 131 | 多孔石 | 完形 | 砂岩 | 40.7 | 20.1 | 17.8 | 15,150 | 全面に62個の凹み。最大の凹みは長36mm、短32mm、深16mm。最小は長10mm、短9mm、深7mmで、平均は長18mm、短15mm、深9mm。 | Ej-62 グリッド |
| 370-14 132 | 磨石 | 完形 | 流紋岩 | 11.8 | 9.3 | 5.1 | 750 | 器面に磨耗痕がみられる。 | Ek-62 グリッド |
| 370-15 132 | 磨石 | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 8.5 | 7.7 | 4.3 | 450 | 器面に磨耗痕がみられる。 | Ek-64 グリッド |
| 370-16 132 | | 完形 | 点紋緑泥片岩 | 24.0 | 23.2 | 11.4 | 9,000 | 器面に磨耗痕がみられる。 | Ek-63 グリッド |

9 ————— グリッド

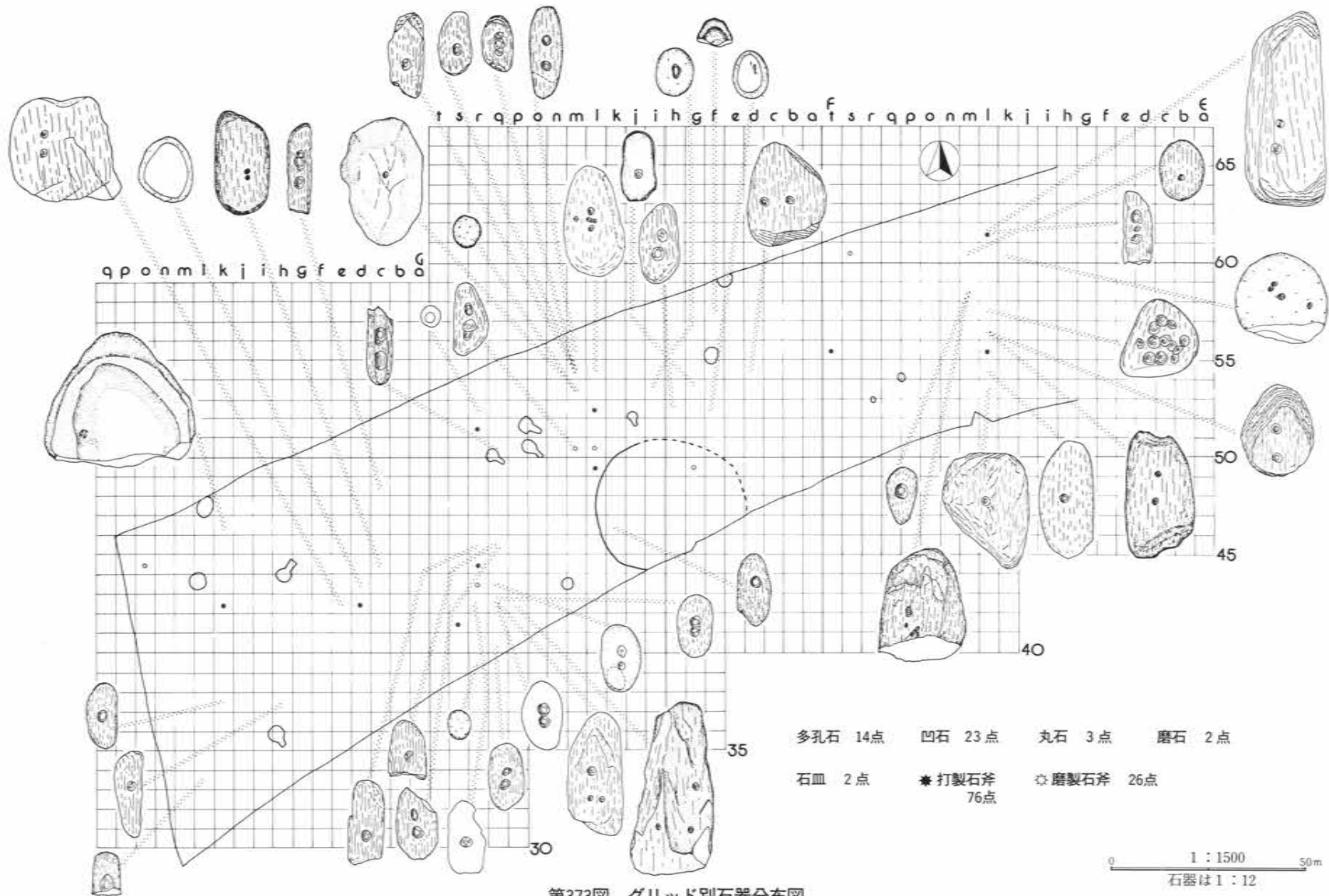
田篠中原遺跡からは縄文時代中期の環状列石、敷石住居跡、配石遺構群が検出されている。各遺構からは多量の土器片と石器類が出土しており、また周辺グリッド（遺構外）からも同様に多量の遺物が出土している。遺構出土遺物の具体的数値は、各遺構説明の出土遺物項目中に、土器片については総点数・部位別点数、石器類（配石遺構を構成する石を含む）については器種別点数・石材別点数を記載し、その詳細なグラフを作成してある。遺構外出土遺物については、一覧表を掲載し、これをもとに分布図を作成してみた。この分布図作成にあたっては次の方法によっている。

遺構外出土土器片の数量的把握を行うために、出土した土器片の総量をおさえ、さらに時期別に分類し、総破片数、口縁部・胴部・底部等の部位別点数とともに重量の測定を行った。遺構外の遺物は基本的に5×5mのグリッドを単位として取り上げられているために、グリッドを最小単位として、このなかにおける時期別・部位別点数を把握し、1㎡あたりの重量を算出した。そして分布図作成には、この点数別・重量別の2通りを作成してみた。土器片の総量はその遺跡の規模（居住人員×継続年数）を反映すると考えられ、時期





第372図 グリッド別中期土器分布図(重量)



第373図 グリッド別石器分布図

別の量的変化は、遺跡の居住人口の変化、いわば盛衰を反映すると思われるが、調査が路線幅という限定された範囲内で実施されているために、問題点は多々ある。しかしながらある程度の把握は可能と思われる。

* * * *

田篠中原遺跡からは縄文時代早期の土器片の出土はなく、前期の土器片42点がグリッドから出土している。このうち胎土に繊維を含んだ前期中葉の土器片は34点(口縁部3点、胴部26点、底部5点)であり、Fc-55・56グリッドにかけて集中して出土した。前期後半の諸磯式土器片は8点の出土、中期前半の土器片は2点の出土であった。こうした土器片の出土は当遺跡の盛衰を考えるうえで非常に興味深いものがある。この地に縄文人が活動の痕跡を残したのは前期中葉段階に求められる。しかしこの段階では、当地は居住不可能な湿地状態であった。前期後半段階になっては縄文人の活動痕跡を認めることはできない。諸磯式土器片の出土は前期中葉の土器片と異なり、集中する出土ではなく、グリッドに分散的に出土しているからである。居住が可能になったのは中期加曾利E 3式期であり、大規模な集落を構成できるようになった。この段階で当地は湿地状態から居住可能な地になっていった。その後、加曾利E 4式期まで集落が営まれるが、この期で集落は断絶し、以後、集落は廃絶されてしまう。これを裏づけるかのように廃棄場所からは加曾利E 4式土器片の出土が多かった。後期の土器片はわずかに2点の出土であり、もちろん遺構の構築はない。後期になって集落立地を異にしている。内匠丘陵(上位段丘)上に集落移動が行われたものと考えられる。

なお、ページ数の関係から中期土器片については、点数分布図(大形破片については実測図を併用)、重量別分布図を作成し、一覧表にまとめた。石器については実測図を併用した分布図を作成し、打製石斧と磨製石斧については点数と出土グリッドを表示したにとどめた。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

グリッド別出土土器 (縄文中期) 一覧表

| グリッド | 重量 (g) | 面積 (m ²) | g/m ² | 総数 | 部 位 | | | 検出遺構 |
|-------|--------|----------------------|------------------|-----|-----|-----|----|--------|
| | | | | | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| Ea-54 | 41 | 25 | 1.6 | 2 | 1 | 1 | | |
| Ea-60 | 273 | 25 | 10.9 | 3 | 2 | 1 | | |
| Eg-52 | 149 | 25 | 6.0 | 5 | 2 | 3 | | |
| Eg-62 | 111 | 25 | 4.4 | 2 | 1 | 1 | | |
| EH-62 | 148 | 25 | 5.9 | 4 | 3 | 1 | | |
| EH-63 | 20 | 25 | 0.8 | 1 | 1 | 1 | | |
| EH-65 | 315 | 25 | 12.6 | 10 | 1 | 9 | | |
| Ei-59 | 39 | 25 | 1.6 | 1 | 1 | 1 | | |
| Ei-60 | 273 | 25 | 10.9 | 5 | 2 | 3 | | |
| Ei-61 | 85 | 25 | 3.4 | 4 | 1 | 3 | | |
| Ei-62 | 213 | 25 | 8.5 | 5 | 1 | 3 | 1 | |
| Ei-64 | 636 | 20 | 31.8 | 19 | 3 | 15 | 1 | |
| Ej-53 | 170 | 25 | 6.2 | 2 | 2 | 2 | | |
| Ej-54 | 305 | 25 | 12.2 | 11 | 1 | 10 | | |
| Ej-60 | 458 | 25 | 18.3 | 13 | 1 | 12 | | |
| Ej-61 | 4743 | 25 | 189.7 | 114 | 15 | 97 | 2 | 廃棄場所 |
| Ej-62 | 5054 | 25 | 202.2 | 136 | 17 | 117 | 2 | 廃棄場所 |
| Ej-63 | 468 | 25 | 58.7 | 46 | 7 | 38 | 1 | 廃棄場所 |
| Ej-64 | 800 | 17.5 | 45.7 | 31 | 1 | 29 | 1 | 5号屋外埋設 |
| Ek-52 | 482 | 23.8 | 20.3 | 14 | 1 | 12 | 1 | |
| Ek-53 | 3908 | 25 | 156.3 | 106 | 14 | 92 | | |
| Ek-54 | 1383 | 25 | 55.3 | 25 | 4 | 19 | 2 | |
| Ek-55 | 2240 | 25 | 89.6 | 38 | 2 | 36 | | |
| Ek-56 | 500 | 25 | 20 | 30 | 30 | 30 | | |
| Ek-57 | 1210 | 25 | 48.4 | 38 | 1 | 34 | 3 | |
| Ek-58 | 1485 | 25 | 59.4 | 21 | 5 | 15 | 1 | |
| Ek-61 | 1311 | 25 | 52.4 | 29 | 5 | 23 | 1 | 廃棄場所 |
| Ek-62 | 16581 | 25 | 663.2 | 423 | 58 | 352 | 13 | 廃棄場所 |
| Ek-63 | 19206 | 25 | 768.2 | 391 | 53 | 322 | 16 | 廃棄場所 |
| Ek-64 | 4678 | 10 | 467.8 | 157 | 16 | 134 | 7 | 5号屋外埋設 |
| El-51 | 1458 | 25 | 58.3 | 27 | 2 | 2 | | |
| El-52 | 20598 | 25 | 823.9 | 407 | 48 | 355 | 4 | |
| El-53 | 5898 | 25 | 235.9 | 121 | 4 | 104 | 13 | |
| El-54 | 6861 | 25 | 274.4 | 152 | 20 | 130 | 2 | |
| El-55 | 5424 | 25 | 217 | 172 | 22 | 146 | 4 | |
| El-56 | 10102 | 25 | 404.1 | 287 | 46 | 238 | 3 | |
| El-57 | 9095 | 25 | 363.8 | 194 | 24 | 167 | 3 | |
| El-58 | 6660 | 25 | 266.4 | 150 | 24 | 123 | 3 | |
| El-59 | 5661 | 25 | 226.4 | 84 | 5 | 77 | 2 | |
| El-60 | 6907 | 25 | 276.3 | 169 | 21 | 146 | 2 | |
| Em-51 | 629 | 10 | 62.9 | 15 | 4 | 11 | | |
| Em-52 | 7978 | 25 | 319.1 | 149 | 15 | 130 | 4 | |
| Em-53 | 1509 | 25 | 60.4 | 39 | 2 | 36 | 1 | |
| Em-54 | 7014 | 25 | 280.6 | 171 | 20 | 147 | 4 | |
| Em-55 | 2708 | 25 | 108.3 | 91 | 7 | 80 | 4 | |
| Em-56 | 6308 | 25 | 252.3 | 144 | 22 | 113 | 9 | |
| Em-57 | 9166 | 25 | 366.6 | 178 | 29 | 141 | 8 | |
| Em-58 | 8334 | 25 | 333.4 | 150 | 23 | 122 | 5 | |
| Em-59 | 7105 | 25 | 284.2 | 89 | 15 | 73 | 1 | |
| Em-60 | 2100 | 25 | 84 | 51 | 8 | 43 | | |
| En-51 | 282 | 21 | 13.4 | 12 | 1 | 1 | | |
| En-52 | 67 | 25 | 2.7 | 1 | 1 | 1 | | |
| En-53 | 1470 | 25 | 58.8 | 59 | 9 | 50 | | 1号土壇 |
| En-56 | 102 | 25 | 4.1 | 3 | | 3 | | |
| En-51 | 234 | 22.5 | 10.4 | 4 | | 4 | | |
| En-56 | 60 | 25 | 2.4 | 1 | 1 | 1 | | 5号土壇 |
| Eq-53 | 8 | 25 | 0.3 | 1 | | 1 | | 1号配石 |
| Eq-55 | 115 | 25 | 4.6 | 3 | 3 | 3 | | |
| Eq-56 | 160 | 25 | 6.4 | 8 | 8 | 8 | | |
| Eq-60 | 65 | 25 | 2.6 | 2 | | 2 | | |
| Er-52 | 55 | 25 | 2.2 | 3 | | 3 | | 2号配石 |
| Er-53 | 132 | 25 | 5.3 | 5 | | 5 | | 2号配石 |
| Er-54 | 318 | 25 | 12.7 | 10 | 3 | 7 | | |
| Es-55 | 75 | 25 | 3 | 4 | | 4 | | |
| Es-53 | 26 | 25 | 1 | 3 | | 3 | | |
| Es-54 | 390 | 25 | 15.6 | 14 | 1 | 13 | | |
| Es-55 | 213 | 25 | 8.5 | 8 | 2 | 6 | | |
| Et-51 | 117 | 25 | 4.7 | 2 | | 2 | | 3・4号土壇 |
| Et-52 | 839 | 25 | 33.6 | 28 | 3 | 24 | | 13号配石 |
| Et-53 | 1565 | 25 | 62.6 | 51 | 8 | 42 | | 14号配石 |
| Et-54 | 1082 | 25 | 43.3 | 33 | 10 | 23 | | |
| Et-55 | 135 | 25 | 5.4 | 7 | | 6 | | |
| Et-56 | 180 | 25 | 7.2 | 7 | | 2 | | |
| Et-57 | 2616 | 25 | 104.6 | 62 | 11 | 50 | | 2号土壇 |
| Et-58 | 54 | 25 | 2.2 | 1 | 1 | 1 | | 4号屋外埋設 |
| Fa-47 | 24 | 20 | 1.2 | 1 | | 1 | | |
| Fa-48 | 107 | 25 | 4.3 | 1 | | 1 | | |
| Fa-49 | 60 | 25 | 2.4 | 1 | | 1 | | |
| Fa-50 | 135 | 25 | 5.4 | 6 | | 5 | | |
| Fa-51 | 160 | 25 | 6.4 | 3 | | 3 | | |
| Fa-52 | 2624 | 25 | 105 | 49 | 9 | 39 | | |
| Fa-53 | 653 | 25 | 25.4 | 26 | | 25 | | 2号土壇 |
| Fa-54 | 691 | 25 | 27.6 | 22 | | 19 | | |
| Fa-55 | 175 | 25 | 7 | 5 | | 4 | | |
| Fa-56 | 50 | 25 | 2 | 5 | | 5 | | |
| Fa-57 | 305 | 25 | 12.2 | 9 | | 8 | | |
| Fc-52 | 622 | 25 | 24.9 | 16 | | 12 | | |
| Fc-53 | 1544 | 25 | 61.8 | 23 | | 5 | | |
| Fc-54 | 261 | 25 | 10.4 | 4 | | 2 | | |
| Fc-55 | 44 | 25 | 1.8 | 2 | | 1 | | |
| Fd-51 | 577 | 25 | 23.1 | 5 | | 2 | | |
| Fd-52 | 3555 | 25 | 142.2 | 70 | | 10 | | 2号土壇 |
| Fd-53 | 773 | 25 | 30.9 | 22 | | 4 | | |
| Fd-54 | 393 | 25 | 15.7 | 7 | | 6 | | |
| Fd-55 | 195 | 25 | 7.8 | 5 | | 5 | | |
| Fd-47 | 223 | 25 | 8.9 | 2 | | 2 | | 1号屋外埋設 |
| Fe-50 | 28 | 25 | 6.1 | 1 | | 1 | | |
| Fe-52 | 2900 | 25 | 116 | 81 | | 5 | | 3号配石 |
| Fe-53 | 49 | 25 | 2 | 1 | | 1 | | |
| Fe-54 | 164 | 25 | 6.6 | 4 | | 4 | | |
| Fe-55 | 292 | 25 | 11.7 | 13 | | 1 | | 6号配石 |
| Fe-56 | 30 | 25 | 1.2 | 2 | | 1 | | 6号配石 |
| Fg-45 | 154 | 13.8 | 11.2 | 3 | | 3 | | |
| Fg-47 | 164 | 25 | 6.6 | 3 | | 1 | | |
| Fg-48 | 236 | 25 | 9.4 | 7 | | 1 | | |

| グリッド | 重量 (g) | 面積 (m ²) | g/m ² | 総数 | 部 位 | | | 検出遺構 |
|-------|--------|----------------------|------------------|-----|-----|-----|----|-------|
| | | | | | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| Fg-50 | 114 | 25 | 4.6 | 1 | | 1 | | |
| Fg-52 | 1935 | 25 | 77.4 | 45 | | 6 | | |
| Fg-53 | 520 | 25 | 20.8 | 14 | | 13 | | |
| Fg-55 | 235 | 25 | 9.4 | 10 | | 10 | | 11号配石 |
| Fg-56 | 188 | 25 | 7.5 | 6 | | 5 | | 11号配石 |
| Fh-45 | 2152 | 23.8 | 90.4 | 28 | | 4 | | 24 |
| Fh-48 | 14 | 25 | 0.6 | 1 | | 1 | | 1 |
| Fh-52 | 660 | 25 | 26.4 | 19 | | 2 | | 17 |
| Fh-53 | 2390 | 25 | 95.6 | 97 | | 7 | | 89 |
| Fh-54 | 427 | 25 | 17.1 | 13 | | 2 | | 11 |
| Fh-55 | 1437 | 25 | 57.5 | 47 | | 8 | | 3 |
| Fh-56 | 725 | 25 | 29 | 21 | | 5 | | 16 |
| Fh-58 | 209 | 7.5 | 27.9 | 1 | | 1 | | 1 |
| Fi-44 | 122 | 16.3 | 7.5 | 3 | | 2 | | 1 |
| Fi-45 | 21 | 25 | 0.8 | 1 | | 1 | | 1 |
| Fi-50 | 1206 | 25 | 48.2 | 44 | | 1 | | 21 |
| Fi-53 | 460 | 25 | 18.4 | 22 | | 1 | | 40 |
| Fi-54 | 564 | 25 | 22.6 | 16 | | 2 | | 13 |
| Fi-55 | 520 | 25 | 20.8 | 21 | | 7 | | 14 |
| Fj-44 | 352 | 22.5 | 15.6 | 9 | | 1 | | 8 |
| Fj-45 | 158 | 25 | 6.3 | 2 | | 1 | | 1 |
| Fj-46 | 639 | 25 | 25.6 | 11 | | 1 | | 9 |
| Fk-45 | 104 | 25 | 4.2 | 3 | | 1 | | 2 |
| Fk-46 | 347 | 25 | 13.9 | 8 | | 2 | | 6 |
| Fk-47 | 415 | 25 | 16.6 | 13 | | 2 | | 13 |
| Fk-48 | 1807 | 25 | 72.3 | 11 | | 2 | | 1 |
| Fk-49 | 170 | 25 | 6.8 | 6 | | 6 | | 8 |
| Fk-50 | 2157 | 25 | 86.3 | 31 | | 6 | | 25 |
| Fk-51 | 158 | 25 | 6.3 | 12 | | 12 | | 12 |
| Fk-52 | 484 | 25 | 19.4 | 16 | | 3 | | 1 |
| Fk-53 | 1150 | 25 | 46 | 18 | | 3 | | 12 |
| Fk-54 | 1100 | 25 | 4.4 | 35 | | 2 | | 33 |
| Fk-55 | 660 | 25 | 26.4 | 21 | | 2 | | 19 |
| Fl-45 | 672 | 25 | 26.9 | 12 | | 2 | | 8 |
| Fl-46 | 194 | 25 | 7.8 | 8 | | 8 | | 7 |
| Fl-47 | 243 | 25 | 9.7 | 9 | | 1 | | 8 |
| Fl-48 | 515 | 25 | 20.6 | 20 | | 1 | | 17 |
| Fl-49 | 274 | 25 | 10.9 | 18 | | 2 | | 16 |
| Fl-50 | 526 | 25 | 21 | 17 | | 3 | | 14 |
| Fl-51 | 482 | 25 | 19.3 | 9 | | 1 | | 8 |
| Fl-52 | 2220 | 25 | 88.8 | 50 | | 10 | | 39 |
| Fl-53 | 2120 | 25 | 84.8 | 67 | | 12 | | 54 |
| Fl-54 | 17165 | 25 | 686.6 | 470 | | 91 | | 375 |
| Fl-55 | 3880 | 25 | 155.2 | 87 | | 19 | | 67 |
| Fm-42 | 460 | 22.5 | 20.4 | 11 | | 1 | | 11 |
| Fm-43 | 165 | 25 | 6.6 | 3 | | 3 | | 3 |
| Fm-44 | 442 | 25 | 17.7 | 20 | | 1 | | 19 |
| Fm-45 | 856 | 25 | 34.2 | 28 | | 3 | | 24 |
| Fm-46 | 229 | 25 | 9.2 | 9 | | 9 | | 9 |
| Fm-47 | 225 | 25 | 9 | 10 | | 10 | | 10 |
| Fm-48 | 240 | 25 | 9.6 | 4 | | 4 | | 4 |
| Fm-49 | 190 | 25 | 7.6 | 3 | | 1 | | 2 |
| Fm-50 | 908 | 25 | 36.3 | 35 | | 4 | | 30 |
| Fm-51 | 1140 | 25 | 45.6 | 32 | | 7 | | 25 |
| Fm-52 | 8994 | 25 | 359.8 | 221 | | 33 | | 183 |
| Fm-53 | 22664 | 25 | 906.6 | 613 | | 106 | | 491 |
| Fm-54 | 30292 | 25 | 1211.7 | 633 | | 130 | | 485 |
| Fm-55 | 6416 | 25 | 256.6 | 181 | | 26 | | 154 |
| Fm-56 | 315 | 12.5 | 25.2 | 10 | | 2 | | 8 |
| Fn-42 | 1790 | 22.5 | 79.6 | 49 | | 6 | | 42 |
| Fn-46 | 114 | 25 | 4.6 | 4 | | 4 | | 4 |
| Fn-47 | 657 | 25 | 26.3 | 15 | | 4 | | 11 |
| Fn-48 | 518 | 25 | 20.7 | 25 | | 24 | | 1 |
| Fn-49 | 174 | 25 | 7 | 9 | | 1 | | 8 |
| Fn-50 | 423 | 25 | 16.9 | 12 | | 2 | | 10 |
| Fn-51 | 679 | 25 | 27.2 | 18 | | 3 | | 15 |
| Fn-52 | 4429 | 25 | 177.2 | 130 | | 23 | | 105 |
| Fn-53 | 11857 | 25 | 474.3 | 332 | | 68 | | 256 |
| Fn-54 | 16773 | 25 | 670.9 | 416 | | 48 | | 352 |
| Fn-55 | 9222 | 25 | 368.9 | 210 | | 31 | | 173 |
| Fo-41 | 101 | 20 | 5.1 | 2 | | 2 | | 2 |
| Fo-43 | 1363 | 25 | 54.5 | 36 | | 7 | | 28 |
| Fo-44 | 1692 | 25 | 67.7 | 54 | | 10 | | 42 |
| Fo-45 | 1185 | 25 | 47.7 | 30 | | 5 | | 25 |
| Fo-46 | 370 | 25 | 14.8 | | | | | |

9 グリッド

| グリッド | 重量 (g) | 面積 (m ²) | g/m ² | 総数 | 部位 | | | 検出遺構 |
|--------|-----------|-------------------------|------------------|-----|-----|----|----|------------------|
| | | | | | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| F r-41 | 3477 | 25 | 139.1 | 84 | 5 | 78 | 1 | |
| F r-42 | 3449 | 25 | 138 | 80 | 19 | 59 | 2 | |
| F r-43 | 3010 | 25 | 120.4 | 93 | 5 | 87 | 1 | |
| F r-44 | 2545 | 25 | 101.8 | 75 | 9 | 60 | 6 | |
| F r-45 | 2133 | 25 | 85.3 | 59 | 14 | 45 | | |
| F r-46 | 653 | 25 | 26.1 | 21 | 1 | 20 | | |
| F r-47 | 291 | 25 | 11.6 | 10 | 1 | 9 | | |
| F r-48 | 45 | 25 | 1.8 | 3 | | 3 | | 9号屋外埋設 9号屋外埋設 |
| F r-49 | 1180 | 25 | 47.2 | 39 | 7 | 32 | | |
| F r-50 | 1286 | 25 | 51.4 | 30 | 2 | 26 | 2 | |
| F r-51 | 640 | 25 | 25.6 | 23 | | 20 | 2 | |
| F r-52 | 2880 | 25 | 115.2 | 59 | 7 | 52 | | 32号配石 |
| F r-53 | 2398 | 25 | 95.9 | 40 | 4 | 32 | 4 | 32号配石 |
| F r-54 | 239 | 15 | 15.9 | 3 | 1 | 2 | | |
| F s-39 | 208 | 25 | 8.3 | 6 | | 5 | | |
| F s-40 | 2168 | 25 | 86.7 | 55 | 5 | 49 | 1 | |
| F s-41 | 3654 | 25 | 146.2 | 82 | 17 | 61 | 4 | |
| F s-42 | 1042 | 25 | 41.7 | 25 | 2 | 22 | | |
| F s-44 | 418 | 25 | 16.7 | 20 | 2 | 18 | | |
| F s-45 | 1371 | 25 | 54.8 | 35 | 8 | 26 | 1 | |
| F s-46 | 192 | 25 | 7.7 | 9 | 1 | 4 | | |
| F s-47 | 18 | 25 | 0.7 | 4 | | 4 | | |
| F s-48 | 90 | 25 | 3.6 | 5 | | 5 | | |
| F s-49 | 570 | 25 | 22.8 | 19 | 1 | 18 | | |
| F s-50 | 4947 | 25 | 197.9 | 115 | 17 | 94 | 4 | |
| F s-51 | 3669 | 25 | 146.8 | 61 | 11 | 48 | 2 | |
| F s-52 | 3692 | 25 | 145.2 | 80 | 11 | 66 | 3 | 32号配石 |
| F s-53 | 1400 | 25 | 56 | 36 | 5 | 31 | | 32号配石 |
| F s-54 | 255 | 5 | 51 | 1 | | 4 | | |
| F t-39 | 113 | 25 | 4.5 | 1 | | 1 | | |
| F t-40 | 992 | 25 | 39.7 | 23 | 3 | 18 | 2 | |
| F t-41 | 1234 | 25 | 49.4 | 29 | 3 | 25 | 1 | |
| F t-42 | 2317 | 25 | 92.7 | 61 | 10 | 51 | | |
| F t-43 | 98 | 25 | 3.9 | 3 | | 3 | | |
| F t-44 | 15 | 25 | 0.6 | 2 | | 2 | | |
| F t-45 | 364 | 25 | 14.6 | 15 | 1 | 14 | | |
| F t-46 | 438 | 25 | 17.5 | 9 | 3 | 6 | | |
| F t-47 | 472 | 25 | 18.9 | 16 | 1 | 15 | | |
| F t-48 | 640 | 25 | 25.6 | 18 | 2 | 16 | | |
| F t-49 | 105 | 25 | 4.2 | 1 | | 1 | | |
| F t-50 | 245 | 25 | 9.8 | 9 | | 9 | | |
| F t-51 | 1194 | 25 | 47.8 | 29 | 5 | 22 | 2 | |
| F t-52 | 285 | 25 | 11.4 | 10 | | 10 | | |
| G a-38 | 82 | 25 | 3.3 | 2 | | 2 | | |
| G a-39 | 910 | 25 | 36.4 | 20 | 4 | 15 | 1 | |
| G a-40 | 200 | 25 | 8 | 7 | | 7 | | |
| G a-41 | 520 | 25 | 20.8 | 12 | 3 | 9 | | |
| G a-42 | 118 | 25 | 4.7 | 4 | | 4 | | |
| G a-43 | 560 | 25 | 22.4 | 10 | | 10 | | |
| G a-46 | 310 | 25 | 12.4 | 12 | 1 | 11 | | |
| G a-47 | 30 | 25 | 1.2 | 1 | 3 | 24 | | |
| G a-48 | 1273 | 25 | 50.9 | 31 | | 31 | | |
| G a-49 | 779 | 25 | 31.2 | 12 | | 11 | | |
| G b-38 | 1093 | 25 | 43.7 | 18 | 1 | 17 | | |
| G b-39 | 153 | 25 | 6.1 | 7 | | 6 | 1 | |
| G b-40 | 140 | 25 | 5.6 | 7 | | 7 | | |
| G b-41 | 108 | 25 | 4.3 | 3 | | 3 | | |
| G b-43 | 140 | 25 | 5.6 | 6 | | 6 | | |
| G b-44 | 1044 | 25 | 41.8 | 23 | 3 | 19 | 1 | |
| G b-45 | 740 | 25 | 29.6 | 17 | | 17 | | |
| G b-46 | 482 | 25 | 19.3 | 9 | 1 | 8 | | |
| G b-49 | 420 | 25 | 16.8 | 11 | | 11 | | |
| G b-50 | 49 | 25 | 2 | 2 | 1 | 1 | | |
| G b-51 | 205 | 25 | 8.2 | 6 | 1 | 5 | | |
| G b-52 | 29 | 16.6 | 1.7 | 1 | | 1 | | |
| G c-39 | 249 | 25 | 10 | 11 | 3 | 8 | | |
| G c-40 | 99 | 25 | 4 | 1 | | 1 | | |
| G c-41 | 16 | 25 | 0.6 | 1 | | 1 | | |
| G c-42 | 470 | 25 | 18.8 | 12 | 2 | 10 | | |
| G c-43 | 1924 | 25 | 77 | 41 | 6 | 35 | | |
| G c-44 | 2675 | 25 | 107 | 51 | 10 | 41 | 1 | |
| G c-45 | 2390 | 25 | 95.6 | 49 | 6 | 42 | | |
| G c-46 | 615 | 25 | 24.6 | 15 | | 14 | 1 | |
| G c-47 | 30 | 25 | 1.2 | 1 | | 1 | | |
| G c-48 | 32 | 25 | 1.3 | 1 | | 1 | | |
| G c-49 | 2060 | 25 | 82.4 | 42 | 9 | 33 | | |
| G c-50 | 619 | 25 | 24.8 | 17 | 4 | 13 | | |
| G c-51 | 18 | 25 | 0.7 | 2 | | 2 | | |
| G d-38 | 421 | 25 | 16.8 | 11 | 2 | 9 | | |
| G d-39 | 115 | 25 | 4.6 | 4 | | 4 | | |
| G d-40 | 425 | 25 | 17 | 9 | 2 | 7 | | |
| G d-41 | 205 | 25 | 8.2 | 8 | | 8 | | |
| G d-42 | 4112 | 25 | 164.5 | 68 | 7 | 59 | 2 | |
| G d-43 | 2873 | 25 | 114.9 | 55 | 7 | 44 | 4 | |
| G d-44 | 1675 | 25 | 67 | 42 | 2 | 37 | 3 | |
| G d-45 | 97 | 25 | 3.9 | 2 | 1 | 1 | | |
| G d-48 | 87 | 25 | 3.5 | 4 | | 4 | | |
| G d-49 | 1280 | 25 | 51.2 | 19 | 3 | 15 | 1 | |
| G d-50 | 3570 | 25 | 142.8 | 54 | 8 | 46 | | |
| G e-38 | 2868 | 25 | 114.7 | 39 | 8 | 30 | | |
| G e-39 | 435 | 25 | 17.4 | 7 | 2 | 5 | | |
| G e-41 | 133 | 25 | 5.3 | 10 | 1 | 9 | | |
| G e-42 | 2548 | 25 | 101.9 | 53 | 13 | 39 | 1 | |
| G e-43 | 1961 | 25 | 76.4 | 40 | 5 | 29 | 6 | |
| G e-44 | 865 | 25 | 34.6 | 22 | 3 | 19 | | |
| G e-45 | 315 | 25 | 12.6 | 6 | | 6 | | |
| G e-46 | 179 | 25 | 7.2 | 5 | 1 | 2 | 2 | |
| G e-47 | 126 | 25 | 5 | 4 | 1 | 3 | | |
| G e-48 | 380 | 25 | 15.2 | 9 | | 9 | | 19号土塊 |
| G e-49 | 257 | 25 | 10.3 | 7 | | 7 | | |
| G e-50 | 912 | 22.1 | 41.3 | 19 | | | | |
| G e-51 | 213 | 7.5 | 28.4 | 4 | 1 | 3 | | |
| G f-35 | 140 | 25 | 5.6 | 4 | | 4 | | |
| G f-36 | 95 | 25 | 3.8 | 3 | | 3 | | |
| G f-38 | 1155 | 25 | 46.2 | 16 | 4 | 12 | | |
| G f-42 | 336 | 25 | 13.4 | 11 | 2 | 8 | | |
| G f-43 | 364 | 25 | 14.6 | 16 | 1 | 4 | 3 | |
| G f-44 | 105 | 25 | 4.2 | 4 | 1 | 3 | | |

| グリッド | 重量 (g) | 面積 (m ²) | g/m ² | 総数 | 部位 | | | 検出遺構 |
|--------|-----------|-------------------------|------------------|-----|-----|----|-----|---------|
| | | | | | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| G f-45 | 83 | 25 | 3.3 | 3 | | | 3 | |
| G f-46 | 95 | 25 | 3.8 | 1 | | | 1 | |
| G j-47 | 277 | 25 | 11.1 | 8 | | 1 | 6 | 1 18号土塊 |
| G f-48 | 395 | 25 | 15.8 | 11 | | 3 | 8 | |
| G f-49 | 200 | 25 | 8 | 7 | | | 7 | |
| G f-50 | 445 | 20 | 22.3 | 10 | | 1 | 9 | |
| G g-38 | 970 | 25 | 38.8 | 23 | | 4 | 19 | |
| G g-39 | 4003 | 25 | 160.1 | 67 | | 9 | 54 | 4 35号配石 |
| G g-40 | 5087 | 25 | 203.5 | 78 | | 14 | 60 | 4 35号配石 |
| G g-42 | 826 | 25 | 33 | 20 | | 3 | 17 | |
| G g-45 | 400 | 25 | 16 | 9 | | 1 | 7 | 1 |
| G g-46 | 75 | 25 | 3 | 2 | | | 2 | |
| G g-47 | 30 | 25 | 1.2 | 1 | | | 1 | |
| G g-48 | 148 | 25 | 5.9 | 6 | | 1 | 4 | 1 |
| G g-49 | 1365 | 25 | 54.6 | 33 | | 5 | 27 | 1 |
| G h-34 | 30 | 25 | 1.2 | 1 | | | 1 | |
| G h-36 | 1180 | 25 | 47.2 | 19 | | 1 | 18 | |
| G h-37 | 5193 | 25 | 207.7 | 139 | | 14 | 123 | 2 |
| G h-38 | 5167 | 25 | 206.7 | 130 | | 16 | 112 | 1 |
| G h-39 | 1951 | 25 | 78 | 51 | | 10 | 40 | 1 |
| G h-40 | 940 | 25 | 37.6 | 30 | | 4 | 25 | 1 |
| G h-41 | 96 | 25 | 3.8 | 2 | | | 1 | 1 |
| G h-42 | 128 | 25 | 5.1 | 7 | | 1 | 6 | |
| G h-45 | 970 | 25 | 38.8 | 16 | | 3 | 12 | 1 |
| G h-46 | 78 | 25 | 3.1 | 2 | | | 1 | |
| G h-47 | 510 | 25 | 20.4 | 9 | | 4 | 5 | |
| G h-48 | 236 | 25 | 9 | 10 | | 2 | 8 | |
| G h-49 | 400 | 23.3 | 17.2 | 10 | | | 10 | |
| G i-34 | 497 | 25 | 19.9 | 12 | | 2 | 10 | |
| G i-36 | 801 | 25 | 32 | 22 | | 5 | 17 | |
| G i-37 | 13667 | 25 | 546.7 | 203 | | 21 | 172 | 10 5 |
| G i-38 | 7040 | 25 | 281.6 | 155 | | 19 | 131 | 5 |
| G i-39 | 3710 | 25 | 148.4 | 87 | | 15 | 70 | 2 |
| G i-40 | 1044 | 25 | 41.8 | 18 | | | 18 | |
| G i-41 | 60 | 25 | 2.4 | 3 | | | 3 | |
| G i-42 | 372 | 25 | 14.9 | 7 | | 1 | 6 | |
| G i-43 | 498 | 25 | 19.9 | 11 | | 2 | 9 | |
| G i-44 | 727 | 25 | 29.1 | 13 | | 4 | 9 | |
| G i-45 | 145 | 25 | 5.8 | 5 | | 1 | 4 | |
| G i-46 | 165 | 25 | 6.6 | 6 | | | 6 | |
| G i-48 | 60 | 25 | 2.4 | 3 | | | 3 | |
| G i-49 | 5 | 15 | 0.3 | 1 | | | 1 | |
| G j-34 | 413 | 25 | 16.5 | 4 | | 2 | 2 | |
| G j-35 | 163 | 25 | 6.5 | 3 | | 1 | 2 | |
| G j-36 | 2320 | 25 | 92.8 | 54 | | 6 | 48 | |
| G j-37 | 11551 | 25 | 462 | 228 | | 36 | 187 | 5 |
| G j-38 | 7591 | 25 | 303.6 | 164 | | 25 | 135 | 4 |
| G j-39 | 4475 | 25 | 179 | 91 | | 10 | 79 | 2 |
| G j-40 | 848 | 25 | 34 | 22 | | | 18 | |
| G j-41 | 715 | 25 | 28.6 | 13 | | 5 | 8 | |
| G j-42 | 915 | 25 | 36.6 | 17 | | 2 | 15 | |
| G j-43 | 706 | 25 | 28.2 | 11 | | 1 | 10 | |
| G j-44 | 1017 | 25 | 40.7 | 14 | | 3 | 11 | |
| G j-45 | 244 | 25 | 9.8 | 7 | | 1 | 6 | |
| G j-46 | 191 | 25 | 7.4 | 5 | | | 5 | 1 |
| G j-47 | 400 | 25 | 16 | 12 | | | 12 | |
| G j-48 | 156 | 25 | 6.2 | 3 | | 2 | 1 | |
| G k-32 | 635 | 25 | 25.4 | 17 | | 5 | 12 | |
| G k-33 | 1023 | 25 | 40.9 | 27 | | 6 | 21 | |
| G k-34 | 332 | 25 | 13.3 | 7 | | 1 | 6 | |
| G k-35 | 102 | 25 | 4.1 | 2 | | | 2 | |
| G k-36 | 2972 | 25 | 118.9 | 61 | | 10 | 51 | |
| G k-37 | 2545 | 25 | 101.8 | 67 | | 8 | 57 | 2 |
| G k-38 | 1648 | 25 | 65.9 | 40 | | 4 | 32 | 4 |
| G k-39 | 2206 | 25 | 88.2 | 49 | | 7 | 41 | 1 |
| G k-40 | 988 | 25 | 39.5 | 25 | | 5 | 20 | |
| G k-41 | 3812 | 25 | 152.5 | 91 | | 5 | 84 | 2 |
| G k-42 | 955 | 25 | 38.2 | 19 | | 2 | 15 | 2 |
| G k-43 | 648 | 25 | 25.9 | 23 | | | 22 | 1 |
| G k-44 | 17 | 25 | 0.7 | 1 | | | 1 | |
| G k-46 | 165 | 25 | 6.6 | 3 | | | 3 | |
| G l-31 | 670 | 25 | 26.8 | 12 | | | 12 | |
| G l-32 | 556 | 25 | 22.2 | 14 | | 2 | 12 | |
| G l-33 | 2790 | 25 | 111.6 | 61 | | 9 | 49 | 3 |
| G l-34 | 2085 | 25 | 83.4 | 34 | | 4 | 30 | |
| G | | | | | | | | |

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

| グリッド | 重量 (g) | 面積 (m ²) | g/m ² | 総数 | 部位 | | | 検出遺構 |
|--------|-----------|-------------------------|------------------|-----|-----|-----|-----------|------|
| | | | | | 口縁部 | 胴部 | 底部 | |
| G n-45 | 67 | 25 | 2.7 | 3 | 1 | 2 | | |
| G n-46 | 175 | 25 | 7 | 2 | | 2 | | |
| G o-39 | 1000 | 22.5 | 44.4 | 32 | | 32 | | |
| G o-40 | 10066 | 24.1 | 417.7 | 174 | 31 | 141 | 2 | |
| G o-41 | 36 | 25 | 1.4 | 2 | 2 | | | |
| G o-42 | 510 | 25 | 20.4 | 17 | 1 | 16 | | |
| G o-43 | 265 | 25 | 10.6 | 8 | | 8 | | |
| G o-44 | 695 | 25 | 27.8 | 17 | 1 | 16 | 10号屋外埋設 | |
| G o-45 | 40 | 25 | 1.6 | 1 | | 1 | | |
| G p-43 | 445 | 15 | 29.7 | 13 | 2 | 11 | | |
| G p-44 | 3606 | 18.8 | 191.8 | 40 | 1 | 38 | 1 10号屋外埋設 | |

4章 自然科学的分析

- 〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析
- 〔2〕 田篠中原遺跡の縄文土器胎土分析
- 〔3〕 田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定
- 〔4〕 田篠中原遺跡で見られる石材の種類と地質的関連
- 〔5〕 遺跡調査における地中レーダの活用

5章 成果と問題点

- 〔1〕 田篠中原遺跡の提起する諸問題
- 〔2〕 出土石器の検討
- 〔3〕 田篠中原遺跡出土石斧について

〔1〕田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設 土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男

(株)ズコーシャ・総合科学研究所 福島道広、中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は、長期間地下に埋蔵されると圧力、水分などの物理的な作用や、土の中に分布する種々の微生物の作用を受けて崩壊していく。従って、遺物を構成していた生体成分も、次々と分解し、千年・万年という長い年月の間にはすっかりなくなるものとこれまで考えられてきた。

最近、生体成分の一部、特に脂肪は微量ながら比較的安定した状態で遺存することが判明した。^(1・2) もともと脂肪は、空気にさらされると酸化分解してしまう性質をもっている。表面に露出している脂質は、長期間おかずして酸化分解を受け、酸化皮膜を形成する。この皮膜のため、多孔質の土器内部に浸透した脂肪は、もとの脂肪のまま保存されることがわかってきた。

R.C.A.Rottlander や D.A.Priestley らは、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、⁽³⁾ 古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子、⁽⁴⁾ 約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽⁵⁾に残存する脂肪の脂肪酸組成は安定した状態で保持されていることなどを報告している。また佐原らは奈良県平城京跡より出土した灯明皿からエルシン酸を多く含むナタネ油を検出した。⁽⁶⁾ このような脂肪を構成する脂肪酸およびステロールの組成は、動植物種によってすべて少しずつ化学組成が異なっている。従って、現生動植物試料の脂肪の化学組成を基準にして、これと出土試料に保存されていた脂肪の化学組成を照合することで、“脂肪の持主”を特定することができる。出土遺物の脂肪の性質から、かつて存在していた動植物の種類をわからせるとともに、その遺物が何に使われ、それを使っていた古代人がどんな生活をしていたかなど、原始時代の環境復原、衣・食・住の生活復原が可能になる。この「残存脂肪分析法」を用いて、田篠中原遺跡の遺構群および埋設土器の性格、用途を解明しようとした。

1 土壌および埋設土器試料

田篠中原遺跡は縄文時代中期後半のものとして推定されている。遺構配置状況(付図1)と試料採取地点を図1-1～1-19に示す。1号配石遺構埋設土器3試料(No.1 HP-1～No.1 HP-3)および土壌4試料(No.1 HS-1～No.1 HS-4)、1号屋外埋設土器16試料(No.1 YP-1～No.1 YP-16)および土器付着土壌13試料(No.1 YS-1～No.1 YS-13)、2号配石遺構埋設土器3試料(No.2 HP-1

参考文献

- (1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp 124。
- (2) 中野益男：「残存脂肪酸による古代復元」、『講演収録集—新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』、第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、1989、pp 114。
- (3) R.C.A.Rottlander and H. Schlichtherle：「Food identification of samples from archaeological sites」、『Archaeo.Physika.』、10巻、1979、pp 260。
- (4) D.A.Priestley, W.C. Galinat and A.C.Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」、『Nature』、296巻、1981、pp 146。
- (5) R.C.A.Rottlander and H. Schlichtherle：「Analyse Frühgeschichtlichen Gefäßinhalte」、『Naturwissenschaften』、70巻、pp 33。
- (6) 佐原 真：「原始古代の残存脂肪成分の研究」、『奈良国立文化財研究報告』、1983、pp 56。

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

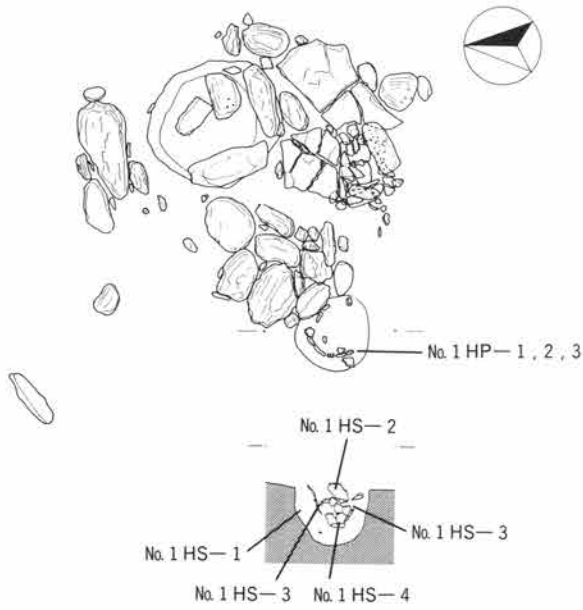


図1-1 1号配石遺構（敷石住居跡）埋設土器（埋甕）
-土壤試料採取地点

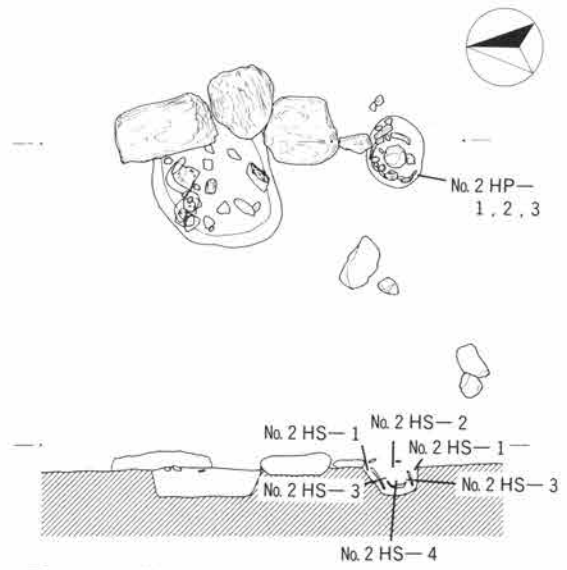


図1-2 2号配石遺構（敷石住居跡）埋設土器（埋甕）
-土壤試料採取地点



図1-3 6号配石遺構伏甕-土壤試料採取地点

0 1:40 2m

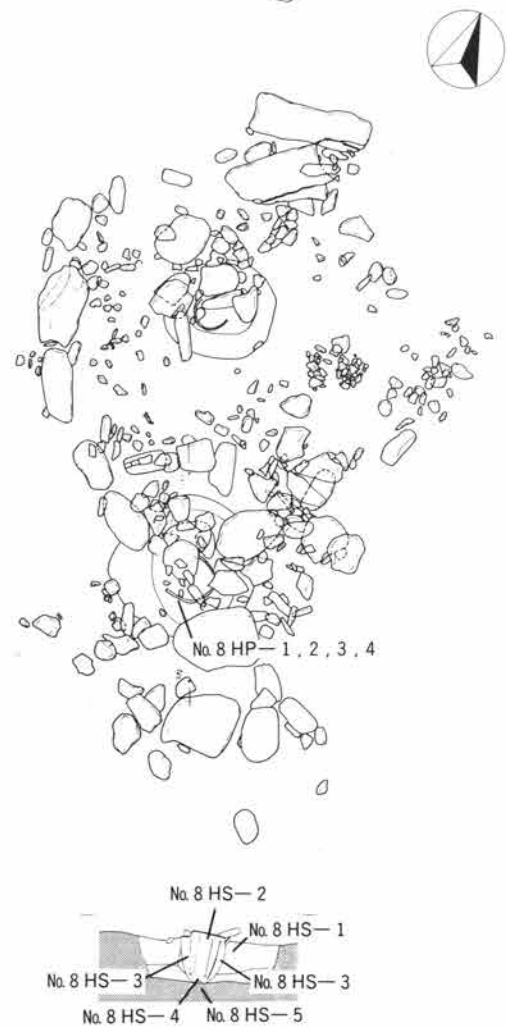


図1-4 8号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）
埋甕-土壤試料採取地点

図1 土壤試料採取地点（1-1~4）

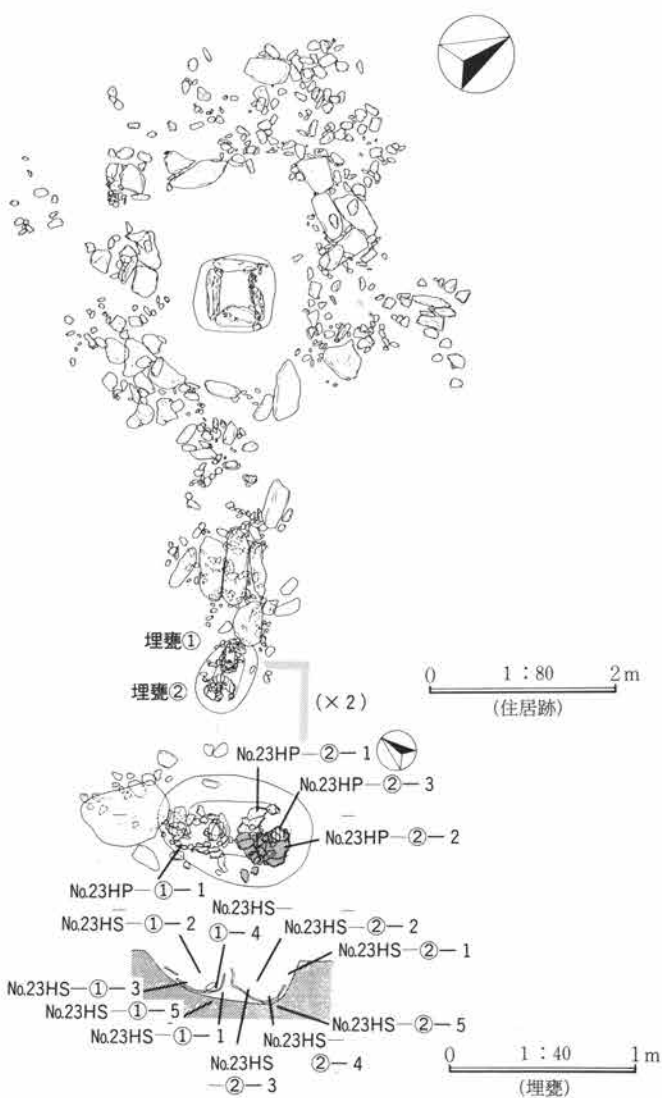


图1-5 23号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡) 埋壙①・埋壙②
-土壤試料採取地点

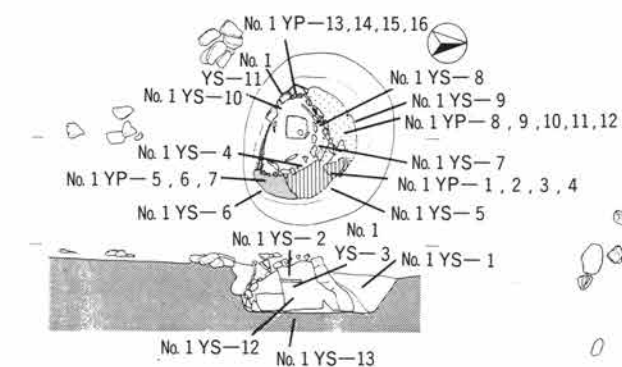


图1-7 1号屋外埋設土器-土壤試料採取地点

0 1:40 1m

图1 土壤試料採取地点(1-5~9)

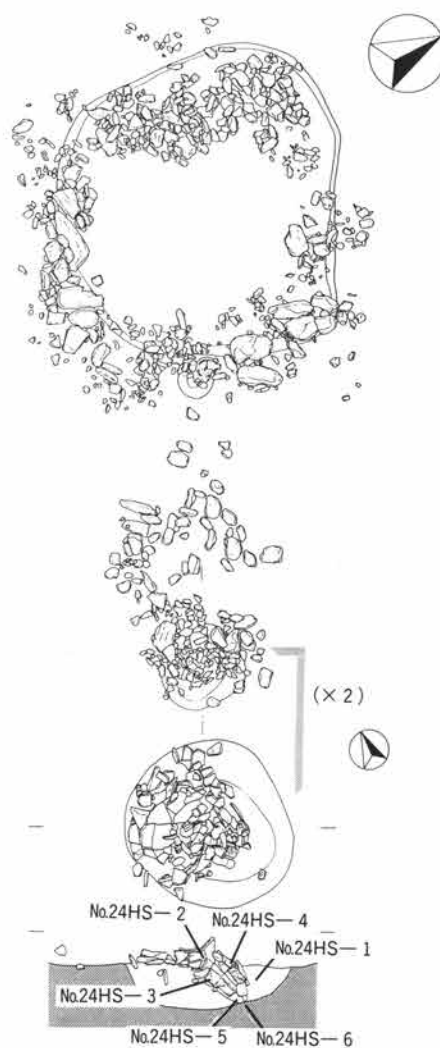


图1-6 24号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡)
先端部埋壙-土壤試料採取地点

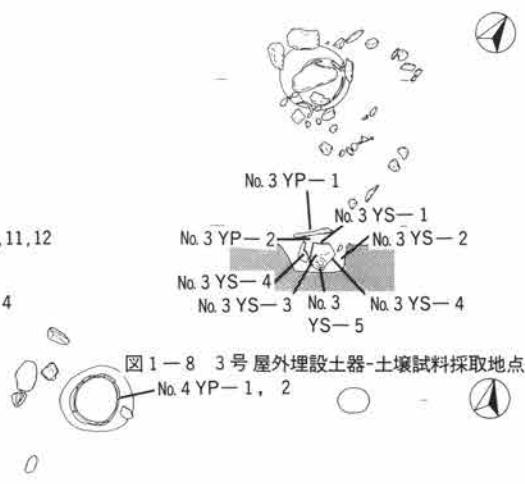


图1-8 3号屋外埋設土器-土壤試料採取地点

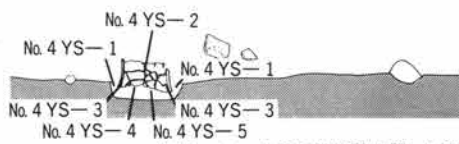


图1-9 4号屋外埋設土器-土壤試料採取地点

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

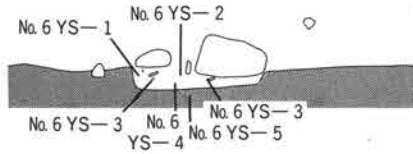
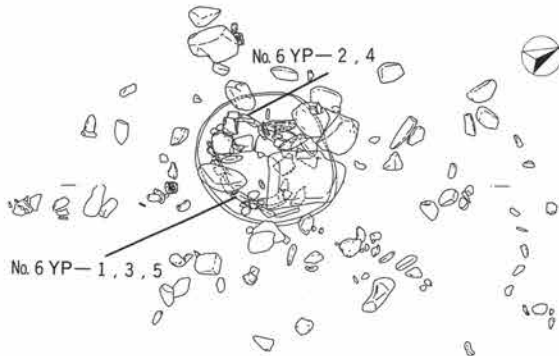


図1-10 6号屋外埋設土器-土壤試料採取地点

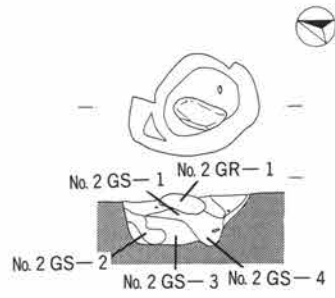


図1-11 2号土壤-土壤試料採取地点

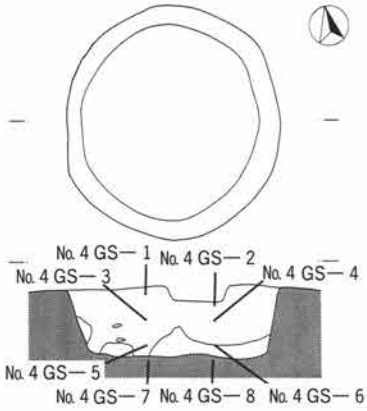


図1-13 4号土壤-土壤試料採取地点

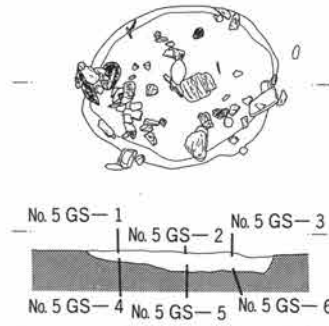


図1-14 5号土壤-土壤試料採取地点

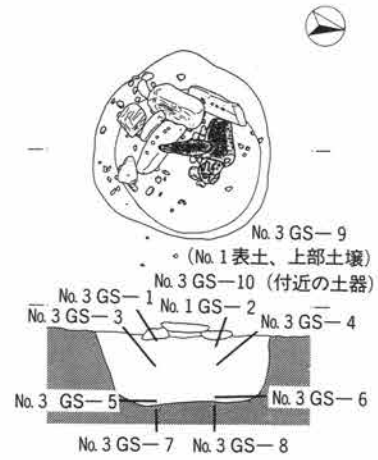


図1-12 3号土壤-土壤試料採取地点

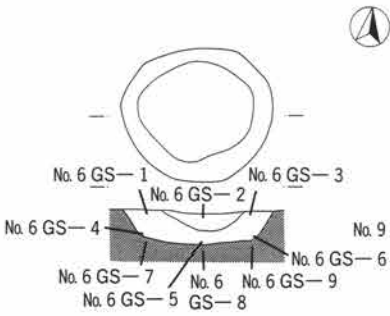


図1-15 6号土壤-土壤試料採取地点

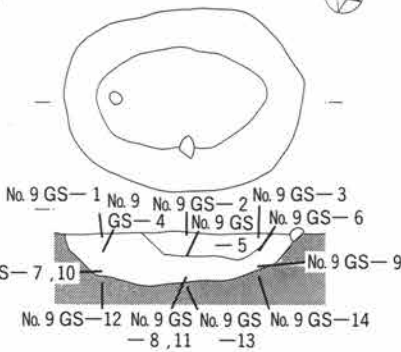


図1-16 9号土壤-土壤試料採取地点

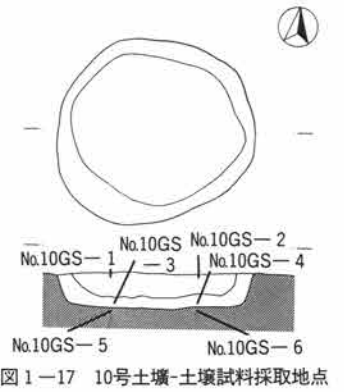


図1-17 10号土壤-土壤試料採取地点

0 1 : 40 1 m

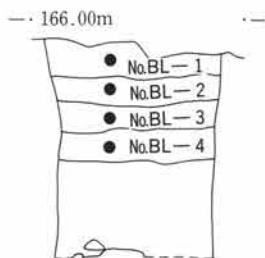


図1-18 標準土壤採取地点 (2号土壤周辺)

標準土壤試料は他に
1号屋外埋設土器周辺から、
No. 9 ~ No. 12までを採取している。

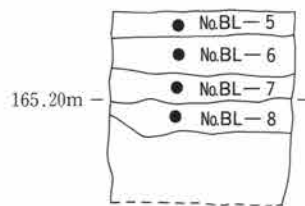


図1-19 標準土壤採取地点 (3号屋外埋設土器周辺)

図1 土壤試料採取地点 (1-10~19)

0 1 : 40 1 m

～No.2 HP-3) および土壌4試料 (No.2 HS-1～No.2 HS-4)、2号土壌土壌4試料 (No.2 GS-1～No.2 GS-4)、および礫1試料 (No.2 GR-1)、3号屋外埋設土器2試料 (No.3 YP-1～No.3 YP-2) および土器付着土壌5試料 (No.3 YS-1～No.3 YS-5)、3号土壌土壌10試料 (No.3 GS-1～No.3 GS-10)、4号屋外埋設土器2試料 (No.4 YP-1～No.4 YP-2) および土器付着土壌5試料 (No.4 YS-1～No.4 YS-5)、4号土壌土壌8試料 (No.4 GS-1～No.4 GS-8)、5号土壌土壌7試料 (No.5 GS-1～No.5 GS-7)、6号配石遺構伏壺5試料 (No.6 HP-1～No.6 HP-5) および土壌6試料 (No.6 HS-1～No.6 HS-6)、6号屋外埋設土器6試料 (No.6 YP-1～No.6 YP-6) および土器付着土壌5試料 (No.6 YS-1～No.6 YS-5)、6号土壌土壌9試料 (No.6 GS-1～No.6 GS-9)、8号配石遺構埋壺4試料 (No.8 HP-1～No.8 HP-4) および土壌5試料 (No.8 HS-1～No.8 HS-5)、9号土壌土壌14試料 (No.9 GS-1～No.9 GS-14)、10号土壌土壌6試料 (No.10 GS-1～No.10 GS-6)、23号配石遺構埋壺①1試料 (No.23 HP-①-1) および土壌5試料 (No.23 HS-①-1～No.23 HS-①-5)、23号配石遺構埋壺②3試料 (No.23 HP-②-1～No.23 HP-②-3) および土壌5試料 (No.23 HS-②-1～No.23 HS-②-5)、24号配石遺構先端部埋壺付着土壌6試料 (No.24 HS-1～No.24 HS-6)、対照区土壌12試料 (No.BL-1～No.BL-12)、計179試料について残存脂肪分析をした。

2 土壌試料の無機成分

土壌試料中の無機成分を調べ遺構および埋設土器の性格の解明を試みた。試料の分析は次のようにして行った。乾燥土壌試料をメノウ乳鉢で細粉し、それを正確に磁製ルツボにとり、500°Cの電気炉で4時間加熱して有機物を分解、冷却後テフロンビーカーに移し、フッ化水素および硝酸一過塩素酸(3:1)を加え、200°Cで加熱分解した。これを蒸発乾固後、残渣に塩酸を加え、加温溶解し、一定容にしてから、原子吸光法により鉄(Fe)、マンガン(Mn)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、ナトリウム(Na)、カリウム(K)の主要元素および銅(Cu)、亜鉛(Zn)の微量元素を分析した。リン(P)は比色法により定量した。遺構および埋設土器内外土壌試料、対照区土壌試料の重金属分布を図2-1～2-10に示す。

(7) 土壌養分測定法委員会編：「土壌養分分析法」、養賢堂、東京、1970、pp 430。

各遺構、埋設土器試料ともに主要元素のうちMg、Ca、NaおよびK含量にそれほど大きな差は認められなかった。しかしその中でも1号配石遺構、1号屋外埋設土器および3号土壌ではCaおよびMgがわずかではあるが対照区土壌より高い値を示した。このうちCa、Naは動物体に多く含まれている元素であることから、動物体の痕跡が認められた。また微量元素についても同様の傾向がみられた。

墓壙の認定に広く利用されているP分布を図3に示す。図に見られるように、対照区土壌に比べ各遺構および土壌とも高い値を示した。その中でも1号屋外

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

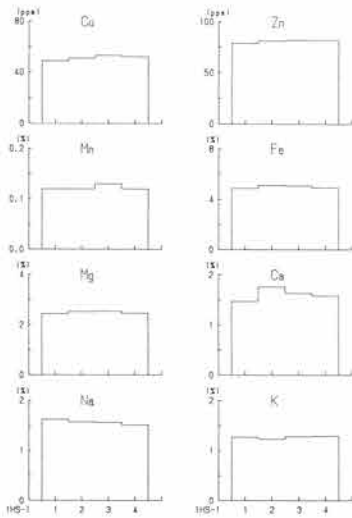


図 2-1 1号配石遺構埋設土器の重金属分布

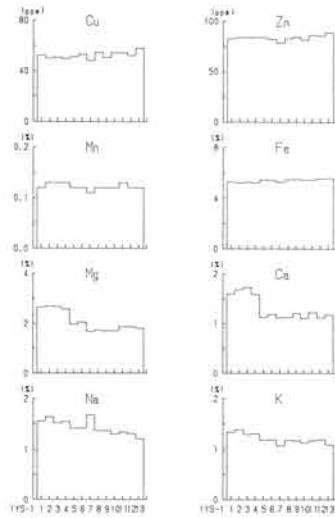


図 2-2 1号屋外埋設土器の重金属分布

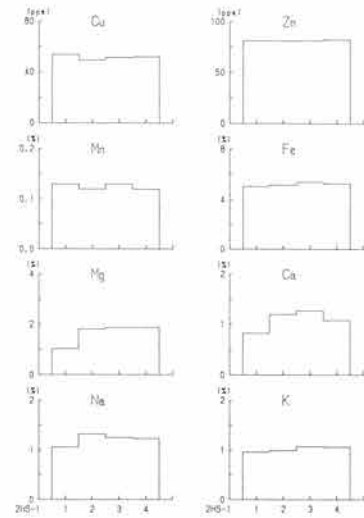


図 2-3 2号配石遺構埋設土器の重金属分布

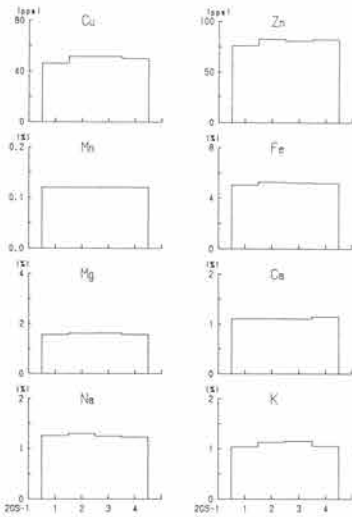


図 2-4 2号土壌の重金属分布

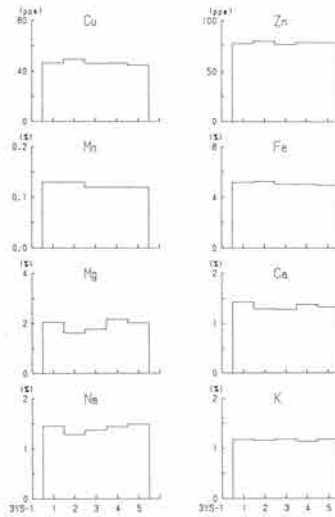


図 2-5 3号屋外埋設土器の重金属分布

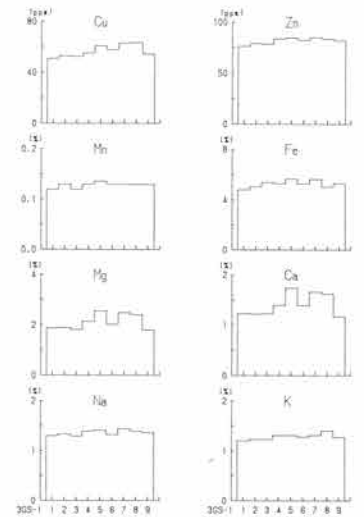


図 2-6 3号土壌の重金属分布

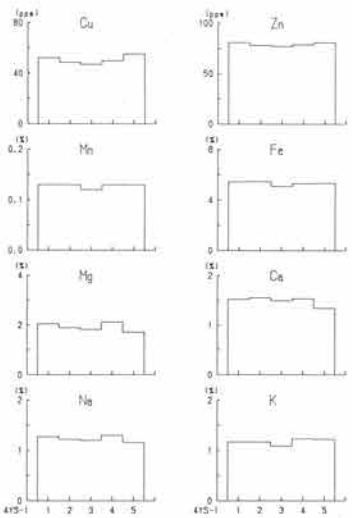


図 2-7 4号屋外埋設土器の重金属分布

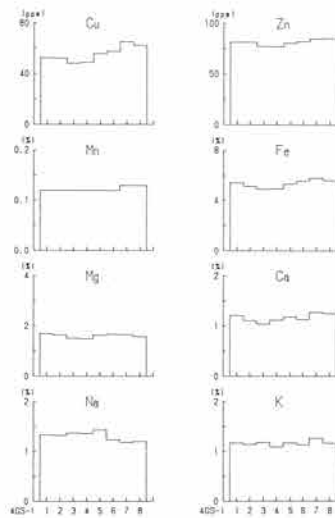


図 2-8 4号土壌の重金属分布

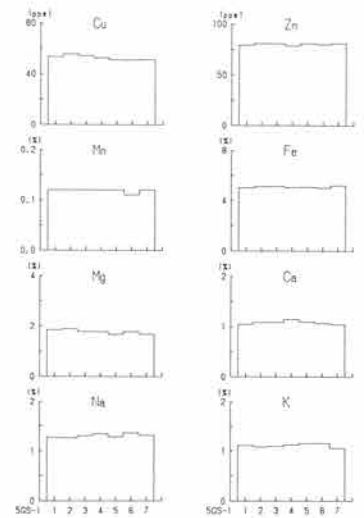


図 2-9 5号土壌の重金属分布

図 2 重金属分布 (2-1~9)

4章 自然科学的分析

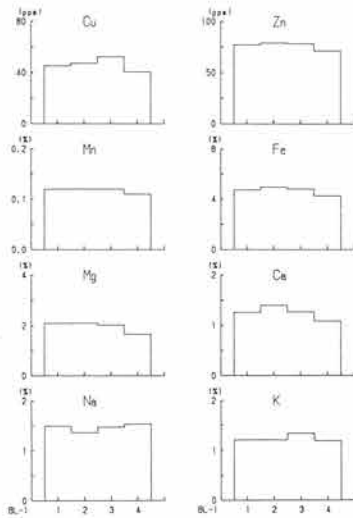


図2-10 標準土壌の重金属分布

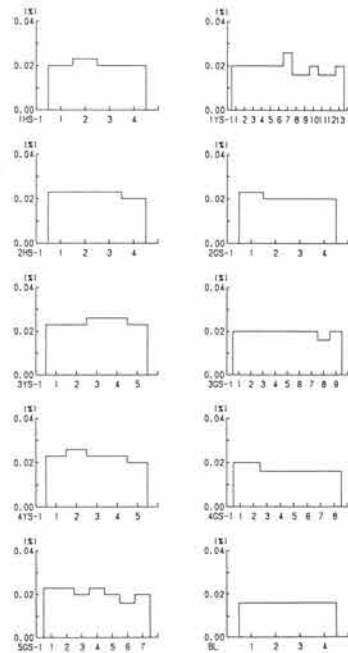


図3 各遺構から採取した土壌のリン分布

表1-1 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

| 試料 | 採取地点 | 試料No | 重量 (g) | 全脂質 (mg) | 抽出率 (%) |
|-----------------|----------------|--------|--------|----------|---------|
| 1号配石遺構埋設土 | No.5土器片その1 | 1HP-1 | 400.14 | 16.1 | 0.0040 |
| | No.5土器片その2 | 1HP-2 | 723.21 | 30.6 | 0.0042 |
| | No.5土器片その3 | 1HP-3 | 496.62 | 15.4 | 0.0031 |
| | No.1土器外側土壌 | 1HS-1 | 954.57 | 46.9 | 0.0049 |
| | No.2土器中央部土壌 | 1HS-2 | 678.55 | 228.2 | 0.0259 |
| | No.3土器側壁土壌 | 1HS-3 | 798.73 | 53.7 | 0.0067 |
| | No.4土器底部土壌 | 1HS-4 | 792.36 | 67.9 | 0.0086 |
| | No.5土器片①A | 1YP-1 | 625.31 | 14.1 | 0.0023 |
| 1号外埋設土 | No.5土器片①B | 1YP-2 | 332.10 | 5.8 | 0.0017 |
| | No.5土器片①C | 1YP-3 | 349.50 | 8.0 | 0.0023 |
| | No.5土器片①D | 1YP-4 | 450.80 | 12.9 | 0.0028 |
| | No.8土器片②A | 1YP-5 | 607.30 | 50.0 | 0.0082 |
| | No.8土器片②B | 1YP-6 | 826.69 | 22.0 | 0.0027 |
| | No.8土器片②C | 1YP-7 | 619.32 | 17.7 | 0.0029 |
| | No.12土器片③A | 1YP-8 | 791.07 | 20.5 | 0.0026 |
| | No.12土器片③B | 1YP-9 | 443.34 | 116.4 | 0.0263 |
| | No.12土器片③C | 1YP-10 | 732.77 | 32.4 | 0.0044 |
| | No.12土器片③D | 1YP-11 | 479.71 | 23.7 | 0.0049 |
| | No.12土器片③E | 1YP-12 | 332.90 | 27.8 | 0.0084 |
| | No.15土器片④A | 1YP-13 | 454.39 | 7.2 | 0.0016 |
| | No.15土器片④B | 1YP-14 | 662.30 | 13.5 | 0.0020 |
| | No.15土器片④C | 1YP-15 | 803.31 | 20.9 | 0.0026 |
| | No.15土器片④D | 1YP-16 | 901.61 | 22.4 | 0.0025 |
| | No.1土器外側土壌 | 1YS-1 | 798.09 | 18.4 | 0.0023 |
| | No.2土器中央部(上)土壌 | 1YS-2 | 823.22 | 15.8 | 0.0019 |
| | No.3土器中央部(下)土壌 | 1YS-3 | 932.24 | 18.0 | 0.0019 |
| No.4土器側壁土壌 | 1YS-4 | 808.13 | 18.0 | 0.0022 | |
| No.6土器底部土壌 | 1YS-5 | 847.00 | 10.5 | 0.0012 | |
| No.9土器底部土壌 | 1YS-6 | 983.04 | 8.0 | 0.0008 | |
| No.10土器側壁部①A土壌 | 1YS-7 | 951.09 | 14.9 | 0.0016 | |
| No.11土器側壁部②B土壌 | 1YS-8 | 900.61 | 11.9 | 0.0012 | |
| No.13土器底部③土壌 | 1YS-9 | 914.51 | 12.0 | 0.0013 | |
| No.14土器側壁部④土壌 | 1YS-10 | 891.11 | 44.3 | 0.0050 | |
| No.16土器底部⑤土壌 | 1YS-11 | 941.20 | 19.7 | 0.0021 | |
| No.17土器底部中央土壌 | 1YS-12 | 889.24 | 12.0 | 0.0014 | |
| No.18土器底部下・中央土壌 | 1YS-13 | 960.87 | 8.1 | 0.0008 | |

表1-2 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

| 試料 | 採取地点 | 試料No | 重量 (g) | 全脂質 (mg) | 抽出率 (%) |
|------------|-------------------|--------|---------|----------|---------|
| 2号配石遺構埋設土 | No.5土器片その1 | 2HP-1 | 350.00 | 13.7 | 0.0039 |
| | No.5土器片その2 | 2HP-2 | 424.69 | 15.0 | 0.0035 |
| | No.5土器片その3 | 2HP-3 | 385.88 | 4.5 | 0.0012 |
| | No.1土器外側土壌 | 2HS-1 | 977.93 | 41.9 | 0.0043 |
| | No.2土器中央部土壌 | 2HS-2 | 673.04 | 283.5 | 0.0061 |
| 2号土器 | No.3土器側壁土壌 | 2HS-3 | 756.11 | 26.9 | 0.0036 |
| | No.4土器底部土壌 | 2HS-4 | 944.07 | 31.3 | 0.0033 |
| | No.1罐 | 2GR-1 | 6250.00 | 54.3 | 0.0009 |
| | No.2埋蔵下土壌 | 2GS-1 | 881.14 | 15.3 | 0.0017 |
| | No.3底部土壌 | 2GS-2 | 836.41 | 11.9 | 0.0014 |
| 3号外埋設土 | No.4底部土壌 | 2GS-3 | 949.04 | 17.1 | 0.0018 |
| | No.5底部土壌 | 2GS-4 | 901.00 | 16.8 | 0.0019 |
| | 上 | 3YP-1 | 840.00 | 98.2 | 0.0117 |
| | 下 | 3YP-2 | 800.00 | 17.4 | 0.0022 |
| | No.1表土 | 3YS-1 | 828.19 | 32.4 | 0.0039 |
| 3号土器 | No.2土器外側土壌 | 3YS-2 | 943.24 | 26.1 | 0.0028 |
| | No.3土器中央部土壌 | 3YS-3 | 796.06 | 14.0 | 0.0018 |
| | No.4土器側壁土壌 | 3YS-4 | 803.03 | 20.8 | 0.0024 |
| | No.5土器底部土壌 | 3YS-5 | 823.80 | 21.6 | 0.0026 |
| | No.1土器上部土壌 | 3GS-1 | 942.72 | 11.0 | 0.0012 |
| | No.2土器上部土壌 | 3GS-2 | 988.04 | 9.6 | 0.0010 |
| | No.3土器中部土壌 | 3GS-3 | 942.67 | 9.2 | 0.0010 |
| | No.4土器中部土壌 | 3GS-4 | 979.32 | 8.0 | 0.0008 |
| | No.5土器底部土壌 | 3GS-5 | 958.17 | 5.2 | 0.0005 |
| | No.6土器底部土壌 | 3GS-6 | 971.28 | 5.0 | 0.0005 |
| 4号外埋設土 | No.7土器埋蔵下土壌 | 3GS-7 | 951.00 | 5.1 | 0.0005 |
| | No.8土器埋蔵下土壌 | 3GS-8 | 969.40 | 2.3 | 0.0002 |
| | No.9 No.1表土(上原土壌) | 3GS-9 | 343.91 | 4.1 | 0.0012 |
| | 付近の土壌 | 3GS-10 | 114.58 | 8.0 | 0.0070 |
| | No.6土器片その1 | 4YP-1 | 536.69 | 15.6 | 0.0029 |
| | No.6土器片その2 | 4YP-2 | 511.73 | 16.9 | 0.0032 |
| | No.1土器外側土壌 | 4YS-1 | 817.79 | 26.3 | 0.0032 |
| | No.2土器中央部土壌 | 4YS-2 | 845.30 | 24.9 | 0.0029 |
| | No.3土器側壁土壌 | 4YS-3 | 821.80 | 24.6 | 0.0030 |
| | No.4土器底部土壌 | 4YS-4 | 757.30 | 13.0 | 0.0017 |
| No.5土器底部土壌 | 4YS-5 | 963.23 | 14.0 | 0.0015 | |

表1 試料の残存脂肪抽出量および抽出率 (1-1・2)

埋設土器、3号屋外埋設土器および4号屋外埋設土器で約0.026%と対照区土壌の0.005%に比べ5倍近く高い値であった。しかし墓壙と認定する際のPの値は、対照区土壌に比べ100倍以上高い必要がある。

これらの結果を総合すると、土壌の無機成分から埋設土器を墓壙と認定する有力な情報は得られなかった。

3 残存脂肪の抽出

各試料に3倍量のクロロホルム—メタノール(2:1)混液を加え、超音波発生浴槽中で30分間処理する。石器および石製品は、予めクロロホルム—メタノール混液で表面を洗浄してから抽出溶液に浸漬して超音波処理した。超音波抽出を3回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶剤に1%塩化バリウムを全抽出溶剤の4分の1容量加えて、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1-1~1-5に示す。抽出率は1号配石遺構埋設土器で0.0031~0.0259%、平均0.0082%、1号屋外埋設土器で0.0008~0.0263%、平均0.0031%、2号配石遺構埋設土器で0.0012~0.0421%、平均0.0088%、2号土壌で0.0009~0.0019%、平均0.0015%、3号屋外埋設土器で0.0018~0.0117%、平均0.0039%、3号土壌で0.0005~0.0079%、平均0.0015%、4号屋外埋設土器で0.0015~0.0032%、平均0.0026%、4号土壌で0.0003~0.0036%、平均0.0014%、5号土壌で0.0014~0.0057%、平均0.0029%、6号配石遺構伏甕で0.0012~0.0032%、平均0.0020%、6号屋外埋設土器で0.0006~0.0016%、平均0.0011%、6号土壌で0.0007~0.0030%、平均0.0015%、8号配石遺構埋甕で0.0008~0.0178%、平均0.0033%、9号土壌で0.0005~0.0030%、平均0.0016%、10号土壌で0.0008~0.0021%、平均0.0014%、23号配石遺構埋甕①で0.0015~0.0226%、平均0.0078%、23号配石遺構埋甕②で0.0021~0.0048%、平均0.0029%、24号配石遺構先端部埋甕で0.0013~0.0032%、平均0.0021%、対照区土壌で0.0002~0.0025%、平均0.0010%であった。全遺構の抽出率の平均は0.0010~0.0088%であり、この値は、秋田県大湯環状列石周辺遺跡から出土した甕棺土器の平均⁽⁸⁾0.0360%や静岡県原川遺跡から出土した土器棺の平均⁽⁹⁾0.0570%と比較して約0.05~0.09倍低かったが、分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した。脂質クラスはグリセロールと脂肪酸が結合したトリグリセリドから誘導されたと推定される遊離脂肪酸が最も多く、次いでトリグリセリド、ステロールの順に多かった。この他に微量のステロールエステル、長鎖炭化水素も検出した。

4 残存脂肪の脂肪酸組成

埋設土器、磔およびその側壁土、並びに土壌の残存脂肪から調製した脂肪酸メチルエステルをガスクロマトグラフィーで分析した。⁽¹⁰⁾脂肪酸メチルエステル

- (8) 中野益男、中岡利泰：「配石遺構の土壌および甕棺土器に残存する脂肪の分析」、『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』、鹿角市教育委員会、1986、pp 113。
- (9) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、『原川遺跡』、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp 79。
- (10) M.Nakano and W.Fischer：「The Glycolipids of *Lactobacillus casei*」(DSM 20021)、『Hoppe-Seylers Z.Physiol.Chem.』、358巻、1977、pp1439。

4章 自然科学的分析

表1-3 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

| 試料 | 採取地点 | 試料No | 重量(g) | 全脂肪(mg) | 抽出率(%) | |
|------------|-------|---------------|-------|---------|--------|--------|
| 4号土壌 | | No 1土壌上部土壌 | 4GS-1 | 938.20 | 23.0 | 0.0024 |
| | | No 2土壌上部土壌 | 4GS-2 | 938.20 | 33.5 | 0.0036 |
| | | No 3土壌中部土壌 | 4GS-3 | 955.32 | 8.6 | 0.0009 |
| | | No 4土壌中部土壌 | 4GS-4 | 967.57 | 11.4 | 0.0012 |
| | | No 5土壌底部土壌 | 4GS-5 | 935.51 | 12.0 | 0.0013 |
| | | No 6土壌底部土壌 | 4GS-6 | 948.34 | 11.0 | 0.0012 |
| | | No 7土壌下部土壌 | 4GS-7 | 961.26 | 4.5 | 0.0005 |
| | | No 8土壌下部土壌 | 4GS-8 | 892.56 | 3.4 | 0.0003 |
| 5号土壌 | | No 1上部西側土壌 | 5GS-1 | 983.33 | 24.9 | 0.0025 |
| | | No 2上部中央土壌 | 5GS-2 | 867.27 | 35.8 | 0.0041 |
| | | No 3上部東側土壌 | 5GS-3 | 990.55 | 20.8 | 0.0021 |
| | | No 4底部西側土壌 | 5GS-4 | 962.95 | 27.5 | 0.0029 |
| | | No 5底部中央土壌 | 5GS-5 | 981.18 | 16.3 | 0.0017 |
| | | No 6底部東側土壌 | 5GS-6 | 993.10 | 14.2 | 0.0014 |
| | | No 7土器割壁部土壌② | 5GS-7 | 980.25 | 56.1 | 0.0057 |
| 6号配石遺構内壁 | | No 6 A土器片 | 6HP-1 | 477.34 | 6.6 | 0.0014 |
| | | No 6 B土器片 | 6HP-2 | 483.70 | 7.2 | 0.0015 |
| | | No 6 C土器片 | 6HP-3 | 496.59 | 6.4 | 0.0013 |
| | | No 6 D土器片 | 6HP-4 | 526.36 | 6.5 | 0.0012 |
| | | No 6 E土器片 | 6HP-5 | 481.75 | 7.3 | 0.0015 |
| | | No 1土器中央部土壌 | 6HS-1 | 769.97 | 18.9 | 0.0025 |
| | | No 2土器側部土壌 | 6HS-2 | 677.89 | 21.6 | 0.0032 |
| | | No 3土器底部中央部土壌 | 6HS-3 | 774.16 | 19.8 | 0.0026 |
| | | No 4口縁部側壁土壌 | 6HS-4 | 737.62 | 17.8 | 0.0024 |
| | | No 5口縁部側壁土壌 | 6HS-5 | 792.46 | 19.5 | 0.0024 |
| 6号埋外埋設土器 | | No 7土器底部土壌 | 6HS-6 | 702.95 | 13.0 | 0.0019 |
| | | No 5土器片①-A | 6YP-1 | 915.01 | 10.5 | 0.0011 |
| | | No 5土器片①-B | 6YP-2 | 801.98 | 5.5 | 0.0007 |
| | | No 5土器片①-C | 6YP-3 | 855.12 | 8.8 | 0.0010 |
| | | No 5土器片①-D | 6YP-4 | 703.71 | 4.5 | 0.0006 |
| | | No 5土器片①-E | 6YP-5 | 683.46 | 6.7 | 0.0010 |
| | | No 5土器片①-F | 6YP-6 | 760.21 | 9.3 | 0.0012 |
| | | No 1土器外側土壌 | 6YS-1 | 806.63 | 9.9 | 0.0012 |
| | | No 2土器中央部土壌 | 6YS-2 | 1254.98 | 12.4 | 0.0010 |
| | | No 3土器側部土壌 | 6YS-3 | 993.39 | 14.7 | 0.0016 |
| No 4土器底部土壌 | 6YS-4 | 1062.99 | 12.3 | 0.0012 | | |

表1-5 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

| 試料 | 採取地点 | 試料No | 重量(g) | 全脂肪(mg) | 抽出率(%) | | | |
|--------------------|-------|--------------------|----------|---------|--------|--------|------|--------|
| 10号土壌 | | No 4底部東側土壌 | 10GS-4 | 939.02 | 10.6 | 0.0011 | | |
| | | No 5底部西側土壌 | 10GS-5 | 903.67 | 10.4 | 0.0012 | | |
| | | No 6底部西側土壌 | 10GS-6 | 925.86 | 7.5 | 0.0008 | | |
| 23号配石遺構・埋カメ① | | No 5土器片 | 23HP-①-1 | 179.30 | 40.6 | 0.0228 | | |
| | | No 1土器外側土壌 | 23HS-①-1 | 618.42 | 33.0 | 0.0053 | | |
| | | No 2土器中央部土壌 | 23HS-①-2 | 900.35 | 13.5 | 0.0015 | | |
| | | No 3土器側部土壌 | 23HS-①-3 | 895.17 | 26.1 | 0.0032 | | |
| | | No 4土器底部土壌 | 23HS-①-4 | 512.61 | 48.9 | 0.0095 | | |
| | | No 6土器底部土壌 | 23HS-①-5 | 757.94 | 35.3 | 0.0047 | | |
| 23号配石遺構・埋カメ② | | No 5土器片A | 23HP-②-1 | 650.90 | 13.9 | 0.0021 | | |
| | | No 5土器片B | 23HP-②-2 | 784.92 | 16.1 | 0.0021 | | |
| | | No 5土器片C | 23HP-②-3 | 323.24 | 7.4 | 0.0023 | | |
| | | No 1土器外側土壌 | 23HS-②-1 | 795.90 | 20.2 | 0.0025 | | |
| | | No 2土器中央部土壌 | 23HS-②-2 | 968.17 | 45.9 | 0.0048 | | |
| | | No 3土器側部土壌 | 23HS-②-3 | 842.95 | 36.4 | 0.0043 | | |
| 24号配石遺構・先端埋カメ | | No 4土器底部土壌 | 24HS-②-4 | 1192.80 | 26.5 | 0.0022 | | |
| | | No 6土器底部土壌 | 24HS-②-5 | 636.89 | 16.1 | 0.0025 | | |
| | | No 1土器外側土壌 | 24HS-1 | 1009.41 | 19.9 | 0.0019 | | |
| | | No 2土器中央部土壌 | 24HS-2 | 808.20 | 19.8 | 0.0025 | | |
| | | No 3土器側部西側土壌 | 24HS-3 | 910.94 | 18.5 | 0.0020 | | |
| | | No 4土器側部東側土壌 | 24HS-4 | 905.53 | 28.6 | 0.0032 | | |
| 1号埋外埋設土器 周辺標準土壌 | | No 5土器底部土壌 | 24HS-5 | 900.99 | 15.1 | 0.0017 | | |
| | | No 6土器底部土壌 | 24HS-6 | 1052.24 | 13.2 | 0.0013 | | |
| | | No 9 | B.L-9 | 1122.32 | 19.4 | 0.0017 | | |
| | | No 10 | B.L-10 | 1247.84 | 5.7 | 0.0005 | | |
| | | No 11 | B.L-11 | 1395.67 | 2.2 | 0.0002 | | |
| | | No 12 | B.L-12 | 1292.76 | 4.2 | 0.0003 | | |
| | | 2号土壌周辺 標準土壌 | | No 1 | B.L-1 | 958.03 | 8.4 | 0.0009 |
| | | | | No 2 | B.L-2 | 959.54 | 5.5 | 0.0006 |
| | | | | No 3 | B.L-3 | 949.02 | 5.1 | 0.0005 |
| | | | | No 4 | B.L-4 | 963.09 | 21.6 | 0.0023 |
| | | 3号埋外埋設土器 周辺標準土壌 | | No 5 | B.L-5 | 917.28 | 20.5 | 0.0022 |
| | | | | No 6 | B.L-6 | 824.09 | 10.5 | 0.0013 |
| No 7 | B.L-7 | | | 879.77 | 7.2 | 0.0008 | | |
| No 8 | B.L-8 | | | 500.13 | 4.2 | 0.0008 | | |

表1 試料の残存脂肪抽出量および抽出率(1-3~5)

表1-4 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

| 試料 | 採取地点 | 試料No | 重量(g) | 全脂肪(mg) | 抽出率(%) | |
|------------|------|--------------|--------|---------|--------|--------|
| 6号埋外埋設土器 | | No 6土器底部土壌 | 6YS-5 | 1077.61 | 12.0 | 0.0011 |
| | | No 1上部西側土壌 | 6GS-1 | 807.67 | 14.7 | 0.0018 |
| | | No 2上部中央土壌 | 6GS-2 | 773.70 | 12.4 | 0.0016 |
| | | No 3上部東側土壌 | 6GS-3 | 685.28 | 20.8 | 0.0030 |
| | | No 4底部西側土壌 | 6GS-4 | 801.00 | 10.3 | 0.0013 |
| | | No 5底部中央土壌 | 6GS-5 | 791.11 | 8.7 | 0.0011 |
| | | No 6底部東側土壌 | 6GS-6 | 818.90 | 11.2 | 0.0014 |
| | | No 7底部西側土壌 | 6GS-7 | 696.22 | 13.5 | 0.0019 |
| | | No 8底部下中央土壌 | 6GS-8 | 770.49 | 5.3 | 0.0007 |
| 8号配石遺構・埋カメ | | No 9底部下東側土壌 | 6GS-9 | 604.80 | 6.8 | 0.0011 |
| | | No 5土器片① | 8HP-1 | 738.19 | 13.9 | 0.0019 |
| | | No 5土器片② | 8HP-2 | 594.37 | 5.0 | 0.0008 |
| | | No 5土器片③ | 8HP-3 | 581.64 | 5.7 | 0.0010 |
| | | No 5土器片④ | 8HP-4 | 456.29 | 81.3 | 0.0178 |
| | | No 1土器外側土壌 | 8HS-1 | 1209.64 | 15.1 | 0.0013 |
| | | No 2土器中央部土壌 | 8HS-2 | 1177.76 | 17.8 | 0.0015 |
| | | No 3土器側部土壌 | 8HS-3 | 1199.39 | 15.0 | 0.0013 |
| | | No 4土器底部土壌 | 8HS-4 | 1416.07 | 16.1 | 0.0011 |
| 9号土壌 | | No 6土器底部土壌 | 8HS-5 | 1227.77 | 32.8 | 0.0027 |
| | | No 1上部北側土壌 | 9GS-1 | 765.69 | 18.2 | 0.0023 |
| | | No 2上部中央土壌 | 9GS-2 | 799.61 | 24.1 | 0.0030 |
| | | No 3上部南側土壌 | 9GS-3 | 823.23 | 18.2 | 0.0022 |
| | | No 4中部北側土壌 | 9GS-4 | 906.39 | 17.7 | 0.0020 |
| | | No 5中部中央土壌 | 9GS-5 | 810.24 | 19.4 | 0.0024 |
| | | No 6中部南側土壌 | 9GS-6 | 908.41 | 12.0 | 0.0013 |
| | | No 7底部北側土壌 | 9GS-7 | 771.62 | 15.1 | 0.0020 |
| | | No 8底部中央土壌 | 9GS-8 | 908.98 | 13.3 | 0.0015 |
| | | No 9底部南側土壌 | 9GS-9 | 916.36 | 10.8 | 0.0012 |
| | | No 10底部土壌 | 9GS-10 | 910.46 | 8.8 | 0.0010 |
| | | No 11底部土壌 | 9GS-11 | 903.25 | 8.0 | 0.0009 |
| 10号土壌 | | No 12底部北側土壌 | 9GS-12 | 914.91 | 4.0 | 0.0005 |
| | | No 13底部下中央土壌 | 9GS-13 | 921.25 | 10.4 | 0.0011 |
| | | No 14底部南側土壌 | 9GS-14 | 848.01 | 8.8 | 0.0010 |
| | | No 1上部西側土壌 | 10GS-1 | 922.34 | 19.2 | 0.0021 |
| | | No 2上部東側土壌 | 10GS-2 | 921.89 | 13.9 | 0.0015 |
| | | No 3底部西側土壌 | 10GS-3 | 925.13 | 14.9 | 0.0016 |

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

表2-1 1号配石遺構埋設土器に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-------|------------|------------|-----------------|
| 1HP-1 | 8.32 | 58.57 | 0.142 |
| 1HP-2 | 11.46 | 36.24 | 0.316 |
| 1HP-3 | 13.66 | 61.86 | 0.221 |
| 1HS-1 | 3.09 | 66.08 | 0.047 |
| 1HS-2 | 3.32 | 58.51 | 0.057 |
| 1HS-3 | 0.67 | 41.08 | 0.016 |
| 1HS-4 | 0.99 | 17.85 | 0.056 |

表2-2 1号屋外埋設土器に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|--------|------------|------------|-----------------|
| 1YP-1 | 11.96 | 36.68 | 0.326 |
| 1YP-2 | 16.92 | 39.31 | 0.430 |
| 1YP-3 | 17.33 | 38.90 | 0.446 |
| 1YP-4 | 17.97 | 37.31 | 0.482 |
| 1YP-5 | 9.30 | 66.24 | 0.140 |
| 1YP-6 | 2.90 | 68.96 | 0.042 |
| 1YP-7 | 8.82 | 59.19 | 0.149 |
| 1YP-8 | 13.95 | 35.05 | 0.398 |
| 1YP-9 | 42.77 | 17.09 | 2.503 |
| 1YP-10 | 9.61 | 43.36 | 0.222 |
| 1YP-11 | 10.91 | 35.15 | 0.310 |
| 1YP-12 | 15.53 | 36.87 | 0.421 |
| 1YP-13 | 7.76 | 46.67 | 0.166 |
| 1YP-14 | 7.31 | 53.17 | 0.138 |
| 1YP-15 | 6.54 | 53.59 | 0.122 |
| 1YP-16 | 12.32 | 66.45 | 0.185 |
| 1YS-1 | 6.41 | 61.19 | 0.105 |
| 1YS-2 | 13.30 | 50.57 | 0.263 |
| 1YS-3 | 3.63 | 58.36 | 0.062 |
| 1YS-4 | 7.60 | 61.41 | 0.124 |
| 1YS-5 | 8.09 | 61.01 | 0.133 |
| 1YS-6 | 8.72 | 63.90 | 0.137 |
| 1YS-7 | 10.33 | 61.61 | 0.168 |
| 1YS-8 | 12.17 | 64.69 | 0.188 |
| 1YS-9 | 7.88 | 57.57 | 0.137 |
| 1YS-10 | 4.94 | 65.86 | 0.075 |
| 1YS-11 | 5.25 | 71.92 | 0.073 |
| 1YS-12 | 7.85 | 61.93 | 0.127 |
| 1YS-13 | 10.05 | 64.58 | 0.156 |

表2-3 2号配石遺構埋設土器および2号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|------------|------------|------------|-----------------|
| 2号配石遺構埋設土器 | | | |
| 2HP-1 | 14.58 | 36.57 | 0.399 |
| 2HP-2 | 6.91 | 51.85 | 0.133 |
| 2HP-3 | 20.62 | 39.28 | 0.525 |
| 2HS-1 | 25.55 | 7.05 | 3.624 |
| 2HS-2 | 8.97 | 21.19 | 0.423 |
| 2HS-3 | 6.18 | 46.59 | 0.133 |
| 2HS-4 | 9.42 | 48.37 | 0.195 |
| 2号土壌 | | | |
| 2GR-1 | 34.19 | 40.71 | 0.840 |
| 2GS-1 | 30.55 | 19.16 | 1.594 |
| 2GS-2 | 31.82 | 26.50 | 1.201 |
| 2GS-3 | 20.40 | 52.75 | 0.387 |
| 2GS-4 | 14.77 | 30.56 | 0.483 |

表2-4 3号屋外埋設土器および3号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|----------|------------|------------|-----------------|
| 3号屋外埋設土器 | | | |
| 3YP-1 | 56.85 | 14.83 | 3.833 |
| 3YP-2 | 25.80 | 24.96 | 0.941 |
| 3YS-1 | 7.25 | 53.03 | 0.137 |
| 3YS-2 | 22.97 | 54.64 | 0.420 |
| 3YS-3 | 6.91 | 45.49 | 0.152 |
| 3YS-4 | 19.11 | 38.51 | 0.496 |
| 3YS-5 | 15.08 | 42.06 | 0.359 |
| 3号土壌 | | | |
| 3GS-1 | 6.25 | 46.47 | 0.135 |
| 3GS-2 | 8.87 | 42.96 | 0.207 |
| 3GS-3 | 56.01 | 10.26 | 5.459 |
| 3GS-4 | 52.37 | 16.78 | 3.121 |
| 3GS-5 | 31.55 | 12.36 | 2.553 |
| 3GS-6 | 11.01 | 55.19 | 0.200 |
| 3GS-7 | 20.90 | 39.32 | 0.532 |
| 3GS-8 | 43.81 | 21.97 | 1.994 |
| 3GS-9 | 30.01 | 22.20 | 1.352 |
| 3GS-10 | 60.43 | 6.76 | 8.939 |

表2-6 5号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-------|------------|------------|-----------------|
| 5GS-1 | 7.80 | 66.57 | 0.117 |
| 5GS-2 | 10.74 | 54.09 | 0.199 |
| 5GS-3 | 14.82 | 41.17 | 0.355 |
| 5GS-4 | 12.70 | 43.92 | 0.295 |
| 5GS-5 | 10.25 | 57.74 | 0.178 |
| 5GS-6 | 12.22 | 45.27 | 0.270 |
| 5GS-7 | 3.38 | 73.76 | 0.046 |

表2-5 4号屋外埋設土器および4号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|----------|------------|------------|-----------------|
| 4号屋外埋設土器 | | | |
| 4YP-1 | 22.22 | 49.40 | 0.450 |
| 4YP-2 | 9.60 | 62.57 | 0.153 |
| 4YS-1 | 14.84 | 62.27 | 0.238 |
| 4YS-2 | 7.90 | 70.11 | 0.113 |
| 4YS-3 | 20.23 | 63.80 | 0.317 |
| 4YS-4 | 2.28 | 35.74 | 0.064 |
| 4YS-5 | 34.55 | 41.33 | 0.836 |
| 4号土壌 | | | |
| 4GS-1 | 46.25 | 11.83 | 3.910 |
| 4GS-2 | 60.22 | 20.26 | 2.972 |
| 4GS-3 | 16.36 | 27.58 | 0.593 |
| 4GS-4 | 10.51 | 31.74 | 0.331 |
| 4GS-5 | 11.07 | 30.84 | 0.359 |
| 4GS-6 | 11.81 | 62.69 | 0.188 |
| 4GS-7 | 13.25 | 46.01 | 0.284 |
| 4GS-8 | 20.83 | 12.50 | 1.666 |

表2-7 6号配石遺構伏壁に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-------|------------|------------|-----------------|
| 6HP-1 | 7.59 | 40.86 | 0.186 |
| 6HP-2 | 15.73 | 42.18 | 0.373 |
| 6HP-3 | 7.55 | 33.49 | 0.225 |
| 6HP-4 | 8.85 | 37.31 | 0.237 |
| 6HP-5 | 14.79 | 53.04 | 0.279 |
| 6HS-1 | 3.72 | 48.02 | 0.078 |
| 6HS-2 | 3.70 | 50.98 | 0.073 |
| 6HS-3 | 5.31 | 56.55 | 0.094 |
| 6HS-4 | 4.18 | 69.19 | 0.060 |
| 6HS-5 | 7.91 | 50.45 | 0.157 |
| 6HS-6 | 10.65 | 53.23 | 0.200 |

表2 コレステロールとシトステロールの割合 (2-1~7)

4章 自然科学的分析

表2-8 6号屋外埋設土器および6号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-----------------|------------|------------|-----------------|
| 6号屋外埋設土器 | | | |
| 6YP-1 | 15.22 | 34.29 | 0.444 |
| 6YP-2 | 10.64 | 34.03 | 0.313 |
| 6YP-3 | 5.86 | 32.51 | 0.180 |
| 6YP-4 | 9.76 | 25.41 | 0.384 |
| 6YP-5 | 7.71 | 31.02 | 0.249 |
| 6YP-6 | 5.77 | 30.07 | 0.192 |
| 6YS-1 | 5.50 | 52.47 | 0.105 |
| 6YS-2 | 3.53 | 65.99 | 0.054 |
| 6YS-3 | 14.79 | 43.47 | 0.340 |
| 6YS-4 | 16.58 | 45.97 | 0.361 |
| 6YS-5 | 5.23 | 66.77 | 0.078 |
| 6号土壌 | | | |
| 6GS-1 | 7.25 | 50.59 | 0.143 |
| 6GS-2 | 4.40 | 27.99 | 0.157 |
| 6GS-3 | 5.27 | 53.41 | 0.099 |
| 6GS-4 | 12.33 | 40.60 | 0.304 |
| 6GS-5 | 11.45 | 55.39 | 0.207 |
| 6GS-6 | 2.78 | 38.40 | 0.072 |
| 6GS-7 | 10.49 | 47.58 | 0.221 |
| 6GS-8 | 15.33 | 16.96 | 0.904 |
| 6GS-9 | 14.10 | 25.18 | 0.560 |

表2-10 9号土壌および10号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|--------------|------------|------------|-----------------|
| 9号土壌 | | | |
| 9GS-1 | 11.12 | 42.81 | 0.260 |
| 9GS-2 | 17.36 | 38.91 | 0.446 |
| 9GS-3 | 9.48 | 41.35 | 0.229 |
| 9GS-4 | 4.65 | 49.38 | 0.094 |
| 9GS-5 | 9.79 | 38.09 | 0.257 |
| 9GS-6 | 10.62 | 41.92 | 0.253 |
| 9GS-7 | 8.36 | 42.25 | 0.199 |
| 9GS-8 | 8.14 | 44.05 | 0.185 |
| 9GS-9 | 7.12 | 37.37 | 0.191 |
| 9GS-10 | 8.25 | 49.77 | 0.166 |
| 9GS-11 | 5.96 | 57.70 | 0.103 |
| 9GS-12 | 18.31 | 50.91 | 0.360 |
| 9GS-13 | 14.43 | 55.34 | 0.261 |
| 9GS-14 | 8.12 | 63.02 | 0.129 |
| 10号土壌 | | | |
| 10GS-1 | 4.12 | 67.45 | 0.061 |
| 10GS-2 | 11.32 | 48.29 | 0.245 |
| 10GS-3 | 6.54 | 64.61 | 0.101 |
| 10GS-4 | 10.20 | 65.22 | 0.156 |
| 10GS-5 | 5.37 | 68.94 | 0.080 |
| 10GS-6 | 51.04 | 25.14 | 2.030 |

表2-12 24号配石遺構先端部埋壙に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|--------|------------|------------|-----------------|
| 24HS-1 | 6.28 | 56.72 | 0.111 |
| 24HS-2 | 3.94 | 66.12 | 0.060 |
| 24HS-3 | 4.08 | 59.01 | 0.070 |
| 24HS-4 | 5.08 | 62.53 | 0.081 |
| 24HS-5 | 4.82 | 56.51 | 0.087 |
| 24HS-6 | 2.91 | 48.64 | 0.060 |

表2-9 8号配石遺構埋壙に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-------|------------|------------|-----------------|
| 8HP-1 | 13.18 | 24.57 | 0.536 |
| 8HP-2 | 10.63 | 30.69 | 0.346 |
| 8HP-3 | 12.22 | 34.28 | 0.357 |
| 8HP-4 | 11.87 | 16.04 | 0.743 |
| 8HS-1 | 4.68 | 50.54 | 0.093 |
| 8HS-2 | 5.82 | 42.60 | 0.137 |
| 8HS-3 | 9.82 | 46.80 | 0.210 |
| 8HS-4 | 5.11 | 39.25 | 0.130 |
| 8HS-5 | 6.56 | 55.18 | 0.119 |

表2-11 23号配石遺構埋壙①および埋壙②に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|------------|------------|------------|-----------------|
| 埋壙① | | | |
| 23BP-①-1 | 9.34 | 54.11 | 0.173 |
| 23BS-①-1 | 3.29 | 44.89 | 0.073 |
| 23BS-①-2 | 3.95 | 60.88 | 0.065 |
| 23BS-①-3 | 4.05 | 49.36 | 0.082 |
| 23BS-①-4 | 4.03 | 46.94 | 0.086 |
| 23BS-①-5 | 5.49 | 60.84 | 0.090 |
| 埋壙② | | | |
| 23BP-②-1 | 7.54 | 41.09 | 0.184 |
| 23BP-②-2 | 7.92 | 41.56 | 0.191 |
| 23BP-②-3 | 8.80 | 35.90 | 0.245 |
| 23BS-②-1 | 9.14 | 45.85 | 0.200 |
| 23BS-②-2 | 3.78 | 42.24 | 0.090 |
| 23BS-②-3 | 4.17 | 56.20 | 0.074 |
| 23BS-②-4 | 5.21 | 49.70 | 0.105 |
| 23BS-②-5 | 4.06 | 50.18 | 0.081 |

表2-13 1号屋外埋設土器・2号土壌・3号屋外埋設土器周辺標準土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

| 試料No | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール/シトステロール |
|-----------------------|------------|------------|-----------------|
| 1号屋外埋設土器周辺標準土壌 | | | |
| B L-9 | 6.01 | 57.84 | 0.104 |
| B L-10 | 13.89 | 41.93 | 0.331 |
| B L-11 | 11.68 | 41.71 | 0.280 |
| B L-12 | 7.04 | 55.49 | 0.127 |
| 2号土壌周辺標準土壌 | | | |
| B L-1 | 27.06 | 24.88 | 1.088 |
| B L-2 | 32.15 | 11.42 | 2.815 |
| B L-3 | 53.02 | 4.96 | 10.690 |
| B L-4 | 3.12 | 7.87 | 0.396 |
| 3号屋外埋設土器周辺標準土壌 | | | |
| B L-5 | 6.63 | 43.02 | 0.154 |
| B L-6 | 53.26 | 26.33 | 2.023 |
| B L-7 | 24.65 | 17.78 | 1.386 |
| B L-8 | 60.81 | 17.46 | 3.483 |

表2 コレステロールとシトステロールの割合 (2-8~13)

〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

は次のようにして調製した。残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図4-1～4-31に示す。残存脂肪から13種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)の11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

1号配石遺構出土土器試料および土壌試料(No.1 HP-1～No.1 HP-3、No.1 HS-1～No.1 HS-4)では主要な脂肪酸はパルミチン酸、オレイン酸およびパルミトレイン酸であった。特に、中級飽和脂肪酸は、約26～43%分布していた(図4-1)。試料No.1 HP-1では、高等動物の脳、臓器、胎盤、神経組織、血液中に多量に含まれている高級脂肪酸のベヘン酸、リグノセリン酸が約17%分布し、高等動物の存在を示唆した(図4-1)。1号屋外埋設土器および土壌試料(No.1 YP-1～No.1 YP-16、No.1 YS-1～No.1 YS-13)では、先に示した1号配石遺構の脂肪酸組成とほぼ同様の脂肪酸組成パターンを示した(図4-2～4-6)。しかし試料No.1 YP-3～No.1 YP-9およびNo.1 YP-11～No.1 YP-13では、パルミチン酸、オレイン酸の他にステアリン酸も主要脂肪酸として高い分布割合を示した。また高級脂肪酸の分布割合が高く、特に試料No.1 YP-3で約27%分布しており、他の試料でも約10～15%と全般的に高い値であった。2号配石遺構試料No.2 HS-1～No.2 HS-4とNo.2 HP-1～No.2 HP-3では主要な残存脂肪酸はパルミチン酸、パルミトレイン酸およびオレイン酸であった。その中でパルミトレイン酸は土壌試料No.2 HS-1～No.2 HS-4で約26～30%近くを占めていた(図4-7)。2号土壌試料No.2 GS-1～No.2 GS-4とNo.2 GR-1についても同様なパターンを示した(図4-8)。また試料No.2 GS-1～No.2 GS-4でパルミトレイン酸が25%以上と比較的高い値にあり、前記した遺構および土壌と同様であった。パルミトレイン酸はオレイン酸が地下埋蔵中に一部酸化分解を受けて生成したと考えられる。従って周辺遺構にはオレイン酸が多く分布していたと考えられ、オレイン酸は動物体に多く含まれることから、これらの遺構、土壌には動物性遺体が存在していた可能性が高い。試料No.2 GR-1の礫ではパルミトレイン酸が約12%分布しており、土壌試料とは異なっていた。3号屋外埋設土器についてみると、土器試料No.3 YP-1およびNo.3 YP-2ではパルミチン酸が主成分であるのに対して、土壌試料No.3 YS-1およびNo.3 YS-2ではパルミトレイン酸が約33%以上分布していた。また試料No.3 YS-1～No.3 YS-5では高級脂肪酸が約8～14%分布していた(図4-9)。3号土壌試料10試料ではNo.3 GS-6を除いてパルミチン酸が主要成分であった。土壌試料No.3 GS-6ではパルミトレイン酸が主成分であった(図4

-10・11)。4号屋外埋設土器試料No.4 YP-1およびNo.4 YP-2はステアリン酸、パルミチン酸が主成分であるのに対し、土壌試料No.4 YS-1～No.4 YS-5ではパルミチン酸、パルミトリン酸およびオレイン酸が主であった(図4-12)。4号土壌についてもオレイン酸、パルミチン酸が主成分で全脂肪酸の約60～70%近く分布していた。また高級脂肪酸はほとんど検出されなかった(図4-13)。5号土壌土壌7試料(No.5 GS-1～No.5 GS-7)では、主にパルミチン酸が約25～40%と多く分布しており、その他に高級脂肪酸であるベヘン酸、リグノセリン酸が約10～17%と比較的高い分布値を示し、動物性遺体の存在を示唆した(図4-14)。6号配石遺構伏甕では土器5試料(No.6 HP-1～No.6 HP-5)でパルミチン酸が約40%前後分布し、主成分を占めた。土壌6試料(No.6 HS-1～No.6 HS-6)では、パルミトリン酸、パルミチン酸、オレイン酸の順に分布していた(図4-15・16)。高級脂肪酸についてはほとんど検出されなかった。6号屋外埋設土器では土壌4試料(No.6 YS-1、No.6 YS-2、No.6 YS-4、No.6 YS-5)でパルミチン酸、パルミトリン酸が主要脂肪酸であったが、土器試料では高級脂肪酸が多く、とくにNo.6 YS-3、No.6 YP-4およびNo.6 YP-5では約24～34%分布していた(図4-17・18)。6号土壌もすべての試料でパルミチン酸が最も多く分布していた。その他に、とくに土壌上面から底面の土壌試料No.6 GS-1～No.6 GS-6は高級脂肪酸であるベヘン酸、リグノセリン酸が約13～16%分布し、土壌中に高等動物が存在していた可能性を示唆した(図4-19・20)。8号配石遺構についてみると、土壌試料(No.8 HS-1～No.8 HS-5)ではパルミチン酸、パルミトリン酸が主成分であったのに対し、土器試料(No.8 HP-1～No.8 HP-4)ではパルミチン酸が約40～60%と高い分布値を示した(図4-21・22)。9号土壌14試料(No.9 GS-1～No.9 GS-14)および10号土壌6試料(No.10 GS-1～No.10 GS-6)についても同様な脂肪酸組成を示し、その中で9号土壌中面土壌No.9 GS-4、No.9 GS-5および底部面土壌No.9 GS-8、No.9 GS-10は高級脂肪酸が約15%前後とかなり高い割合で検出された(図4-23～25)。23号配石遺構埋甕①および②でもパルミチン酸が主成分の同様な脂肪酸パターンを示したが、高級脂肪酸が約20%前後と全体的に高く、動物脂肪が付着していた可能性が高い(図4-26・27)。24号配石遺構・先端部埋甕土壌試料(No.24 HS-1～No.24 HS-6)でも23号配石遺構と同様なパターンであった(図4-28)。対照区土壌12試料(No. BL-1～No. BL-12)では、No. BL-6、No. BL-9を除いてパルミチン酸が主成分を占め、次いでパルミトリン酸、オレイン酸の順であった。高級脂肪酸はほとんど検出されなかった(図4-29～31)。

以上、脂肪酸組成を比較すると、対照区土壌と同様に各遺構および土壌では、パルミチン酸が多く分布していた。土壌試料中にパルミチン酸が多いのは脂肪の分解が進んでいる遺跡や加熱の影響を受けている遺跡でよく見られる現象である。本遺構の場合は焼土が見られないことから熱変性よりも脂肪酸の分解が

(1) 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

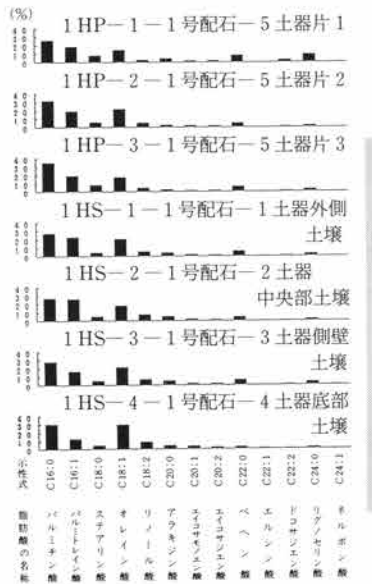


図4-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

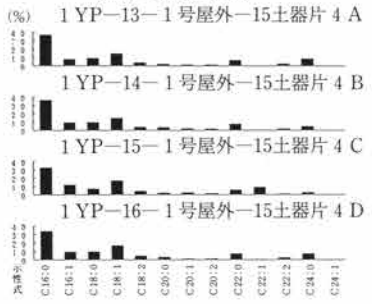


図4-4 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

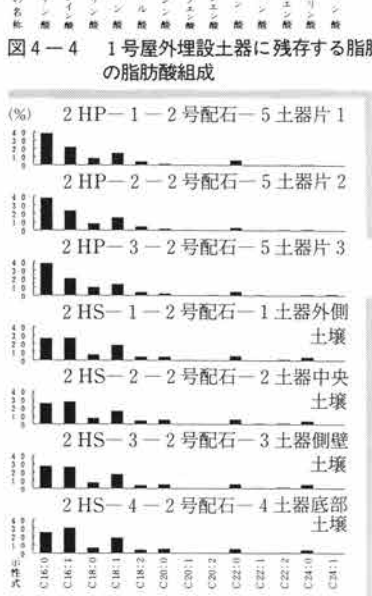


図4-7 2号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

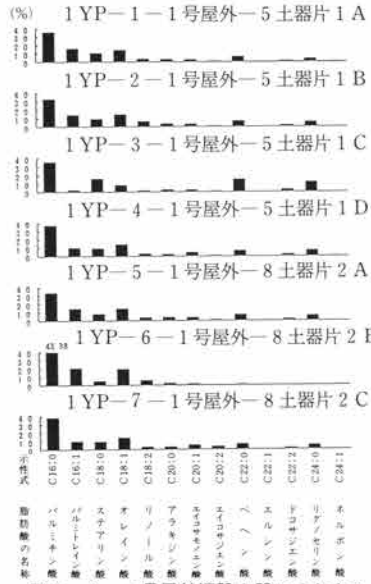


図4-2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

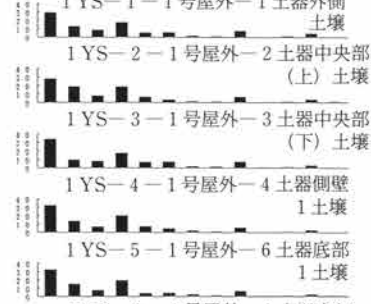


図4-5 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

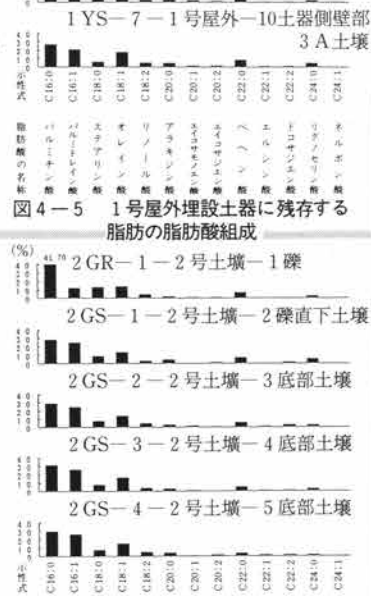


図4-8 2号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

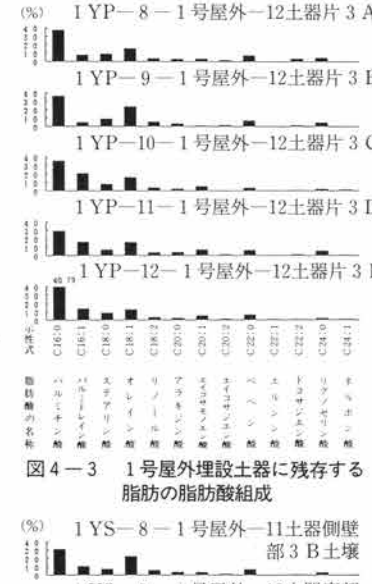


図4-3 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

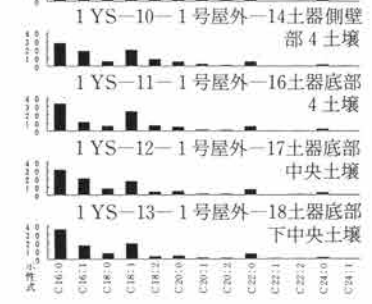


図4-6 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

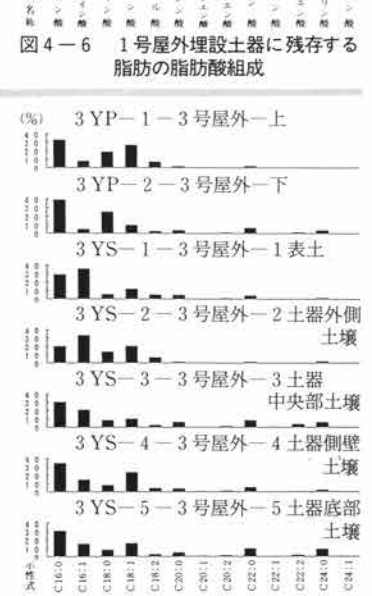


図4-9 3号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-1~9)

4章 自然科学的分析

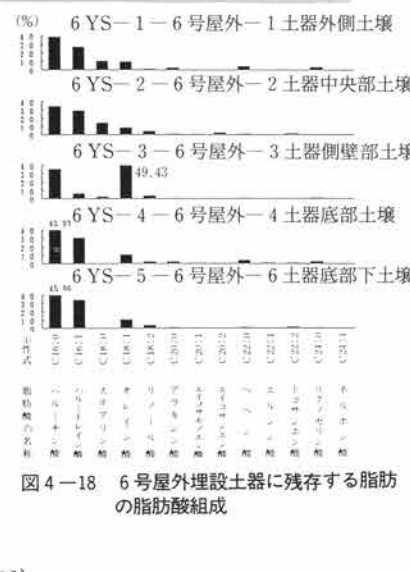
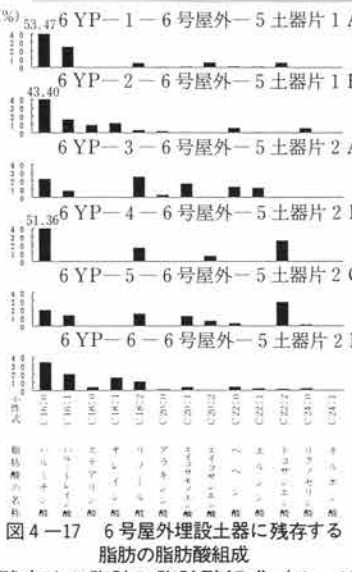
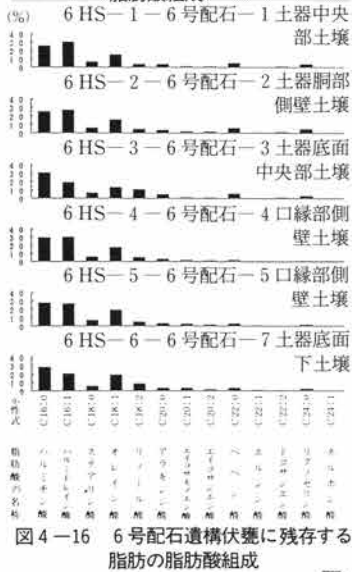
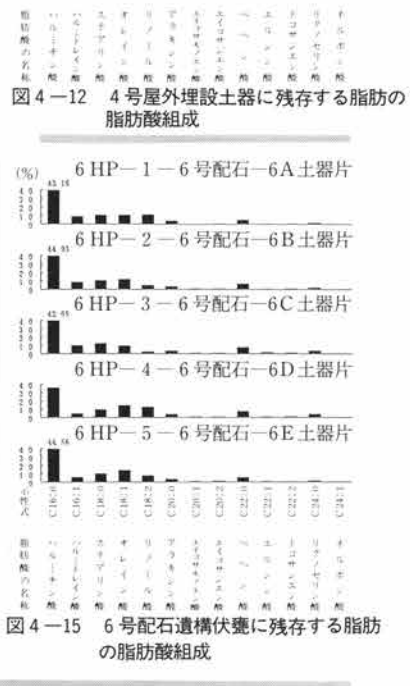
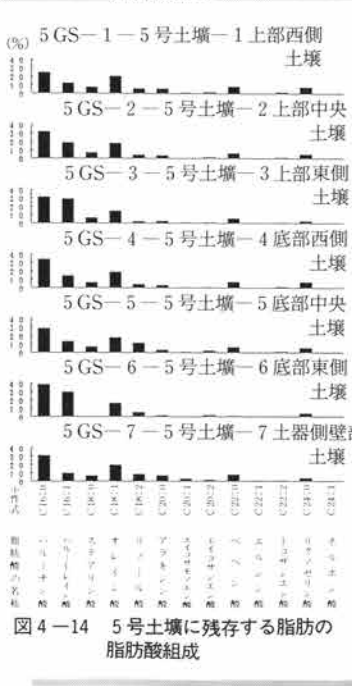
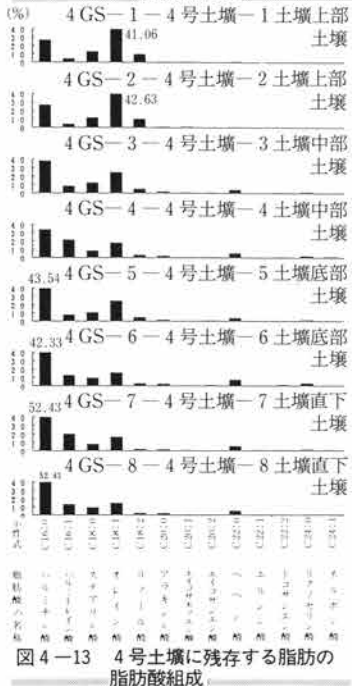
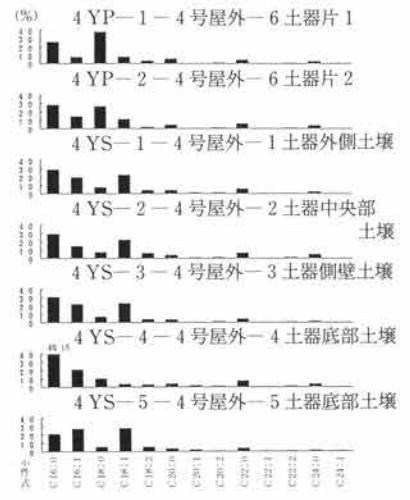
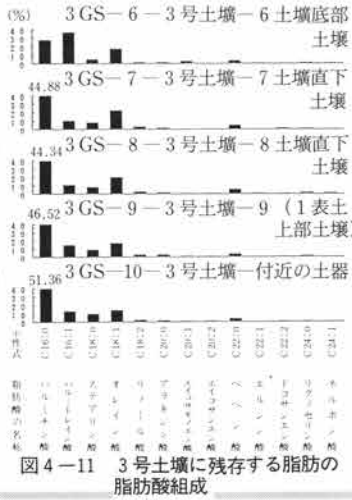
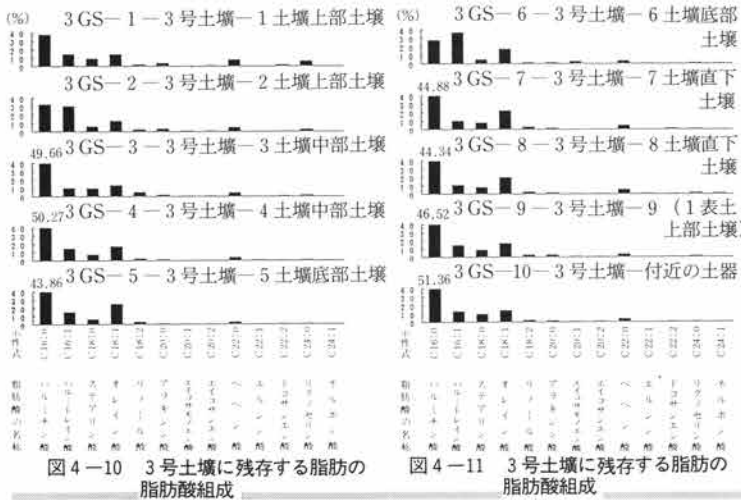


図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-10~18)

〔1〕田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

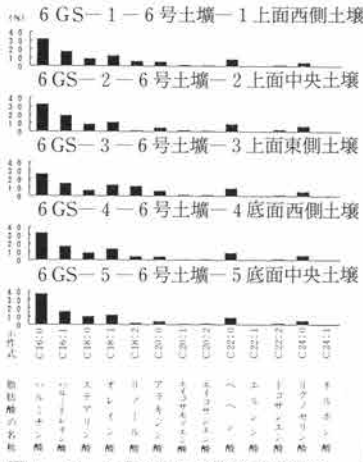


図4-19 6号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

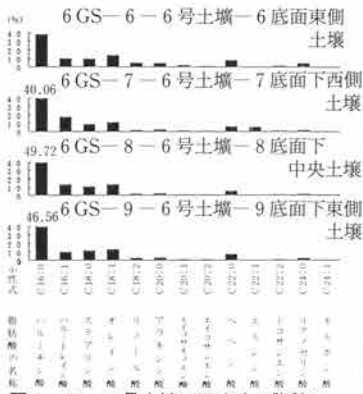


図4-20 6号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

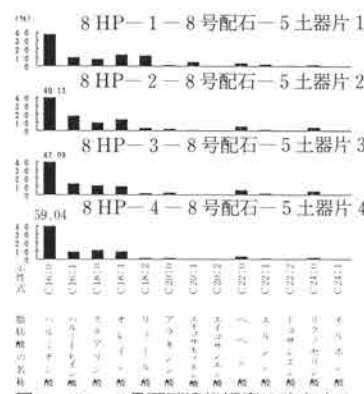


図4-21 8号配石遺構埋塞に残存する脂肪の脂肪酸組成

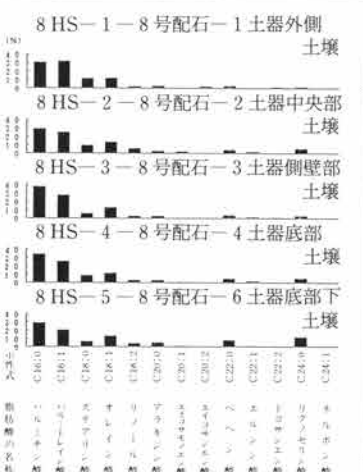


図4-22 8号配石遺構埋塞に残存する脂肪の脂肪酸組成

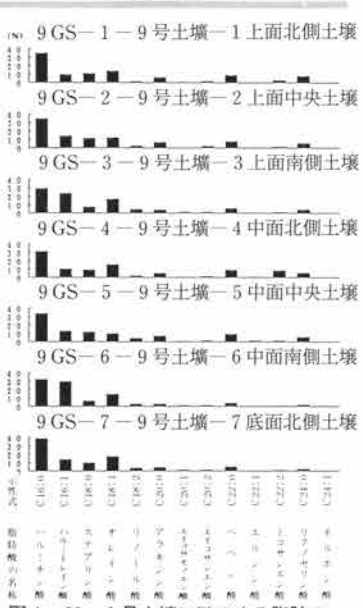


図4-23 9号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

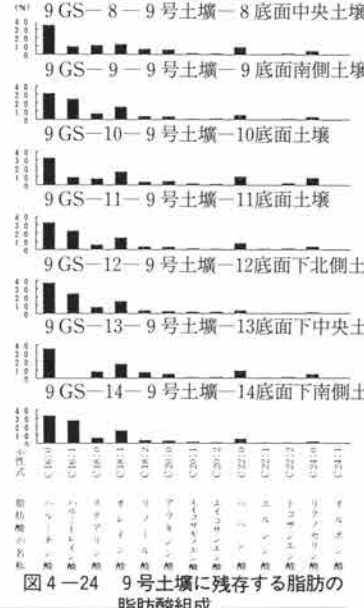


図4-24 9号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

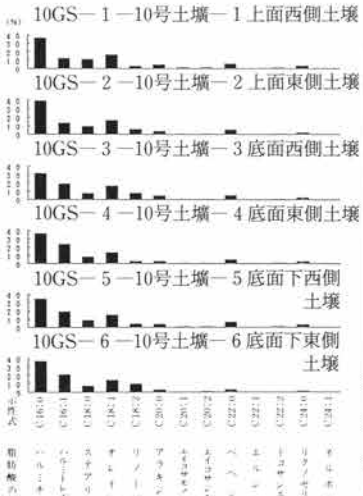


図4-25 10号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

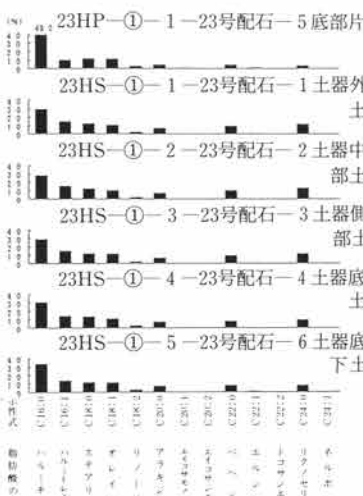


図4-26 23号配石遺構埋塞①に残存する脂肪の脂肪酸組成

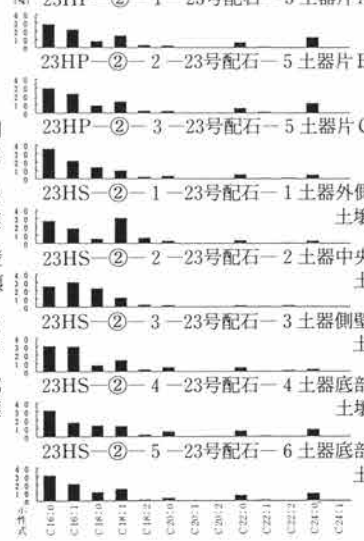


図4-27 23号配石遺構埋塞②に残存する脂肪の脂肪酸組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-19~27)

4章 自然科学的分析

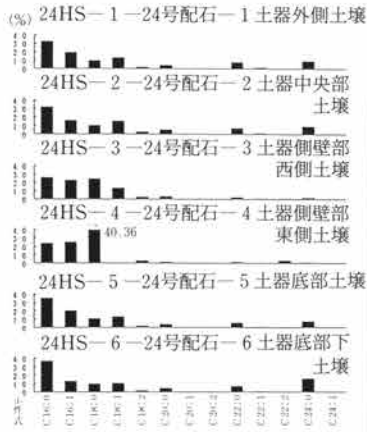


図4-28 24号配石遺構先端部埋塞に残存する脂肪の脂肪酸組成

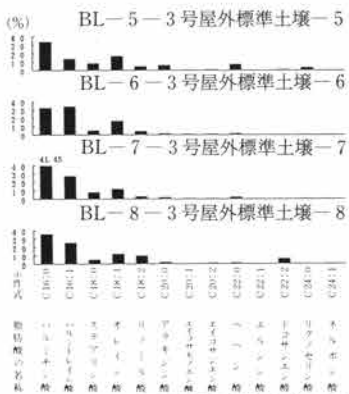


図4-31 3号屋外埋設土器周辺標準土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

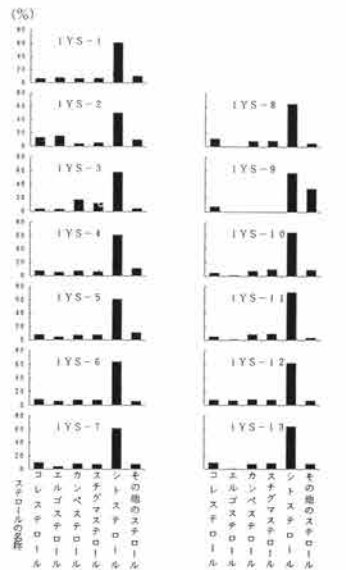


図5-3 1号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

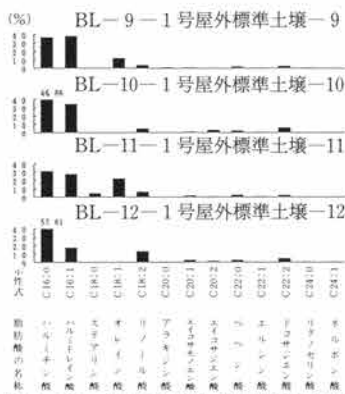


図4-29 1号屋外埋設土器周辺標準土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

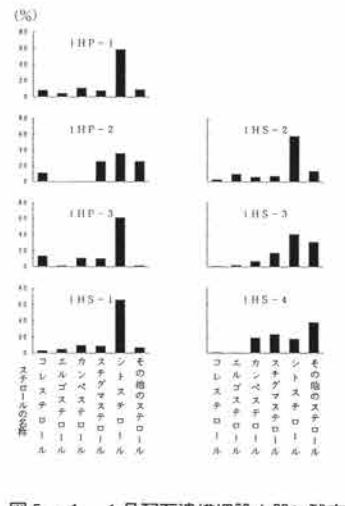


図5-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

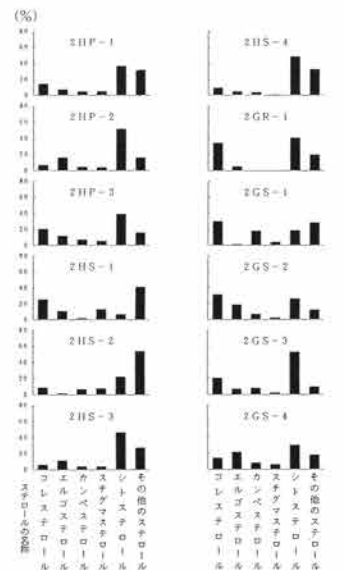


図5-4 2号配石遺構埋設土器および2号土壌に残存する脂肪のステロール組成

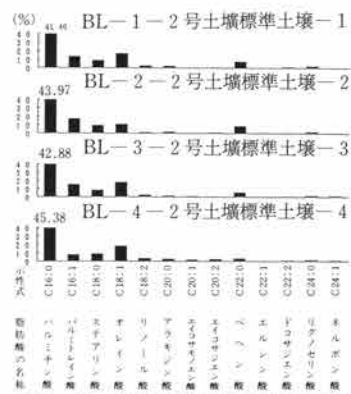


図4-30 2号土壌周辺標準土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

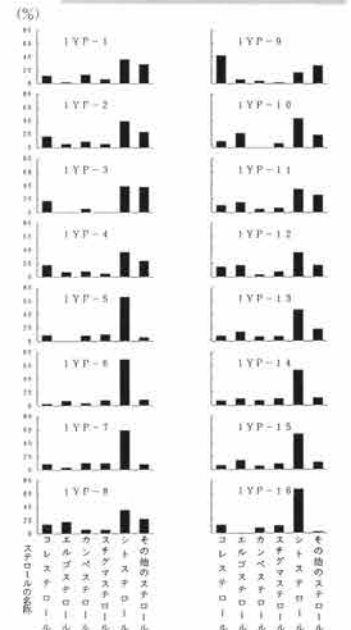


図5-2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

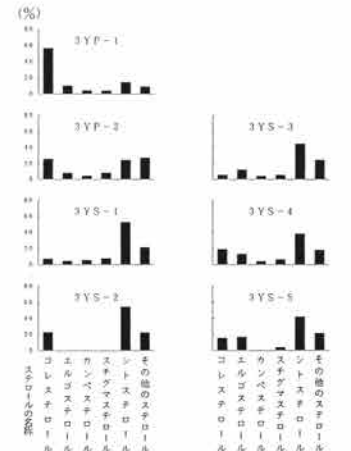


図5-5 3号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-28~31)

図5 残存する脂肪のステロール組成 (5-1~5)

進んでいる可能性が高い。しかし、脂肪酸の分解が進んでいる遺構であっても、埋設土器周辺および土壌土壌の残存脂肪酸組成は明確に遺構外土壌のそれと様相を異にしていた。

5 残存脂肪のステロール組成

土器および土壌に残存する脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィにより分離・精製後、アセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィおよびガスクロマトグラフィ—質量分析で分析、同定した。

試料の残存ステロール組成を図5-1～5-16に示す。残存脂肪から7～11種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールを同定した。コレステロールは動物、エルゴステロールは微生物、カンペステロールは穀類、シトステロールは植物一般に特異的にみられるステロールである。従って、これらのステロールの占める相対比は、動植物起原の指標となる。コレステロールの分布割合が比較的高い値を示したのは、1号屋外埋設土器試料No.1 YP-9 (約43%)、2号配石遺構、2号土壌、3号屋外埋設土器、3号土壌中部土壌試料 (約30～60%)、4号屋外埋設土器試料No.4 YP-1および土器内付着土壌試料No.4 YS-3、No.4 YS-5 (約20～35%)、4号土壌上部および底部直下土壌 (約20～60%)、10号土壌底部土壌試料No.10 GS-6 (約51%)であり、動物性遺体の存在を示唆した。また、1号配石遺構土器 (No.1 HP-2およびNo.1 HP-3)、6号屋外埋設土器3試料 (No.6 YS-3～No.6 YS-5)、6号土壌内土壌試料 (No.6 GS-4、No.6 GS-5、No.6 GS-7～No.6 GS-9)、8号配石遺構埋甕 (No.8 HP-1～No.8 HP-4) および9号土壌内土壌 (No.9 GS-2、No.9 GS-6、No.9 GS-12、No.9 GS-13) では、コレステロールが約10～15%前後と通常の土壌中に分布するコレステロール含量5%前後にくらべて2～3倍高い値を示した。このことは、動物脂肪がわずかではあるが残存していた可能性を示す。その他の遺構、屋外埋設土器および土壌では、コレステロールが5～10%前後分布していたが、シトステロールが約40～60%近く分布し、植物腐植の傾向を示した。対照区土壌試料では一部コレステロールが約40%前後と高い分布値を示したが、これは遺構周辺土壌の攪乱により異種脂肪が混入してきた可能性が高く、元来土壌中に存在していた成分とは考え難い。

一般に墓墳試料から得られた動物遺物の存在を示唆するコレステロールとシトステロール比の指標値は^(11・12・13)0.6以上である。従って、表2に見られるように、先に示したコレステロールの分布割合の高い試料では、ステロール比も0.525～5.459と高い値で分布していた。動物脂肪の痕跡がみられる1号配石遺構、5号土壌、6号屋外埋設土器、6号土壌、8号配石遺構および9号土壌では、ステロール比0.316～0.7133と動物脂肪または動物脂肪と植物脂肪が混合している値を示した。それ以外の6号配石遺構、23号配石遺構および24号配石遺構ではステ

(11) 中野益男、伊賀 啓、根岸孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp 40。

(12) 中野益男、有賀裕子、根岸孝、安本教傳、佐原 真、

4章 自然科学的分析

田中 琢：「脂肪分析と考古学—その活用と問題点について—」、『脂質生化学研究』、第27巻、1985、pp 41。

- (9) 中野益男、伊賀 啓、和氣清彦、根岸 孝、安本教傳、西本豊弘、佐原 真、田中琢：「古代遺跡から出土した獣骨、骨角器に遺存する脂質について」、『脂質生化学研究』、第25巻、1983、pp 236。
- (10) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏：「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』、奈良市教育委員会、1989、pp 5。

ロール比0.078~1.784と低い値であった。対照区土壌では一部のステロール比が1.386~10.690と動物遺体の存在を示す値を検出した。これは周辺遺構の攪乱による異種脂肪の混入によるものと推測される。

6 脂肪酸組成からの数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、その相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って、各試料間の類似度を調べた。その際、平城京跡出土胞衣壺⁽¹⁴⁾とも比較した。各遺構、屋外埋設土器および土壌の樹状構造図を図6-1~6-17に示す。

1号配石遺構の樹状構造図（図6-1）を見ると、対照区土壌試料No. BL-1~No. BL-5およびNo. 1 HP-3は相関行列距離0.05以下でA₁群を、対照区土壌試料No. BL-11、No. 1 HP-1~No. 1 HP-2およびNo. 1 HS-1~No. 1 HS-3はA₂群、対照区土壌試料No. BL-6~No. BL-10およびNo. BL-12は、それぞれA₃、A₄群を形成した。土器底部土壌試料No. 1 HS-4は、平城京出土胞衣壺と相関行列距離0.1以下でA₅群を形成した。これは1号配石遺構出土土器に動物性の脂肪が微量ながら存在していた可能性を示す。

1号屋外埋設土器の樹状構造図（図6-2）を見ると、埋設土器土壌試料では、対照区土壌試料と相関行列距離0.05以下でB₁群、B₃群を形成し、同じ系統樹に属していたのに対して、埋設土器試料No. 1 YP-9およびNo. 1 YP-3は、それぞれ平城京跡胞衣壺とB₂群、B₅群を形成した。

2号配石遺構の樹状構造図（図6-3）を見ると、出土土器試料No. 2 HP-1~No. 2 HP-3は対照区土壌試料No. BL-1~No. BL-5およびNo. BL-7とC₁群を形成し、土壌試料No. 2 HS-1~No. 2 HS-4は対照区土壌試料No. BL-9およびNo. BL-11とC₃群を形成した。C₁群~C₃群は相関距離0.1で高い類似度を示し、平城京跡出土胞衣壺とは別種のものであった。

2号土壌の樹状構造図（図6-4）を見ると、土壌内土壌試料No. 2 GS-1~No. 2 GS-4はD₂群を形成した。礫試料No. 2 GR-1は対照区土壌試料No. BL-1~No. BL-5と非常に近い距離でコロニーを形成した。しかし平城京跡出土胞衣壺とも相関行列距離0.1と近い相関を示し、D₁群を形成した。従って、礫には動物脂肪が付着していたことを示唆する。また、対照区土壌が同じ系統樹に属していたことから、異種脂肪が混入していた可能性が高い。

3号屋外埋設土器および3号土壌の樹状構造図（図6-5・6）を見ると、2号土壌の結果と同様、土壌試料は平城京跡出土胞衣壺とそれぞれE₁、F₁群を形成し、動物脂肪が存在していた可能性を示した。

4号屋外埋設土器の樹状構造図（図6-7）を見ると、対照区土壌はそれぞれG₁、G₂およびG₄群を形成し、埋設土器土壌はG₃群を形成した。しかし、いずれの群とも相関距離0.2以下と比較的近く、同種の系統樹に属していたのに対して、埋設土器試料No. 4 YP-1およびNo. 4 YP-2では他の群とは相関距離0.3以

〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

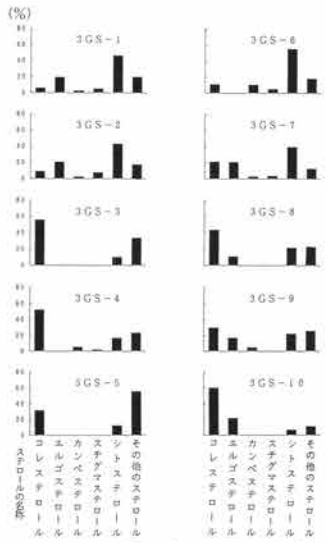


図5-6 3号土壌に残存する脂肪のステロール組成

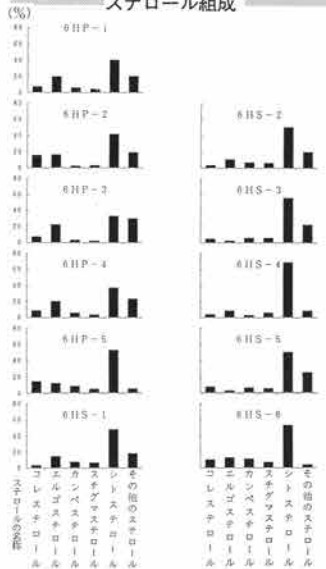


図5-9 6号配石遺構伏壺に残存する脂肪のステロール組成

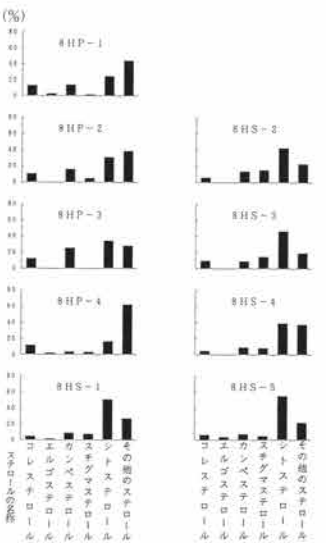


図5-12 8号配石遺構埋壺に残存する脂肪のステロール組成

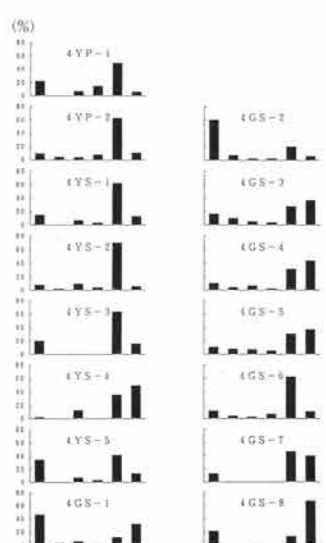


図5-7 4号屋外埋設土器及び4号土壌に残存する脂肪のステロール組成

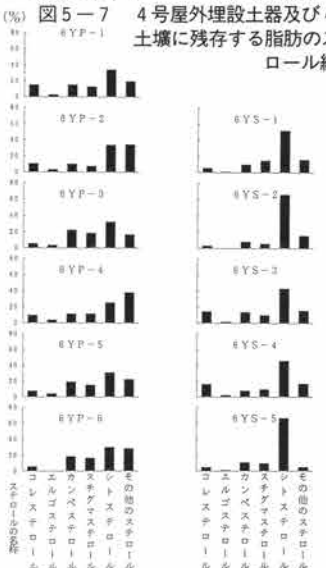


図5-10 6号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

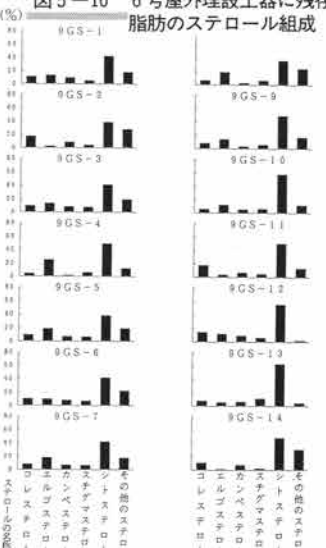


図5-13 9号土壌に残存する脂肪のステロール組成

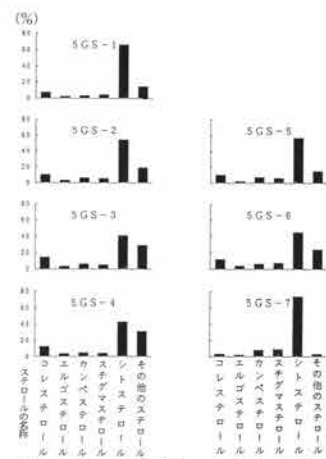


図5-8 5号土壌に残存する脂肪のステロール組成

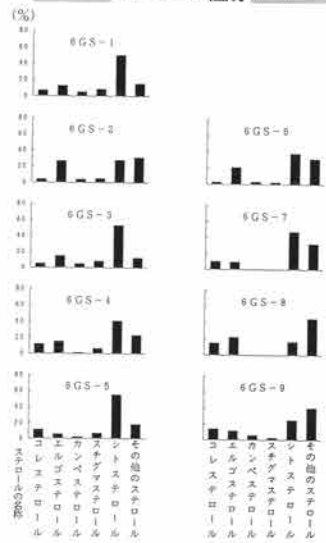


図5-11 6号土壌に残存する脂肪のステロール組成

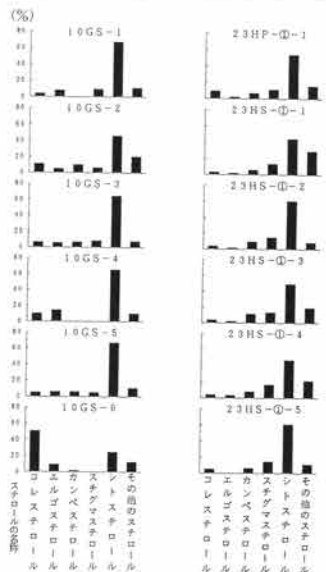


図5-14 10号土壌および23号配石遺構埋壺①に残存する脂肪のステロール組成

4章 自然科学的分析

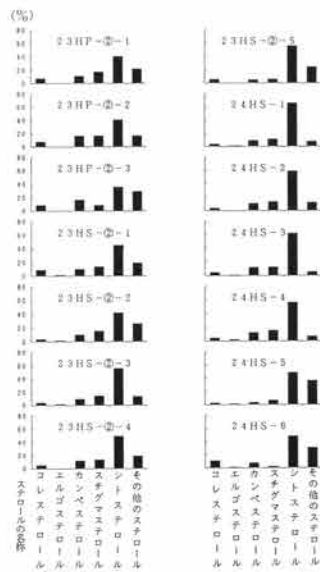


図5-15 23号配石遺構埋設②および24号配石遺構先端部埋設に残存する脂肪のステロール組成

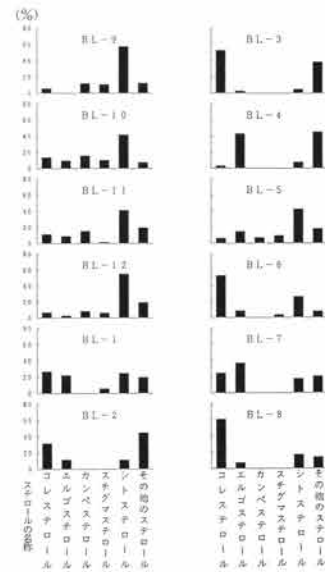


図5-16 1号屋外埋設土器、2号土壌および3号屋外埋設土器周辺標準土壌に残存する脂肪のステロール組成

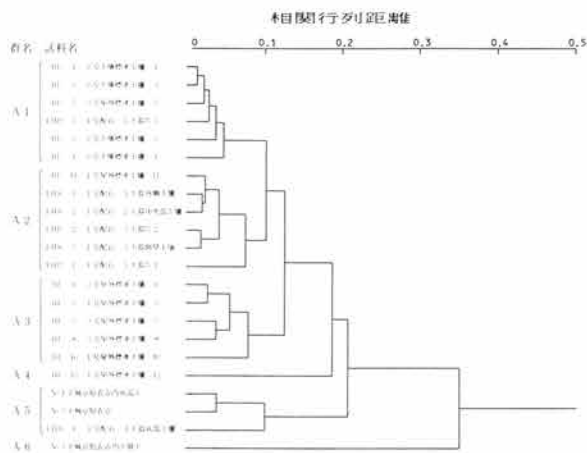


図6-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

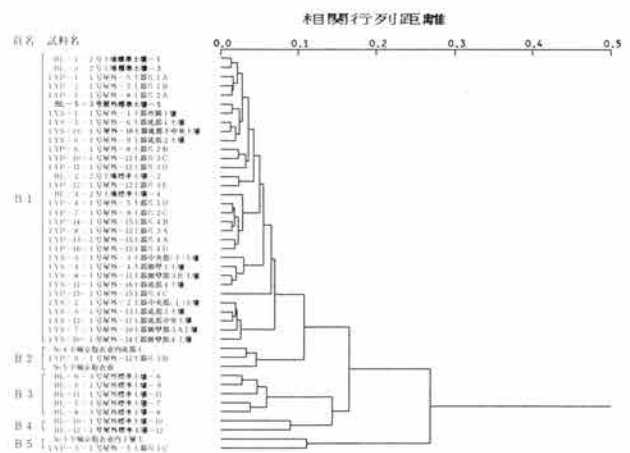


図6-2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

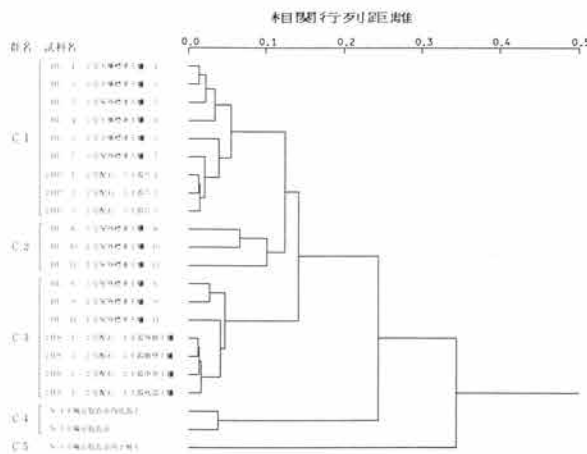


図6-3 2号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

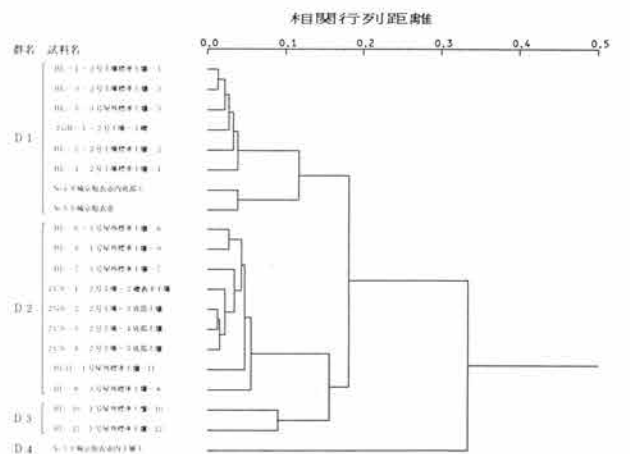


図6-4 2号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図5 残存する脂肪のステロール組成 (5-15・16)

図6 残存する脂肪酸組成樹状構造図 (6-1~4)

〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

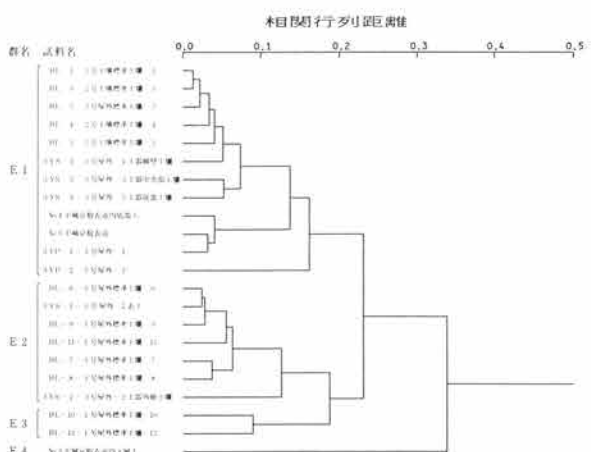


図6-5 3号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

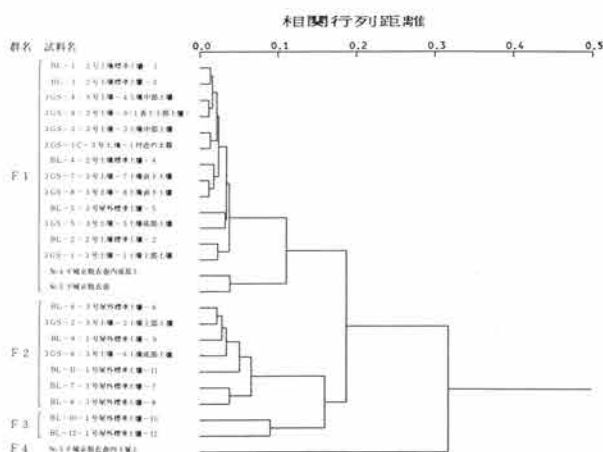


図6-6 3号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

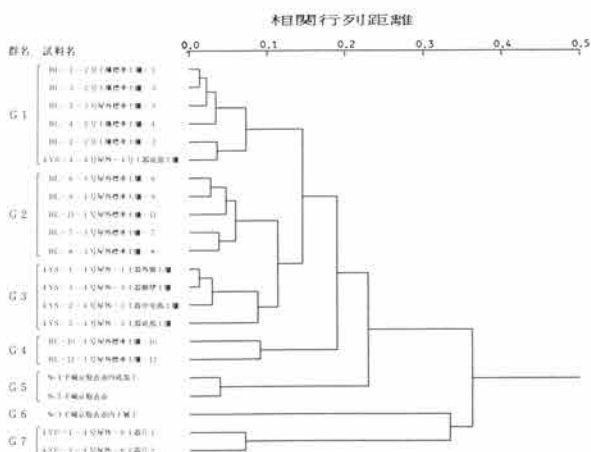


図6-7 4号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

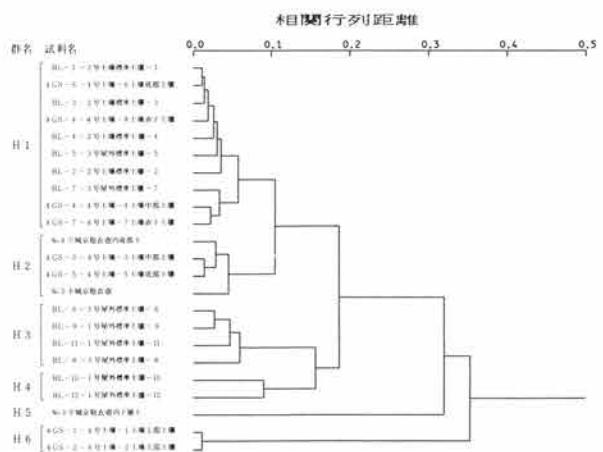


図6-8 4号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

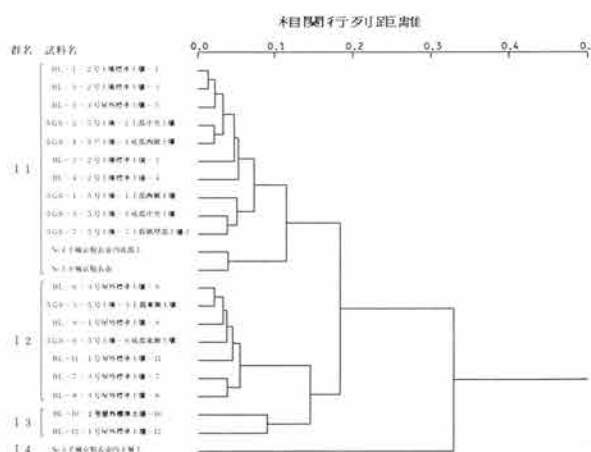


図6-9 5号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

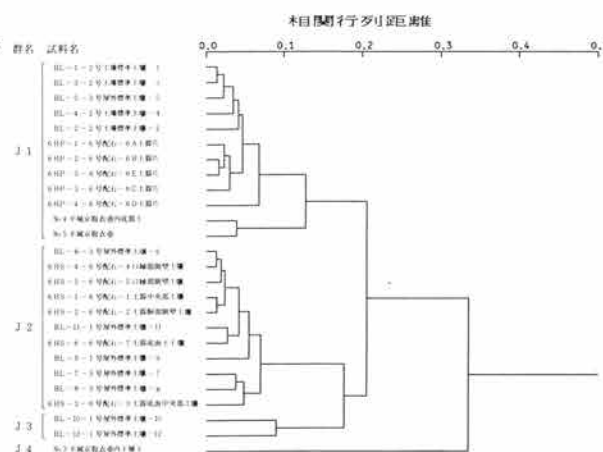


図6-10 6号配石遺構伏壘に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図6 残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 (6-5~10)

4章 自然科学的分析

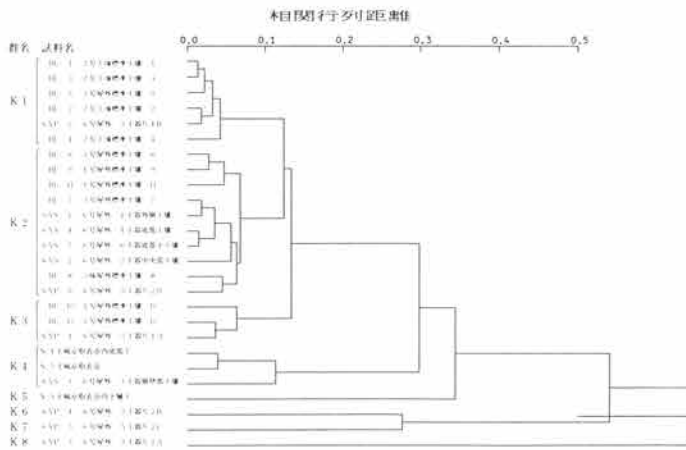


図6-11 6号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

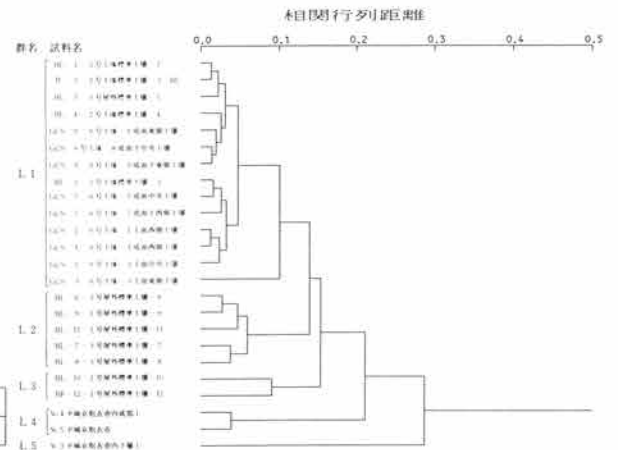


図6-12 6号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

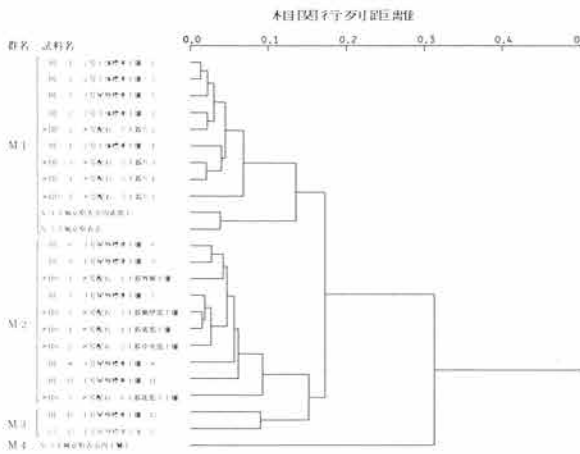


図6-13 8号配石遺構埋壙に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

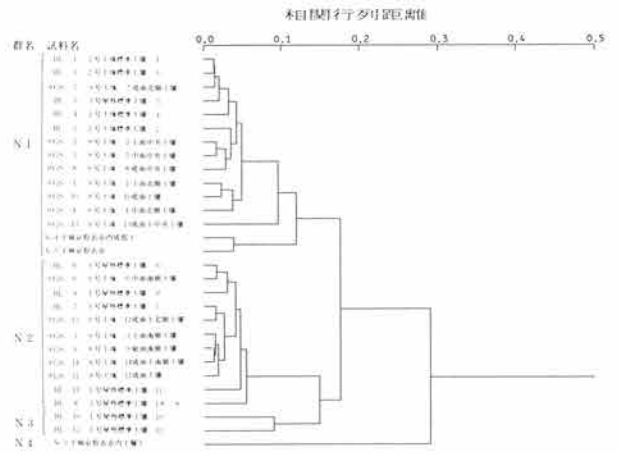


図6-14 9号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

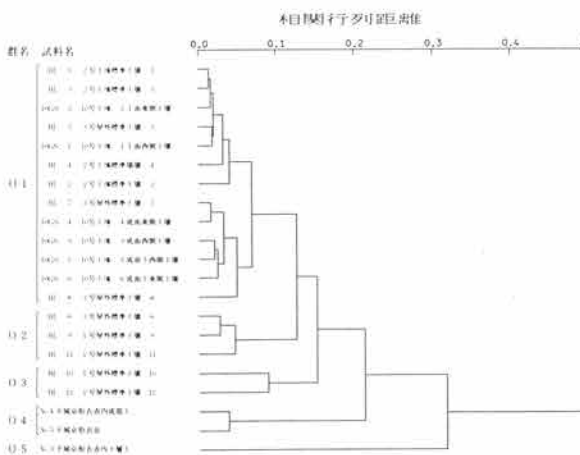


図6-15 10号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

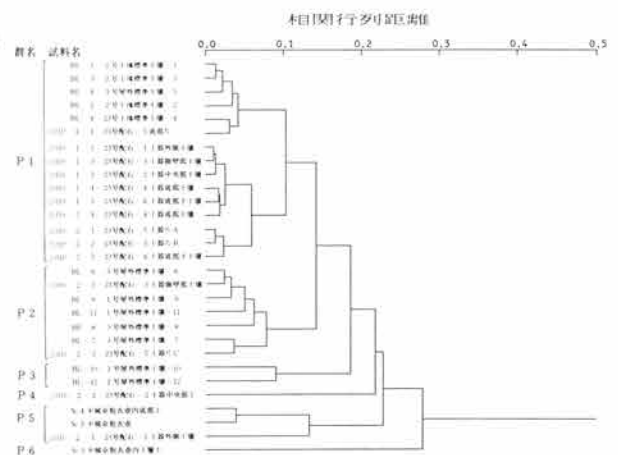


図6-16 23号配石遺構埋壙に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図6 残存する脂肪酸組成樹状構造図 (6-11~16)

上と離れてG₇群を形成し、別種の脂肪が付着していたことを示唆した。

4号土壌の樹状構造図(図6-8)を見ると、土壌試料No.4 GS-4及びNo.4 GS-5は胞衣壺と相関距離0.05以下と非常に短く、H₂群を形成した。このことは土壌中に動物脂肪が存在していることを示唆する。また土壌上部土壌試料であるNo.4 GS-1およびNo.4 GS-2は、別の系統樹に属するH₆群を形成した。これは、土壌の層の違いにより、土壌の性質がかなり異なっていることを意味する。

1号配石遺構から4号土壌のクラスター分析の結果、平城京跡出土胞衣壺と類似度が高く、同質の脂肪酸組成をもつ1号配石遺構、1号屋外埋設土器、2号土壌、3号屋外埋設土器、3号土壌および4号土壌、胞衣壺と類似度が低く、異質の脂肪酸組成をもつ2号配石遺構および4号屋外埋設土器の2通りに分かれた。他の配石遺構、屋外埋設土器および土壌の樹状構造図(図6-9～6-17)について見ると、5号土壌、6号配石遺構、8号配石遺構、9号土壌および24号配石遺構では土壌試料および土器試料の脂肪が胞衣壺と同質の脂肪酸組成であり、6号屋外埋設土器、6号土壌、10号土壌および23号配石遺構は胞衣壺と異質の脂肪酸組成であった。しかし、その中で6号屋外埋設土器では土器側壁土壌試料No.6 YS-3だけが胞衣壺と相関行列距離0.1と類似性の高いコロニーを形成し、動物脂肪が残存していた傾向を示したが、土器試料No.6 YP-3～No.6 YP-5とは遠い距離にあり、土器には別種の脂肪が付着していた可能性がある。23号配石遺構についてもNo.23 HS-②-1だけが胞衣壺と近い距離にあった。また、各試料とも対照区土壌と近い距離にあり、遺跡周辺の土壌がかなり混在している可能性がある。従って、平城京胞衣壺と同じコロニーを形成した土器試料の1号屋外埋設土器、2号土壌出土礫、6号配石遺構出土土器および8号配石遺構出土土器については、土器使用目的由来の脂肪が付着していた可能性が高い。

7 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪・骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

各配石遺構、屋外埋設土器および土壌の残存脂肪から求めた相関図を図7-1～7-17に示す。1号配石遺構について見ると、土器試料No.1 HP-3を含むA₁群が第2象限に分布し、動物脂肪の存在を示した(図7-1)。1号屋外埋設土

器では、B₁群が第1象限から第2象限にかけて分布した。埋設土器No.1 YP-3はB₅群を形成し第1象限の原点から離れた位置に分布した(図7-2)。2号配石遺構では出土土器No.2 HP-1~No.2 HP-3が第2象限に分布した。また土壌試料No.2 HS-1~No.2 HS-4については第2象限から第3象限にかけて分布し、植物腐植土を示した(図7-3)。2号土壌では、出土した礫No.2 GR-1が第2象限に分布した以外、土壌試料No.2 GS-1~No.2 GS-4は植物腐植を示す位置に分布した(図7-4)。

その他の各遺構、屋外埋設土器および土壌について見ると(図7-5~7-17)、3号屋外埋設土器ではE₁群、3号土壌ではF₁群、4号屋外埋設土器ではG₁およびG₇群、4号土壌ではH₁およびH₂群が、それぞれ第2象限の原点から離れた位置に分布した。5号土壌ではI₁およびI₂群のすべての試料とも第2象限の原点に近い位置に分布し、植物腐植土が混流している可能性を示した。6号配石遺構では、すべての土器試料を含むJ₁群が第2象限に分布した。6号屋外埋設土器では土器試料が第2象限(K₁群)、第1象限の原点付近(K₆群)、第4象限(K₇群、K₈群)にそれぞれ分布していた。6号土壌および8号配石遺構ではL₁群およびM₁群が第2象限に分布していた。10号土壌のO₁群は第2象限から第3象限にかけて分布していた。9号土壌、23号配石遺構および24号配石遺構ではN₁群、P₁群およびQ₁群が第1象限から第2象限にかけて分布していた。この位置は奈良県平城京跡から出土した胞衣壺によく類似していた。これらの成績とクラスター分析およびステロール分析の結果を総合すると、1号配石遺構、2号土壌、3号土壌、4号土壌、6号土壌、8号配石遺構、9号土壌および10号土壌には動物遺体が埋葬されていたと推測される。しかし、1号配石遺構、6号土壌、8号配石遺構、9号土壌および10号土壌では動物由来のコレステロールが約10%前後と低いことや、宮城県摺萩遺跡の再葬墓の脂肪酸分布とかなり高い類似性をもつことから、人体そのものを直接埋葬した可能性は低い。とくに配石遺構群では第2象限に土器試料が分布していることから、土器内に高等動物由来の遺物を埋納した可能性も推察される。1号屋外埋設土器、2号配石遺構、3号屋外埋設土器、4号屋外埋設土器、6号配石遺構、23号配石遺構および24号配石遺構では、平城京跡出土胞衣壺と非常によく類似しており、埋設土器には動物由来の遺物が埋納されていたと推測される。5号土壌は動物脂肪の痕跡はみられたが、コレステロール含量が低いことから動物遺体の存在を断定することは困難であった。6号屋外埋設土器では、種特異性相関で第4象限に分布しており、動物性ステロールが少ないことから、異種の脂肪が混入した可能性が高い。しかし、その脂肪種については解明できなかった。

(15) 中野益男、福島道広、長田正宏、中野寛子：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会。

〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

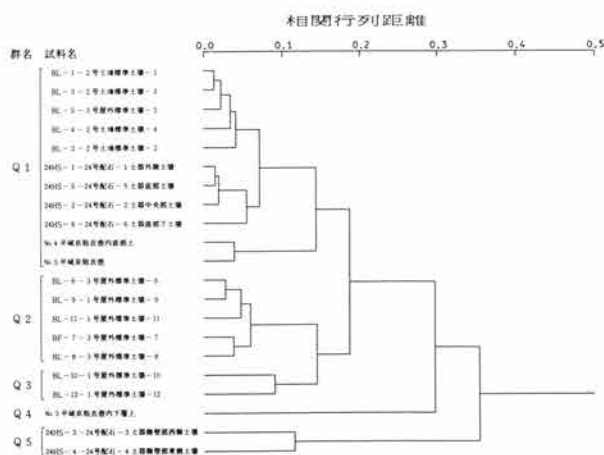


図6-17 24号配石遺構先端部埋設に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

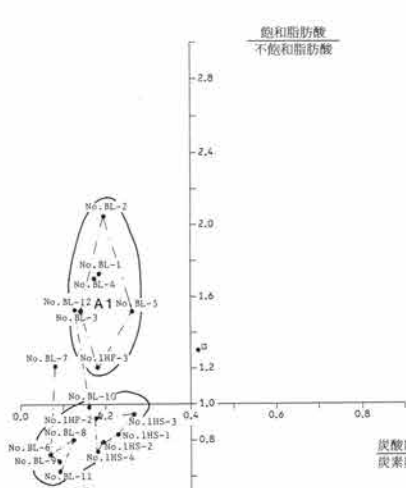


図7-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

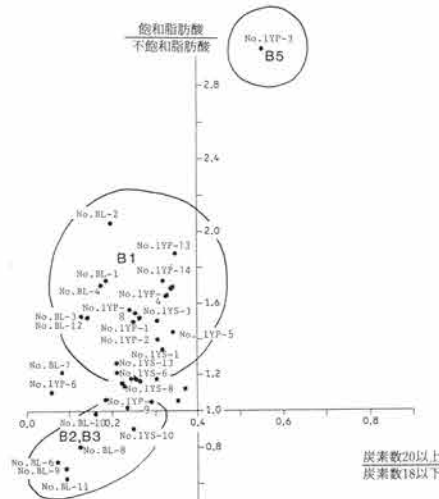


図7-2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

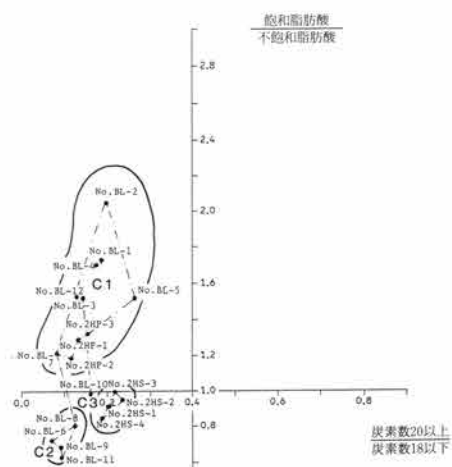


図7-3 2号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

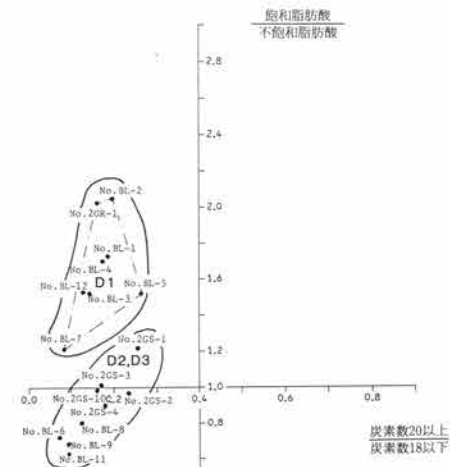


図7-4 2号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

図6 残存する脂肪酸組成樹状構造図 (6-17)

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関 (7-1~4)

4章 自然科学的分析

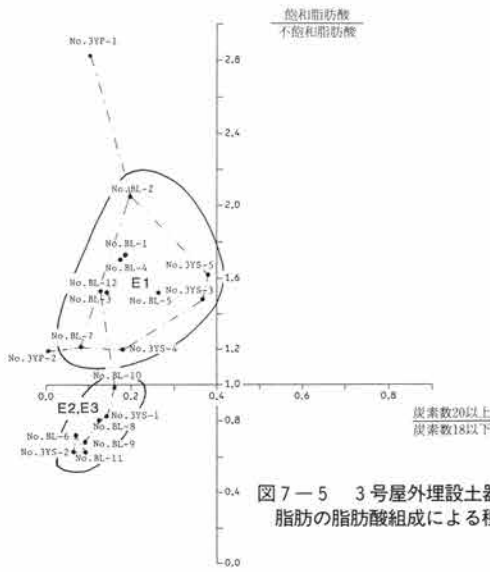


図7-5 3号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

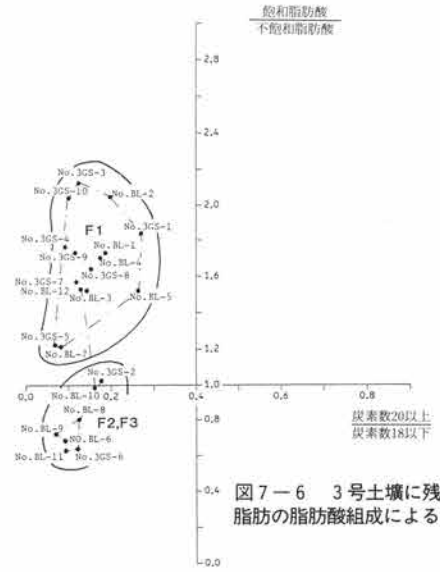


図7-6 3号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

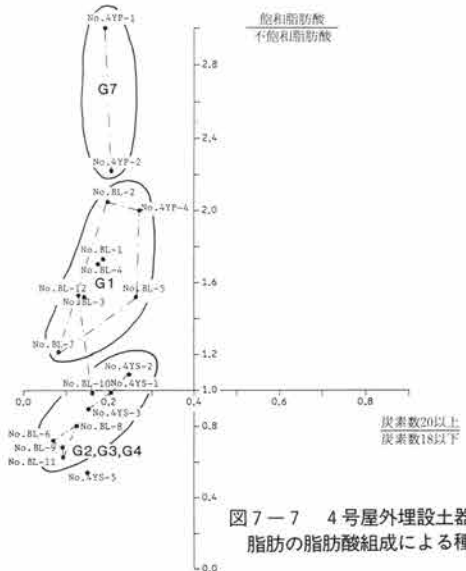


図7-7 4号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

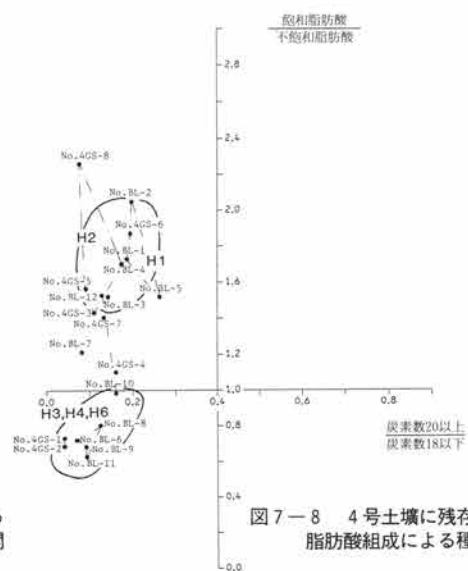


図7-8 4号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

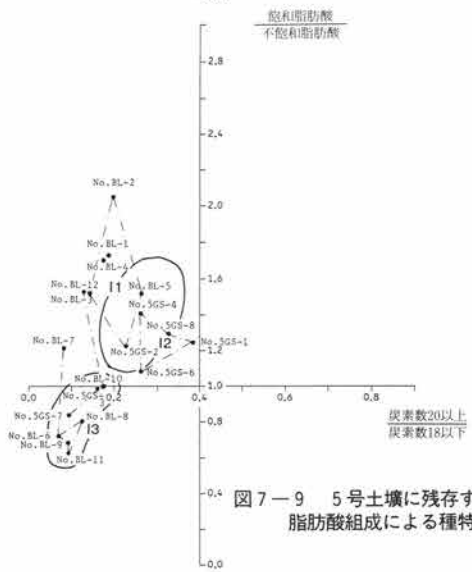


図7-9 5号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

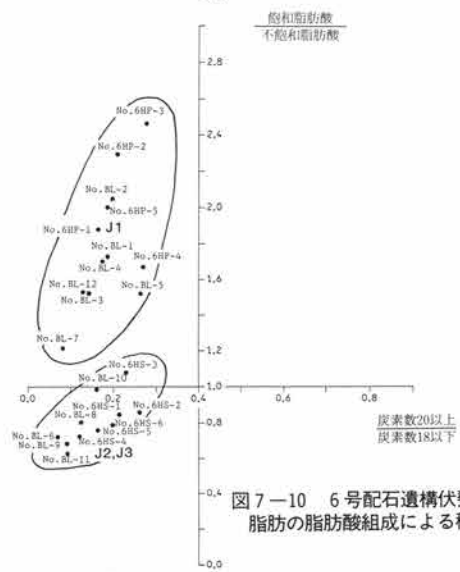


図7-10 6号配石遺構伏壺に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関 (7-5~10)

〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

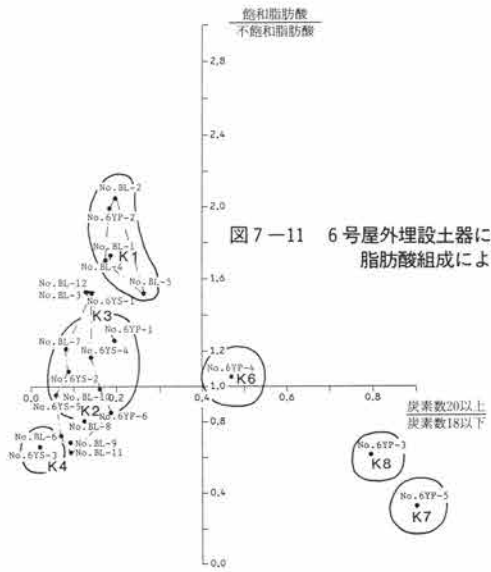


図7-11 6号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

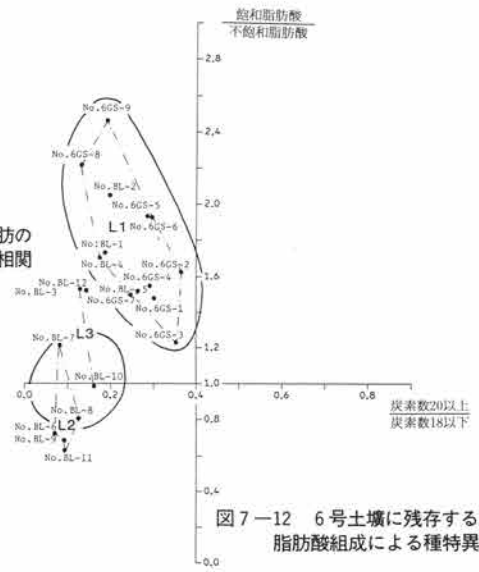


図7-12 6号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

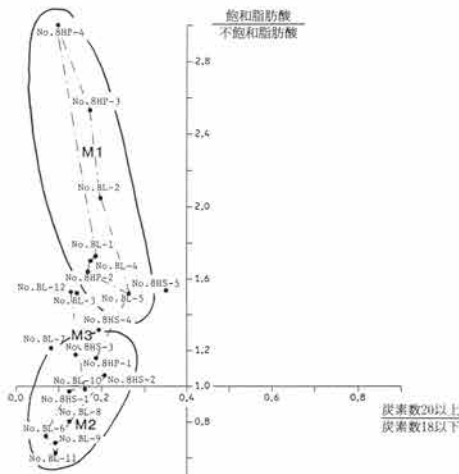


図7-13 8号配石遺構埋壘に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

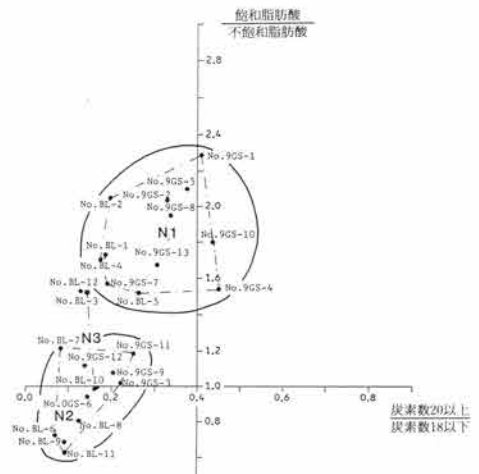


図7-14 9号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

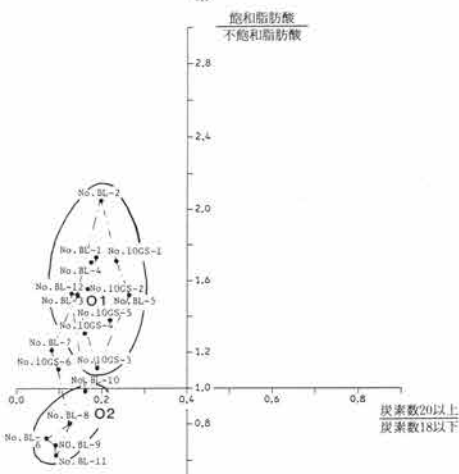


図7-15 10号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

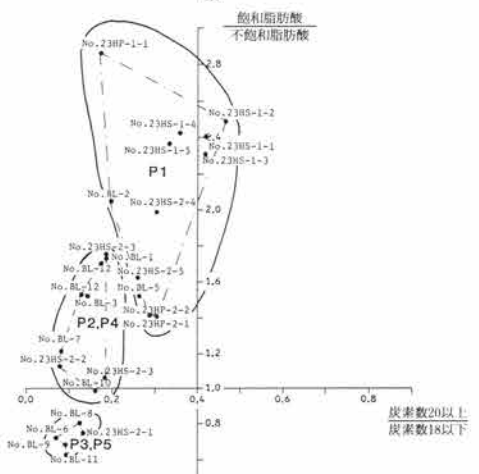


図7-16 23号配石遺構埋壘に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関 (7-11~16)

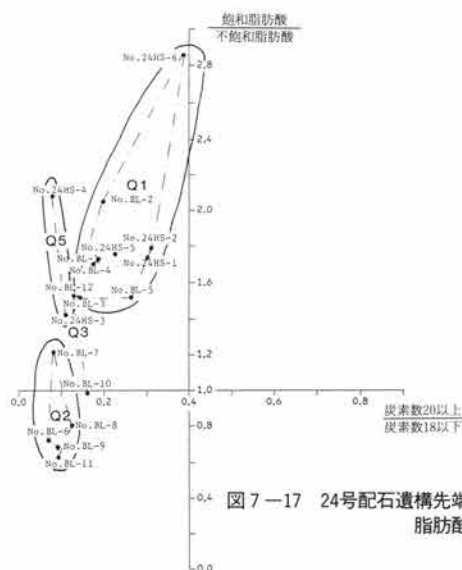


図7-17 24号配石遺構先端部埋甕に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関 (7-17)

8 総括

田篠中原遺跡遺構群、屋外埋設土器および土壌試料に残存する脂肪を分析した。その結果、1号配石遺構、2号土壌、3号土壌、4号土壌、6号土壌、8号配石遺構、9号土壌および10号土壌は動物遺体が埋葬されていたと推測される。その中で6号土壌および10号土壌については、コレステロール含量が低く、土壌の流動または宮城県摺萩遺跡から出土した再葬墓の脂肪酸分布とかなり高い類似性をもつことから、人体そのものを直接埋葬した可能性は低く、再葬墓の可能性が高い。

1号屋外埋設土器、2号配石遺構、3号屋外埋設土器、4号屋外埋設土器、6号配石遺構、23号配石遺構埋設土器①および24号配石遺構は平城京跡出土胞衣壺と非常によく類似していた。このことから埋設土器に高等動物の胎盤由来の遺物が存在していた可能性が高い。その他の土壌および埋設土器からは動物性脂肪を検出できなかった。土壌墓および埋設土器に埋葬、埋納されている動物種とくにヒトの認定については、この成績からだけでは判定できなかった。

現在、胎盤については哺乳動物の胎盤由来の糖脂質群の糖鎖を抗原抗体反応を用いる免疫学的手法により読み取って確認中である。

〔2〕田篠中原遺跡の縄文土器胎土分析

—X線回析試験及び電子顕微鏡観察—

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとうりである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10$ m/mの試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘度鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu、Filter: Ni、Voltage: 40Kv、Current: 30mA、ステップ角度： 0.02° 、計数時間：0.5SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35、350、750、1500、5000、の5段階で行い、写真撮影した。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとうりである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第1図(左)に示すように三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、のX線回析試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb、も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

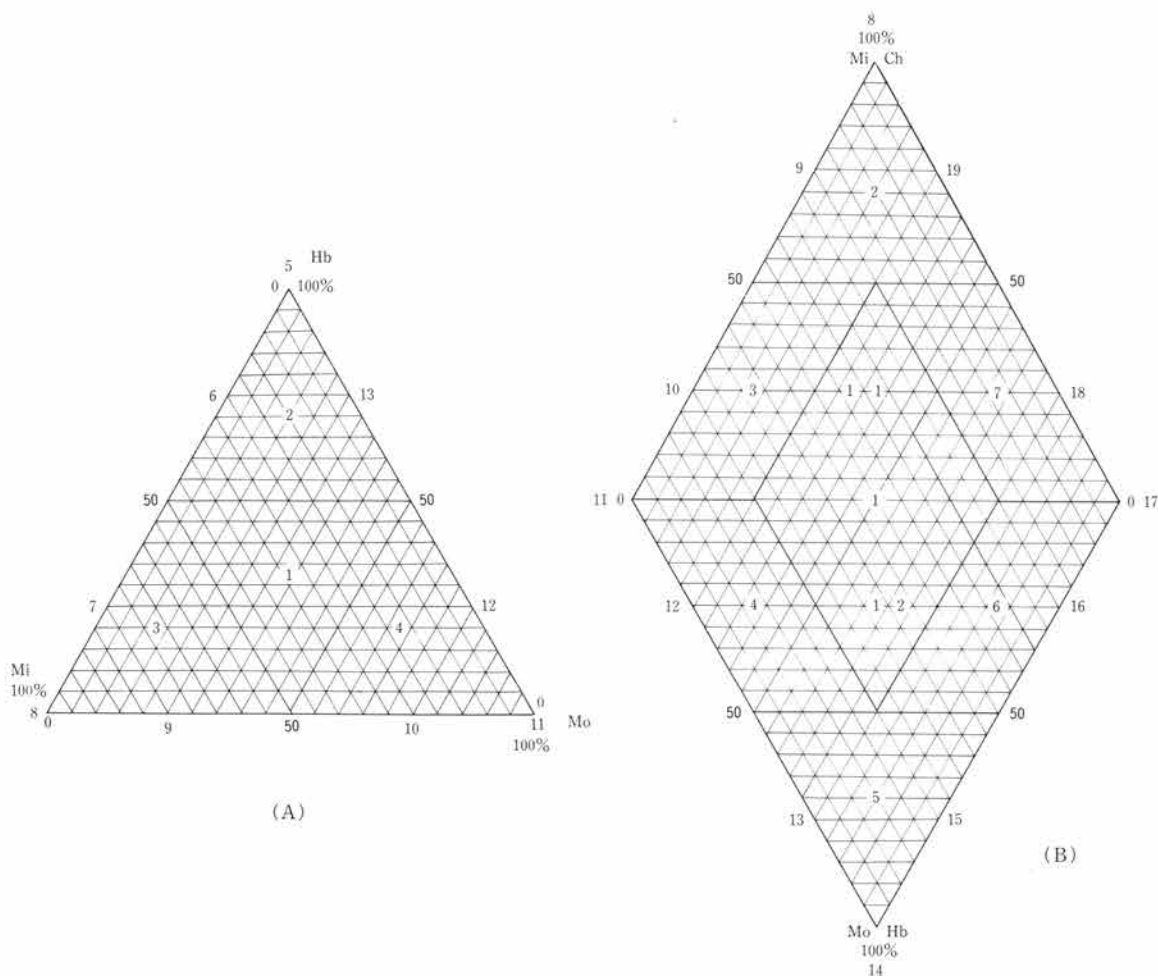
三角ダイヤグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図(A)に示すとうりである。

2) Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

第1図(B)に示すように菱形ダイヤグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)、



第1図 三角(A)・菱形(B)ダイヤグラム位置図

のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Ch、の2成分が含まれない、c) Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch、Mica-Hb の組み合わせを表示するものである。Mont-Ch、Mica-Hb のそれぞれのX線回析試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo / Mo + Ch \times 100$ と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Ch、の4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Ch、のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第1図(B)に示すとうりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁気、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大字を使用し、同

第1表 胎土性状表

90. 田篠中原遺跡(群馬)

| 試料 No | タイプ 分類 | 焼成 ランク | 組成分類 | | 粘土鉱物および造岩鉱物 | | | | | | | | | | ガラス | 備考 | |
|----------|-----------|-----------|----------|--------------|-------------|------|-----|--------|--------|------|--------|------|------|----|-----|----|----------------|
| | | | Mo-Mi-Hb | Mo-Ch. Mi-Hb | Mont | Mica | Hb | CH(Fe) | Ch(Mg) | Kaol | K-fels | Qt | Pl | Cr | | | Mu |
| 田篠中原-1 | G | III~IV | 14 | 20 | | | | | | | | 1285 | 599 | | | 細粒 | 中粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 2 | E | III | 7 | 20 | | 146 | 98 | | | | | 2604 | 702 | | | 中粒 | 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 3 | D | III~IV | 7 | 9 | | 244 | 203 | 177 | | | | 2491 | 1319 | | | 細粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 4 | D | III | 7 | 9 | | 307 | 162 | 410 | 205 | | | 2669 | 607 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 5 | F | III~IV | 8 | 20 | | 144 | | | | | | 1372 | 529 | | | 細粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 6 | D | III | 7 | 9 | | 197 | 142 | 216 | | | | 3655 | 718 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 7 | D | III~IV | 7 | 9 | | 179 | 121 | 271 | 79 | | | 1994 | 511 | | | 細粒 | 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 8 | A | III~IV | 1 | 1 | 182 | 147 | 148 | 193 | | | | 1598 | 797 | | | 細粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 9 | C | III | 9 | 10 | | 136 | 163 | 141 | 74 | | | 2039 | 880 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 10 | B | III | 5 | 11 | | | 211 | 311 | | | | 2338 | 888 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 11 | D | III | 7 | 9 | | 222 | 123 | 428 | 100 | | | 1570 | 1785 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 12 | E | III | 7 | 20 | | 250 | 143 | | | | | 2299 | 1103 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 13 | D | III~IV | 7 | 9 | | 134 | 100 | 163 | | | | 2935 | 811 | | | 細粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 14 | D | III | 7 | 9 | | 257 | 170 | 302 | 84 | | | 1846 | 346 | | | 中粒 | 中粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 15 | D | III | 7 | 9 | | 192 | 105 | 322 | 104 | | | 2871 | 484 | | | 中粒 | 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 16 | D | III | 7 | 9 | | 307 | 172 | 336 | 101 | | | 2487 | 1177 | | | 中粒 | 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土 |
| 原土-上層 | D | | 7 | 9 | | 332 | 280 | 356 | 665 | | | 2955 | 1359 | | | | |
| 原土-下層 | D | | 7 | 9 | | 458 | 290 | 410 | 838 | | | 2767 | 1495 | | | | |

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナイト Ha: ハロイサイト Au: 普通輝石

Hy: 紫蘇輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリストバーライト Mu: ムライト

じ組み合わせのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイヤグラムの1と菱形ダイヤグラムの1の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの2と菱形ダイヤグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第2図(A)三角ダイヤグラム、第2図B菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Gの7タイプに分類された。

分析した土器は加曽利E3式とE4式の深鉢を主体とするもので、隣接する善慶寺早道場遺跡の土層断面より採取した原土と対比した。

分析結果によれば、土器16個のうち9個がDタイプの土器であり、全体の55%を占めている。個体数の多いことから推察して在地あるいは在地近傍の可能性が最も高いと判断される。事実、土層断面より採取した原土2個もDタイプであり、組成は一致しており、在地の可能性が高いことを裏付けている。Eタイプは2個、その他は各1個で構成されている。

電子顕微鏡によるガラスの分析では中粒のガラスが生成している焼成ランクがⅢのものは10個、細粒なガラスが生成している焼成ランクがⅢ～Ⅳのものが6個で、全体に焼成ランクⅢのものが多く、やや高い焼成環境を示している。

次に各タイプについて述べる。

Aタイプ……田篠中原遺跡—8

Mont, Mica, Hb, Ch の4成分を含む。個体数は1個である。

組成的にはCタイプに近いものである。

Bタイプ……田篠中原遺跡—10

Hb, Ch の2成分を含み、Mont, Mica の2成分に欠ける。個体数は1個である。

Cタイプ……田篠中原遺跡—9

Mica, Hb, Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。個体数は1個である。組成的にはDタイプと類似するがピーク強度が違うために、位置分類が異なっている。

Dタイプ……田篠中原遺跡—3、4、6、7、11、13、14、15、16

原土—上層、下層

Mica, Hb, Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。個体数は9個で、原土とも同じ組成をしており、個体数の多いことから判断して在地あるいは在地近傍の可能性が最も高い。

Eタイプ……田篠中原遺跡—2、12

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。個体数は2個である。

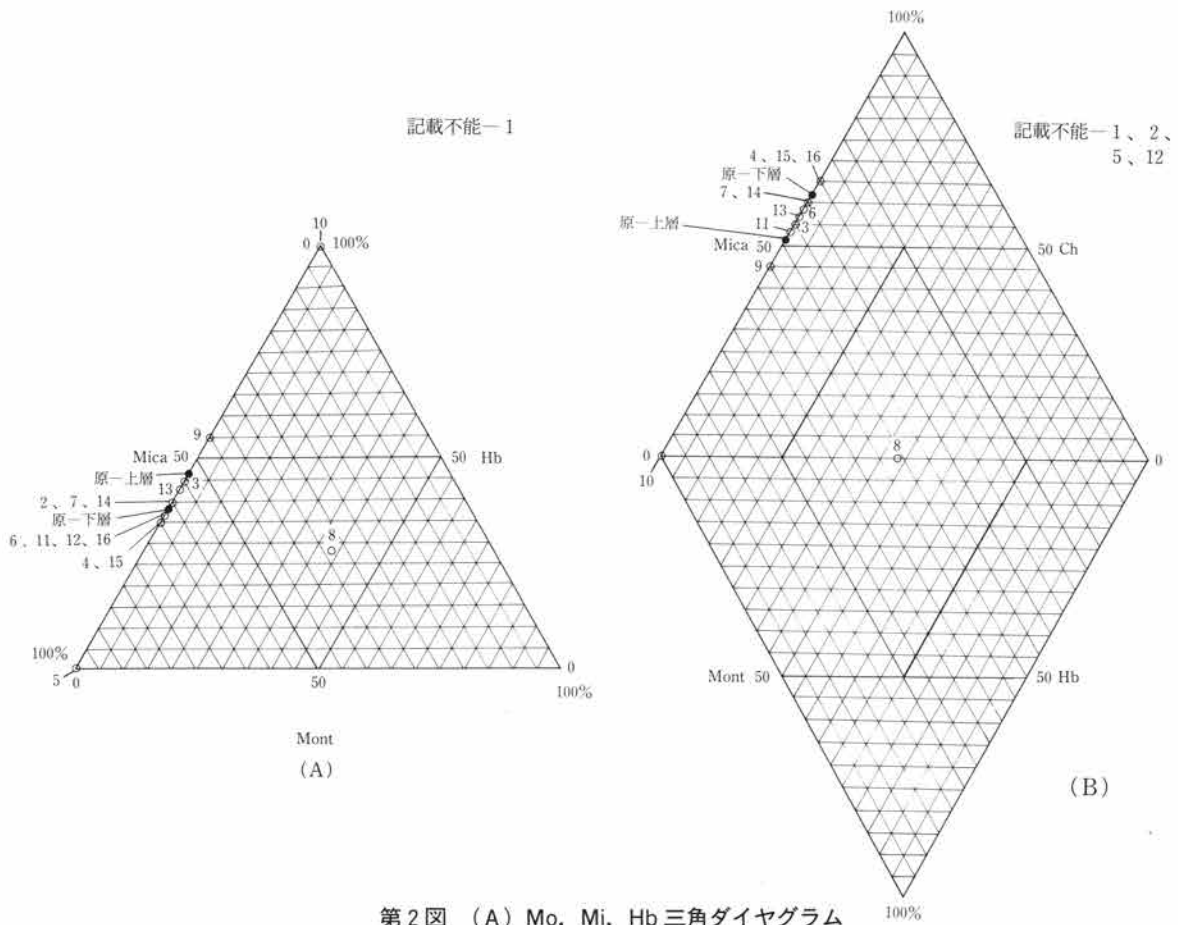
Fタイプ……田篠中原遺跡-5

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。個体数は1個である。胎土的には田篠中原遺跡においては異質のものである。

Gタイプ……田篠中原遺跡-1

Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。おもに、アルミナゲル ($nAl_2O_3 \cdot m \cdot SiO_2 \cdot lH_2O$) で構成される。個体数は1個であるが、他のものと比較して組成的には異質である。

分析した土器と原土を比較対比すると、組成的にはDタイプの土器が原土と一致し、在地あるいは在地近傍の可能性が最も高いと判断された。組成的に異質なものはFとGタイプであり、田篠中原遺跡-1、5は異質のものではなからうか。石英と斜長石の相関では田篠中原遺跡-1と5は共にグループを形成しており、このようなことから推察すると、田篠中原遺跡-1と5は他からの



第2図 (A) Mo, Mi, Hb 三角ダイヤグラム
(B) Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

搬入品である可能性が高い。これらの組成は埼玉県で比較的多く認められるものである。

3-2 石英（Qt）—斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英—斜長石比を有しているといえる。

この個有の比率を有する砂を、どの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する技術の一端である。

第3図石英—斜長石相関図には田篠中原遺跡の土器と埼玉県の将監塚遺跡の土器が記載してある。図からも明らかなように、I～VIIの7グループと“その他”に分類された。次に各グループについて述べる。

Iグループ……田篠中原遺跡—11、将監塚遺跡—11、24

斜長石の強度が高いことが特徴で、田篠中原遺跡の土器はDタイプの胎土で、将監塚遺跡の土器はこれに類似するタイプで構成されている。

IIグループ……田篠中原遺跡—3、12、16 将監塚遺跡—9、14、16、20、23

このグループは7個が集中するもので、田篠中原遺跡の土器は加曾利E3タイプで、胎土はDタイプのもので構成されるのが特徴である。原土に近く、直接原土を使用している可能性もある。また、将監塚遺跡の土器もDタイプの胎土で構成されている。

IIIグループ……将監塚遺跡—1、5、10、18、19

将監塚遺跡の土器だけで構成されるグループで、個体数は5個で、集中度もいい。

IVグループ……田篠中原遺跡—8、9、10

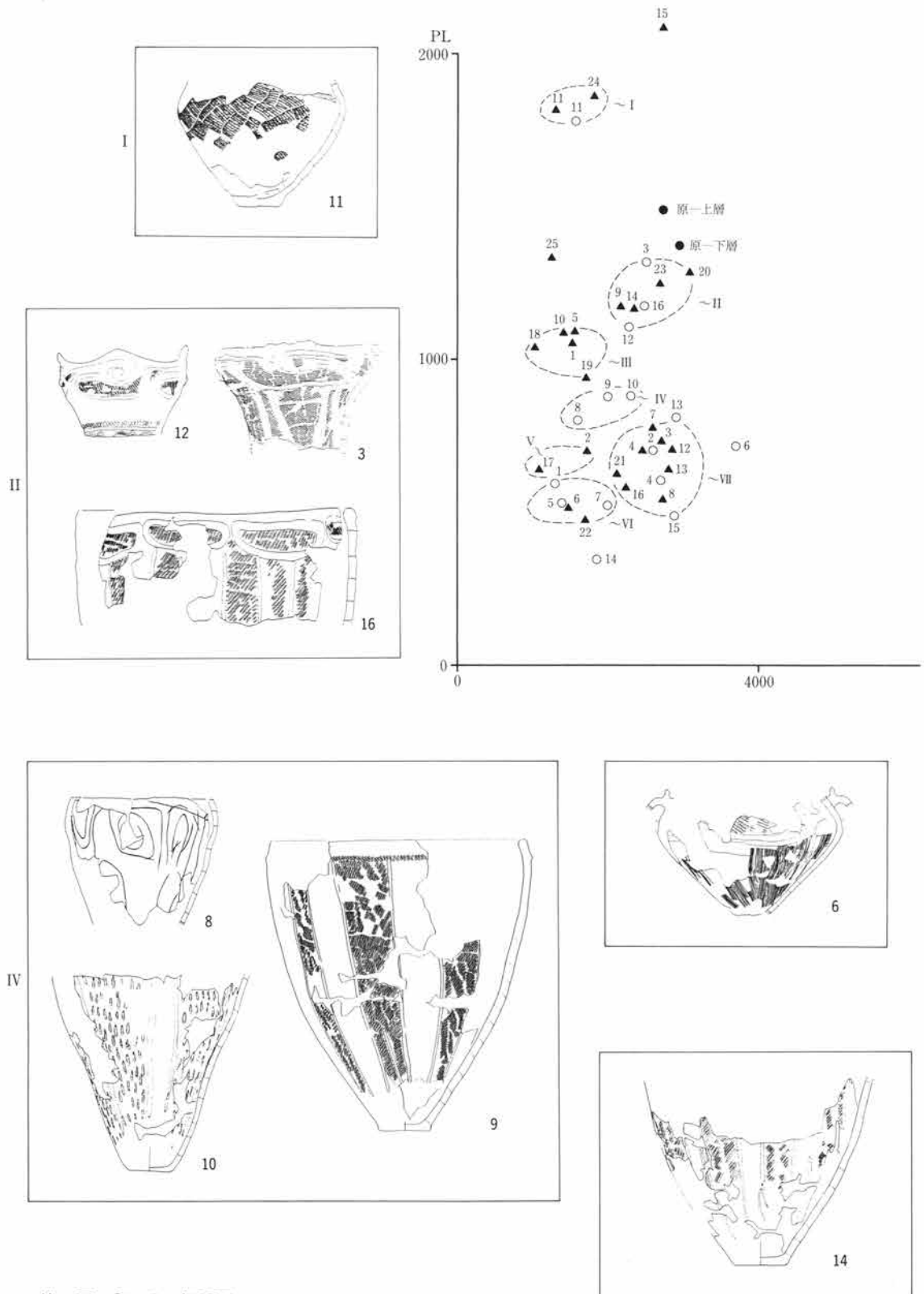
田篠中原遺跡の土器だけで構成されるグループで、加曾利E4式の土器が集中し、この土器で特徴づけられる。田篠中原遺跡—8はA、9はC、10はBと組成的な統一性に欠ける。

Vグループ……将監塚遺跡—2、17

将監塚遺跡の土器だけで構成される。

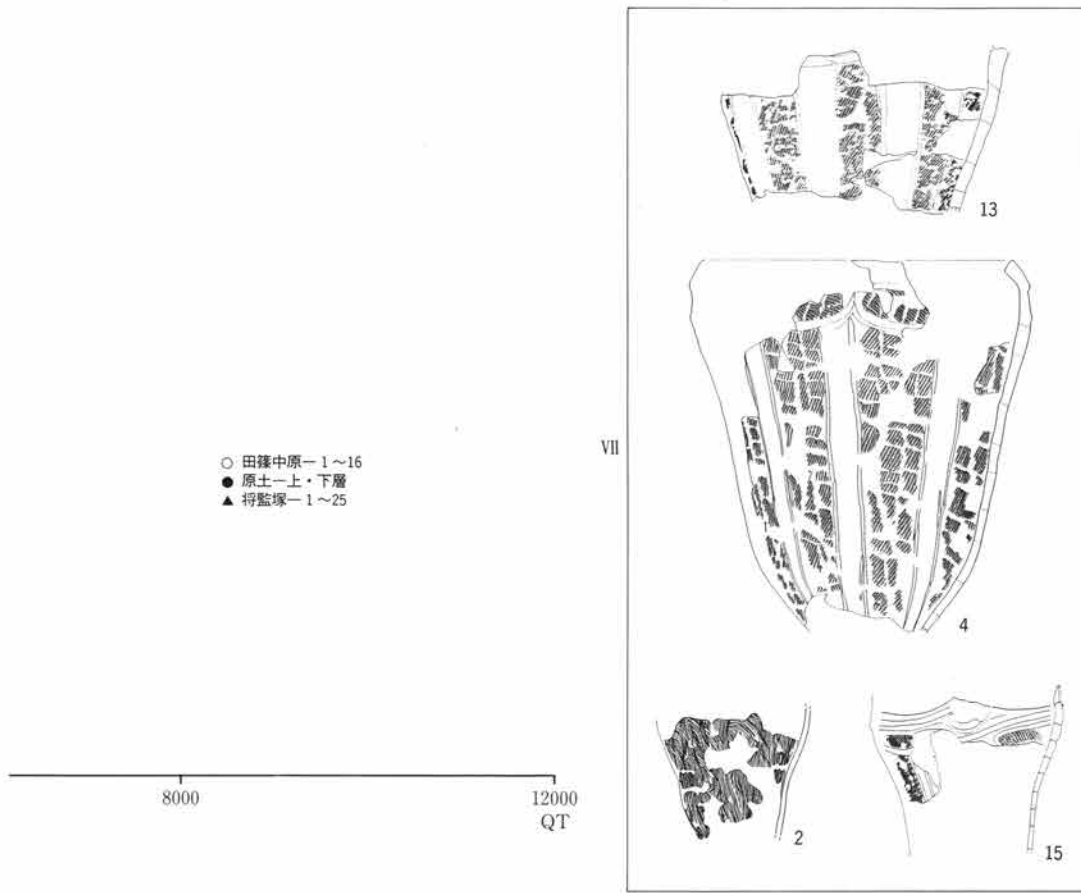
VIグループ……田篠中原遺跡—1、5、7 将監塚遺跡—6、22

田篠中原遺跡の土器と将監塚遺跡の土器が共存するグループで、田篠中原遺跡—1、3はともに加曾利E3タイプで、接



第3図 Qt-P1 相關図

〔2〕田篠中原遺跡の縄文土器胎土分析



近しているが、田篠中原遺跡-7は加曾利E4タイプで少し離れており、このグループには入らないのかもしれない。田篠中原遺跡-1は組成的には異質であり、田篠中原遺跡-5も同じく異質であることからすれば、このグループの加曾利E3タイプは異質、すなわち、搬入品の可能性がある。この2個の土器胎土の組成は埼玉県で比較的多く認められるものである。

VIIグループ……田篠中原遺跡-2、4、13、15 将監塚遺跡-3、4、7、8、12、16、21

田篠中原遺跡の土器と将監塚遺跡の土器が混在するグループである。このグループでの田篠中原遺跡の土器は加曾利E3の土器が集中し、土器胎土はDタイプが主体となる。

“その他”……田篠中原遺跡-6、14 将監塚遺跡-15、25 原土-上層下層

田篠中原遺跡-6、14は加曾利E3の土器で、土器胎土はDタイプであり、在地的な組成をしている。この2個が使用している原土は在地のものであるが、砂の混合比が異なっており、これらはそれぞれ1つのグループを代表している可能性がある。

田篠中原遺跡の土器についていえば、II、VI、VIIグループには加曾利E3タイプの土器、IVグループには加曾利E4タイプの土器が集中し、明らかに砂の混合比が異なっている。

将監塚遺跡との関連性からいえば、II、VI、VIIの3つのグループは田篠中原遺跡と将監塚遺跡の土器が混在し、加曾利E3が集中する傾向と一致していることになる。このような2つの現象が一致することが何を意味するのかはよくわからないが、なんらかの関連性がありそうである。Iグループは加曾利E4の土器と将監塚遺跡の土器が混在するもので、斜長石の強度が高いという特殊な条件で一致している点は注目に値する。“その他”の土器はいずれも加曾利E3の土器で、土器胎土がDタイプで、胎土としては在地であるが、砂の混合比が他のものとは異なり、どのグループにも属していない。この土器は各々が1つのグループを代表しているようである。IIグループは原土の組成とも近く、原土を直接使用している可能性も考えられる。

4 まとめ

- i) 土器胎土は分析した土器16個に対して7タイプに分類された。最も多く検出されたタイプはDタイプで、9個あり、全体の55%を占めている。隣接する善慶寺早道場遺跡の土層断面から採取した原土の組成はともにDタイプであり、個体数の多いこと、原土と組成が一致することから判断して、

Dタイプの土器は在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

- ii) FとGタイプの土器はともに組成が異質であり、この異質の土器はVIグループに属するのが特徴である。
- iii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、中粒のガラスが生成する焼成ランクがIIIのものが多く、ついで細粒のガラスが生成する焼成ランクがIII～IVのものとなっている。
- iv) 石英と斜長石の相関では加曾利E 3タイプはII、VI、VIIグループに集中する。このグループは将監塚遺跡の土器と混在することでも特徴づけられる。加曾利E 4タイプの土器はIVグループに集中し、明らかに加曾利E 3の土器とは違うグループを形成している。
- v) Iグループは斜長石の強度が高い特殊なグループであるが、このグループでは加曾利E 4タイプの土器が将監塚遺跡の土器と混在している。
- vi) “その他”の土器はいずれも加曾利E 3タイプの土器で、ともにDタイプの胎土であり、素地土は在地であるが、砂の混合比が他と異なり、各々が1つのグループを代表しているようである。

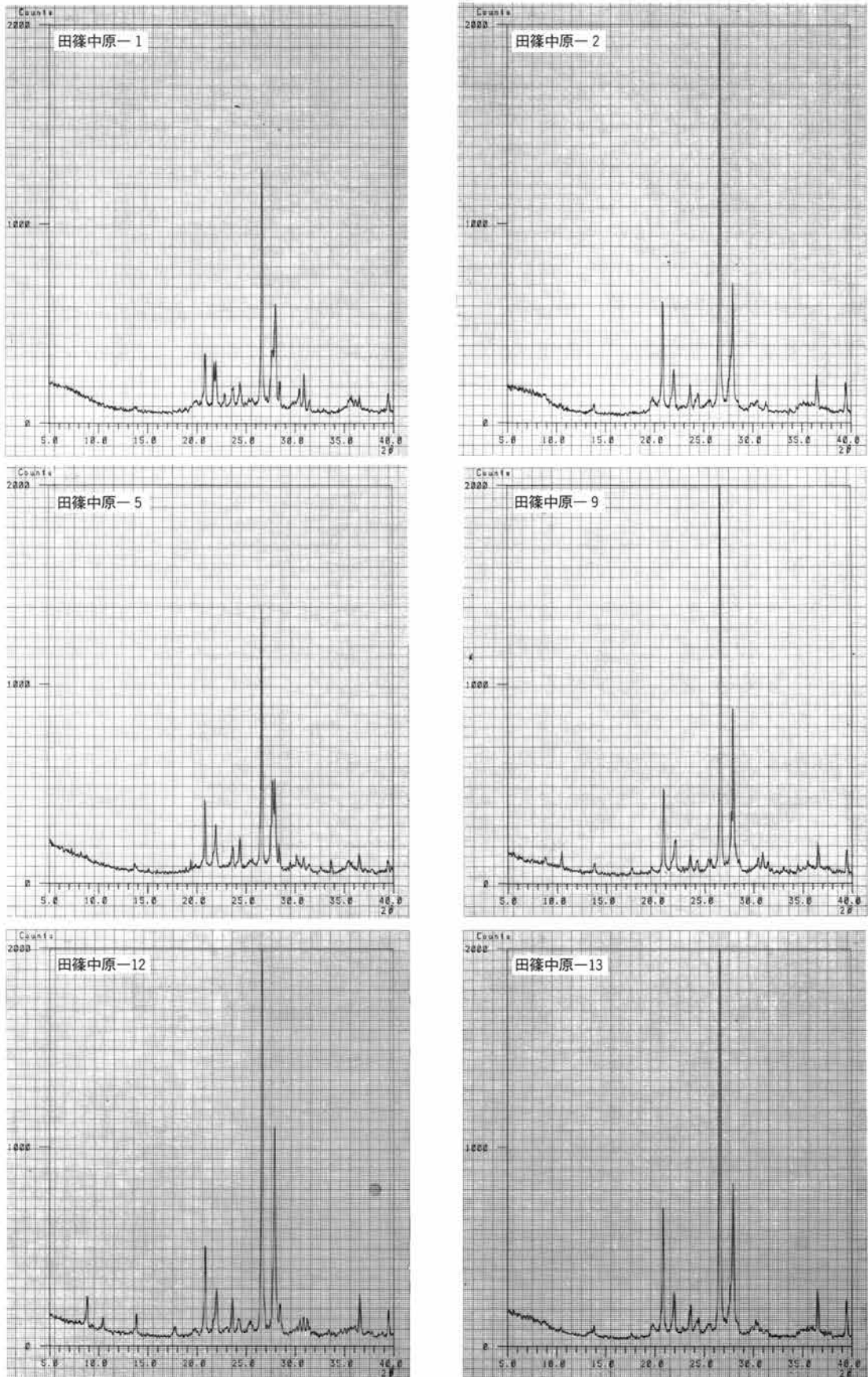
執筆者紹介

氏名：井上 巖
 所属：㈱第四紀 地質研究所
 住所：〒273千葉県船橋市古作3-13-5-206
 Tel：本社 0473 (33) 1788
 試験室0474 (24) 9855

分析報告事例

(大阪文化財センター)
 美園遺跡出土土器胎土分析報告書
 亀井北遺跡(その1)出土土器胎土分析報告書
 久宝寺遺跡出土韓式土器の胎土分析報告書
 久宝寺南遺跡出土土器胎土分析報告書
 太井遺跡出土銅滓の化学分析報告書
 真福寺遺跡出土鉄滓の化学分析報告書
 日置荘遺跡(その5)出土埴輪の胎土分析報告書
 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
 北遺跡出土土器胎土分析報告書
 北遺跡出土阿玉台式土器に含まれる雲母類の化学分析報告書
 児玉工業団地遺跡出土土器胎土分析報告書
 将監塚遺跡出土土器胎土分析報告書
 御伊勢原遺跡出土鉄滓の化学分析報告書
 稲荷前遺跡出土土器胎土分析報告書
 古凍遺跡出土土器胎土分析報告書

(東北新幹線赤羽地区遺跡調査会)
 袋低地遺跡出土土器胎土分析報告書
 八幡原遺跡出土土器胎土分析報告書
 赤羽地区八幡神社一星美学園地区出土縄文土器胎土分析報告書
 赤羽台遺跡出土埴輪胎土分析報告書
 赤羽台古墳群出土ガラス玉の化学分析報告書
 赤羽台遺跡星美学園地区出土弥生～古墳時代土器胎土分析報告書
 (群馬県企業局)
 三原田遺跡出土土器胎土分析報告書
 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)
 房谷戸遺跡出土土器胎土分析報告書
 田篠中原遺跡出土土器胎土分析報告書
 (洪川市教育委員会)
 御幸田山遺跡出土土器胎土分析報告書
 (北橘村教育委員会)
 分郷八崎遺跡出土土器胎土分析報告書
 (昭和村教育委員会)
 中棚遺跡出土土器胎土分析報告書
 (松井田町教育委員会)
 松井田工業団地遺跡出土土器胎土分析報告書
 (富岡市教育委員会)
 横瀬古墳群出土土器胎土分析報告書



第4図 縄文土器X線回析図型

〔3〕田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定

二宮 修治 (東京学芸大学教育学部)
 藁科 実 (東京学芸大学教育学部)
 網 干 守 (成城学園高等学校)
 大沢 眞澄 (東京学芸大学教育学部)

(1) はじめに

群馬県田篠中原遺跡(富岡市田篠)から出土した縄文時代中期の黒曜石6資料の原産地推定を行った。本研究は、これまで筆者らのすすめている関東地方およびその周辺地域の先史時代文化層出土黒曜石石器の原産地推定に関する基礎的研究の一環である。

現在、黒曜石石器の原産地推定は、フィッシュトラック法¹⁾、水和層年代法²⁾、晶子形態法³⁾、蛍光X線法⁴⁾、放射化分析法⁵⁾などによりすすめられている。これらの方法は、それぞれに特徴を有するが、微量成分元素存在量にもとづく原産地推定も極めて有効な方法の一つである。諸種微量成分元素の定量には、多元素同時定量が可能であり、検出感度が高く、さらに分析精度の高い機器中性子放射化分析が用いられている。この機器中性子放射化分析は、適応範囲が広いために、多岐にわたる考古学関係資料に応用され、有効な成果をもたらしている。なお、この機器中性子放射化分析とは、広義の放射化分析のうち、放射化したのちに化学的分離操作を行わず、生成核種の γ 線スペクトロメトリーによる諸種元素の定量分析を行うことである。

日本各地に産出する黒曜石は、比較的限定されており、多くの原産地について研究がなされている^{6,7)}。代表的な本邦産黒曜石の微量成分元素存在量はすでに報告されており、これらの微量成分元素存在量により、原産地黒曜石の識別・分類が可能である。従って、遺跡出土黒曜石石器の原産地推定は、基本的には、遺跡出土黒曜石の微量成分元素を原産地黒曜石の微量成分元素存在量と対比することにより達成される⁸⁾。

これまでの研究によれば、関東地方における先史時代文化層より出土した黒曜石石器の原産地として、和田峠、星ヶ塔(霧ヶ峰)、麦草峠(八ヶ岳)、畑宿(箱根)、柏峠(伊豆)、神津島などが知られている⁹⁻¹⁵⁾。また、栃木県内¹³⁾、千葉県内¹⁴⁾では、栃木県高原山産の黒曜石の使用頻度も高い。

一方、群馬県内の遺跡出土黒曜石の原産地推定は、数例のみで鈴木らのグループにより行われている¹⁶⁻¹⁸⁾。

本研究では、田篠中原遺跡出土黒曜石資料の原産地推定を目的として、本遺跡出土黒曜石資料6片について、機器中性子放射化分析により諸種微量成分元素の定量を行った。つぎに、定量された微量成分元素存在量によりこれら遺跡

参考文献

- 1) 例えば、
M. Suzuki (1977) Fission Track Ages and Uranium Contents, 人類学雑誌, 78 (1): 50-58
- 2) 例えば、
松浦秀治・山下秀樹 (1983) 「はけうえ遺跡出土黒曜石の産地推定と水和層年代」 『はけうえ遺跡・研究編(1)』 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 5: 112-121
- 3) 例えば、
高橋 豊(1983) 「黒曜石の2・3の岩石学的特徴―遺跡出土黒曜石の原産地推定のために」 沼津市歴史民俗資料館紀要7: 151-174
- 4) 例えば、
藁科哲男・東村武信 (1983) 石器原材の産地分析, 考古学と自然科学 16: 59-87
- 5) 例えば、
M. Osawa・H. Kasuya・Y. Sakakibara (1977) Trace element abundances in stone artifacts and related materials from Japan by neutron activation analysis. An approach to archaeological provenience studies, J. Radioanal. Chem., 39: 137-167
- 6) 小田静夫 (1982) 「黒曜石」 『縄文文化の研究・8 社会・文化』 雄山閣出版: 168-179
- 7) 近堂祐弘・勝井義雄・戸村健児・町田 章・鈴木正男・小野 昭(1980) 「黒曜石の年代測定と産地分析」 『考古学・美術史の自然科学的研究』 古文化財編集委員会編, 日本学術振興会: 168-179
- 8) 二宮修治 (1984) 考古学と周辺科学 6 鉱物学、季刊考古学, 雄山閣出版 8: 86-90

4章 自然科学的分析

- 9) M. Suzuki (1973) Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan, Part I, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V, 4 : 241-318
- 10) M. Suzuki (1974) Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan, Part II, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V, 4 : 397-469
- 11) 二宮修治 (1983) 「黒曜石の産地同定」『はけうえ遺跡・研究編(1) 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 5 : 122-127
- 12) 二宮修治・網千守・大沢眞澄 (1985) 「向ノ原遺跡出土黒曜石石器の産地推定」『向ノ原遺跡』国際基督教大学考古学研究センター Occasional Paper 6 : 112-118
- 13) 上野修一・二宮修治・網千守・大沢眞澄 (1986) 石器時代の本県域における黒曜石の利用について一栃木県高原山産黒曜石を中心に、栃木県立博物館研究紀要 3 : 91-115
- 14) 二宮修治・田村隆・澤野弘 (1987) 「黒曜石、黒色緻密質安山岩、メノウの機器中性子放射化分析による産地推定」『千葉県文化財センター研究紀要』11 : 57-72
- 15) 二宮修治・大沢眞澄 (1988) 「月見野遺跡群上野遺跡第1地点出土黒曜石石器の産地推定」『大和のあけぼのII』大和市教育委員会 : 137-154
- 16) 鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・関根慎二 (1986) 「糸井宮前遺跡の黒曜石分析」『糸井宮前遺跡II』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 : 204-209
- 17) 鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・麻生敏隆 「本遺跡出土黒曜石産地同定」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 : 578
- 18) 鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・菊池実 「黒曜石分析」『三後沢遺

出土黒曜石の原産地を推定した。

(2) 資料

本研究に供した、田篠中原遺跡出土黒曜石資料を第1表に示す。遺構別には、6号配石S-108の2片、Ej-62グリッドの3片、Ej-61グリッドの1片、計6片である。

第1表 分析資料一覧表 (田篠中原遺跡出土黒曜石資料)

| 試料番号 | 遺構名 | 備考 |
|------------------|------------|----------|
| 87282 GNTN-01-01 | 6号配石 S-108 | 縄文時代中期遺構 |
| 87283 GNTN-01-02 | 6号配石 S-108 | 縄文時代中期遺構 |
| 87284 GNTN-01-03 | グリッド Ej-62 | S-27 |
| 87285 GNTN-01-04 | グリッド Ej-62 | S-27 |
| 87286 GNTN-01-05 | グリッド Ej-62 | S-27 |
| 87287 GNTN-01-06 | グリッド Ej-61 | S-16 |

(3) 実験方法

諸種微量成分元素 [主成分元素であるナトリウム (Na)、鉄 (Fe) を含む] の定量には、機器中性子放射化分析⁸⁾を用いた。

一般に、化学分析においては、岩石のようなケイ酸塩物質の場合、通例としてその存在量が0.01%以上の元素を主成分元素、それ以下の元素を微量成分元素と称する。微量成分元素は、その存在量の単位として ppm (parts per million, 1 ppm = 1 μg/g) を用いる。

一方、ケイ酸塩物質のような地球化学的固体試料の微量成分元素の定量には、分析感度が高く、かつ分析の信頼性の高い放射化分析が用いられることが多い。

試料を中性子、高エネルギーの荷電粒子 (陽子、α粒子など) あるいはγ線などで照射すると、試料中の目的元素の核種はその核特性に従って核反応を起こし、放射性核種を生成する。この放射性核種から放出されるβ線、γ線などの放射線のスペクトルや放射能強度を測定することにより定性分析や定量分析を行うことができる。これを放射化分析という。誘起される放射能は、分析試料中の元素の存在量に比例する。

最も一般的に利用される核反応は、原子炉内での熱中性子による (n, γ) 反応である。なお、放射化した後、放射化学分離を伴うか否かにより、破壊法と非破壊法とに大別される。機器中性子放射化分析は、熱中性子による放射化、および非破壊的なγ線スペクトロメトリーにもとづく定量法である。高感度で非破壊的に多元素の同時定量が可能であり、適当な照射時間、冷却時間、計測時間などの組合せによる実験条件の選定により効果的な定量分析が可能である。

機器中性子放射化分析に供した黒曜石資料は、純水一超音波洗浄後、水和層

部分を取り除き、再度、純水—超音波洗浄し、ステンレス・スチール製エリス型粉砕器で粉砕し、メノウ乳鉢で細粉化（粒径約0.04mm程度）した。なお、分析に供した細粉試料はすべて風乾試料である。分析試料を粉末試料とするのは、機器中性子放射化分析の際に、熱中性子照射により生成する人工放射性核種の γ 線の測定時のジオメトリーを一定にするためである。

細粉化試料約50mgを精秤し、ポリエチレン袋に二重に封入（約1cm×1cm）する。標準試料とともに20～25試料を照射キャプセルに入れ、立教大学原子力研究所 TRIGA Mark II 原子炉回転試料棚（熱中性子束 $5.0 \times 10^{11} \text{ n/cm}^2 \cdot \text{sec}$ ）にて熱中性子を24時間断続照射（1日6時間×4日間）した。

本法の測定条件（測定した生成核種の γ 線の測定条件および測定核種）を第2表に示す。 γ 線測定は、生成核種の半減期の違いにより、測定条件を変え、各試料について3回（それぞれ、短寿命核種、中寿命核種、長寿命核種を中心に測定）を行った。短寿命核種の測定は、照射終了時から4～5日間冷却後、1,000秒間計測した。中寿命核種の測定は、1～2週間冷却後、5,000秒間計測した。長寿命核種の測定は、1～2ヶ月間冷却後、10,000秒間計測した。 γ 線の測定にはGe(Li)半導体検出器—マルチチャンネル波高分析装置を用い、生成核種の γ 線スペクトロメトリーを行った。

定量は、同時照射した合衆国地質調査所標準岩石（AGV-1, GSP-1, G-2）¹⁹⁾を比較標準とする方法（比較法）により行った。さらに定量性の検討は、同時照射

跡・十二原II遺跡】群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団：366—367

- 19) F. J. Flanagan (1973) 1972 values for international geochemical reference samples, Geochim. Cosmochim. Acta, 37 : 1189—1200

第2表 機器中性子放射化分析の測定条件

| 測定 | 冷却時間 | 測定時間 | 定 量 | | | |
|---------|-------------------|----------|---------|-------------------|----------|------------------------|
| | | | 元素 | 核 種 | 半減期 | γ 線のエネルギー (keV) |
| ① 短寿命核種 | 4～6日間 | 1,000秒間 | Na | ^{24}Na | 14.659 h | 1368, 2754 |
| | | | La | ^{140}La | 1.6780 d | 487, 1595 |
| | | | Sm | ^{152}Sm | 1.946 d | 103 |
| ② 中寿命核種 | 1～2週間 | 5,000秒間 | La | ^{140}La | 1.6780 d | 487, 1596 |
| | | | Sm | ^{152}Sm | 1.946 d | 103 |
| | | | Lu | ^{177}Lu | 6.71 d | 208 |
| | | | Rb | ^{86}Rb | 18.66 d | 1077 |
| | | | Th* | ^{233}Pa | 27.0 d | 312 |
| | | | Cr | ^{51}Cr | 27.704 d | 320 |
| | | | Ce | ^{141}Ce | 32.50 d | 145 |
| | | | Fe | ^{59}Fe | 44.496 d | 1099, 1292 |
| | | | Sc | ^{46}Sc | 83.83 d | 889, 1120 |
| | | | ③ 長寿命核種 | 1～2ヶ月間 | 10,000秒間 | Rb |
| Th* | ^{233}Pa | 27.0 d | | | | 312 |
| Cr | ^{51}Cr | 27.704 d | | | | 320 |
| Yb | ^{169}Yb | 32.022 d | | | | 198 |
| Ce | ^{141}Ce | 32.50 d | | | | 145 |
| Hf | ^{181}Hf | 42.39 d | | | | 133, 482 |
| Fe | ^{59}Fe | 44.496 d | | | | 1099, 1292 |
| Sc | ^{46}Sc | 83.83 d | | | | 889, 1120 |
| Cs | ^{134}Cs | 2.062 y | | | | 606, 796 |
| Co | ^{60}Co | 5.271 y | | | | 1173, 1332 |
| Eu | ^{152}Eu | 13.33 y | | | | 122, 1408 |

* : $^{233}\text{Th} \xrightarrow{\beta^-} ^{233}\text{Pa}$

した地質調査所標準岩石 (JR-1, JR-2)²⁰⁾の定量結果により評価した。

本法では、主成分元素である NaとFe、微量成分元素であるルビジウム (Rb)、セシウム (Cs)、ランタン (La)、セリウム (Ce)、サマリウム (Sm)、ユウロピウム (Eu)、イッテルビウム (Yb)、ルテチウム (Lu)、トリウム (Th)、ハフニウム (Hf)、コバルト (Co)、スカンジウム (Sc)、クロム (Cr) の15元素の定量が可能であった。

(4) 結果および考察

機器中性子放射化分析による同時照射した地質調査所標準岩石 (JR-1, JR-2) の定量結果を第3表に示す。本法により得られた値は文献値²⁰⁾とよく一致した。

田篠中原遺跡出土黒曜石6資料の定量結果を第4表に示す。各元素の存在量(濃度)の単位は、主成分元素である Na および Fe が%であり、微量成分元素が ppm である。

諸種微量成分元素存在量(以下、ここでは、微量成分元素に主成分元素の Na と Fe を含めて論議する)を比較すると、田篠中原遺跡より出土した黒曜石6資料は、大きく2系等に分類される。

さらに、分類を明確にするために、多変量解析(クラスター分析)による検討を行った。ここでは、定量された微量成分元素存在量を変数とする多変量解析[拡張統計計算プログラム・パッケージ BMDP (Biomedical Computer programs-P) 2Mクラスター分析²¹⁾]を用いた。

田篠中原遺跡出土黒曜石6試料のクラスター分析の変数には、黒曜石によっては、その元素存在量が検出限界に近く、比較的定量が困難とされている Yb、Co、Cr の3元素を除く12元素を用いた。クラスター分析の結果、大きく GMTN-01-01、-02、-03、-04、-05の5資料と GMTN-01-06の1資料との2群に分類された。

クラスター分析による2グループの黒曜石をこれまで報告されている原産地黒曜石の諸種微量成分元素存在量(東日本の主な原産地について第5表に示してある)との比較により原産地推定が可能である。

原産地推定の結果を第6表にまとめた。GMTN-01-01、-02、-03、-04、-05の5資料は星ヶ塔、GMTN-01-06の1資料は和田峠・小深沢周辺(和田峠北とする)が原産地と推定された。

20) A. Ando・N. Mita・S. Terashima (1987) 1986 values for fifteen GSJ rock reference samples, "igneous rock series", Geostandards Newsletter, 11: 159-166

21) 日立製作所 (1979) HITAC VOS 2/VOS 3 拡張統計計算プログラム・パッケージ BMDP 機能編—第2分冊—Mシリーズ(多変量解析)

第3表 機器中性子放射化分析による標準岩石 JR-1、JR-2 の定量結果

(Na, Fe 以外は ppm)

| 試料 | Na(%) | Fe(%) | Rb | Cs | La | Ce | Sm | Eu | Yb | Lu | Th | Hf | Co | Sc | Cr |
|--------------|-------|-------|-----|------|------|----|-----|------|-----|------|------|-----|------|-----|------|
| JR-1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 01034 (8901) | 2.88 | 0.64 | 240 | 20 | 20 | 42 | 6.7 | 0.31 | 4.4 | 0.68 | 25 | 4.6 | 0.7 | 5.3 | 4 |
| 文献値 | 3.04 | 0.67 | 257 | 20.2 | 21 | 49 | 6.2 | 0.31 | 4.6 | 0.68 | 26.5 | 4.7 | 0.65 | 5.2 | 2.3 |
| JR-2 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 01035 (8901) | 3.10 | 0.55 | 310 | 28 | 17 | 39 | 7.1 | 0.08 | 5.5 | 0.85 | 33 | 5.4 | n.d. | 6.0 | n.d. |
| 文献値 | 2.99 | 0.60 | 297 | 26 | 17.5 | 38 | 6.2 | 0.13 | 5.4 | 0.92 | 32.2 | 5.2 | 0.4 | 5.4 | 2.6 |

n.d.: 検出せず

〔3〕田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定

参考までに、同時に分析した群馬県内の遺跡（国分寺中間地域遺跡、下牧小竹遺跡）から出土した黒曜石の諸種微量元素存在量を第7表に示す（未発表データ、詳細は下牧小竹遺跡の調査報告書で述べる予定である）。国分寺中間地域遺跡の資料は主に縄文時代中期の遺構、下牧小竹遺跡の資料は縄文時代前期の遺構から出土したものである。

第4表 田篠中原遺跡出土黒曜石の元素存在量—機器中性子放射化分析 (Na, Fe 以外は ppm)

| 試料 | Na(%) | Fe(%) | Rb | Cs | La | Ce | Sm | Eu | Yb | Lu | Th | Hf | Co | Sc | Cr |
|------------------|-------|-------|-----|-----|----|----|-----|------|-----|------|----|-----|------|-----|----|
| 89282 GMTN-01-01 | 2.99 | 0.48 | 130 | 7.7 | 15 | 33 | 5.0 | 0.61 | 3.0 | 0.38 | 10 | 3.3 | n.d. | 2.9 | 4 |
| 89283 GMTN-01-02 | 3.04 | 0.49 | 140 | 7.8 | 15 | 34 | 4.9 | 0.66 | 2.8 | 0.40 | 10 | 3.4 | n.d. | 2.9 | 4 |
| 89284 GMTN-01-03 | 3.08 | 0.48 | 130 | 7.8 | 15 | 34 | 5.0 | 0.66 | 2.7 | 0.41 | 10 | 3.4 | n.d. | 2.9 | 3 |
| 89285 GMTN-01-04 | 3.07 | 0.52 | 140 | 8.0 | 16 | 34 | 5.0 | 0.63 | 2.8 | 0.35 | 10 | 3.4 | n.d. | 2.9 | 6 |
| 89286 GMTN-01-05 | 3.09 | 0.52 | 130 | 7.8 | 15 | 32 | 5.0 | 0.63 | 2.8 | 0.44 | 10 | 3.4 | n.d. | 2.9 | 6 |
| 89287 GMTN-01-06 | 3.00 | 0.62 | 230 | 18 | 26 | 51 | 6.3 | 0.27 | 3.9 | 0.58 | 26 | 4.5 | n.d. | 4.4 | 5 |

n.d.: 検出せず

第5表 東日本の主な黒曜石原産地の化学組成（平均値）—機器中性子放射化分析 (Na, Fe 以外は ppm)

| 試料 | Na(%) | Fe(%) | Rb | Cs | La | Ce | Sm | Eu | Yb | Lu | Th | Hf | Sc |
|----------|-------|-------|-----|-----|-----|----|-----|------|-----|------|-----|-----|-----|
| 星ヶ塔 | 2.90 | 0.46 | 160 | 6.6 | 16 | 32 | 4.8 | 0.62 | 2.2 | 0.41 | 10 | 3.4 | 2.9 |
| 和田峠・小深沢 | 2.91 | 0.55 | 270 | 21 | 21 | 45 | 6.8 | 0.23 | 4.3 | 0.83 | 27 | 4.8 | 5.6 |
| 和田峠・丁子御領 | 2.80 | 0.56 | 320 | 27 | 17 | 35 | 6.6 | 0.11 | 3.9 | 0.96 | 31 | 5.2 | 6.0 |
| 男女倉 | 2.83 | 0.70 | 170 | 7.8 | 27 | 48 | 4.9 | 0.65 | 2.3 | 0.39 | 15 | 4.5 | 3.1 |
| 麦草峠 | 2.93 | 0.67 | 100 | 5.0 | 25 | 44 | 4.0 | 0.68 | 1.4 | 0.33 | 8.9 | 3.9 | 2.3 |
| 新発田・板山 | 2.56 | 0.52 | 150 | 5.8 | 18 | 35 | 3.6 | 0.46 | 2.9 | 0.45 | 11 | 2.3 | 3.2 |
| 高原山 | 2.79 | 1.37 | 110 | 5.6 | 26 | 48 | 5.9 | 0.99 | 3.9 | 0.56 | 12 | 5.2 | 8.0 |
| 箱根・畑宿 | 3.74 | 1.87 | 20 | 2.2 | 8.6 | 21 | 5.1 | 1.1 | 3.3 | 0.68 | 1.0 | 4.7 | 15 |
| 伊豆・柏峠 | 3.13 | 1.29 | 50 | 3.3 | 13 | 27 | 5.2 | 0.90 | 3.3 | 0.63 | 3.0 | 5.7 | 8.1 |
| 神津島・恩馳島 | 3.31 | 0.64 | 70 | 2.7 | 20 | 37 | 3.6 | 0.61 | 2.2 | 0.41 | 4.8 | 2.6 | 3.6 |

第6表 田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定の結果

| 試料番号 | 遺構名 | 備考 | 推定原産地 |
|------------------|------------|------|-------|
| 87282 GNTN-01-01 | 6号配石 S-108 | 縄文中期 | 星ヶ塔 |
| 87283 GNTN-01-02 | 6号配石 S-108 | 縄文中期 | 星ヶ塔 |
| 87284 GNTN-01-03 | グリッド Ej-62 | S-27 | 星ヶ塔 |
| 87285 GNTN-01-04 | グリッド Ej-62 | S-27 | 星ヶ塔 |
| 87286 GNTN-01-05 | グリッド Ej-62 | S-27 | 星ヶ塔 |
| 87287 GNTN-01-06 | グリッド Ej-61 | S-16 | 和田峠北* |

*: 和田峠において北側の小深沢周辺と南側の丁子御領付近とに識別・分類され、この資料は北側の小深沢周辺が採取地と考えられる。

第7表 国分寺中間地域遺跡、下牧小竹遺跡出土黒曜石の元素存在量—機器中性子放射化分析 (Na, Fe 以外は ppm)

| 試料 | Na(%) | Fe(%) | Rb | Cs | La | Ce | Sm | Eu | Yb | Lu | Th | Hf | Co | Sc | Cr |
|------------------|-------|-------|-----|-----|----|----|-----|------|-----|------|-----|-----|------|-----|----|
| 国分寺中間地域遺跡 (A区) | | | | | | | | | | | | | | | |
| 89277 GMKT-01-01 | 2.95 | 0.47 | 140 | 7.5 | 15 | 33 | 4.8 | 0.67 | 2.7 | 0.37 | 10 | 3.4 | n.d. | 2.8 | 4 |
| 89278 GMKT-01-02 | 2.91 | 0.46 | 140 | 7.8 | 14 | 32 | 4.7 | 0.62 | 2.5 | 0.37 | 9.8 | 3.3 | n.d. | 2.8 | 3 |
| 89281 GMKT-01-03 | 3.00 | 0.49 | 140 | 8.1 | 15 | 33 | 5.0 | 0.68 | 3.0 | 0.43 | 10 | 3.5 | n.d. | 2.9 | 4 |
| 国分寺中間地域遺跡 (J区) | | | | | | | | | | | | | | | |
| 89279 GMKT-02-01 | 2.97 | 0.49 | 130 | 7.7 | 15 | 32 | 4.8 | 0.64 | 2.8 | 0.38 | 9.9 | 3.3 | n.d. | 2.8 | 4 |
| 89280 GMKT-02-02 | 2.96 | 0.47 | 140 | 7.8 | 14 | 32 | 4.8 | 0.65 | 2.5 | 0.38 | 9.7 | 3.3 | n.d. | 2.8 | 4 |
| 下牧小竹遺跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 89273 GMTN-01-01 | 2.91 | 0.50 | 250 | 22 | 20 | 44 | 6.9 | 0.19 | 4.6 | 0.72 | 26 | 4.5 | n.d. | 5.0 | 6 |
| 89274 GMTN-01-02 | 2.93 | 0.51 | 260 | 22 | 20 | 45 | 7.0 | 0.17 | 4.7 | 0.72 | 27 | 4.9 | n.d. | 5.1 | 5 |
| 89275 GMTN-01-03 | 2.89 | 0.50 | 250 | 22 | 20 | 44 | 6.8 | 0.14 | 4.6 | 0.70 | 27 | 4.4 | n.d. | 5.1 | 5 |
| 89276 GMTN-01-04 | 3.04 | 0.55 | 280 | 23 | 21 | 46 | 7.2 | 0.16 | 4.9 | 0.74 | 28 | 4.7 | n.d. | 5.3 | 5 |

国分寺中間地域遺跡出土黒曜石5資料は、A区、J区ともに星ヶ塔産、下牧小竹遺跡出土黒曜石は、4資料すべて和田峠北（小深沢周辺）産のものと推定された。

(5) まとめ

群馬県内の田篠中原遺跡から出土した黒曜石6資料の原産地としては、5資料が星ヶ塔、1資料が和田峠北であった。

さらに、同時に分析した同県内の国分寺中間地域遺跡出土黒曜石5資料の原産地としては、A区、J区ともに星ヶ塔であり、また、下牧小竹遺跡出土黒曜石4資料の原産地としては、すべて和田峠北であった。

今回分析した群馬県内の遺跡から出土した黒曜石では、鈴木らの報告¹⁶⁻¹⁸⁾と同様に星ヶ塔と和田峠北の原産地のものが使われていた。しかし、三後沢遺跡¹⁸⁾で認められた神津島産の黒曜石の使用は、今回の遺跡では認められなかった。

これらの黒曜石の原産地推定の結果が意味する考古学的解釈については、現段階ではあまりにも遺跡数ならびに出土黒曜石の分析例が少ないために解明される問題ではないであろう。今後、さらに、同地域ならびに周辺地域での遺跡出土黒曜石の原産地に関する研究に期待するとともに、問題解明にあたっては多くの考古学的研究が基本となると思われる。

謝 辞

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団・菊池 実主任調査研究員、同・桜岡正信主任調査研究員には、貴重な資料を提供していただき、さらに、考古学に関する有益なご教示をいただいた。また、立教大学原子力研究所戸村健児教授ならびに所員の方々には、原子炉等利用に関してお世話いただいた。記して深く感謝いたします。

〔4〕田篠中原遺跡でみられる石材の種類 と地質的関連

陣内 主一

I 当遺跡の地形及び地質的特徴

田篠中原遺跡は、富岡市大字田篠地内で、南部は甘楽郡甘楽町大字善慶寺地内に接する地点に位置する。地形上からみると、全体的には南高北低の扇状地地盤上に支えられて分布しているものである。

標高は、凡そ166～167m付近に広がりをもっている状態で、東部は雄川方面へと、西部は下川方向へと、極僅かに下向傾斜する地形をみせている。これは、雄川と下川との両河川の間挟まれた地点にあり、両河川の河川動力による少なからざる影響を受けている証差である。また当地点から北方に向かって脊梁的な地形をなしている状態である。なお、当遺跡の西部凡そ400mを南から北へ貫流する下川は、高瀬南部丘陵を、その地点において侵食切断して、扇状地形成に一役担って、鑄川に流入している状態である。

以上のような地形的特徴をもった当地は、先住民の生活の場として選択されるにふさわしい好条件を充たしていたものであると思われ。

第1に、湿け地でないことである。現在は、砂質シルトで、いわゆる農耕土で、遺跡の上部を数10cm程被覆していて、礫混りの耕土で桑園や菜畑となっていたものである。この農耕土の下層は透水性の極めて良好な扇状地礫層を基盤として、先住民は住居を構えている。このことは、基本的な生活の知恵の表現である。

第2は、生活用水が得やすいことである。このことは、当地点は小形ではあるが、扇状地であるので当地形の末端や側端には、非常に綺麗なこんこんと湧き出る不滅の泉が存在するのである。その状態は当遺跡東部の雄川にほど近い傾斜地で観察されるし、雄川及び下川に接近しているが、洪水の憂にはさらされていない地点である。さらに、付近の井戸水の水位は高く安定していることがあげられる。

第3に、日照条件は、これを遮るものはない地点で、非常に良好である。

以上の地形及び地質的観点から、当地点は生活の拠点とし最も重要な条件は必要にして十分に充たされた、絶好な居住地点であったと考えられるのである。

II 当遺跡の石材に関連する地質的環境

1 石材の数量と成因別分類

当遺跡で、石材として取り扱われた数量は、実に17,255個という莫大なものであった。これを成因別に分けると、火成岩類が799個であり、全体の4.6%に当たり、堆積岩類が1,116個であり、全体の6.5%に当たる。変成岩類は15,340

個で、全体の88.9%を占めるという特異な状況である。このことは、当地点が
 変成岩の分布する地域に隣接していることと、その物が入手しやすい地質的な
 環境に位置しているという、特異性が存在することであると考えられる。

以下当地点にかかわりをもつ主な岩石の分類表を掲げて、成因別を考慮した
 よりどころとして、掲げることとする。

(1) 火成岩の分類表

| | | | | | | |
|------------------|------------------|------|-------|--------|--------|-----------|
| 産 出 状 況 | 造 岩 鉱 物 | 石英 | 斜長石 | アルカリ長石 | 輝石 | かんらん石 |
| | | カリ長石 | 雲母 | 角閃石 | その他の鉱物 | |
| 深成岩的 | | 花崗岩 | 花崗閃緑岩 | 閃緑岩 | 斑岩 | 超塩基性岩 |
| 半深成岩的 | | 花崗斑岩 | | ひん岩 | 輝緑岩 | (角閃岩 蛇紋岩) |
| 火山岩的 | | 流紋岩 | 石英安山岩 | 安山岩 | 粗面岩 | 玄武岩 |

(2) 堆積岩の分類表

| | | | | |
|-----|------------|--------|------|-------------|
| 未固結 | 泥 粘土 | 砂 | 礫 | 火山灰 軽石 岩屑 |
| 固 結 | シルト岩 泥岩 頁岩 | 砂岩 | 礫岩 | 凝灰岩 集塊岩 |
| 甚固結 | 粘板岩 | 硬砂岩 珪岩 | 雑色珪岩 | 角礫凝灰岩 輝緑凝灰岩 |

(3) 沈澱岩の分類表

| | | | |
|---------|------------|----------|--------|
| 鹹質溶液 | 珪質溶液 | 石灰質溶液 | 鉄質溶液 |
| 岩塩 カリ塩類 | 珪華 チャート 角岩 | 灰華 縞状石灰岩 | 鉄華 黄土石 |

(4) 変成岩の分類表

| 原 岩 | 接 触 変 成 岩 | 広 域 変 成 岩 | | |
|---------|---------------------|------------------------------|------------------------|------|
| | | 低 度 変 成 | 中低度変成 | 強度変成 |
| 砂 質 岩 | ホルンヘルス | 珪質千枚岩 | 石英片岩 絹雲母片岩 紅簾片岩 | 準片麻岩 |
| 粘 土 質 岩 | ホルンヘルス 董青石ホルンヘルス | 千枚岩 石墨千枚岩 | 黒雲母片岩 雲母片岩 珪線石片岩 | 準片麻岩 |
| 凝 灰 質 岩 | ホルンヘルス 陽起石ホルンヘルス | 所謂「輝岩」 オツトレライト千枚岩 藍閃片岩 | 緑泥片岩 緑簾片岩 | 榴閃岩 |
| 蛇 紋 岩 | | | 滑石片岩 | |
| 石 灰 岩 | | | 石灰片岩 | |
| 鉄 質 岩 | | | 赤鉄鉱片岩 | |

参考文献

- 『地質学ハンドブック』(1966) 朝倉書店
- 『地学辞典』(1983) 平凡社
- 陣内主一編 『かぶらの自然』(1972) かぶら理科研究会
- 『富岡市史』自然編 原始・古代・中世編(1987) 富岡市
- 『関東地方』『日本地方地質誌』(1980) 朝倉書店
- 『関東地方』『日本の地質3』(1988) 共立出版

2 石材の種類、産地、特徴の一端

石材の鑑定は、肉眼によって観察を実施し、ルーペや小刀のみで、薄片による造岩鉱物までの検鏡を加えなかったので、大まかな種類別であったと思うが、以下、その産地をも想定しながら簡単な説明を加える。

(1) 火成岩類についてみると、深成岩的な岩石が多量であった。

①斑斨岩(214) 野上川の上流黒内山付近、西牧川上流に分布あり。塩基性の深成岩で結晶質中粒ないし粗粒の暗黒灰色の岩石である。

石材名の右に記した数字は、当遺跡で取扱った点数を示す。

②閃緑岩(59) 野上川上流及び下仁田付近に分布する。深成岩で黒味多い角閃石の細い結晶がみえる暗緑灰色の岩石である。

③角閃岩(196) 産地は野上川上流黒内山付近である。この岩石は、他の岩石と比べて、特に重さが大きく角閃石の集合体で、割れ口はやや繊維状で、暗緑色であるので他と区別しやすい。

④石英閃緑岩(10) 下仁田町川井付近に大きな岩体があるが、そのものは鑓川によって運ばれるので、小形となってしまう。おそらく、下仁田町馬山地域の産出で、野上川の運搬したものである。閃緑岩に比して、石英が多く白味がかっている。

⑤変斑斨岩(90) 産地は、斑斨岩などの付近であろうが、やや接触変成作用を受けているもので、白味がかっている。

⑥蛇紋岩(12) 産地は、野上川上流付近から横瀬川上流にあるが、横瀬川上流地域では採掘されているが、当遺跡で石材としてのものは、甘楽町雄川の上流河振付近の岩体からの産品であろう。暗緑色の緻密な岩石で脂感があるのが特長で細工にも使われる。

⑦ノーライト(6) 産地は、野上川上流地域であろう。風化変質の状態である。

⑧平滑花崗岩(3) 産地は、下仁田町小坂付近から神成、田島、更に高瀬地域で第3紀層に覆われて姿を消すまで分布がみえる。岩質は圧碎形であり、優白色の花崗岩である。有色鉱物はほとんどみられない状態であり、部分的には風化の進んだ所が多いものである。

⑨花崗斑岩(1) 産地は、富岡市神農原付近から下仁田町に至る鑓川岸によく発達している神農原礫岩層を形成している礫中に多いのが花崗斑岩である。石基が有色鉱物に乏しいので白っぽいのが、酸化鉄の影響を受けて、表面は灰褐色を呈する場合が多い。

⑩花崗閃緑岩(2) 花崗岩と閃緑岩との中間の深成岩の仲間であり、前橋の県民会館の立ち上がっている部分に使用されている石材と同じもので、それは産地から沢入花崗岩と呼ばれる程花崗岩に似ている。造岩鉱物も同じようであるが角閃石が加わる状態が異なる。産地は下仁田付近であろう。鑓川から運ばれたものであると思う。

⑪閃緑玢岩(37) 産地は野上川上流であり、閃緑岩質石基に角閃石を混在

する比較的細粒組織で暗緑灰色の深成岩類である。

⑫**石英斑岩**(7) 花崗斑岩によく似た岩石で、石基が細かく、有色鉱物が少ないので灰白色を呈する。斑晶に石英がみえる。産地は田島付近でもみられるが、鎗川に転入散在している礫である。

⑬**玢岩**(2) 産地は鎗川上流の火成岩地帯であり、石英玢岩状であり、成分からは、石英安山岩質である。灰緑色で細粒組織である。

⑭**熔結凝灰岩**(6) 神農原礫岩層の中に存在するもので、鎗川の礫中に散在する岩石である。火山砕せつ物がガラス質の熔岩の小破片で膠結されたものであり、灰白色や灰褐色のものがある。

⑮**流紋岩**(38) 産地は南牧川の上流、砥沢付近が江戸時代から有名な産地である。中には、縞状の流紋構造をもつものがある。虎のような斑があり、虎砥と称せられ、刃物の研磨に貴重な石材とされた。砥石としては、中砥的価値の高いものである。小坂付近でも産出する。

⑯**安山岩**(96) 産地は鎗川上流、及び南牧川の上流の火成岩地帯であり、輝石安山岩や両輝石安山岩等の仲間が多く、いわゆる「ま石」といわれるもので、鎗川に散在する灰色石基に輝石の目立つものがある。

⑰**玻璃質安山岩**(7) 産地は鎗川上流であり、黒灰色でガラス質である。硬さもややあり、貝殻状断口のみえるものさえある。

⑱**石英安山岩**(7) 産地は南牧川支流の櫛沢川流域に分布し石材として搬出され、櫛石という。石英・斜長石が多く灰白色で石段等に用いられる。

⑲**黒曜石**(6) 黒曜石については、東京学芸大学の二宮修治先生に産地同定を依頼しているのでそちらを参照してください。

⑳**正長石岩**(1) 正長石の集合体であり、氷長石といわれる状態のものでありその産地は不明である。花崗斑岩から分離した姿でもあるが小形のものである。

(2) 次に**堆積岩類**について記すに当たり、堆積岩分類表の項立てによって、固結度の低いものから高いものへと、すなわち、新生代第三紀層のものから中生層のもの、古生層のものへと列記することとする。

①**砂岩**(312) 新生代第三紀層産のもので数量も多く種類も多いが、ここで多くみられるものは、花崗岩質の牛伏砂岩であり、多胡石といわれる仲間のものである。当地点の南部で三波川結晶片岩と断層で接する地域に分布するのが顕著で主な産地である。雄川にも転石が得やすく、下川上流域でも分布しているものである。甘楽町の町谷付近雄川左岸の山地では、往時、落下したものを古墳造りに利用するため、搬出されたものと、想定される。砂岩の中には細粒で、やや青灰色のものもみられるが、これは、下川中・下流域に分布する富岡層中に泥岩と互層する状態で分布しているものである。砂岩の中で粗粒の灰褐色のものは、砥石や物を擦り減らす石材として使用されたものではないかと思う。

②凝灰岩 (51) 当地点西部の丘陵、下川岸にも露頭が存在する第三紀の堆積岩類であり、灰白色のものが多く。火山灰の堆積したものであるが質は、付近のものはやや緻密で火力には耐える力のある岩石であるが、節理もよく発達しているものがある。

③泥岩 (2) 第三紀層のもので、当地点では下川岸に分布している砂質の泥岩である。砂質でない泥岩は、風化が非常に速いので、極めて短い時間で崩壊して粉泥化してしまうものである。

④頁岩 (11) 中生代の地層を形成している泥岩で、粘板岩程の固結度が無いものであり、一般的に暗灰黒色である。産地は下仁田町付近に分布する中生代の南蛇井層や跡倉層のものが鑄川に転石で、きている。

⑤礫岩 (3) 中生代の堆積岩類である。当地に運び込まれているものは、下仁田町に分布する中生層の跡倉層と中之萱層のものである。

⑥チャート (267) 古生代の堆積岩類である。灰色や赤色、白色で非常に硬く、ハンマーで打つと火花が出るし、チャート自体を打ち合わせるとカチカチと音を出したり火花を散らしたりする。銭形平次の奥方が使うのもこれであろう。雄川上流や南牧川に分布のある秩父古生層中によく発達する。硬度もあり緻密であるので、河川作用によく耐えて、鑄川の河岸段丘礫層中に、また鑄川河川礫としても数多くみられるものである。当遺跡にも多量に持ち込まれている。

⑦輝緑凝灰岩 (79) 古生代の堆積岩類であり、チャート同様秩父古生層中に分布するもので、暗赤紫色や緑色を呈し、石灰岩の斑紋を混在することが多い岩石である。硬度は低いものである。風化が進んでいると、片状に剝離をみせるものもある。産地は、秩父古生層地帯特に南牧川域によく発達し、鑄川や雄川に転石としてみられる。

⑧硬砂岩 (16) 古生代の堆積岩であり、表面が風化の進んだものであると、褐色で安山岩とよく似ているので見違ふことがある。安山岩の造岩鉱物は結晶形であるが、硬砂岩では細円形粒状である。新しい面は暗灰色であり、硬質な岩石である。産地は南牧川沿岸にある。

⑨粘板岩 (3) 古生代秩父古生層地帯に分布する岩石であり、粘土の強固結した、黒灰色であるのが一般的で、やや板状に、堆積当時の葉理構造をもったものもある。仙台石のように石碑に用いられている粘板岩があるが、南牧川域を産地とするものは、節理が発達し、硬度も低いのでハンマーや針などで容易に傷が付く。安い基石は粘板岩で作られている。高価な基石は那智黒のようなホルンヘルスなどで作られていて、小刀でも傷が付かないものである。粘板岩の層間異状でもめている部分では、石墨が観察されることがある。

⑩石灰岩 (2) 産地は下仁田・南牧地域に分布する秩父古生層地帯である。さきに記した輝緑凝灰岩や粘板岩の地層中に、大きな塊や板状になって挟まれていることが多い。下仁田町の白石工場や南牧村の青倉石灰工場では、

石灰岩の採鉱製品化が盛んにおこなわれている。

石灰岩は方解石からなり硬度は低く、酸性の溶液に対しては、弱いので、自然界における鍾乳洞の形成がみられる。

当遺跡に持ち込まれた石灰岩は、極めて少量であるが、鎭川や南牧川で産地付近の河川敷では、大形のものが見られるが、河川作用による磨耗度が大きいので、下流では採取し難い岩石である。

⑪珪岩 (106) 産地は南牧川流域の秩父古生層中の狭谷美がみられる蟬の橋付近によく発達している。硬度の高い、多くは白っぽい岩石であり、なお、河川作用にもよく耐え下流まで運ばれている。雄川上流稲倉山付近にも産出されるので、当遺跡で見られるものは、雄川の流域産のものが多いのかと思う。

⑫緑色珪質板岩 (140) 古生代秩父古生層の分布する雄川上流、稲倉山付近に発達する露頭が観察される岩石である。チャートに近いような硬度をもつ、淡緑色で平板状に劈開する岩石である。緑簾石、石英や曹長石よりなり、緑色珪質頁岩ともいう。

⑬赤色珪質板岩 (90) 前者と同様な地域に分布する、淡赤色の岩石である。硬度や、平板状に劈開するようすなども前者と同様なものである。

⑭放散虫板岩 (32) 古生代秩父古生層の分布地域に産出する岩石で、放散虫などを多く混在する放散虫軟泥などが固結した板状の岩石である。色は、赤紫色であり、肉眼では化石のようすは見えない。

⑮赤鉄鉱珪岩 (2) 赤褐色を呈する珪岩で、節理など発達している部分の多い岩石で、古生層の分布する地帯に産出する。数量は少量しか持ち込まれていない。硬度は珪岩類と同じく高く、呈色は赤鉄鉱による。

(3) 変成岩類について、まず接触変成岩類、ついで広域変成岩類について記すこととし、その低度変成のものから、中程度変成のものへ、さらに、砂質岩から粘土質岩へと、分類表の項に添って記述することとする。

①熱変成岩 (198) 富岡付近の鎭川で多くみられる熱変成岩(ホルンヘルス)は下仁田町東部に分布する中生代の南蛇井層が、花崗岩の貫入などによってホルンヘルス化されたもので、黒色で質は珪化し、硬度を増して、貝殻状断口のみられるものもある。なお、下仁田の川井山南西部の南牧川沿岸でも、石英閃緑岩の貫入によるホルンヘルス化がみられ、ザクロ石の点在するものが観察される。

②千枚岩 (40) 細粒堆積岩源の変成岩であり、粘板岩と結晶片岩の中間的な低変成度変成のもので、板状の片理構造がよく発達している。産地は古生層分布地帯縁辺部で多くみられる。

③輝岩 (2375) 分類表中いわゆる輝岩に属する変成度の低い緑色変成岩で三波川結晶片岩類であるが、片理の発達がそれほど顕著でない岩石である。やや風化の進んだものと、否なるものとは差異があり、輝緑岩状の石基をみ

せるものを区別したが、変成度によるものとして同種のものとした。産地と分布状態は、下仁田構造帯の北側に分布するもので、景勝地青岩付近に露頭がよく観察され野上川、雄川流域にも、さらに御荷鉾山付近まで産地は分布する。

④珪石 (891) 分類表による砂質岩の中程度変成岩類であり、石英片岩である。なお、硬度は付近で採集できる岩石では、最高(モースの硬度目盛で8)である。産地としては、雄川上流域結晶片岩層中である。来波付近で採鉱搬出があった。純度の高い SiO_2 であった為とか。

⑤絹雲母片岩 (71) 砂質岩の中程度変成岩類である。結晶片岩類は多種多様な目につく造岩鉱物が、多量に、また少量混在して形成されている。この場合、その岩石名を呼ぶとき、普通に識別する時には、その岩石を形成する造岩鉱物が少なくみえる鉱物名をさきに呼び、順次多量に混在する鉱物名を連れ、石英の呼び名は加えないのが普通の習わしである。絹雲母片岩も、絹雲母と石英が多量で形成されているが、絹雲母片岩と呼ぶ、以下その例に準拠する。

絹雲母片岩の産地は雄川流域梅ノ木平付近のものが目に付く。

⑥紅簾片岩 (18) 同上の中程度変成岩類であり、紅簾石が特に多量で紅色の様子である。産地は梅ノ木平の下流、雄川に美しい露頭がある。

⑦紅簾絹雲母片岩 (158) 砂質岩の中程度変成岩類で、紅簾石が僅かに、混入する淡紅色の絹雲母片岩である。産地は雄川の流域である。

⑧点紋絹雲母片岩 (8) 同上と同類の中程度変成岩類で、きれいな絹絲光沢の絹雲母片岩に、曹長石の点紋を有する岩石で片理構造は全上共々によく発達している。産地は、雄川流域及び野上川流域にも分布する。

⑨白雲母片岩 (11) 同上と同類の中程度変成岩類で、白雲母の真珠光沢のある板状の結晶面からの光は、ことに美しい。産地は雄川流域であろう。

⑩緑泥絹雲母片岩 (5) 絹絲光沢のある絹雲母片岩に、僅かに、緑泥石が混入する、淡緑色の交じったつやをみせる岩石で、片理の発達はおなじである。産地は雄川中上流及び下川上流地域である。

⑪石墨絹雲母片岩 (267) 絹雲母片岩に石墨がわずかに混入する岩石で、前者同様な変成岩類であり、産地も雄川や野上川流域にある。

⑫脆雲母絹雲母片岩 (10) 前者と同類の中程度変成岩であるが、絹雲母片岩にわずかに脆雲母の暗褐色で鈍い光沢をもつ片状鉱物が混入する岩石である。産地は、雄川や下川上流域にある。

⑬点紋緑泥絹雲母片岩 (5) 前者と同類の中程度変成岩であり、絹雲母片岩に緑泥石を混在し、ごくわずかに白色でぼつぼつ点紋のみえる岩石である。産地は、前者同様である。

⑭点紋石墨絹雲母片岩 (2) 石墨絹雲母片岩の石基に、白いぼつぼつの曹長石の点紋がみえる岩石で、産地は前者同様である。

- ⑮点紋絹雲母片岩（1） 絹雲母片岩に、点紋をわずかに混在する岩石であり、産地は前者と同様である。
- ⑯雲母片岩（8） 粘土質岩の中程度変成岩類である。雲母の金色絹絲光沢があり美しく、片理構造は前者と同様であり、産地も同地域である。
- ⑰絹雲母雲母片岩（57） 前者と同様の変成岩であり、雲母片岩に絹雲母を少々交えている岩石であり、産地は前者同様である。
- ⑱点紋石墨雲母片岩（2） 前者と同様の変成岩であり産地も同様であるが、石墨を混在する雲母片岩で暗灰色であり、わずかに点紋を混在する。
- ⑲絹雲母脆雲母片岩（18） 前者と同様な変成岩であるが、脆雲母片岩に絹雲母の絹絲光沢が目立つ様子の岩石である。片理構造も前者と同様であり、産地も同様である。
- ⑳石墨片岩（181） 前者同様に粘土質岩の変成岩であり、その代表的な岩石である。暗黒灰色で節理がよく発達し、やや風化の進んだものは、石墨が指先で検知できるものあり。産地は前者と同様であるが、特に下川上流の国峰や岩染付近では顕著な露頭が観察できる。
- ㉑絹雲母石墨片岩（5,613） 前者同様な変成岩類である。石墨片岩であるが絹雲母の混入がよくみられ、中には石英質が多量であるものがある。前者同様節理がよく発達していて、こん棒状で長短ある石材は生活に好都合に役立ったであろう。産地は前者同様な地域である。
- ㉒点紋絹雲母石墨片岩（1,116） 前者同様な変成岩類である。絹雲母石墨片岩にぼつぼつの曹長石の点紋をもつものであり、産地は、前者同様で、雄川の河原、下川河川敷には特に多産する。
- ㉓緑泥石墨片岩（63） 前者同様の変成岩であり、石墨片岩に緑泥石をわずかに混入するもので、産地は前者同様である。黒と緑の混色である。
- ㉔脆雲母石墨片岩（29） 前者同様の変成岩である。石墨片岩にわずかに脆雲母を混在するもので、産地は前者同様である。
- ㉕紅簾絹雲母石墨片岩（30） 前者同類の変成岩であり、絹雲母石墨片岩に紅簾石をわずかに混入する状態の岩石である。産地は前者と同じ。
- ㉖絹雲母赤鉄鉱石墨片岩（12） 前者同類の変成岩である。赤鉄鉱石墨片岩で赤褐色を呈する母岩に、ごくわずかな絹絲光沢をみせる絹雲母が混入する岩石である。産地は、前者同様の地域である。
- ㉗角閃石石墨片岩（2） 前者同類の変成岩である。石墨片岩に角閃石がちりばめられた状態の岩石であり、産地は下川上流域であろう。
- ㉘絹雲母緑泥石墨片岩（365） 前者と同類の変成岩であり、緑泥石を混入する石墨片岩に微量の絹雲母を包含する岩石で、産地は前者と同じ。
- ㉙点紋絹雲母緑泥石墨片岩（21） 前者と同類の変成岩である。絹雲母緑泥石墨片岩に点紋を散在混入する岩石であり、産地は前者と同じである。
- ㉚緑泥片岩（981） 凝灰質岩の中程度変成作用を受けた岩石である。以下、

同類の変成岩について列記を続ける。緑泥石が石英の石基に混在する緑色で片理構造がよく発達し、薄くまた厚く板状であるので、板碑などにも活用されたり、その他遺物にも利用されたようである。

産地は、三波川結晶片岩の分布する地域に、石墨片岩類と接して産出するもので、雄川、下川、野上川、鎚川の流域にみられる。緑色の結晶片岩の代表的な岩石である。

③①点紋緑泥片岩 (1,301) 前者と同類の変成岩である。緑泥片岩に曹長石の白っぽい点紋を混在する岩石である。産地は前者と同じ地域である。

③②絹雲母緑泥片岩 (306) 前者と同類の変成岩であり、緑泥片岩にわずかに絹絲光沢をみせる絹雲母を混入する岩石である。産地は前者同様に結晶片岩分布地域で雄川流域が多いと思う。

③③石墨緑泥片岩 (181) 前者と同類の変成岩であり、緑泥片岩にわずかに石墨を混入する岩石である。産地も前者と同じ地域である。

③④緑簾緑泥片岩 (117) 前者と同類の変成岩であり、緑泥石に緑簾石が混在するもので、緑泥石は深緑色であり、そこへやや黄緑色が交じり、更に石英の白色が交錯すると実に美しい模様を織り成す。鑑賞石材として、珍重される三波石こそ、この岩石である。産地は前者と同地域である。下久保ダム下流の溪谷美はこの岩石で造られる。

③⑤点紋石墨緑泥片岩 (296) 石墨緑泥片岩にぼつぼつと白色の点紋を散在する岩石で、前者と同類の変成岩であり、産地も前者同様の地域である。

③⑥絹雲母石墨緑泥片岩 (66) 石墨緑泥片岩に絹雲母をわずかに混在する岩石で前者同類の変成岩であり、また産地も前者同様地域である。

③⑦点紋絹雲母緑泥片岩 (205) 絹雲母緑泥片岩に白っぽい点紋が散在する岩石であり、前者同類の変成岩で、産地も前者同様な地域である。

③⑧点紋絹雲母石墨緑泥片岩 (91) 石墨緑泥片岩にわずかに絹雲母を混入し、更に、白っぽい点紋を散在する岩石である。前者と同類の変成岩であり、産地も前者と同様な地域である。

③⑨石墨絹雲母緑泥片岩 (1) 絹雲母緑泥片岩に、黒色の石墨の筋が入る珍しい状態の岩石である。前者と同類の変成岩であり、また産地も前者と同じ地域である。

④⑩緑簾片岩 (2) 緑簾石が石英の石基に混入するものであり、緑泥片岩より明るい黄緑色の岩石で、数が少ない。産地も前者と同じである。

④⑪絹雲母緑簾片岩 (1) 緑簾片岩に絹雲母をわずかに混入する岩石であり、前者と同類の変成岩である。産地も同じ地域である。

④⑫滑石片岩 (27) 蛇紋岩が中程度変成作用を受けたもので、片理構造をもつ岩石である。非常に軟らかく、爪で傷付く、最も硬度の低い鉱物である。白色ないし淡褐色で蠟のような脂感があり真珠光沢がある。細工に都合のよい石材であり、潤滑剤としても役立つものである。特産地は、甘楽町河振の

雄川右岸にあり、良質のものを採鉱していたが、現在は鉱道も閉鎖されてしまっている。

3 鐮川及び雄川の石材概説

当遺跡に関係をもった石材が、鐮川や雄川の流域のいずれの地層から産出したものかを、その地域の地質分布に関係づけて概況を記述する。

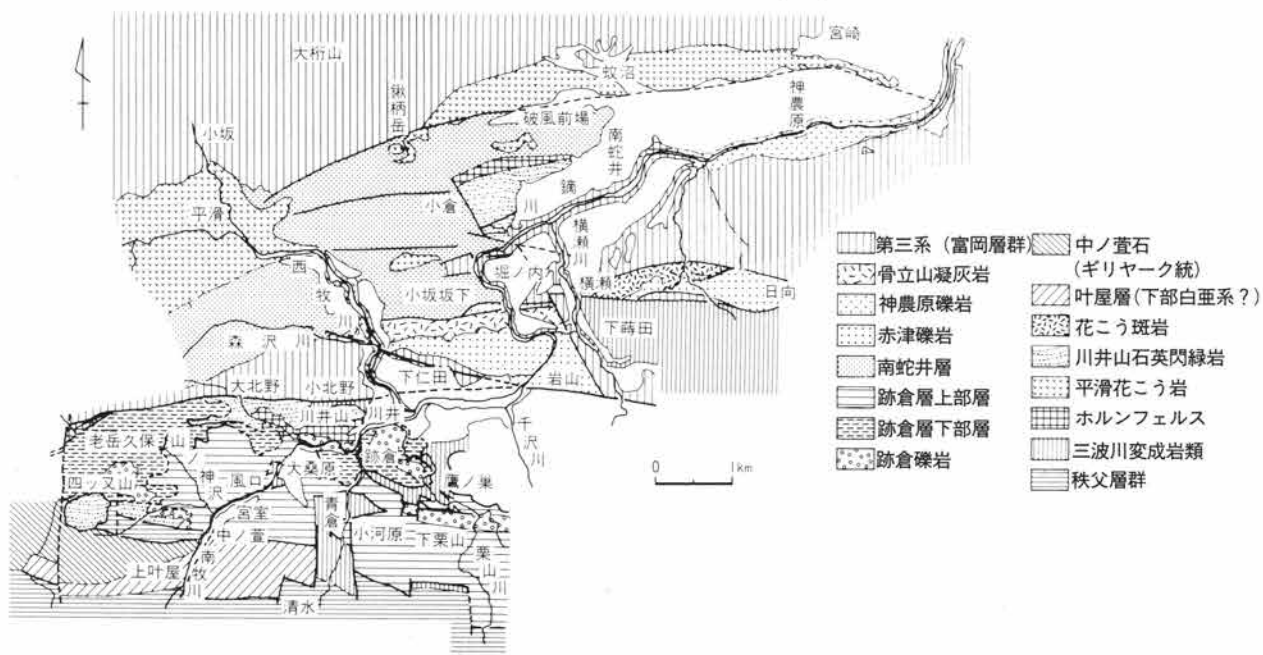
当遺跡の石材の産地については、前項で個々に記載した所であるが、この項では、石材を岩石分類表で括った態様に従って、その石材を産出した地層の分布状態と特徴を、地質図等と併せて略述する。

(1) 秩父古生層

鐮川の支流である南牧川流域、下仁田町南部から甘楽町南部の稲含山地域にわたって分布し、更に南東へ秩父地方へと延びる地層である。この地層を形成している岩石は、堆積岩分類表中の甚固結している部分に該当するものである。関東山地、秩父地方を模式とするもので、石炭～二畳紀の海成層であり、粘板岩、硬砂岩、輝緑凝灰岩、チャート、石灰岩などからなる地層であるので、当遺跡の石材で古生代（甚固結）の堆積岩は全部のものが、秩父古生層からの産物であった。

(2) 三波川結晶片岩

三波川変成帯の結晶片岩類は変成岩の分類表に基づいて、当遺跡の石材についての分類を実施した。三波川変成帯は、下仁田構造帯として、東方へ埼玉県まで延長分布しているものであり、当地域では、秩父古生層地帯を南側に置いて、併走する状態で、南北約6km位の幅で分布している。変成作用を受け、全体としては片理構造の発達した岩石帯である。



第1図 下仁田町付近の地質図 (『かぶらの自然』から)

(3) 中生代の地層

当遺跡の石材では、跡倉層や中之萱層、南蛇井層、神農原礫岩層が特に関係する地層で分布状態は（第1図）の如くである。

(4) 第三紀の地層

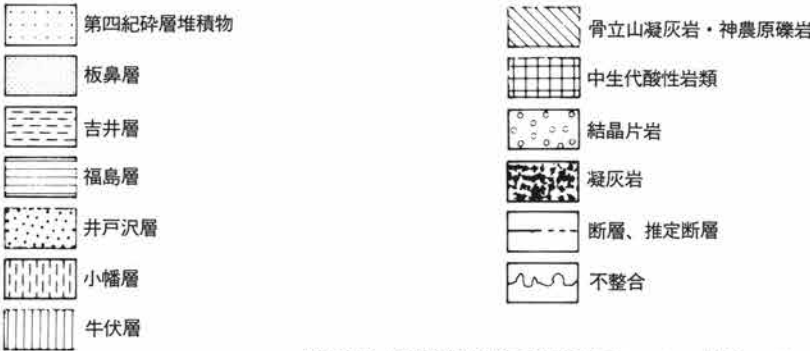
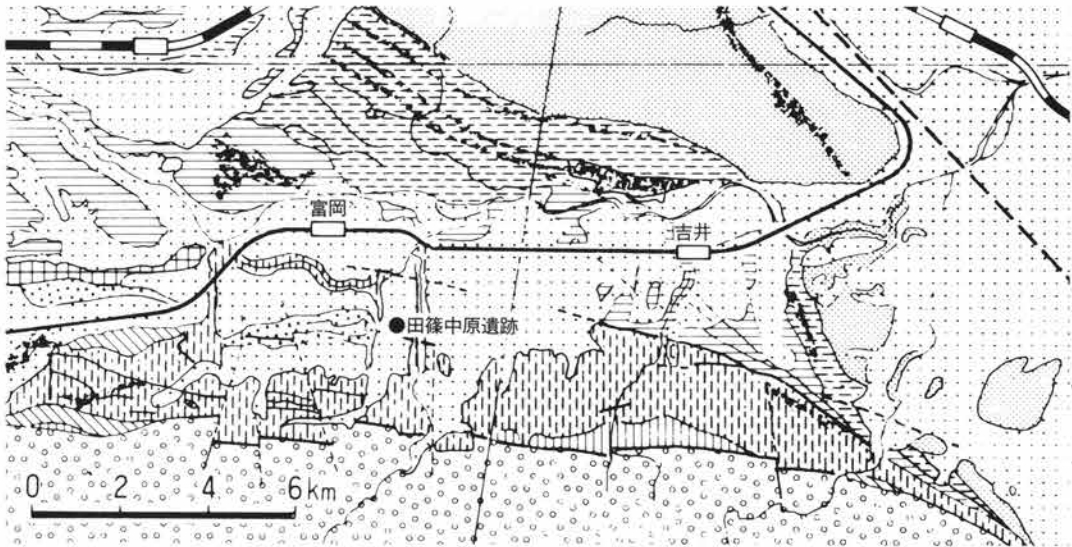
当遺跡の石材としては、富岡層群中、井戸沢層、小幡層、牛伏層の堆積岩層に深い関係がある。（第2図）の如くである。

(5) 火成岩層と熱変成岩

鎬川の上流地域に発達する火成岩層及び下仁田付近の火成岩層と南牧川上流域を産地とする火成岩類がある。

火成岩の貫入現象による接触熱変成作用を受けたホルンヘルス等が下仁田町川井山西部付近及び、南蛇井層が滑花崗岩層との接点に見られる。

以上、簡略に走り、意を尽くせませんが、縄文時代の住人が、石材の特徴を活かして生活された姿に対して、敬意を表してこの稿を終わります。



第2図 富岡市付近の地質図（『かぶらの自然』から）

4章 自然科学的分析

執筆者紹介

氏名：陣内 主一

生年月日：明治44年6月27日

最終学歴：群馬師範、専攻科卒

職歴：昭和6年3月教職に就き、教職・行政職等40年間

昭和46年3月退職

現職：県立自然科学資料館(解説員)当時
富岡市・妙義町文化財調査員

執筆関係文献：富岡市史、南牧村誌、
妙義町誌、かぶらの自然、
資料館自然観察コース案内等

〔5〕遺跡調査における地中レーダの活用

渡 辺 広 勝

(テラ・インフォメーション・エンジニアリング)

I 田篠中原遺跡での地中レーダの活用

関越自動車道上越線工事に伴う遺跡調査において、大規模な環状列石が出現した田篠中原遺跡では、道路範囲外まで列なると見られる列石の確認を必要とした。道路外を試掘することは、多種の事情から、不可能であるため、物理探査による確認が望まれ、特に地中レーダの活用を行った。

ただし、この測定には、次の2つの問題が発生した。

問題点1として、道路外は、畑地で桑畑がほとんどであり、一部、野菜などが作られている。地主と立ち入りのみの話し合いはついているが、野菜畑への調査は出来ない。

問題点2として、環状列石の一部が発掘範囲で攪乱されており、北東側の環状の規模がわからない。

問題点1は、この様な探査の場合に常に起りうる状況であり、地中レーダの成果は、この時点での測線設定の良否にかかわるため、慎重に対処し、測線を設定しなければならない。

問題点2は、多くのデータを収集出来る場合は良いが、少い測線だとデータの目的とは関係ない転石を求めてしまうことも考慮しなければならない。そのため、次の様に打ち合わせした。

1. 考古学的に推測される環状列石のラインを定め、その位置を交差又は縦断する測線を設定する。
2. データを即読し、可能性ある場合、ボーリングステッキで確認する。転石が確認された場合は、印をつける。

準備結果としては、1については、結局、2本のラインが想定された。2については、桑畑が意外に狭いため、要求された測線が設定されたとはいえない。また、測線量も少くなった。

以上に基づいて、測定した。

発掘では、環状の西側に、はっきりした遺構面が見られるので、南西側付近に測線を置き、データを求めたところ、固体状のデータが得られ、ボーリングステッキで確認したところ、転石の反応を得た。

それ等の位置は、図1の円内になる。それ等は、ほぼ想定ライン1に沿って存在している。想定ライン2にも転石は確認されているが、数は少ない。北東側は、「問題点1」に該当し、調査は不十分となった。他に遺構状データも何通りか収集されたが、主目的と離れるため、整理から除外した。

シュミレーション図の作成

調査に当って提供された遺構平面図には、発掘区域外は白紙である。記入された遺構状況図、特に石の状況から、これによる発掘区域外の探查結果によるシュミレーションを行った。

これは、地中レーダのパターン解析により、物の形態をおおまかにとらえてみようとする試みと、遺構平面図から、類似する遺構図を取り出し、地中レーダデータにあてはめようとする考え方である。

作業としては、データに取り出されたパターンを解析し、石の大きさ、形などを決め、遺構平面図から、その状況に近似する石群を選び出し(図2)、測線上に転写してみた。(従って、細かい石の状況が、まったくその様になっているというわけではない。)

この手法は、今後、用い方により、発掘前におおよその遺跡状況把握に利用できる。また、本件のように発掘出来ない区域の状況確認として、シュミレーション図作成は、効果があると考えられる。(図1参照)

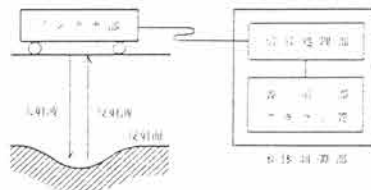
以上は、田篠中原遺跡での調査結果の状況である。この発掘できない区域での調査では、同様、高速道工事において発見された中世遺構(堀)の区域外探查を行い、その状況を解明している。(大阪府近畿道余部城郭跡 資料1)

資料1

近畿道和歌山線、府道松原泉
 天津線関連 第2回発掘速報展
 主催 財団法人大阪文化財センター、大阪府教育委員会、大阪府立泉北考古資料館
 オペレーション協力
 資料提供 株式会社パスコ

レーダー探査による調査

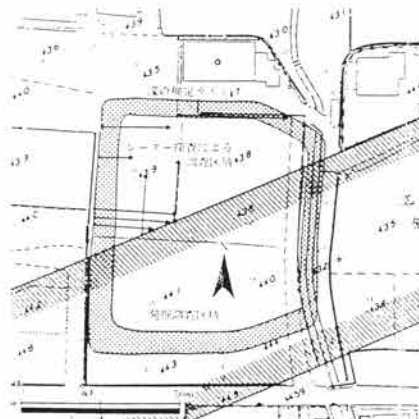
最近では、考古学の世界にもいわゆるハイテク技術が進出してきています。発掘調査で、城郭の前半部を検出していたため、今回は発掘調査によらず、地中埋設物探査装置を使って、城郭前半部の埋の広がり調べてみました。地表面をゆっくりと移動するアンテナ部から地中に電波を流し、反射してくるエコー電波を表示部のディスプレイに表示します。地中の埋設物の違いをカラー映像で見ることが出来るため、地面を掘らずに調査することが出来ます。細かい溝や柱穴などの細かいものは確認できませんが、大規模な埋はかなり鮮明に表れたため、城郭の範囲を知る事が出来ました。



レーダー探査のしくみ



レーダー探査風景



城郭範囲推定図 (1/1,000)

城郭の前半部は、発掘調査で確認できた部分です。後半部は、レーダー探査によって確認した埋の広がりを示しています。
 幅約7m、深さ約1.5mの大きな溝が埋まりを囲んでおり、方位にあわせつつなされています。内部の大きさは東西約60m、南北約65mで、面積は3900㎡あまりです。入口ははみりしませんが、東側には南北方向に走る土塁跡があります。

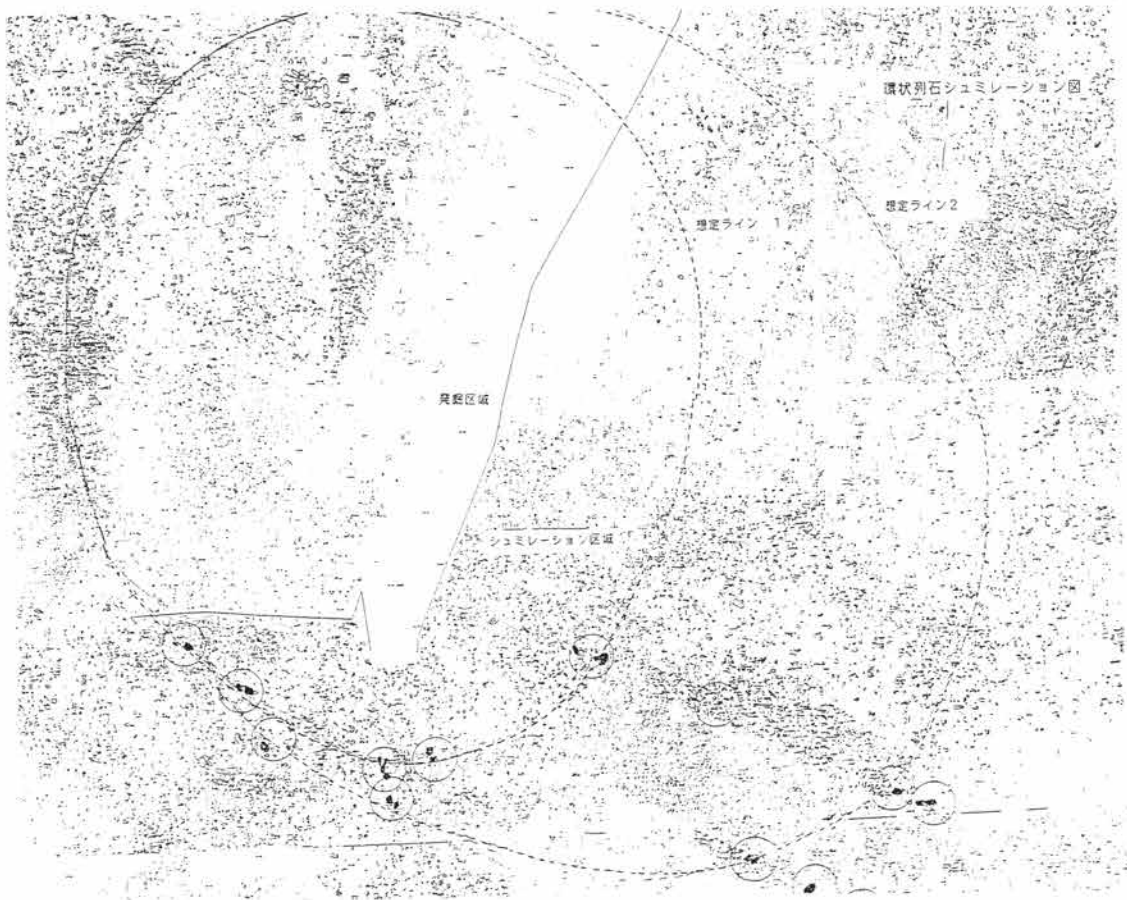


図1 環状列石シュミレーション図



図2

II 遺跡調査での地中レーダ

1. 地中レーダに表現された遺跡

地中レーダのデータ映像画面には、地中物体のそのものの形が現われるわけではない。映像面には、地中における電波の反射状況が表現される。この反射状況をパターンと称し、複雑な土中の状態の解明を行う。この作業を解析または判読と称している。多くのデータと発掘実証などにより、すでに、「この様なデータの場合は、この様な遺構である」という、代表パターン認識は出来つつある。

今後発掘担当者と地中レーダ作業の組合せにより、このパターン認識が、より一般的になれば、発掘作業の合理化も進められるものと考えられる。

以下は、その代表的データの一部である。

図3は、関東ローム層上部黒土中の住居跡である。自然堆積された黒土に比べ、住居跡の黒土は、成分的にも大きく異なるものとみられる。有機成分の違いは、電波の反射にも大きく影響を与える。

データは、発掘により確認され、古墳前期頃のものとして報告されている。

この様なデータを見る場合、水平方向と深さ方向の縮尺の違いから、錯覚を起こしやすいが、黒いライン部だけが住居跡ではないので注意する必要がある。

図4は、住居跡

図5の溝の、データは、対象遺構の置かれている状況により、様々な表現の違いを見せている。

それは、単に遺構の構造の違いだけでなく、旧地形、土質、堆積状況、攪乱状況などの遺構の置かれている環境も影響する。

図5左上から周溝、周溝、左下から溝、堀跡などのデータである。

図6は、データにより確認された横穴。

輪切りのデータをとることにより、横穴の形態を推測することができる。

以上のように地中レーダデータは、多くのデータパターンの認識により、データを読みとっていく。

図7、図8は、読み取りの一例である。

地中レーダデータには、遺構だけが表現されるのではない。様々な土質構造の中には、まったく人工的なパターンを見せるものもある。このため、判断の誤りは、大きな間違いとなる。また、地中レーダの電波は、どの土質にも適するとは限らない。これも、また、使用するうえで考慮しなければならない問題である。

このため、遺跡調査については、地中レーダのオペレータが、遺跡に興味を持ち、遺跡保護に関心を持ち、現地の踏査調査をよく行い、その時点から、遺構発見への準備を持たなければならない。しかし、遺跡による「性格」の違いは、レーダパターンにも現われるため、数少ない地中オペレータにすべてをゆだねるのは、遺跡保護の上からも安全とはいえない。出来うれば、各担当者が、

地中レーダの内容を知り、活用に当たっては、お互いに情報を交換しあって、利用することが望ましいと考える。



図3 住居跡

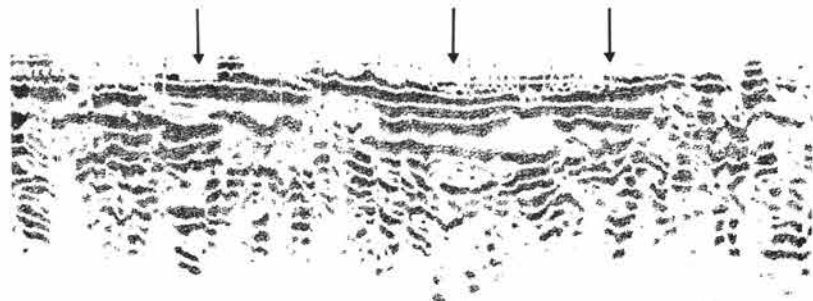


図4 住居跡

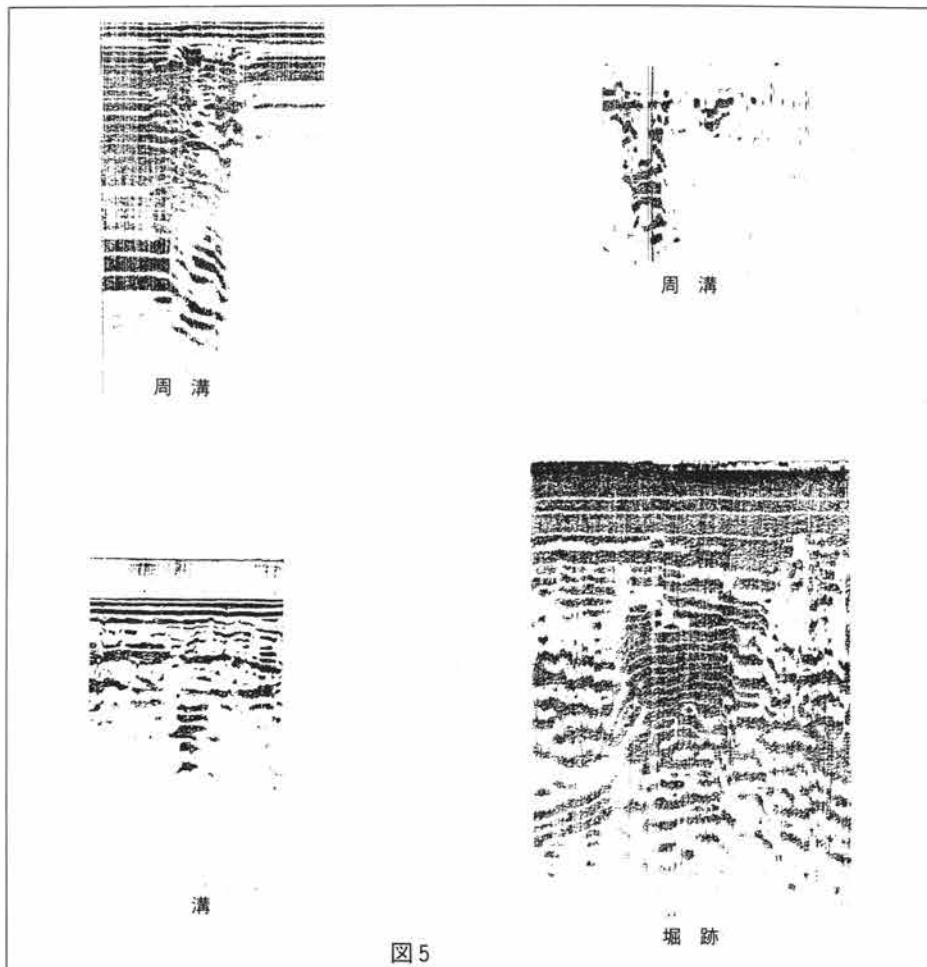
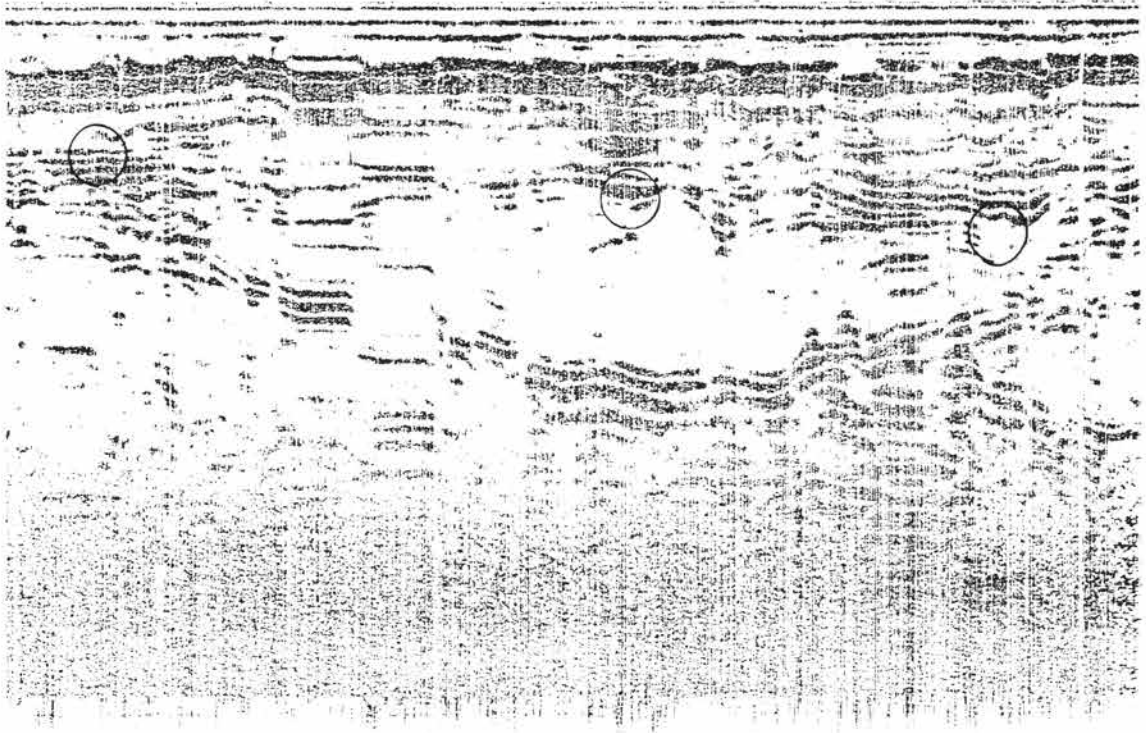
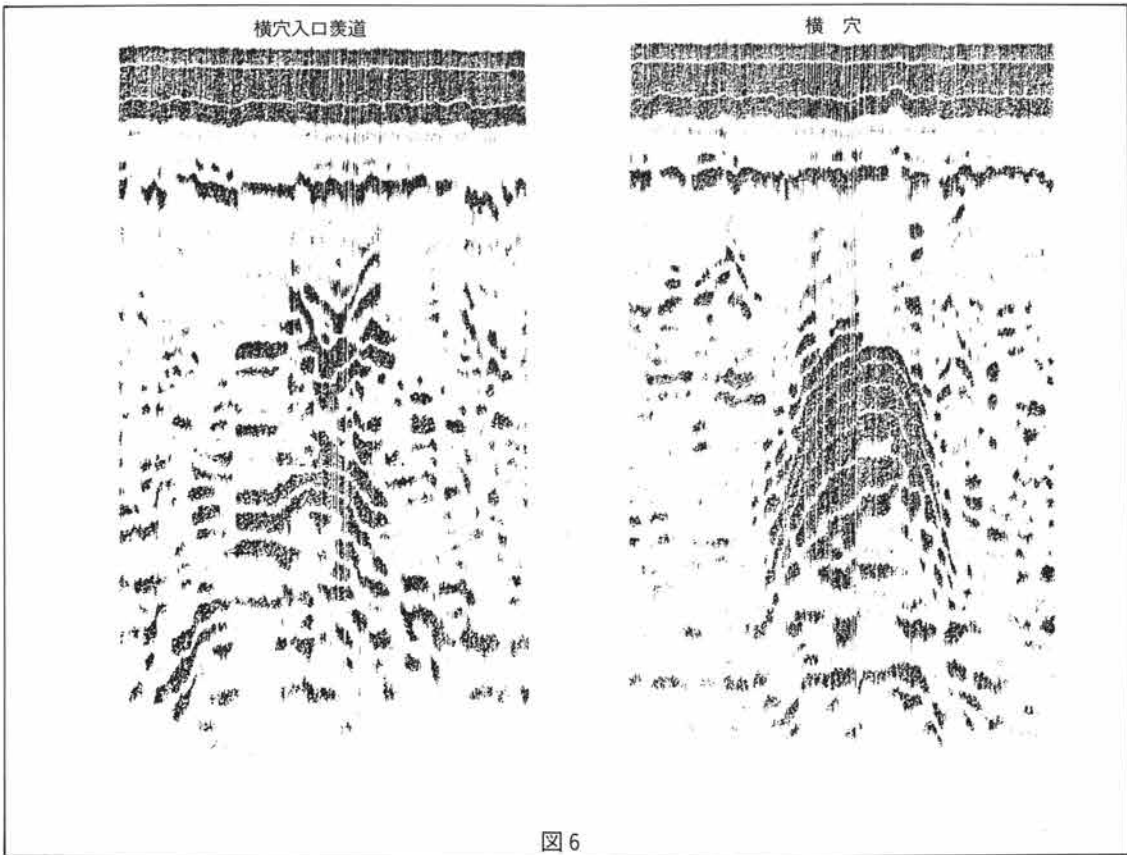


図5



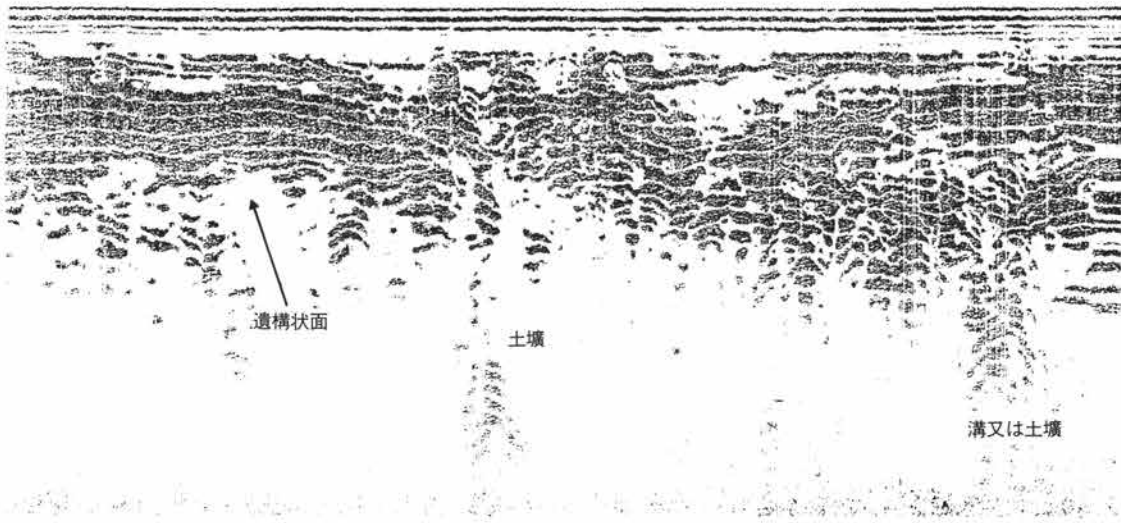


図8

2. 遺跡調査探査状況

地中レーダは、地中の各種の情報を一括取得する。従って、そのなかから、必要な情報を得なければならない。特に、遺跡については、探査前に担当者と十分な協議をし、指導を受け、目的遺跡の基礎的な知識を持たなければならない。

遺跡調査について、現状の地中レーダでの探査状況を以下に述べる。

1. 旧地形の探査

各種の要因による自然堆積などや、貝塚、埋められた遺跡などを探査するとき、データの中から旧地形線を探し出すことが出来る。但し、旧地形の持つ傾斜角は、地表面より20度程度までである。また、礫層などに積重なった貝塚などは、これを分離認識することは、大変難しい。複雑な地層構造の土地では、遺跡に関係無いデータを遺跡データとして見てしまう場合もある。(このような場合のため遺跡専門家の指導がいる。)

2. 溝、堀の探査

古墳の周溝をはじめ、埋没している堀や溝跡の探査は、地中レーダの探査テーマとしては、比較的データを多く求めることができる。また、遺跡の情報処理のためにも、最も大切なデータといえる。作業は、目的の溝の歴史的背景による状況情報により、測線設定をおこなう。一般に古墳周溝は、古墳中心側から、放射線状にとる。屋形跡などの周濠などは、現地形などを考慮しながら行うと効果がある。

測定に関しては、耕作上の制約が起きやすい。測線は、放射状に取れる範囲が制限される。このため、データへの安全を含め、出来るだけ多くの測線を設定する必要がある。

古墳周溝のような円周形のものは、やはり放射線状に求めることが望ましい。

但し、これは古墳の中心部が、明らかに確認されている場合に限られる。従って中心部の不明な場合、網目状に測線を設定し、この結果をもとに、放射線状に確認測線を設定しなければならず、作業量は多くなる。

一般的な溝は、注意深くデータを判読しないと溝として不明な点が多い。平面図に書込んで溝として判断出来た場合もある。これは、土質、その地区の歴史的背景などにより溝の埋没してゆく成立ちが、それぞれ異なり、データにもそれぞれのパターンの違いが生じるからである。最初に述べた、当該遺跡担当者との協議をし、指導を受け、遺跡への基礎的な知識を持つことは、このためにも必要である。

3. 住居跡

竪穴式住居跡については、比較的よく表現され、すでに多くの実証データが公表されている。

4. 礎石、石群

石、一つの直径30cm以上、または、小石でも集まって、直径が30cm以上の場合、顕著に表現される。平石、丸石、敷石、積み重ね石、角ばった石などで表現が異なり、平面図にその配置状況などを記入しやすい。ただ、自然堆積の礫群が、近くに存在すると、データへ介入し、判読を誤るので、注意しなければならない。

5. その他

古窯跡、古墳(埋没も含む)、その他の埋没遺跡について地中レーダの活用は、有効的である。但し、次の様な条件では、データの判読は難しいか、不可能である。

粘土質の多い土地、または粘土地質と他の地質の互層。全域礫層の中の物体、土質変化の乏しい遺跡、細い柱穴、急傾斜面の横穴、直径30cm以下の単体物体、深さ2m以上の遺跡(掘られた溝は除く)等。

都市遺跡の探査の場合、舗装面下の遺跡は、舗装の種類、厚さ、埋設物の有無または量による影響を受け、判断しがたい場合がある。

III 地中レーダパターンの見方

1. 地中レーダの概要

一般に使用されている地中レーダに利用される電波は、サイクルが、6ナノセック(Nsec)のパルス波(モノパルス波)を利用する。このパルス波を、約20マイクロ間隔に発射し、地中からの反射回帰波を求め、発射時間との同期をとり、反射の発生位置までの時間を計測する。

このため、同期の時間間隔と、電波の透過能力を考慮すると、一般に、反射

回帰の有効範囲は、一般使用機器の電波で、200Nsec前後であるとみられる。

この深さは、一般土質で、2mから3m、よほど乾燥した砂地でも、8mから10mとみられる。

一般に、電波を使用しているため、周波数を求めようとするが、このパルス波は、一般使用電波のように、搬送波を持つ電波の周波数と同じ考え方はあてはまらない。

このパルス波は、広帯域波と称し、有る一定の周波数帯域を包括した電波の束と思えばよい。テレビ、ラジオなどの電波を、なわとびの縄にたとえた場合、地中レーダのパルス波は、投げあうボールのようなものである。

しかし、周波数の考えの基準を定める為に、パルス波の振幅ピーク点での周波数の位置を求めて、公称周波数としている。

電波の周波数の送信は、周波数に相当した、アンテナの長さに関係する。

アンテナの長いほど低い周波数帯に、短いほど高い周波数帯のものとなる。

一般に使用される60cmアンテナは、150MHz 前後である。

ただし、パルス波の振幅ピーク点の調整は、機器の構造上とくに難しいことも有り、調整時点で、その周波数も、微妙に異なる場合がある。このため、一般波のように正確な周波数表現は出来ない。

さて、電波が地中を透過するとき、地中の物質的特性においてさまざまな変化がある。その一つとして、地中に透過するとき、深さに応じた周波数の減衰が起こり、このため深さごとの反射波の周波数が異なるということである。

この電波の特徴として、深さにより、回帰周波数が異なる。これは、深さ方向に、高い成分の周波数から、減衰していくためである。

高い帯域の周波数は、地中の浅い場所の解像度（分解能）をよくするが、地中深くまで達することは出来ない。低い帯域の周波数は、深い場所、または遠く場所に届くが、大まかな解像度しか持たない。

このようなパルス波のことを広帯域波ともいう。

つまり、広帯域波は、150MHz 付近をピークとした30MHz から1GHz 付近までの、無限の周波数を包みこんで、地中に送り込まれる。地中では広帯域波に含まれた周波数が、その周波数の、能力に応じた深さまで透過する。これは、電波が、地中から、その深さに応じた、その深さまでの周波数が、その深さでの物体の、反射波をもたらしていることになる。

従って、収集されたデータは、電波の問題だけに関しても、深さ方向にたいし、すべて同じ条件の表現ではない。さらに、ここに土質、物質の各種条件を加味すれば、より複雑なデータ内容となる。とくに電波は、電気的エネルギーであり、物質によっては、エネルギーとしての、保有と放出という、電気的特性が発生する。この電気的特性が発生した反射波は、データを乱し、解析上やっかいなこととなる。しかし、最近、一部の作業には、物質特性の判断に役立つことがあることがわかり、これを利用するようになった。

2. データとパターン

1. データは、横断データとして収集する。これは、埋設物などは、同一反射時間内の、反射面積が広くとれるからで、縦断した場合、その面積は、小さいので表現されにくい。

ある物体の反射面積が、その存在する深さで、電波の透過面積に比べ、どの程度の割合を持つかで、データへの表現は異なる。浅く太い管は、縦断でも求められるが、細い管や、太くても深いものは、データの求められるチャンスは、限られる。反射面の広さは、各種の要因が有り、決定は出来ないが、150MHzアンテナ使用の場合、深さ1mで、空洞では、平面積30×30cm、厚さ5cm以上、対交直線物では、100φの鋼管で長さ50cm以上を必要とする。

2. データの基本は円弧状である。

データは、一般に円弧状に表現される。そのため、ある測線に表現された円弧状のデータは、求める物、そのものとは限らない。

たとえば、埋設物と空洞との間違い。石などと、空洞、埋設物との間違いなどである。

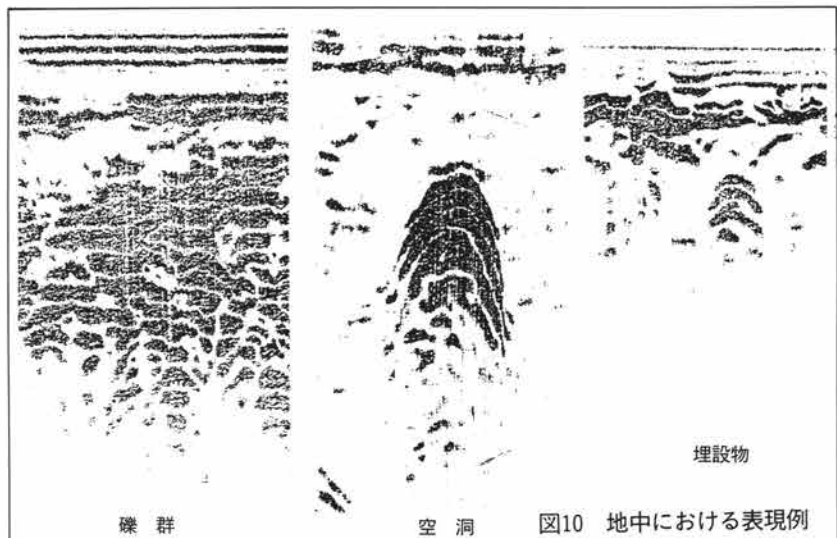
遺跡調査では、データは複雑なため、このような注意をしなければならない。図10は、地中における表現例である。

3. パターンラインとリアルラインの分離。

データは、パターンによって表わされるが、このパターンの合成によっては、パターンの連続による一体化した、地中状態と整合性の有るデータが求められる。これは、リアルデータとして、パターンデータと区別して、データの解析に役立てることができる。そのようなものには、地層、土層、構造物平面等がある。



図9 トンネルの横断データ



4. パターンの解析

地中レーダの使用は、パターン解析手法の理解が必要である。

地中レーダのデータを見ると、あたかもセンサーから、一本の細いビームが、地中の断面データを収集しているように見られる。これは、図形がもたらす錯覚で、実際には、電波は、広い範囲の地中透過を行い、表現される反射図形は、広い範囲の反射波の状況であり、絶対にセンサーの真下のものばかりではないので、解析に注意しなければならない。

センサーを移動させると、画面上に、地中での電波の、反射量、反射状況による図形が出来る。この図形をパターンと称する。地中レーダの利用は、このパターンの成立ちを解明し、地中の様子を分析するパターン解析が、重要な作業である。

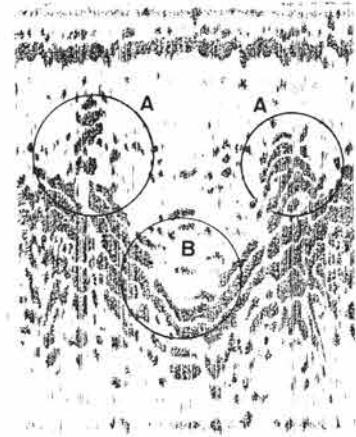


図11 A パターンデータ
B リアルデータ

5. パターンの成立ち

1) 電波の広がり。(図12-1)

電波は、楕円錐状に地中に透過していく。(これは、多くのデータを分析した結果、求められた考え方である。)

2) 反射の強さ。(図12-2)

深さ方向では、1mから2m付近が最も効果がよい。(これは多くの反射物体の実験から、導きだされた。)

この効果をレンズ状放射ともいい、普通の空間レーダにもみられる現象である。

レンズ状範囲は、回帰周波数帯の、効率のよい範囲として考えられる。

3) パターンの発生。

反射波は、回帰した時間によって、その時間の場所に、その強さに応じた色で表される。電波の広がり、1) のようになっているので、有る一点はセンサーの移動にともない、円弧状に表現される。このようなことをパターンという。

図13は、円弧状表現の成立ちである。

4) パターン図形の合成。

地中データは、反射物体が複雑な場合、パターンも複雑になる。従って、先ずデータを見る時は、パターンが正常に発生したかどうか、注目することが大切である。

資料2は、パターン発生の結果図である。

5) 以下は、データ収集の不可能なものである。

- 垂直方向は、表現されない。

(杭、矢板、垂直断層の割れ目ラインなど)

- 電波を通過させないものや、電波の減衰の大きい物質、障害物の下方デー

図12-1

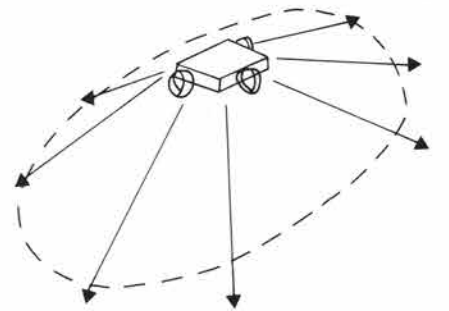
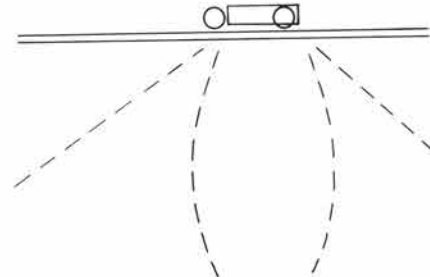
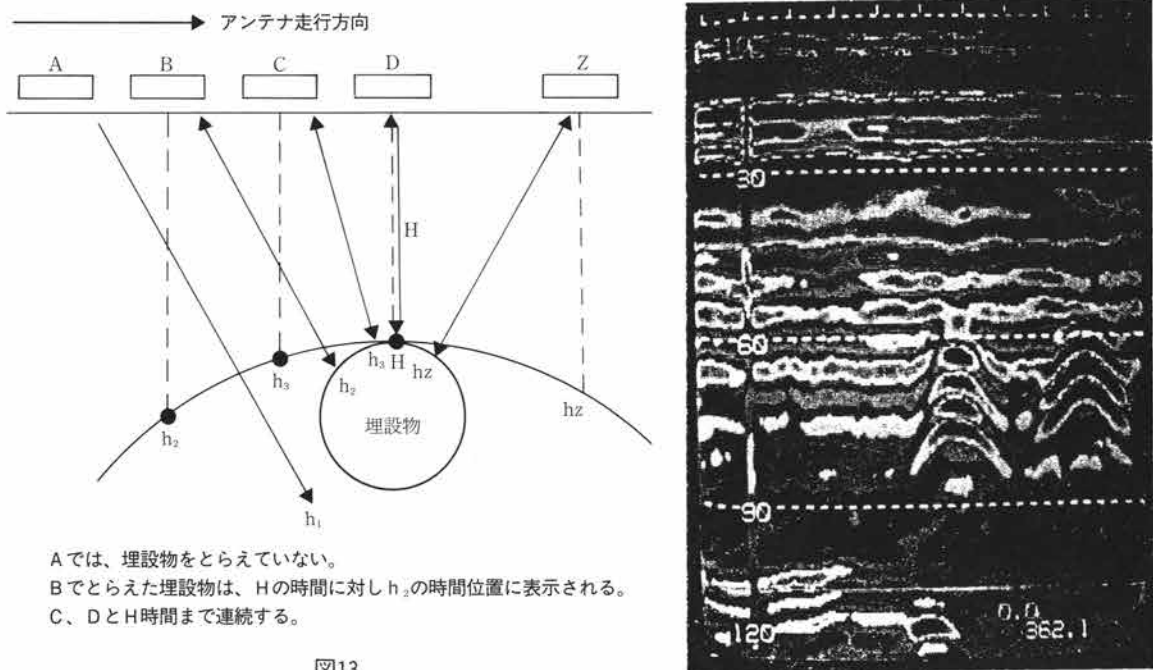


図12-2



タは収集出来ない。

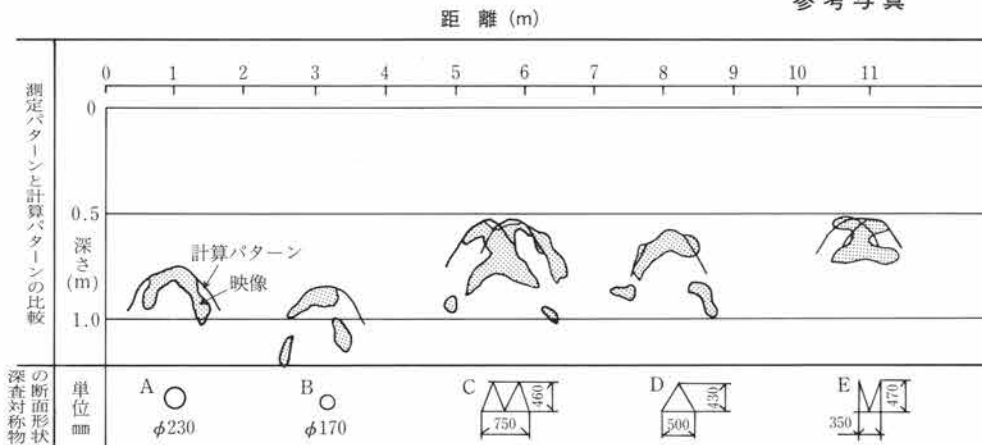
(空洞、暗渠、側溝、中空埋設物、金属板)



Aでは、埋設物をとらえていない。
 Bでとらえた埋設物は、Hの時間に対し h_2 の時間位置に表示される。
 C、DとH時間まで連続する。

図13

参考写真



野外確認実験による測定結果及び計算により求めたパターン
 (Comparison of Experimental and Calculated Echo Curve)

資料2 鹿島建設技術研究所 (結果図)

●このようなデータ解析上の問題が有るため、パターンは、つねに正しい形態が要求される。距離エンコーダーと直結されるCRTモニター使用の地中レーダは、データスケールが、つねに一定に保てるため、パターン表現に信頼がおけることとなる。

IV 遺跡調査でのパターン解析

パターンとは、電波の反射波形を水平方向に集中的に並べて作り出す土中の図形である。

1. パターンの基本は、円弧である。

電波は、楕円錐状に地中に放射され、各々、反射物から回帰する。

同質のものでも、センサーの進行方向に対し存在している形体により、反射量が違う。

図14-1は、円弧表現がなされる場合で、これは同一距離（時間）に反射面積が多くあるためである。

図14-2は、直線表現になるが、細い管などは、何の表現もされない。

また、太い管で表現されても少し位置がずれると消えてしまう。

これは、反射面積の角度が全部違うため、反射面積の範囲が小さくなるからである。

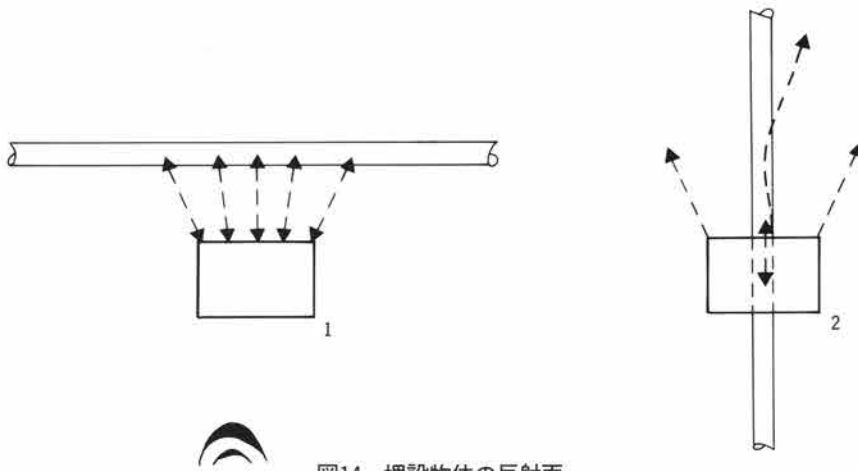


図14 埋設物体の反射面

2. 遺跡データは、複雑なパターン図形の集合。

平面積の広いものは、パターンの集合として反射面そのものが、図上、表現される。地層、又は、土層があり、大きな構造物面も含まれる。これをリアルラインと呼称する。

しかし、地層や土層も、何かの境い目では、その境い目の状態、大きさによっては、パターンが発生する。一つの図形の中から、パターンとリアルラインとを区別する必要があり、比較的、面倒で、誤差や判断違いを起こしやすい。

大略、以上のような感じで、ここに他の要因が入ってくると、より複雑なデータが収集される。

3. パターン図形はいろいろな誤差を含む。

- 1) 距離計の動きが不規則
 - 2) 地形、地層による反射波のゆがみ
 - 3) 土中含水率等による反射波のゆがみ
 - 4) 画面判読点の誤り（判読誤差、ミス）（解析誤差）
 - 5) 現場位置記入上の誤り、誤差
- } パターンやリアルラインのゆがみ

従って、目的とする対象物の位置誤差をどの程度の範囲にとどめるかで、測定作業工程の内容を変えなければならない。

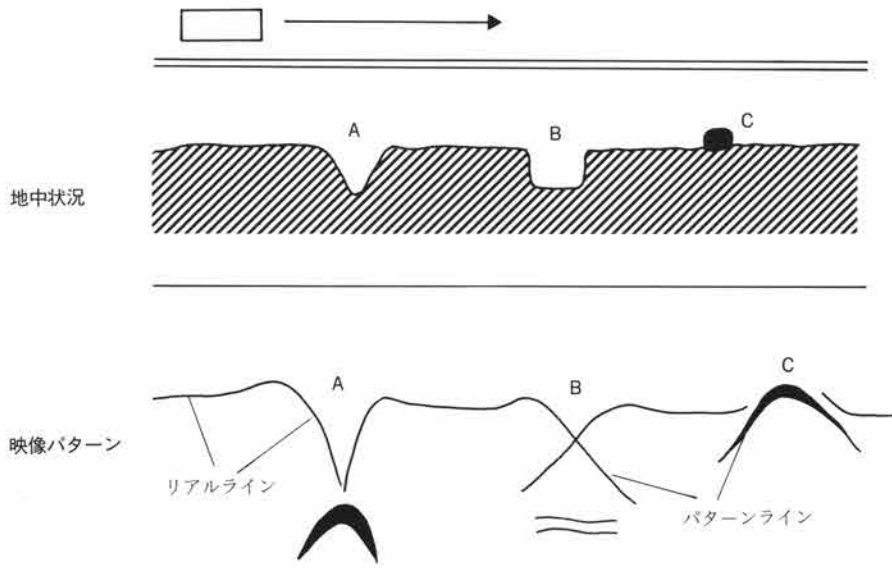


図15 リアルラインとパターンの発生

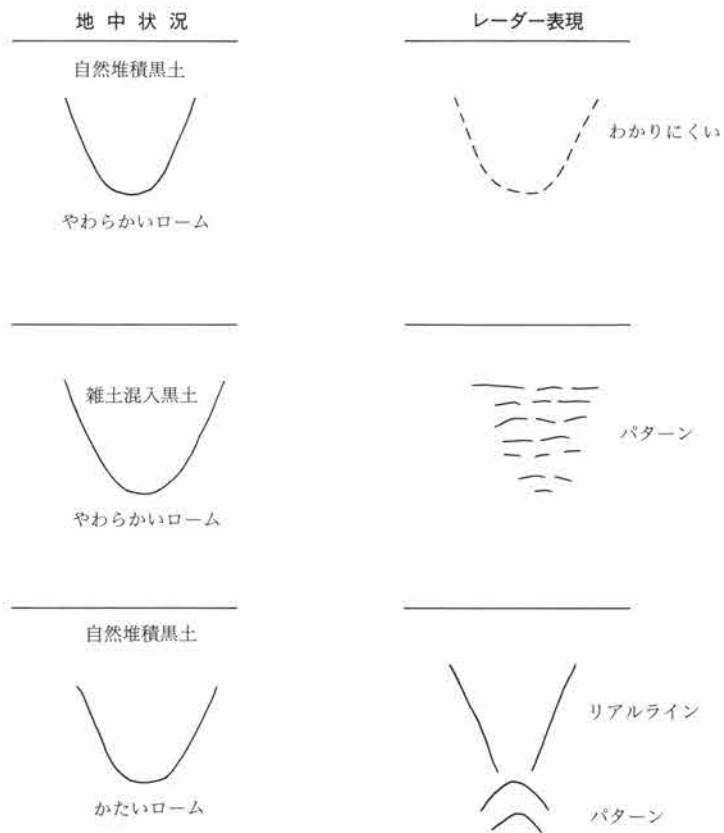


図16 ローム層遺跡での反射波の取得条件（溝の場合）

4. 遺跡調査での作業能力

操作時間は、一般に、障害物のない平坦な舗装面の1kmの測定がH時間とした場合、山林地で伐採跡を行ってもH時間内に30%が限度である。判読結果を伴い、精度を要求されれば、さらにその測定距離は、少なくなる。

従って、広い面積では、精度より量をまず行い、その結果をもとに局部的に精度の高いデータ収集を行う。一般に、遺跡の場合、H時間当たり、70%が限度である。

V 地中レーダの原理と構造

1. 地中レーダ探査法の原理

地中レーダ探査法は、地中に埋設されている配管類、空洞等の位置および地下浅所の土質状況等の探知を目的に開発されたものである。

アンテナ部から地中に、VHF(100~300MHz)と呼ばれる極超短波帯(図17)の電磁波パルスを発射し、地中の反射面で反射し戻ってくる反射波を受信して、信号処理を行ない、アンテナ走行線沿いの地下断面映像をブラウン管上にカラー表示するので、地下構造を直視的に把握できることが特徴である。

ブラウン管の横軸は、アンテナの移動距離、縦軸は、反射走時(パルスが発信されてから受信されるまでの時間)を表している。また、カラー表示は、受信強度区別に設定される。

1. 受信強度

反射波がアンテナで受信された場合の受信電力(P_r)は、レーダ方程式で近似される。

$$P_r = P_t \cdot G_t \cdot G_r \cdot R_e^2 \cdot \lambda^2 \cdot S \cdot R^2 \cdot \frac{e \times P(-4\alpha L)}{64\pi^3 L^4}$$

ここに

| | |
|-----------------------|-----------------------|
| P_t : 送信電力 | S : 反射面の有効反射面積 |
| R_e : アンテナの受信効率 | R : 反射面の反射係数 |
| G_t : 送信アンテナの利得 | α : 地中における減衰係数 |
| G_r : 受信アンテナの利得 | L : 反射面の深度 |
| λ : 電磁波パルスの波長 | |

$P_t \cdot G_t \cdot G_r \cdot R_e^2$ は、探査機固有の定数であり、感度調整により可変できる。電磁波パルスの波長(λ)は、機種により固有の値となる

S および R 、 α は、反射体の電気特性により変化する変数であり、金属物体や空洞等の反射面の反射係数、および有効反射面積が大きいと反射強度が強くなる。また、(深度)⁴で減衰するので深度の深いほど反射強度は弱くなる。

文献資料

電気通信大学 鈴木務
電波による地中・水中の探査
計測と制御
Vol. 20 No. 8
昭和56年8月

文献資料

株式会社 光電製作所
地中レーダKSD3AM
取扱説明書

2. 反射係数 (R)

反射は、媒質中の電気特性が異なる境界層で発生し、反射鏡度は次式で表される。

$$R = \frac{\sqrt{\epsilon_1} - \sqrt{\epsilon_2}}{\sqrt{\epsilon_1} + \sqrt{\epsilon_2}} = \frac{C_1 - C_2}{C_1 + C_2}$$

ここに

ϵ : 媒質の比誘電率

C : 媒質中の電磁波の伝播速度

$$C = 3 \times 10^8 / \sqrt{\epsilon} \quad (\text{m/s})$$

すなわち、2層の、誘電率 (または伝播速度) の差が大きくなるほど反射係数は大きくなる。

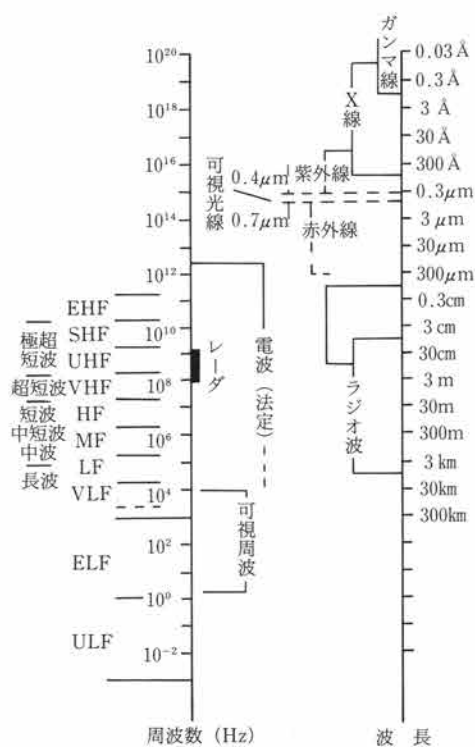


図17 地中レーダ法に利用される電磁波パルス帯

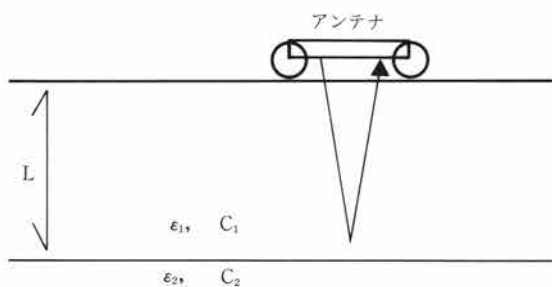


図18 媒体の電気特性

3. 反射面の深度

地中レーダ探査法は、反射法であるので、地下の反射面の深度（d）は、次式で表される。

$$d = 0.5 \times C \times T = 0.5 \times \frac{3 \times 10^8}{\sqrt{\epsilon_1}}$$

ここに

T： 反射走時

参考として、主な物質の電気的性質を表1に示す。

表2に示すように、比誘電率は、材質により、電磁波速度が大きく変化する。また、現地で比誘電率を連続的に測定することは困難であるので、調査地の土質の平均的な比誘電率を仮定して深度に換算する。このため、探査機では、表2に示すような仮定比誘電率に対応した探知レンジが設定されている。ブラウン管の縦軸は、深レンジで、120ns 幅の反射走時を表示しているが、探知レンジを設定すると深度表示（m）変換することができる。比誘電率は仮定しているので深度は正確ではない。

表1 主な物質の電気的特性

| 名称 | 比抵抗 ($\Omega \cdot m$) | 比誘電率 | 電磁波速度 (cm/ns) |
|--------|-----------------------------|------------|------------------|
| 空気 | — | 1 | 30 |
| アスファルト | ~ 1000 | 2.5~3.5 | 16~19 |
| コンクリート | ~ 100 | 3~ 9 | 10~17 |
| 土 | 礫質土 | 100~ 1000 | 9~ 14 |
| | 砂質土 | 50~ 400 | 11~ 18 |
| | シルト土 | 20~ 200 | 14~ 36 |
| | 粘 土 | 1~ 30 | 25~ 56 |
| 岩 | 砂 岩 | 200~ 1000 | 9~ 14 |
| | 石灰岩 | 2000~10000 | 6~ 11 |
| 水 | — | 3.2 | 17 |
| 水 | — | 81 | 3.3 |
| 海水 | 0.05 | 81 | 3.3 |

表2 探知レンジと比誘電率 (KSD-3AM)

| 探知レンジ 比誘電率 | 浅 | | 深 | |
|---------------|---------|---------|---------|---------|
| | 表示深度 | 深度スケール | 表示深度 | 深度スケール |
| (乾土) | | | | |
| 5.6 | 0~3.8 m | 1.0m毎 | 0~7.6 m | 2.0m毎 |
| 6.7 | 0~3.47m | 〃 | 0~6.95m | 〃 |
| 8 | 0~3.18m | 〃 | 0~6.36m | 〃 |
| 9.5 | 0~2.91m | 0.5m毎 | 0~5.83m | 1.0m毎 |
| 市街地 | 11 | 0~2.71m | 〃 | 0~5.42m |
| 13 | 0~2.49m | 〃 | 0~4.99m | 〃 |
| 16 | 0~2.25m | 〃 | 0~4.5 m | 〃 |
| 農 地 | 22 | 0~1.91m | 〃 | 0~3.83m |
| 32 | 0~1.59m | 〃 | 0~3.18m | 〃 |
| (湿度) | | | | |
| 81 | 0~1.00m | 〃 | 0~2.0m | 〃 |

2. 地中レーダ探査装置の概要

1. 探査機の構成概要

探査装置の構成は、図19に示すようにアンテナ部と送・受信部、表示部、記録部からなる。

受信アンテナ部の発信装置から指向性を持ったパルス状の電波を地中に発信すると、地下の電気特性が変化する境界面で電磁波が反射され、再び地表に戻ってくる。この反射波は、アンテナ部の受信装置により受信され、電気パルスに変換される。電波の送・受信10回毎に、受信パルス波を平均し、反射強度区分をおこない、区分別にカラー指示（8色）を行い、ブラウン管上の縦方向の1本の走査線として表示する。

1本の走査線は、256個の画素（ビット）で表わされる。

アンテナ部の車軸には、移動の距離を検出する“エンコーダー”が取付けられており、これから発信される距離検出パルスに同期して、一定距離間隔で送受信を繰り返す。このため、アンテナの移動線（測線）沿いの地下情報が連続的に表示される。横方向は、1画面あたり、256本の走査線で構成される。

したがって、地中レーダの画像は、横軸を水平距離、縦軸を反射走時（深さ）とした座標軸に、反射強度区分ごとに色別された縦横各256個の画素で構成されたものである。

処理された信号のデータは、データレコーダーに記録しておき、室内で再生でき、再生表示の映像を写真撮影し、その写真により解析を行う。

図20は、ディスプレイ（または焼き付けられた写真）の映像の見方を示すものである。

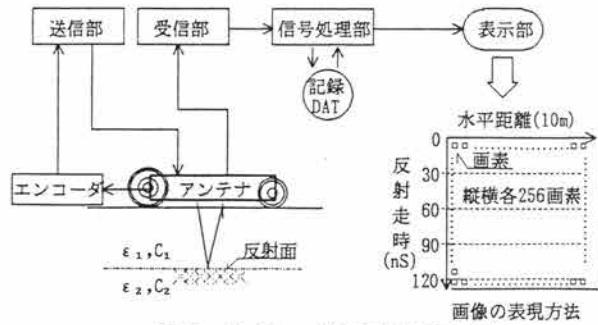


図19 地中レーダ探査装置概要図

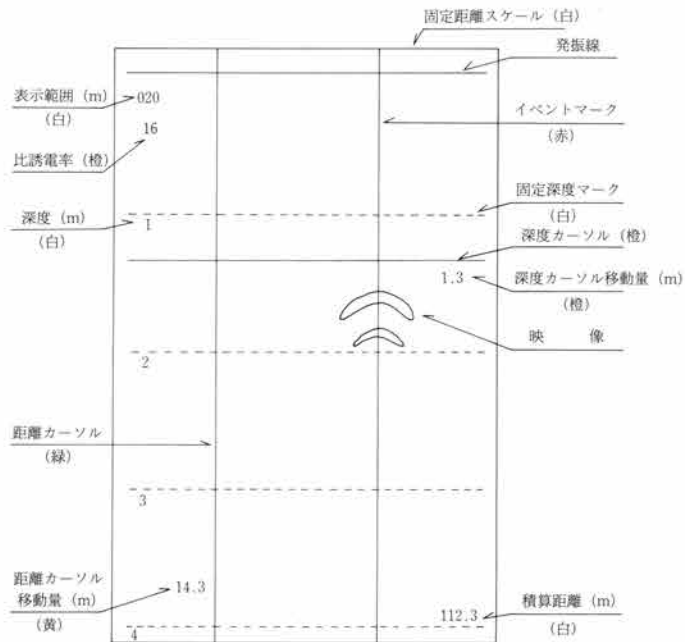


図20 CRT映像表示例

2. 主要性能および仕様

今回使用した地中レーダ装置の性能および仕様は、表3および表4に示すとおりである。

表3 主要性能

| | |
|----------|--|
| 探 査 深 度 | 2 m (max) アスコン45型 2層構造舗装下の関東ローム層中でのφ100mm鋼管が探知可能 |
| 分 解 能 | 水平 75cm (深度1.5mの100φの鋼管) 垂直 50cm (//) |
| 表 示 | アンテナ走査断面をカラーブラウン管に表示 |
| アンテナ走査速度 | 1.0m/s (max) |
| 電 源 | AC100V 50/60Hz 200VA |
| 周 囲 温 度 | -0°C+40°C |

表4 主要仕様

| | | |
|---------|------------------------------|---|
| 送 信 器 | 送信パルス 約150Vpp | 6 ns モノサイクルパルス 繰返し周波数 50KHz |
| 受 信 器 | 利 得 S T C | 55 d B ± 3 d B (可変) 22 d B ± 3 d B |
| サンプラー | 利 得 | 6 d B以上 |
| ビデオ増幅器 | 入 力 出 力 利 得 S T C | 10mVpp~10Vpp 20Vpp (max) 0~20 d B可変 0~40 d B // |
| 表 示 機 能 | 表 示 画素密度 映像同期 映像モード | 11インチ カラーブラウン管 8色 256ビット×256ビット アンテナ走査距離に同期表示又は 時間表示の切換 生データと処理データの切換表示 |
| 信 号 処 理 | 空間フィルタ法 差 分 法 | 水平距離方向のフィルタ 水平方向の固定エコー除去 |

VI 日本における地中レーダの開発と今後

昭和49年、東京電力土木本部の長坂は、米国土木誌エンジニアニュースレコードの中に次の様な記事を認めた。

それは、米国内にあるGSSI社の紹介というもので、次のように記載されていた。

「GSSI社の製作販売するUnderground Radarは、地下水及び水位、転石、鉱材、パイプ、土管、空洞の探知、また船で引いて湖底の測深などが可能である。」

送電ラインの地中化を進めようとする東京電力としては、地下埋設物の状況把握は、きわめて重要なことであった。長坂は、その手法の概要につき、資料を集め、研究した結果、我が国がその頃より急成長をしつつある、ハイテク分野の技術を利用して研究することにより、より高度なものを製作できるかもしれないと考え、社内答申した。これをうけ、東京電力総合研究所は、電気通信大学に外注依頼した。

電気通信大学の計測研究室教授鈴木務は、米国に渡り、マサチューセッツ工科大学をベースに文献などを調査し、開発が可能であることを知った。

東京電力総合研究所では、何社かへの打診において、応答のあった(株)光電製作所と開発を開始した。(株)光電製作所は、その前身を海軍の技術研究所の電波傍受分野に始まる海洋機器のメーカーであるが、技術本部長の田中は、以前、運輸省の要請により、滑走路下の地盤調査手法の研究を依頼され、超音波が利用出来ないか研究開発した経験がある。田中は、この種の作業の出来るこのシステムについて、興味を持った。

昭和51年、(株)光電製作所は、朝倉、堀田、野津、木下等を中心とする研究

開発チームをつくり、開発が開始された。しかし、最大の問題は、その基本的内容に踏み入る基礎データは、どこにも何もなかったのである。

この頃、土木現場においても、この種の機器の重要性が叫ばれるようになる。土木工事における埋設物事故の多発性は、その損害やトラブル問題から、各現場における最も頭の痛い事実であり、各建設関係者は、常にこの問題に良い方法を求めている。

(株)光電製作所の地中レーダ研究開発グループは、文献収集から基礎的な技術問題まで、まったくの手さぐりの状況の中で進んでいた。このため、電気通信大学鈴木、荒井による基礎論の確立も急がれ、検討会がくり返された。

昭和53年頃、山梨県上野原町にある(株)光電製作所上野原工場に実験のためのフィールドが完成した。そこには、東京電力の求めに応じた精度を確保するためのテスト埋設物が埋められてあった。

昭和54年、実験機による埋設物の探知に成功。

昭和55年、実用実験機の製作が開始された。

この頃、(株)光電製作所は、海洋開発機器の一つに、カラー魚群探知機の製作に成功し、業界に先駆け発表していた。そして、地中レーダにもこの技術が取り入れられた。それは、将来、カラーCRT映像などが、画像処理技術との関係から、切り離せないものとして考えられたからである。

昭和56年、カラーCRT、距離エンコーダー、画像処理CPUなど当時のハイテク機能を伴った実用実験一号機が完成、報告された。

しかし、その後、実用としての地中レーダの利用は、遅々として進まない。フィールド以外になると、データが何を意味するかよくわからないためである。

昭和58年、鹿島建設技術研究所松本、阿部、土弘、五十嵐のグループは、データが、それぞれの物体で特有の表現を持つことに着目、これをパターンと称し、パターン解析の基本データの収集実験を行った。その結果、複雑な日本の土質では、より多くの現場実証を行い、パターンの基本理論を作成することが、地中レーダの活用のための最短の道であることを報告した。それまで、波形解析を主体としたものから、全データの比較法やデータ図形の判読法で地中の状況を知る様になり、地中レーダ普及へとつながった。

しかし、波形解析、信号処理などの技術が無駄というわけではなく、今後、演算速度の速い小型コンピュータなどの発達と、多くの実証データの活用により、波形解析、信号処理は、重要性を増し、その発達により、データ判読や、地中状況図の作成は、人間の手を離れていくようになるであろうし、考古学分野へもその技術は急速に広まっていくと考えられる。

執筆者紹介

氏 名：渡 辺 広 勝
所 属：テラ・インフォメーション・エンジニアリング
連 絡 先：〒227 横浜市緑区桜台30-6
(045) 982-1776

〔1〕田篠中原遺跡の提起する諸問題

菊池 実
飯塚 聡

1 環状列石

群馬県内で検出された環状列石は、田篠中原遺跡で3例目であった。その後、2遺跡で検出され、また環状列石と考えられる遺構もあり、現在では6例になっている。時期別には中期前半1例(利根郡月夜野町十二原II遺跡)、中期末4例(吾妻郡中之条町久森遺跡、富岡市田篠中原遺跡、多野郡吉井町長根安坪遺跡、渋川市空沢遺跡)、後期1例(碓井郡松井田町行田II遺跡)である。

^{じゅうに はら}十二原II遺跡例⁽¹⁾は、二重の環状構造をとるものと思われ、長径22m、短径18mの範囲に礫が散漫的に配置されている。この礫の配置を子細に検討すると、内側と外側に配置された礫群に分解できる。内側は8×6m程の規模を有し、外側は22×18mの規模となっている。そしてこの配石間に焼土の堆積2カ所が認められた。いずれも1×0.65m程の範囲であり、掘り込みは確認できなかった。内側の配石には26号土壇(配石墓)が、外側の配石には屋外埋設土器が存在するなど、特徴的である。この配石遺構は北西部で途切れて、中期前半の居住域と結ばれているなど非常に興味深い構造となっている。そしてこの配石を取り囲むように縄文時代の土壇が存在することも重要な事実である。

^{くもり}久森遺跡例⁽²⁾は、推定直径40mと推定直径30mの二重の環状構造を呈している。列石は人頭大から拳大の安山岩礫を集めたものである。列石の構築時期は田篠中原遺跡と同時期の加曾利E3式期に求められる。調査は列石下までは及んでおらず、環状列石の性格を考えるうえで重要な役割を果たす土壇の有無については残念ながらわからない。ただし十二原II遺跡例や田篠中原遺跡例と同様に列石内に配石墓と屋外埋設土器を伴っている。列石間からは柄鏡形敷石住居跡3軒、円形の住居跡1軒が検出されている。

^{ながね あづま}長根安坪遺跡例⁽³⁾は、推定直径約15mの環状列石であり、多孔石・石皿・焼石等の礫を使用している。残念ながら複合遺跡のために列石の約1/2程は破壊されたものと思われるが、残存している列石下には直径約1.3m程の土壇群が存在している。これらの土壇内覆土は残存脂肪分析を実施しているが、考古学的所見からは墓壇と考えられるものであった。

^{からさわ}空沢遺跡例⁽⁴⁾は、列石が幅1m、長さ30mにわたり検出されている。加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡6軒との関連が考えられている。この列石は調査概報では石垣状遺構として報告されており、また多孔石・石皿は40個以上出土しているという。環状列石として把握して間違いないであろう。

^{おくなだ}行田II遺跡例⁽⁵⁾は、後期の環状配石墓群で3群検出されている。現在調査中の遺跡であり、詳細は不明である。

(1) 菊池 実編『三後沢遺跡・十二原II遺跡』1986(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(2) 丸山公夫編『上沢渡遺跡群』1985 中之条町教育委員会

(3) 『年報8』1990(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(4) 『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器、縄文)』1988 群馬県

(5) 『行田I遺跡・行田II遺跡 現地説明会資料』1989 山武考古学研究所

以上が、県内から検出された環状列石の概要である。中期前半に登場して、中期末段階では数を増している。これらの環状列石は孤立して存在するものではなく、縄文集落の中核・中枢として重要な意義をもつ円形広場として機能していたことがわかる。田篠中原遺跡の環状列石は、列石下の3基の屋外埋設土器の在り方から、加曾利E3式期の短期間で構築されたことがわかる。そしてこの列石の弧に沿うように同時期の敷石住居跡が環状に配置された集落構造をとることからも、列石のもつ意味は縄文人にとっては神聖なものであったのではなかろうか。ところがE4式期になると敷石住居跡は極端に列石に近接して構築されるが、その配置はE3式期とは大きく異なり、列石の東側には住居は構築されなくて、列石の中心から北西方向に集中していた。田篠中原遺跡ではE3式からE4式期になって集落構造が大幅に変わってくるが、これはまた列石（円形広場）に対する縄文人の意識の変化とも読み取ることができるであろう。

2 敷石住居跡

当遺跡からは中期加曾利E3式期の敷石住居跡7軒と同E4式期の敷石住居跡4軒が検出されている。時期決定については埋甕と炉体土器を基本とした。

| No. | 規模（ ）は現状 上段は主体部下段は張出し部 | 形態(推定) | 時期 | 炉 | 埋甕 | 列石の中心からの距離 |
|-----|------------------------------|--------|----|------|----------|------------|
| 1 | (2.75×2.0)m | (円形) | E3 | 石囲い炉 | 斜位 | 北東約66m |
| 2 | (1.65×1.30)m | (円形) | E3 | 地床炉 | 斜位 | 北東約56m |
| 5 | 3.70×3.5m | 円形 | E3 | 石囲い炉 | 逆位 | 北北西39m |
| 17 | (5.0×3.1)m | (円形) | E3 | 石囲い炉 | 不明 | 北北東59m |
| 36 | 2.6×2.6m 3.4×0.5m | 柄鏡形 | E3 | 石囲い炉 | 斜位 斜位 | 西南西101m |
| 37 | 4.0×3.7m 2.7×1.1m | 柄鏡形 | E3 | 石囲い炉 | 不明 | 南西118m |
| 38 | (4.6×4.0)m | (柄鏡形) | E3 | 不明 | 斜位 | 西115m |
| 8 | 2.4×2.3m | 柄鏡形 | E4 | 石囲い炉 | 斜位 | 北東25m |
| 23 | 3.0×3.0m 3.4×0.9m | 柄鏡形 | E4 | 石囲い炉 | 斜位 斜位 | 北西40m |
| 24 | 3.8×3.2m 3.4×1.2m | 柄鏡形 | E4 | 不明 | 斜位 斜位 | 北西43m |
| 26 | (3.4×3.3)m (1.4×0.6~0.8)m | 柄鏡形 | E4 | 埋甕炉 | 斜位 | 西北西47m |

E3式期の敷石住居跡を概観すると、柄鏡形を呈するもの2軒（36・37号配石遺構）、円形を呈するもの1軒（5号配石遺構）であるが、1・2・17号の配石遺構は円形の敷石住居跡である可能性が高く、38号は柄鏡形を呈する可能性が高い。結果的には円形4軒、柄鏡形3軒となり、E4式期の敷石住居跡がすべて柄鏡形を呈するのとは対照的である。当遺跡からはE3式期の円形の竪穴住居跡2軒が検出されていることを考えると、住居形態が円形竪穴住居跡から敷石住居跡へと変化する過渡的段階と判断することができる。すなわち5号配

石遺構は敷石住居跡の初源形態ととらえることができるのではなかろうか。

5号配石遺構は長径3.7m、短径3.5mのほぼ円形に石を巡らし、炉北側に部分敷石を施している。部分敷石の範囲は長径約1.5m、短径約0.8mであった。1・2号配石遺構が敷石住居跡と判断されたのも、実にこの部分敷石の状態であり、炉跡と埋甕の存在からであった。このほかに部分敷石をもつ遺構は、36号配石遺構に認められた。E4式段階の敷石住居跡には部分敷石は認められず、また主体部全面に敷石を施すことはない。

E3式期とE4式期の敷石住居跡に共通する要素としては、主体部を圍繞する縁石があげられる。E3式期では不明の3軒を除いた4軒に認められているが、縁石に使用した石は全体的には大小様々な石が選定されており、統一性はとれていない。しかしE4式期の敷石住居跡の縁石では比較的統一のとれた石を選定していることがわかる。張出し部の敷石については、E3式期・E4式期とも主体部の敷石に比べると明瞭であり、かなり意識的に構築されていることがわかる。また張出し部に立石を伴う住居跡がE3式期に1軒、E4式期に1軒確認された。

敷石住居跡からの出土遺物は、埋甕・炉体土器・土器片と石器類である。石器類では敷石住居跡全体で見つかった場合、多孔石38点(25.3%)、凹石29点(19.3%)、打製石斧21点(14%)、磨製石斧(成品)18点(12%)、磨石13点(8.7%)、石皿11点(7.3%)、磨製石斧(未成品)10点(6.7%)、砥石5点(3.3%)、敲石3点(2%)、丸石・台石各1点(各0.7%)であった。多孔石の出土状況の検討は、〔2〕出土石器の検討の項目中で述べているのでそちらを参照していただきたい。

3 配石遺構

当遺跡からは36基の配石遺構が検出された。各配石遺構からは縄文時代中期加曽利E3式土器片から同E4式土器片が出土している。配石遺構の時期決定については明確にすることは困難であったが、その主体となる土器片によって時期決定を行った。E3式期に構築され、E4式期まで機能し続けたと考えれば簡単であるが、実際には敷石住居跡にかぎってみても、E3式期とE4式期においては遺構配置に大幅な変更があることから、配石遺構についても同様な傾向を示すことが当然考えられた。しかし、埋甕や炉体土器を伴わないことから明確な分類は実施し得ず、主体となる土器片によって時期決定を行わざるを得なかったのである。その結果、E3式期の配石遺構は20基、E4式期の配石遺構は13基、土器片の出土がなくて時期を決定できなかった配石遺構は3基となった。

配石遺構の規模は、最小0.33m²、最大62.9m²であり、平均は15.4m²となった。時期別にみるとE3式期では0.66m²~2.7m²に5基、6.1m²~7.3m²に3基、10.7m²~11.2m²に4基と集中しており、15m²以上ではまばらであった。E4式期で

は最小2.6㎡、6.9㎡～8.2㎡の間に4基集中しており、18.6㎡以内に10基がまとまっている。E3式期に比べてやや大きな傾向にある。しかし使用石材の点数では、E4式期の配石遺構では1㎡あたりの点数は、一部を除けばE3式期よりも少ない傾向が認められた。

明らかに環状構造を意識して構築されている配石遺構には、4号・44号・50号の3基があげられる。4・44号の2基については2重構造が考えられた。これらの所属時期は加曽利E3式期である。半円構造をとる遺構には、6号・12号・40号の3基が認められた。これらの所属時期もE3式期である。他の配石遺構の形態はまとまりのないものであった。

配石遺構からの出土遺物は、土器片と石器に代表される。土器片の1㎡あたりの分布密度は、E4式期の配石遺構のほうがE3式期よりも高い。石器類では配石遺構全体をみると、多孔石39点(28.3%)、打製石斧36点(26.1%)、凹石26点(18.8%)、磨製石斧(成品)10点(7.2%)、磨石9点(6.5%)、磨製石斧(未成品)8点(5.8%)、石皿6点(4.4%)、砥石・敲石・丸石・台石各1点(各0.7%)の出土であった。これを時期別にみると、E3式期では多孔石25点(33.8%)、打製石斧21点(28.3%)、凹石10点(13.5%)、磨石6点(8.1%)、石皿4点(5.4%)、磨製石斧(成品)3点(4%)、磨製石斧(未成品)2点(2.7%)、敲石・丸石・台石各1点(各1.4%)である。これに対して、E4式期では打製石斧15点(25.9%)、凹石14点(24.1%)、多孔石11点(19%)、磨製石斧(成品)7点(12.1%)、磨製石斧(未成品)6点(10.3%)、磨石3点(5.2%)、石皿2点(3.4%)となり、石器含有率に変化が認められる。しかし、すでに5章〔2〕出土石器の検討のなかで述べたように、多孔石は配石遺構と関係のある石器と言え、多孔石に伴う祭祀が執行された場所が配石遺構であったと見ることができる。また焼石の混入率では、10%以上の混入が認められる配石遺構は9基であり、なかでも22号配石遺構のように30.7%と異常に高い配石遺構も認められた。しかし、全体的に見ると、敷石住居跡よりも焼石の混入率は低かった。

配石遺構を構成する石材の特徴は、片岩類が圧倒的に多く使用されているが、さらに片岩類は石墨片岩類の使用が緑泥片岩類の使用よりも高くなっている。48号配石遺構のように片岩類の使用が49.1%と低い以外は、大体60～70%の使用率であった。

4 埋 壙

11軒の敷石住居跡からは総計13個体の埋壙が検出されている。時期別にはE3式期の敷石住居跡からは7個体、E4式期の敷石住居跡からは6個体の出土であった。E3式期の埋壙は基本的に1個体であるが、36号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡)では主体部と張出し部の接続部から1個体と張出し部の先端部から1個体の計2個体が出土している。E4式期では1個体出土している住居跡

2軒、2個体出土している住居跡2軒であった。その埋設場所は接続部1個体（8号配石遺構）、張出し部先端部1個体（26号配石遺構）、張出し部先端部2個体（23号配石遺構）、接続部と張出し部先端部計2個体（24号配石遺構）と、統一性はない。しかしいずれも住居の出入り口部に該当する場所である。

埋甕の埋設状態は、逆位1個体、不明1個体、斜位11個体であり、圧倒的に斜位状態での出土が多かった。土圧等の影響で斜位になったものではなくて、意識的に斜位状態で埋設したことは調査から明らかであった。埋甕の欠損状態は、口縁部を欠損したもの6個体、胴下半分を欠損したものの3個体、口縁部と底部を欠損したものの2個体、底部だけのもの1個体、不明1個体となり、口縁部を欠損したものが全体の46.2%を占めていた。

埋甕について筆者は、かつて次の一文を記したことがある。『竪穴住居跡の出入り口部床面に埋設された転用土器の事例は、今日膨大な量の検出があり、東日本の縄文時代中・後期社会におけるきわめて普遍的現象と認められるに至っている。その用途をめぐり、胎盤などの後産を収納する施設、幼児などの埋葬遺骸を収納する葬棺施設、住居の新築・建替え時の儀礼に用いる施設等の諸見解があり、過去多くの研究者を論争の渦に巻き込んできた。1981年1月末日現在、木下 忠の集成によれば、北は青森県から南は静岡県に至る276遺跡1079例の住居内埋甕が確認されているが、人骨の検出は今もって皆無である。もちろん、胎盤などの後産も形骸を残さず腐食してしまっているであろうから、今後とも確認されるものではない』⁽⁶⁾。

(6) 菊池 実「甕棺葬」『縄文文化の研究9』1983 雄山閣出版株式会社

その後の状況は類例こそ増えているものの、用途論は決着をみていないようである。しかし最近、「残存脂肪分析法」が開発され、この分析法を用いて埋甕の性格、用途を解明できることがわかった。このため担当者間で協議して可能な限り分析を依頼することとなった。その結果、分析対象となった埋甕の個体数は6個体となった。もちろん総ての埋甕について分析を実施すれば良いわけであるが、予算の問題さらに土壌や屋外埋設土器についても実施したい意向があったために上記個体数となった。なお、分析土壌採取にあたっては、中野先生、長田所長の来跡、指導をうけた。分析結果は、4章〔1〕を参照していただきたいが簡単に表にまとめてみた。

| No. | 時期 | 個数 | 埋設場所 | 埋設状態 | 欠損状態 | 残存脂肪分析の結果(◎実施×不) |
|-------|-----|----|------------|----------|--------------|---------------------------------|
| 1号配石 | E 3 | 1 | 出入り口部 | 斜位 | 口縁部一部欠 | ◎ 動物遺体の埋葬 |
| 2号配石 | E 3 | 1 | 出入り口部 | 斜位 | 口縁部・底 | ◎ 高等動物の胎盤由来の遺物 |
| 5号配石 | E 3 | 1 | 出入り口部 | 逆位 | 胴部欠 | × |
| 8号配石 | E 4 | 1 | 接続部 | 斜位 | 口縁部・底部欠 | ◎ 動物遺体の埋葬 |
| 23号配石 | E 4 | 2 | 先端部 先端部 | 斜位 斜位 | 口縁部欠 口縁部欠 | ◎ 高等動物の胎盤由来の遺物 ◎ 動物性脂肪を検出できず |
| 24号配石 | E 4 | 2 | 接続部 先端部 | 斜位 斜位 | 口縁部欠 口縁部欠 | × ◎ 高等動物の胎盤由来の遺物 |
| 26号配石 | E 4 | 1 | 先端部 | 斜位 | 底部残 | × |

| No. | 時期 | 個数 | 埋設場所 | 埋設状態 | 欠損状態 | 残存脂肪分析の結果(○実施×不) |
|-------|-----|----|------------|----------|---------------|------------------|
| 36号配石 | E 3 | 2 | 接続部 先端部 | 斜位 斜位 | 胴下半部欠 口縁部欠 | × × |
| 37号配石 | E 3 | 1 | 先端部 | 不明 | 不明 | × |
| 38号配石 | E 3 | 1 | 先端部 | 斜位 | 胴下半部欠 | × |

6個体の埋甕の分析結果は、高等動物の胎盤由来の遺物3個体、動物遺体の埋葬2個体、動物性脂肪を検出できなかった埋甕1個体であった。高等動物の胎盤由来の遺物が検出されたことは埋甕の用途を考えるうえで大きな成果である。しかし同時に検出された動物遺体の埋葬は検討を要しよう。少なくともより明確にするためにも分析試料の増加が今後も望まれる。

5 屋外埋設土器

12基の屋外埋設土器（E 3 式期—10基・E 4 式期—2基）が検出されているが、このうち4基については残存脂肪分析を実施して、その用途解明にあたった。詳細は4章〔1〕を参照していただきたいが、以下簡単にまとめてみた。

| No. | 時期 | 埋設状態 | 欠損状態 | 残存脂肪分析の結果 |
|-----|-----|------|-------|--------------|
| 1 | E 3 | 逆位 | 胴下半分欠 | 高等動物の胎盤由来の遺物 |
| 3 | E 3 | 逆位 | 胴部欠 | 高等動物の胎盤由来の遺物 |
| 4 | E 3 | 逆位 | 胴部残存 | 高等動物の胎盤由来の遺物 |
| 6 | E 3 | 斜位 | 胴部残存 | 動物の脂肪を検出できず |

分析を実施した4例中3例の屋外埋設土器内部には、高等動物の胎盤由来の遺物が収納されていることが判明した。1号屋外埋設土器は環状列石下から検出され、3号は19号配石遺構に伴い、4号は単独の屋外埋設土器であった。いずれも逆位状態の出土であることに共通している。従来、堅穴住居跡の出入り口部に埋設された土器内部に胎盤を収納したものと考えられ、また当遺跡における分析結果もすでに記したが、今回の分析からは、さらに屋外埋設土器の用途にも確実に胎盤を収納したと考えられるものが存在しているという事実である。

『甕棺（内部から人骨の検出された土器）を除く屋外に埋設された土器は、東日本を中心に前期から晩期にわたり確認されている。単独出土のものもあれば、複数個体出土している事例もあり、その在り方は一様ではない。報告書を概観すると、その用途について、断定はさけながらも甕棺としての機能を報告者は考えているようである。しかし、近年宮城県登米郡青島貝塚例や福島県双葉郡道平遺跡例のように意識的に獣骨（イノシシ）を収納した事例も検出されており、今後、屋外埋設土器遺構に対する安易な断定は慎み、調査に慎重を期したい』⁽⁷⁾。

8年前に上記一文を記したが、田篠中原遺跡のように内陸部に位置している遺跡にあつては、内容物は検出されることはほとんどないし、今後も確認され

(7) 菊池 実『日本歴史地図 原始・古代編（上）埋甕』1982 柏書房株式会社

ることではないであろう。そこで住居内埋甕と同様に残存脂肪分析を実施したわけである。結果は予想もしていなかった胎盤収納という事実であった。この事実は、屋外埋設土器については甕棺、獣骨収納容器、胎盤収納などの様々な用途があることをわかり、今後も引き続き分析を実施して、その用途解明に当たらなければならないということである。

6 土 壌

総計22基の配石墓・土墳墓・土墳が検出されているが、このうち7基については残存脂肪分析を実施した。詳細は4章〔1〕を参照していただきたいが、以下簡単にまとめてみた。

| No. | 上面 (cm) (長径×短径) | 底面 (cm) (長径×短径) | 底面積 (㎡) | 残 存 脂 肪 分 析 の 結 果 |
|-----|--------------------|--------------------|------------|-------------------|
| 2 | (70× 51) | (42× 31) | 0.1 | 動物遺体の埋葬 |
| 3 | (100× 95) | (78× 75) | 0.5 | 動物遺体の埋葬 |
| 4 | (124× 105) | (103× 95) | 0.8 | 動物遺体の埋葬 |
| 5 | (100× 85) | (95× 75) | 0.6 | 動物性脂肪を検出できず |
| 6 | (80× 72) | (61× 54) | 0.2 | 再葬墓の可能性が高い |
| 9 | (128× 95) | (91× 51) | 0.6 | 動物遺体の埋葬 |
| 10 | (103× 98) | (91× 78) | 0.4 | 再葬墓の可能性が高い |

分析の結果、7基の土墳のうち4基には動物遺体が埋葬されていたと推測されたが、動物種とくにヒトの認定については、残念ながら判定はできなかったということである。しかし考古学的所見からは、2号土墳については抱石葬を想定でき、3号土墳上には墓標である多孔石が配置されているなど動物遺体の埋葬といっても、それがヒトであることには間違いのない事実であろう。5号土墳は掘り込みが浅く、また覆土中に炭化物粒子が多量に認められたことから墓墳の可能性は考えられなかったが、分析結果も動物性脂肪を検出できず、考古学的所見が正しいことも立証された。6・10号土墳は再葬墓の可能性があると指摘された。再葬とは、遺骸を一旦埋めるか、風雨にさらす死体処理の葬法があり、生体や軟部の腐敗したある時期、または完全に白骨化したある時期を経過した後、骨を取り出し再びこれらの骨を容器などに収納安置する遺骸処理の葬法であり、ただ一回の葬時で完結するものではない。洗骨葬・改葬などの語とあまり区別されないで、また互換的に用いられている。現在確認できる最古例は、埼玉県入間市坂東山遺跡例で、これは後期初頭の称名寺式土器内に熟年期の男性骨が収納されていたものである。容積の面から、また人骨の出土状況からみても、再葬手段によるものであることが看取されたものであった。6・10号土墳の分析結果は、縄文時代中期にも再葬墓は確実に存在していることを裏付け、またその葬法にあたっては土墳を使用していることが認識された。甕棺を使用していないために、これにかわる木製の容器等の使用があったかもしれないが、調査から確認されるものではなかった。6・10号土墳は縄文時代の

ごく一般的な土壌と判断されるが、人骨の検出が不可能な地域にあっては積極的に残存脂肪分析を進めて行かなければ、単なる土壌と処理され、あまり意味のない調査となってしまう恐れがある。

分析土壌を含めた土壌22基の分布は、2基の土壌を除いた20基が環状列石外に分布している。墓塚についてみると18基のうち16基が環状列石外の分布となり、明らかな墓域は列石外に構築されていることが理解できる。環状列石に伴う墓塚2基の様相は、8号土壌が環状列石下から検出され、墓標は列石に連なっていた。22号土壌は列石内から検出されたが、規模の大きな配石墓であった。一般的な墓塚とは異なり何らかの象徴と考えられるが、これら2基から環状列石は墓地遺構であると断定することは不可能であった。

おわりに

時間的・紙数の制限から当遺跡の性格を十分に深めることはできなかった。担当者としては残念に思う。今後、個々の問題については別稿を準備して担当者としての責をはたしたいと考えている。大方の御教示をお願いするしだいである。

〔2〕 出土石器の検討

— 多孔石・凹石・石皿・磨石を中心として—

菊池 実

はじめに

田篠中原遺跡からは多量の石器類が出土している。このほかに環状列石、敷石住居跡、配石遺構を構築している多量の石材も出土しており、その総点数は17,255点に達している。配石遺構等構築の石材についての検討は別稿に譲り、ここでは当遺跡出土石器を代表するところの、多孔石・凹石・石皿・磨石について、簡単に検討を加えてみた。

(1) 多孔石

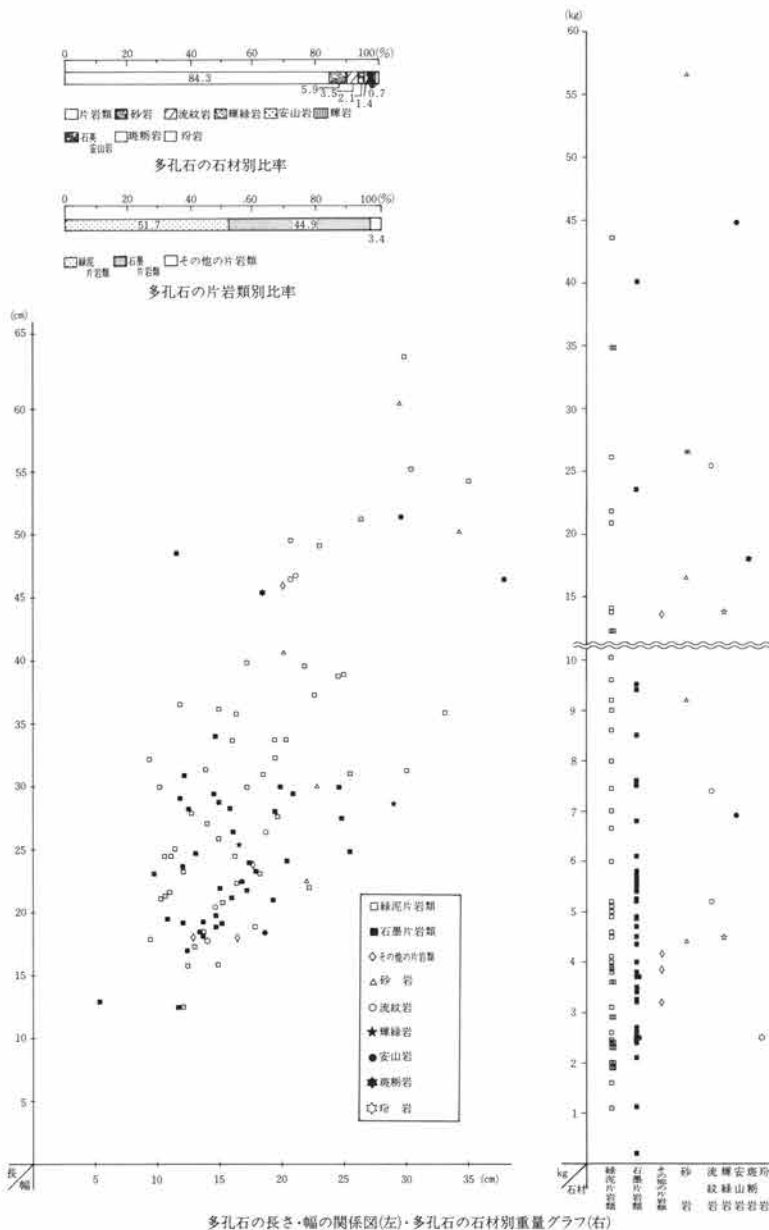
多孔石は140点出土した。遺構別の出土点数は、環状列石15点(10.7%)、立石2点(1.4%)、敷石住居跡38点(27.1%)、竪穴住居跡12点(8.6%)、配石遺構39点(27.9%)、屋外埋設土器4点(2.9%)、土壇9点(6.4%)、廃棄場所7点(5%)、グリッド14点(10%)である。

敷石住居跡38点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から25点、同E4式期の敷石住居跡から13点である。また竪穴住居跡からは12点の出土があるので、E3式期の住居跡からは合計37点の出土となる。配石遺構出土の39点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から25点、同E4式期から11点、中期末3点である。

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計50点出土しているが、平均では1軒から3.8個の多孔石が出土していることになる。配石遺構では平均1.08個の出土となり、住居跡では配石遺構の約3.5倍の出土率となっている。しかし、これは他の石器の出土率(凹石約8倍、石皿約6.4倍、磨石約3.9倍)と比べると僅差であり、また配石遺構36基中23基の配石遺構から出土していることを考えると、多孔石は配石遺構と関係にある石器と言える。多孔石の出土していない配石遺構をみると、小規模な遺構(10・13・15・41・43・49号)であったり、環状列石の張出し部(7号)に該当すると考えられる遺構である。また14・16号配石遺構からは石皿が出土している。このような事実はより一層、多孔石を配石遺構と結びつける根拠にもなるであろう。

では、住居跡からはどのような状態で出土しているのだろうか。敷石住居跡から出土した38点の内訳は、縁石として使用されているもの17点、部分敷石に使用されているもの7点、張出し部に使用されているもの6点であり、計30点の多孔石が敷石住居跡の構成石として転用されている。このほかに炉石として転用されているもの1点がある。特殊な出土状況をしているものに37号配石遺構(第116図-9)の多孔石1点がある。丸石(流紋岩)に4個の凹みを有するもので、張出し部の西に意図的に配置されていた。何らかの指標になっていたものであろう。一方、竪穴住居跡からの出土は覆土中のものであるが、2号竪穴

5章 成果と問題点



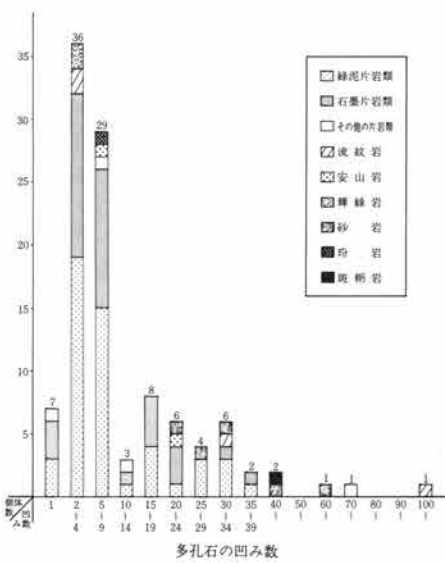
住居跡の多孔石の出土状況には興味深いものがある。ほぼ床直上に円形状の石の分布が認められるが、その縁石部分に多孔石の出土が認められるからである。敷石住居跡の縁石に転用されている多孔石が多いことを考えると、今後、敷石住居跡出現前の様相を理解する遺構として検討して行かなければならないであろう。

環状列石出土の多孔石はいずれも大型であり、基本的には列石の指標の石となっている。土壌出土の多孔石は、墓標として使用(3・18・19号)されたり、また配石墓の石として使用(22号)されている。

このように出土状況を検討してみると、多孔石は配石遺構での使用を原則とし、そこで執行された何らかの祭祀活動に伴う祭祀具とみることができる。そして敷石住居跡の構成石にも多数転用されていることを考えると、その構築にあたっては少なからず、多孔石に伴う祭祀が反映されているものとなろうか。

さらにまた土壌の墓標となっている事実は、土壌内に埋葬された人物の生前における活動を反映しているものであろうか。今後さらに類例を集めて検討していきたい。

多孔石の大きさは、最大のもので長径64.2cm、短径29.8cm、厚さ13.7cm、重量43,600g。最小は長径12.9cm、短径5.3cm、厚さ1.8cm、重量200gであり、平均値(完形・ほぼ完形から算出)は長径29cm、短径17.6cm、厚さ9.7cm、重量8,911gである。完形品は140点中106点(75.7%)、破損品は34点(24.3%)であり、完形品の占める割合が高い。凹みの数は最大102個、最小は1個であり、平均は12.3個。9個までのものが71点であり、全体の50.7%を占めている。50個以上の凹みを有するものは極僅かであった。凹みの長径は平均17mm、短径14mm、深さ5mmで逆円錐状である。



〔2〕 出土石器の検討

使用石材は片岩類118点(84.3%)、砂岩8点(5.7%)、流紋岩5点(3.6%)、輝緑岩3点(2.1%)、安山岩2点(1.4%)、輝岩・石英安山岩・斑縞岩・玢岩各1点(各0.7%)である。片岩類の使用が圧倒的に多いが、これはさらに緑泥片岩類61点(51.7%)、石墨片岩類53点(44.9%)、その他の片岩類4点(3.4%)に分類できる。個々の石材では点紋緑泥片岩51点、絹雲母石墨片岩44点となっている。緑泥片岩類は凝灰質岩の中程度変成作用を受けた岩石である。緑泥石が石英の石基に混在する緑色で片理構造がよく発達し、薄くまた厚く板状である。産地は三波川結晶片岩の分布する地域に、石墨片岩類と接して産出するもので、雄川、下川、野上川、鎗川の流域にみられる。石墨片岩類は粘土質岩の変成岩であり、暗黒灰色で節理がよく発達している。産地は雄川や下川上流域である。緑泥片岩類・石墨片岩類の採取地は雄川の河原であろう。

(2) 凹石

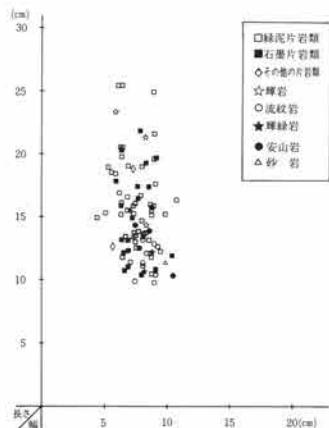
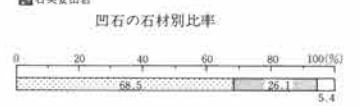
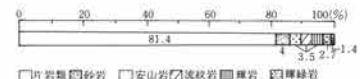
凹石は113点出土した。遺構別の出土点数は、環状列石17点(15%)、敷石住居跡29点(25.7%)、竪穴住居跡9点(8%)、配石遺構26点(23%)、屋外埋設土器4点(3.5%)、土壌1点(0.9%)、廃棄場所4点(3.5%)、グリッド23点(20.4%)である。

敷石住居跡出土の29点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から15点、同E4式期の敷石住居跡から14点である。また竪穴住居跡からは9点の出土であるから、E3式期の住居跡からは合計24点の出土となる。配石遺構出土の26点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から10点、同E4式期から14点である。

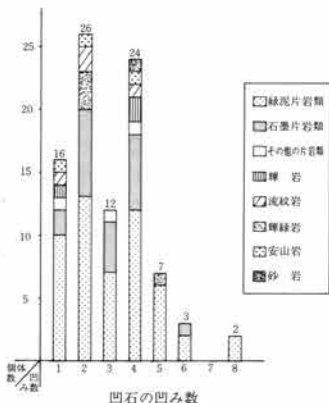
敷石住居跡と竪穴住居跡から合計76点出土しているが、平均では1軒から5.8個の凹石が出土していることになる。配石遺構では平均0.72個の出土となり、住居跡では配石遺構の約8倍の出土率となっている。多孔石の出土率とは大きく異なっている。凹石が殻果類、特にクルミの破砕具としての機能をもっていたものであることを考えると、日常生活の場である住居跡からの出土は当然であり、配石遺構からの出土が少ないのは、配石遺構が日常生活の場として常時機能していなかったことを反面裏付けていることになる。

凹石の大きさの平均値(完形・ほぼ完形から算出)は、長径15.1cm、短径8.5cm、厚さ3.8cm、重量634gである。完形品は113点中90点(79.6%)、破損品は23点(20.4%)であり、完形品の占める割合が高い。また凹みの数は最大8個で、2個と4個の凹みをもつものが多く、平均は3個となった。

使用石材は、片岩類92点(81.4%)、砂岩5点(4.4%)、安山岩・流紋岩・輝岩各4点(各3.5%)、輝緑岩3点(2.7%)、石英安山岩1点(0.9%)である。片岩類では緑泥片岩類63点(68.5%)、石墨片岩類24点(26.1%)



凹石の長さ・幅の関係図



1%)、絹雲母片岩類5点(5.4%)であり、点紋緑泥片岩の占める割合が高かった。点紋緑泥片岩は緑泥片岩に曹長石の白っぽい点紋を混在する岩石である。これらの石材は雄川から採取したものであろう。

(3) 石皿

石皿は30点検出された。遺構別の出土は、環状列石5点(16.7%)、敷石住居跡11点(36.7%)、竪穴住居跡3点(10%)、配石遺構6点(20%)、土壇1点(3.3%)、廃棄場所2点(6.7%)、グリッド2点(6.7%)である。

敷石住居跡出土の11点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から7点、同E4式期の敷石住居跡から4点である。また竪穴住居跡からは3点の出土があるので、E3式期の住居跡からは合計10点の出土となる。配石遺構出土の6点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から4点、同E4式期の配石遺構から2点である。

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計14点出土しているが、平均では1軒から1.08個の石皿が出土していることになる。配石遺構では平均0.17個の出土となり、住居跡では配石遺構の約6.4倍の出土率となる。石皿は磨石との併用によって、主として植物性食糧の圧潰・破碎・粉化等に使用されたことを考えれば当然の結果であろう。しかしその出土状況を検討すると、2次的使用(転用)を思わせるものが多数ある。環状列石の指標となっている石皿2点、列石内から3点、敷石住居跡の縁石として転用されているもの6点、張出し部敷石として転用されているもの1点などがあり、本来の使用目的後の転用率は非常に高い。このことはまた破損品が30点中24点(80%)占めていることと関係しているであろう。すなわち、石皿の転用にあたっては土器の転用と同様に意図的に欠損されたとみることができる。

使用石材は片岩類20点(66.7%)、砂岩10点(33.3%)である。片岩類はさらに緑泥片岩類17点、石墨片岩類3点に分けられ、点紋緑泥片岩の使用が15点と圧倒的に多かった。また砂岩が特徴的に使用されていることも石器使用本来の目的と合致するものである。砂岩の産地は、当遺跡の南部で三波川結晶片岩と断層で接する地域に分布するのが顕著で主な産地であり、雄川にも転石が得やすい。

(4) 磨石

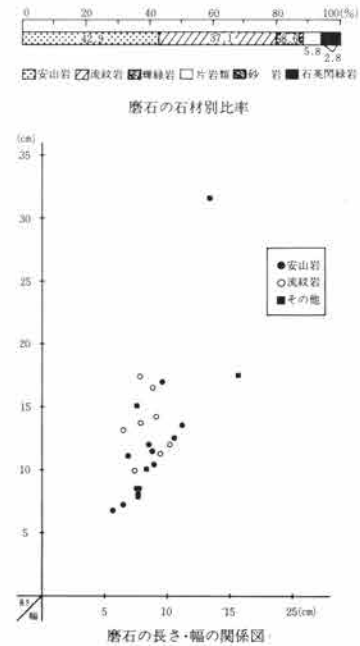
磨石は35点検出された。遺構別の出土は、環状列石3点(8.6%)、敷石住居跡14点(40%)、竪穴住居跡1点(2.9%)、配石遺構10点(28.6%)、土壇3点(8.6%)、廃棄場所2点(5.7%)、グリッド2点(5.7%)である。

敷石住居跡出土の14点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から8点、同E4式期の敷石住居跡から6点である。配石遺構出土の10点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から6点、同E4式期から3点である。

〔2〕出土石器の検討

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計14点出土しているが、平均では1軒から1.08個の磨石が出土していることになる。配石遺構では平均0.28個の出土となり、住居跡では配石遺構の約3.9倍の出土率となる。しかしこれには凹石のなかに磨石として利用されたものは除外してあるので、実際は4倍以上の差となる。磨石が植物質食糧の処理・加工具としての機能をもっていたものであることを考えると、日常生活の場である住居跡からの出土は当然であり、配石遺構からの出土が極端に少ないのは、凹石の出土傾向と同様に配石遺構が日常生活の場として常時機能していなかったことを反面裏付けていることになろう。

磨石の大きさの平均値は、長径12cm、短径8.5cm、厚さ5.3cm、重量879gであった。使用石材は安山岩14点、流紋岩13点、輝緑岩3点、片岩類2点、砂岩1点、石英閃緑岩1点であり、安山岩と流紋岩を基本石材としている。加曽利E3式期とE4式期による石材の変化は認められない。安山岩や流紋岩の利用度が高いのは、物理的にも強く、表面がザラザラしている性質が評価されたためである。安山岩・流紋岩の産地は鎗川上流及び南牧川の上流域であり、遺跡からは最短距離にして北800mのところを鎗川が東流している。遺跡の東を流れる雄川や西を流れる下川から運び込んだり、また鎗川からも運び込んだ石材である。



おわりに

以上簡単ではあるが、当遺跡から出土した多孔石・凹石・石皿・磨石について、その概略を記した。このほかにも打製石斧150点、磨製石斧81点、砥石6点、敲石4点、丸石9点、石棒1点、台石2点、立石・墓標の石等が出土している。打製石斧・磨製石斧については桜井美枝氏が検討しているので、それを参照していただきたい。また他の石器については、今回報告した石器を含め再度詳述したいと考え、現在別稿を準備中である。

〔3〕 田篠中原遺跡出土石斧について

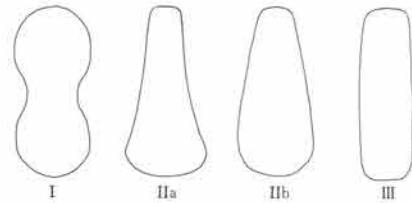
桜井美枝

田篠中原遺跡からは、打製石斧150点、磨製石斧81点が出土した。以下に打製・磨製石斧のそれぞれについて、その特徴をしるす。

1) 打製石斧

全150点を主に平面形によって4種類に分類した(第1図)。

I類：いわゆる分銅形。石器のほぼ中央部にえぐりが入る。大多数のものは両側縁にえぐりが入るが、一部片側のみのもこの類型に入れた。II類：いわ



第1図 打製石斧分類概念図

ゆる撥形。側縁の状況によって二分し、側縁が内湾するものをII a類、直線状のものをII b類とする。III類：いわゆる短冊形。基部から刃部まで幅がほぼ一定で、平面形が長方形を呈する。いずれにおいても直刃・凸刃のものがあつた。各類型の内訳は、I類51点、II a類33点、II b類49点、III類17点である(第2図)。

各類型の調整加工の特徴を記すと、I類は周辺のみ調整が施されるものが多い。特に、I類に多用される片岩類の石材のものは、その傾向が顕著である。また片岩類の石材は、片状組織を持つため⁽¹⁾剝離が板状の片理に沿って進み、ステップ状の剝離痕を呈するものが多い。片岩類以外の石材のものは比較的調整の頻度が高く、粗い調整によって全体の形を整えた後、細かな調整をほぼ全周に加えている。刃部・えぐり部ともに平坦剝離による調整で、ブランディング状の調整は見られない。II・III類については片岩類以外の石材が多く、調整の頻度が高いものが多い。I類と同様、大まかに調整を加えた後細かな調整によって仕上げているが、刃部や基部よりも側縁部により細かな調整が加えられる例が多く、平坦剝離が多用される。また、各類型とも片岩類以外の石材のものについても、両面もしくは片面に素材となった礫や剝片の自然面や主要剝離面を残すものが見られ、概して両面全面に加工が及ぶものは少ない。

参考文献

- (1) 柴田秀賢・須藤俊男「原色
鉱物岩石検索図鑑」1964
北隆館

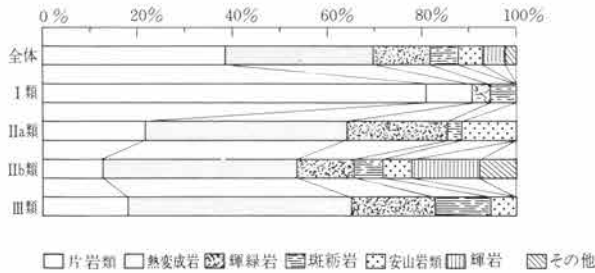


□ I類 □ IIa類 ▨ IIb類 ▩ III類

第2図 打製石斧類型組成

| | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 長幅比 |
|------|--------|-------|--------|-------|-----|
| 全体 | 14.3 | 6.8 | 2.3 | 316.5 | 2.1 |
| I類 | 15.9 | 7.4 | 2.2 | 371.8 | 2.2 |
| IIa類 | 13.8 | 6.8 | 2.4 | 320.3 | 2.1 |
| IIb類 | 12.6 | 6.6 | 2.3 | 259.6 | 2.0 |
| III類 | 14.4 | 5.7 | 2.2 | 269.6 | 2.5 |

第1表 打製石斧計測値平均



完形のものについては、長さ・幅・厚さ・重量・長幅比について比較を行った(第1表)。長さ・幅・重量については平均値でI類が最も大きく、比較的大形のもの割合が高い。一方厚さではI類がIII類と並んで最も小さな値となり、分布のピークも1.5~2.0cmと最小値となる。周辺みの調整加工が多いというI類の特徴から考えて、この厚さに見られる特徴は石斧の素材となった板状礫や剥片・礫の特徴であり、従ってI類の素材としては、他の類型に比べ若干薄手のものが選択されたと考えられる。この理由としては、I類の素材に多用されている片岩類の石材が、片状組織が顕著なため器体の全面を覆い厚みを減じよう調整加工に不向きなため、あらかじめ薄手の素材を選択したり、機能的な面からより薄い形態が必要とされたことなどが推測される。長幅比は、III類が平均値で最大で分布も比較的大きな値を取り、他に比べて細長い傾向が見られる。ただし、かねてから指摘されているように、石斧においては刃部再生や破損後の再調整などの工程が普遍的に見られ、製作から使用・廃棄にいたるまでのどの段階にあるかによって形態にかなりの差が見られる⁽²⁾。従って、III類の細長の傾向が本来的な特徴であるかどうかはなお検討を要する。

使用石材については、I類と他の類型との間で顕著な差が見られる(第3図)。I類は片岩類の石材が圧倒的に多く、次いで熱変成岩、斑禰岩、輝緑岩となっている。II・III類は熱変成岩が4割以上を占め最も多く、片岩類の石材は1~2割にすぎない。以下輝緑岩・斑禰岩・安山岩(玻璃質安山岩を含む)などが使用されている。

以上、各類型の特徴を見てきたが、最も顕著な差が見られたものは使用石材についてである。先述したとおり、片岩類の石材は片状構造を持つため片理の方向に沿って剥離が進行しやすく、それ以外の方向には割れにくい。一方熱変成岩は比較的均質・緻密で、剥離の進行が節理や夾雑物によって阻害されるこ

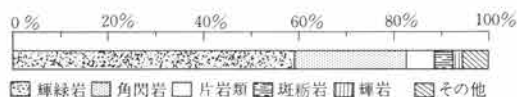
(2) 長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧一形態変化論を視点として」『先史学研究』3 1990 阿佐ヶ谷先史学研究会

とが少なく加工しやすい。この石材の性質は、調整加工の特徴にそのまま現われており、片岩類の石材においては周辺加工のみで調整の頻度が低く、熱変成岩では調整の頻度が高い。すなわち、各石斧の調整加工の特徴は、使用石材によってある程度決定づけられている。それでは、なぜⅠ類と他の類型の間で使用石材に差が見られるのであろうか。Ⅱ・Ⅲ類の石斧は比較的平面形が整ったものが多いが、Ⅰ類ではえぐり部を除いてかなりのバラツキが見られる。このことから、Ⅰ類においてはⅡ・Ⅲ類に比べ平面形に対する規制が弱かった可能性が考えられる。もしそうであれば、素材の形態を大きく変える必要の無いⅠ類の素材として、細かな調整は加えにくい、遺跡周辺に普遍的に存在する片岩類の石材が多用されたと推測できる。もちろん、石材の選択については、機能的な面から硬度や比重なども吟味されたと考えられるが、調整を行う上での石材の特性も大きな条件になったであろう。以上のことから、田篠中原遺跡の打製石斧については、機能的・技術的な面から、類型ごとに石材の選択が行われていたものと思われる。

2) 磨製石斧

全81点のうち、一部でも磨かれた面を持つものは23点のみである。他のものは研磨面を持たないが、石材や形態の特徴などから製作途中の未製品であると考へて、磨製石斧に分類した。全点を粗割→敲打→研磨という製作工程に沿って、以下の6段階に細分した。①粗割途中：粗割によって形を整えている途中のもの。②粗割段階：粗割が完了した状態。完成品の形態に近い。③敲打途中：敲打によって形を整えている途中のもの。粗割した面をかなり残す。④敲打段階：ほぼ全面に敲打を加えた状態。⑤磨き途中：研磨によって仕上げている途中のもの。研磨面が全面に及んでいない。⑥磨き段階：ほぼ全面に研磨が施されたもの。完成品。各段階の内訳は、①：20点、②：18点、③：12点、④：8点、⑤：11点、⑥：12点である。ここで問題になるのは、粗割段階のものと打製石斧との区分であろう。両者とも剝離によって形づくられているが、打製石斧の厚さが平均2cm強であるのに対し、粗割段階としたものは2～7、8cmと厚く、調整もより粗いことを基準として分類した。また、石材も打製石斧が片岩類や熱変成岩が多いのに対し、磨製石斧は輝緑岩・角閃岩などが使用されていることなども考慮した(第4図)。

これらから、当遺跡における磨製石斧の製作工程について記す。まず素材であるが、粗割途中のものにかなりの割合で自然面が見られることから、礫もしくは分割礫が利用されているようである。それらを粗い剝離によって形を整えた後、全面に敲打を施している。その後研磨を行い、一部に敲打痕・剝離痕を残すが、ほぼ全面が磨かれる。



第4図 磨製石斧石材組成

写 真 图 版

PLATES



航空写真

○田篠中原遺跡





PL. 2
航空写真(遺跡上空から撮影)

PL. 3
航空写真(東から)

航空写真の撮影は、ヘリコプターとセスナ機を使用して、調査の進展に伴い随時実施した。低空からの撮影ではヘリコプターを使用し、高高度からは、セスナ機使用を基本とした。





PL. 4

1. 航空写真(西から)
2. 航空写真(南から)

PL. 5

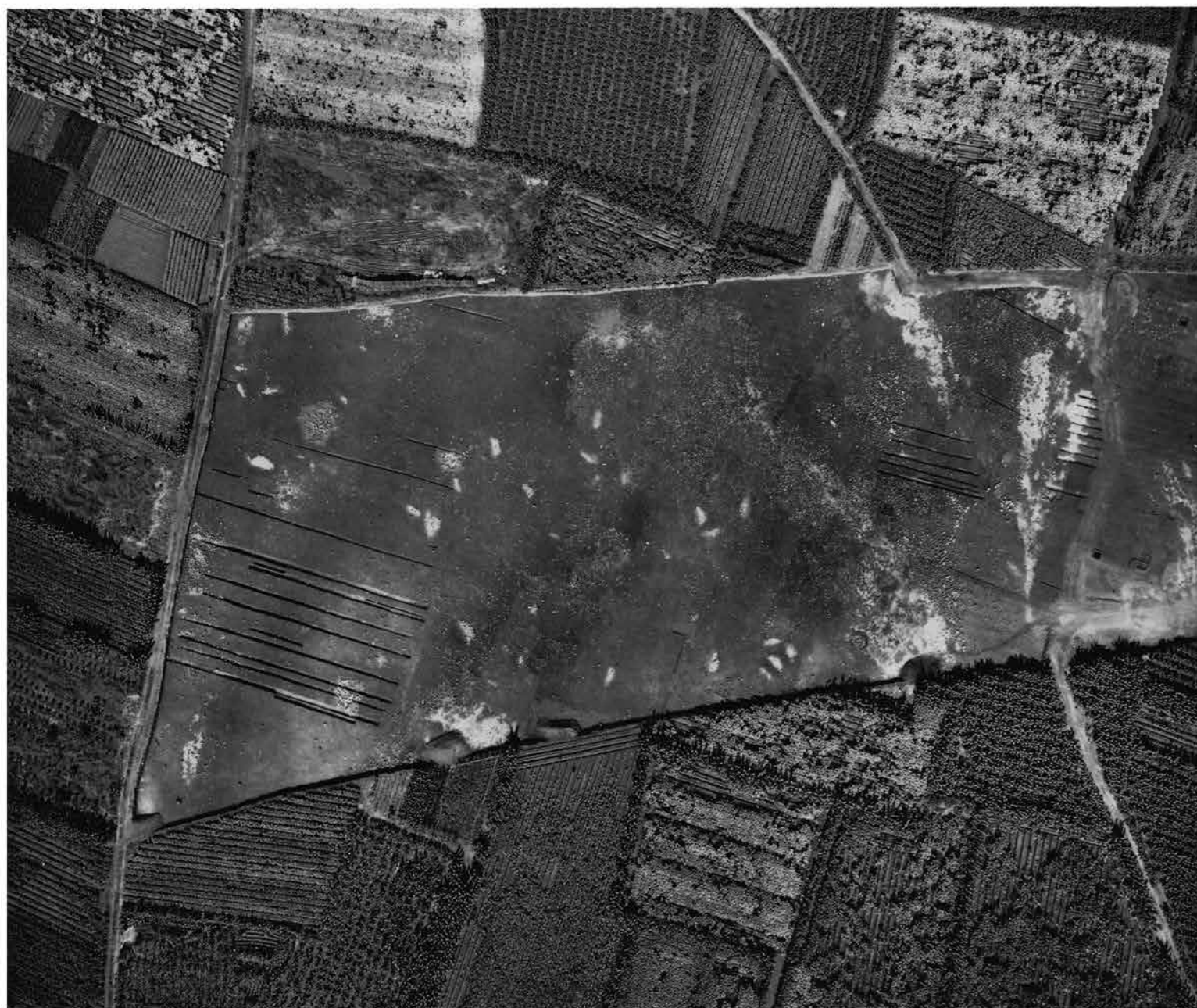
1. 航空写真(北から)

PL. 4-1は内匠丘陵上空から雄川方面を望み、同2は錦川を望んでいる。遺跡は雄川扇状地の扇尖部に位置しており、北からこの扇状地を撮影したのがPL. 5-1である。



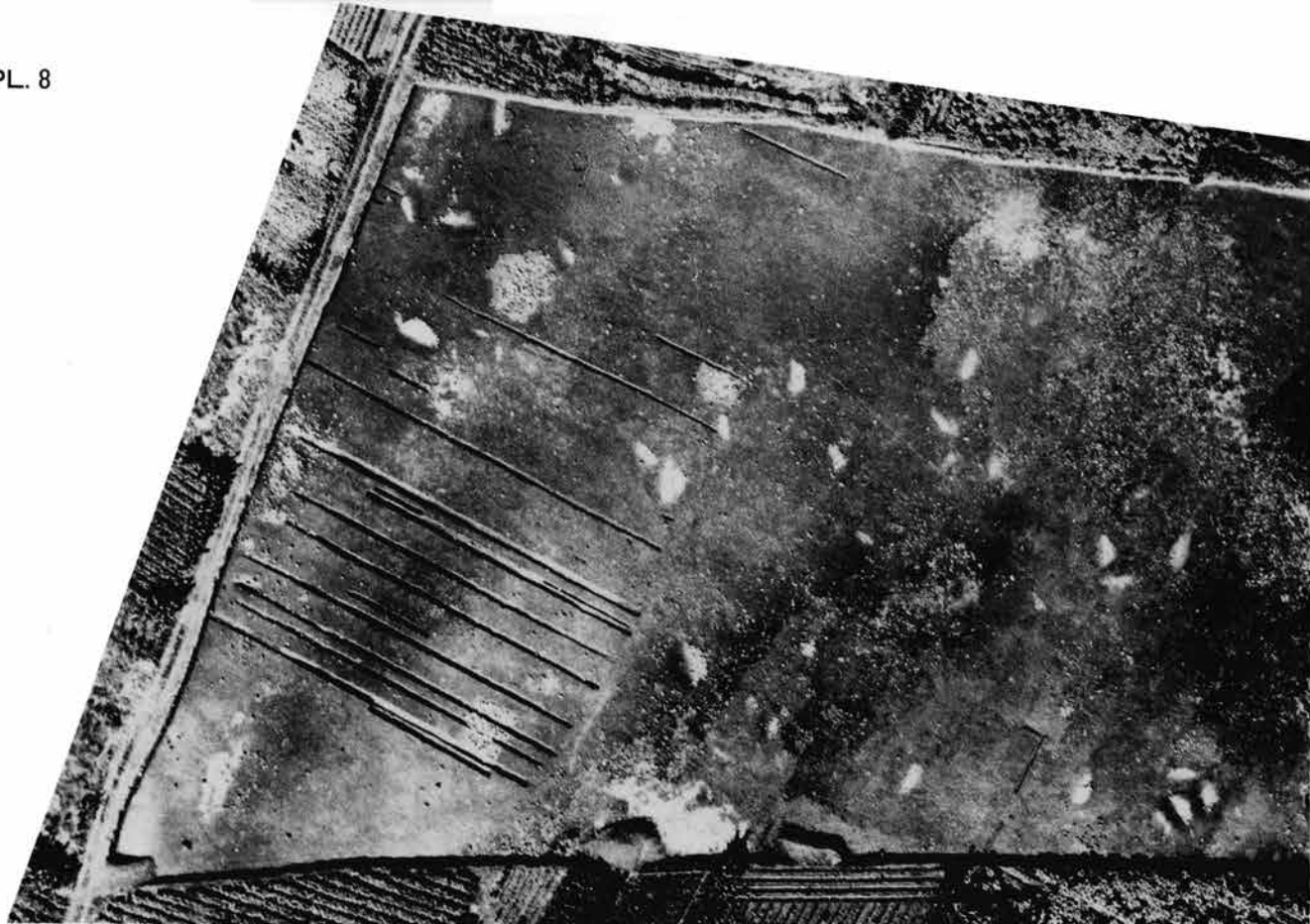
Ⅰ区全景(東から)

Ⅰ区調査区は昭和61年5月から62年3月まで調査を実施した。調査区西側は0区(昭和62年度調査区)にあたる。背後の丘陵は内匠丘陵で、丘陵上には内匠上ノ宿遺跡が調査されている。



〇区全景(上空から)

〇区調査区は昭和62年4月から同年12月末日まで調査を実施した。写真右側にⅠ区調査区が埋め戻されている。Ⅰ区・〇区の調査総面積は約15,800㎡である。



PL. 8-1 と PL. 9-1 はモザイク写真



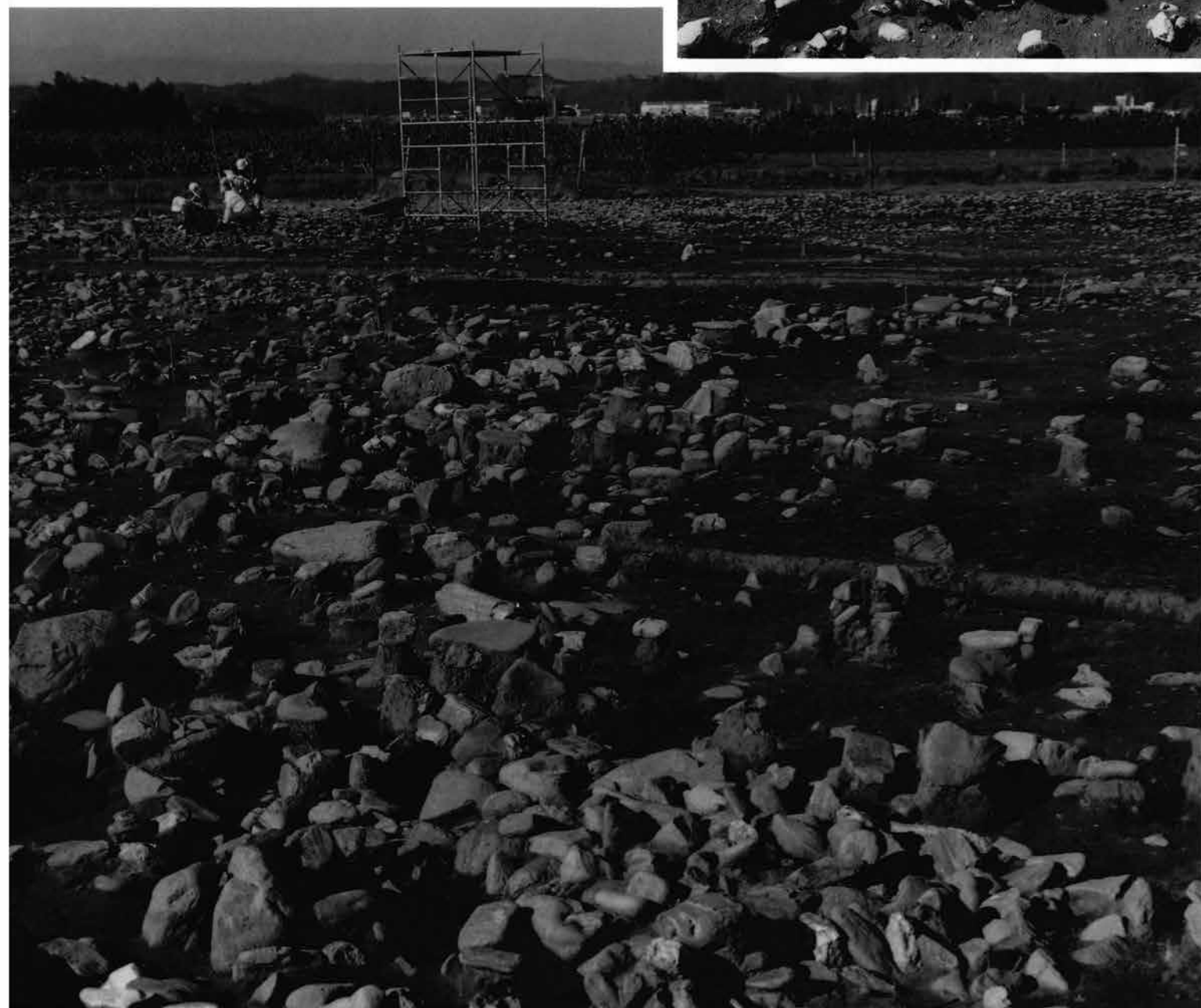


PL.10

1. 環状列石(北東から)
2. 環状列石(北から)

PL.11

1. 調査スナップ(列石の石を囲んで)
2. 環状列石(南から)



径約38mの環状列石であるが、列石の明瞭な部分はFj-44、FK-44・45・49、Fi-46・47・48グリッドにかけてであり、実際は弧状列石として理解できるものである。従来環状列石として把握されているものも石の分布に濃淡があることから構築当初からのものと理解してよいのかもしれない。
(本文PP.23-46)



1. 環状列石の部分(南東から)
2. 環状列石の部分(東から)
3. 環状列石の部分(北東から)



2



列石を構成する石の中でも指標となる石には大石が使用され、また一定間隔で配置されている。これらの石の最長間隔は3.7m、最短間隔は1mで、平均間隔は2.11mであった。これらの石の重量は一番軽いもので約17kg、最大重量は60.5kgであり、平均は約40kgとなった。

3



1



2



3



4



5



6

1. 環状列石の部分(北東から)
2. 環状列石の部分(北東から)
3. 環状列石の部分(北東から)
4. 環状列石の部分(北東から)
5. 環状列石の部分(北東から)
6. 環状列石の部分(北東から)

列石を構成する石の総てを取り上げて石材鑑定と石材重量の測定を実施した。石材は49種類確認され、絹雲母石墨片岩が30.5%を占め、500g未満の石が48%を占めていた。列石中には石皿5点、多孔石15点、凹石17点、磨石3点、打製石斧10点、磨製石斧4点、丸石2点が含まれていた。



1. 立石(北から)
2. 立石復元写真(北東から)

環状列石の中心から北東13m、列石内部に位置している。秋田県大湯環状列石の所謂日時計と共通するものである。11点の石から構成され、中心の立石は長さ78cmを測る。下部には土壌は存在せず、集落のシンボリック存在だったものであろう。
(本文PP.46~48)

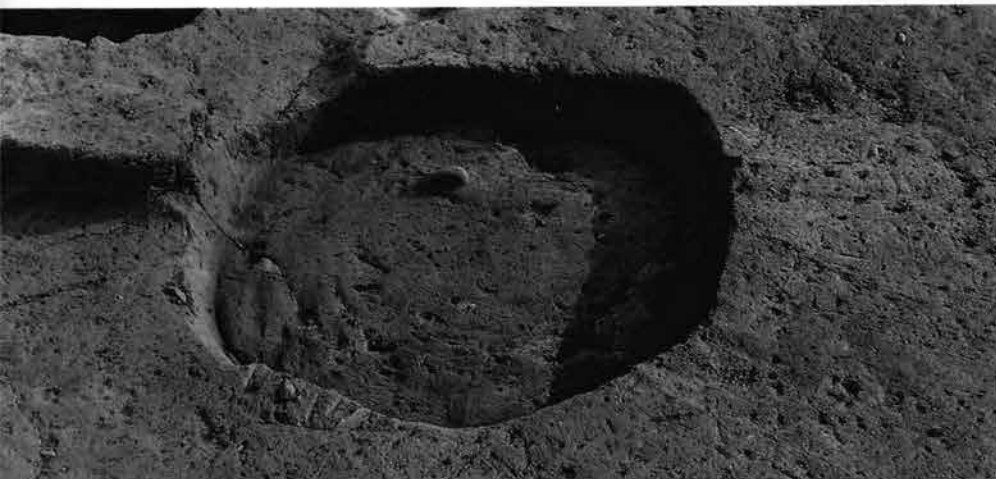


1. 1号配石遺構(西から)
2. 1号配石遺構炉(北から)
3. 1号配石遺構埋甕(西から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の敷石住居跡と考えられる。構築当初の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。

(本文PP.49～54)



1. 2号配石遺構(西から)
2. 2号配石遺構炉(北から)
3. 2号配石遺構(西から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の敷石住居跡と考えられる。構築当初の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。しかし、1・5号配石遺構と異なり、敷石は抜かれたものが多いと思われる。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。

(本文PP.55~58)



5・6号配石遺構(北から)

写真左が6号配石遺構、右が5号配石遺構である。6号配石遺構については、5号配石遺構の張出し部はないかと思われたが、配石の位置関係から別遺構と判断せざるを得なかった。



5号配石遺構(北から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形敷石住居跡と考えられる。炉を中心とした小範囲に部分敷石を施し、周囲に石を円形に配置したものであるが、バラつきが認められる。当遺構は1・2号配石遺構の構築当初の姿になるものと思われる。
(本文PP.58~66)

1. 5号配石遺構部分敷石(東から)
2. 5号配石遺構炉(南西から)
3. 5号配石遺構埋甕(南東から)



PL.19-1は炉の北側に配置された敷石の写真。部分敷石は長径約150cm、短径約80cmの規模である。1・2号配石遺構が敷石住居跡と判断されたのも、実にこの部分敷石の状況からである。PL.19-2は石囲い炉。長径65cm、短径60cmのほぼ円形を呈している。炉石は2個で北端と東端に配置され、1号配石遺構と同様に硬い輝岩と輝緑岩が使用されていた。PL.19-3は出入口部埋甕に該当するもので加曾利E3式土器の深鉢(胴部欠損)が逆位状態で埋設されていた。



PL.20

1. 7・8号配石遺構の調査スナップ

PL.21

1. 8号配石遺構(北東から)
2. 8号配石遺構(南東から)

8号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の小規模な柄鏡形敷石住居跡である。主体部は長径2.4m、短径2.3mのほぼ円形を呈し、張出し部は長径1.55m、短径1.1mを測る。張出し部では明瞭な敷石が認められるが、主体部内部には敷石は施されていない。(本文PP.66~77)





PL.22

1. 8号配石遺構調査スナップ
2. 8号配石遺構遺物出土状況
(北西から)

PL.23

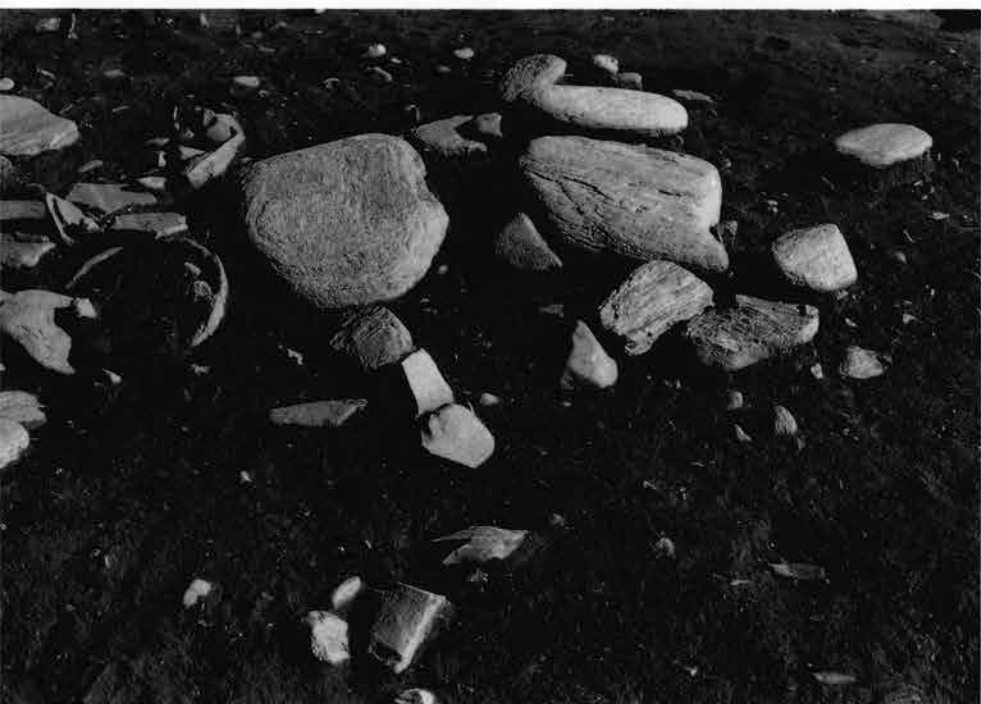
1. 8号配石遺構遺物出土状況
(北西から)
2. 8号配石遺構遺物出土状況
(北東から)
3. 8号配石遺構遺物出土状況
(北東から)



炉体土器と埋壺の他には、炉東から胴下部欠損の大型土器、炉南から胴下部欠損の大型土器片が出土し、この他に口縁部21点、胴部184点、底部3点の計208点の土器片が出土している。石器では凹石1点、打製石斧1点が出土。



1. 8号配石遺構張出し部
(南東から)
2. 8号配石遺構張出し部
(南西から)



張出し部の規模は長径1.55m、短径1.1mである。3個の石を配置し周囲に押えの石を配置したものである。3個の石の最大は、長径45cm、短径31.5cm、厚さ7cm、重量15.5kgであった。主体部と張出し部の接続部に埋壘が存在している。

1. 8号配石遺構炉(南東から)
2. 8号配石遺構埋壺(南西から)
3. 8号配石遺構埋壺(北東から)



1



2



3

主体部と張り出し部の接続部に加曾利E4式土器の深鉢(口縁部と底部欠損)が斜位状態で埋設されていた。埋設土壌は長径75cm、短径70cm、深さ27cmの円形を呈している。埋壺には偏平な蓋石が伴い埋壺の東側にずり落ちていた。



1



2

PL.26

1. 17号配石遺構(南西から)
2. 17号配石遺構(南から)

PL.27

1. 17号配石遺構石囲い炉
(南から)
2. 17号配石遺構石囲い炉
(南から)
3. 17号配石遺構石皿出土状況
(南西から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の敷石住居跡である。ただし完掘できなかつたために円形なのか、柄鏡形なのかは判断つかない。炉南西1.8mところに石が集中している。まだ炉東1.5mの部分にも集中個所があるが、遺構内部の敷石ではなくて圍繞する縁石となろう。石囲い炉は長径92cm、短径80cm、深さ34cmの楕円形を呈している。4個の大石と2個の小石を配置している。

(本文PP.77-85)



PL.28

1. 23～26号配石遺構(北東から)

PL.29

1. 23号配石遺構(北東から)
2. 23号配石遺構(南東から)

23号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。主体部は長短とも径3mの円形を呈し、張出し部は長径3.4m、短径0.9mで、全長6.4mを測る。主体部の縁石と張出し部に敷石が施されているが、主体部の内部には敷石が認められない。(本文PP.86～100)





PL.30

1. 23号配石遺構縁石(南東から)
2. 23号配石遺構縁石(南から)
3. 23号配石遺構縁石(北東から)

PL.31

1. 23号配石遺構縁石(北から)
2. 23号配石遺構縁石(東から)
3. 23号配石遺構張出し部立石
(南東から)
4. 23号配石遺構張出し部
(南西から)
5. 23号配石遺構張出し部
(北西から)
6. 23号配石遺構先端部埋壙
(南東から)
7. 27号配石遺構石囲い炉
(南東から)
8. 23号配石遺構石囲い炉
(南東から)



2



3

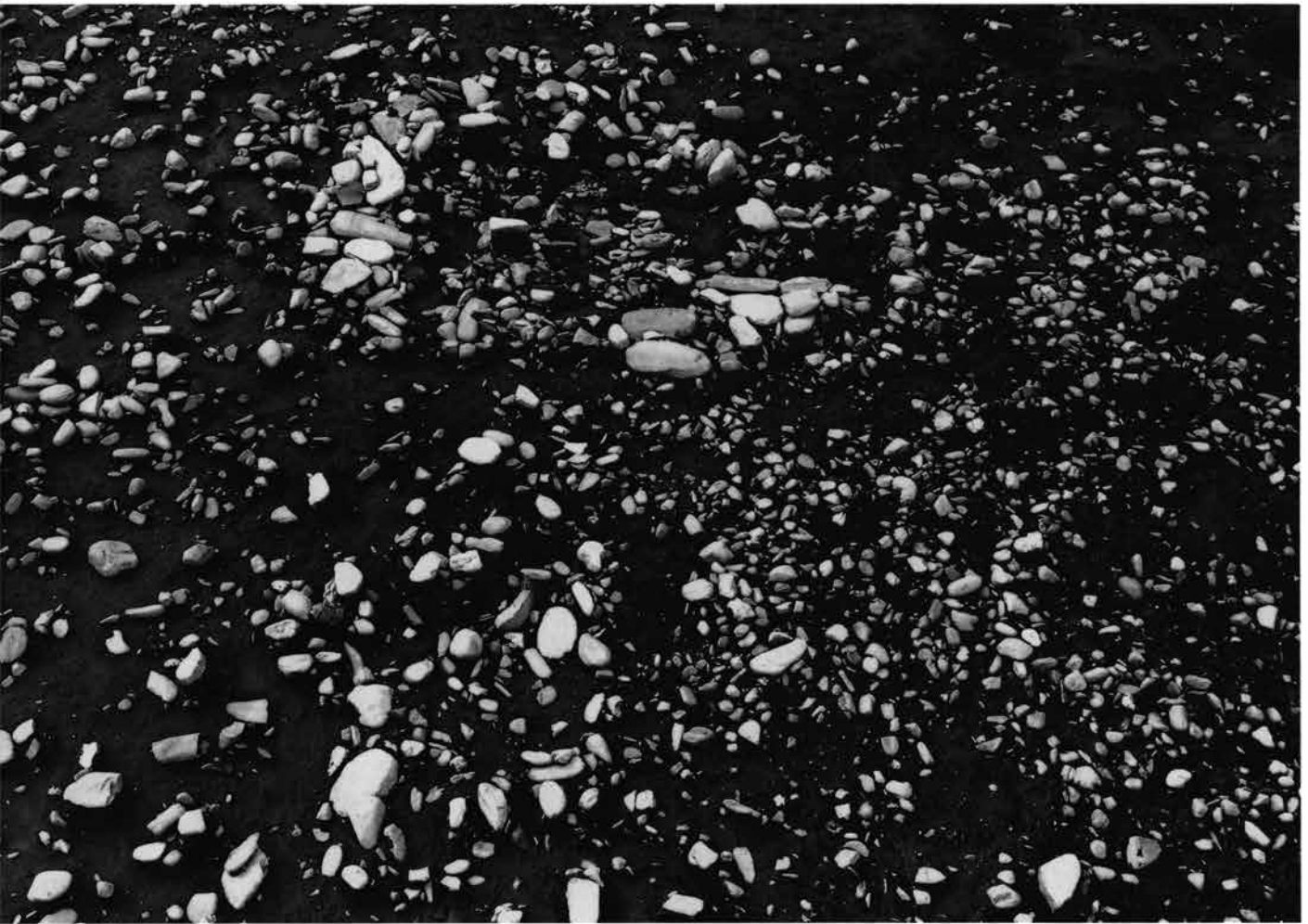
主体部の縁石の間隙には小石が認められた。また張出し部の石の下には多量の小石が押えの石として使用されていた。敷石住居跡を構成している敷石と、この敷石の押えの小石は総計518点検出されている。

3.4mの張出し部で明瞭な敷石が認められるのは、埋壙の北1.2mまでの範囲である。接続部近くに立石があった。

張出し部先端から口縁部を欠損した加曾利E4式土器2個体が出土した。埋設土壌は長径85cm、短径56cm、深さ24cmの楕円形を呈している。埋壙はこの土壌内に斜位状態で埋設されていたものである。蓋石が伴っていた。

石囲い炉は長径84cm、短径82cm、深さ26cmの方形を呈している。炉石には4個の大石が使用され、この間隙に小石を配置している。





1



2



PL.32

1. 24号配石遺構(東から)
2. 24号配石遺構主体部(西から)

PL.33

1. 24号配石遺構調査スナップ
(東から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E4期の柄鏡形敷石住居跡である。主体部の規模は長径3.8m、短径3.2mの方形を呈する。張出し部は長径3.4m、短径1.2mで敷石住居跡の全長は7.2mを測る。主体部の縁石と張出し部の一部に敷石が施されているが、主体部内部には敷石が認められなかった。縁石は竪穴内に巡るのではなく、掘り込みの外側に巡らされたものである。

(本文PP.101~124)



PL.34

1. 24号配石遺構縁石(北から)
2. 24号配石遺構縁石(西から)
3. 24号配石遺構縁石(東から)

PL.35

1. 24号配石遺構先端部埋壺
(東から)
2. 24号配石遺構先端部埋壺近景
(南から)



2



3

北壁と西壁上に巡っていた縁石は、
竪穴内部に崩れこんだ状態で検出され、
多量の石が使用されていた。東壁と南
壁の縁石は大きな石が選定されてい
るが、西壁の縁石はやや小さな石が主
体的に選定されている。

埋壺は主体部と張出し部の接続部に
1点、張出し部の先端部に1点の計2
点が出土している。





PL.36

1. 24号配石遺構先端部埋壔
(東から)
2. 24号配石遺構先端部埋壔完
掘状況 (東から)
3. 24号配石遺構接続部埋壔
(西から)

接続部の埋壔は口縁部の一部を欠損した加曾利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。この埋壔には蓋石が伴っている。先端部の埋壔は口縁部の一部を欠損した大型の加曾利E4式の土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた。

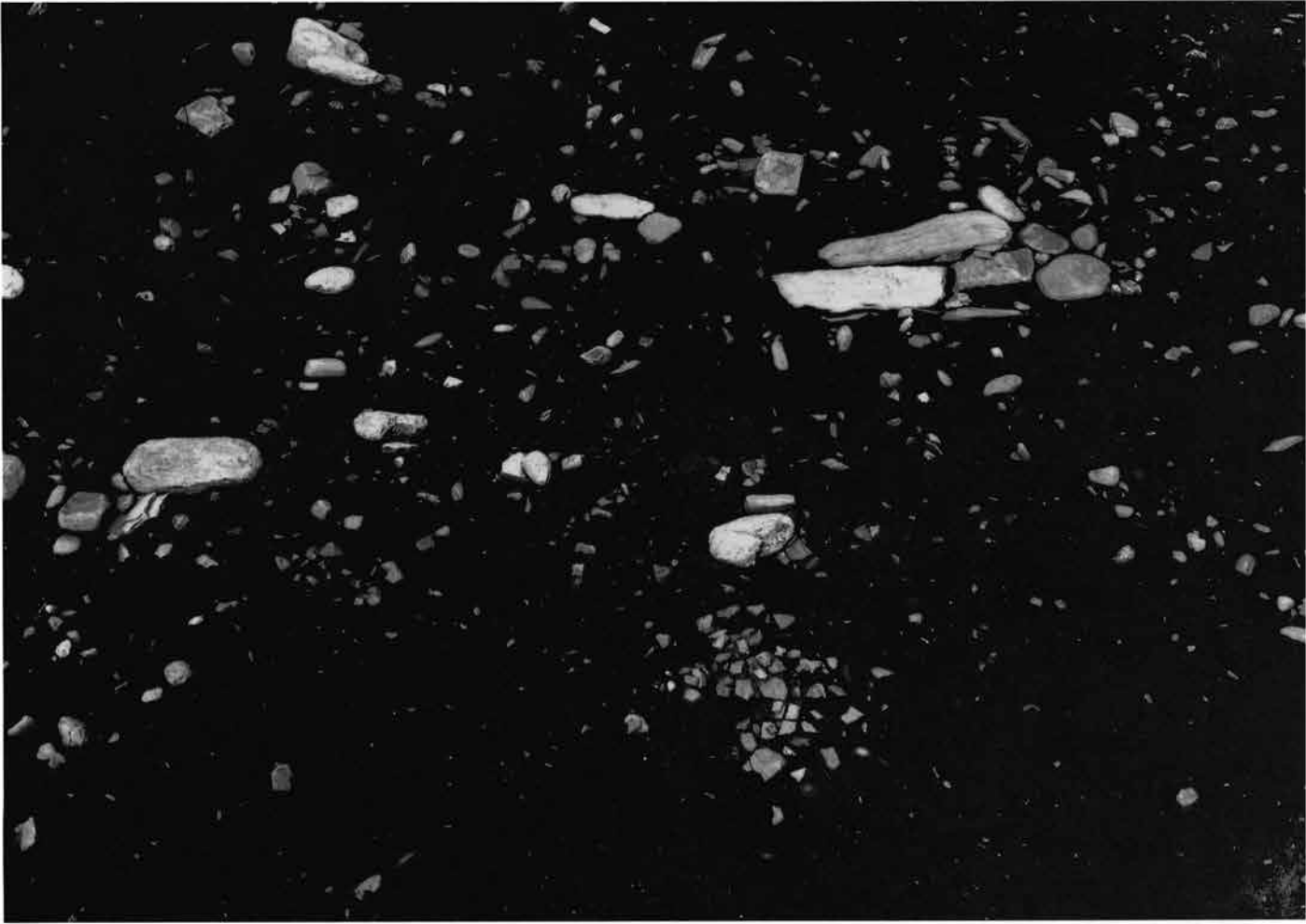


PL.37

1. 26号配石遺構(南西から)
2. 26号配石遺構張出し部
(南西から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E4期の柄鏡形敷石住居跡である。主体部の規模は推定長径3.4m、推定短径3.3mを呈している。張出し部の規模は長径1.4m、短径0.6~0.8mで、敷石住居跡の全長は4.8mを測る。

(本文PP.125~137)



1



2



PL.38

1. 26号配石遺構縁石(南西から)
2. 26号配石遺構炉(南西から)
3. 24号配石遺構先端部埋壺
(南東から)

炉は埋壺炉である。炉体土器は胴下半部を欠損した加曾利E4式土器であり、潰れた状態で出土した。埋壺は張出し部の先端から検出され、底部を転用したものである。斜位状態で検出された。



2



PL.39

1. 36号配石遺構(南東から)
2. 36号配石遺構調査スナップ

当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の柄鏡形敷石住居跡である。主体部の規模は長径2.6m、短径2.6m。張出し部は長径3.4m、短径0.5mで敷石住居跡全長は6mを測る。

(本文PP.137～153)

3



1



2



1



2

PL.40

1. 36号配石遺構(北東から)
2. 36号配石遺構主体部
(北東から)

PL.41

1. 36号配石遺構主体部
(東から)
2. 36号配石遺構張出し部
(南東から)
3. 36号配石遺構炉(北東から)



主体部内部の全面には敷石は施されていない。炉を中心に西側にかけて敷石が認められるが、大小さまざまな石が使用され雑然としている。この周囲に縁石が巡る。

張出し部は新しい耕作溝によってその一部が壊されているが、残存状況は比較的よい。

炉は石囲い炉である。長径53cm、短径46cm、深さ9～14cmの楕円形を呈している。炉石は主体部の敷石が代用されているもので、規則的には組まれている。



1



2



3



4



5



6



7



8

PL.42

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. 36号配石遺構先端部埋壘検出状況 (北東から) | 5. 36号配石遺構多孔石出土状況 (北東から) |
| 2. 36号配石遺構先端部埋壘完掘状況 (南西から) | 6. 36号配石遺構丸石出土状況 (北東から) |
| 3. 36号配石遺構接続部埋壘検出状況 (北東から) | 7. 36号配石遺構石皿出土状況 (南西から) |
| 4. 36号配石遺構接続部埋壘完掘状況 (北東から) | 8. 36号配石遺構磨製石斧出土状況 (北から) |



PL.43

1. 37号配石遺構(北東から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の柄鏡形敷石住居跡である。主体部の規模は長径4m、短径3.7mである。張出し部は長径2.7m、短径1.1mで、敷石住居跡の全長は6.4mを測る。主体部の縁石と張出し部には敷石が施されているが、主体部内部には敷石が認められない。

(本文PP.153-165)



1



2

PL.44

- 1. 37号配石遺構(南東から)
- 2. 37号配石遺構張出し部
(南東から)

PL.45

- 1. 37号配石遺構縁石(南西から)
- 2. 37号配石遺構縁石(北東から)
- 3. 37号配石遺構縁石(北西から)



縁石は東縁では小さな石が選定されているが、西縁・南縁・北縁では比較的大きな石が選定されている。



1. 37号配石遺構縁石(南から)
2. 37号配石遺構縁石(南東から)



1. 37号配石遺構調査スナップ
2. 37号配石遺構石囲い炉検出状況
(南東から)
3. 37号配石遺構石囲い炉
(南東から)



石囲い炉は長径52cm、短径36cm、深さ10cmの楕円形を呈している。炉石は6個の石から構成されていた。



1. 37号配石遺構立石(北西から)
2. 37号配石遺構先端部埋甕
(北西から)
3. 37号配石遺構多孔石出土状況
(北から)



2



3

張出し部の東から小さな立石が検出された。この立石は周囲を石で囲われている。立石の長さは16.5cmである。
埋甕は張出し部の先端部から検出されたが、耕作溝によって壊されていたために全容を知ることができなかった。埋甕の破片は加曾利E3式土器であった。



1. 38号配石遺構(南から)
2. 38号配石遺構(東から)
3. 38号配石遺構埋甕
(東から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡である。路線外に遺構が延びていることと、一部破壊されているためにその全容をつかむことはできなかった。おそらくは張出し部に該当する部分であろう。

(本文PP.165-173)



1



2



3

PL.50

1. 1号竪穴住居跡(南から)
2. 1号竪穴住居跡遺構確認状況
(南西から)
3. 1号竪穴住居跡遺物出土状況
(北西から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の竪穴住居跡である。長径3.1m、短径3mのほぼ円形を呈している。覆土上層から土器片とともに多量の石が出土している。

(本文PP.173~180)

PL.51

1. 2号竪穴住居跡(西から)
2. 2号竪穴住居跡遺物出土状況
(南東から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の円形竪穴住居跡である。長径5m、短径4.8m、確認面からの深さは4~16cmほどである。覆土からは多量の土器片と石器が出土している。

(本文PP.180~197)





1. 2号竖穴住居跡遺物出土状況
(北東から)
2. 2号竖穴住居跡遺物出土状況
(南東から)
3. 2号竖穴住居跡遺物出土状況
(南東から)



2号竖穴住居跡からは、炉体土器1
個体、大型土器片3個体の他に、口縁
部99点、胴部651点、底部10点の計760
点の土器片が出土している。石器では
石皿3点、多孔石11点、凹石5点、磨
石1点、敲石1点、打製石斧3点、磨
製石斧3点が出土している。この他に
663点の石が出土している。



1



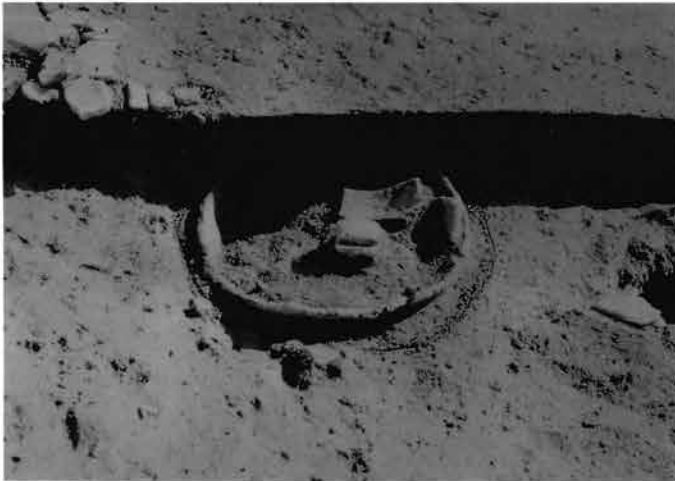
2



3



4



5



6

1. 2号竖穴住居跡遺物出土状況
(東から)
2. 2号竖穴住居跡遺物出土状況
(東から)
3. 2号竖穴住居跡遺物出土状況
(西から)
4. 2号竖穴住居跡磨製石斧出土状況
(南西から)
5. 2号竖穴住居跡炉体土器検出状況
(北から)
6. 2号竖穴住居跡炉体土器調査状況
(南東から)
7. 2号竖穴住居跡炉体土器
埋設ピット(南東から)



7



1



2

PL.54

1. 3号配石遺構(西から)
2. 4号配石遺構(南から)

3号配石遺構は長径83cm、短径(47cm)の小規模な遺構である。下部に土壌等は存在しなかった。

4号配石遺構は長径4m、短径3.6mの規模である。出土遺物から判断して縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

(3号配石遺構 本文PP.198・199)
(4号配石遺構 本文PP.200~205)



PL.55

1. 6号配石遺構(北西から)

PL.56

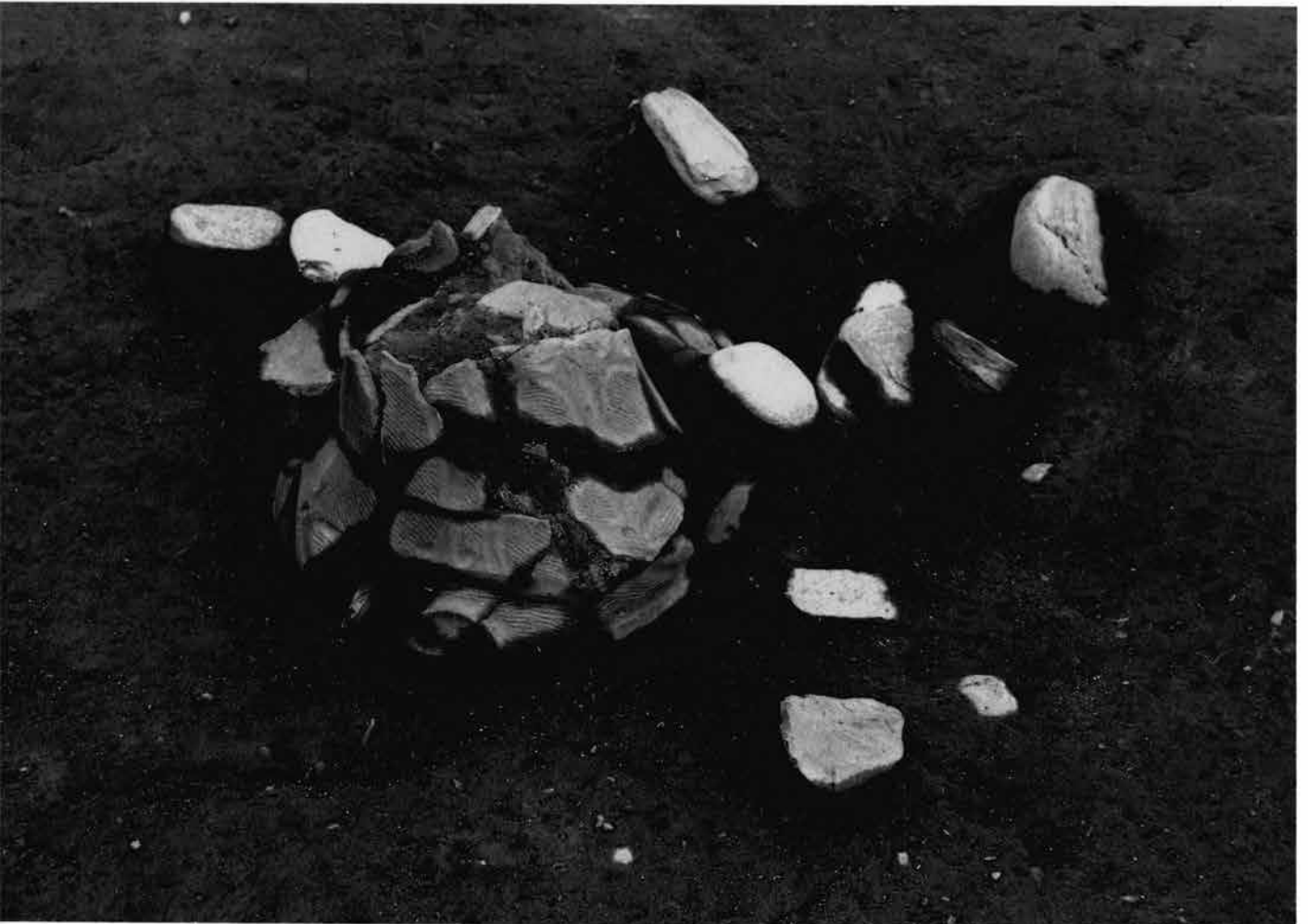
1. 6号配石遺構(南東から)
2. 6号配石遺構伏壺(北東から)

6号配石遺構は5号配石遺構の東に接して構築されていた。その規模は長径2.2m、短径1.3mである。また南端の伏壺周辺には小石が配置されている。当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

(本文PP.206~210)



1



2





PL.57

1. 7号配石遺構(東から)
2. 7号配石遺構(南から)

PL.58

1. 7号配石遺構(南から)
2. 7号配石遺構部分(南から)
3. 7号配石遺構土器出土状況
(南西から)

7号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であり、環状列石の一部を構成するものである。長径4.5m、短径2.3mの柄鏡形を呈するようである。

(本文PP.211-217)



2



PL.59

1. 9号配石遺構(北から)
2. 10号配石遺構(北から)

9号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長径2m、短径1.1mの規模で下部に土壌等は存在しなかった。

10号配石遺構も加曾利E3式期の配石遺構である。規模は長径1.4m、短径1.1mで、下部に土壌等は存在しなかった。

(9号配石遺構 本文PP.218-221)
(10号配石遺構 本文PP.222・223)



1



2



1. 11号配石遺構(北西から)
2. 11号配石遺構多孔石(丸石)
出土状況(北東から)

9号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長径約6m、短径約5mの範囲に散漫的に石が配置されている。ややまとまって分布している範囲は、長径2.5m、短径2.3mである。

(本文PP.224~229)

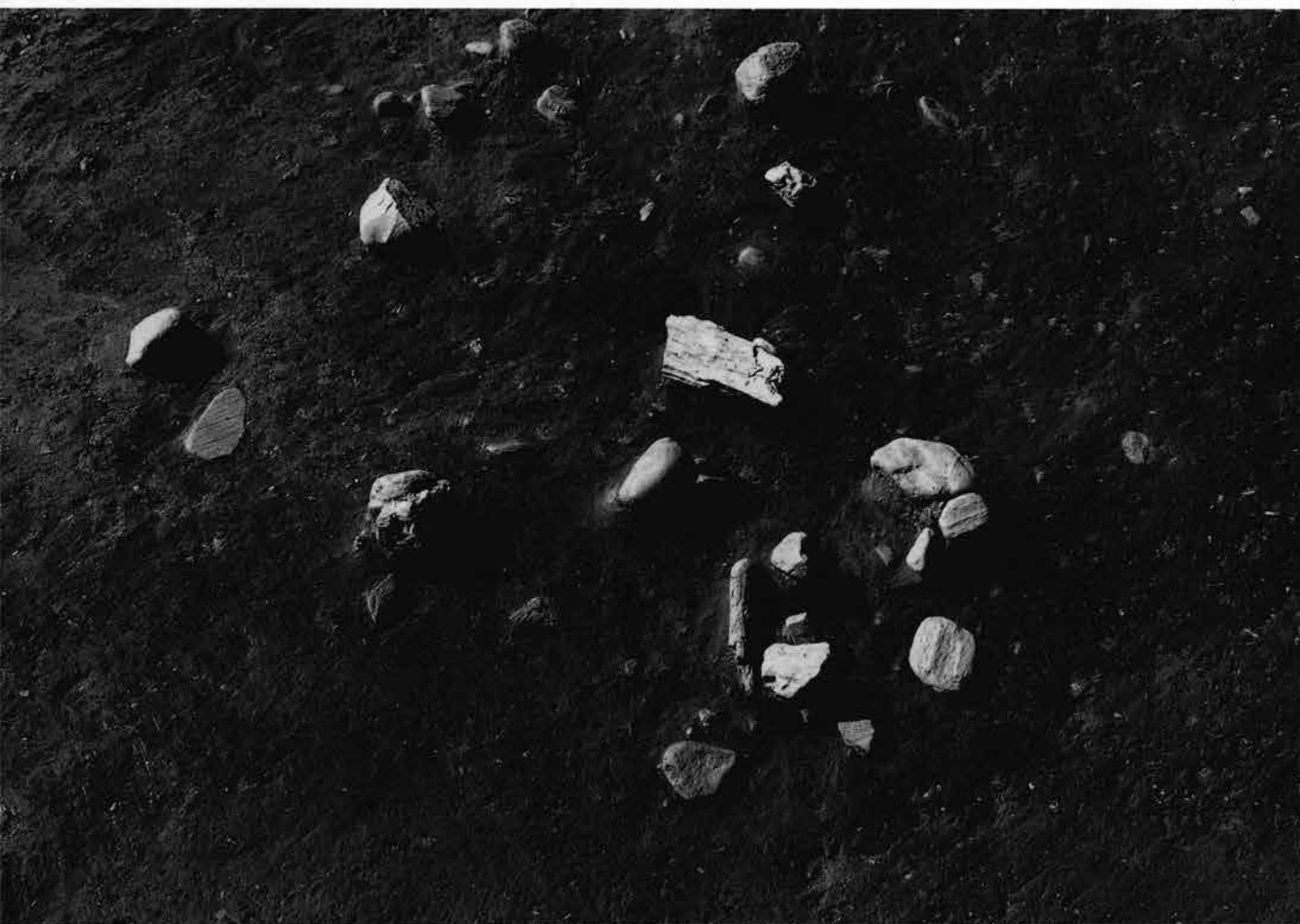


1. 12号配石遺構(東から)
2. 12号配石遺構調査スナップ



12号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。半円状に配石が認められ、その規模は長径3.4m、短径2mである。下部に土壌等は存在しなかった。

(本文PP. 230～233)





PL.62

1. 14号配石遺構(東から)
2. 15号配石遺構(東から)

PL.63

1. 16号配石遺構(東から)
2. 16号配石遺構石皿出土状況
(東から)



14号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長径5 m、短径3 mの範囲に石が散在している。

15号配石遺構は長径1.4 m、短径1.2 mの小規模な配石である。

16号配石遺構は長径3 m、短径2 mの規模である。いずれの配石遺構下部には土壌等は存在しなかった。

(14号配石遺構 本文PP.234～238)
(15号配石遺構 本文PP.238・239)
(16号配石遺構 本文PP.240～244)



PL.64

1. 12号屋外埋設土器(北東から)
2. 12号屋外埋設土器出土状況
(北東から)

12号屋外埋設土器は環状列石下からの出土である。埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E3式土器で、斜位状態で検出された。

(本文PP.374~390)

PL.65

1. 20号配石遺構(南東から)
2. 20号配石遺構(南東から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構であり、7号配石遺構と同様に環状列石の張出し部になるものと判断される。長径5m、短径2.3mの範囲に石が配置されている。中心部にやや大きな石を使用しているが、列石内部に通じる通路のような役割を果たしていたものであろうか。

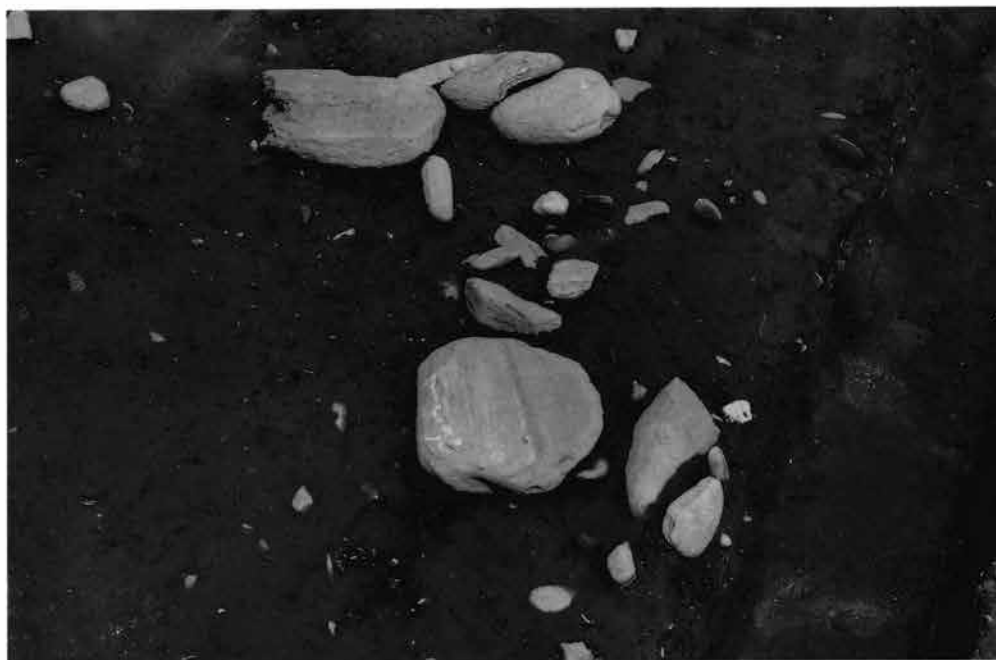
(本文PP.248~255)



1



2



1. 21号配石遺構(南西から)
2. 21号配石遺構伏壺(北東から)
3. 21号配石遺構調査スナップ



2



当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構である。長径1.7m、短径1.1mの小規模な遺構であり、下部に土壇等は存在しなかった。また配石の中心から東2.4mのところに伏壺が検出された。
(本文PP.256-258)

3



1. 22号配石遺構(南西から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。他の配石遺構と異なり砂岩が多量に使用され、焼石が多く、また埋壟を伴うことから異質な感じを受ける。長径4.5m、短径3.5mの規模である。

(本文PP.259～265)



PL.68

1. 22号配石遺構部分(北東から)
2. 22号配石遺構埋壘検出状況
(南西から)
3. 22号配石遺構埋壘調査状況
(北東から)

配石下から胴下半部を欠損した埋壘が出土した。この埋壘は長径46cm、短径37cmのビット内に正位状態で埋設されていたものである。偏平な砂岩が埋設ビットをほぼ覆っているが、当初はこのビットを完全に覆っていたもので蓋石として使用されたものであろう。



2



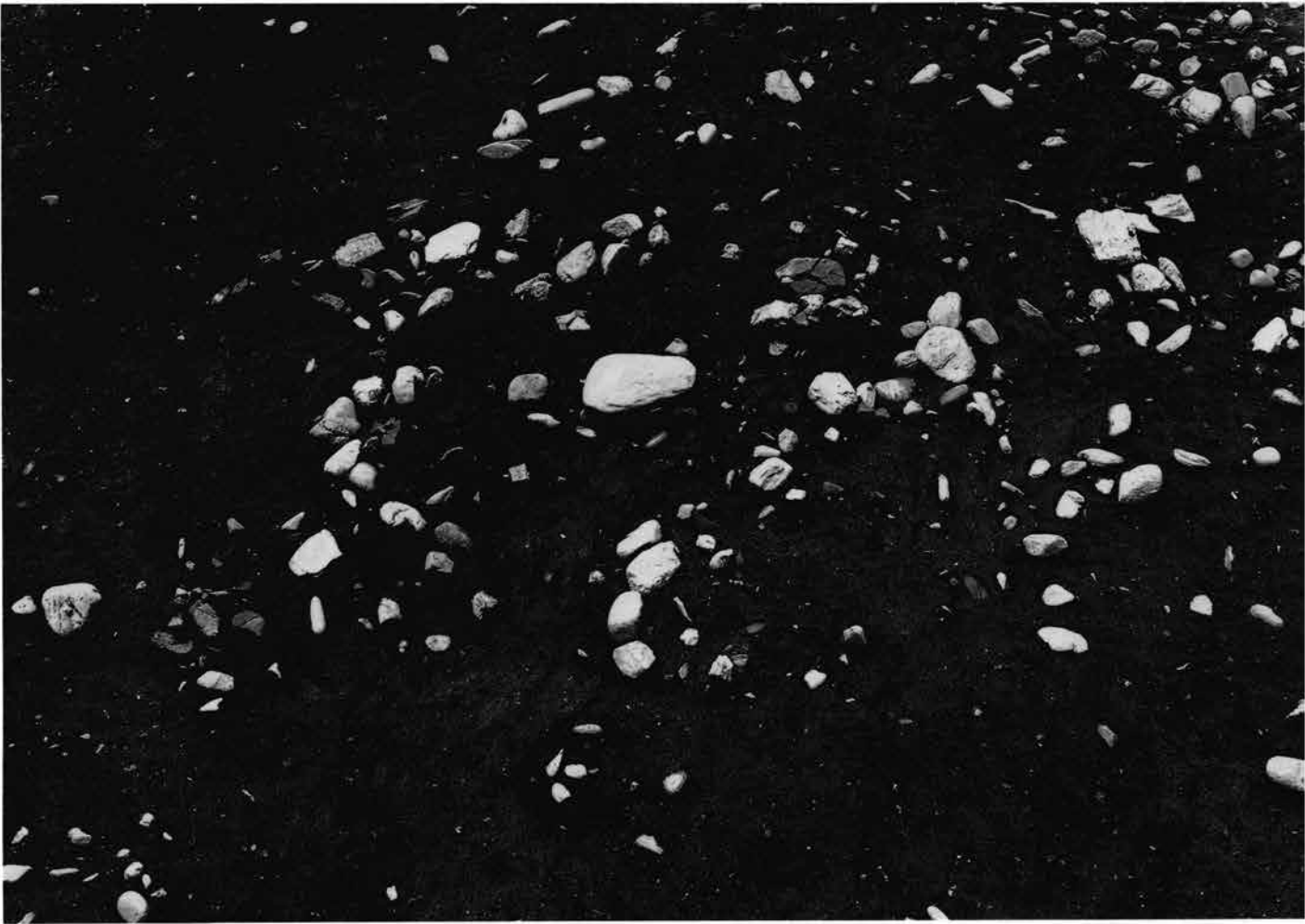
PL.69

1. 27号配石遺構(北西から)
2. 28号配石遺構(南東から)

27号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径3m、短径2.5mの規模で、中心に多孔石を配置している。

28号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径3m、短径2.3mの規模である。

(27号配石遺構 本文PP.272~277)
(28号配石遺構 本文PP.278~282)





1. 29号配石遺構(南東から)
2. 29号配石遺構石皿出土状況
(南東から)

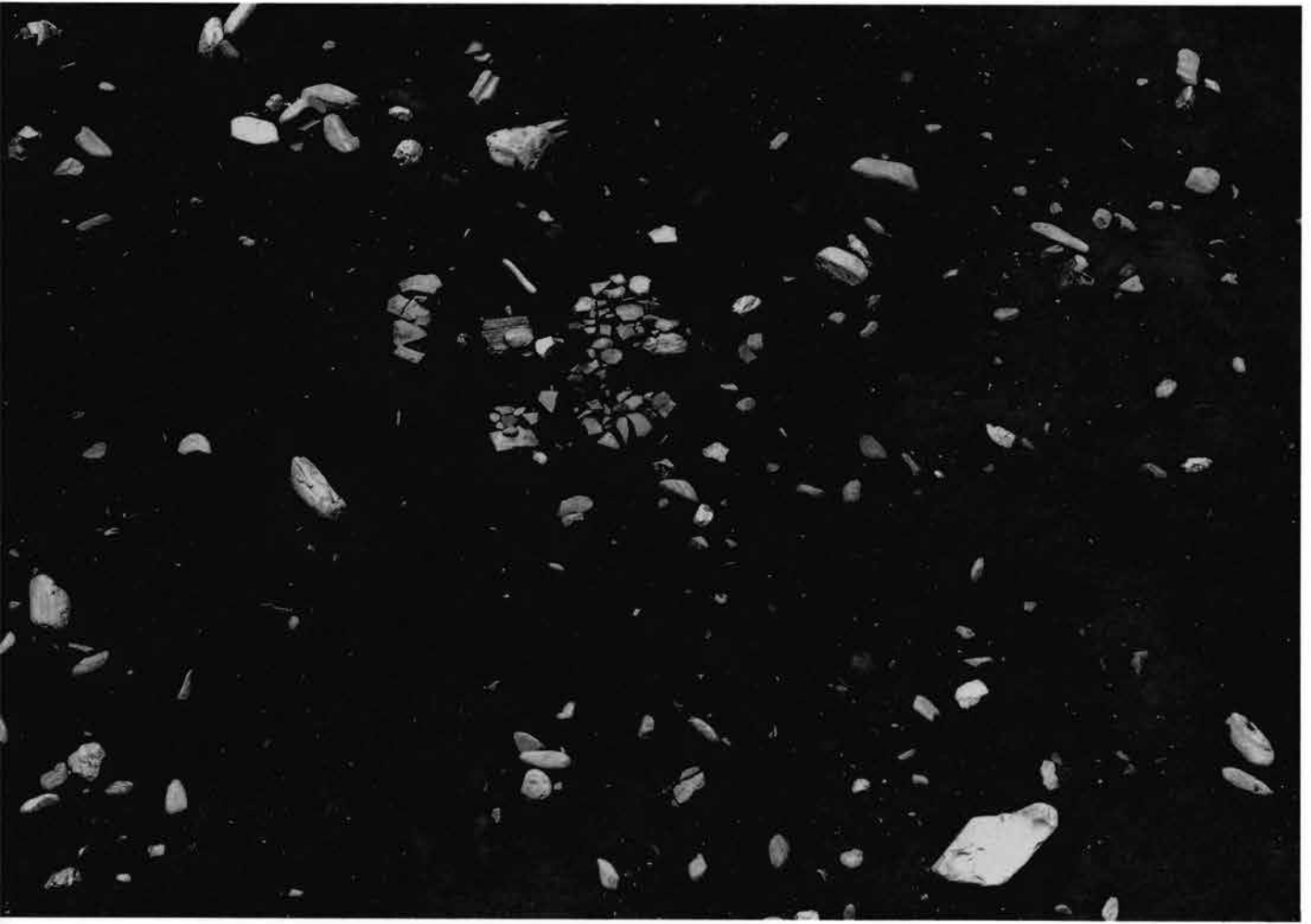
当遺構は縄文時代中期加曾利E4期の配石遺構である。長径3.9m、短径3.5mの範囲に石が配置されている。石皿は立石的な使用をされている。下部に土壌は存在しなかった。
(本文PP.283~289)



1. 30号配石遺構(東から)
2. 30号配石遺構部分(西から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径1.6m、短径1.5mの範囲に集中して石が配置されている。配石南端には立石と考えられる石が出土している。下部には土壌等は存在しなかった。
(本文PP.289～295)

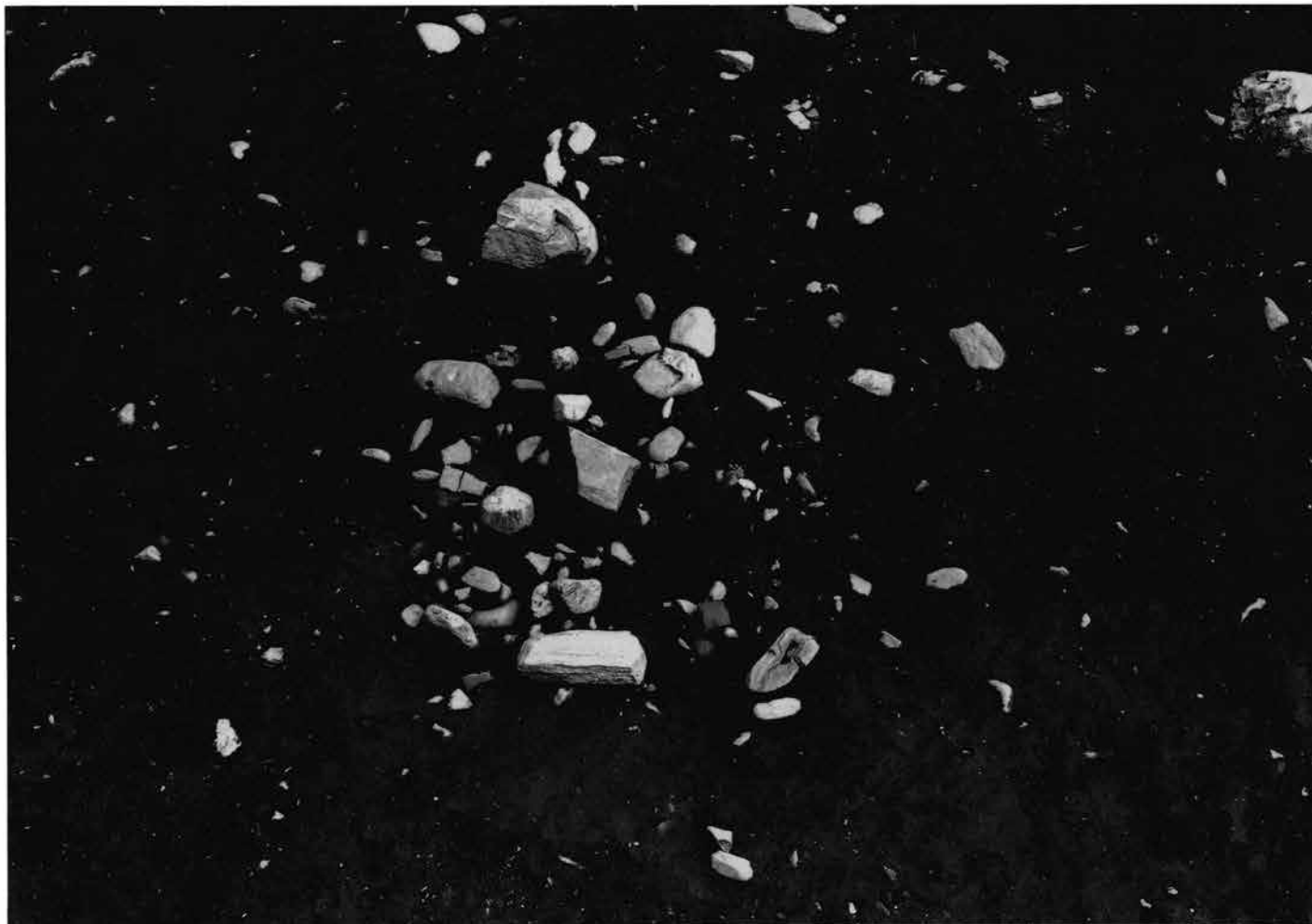


1



1. 31号配石遺構(北から)
2. 31号配石遺構部分(北から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径5m、短径4.5mの範囲に石が散漫的に配置されている。中心部には土器片が集中している。(本文PP.295～301)



1. 32号配石遺構(西から)
2. 32号配石遺構部分(北から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径5m、短径4mの楕円形の範囲に石の分布が認められるが、集中する範囲は長径2m、短径0.8mの範囲である。下部に土壌等は存在しなかった。
(本文PP.302～307)



PL.74

1. 33号配石遺構(北から)

PL.75

1. 33号配石遺構部分(北から)
2. 33号配石遺構部分(北から)

当遺構からは縄文時代中期加曾利E3～E4式の土器片が出土している。長径10m、短径7mの広範囲に多量の石と土器片が分布していた。この分布の北側からは遺物の出土はほとんど認められなかった。

(本文PP.307～315)





PL.76

1. 34号配石遺構(南西から)
2. 34号配石遺構部分(南西から)
3. 35号配石遺構(北から)

PL.77

1. 40号配石遺構(南東から)
2. 40号配石遺構部分(北西から)



2



3

34号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。規模は長径8.5m、短径6mである。

35号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。広範囲に遺物が分布しているために、明確に遺構として把握することに対しては疑問が残る。

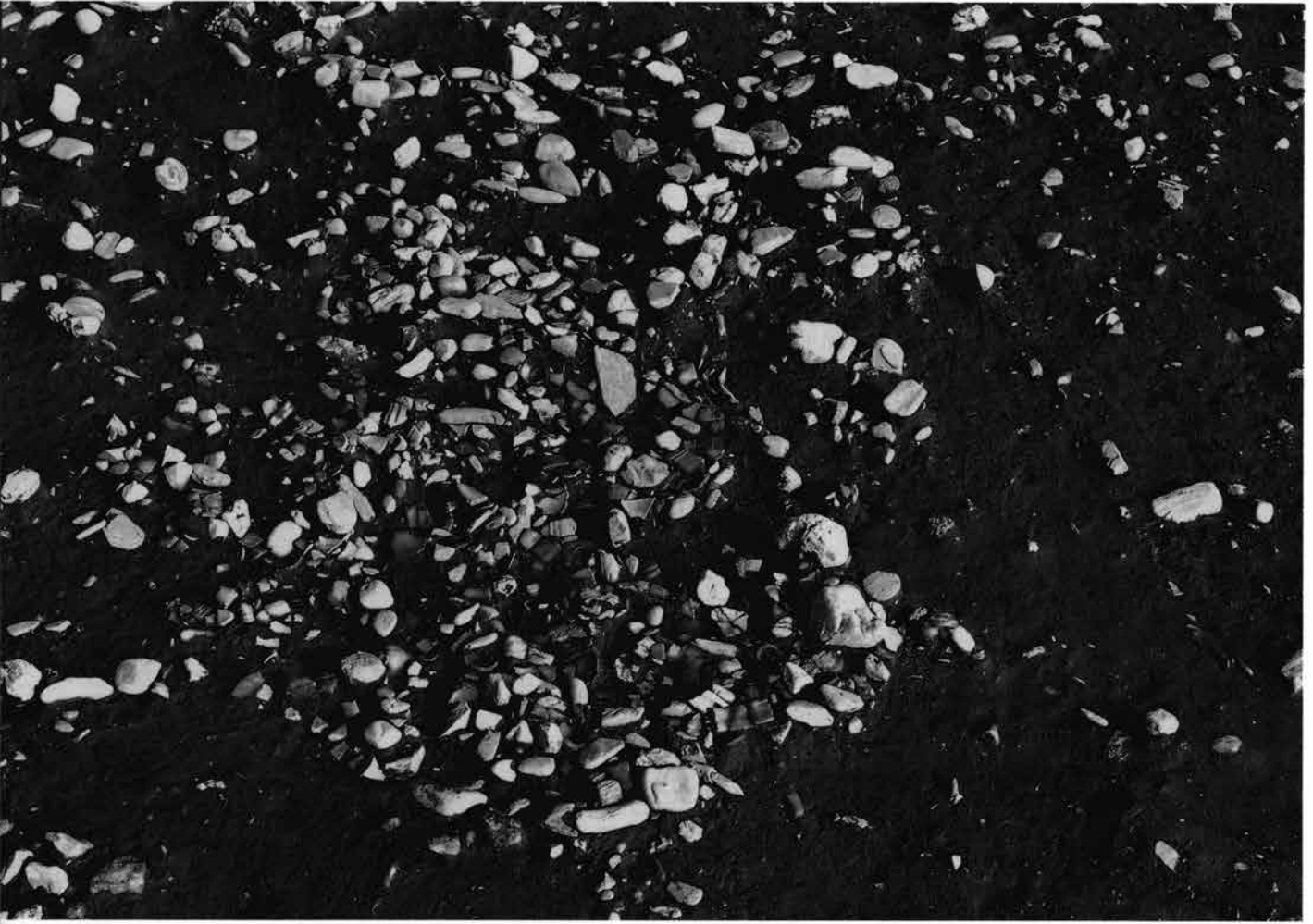
40号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。規模は長径2.5m、短径2mである。

(34号配石遺構 本文PP.315～321)

(35号配石遺構 本文PP.322～327)

(40号配石遺構 本文PP.327～333)







PL.78

1. 41号配石遺構(西から)
2. 43号配石遺構(南東から)

PL.79

1. 44号配石遺構(北から)
2. 45号配石遺構(南東から)



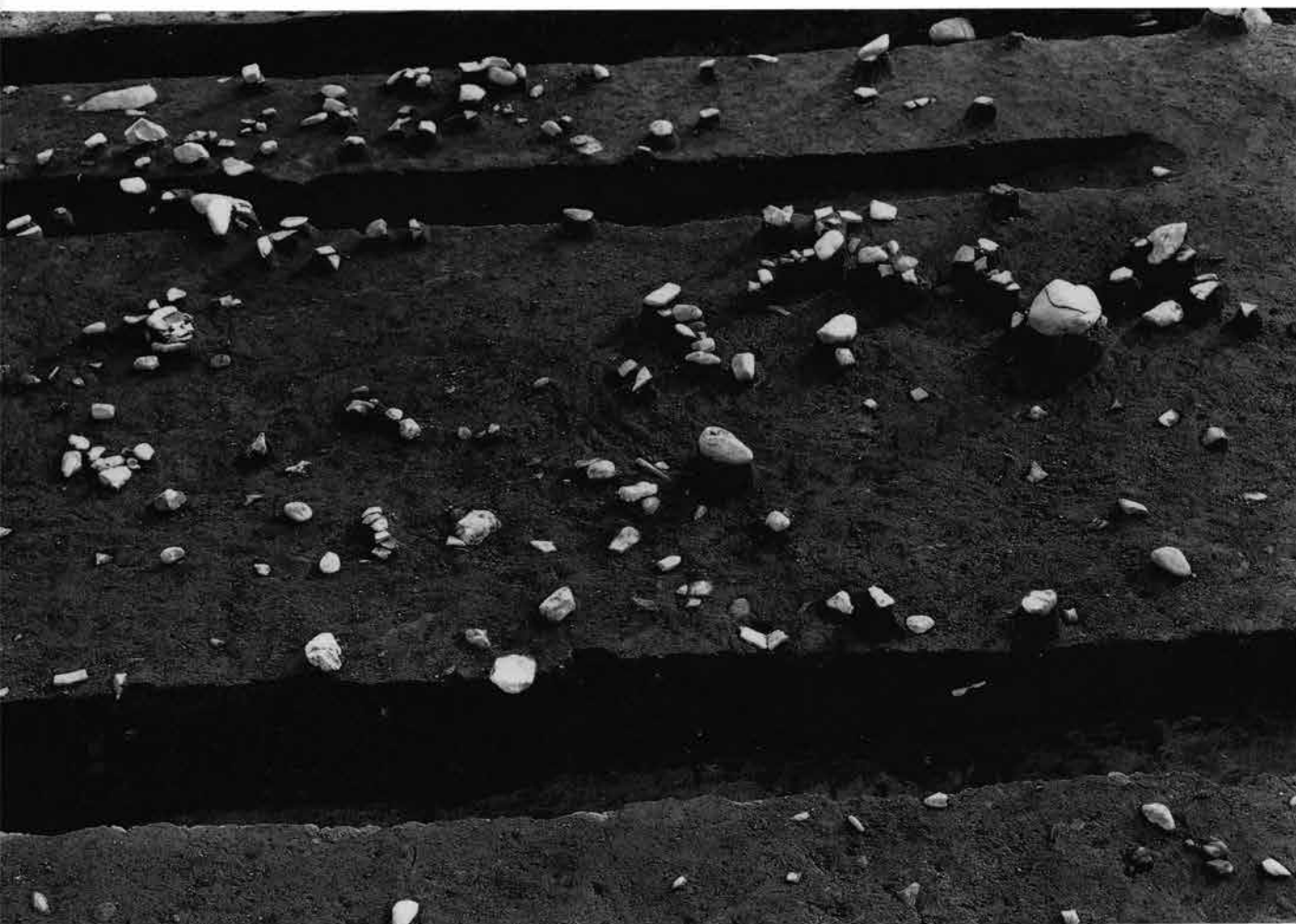
41号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。規模は長径3.1m、短径2.7mである。

43号配石遺構は中期の配石遺構である。規模は長径0.5m、短径0.4mである。

44号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。二重の環状構造を呈していると考えられる。

45号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長径7.5m、短径5.5mの範囲に石の分布が認められるが、一部に列状配石がある。

- | | |
|---------|--------------|
| 41号配石遺構 | 本文PP.334～340 |
| 43号配石遺構 | 本文PP.341・342 |
| 44号配石遺構 | 本文PP.342～347 |
| 45号配石遺構 | 本文PP.348～352 |



1



2



PL.80

1. 46号配石遺構(北から)
2. 47号配石遺構(北西から)

PL.81

1. 48号配石遺構(南東から)
2. 48号配石遺構多孔石出土状況
(北西から)



46号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。規模は長径約10m、短径約7mである。

47号配石遺構は加曾利E4式期の配石遺構である。規模は長径4.8m、短径3mである。

48号配石遺構は加曾利E3式期の配石遺構である。規模は長径3.5m、短径1.7mである。

| | |
|---------|--------------|
| 46号配石遺構 | 本文PP.352～359 |
| 47号配石遺構 | 本文PP.359～365 |
| 48号配石遺構 | 本文PP.365～369 |

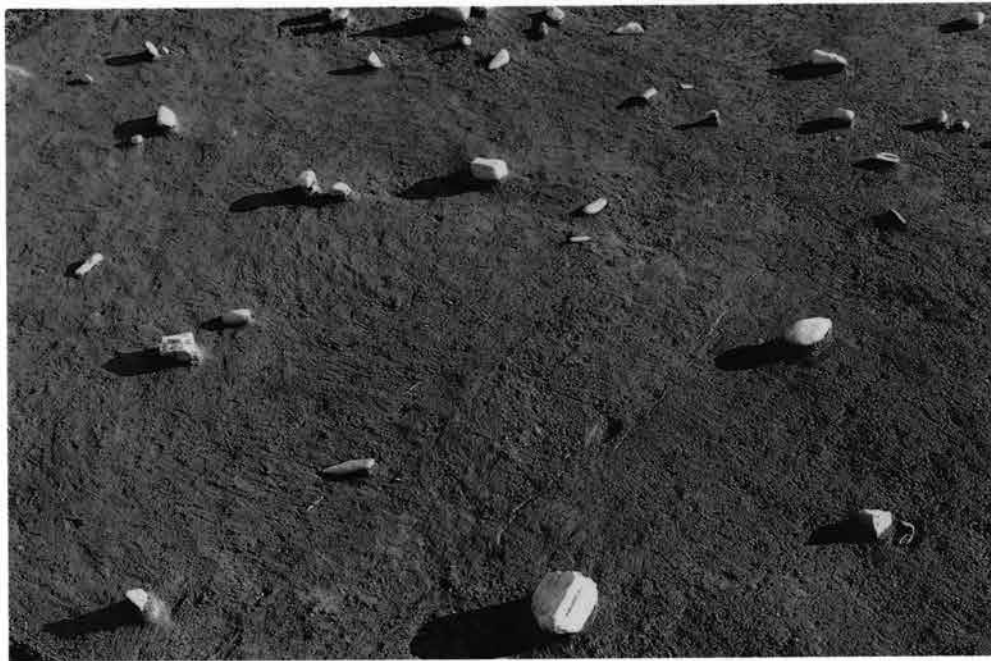


PL.82

1. 49号配石遺構(南から)
2. 50号配石遺構(北西から)
3. 50号配石遺構調査スナップ

PL.83

1. 13号配石遺構(南西から)
2. 19号配石遺構(南東から)



49号配石遺構は中期の配石であり、規模は長径75cm、短径70cmの小規模なものである。

50号配石遺構も中期の配石であり、長径6m、短径4mの小規模な環状構造となっている。

13号配石遺構は加曾利E3式期の配石であるが、集石として把握したほうが良いかもしれない。下部に土壌等は存在しなかった。

19号配石遺構は加曾利E3式期の配石であり、長径8m、短径4.5mの規模である。3号屋外埋設土器が検出されている。

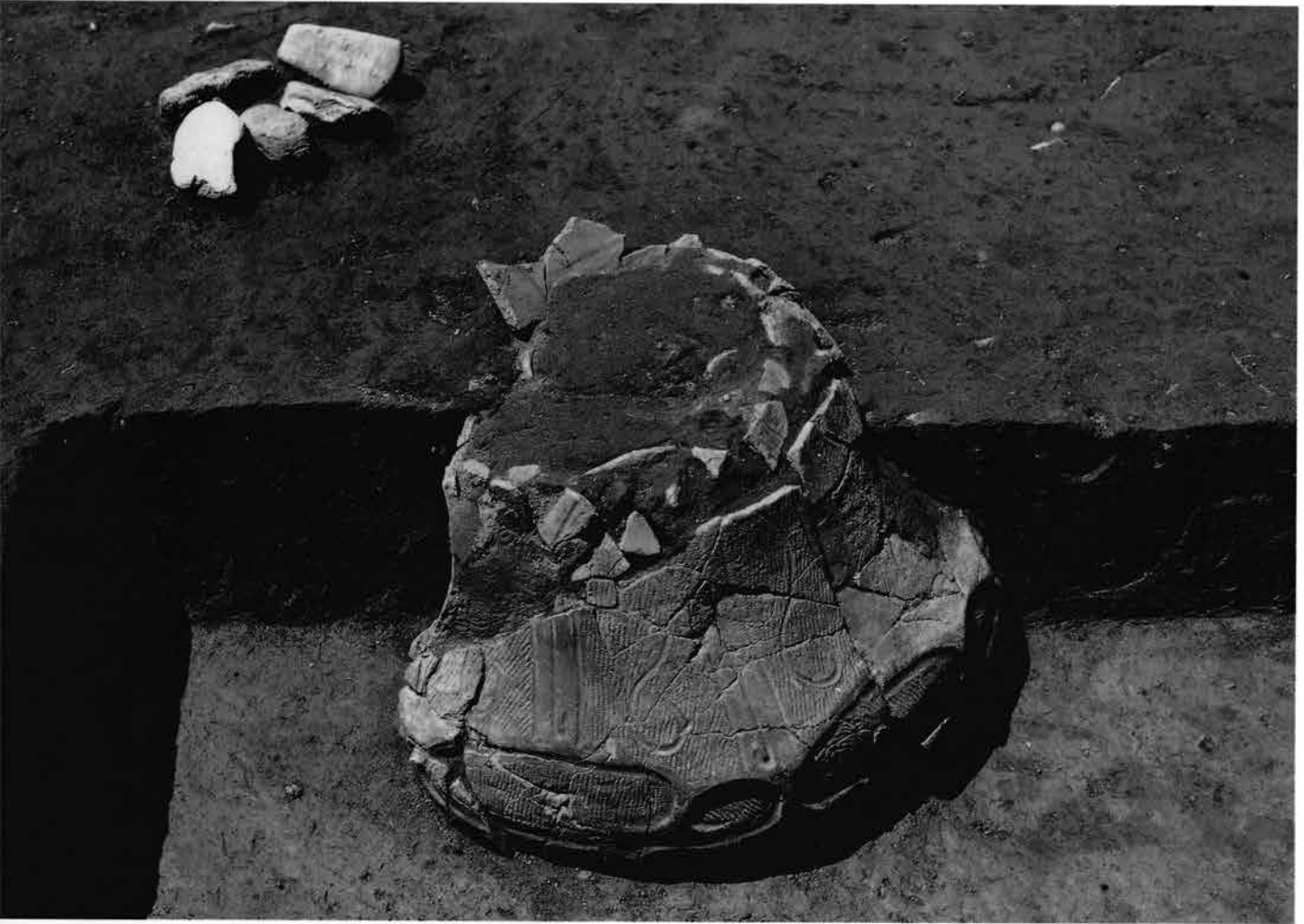
| | |
|---------|--------------|
| 49号配石遺構 | 本文PP.369・370 |
| 50号配石遺構 | 本文PP.370~373 |
| 13号配石遺構 | 本文 P.333 |
| 19号配石遺構 | 本文PP.244~248 |



1



2



1



2

PL.84

1. 1号屋外埋設土器(東から)
2. 2号屋外埋設土器(南東から)

PL.85

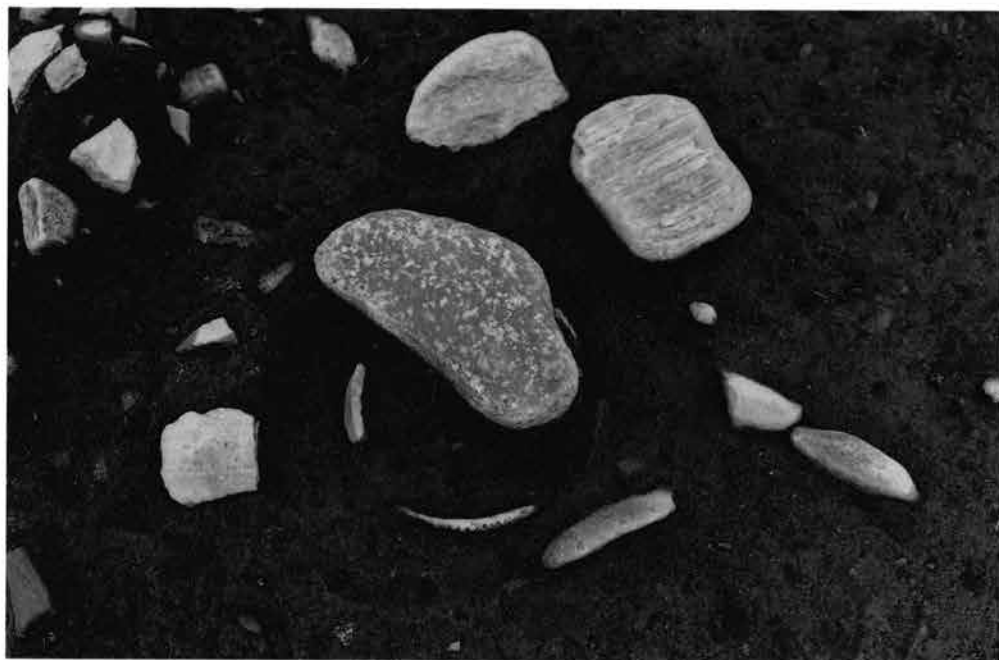
1. 2号屋外埋設土器調査状況
(南から)
2. 2号屋外埋設土器石蓋出土状況
(南東から)
3. 2号屋外埋設土器完掘状況
(南東から)



1号屋外埋設土器は環状列石下から検出された。埋設土器は胴下半部を欠損した加曾利E3式土器で、逆位状態で埋設され、土圧によりやや南に傾いていた。残存脂肪分析を実施。

2号屋外埋設土器は環状列石内部から検出された。埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。

(本文PP.374~390)



1. 3号屋外埋設土器(東から)
2. 3号屋外埋設土器調査状況
(南東から)
3. 3号屋外埋設土器残存脂肪分析
土壌採取



3号屋外埋設土器は19号配石遺構内から検出された。埋設土器は胴部を欠損した加曾利E3式土器で、逆位状態で出土した。残存脂肪分析実施。(本文PP.374～390)



1. 4号屋外埋設土器検出状況
(西から)
2. 4号屋外埋設土器調査状況
(南から)
3. 4号屋外埋設土器(南から)



4号屋外埋設土器は、加曾利E3式土器の胴部で逆位状態で埋設されていた。
(本文PP.374~390)



1. 5号屋外埋設土器(南から)
2. 6号屋外埋設土器検出状況
(東から)
3. 6号屋外埋設土器調査状況
(南東から)



5号屋外埋設土器は廃棄場所から検出された。埋設土器は斜位状態で、蓋石を伴って出土。

6号屋外埋設土器は環状列石下から検出された。埋設土器は加曾利E3式土器の胴部で、斜位状態で出土。列石が蓋石となっていた。

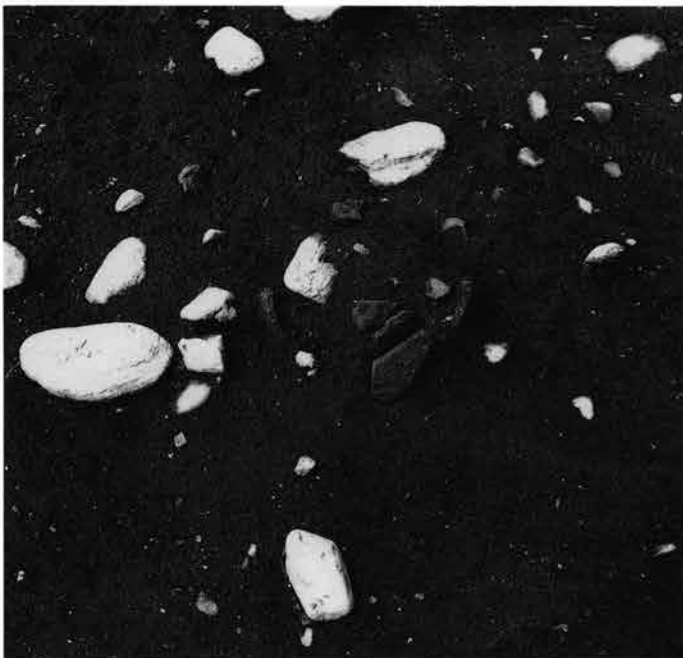
(本文PP. 374~390)



1



2



3



4

1. 7号屋外埋設土器(北東から)
2. 8号屋外埋設土器(北東から)
3. 9号屋外埋設土器(北から)
4. 9号屋外埋設土器調査状況
(西から)
5. 10号屋外埋設土器(北から)

7号屋外埋設土器は加曾利E3式土器の両耳壺で正位状態で出土した。

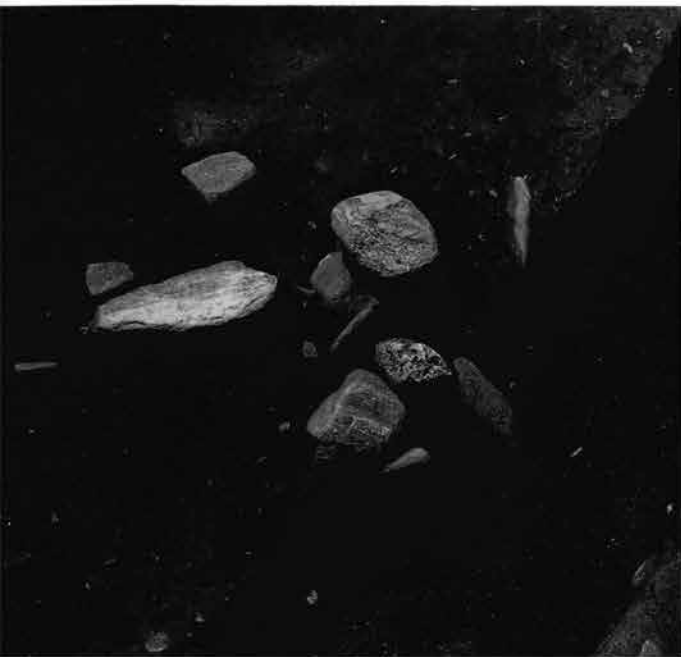
8号屋外埋設土器は土器片を利用したもので蓋石を伴っていた。

9号屋外埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E3式土器で、正位状態で出土。凹石が蓋石となっていた。

10号屋外埋設土器は加曾利E3式土器の胴下半部で、正位状態で出土。
(本文PP.374~390)



5



PL.90

1. 1号土壙(東から)
2. 2号土壙検出状況(東から)
3. 2号土壙完掘状況(東から)
4. 3・4号土壙(南から)

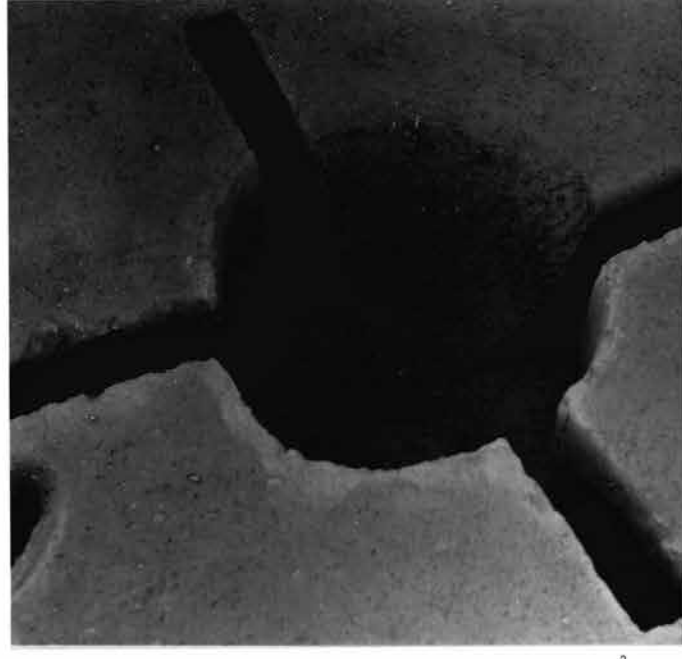
PL.91

1. 3号土壙墓標(東から)
2. 3号土壙完掘状況(北東から)
- 3・4. 3号土壙残存脂肪分析土壌採取
5. 5号土壙検出状況(南から)
6. 5号土壙完掘状況(南から)





1



2



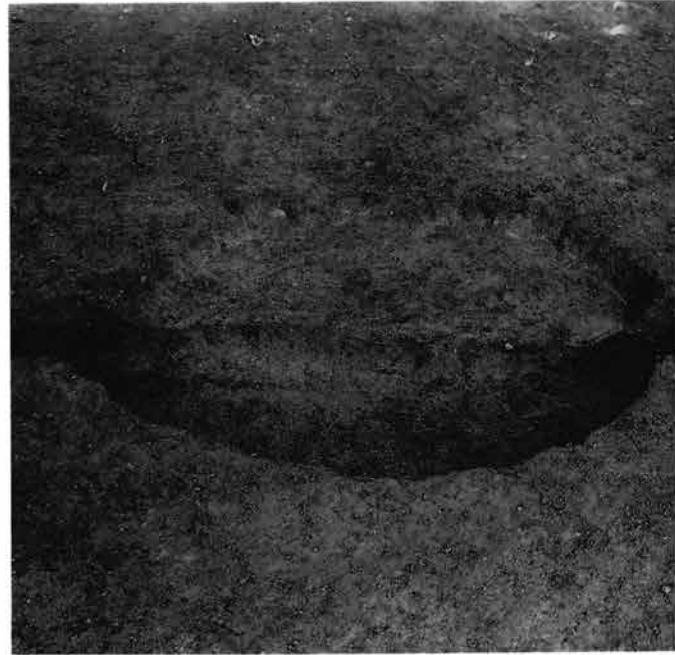
3



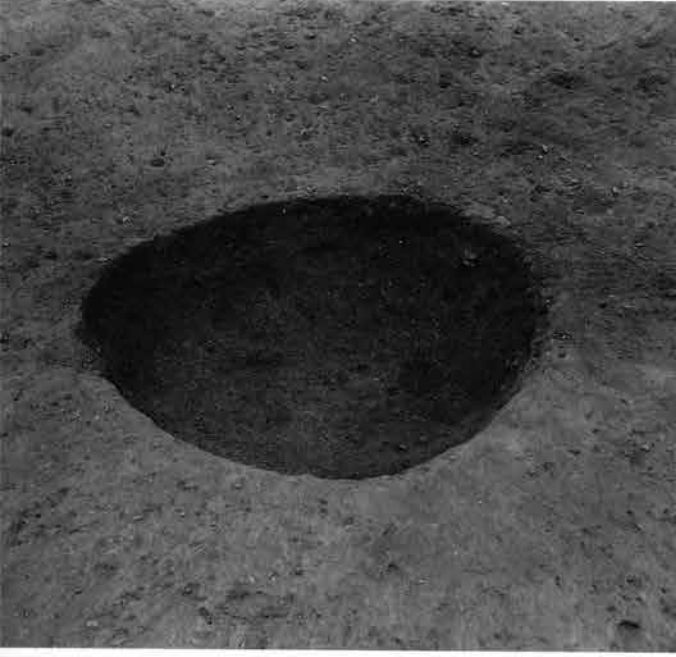
4



5



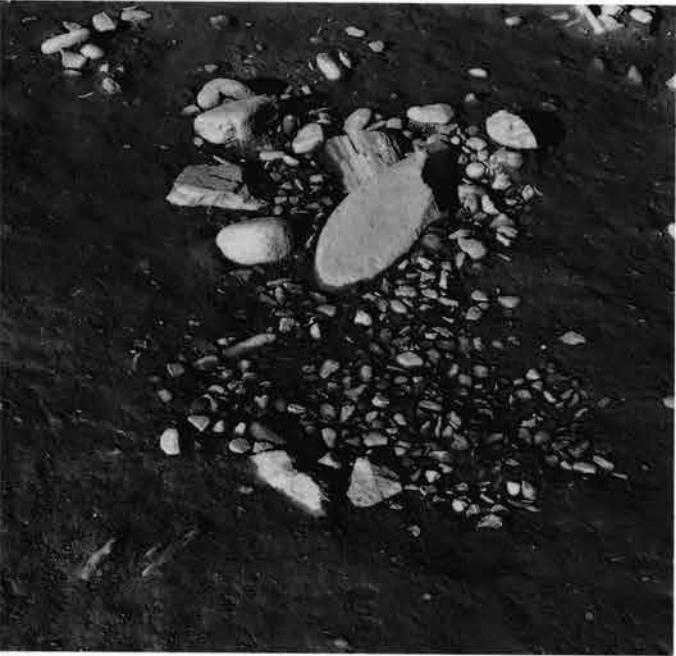
6



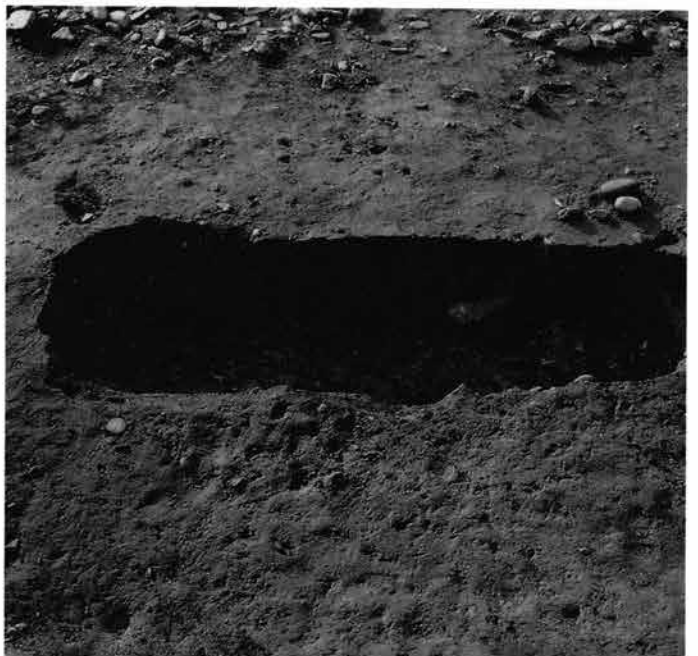
1



2



3



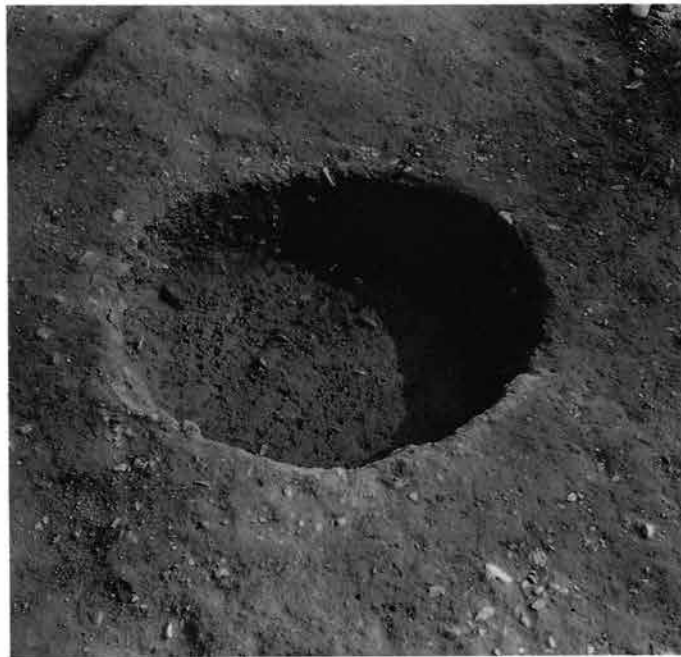
4



5



1



2



3



4

PL.92

1. 6号土壙(南から)
2. 7号土壙検出状況(北から)
3. 8号土壙検出状況(北から)
4. 8号土壙完掘状況(東から)
5. 8号土壙スナップ

PL.93

1. 9号土壙(南から)
2. 10号土壙(北から)
3. 11号土壙(南から)
4. 12号土壙(南から)
5. 13号土壙(東から)



5



1



2



3



4



5



6



1



2



3



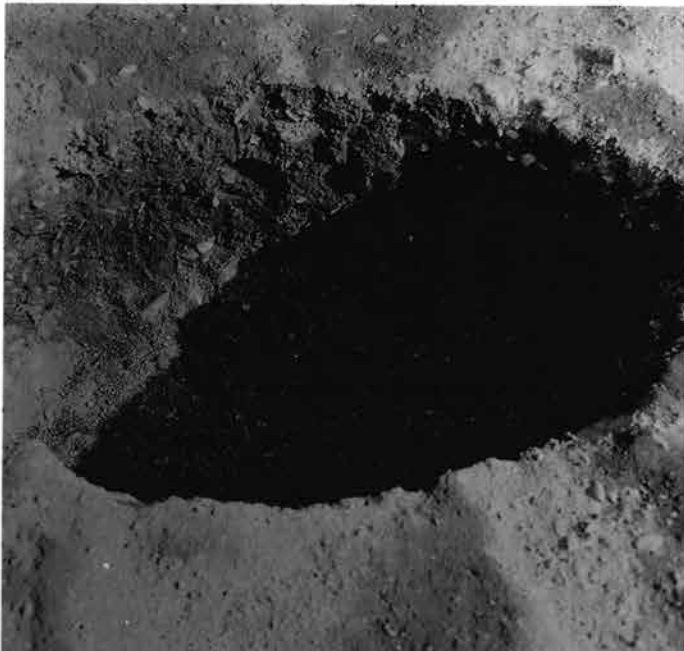
4

PL.94

- 1. 14号土壙(南東から)
- 2. 15号土壙(北西から)
- 3. 16号土壙(北西から)
- 4. 17号土壙(南から)
- 5. 18号土壙検出状況(北西から)
- 6. 18号土壙完掘状況(南から)

PL.95

- 1. 19号土壙検出状況(北西から)
- 2. 19号土壙墓標(北西から)
- 3. 19号土壙調査状況(南東から)
- 4. 19号土壙完掘状況(南から)
- 5. 20号土壙(西から)



5



1. 21号土壙検出状況(南東から)
2. 21号土壙調査状況(西から)
3. 21号土壙完掘状況(北東から)



2



3

- 1. 22号土城(東から)
- 2. 22号土城(東から)
- 3. 22号土城伏甕(南から)



1



2



3





1



2

PL.98

1. 廃棄場所(南東から)
2. 廃棄場所(東から)

PL.99

1. 廃棄場所多孔石出土状況
(東から)
2. 廃棄場所多孔石出土状況
(東から)
3. 廃棄場所調査スナップ
(北西から)
4. 廃棄場所石皿出土状況
(北西から)
5. 廃棄場所多孔石出土状況
(西から)

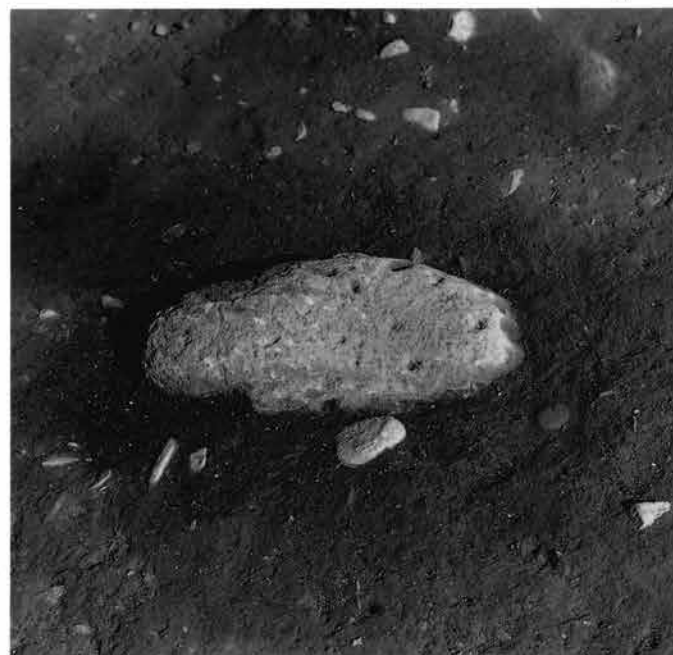
集落の北東端にあたる場所から検出されたが路線外にも延びている。廃棄場所の一角を調査できたものである。集落の存続期間(加曾利E3式期~E4式期)中、遺物が廃棄され続けたものであろう。
(本文PP.411~417)



3



4



5



1. グリッド調査状況(南から)
2. グリッド調査状況(東から)
3. グリッド調査スナップ



2



3



1



2



3

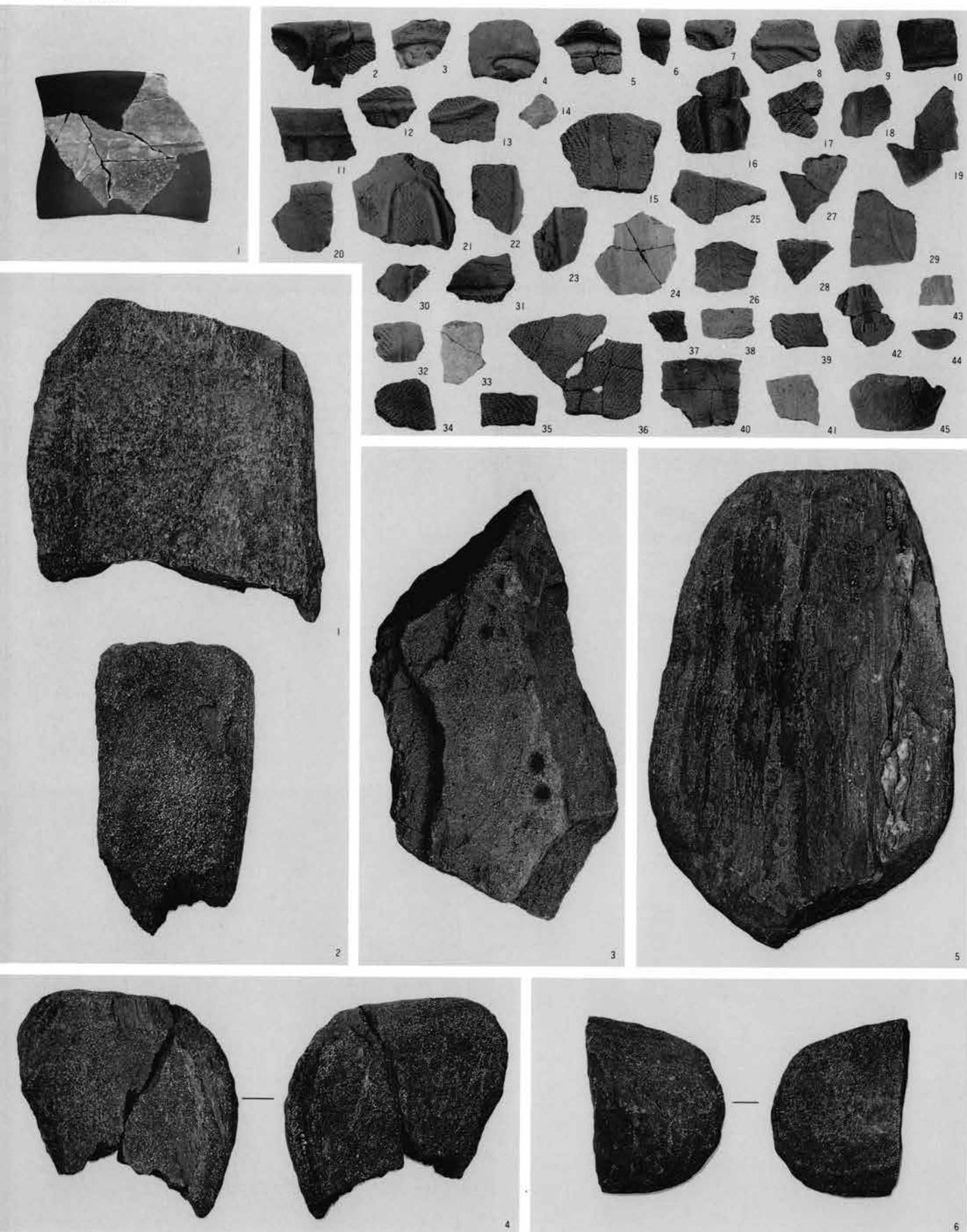
1. 石棒出土状況(北西から)
2. グリッド遺物出土状況
(北西から)
3. グリッド遺物出土状況
(東から)
4. 多孔石出土状況(北から)



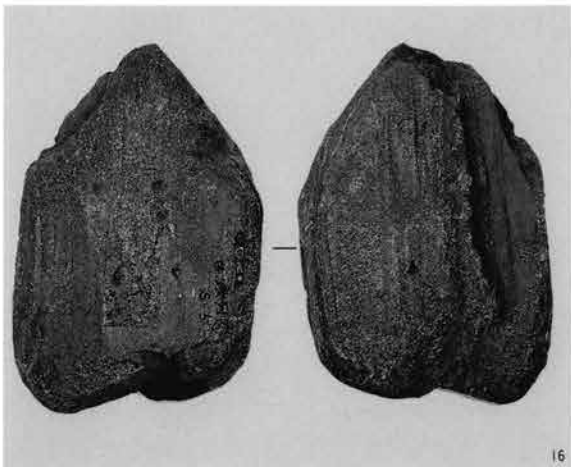
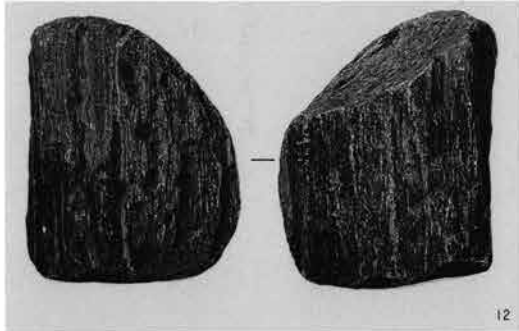
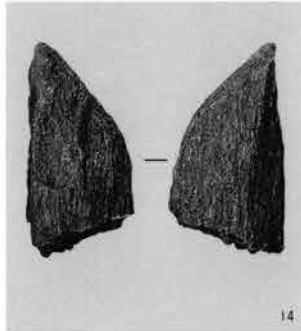
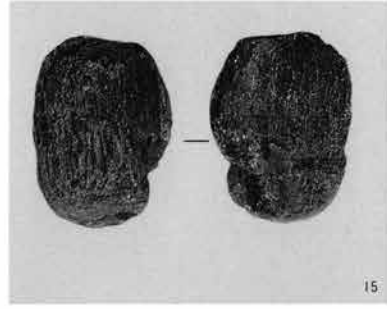
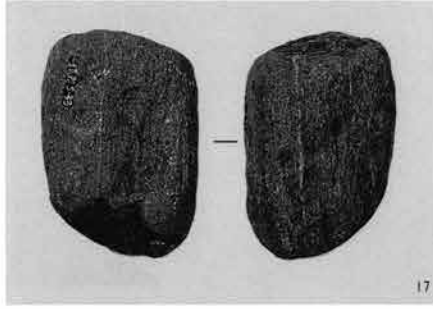
4

遺物写真は $\frac{1}{6}$ を基本とした。ただし大型土器については $\frac{1}{8}$ で掲載したものもある。
土器・石器の遺物番号は挿図中の番号と一致している。

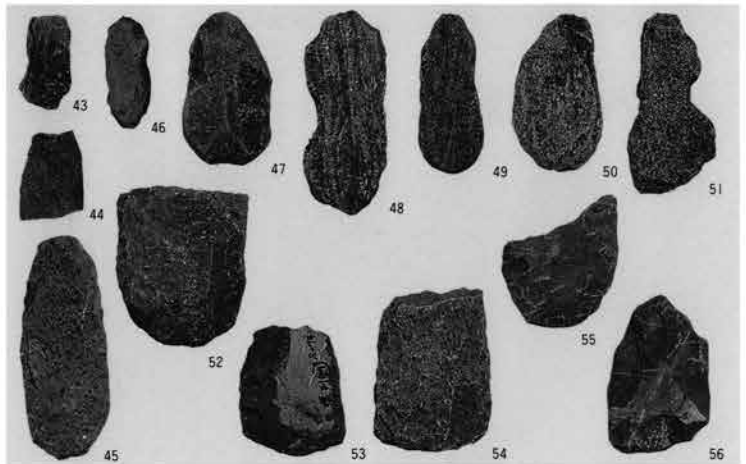
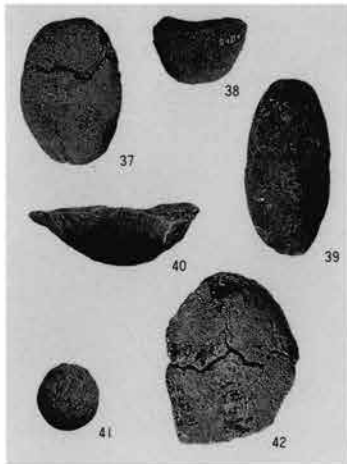
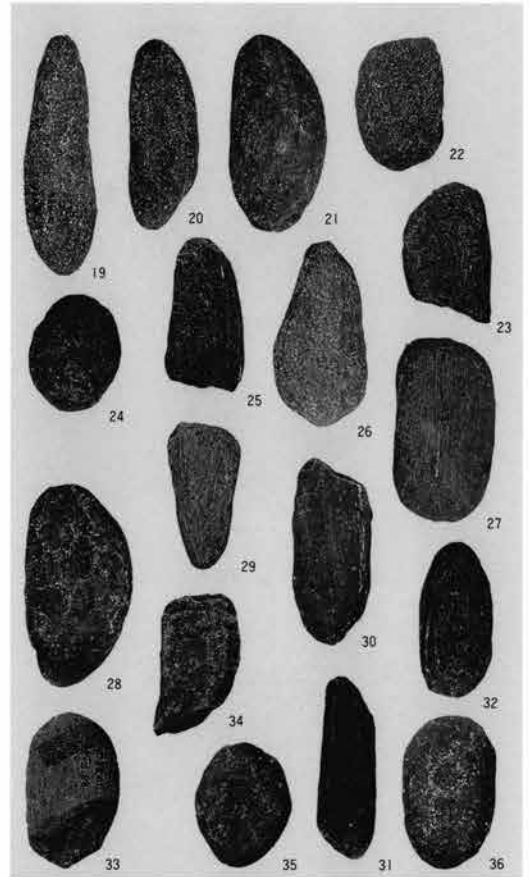
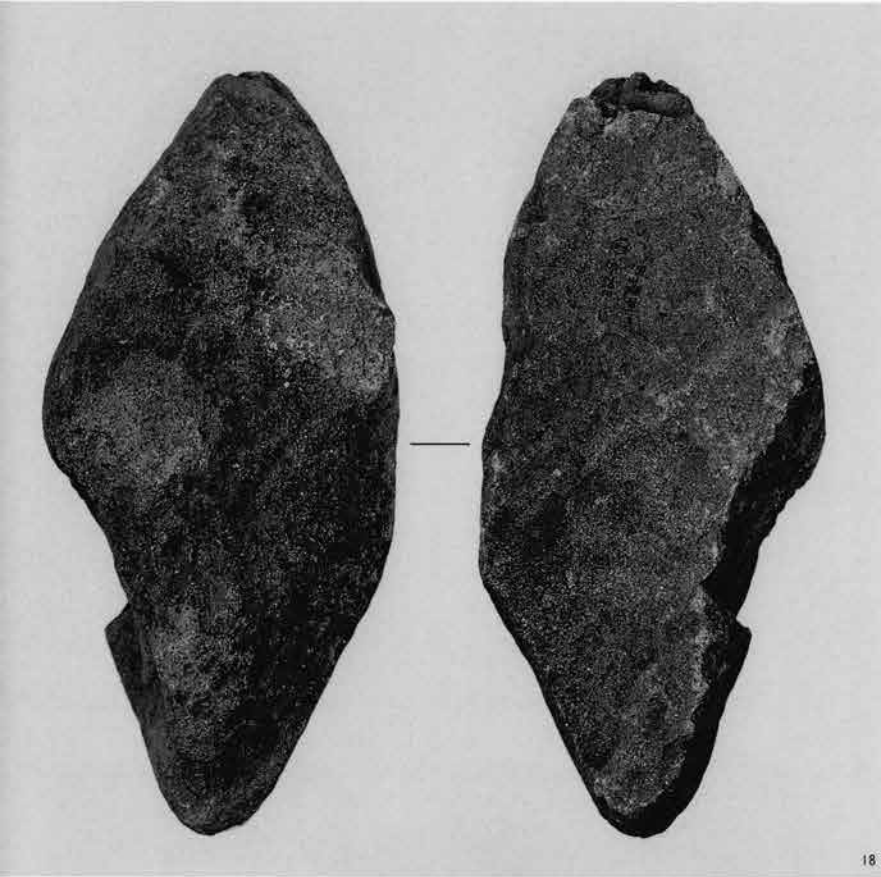
▼環状列石



▼環状列石



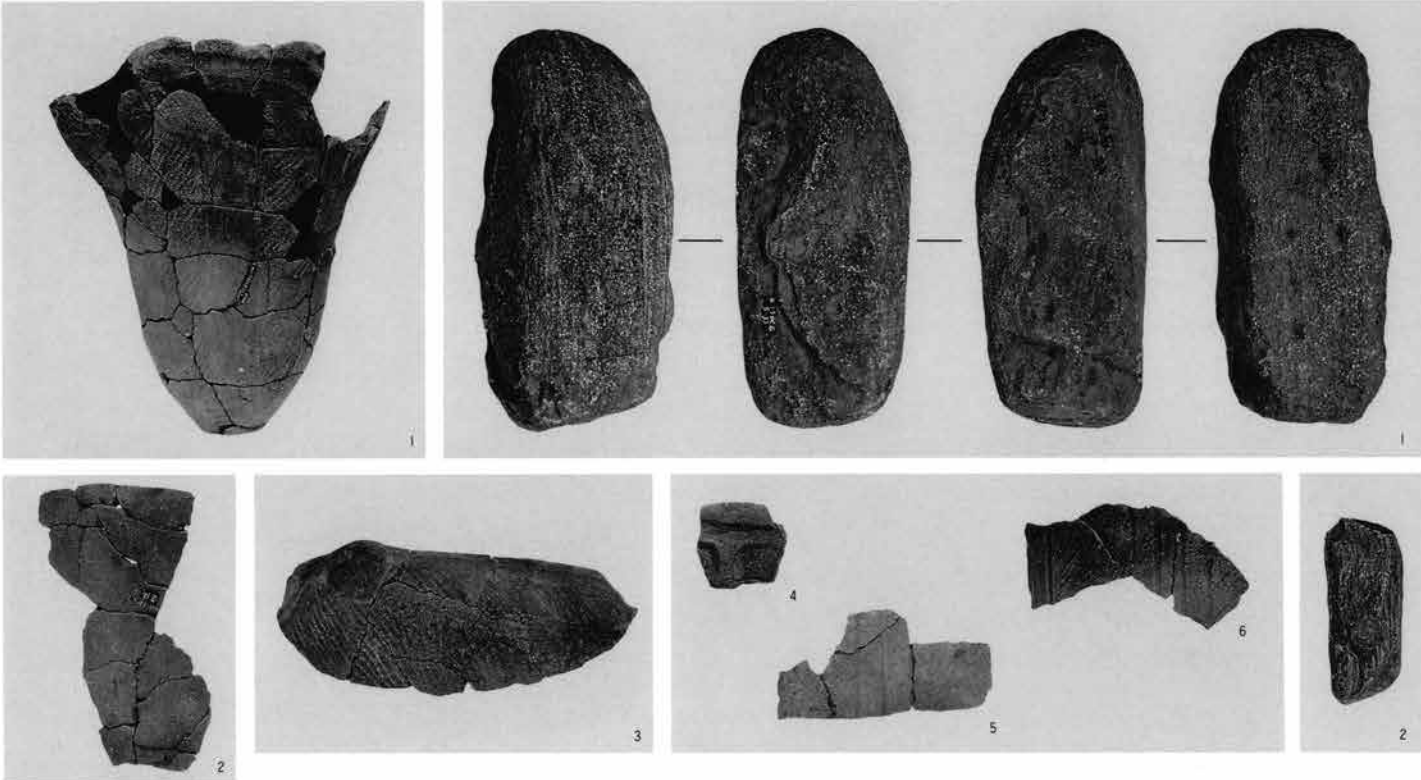
▼環状列石



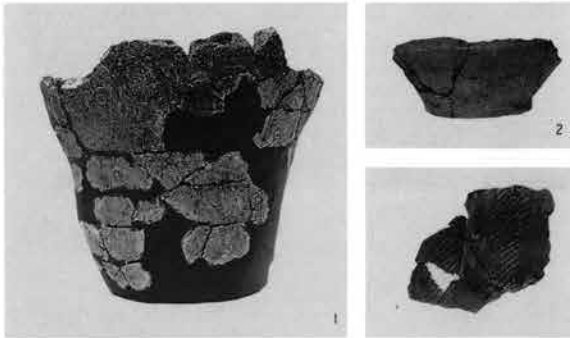
▼立石



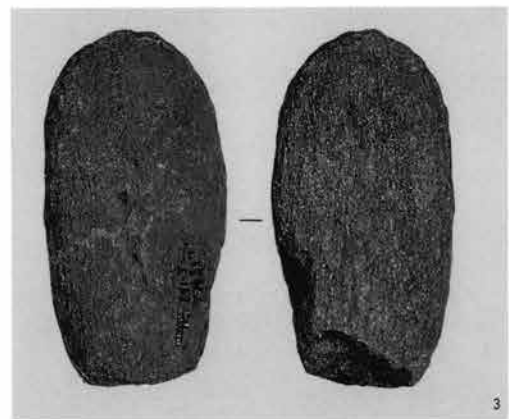
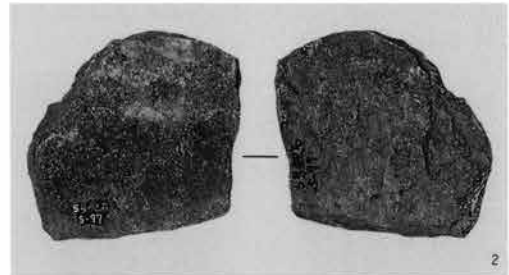
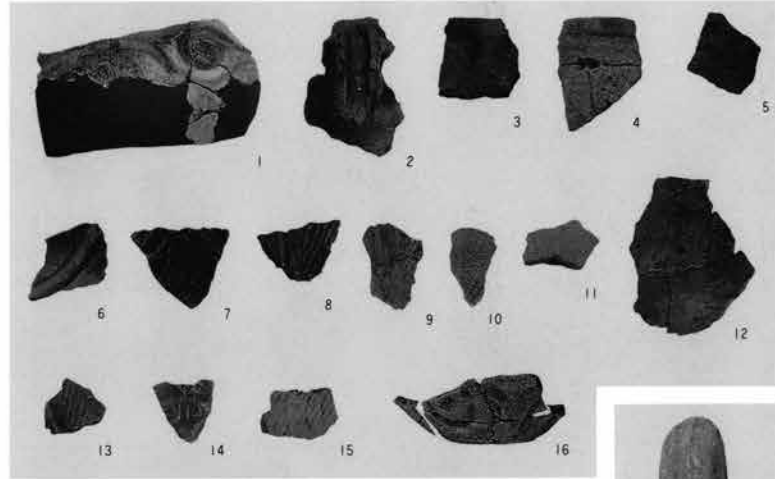
▼ 1号配石遺構(敷石住居跡)



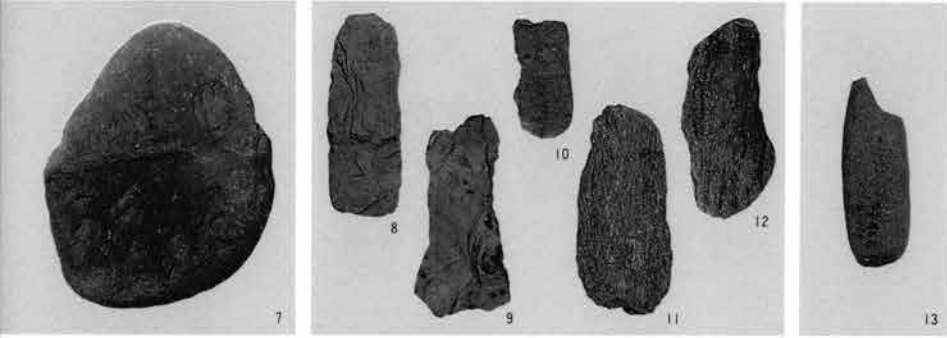
▼ 2号配石遺構(敷石住居跡)



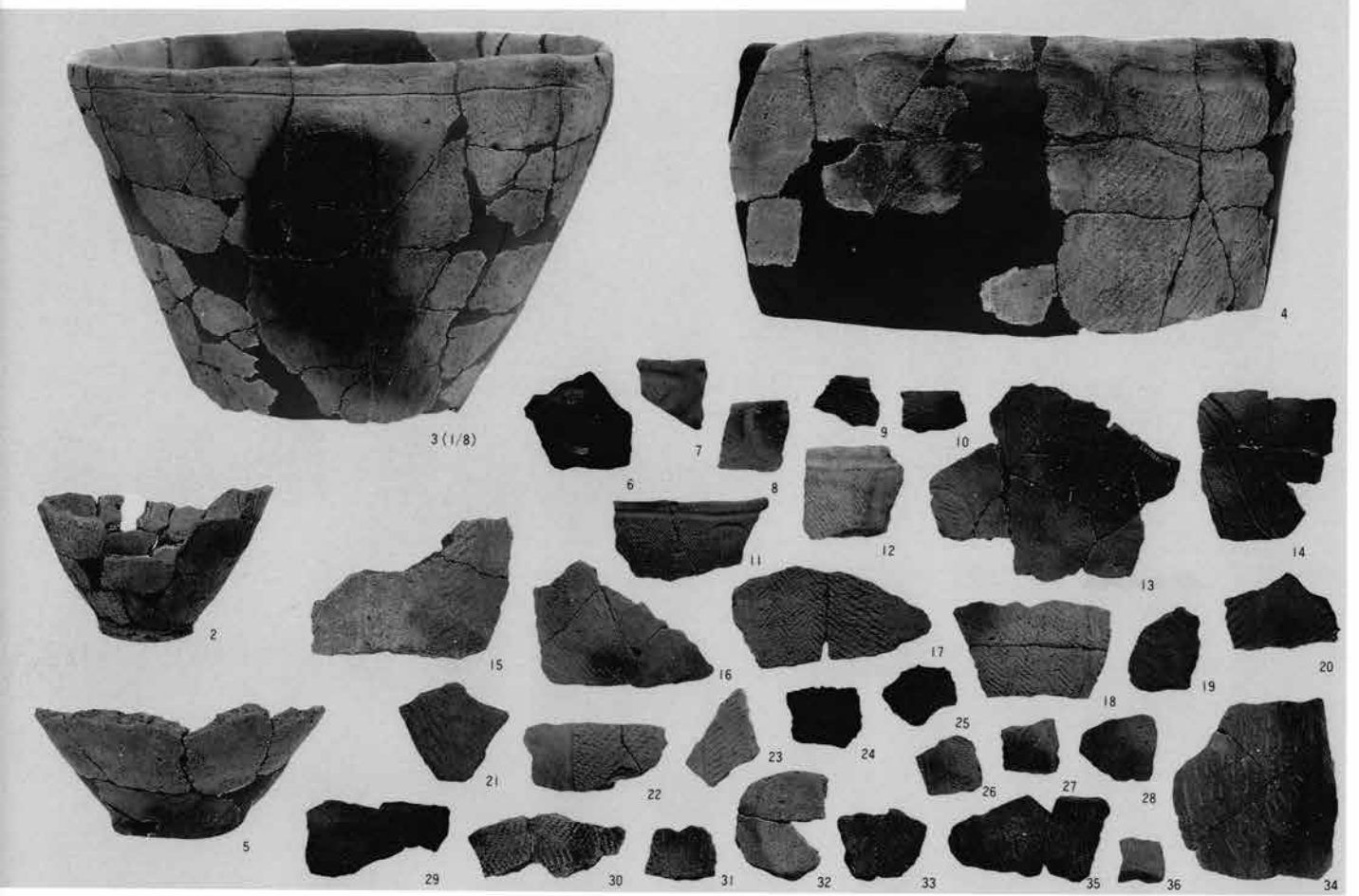
▼ 5号配石遺構(敷石住居跡)



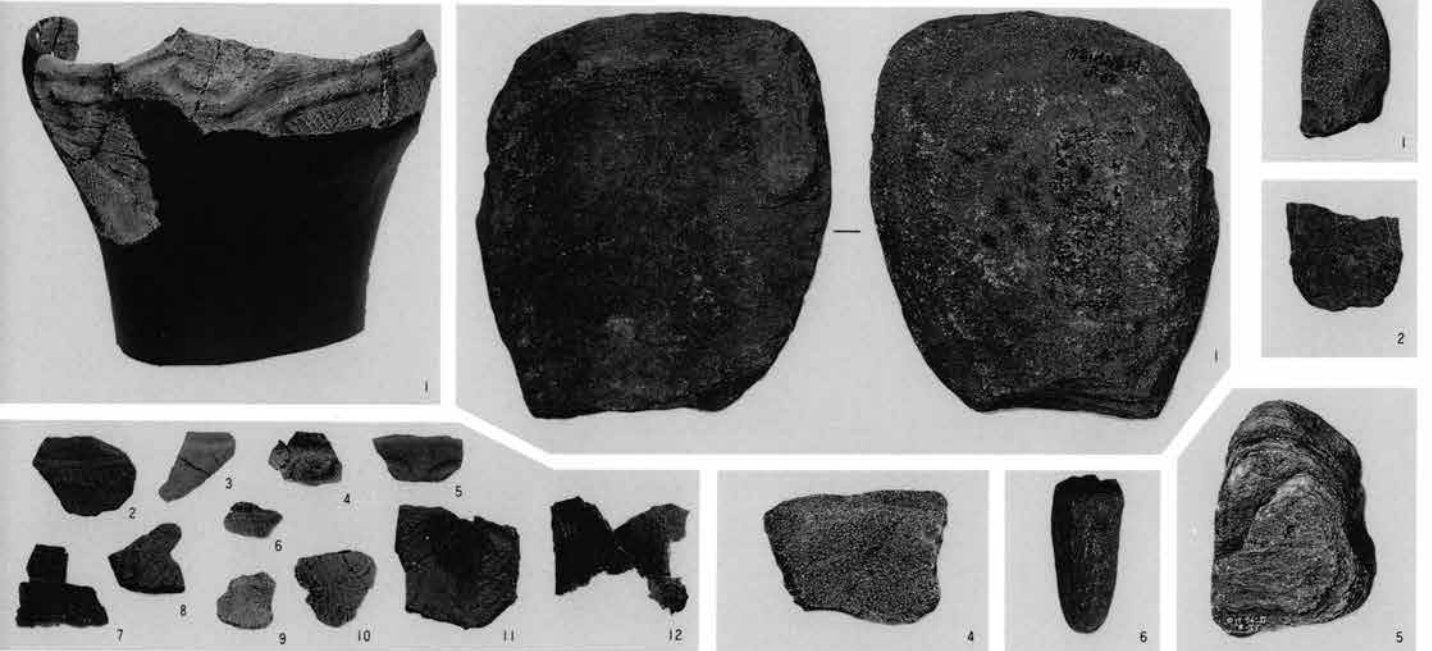
▼ 5号配石遺構(敷石住居跡)



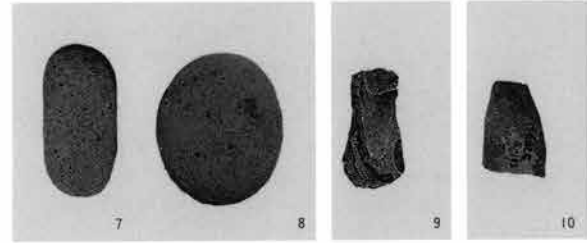
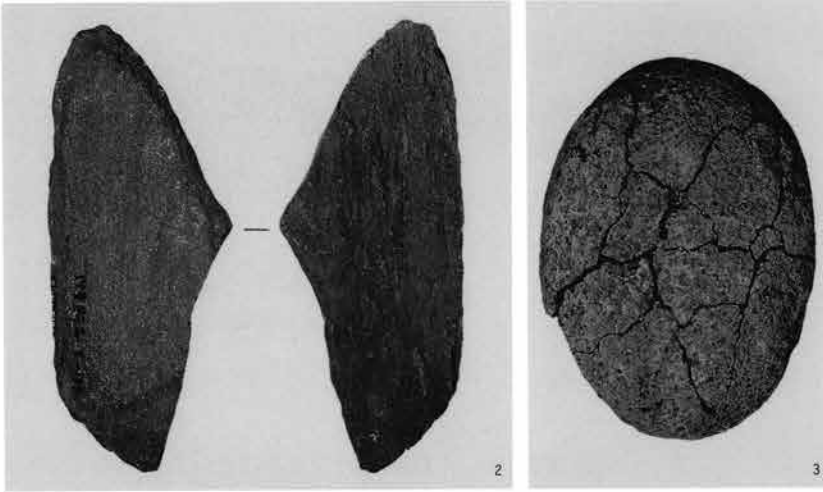
▼ 8号配石遺構(敷石住居跡)



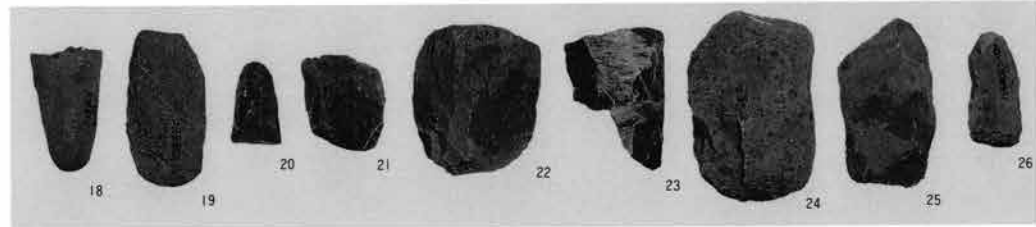
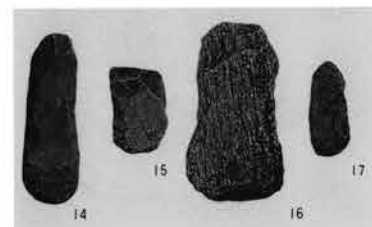
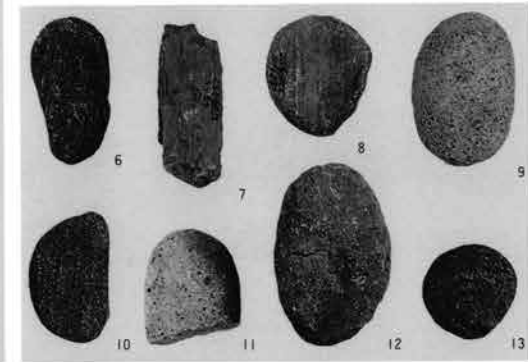
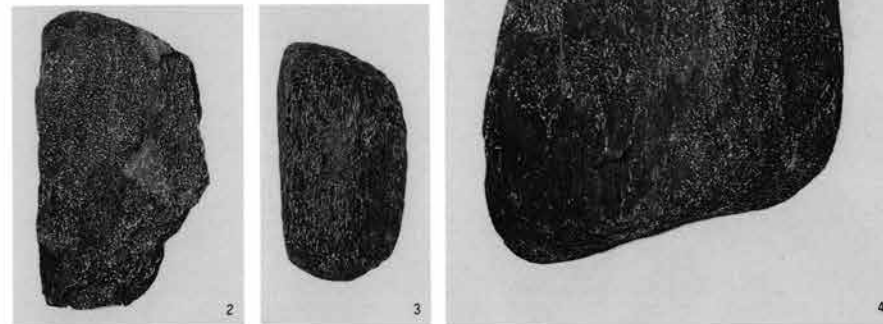
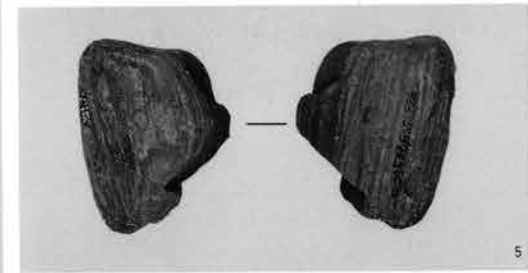
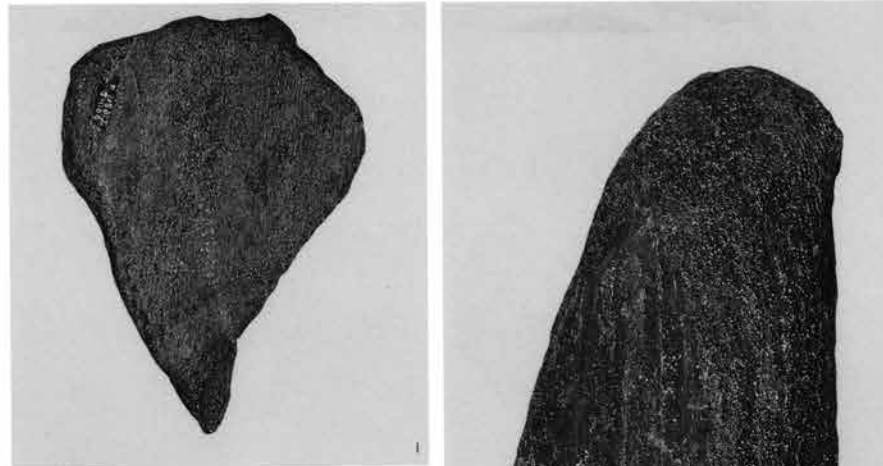
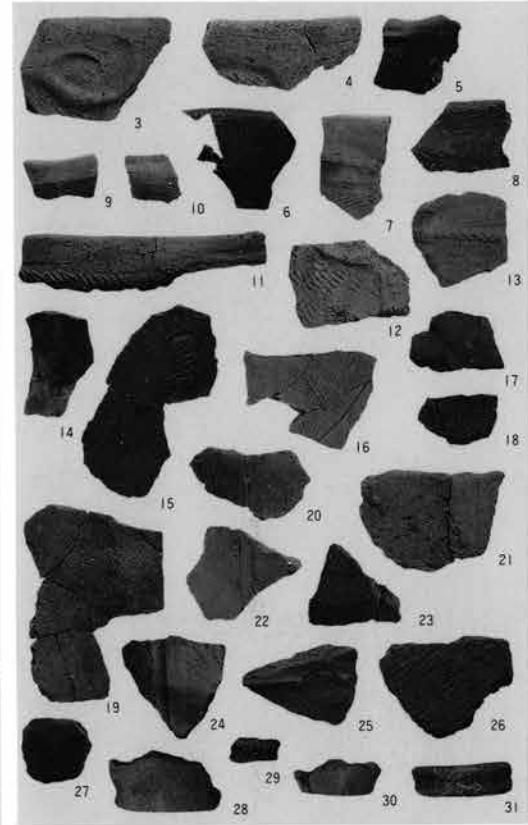
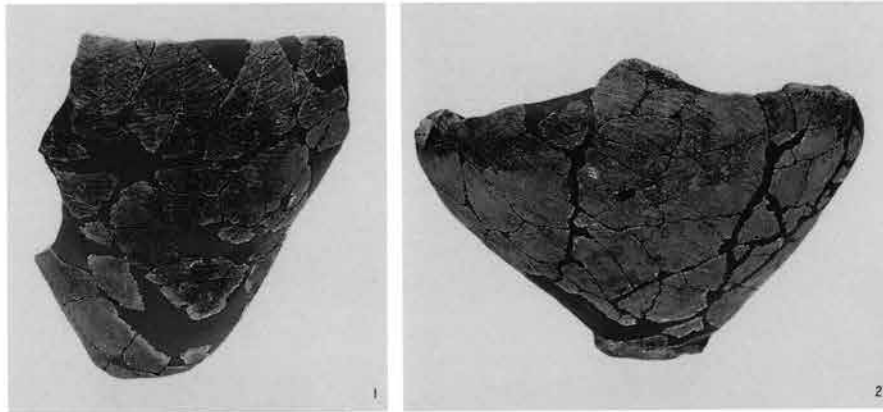
▼ 17号配石遺構(敷石住居跡)



▼17号配石遺構(敷石住居跡)

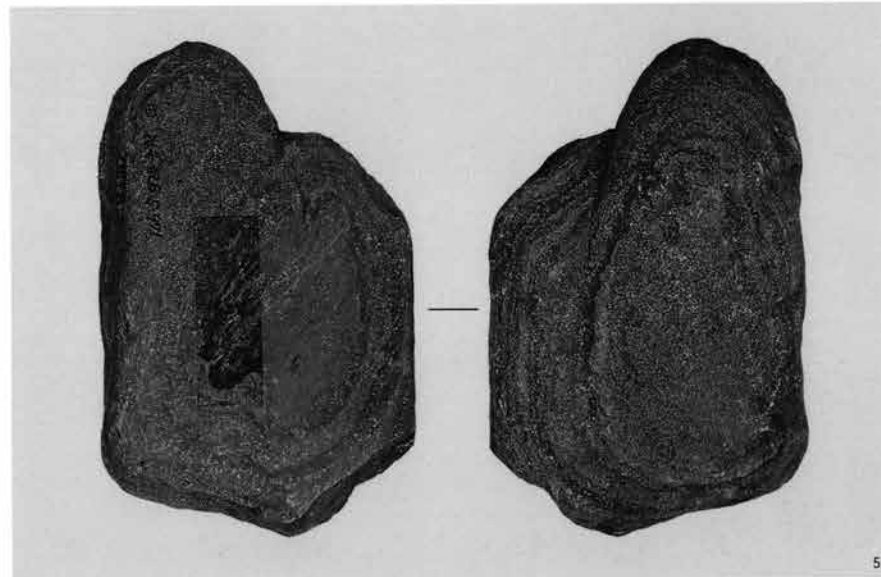
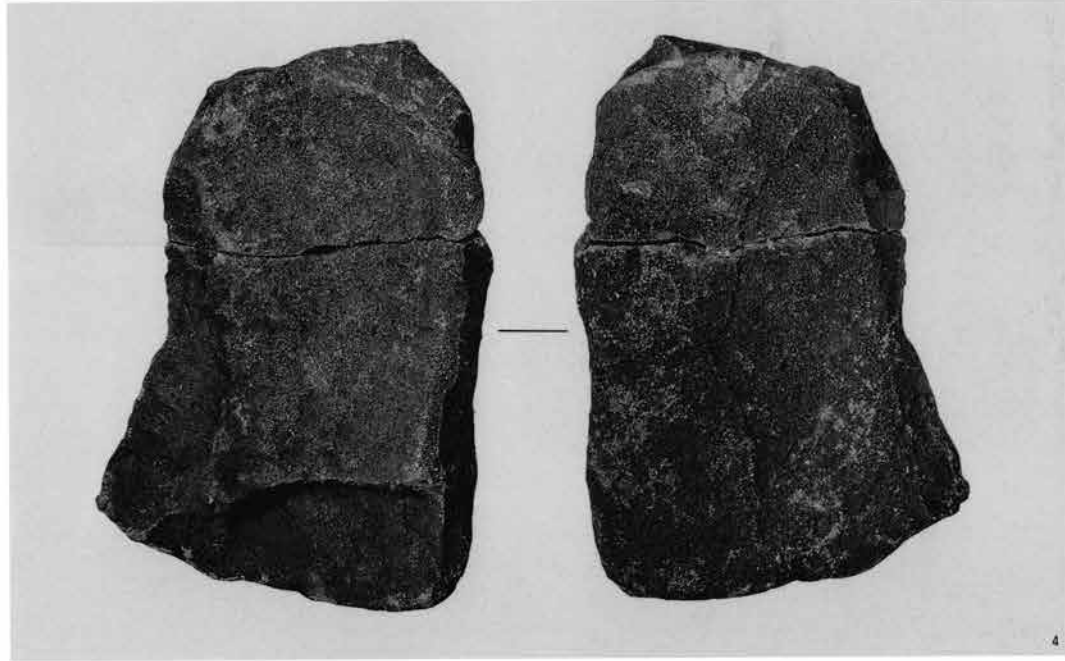
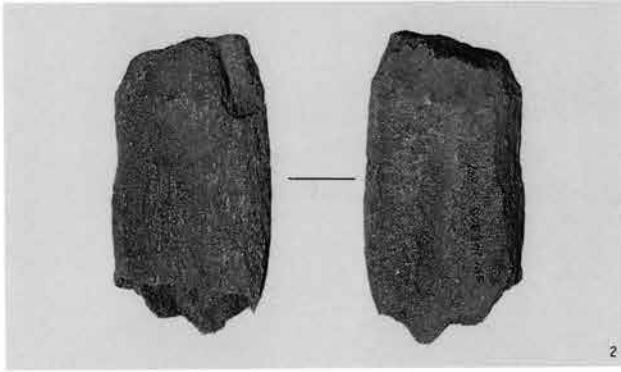
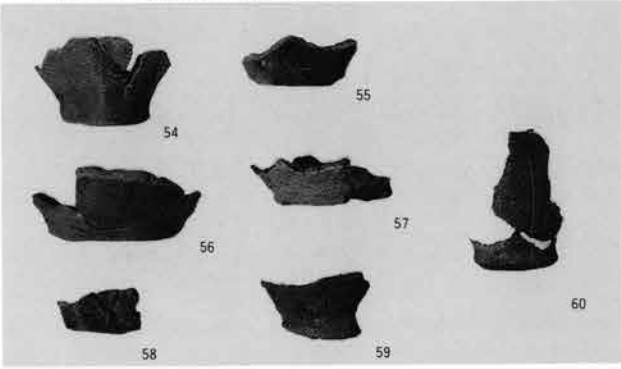


▼23号配石遺構(敷石住居跡)

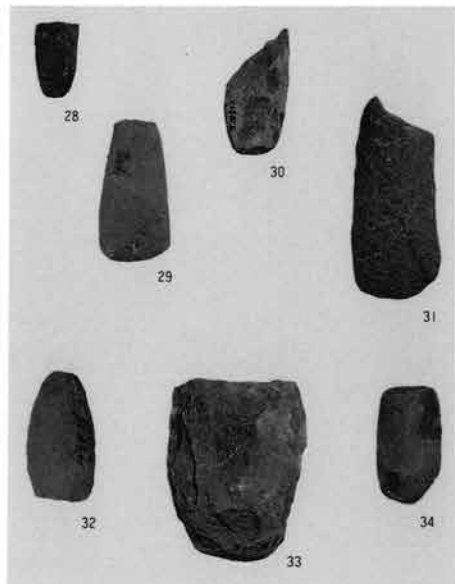
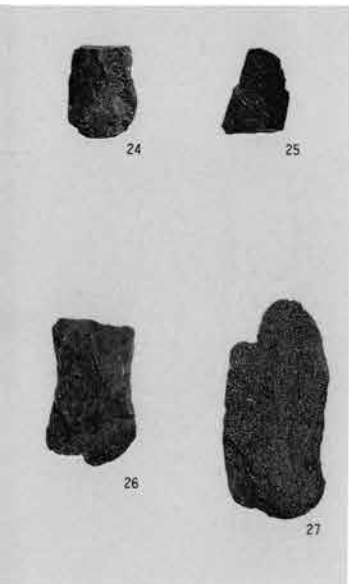
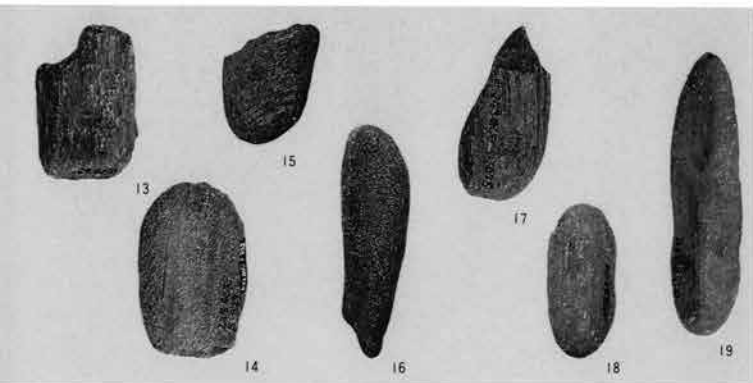
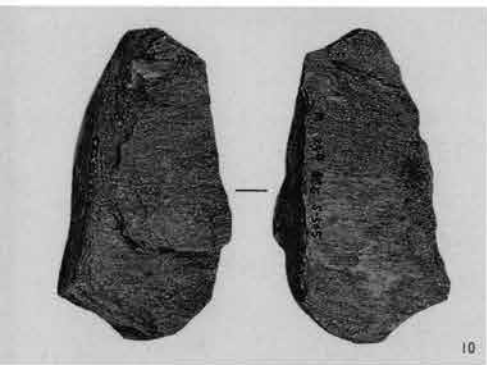
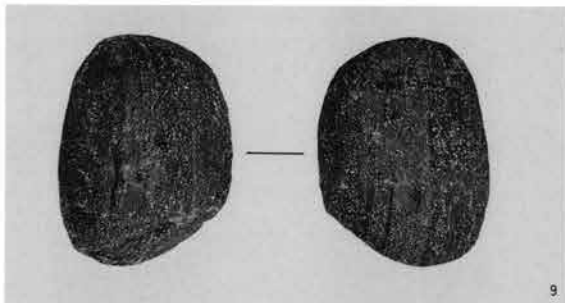
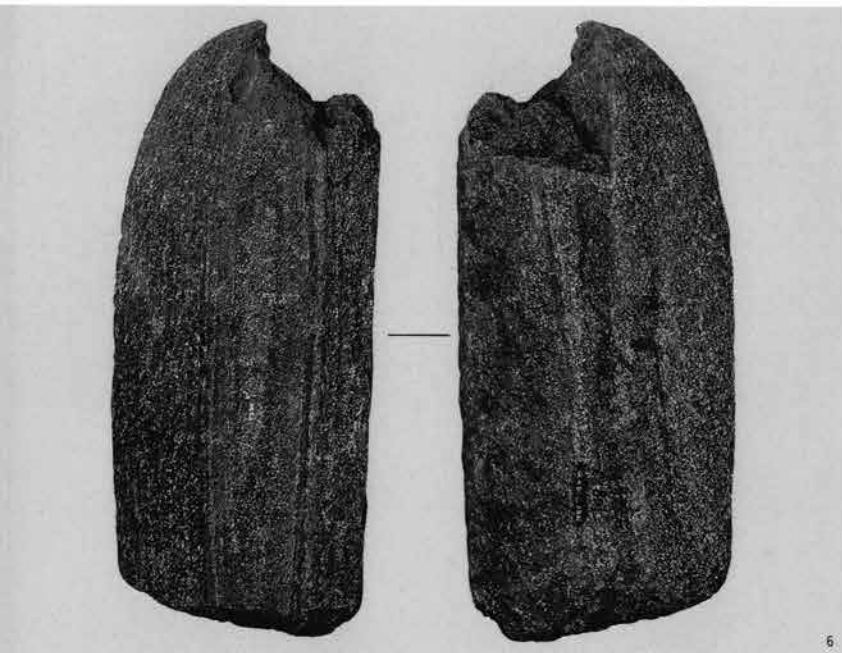




▼24号配石遺構(敷石住居跡)



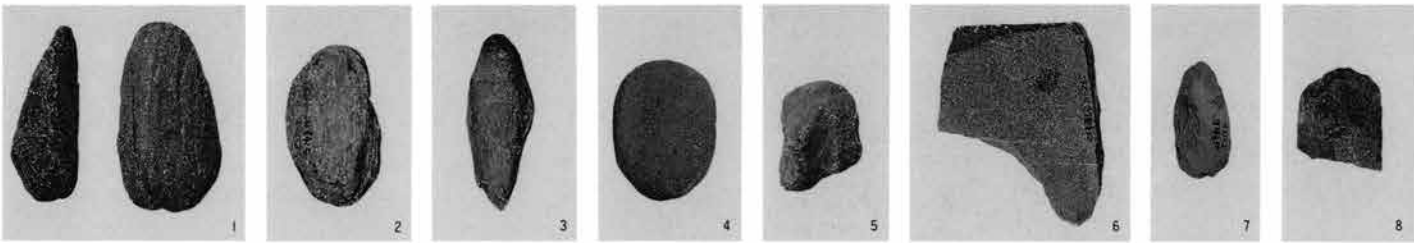
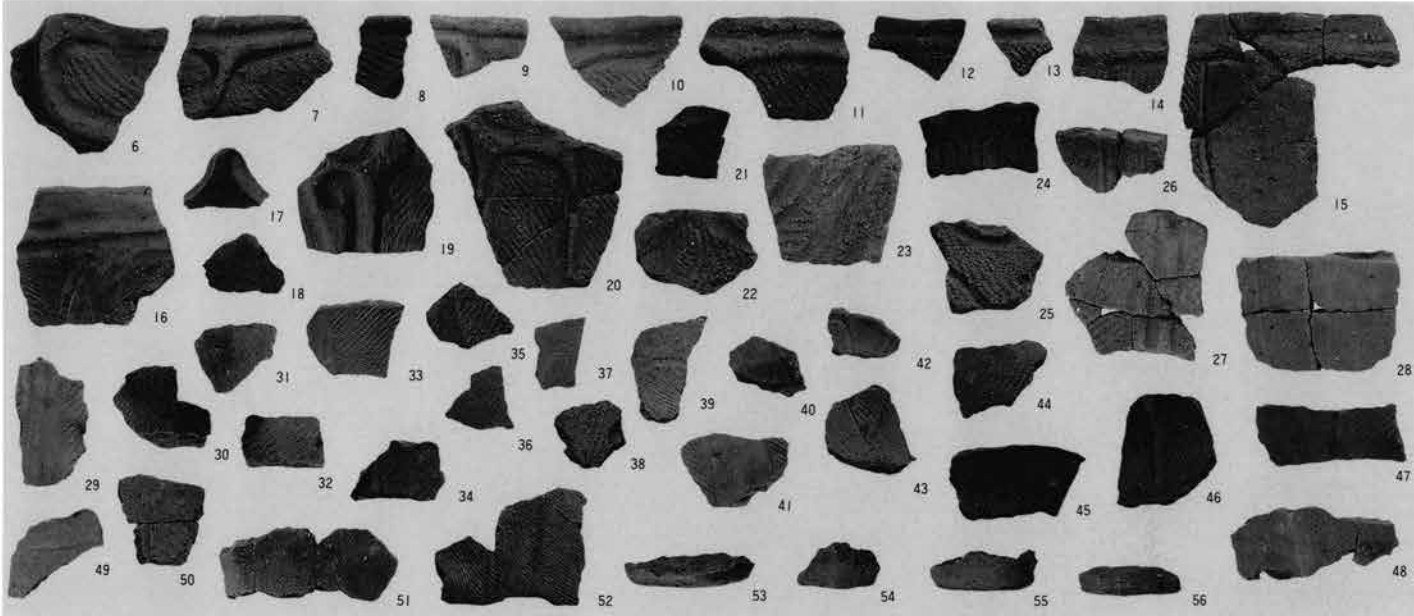
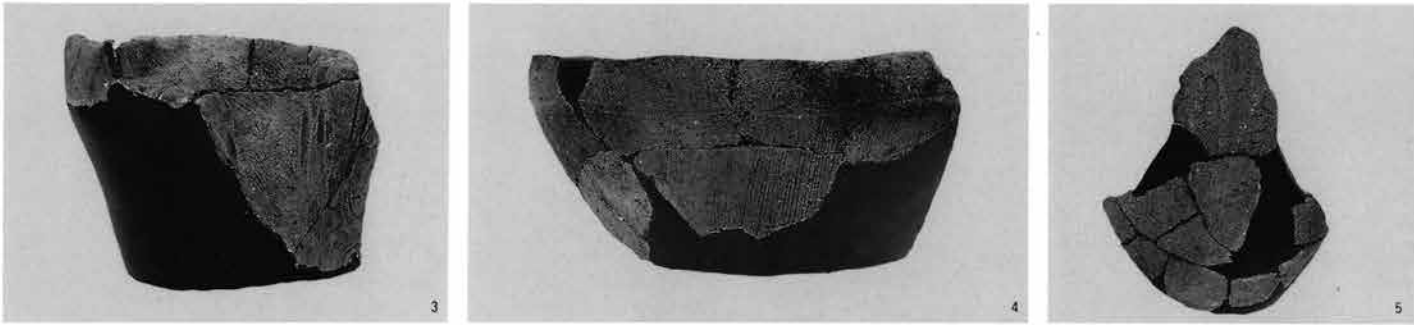
▼24号配石遺構(敷石住居跡)



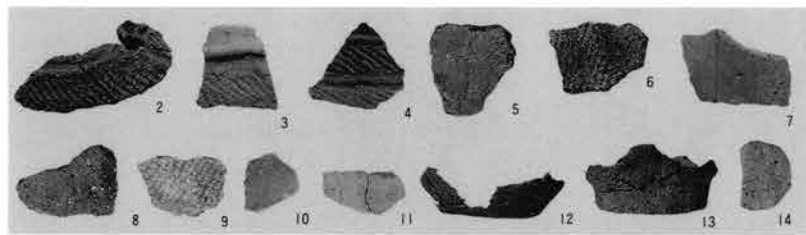
▼26号配石遺構(敷石住居跡)



▼26号配石遺構(敷石住居跡)

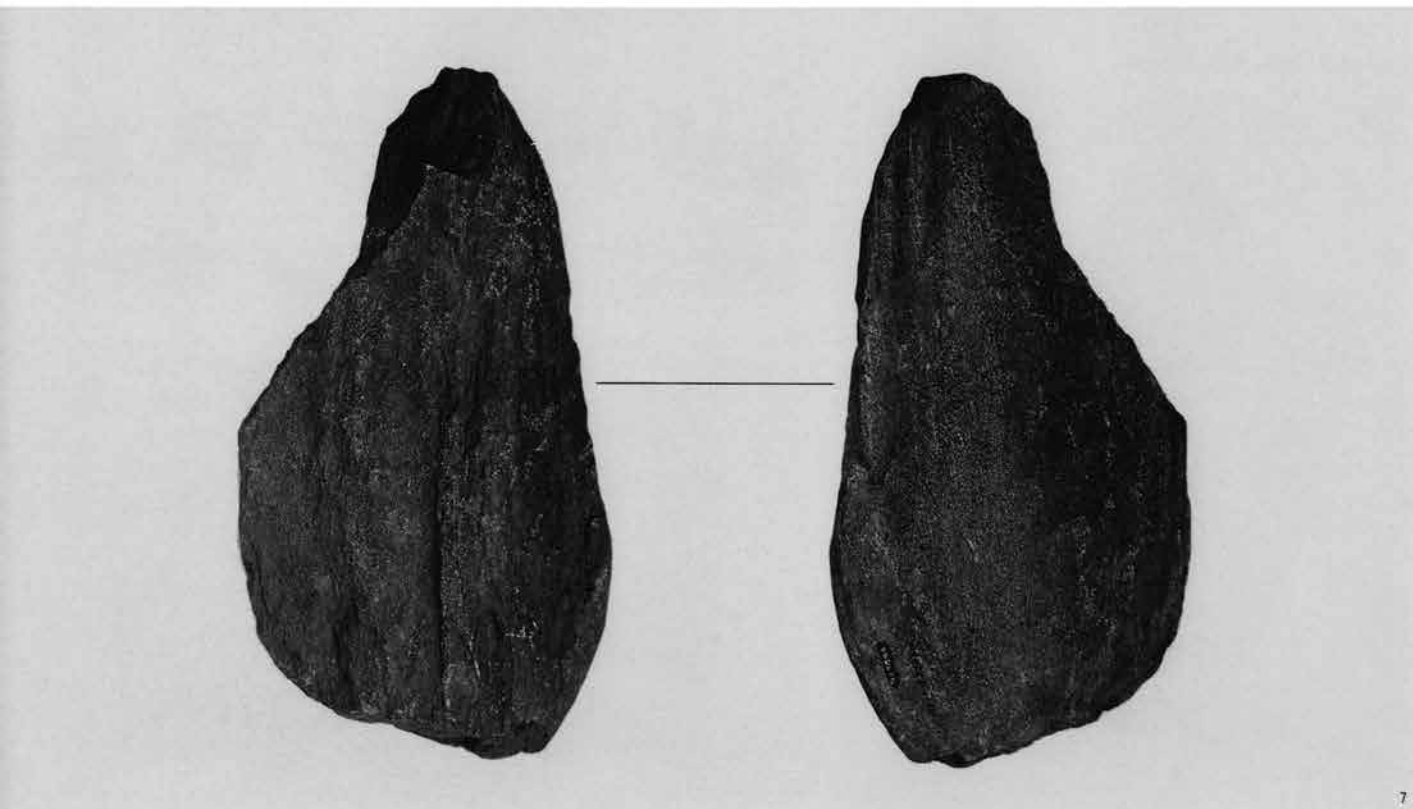
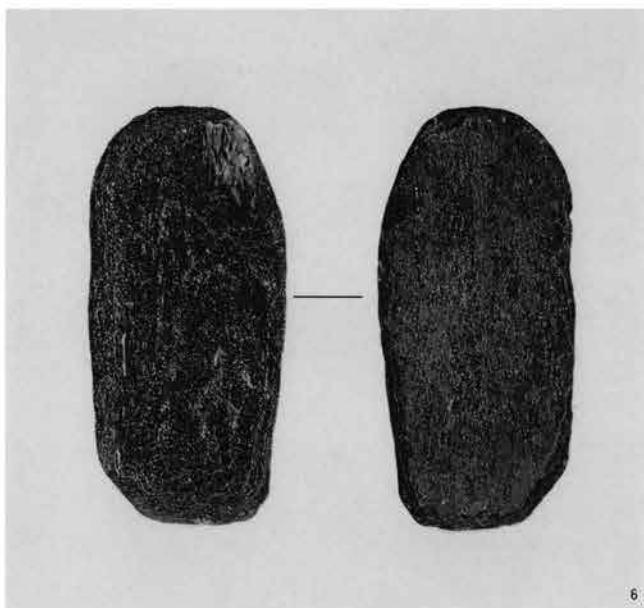
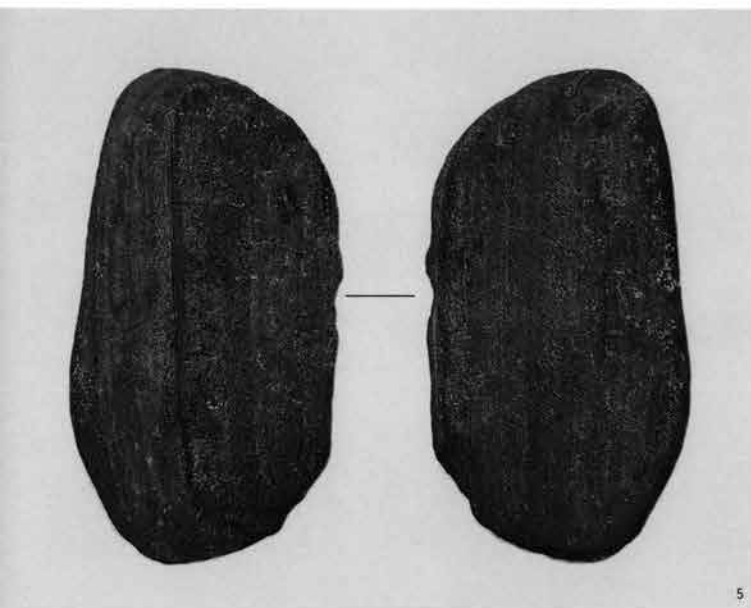
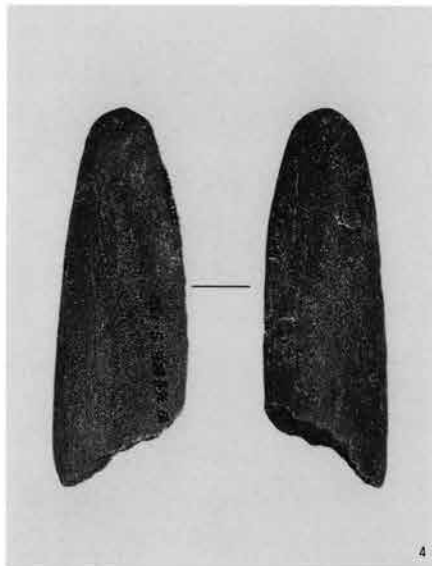


▼36号配石遺構(敷石住居跡)

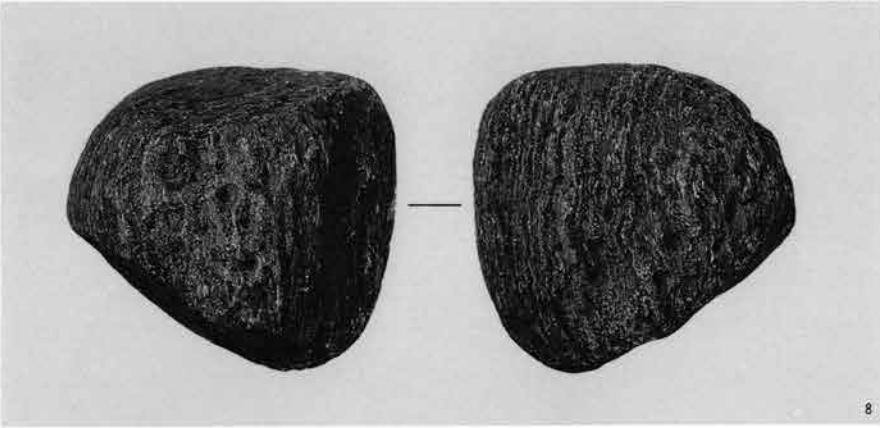


1 (1/8)

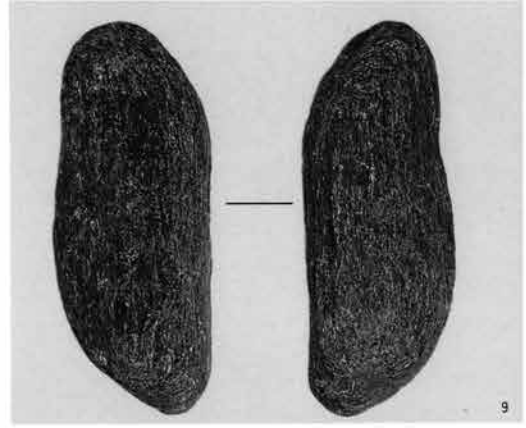
1



▼36号配石遺構(敷石住居跡)



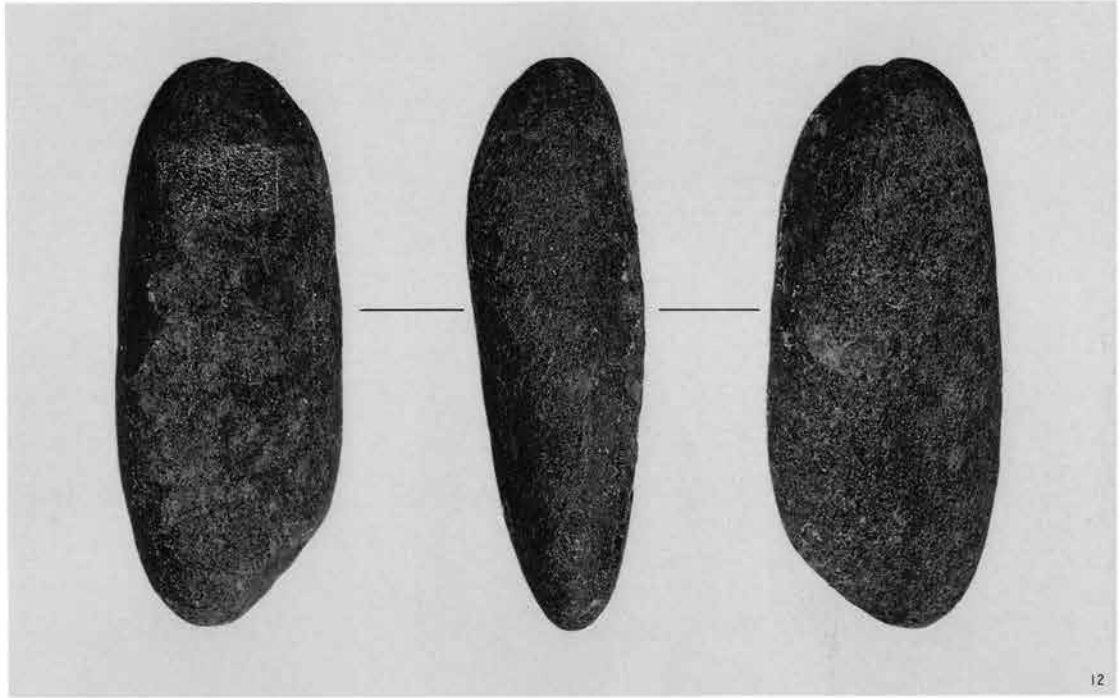
8



9



10



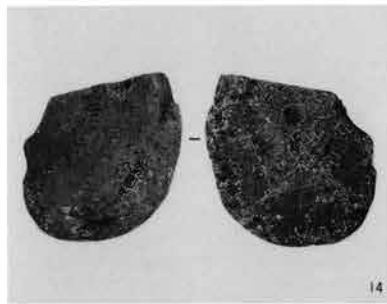
12



11



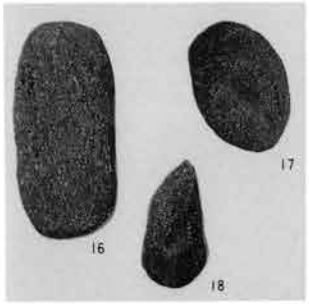
13



14



15



16

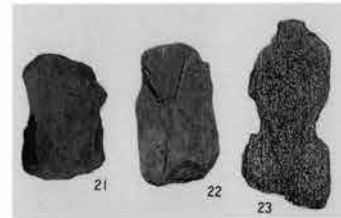
17

18



19

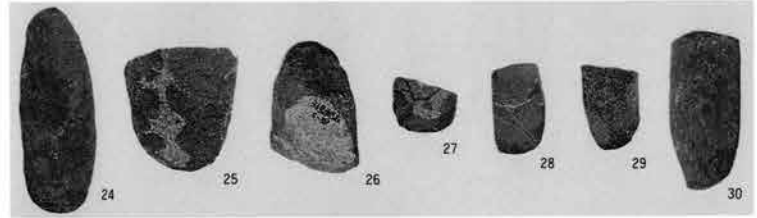
20



21

22

23



24

25

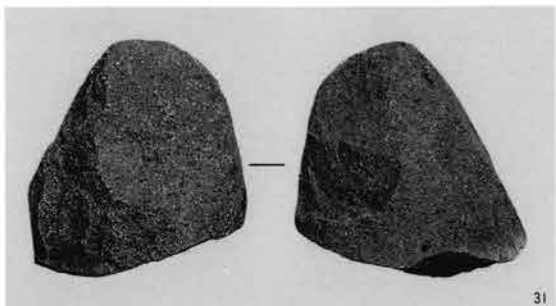
26

27

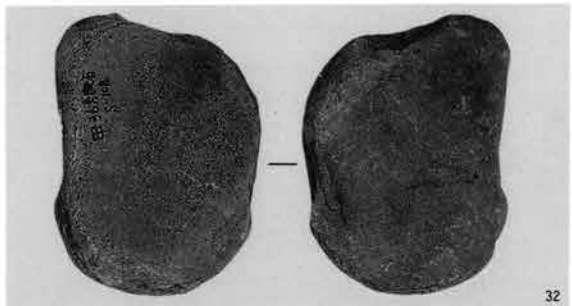
28

29

30



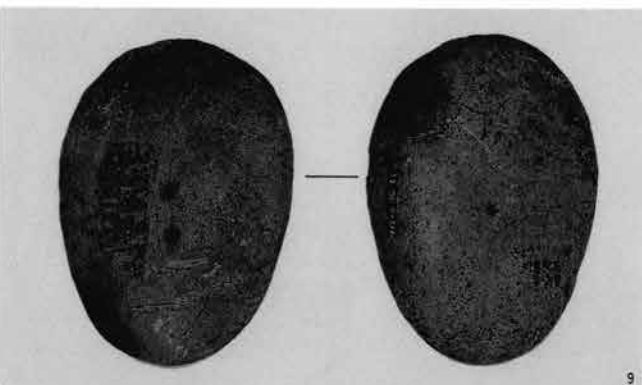
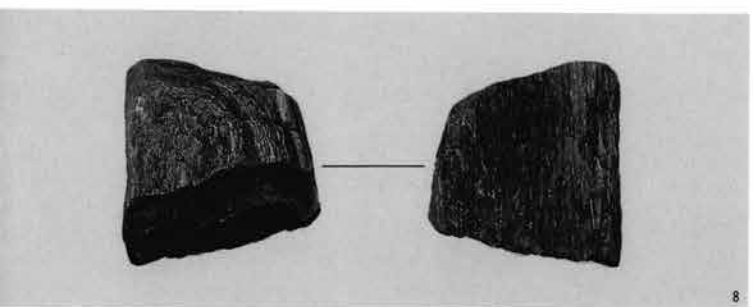
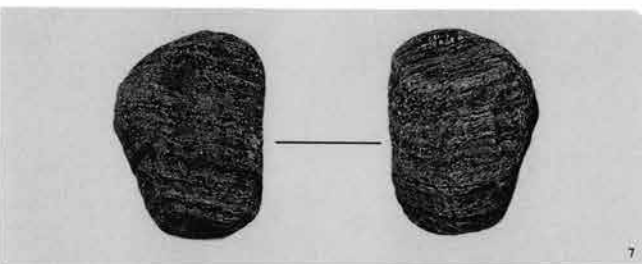
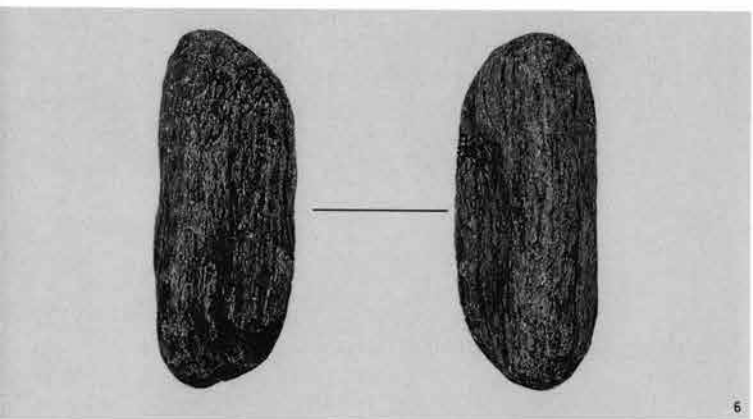
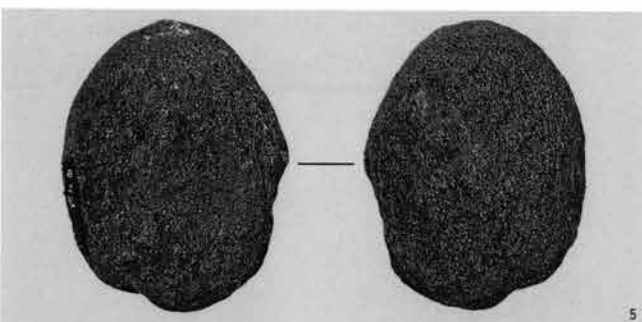
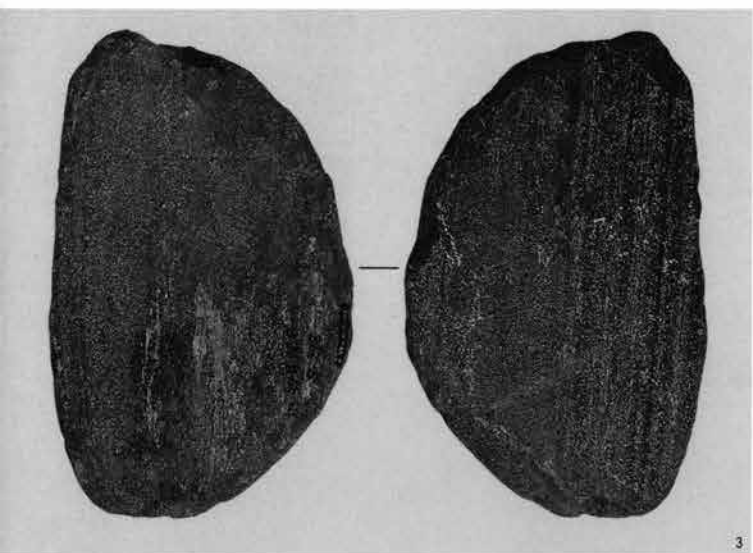
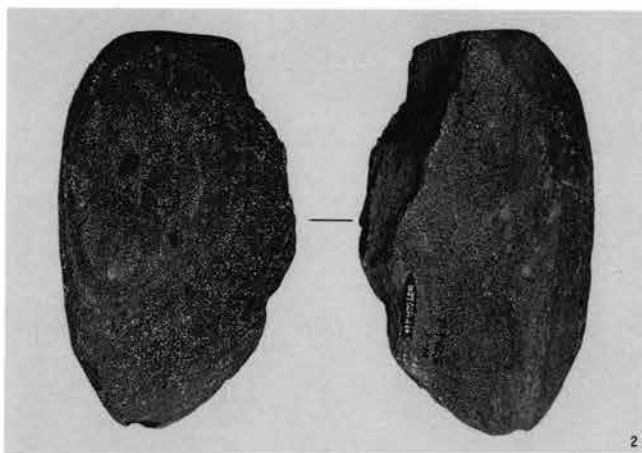
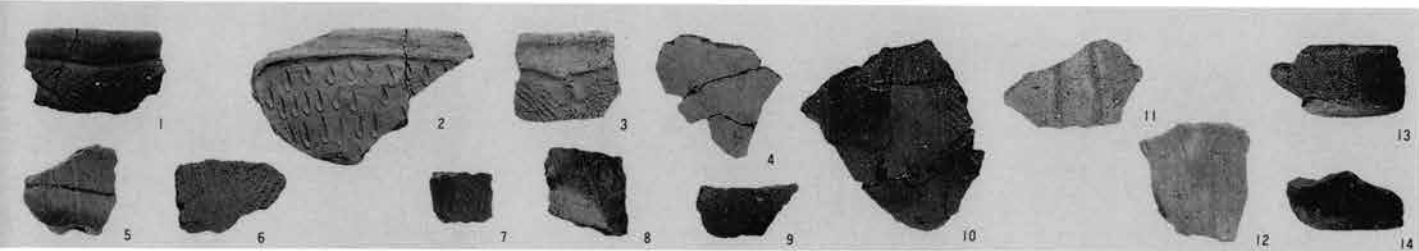
31



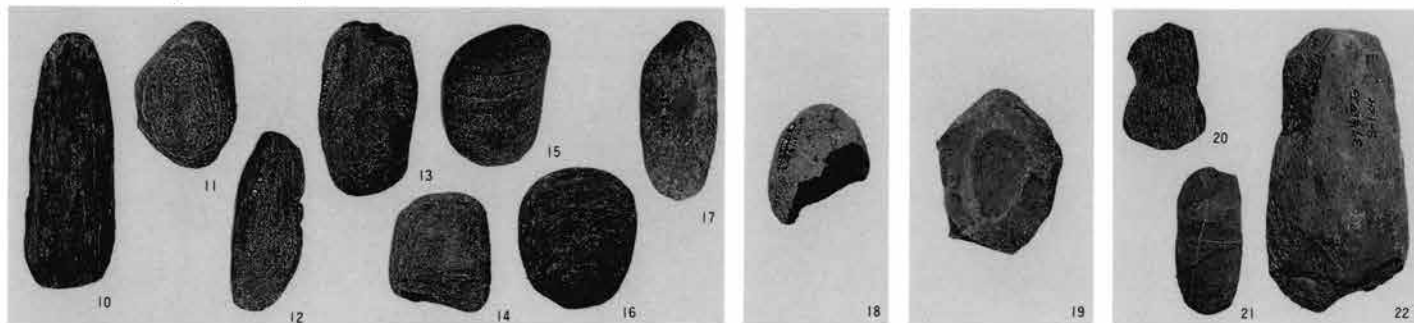
32



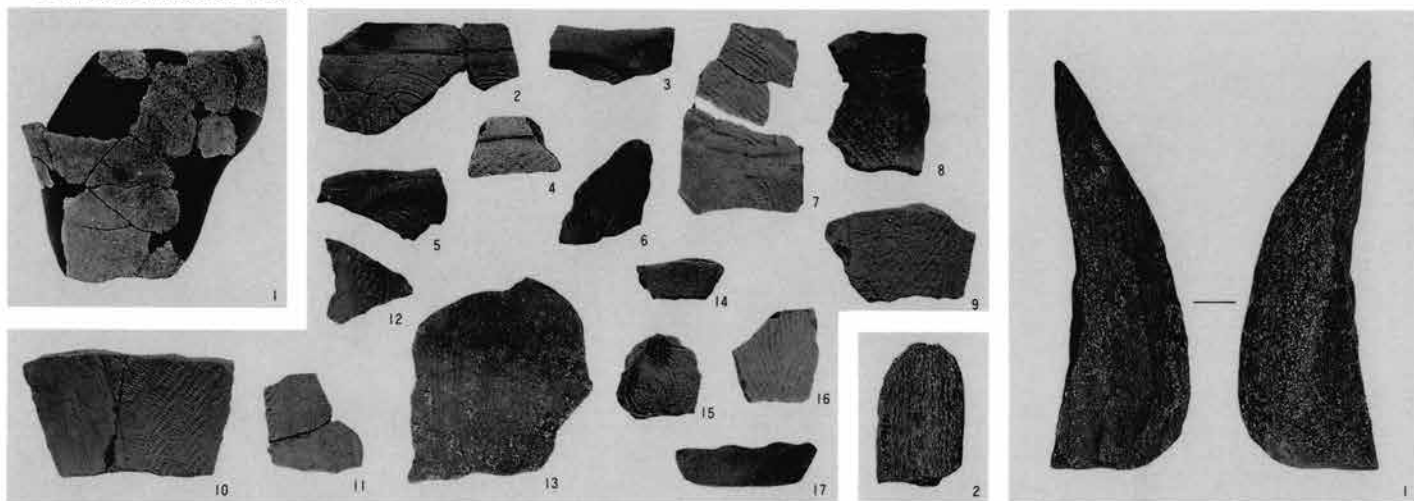
33



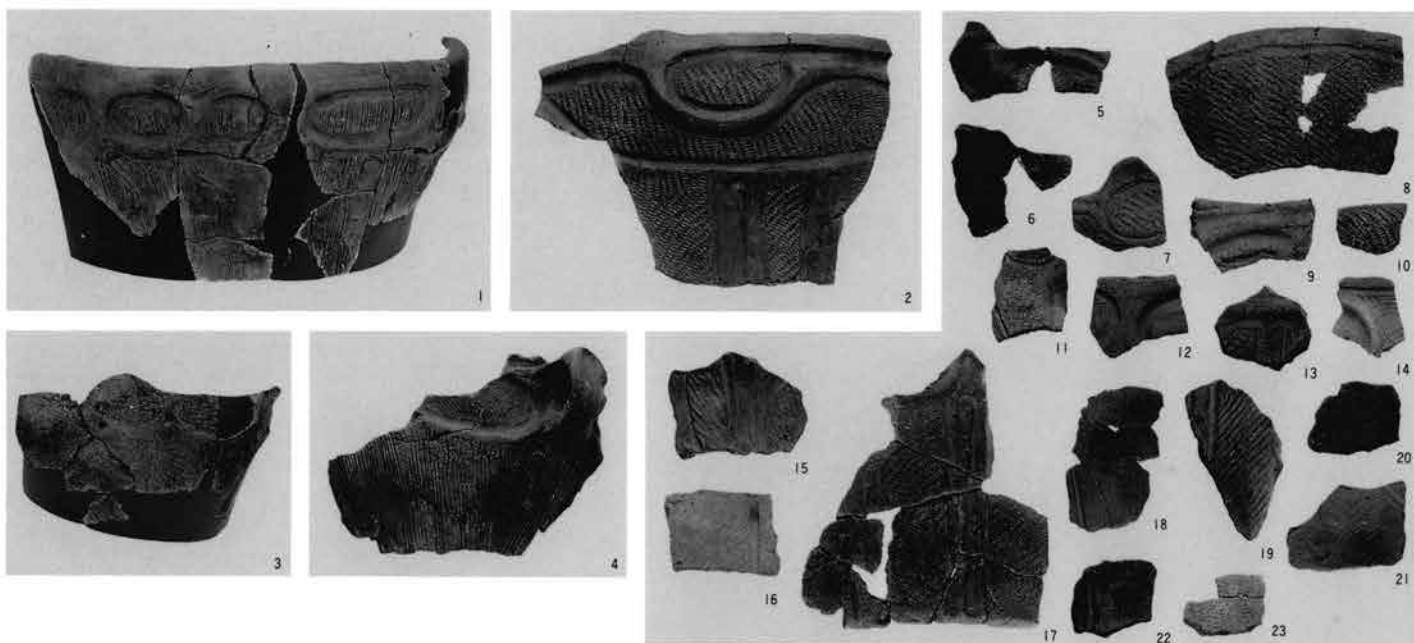
▼37号配石遺構(敷石住居跡)



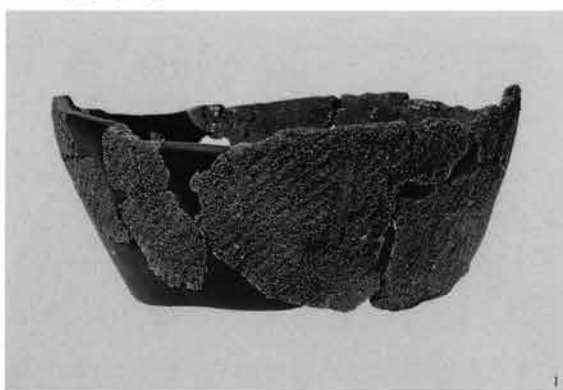
▼38号配石遺構(敷石住居跡)



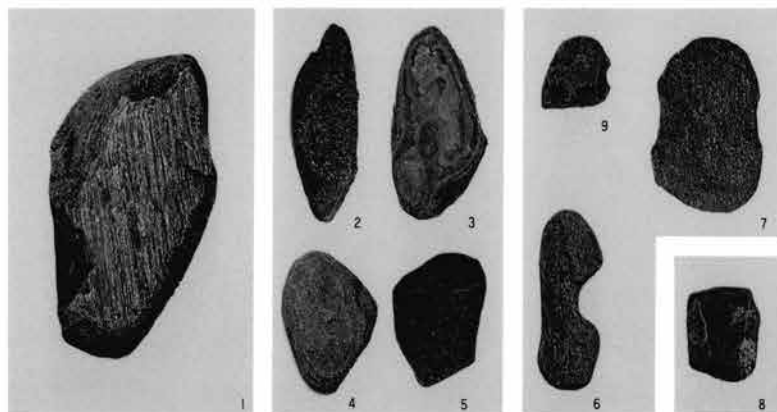
▼1号竖穴住居跡

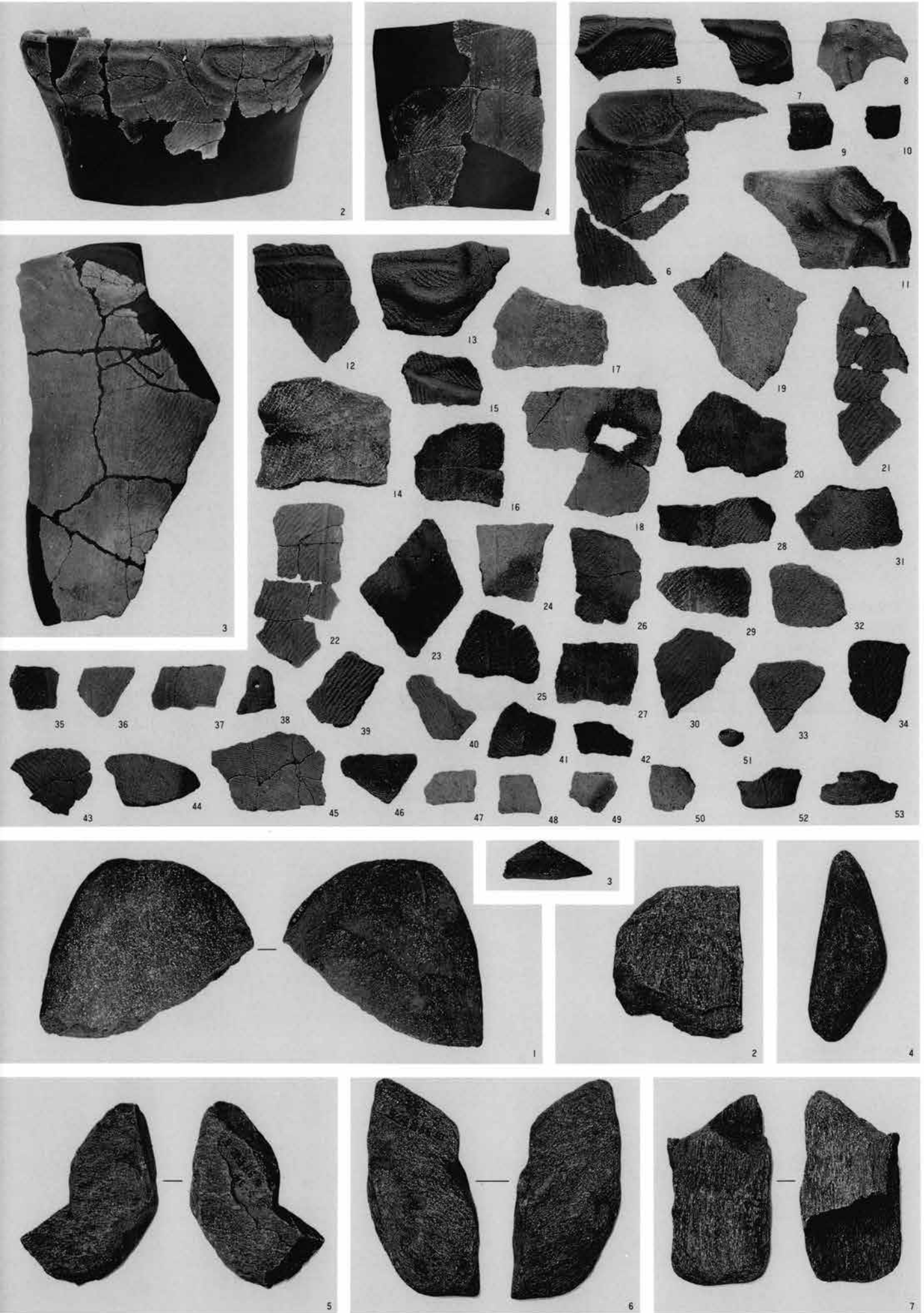


▼2号竖穴住居跡

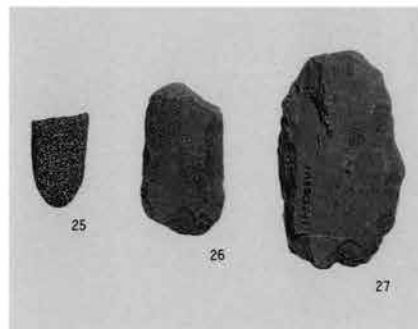
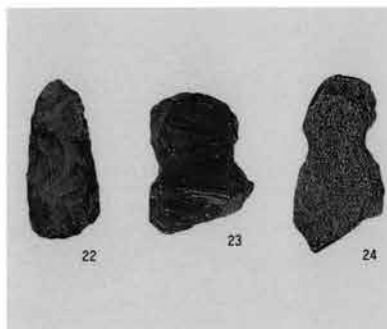
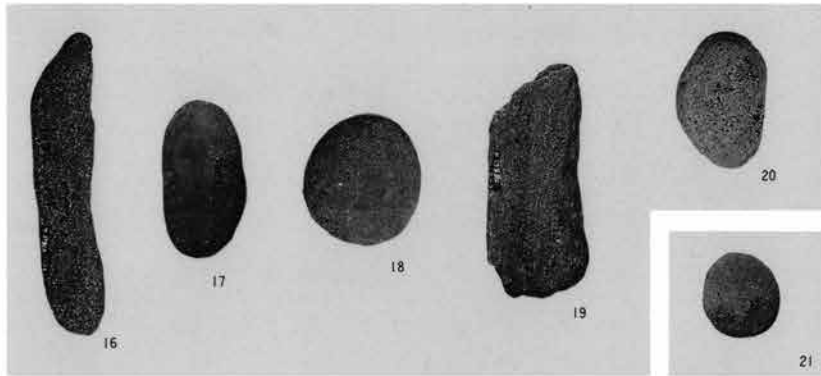
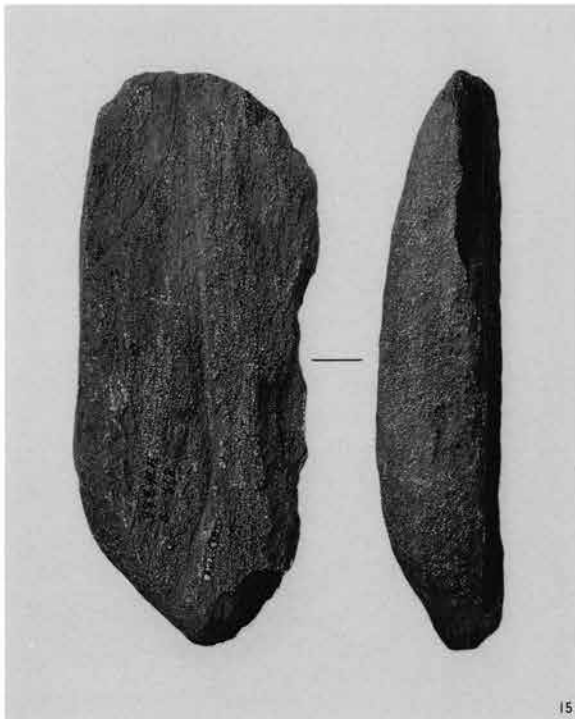
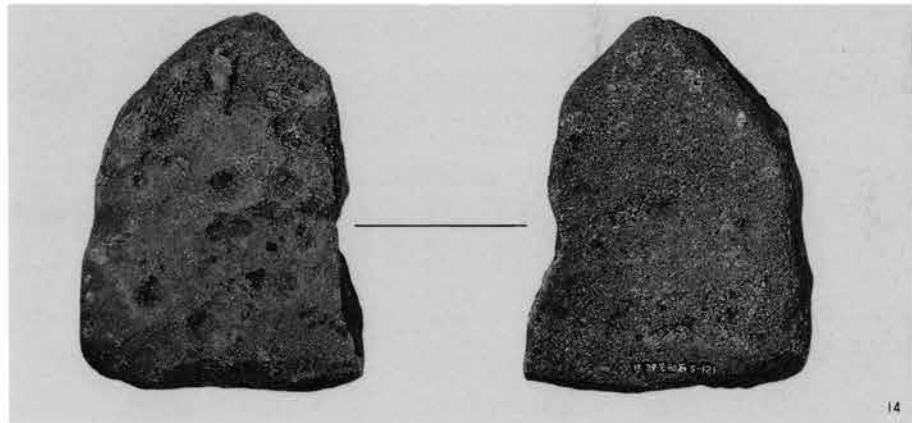
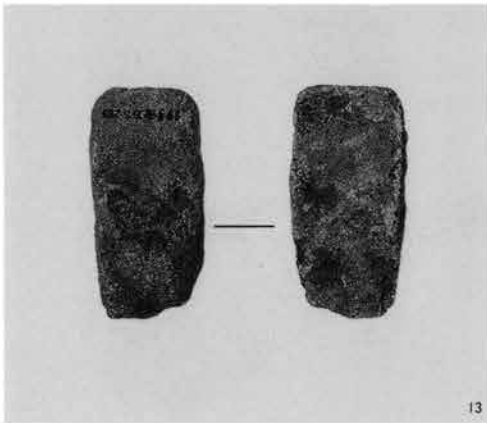
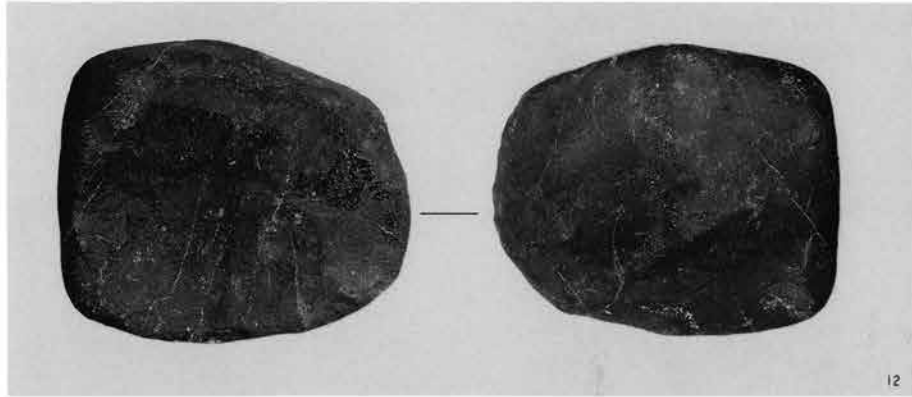
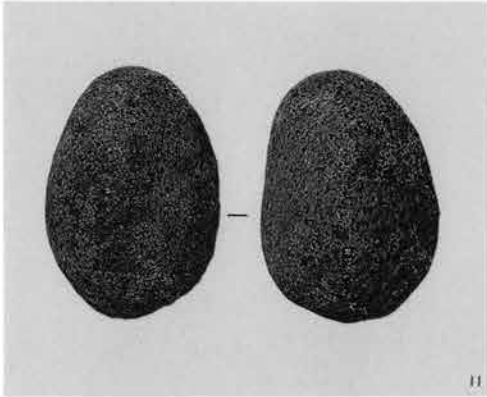
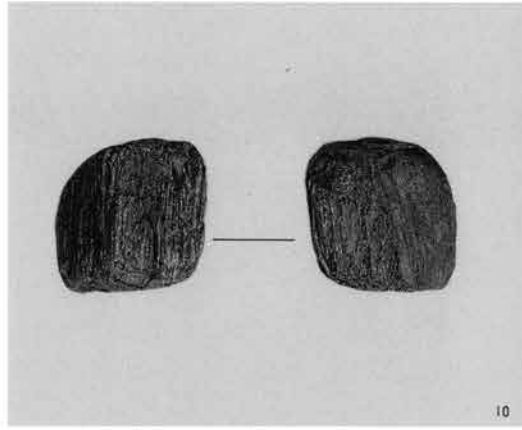
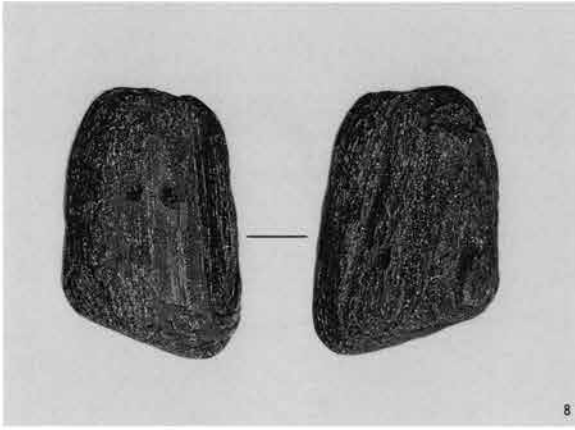


▶1号竖穴住居跡

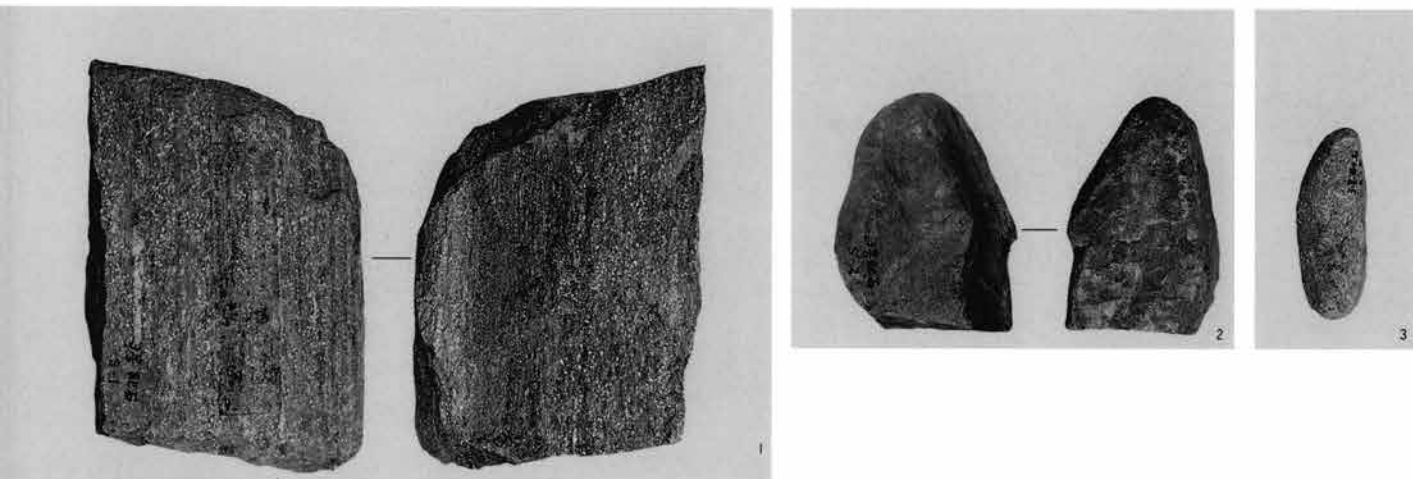




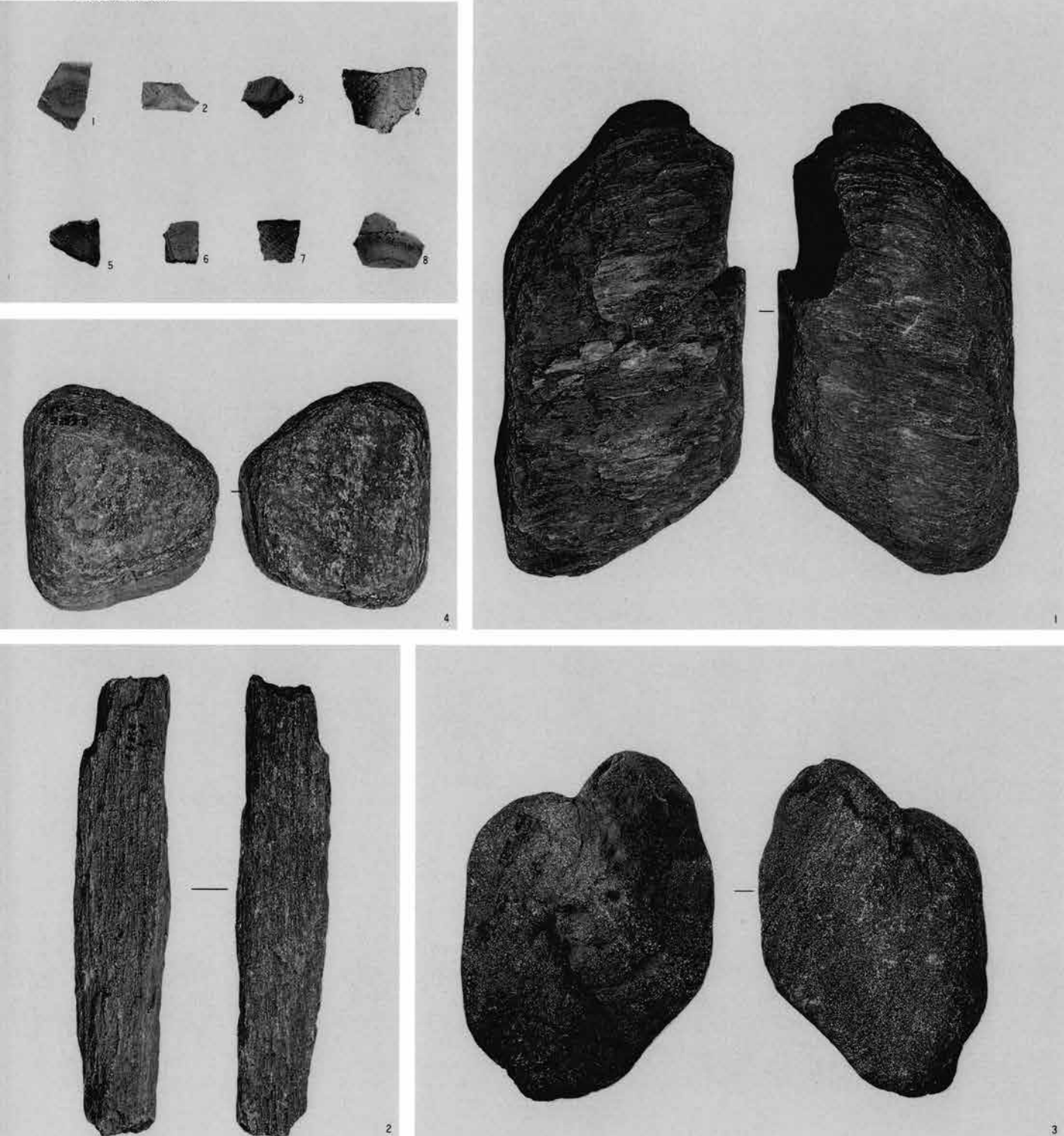
▼ 2号竖穴住居跡



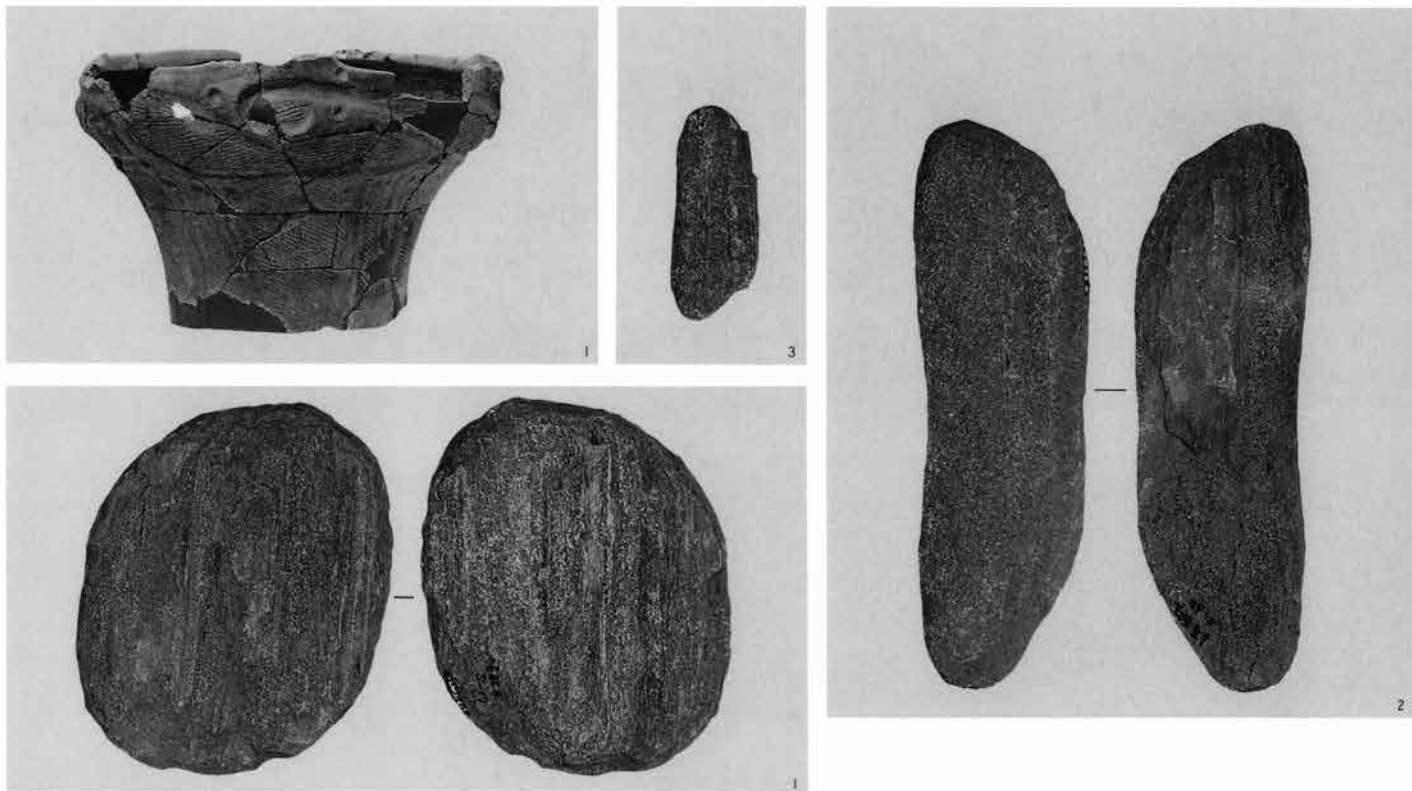
▼ 3号配石遺構



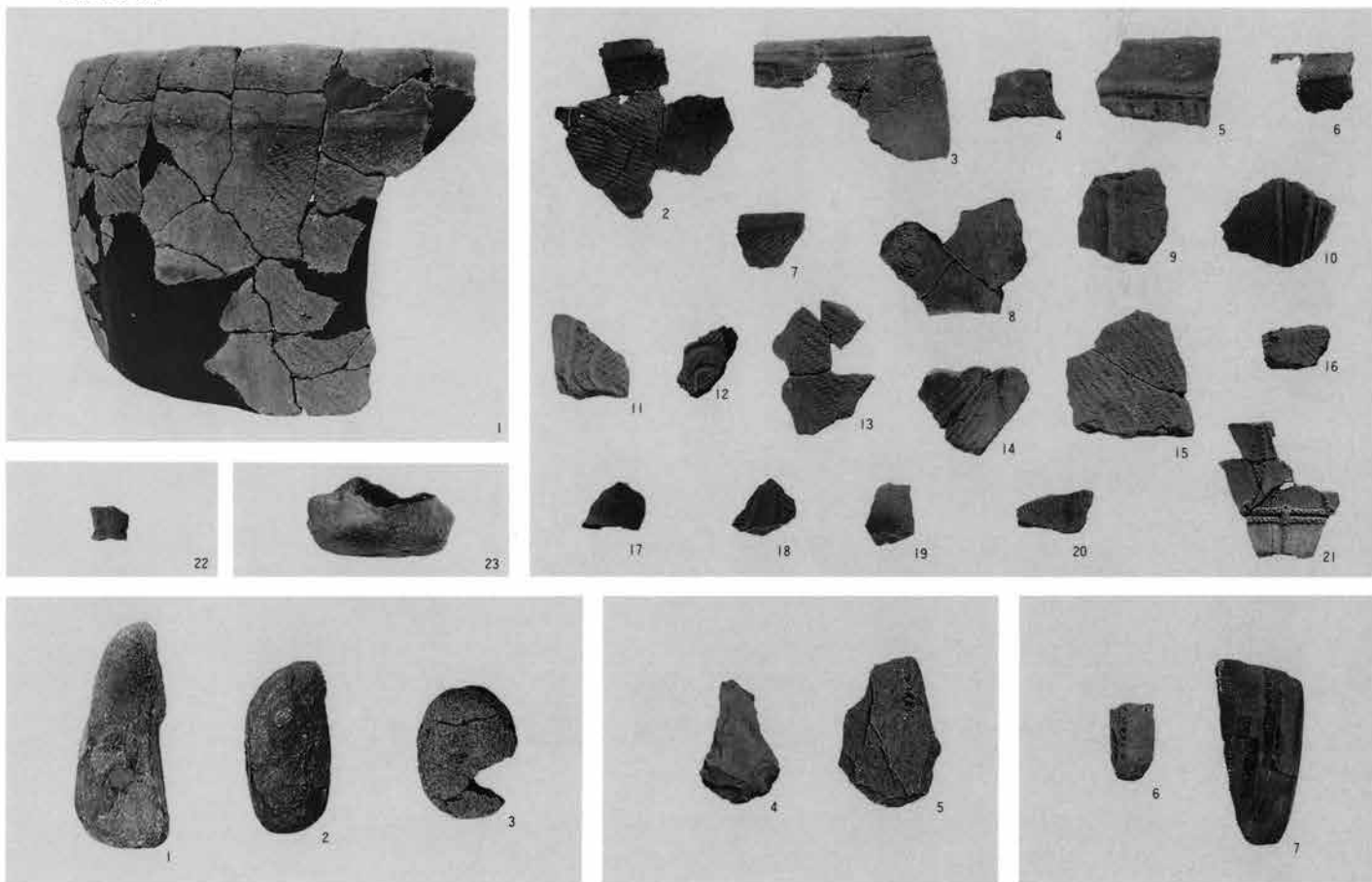
▼ 4号配石遺構



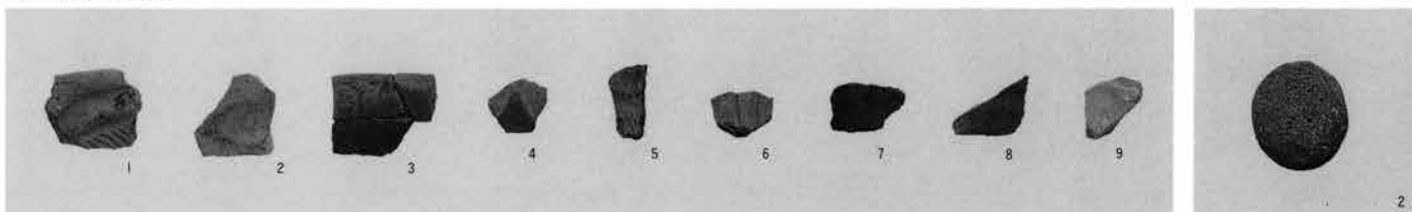
▼ 6号配石遺構



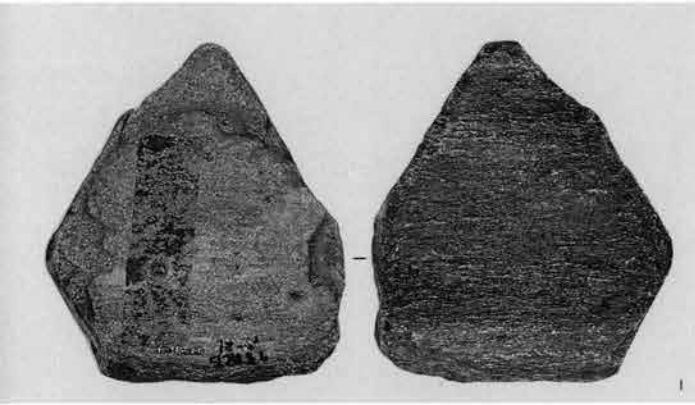
▼ 7号配石遺構



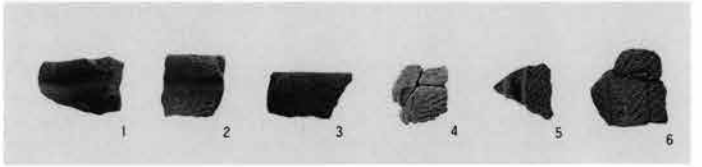
▼ 9号配石遺構



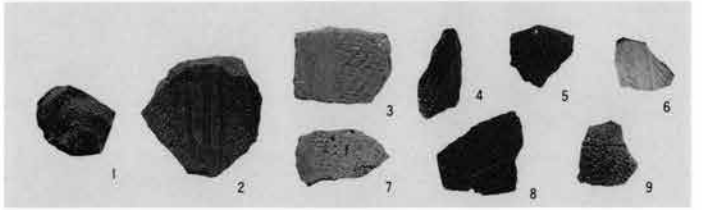
▼9号配石遺構



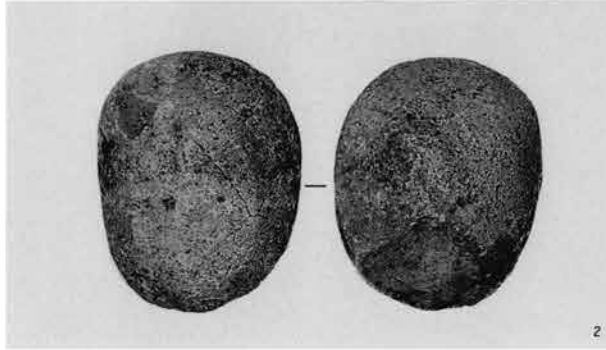
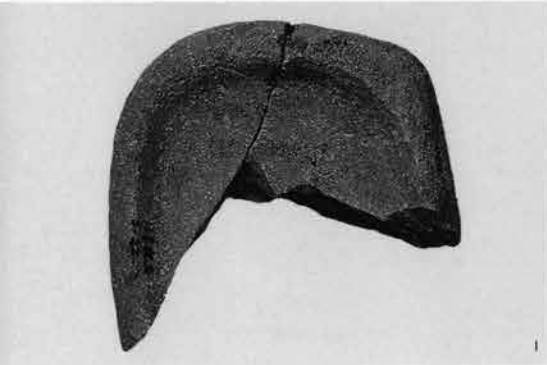
▼10号配石遺構



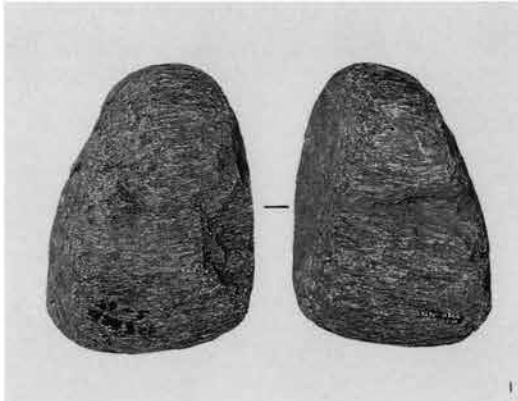
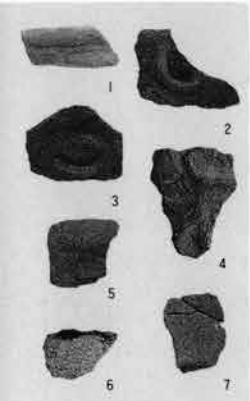
▼11号配石遺構



▼11号配石遺構



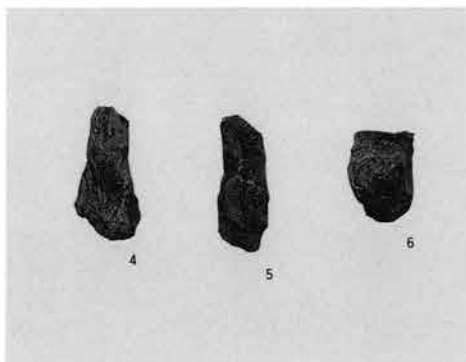
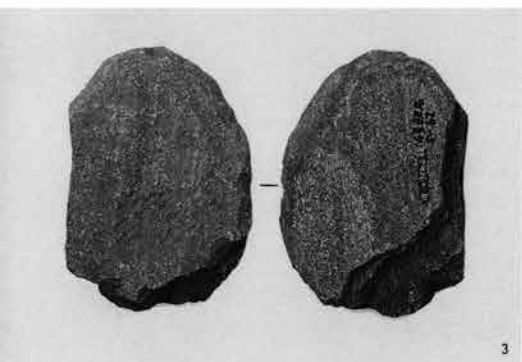
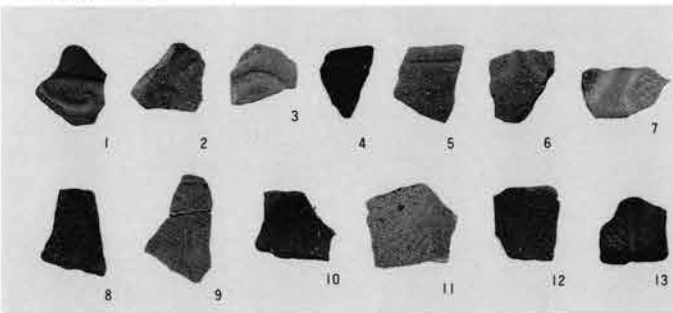
▼12号配石遺構



▼13号
配石遺構



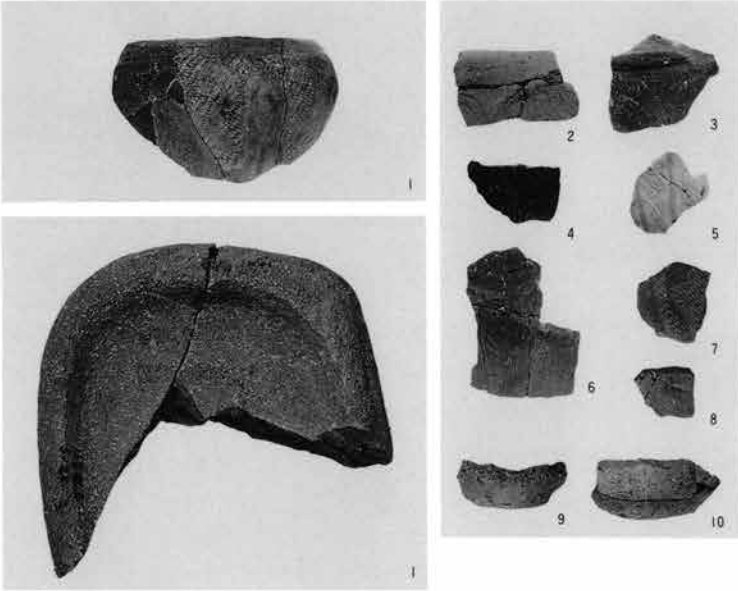
▼14号配石遺構



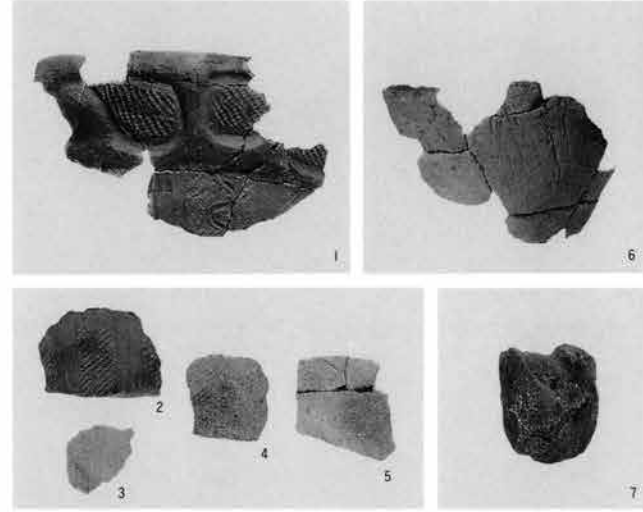
▶15号配石遺構



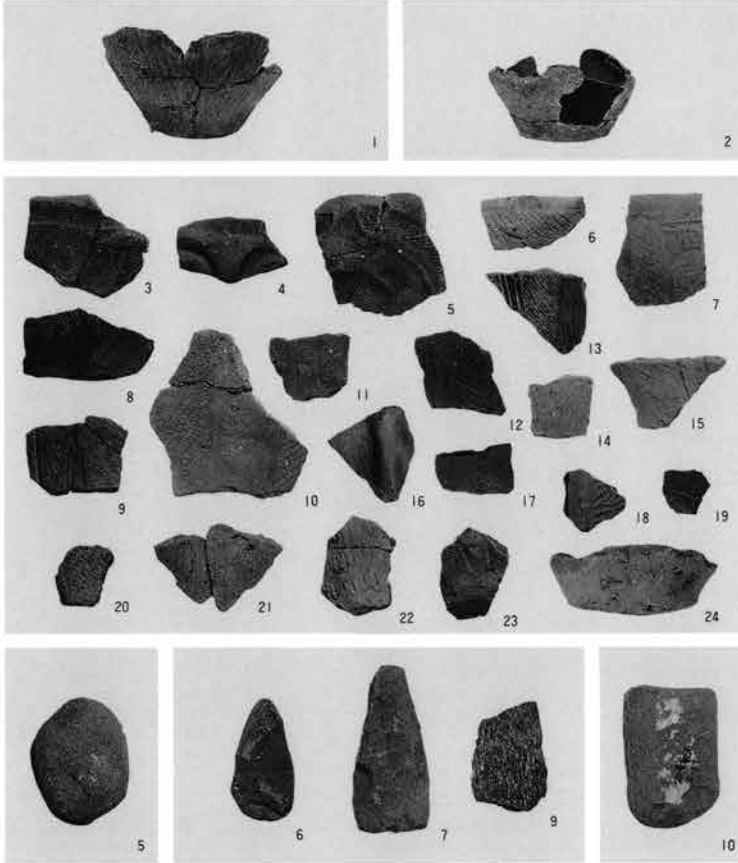
▼16号配石遺構



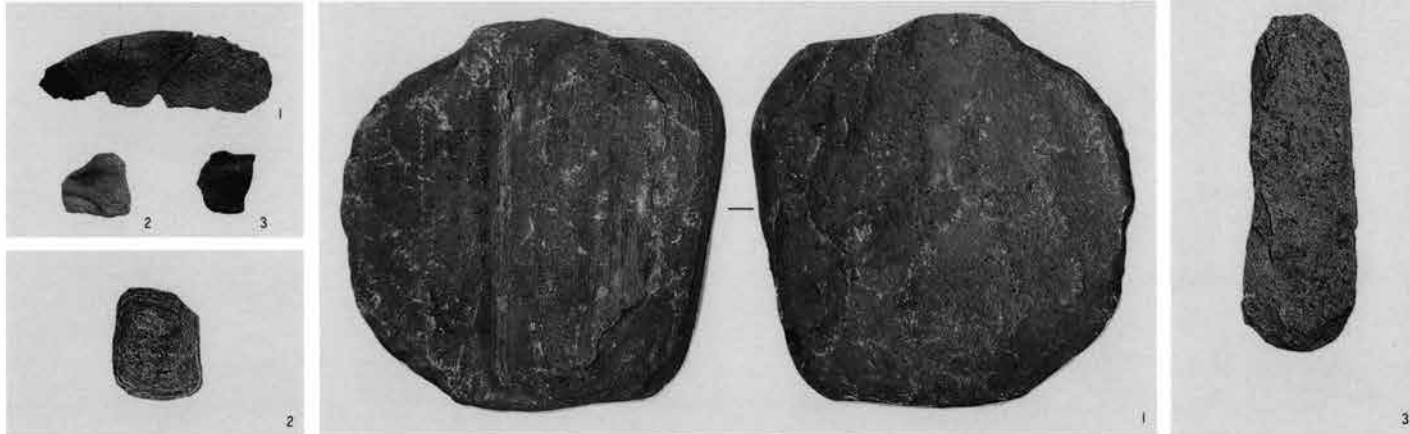
▼19号配石遺構



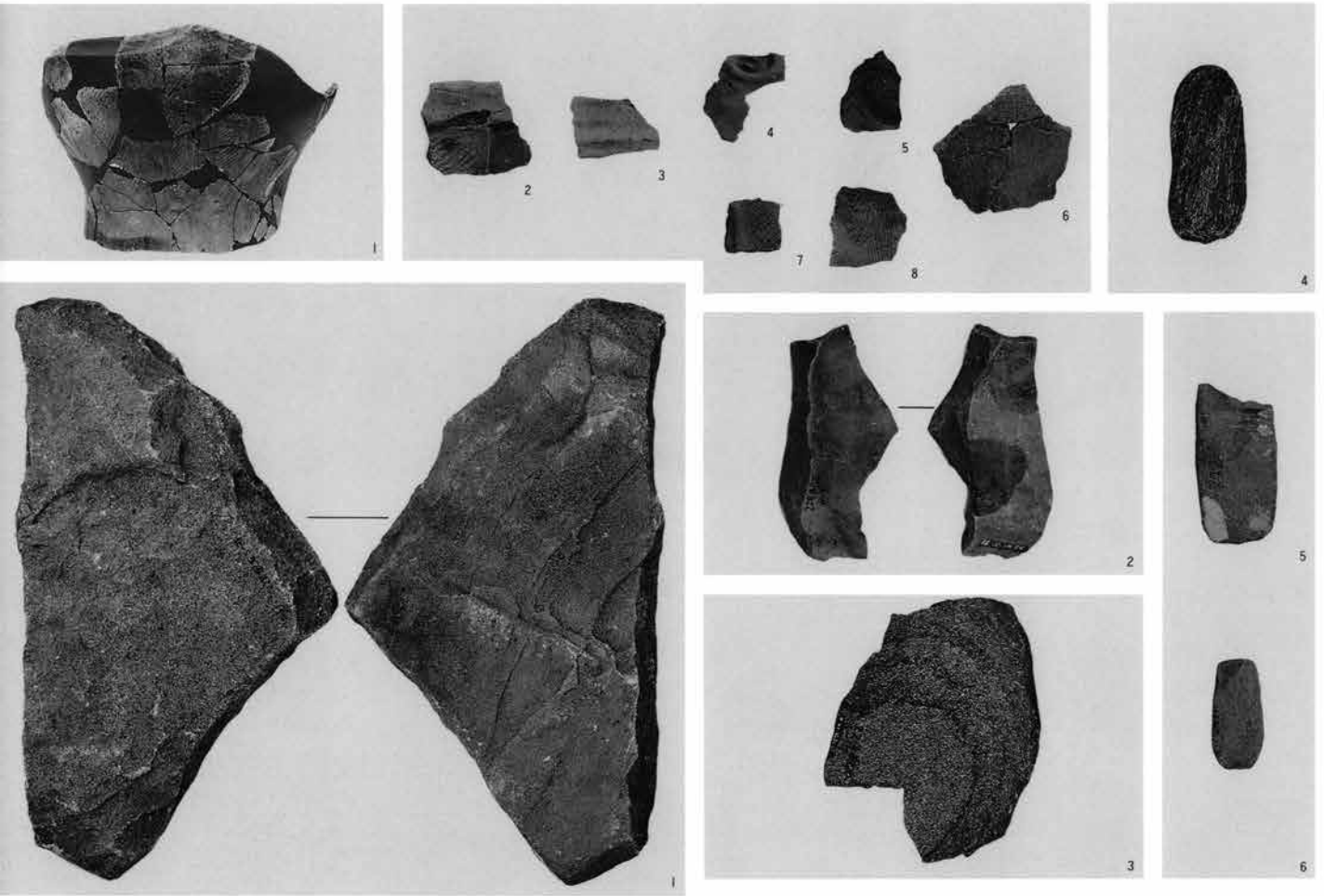
▼20号配石遺構



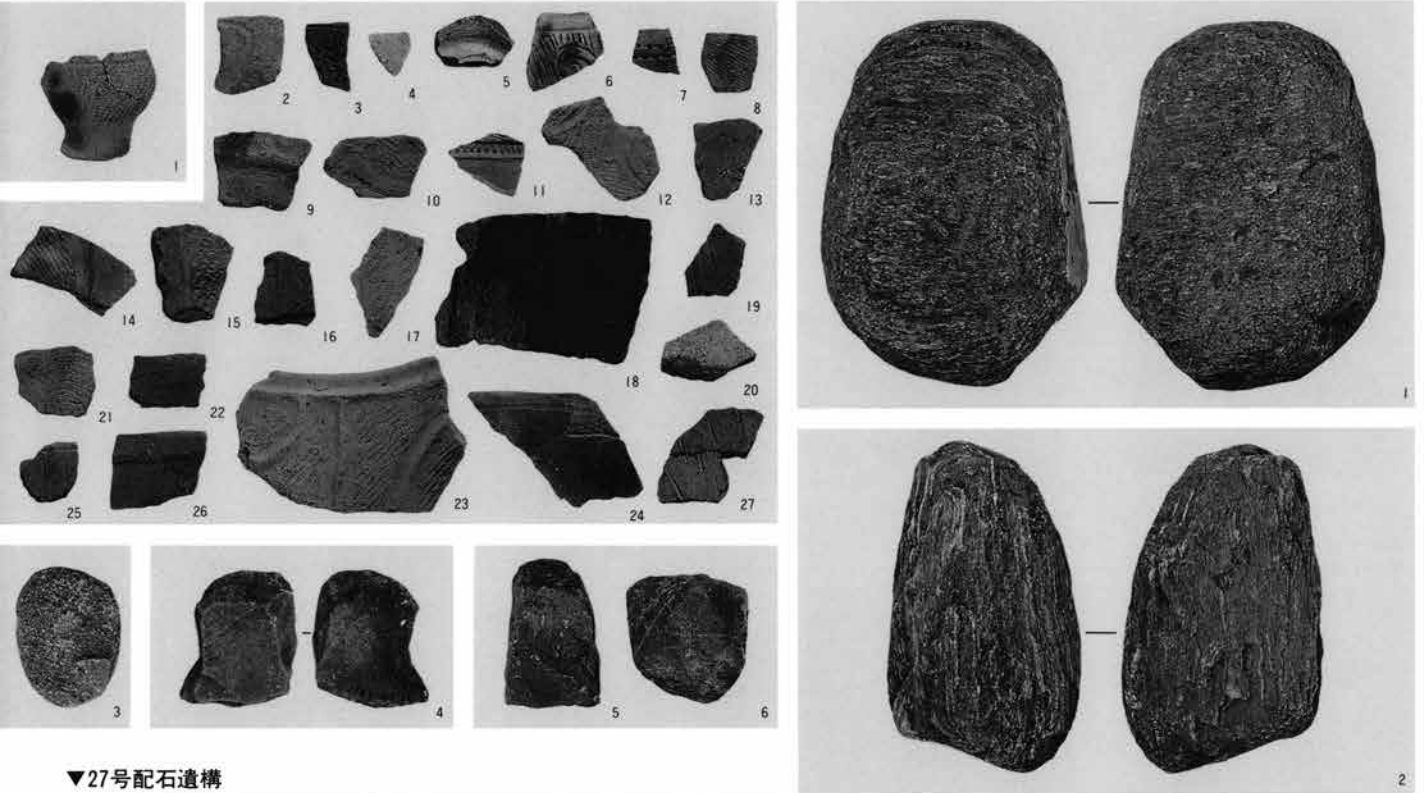
▼21号配石遺構



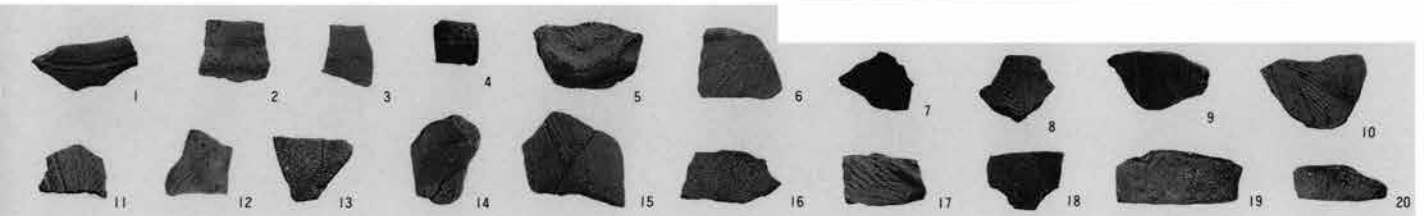
▼22号配石遺構



▼25号配石遺構



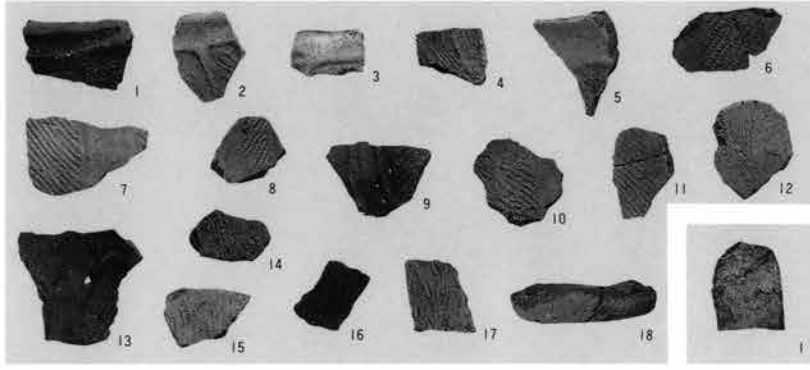
▼27号配石遺構



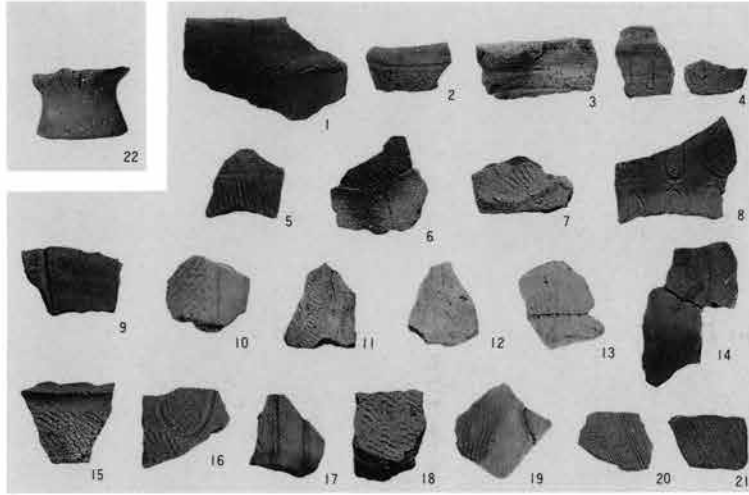
▼27号配石遺構



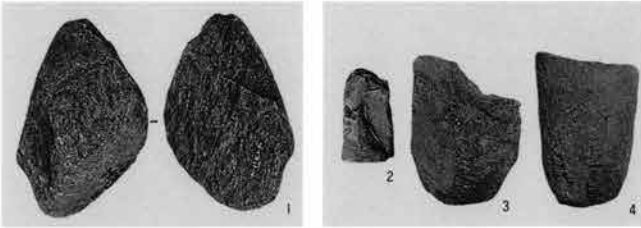
▼28号配石遺構



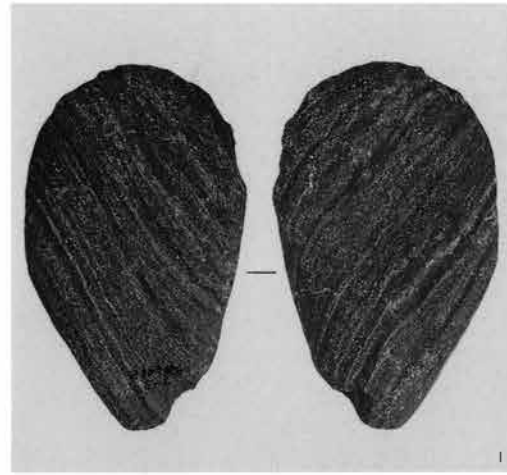
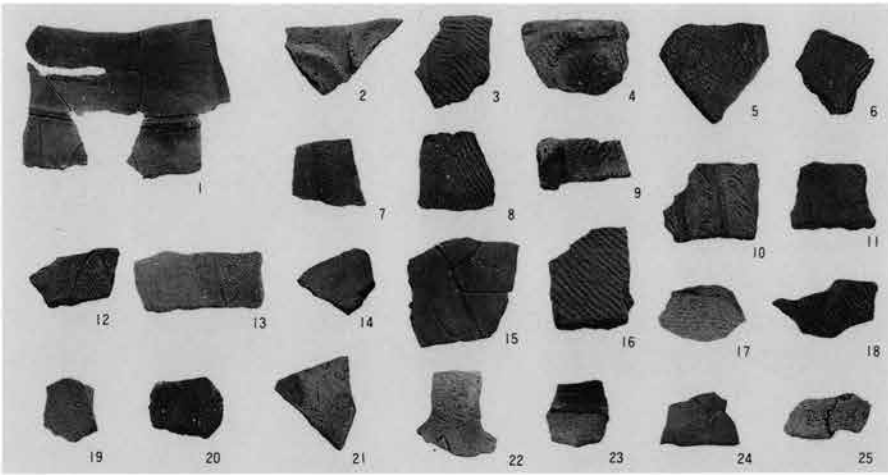
▼29号配石遺構



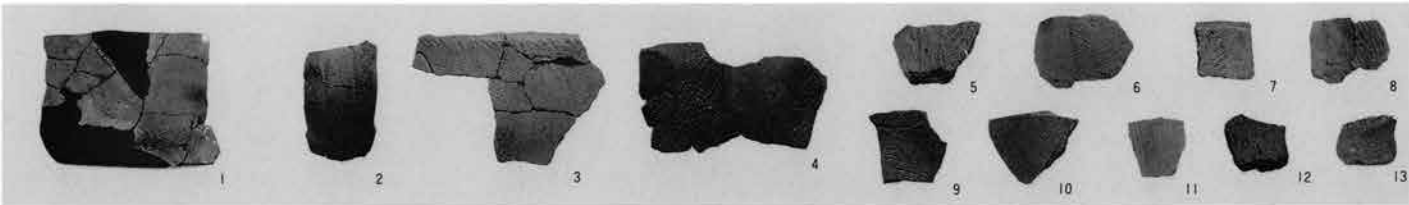
▼29号配石遺構



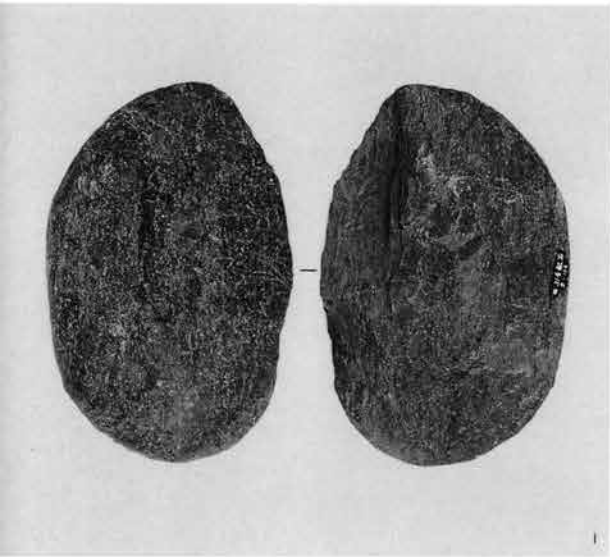
▼30号配石遺構



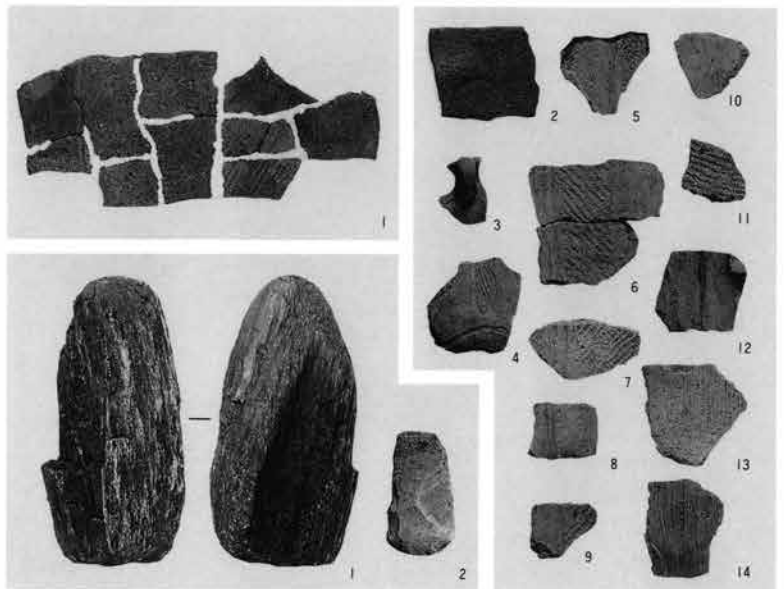
▼31号配石遺構



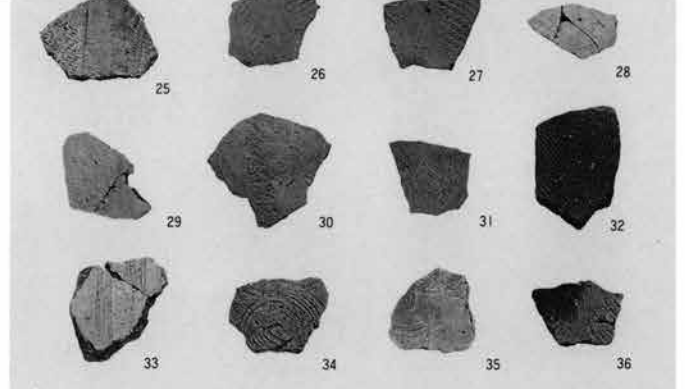
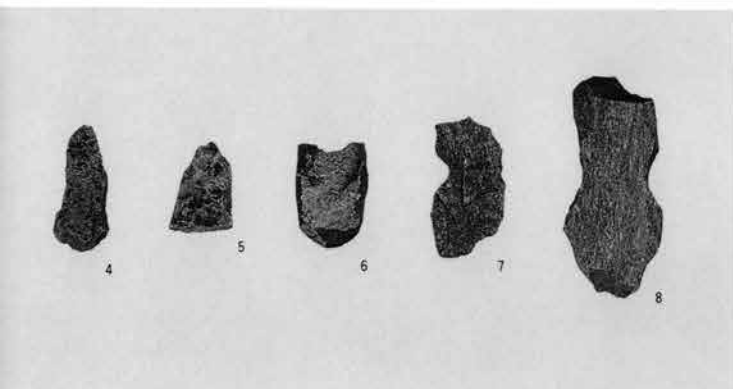
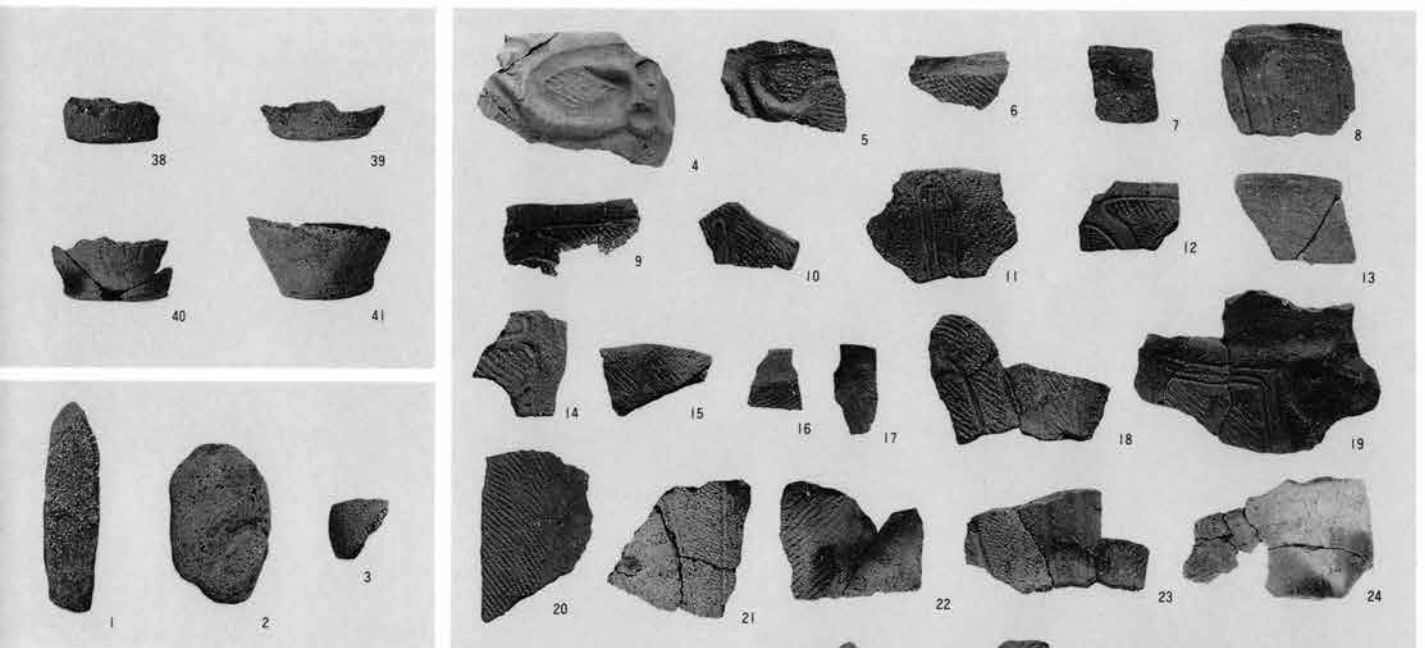
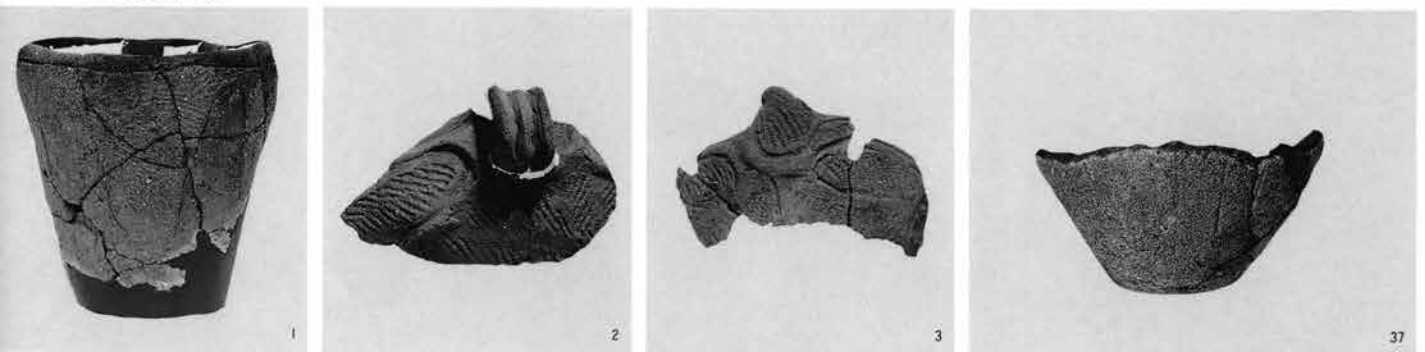
▼31号配石遺構



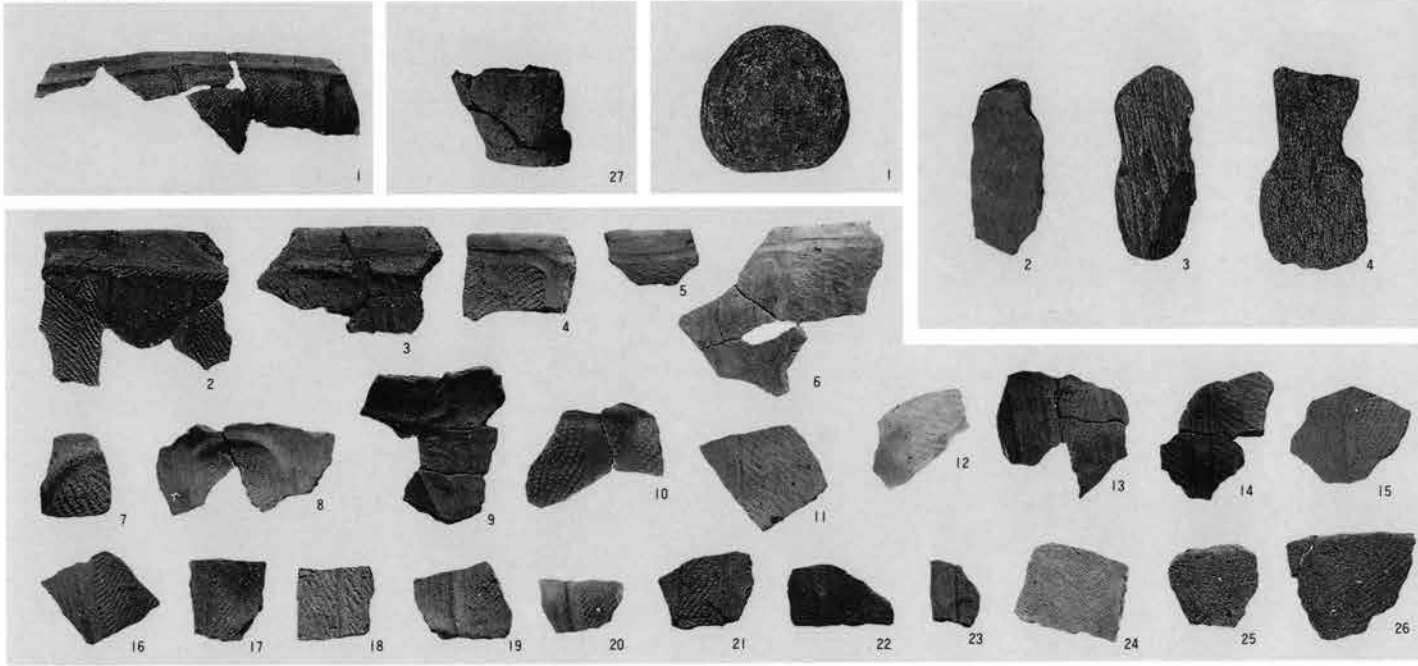
▼32号配石遺構



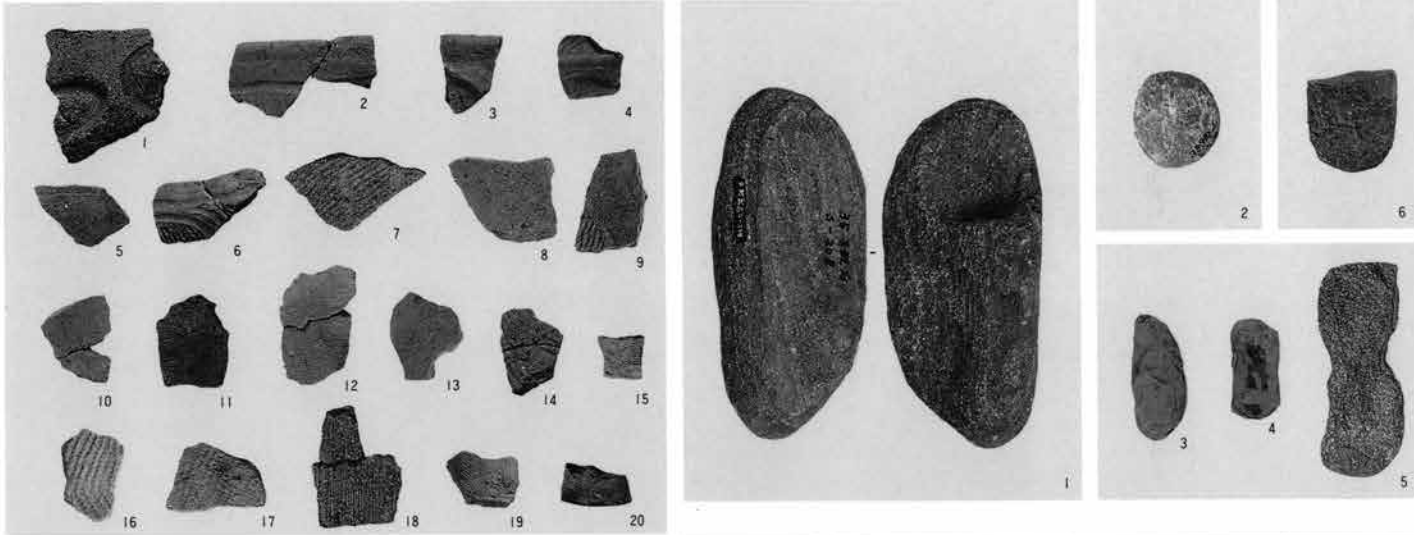
▼33号配石遺構



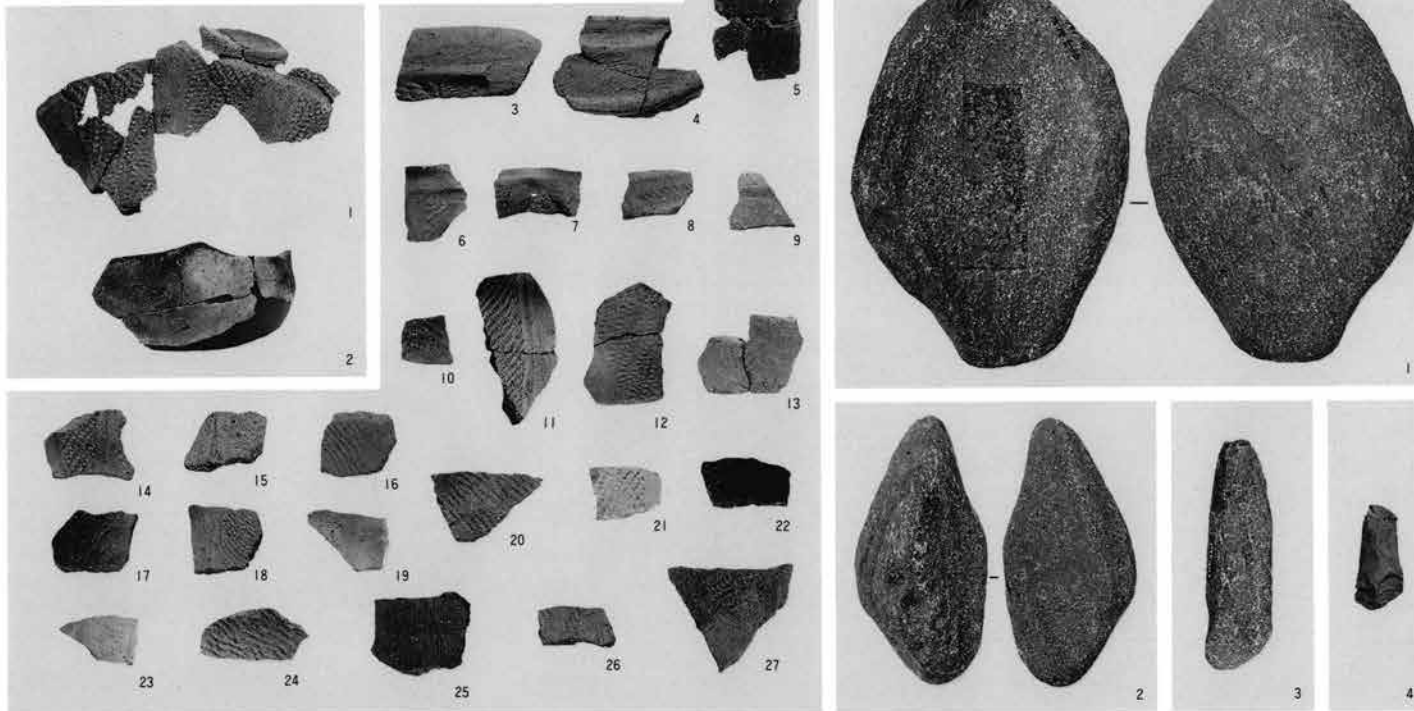
▼34号配石遺構



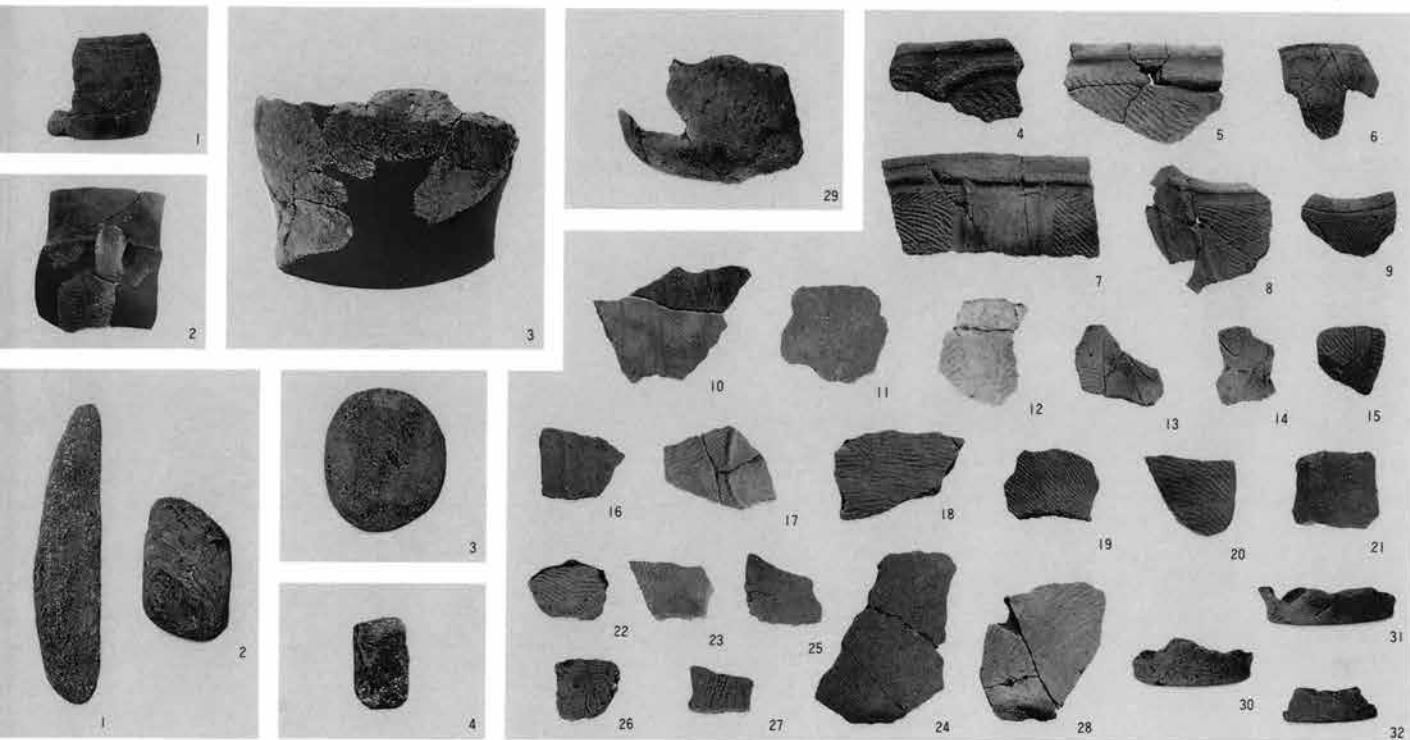
▼35号配石遺構



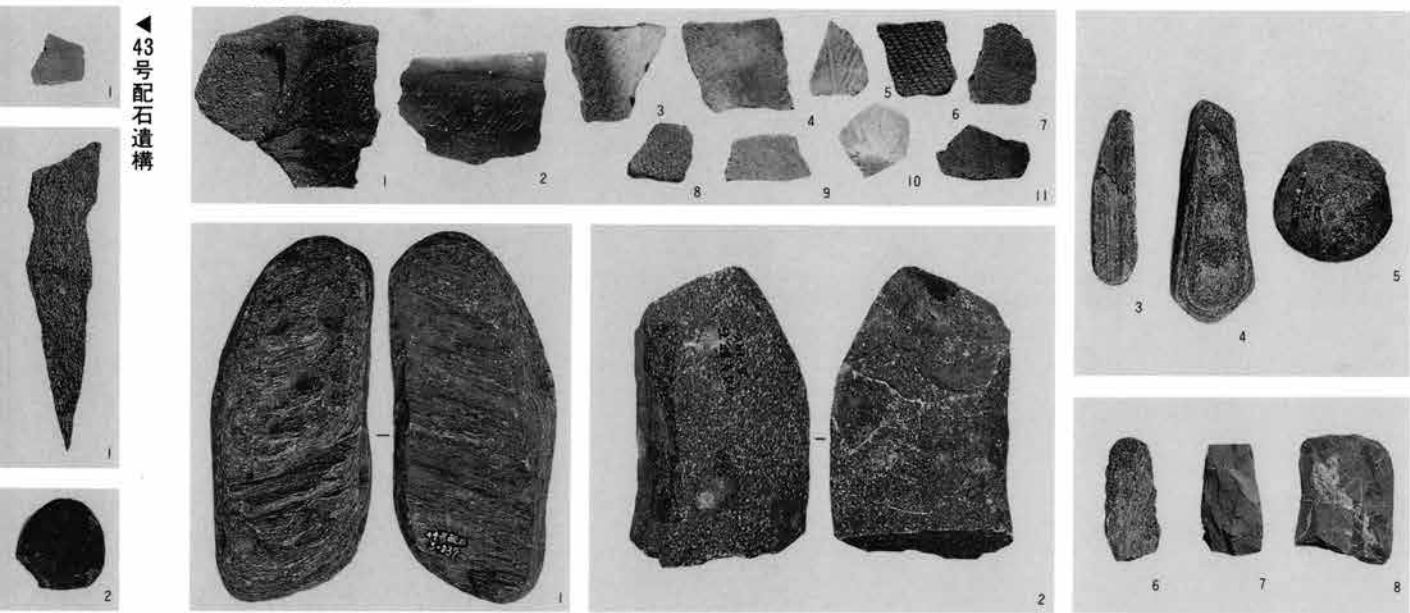
▼40号配石遺構



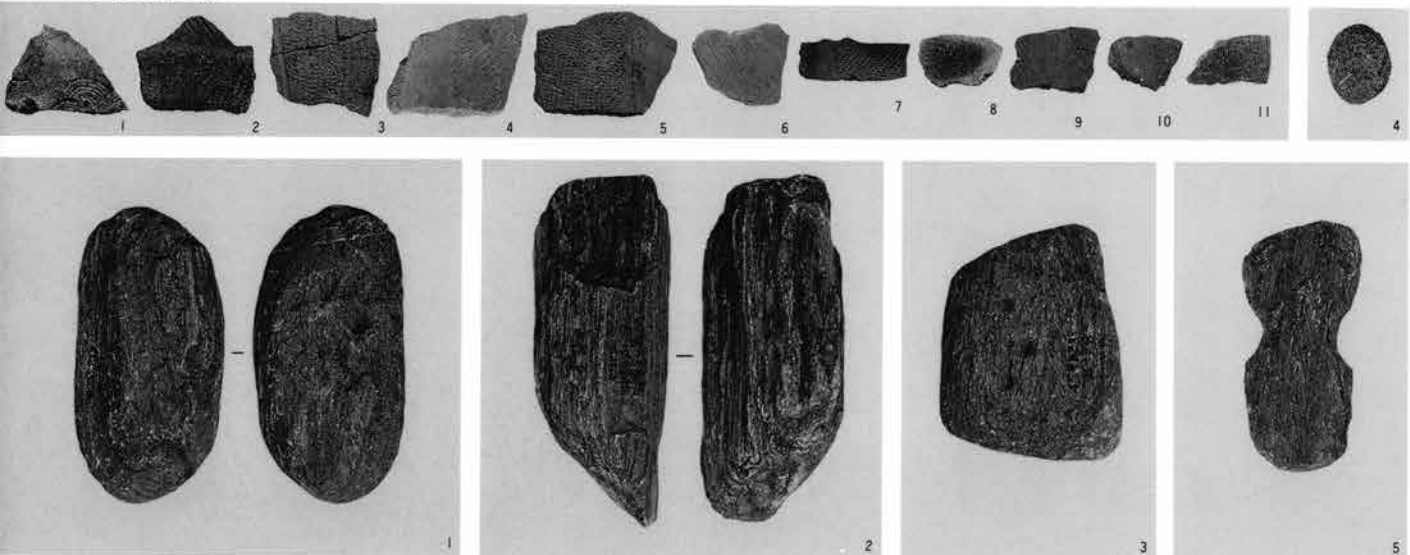
▼41号配石遺構



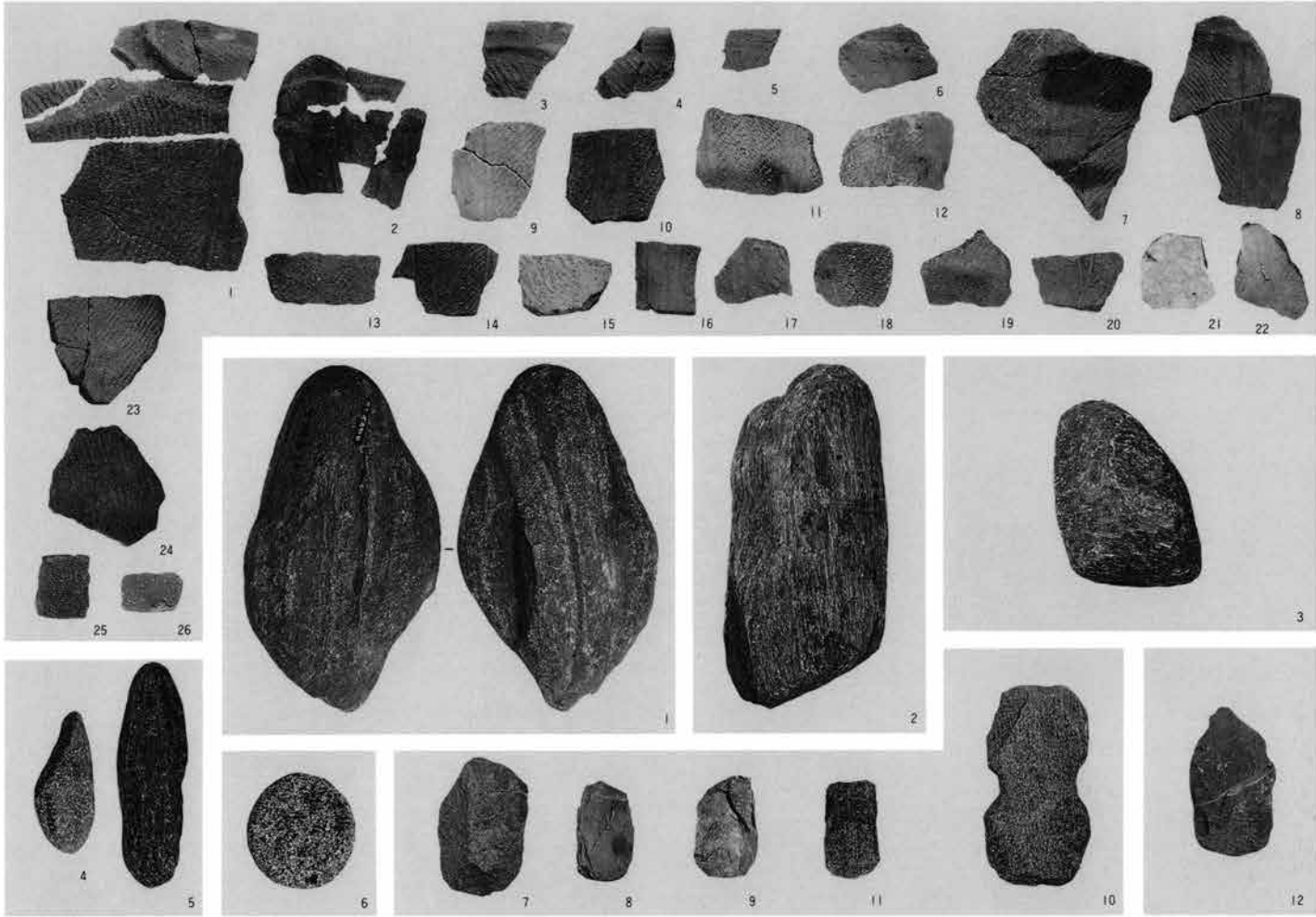
▼44号配石遺構



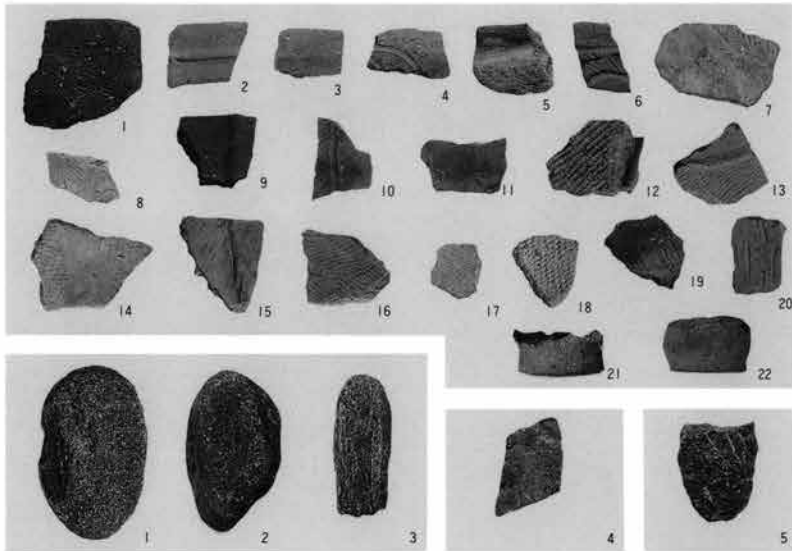
▼45号配石遺構



▼46号配石遺構



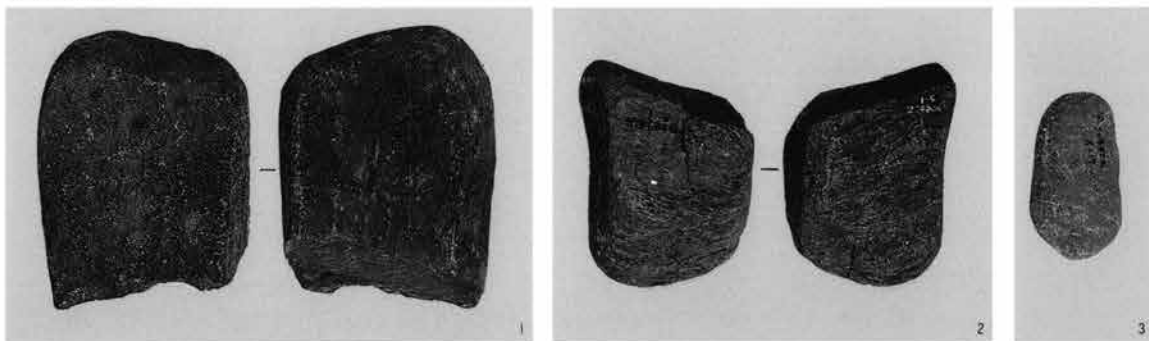
▼47号配石遺構



▼48号配石遺構



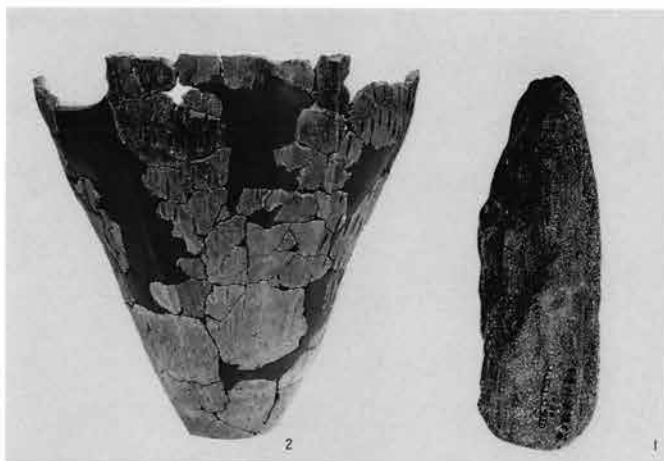
▼50号配石遺構



▼ 1号屋外埋設土器



▼ 2号屋外埋設土器



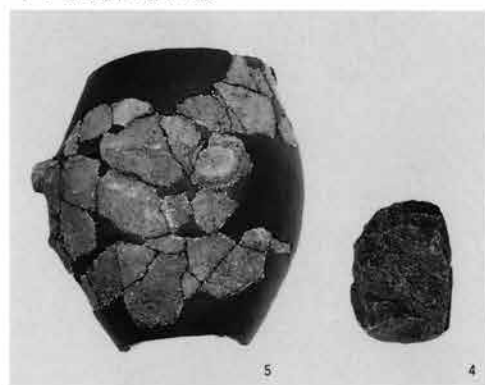
▼ 3号屋外埋設土器



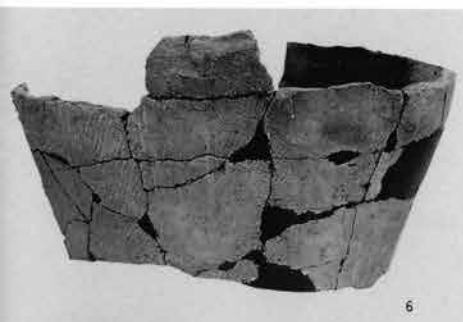
▼ 4号屋外埋設土器



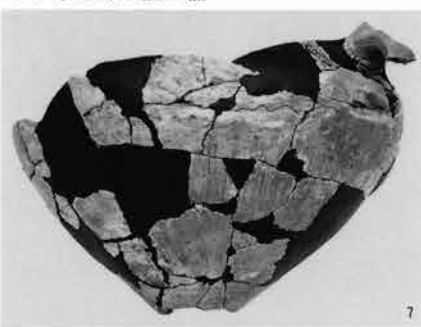
▼ 5号屋外埋設土器



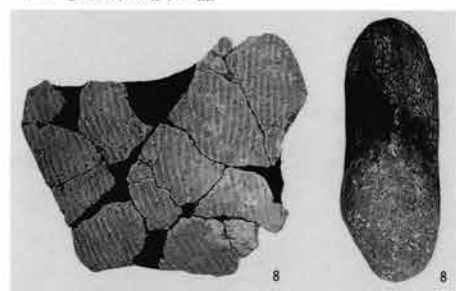
▼ 6号屋外埋設土器



▼ 7号屋外埋設土器



▼ 8号屋外埋設土器



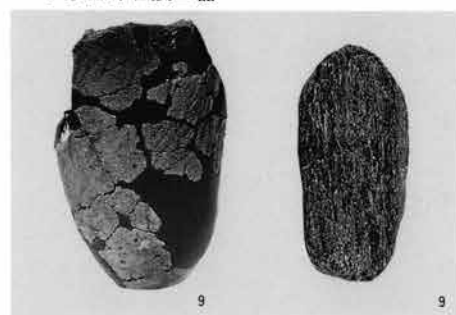
▼ 10号屋外埋設土器



▼ 11号屋外埋設土器



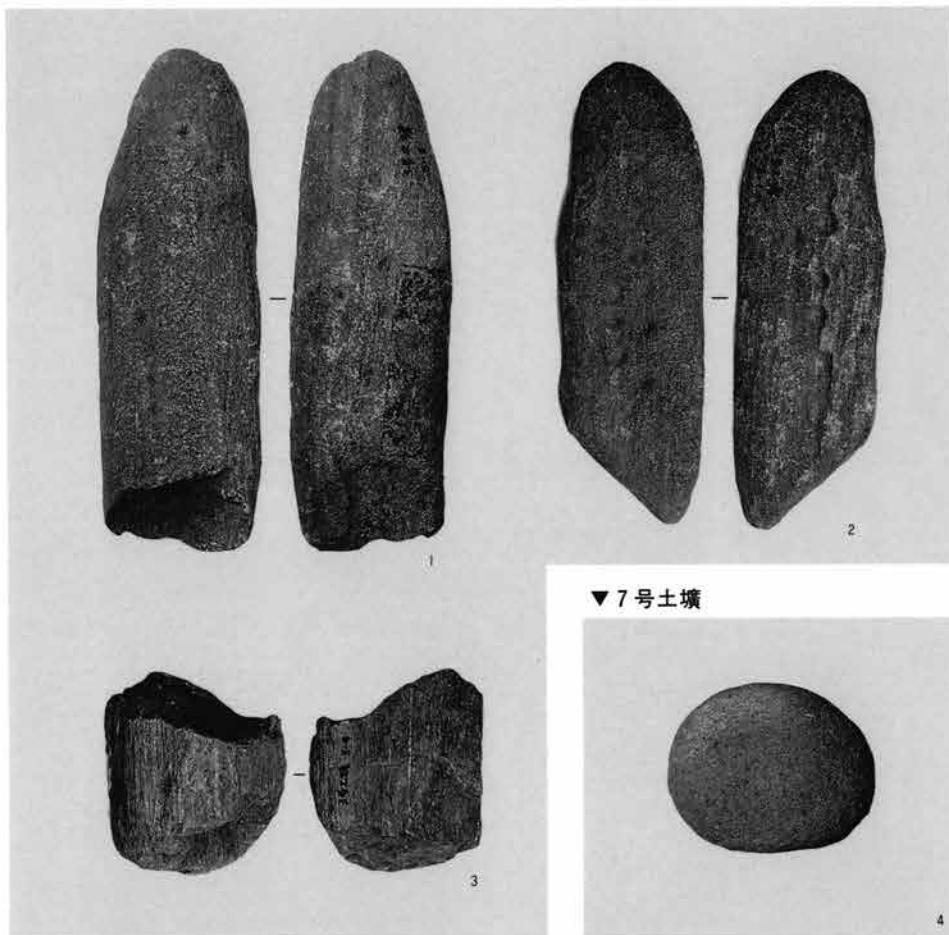
▼ 9号屋外埋設土器



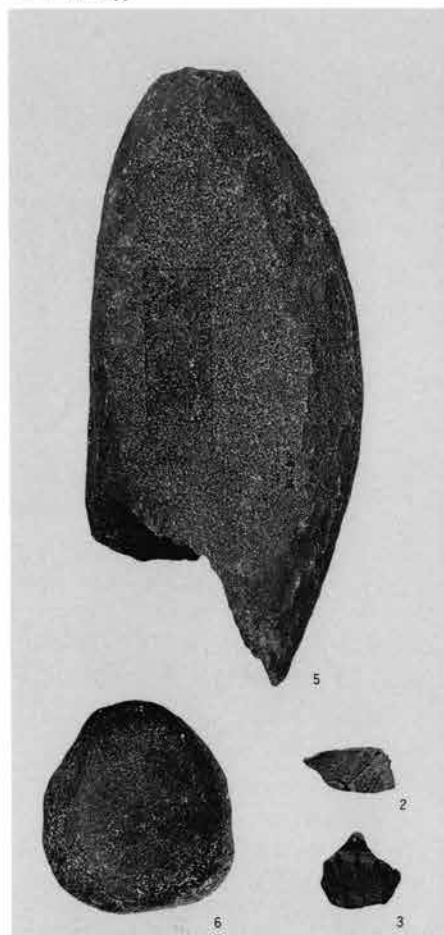
▼ 12号屋外埋設土器



▼ 3号土壙



▼ 8号土壙



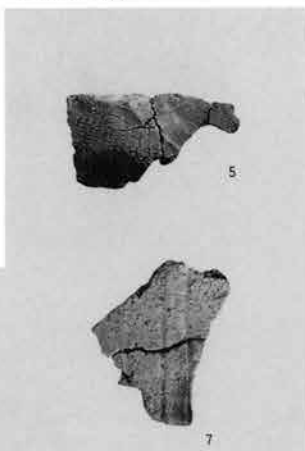
▼ 7号土壙



▼ 9号土壙



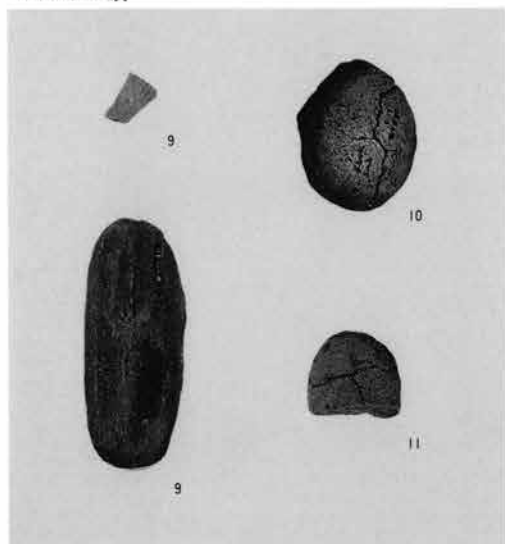
▼ 13号土壙



▼ 14号土壙

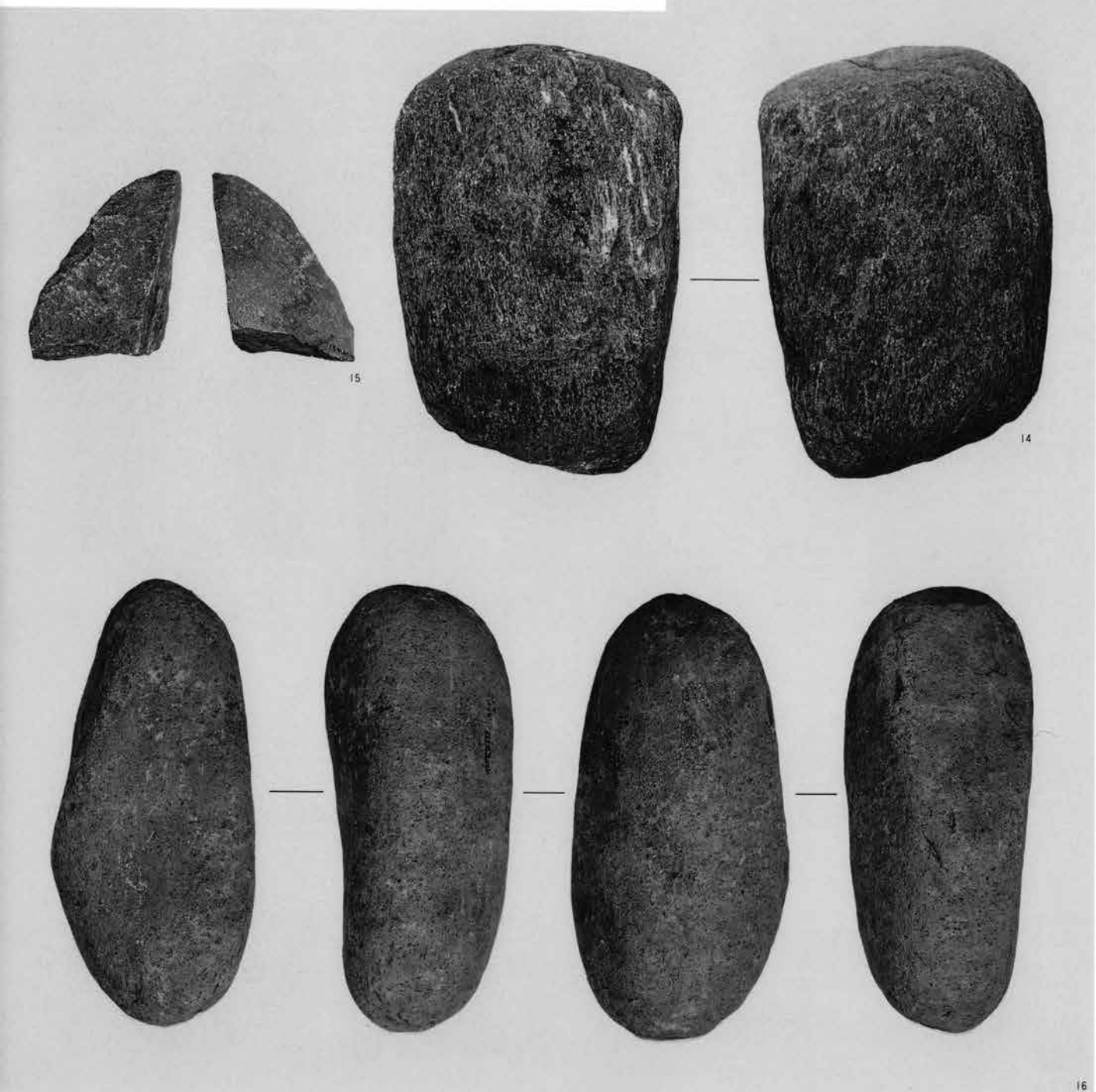
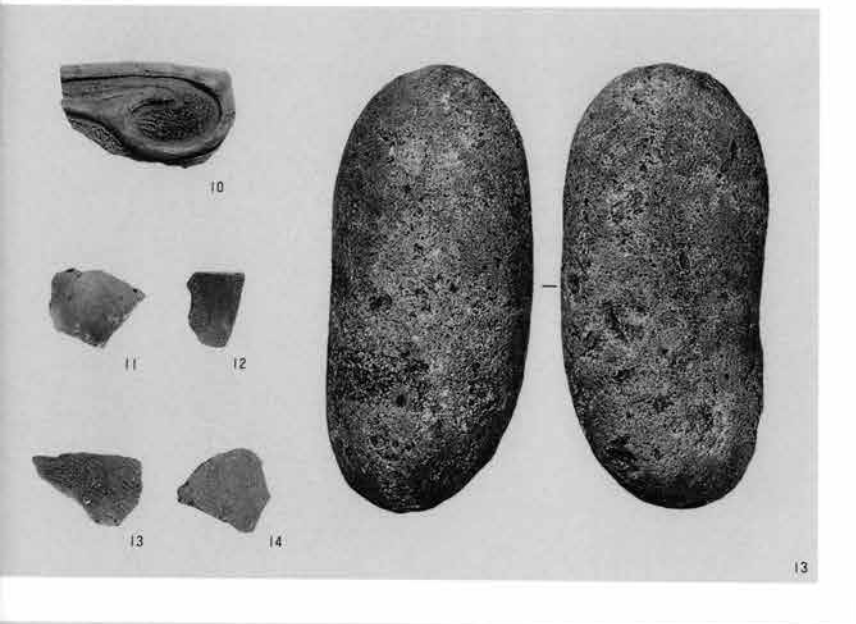


▼ 15号土壙

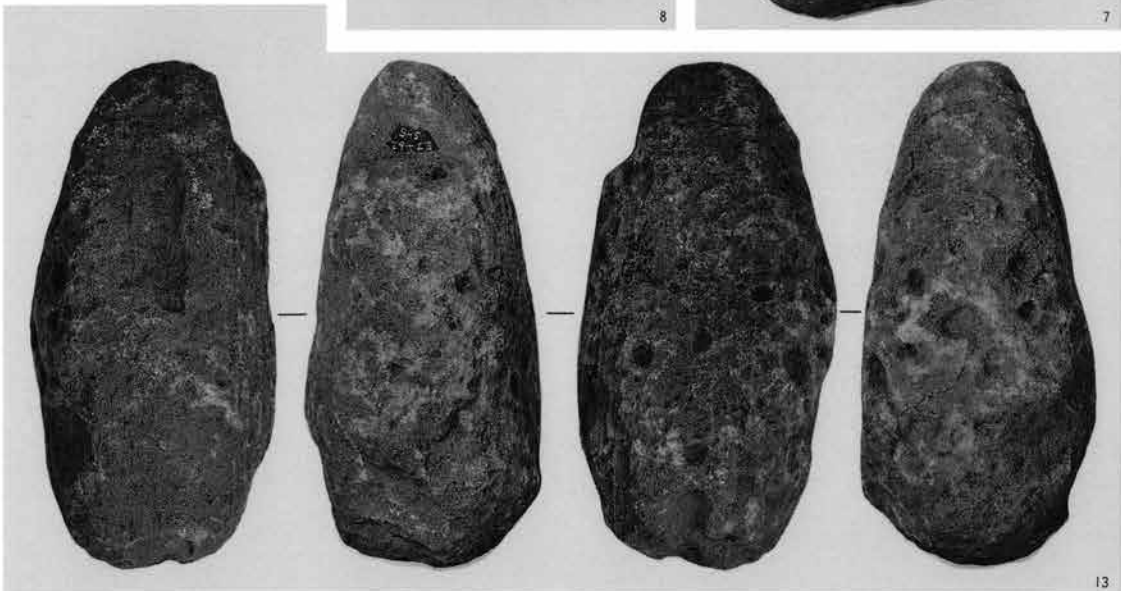
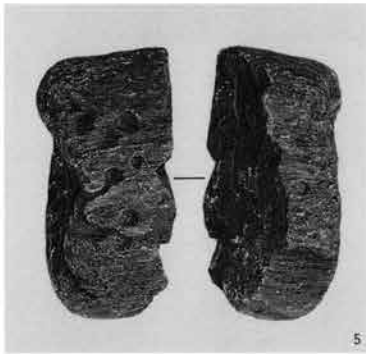
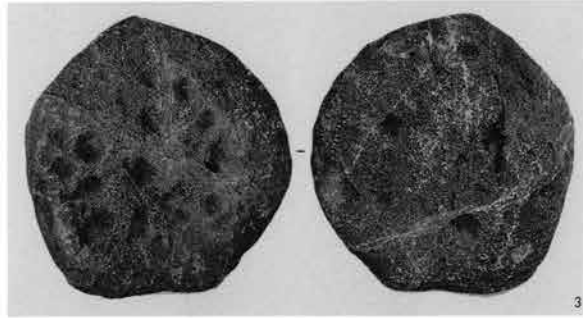
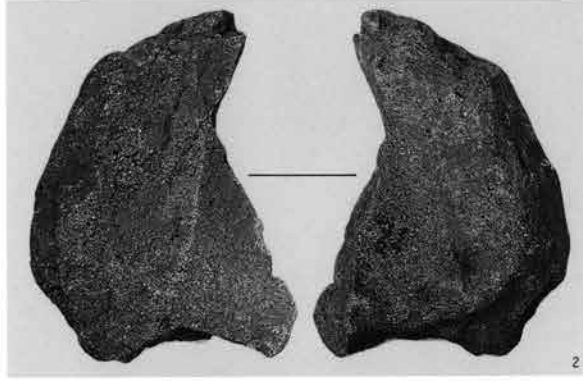
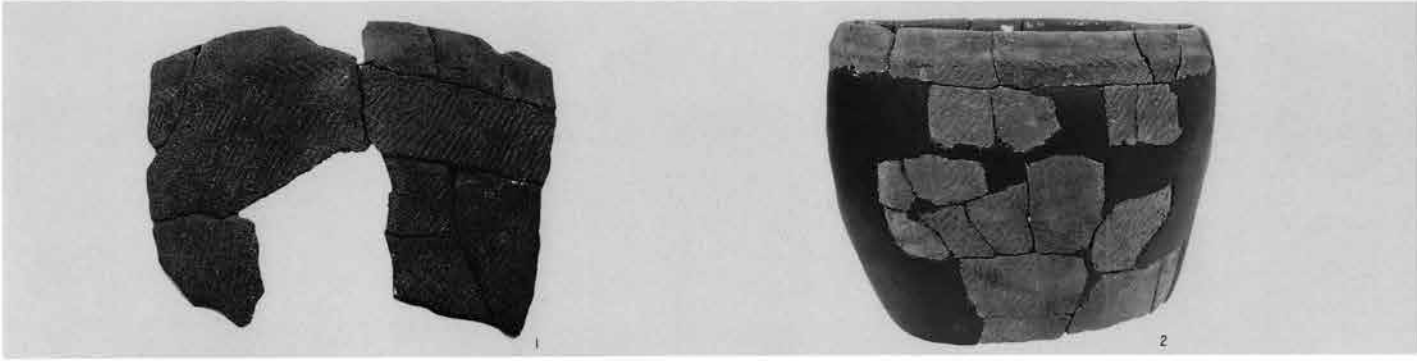


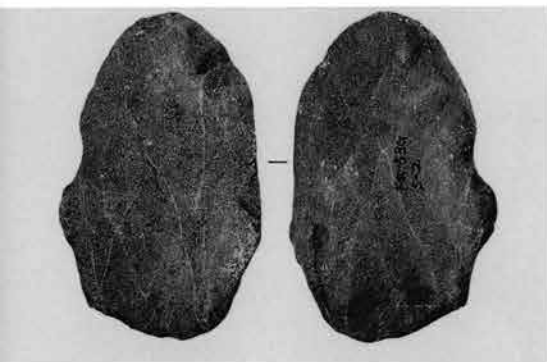
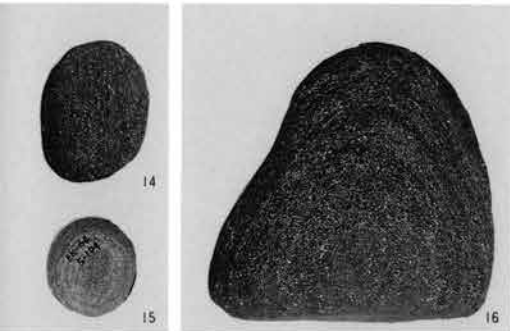
▼ 18号土壙



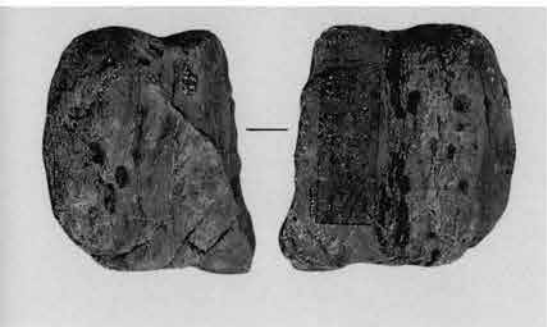


▼廃棄場所





環状列石の10



22号土壇15と同一



群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第112集

田篠中原遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第5集

平成2年10月15日 印刷

平成2年10月25日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橘村大字下箱田784-2

電話 (0279) 52-2511(代表)

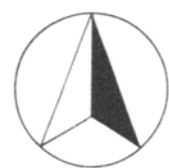
印刷／朝日印刷工業株式会社

付図1 群馬県富岡市田篠中原遺跡全体図



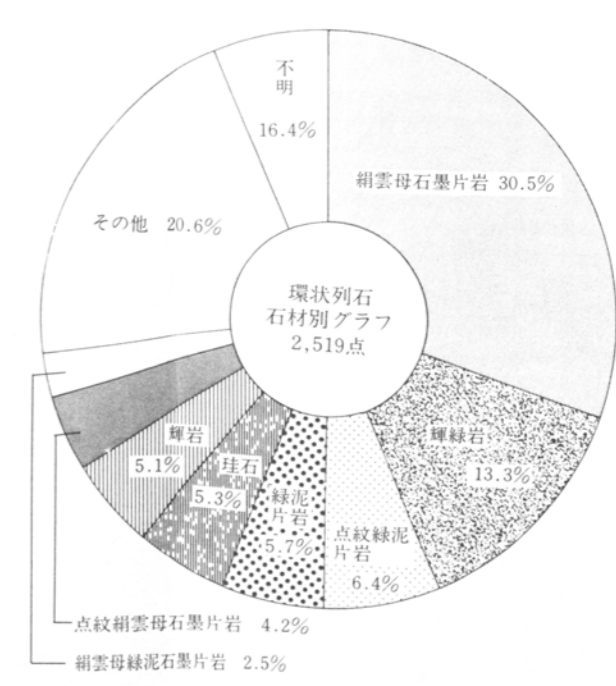


付図2 環状列石全体図



(環状列石の中心)

0 1 : 160 5m



- 絹雲母石墨片岩
- 点紋絹雲母石墨片岩
- 点紋緑泥片岩
- 輝緑岩
- 輝岩
- 絹雲母緑泥片岩
- 緑泥片岩
- 砂岩
- 珪石

付図3 環状列石石材別分布図



付図4 環状列石重量別分布図